

日本国温室効果ガスインベントリ報告書

2020 年

温室効果ガスインベントリオフィス（GIO）編
環境省地球環境局総務課脱炭素社会移行推進室 監修

地球環境研究センター
Center for Global Environmental Research



国立研究開発法人 国立環境研究所
National Institute for Environmental Studies, Japan



目次

目次	i
本報告書出版の背景	xiii
監修にあたって	xv
日本国温室効果ガスインベントリ報告書（概要）	1
概要 1. インベントリの概要	1
概要 2. 総排出量及び吸収量の推移	2
2.1. 温室効果ガスインベントリ	2
2.2. KP-LULUCF 活動	4
概要 3. 各分野の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移	5
3.1. 温室効果ガスインベントリ	5
3.2. KP-LULUCF 活動	6
第 1 章 序論	1-1
1.1. 温室効果ガスインベントリの背景情報	1-1
1.2. 国家インベントリに関する取り決め	1-1
1.2.1. 制度的・法的・手続き的取り決め	1-1
1.2.1.1. インベントリ作成のための制度的・法的取り決め	1-1
1.2.1.2. インベントリ作成に関する各主体の役割・責任	1-2
1.2.1.3. UNFCCC インベントリ審査への対応	1-4
1.2.2. インベントリの計画・作成・管理の概要	1-5
1.2.3. QA/QC ・ 検証の計画	1-6
1.2.3.1. QA/QC プロセス	1-6
1.2.3.2. QA/QC 計画	1-9
1.2.3.3. 検証活動	1-10
1.2.3.4. 秘匿情報の取り扱い	1-10
1.2.4. 国家インベントリに関する取り決めの変更に関する情報	1-10
1.3. インベントリ作成プロセス・データ収集・処理・保管	1-10
1.3.1. インベントリ作成の年次サイクル	1-10
1.3.2. インベントリ作成のプロセス	1-11
1.3.3. インベントリ情報の文書化、保管	1-12
1.3.3.1. 情報の文書化	1-12
1.3.3.2. 情報の保管	1-13
1.3.3.3. インベントリ情報の文書化、保管に関する QC 活動	1-13
1.4. インベントリの算定方法	1-13
1.4.1. 活動量データの収集プロセス	1-14
1.4.2. 排出係数及び算定方法の選定プロセス	1-14
1.4.3. 排出・吸収量算定の改善プロセス	1-14
1.5. キーカテゴリー分析の概要	1-15
1.5.1. 温室効果ガスインベントリ	1-15

1.5.2. KP-LULUCF 活動	1-17
1.6. 不確実性の評価	1-17
1.6.1. 温室効果ガスインベントリ	1-17
1.6.2. KP-LULUCF 活動	1-18
1.7. 完全性に関する評価	1-18
第 2 章 温室効果ガス排出量及び吸収量の推移	2-1
2.1. 温室効果ガスの排出及び吸収の状況	2-1
2.1.1. 温室効果ガスの排出量及び吸収量の概要	2-1
2.1.2. CO ₂	2-3
2.1.3. CH ₄	2-7
2.1.4. N ₂ O	2-8
2.1.5. HFCs	2-9
2.1.6. PFCs	2-10
2.1.7. SF ₆	2-11
2.1.8. NF ₃	2-12
2.1.9. 間接 CO ₂	2-13
2.2. 分野ごとの排出及び吸収の状況	2-14
2.2.1. エネルギー	2-15
2.2.2. 工業プロセス及び製品の使用	2-16
2.2.3. 農業	2-18
2.2.4. 土地利用、土地利用変化及び林業	2-19
2.2.5. 廃棄物	2-20
2.2.6. 間接 CO ₂	2-20
2.3. 前駆物質及び硫黄酸化物の排出状況	2-21
2.4. KP-LULUCF 活動の排出・吸収状況	2-22
第 3 章 エネルギー分野	3-1
3.1. エネルギー分野の概要	3-1
3.2. 燃料の燃焼 (1.A.)	3-1
3.2.1. レファレンスアプローチと部門別アプローチの比較	3-3
3.2.1.1. レファレンスアプローチの方法論	3-4
3.2.1.2. エネルギー消費量の差異について	3-4
3.2.1.3. CO ₂ 排出量の差異について	3-5
3.2.1.4. エネルギー消費量の差異及び CO ₂ 排出量の差異の比較	3-6
3.2.1.5. レファレンスアプローチと部門別アプローチの差異の原因について	3-6
3.2.2. 国際バンカー油	3-10
3.2.3. 燃料の非エネルギー利用分について	3-12
3.2.4. エネルギー産業 (1.A.1) における CO ₂ の排出	3-13
3.2.5. エネルギー産業 (1.A.1) における CH ₄ と N ₂ O の排出	3-28
3.2.6. 製造業及び建設業 (1.A.2) における CO ₂ の排出	3-40
3.2.7. 製造業及び建設業 (1.A.2) における CH ₄ と N ₂ O の排出	3-42
3.2.8. 運輸 (1.A.3) における CO ₂ の排出	3-45
3.2.9. 運輸 (1.A.3) における CH ₄ と N ₂ O の排出	3-48

3.2.9.1. 航空 (1.A.3.a)	3-48
3.2.9.2. 自動車 (1.A.3.b)	3-51
3.2.9.3. 鉄道 (1.A.3.c)	3-61
3.2.9.4. 船舶 (1.A.3.d)	3-62
3.2.9.5. その他輸送 (1.A.3.e)	3-63
3.2.10. その他部門 (1.A.4) 及びその他 (1.A.5) における CO ₂ の排出	3-63
3.2.11. その他部門 (1.A.4) 及びその他 (1.A.5) における CH ₄ と N ₂ O の排出	3-66
3.2.12. エネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出量	3-68
3.3. 燃料からの漏出 (1.B)	3-72
3.3.1. 固体燃料 (1.B.1)	3-72
3.3.1.1. 石炭採掘 (1.B.1.a)	3-72
3.3.1.2. 固体燃料転換 (1.B.1.b)	3-79
3.3.1.3. その他 (制御不能な燃焼および石炭ずり (coal dumps) での燃焼) (1.B.1.c)	3-80
3.3.2. 石油、天然ガス及びその他エネルギー生産由来の排出 (1.B.2)	3-80
3.3.2.1. 石油 (1.B.2.a)	3-80
3.3.2.2. 天然ガス (1.B.2.b)	3-86
3.3.2.3. 通気弁及びフレアリング (1.B.2.c)	3-95
3.3.2.4. その他 (地熱発電における蒸気の生産に伴う漏出) (1.B.2.d)	3-102
3.4. CO ₂ の輸送と貯留 (1.C)	3-104
3.4.1. CO ₂ の輸送 (1.C.1)	3-104
3.4.1.1. パイプライン (1.C.1.a)	3-104
3.4.1.2. 船舶 (1.C.1.b)	3-104
3.4.1.3. その他 (1.C.1.c)	3-105
3.4.2. 圧入及び貯留 (1.C.2)	3-105
3.4.2.1. 圧入 (1.C.2.a)	3-105
3.4.2.2. 貯留 (1.C.2.b)	3-105
3.4.3. その他 (1.C.3)	3-105
3.4.4. 情報項目 (Information item)	3-105

第 4 章 工業プロセス及び製品の使用分野 4-1

4.1. 工業プロセス及び製品の使用分野の概要	4-1
4.2. 鉱物産業 (2.A.)	4-3
4.2.1. セメント製造 (2.A.1.)	4-3
4.2.2. 石灰製造 (2.A.2.)	4-7
4.2.3. ガラス製造 (2.A.3.)	4-8
4.2.4. その他プロセスでの炭酸塩の使用 (2.A.4.)	4-11
4.2.4.1. セラミックス製品 (2.A.4.a)	4-11
4.2.4.2. その他用途でのソーダ灰の使用 (2.A.4.b)	4-13
4.2.4.3. マグネシア製造 (2.A.4.c)	4-14
4.2.4.4. その他 (2.A.4.d)	4-14
4.3. 化学産業 (2.B.)	4-15
4.3.1. アンモニア製造 (2.B.1.)	4-16
4.3.2. 硝酸製造 (2.B.2.)	4-18
4.3.3. アジピン酸製造 (2.B.3.)	4-19

4.3.4. カプロラクタム、グリオキサール、グリオキシル酸製造 (2.B.4.)	4-21
4.3.4.1. カプロラクタム (2.B.4.a)	4-21
4.3.4.2. グリオキサール (2.B.4.b)	4-22
4.3.4.3. グリオキシル酸 (2.B.4.c)	4-23
4.3.5. カーバイド製造 (2.B.5.)	4-24
4.3.5.1. シリコンカーバイド製造 (2.B.5.a)	4-24
4.3.5.2. カルシウムカーバイドの製造及び使用 (2.B.5.b)	4-25
4.3.6. 二酸化チタン製造 (2.B.6.)	4-27
4.3.7. ソーダ灰の製造 (2.B.7.)	4-28
4.3.8. 石油化学及びカーボンブラック製造 (2.B.8.)	4-29
4.3.8.1. メタノール製造 (2.B.8.a.)	4-29
4.3.8.2. エチレン製造 (2.B.8.b)	4-30
4.3.8.3. 1,2-ジクロロエタン及びクロロエチレン製造 (2.B.8.c)	4-31
4.3.8.4. 酸化エチレン (2.B.8.d)	4-33
4.3.8.5. アクリルニトリル (2.B.8.e)	4-35
4.3.8.6. カーボンブラック製造 (2.B.8.f)	4-37
4.3.8.7. スチレン製造 (2.B.8.g.-)	4-39
4.3.8.8. 無水フタル酸製造 (2.B.8.g.-)	4-40
4.3.8.9. 無水マレイン酸製造 (2.B.8.g.-)	4-41
4.3.8.10. 水素製造 (2.B.8.g.-)	4-42
4.3.9. フッ化物製造 (2.B.9.)	4-43
4.3.9.1. 副生ガスの排出—HCFC-22 の製造 (2.B.9.-)	4-43
4.3.9.2. 製造時の漏出 (2.B.9.-)	4-45
4.4. 金属製造 (2.C.)	4-46
4.4.1. 鉄鋼製造 (2.C.1.)	4-47
4.4.1.1. 鋼製造 (2.C.1.a)	4-47
4.4.1.2. 鉄鋼製造における電気炉の使用 (2.C.1.a)	4-47
4.4.1.3. 銑鉄製造 (2.C.1.b)	4-49
4.4.1.4. 鉄鋼製造における石灰石・ドロマイトの使用 (2.C.1.b)	4-49
4.4.1.5. 直接還元鉄製造 (2.C.1.c)	4-51
4.4.1.6. 焼結鉱製造 (2.C.1.d)	4-51
4.4.1.7. ペレット製造 (2.C.1.e)	4-51
4.4.2. フェロアロイ製造 (2.C.2.)	4-52
4.4.3. アルミニウム製造 (2.C.3.)	4-54
4.4.3.1. 副次的排出 (2.C.3.-)	4-54
4.4.3.2. 鑄造時の F ガスの使用 (2.C.3.-)	4-55
4.4.4. マグネシウム製造 (2.C.4.)	4-55
4.4.5. 鉛製造 (2.C.5.)	4-56
4.4.6. 亜鉛製造 (2.C.6.)	4-56
4.5. 燃料からの非エネルギー製品及び溶剤の使用 (2.D.)	4-56
4.5.1. 潤滑油の使用 (2.D.1.)	4-57
4.5.2. パラフィンろうの使用 (2.D.2.)	4-58
4.5.3. その他 (2.D.3.)	4-59
4.5.3.1. 触媒として使用される尿素 (2.D.3.-)	4-59
4.5.3.2. NMVOC の焼却 (2.D.3.-)	4-60

4.5.3.3. 道路舗装 (2.D.3.-)	4-62
4.5.3.4. アスファルト屋根材 (2.D.3.-)	4-62
4.6. 電子産業 (2.E.)	4-62
4.6.1. 半導体製造 (2.E.1.)	4-63
4.6.2. 液晶製造 (2.E.2.)	4-65
4.6.3. 太陽光発電 (2.E.3.)	4-66
4.6.4. 熱伝導流体 (2.E.4.)	4-67
4.7. オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用 (2.F.)	4-67
4.7.1. 冷蔵庫及び空調機器 (2.F.1.)	4-67
4.7.1.1. 家庭用冷蔵庫の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)	4-67
4.7.1.2. 業務用冷凍空調機器の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)	4-69
4.7.1.3. 輸送機器用冷蔵庫の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)	4-73
4.7.1.4. 工業用冷蔵庫の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)	4-74
4.7.1.5. 固定空調機器 (家庭用エアコン) の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)	4-75
4.7.1.6. 輸送機器用空調機器の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)	4-76
4.7.2. 発泡剤 (2.F.2.)	4-79
4.7.2.1. 閉鎖系気泡フォーム (2.F.2.-)	4-79
4.7.2.2. 開放系気泡フォーム (2.F.2.-)	4-82
4.7.3. 消火剤 (2.F.3.)	4-83
4.7.4. エアゾール (2.F.4.)	4-84
4.7.4.1. 医療用エアゾール (定量噴射剤: MDI) (2.F.4.-)	4-84
4.7.4.2. 一般用エアゾール (2.F.4.-)	4-86
4.7.5. 溶剤 (2.F.5.)	4-88
4.7.6. その他利用 (2.F.6.)	4-89
4.8. その他製品の製造および使用 (2.G.)	4-89
4.8.1. 電気設備 (2.G.1.)	4-90
4.8.2. その他製品の使用からの SF ₆ 、PFCs (2.G.2.)	4-91
4.8.2.1. 防衛利用 (2.G.2.-)	4-91
4.8.2.2. 加速器 (2.G.2.-)	4-92
4.8.2.3. 防音窓 (2.G.2.-)	4-93
4.8.2.4. 断熱特性: 靴およびタイヤ (2.G.2.-)	4-94
4.8.2.5. その他 鉄道用シリコン整流器 (2.G.2.-)	4-94
4.8.3. 製品の使用からの N ₂ O (2.G.3.)	4-95
4.8.3.1. 医療利用 (2.G.3.a)	4-95
4.8.3.2. その他 (2.G.3.b)	4-96
4.9. その他 (2.H.)	4-97
4.9.1. 食品・飲料産業 (2.H.2.)	4-97
4.9.2. 輸入炭酸ガスからの排出 (2.H.3.)	4-97
第 5 章 農業分野	5-1
5.1. 農業分野の概要	5-1
5.2. 消化管内発酵 (3.A.)	5-2
5.2.1. 牛 (3.A.1.)	5-2
5.2.2. 水牛、めん羊、山羊、馬、豚 (3.A.2., 3.A.3., 3.A.4.-)	5-9

5.2.3. その他の家畜 (3.A.4.-)	5-11
5.3. 家畜排せつ物の管理 (3.B.)	5-11
5.3.1. 牛、豚、家禽類 (採卵鶏、ブロイラー) (3.B.1., 3.B.3., 3.B.4.-)	5-12
5.3.2. 水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンク (3.B.2., 3.B.4.-)	5-24
5.3.3. その他の家畜 (3.B.4.-)	5-27
5.3.4. 間接 N ₂ O 排出量 (3.B.5.)	5-27
5.3.4.1. 大気沈降 (3.B.5.-)	5-27
5.3.4.2. 窒素溶脱・流出 (3.B.5.-)	5-29
5.4. 稲作 (3.C.)	5-29
5.4.1. 灌漑水田 (間断灌漑水田 (中干し)、常時湛水田) (3.C.1.)	5-29
5.4.2. 天水田、深水田、その他の水田 (3.C.2., 3.C.3., 3.C.4.)	5-36
5.5. 農用地の土壌 (3.D.)	5-37
5.5.1. 直接排出 (3.D.a.)	5-37
5.5.1.1. 無機質窒素肥料 (3.D.a.1.)	5-37
5.5.1.2. 有機質窒素肥料 (3.D.a.2.)	5-41
5.5.1.3. 放牧家畜の排せつ物 (3.D.a.3.)	5-46
5.5.1.4. 作物残渣 (3.D.a.4.)	5-46
5.5.1.5. 土壌有機物中の炭素の消失により無機化された窒素からの N ₂ O 排出 (3.D.a.5.)	5-50
5.5.1.6. 有機質土壌の耕起 (3.D.a.6.)	5-51
5.5.2. 間接排出 (3.D.b.)	5-53
5.5.2.1. 大気沈降 (3.D.b.1.)	5-53
5.5.2.2. 窒素溶脱・流出 (3.D.b.2.)	5-55
5.6. サバナを計画的に焼くこと (3.E.)	5-57
5.7. 野外で農作物の残留物を焼くこと (3.F.)	5-57
5.8. 石灰施用 (3.G.)	5-60
5.9. 尿素施用 (3.H.)	5-61
5.10. その他の炭素を含む肥料 (3.I.)	5-62
5.11. その他 (3.J.)	5-62
第 6 章 土地利用、土地利用変化及び林業分野	6-1
6.1. 土地利用、土地利用変化及び林業分野の概要	6-1
6.2. 土地利用カテゴリーの設定方法及び面積把握方法	6-2
6.3. 土地利用データベース及び土地面積の推計方法	6-4
6.3.1. 主な土地面積統計の調査方法及び調査期日	6-4
6.3.2. 土地面積の推計方法	6-4
6.3.3. 土地利用転用マトリクス	6-5
6.4. 土地転用に伴う炭素ストック変化量の算定に用いるパラメータ	6-7
6.5. 森林 (4.A.)	6-10
6.5.1. 転用のない森林 (4.A.1.)	6-10
6.5.2. 他の土地利用から転用された森林 (4.A.2.)	6-21
6.6. 農地 (4.B.)	6-25
6.6.1. 転用のない農地 (4.B.1.)	6-26
6.6.2. 他の土地利用から転用された農地 (4.B.2.)	6-34
6.7. 草地 (4.C.)	6-39

6.7.1. 転用のない草地 (4.C.1)	6-40
6.7.2. 他の土地利用から転用された草地 (4.C.2)	6-43
6.8. 湿地 (4.D)	6-46
6.8.1. 転用のない湿地 (4.D.1)	6-47
6.8.2. 他の土地利用から転用された湿地 (4.D.2)	6-48
6.9. 開発地 (4.E)	6-51
6.9.1. 転用のない開発地 (4.E.1)	6-52
6.9.2. 他の土地利用から転用された開発地 (4.E.2)	6-57
6.10. その他の土地 (4.F)	6-64
6.10.1. 転用のないその他の土地 (4.F.1)	6-64
6.10.2. 他の土地利用から転用されたその他の土地 (4.F.2)	6-65
6.11. 伐採木材製品 (HWP) による炭素蓄積変化 (4.G)	6-68
6.11.1. 建築物	6-69
6.11.2. その他木材利用	6-73
6.11.3. 紙製品	6-76
6.12. 施肥に伴う N ₂ O 排出 (4.(I))	6-78
6.13. 土壌排水等に伴う非 CO ₂ 排出 (4.(II))	6-80
6.14. 土地利用変化・管理変化に伴う無機化された窒素からの N ₂ O 排出 (4.(III))	6-82
6.15. 土壌からの N ₂ O 間接排出 (4.(IV))	6-85
6.16. バイオマスの燃焼 (4.(V))	6-87

第 7 章 廃棄物分野

7-1

7.1. 廃棄物分野の概要	7-1
7.1.1. 廃棄物処理及び算定カテゴリーの概要	7-1
7.1.2. 廃棄物分野における温室効果ガス排出量の概要	7-2
7.1.3. 廃棄物分野における一般的な方法論	7-3
7.1.4. 廃棄物分野における一般的な不確実性評価	7-4
7.1.5. 廃棄物分野における一般的な再計算	7-4
7.2. 固形廃棄物の処分 (5.A.)	7-5
7.2.1. 管理処分場 (5.A.1.)	7-6
7.2.2. 非管理処分場 (5.A.2.)	7-17
7.2.3. その他の廃棄物処分場 (5.A.3.)	7-17
7.2.3.1. 不適正処分 (5.A.3.-)	7-17
7.3. 固形廃棄物の生物処理 (5.B.)	7-18
7.3.1. コンポスト化 (5.B.1)	7-19
7.3.2. バイオガス施設における嫌気性消化 (5.B.2.)	7-22
7.4. 廃棄物の焼却と野焼き (5.C.)	7-22
7.4.1. 廃棄物の焼却 (エネルギー回収を伴わない) (5.C.1.)	7-27
7.4.1.1. 一般廃棄物 (5.C.1.-)	7-27
7.4.1.2. 産業廃棄物 (5.C.1.-)	7-36
7.4.1.3. 特別管理産業廃棄物 (5.C.1.-)	7-43
7.4.2. 廃棄物の野焼き (5.C.2.)	7-47
7.4.2.1. 一般廃棄物 (5.C.2.-)	7-47
7.4.2.2. 産業廃棄物 (5.C.2.-)	7-47
7.4.3. 廃棄物の焼却等 (エネルギー分野での報告) (1.A.)	7-49

7.4.3.1. 廃棄物が焼却される際にエネルギーが回収される場合 (1.A.)	7-49
7.4.3.2. 廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.)	7-51
7.4.3.3. 廃棄物が燃料に加工された後に利用される場合 (1.A.)	7-60
7.5. 排水の処理と放出 (5.D.)	7-65
7.5.1. 生活排水 (5.D.1.)	7-67
7.5.1.1. 終末処理場 (5.D.1.-)	7-67
7.5.1.2. 生活排水処理施設 (主に浄化槽) (5.D.1.-)	7-69
7.5.1.3. し尿処理施設 (5.D.1.-)	7-72
7.5.1.4. 生活排水の自然界における分解 (5.D.1.-)	7-76
7.5.2. 産業排水 (5.D.2.)	7-81
7.5.2.1. 産業排水の処理 (5.D.2.-)	7-81
7.5.2.2. 産業排水の自然界における分解 (5.D.2.-)	7-85
7.5.2.3. 最終処分場浸出液の処理 (5.D.2.-)	7-87
7.6. その他 (5.E.)	7-89
7.6.1. 石油由来の界面活性剤の分解 (5.E.-)	7-90
第 8 章 その他の分野	8-1
8.1. 分野の概要	8-1
8.2. CO ₂ 、CH ₄ 、N ₂ O、HFCs、PFCs、SF ₆ 、NF ₃	8-1
8.3. NO _x 、CO、NMVOC、SO _x	8-1
第 9 章 二酸化炭素と一酸化二窒素の間接排出	9-1
9.1. 分野の概要	9-1
第 10 章 再計算及び改善点	10-1
10.1. 再計算に関する解説と正当性	10-1
10.1.1. 全般的事項	10-1
10.1.2. 各分野における再計算	10-1
10.2. 排出量に対する影響	10-1
10.2.1. 温室効果ガスインベントリ	10-1
10.2.2. KP-LULUCF インベントリ	10-9
10.3. 排出量の推移に対する影響 (時系列の一貫性を含む)	10-10
10.3.1. 温室効果ガスインベントリ	10-10
10.4. インベントリ審査への対応を含めた再計算とインベントリの改善計画	10-10
10.4.1. インベントリ提出以降の改善点	10-10
10.4.1.1. 排出・吸収量の算定方法	10-10
10.4.1.2. 国家インベントリ報告書 (NIR)	10-13
10.4.1.3. UNFCCC インベントリ審査への対応事項	10-13
10.4.2. 今後の改善計画	10-18
第 11 章 京都議定書第 3 条 3 及び 4 の下での LULUCF 活動の補足情報	11-1
11.1. 京都議定書第 3 条 3 及び 4 の下での排出・吸収の算定についての概要	11-1
11.2. 決定 3/CMP.11 パラグラフ 8 に関する情報	11-2
11.3. 一般的な情報	11-2
11.3.1. 森林の定義とその他の判断基準	11-2

11.3.2. 選択された京都議定書第3条4の活動	11-3
11.3.2.1. 森林経営	11-3
11.3.2.2. 農地管理	11-3
11.3.2.3. 牧草地管理	11-3
11.3.2.4. 植生回復	11-4
11.3.3. 第3条3及び4活動に関する定義の一貫性について	11-4
11.3.4. 選択された京都議定書第3条4の活動間の階層構造及び土地区分の一貫した適用について	11-4
11.4. 土地に関する情報	11-4
11.4.1. 京都議定書第3条3に基づく土地ユニットの面積を決定するための空間評価単位	11-4
11.4.2. 土地転用マトリクスの作成方法	11-5
11.4.2.1. 共通報告様式 Table NIR 2 の説明について	11-5
11.4.2.2. 新規植林・再植林、森林減少、森林経営排出・吸収量の算定手順	11-5
11.4.2.3. 新規植林・再植林面積及び森林減少面積の把握方法	11-6
11.4.2.4. 森林経営対象森林面積の把握方法	11-8
11.4.2.5. 農地管理面積の把握方法	11-10
11.4.2.6. 牧草地管理面積の把握方法	11-11
11.4.2.7. 植生回復面積の把握方法	11-11
11.4.3. 地理的境界を特定するために用いる地図情報及び地理的境界のIDシステム	11-14
11.5. 活動別の情報	11-16
11.5.1. 炭素ストック変化量及びGHG排出・吸収量の算定方法	11-16
11.5.1.1. 算定方法と算定の基になる仮定について	11-16
11.5.1.2. 算定対象から除外した炭素プールについて	11-39
11.5.1.3. 自然攪乱の排出除外ルールに関係する報告について	11-39
11.5.1.4. 伐採木材製品に関係する報告について	11-39
11.5.1.5. 間接及び自然要因の分離（ファクタリングアウト）について	11-40
11.5.1.6. QA/QCと検証	11-40
11.5.1.7. 再計算と改善点	11-41
11.5.1.8. 不確実性評価	11-42
11.5.1.9. その他の方法論（自然攪乱等による影響に対する対処方法等）	11-44
11.5.1.10. 活動の開始年	11-45
11.6. 京都議定書第3条3の活動について	11-45
11.6.1. 1990年1月1日以降に人為的活動が実施されたことを示す情報	11-45
11.6.2. 伐採及び攪乱に伴う一時的なストック減少と森林減少を区別する方法	11-46
11.7. 京都議定書第3条4の活動について	11-46
11.7.1. 1990年1月1日以降に人為的活動が実施されたことを示す情報	11-46
11.7.1.1. 森林経営活動	11-46
11.7.1.2. 農地管理活動	11-46
11.7.1.3. 牧草地管理活動	11-46
11.7.1.4. 植生回復活動	11-46
11.7.2. 基準年及び約束期間の農地管理活動、牧草地管理活動、植生回復活動に関する情報	11-48
11.7.3. 第3条4活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由	11-48

11.7.3.1. 森林経営活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由	11-48
11.7.3.2. 農地管理活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由	11-48
11.7.3.3. 牧草地管理活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由	11-48
11.7.3.4. 植生回復活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由	11-48
11.7.4. 天然林の人工林転換について	11-49
11.7.5. 森林経営参照レベル（一貫性）について	11-49
11.7.6. 森林経営参照レベル（技術的調整）について	11-49
11.7.7. 等価森林ルールについて	11-49
11.8. その他の情報	11-49
11.8.1. キーカテゴリー分析結果	11-49
11.8.2. 今後の検討課題	11-50
11.9. 京都議定書第6条に関する情報	11-51
11.10. 決定2/CMP.8 附属書IIの報告状況	11-51
第12章 京都ユニットの計上に関する情報	12-1
12.1. SEFで報告されている情報のまとめ	12-1
12.2. 不一致及び通知	12-1
12.3. 公開情報	12-1
12.4. 約束期間リザーブの計算	12-2
第13章 国内制度の変更に関する情報	13-1
第14章 国別登録簿の変更に関する情報	14-1
14.1. 2019年において我が国の国別登録簿でなされた変更点の概要	14-1
14.2. 我が国の国別登録簿になされた変更に関する参考情報	14-2
第15章 第3条14に則った悪影響の最小化	15-1
15.1. 概要	15-1
15.2. 京都議定書第3条14に則った悪影響の最小化に関する行動	15-1
別添（Annex）1 キーカテゴリー分析の詳細	別添 1-1
A1.1. キーカテゴリー分析の概要	別添 1-1
A1.2. キーカテゴリー分析結果	別添 1-1
別添（Annex）2 不確実性評価	別添 2-1
A2.1. 不確実性評価手法	別添 2-1
A2.2. 不確実性評価の結果	別添 2-1

別添 (Annex) 3	各排出・吸収区分における算定方法	別添 3-1
A3.1.	前駆物質等に関する算定方法	別添 3-1
A3.1.1.	エネルギー分野	別添 3-1
A3.1.2.	工業プロセス及び製品の使用分野	別添 3-24
A3.1.3.	農業分野	別添 3-57
A3.1.4.	土地利用、土地利用変化及び林業分野	別添 3-58
A3.1.5.	廃棄物分野	別添 3-59
A3.1.6.	その他分野	別添 3-64
別添 (Annex) 4	直近報告年のエネルギー収支	別添 4-1
A4.1.	CRF 報告値と IEA 報告値の相違点	別添 4-1
A4.2.	総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）について	別添 4-9
A4.2.1.	総合エネルギー統計の概要	別添 4-9
A4.2.2.	総合エネルギー統計とインベントリの CRF	別添 4-14
A4.3.	軽油の品質規格について	別添 4-18
A4.4.	発熱量の換算係数について	別添 4-18
別添 (Annex) 5	完全性、注釈記号の定義及び「NE」を用いた排出吸収源	別添 5-1
A5.1.	完全性に関する検討	別添 5-1
A5.2.	注釈記号の定義	別添 5-1
A5.3.	注釈記号選択のためのデシジョンツリー	別添 5-2
A5.4.	我が国における「重要でない」という意味で「NE」を用いた排出吸収源	別添 5-3
A5.5.	我が国における未推計排出吸収源	別添 5-4
別添 (Annex) 6	日本のインベントリのファイル構造	別添 6-1

略語集

本報告書出版の背景

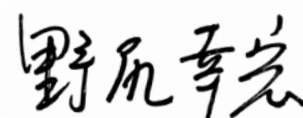
本報告書を含むわが国の温室効果ガスインベントリは、1999年11月の設置以来環境省のもとで毎年開催されている「温室効果ガス排出量算定方法検討会」に大学・業界団体・地方自治体・関係省庁及び関連研究機関から参加頂いた60名の各分野の専門家の英知を結集したものです。最新の科学的知見を提供頂いたその他の専門家の皆様、および、必要なデータを提供頂いた業界団体と関連省庁の皆様他からも、多大なご協力を賜りました。また、担当課室の環境省地球環境局総務課脱炭素社会移行推進室には、温室効果ガスインベントリオフィス（GIO）の運営に際して多大なご尽力を賜りました。関係各位には、深く感謝の意を表します。

本報告書の作成にあたっては、国内外の多くの方による評価を通じ、より一層充実した内容となるよう心がけました。本報告書が、パリ協定などの下でわが国が果たすべき国際的責任の指標として、また、わが国の温暖化対策への取り組みを示す指標として、正しくかつ広く活用されることを祈念いたします。

また、田中晶子さんには、2019年夏までGIOのメンバーとして、これまでの報告書作成と本報告書の準備に尽力いただきました。池田直子さん、アシスタントの藤井むつ子さん、大饗洋子さん、柴久美子さんには、GIOの円滑な運営にあたってのサポートを頂き、ここで感謝の意を表します。

令和2年（2020年）4月

国立研究開発法人 国立環境研究所 地球環境研究センター
温室効果ガスインベントリオフィス（GIO）
連携研究グループ長 野尻幸宏



監修にあたって

国連気候変動枠組条約（UNFCCC）第4条及び第12条並びに決定2/CMP.8に基づき、同条約、京都議定書各締約国は自国の温室効果ガスの排出及び吸収の目録（インベントリ）を条約事務局に提出する責務を有する。この条項に従い、日本の温室効果ガス及び前駆物質等の排出量及び吸収量をUNFCCCインベントリ報告ガイドライン（決定24/CP.19 附属書I）及び決定2/CMP.8に則り、本報告書及び共通報告様式（CRF）を用いて、日本国のインベントリとして報告する。

本報告書では、日本におけるインベントリの作成体制、各排出源及び吸収源による温室効果ガスの排出量及び吸収量の算定方法、温室効果ガス（二酸化炭素 [CO₂]、メタン [CH₄]、一酸化二窒素 [N₂O]、ハイドロフルオロカーボン類 [HFCs]、パーフルオロカーボン類 [PFCs]、六ふっ化硫黄 [SF₆]、三ふっ化窒素 [NF₃]、間接 CO₂) 及び前駆物質（窒素酸化物 [NO_x]、一酸化炭素 [CO]、非メタン揮発性有機化合物 [NMVOC]）、硫黄酸化物 [SO_x] の排出及び吸収の状況を整理した。また、京都議定書第7条1の補足情報を掲載した。

本報告書の構成は、UNFCCCインベントリ報告ガイドラインに示されている目次に従っている。

概要編では、日本における温室効果ガスの排出及び吸収の最新の状況を中心に本報告書の概要を整理した。第1章では、温室効果ガスインベントリの背景情報、国家インベントリに関する取り決め、インベントリ作成手順、インベントリの算定方法、キーカテゴリー分析、品質保証・品質管理計画、不確実性評価結果等を取りまとめた。第2章では、日本における温室効果ガスの排出及び吸収の最新の状況を整理した。第3章～第7章では、2006年IPCCガイドラインに示された排出源及び吸収源ごとの算定方法を解説した。第8章では、当該ガイドラインに含まれていない排出源の報告状況を示した。第9章では、CO₂及びN₂Oの間接排出量について報告状況を示した。第10章では、昨年提出インベントリ以降の改善点及び再計算（算定に用いるデータの変更、新規カテゴリーの追加等）について説明を行った。さらに、第11章から第15章では、京都議定書第7条1の補足情報を掲載した。また、別添として、日本のインベントリに対する理解を助ける資料を添付した。

データの変更、更新等の最新の状況については、温室効果ガスインベントリオフィス（GIO）のホームページ（<http://www-gio.nies.go.jp/index-j.html>）を参照のこと。

令和2年（2020年）4月 環境省地球環境局総務課脱炭素社会移行推進室

日本国温室効果ガスインベントリ報告書（概要）

概要1. インベントリの概要

気候変動枠組条約第4条及び第12条並びに2/CMP.8決定に基づき、1990年度から2018年度¹までの日本の温室効果ガスと前駆物質等の排出・吸収に関する目録（インベントリ）を気候変動枠組条約（UNFCCC）事務局に報告する。

インベントリの作成方法については、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）により作成された「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」（以下、「2006年IPCCガイドライン」）が定められており、我が国の排出量と吸収量の算出方法はこれに準拠している。また、インベントリの透明性、一貫性、比較可能性、完全性及び正確性を向上するために、「2006年IPCCガイドラインに対する2013年版追補：湿地」（以下、「湿地ガイドライン」）及び「京都議定書に関わる2013年改訂補足的な方法論及びグッドプラクティスガイダンス」（以下、「2013年京都議定書補足的な方法論ガイダンス」）も適用している。

インベントリの報告方法については、UNFCCC温室効果ガスインベントリ報告ガイドライン（24/CP.19決定 附属書I、以下、「UNFCCCインベントリ報告ガイドライン」）の適用が締約国会議によって決定されており、これに則して報告を行う。

¹ 排出量の大部分を占めるCO₂が年度ベース(当該年4月～翌年3月)であるため、『年度』と記した。

概要2. 総排出量及び吸収量の推移

2.1. 温室効果ガスインベントリ

2018年度の温室効果ガスの総排出量²（LULUCF³を除く、間接CO₂⁴含む、以下定義省略）は12億4,000万トン（CO₂換算）であり、1990年度の総排出量から2.8%の減少となった。

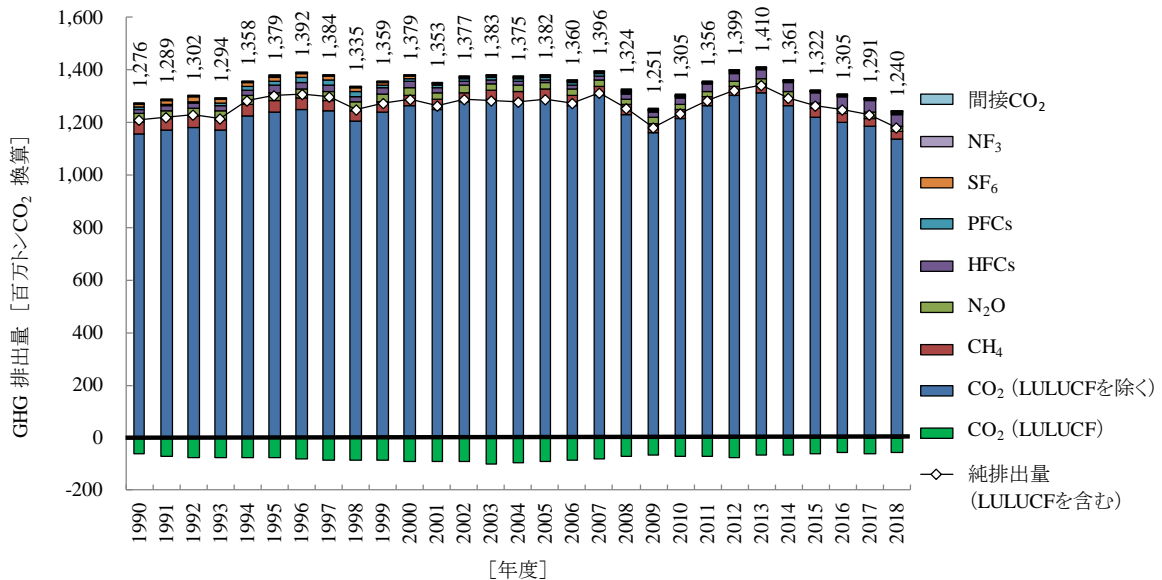


図 1 日本の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

² CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃の排出量にそれぞれの地球温暖化係数(GWP)を乗じ、それらを合算したもの。ここで「GWP」とは、温室効果ガスのもたらす温室効果の程度を、CO₂の当該程度に対する比で示した係数のことであり、その数値は気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第4次評価報告書の数値を使用。

³ 土地利用、土地利用変化及び林業(Land Use, Land-Use Change and Forestry)分野の略称。

⁴ 一酸化炭素(CO)、メタン(CH₄)及び非メタン揮発性有機化合物(NMVO)は、長期的には大気中で酸化されてCO₂に変換される。間接CO₂はこれらの排出量をCO₂換算した値を指す。ただし、燃焼起源及びバイオマス起源のCO、CH₄及びNMVOに由来する排出量は、二重計上やカーボンニュートラルの観点から計上対象外とする。

表 1 日本の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

[百万トンCO ₂ 換算]	GWP	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
CO ₂ (LULUCFを除く)※1	1	1,158.4	1,170.1	1,179.7	1,172.6	1,227.6	1,239.9	1,251.9	1,245.1	1,205.4	1,242.0
CO ₂ (LULUCFを含む)※1	1	1,095.9	1,099.5	1,106.1	1,095.9	1,151.1	1,162.5	1,169.8	1,160.7	1,119.6	1,156.0
CO ₂ (LULUCFのみ)	1	-62.5	-70.6	-73.6	-76.7	-76.4	-77.4	-82.0	-84.4	-85.8	-86.0
CH ₄ (LULUCFを除く)	25	44.4	43.3	44.1	40.0	43.4	41.9	40.7	40.0	38.1	38.0
CH ₄ (LULUCFを含む)	25	44.5	43.4	44.2	40.1	43.5	42.0	40.8	40.1	38.2	38.1
N ₂ O (LULUCFを除く)	298	31.9	31.6	31.8	31.6	32.9	33.2	34.3	35.1	33.5	27.4
N ₂ O (LULUCFを含む)	298	32.1	31.8	32.0	31.8	33.1	33.4	34.5	35.3	33.7	27.6
HFCs	HFC-134a: 1,430など	15.9	17.3	17.8	18.1	21.1	25.2	24.6	24.4	23.7	24.4
PFCs	PFC-14: 7,390など	6.5	7.5	7.6	10.9	13.4	17.6	18.3	20.0	16.6	13.1
SF ₆	22,800	12.9	14.2	15.6	15.7	15.0	16.4	17.0	14.5	13.2	9.2
NF ₃	17,200	0.03	0.03	0.03	0.04	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3
間接CO ₂	1	5.5	5.3	5.1	4.8	4.8	4.7	4.7	4.6	4.2	4.2
総排出量 (LULUCF分野除く。 間接CO ₂ を除く。)		1,270.0	1,284.0	1,296.7	1,289.1	1,353.4	1,374.5	1,387.0	1,379.3	1,330.8	1,354.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。 間接CO ₂ を除く。)		1,207.8	1,213.7	1,223.4	1,212.7	1,277.3	1,297.4	1,305.3	1,295.2	1,245.2	1,268.6
総排出量 (LULUCF分野除く。 間接CO ₂ を含む。)		1,275.5	1,289.3	1,301.7	1,293.9	1,358.2	1,379.2	1,391.7	1,383.9	1,334.9	1,358.5
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。 間接CO ₂ を含む。)		1,213.3	1,219.0	1,228.4	1,217.5	1,282.1	1,302.1	1,310.0	1,299.8	1,249.4	1,272.8

[百万トンCO ₂ 換算]	GWP	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
CO ₂ (LULUCFを除く)※1	1	1,264.8	1,250.2	1,279.5	1,287.6	1,282.9	1,290.1	1,266.8	1,302.5	1,231.9	1,162.6
CO ₂ (LULUCFを含む)※1	1	1,176.8	1,161.7	1,189.4	1,187.4	1,186.2	1,198.6	1,180.8	1,221.1	1,160.7	1,095.5
CO ₂ (LULUCFのみ)	1	-88.0	-88.6	-90.0	-100.3	-96.7	-91.5	-86.1	-81.5	-71.2	-67.2
CH ₄ (LULUCFを除く)	25	38.0	37.1	36.4	35.0	36.0	35.8	35.3	35.5	35.2	34.3
CH ₄ (LULUCFを含む)	25	38.1	37.2	36.5	35.1	36.1	35.9	35.3	35.6	35.3	34.4
N ₂ O (LULUCFを除く)	298	29.9	26.3	25.7	25.6	25.4	25.0	24.8	24.2	23.4	22.7
N ₂ O (LULUCFを含む)	298	30.1	26.5	25.9	25.8	25.6	25.2	25.0	24.4	23.6	22.9
HFCs	HFC-134a: 1,430など	22.9	19.5	16.2	16.2	12.4	12.8	14.6	16.7	19.3	20.9
PFCs	PFC-14: 7,390など	11.9	9.9	9.2	8.9	9.2	8.6	9.0	7.9	5.7	4.0
SF ₆	22,800	7.0	6.1	5.7	5.4	5.3	5.0	5.2	4.7	4.2	2.4
NF ₃	17,200	0.3	0.3	0.4	0.4	0.5	1.5	1.4	1.6	1.5	1.4
間接CO ₂	1	4.2	3.8	3.5	3.4	3.3	3.2	3.1	3.0	2.7	2.5
総排出量 (LULUCF分野除く。 間接CO ₂ を除く。)		1,374.8	1,349.3	1,373.2	1,379.1	1,371.7	1,378.8	1,357.2	1,393.2	1,321.2	1,248.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。 間接CO ₂ を除く。)		1,287.0	1,261.1	1,283.5	1,279.1	1,275.3	1,287.6	1,271.4	1,312.0	1,250.3	1,181.5
総排出量 (LULUCF分野除く。 間接CO ₂ を含む。)		1,379.0	1,353.1	1,376.7	1,382.5	1,375.0	1,382.0	1,360.3	1,396.2	1,323.9	1,250.9
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。 間接CO ₂ を含む。)		1,291.2	1,264.9	1,287.0	1,282.5	1,278.6	1,290.8	1,274.5	1,315.0	1,253.0	1,184.0

[百万トンCO ₂ 換算]	GWP	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	排出・吸収量(2018年)の変化 1990年度比 前年度比	
CO ₂ (LULUCFを除く)※1	1	1,214.1	1,264.2	1,305.4	1,314.7	1,263.0	1,222.8	1,203.2	1,187.7	1,135.7	-2.0%	-4.4%
CO ₂ (LULUCFを含む)※1	1	1,143.4	1,194.2	1,232.4	1,248.4	1,198.4	1,163.1	1,148.6	1,128.8	1,078.0	-1.6%	-4.5%
CO ₂ (LULUCFのみ)	1	-70.7	-69.9	-73.0	-66.3	-64.6	-59.6	-54.5	-58.8	-57.7	-7.8%	-2.0%
CH ₄ (LULUCFを除く)	25	34.8	33.8	32.9	32.5	31.9	31.1	30.7	30.2	29.9	-32.8%	-1.3%
CH ₄ (LULUCFを含む)	25	34.9	33.9	33.0	32.6	32.0	31.1	30.8	30.3	29.9	-32.8%	-1.3%
N ₂ O (LULUCFを除く)	298	22.2	21.8	21.5	21.5	21.1	20.7	20.2	20.4	20.0	-37.3%	-2.0%
N ₂ O (LULUCFを含む)	298	22.4	22.0	21.7	21.7	21.3	20.9	20.4	20.6	20.2	-37.1%	-2.0%
HFCs	HFC-134a: 1,430など	23.3	26.1	29.4	32.1	35.8	39.3	42.6	44.9	47.0	194.9%	4.7%
PFCs	PFC-14: 7,390など	4.2	3.8	3.4	3.3	3.4	3.3	3.4	3.5	3.5	-46.7%	-0.7%
SF ₆	22,800	2.4	2.2	2.2	2.1	2.0	2.1	2.2	2.1	2.0	-84.1%	-1.3%
NF ₃	17,200	1.5	1.8	1.5	1.6	1.1	0.6	0.6	0.4	0.3	766.3%	-37.2%
間接CO ₂	1	2.4	2.3	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.1	2.1	-62.4%	-0.7%
総排出量 (LULUCF分野除く。 間接CO ₂ を除く。)		1,302.5	1,353.6	1,396.3	1,407.8	1,358.3	1,319.8	1,302.8	1,289.2	1,238.3	-2.5%	-3.9%
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。 間接CO ₂ を除く。)		1,232.1	1,283.9	1,323.6	1,341.8	1,294.0	1,260.4	1,248.6	1,230.7	1,181.0	-2.2%	-4.0%
総排出量 (LULUCF分野除く。 間接CO ₂ を含む。)		1,305.0	1,355.9	1,398.6	1,410.1	1,360.5	1,322.0	1,305.0	1,291.3	1,240.4	-2.8%	-3.9%
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。 間接CO ₂ を含む。)		1,234.5	1,286.3	1,325.8	1,344.0	1,296.2	1,262.6	1,250.7	1,232.8	1,183.0	-2.5%	-4.0%

※1 間接CO₂を含まない

※2 LULUCF: 土地利用、土地利用変化及び林業

2.2. KP-LULUCF 活動

京都議定書第 8 回締約国会議（COP/MOP8）における決定 2/CMP.8 パラグラフ 4 の要請に従って報告する、京都議定書の第二約束期間の下での第 3 条 3 及び 4 に関する吸収源活動（KP-LULUCF 活動）は、我が国では新規植林・再植林、森林減少、森林経営、農地管理、牧草地管理、及び植生回復活動が該当する⁵。活動毎の排出・吸収状況は表 2 の通りである。詳細については第 11 章を参照のこと。

表 2 京都議定書第 3 条 3 及び 4 活動による排出・吸収量（CRF Accounting Table）

温室効果ガス排出・吸収活動	基準年 (1990)	純排出/吸収量					
		2013	2014	2015	2016	2017	2018
(kt CO ₂ 換算)							
A. 3 条 3 項活動							
A.1. 新規植林・再植林		-1558	-1563	-1562	-1562	-1536	-1442
自然攪乱により除外される排出量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
自然攪乱を受けた土地での除外される再吸収量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
A.2. 森林減少		2049	2055	2274	2275	1611	1605
B. 3 条 4 項活動							
B.1. 森林経営							
純排出/吸収量		-51149	-51449	-49216	-46650	-46469	-45361
自然攪乱により除外される排出量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
自然攪乱を受けた土地での除外される再吸収量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
代替植林に起因するデビット (CEF-ne)		NA	NA	NA	NA	NA	NA
FM参照レベル (FMRL)		0	0	0	0	0	0
FMRLへの技術的調整		1069	1252	1404	1544	1687	1821
上限値							
B.2. 農地管理	10265	3693	4476	4413	4917	4139	3721
B.3. 牧草地管理	840	-190	9	-70	-118	-127	-209
B.4. 植生回復	-82	-1228	-1247	-1267	-1285	-1308	-1322
B.5. 湿地の排水・再湛水 (非選択)	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA

※四捨五入表記の関係で、各要素の累計と合計値が一致していない箇所がある。

⁵ 京都議定書第 3 条 3 及び 4 活動に伴う排出・吸収量は、条約の下で報告する LULUCF の排出・吸収量の一部に該当する。本報告書において、条約の下で報告する LULUCF は 6 章に、KP-LULUCF 活動は 11 章に詳細情報が示されている。

概要3. 各分野の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

3.1. 温室効果ガスインベントリ

2018年度の温室効果ガス排出量及び吸収量の分野⁶ごとの内訳をみると、温室効果ガス総排出量に占める割合は、エネルギー分野（間接CO₂含まない）が87.5%、工業プロセス及び製品の使用分野（間接CO₂含まない）が8.1%、農業分野が2.7%、廃棄物分野が1.6%、間接CO₂排出が0.2%となった。

2018年度におけるLULUCF分野の吸収量の温室効果ガス総排出量に対する割合は4.6%となった。

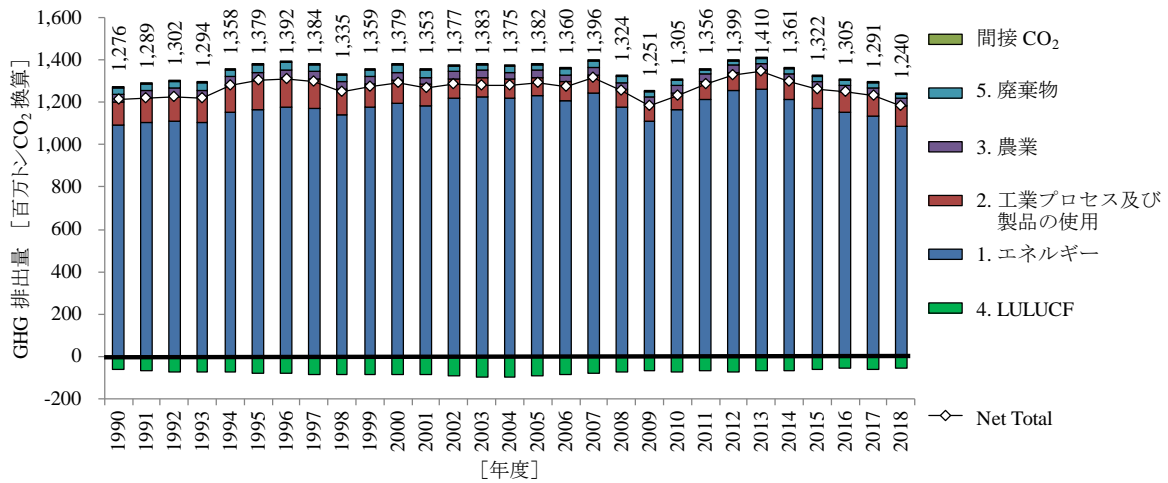


図 2 各分野の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

⁶ 2006年 IPCC ガイドライン及び共通報告様式（CRF）に示される Sector を指す。

表 3 各分野の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

[百万トンCO ₂ 換算]	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1. エネルギー ^{※1}	1,091.9	1,102.2	1,110.6	1,104.5	1,155.3	1,167.4	1,178.2	1,173.4	1,139.4	1,176.0
2. 工業プロセス及び製品の使用 ^{※1}	110.9	115.4	117.3	119.4	127.0	137.1	139.3	136.3	123.6	110.9
3. 農業	37.4	36.7	37.9	34.7	38.3	37.0	36.2	35.9	34.5	34.7
4. LULUCF ^{※2}	-62.2	-70.3	-73.3	-76.4	-76.1	-77.1	-81.7	-84.1	-85.5	-85.7
5. 廃棄物	29.7	29.7	30.9	30.4	32.9	33.1	33.3	33.7	33.3	32.7
間接CO ₂	5.5	5.3	5.1	4.8	4.8	4.7	4.7	4.6	4.2	4.2
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)	1,270.0	1,284.0	1,296.7	1,289.1	1,353.4	1,374.5	1,387.0	1,379.3	1,330.8	1,354.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)	1,207.8	1,213.7	1,223.4	1,212.7	1,277.3	1,297.4	1,305.3	1,295.2	1,245.2	1,268.6
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)	1,275.5	1,289.3	1,301.7	1,293.9	1,358.2	1,379.2	1,391.7	1,383.9	1,334.9	1,358.5
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)	1,213.3	1,219.0	1,228.4	1,217.5	1,282.1	1,302.1	1,310.0	1,299.8	1,249.4	1,272.8

[百万トンCO ₂ 換算]	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
1. エネルギー ^{※1}	1,198.0	1,185.7	1,217.4	1,226.1	1,221.8	1,228.5	1,205.7	1,241.8	1,174.2	1,112.6
2. 工業プロセス及び製品の使用 ^{※1}	109.0	98.0	91.1	89.7	86.3	87.4	90.2	89.3	84.9	77.5
3. 農業	35.3	34.8	35.0	34.0	35.1	35.2	35.0	36.1	35.5	34.8
4. LULUCF ^{※2}	-87.8	-88.3	-89.7	-100.0	-96.4	-91.2	-85.8	-81.2	-70.9	-66.9
5. 廃棄物	32.5	30.8	29.7	29.4	28.5	27.7	26.3	26.0	26.6	23.5
間接CO ₂	4.2	3.8	3.5	3.4	3.3	3.2	3.1	3.0	2.7	2.5
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)	1,374.8	1,349.3	1,373.2	1,379.1	1,371.7	1,378.8	1,357.2	1,393.2	1,321.2	1,248.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)	1,287.0	1,261.1	1,283.5	1,279.1	1,275.3	1,287.6	1,271.4	1,312.0	1,250.3	1,181.5
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)	1,379.0	1,353.1	1,376.7	1,382.5	1,375.0	1,382.0	1,360.3	1,396.2	1,323.9	1,250.9
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)	1,291.2	1,264.9	1,287.0	1,282.5	1,278.6	1,290.8	1,274.5	1,315.0	1,253.0	1,184.0

[百万トンCO ₂ 換算]	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1. エネルギー ^{※1}	1,162.6	1,213.3	1,253.7	1,261.1	1,210.5	1,171.6	1,152.7	1,137.0	1,085.7
2. 工業プロセス及び製品の使用 ^{※1}	80.7	82.7	85.2	89.5	92.1	93.2	96.2	99.0	100.1
3. 農業	35.9	35.3	34.8	34.8	34.2	33.6	33.5	33.4	33.3
4. LULUCF ^{※2}	-70.4	-69.7	-72.7	-66.0	-64.3	-59.4	-54.3	-58.5	-57.4
5. 廃棄物	23.3	22.4	22.7	22.4	21.5	21.3	20.4	19.9	19.3
間接CO ₂	2.4	2.3	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.1	2.1
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)	1,302.5	1,353.6	1,396.3	1,407.8	1,358.3	1,319.8	1,302.8	1,289.2	1,238.3
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)	1,232.1	1,283.9	1,323.6	1,341.8	1,294.0	1,260.4	1,248.6	1,230.7	1,181.0
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)	1,305.0	1,355.9	1,398.6	1,410.1	1,360.5	1,322.0	1,305.0	1,291.3	1,240.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)	1,234.5	1,286.3	1,325.8	1,344.0	1,296.2	1,262.6	1,250.7	1,232.8	1,183.0

※1 間接CO₂を含まない

※2 LULUCF: 土地利用、土地利用変化及び林業

3.2. KP-LULUCF 活動

概要 2.2 を参照のこと。

第1章 序論

1.1. 温室効果ガスインベントリの背景情報

国連気候変動枠組条約第4条及び第12条並びに2/CMP.8決定に基づき、日本国はここに1990年度から2018年度¹までの日本の温室効果ガス及び前駆物質等（窒素酸化物（NO_x）、一酸化炭素（CO）、非メタン揮発性有機化合物（NMVOC）、硫黄酸化物（SO_x））の排出・吸収に関する目録（インベントリ）を国連気候変動枠組条約（UNFCCC）事務局に報告する。

インベントリの作成方法については、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）により作成された「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」（以下、「2006年IPCCガイドライン」）が定められており、我が国の排出量と吸収量の算出方法はこれに準拠している。また、インベントリの透明性、一貫性、比較可能性、完全性及び正確性を向上するために、「2006年IPCCガイドラインに対する2013年版追補：湿地」（以下、「湿地ガイドライン」）及び「京都議定書に関わる2013年改訂補足的方法論及びグッドプラクティスガイダンス」（以下、「2013年京都議定書補足的方法論ガイダンス」）も適用している。

インベントリの報告方法については、UNFCCC温室効果ガスインベントリ報告ガイドライン（24/CP.19決定 附属書I、以下、「UNFCCCインベントリ報告ガイドライン」）の適用が締約国会議によって決定されており、これに則してインベントリの報告を行う。

1.2. 国家インベントリに関する取り決め

1.2.1. 制度的・法的・手続き的取り決め

1.2.1.1. インベントリ作成のための制度的・法的取り決め

我が国では、UNFCCC及び京都議定書の国内措置を定めた「地球温暖化対策の推進に関する法律²」（平成10年法律第117号）第7条において、政府は、毎年、我が国における温室効果ガスの排出及び吸収量を算定し、公表することとされているため、環境省が関係省庁及び関係団体の協力を得ながら、UNFCCC及び京都議定書に基づき毎年提出するインベントリを作成し、2/CMP.8決定に基づく補足情報等を取りまとめている。

環境省は、インベントリに係る全般的な責任を負っており、最新の科学的知見をインベントリに反映し、国際的な規定へ対応するために、後述の温室効果ガス排出量算定方法検討会の開催を含むインベントリ改善に関する検討を行い、検討結果に基づいて温室効果ガス排出・吸収量の算定などを実施する。なお、インベントリにおける排出・吸収量の算定、共通報告様式（Common Reporting Format、以下、「CRF」）及び国家インベントリ報告書（National Inventory Report、以下、「NIR」）の作成といった実質的な作業は、国立環境研究所地球環境研究センター温室効果ガスインベントリオフィス（Greenhouse Gas Inventory Office of Japan、以下、「GIO」）が実施している。関係省庁及び関係団体は、各種統計の作成等を通じ、活動量、排出係数、排出・吸収量等のデータ、2/CMP.8決定に基づく補足情報等、関連情報をGIOに提供する。関係省庁は、環境省及びGIOにより作成されたインベントリについて、実際に算定を行っている算定ファイル等（Japan National Greenhouse gas Inventory ファイル、以下、「JNGI ファイル」）も含め、品質管理（QC）活動の一環として、情報の確認を実施している。

¹ 排出量の大部分を占めるCO₂が年度ベース（当該年4月～翌年3月）であるため、『年度』と記した。

² 1998年10月制定。最終改正2016年5月27日。

全ての確認がなされたインベントリは公式に日本の温室効果ガス排出・吸収量の数値として決定され、公表されるとともに、UNFCCC事務局へ提出される。
 上記をまとめたインベントリの作成体制を図 1-1 に示す。

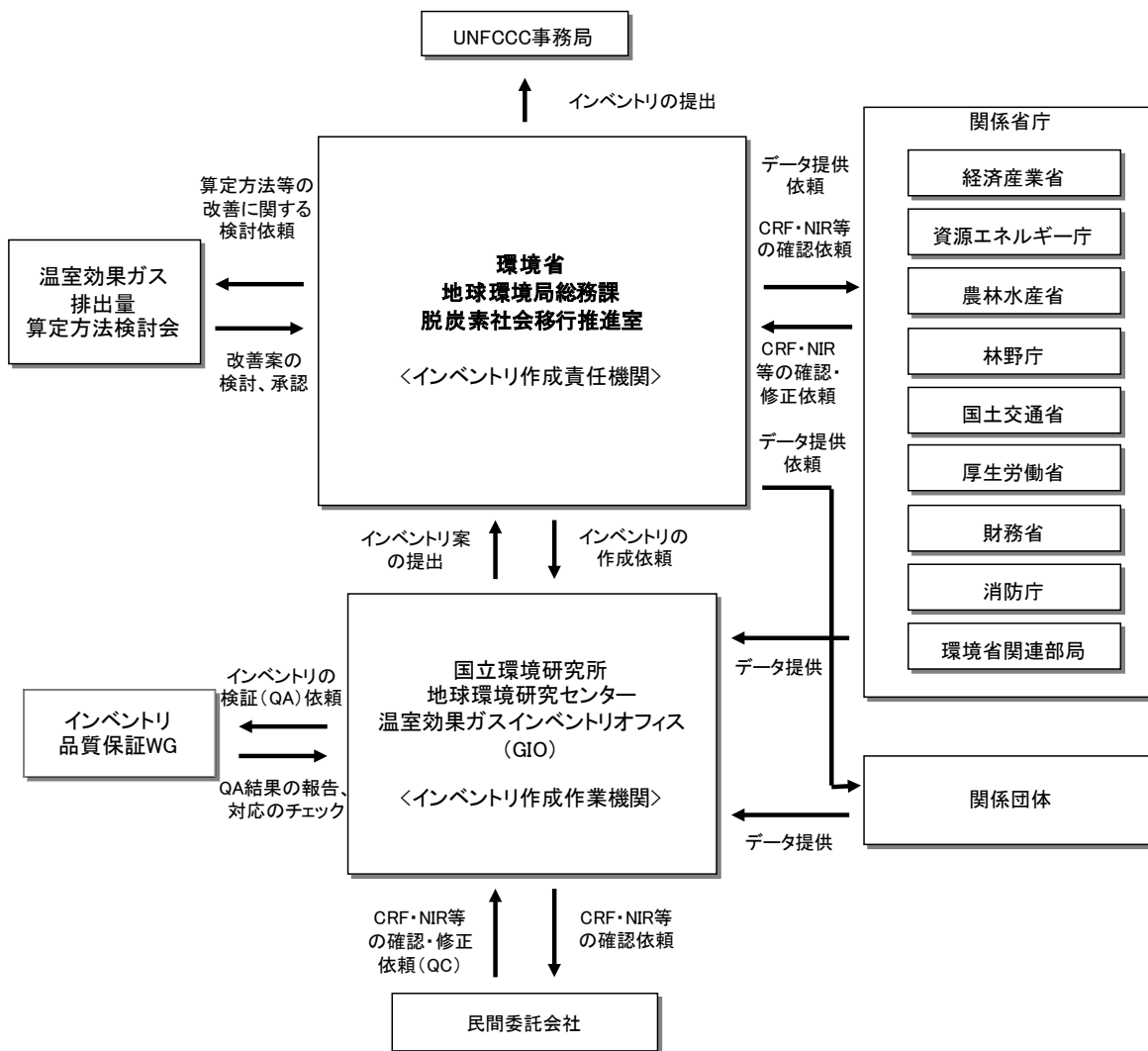


図 1-1 日本国のインベントリ作成体制

1.2.1.2. インベントリ作成に関する各主体の役割・責任

インベントリ作成プロセスに関与する機関と、その機関の役割は以下の通りである。

1) 環境省（地球環境局総務課脱炭素社会移行推進室）

- UNFCCC インベントリ報告ガイドライン及び京都議定書第5条1に基づいて指定された、我が国のインベントリ作成に責任を持つ単一の国家機関。
- インベントリの編集と提出に関する責任を有する。
- インベントリのための品質保証・品質管理（QA/QC）活動のコーディネートをを行う。
- QA/QC 計画案を確認し、承認する。

- ▶ インベントリ改善計画案を確認し、承認する。

2) 国立環境研究所地球環境研究センター温室効果ガスインベントリオフィス (GIO)

- ▶ インベントリ作成の実質的な作業を実施する。インベントリの算定、編集及び全てのデータの保存・管理に係る責任を有する。
- ▶ QA/QC 計画の改訂案を作成する。
- ▶ インベントリ改善計画案を作成する。

3) 関係省庁

関係省庁は、インベントリの作成に関して、下記の役割及び責任を担う。

- ▶ インベントリの作成に必要な活動量・排出係数等のデータ作成及び提供。
- ▶ インベントリ作成のために提供するデータの確認。
- ▶ GIO が作成したインベントリ (CRF、NIR、JNGI ファイル及びその他の情報) の確認 (カテゴリー別 QC) の実施。
- ▶ (必要に応じ) 関係省庁の管轄統計又は個別作成データに対する専門家審査チーム (ERT : Expert Review Team、以下、「ERT」) からの質問への対応及び審査報告書案へのコメント作成。
- ▶ (必要に応じ) ERT による訪問審査への対応。

4) 関係団体

関係団体は、インベントリの作成に関して下記の役割及び責任を担う。

- ▶ インベントリの作成に必要な活動量・排出係数等のデータ作成及び提供。
- ▶ インベントリ作成のために提供するデータの確認。
- ▶ (必要に応じ) 関係団体の管轄統計又は個別作成データに対する ERT からの質問への対応及び審査報告書案へのコメント作成。

5) 温室効果ガス排出量算定方法検討会

温室効果ガス排出量算定方法検討会は、環境省が設置・運営する委員会であり、インベントリにおける排出・吸収量の算定方法や、活動量、排出係数等各種パラメータの選択について検討を行う役割を担う。

温室効果ガス排出量算定方法検討会の下には、分野横断的課題を検討するインベントリワーキンググループ及び分野別の課題を検討する各分科会 (エネルギー・工業プロセス分科会、運輸分科会、HFC 等 4 ガス分科会、農業分科会、廃棄物分科会、森林等の吸収源分科会、NMVOC 分科会) を設置している。

インベントリ WG 及び各分科会は、各分野の専門家より構成され、インベントリの改善に関する案を検討する。

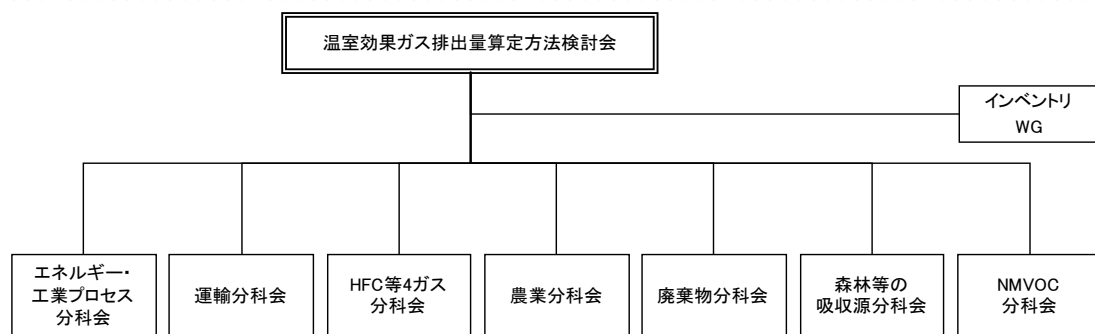


図 1-2 温室効果ガス排出量算定方法検討会の体制

6) 民間委託会社

環境省からインベントリ作成に関する業務の委託を受けた民間委託会社は、業務契約に基づき、インベントリの作成に際して下記の役割を担う。

- 環境省及びGIOが作成したインベントリ(CRF、NIR、JNGIファイル)の品質管理(QC)。
- (必要に応じ) ERTからの質問への対応及び審査報告書案へのコメント作成に関する支援。
- (必要に応じ) ERTによる訪問審査への対応に関する支援。

7) インベントリ品質保証ワーキンググループ (QAWG)

インベントリ品質保証ワーキンググループ(以下、「QAWG」)は、インベントリ作成に直接関与していない専門家によって構成されるQA活動のための組織であり、インベントリにおける排出・吸収源ごとの詳細な審査を実施することにより、インベントリの品質を保証するとともに改善点を抽出する役割を担う。

1.2.1.3. UNFCCC インベントリ審査への対応

我が国が毎年提出する条約インベントリ及び議定書吸収源補足情報は、UNFCCC インベントリ審査ガイドライン(13/CP.20 決定 附属書)、京都議定書第8条及び22/CMP.1 決定等に基づき、ERTによる審査を受けることとされている。具体的には、我が国が所定のガイドライン³に従って排出・吸収量の算定・報告を正確かつ完全に行っているか、算定方法について透明性のある説明がなされているか、QA/QC活動や不確実性評価が適切に実施されているか等の観点から、厳しくチェックを受ける。

インベントリ審査については、議定書第二約束期間下で削減約束を担わない我が国のインベントリに関して透明性の確保が重要であるという観点から、以下のとおり対応する。

【基本体制】

我が国では、インベントリの編集及び提出について責任を有している環境省(地球環境局総務課脱炭素社会移行推進室)を審査対応における全体統括(責任)機関と位置付け、資料作成・UNFCCC事務局との連絡等の実作業はGIOにおいて実施する。また、インベントリ作成に関与している関係省庁・関係団体及び民間委託会社⁴は、関連情報の提供、資料作成支援、

³ UNFCCC インベントリ報告ガイドライン、2006年IPCCガイドライン、2013年京都議定書補足的方法論ガイドライン

⁴ 民間委託会社は、環境省との業務委託契約に基づき審査対応に協力する。

QC の実施等を通じて審査対応に協力する（図 1-3）。

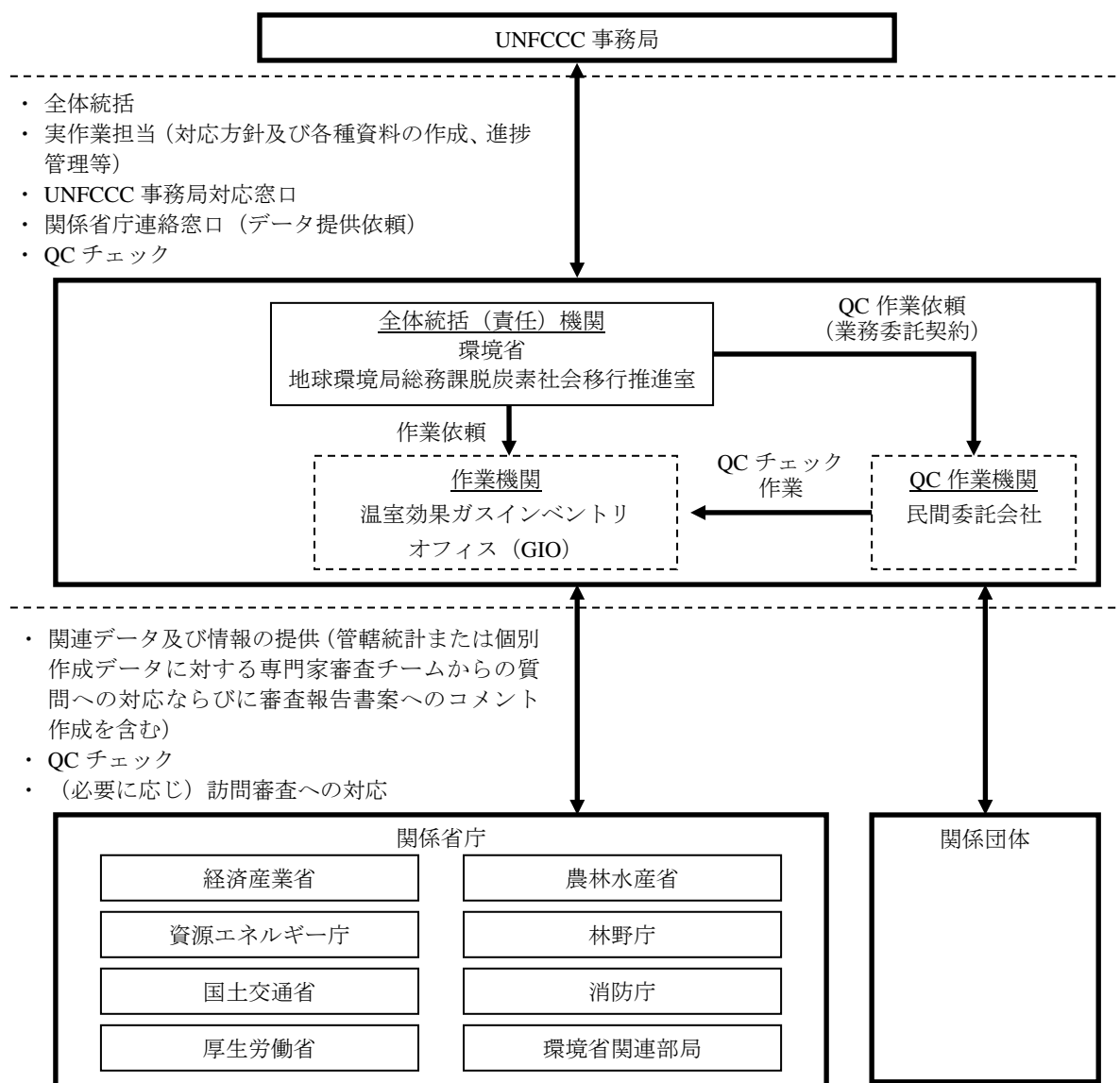


図 1-3 審査対応における我が国の基本体制

1.2.2. インベントリの計画・作成・管理の概要

環境省（地球環境局総務課脱炭素社会移行推進室）は我が国のインベントリ作成に責任を持つ単一の国家機関であり、GIO はインベントリ作成の実質的な作業を実施する。関係省庁・関係団体は、インベントリの作成に関して主に必要な活動量・排出係数等のデータ作成及び提供の役割を担う。民間委託会社は、環境省からの業務委託契約に基づき、主に環境省及び GIO が作成したインベントリの QC の役割を担う。

環境省により開催されている「温室効果ガス排出量算定方法検討会」は、算定方法や活動量、排出係数に関する検討を行う役割を担う。検討会の下には、分野横断的課題を検討するインベントリワーキンググループ（WG）及び分野別の課題を検討する各分科会（エネルギー・工業プロセス分科会、運輸分科会、HFC 等 4 ガス分科会、農業分科会、廃棄物分科会、森林等の吸収源分科会、NMVOC 分科会）が設置されている。

排出・吸収量は、UNFCCC インベントリ報告ガイドラインに従って作成されている（詳細はセクター各章参照）。キーカテゴリー分析は、2006年 IPCC ガイドラインに従い行われており、アプローチ1及び2が適用されている（分析結果は1.5節参照）。定性的アプローチを使用した付加的なキーカテゴリー分析は実施されていない。京都議定書第3条3及び4の下での活動については、京都議定書下の活動及び条約インベントリにおける関連キーカテゴリーとの関係性を定めるガイダンスに従い、キーカテゴリーの特定を行っている。これらキーカテゴリー分析は、インベントリ改善の優先順位を決める際に使用されている。不確実性の評価は、2006年 IPCC ガイドラインに従い行われており、アプローチ1が適用されている。（評価結果は1.6節参照）

また、インベントリの作成においては QC 手続きが適用されており、QA/QC 計画の一部として文書化されている。（詳細は1.2.3節参照）また、インベントリの QA として、インベントリ作成に直接関与していない専門家による排出・吸収源ごとの詳細な審査（専門家ピアレビュー）を定期的実施している。

我が国は、細分化された排出係数・活動量、及び当該排出係数・活動量のインベントリ作成における合成等に関する文書を含む集中記録・保管システムを有している。記録・保管されている情報には、QA/QC 手続き、UNFCCC 審査および QA の専門家ピアレビュー、キーカテゴリーの特定、インベントリ改善計画の文書も含まれている。保管システムは GIO により管理されており、電子媒体と紙媒体による文書から構成される。

1.2.3. QA/QC ・ 検証の計画

1.2.3.1. QA/QC プロセス

我が国ではインベントリを作成する際に、2006年 IPCC ガイドラインに従って、各プロセスにおいて QC 活動（算定の正確性チェック、文書の保管など）を実施し、インベントリの品質を管理している。我が国では、インベントリ作成に関係する機関である環境省（GIO 及び民間委託会社を含む）及び関係省庁に所属する担当者が行うインベントリ作成に関わる品質管理活動を QC と位置付けている。また、インベントリ作成体制外の立場の専門家による外部審査を QA と位置付け、現状の算定方法に対し、科学的知見やデータ入手可能性の観点からデータ品質の評価を行っている。我が国の QA/QC 活動の概要は表 1-1 の通りである。

表 1-1 我が国の QA/QC 活動の概要

	実施主体	主な活動内容
QC (品質管理)	環境省地球環境局 総務課脱炭素社会移行推進室	・インベントリのための QA/QC 活動のコーディネート ・QA/QC 計画案の確認及び承認 ・インベントリ改善計画案の確認及び承認
	国立環境研究所 地球環境研究センター 温室効果ガスインベントリオフィス (GIO)	・一般的な QC 手続きの実施 ・QA/QC 活動の記録・関連文書の保管 ・インベントリ改善計画案の作成 ・QA/QC 計画の改訂案の作成
	関係省庁	・インベントリ作成のために提供するデータの確認 ・GIO が作成した JNGI ファイル及びインベントリの確認 (カテゴリー別 QC) の実施
	温室効果ガス排出量算定方法検討会	・算定方法、排出係数、活動量等の設定に関する検討、評価 (カテゴリー別 QC) の実施
	民間委託会社	・GIO が作成した JNGI ファイル及びインベントリの確認 (カテゴリー別 QC) の実施
QA (品質保証)	インベントリ品質保証 WG (QAWG)	・外部専門家によるインベントリのピアレビューの実施

1.2.3.1.a. QC 活動

a) 一般的な QC 手続き

2006年 IPCC ガイドライン Vol.1 第6章 表 6.1 にもとづき、一般的な QC 手続きは、全ての排出・吸収源カテゴリーに適用可能な、計算、データ処理、完全性及び文書化に関する一般的な確認事項を含むものである。一般的な QC 手続きは、インベントリ作成の各実務担当者によって実施される。

下記に、各カテゴリーの排出・吸収量算定ファイル、CRF 移行ファイル及び NIR を作成する作業を行う GIO のセクトラルエキスパート (Sectoral Expert、以下、「SE」)、各 SE の情報を統合し、インベントリを取りまとめる作業を行う GIO のナショナルインベントリコンパイラー (National Inventory Compiler、以下、「NIC」)、排出・吸収量の算定に用いる活動量等のデータ提供者が行う QC 活動を示す。

1) セクトラルエキスパート (SE)

SE が行う主な QC 活動は次のとおりである。

- データ入力及び参照の際の転記エラーのチェック
- 排出量が正確に算定されているかのチェック
- パラメータ及び排出量の単位が正確に記録され、適切な換算係数が用いられているかのチェック
- データベース及び/またはファイルの整合性のチェック
- カテゴリー間のデータにおける一貫性のチェック
- 処理ステップ間におけるインベントリデータの挙動が正確かどうかのチェック
- 完全性のチェック
- 時系列の一貫性のチェック
- トレンドのチェック
- 過去の算定値との比較
- 排出量及び吸収量における不確実性が正確に推計・算定されているかのチェック
- 内部文書化のレビューの実施
- 活動量及び排出係数の選択のための仮定・基準が文書化されているかどうかのチェック

2) ナショナルインベントリコンパイラー (NIC)

NIC が行う主な QC 活動は次のとおりである。

- ▶ SE が CRF レポーターにデータを不備なくインポートしたかどうかの確認
- ▶ ドキュメンテーションボックスに必要な情報が適切に入力されているかどうかの確認
- ▶ 「NE」、「IE」の理由が正しく入力されているかどうかの確認
- ▶ キーカテゴリー分析の結果が正しく出力されているかどうかの確認
- ▶ 再計算の理由がすべての項目で記述されているかどうかの確認
- ▶ 排出量・吸収量が正しく合計されているかどうかの確認
- ▶ 省庁協議のデータの修正が正しく反映されているかどうかの確認

b) 排出源・吸収源カテゴリー別の QC 手続き

我が国においては、以下のカテゴリー別 QC を実施している。

1) 民間委託会社による QC (外部 QC)

GIO と同様の算定ファイルを用いて排出・吸収源カテゴリー別の算定ファイルに入力されたデータや算定式の確認を行うとともに、温室効果ガス排出・吸収量の算定を行い、算定結果の相互検証を実施することにより、GIO が作成した JNGI ファイル、CRF 案、NIR 案に係る QC を行う。

2) 省庁調整による QC (外部 QC)

JNGI ファイル、CRF、NIR 及び排出・吸収量算定値を示した国内向け公表資料の案について、ファイル一式が関係省庁に送付され、各省庁に関連するカテゴリーの内容に係る QC を行う。

3) 温室効果ガス排出量算定方法検討会

各排出・吸収源における算定方法や、活動量、排出係数等各種パラメータの選択に係る検討を実施することにより、排出・吸収源カテゴリー別の QC 活動を担う。

c) インベントリ情報の文書化、保管に関する QC 活動

GIO は、インベントリ情報の文書化、保管に関する QC 活動を UNFCCC 事務局へのインベントリ提出後速やかに実施する。

1.2.3.1.b. QA 活動

QA は、インベントリ作成に直接関与していない第三者によるインベントリの品質評価を指す。

我が国においては、インベントリの品質を保証するため、QA 活動として QAWG による専門家ピアレビューを実施する。

a) インベントリ品質保証ワーキンググループ (QAWG)

1) 概要

QAWG は、インベントリ作成に直接関与していない専門家による排出・吸収源ごとの詳細な審査 (専門家ピアレビュー) により、インベントリの品質を保証するとともに、改善点を抽出する。

QAWG 事務局は、GIO 内に設置され、QAWG が審査対象とする排出・吸収源分野・カテゴリーは、環境省及び QAWG 事務局により決定され、QAWG の委員については、以下の要件に基づいて選定される。

<QAWG 委員の要件>

- | | |
|----|--|
| a. | 品質保証の対象となる分野（カテゴリー）の排出・吸収量算定プロセスに関与していないこと（具体的には、当該分野に関わる算定方法検討会、データ作成、データ提供等に関与していないこと） |
| b. | インベントリに関する利害関係が存在せず、特定の関心や組織に影響されることなく客観的な判断が行えること |
| c. | インベントリの品質を保証するために必要なスキル、知識、経験を有していること |

2) 審査内容

QAWG は主として下記の事項に関する審査を実施し、当該活動の成果を次回提出のインベントリ作成に活用している。

- 算定方法、活動量、排出係数等に関する妥当性の確認
- CRF 及び NIR における報告内容の妥当性の確認

3) 2019 年度の活動

2019 年度は、工業プロセス及び製品の使用分野を対象に 2 名の委員によって、以下の日程で実施された。

表 1-2 2019 年度の QAWG 審査実施日程

日程	内容
2019 年 4 月中旬	委員の選定
5 月下旬	事務局による各委員への訪問・説明
6 月～8 月	委員による審査（温室効果ガスインベントリの精査と疑問点・問題点の洗い出し、改善提案）
9 月 18 日	QAWG 会合の開催
10 月、2020 年 1 月	QAWG からの指摘事項について、温室効果ガス排出量算定方法検討会及び関係分科会に提示・検討
3 月～4 月	QAWG の活動・結果概要のインベントリへの記載 指摘事項への対応の検討結果を QAWG 委員へ報告 委員による検討結果及び修正箇所のチェック

QAWG により、工業プロセス及び製品の使用分野のインベントリが概ね妥当であることが確認された。

今回の QAWG においては、温室効果ガス排出量算定方法検討会関係分科会の課題として新たに追加すべき課題はなかった。但し、QAWG は NIR の記述不足等についても指摘しており、NIR の品質改善につながっている。

なお、QAWG 審査対象とする排出・吸収源分野・カテゴリーは、毎年度、環境省及び QAWG 事務局の協議により決定し、数年でインベントリ全体をカバーできるように実施する予定である。

1.2.3.2. QA/QC 計画

QA/QC 計画は、インベントリの作成開始から最終報告までの全てのプロセスにおける QA/QC 活動の内容や作成スケジュール、各関与主体の役割分担等を文書化した内部文書であ

り、インベントリ作成における QA/QC 活動を組織化・体系化し、作成に関与する各主体が実施すべき事項を明確化するとともに、QA/QC 活動の実施を担保することを目的として作成されたものである。

なお、本 QA/QC 計画は、国連気候変動枠組条約におけるインベントリ及び 2/CMP.8 決定で定められた京都議定書第 3 条 3 及び 4 の下での吸収源に関する補足情報の作成、報告、審査に関する作業プロセスを対象としている。

1.2.3.3. 検証活動

算定方法検討会の各分科会において、実測調査に基づく排出係数の検討や、モデル等から算出された排出係数を我が国のインベントリに適用することの妥当性の確認等を行っている。また、事業者が自らの活動により排出される温室効果ガス排出量を算定・把握することで自らの排出抑制につなげることを目的とした「温室効果ガス排出量算定・報告・公表制度」において報告された事業所単位の排出量データとインベントリにおける排出量との相互検証を行い、インベントリにおいて排出量の大きな把握漏れがないかを確認している。

1.2.3.4. 秘匿情報の取り扱い

関係省庁や関係団体から提供された活動量や排出係数、その他パラメータ、及び排出量等の一部が秘匿情報に該当する。これらはリスト化され、保存されている。データの入手・保存・QC の際には、ファイルにパスワードをかけて保護し、秘匿情報を含むファイルは他と差別化した形で管理し、アクセスを制限している。関係省庁による確認を依頼する際には、秘匿データについては、これを提出した省庁のみに送付し確認を受ける。国連報告の際には、必要最小限の形で他のサブカテゴリと合算し、注釈記号「C」(Confidential)を用いて報告する。

1.2.4. 国家インベントリに関する取り決めの変更に関する情報

UNFCCC インベントリ報告ガイドラインパラグラフ 50 (J) 及び 15/CMP.1 決定の附属書パラグラフ 21 の規定に基づき、我が国の国家インベントリに関する取り決めについて、前回のインベントリ提出からの変更点を報告する。

1.3. インベントリ作成プロセス・データ収集・処理・保管

1.3.1. インベントリ作成の年次サイクル

インベントリ作成の年次サイクルを表 1-3 に示す。インベントリの策定サイクルは我が国の会計年度（財政年度）（毎年 4 月 1 日から翌年 3 月 31 日まで）のサイクルと連動・設定されている。我が国では、UNFCCC 事務局に提出するインベントリの確報値（毎年 4 月 15 日提出締切）の算定に先立って、速報値の算定・公表も行っている（速報値では、排出量のみを公表し、吸収量は公表していない）。

表 1-3 インベントリ作成の年次サイクル

※n年度のインベントリ作成の場合

プロセス	関係主体	n+1年												n+2年			
		n+1年度												3月	4月		
		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月						
1 インベントリ品質保証WGの開催	環境省、GIO	→	→	→	→												
2 インベントリ改善に関する検討	環境省、GIO		→	→	→	→											
3 算定方法検討会の開催	環境省 (GIO、民間委託会社)		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→					
4 インベントリ用データの収集	環境省、GIO、関係省庁・団体、民間委託会社												→	→	→	→	
5 CRF案の作成	GIO、民間委託会社												→	→	→		
6 NIR案の作成	GIO、民間委託会社												→	→	→		
7 外部QC及び省庁調整の実施	環境省、GIO、関係省庁、民間委託会社													→	→	→	
8 CRF・NIR案の修正	環境省、GIO、民間委託会社														→	→	
9 インベントリの提出、公表	環境省、GIO																★

1.3.2. インベントリ作成のプロセス

1) インベントリ品質保証ワーキンググループ (QAWG) の開催 (ステップ 1)

インベントリの品質を保証するとともに、改善点の抽出を行うため、インベントリ作成に直接関与していない専門家によるピアレビューを実施し、QAWGを開催する。

QAWGにおいては、算定方法、活動量、排出係数等に関する妥当性の確認やCRF及びNIRにおける報告内容の妥当性の確認を行う。GIOは、指摘された要改善事項をインベントリ算定方法に関する検討及び次のインベントリ作成に活用する。

2) インベントリの改善に関する検討 (ステップ 2)

我が国では、UNFCCCに基づくインベントリの審査における指摘、QAWGにおける指摘、前年度までの温室効果ガス排出量算定方法検討会で示された継続課題、その他インベントリ算定過程において発見された修正事項に基づいて、環境省及びGIOがインベントリの改善項目を抽出する。専門家による評価 (ステップ 3) のスケジュールは、このステップで言及した情報を考慮したうえで作成される。

3) 温室効果ガス排出量算定方法検討会の開催 [専門家による算定方法の評価・検討] (ステップ 3)

毎年のインベントリの算定方法や専門的な評価・検討が必要な課題については、環境省において「温室効果ガス排出量算定方法検討会」を開催し、幅広い分野の国内専門家による検討を行う。

4) インベントリ用データの収集 (ステップ 4)

インベントリの作成に必要なデータ及び2/CMP.8決定の補足情報に関連する情報の収集を実施する。

5) CRF案の作成 [キーカテゴリー分析及び不確実性評価の実施を含む] (ステップ 5)

排出・吸収量の算定式に基づくリンク構造を有するJNGIファイルを用いることにより、データの入力と排出・吸収量の算定を一括して実施する。また、キーカテゴリー分析及び不確実性評価も併せて実施する。

6) NIR 案の作成 (ステップ 6)

ステップ2における検討を踏まえた上で、GIOにおいてNIRの記述の修正点及び追加文書を決定する。NIRの構成は通例毎年ほぼ同じであるが、章立ての変更など大幅な改変が見込まれる場合は、環境省に方針を提示し了解を得る。GIOにおいて最新データへの更新、記述の修正及び追加を行うことによりNIR案を作成する。

7) 外部 QC 及び省庁調整の実施 (ステップ 7)

QC活動として、GIOが作成したJNGIファイル及びCRF(JNGI0次案)に対する民間委託会社によるQC(外部QC)を実施する。民間委託会社は、JNGI0次案の入力データや排出量・吸収量の算定式の確認を行うだけでなく、GIOと同様のJNGIファイルを用いて温室効果ガス排出・吸収量の算定を行い、算定結果の相互検証も実施する。この相互検証により、データ入力や排出量算定のミス等を予防する。また、GIOが作成したNIR案(NIR0次案)の記載内容についても、同様に内容のチェックを実施する。民間委託会社によるQCを経たJNGIファイル、CRF及びNIR案をインベントリ1次案とする。

次いで、GIOはインベントリ1次案及び国内向け公表資料1次案の電子ファイルを、環境省及び関係省庁に送付し、関係省庁に1次案の確認を依頼する(省庁調整)。なお、秘匿データについては、これを提出した省庁のみに当該秘匿データを送付し確認を受ける。

一部の排出・吸収源についてはGIO以外の機関等により排出・吸収量が算定されており、これらの機関等におけるQC活動の実施状況を確認する。

8) CRF・NIR 案の修正 (ステップ 8)

関係省庁におけるインベントリ及び公表用資料1次案のチェック(ステップ7)の結果、修正依頼が提出された場合には、環境省、GIO及び修正依頼提出省庁間において、修正内容を調整した後、インベントリ及び公表用資料2次案を作成する。

作成した2次案は再度関係省庁へ最終確認のため送付する。追加の修正依頼が無い場合、2次案が最終版となる。

9) インベントリの提出及び公表 (ステップ 9)

完成したインベントリをUNFCCC事務局に提出する。それに合わせて算定した温室効果ガス排出・吸収量に基づく公表用資料について記者発表を行うとともに、関連情報とともに環境省のホームページ(<https://www.env.go.jp/>)において公表する。また、温室効果ガス排出量データを取りまとめた電子ファイルをGIOのホームページ(<http://www-gio.nies.go.jp/index-j.html>)において公表する。

1.3.3. インベントリ情報の文書化、保管

我が国では、インベントリを作成する上で必要となる情報を文書化し、原則的にGIOにおいて保管している。

なお、インベントリの作成に必要な主要ファイル(全算定ファイル、NIRのワードファイル、CRF)については、環境省においても電子媒体にて保管する。

1.3.3.1. 情報の文書化

GIOは、インベントリに関係する全ての情報を電子情報または紙媒体として文書化し、保管する。保管すべき情報の例としては、以下のものが挙げられる。

- ・ UNFCCC事務局へ提出した毎年のインベントリファイル一式

- ・ 速報値及び確報値における公表資料一式
- ・ インベントリ作成に用いた統計データ及び提供データ（提供者、提供時期等の関連情報を含む）
- ・ 活動量、算定方法、排出係数等の選択に関する検討過程及び検討結果に関する情報（温室効果ガス排出量算定方法検討会における検討プロセスにおける関連資料）
- ・ インベントリ作成プロセスにおける関係主体とのやりとりの記録
- ・ インベントリの再計算に関する情報（再計算理由、実施時期など）
- ・ QA/QC 計画及び QAWG を含む QA/QC 活動の実施記録
- ・ インベントリに対する専門家のコメント
- ・ UNFCCC インベントリ審査における審査報告書及び ERT との質疑応答の記録

1.3.3.2. 情報の保管

1) 電子情報での保管

i) インベントリ関連の電子情報

- ・ 各年の JNGI ファイル及び CRF、NIR 関連ファイルは、算定実施年をファイル名に記載し、年ごとに所定のフォルダに保存する。
- ・ インベントリにおける排出・吸収量算定及びその他関連データの作成に用いた統計データまたは提供データ等の電子ファイルは、データの入手日、データ提供元をファイル名等に記載の上、所定のフォルダに保存する。
- ・ 排出・吸収量算定方法の検討時における各種電子ファイル資料（Word、PDF など）については、資料のタイトル、ファイルの入手日（必要に応じてファイル提供元）をファイルに記載の上、所定のフォルダに保存する。
- ・ インベントリに関する情報のやりとりを電子メールで行った場合は、その電子ファイルを所定のフォルダに保存する。

ii) 電子情報のバックアップ・リスク管理

- ・ インベントリ関連情報を保存している GIO の所属する国立環境研究所地球環境研究センターのサーバは、毎日他の 1 か所に自動バックアップを実施している。
- ・ 全てのインベントリ関連電子情報は、年に 1 回、年次インベントリの UNFCCC 事務局への提出後、CD-ROM 等の電子メディアに保存し、保管する。

2) 紙媒体での保管

- ・ インベントリにおける排出・吸収量算定に用いた統計書や提供された紙媒体のデータ・資料、その他各種紙媒体資料については、所定の保管場所にファイリングを行う。

1.3.3.3. インベントリ情報の文書化、保管に関する QC 活動

GIO は、インベントリ情報の文書化、保管に関する QC 活動を UNFCCC 事務局へのインベントリ提出後速やかに実施する。

1.4. インベントリの算定方法

我が国では、基本的に 2006 年 IPCC ガイドラインに示された算定方法を用いて排出・吸収

量の算定を行っているが、一部の排出・吸収源については、我が国の排出実態をより正確に反映するために、我が国独自の算定方法を用いて算定を行っている。

排出係数については、基本的に我が国における研究等に基づく実測値か推計値を用いている。ただし、排出量が少ないと考えられる区分（「1.B.2.a.ii. 燃料からの漏出－石油の生産（CO₂、CH₄）」）等については、2006年 IPCC ガイドラインに示されるデフォルト値を用いて算定している。

1.4.1. 活動量データの収集プロセス

算定に必要な活動量データは、データが出版物・ウェブ等から入手できるものについては当該媒体から必要となるデータを収集している。また、出版物・ウェブ等で公表されないデータ及びインベントリ作成時に未公表のデータについては、環境省又は GIO よりデータを所管する関係省庁及び関係団体にデータ提供依頼を行い、当該データの提供を受けている。主な関係省庁及び関係団体と統計・データは表 1-4 に示す通りである。

表 1-4 主な関係省庁及び関係団体と統計・データ

		主なデータまたは統計
関係省庁	環境省	大気汚染物質排出量総合調査、日本の廃棄物処理、廃棄物等循環利用量実態調査、産業廃棄物処理施設状況調査
	経済産業省	総合エネルギー統計、化学工業統計年報、窯業・建材統計年報、硝酸生産量、産構審 製造産業分科会化学物質政策小委員会フロン類等対策 WG 資料
	国土交通省	自動車燃料消費量統計年報、土地利用現況把握調査
	農林水産省	畜産統計、耕地及び作付面積統計、ポケット肥料要覧、森林資源現況調査、国家森林資源データベース
関係団体	電気事業連合会	加圧流動床ボイラー燃料使用量
	(一財) 石炭エネルギーセンター	石炭生産量、石炭政策史
	(一社) セメント協会	クリンカ生産量、セメントハンドブック
	(一社) 日本鉄鋼連盟	コークス炉蓋・脱硫酸化塔・脱硫再生塔からの排出量
	日本製紙連合会	産業廃棄物最終処分量、RPF 焼却量

1.4.2. 排出係数及び算定方法の選定プロセス

我が国の排出・吸収量の算定方法は、2006年 IPCC ガイドラインに基づき、我が国の温室効果ガス排出・吸収量算定に必要な全ての活動区分に対し、温室効果ガス排出量算定方法検討会において我が国の実状に合った算定方法の検討を行い、決定する。

1.4.3. 排出・吸収量算定の改善プロセス

我が国では、UNFCCC 審査や QAWG による指摘、新規ガイドラインの策定といった国際交渉の進展、科学的研究・統計整備状況の進展・変化、温室効果ガス排出量算定・報告・公表制度における新規情報の把握等により、インベントリの改善事項が特定された場合、必要に応じ順次算定方法改善の検討を行う。排出・吸収量算定の改善案は、科学的研究や温室効果ガス排出量算定方法検討会を通じて検討が行われ、その検討成果をインベントリに反映する。インベントリ改善プロセスの概念図を図 1-4 に示す。

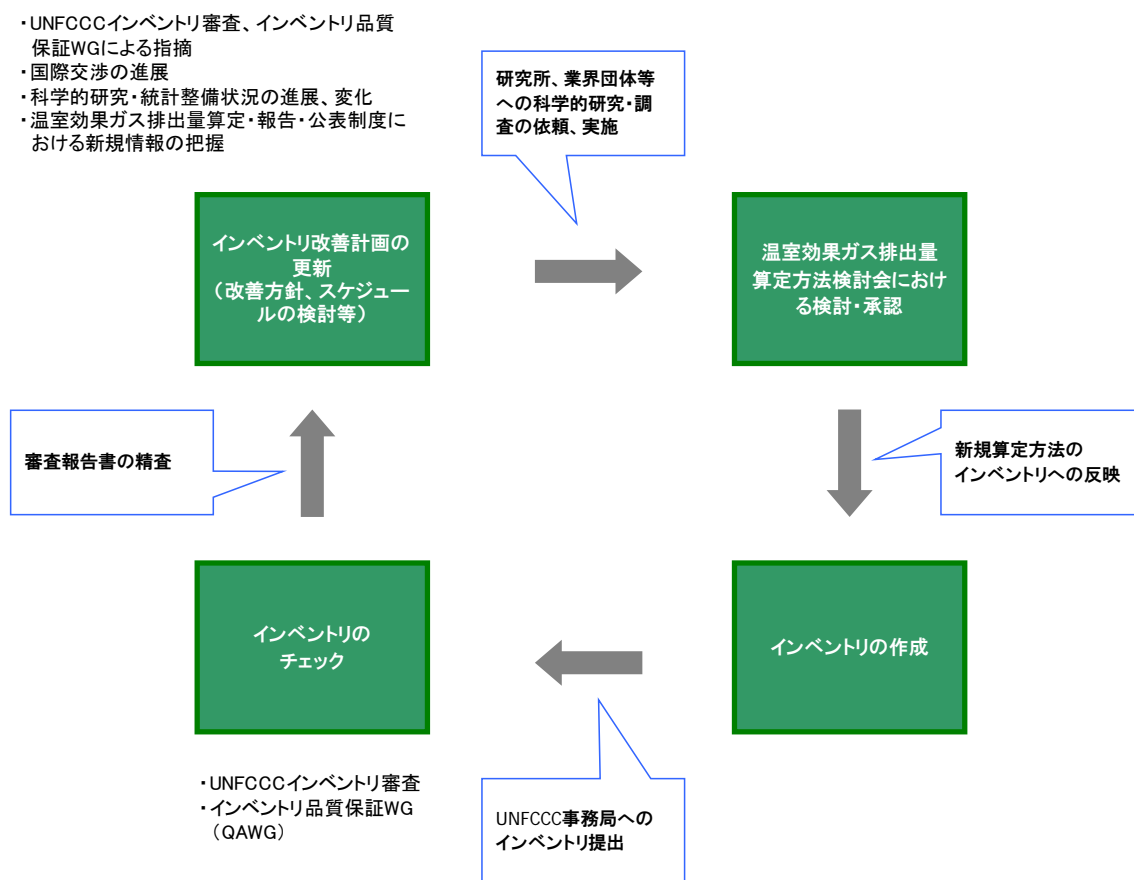


図 1-4 インベントリ改善プロセスの概念図

1.5. キーカテゴリー分析の概要

2006年 IPCC ガイドライン及び 2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスに示された分析方法（アプローチ1 レベルアセスメント、アプローチ1 トレンドアセスメント、アプローチ2 レベルアセスメント、アプローチ2 トレンドアセスメント）に従って評価を行った。

1.5.1. 温室効果ガスインベントリ

2018年度は、46の排出・吸収区分が日本のキーカテゴリーと同定された（表 1-5）。また、条約の基準年（1990年度）については、40の排出・吸収区分がキーカテゴリーと同定された（表 1-6）。結果の詳細については、別添1を参照のこと。

表 1-5 2018 年度の日本のキーカテゴリ

	A コード	B 区分	C 温室効果ガス	Ap1-L	Ap1-T	Ap2-L	Ap2-T
#1	1.A.1.	エネルギー産業	固体燃料	CO2	#1	#1	#1
#2	1.A.3.	運輸	b. 自動車	CO2	#2	#18	#3
#3	1.A.2.	製造業及び建設業	固体燃料	CO2	#3	#7	#2
#4	1.A.1.	エネルギー産業	気体燃料	CO2	#4	#4	#6
#5	1.A.4.	その他部門	液体燃料	CO2	#5	#5	#5
#6	1.A.1.	エネルギー産業	液体燃料	CO2	#6	#2	#9
#7	4.A	森林	1. 転用のない森林	CO2	#7	#10	#4
#8	1.A.2.	製造業及び建設業	液体燃料	CO2	#8	#3	#11
#9	1.A.4.	その他部門	気体燃料	CO2	#9	#8	#24
#10	2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	#10	#6	#10
#11	1.A.2.	製造業及び建設業	気体燃料	CO2	#11	#9	#29
#12	2.A	鉱物製品	1. セメント製造	CO2	#12	#12	#23
#13	3.C	稲作		CH4	#13		#28
#14	1.A.3.	運輸	d. 船舶	CO2	#14		
#15	1.A.3.	運輸	a. 航空機	CO2	#15	#22	
#16	5.C	廃棄物の焼却と野焼き		CO2	#16		#14
#17	1.A.2.	製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	#17	#20	#13
#18	1.A.4.	その他部門	その他の燃料	CO2	#18		#15
#19	3.A	消化管内発酵		CH4	#19		#12
#20	1.A.4.	その他部門	固体燃料	CO2	#20	#15	#28
#21	2.C	金属の生産	1. 鉄鋼製造	CO2	#21		
#22	3.B	家畜排せつ物の管理		N2O			#8
#23	3.D	農用地の土壌	1. 直接排出	N2O			#27
#24	4.B	農地	1. 転用のない農地	CO2		#17	#18
#25	5.A	固形廃棄物の処分		CH4		#16	#13
#26	2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	2. 発泡	HFCs		#25	#19
#27	2.B	化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO2		#16	#27
#28	2.D	燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO2		#20	#30
#29	1.A.1.	エネルギー産業		N2O			#29
#30	4.G	伐採木材製品の利用		CO2			#23
#31	5.D	排水の処理と放出		N2O			#31
#32	2.E	電子産業		PFCs		#17	#31
#33	3.D	農用地の土壌	2. 間接排出	N2O		#7	#18
#34		間接CO2	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2		#30	#16
#35	2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	PFCs		#24	
#36	1.A.3.	運輸	b. 自動車	N2O		#26	#15
#37	5.C	廃棄物の焼却と野焼き		N2O		#22	
#38	4.E	開発地	2. 他の土地利用から転用された開発地	CO2		#26	#21
#39	2.G	その他の製品製造及び使用		SF6	#13	#21	#2
#40	4.A	森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	#19		#19
#41	1.B	燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH4	#21		#6
#42	2.E	電子産業		SF6		#25	
#43	2.B	化学産業	4. カプロラクタム等製造	N2O			#11
#44	2.B	化学産業	9. フッ化物製造（製造時の漏出）	HFCs	#11		
#45	2.B	化学産業	3. アジピン酸	N2O	#14		#20
#46	2.B	化学産業	9. フッ化物製造（製造時の漏出）	SF6		#23	

(注) Ap1-L : アプローチ 1 のレベルアセスメント、Ap1-T : アプローチ 1 のトレンドアセスメント、
 Ap2-L : アプローチ 2 のレベルアセスメント、Ap2-T : アプローチ 2 のトレンドアセスメント
 各アセスメント中の数値は、それぞれのアセスメント中の順位を表す。

表 1-6 1990 年度の日本のキーカテゴリー

A コード	B 区分	C 温室効果 ガス	Ap1-L	Ap2-L
#1	1.A.2. 製造業及び建設業	固体燃料	CO2	#1
#2	1.A.3. 運輸	b. 自動車	CO2	#2
#3	1.A.1. エネルギー産業	液体燃料	CO2	#3
#4	1.A.2. 製造業及び建設業	液体燃料	CO2	#4
#5	1.A.4. その他部門	液体燃料	CO2	#5
#6	1.A.1. エネルギー産業	固体燃料	CO2	#6
#7	1.A.1. エネルギー産業	気体燃料	CO2	#7
#8	4.A 森林	1. 転用のない森林	CO2	#8
#9	2.A 鉱物製品	1. セメント製造	CO2	#9
#10	1.A.4. その他部門	気体燃料	CO2	#10
#11	2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	HFCs	#11
#12	1.A.3. 運輸	d. 船舶	CO2	#12
#13	3.C 稲作		CH4	#13
#14	5.C 廃棄物の焼却と野焼き		CO2	#14
#15	1.A.2. 製造業及び建設業	気体燃料	CO2	#15
#16	4.B 農地	1. 転用のない農地	CO2	#16
#17	5.A 固形廃棄物の処分		CH4	#17
#18	3.A 消化管内発酵		CH4	#18
#19	2.G その他の製品製造及び使用		SF6	#19
#20	2.C 金属の生産	1. 鉄鋼製造	CO2	#20
#21	2.B 化学産業	3. アジピン酸	N2O	#21
#22	1.A.3. 運輸	a. 航空機	CO2	#22
#23	1.A.4. その他部門	その他の燃料	CO2	#23
#24	4.A 森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	#24
#25	2.A 鉱物製品	2. 生石灰製造	CO2	#25
#26	1.B 燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH4	#26
#27	3.D 農用地の土壌	1. 直接排出	N2O	#27
#28	間接CO2	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2	#28
#29	4.E 開発地	2. 他の土地利用から転用された開発地	CO2	#29
#30	3.B 家畜排せつ物の管理		N2O	#30
#31	1.A.2. 製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	#31
#32	2.B 化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO2	#32
#33	1.A.3. 運輸	b. 自動車	N2O	#33
#34	3.D 農用地の土壌	2. 間接排出	N2O	#34
#35	5.D 排水の処理と放出		N2O	#35
#36	2.D 燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO2	#36
#37	2.B 化学産業	4. カプロラクタム等製造	N2O	#37
#38	2.E 電子産業		PFCs	#38
#39	5.C 廃棄物の焼却と野焼き		N2O	#39
#40	2.E 電子産業		SF6	#40

(注) Ap1-L : アプローチ1のレベルアセスメント、Ap2-L : アプローチ2のレベルアセスメント
各アセスメント中の数値は、それぞれのアセスメント中の順位を表す。

1.5.2. KP-LULUCF 活動

2006年 IPCC ガイドライン及び2013年京都議定書補足的な方法論ガイダンスに基づき分析を行った結果、新規植林・再植林、森林減少、森林経営、農地管理及び植生回復活動（何れもCO₂）が2018年度の日本のKP-LULUCF活動のキーカテゴリーに該当した。分析の詳細については、第11章の11.8.1節を参照のこと。

1.6. 不確実性の評価

1.6.1. 温室効果ガスインベントリ

日本の2018年度の純排出量は約11億8,300万トン（二酸化炭素換算）であり、アプローチ1（誤差伝播方式）で実施した純排出量の不確実性は-4%～+2%、純排出量のトレンドに伴う

不確実性は-5%～+3%と評価された。分析手法、詳細な結果については、別添2を参照のこと。

表 1-7 我が国の純排出量の不確実性評価結果

A カテゴリー	B GHGs	C		D		G-1990		G-2018		I		J	
		1990年度 排出・吸収量	2018年度 排出・吸収量	1990年度 排出・吸収量 の不確実性	2018年度 排出・吸収量 の不確実性	2018年度排出・ 吸収量の1990 年度比増加率	総排出量のトレンド において考慮され た不確実性						
		kt-CO ₂ 換算	kt-CO ₂ 換算	(-) %	(+) %	(-) %	(+) %	%	(-) %	(+) %			
1A.燃料の燃焼 (CO ₂)	CO ₂	1,078,839	1,077,487	-5%	+2%	-4%	+2%	-0.1%	-4.9%	+2.6%			
1A.燃料の燃焼 (固定発生源: CH ₄ , N ₂ O)	CH ₄ , N ₂ O	3,916	5,281	-23%	+29%	-25%	+28%	34.9%	0.0%	+0.0%			
1A.燃料の燃焼 (運輸: CH ₄ , N ₂ O)	CH ₄ , N ₂ O	4,031	1,796	-32%	+92%	-30%	+87%	-55.4%	0.0%	+0.0%			
1B.燃料からの漏出	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	5,165	1,155	-40%	+80%	-23%	+39%	-77.6%	0.0%	+0.0%			
2.工業プロセス及び製品の使用 (CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O)	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	75,591	47,305	-4%	+4%	-5%	+5%	-37.4%	-0.1%	+0.1%			
2.工業プロセス及び製品の使用 (HFCs等4ガス)	HFCs, PFCs, SF ₆ , NF ₃	35,354	52,800	-7%	+36%	-7%	+8%	49.3%	-0.5%	+0.5%			
3.農業	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	37,413	33,252	-10%	+25%	-9%	+21%	-11.1%	0.0%	+0.0%			
4.土地利用、土地利用変化及び林業	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	-62,219	-57,390	-16%	+16%	-13%	+13%	-7.8%	-0.4%	+0.4%			
5.廃棄物	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	29,732	19,267	-10%	+11%	-12%	+12%	-35.2%	-0.2%	+0.2%			
間接CO ₂	Ind CO ₂	5,482	2,063	-28%	+50%	-27%	+48%	-62.4%	0.0%	+0.0%			
純排出量		1,213,304	1,183,016	-4.5%	+2.3%	-3.7%	+2.1%	-2.5%	-4.9%	+2.6%			

1.6.2. KP-LULUCF 活動

日本の2018年度の純吸収量は約4,300万トン（二酸化炭素換算）であり、純吸収量の不確実性は15%と評価された。分析手法、詳細な結果については、第11章の11.5.1.8節を参照のこと。

表 1-8 我が国の KP-LULUCF 活動の不確実性評価結果

活動種類	GHGs	排出・吸収量 [kt CO ₂ eq.]	排出・吸収量の 不確実性 [%]		各区分の不確実性が純 吸収量に占める割合 [%]	
			(-)[%]	(+)[%]	(-)[%]	(+)[%]
3条3項の活動 新規植林および再植林	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	-1,442	-35%	35%	-1%	1%
3条3項の活動 森林減少	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	1,605	-23%	23%	-1%	1%
3条4項の活動 (人為的吸収源活動) 森林経営	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	-45,361	-14%	14%	-15%	15%
3条4項の活動 (人為的吸収源活動) 農地管理	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	3,721	-40%	40%	-3%	3%
3条4項の活動 (人為的吸収源活動) 牧草地管理	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	-209	-22%	22%	0%	0%
3条4項の活動 (人為的吸収源活動) 植生回復	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	-1,322	-33%	33%	-1%	1%
合計		-43,008	-15%	15%		

1.7. 完全性に関する評価

インベントリでは、一部の排出区分からの排出量を算定しておらず、CRFにおいて「NE」として報告している。未推計として報告するものには、排出量ごく微量と考えられるものや、排出実態が明らかでないもの、排出量の算定方法が設定されていないもの等が含まれている。これらの区分については、我が国のQA/QC計画に従って排出可能性の検討、排出量算定等の検討を行なっていくものとする。未推計排出区分の一覧については別添5を参照されたい。

【東日本大震災の影響について】

2011年3月11日に発生した東日本大震災が活動量の完全性・正確性・一貫性に対して及ぼす影響を確認するため、温室効果ガス排出・吸収量の算定に使用している各種統計等を所管している全ての関係省庁・関係団体に対しアンケート及びヒアリングによる調査を行った。結果、活動量に震災が及ぼす影響は、把握できる範囲では欠損値も含めて、全体の排出・吸収量に対して軽微であったことが判明している。よって、これらの調査結果を踏まえ、専門家による算定方法等の評価・検討の上作成されたインベントリは、完全性、正確性、一貫性が保証されたものとなっている。しかし、一部の統計等データについては、データに対する震災の影響の状況把握が十分とは言えなかったため、継続的に調査、検討を行った結果、震災により発生した災害廃棄物の処理に伴う温室効果ガスの排出量を第7章（廃棄物分野）において報告する。

参考文献

1. IPCC 「温室効果ガスインベントリに関する 2006 年 IPCC ガイドライン」 (2006)
2. IPCC 「2006 年 IPCC ガイドラインに対する 2013 年追補：湿地」 (2014)
3. IPCC 「2013 年京都議定書補足的ガイダンス」 (2014)
4. UNFCCC 「改訂 UNFCCC インベントリ報告ガイドライン」 (決定 24/CP.19 附属書 I) (FCCC/CP/2013/10/Add.3) (2014)
5. UNFCCC, 「京都議定書第 7 条に基づき必要とされる情報の作成に関するガイドライン」 (決定 15/CMP.1), (FCCC/KP/CMP/2005/8/Add.2), (2005)
6. UNFCCC, 「京都議定書第 8 条に基づく審査に関するガイドライン」 (決定 22/CMP.1), (FCCC/KP/CMP/2005/8/Add.3), (2005)
7. UNFCCC, 「京都議定書第 5 条、7 条、8 条に関連するものを含む、京都議定書に関連する方法論において決定 2/CMP.7 から 5/CMP.7 の実施が以前の決定に与える影響」 (決定 2/CMP.8), (FCCC/KP/CMP/2012/13/Add.1), (2013)

第2章 温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

2.1. 温室効果ガスの排出及び吸収の状況

2.1.1. 温室効果ガスの排出量及び吸収量の概要

2018年度¹の温室効果ガスの総排出量²（LULUCF³を除く、間接CO₂⁴含む、以下定義省略）は12億4,000万トン（CO₂換算）であり、1990年度の総排出量から2.8%の減少となった。

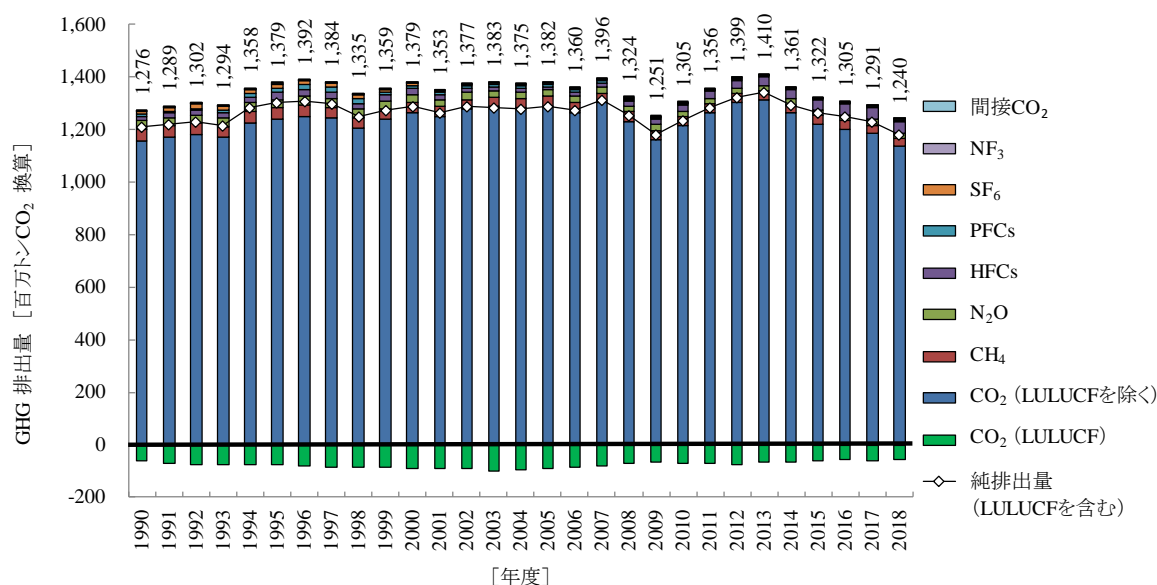


図 2-1 日本の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

2018年度のCO₂排出量（LULUCFを除く、間接CO₂含まない、以下定義省略）は11億3,600万トンであり、温室効果ガス総排出量の91.6%を占めた。1990年度比2.0%の減少、前年度比4.4%の減少となった。また、2018年度のCO₂吸収量⁵は5,770万トンであり、温室効果ガス総排出量に対する割合は4.6%となった。1990年度比7.8%の減少、前年比2.0%の減少となった。

2018年度のCH₄排出量（LULUCFを除く）は2,990万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の2.4%を占めた。1990年度比32.8%の減少、前年度比1.3%の減少となった。

¹ 排出量の大部分を占めるCO₂が年度ベース(当該年4月～翌年3月)であるため、『年度』と記した。

² CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃の排出量に各地球温暖化係数(GWP)を乗じ、それらを合算したもの。ここで「GWP」とは、温室効果ガスのもたらす温室効果の程度を、CO₂の当該程度に対する比で示した係数のことであり、その数値は気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第4次評価報告書の数値を使用。

³ 土地利用、土地利用変化及び林業(Land Use, Land-Use Change and Forestry)分野の略称。

⁴ 一酸化炭素(CO)、メタン(CH₄)及び非メタン揮発性有機化合物(NMVOC)は、長期的には大気中で酸化されてCO₂に変換される。間接CO₂はこれらの排出量をCO₂換算した値を指す。ただし、燃焼起源及びバイオマス起源のCO、CH₄及びNMVOCに由来する排出量は、二重計上やカーボンニュートラルの観点から計上対象外とする。

⁵ 気候変動枠組条約の下でのインベントリではLULUCF分野のすべてのGHG排出・吸収量を計上していることから、京都議定書上の排出・吸収量に対応する値ではない点に留意する必要がある。

表 2-1 日本の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

[百万トンCO ₂ 換算]	GWP	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
CO ₂ (LULUCFを除く)※1	1	1,158.4	1,170.1	1,179.7	1,172.6	1,227.6	1,239.9	1,251.9	1,245.1	1,205.4	1,242.0
CO ₂ (LULUCFを含む)※1	1	1,095.9	1,099.5	1,106.1	1,095.9	1,151.1	1,162.5	1,169.8	1,160.7	1,119.6	1,156.0
CO ₂ (LULUCFのみ)	1	-62.5	-70.6	-73.6	-76.7	-76.4	-77.4	-82.0	-84.4	-85.8	-86.0
CH ₄ (LULUCFを除く)	25	44.4	43.3	44.1	40.0	43.4	41.9	40.7	40.0	38.1	38.0
CH ₄ (LULUCFを含む)	25	44.5	43.4	44.2	40.1	43.5	42.0	40.8	40.1	38.2	38.1
N ₂ O (LULUCFを除く)	298	31.9	31.6	31.8	31.6	32.9	33.2	34.3	35.1	33.5	27.4
N ₂ O (LULUCFを含む)	298	32.1	31.8	32.0	31.8	33.1	33.4	34.5	35.3	33.7	27.6
HFCs	HFC-134a: 1.430%など	15.9	17.3	17.8	18.1	21.1	25.2	24.6	24.4	23.7	24.4
PFCs	PFC-14: 7.390%など	6.5	7.5	7.6	10.9	13.4	17.6	18.3	20.0	16.6	13.1
SF ₆	22,800	12.9	14.2	15.6	15.7	15.0	16.4	17.0	14.5	13.2	9.2
NF ₃	17,200	0.03	0.03	0.03	0.04	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3
間接CO ₂	1	5.5	5.3	5.1	4.8	4.8	4.7	4.7	4.6	4.2	4.2
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)		1,270.0	1,284.0	1,296.7	1,289.1	1,353.4	1,374.5	1,387.0	1,379.3	1,330.8	1,354.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)		1,207.8	1,213.7	1,223.4	1,212.7	1,277.3	1,297.4	1,305.3	1,295.2	1,245.2	1,268.6
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)		1,275.5	1,289.3	1,301.7	1,293.9	1,358.2	1,379.2	1,391.7	1,383.9	1,334.9	1,358.5
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)		1,213.3	1,219.0	1,228.4	1,217.5	1,282.1	1,302.1	1,310.0	1,299.8	1,249.4	1,272.8

[百万トンCO ₂ 換算]	GWP	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
CO ₂ (LULUCFを除く)※1	1	1,264.8	1,250.2	1,279.5	1,287.6	1,282.9	1,290.1	1,266.8	1,302.5	1,231.9	1,162.6
CO ₂ (LULUCFを含む)※1	1	1,176.8	1,161.7	1,189.4	1,187.4	1,186.2	1,198.6	1,180.8	1,221.1	1,160.7	1,095.5
CO ₂ (LULUCFのみ)	1	-88.0	-88.6	-90.0	-100.3	-96.7	-91.5	-86.1	-81.5	-71.2	-67.2
CH ₄ (LULUCFを除く)	25	38.0	37.1	36.4	35.0	36.0	35.8	35.3	35.5	35.2	34.3
CH ₄ (LULUCFを含む)	25	38.1	37.2	36.5	35.1	36.1	35.9	35.3	35.6	35.3	34.4
N ₂ O (LULUCFを除く)	298	29.9	26.3	25.7	25.6	25.4	25.0	24.8	24.2	23.4	22.7
N ₂ O (LULUCFを含む)	298	30.1	26.5	25.9	25.8	25.6	25.2	25.0	24.4	23.6	22.9
HFCs	HFC-134a: 1.430%など	22.9	19.5	16.2	16.2	12.4	12.8	14.6	16.7	19.3	20.9
PFCs	PFC-14: 7.390%など	11.9	9.9	9.2	8.9	9.2	8.6	9.0	7.9	5.7	4.0
SF ₆	22,800	7.0	6.1	5.7	5.4	5.3	5.0	5.2	4.7	4.2	2.4
NF ₃	17,200	0.3	0.3	0.4	0.4	0.5	1.5	1.4	1.6	1.5	1.4
間接CO ₂	1	4.2	3.8	3.5	3.4	3.3	3.2	3.1	3.0	2.7	2.5
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)		1,374.8	1,349.3	1,373.2	1,379.1	1,371.7	1,378.8	1,357.2	1,393.2	1,321.2	1,248.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)		1,287.0	1,261.1	1,283.5	1,279.1	1,275.3	1,287.6	1,271.4	1,312.0	1,250.3	1,181.5
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)		1,379.0	1,353.1	1,376.7	1,382.5	1,375.0	1,382.0	1,360.3	1,396.2	1,323.9	1,250.9
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)		1,291.2	1,264.9	1,287.0	1,282.5	1,278.6	1,290.8	1,274.5	1,315.0	1,253.0	1,184.0

[百万トンCO ₂ 換算]	GWP	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	排出・吸収量(2018年)の変化 1990年度比	前年度比
CO ₂ (LULUCFを除く)※1	1	1,214.1	1,264.2	1,305.4	1,314.7	1,263.0	1,222.8	1,203.2	1,187.7	1,135.7	-2.0%	-4.4%
CO ₂ (LULUCFを含む)※1	1	1,143.4	1,194.2	1,232.4	1,248.4	1,198.4	1,163.1	1,148.6	1,128.8	1,078.0	-1.6%	-4.5%
CO ₂ (LULUCFのみ)	1	-70.7	-69.9	-73.0	-66.3	-64.6	-59.6	-54.5	-58.8	-57.7	-7.8%	-2.0%
CH ₄ (LULUCFを除く)	25	34.8	33.8	32.9	32.5	31.9	31.1	30.7	30.2	29.9	-32.8%	-1.3%
CH ₄ (LULUCFを含む)	25	34.9	33.9	33.0	32.6	32.0	31.1	30.8	30.3	29.9	-32.8%	-1.3%
N ₂ O (LULUCFを除く)	298	22.2	21.8	21.5	21.5	21.1	20.7	20.2	20.4	20.0	-37.3%	-2.0%
N ₂ O (LULUCFを含む)	298	22.4	22.0	21.7	21.7	21.3	20.9	20.4	20.6	20.2	-37.1%	-2.0%
HFCs	HFC-134a: 1.430%など	23.3	26.1	29.4	32.1	35.8	39.3	42.6	44.9	47.0	194.9%	4.7%
PFCs	PFC-14: 7.390%など	4.2	3.8	3.4	3.3	3.4	3.3	3.4	3.5	3.5	-46.7%	-0.7%
SF ₆	22,800	2.4	2.2	2.2	2.1	2.0	2.1	2.2	2.1	2.0	-84.1%	-1.3%
NF ₃	17,200	1.5	1.8	1.5	1.6	1.1	0.6	0.6	0.4	0.3	766.3%	-37.2%
間接CO ₂	1	2.4	2.3	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.1	2.1	-62.4%	-0.7%
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)		1,302.5	1,353.6	1,396.3	1,407.8	1,358.3	1,319.8	1,302.8	1,289.2	1,238.3	-2.5%	-3.9%
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)		1,232.1	1,283.9	1,323.6	1,341.8	1,294.0	1,260.4	1,248.6	1,230.7	1,181.0	-2.2%	-4.0%
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)		1,305.0	1,355.9	1,398.6	1,410.1	1,360.5	1,322.0	1,305.0	1,291.3	1,240.4	-2.8%	-3.9%
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)		1,234.5	1,286.3	1,325.8	1,344.0	1,296.2	1,262.6	1,250.7	1,232.8	1,183.0	-2.5%	-4.0%

※1 間接CO₂を含まない

※2 LULUCF: 土地利用、土地利用変化及び林業

2018年度のN₂O排出量（LULUCFを除く）は2,000万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の1.6%を占めた。1990年度比37.3%の減少、前年度比2.0%の減少となった。

2018年（暦年）のHFC排出量は4,700万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の3.8%を占めた。1990年比194.9%の増加、前年比4.7%の増加となった。

2018年（暦年）のPFC排出量は350万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の0.3%を占めた。1990年比46.7%の減少、前年比0.7%の減少となった。

2018年（暦年）のSF₆排出量は200万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の0.2%を占めた。1990年比84.1%の減少、前年比1.3%の減少となった。

2018年（暦年）のNF₃排出量は30万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の0.02%を占めた。1990年と比べて766.3%の増加、前年比37.2%の減少となった。

2018年度の間接CO₂排出量は210万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の0.2%を占めた。1990年度比62.4%の減少、前年度比0.7%の減少となった。

2.1.2. CO₂

2018年度のCO₂排出量は11億3,600万トンであり、温室効果ガス総排出量の91.6%を占めた。1990年度比2.0%の減少、前年度比4.4%の減少となった。

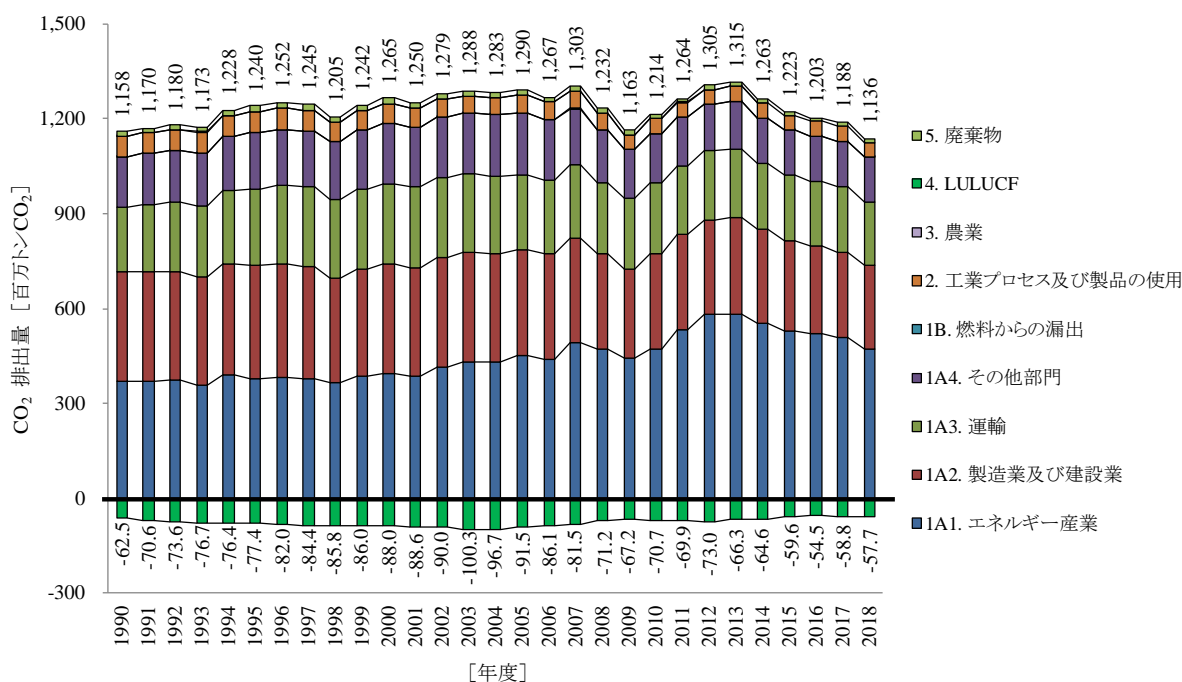


図 2-2 CO₂排出量の推移

2018年度のCO₂排出量の内訳は、燃料の燃焼に伴う排出が94.9%と最も多く、工業プロセス及び製品の使用分野からの排出（4.1%）、廃棄物分野からの排出（1.0%）がこれに続いた。燃料の燃焼に伴う排出の内訳をみると、エネルギー産業が41.6%、製造業及び建設業が23.1%、運輸が17.9%、その他部門⁶が12.3%を占めていた。前年度から排出量が減少した原因としては、エネルギー産業における燃料の燃焼に伴う排出が減少したことなどが挙げられる。

部門別に排出量の増減をみると、エネルギー産業における燃料の燃焼に伴う排出は、1990

⁶ 業務、家庭、農林水産業からの排出を対象とする。

年度比で 28.2%増加、前年度比で 7.1%の減少となった。1990 年度からの排出量の増加は、発電における固体燃料消費量が増加したこと等による。製造業及び建設業における燃料の燃焼に伴う排出は、1990 年度比で 24.8%減少、前年度比で 2.6%の減少となった。1990 年度からの排出量の減少は、その他（機械製造等）における液体燃料消費量が減少したこと等による。運輸における燃料の燃焼に伴う排出は、1990 年度比で 1.0%増加、前年度比で 1.2%の減少となった。1990 年度からの排出量の増加は、国内船舶からの排出量が減少した一方で、国内航空からの排出量が増加したことによる。その他部門における燃料の燃焼に伴う排出は、1990 年度比で 12.8%減少、前年度比で 3.6%の減少となった。1990 年度からの排出量の減少は、業務における液体燃料消費量が減少したこと等による。

2018 年度の CO₂吸収量は 5,770 万トンであり、総排出量に対する割合は 4.6%となり、1990 年度比 7.8%の減少、前年度比 2.0%の減少となった。

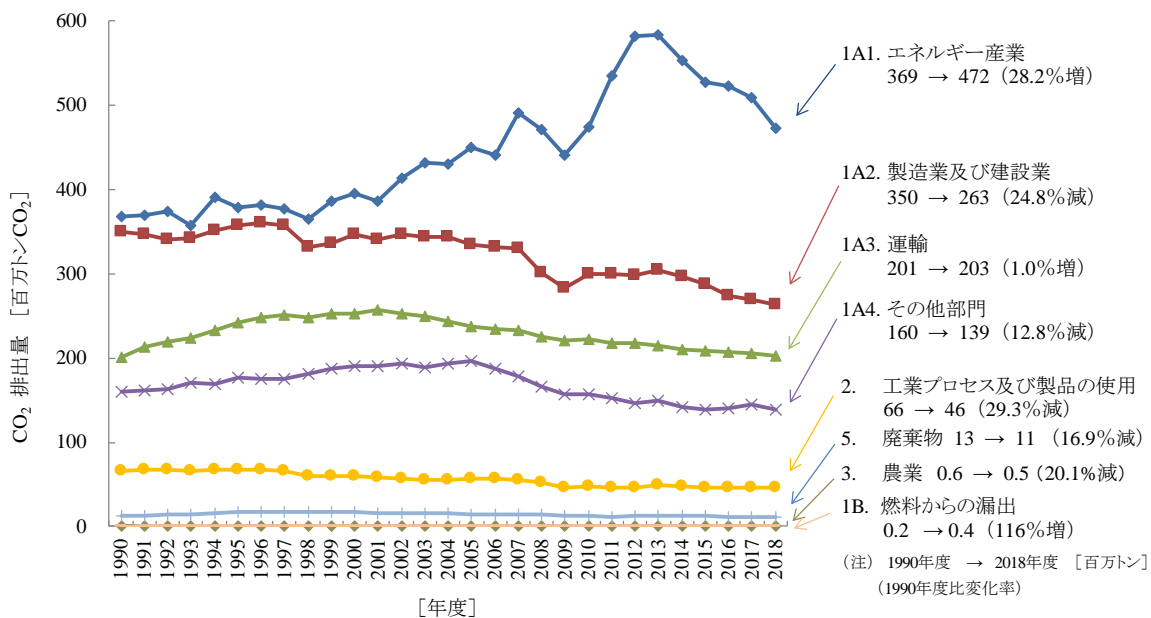


図 2-3 各部門の CO₂排出量の推移
(注) かつこ内の数値は 1990 年度比

表 2-2 各部門の CO₂排出量の推移

[千トンCO ₂]														
排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
IA. 燃料の燃焼	1,078,839	1,154,876	1,186,033	1,218,052	1,103,125	1,153,259	1,204,244	1,244,716	1,252,248	1,201,718	1,162,992	1,144,294	1,128,427	1,077,487
IA1. エネルギー産業	368,529	378,904	395,495	449,661	441,432	473,849	534,792	581,482	583,367	552,884	527,321	522,736	508,760	472,488
発電及び熱供給	303,055	317,587	330,118	378,044	373,133	404,240	468,952	516,377	521,751	493,352	468,475	469,005	456,772	418,339
石油精製	36,397	41,085	46,978	50,888	47,184	47,715	44,478	43,298	42,939	41,103	41,664	35,883	35,147	36,211
固体燃料転換、他	29,077	20,232	18,399	20,728	21,115	21,894	21,361	21,807	18,677	18,429	17,182	17,849	16,840	17,938
IA2. 製造業及び建設業	349,703	357,556	346,635	334,189	283,829	300,375	299,343	299,008	304,121	296,553	287,513	273,647	269,847	262,837
鉄鋼	150,689	143,096	152,113	154,175	135,644	153,172	148,896	151,309	157,569	155,124	148,897	142,785	139,784	136,047
非鉄金属	8,428	7,380	6,332	5,705	4,066	3,999	3,871	4,037	3,778	3,673	3,282	3,556	3,172	3,114
化学	58,039	64,239	59,022	54,488	48,956	49,188	48,484	46,108	47,287	45,499	44,571	41,084	41,841	40,638
パルプ・紙	27,105	31,427	31,679	29,738	23,425	22,592	23,266	23,761	23,778	22,848	23,248	20,802	20,466	20,229
食品加工・飲料	7,649	10,132	11,511	12,217	9,906	9,925	10,900	10,653	9,901	9,668	8,669	8,678	8,163	8,188
窯業土石・ガラス	43,620	46,453	40,150	35,482	29,281	28,775	28,681	28,962	29,865	29,059	28,134	27,207	27,005	26,677
その他	54,173	54,828	45,828	42,385	32,551	32,725	35,246	34,178	31,943	30,682	30,712	29,535	29,416	27,946
IA3. 運輸	200,986	241,993	252,656	237,777	221,488	221,969	217,138	218,004	215,115	210,131	208,853	206,949	205,394	202,914
航空	7,162	10,278	10,677	10,799	9,781	9,193	9,001	9,524	10,149	10,173	10,067	10,187	10,399	10,536
自動車	179,213	216,223	226,256	213,317	200,656	201,457	197,148	197,158	193,437	188,521	187,641	185,709	184,024	181,333
鉄道	935	822	711	647	590	574	554	554	540	524	523	499	499	499
船舶	13,675	14,669	15,012	13,014	10,462	10,745	10,434	10,769	10,989	10,912	10,622	10,555	10,472	10,546
IA4. その他部門	159,621	176,423	191,246	196,425	156,376	157,066	152,972	146,222	149,645	142,151	139,305	140,962	144,425	139,247
業務	79,184	88,256	98,693	106,091	75,808	75,023	73,925	67,332	74,462	69,509	67,726	68,071	69,487	71,725
家庭	58,167	67,477	72,226	70,395	61,351	64,217	62,541	62,626	60,319	58,014	55,392	55,712	59,260	52,152
農林水産業	22,270	20,690	20,326	19,939	19,217	17,826	16,505	16,264	14,863	14,628	16,188	17,179	15,678	15,370
IA5. その他	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
IB. 燃料からの漏出	192	521	512	508	501	475	477	490	438	449	425	457	436	414
IC. CO ₂ の輸送と貯留	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO	NE.NO
2. 工業プロセス及び製品の使用	65,620	67,458	60,214	56,476	46,056	47,105	46,946	46,995	48,758	48,153	46,772	46,359	46,994	46,389
3. 農業	609	359	443	411	390	403	415	520	578	551	459	446	486	486
4. LULUCF	-62,537	-77,382	-88,049	-91,471	-67,158	-70,710	-69,923	-72,985	-66,285	-64,621	-59,636	-54,536	-58,825	-57,655
5. 廃棄物	13,132	16,714	17,644	14,609	12,575	12,827	12,073	12,711	12,681	12,179	12,133	11,611	11,318	10,912
合計 (LULUCF含む)	1,095,855	1,162,546	1,176,796	1,198,585	1,095,489	1,143,358	1,194,232	1,232,448	1,248,418	1,198,429	1,163,145	1,148,632	1,128,837	1,078,033
合計 (LULUCF除く)	1,158,391	1,239,928	1,264,844	1,290,056	1,162,648	1,214,069	1,264,155	1,305,433	1,314,703	1,263,050	1,222,781	1,203,167	1,187,661	1,135,688

※1 間接CO₂を含まない

※2 LULUCF: 土地利用、土地利用変化及び林業

2018年度の1人当たりのCO₂排出量は8.98トンであった。1990年度と比べ4.2%の減少、前年度と比べると4.2%の減少となった。

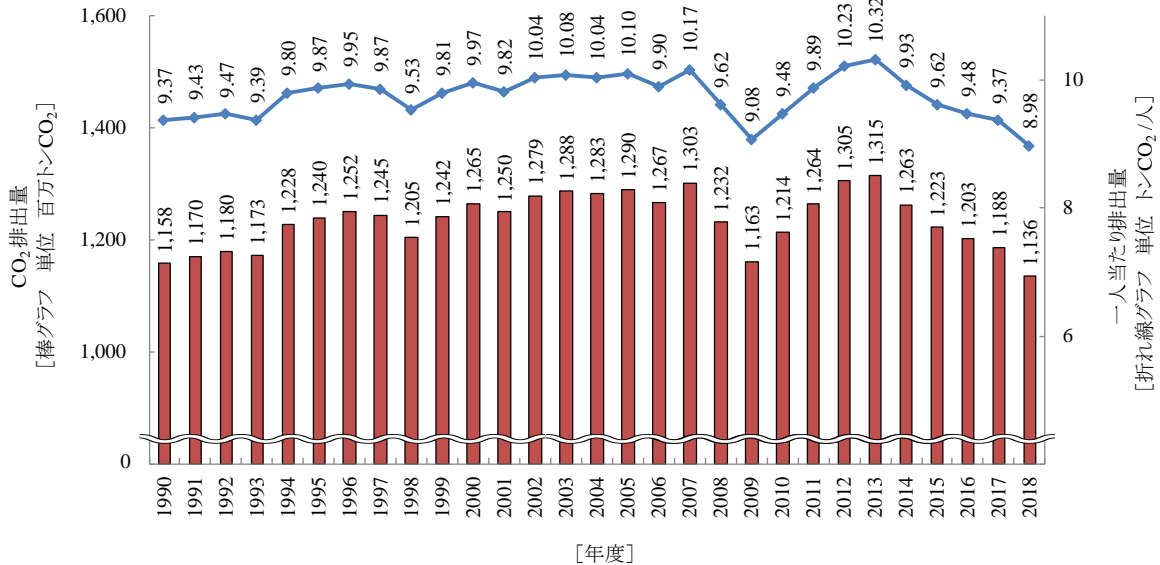


図 2-4 CO₂総排出量及び1人当たりCO₂排出量の推移
(人口の出典) 総務省統計局「国勢調査」及び「人口推計年報」

2018年度のGDP(百万円)当たりのCO₂排出量は2.13トンであった。1990年度から24.4%の減少、前年度から4.7%の減少となった。

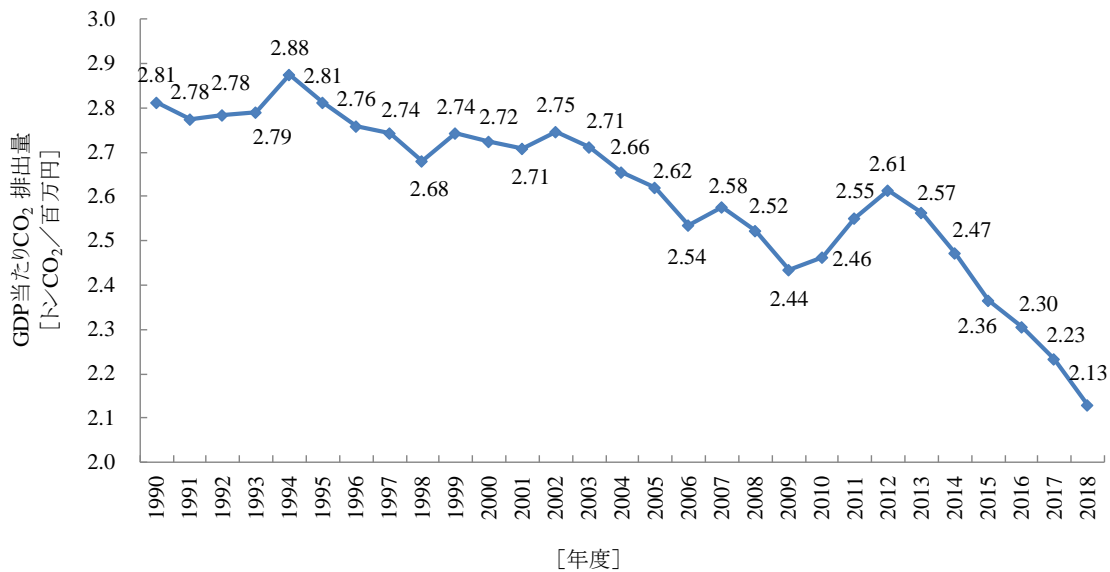


図 2-5 GDP 当たり CO₂排出量の推移
(GDP の出典) 内閣府「国民経済計算年報」(確報)

2.1.3. CH₄

2018年度のCH₄排出量は2,990万トン（CO₂換算、LULUCFを含む）であり、温室効果ガス総排出量の2.4%を占め、1990年度比32.8%の減少、前年度比1.3%の減少となった。1990年度からの減少は、廃棄物分野からの排出量（固形廃棄物の処分に伴う排出量等）が減少（1990年度比63.1%減）したこと等による。

2018年度のCH₄排出量の内訳は、稲作からの排出が45%と最も多く、家畜の消化管内発酵に伴う排出（25%）、固形廃棄物の処分に伴う排出（10%）がこれに続いた。

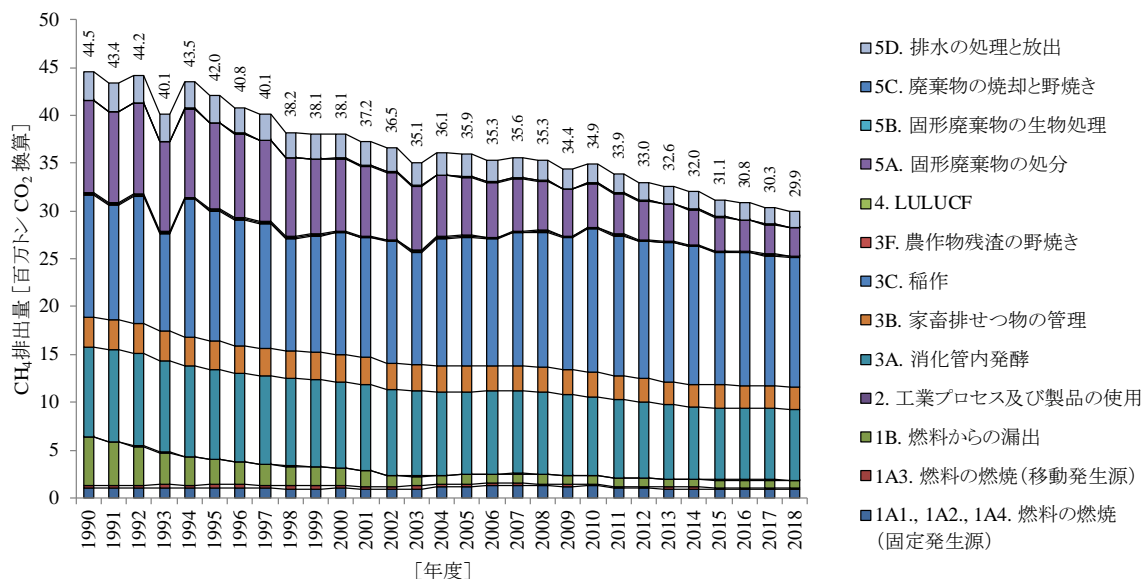


図 2-6 CH₄排出量の推移

表 2-3 CH₄排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1A. 燃料の燃焼	1,350	1,381	1,276	1,434	1,366	1,437	1,147	1,166	1,112	1,099	1,052	1,050	1,043	1,014
1A1. エネルギー産業	459	400	263	249	258	270	290	300	239	225	214	222	208	200
1A2. 製造業及び建設業	360	378	371	442	499	538	439	465	496	519	496	487	489	492
1A3. 運輸	291	309	312	247	184	174	166	160	151	143	137	133	128	125
1A4. その他部門	239	294	330	496	426	455	252	241	225	211	205	207	218	198
1B. 燃料からの漏出	4,973	2,647	1,836	976	916	885	867	851	816	806	788	794	800	741
1B1. 固体燃料	4,760	2,394	1,563	655	577	564	552	545	533	538	521	510	521	479
1B2. 石油、天然ガス、他	213	253	273	322	339	321	315	305	283	268	267	284	280	262
2. 工業プロセス及び製品の使用	61	58	54	54	51	54	54	46	46	43	48	43	43	40
3. 農業	25,441	26,022	24,615	24,898	24,991	25,829	25,415	24,815	24,781	24,415	23,871	23,776	23,510	23,413
3A. 消化管内発酵	9,423	9,318	8,966	8,651	8,480	8,202	8,154	7,953	7,737	7,543	7,534	7,481	7,494	7,466
3B. 家畜排せつ物の管理	3,121	2,988	2,804	2,717	2,573	2,513	2,508	2,465	2,406	2,364	2,362	2,321	2,324	2,324
3C. 稲作	12,771	13,605	12,749	13,445	13,863	15,041	14,680	14,325	14,565	14,437	13,908	13,907	13,627	13,561
3F. 農作物残渣の野焼き	127	111	96	86	76	74	73	71	72	70	67	67	64	63
4. LULUCF	99	96	91	90	88	81	82	77	78	97	80	74	95	74
5. 廃棄物	12,594	11,818	10,201	8,483	6,951	6,579	6,293	6,026	5,778	5,524	5,306	5,073	4,841	4,646
5A. 固形廃棄物の処分	9,570	8,985	7,570	6,090	4,835	4,521	4,272	4,058	3,855	3,635	3,444	3,247	3,093	2,930
5B. 固形廃棄物の生物処理	54	53	54	95	106	93	102	101	100	100	102	103	90	89
5C. 廃棄物の焼却と野焼き	28	29	21	18	13	12	11	11	12	10	10	9	10	10
5D. 排水の処理と放出	2,942	2,750	2,556	2,280	1,997	1,954	1,908	1,855	1,811	1,779	1,749	1,714	1,648	1,617
合計 (LULUCF含む)	44,518	42,022	38,073	35,936	34,364	34,865	33,858	32,981	32,612	31,984	31,145	30,810	30,333	29,929
合計 (LULUCF除く)	44,418	41,926	37,982	35,845	34,277	34,784	33,776	32,904	32,533	31,887	31,065	30,736	30,237	29,855

※LULUCF: 土地利用、土地利用変化及び林業

2.1.4. N₂O

2018年度のN₂O排出量は2,020万トン（CO₂換算、LULUCFを含む）であり、温室効果ガス総排出量の1.6%を占めた。1990年度比37.1%の減少、前年度比2.0%の減少となった。1990年度からの減少は、工業プロセス及び製品の使用分野からの排出量（化学産業のアジピン酸製造に伴う排出量等）が減少（1990年度比94.7%減）したこと等による。なお、1999年3月にアジピン酸製造工場においてN₂O分解設備が稼働したことにより、1998年度から1999年度にかけて工業プロセス及び製品の使用からの排出量が大幅に減少した。2000年度にはN₂O分解装置の故障により稼働率が低下したため排出量が増加したが、2001年には通常運転を開始したため排出量が少なくなった。

2018年度のN₂O排出量の内訳は、農用地の土壌からの排出が27%と最も多く、燃料の燃焼（固定発生源）に伴う排出（22%）、家畜排せつ物管理に伴う排出（19%）がこれに続いた。

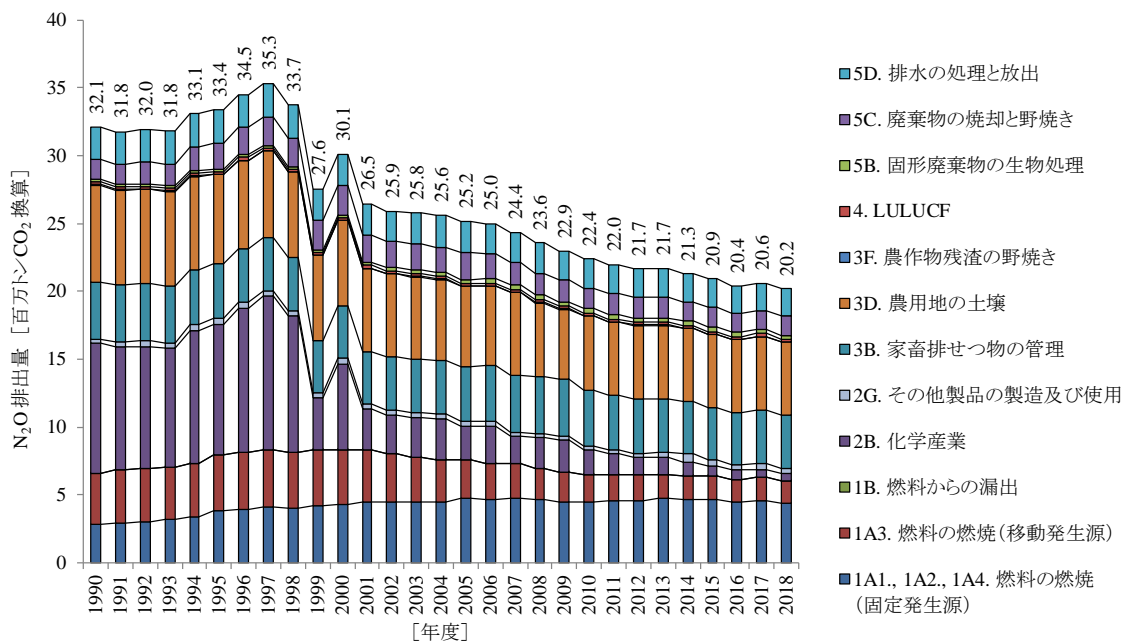


図 2-7 N₂O 排出量の推移

表 2-4 N₂O 排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1A. 燃料の燃焼	6,597	7,941	8,341	7,559	6,690	6,503	6,517	6,497	6,529	6,420	6,377	6,151	6,299	6,063
1A1. エネルギー産業	889	1,353	1,613	2,117	2,084	2,072	2,267	2,290	2,358	2,346	2,348	2,183	2,338	2,166
1A2. 製造業及び建設業	1,259	1,705	1,878	1,867	1,762	1,723	1,720	1,738	1,761	1,721	1,723	1,650	1,643	1,600
1A3. 運輸	3,739	4,104	3,997	2,817	2,187	2,052	1,950	1,874	1,803	1,745	1,716	1,691	1,680	1,671
1A4. その他部門	709	778	852	757	656	656	580	595	606	608	590	626	638	625
1B. 燃料からの漏出	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
2. 工業プロセス及び製品の使用	9,911	10,114	6,720	2,926	2,619	2,088	1,777	1,600	1,618	1,606	1,199	1,105	1,020	876
2B. 化学産業	9,620	9,665	6,348	2,558	2,360	1,813	1,507	1,293	1,259	979	798	676	599	506
2G. その他製品の製造及び使用	291	449	371	368	259	275	270	308	359	627	402	429	420	370
3. 農業	11,362	10,598	10,207	9,915	9,416	9,666	9,507	9,442	9,398	9,274	9,295	9,258	9,385	9,353
3B. 家畜排せつ物の管理	4,208	3,983	3,850	3,994	4,218	4,136	4,093	4,024	3,927	3,865	3,849	3,847	3,926	3,922
3D. 農用地の土壌	7,115	6,580	6,327	5,894	5,175	5,506	5,391	5,397	5,448	5,388	5,426	5,390	5,440	5,412
3F. 農作物残渣の野焼き	39	34	30	26	23	23	22	22	22	22	21	21	20	20
4. LULUCF	219	209	199	190	184	182	182	183	183	186	185	185	189	190
5. 廃棄物	4,006	4,525	4,638	4,563	4,018	3,939	3,989	3,931	3,952	3,801	3,865	3,683	3,714	3,708
5B. 固形廃棄物の生物処理	181	179	181	319	354	309	342	338	335	333	340	343	298	296
5C. 廃棄物の焼却と野焼き	1,438	1,908	2,156	1,963	1,570	1,515	1,518	1,523	1,535	1,423	1,498	1,312	1,423	1,429
5D. 排水の処理と放出	2,387	2,439	2,301	2,280	2,094	2,115	2,129	2,069	2,082	2,045	2,027	2,028	1,992	1,983
合計 (LULUCF含む)	32,095	33,388	30,105	25,152	22,927	22,377	21,971	21,654	21,679	21,287	20,922	20,381	20,607	20,190
合計 (LULUCF除く)	31,876	33,179	29,906	24,963	22,743	22,195	21,790	21,471	21,496	21,101	20,737	20,196	20,418	20,000

※LULUCF: 土地利用、土地利用変化及び林業

2.1.5. HFCs

2018年⁷のHFC排出量は4,700万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の3.8%を占めた。1990年比194.9%の増加、前年比4.7%の増加となった。1990年からの増加は、特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律（昭和63年法律第53号）の下での規制によりHCFC-22の製造時の副生HFC-23が減少（1990年比99.9%減）した一方で、オゾン層破壊物質（ODS）であるHCFCsからHFCsへの代替に伴い冷蔵庫及び空調機器からの排出量が増加（1990年比4,320万トン（CO₂換算）増）したこと等による。

2018年のHFC排出量の内訳をみると、冷蔵庫及び空調機器からの排出が92%と最も多く、発泡剤からの排出（6%）がこれに続いた。

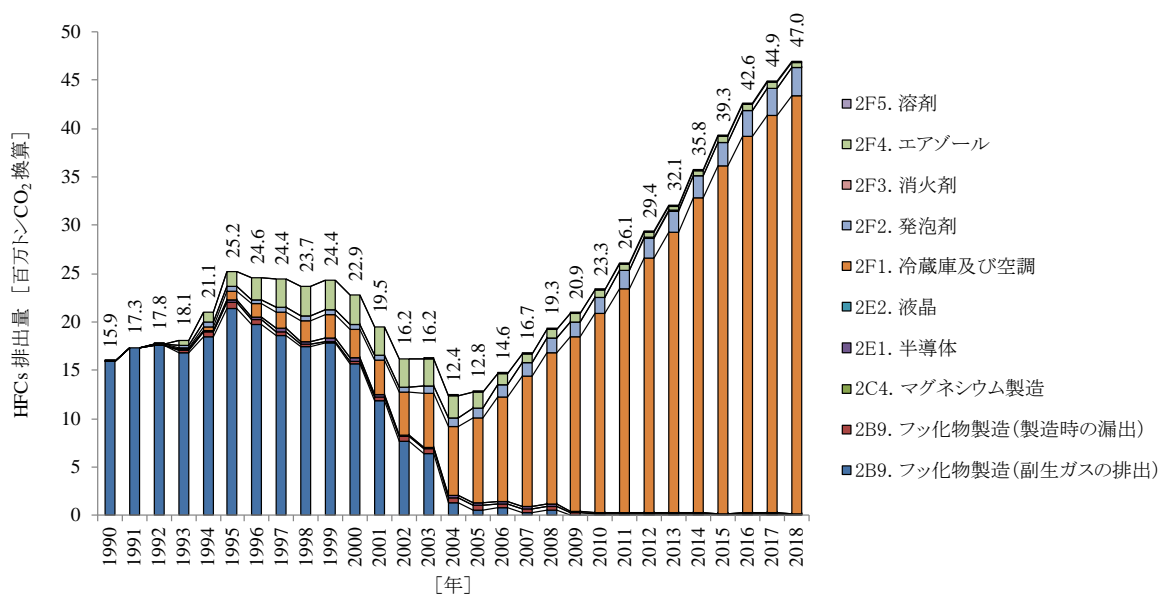


図 2-8 HFC 排出量の推移

表 2-5 HFC 排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2B9. フッ化物製造	15,930	22,019	15,984	1,035	284	181	168	138	147	124	113	172	133	100
副生ガスの排出	15,929	21,460	15,688	586	50	53	16	18	16	24	30	24	38	12
製造時の漏出	2	559	296	449	234	128	151	120	131	101	83	149	95	88
2C4. マグネシウム製造	NO	NO	NO	NO	NO	NO	1	1	1	1	1	1	1	2
2E. 電子産業	1	271	285	227	152	168	145	124	112	115	115	119	125	113
2E1. 半導体	1	271	283	224	150	165	142	122	109	113	113	117	123	113
2E2. 液晶	0.001	0.3	2	3	2	3	3	2	2	2	2	2	2	0.4
2F. ODSの代替としての製品の使用	1	2,923	6,583	11,522	20,498	22,966	25,791	29,097	31,844	35,543	39,034	42,282	44,631	46,772
2F1. 冷蔵庫及び空調	NO	925	2,977	8,876	17,998	20,482	23,139	26,353	29,007	32,535	35,875	38,905	41,104	43,179
2F2. 発泡剤	1	497	484	937	1,608	1,749	1,923	2,081	2,229	2,373	2,484	2,651	2,801	2,922
2F3. 消火剤	NO	NO	5	7	8	8	8	9	9	9	9	10	10	10
2F4. エアゾール	NO	1,502	3,117	1,695	845	666	634	561	489	503	540	587	600	544
2F5. 溶剤	NO	NO	NO	6	39	60	86	94	109	122	126	130	116	117
合計	15,932	25,213	22,852	12,784	20,934	23,315	26,105	29,361	32,104	35,783	39,263	42,575	44,891	46,988

⁷ HFCs、PFCs、SF₆、NF₃については暦年ベースの排出量を採用した。

2.1.6. PFCs

2018年のPFC排出量は350万トン（CO₂換算）であり、温室効果ガス総排出量の0.3%を占めた。1990年比46.7%の減少、前年比0.7%の減少となった。1990年からの減少は、溶剤からの排出量が減少（1990年比66.9%減）したこと等による。

2018年のPFC排出量の内訳をみると、半導体製造時の排出が51%と最も多く、金属洗浄等の溶剤からの排出（43%）、フッ化物製造からの排出（3%）がこれに続いた。

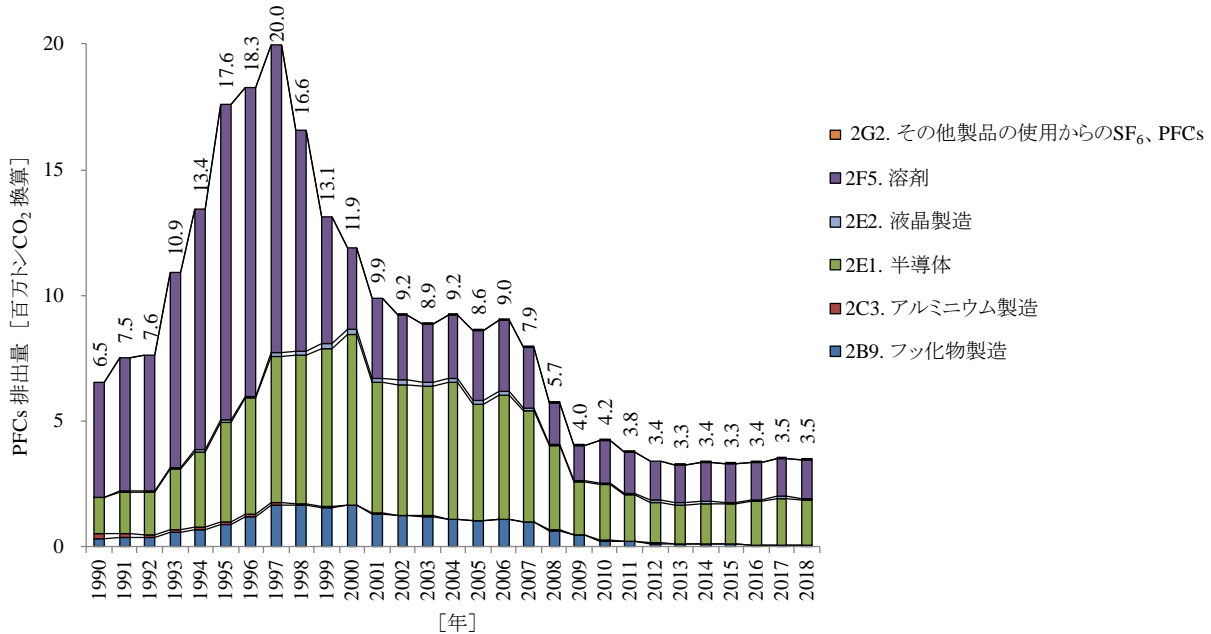


図 2-9 PFC 排出量の推移

表 2-6 PFC 排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2B9. フッ化物製造	331	914	1,661	1,041	459	248	206	148	111	107	115	97	78	87
2C3. アルミニウム製造	204	104	26	22	16	15	15	13	10	2	NO	NO	NO	NO
2E. 電子産業	1,455	4,020	6,986	4,746	2,148	2,261	1,922	1,692	1,631	1,707	1,669	1,792	1,931	1,855
2E1. 半導体	1,423	3,933	6,771	4,594	2,109	2,214	1,863	1,624	1,556	1,617	1,582	1,721	1,847	1,776
2E2. 液晶	31	87	214	152	39	46	59	68	76	90	86	71	84	79
2F5. 溶剤	4,550	12,572	3,200	2,815	1,420	1,721	1,605	1,583	1,518	1,537	1,517	1,465	1,484	1,505
2G2. その他製品の使用からのSF ₆ , PFCs	NO	NO	NO	0.3	3	4	6	NO	10	9	8	21	20	39
合計	6,539	17,610	11,873	8,623	4,047	4,250	3,755	3,436	3,280	3,361	3,308	3,375	3,512	3,487

2.1.7. SF₆

2018年のSF₆排出量は200万トン（CO₂換算）であり、総排出量の0.2%を占めた。1990年比84.1%の減少、前年比1.3%の減少となった。1990年からの減少は、電力会社を中心としたガスの回収等取扱管理の強化等により電気絶縁ガス使用機器からの排出量が減少（1990年比92.9%減）したこと等による。

2018年のSF₆排出量の内訳をみると、その他製品の使用（加速器等）からの排出が39%と最も多く、電気絶縁ガス使用機器からの排出（28%）、マグネシウム製造からの排出（13%）がこれに続いた。

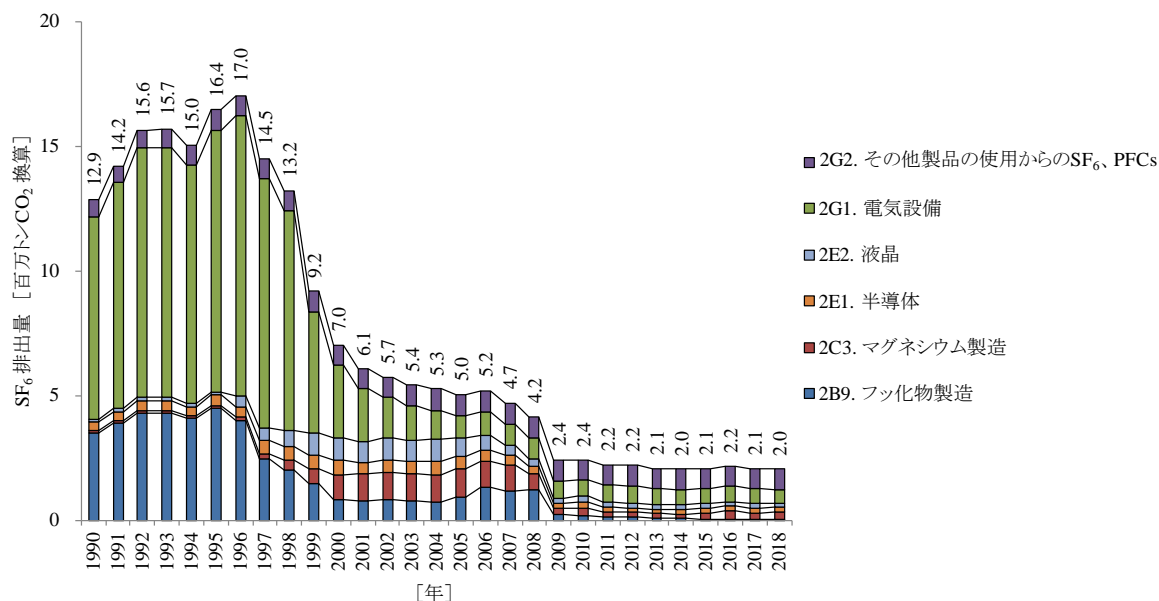


図 2-10 SF₆排出量の推移

表 2-7 SF₆排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2B9. フッ化物製造	3,471	4,492	821	930	233	189	132	123	93	62	52	50	41	46
2C3. マグネシウム製造	147	114	980	1,104	228	294	182	182	160	182	228	315	246	274
2E. 電子産業	419	542	1,506	1,252	410	494	394	356	351	366	375	349	363	349
2E1. 半導体	309	400	629	540	211	225	196	184	181	175	184	192	200	182
2E2. 液晶	110	142	877	712	199	269	198	172	170	191	191	157	163	167
2G. その他製品の製造及び使用	8,814	11,300	3,724	1,741	1,549	1,422	1,513	1,546	1,472	1,429	1,419	1,445	1,421	1,375
2G1. 電気設備	8,112	10,498	2,910	899	711	622	707	719	643	602	610	655	620	572
2G2. その他製品の使用からのSF ₆ , PFCs	702	802	815	842	838	799	806	827	829	827	809	789	801	803
合計	12,850	16,448	7,031	5,027	2,420	2,398	2,222	2,207	2,075	2,039	2,075	2,159	2,070	2,043

2.1.8. NF₃

2018年のNF₃排出量は30万トン(CO₂換算)であり、総排出量の0.02%を占めた。1990年と比べて766.3%増加、前年比37.2%の減少となった。1990年からの増加は、NF₃の生産量の増加に伴い、フッ化物製造(NF₃)からの排出が増加(1990年と比べて1,978.2%増加)したこと等による。

2018年のNF₃排出量の内訳をみると、半導体製造からの排出が72%と最も多く、フッ化物製造からの排出(21%)、液晶製造からの排出(7%)がこれに続いた。

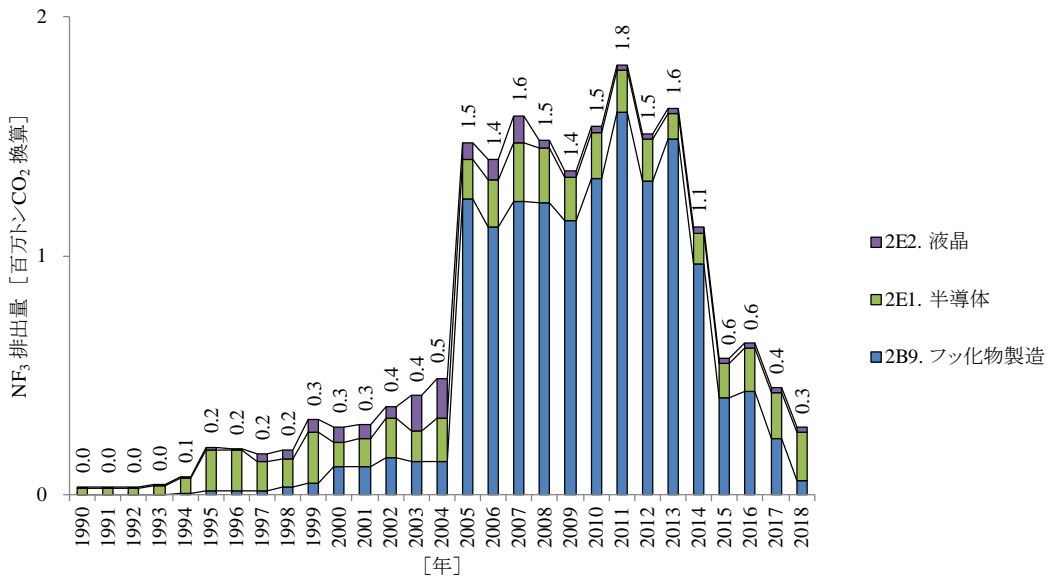


図 2-11 NF₃排出量の推移

表 2-8 NF₃排出量の推移

[千トンCO ₂ 換算]														
排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2B9. フッ化物製造	3	17	120	1,240	1,149	1,323	1,601	1,314	1,486	965	404	432	234	58
2E. 電子産業	30	184	165	232	205	217	199	198	131	158	167	203	216	225
2E1. 半導体	27	168	100	161	182	191	175	177	110	132	145	183	194	203
2E2. 液晶	3	16	66	71	23	26	24	21	21	26	22	20	22	21
合計	33	201	286	1,472	1,354	1,540	1,800	1,512	1,617	1,123	571	634	450	282

2.1.9. 間接 CO₂

2018年度の間接CO₂⁸排出量は210万トン(CO₂換算)であり、総排出量の0.2%を占めた。1990年度比62.4%の減少、前年度比0.66%の減少となった。1990年度からの減少は、VOC含有量の低い塗料の利用拡大や吸着装置によるVOCの回収処理等により、塗料の使用からの排出量が減少しているためである。

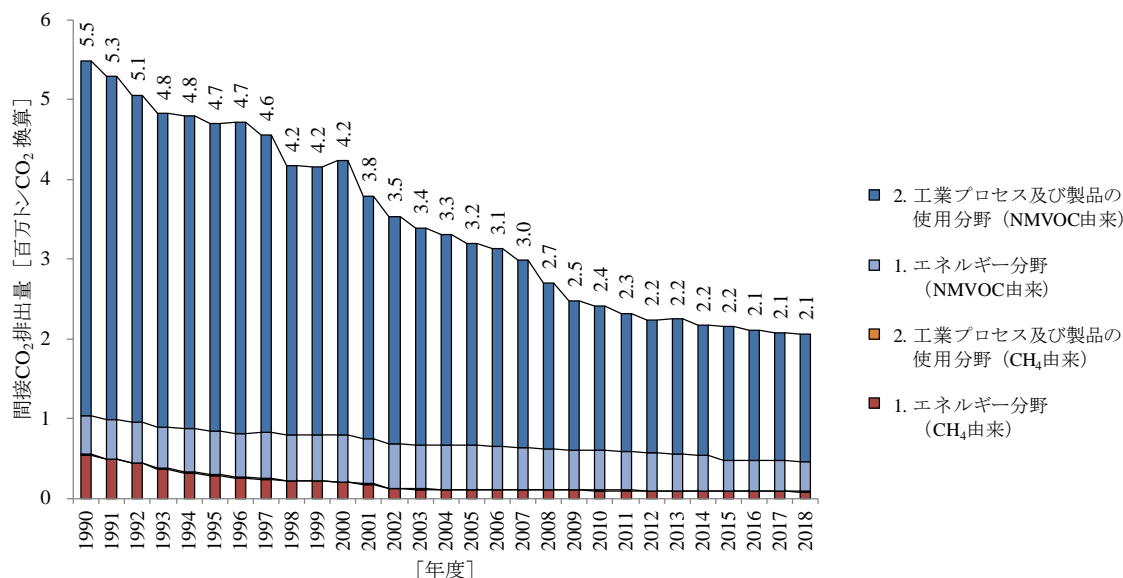


図 2-12 間接 CO₂排出量の推移

表 2-9 間接 CO₂排出量の推移

[千トンCO₂換算]

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CH ₄ 由来														
1. エネルギー分野	554	298	208	113	106	103	101	99	95	93	92	92	93	86
2. 工業プロセス及び製品の 使用分野	7	6	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	4
NMVOC由来	4,929	4,394	4,025	3,083	2,372	2,306	2,218	2,142	2,149	2,075	2,059	2,016	1,984	1,977
1. エネルギー分野	480	545	590	548	500	497	482	465	463	441	390	386	380	375
2. 工業プロセス及び 製品の 使用分野	4,448	3,849	3,435	2,535	1,872	1,809	1,736	1,676	1,686	1,634	1,669	1,630	1,604	1,602
合計	5,482	4,692	4,233	3,196	2,478	2,410	2,319	2,241	2,244	2,168	2,151	2,108	2,077	2,063

⁸ 燃料の燃焼起源、廃棄物の焼却起源及びバイオマス起源のCO、CH₄及びNMVOCに由来する排出量は、二重計上やカーボンニュートラルの観点から計上対象外とする。

2.2. 分野ごとの排出及び吸収の状況

2018年度の温室効果ガス排出量及び吸収量の分野⁹ごとの内訳をみると、温室効果ガス総排出量に占める割合は、エネルギー分野（間接CO₂含まない、以下定義省略）が87.5%、工業プロセス及び製品の使用分野（間接CO₂含まない以下定義省略）が8.1%、農業分野が2.7%、廃棄物分野が1.6%、間接CO₂排出が0.2%となった。

2018年度のLULUCF分野の吸収量の温室効果ガス総排出量に対する割合は4.6%となった。

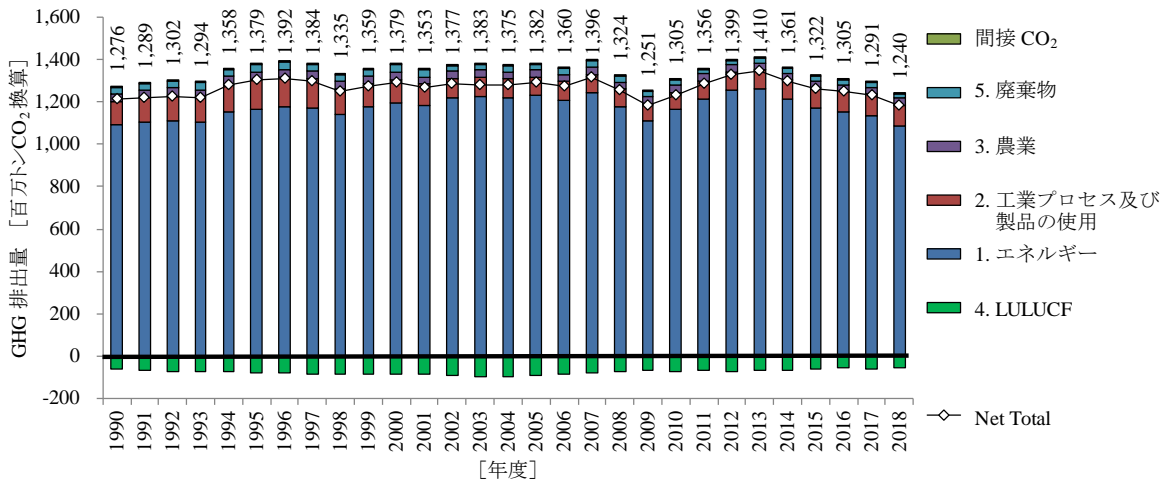


図 2-13 各分野の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

⁹ 2006年 IPCC ガイドライン及び共通報告様式（CRF）に示される Sector を指す。

表 2-10 各分野の温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

[百万トンCO ₂ 換算]	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
1. エネルギー ^{※1}	1,091.9	1,102.2	1,110.6	1,104.5	1,155.3	1,167.4	1,178.2	1,173.4	1,139.4	1,176.0
2. 工業プロセス及び製品の使用 ^{※1}	110.9	115.4	117.3	119.4	127.0	137.1	139.3	136.3	123.6	110.9
3. 農業	37.4	36.7	37.9	34.7	38.3	37.0	36.2	35.9	34.5	34.7
4. LULUCF ^{※2}	-62.2	-70.3	-73.3	-76.4	-76.1	-77.1	-81.7	-84.1	-85.5	-85.7
5. 廃棄物	29.7	29.7	30.9	30.4	32.9	33.1	33.3	33.7	33.3	32.7
間接CO ₂	5.5	5.3	5.1	4.8	4.8	4.7	4.7	4.6	4.2	4.2
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)	1,270.0	1,284.0	1,296.7	1,289.1	1,353.4	1,374.5	1,387.0	1,379.3	1,330.8	1,354.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)	1,207.8	1,213.7	1,223.4	1,212.7	1,277.3	1,297.4	1,305.3	1,295.2	1,245.2	1,268.6
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)	1,275.5	1,289.3	1,301.7	1,293.9	1,358.2	1,379.2	1,391.7	1,383.9	1,334.9	1,358.5
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)	1,213.3	1,219.0	1,228.4	1,217.5	1,282.1	1,302.1	1,310.0	1,299.8	1,249.4	1,272.8

[百万トンCO ₂ 換算]	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
1. エネルギー ^{※1}	1,198.0	1,185.7	1,217.4	1,226.1	1,221.8	1,228.5	1,205.7	1,241.8	1,174.2	1,112.6
2. 工業プロセス及び製品の使用 ^{※1}	109.0	98.0	91.1	89.7	86.3	87.4	90.2	89.3	84.9	77.5
3. 農業	35.3	34.8	35.0	34.0	35.1	35.2	35.0	36.1	35.5	34.8
4. LULUCF ^{※2}	-87.8	-88.3	-89.7	-100.0	-96.4	-91.2	-85.8	-81.2	-70.9	-66.9
5. 廃棄物	32.5	30.8	29.7	29.4	28.5	27.7	26.3	26.0	26.6	23.5
間接CO ₂	4.2	3.8	3.5	3.4	3.3	3.2	3.1	3.0	2.7	2.5
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)	1,374.8	1,349.3	1,373.2	1,379.1	1,371.7	1,378.8	1,357.2	1,393.2	1,321.2	1,248.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)	1,287.0	1,261.1	1,283.5	1,279.1	1,275.3	1,287.6	1,271.4	1,312.0	1,250.3	1,181.5
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)	1,379.0	1,353.1	1,376.7	1,382.5	1,375.0	1,382.0	1,360.3	1,396.2	1,323.9	1,250.9
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)	1,291.2	1,264.9	1,287.0	1,282.5	1,278.6	1,290.8	1,274.5	1,315.0	1,253.0	1,184.0

[百万トンCO ₂ 換算]	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1. エネルギー ^{※1}	1,162.6	1,213.3	1,253.7	1,261.1	1,210.5	1,171.6	1,152.7	1,137.0	1,085.7
2. 工業プロセス及び製品の使用 ^{※1}	80.7	82.7	85.2	89.5	92.1	93.2	96.2	99.0	100.1
3. 農業	35.9	35.3	34.8	34.8	34.2	33.6	33.5	33.4	33.3
4. LULUCF ^{※2}	-70.4	-69.7	-72.7	-66.0	-64.3	-59.4	-54.3	-58.5	-57.4
5. 廃棄物	23.3	22.4	22.7	22.4	21.5	21.3	20.4	19.9	19.3
間接CO ₂	2.4	2.3	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.1	2.1
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を除く。)	1,302.5	1,353.6	1,396.3	1,407.8	1,358.3	1,319.8	1,302.8	1,289.2	1,238.3
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を除く。)	1,232.1	1,283.9	1,323.6	1,341.8	1,294.0	1,260.4	1,248.6	1,230.7	1,181.0
総排出量 (LULUCF分野除く。間接CO ₂ を含む。)	1,305.0	1,355.9	1,398.6	1,410.1	1,360.5	1,322.0	1,305.0	1,291.3	1,240.4
純排出/吸収量 (LULUCF分野含む。間接CO ₂ を含む。)	1,234.5	1,286.3	1,325.8	1,344.0	1,296.2	1,262.6	1,250.7	1,232.8	1,183.0

※1 間接CO₂を含まない

※2 LULUCF: 土地利用、土地利用変化及び林業

2.2.1. エネルギー

2018年度のエネルギー分野の排出量は10億8,600万トン(CO₂換算)であり、1990年度比

0.6%の減少、前年比 4.5%の減少となった。

2018 年度のエネルギー分野の温室効果ガス排出量の内訳をみると、燃料の燃焼¹⁰からのCO₂排出が 99.2%を占め、うち、固体燃料からのCO₂排出が 40%と最も多く、液体燃料からのCO₂排出 (36%)、気体燃料からのCO₂排出 (21%) がこれに続いた。

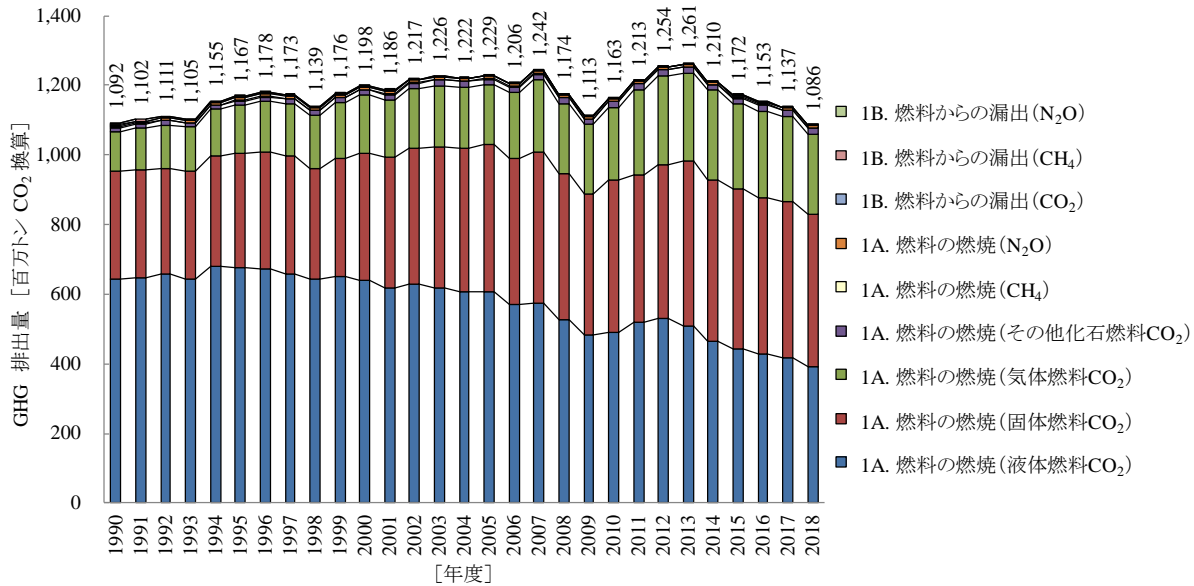


図 2-14 エネルギー分野からの温室効果ガス排出量の推移

表 2-11 エネルギー分野からの温室効果ガス排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1A. 燃料の燃焼	1,086,785	1,164,199	1,195,649	1,227,045	1,111,181	1,161,198	1,211,908	1,252,380	1,259,888	1,209,236	1,170,422	1,151,494	1,135,769	1,084,564
液体燃料CO ₂	644,312	677,416	640,667	606,112	483,777	488,924	520,349	530,754	508,462	464,737	444,007	428,294	415,803	392,517
固体燃料CO ₂	309,482	327,102	364,079	422,447	404,591	438,513	423,245	442,778	473,705	465,143	458,776	449,606	451,606	435,755
気体燃料CO ₂	114,167	137,927	166,073	172,415	199,127	209,932	244,686	254,051	253,378	255,508	243,368	248,829	242,817	231,175
その他化石燃料(廃棄物)CO ₂	10,878	12,431	15,214	17,077	15,630	15,890	15,964	17,134	16,703	16,330	16,841	17,565	18,200	18,040
CH ₄	1,350	1,381	1,276	1,434	1,366	1,437	1,147	1,166	1,112	1,099	1,052	1,050	1,043	1,014
N ₂ O	6,597	7,941	8,341	7,559	6,690	6,503	6,517	6,497	6,529	6,420	6,377	6,151	6,299	6,063
1B. 燃料からの漏出	5,165	3,169	2,347	1,484	1,417	1,359	1,345	1,341	1,255	1,255	1,212	1,251	1,236	1,155
CO ₂	192	521	512	508	501	475	477	490	438	449	425	457	436	414
CH ₄	4,973	2,647	1,836	976	916	885	867	851	816	806	788	794	800	741
N ₂ O	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
1C. CO ₂ の輸送と貯留	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0	NEN0
合計	1,091,950	1,167,367	1,197,996	1,228,529	1,112,598	1,162,558	1,213,253	1,253,720	1,261,143	1,210,491	1,171,634	1,152,746	1,137,006	1,085,719

2.2.2. 工業プロセス及び製品の使用

2018 年度の工業プロセス及び製品の使用分野の排出量は 1 億 10 万トン (CO₂換算) であり、1990 年度比 9.8%の減少、前年比 1.1%の増加となった。

2018 年度の工業プロセス及び製品の使用分野の温室効果ガス排出量の内訳をみると、オゾン層破壊物質 (ODS) の代替製品の使用に伴う HFCs 排出が 47%と最も多く、セメント製造時のCO₂排出等の鉱物産物からの排出 (34%)、金属製造からのCO₂排出 (6%) がこれに続いた。

1990 年度からの排出量の減少は、特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律の下での規制により「ODS の代替製品の使用」からの HFCs 排出量が増加したものの、HCFC-22 の製造時の副生 HFC-23 が減少したこと (化学産業)、クリンカ生産量の減少に伴うセメン

¹⁰ 燃料種は 2006 年 IPCC ガイドライン及び共通報告様式 (CRF) の分類に従う。

ト製造時のCO₂排出量（鉱物産業）が減少したこと、アジピン酸製造におけるN₂O分解設備の稼働によるアジピン酸製造時のN₂O排出量（化学産業）が減少したこと等により、分野全体では減少しているものである。

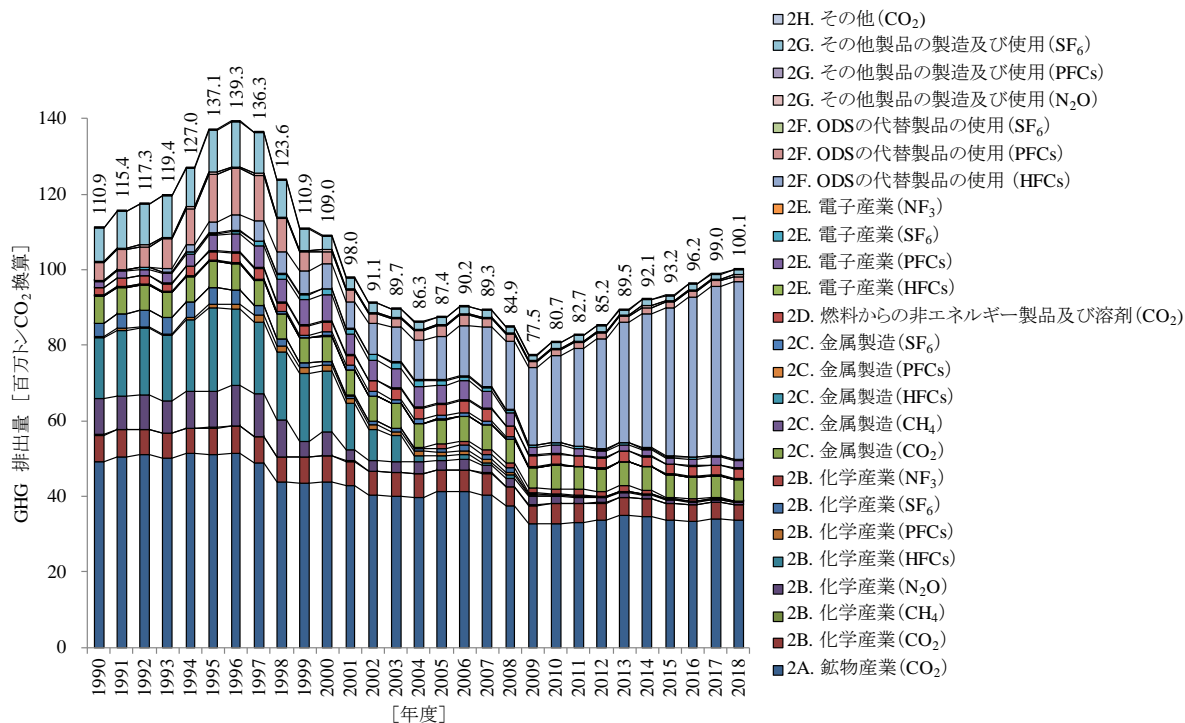


図 2-15 工業プロセス及び製品の使用分野からの温室効果ガス排出量の推移

表 2-12 工業プロセス及び製品の使用分野からの温室効果ガス排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2A. 鉱物産業 (CO ₂)	49,230	51,146	43,919	41,230	32,779	32,752	33,089	33,629	35,004	34,731	33,659	33,533	33,971	33,707
2B. 化学産業	36,433	44,158	31,780	12,633	9,392	9,218	8,753	7,696	7,911	6,945	6,104	5,754	5,595	5,040
CO ₂	7,041	7,014	6,810	5,795	4,872	5,427	5,103	4,652	4,787	4,683	4,591	4,300	4,485	4,220
CH ₄	37	37	34	34	36	36	36	28	28	25	32	27	25	23
N ₂ O	9,620	9,665	6,348	2,558	2,360	1,813	1,507	1,293	1,259	979	798	676	599	506
HFCs	15,930	22,019	15,984	1,035	284	181	168	138	147	124	113	172	133	100
PFCs	331	914	1,661	1,041	459	248	206	148	111	107	115	97	78	87
SF ₆	3,471	4,492	821	930	233	189	132	123	93	62	52	50	41	46
NF ₃	3	17	120	1,240	1,149	1,323	1,601	1,314	1,486	965	404	432	234	58
2C. 金属製造	7,617	7,088	7,766	7,643	5,728	6,427	6,182	6,278	6,378	6,325	6,185	6,168	6,011	6,006
CO ₂	7,244	6,850	6,740	6,497	5,468	6,101	5,965	6,063	6,189	6,122	5,939	5,836	5,746	5,712
CH ₄	23	21	20	20	15	18	18	18	18	18	17	16	17	18
HFCs	NO	NO	NO	NO	NO	NO	1	1	1	1	1	1	1	2
PFCs	204	104	26	22	16	15	15	13	10	2	NO	NO	NO	NO
SF ₆	147	114	980	1,104	228	294	182	182	160	182	228	315	246	274
2D. 燃料由来の非エネルギー製品及び溶剤の使用 (CO ₂)	2,040	2,377	2,659	2,865	2,864	2,748	2,701	2,551	2,685	2,527	2,486	2,583	2,682	2,644
2E. 電子産業	1,904	5,016	8,941	6,457	2,916	3,140	2,661	2,370	2,225	2,346	2,326	2,463	2,634	2,542
HFCs	1	271	285	227	152	168	145	124	112	115	115	119	125	113
PFCs	1,455	4,020	6,986	4,746	2,148	2,261	1,922	1,692	1,631	1,707	1,669	1,792	1,931	1,855
SF ₆	419	542	1,506	1,252	410	494	394	356	351	366	375	349	363	349
NF ₃	30	184	165	232	205	217	199	198	131	158	167	203	216	225
2F. ODSの代替製品の使用	4,551	15,496	9,783	14,336	21,918	24,686	27,396	30,680	33,361	37,079	40,551	43,747	46,115	48,278
HFCs	1	2,923	6,583	11,522	20,498	22,966	25,791	29,097	31,844	35,543	39,034	42,282	44,631	46,772
PFCs	4,550	12,572	3,200	2,815	1,420	1,721	1,605	1,583	1,518	1,537	1,517	1,465	1,484	1,505
SF ₆	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
2G. その他製品の製造及び使用	9,105	11,749	4,096	2,109	1,811	1,701	1,789	1,854	1,841	2,065	1,829	1,894	1,860	1,784
N ₂ O	291	449	371	368	259	275	270	308	359	627	402	429	420	370
PFCs	NO	NO	NO	0.3	3	4	6	NO	10	9	8	21	20	39
SF ₆	8,814	11,300	3,724	1,741	1,549	1,422	1,513	1,546	1,472	1,429	1,419	1,445	1,421	1,375
2H. その他 (CO ₂)	65	72	87	90	72	77	88	100	94	91	97	107	111	105
合計	110,945	137,102	109,030	87,363	77,481	80,750	82,660	85,158	89,499	92,108	93,237	96,250	98,979	100,105

2.2.3. 農業

2018年度の農業分野の排出量は3,330万トン（CO₂換算）であり、1990年度比11.1%の減少、前年度比0.4%の減少となった。

2018年度の農業分野の温室効果ガス排出量の内訳をみると、稲作からのCH₄排出（41%）、家畜の消化管内発酵に伴うCH₄排出が22%と最も多く、窒素肥料等の施肥に伴うN₂O排出等の農用地の土壌からのN₂O排出（16%）がこれに続いた。

1990年度からの排出量の減少は、乳用牛の頭数の減少により家畜の消化管内発酵に伴うCH₄排出が減少したこと、窒素肥料施用量、家畜ふん尿由来の有機質肥料施用量の減少により農用地の土壌からのN₂O排出量が減少したこと等によるものである。

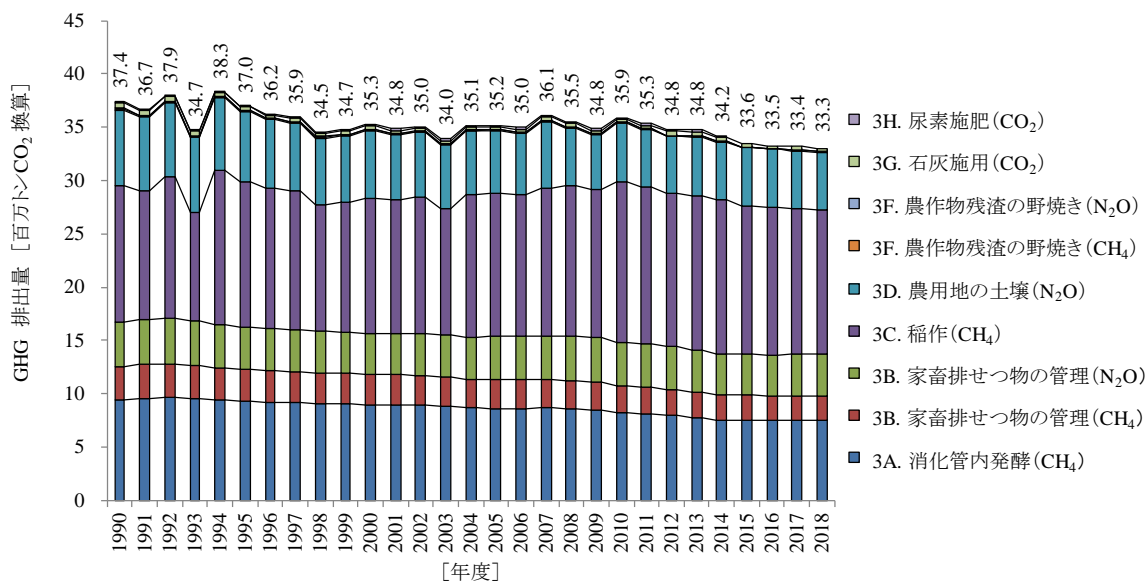


図 2-16 農業分野からの温室効果ガス排出量の推移

表 2-13 農業分野からの温室効果ガス排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
3A. 消化管内発酵 (CH ₄)	9,423	9,318	8,966	8,651	8,480	8,202	8,154	7,953	7,737	7,543	7,534	7,481	7,494	7,466
3B. 家畜排せつ物の管理	7,329	6,971	6,654	6,711	6,791	6,649	6,601	6,489	6,334	6,229	6,210	6,169	6,250	6,245
CH ₄	3,121	2,988	2,804	2,717	2,573	2,513	2,508	2,465	2,406	2,364	2,362	2,321	2,324	2,324
N ₂ O	4,208	3,983	3,850	3,994	4,218	4,136	4,093	4,024	3,927	3,865	3,849	3,847	3,926	3,922
3C. 稲作 (CH ₄)	12,771	13,605	12,749	13,445	13,863	15,041	14,680	14,325	14,565	14,437	13,908	13,907	13,627	13,561
3D. 農用地の土壌 (N ₂ O)	7,115	6,580	6,327	5,894	5,175	5,506	5,391	5,397	5,448	5,388	5,426	5,390	5,440	5,412
3F. 農作物残渣の野焼き	166	145	126	112	99	96	95	93	94	92	88	88	84	83
CH ₄	127	111	96	86	76	74	73	71	72	70	67	67	64	63
N ₂ O	39	34	30	26	23	23	22	22	22	21	21	21	20	20
3G. 石灰施用 (CO ₂)	550	304	333	231	270	243	247	370	380	363	259	253	294	294
3H. 尿素施肥 (CO ₂)	59	56	110	179	120	160	168	150	198	189	201	193	193	193
合計	37,413	36,979	35,265	35,224	34,798	35,898	35,337	34,777	34,756	34,241	33,625	33,479	33,381	33,252

2.2.4. 土地利用、土地利用変化及び林業

2018年度の土地利用、土地利用変化及び林業（LULUCF）分野の純吸収量（CO₂、CH₄及びN₂O排出量を含む）は5,740万トン（CO₂換算）であり、1990年比7.8%の減少、前年比2.0%の減少であった。なお、森林における2003年以降の長期的な吸収量の減少傾向は森林の成熟化によるところが大きい。

2018年度のLULUCF分野の温室効果ガスの排出・吸収量の内訳を見ると、森林におけるCO₂吸収量が5,900万トンと最も多く、LULUCF分野の純吸収量の103%に相当している。

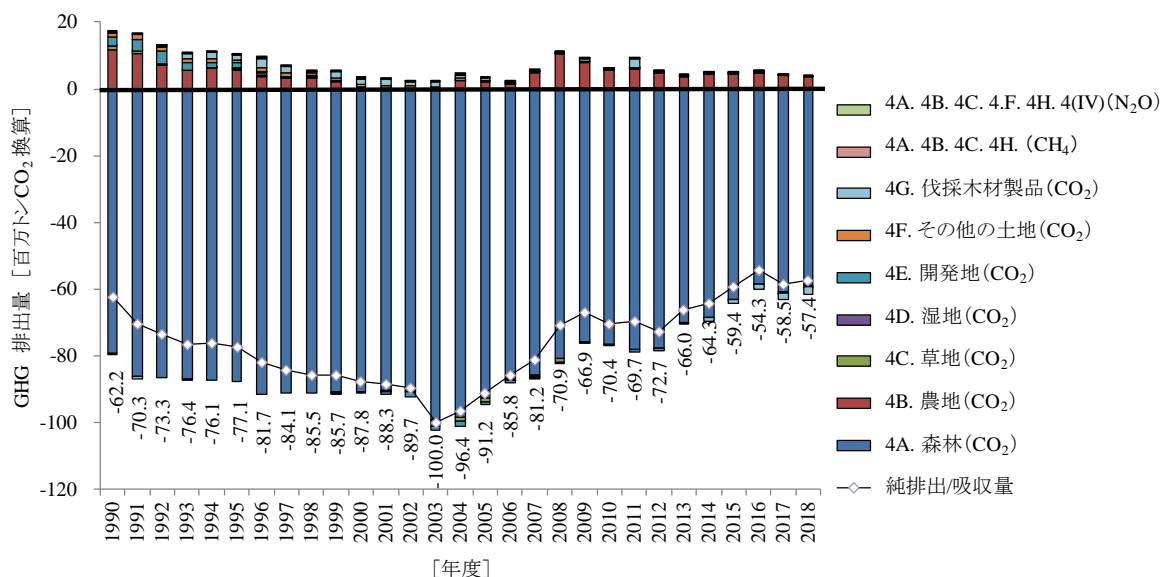


図 2-17 LULUCF 分野からの温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

表 2-14 LULUCF 分野からの温室効果ガス排出量及び吸収量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
4A. 森林	-78,931	-87,475	-90,507	-92,529	-75,735	-76,245	-77,982	-77,553	-69,865	-68,131	-62,977	-58,434	-60,696	-58,895
CO ₂	-79,061	-87,606	-90,637	-92,662	-75,867	-76,371	-78,110	-77,676	-69,991	-68,279	-63,108	-58,562	-60,849	-59,027
CH ₄	10	10	9	11	10	5	6	2	4	23	6	1	23	2
N ₂ O	120	121	121	122	122	121	122	121	122.5	125.2	125.0	126.5	129.5	129.6
4B. 農地	11,787	5,518	107	2,332	8,069	5,565	5,969	4,989	3,718	4,483	4,409	4,890	4,016	3,591
CO ₂	11,697	5,436	34	2,266	8,007	5,503	5,908	4,929	3,658	4,422	4,350	4,831	3,956	3,530
CH ₄	61	58	56	54	53	53	52	52	52	52	51	51	51	51
N ₂ O	30	24	18	12	9	9	8	8	9	9	9	8	9	9
4C. 草地	1,093	720	78	-935	-5	154	287	14	-4	179	20	-37	-151	-236
CO ₂	1,062	689	48	-966	-36	124	256	-19	-35	147	-12	-67	-181	-266
CH ₄	15	15	15	15	15	15	15	15	15	16	16	15	15	15
N ₂ O	15	16	15	15	16	15	16	17	16	16	16	15	15	15
4D. 湿地	91	359	426	42	121	114	59	68	24	24	59	59	17	17
CO ₂	91	359	426	42	121	114	59	68	24	24	59	59	17	17
CH ₄	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO
N ₂ O	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO	IE,NA,NE,NO
4E. 開発地	2,865	1,288	-447	-962	-296	-384	-814	-570	-443	-283	107	196	-156	-27
CO ₂	2,865	1,288	-447	-962	-296	-384	-814	-570	-443	-283	107	196	-156	-27
CH ₄	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
N ₂ O	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO
4F. その他の土地	1,191	987	715	196	277	258	322	225	186	193	201	210	168	166
CO ₂	1,180	976	706	189	272	254	317	221	182	190	198	207	165	164
CH ₄	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
N ₂ O	11	10	9	7	5	5	4	4	4	3	3	3	3	2
4G. 伐採木材製品 (CO ₂)	-370	1,475	1,821	621	642	50	2,461	62	321	-843	-1,230	-1,200	-1,777	-2,046
4H. その他 (開発地への転用時の有機質土壌)	15	13	13	11	10	9	9	8	8	8	7	7	7	7
CH ₄	14	13	12	10	9	9	8	8	7	7	7	7	6	6
N ₂ O	0.8	0.8	0.7	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4
4(IV) 間接N ₂ O	41	38	35	32	31	31	31	31	31	32	32	32	32	33
合計	-62,219	-77,078	-87,758	-91,191	-66,887	-70,448	-69,659	-72,725	-66,023	-64,339	-59,371	-54,276	-58,540	-57,390

2.2.5. 廃棄物

2018年度の廃棄物分野の排出量は1,930万トン（CO₂換算）であり、1990年度比35.2%の減少、前年度比3.0%の減少となった。

2018年度の廃棄物分野の温室効果ガス排出量の内訳をみると、廃プラスチックや廃油等の化石燃料由来の廃棄物の焼却に伴うCO₂排出が53%と最も多く、固形廃棄物の処分（埋立）に伴うCH₄排出（15%）、排水の処理と放出に伴うN₂O排出（10%）がこれに続いた。

1990年度以降の排出量の減少は、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」（昭和45年法律第137号）、「循環型社会形成推進基本法」（平成12年法律第110号）、個別リサイクル法等の法令の制定・施行により、中間処理による減量化率等が向上し、生分解可能廃棄物最終処分量の減少に伴う最終処分場からのCH₄排出量が減少したこと等によるものである。

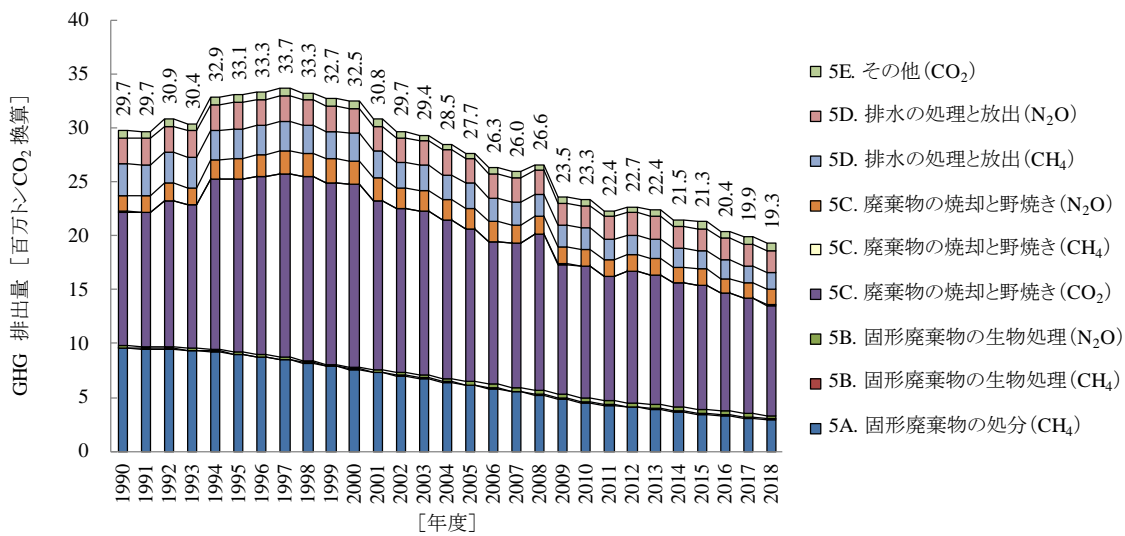


図 2-18 廃棄物分野からの温室効果ガス排出量の推移

表 2-15 廃棄物分野からの温室効果ガス排出量の推移

排出源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
5A. 固形廃棄物の処分 (CH ₄)	9,570	8,985	7,570	6,090	4,835	4,521	4,272	4,058	3,855	3,635	3,444	3,247	3,093	2,930
5B. 固形廃棄物の生物処理	235	233	235	414	460	402	444	440	435	433	441	446	388	385
CH ₄	54	53	54	95	106	93	102	101	100	100	102	103	90	89
N ₂ O	181	179	181	319	354	309	342	338	335	333	340	343	298	296
5C. 廃棄物の焼却と野焼き	13,895	17,983	19,164	16,084	13,644	13,826	13,078	13,717	13,623	12,995	13,016	12,313	12,115	11,678
CO ₂	12,429	16,046	16,988	14,103	12,062	12,300	11,549	12,183	12,076	11,561	11,508	10,992	10,682	10,239
CH ₄	28	29	21	18	13	12	11	11	12	10	10	9	10	10
N ₂ O	1,438	1,908	2,156	1,963	1,570	1,515	1,518	1,523	1,535	1,423	1,498	1,312	1,423	1,429
5D. 排水の処理と放出	5,329	5,189	4,857	4,560	4,091	4,069	4,037	3,925	3,893	3,825	3,777	3,742	3,640	3,600
CH ₄	2,942	2,750	2,556	2,280	1,997	1,954	1,908	1,855	1,811	1,779	1,749	1,714	1,648	1,617
N ₂ O	2,387	2,439	2,301	2,280	2,094	2,115	2,129	2,069	2,082	2,045	2,027	2,028	1,992	1,983
5E. その他 (CO ₂)	703	668	656	507	514	527	524	528	605	617	625	619	637	673
合計	29,732	33,057	32,483	27,655	23,545	23,345	22,355	22,668	22,411	21,504	21,304	20,367	19,873	19,267

2.2.6. 間接 CO₂

上記、2.1.9. 参照。

2.3. 前駆物質及び硫黄酸化物の排出状況

インベントリでは、附属書 I 国のための改訂 UNFCCC インベントリ報告ガイドラインにおいて排出量の報告が義務づけられている 7 種類の温室効果ガス（CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃）以外に前駆物質（窒素酸化物、一酸化炭素、非メタン揮発性有機化合物）及び硫黄酸化物の排出を報告する必要がある。これらの気体の排出状況を以下に示す。

窒素酸化物（NO_x）の 2018 年度の排出量は 130 万トンであり、1990 年度比 33.4%の減少、前年度比 2.9%の減少となった。

一酸化炭素（CO）の 2018 年度の排出量は 260 万トンであり、1990 年度比 40.0%の減少、前年度比 3.9%の減少となった¹¹。

非メタン揮発性有機化合物（NMVOC）の 2018 年度の排出量は 90 万トンであり、1990 年度比 59.6%の減少、前年度比 1.0%の減少となった。

硫黄酸化物（SO_x）¹²の 2018 年度の排出量は 70 万トンであり、1990 年度比 44.4%の減少、前年度比 0.1%の減少となった。

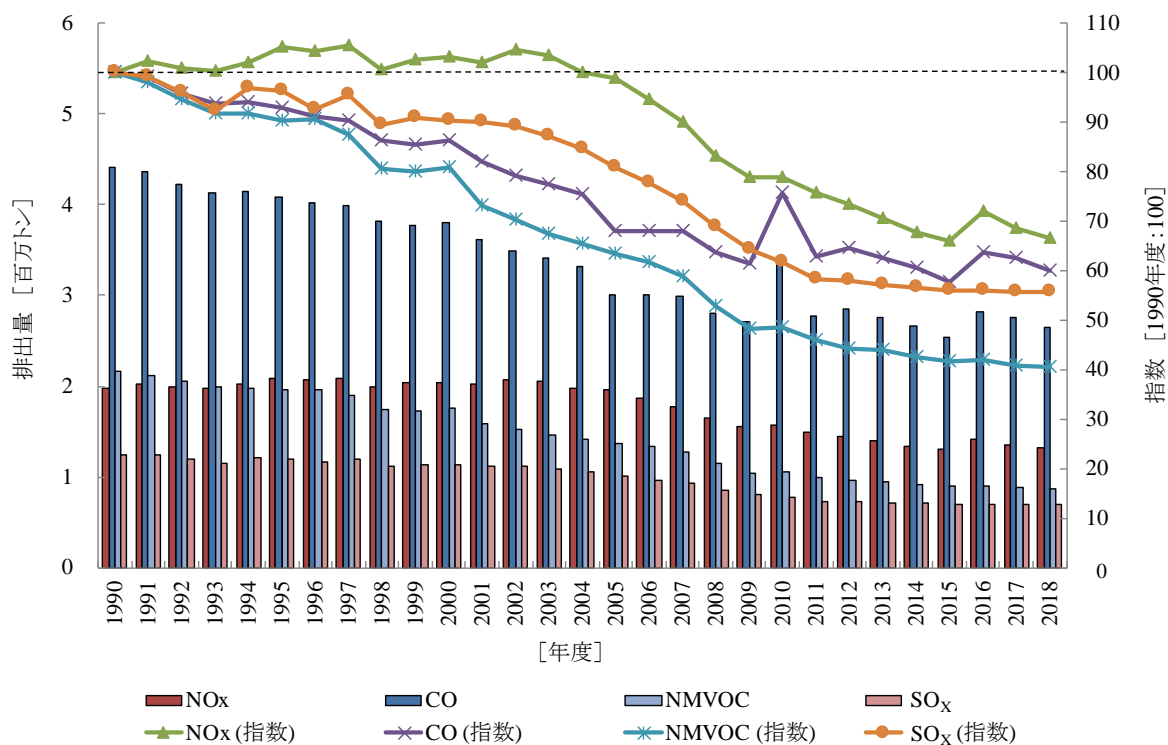


図 2-19 前駆物質及び硫黄酸化物の排出量の推移

(注) 折れ線グラフは 1990 年度を 100 とした場合の推移を示している。

¹¹ 2010 年度の CO 排出量が前年度比で増加したのは自動車の排出係数の変化、2011 年度の CO 排出量が前年度比で減少したのは鉄鋼業の炉種比の変化等による。

¹² SO_xのほとんどは、SO₂で構成される。主な排出源では、SO₂排出量を計上している。

2.4. KP-LULUCF 活動の排出・吸収状況

京都議定書第3条3及び4活動による2018年度の純吸収量は、4,300万トン（CO₂換算）であった。活動毎の排出・吸収量の内訳は以下の通りである。詳細情報は11章を参照のこと。

表 2-16 京都議定書第3条3及び4活動による排出・吸収量（CRF Accounting table）

温室効果ガス排出・吸収活動	基準年 (1990)	純排出／吸収量					
		2013	2014	2015	2016	2017	2018
(kt CO ₂ 換算)							
A. 3条3項活動							
A.1. 新規植林・再植林		-1558	-1563	-1562	-1562	-1536	-1442
自然攪乱により除外される排出量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
自然攪乱を受けた土地での除外される再吸収量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
A.2. 森林減少		2049	2055	2274	2275	1611	1605
B. 3条4項活動							
B.1. 森林経営							
純排出／吸収量		-51149	-51449	-49216	-46650	-46469	-45361
自然攪乱により除外される排出量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
自然攪乱を受けた土地での除外される再吸収量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
代替植林に起因するデビット（CEF-ne）		NA	NA	NA	NA	NA	NA
FM参照レベル（FMRL）		0	0	0	0	0	0
FMRLへの技術的調整		1069	1252	1404	1544	1687	1821
上限値							
B.2. 農地管理	10265	3693	4476	4413	4917	4139	3721
B.3. 牧草地管理	840	-190	9	-70	-118	-127	-209
B.4. 植生回復	-82	-1228	-1247	-1267	-1285	-1308	-1322
B.5. 湿地の排水・再灌水（非選択）	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA

（注）四捨五入表記の関係で、各要素の累計と合計値が一致していない箇所がある。

参考文献

1. 内閣府「国民経済計算年報」
2. 気候変動に関する政府間パネル（IPCC）「第4次評価報告書」（2007）
3. 総務省統計局「人口推計年報」
4. 総務省統計局「国勢調査」

第3章 エネルギー分野

3.1. エネルギー分野の概要

エネルギー分野は、石炭、石油、天然ガス等の化石燃料を燃焼させた際に排出される温室効果ガスを扱う「燃料の燃焼」と、人為的な活動からの意図的または非意図的な化石燃料由来のガスの放出を扱う「燃料からの漏出」という2つの主要なカテゴリから成る。

日本の社会システムにおいては、生産、運輸、出荷、エネルギー製品の消費等、様々な場面において化石燃料が使われており、温室効果ガスが排出されている。また、CO₂だけではなくCH₄、N₂O、NO_x（窒素酸化物）、CO（一酸化炭素）及びNMVOC（非メタン揮発性有機化合物）など直接的及び間接的な温室効果ガスも排出されている。

2018年度における当該分野からの温室効果ガス（CO₂、CH₄及びN₂O）排出量は1,085,719 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCFを除く）の87.5%を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると0.6%の減少となっている。

方法論は下表のとおり。

表 3-1 エネルギー分野で用いている方法論

温室効果ガスの種類 カテゴリ	CO ₂		CH ₄		N ₂ O	
	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数
1.A. 燃料の燃焼	CS,T2	CS	CS,T1,T2,T3	CR,CS,D	CS,T1,T2,T3	CR,CS,D
1. エネルギー産業	CS,T2	CS	CS,T3	CS	CS,T3	CS
2. 製造業及び建設業	CS,T2	CS	CS,T1,T3	CR,CS,D	CS,T1,T3	CR,CS,D
3. 運輸	T2	CS	T1,T2,T3	CS,D	T1,T2,T3	CS,D
4. その他部門	CS,T2	CS	CS,T1,T3	CR,CS,D	CS,T1,T3	CR,CS,D
5. その他						
1.B. 燃料からの漏出	CS,T1	CS,D	CS,D,T1,T2,T3	CS,D	T1	D
1. 固体燃料	CS	CS	D,T1,T2,T3	CS,D		
2. 石油及び天然ガス	CS,T1	CS,D	CS,T1	CS,D	T1	D
1.C. CO ₂ の輸送及び貯蔵						

(注) D: IPCC デフォルト値、T1: IPCC Tier1、T2: IPCC Tier2、T3: IPCC Tier3、CS: 国独自の方法または排出係数、CR: CORINAIR

3.2. 燃料の燃焼（1.A.）

燃料の燃焼カテゴリは、石炭、石油、天然ガス等の化石燃料の燃焼や、エネルギー利用・回収を伴う廃棄物の燃焼¹により大気中に排出される温室効果ガスを扱う。

本カテゴリは、主に発電及び熱供給からの排出を扱う「1.A.1 エネルギー産業」、製造業や建設業からの排出を扱う「1.A.2 製造業及び建設業」、旅客や貨物の輸送に伴う排出を扱う「1.A.3 運輸」、業務、家庭、農林水産業からの排出を扱う「1.A.4 その他部門」、その他からの排出を扱う「1.A.5 その他」の5部門から構成されている。

¹ エネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出は、2008年提出インベントリまでは廃棄物分野で報告を実施していた。しかし、ERT（専門家審査チーム）の勧告とIPCCガイドラインのルールに従い、これらの排出は2009年提出インベントリよりエネルギー分野で報告している。

2018年度における本カテゴリーからの温室効果ガス排出量は1,084,564 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCFを除く）の87.4%を占めている。また、ガス別の内訳をみると、CO₂が本カテゴリーからの温室効果ガス排出量の99.3%を占めている。

2018年度における本カテゴリーからのCO₂排出量を前年度と比較すると4.5%の減少となった。これは、エネルギー産業（1.A.1）における排出が減少したこと等による。

部門別にCO₂排出量の増減をみると、エネルギー産業（1.A.1）における排出は、1990年度比で28.2%増加、前年度比で7.1%の減少となった。1990年度からの排出量の増加は、火力発電の増加等による。1990年度から2007年度までは電力需要が増加傾向にあり、それに伴い排出量が増加傾向にあった。2011年度から2013年度は東日本大震災をきっかけとした原子力発電所の稼働停止に伴う火力発電の比率の増加もあり排出量が増加した。それ以降は、再生可能エネルギーの導入拡大や原子力発電所の再稼働などが進み排出量が減少している。

製造業及び建設業（1.A.2）におけるCO₂排出は、1990年度比で24.8%減少、前年度比で2.6%の減少となった。1990年度からの排出量の減少は、液体燃料消費量が減少したこと等による。排出量の推移は経済産業省「鉱工業生産指数」の変化の傾向とある程度の関連がみられるが、2000年代中盤においては「鉱工業生産指数」の伸びに比して排出量は横ばいで推移している。これは省エネルギーの進展等による。（資源エネルギー庁、2019）

運輸（1.A.3）におけるCO₂排出は、1990年度比で1.0%増加、前年度比で1.2%の減少となった。1990年度からの排出量の増加は、貨物からの排出量が減少した一方で、乗用車からの排出量が増加したことによる。自動車からの排出量は1990年代にかけて走行量の増加に伴い増加傾向にあったが、2000年代に入り燃費の改善等により減少傾向にある。

その他部門（1.A.4）におけるCO₂排出は、1990年度比で12.8%減少、前年度比で3.6%の減少となった。1990年度からの排出量の減少は、液体燃料消費量が減少したこと等による。2005年度までは経済産業省「第三次産業活動指数」の変化の傾向と業務他からの排出量にある程度の関連がみられるが、それ以降、液体燃料の需要減少により排出量は減少傾向にある。

2012年提出インベントリの対日審査（FCCC/ARR/2012/JPN パラグラフ33）において、エネルギー分野の排出量増減傾向の要因に関する情報の透明性を改善することが勧告された。これに対応するため、排出量の増減傾向に関連する指標を下表に示す。なお、これらの指標は排出量の算定に用いていないことに留意されたい。また、排出量の推移の図を第2章に掲載しているため、そちらも併せて参照されたい。

表 3-3 燃料の燃焼カテゴリー（1.A）からの温室効果ガス排出量に関連する指標の推移

No.	関連サブカテゴリー	項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1	1.A. 燃料の燃焼	最終電力消費	TWh	765	872	973	1,025	989	1,035	997	991	990	974	949	951	965	946
2	1.A.2. 製造業及び建設業	鉱工業生産指数	2015年基準	109.1	103.3	107.7	109.3	93.0	101.2	100.5	97.8	101.1	100.5	99.8	100.6	103.5	103.8
3	1.A.3.b. 自動車	自動車の走行量	十億台キロ	585	673	728	727	709	708	712	723	724	718	721	730	740	748
4	1.A.4.a. 業務	第三次産業活動指数	2010年基準	85.8	93.1	97.5	103.1	99.0	99.9	100.7	102.0	103.2	102.1	103.5	103.9	105.0	106.2

（出典）1: 資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」、2: 経済産業省、3: 国土交通省「自動車燃料消費量統計年報」等、4: 経済産業省

3.2.1. レファレンスアプローチと部門別アプローチの比較

ここでは、UNFCCC インベントリ報告ガイドライン（決定24/CP.19 附属書I）の Paragraph 40 に則り、レファレンスアプローチと部門別アプローチの比較を行う。部門別アプローチの方法論については3.2.4. b) 節を参照のこと。

3.2.1.1. レファレンスアプローチの方法論

レファレンスアプローチは燃焼による CO₂排出量を一国のエネルギー供給データを用いて算定する方法である。レファレンスアプローチにより算定した CO₂排出量は、我が国の総排出量には含めず、部門別アプローチの検証目的に用いる。

レファレンスアプローチによる CO₂排出量は次式で算定した。

$$E = \sum_i [(A_i - N_i) \times GCV_i \times 10^{-3} \times EF_i \times OF_i] \times 44/12$$

- E* : 化石燃料の燃焼に伴う CO₂排出量 [t-CO₂]
- A* : みかけのエネルギー消費量 (固有単位 [t, kL, 10³×m³])
- N* : 非エネルギー利用量 (固有単位)
- GCV* : 総発熱量 (高位発熱量) [MJ/固有単位]
- EF* : 炭素排出係数 [t-C/TJ]
- OF* : 酸化係数
- i* : エネルギー源

みかけのエネルギー消費量 *A* は次式で算定した。

一次エネルギー: $A = P + IM - EX \pm SC - IB$

二次エネルギー: $A = IM - EX \pm SC - IB$

表 3-4 レファレンスアプローチ算定式各項の出所

記号	項	出所 ²
<i>P</i>	生産量	・ 資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」の国内産出 (#110000) ・ 廃棄物に限り部門別アプローチの消費量 ³
<i>IM</i>	輸入量	同統計の輸入 (#120000) + 国際バンカー油 (3.2.2. 節参照)
<i>EX</i>	輸出量	同統計の輸出 (#160000)
<i>SC</i>	供給在庫変動	同統計の供給在庫変動 (#170000)
<i>IB</i>	国際バンカー油	3.2.2. 節参照
<i>N</i>	非エネルギー利用	同統計の非エネルギー利用 (#950000) (3.2.3. 節参照)

炭素排出係数、酸化係数、高位発熱量は部門別アプローチと共通である。3.2.4. b) 節を参照のこと。

レファレンスアプローチによる算定結果の詳細は共通報告様式 (CRF) 表 1.A(b)に示している。同表の燃料種と「総合エネルギー統計」の燃料種の対応関係を別添 4 に掲載しているので参照のこと。

○ CRF 報告値と IEA 報告値の相違点

日本が共通報告様式 (CRF) にて報告しているエネルギー需給データと、国際エネルギー機関 (IEA) にて報告しているエネルギー需給データに相違が生じているものがある。その相違や理由について詳細を別添 4 (A4.1) に掲載しているので参照のこと。

3.2.1.2. エネルギー消費量の差異について

1990~2018 年度におけるエネルギー消費量の差異⁴の変動幅は、-1.79% (2012 年度) ~ +1.76% (2004 年度) となっている。

² # から始まる数字は「総合エネルギー統計」(エネルギーバランス表) の対応する部門 (行) 番号を示す。

³ 2018 年提出インベントリの対日審査における勧告 (FCCC/ARR/2018/JPN E.11) への対応

⁴ 差異 = [(レファレンスアプローチ) - (部門別アプローチ)] / (部門別アプローチ)

なお、エネルギーとして利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却のエネルギー消費量は、国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドラインに従い、部門別アプローチに報告している。

また、2004年度の石炭系燃料（固体燃料）において大きな差異（+10.63%）が生じている。これは、2004年度の製造業の原料炭（\$0110⁵）の消費側の在庫が増加したため、供給側から算定するレファレンスアプローチと消費側から算定する部門別アプローチとの間で大きな差異が生じたことを意味する。さらに、2008年度の石炭系燃料（固体燃料）においても大きな差異（+6.82%）が生じているが、これも2004年度と同様に製造業の輸入一般炭（\$0121）の在庫が増加したためである。なお、ここで言う在庫変動は、エネルギー供給部門における在庫変動（供給在庫変動）ではなく、エネルギー転換部門およびエネルギー消費部門における在庫変動（転換・消費在庫変動）であることに留意されたい。

3.2.1.3. CO₂排出量の差異について

1990～2018年度におけるCO₂排出量の差異の変動幅は、-0.74%（1990年度）～+3.83%（2004年度）となっている。

なお、エネルギーとして利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却からのCO₂排出量は、2006年IPCCガイドラインに従い、廃棄物の焼却（カテゴリー5.C.）ではなく、燃料の燃焼（カテゴリー1.A.）にて報告している。

また、石炭系燃料（固体燃料）の2004年度、2008年度の差異が大きく、それぞれ+9.94%、+6.24%となり、2005年度、2009年度の差異が小さく（それぞれ+2.05%、-1.92%）なっているが、これは先に述べたエネルギー消費量の差異と同様の理由によるものである。

表 3-5 エネルギー消費量の比較⁶

[PJ]	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
レファレンスアプローチ														
液体燃料	9,526	10,132	9,442	8,919	7,125	7,179	7,531	7,640	7,395	6,811	6,501	6,285	6,196	5,847
固体燃料	3,285	3,602	4,179	4,763	4,385	4,979	4,653	4,864	5,284	5,080	5,137	5,022	5,024	4,927
気体燃料	2,042	2,465	3,050	3,275	3,762	3,979	4,665	4,854	4,882	4,948	4,646	4,718	4,686	4,499
その他化石燃料	281	318	373	457	442	450	450	471	461	466	462	494	505	504
泥炭	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
合計	15,135	16,517	17,045	17,415	15,714	16,587	17,298	17,829	18,022	17,304	16,745	16,519	16,411	15,778
部門別アプローチ														
液体燃料	9,459	9,973	9,451	8,949	7,180	7,261	7,704	7,850	7,463	6,839	6,544	6,308	6,139	5,798
固体燃料	3,368	3,597	3,986	4,638	4,447	4,819	4,660	4,878	5,222	5,119	5,049	4,956	4,981	4,832
気体燃料	2,209	2,667	3,226	3,355	3,883	4,093	4,772	4,954	4,939	4,981	4,744	4,850	4,731	4,532
その他化石燃料	281	318	373	457	442	450	450	471	461	466	462	494	505	504
泥炭	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
合計	15,318	16,555	17,035	17,399	15,952	16,624	17,586	18,153	18,085	17,405	16,800	16,608	16,356	15,665
差異 (%)														
液体燃料	0.71%	1.60%	-0.09%	-0.33%	-0.77%	-1.13%	-2.25%	-2.68%	-0.91%	-0.40%	-0.66%	-0.37%	0.93%	0.85%
固体燃料	-2.46%	0.15%	4.86%	2.70%	-1.39%	3.32%	-0.17%	-0.29%	1.19%	-0.77%	1.73%	1.34%	0.86%	1.97%
気体燃料	-7.56%	-7.58%	-5.43%	-2.38%	-3.12%	-2.80%	-2.24%	-2.01%	-1.16%	-0.67%	-2.08%	-2.72%	-0.96%	-0.72%
その他化石燃料	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
泥炭	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
合計	-1.20%	-0.23%	0.06%	0.09%	-1.49%	-0.22%	-1.64%	-1.79%	-0.35%	-0.58%	-0.32%	-0.54%	0.33%	0.72%

⁵ \$ から始まる数字は「総合エネルギー統計」（エネルギーバランス表）の対応するエネルギー源（列）番号を示す。

⁶ 特記なき限り、本章において、固体燃料は石炭及び石炭製品（石炭ガスを含む。）、液体燃料は原油及び石油製品（LPG等を含む。）、気体燃料は天然ガス（LNGを含む。）及び都市ガスを意味する。（2006年IPCCガイドライン Vol.2, Table 1.1 を参照）

表 3-6 CO₂排出量の比較

[Mt-CO ₂]	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
レファレンスアプローチ														
液体燃料	659.9	701.9	656.2	621.1	497.6	501.8	523.6	532.9	512.2	472.1	450.1	434.6	428.9	404.2
固体燃料	295.7	323.7	377.9	431.1	396.8	450.8	420.8	439.9	474.5	457.3	462.1	451.1	450.8	440.8
気体燃料	104.4	126.1	155.9	167.4	192.4	203.5	238.6	248.4	249.9	253.2	237.8	241.5	239.9	228.9
その他化石燃料	10.9	12.4	15.2	17.1	15.6	15.9	16.0	17.1	16.7	16.3	16.8	17.6	18.2	18.0
泥炭	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
合計	1,071	1,164	1,205	1,237	1,102	1,172	1,199	1,238	1,253	1,199	1,167	1,145	1,138	1,092
セクター別アプローチ														
液体燃料	644.3	677.4	640.7	606.1	483.8	488.9	520.3	530.8	508.5	464.7	444.0	428.3	415.8	392.5
固体燃料	309.5	327.1	364.1	422.4	404.6	438.5	423.2	442.8	473.7	465.1	458.8	449.6	451.6	435.8
気体燃料	114.2	137.9	166.1	172.4	199.1	209.9	244.7	254.1	253.4	255.5	243.4	248.8	242.8	231.2
その他化石燃料	10.9	12.4	15.2	17.1	15.6	15.9	16.0	17.1	16.7	16.3	16.8	17.6	18.2	18.0
泥炭	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
合計	1,079	1,155	1,186	1,218	1,103	1,153	1,204	1,245	1,252	1,202	1,163	1,144	1,128	1,077
差異 (%)														
液体燃料	2.42%	3.62%	2.43%	2.47%	2.86%	2.64%	0.62%	0.40%	0.74%	1.58%	1.38%	1.48%	3.16%	2.97%
固体燃料	-4.47%	-1.05%	3.79%	2.05%	-1.92%	2.79%	-0.58%	-0.65%	0.17%	-1.70%	0.72%	0.34%	-0.18%	1.15%
気体燃料	-8.56%	-8.61%	-6.11%	-2.89%	-3.39%	-3.06%	-2.48%	-2.24%	-1.39%	-0.92%	-2.29%	-2.93%	-1.20%	-0.99%
その他化石燃料	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
泥炭	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
合計	-0.74%	0.80%	1.62%	1.53%	-0.06%	1.62%	-0.44%	-0.52%	0.08%	-0.24%	0.33%	0.05%	0.83%	1.33%

3.2.1.4. エネルギー消費量の差異及びCO₂排出量の差異の比較

エネルギー消費量の差異とCO₂排出量の差異は概ね同じ傾向を示している。

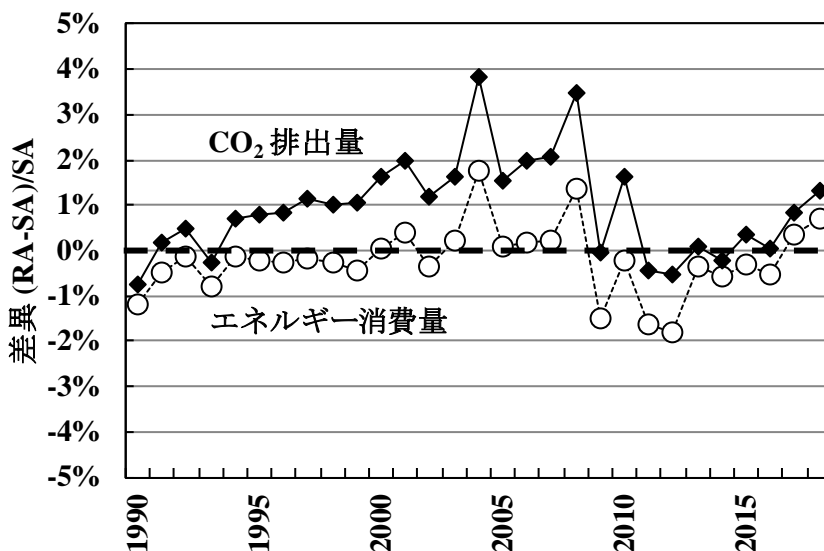


図 3-1 エネルギー消費量の差異及びCO₂排出量の差異の推移

3.2.1.5. レファレンスアプローチと部門別アプローチの差異の原因について

わが国のインベントリで、レファレンスアプローチと部門別アプローチのエネルギー消費量、CO₂排出量に差異が生じる主な原因は、インベントリの作成に用いられるエネルギーバランス表「総合エネルギー統計」のエネルギー転換部門において控除される非エネルギー利

用量の差である。

1) レファレンスアプローチの計算で十分に考慮されないもの

わが国のレファレンスアプローチの現計算では、国内に供給されたエネルギー量のうち非燃焼用途を除いた量が全て燃焼されたと仮定して計算しているが、実際には燃焼されずに備蓄されている量があり、その積み増し、取り崩しがレファレンスアプローチには反映されない。

【他転換増減（#289000）】

石油精製などのエネルギー転換部門においては、自らが輸入により受け入れたり、精製により生産したりしたエネルギー以外に、既に出荷した製品の消費・販売部門からの返品、他者からの少量の副生エネルギー源の引取、工場・事業者の製品タンクの新設・廃止による在庫積増・払出、事故・火災による減減などの諸要因により、エネルギー源の出荷量・払出量が生産量・受入量と一致しないことがある。

当該部門には、エネルギー転換部門における、消費・販売部門からの返品、製造業等における副産エネルギー源の受入、備蓄の増減などによるエネルギー源の出荷・払出量の増減が表現されているが、レファレンスアプローチではこの増減が考慮されていない。

【転換・消費在庫変動（#350000）】

当該部門には、エネルギー転換部門や最終エネルギー消費部門における在庫の積み増し、取り崩しの量が表現されているが、レファレンスアプローチではこの増減が考慮されていない。

【その他の要因】

レファレンスアプローチの計算では過度に複雑にならないように総量に対して微々たる排出源は省略している。例えば、2ストロークエンジンに用いられる潤滑油からの排出はレファレンスアプローチの計算では考慮していない。

2) 調査データの性質上避けられないもの

【一次供給側統計誤差（#401000）】

統計誤差には本来各種統計調査の段階で本質的に含まれている誤差（本源誤差）及び供給・転換・消費に関する各統計相互間の不整合であってその帰属を推計することが困難であるもの（相対誤差）が存在する。この誤差のため、国内供給、転換、最終エネルギー消費に不整合量が生じ、両アプローチの差異として報告される。

3) 投入側と産出側のエネルギー・炭素収支に差があるもの

【「石炭品種振替（#211000）」、「石油品種振替（#221000）」、「石炭製品二次品種振替（#281000）」、「石油製品二次品種振替（#282000）」】

当該部門は、エネルギー転換であって、コークス製造（#212000）～鉄鋼系ガス生成（#215000）、石油精製（#222000）～地域熱供給（#270000）のいずれにも属さないエネルギー転換や、混合・順湿などの簡単な操作のみで石炭や石油製品の品種が変更されるものがエネルギー転換として表現されている。炭素重量は品種振替、転換前後で変化しないと考えられるが、品種振替等に伴い、対応する発熱量当たりの炭素含有量が変化することにより、統計上品種振替、転換前後で炭素重量が変化する場合がある。この差分が両アプローチの差の原因となる。

4) 異なる燃料種に転換されるもの

【一般ガス製造 (#231000)】

当該部門は、都市ガスの製造に伴うエネルギー転換を表現している。都市ガスは液化天然ガス (LNG) 等の気体燃料だけでなく液化石油ガス (LPG) やコークス炉ガス等の液体、固体燃料も原材料として用いられる。すなわち、一部の液体、固体燃料が気体燃料へ転換されているが、レファレンスアプローチではこれが考慮されていない。したがって、気体燃料に関しては部門別アプローチによる排出量がレファレンスアプローチの排出量に比べて大きくなり、液体、固体燃料に関しては部門別アプローチの方がレファレンスアプローチより小さくなる傾向にある。ただし、当該部門は両アプローチによる合計 CO₂排出量の差異には影響を与えない。

3.2.2. 国際バンカー油

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、貿易や海外渡航で利用される国際航空や国際海運から排出される温室効果ガスを扱う。

なお、国際バンカー油からの排出は、UNFCCC インベントリ報告ガイドライン及び2006年 IPCC ガイドラインに従い我が国の総排出量には含めず、CRF の Memo Item の欄で報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源からの CO₂、CH₄、N₂O 排出については、ボンド扱いの各燃料種の消費量に排出係数を乗じて、排出量の算定を行った。

■ 排出係数

【CO₂】

CO₂の排出係数については、1.A.1 における燃料の燃焼(CO₂)と同じ排出係数を用いた(3.2.4. b) 節を参照)。

2012 年及び 2013 年提出インベントリの対日審査 (FCCC/ARR/2012/JPN 及び FCCC/ARR/2013/JPN) において、わが国独自のジェット燃料油の炭素排出係数 (18.3 t-C/TJ) が国家温室効果ガスインベントリのための 1996 年改訂 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (18.5 t-C/TJ (高位発熱量換算)⁷⁾ より低いと専門家審査チーム (ERT) から指摘され、追加情報を提供するよう勧告された。

わが国のジェット燃料の炭素排出係数は実測調査より得られたものである。加えて、2006 年 IPCC ガイドライン Table 1.4 によれば、ジェット燃料のデフォルト排出係数の 95%信頼区間は 18.1-19.3 t-C/TJ (高位発熱量換算) であり、わが国の排出係数はこの範囲内にある。したがって、わが国独自の排出係数を採用することはデフォルト値と比較して適切な値であると考えている。

【CH₄、N₂O】

CH₄、N₂O の排出係数については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値を採用した。

表 3-8 国際バンカー油起源の CH₄、N₂O 排出係数

輸送機関	燃料種	CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ /TJ(NCV)]	N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O/TJ(NCV)]
航空機	ジェット燃料油	0.5 ¹⁾	2 ¹⁾
船舶	A 重油、B 重油、C 重油、軽油、灯油	7 ²⁾	2 ²⁾

(注)

1) 2006 年 IPCC ガイドライン Vol.2 Table 3.6.5

2) 同 Table 3.5.3。2006 年 IPCC ガイドライン Vol.3 page 5.7 によれば、潤滑油からの CH₄、N₂O 排出は、CO₂排出と比較して非常に小さく、排出量の算定上は無視できるとされていることから、排出量を算定していない。

■ 活動量

当該排出源からの CO₂、CH₄、N₂O 排出については、経済産業省「資源・エネルギー統計年報 (旧：エネルギー生産・需給統計年報)」に示された「ボンド輸入」と「ボンド輸出」の

⁷⁾ 2006 年 IPCC ガイドラインでもこの値がデフォルト値となっている。

合計値を用いた。

図 3-2 の A、B は、それぞれ「資源・エネルギー統計年報（旧：エネルギー生産・需給統計年報）」のボンド輸出、ボンド輸入の項に計上される量に対応している。A と B の合計である C を当該排出源の活動量とした。この量は、国際航空、外航海運のための燃料の日本における販売量にほぼ相当すると考えられる。

ジェット燃料油は航空機、A 重油、B 重油、C 重油、軽油、灯油、潤滑油は船舶での利用と仮定した。なお、外航船舶の推進燃料として用いられるのは重油のみで、軽油、灯油は外航船における自家発電の燃料（暖房等）に使用されている。潤滑油については、油種別消費量が不明のため安全側に見て全量が使用中に酸化されるとみなした。

【CO₂】

CO₂の活動量については、「資源・エネルギー統計年報（旧：エネルギー生産・需給統計年報）」に示された「kL」ベースの消費量を、「総合エネルギー統計」に示された実質発熱量を用いて「J」ベース（高位発熱量）に換算した。

【CH₄、N₂O】

CH₄、N₂O の活動量については、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト排出係数が低位発熱量ベースで示されているため、高位発熱量換算の燃料消費量に換算係数を乗じて低位発熱量に換算した。

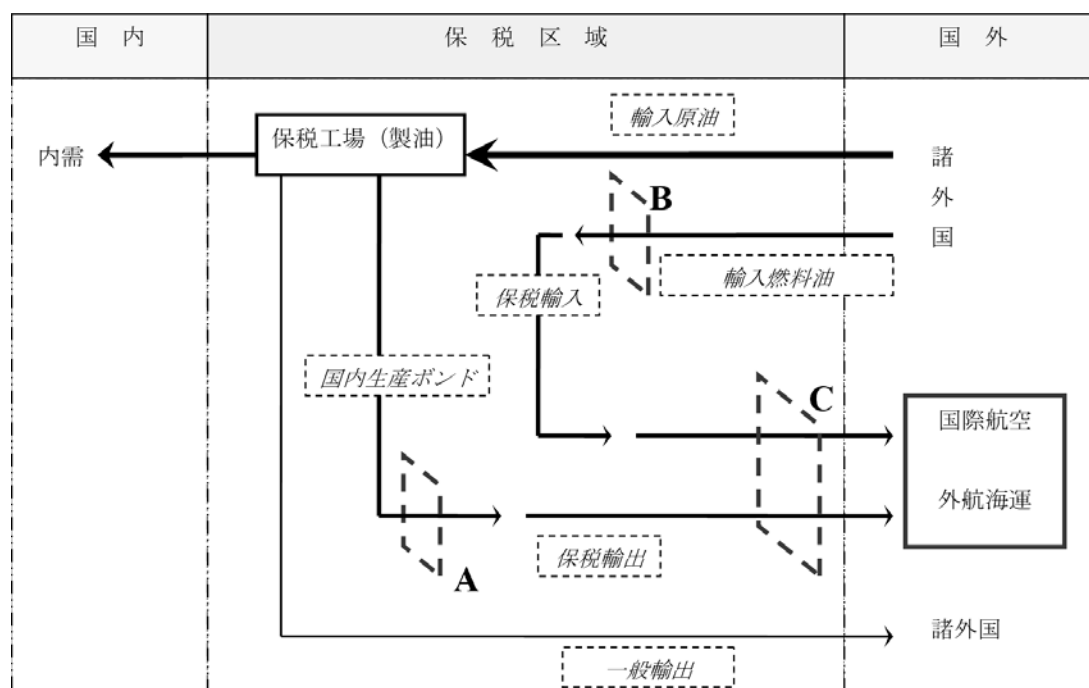


図 3-2 国際バンカー油の活動量

■ 用語

保税ジェット燃料油（ボンドジェット燃料油）

国際線に就航する航空機（邦機、外機）については、関税法上では外国往来機とみなされ、その消費する燃料は、所定の手続を経て関税の免除が受けられる。この適用により、国内製油所で輸入原油から精製された燃料であれば、原油輸入関税と石油石炭税が免税となる。また、製品輸入された燃料であれば製品輸入関税が免税となる。これらを保税ジェット燃料と呼ぶ。

保税重油（ボンド重油）

日本と諸外国を往来する外航船舶については、関税法上では外国貿易船とみなされ、その大部分が日本の領域外で消費されるため、関税と石油石炭税が免除されている。これらを保税重油と呼ぶ。

保税輸出（ボンド輸出）

国際線に就航する航空機（邦機、外機）及び外国航路に就航する船舶（邦船、外船）などに給油される燃料需要を保税需要といい、ジェット燃料油が航空機に、C 重油等が船舶に積み込まれており、その保税需要のうち、原油から生産された製品が供給されるものは、経済産業省統計において、保税輸出に計上される。

保税輸入（ボンド to ボンド）

海外から製品を輸入し保税地域に陸揚げし、国内に通関せずに保税のままに供給するものは、経済産業省統計において、保税輸入に計上される。

3.2.3. 燃料の非エネルギー利用分について

燃料の燃焼に伴う温室効果ガスの排出量（1.A.）の算定において活動量として使用している「総合エネルギー統計」の最終エネルギー消費量（#500000）には、燃焼・酸化などを伴わない原材料等として使用された燃料のエネルギー量も含まれているため、排出量算定においては、そのようなエネルギー量が計上されている非エネルギー利用部門（#950000）におけるエネルギー量を、最終エネルギー消費量から控除して活動量として使用している。

この非エネルギー利用部門には、「総合エネルギー統計」の出典となっている経済産業省「石油等消費動態統計年報」などの公的統計において燃料が非エネルギー利用されたことが確認できる量、及び最初から非エネルギー利用を目的として製造された量が計上されている（ただし、公的統計においてエネルギー利用されたことが確認されている量は含まない）。

燃料の非エネルギー利用分については共通報告様式（CRF）表 1.A(d)の“Fuel quantity for NEU”及び“Carbon excluded”列に掲載している。同表の燃料種と「総合エネルギー統計」の燃料種の対応関係を別添 4 に掲載しているので参照のこと。

製品の原料等に非エネルギー利用された燃料が、製品の製造・使用・廃棄等のいずれかの過程で酸化・燃焼されることに伴う CO₂ 排出量は、表 3-9 に示す通り他の分野にて別途報告している（詳細は各章参照）。その排出量は CRF 表 1.A(d)の“Reported CO₂ emissions”列に報告している。

なお、日本における鉄鋼及び非鉄金属製造プロセスからの排出については、エネルギー分野（1.A）で報告すべき燃料の燃焼に由来する排出量と、工業プロセス及び製品の使用分野（2.C）で報告すべき還元剤に由来する排出量があるが、両者を分離することなく、鉄鋼及び非鉄金属製造プロセス全体からの排出を包括的に捉える方が排出量の正確性の観点や二重計上、把握漏れを防ぐ観点からも最適であると考え、本エネルギー分野（1.A）にてまとめて報告する。具体的な製造プロセスと区分は表 3-10 のとおり。

表 3-9 原料等に非エネルギー利用される燃料の CO₂排出量別報告

CO ₂ の排出を伴う過程	CRF 区分	原料等に非エネルギー利 用される燃料の種類	排出係数	
				発熱量
アンモニア製造	2.B.1	ナフサ	表 3-11 参照	表 3-20 参照
		液化石油ガス (LPG) (2002 年度まで)		
		製油所ガス (オフガス) (2011 年度まで)		
		国産天然ガス		
		石炭 (一般炭・輸入炭)		
		オイルコークス		
		輸入天然ガス (LNG) コークス炉ガス (COG) (2001 年度まで)		
シリコンカーバイド製造	2.B.5.a	オイルコークス	2.3 [t-CO ₂ /t] (オイルコークス消費量当たり)	
カルシウム カーバイド製造	2.B.5.b	コークス	生産時還元剤起源: 1.09 [t-CO ₂ /t] (2008 年度以降秘匿情報)、使用時: 1.10 [t-CO ₂ /t] (いずれもカルシウムカーバイド生産量当たり係数)	
二酸化チタン製造	2.B.6	オイルコークス 等	ルチル型二酸化チタン: 秘匿情報 合成ルチル: 1.43 [t-CO ₂ /t] (生産量当たり)	
メタノール製造	2.B.8.a	天然ガス(1995 年度まで)	0.67 [t-CO ₂ /t] (メタノール生産量当たり)	
エチレン製造	2.B.8.b	ナフサ LPG 等	秘匿情報	
カーボンブラック製造	2.B.8.f	コールタール 等	2.06 [t-CO ₂ /t] (カーボンブラック生産量当たり)	
無水マレイン酸製造	2.B.8.g	LPG	1.65 [t-CO ₂ /t] (n-ブタン法により製造された無水マレイン酸生産量当たり)	
水素製造	2.B.8.g	天然ガス 等	日本産業・医療ガス協会加盟企業調べ	
全損型以外の自動車・ 船舶エンジン油 ^り	2.D.1	潤滑油	表 3-11 参照	
パラフィンろうの使用	2.D.2	他重質石油製品	表 3-11 参照	

(注)

- 1) 全損型の自動車・船舶エンジン油からの CO₂排出量は 1.A.3「運輸」に報告される。
- 2) 非エネルギー利用される燃料からの CO₂排出には、化石燃料由来の廃棄物の焼却・分解に伴う排出や、化石燃料由来の化学物質が別の化学物質の原料として使用される際の排出もある。これらの CO₂排出は、1.A の Other fossil fuels、2.D.3、2.B.8、2.H.2、5.C、5.E に報告されている。しかし、2006 年 IPCC ガイドライン Vol.3, page 1.16 に沿って、本表及び CRF 表 1.A(d) の Reported CO₂ emissions 欄には、これらの排出は含まない。

表 3-10 鉄鋼及び非鉄金属製造プロセスからの CO₂排出量の報告区分

CO ₂ の排出を伴う過程	還元剤の酸化等により CO ₂ を発生する燃料の種類	IPCC ガイドライン 上の区分	我が国での報告区分
鋼製造、銑鉄製造、直接還元鉄製造、 焼結鉱製造、ペレット製造	コークス、吹込用原料炭、 廃プラスチック類、コーク ス炉ガス、高炉ガス	2.C.1	1.A.2.a (鉄鋼)
フェロアロイ製造	一般炭、コークス	2.C.2	1.A.2.a (鉄鋼)
アルミニウム製造	コークス (陽極ペーストの主原料)	2.C.3	1.A.2.f (窯業土石)
鉛製造	コークス	2.C.5	1.A.2.b (非鉄金属)
亜鉛製造	コークス	2.C.6	1.A.2.b (非鉄金属)

3.2.4. エネルギー産業 (1.A.1) における CO₂の排出

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、発電及び熱供給 (1.A.1.a)、石油精製 (1.A.1.b)、固体燃料製造及びその

他エネルギー産業（1.A.1.c）におけるエネルギー転換に伴う CO₂排出を扱う。

2018年度における当該カテゴリからの CO₂排出量は 472,488 kt であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF を除く）の 38.1%を占めている。うち「1.A.1.a 発電及び熱供給」からの排出が 88.5%と、当該カテゴリで最も多くを占めている。

1.A.1.c「固体燃料製造及びその他エネルギー産業」（Manufacture of solid fuels and other energy industries）における固体燃料からの CO₂排出量の見かけの排出係数⁸は、石炭製品製造部門の固体燃料の転換における炭素バランスの変動によって上下している。この見かけの年次変動は、コークス用原料炭及びコークス、そしてその他石炭製品間のマスバランス、エネルギーバランス及び炭素バランスに起因している。また、統計誤差やプロセス上では見えてこない貯蔵あるいは自然発生的な入出力のアンバランスに起因することもある。

b) 方法論

■ 算定方法

わが国独自の排出係数が得られることから、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol.2、page 1.9、Fig.1.2）に従い、Tier 2 部門別アプローチ（Sectoral Approach）法を用いて排出量の算定を行った。

$$E = \sum_{ij} [(A_{ij} - N_{ij}) \times GCV_i \times 10^{-3} \times EF_i \times OF_i] \times 44/12$$

<i>E</i>	: 化石燃料の燃焼に伴う CO ₂ 排出量 [t-CO ₂]
<i>A</i>	: エネルギー消費量（固有単位 [t, kL, 10 ³ ×m ³]
<i>N</i>	: 非エネルギー利用量（固有単位）
<i>GCV</i>	: 高位発熱量 [MJ/固有単位]
<i>EF</i>	: 炭素排出係数 [t-C/TJ]
<i>OF</i>	: 酸化係数
<i>i</i>	: エネルギー源
<i>j</i>	: 部門

2006年 IPCC ガイドラインに従い、「エネルギーとして利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出」に該当する熱量と排出量を、燃料の燃焼（1.A.）の「その他化石燃料（other fossil fuels）」及び「バイオマス（biomass）」に報告している。

エネルギー利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出量の算定には、2006年 IPCC ガイドラインに従い、廃棄物の焼却（カテゴリ5.C.）で用いる排出係数や算定方法を適用している。詳細な算定方法は第7章を参照のこと。

バイオマスからの CO₂排出は、2006年 IPCC ガイドラインに従い、我が国の総排出量には含まず、CRFに参考値として報告している。「総合エネルギー統計」では、バイオ燃料消費量がガソリンと軽油の消費量に含まれているが、ガソリンと軽油の発熱量、炭素排出係数を調整することでバイオ燃料由来の CO₂排出量が化石燃料由来として報告されないようにしている。

2004年度から2007年度、2016年度以降において、石油精製工場で発生した CO₂の回収・貯留が実施された。CO₂の回収量を CRF table 1.A(a)の「1.A.1.b 石油精製」の「液体燃料」の「CO₂ amount captured」に報告し、その分を上式で求めた排出量から控除している。詳細は 3.4.4. 節を参照のこと。

■ 排出係数

○ 炭素排出係数

炭素排出係数は、全て総発熱量（高位発熱量）当たりの炭素含有量で表される値を用いて

⁸ Implied emission factor (IEF)。共通報告様式（CRF）に記載される排出量を CRF の活動量で割り戻して求めた指標。

おり、概ね日本独自の値である。

炭素排出係数は、(a) 高炉ガス、都市ガス（一般ガス）以外のエネルギー源、(b) 高炉ガス、(c) 都市ガス（一般ガス）の3つに分けて設定している。

エネルギー源別炭素排出係数を表 3-11 に示す。

表 3-11 エネルギー源別炭素排出係数（単位：t-C/TJ、高位発熱量ベース）

エネルギー源		コード ¹⁾	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
固体燃料	石炭	原料炭	\$0110	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.6	24.6	24.6	24.6	24.6	
		コークス用原料炭	\$0111	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.4	24.4	24.4	24.4	24.4	24.5
		吹込用原料炭	\$0112	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	25.1	25.1	25.1	25.1	25.1	25.1
		輸入一般炭	\$0121	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.4	24.4	24.4	24.4	24.4	24.3
		汎用輸入一般炭	\$0122	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.4	24.4	24.4	24.4	24.4	24.3
		発電用輸入一般炭	\$0123	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.7	24.4	24.4	24.4	24.4	24.4	24.3
		国産一般炭	\$0124	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	23.7	23.7	23.7	23.7	23.7	24.2
	無煙炭	\$0130	25.5	25.5	25.5	25.5	25.5	25.5	25.5	25.5	25.5	25.9	25.9	25.9	25.9	25.9	
	石炭製品	コークス	\$0211	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	30.2	30.2	30.2	30.2	30.2	29.9
		コーラルター	\$0212	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9	20.9
		練豆炭	\$0213	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	25.9	25.9	25.9	25.9	25.9	25.9
		コークス炉ガス	\$0221	11.0	11.0	11.0	11.0	11.0	11.0	11.0	11.0	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9
		高炉ガス	\$0222	27.2	26.9	26.7	26.5	26.5	26.4	26.3	26.2	26.5	26.6	26.5	26.5	26.5	26.3
		転炉ガス	\$0225	38.4	38.4	38.4	38.4	38.4	38.4	38.4	38.4	41.7	41.7	41.7	41.7	41.7	42.0
		精製用原油	\$0310	19.1	19.0	19.0	19.1	19.0	19.1	19.1	19.1	19.1	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0
	原油	精製用純原油	\$0311	19.1	19.0	19.0	19.1	19.0	19.1	19.1	19.1	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0	19.0
精製用粗残油		\$0312	21.3	21.4	21.4	21.4	21.4	21.4	21.5	21.5	19.7	19.6	19.5	19.6	19.4	19.4	
発電用原油		\$0320	19.1	19.1	19.2	19.6	19.3	19.2	19.1	19.1	19.2	19.2	19.3	19.3	19.3	19.3	
瀝青質混合物		\$0321	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	
NGL・コンデンサート		\$0330	16.1	16.7	17.5	18.2	18.4	18.4	17.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.2	
精製用NGLコンデンサート		\$0331	17.4	18.1	18.0	18.3	18.4	18.4	17.3	18.4	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.2	
発電用NGLコンデンサート		\$0332	17.5	17.6	17.6	18.2	17.9	17.9	17.9	17.9	18.2	18.2	18.2	18.2	18.2	18.2	
石油化学用NGLコンデンサート		\$0333	15.6	16.2	16.8	17.6	17.9	18.0	16.9	18.2	18.3	18.2	18.2	18.3	18.2	18.2	
液体燃料		原料	純ナフサ	\$0420	18.2	18.2	18.2	18.2	18.2	18.2	18.2	18.2	18.6	18.6	18.6	18.6	18.6
			改質生成油	\$0421	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	19.3	19.3	19.3	19.3	19.3
	燃料油	ガソリン(原油由来) ²⁾	\$0431	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	
		ガソリン(バイオマス考慮) ³⁾		18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.2	18.2	18.2	18.6	18.6	18.6	18.5	18.5	
		ジェット燃料油	\$0432	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.3	18.6	18.6	18.6	18.6	18.6	
		灯油	\$0433	18.5	18.5	18.5	18.5	18.5	18.5	18.5	18.5	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	
		軽油(原油由来) ²⁾	\$0434	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	18.8	18.8	18.8	18.8	18.8		
		軽油(バイオマス考慮) ³⁾		18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	18.8	18.8	18.8	18.8		
		A重油	\$0436	18.9	18.9	18.9	18.9	18.9	18.9	18.9	18.9	19.3	19.3	19.3	19.3	19.3	
		C重油	\$0437	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	
		B重油	\$0438	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	
		一般用C重油	\$0439	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	
	発電用C重油	\$0440	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.5	19.8	19.8	19.8	19.8	19.8		
	他石油製品	潤滑油	\$0451	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.2	19.9	19.9	19.9	19.9	19.9	
		他重質石油製品	\$0452	20.8	20.8	20.8	20.8	20.8	20.8	20.8	20.8	20.4	20.4	20.4	20.4	20.4	
		オイルコークス	\$0455	25.4	25.4	25.4	25.4	25.4	25.4	25.4	25.4	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	
		電気炉ガス	\$0456	38.4	38.4	38.4	38.4	38.4	38.4	38.4	38.4	41.7	41.7	41.7	41.7	42.0	
		製油所ガス	\$0457	14.2	14.2	14.2	14.2	14.2	14.2	14.2	14.2	14.4	14.4	14.4	14.4	14.4	
		液化石油ガス(LPG)	\$0458	16.5	16.5	16.5	16.5	16.5	16.5	16.5	16.5	16.4	16.4	16.4	16.4	16.4	
輸入天然ガス(LNG)		\$0510	13.9	13.9	13.9	13.9	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0		
天然ガス	国産天然ガス	\$0520	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0		
	ガス田・随伴ガス	\$0521	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	14.0	14.0	14.0	14.0	13.9		
	炭鉱ガス	\$0522	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5	13.5		
	原油溶解ガス	\$0523	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	13.9	14.0	14.0	14.0	14.0	13.9		
	ガ都市	一般ガス	\$0610	14.4	14.4	14.2	14.1	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	
簡易ガス		\$0620	16.5	16.5	16.5	16.5	16.5	16.5	16.5	16.5	16.4	16.4	16.4	16.4	16.4		
(参考)	バイオマス	木材利用	\$N131	30.2	30.2	30.2	30.9	30.9	30.9	30.9	29.6	29.6	29.6	29.6	29.6		
		廃材利用	\$N132	30.2	30.2	30.2	30.9	30.9	30.9	30.9	29.6	29.6	29.6	29.6	29.6		
		バイオエタノール	\$N134	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.6	17.6	17.6	17.6		
		バイオディーゼル	\$N135	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.6	17.6	17.6	17.6		
		黒液直接利用	\$N136	26.8	26.8	26.8	25.6	25.6	25.6	25.6	25.6	24.9	24.9	24.9	24.9		
		バイオガス	\$N137	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	13.5	13.5	13.5	13.5		

1) 総合エネルギー統計(エネルギーバランス表)のエネルギー源別コード番号

2) レファレンスアプローチで使用。

3) 部門別アプローチで使用。

表 3-12 エネルギー源別炭素排出係数の出典・設定方法（1990～2012年度）

エネルギー源		コード	1990-2012年度		
固体燃料	石炭	原料炭	\$0110 コークス用原料炭と同一		
		コークス用原料炭	\$0111 戒能(2005)		
		吹込用原料炭	\$0112 コークス用原料炭と同一		
		輸入一般炭	\$0121 汎用輸入一般炭と同一		
		汎用輸入一般炭	\$0122 環境庁(1992)		
		発電用輸入一般炭	\$0123 汎用輸入一般炭と同一		
		国産一般炭	\$0124 環境庁(1992)		
		無煙炭	\$0130 戒能(2005)		
	石炭製品	コークス	\$0211 環境庁(1992)		
		コールタール	\$0212 戒能(2005)		
		練豆炭	\$0213 環境庁(1992)		
		コークス炉ガス	\$0221 戒能(2005)		
		高炉ガス	\$0222 総合エネルギー統計(資源エネルギー庁)の高炉・転炉における炭素収支に基づく算定値		
		転炉ガス	\$0225 戒能(2005)		
液体燃料	原油	精製用原油	\$0310 精製用純原油と同一		
		精製用純原油	\$0311 銘柄別の炭素排出係数を輸入量の構成比で加重平均		
		精製用粗残油	\$0312		
		発電用原油	\$0320 精製用原油の補間・近似式より推計		
		瀝青質混合物	\$0321 戒能(2005)		
		NGL・コンデンセート	\$0330		
		精製用NGLコンデンセート	\$0331 銘柄別の炭素排出係数を銘柄別輸入量の構成比で加重平均		
		発電用NGLコンデンセート	\$0332		
		石油化学用NGLコンデンセート	\$0333		
		石油製品	原料	純ナフサ	\$0420 環境庁(1992)
	改質生成油		\$0421 ガソリンの値		
	燃料油		ガソリン(原油由来)	\$0431	環境庁(1992)
			ガソリン(バイオマス考慮)		原油由来・バイオマス由来の炭素排出係数を国内消費量の構成比で加重平均
			ジェット燃料油	\$0432	環境庁(1992)
灯油			\$0433	環境庁(1992)	
軽油(原油由来)			\$0434	環境庁(1992)	
軽油(バイオマス考慮)				原油由来・バイオマス由来の炭素排出係数を国内消費量の構成比で加重平均	
A重油		\$0436	環境庁(1992)		
C重油		\$0437	一般用C重油と同一		
B重油		\$0438	環境庁(1992)		
一般用C重油		\$0439	環境庁(1992)		
発電用C重油	\$0440	環境庁(1992)			
他石油製品	潤滑油	\$0451	環境庁(1992)		
	他重質石油製品	\$0452	環境庁(1992)		
	オイルコークス	\$0455	環境庁(1992)		
	電気炉ガス	\$0456	転炉ガスの値		
	製油所ガス	\$0457	環境庁(1992)		
	液化石油ガス(LPG)	\$0458	プロパン・ブタン理論値を国内生産・輸入量の構成比で加重平均		
気体燃料	天然ガス	輸入天然ガス(LNG)	\$0510 産地別の炭素排出係数を国別輸入量で加重平均		
		国産天然ガス	\$0520 戒能(2005)		
		ガス田・随伴ガス	\$0521 国産天然ガスの値		
		炭鉱ガス	\$0522 環境庁(1992)		
		原油溶解ガス	\$0523 国産天然ガスの値		
	ガ都市	一般ガス	\$0610 総合エネルギー統計(資源エネルギー庁)の都市ガス製造における炭素収支に基づき算定		
		簡易ガス	\$0620 LPGの値		
(参考)	バイオマス	木材利用	\$N131 実測値(日本製紙連合会提供)		
		廃材利用	\$N132		
		バイオエタノール	\$N134 エタノールの理論炭素排出係数(ノルマル状態)		
		バイオディーゼル	\$N135		
		黒液直接利用	\$N136 実測値(日本製紙連合会提供)		
バイオガス	\$N137 メタンの理論炭素排出係数(ノルマル状態)				

表 3-13 エネルギー源別炭素排出係数の出典・設定方法（2013～2017年度）

エネルギー源		コード	2013-2017年度	
固体燃料	石炭	原料炭	\$0110	コークス用原料炭・吹込用原料炭の炭素排出係数を消費量で加重平均
		コークス用原料炭	\$0111	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均
		吹込用原料炭	\$0112	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均
		輸入一般炭	\$0121	汎用輸入一般炭と同一
		汎用輸入一般炭	\$0122	実測値(電気事業連合会提供)から算出した各サンプルの炭素排出係数を受入量で加重平均
	石炭製品	発電用輸入一般炭	\$0123	汎用輸入一般炭と同一
		国産一般炭	\$0124	実測値(電気事業連合会提供)から算出した各サンプルの炭素排出係数を受入量で加重平均
		無煙炭	\$0130	輸入一般炭の補間・近似式より推計
		コークス	\$0211	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均
		コールタール	\$0212	前回改定値を据え置き
原油	練豆炭	\$0213	輸入無煙炭の値	
	コークス炉ガス	\$0221	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により算出された炭素排出係数を単純平均	
	高炉ガス	\$0222	総合エネルギー統計(資源エネルギー庁)の高炉・転炉における炭素収支に基づき算定値	
	転炉ガス	\$0225	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により算出された炭素排出係数を単純平均	
	精製用原油	\$0310	精製用純原油と同一	
	精製用純原油	\$0311	実測値(石油連盟)により得られた銘柄別発熱量を基に原油の補間・近似式により推計した銘柄別炭素排出係数を銘柄別輸入量で加重平均	
	精製用粗残油	\$0312		
	発電用原油	\$0320	電力調査統計(資源エネルギー庁)の発熱量を基に原油の補間・近似式により推計した月別の炭素排出係数を各月の受入量で加重平均	
	瀝青質混合物	\$0321	前回改定値を据え置き	
	NGL・コンデンセート	\$0330		
液体燃料	原料	純ナフサ	\$0420	実測値(石油連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均したレギュラーガソリンの値
		改質生成油	\$0421	実測値(石油連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均したプレミアムガソリンの値
	燃料油	ガソリン(原油由来)	\$0431	実測値(石油連盟)により得られたプレミアムガソリンとレギュラーガソリンの炭素排出係数を国内向け出荷量で加重平均
				原油由来・バイオマス由来の炭素排出係数を国内消費量の構成比で加重平均
		ジェット燃料油	\$0432	実測値(石油連盟)により得られたガソリン型・灯油型の炭素排出係数を総合エネルギー統計の各最終消費量で加重平均
		灯油	\$0433	実測値(石油連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均
		軽油(原油由来)	\$0434	実測値(石油連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均
		軽油(バイオマス考慮)		原油由来・バイオマス由来の炭素排出係数を国内消費量の構成比で加重平均
		A重油	\$0436	実測値(石油連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均
		C重油	\$0437	一般用C重油と同一
B重油		\$0438	実測値(石油連盟)により得られた発熱量を基に石油製品の補間・近似式より推計	
一般用C重油		\$0439	実測値(石油連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均	
発電用C重油	\$0440	電力調査統計(資源エネルギー庁)の発熱量を基に石油製品の補間・近似式により推計		
他石油製品	潤滑油	\$0451	実測値(石油連盟)により得られた発熱量を基に石油製品の補間・近似式より推計	
	他重質石油製品	\$0452	常圧残油投入量とC重油生産量のエネルギー収支から算定した発熱量に基づき、石油製品の補間・近似式より推計	
	オイルコークス	\$0455	実測値(日本化学工業協会提供)により得られた炭素排出係数を単純平均	
	電気炉ガス	\$0456	転炉ガスの値	
	製油所ガス	\$0457	実測値(石油連盟提供)により算出された炭素排出係数を単純平均	
	液化石油ガス(LPG)	\$0458	プロパン・ブタンの理論炭素排出係数を各ガスの国内供給量で加重平均	
気体燃料	天然ガス	輸入天然ガス(LNG)	\$0510	ガス事業便覧(日本ガス協会)から算出した産地別の炭素排出係数を国別輸入量で加重平均
		国産天然ガス	\$0520	実測値(天然ガス鉱業会提供)から算出したガス田別の炭素排出係数をガス田別産出量で加重平均
		ガス田・随伴ガス	\$0521	国産天然ガスの値
		炭鉱ガス	\$0522	実測値(天然ガス鉱業会提供)から算出したガス田別の炭素排出係数をガス田別産出量で加重平均
		原油溶解ガス	\$0523	国産天然ガスの値
	ガ都	一般ガス	\$0610	総合エネルギー統計(資源エネルギー庁)の都市ガス製造における炭素収支に基づき算定
簡易ガス	\$0620	LPGの値		
(参考)	バイオマス	木材利用	\$N131	実測値(日本製紙連合会提供)により得られた炭素排出係数を単純平均
		廃材利用	\$N132	
		バイオエタノール	\$N134	エタノールの理論炭素排出係数(SATP状態)
		バイオディーゼル	\$N135	
		黒液直接利用	\$N136	実測値(日本製紙連合会提供)
		バイオガス	\$N137	メタンの理論炭素排出係数(SATP状態)

表 3-14 エネルギー源別炭素排出係数の出典・設定方法（2018年度以降）

エネルギー源		コード	2018年度以降		
固体燃料	石炭	原料炭	\$0110	コークス用原料炭・吹込用原料炭の炭素排出係数を消費量で加重平均	
		コークス用原料炭	\$0111	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均	
		吹込用原料炭	\$0112	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均	
		輸入一般炭	\$0121	汎用輸入一般炭と同一	
		汎用輸入一般炭	\$0122	実測値(電気事業連合会提供)から算出した各サンプルの炭素排出係数を受入量で加重平均	
		発電用輸入一般炭	\$0123	汎用輸入一般炭と同一	
		国産一般炭	\$0124	実測値(電気事業連合会提供)から算出した各サンプルの炭素排出係数を受入量で加重平均	
		無煙炭	\$0130	前回改定値を据え置き	
	石炭製品	コークス	\$0211	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により得られた炭素排出係数を単純平均	
		コールタール	\$0212	前回改定値を据え置き	
		練豆炭	\$0213	前回改定値を据え置き	
		コークス炉ガス	\$0221	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により算出された炭素排出係数を単純平均	
		高炉ガス	\$0222	総合エネルギー統計(資源エネルギー庁)の高炉・転炉における炭素収支に基づく算定値	
		転炉ガス	\$0225	実測値(日本鉄鋼連盟提供)により算出された炭素排出係数を単純平均	
原油	精製用原油	\$0310	精製用純原油と同一		
	精製用純原油	\$0311	実測値(石油連盟)により得られた銘柄別発熱量を基に原油の補間・近似式により推計した銘柄別炭素排出係数を銘柄別輸入量で加重平均		
	精製用粗残油	\$0312			
	発電用原油	\$0320	電力調査統計(資源エネルギー庁)の発熱量を基に原油の補間・近似式により推計した月別の炭素排出係数を各月の受入量で加重平均		
	瀝青質混合物	\$0321	前回改定値を据え置き		
	NGL・コンデンセート	\$0330			
	精製用NGLコンデンセート	\$0331	実測値(石油連盟)により得られた銘柄別発熱量を基に原油の補間・近似式により推計した銘柄別炭素排出係数を銘柄別輸入量で加重平均		
	発電用NGLコンデンセート	\$0332			
	石油化学用NGLコンデンセート	\$0333			
	液体燃料	原料	純ナフサ	\$0420	前回改定値を据え置き
改質生成油			\$0421	前回改定値を据え置き	
燃料油		ガソリン(原油由来)	\$0431	実測値(石油連盟)により得られたプレミアムガソリンとレギュラーガソリンの炭素排出係数を国内向け出荷量で加重平均	
				原油由来・バイオマス由来の炭素排出係数を国内消費量の構成比で加重平均	
		ガソリン(バイオマス考慮)			
		ジェット燃料油	\$0432	実測値(石油連盟)により得られたガソリン型・灯油型の炭素排出係数を総合エネルギー統計の各最終消費量で加重平均	
		灯油	\$0433	前回改定値を据え置き	
		軽油(原油由来)	\$0434	前回改定値を据え置き	
		軽油(バイオマス考慮)		原油由来・バイオマス由来の炭素排出係数を国内消費量の構成比で加重平均	
		A重油	\$0436	前回改定値を据え置き	
		C重油	\$0437	一般用C重油と同一	
		B重油	\$0438	前回改定値を据え置き	
一般用C重油		\$0439	前回改定値を据え置き		
発電用C重油		\$0440	電力調査統計(資源エネルギー庁)の発熱量を基に石油製品の補間・近似式により推計		
他石油製品		潤滑油	\$0451	前回改定値を据え置き	
		他重質石油製品	\$0452	常圧残油投入量とC重油生産量のエネルギー収支から算定した発熱量に基づき、石油製品の補間・近似式より推計	
		オイルコークス	\$0455	前回改定値を据え置き	
		電気炉ガス	\$0456	転炉ガスの値	
	製油所ガス	\$0457	前回改定値を据え置き		
	液化石油ガス(LPG)	\$0458	プロパン・ブタンの理論炭素排出係数を各ガスの国内供給量で加重平均		
気体燃料	天然ガス	輸入天然ガス(LNG)	\$0510	実測値(電気事業連合会、日本ガス協会)から算出した産地別の炭素排出係数を国別輸入量で加重平均	
		国産天然ガス	\$0520	実測値(天然ガス鉱業会提供)から算出したガス田別の炭素排出係数をガス田別産出量で加重平均	
		ガス田・随伴ガス	\$0521	国産天然ガスの値	
		炭鉱ガス	\$0522	前回改定値を据え置き	
		原油溶解ガス	\$0523	国産天然ガスの値	
	ガ都市	一般ガス	\$0610	総合エネルギー統計(資源エネルギー庁)の都市ガス製造における炭素収支に基づき算定	
		簡易ガス	\$0620	LPGの値	
(参考)	バイオマス	木材利用	\$N131	前回改定値を据え置き	
		廃材利用	\$N132		
		バイオエタノール	\$N134	前回改定値を据え置き	
		バイオディーゼル	\$N135		
		黒液直接利用	\$N136	前回改定値を据え置き	
バイオガス	\$N137	前回改定値を据え置き			

(a) 高炉ガス、都市ガス（一般ガス）以外のエネルギー源

高炉ガス、都市ガス（一般ガス）以外のエネルギー源における炭素排出係数については、環境庁（1992）、環境省（2002a）、戒能（2005）、戒能（2014）及び資源エネルギー庁（2020）に基づき設定した。

【2012年度までの炭素排出係数の設定方法について】

排出係数の設定にあたっては、戒能（2005）において実施された排出係数の評価分析結果を活用した。

2005年提出版インベントリまでのCO₂排出量算定に使用してきた環境庁（1992）に示されたエネルギー源別排出係数について、

- 1) 理論上限値・下限値との比較による評価分析
- 2) 1996年改訂IPCCガイドラインに示されたデフォルト値との比較による評価分析
- 3) 「総合エネルギー統計」を用いた炭素収支による群評価分析によってその妥当性を評価し、妥当性が確認された値についてはその値を使用した。

以下、1)～3)の評価分析の概要を示す。

1) 理論上限値・下限値との比較による評価分析

炭素排出係数の評価を必要とするエネルギー源の大部分は若干の不純物を含んだ炭化水素であり、純粋な炭化水素の総発熱量と炭素排出係数の間には物理化学的な対応関係が存在していることから、水素、メタン、一酸化炭素などの純粋物質の標準生成エンタルピーから理論的に算出される排出係数と評価対象の排出係数を比較することで、係数の妥当性を評価する。

2) 1996年改訂IPCCガイドラインに示されたデフォルト値との比較による評価分析

1996年改訂IPCCガイドラインデフォルト値や2006年IPCCガイドライン試算値⁹とその統計的な信頼性（不確実性）情報を利用して、エネルギー源別の炭素排出係数の妥当性を判断する。ただし、IPCCガイドラインが想定する平均的なエネルギー源の性状と、日本が固有に利用するエネルギー源の性状は必ずしも同一ではないため、数値が乖離している場合があっても当該乖離を説明する正当な根拠が存在する場合、後述する「群評価分析」などの統計的な検討・検証を加えた上で、適切な判断を行う。

3) 「総合エネルギー統計」を用いた炭素収支による群評価分析

エネルギー源別炭素排出係数のうち、石油製品、石炭製品の係数の群の一部については、「総合エネルギー統計」を用いて石油・石炭製品部門における炭素収支を分析することにより、各炭素排出係数の妥当性を評価する。

妥当性がないと判断されたものに関しては、環境省（2002a）及び2006年IPCCガイドラインに示された値を比較検証し、妥当と考えられる値を用いた。

【2013年度から2017年度の炭素排出係数の設定方法について】

2013年度から2017年度の炭素排出係数については、2013年度及び2014年度に経済産業省・環境省により実施された発熱量・炭素排出係数の設定に関する調査を通じて得られた値を設定した。

⁹ 「エネルギー源別炭素排出係数の妥当性の評価と分析」の公表時において、2006年IPCCガイドラインはまだ公表されていなかったため、その値は試算値であり、公表時には若干の変更がある。

設定方法の概要は以下のとおり。

1) 調査方法

2013年度から2014年度において、経済産業省・環境省により、関係諸団体が有する各種エネルギー源の物性値等の収集と、関係団体より提供された試料の物性値の実測等に関する調査が実施された。本調査により得られた各種エネルギー源に関する物性値を基に、戒能(2014)で示された手法などを用い、2013年度から適用する発熱量・炭素排出係数を設定した。

2) 炭素排出係数の基本的算定方法

各エネルギー源別の発熱量・炭素排出係数については、各エネルギー源の性質や精度面での優先順位等を踏まえ、「(1) 理論値からの算定」、「(2) 関係諸団体から提供された実測値及び経済産業省・環境省による実測調査結果より算定」、「(3) 他の主要エネルギー源の数値やその加重平均・回帰分析式からの推計により算定」、「(4) 現行値を継続使用」の各方法により設定した。

理論値及び実測値を用いた固体・液体・気体の各燃料における発熱量・炭素排出係数の算定方法(1),(2)の方法に該当)は下記のとおり。

・気体燃料

気体などのエネルギー源においてガスクロマトグラフィーなどにより成分組成値が実測できる場合には、メタン・プロパンなど各成分組成値に関する純物質の理論発熱量・炭素排出係数を標準生成エンタルピーから算定し、統計処理した成分組成値でこれを加重平均して発熱量・炭素排出係数を算定した。

・固体・液体燃料

固体及び純成分で加重平均できない液体のエネルギー源については、高位発熱量と炭素含有率などの物性値を直接実測し、当該結果を統計処理して発熱量・炭素排出係数を算定した。

(3)の方法については、一般炭・原油・石油製品の実測結果を基に、発熱量・炭素排出係数を密度・水分など物性値から推計する補間・近似推計式を作成し、これを用いて対象エネルギー源の発熱量・炭素排出係数を推計した。

3) 精度管理

上記により得られた標準発熱量・炭素排出係数は、現行値及び2006年IPCCガイドラインのデフォルト値との比較検証を行い、妥当性を確認した上でインベントリに適用した。

【2018年度以降の炭素排出係数の設定方法について】

2017年度から2019年度にかけて経済産業省・環境省により実施された発熱量・炭素排出係数の設定に関する調査を基に、2018年度以降の炭素排出係数を発熱量とともに改定した。なお、改定対象とする燃料種は、2013年度に発熱量・炭素排出係数の全面的な改定が行われたこと、5年程度では組成が大きく変動しない燃料種があること、及び実測調査に要するコストや作業負荷と排出量への影響とのバランス等を踏まえ、選別した。

設定方法は「1.業界団体提供データを用いた設定」「2.既存統計・文献及び推計式等を用いて設定」あるいは「3.現行値を継続使用」の3手法に分別される。このうち1.及び2.について、2013年度値設定時の推計手法を踏襲する場合は戒能(2014)を参照した。

上記により得られた発熱量・炭素排出係数の妥当性を評価するため、2013年度改定値及び2006年IPCCガイドラインデフォルト値との比較検証を行った。また、石炭製品製造・石油製品製造部門におけるエネルギー・炭素収支を確認し、上記の発熱量・炭素排出係数の設定により産出量が投入量を上回らないことを確認した。

(b) 高炉ガス

鉄鋼製造工程における高炉・転炉においては、投入される吹込用原料炭、コークスのエネルギー量・炭素量と、産出される高炉ガス、転炉ガスのエネルギー量・炭素量の収支は理論上成立していなければならない。この高炉・転炉での炭素収支を成立させるため、高炉ガス組成の不安定性を鑑み、高炉ガスの炭素排出係数については、高炉・転炉に関する炭素収支から毎年度算定する。具体的には、鉄鋼系ガス生成部門に示された高炉に投入された炭素量（投入された吹込用原料炭及びコークスに含まれる炭素量）から、転炉ガスに含まれる可燃炭素を差し引いた炭素量を高炉ガスの排出量とみなし、当該炭素量を高炉ガスの発生量で除すことで排出係数を算定する。算定式及び算定過程を以下に示す。

なお、高炉ガスの排出係数の算定は毎年行う。

$$EF_{BFG} = [(A_{coal} \times EF_{coal} + A_{coke} \times EF_{coke}) - A_{CFG} \times EF_{CFG}] / A_{BFG}$$

- EF : 炭素排出係数 [t-C/TJ]
- A : エネルギー量 [TJ]
- BFG : 高炉ガス
- $coal$: 吹込用原料炭
- $coke$: コークス
- CFG : 転炉ガス

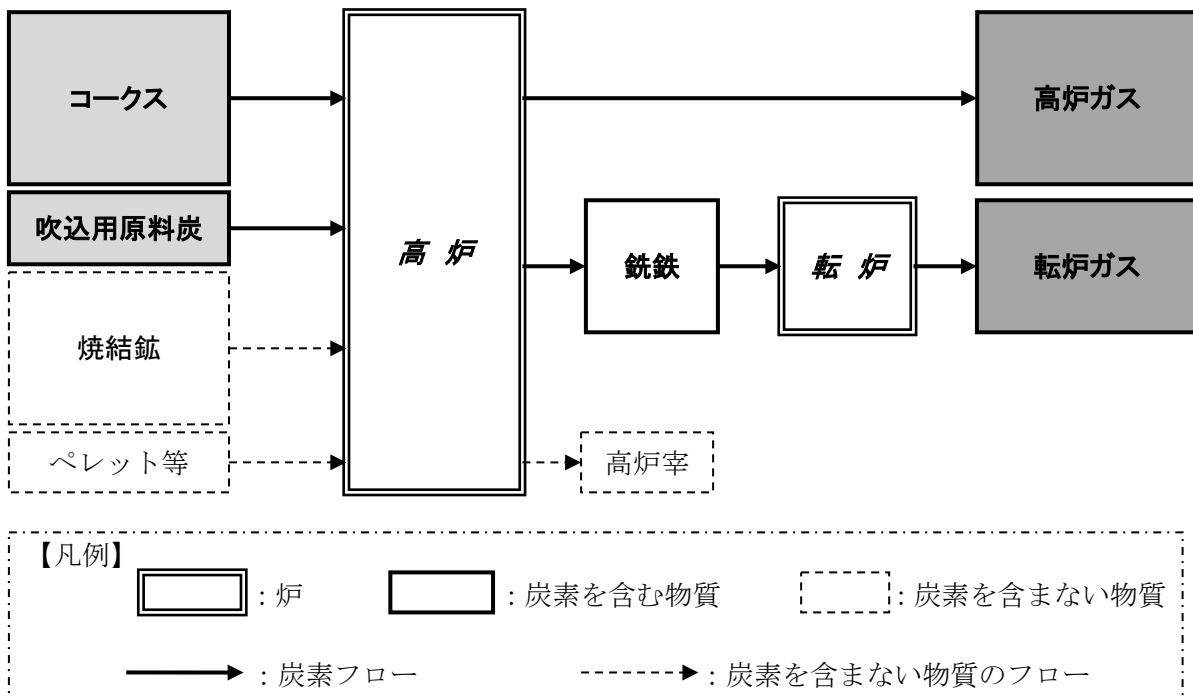


図 3-3 鉄鋼製造における炭素フローの概略図

表 3-15 高炉ガスの炭素排出係数の算定過程

鉄鋼系ガス		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	備考
Input																
吹込用原料炭	kt-C	1,650	2,619	3,351	3,014	2,576	3,444	3,669	4,019	4,401	4,283	4,180	4,206	4,250	4,094	A
コークス	kt-C	12,739	11,400	12,221	11,497	10,458	11,194	10,137	10,187	10,870	10,917	10,270	10,196	9,739	9,586	B
合計	kt-C	14,389	14,019	15,572	14,511	13,034	14,637	13,806	14,206	15,271	15,200	14,449	14,402	13,989	13,680	C: A + B
Output																
転炉ガス	kt-C	2,541	2,359	2,726	2,804	2,589	2,798	2,502	2,612	2,955	2,941	2,778	2,770	2,589	2,552	D
差	kt-C	11,848	11,660	12,846	11,707	10,444	11,839	11,304	11,594	12,316	12,260	11,671	11,632	11,400	11,127	E: C - D
Output																
高炉ガス	PJ	434.8	433.5	481.8	441.4	393.7	448.7	429.6	442.8	464.5	461.7	440.1	438.9	429.8	423.2	F
EF 高炉ガス	t-C/TJ	27.2	26.9	26.7	26.5	26.5	26.4	26.3	26.2	26.5	26.6	26.5	26.5	26.5	26.3	E/F

(c) 都市ガス

都市ガスは、一般ガス事業者が供給する一般ガスと、簡易ガス事業者が供給する簡易ガスに分けられる。

簡易ガスの炭素排出係数は、その大部分がLPG直接供給によるプロパンガスであることから、LPGと同一の値を採用する。

一般ガスの炭素排出係数については、一般ガスはその大部分が原材料を混合・空気希釈して製造されたものであることから、一般ガス製造部門における炭素収支から毎年度設定する。具体的には、一般ガスの原料として消費された炭素量（コークス炉ガス、灯油、製油所ガス、LPG、LNG、国産天然ガスに含まれる炭素量）を、一般ガスの生産量で除すことで排出係数を設定する。算定式及び算定過程を以下に示す。

なお、一般ガスの排出係数の算定は毎年行う。

$$EF_{CG} = \sum_i (A_i \times EF_i) / P_{CG}$$

- EF : 炭素排出係数 [t-C/TJ]
- A : エネルギー量 [TJ]
- P : 生産量 [TJ]
- CG : 都市ガス（一般ガス）
- i : 都市ガス原料（コークス炉ガス、灯油、製油所ガス、LPG、LNG、国産天然ガス）

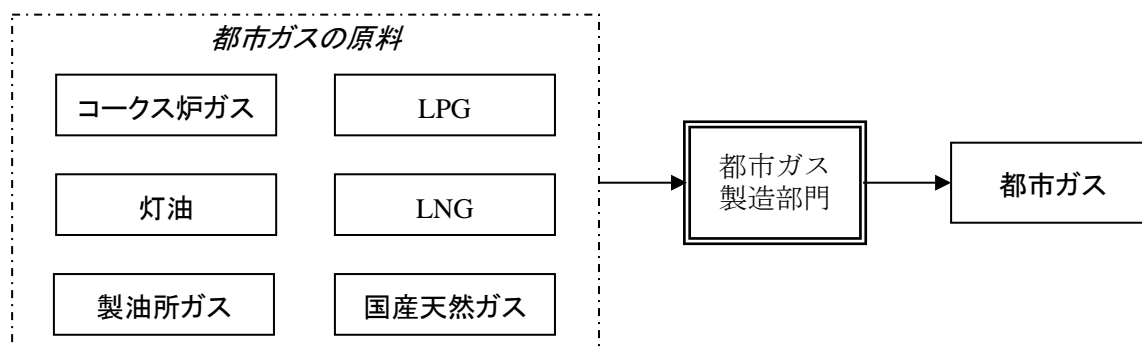


図 3-4 都市ガスの製造フロー

表 3-16 一般ガスの炭素排出係数の算定過程

一般ガス		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	備考
Input																
コークス炉ガス	kt-C	211	134	105	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	a1
灯油	kt-C	200	275	69	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	a2
製油所ガス	kt-C	186	199	186	145	94	89	83	82	67	56	37	48	43	46	a3
LPG	kt-C	1,957	2,129	1,809	1,092	706	786	869	891	930	992	818	837	947	965	a4
LNG	kt-C	6,473	9,429	12,051	17,146	19,865	21,357	21,957	22,216	21,709	21,863	21,868	22,907	23,252	22,682	a5
国産天然ガス	kt-C	551	661	848	1,190	1,768	1,603	1,635	1,557	1,498	1,479	1,435	1,415	1,347	1,187	a6
合計	kt-C	9,577	12,827	15,068	19,601	22,433	23,834	24,544	24,746	24,205	24,390	24,159	25,205	25,589	24,879	A: Σ a
Output																
一般ガス	PJ	664.7	892.3	1,061.1	1,392.0	1,600.8	1,700.3	1,750.3	1,764.1	1,724.3	1,737.3	1,722.1	1,796.5	1,822.5	1,781.9	B
EF 一般ガス	t-C/TJ	14.4	14.4	14.2	14.1	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	A/B

○ 酸化係数

燃料種別に、燃料の燃焼に伴う未燃炭素の実態について、関係業界団体、関連メーカー、専門家等への調査を行い、燃焼の実態を考慮した日本固有の酸化係数を設定した。

・ 気体燃料

気体燃料の燃焼については、発電用ボイラーにおける平成16年度のガス燃焼時の煤塵濃度測定結果がいずれもゼロであるため、定量的に完全燃焼であることを示すことができる。ヒアリングの結果においても、いずれも100%燃焼しているとの回答が得られた。以上より、気体燃料については酸化係数を1.0と設定した。

表 3-17 気体燃料の燃焼に関するデータ

燃焼状況	情報提供元	調査
完全燃焼	電気事業連合会	平成16年度のガス燃焼時の煤塵濃度測定結果

・ 液体燃料

液体燃料については、燃料に含まれる炭素ほぼ全量が燃焼していると想定できるものの、燃焼状況によっては0.5%程度の未燃損失が生じる可能性があることが指摘された。ただし、いずれも具体的な定量データを示すのは困難であったため、我が国ではきめ細かな燃焼管理、煤煙処理を実施していることを勘案し、酸化係数を1.0と設定した。

・ 固体燃料

石炭の燃焼については、燃焼条件、炉種、炭質により燃焼の状況が異なることもあり、具体的にどれだけの未燃炭素が生じているかを示す直接的な定量データの提供は困難な状況である。一方、炉で発生する未燃炭素については、ほぼ全量が石炭灰中に含まれるものと考えられる。石炭灰は有効利用または埋立処理が行われており、有効利用が行われる石炭灰のうち、セメント原料に利用されたもののように、製造過程において焼成工程を経るものについては、焼成過程で石炭灰中に含まれる未燃炭素が酸化されCO₂として大気中に放出される。

焼成工程により酸化される未燃炭素も考慮した、石炭燃焼における酸化係数は1990～2003年の平均値は有効数字3桁で0.996となる。我が国のインベントリに用いるデータの精度を考慮すると、有効数字2桁の設定が妥当であるため、3桁目の四捨五入を行い、我が国の固体燃料燃焼に係る酸化係数は1.0と設定した。

■ 活動量

本カテゴリーの活動量については、「総合エネルギー統計」に示されたエネルギー消費量を用いている。エネルギー消費量の推移を表3-18に示す。

表 3-18 エネルギー産業（1.A.1）におけるエネルギー消費量（単位：PJ）

エネルギー源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
液体燃料	2,596	2,198	1,618	1,669	1,257	1,352	1,885	2,166	1,866	1,465	1,313	1,170	1,034	899
固体燃料	1,235	1,542	1,951	2,586	2,569	2,757	2,655	2,835	3,120	3,056	3,038	3,039	3,096	2,924
気体燃料	1,564	1,786	2,167	2,021	2,451	2,624	3,266	3,475	3,488	3,552	3,300	3,394	3,218	3,038
その他化石燃料	IE	IE	0	5	5	5	5	5	0	1	1	1	1	1
バイオマス	0	0	0	26	23	28	28	28	32	33	33	54	89	102
合計	5,395	5,526	5,737	6,308	6,304	6,767	7,839	8,511	8,506	8,107	7,685	7,658	7,439	6,964

(注) 燃料種区分は共通報告様式（CRF）に準じている。

「総合エネルギー統計」は、日本国内に供給された石炭・石油・天然ガスなどのエネルギー源が、どのような形態に転換され、日本国内においてどの部門によりどのような形で消費されたのかを捉え、国内のエネルギー需給の状況を表した統計（エネルギーバランス表）である。この統計の目的は、日本のエネルギー需給の概要を示し、エネルギー・環境政策の企

画立案やその効果の実測・評価などに貢献するとともに、エネルギー需要に対する定量的な理解や情勢判断を支援するために策定するものである。

「総合エネルギー統計」は、各種エネルギー源を「列」、エネルギー供給・転換・消費部門を「行」として、国内のエネルギー需給を行列形式で表現している。具体的には、各種エネルギー源「列」においては、13の大項目区分（石炭、石炭製品、原油、石油製品、天然ガス、都市ガス、再生可能エネルギー（水力を除く）、水力発電（揚水除く）、揚水発電、未活用エネルギー、原子力発電、電力、熱）と必要な中項目以下の区分で構成されている。そして需給部門「行」の構成については、一次エネルギー供給（一次供給）、エネルギー転換（転換）、最終エネルギー消費（最終消費）の3つの大部門と必要な中部門以下の部門で構成されている。

「総合エネルギー統計」におけるエネルギー需給量の算定では、ガソリン・電力などの各エネルギー源が一律に固有単位あたりの総発熱量（高位発熱量）[MJ/kg, MJ/L, MJ/m³]で均質とし、それぞれのエネルギー源が供給・転換・消費されていると仮定している。そして各種の公的統計で把握されている固有単位での供給・転換・消費の数値に、固有単位あたりの総発熱量（高位発熱量）を乗じてエネルギー需給量を算定している。「総合エネルギー統計」の算定作業は以下の手順で行われている。

- (1) 発熱量・炭素排出係数の設定
- (2) 各種公的統計からエネルギー需給モジュールの構築
- (3) 固有単位表の作成（各種公的統計からモジュールを通して、詳細表、本表及び簡易表を作成）（t, kL, 10³×m³などの単位で表記）
- (4) エネルギー単位表の作成（ジュール単位で表記）
- (5) エネルギー起源炭素表の作成（炭素含有量で表記）

なお、「総合エネルギー統計」では、各エネルギー源の固有単位当たりの総発熱量（高位発熱量）が毎年度再計算可能なエネルギーについては毎年度公的統計から再計算を行って算定した「実質発熱量」を用いている。また、毎年度再計算することができないエネルギー源や物理的性状が安定しているエネルギー源については、直近の実測データや各種公的文献・資料などから推計された「標準発熱量」の値を用いている。

「総合エネルギー統計」（エネルギーバランス表）は下記の資源エネルギー庁のウェブサイトで1990年度から入手可能である。

http://www.enecho.meti.go.jp/statistics/total_energy/results.html#headline2

また、「総合エネルギー統計」の簡易表を別添4（A4.2）に掲載しているので参照のこと。

エネルギー産業の活動量については、「総合エネルギー統計」に示された、石炭製品製造（#210000）、石油製品製造（#220000）、ガス製造（#230000）、電気事業者が行う発電に伴うエネルギー消費量を計上している事業用発電（#240000）、熱供給事業者が行う温熱・冷熱の発生に伴う消費量を計上している地域熱供給（#270000）、及び各エネルギー産業における自家消費（石炭製品製造（#301100）、石油製品製造（#301200）、ガス製造（#301300）、事業用電力（#301400）、地域熱供給（#301500））の各部門の値を用いている。

これに加え、1990～2015年度までの電気業（#255330）における自家用発電の化石燃料消費量も、エネルギー産業に含めている。これは、2006年IPCCガイドラインでは、発電を主たる業とする事業者は発電及び熱供給（1.A.1.a）に含めることとされており、2015年度までの電気業（#255330）には主に発電を主たる業とする独立系発電事業者（IPP）が含まれているためである。なお、電力小売全面自由化を定めた改正電気事業法が2016年4月に施行されたことに伴い電気事業者の定義が変更されたため、2016年度以降はIPP等の発電を主たる業とする事業者については電気業（#255330）ではなく事業用発電（#240000）に含まれている。

「総合エネルギー統計」の部門と CRF の部門対応を表 3-19 に示す。

表 3-19 「総合エネルギー統計」とインベントリ（CRF 共通報告様式）の部門対応（1.A.1）

CRF		総合エネルギー統計	
1A1	Energy industries		
1A1a	Public electricity and heat production	事業用発電	#240000
		自家消費 事業用電力	#301400
		地域熱供給	#270000
		自家消費 地域熱供給	#301500
		自家用発電 電気業(2015まで)	#255330
1A1b	Petroleum refining	石油製品製造	#220000
		自家消費 石油製品製造	#301200
		自家用発電 石油製品	#253171
		自家用蒸気発生 石油製品	#263171
		最終エネルギー消費 石油製品製造業(除 石油製品)	#626510
		▲非エネルギー利用(石油製品)	#951540
1A1c	Manufacture of solid fuels and other energy industries	石炭製品製造	#210000
		自家消費 石炭製品製造	#301100
		自家用発電 石炭製品他	#253175
		自家用蒸気発生 石炭製品他	#263175
		最終エネルギー消費 石炭製品製造業他(除 石炭製品)	#626550
		ガス製造	#230000
		自家消費 ガス製造	#301300

(注) ▲非エネルギー利用：原料用として用いられた分を控除している。

○ 発熱量

エネルギー源別の高位発熱量は、「総合エネルギー統計」で用いられている値を使用した。エネルギー源別の高位発熱量の推移を表 3-20 に示す。「総合エネルギー統計」では、各エネルギー源の固有単位当たりの総発熱量が毎年度再計算可能なエネルギーについては、毎年度公的統計から再計算を行って算定した「実質発熱量」を用いている。また、毎年度再計算することができないエネルギー源や、物理的性状が安定しているエネルギー源については、直近の実測データや各種公的文献・資料などから推計された「標準発熱量」の値を用いている。

なお、標準発熱量は概ね 5 年に一度改定されており、これまで、2000、2005、2013、2018 年度値に対して改定が実施された。

固体燃料の高位発熱量（GCV）のトレンドは、1990 年以降減少傾向にあるが、これはコークス用原料炭と一般炭の比率の変化に起因する。1970～1990 年においては、コークスの原料として、コークス用原料炭が使用されていたが、コークス用原料炭の不足と価格上昇のため、コークスの代わりに前処理（調湿と増粘）をした一般炭を使う新しいコークス技術が開発された。同様に、PCI（吹込用原料炭）がコークス用原料炭や一般炭の混合から、前処理（微粉化）をした一般炭に変更された。これは、日本の鉄鋼製造が、経済的な理由で安い石炭から高品質のコークスを製造してきたためである。従来のコークス用原料炭は、一般炭に比べて高い炭素含有量と発熱量を有するため、新技術が徐々に導入された結果、近年の見かけの GCV が減少傾向にある。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、炭素排出係数の元データから得られる 95%信頼区間の上限値、下限値等から設定した。また、活動量の不確実性は、出典である「総合エネルギー統計」における燃料種別・部門別のエネルギー消費量の不確実性を設定することが困難であるため、1990～2017年度の固体燃料、液体燃料、気体燃料の統計誤差率（対国内供給）の標準偏差から上限値、下限値を設定した。その結果、固体燃料、液体燃料、気体燃料の燃焼による CO₂排出量の不確実性は燃料の燃焼部門全体で-4～+2%と評価された。エネルギー利用・回収を伴う廃棄物の焼却による CO₂排出量の不確実性は、7.4.3節を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

全ての時系列において一貫した算定方法を用いて排出量の算定を行っている。

炭素排出係数については、全てのエネルギー源について、全ての時系列において同一の方法にて設定を行っている。

活動量については、全ての時系列において「総合エネルギー統計」の値を使用しており、本統計は全ての時系列において一貫した方法にて作成されている。

時系列の一貫性の観点から、「総合エネルギー統計」における 1990～2015年度の自家用発電の電気業（#255330）の化石燃料消費量は発電及び熱供給（1.A.1.a）の活動量に含めている。3.2.4. b) の活動量の説明を参照のこと。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の更新に伴う活動量及び排出係数の更新により、2013～2017年度について排出量が再計算された。

2017年度の CO₂の回収量が更新された。

廃棄物分野における統計データの更新及び算定方法の改善に伴い、2005～2017年度のその他化石燃料の CO₂排出量が再計算された。詳細は 7.4.3節を参照のこと。

再計算の影響の程度については第10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

発熱量および炭素排出係数の設定作業において、オイルコークスの炭素排出係数について、我が国の実態を反映するに足る試料数が確保できなかったことから、今後十分な試料数を確保したうえで設定の検討を行う必要がある。

3.2.5. エネルギー産業（1.A.1）における CH₄ と N₂O の排出

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、発電及び熱供給（1.A.1.a）、石油精製（1.A.1.b）、固体燃料製造及びその他エネルギー産業（1.A.1.c）におけるエネルギー転換に伴う CH₄、N₂O 排出を扱う。

CH₄は、化石燃料の不完全燃焼により発生する。従って、不完全燃焼を起こさないように燃焼管理を徹底すれば、CH₄は発生しない。

N₂O は、燃料中の窒素を含む揮発成分と、燃焼によって生じた NO の反応などによって生成するため、窒素分を多く含む燃料を使用すると N₂O が発生しやすくなる。また、この生成反応の起こりやすさは温度条件に依存し、低温になるほど N₂O は発生しやすい。そのため、例えば流動床ボイラーのような、800-900 °C 程度の低温で燃焼する炉の場合、N₂O の排出が大きくなる。また、N₂O は NO_x 除去用の触媒と NO_x の接触によっても発生することがある。

わが国の温室効果ガス総排出量に対するこのカテゴリーからの排出量の寄与は小さい。その中で相対的に寄与の大きいものとして、流動床ボイラーからの N₂O 排出がある。わが国では 1990 年以降流動床ボイラーの新設が進んでおり、このカテゴリーからの排出量の増加に寄与している。1.A.1.a 「発電と熱供給」(Public electricity and heat production) における固体燃料の燃焼による N₂O の排出量が 1994-1995 年にかけて大きく増加しているが、これは 1995 年に事業用発電用の大型流動床ボイラーが稼働を開始したことにより、1995 年における固体燃料使用量が増加したためである。

コークスの製造に伴い排出される CH₄ は当該カテゴリーに報告する。コークス炉炉蓋からの漏洩ガス中の N₂O 濃度の実測結果は得られていないが、専門家意見によるとコークス炉内は通常 1,000°C 以上の還元雰囲気であり N₂O は発生しないと考えられる。

b) 方法論

■ 算定方法

○ 各種炉

本カテゴリーにおける化石燃料の燃焼に伴う CH₄、N₂O 排出量については、燃料種別、部門別、炉種別の活動量（エネルギー消費量）が利用可能であり、また我が国独自の排出係数が炉種別に設定可能であることから、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.2、page 1.9、Fig.1.2) に従い、Tier 3 法を用いて排出量を算定した。排出量の算定式を以下に示す。燃料種別、炉種別の排出係数に、燃料種別、炉種別、部門別の活動量を乗じて排出量を算定した。

$$E = \sum_{ij} (EF_{ij} \times A_{ijk})$$

E	: 化石燃料の燃焼に伴う固定発生源からの CH ₄ 、N ₂ O 排出量 [kg-CH ₄ , kg-N ₂ O]
EF_{ij}	: 燃料種 i 、炉種 j における排出係数 [kg-CH ₄ /TJ, kg-N ₂ O/TJ]
A_{ijk}	: 燃料種 i 、炉種 j 、部門 k におけるエネルギー消費量 [TJ]
i	: 燃料種
j	: 炉種
k	: 部門

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーでの燃焼に伴う CH₄、N₂O 排出については、我が国独自の排出係数が発電施設及び熱利用施設の施設別に設定可能であることから、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.2、page 1.9、Fig.1.2) に従い、Tier 3 法を用いて排出量を算定した。ただし、バイオガスは、国独自の排出係数が利用可能ではないため、Tier1 法を用いて算定した。

○ コークス製造

コークス製造に伴う CH₄ 排出については、2006 年 IPCC ガイドラインに示された手法に基づき、コークスの生産量に我が国独自の排出係数を乗じて算定した。

○ エネルギー利用・回収を伴う廃棄物の焼却

7.4.3 節を参照のこと。

■ 排出係数

○ 各種炉

表 3-21 に示す理論排ガス量（乾き）と、煙道における CH₄濃度、N₂O 濃度、O₂濃度の我が国で行った実測調査データ（表 3-22）、理論空気量、高位発熱量を用いて、以下の式より各施設の排出係数の設定を行なった。

$$EF = C_{CH_4, N_2O} \times \{G_0' + (m - 1) \times A_0\} \times MW / V_m / GCV$$

EF	: 排出係数 [kg-CH ₄ /TJ, kg-N ₂ O/TJ]
C_{CH_4, N_2O}	: 排ガス中の CH ₄ 濃度、N ₂ O 濃度 [ppm]
G_0'	: 燃焼された燃料の理論排ガス量（乾き）[m ³ N/固有単位]
A_0	: 燃焼された燃料の理論空気量 [m ³ N/固有単位]
m	: 空気比≒実際空気量/理論空気量 [-]
MW	: CH ₄ の分子量（定数）= 16 [g/mol] N ₂ O の分子量（定数）= 44 [g/mol]
V_m	: 理想気体 1 モルの標準状態での体積（定数）= 22.4 [10 ⁻³ m ³ /mol]
GCV	: 燃焼された燃料の高位発熱量 [MJ/固有単位]

ただし、空気比 m は、排ガス中 O₂濃度を用いて近似的に次式で与える。

$$m = \frac{21}{21 - C_{O_2}}$$

C_{O_2} : 排ガス中の O₂濃度 [%]

燃料種、炉種別の CH₄、N₂O 排出係数は、各施設における排出係数の値を燃料種、炉種別に区分した上で平均して設定した（表 3-23、表 3-24）。平均値を求める際には t 検定及び専門家判断により異常値を棄却し、算定を行なった。排出係数設定に用いた実測値については、環境省（2006a）を参照のこと。

【排出係数の吸気補正について】

我が国では、2005 年提出インベントリまで、固定発生源からの非 CO₂排出係数を、排出量算定方法に関する過去の検討結果（大気環境学会（1996）等）を踏まえ、排気ガス中の濃度と吸気ガス中の濃度の差を考慮して設定（吸気補正）してきた。このうち、一部の排出源については、吸気ガス中に存在する CH₄または N₂O が燃焼作用によって酸化あるいは分解され、排気ガス中の濃度が吸気ガス中の濃度よりも低くなるとの実測データを基に、排出係数を負の値としてきた。しかし、2003 年訪問審査では、正確な排出量の把握の上では吸気補正の実施を行うべきだが、国際的な比較の観点から、1996 年改訂 IPCC ガイドライン及び「温室効果ガスインベントリにおけるグッドプラクティスガイダンス及び不確実性管理報告書」（以下、GPG(2000)）において、排出量の算定には排気ガス中の CH₄または N₂O の実排出量に基づく正の排出係数を用いるべきとされており、これに従うべきとの指摘を受けた。そのため、2006 年以降提出のインベントリでは、吸気補正は行わず、排気ガス中の CH₄または N₂O の濃度の測定値をそのまま用いた排出係数を設定することとした。

表 3-21 燃料種別の理論排ガス量、理論空気量、高位発熱量

燃料種	固有単位	理論排ガス量(乾)	高位発熱量	理論空気量	備考
		$G_0^{1)}$	$GCV^{2)}$	$A_0^{1)}$	
		m ³ N/L, kg, m ³ N	kJ/L, kg, m ³ N, kWh	m ³ N/L, kg, m ³ N	
A 重油	L	8.900	39,100	9.500	a
B 重油	L	9.300	40,400	9.900	a
C 重油	L	9.500	41,700	10.100	a
軽油	L	8.800	38,200	9.400	a
灯油	L	8.400	36,700	9.100	a
原油	L	8.747	38,200	9.340	a
ナフサ	L	7.550	34,100	8.400	a
その他液体	L	9.288	37,850	9.687	b
その他液体(重質)	L	9.064	37,674	9.453	b
その他液体(軽質)	L	9.419	35,761	9.824	b
石炭(一般炭)	kg	7.210	26,600	7.800	a
コークス	kg	7.220	30,100	7.300	a
木材	kg	3.450	14,367	3.720	b
木炭	kg	7.600	30,500	7.730	c
その他固体	kg	7.000	33,141	7.000	b
都市ガス	m ³	9.850	46,047	10.949	b
COG(コークス炉ガス)	m ³	4.500	21,100	4.800	a
BFG(高炉ガス)	m ³	1.460	3,410	0.626	a
LNG(液化天然ガス)	kg	11.766	54,500	13.093	a
LPG(液化石油ガス)	kg	11.051	50,200	12.045	a
CFG(LDG)(転炉ガス)	m ³	2.200	8,410	1.500	a
製油所ガス(オフガス)	m ³	11.200	44,900	12.400	a
その他気体	m ³	4.587	28,465	4.096	b
その他気体(石油)	m ³	7.889	40,307	7.045	b
その他気体(鉄鋼)	m ³	2.812	19,097	2.511	b
その他気体(鋳業)	m ³	3.396	38,177	3.032	b
その他気体(その他)	m ³	4.839	23,400	4.321	b
パルプ廃液	kg	3.245	13,898	3.499	b
電力	kWh		3,600		a

(注)

- 1) 理論排ガス量及び理論空気量は、環境省「大気汚染物質排出量総合調査」における標準値である。ただし、都市ガス、LNG、LPGについては、成分データから試算した値を採用した。なお、都市ガスの成分については、都市ガス(13A)の成分で代表できるものとみなした。
- 2) 高位発熱量については、備考欄がaのものは「総合エネルギー統計」の標準発熱量のデータを用いたもの、備考欄がbのものは「大気汚染物質排出量総合調査」の標準値(1992年度実績ベース)を用いて設定したものである。なお、石炭(一般炭)の高位発熱量は「一般炭(輸入炭)」の高位発熱量を用いている。備考欄がcのものは、文献等を元に、2005年度の温室効果ガス排出量算定方法検討会で設定したものである。

表 3-22 排出係数の設定に用いた実測データの出典一覧

出典	
1	北海道（1991）：固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査結果報告書
2	兵庫県（1991）：固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査報告書
3	大阪市（1991）：固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査
4	北海道（1992）：固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査結果報告書
5	兵庫県（1992）：固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査報告書
6	北九州市（1992）：固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査報告書
7	兵庫県（1993）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数作成調査
8	兵庫県（1994）：固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査報告書
9	神奈川県（1995）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
10	新潟県（1995）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
11	大阪府（1995）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
12	広島県（1995）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
13	福岡県（1995）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査報告書
14	大阪市（1995）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
15	神戸市（1995）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
16	北海道（1996）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
17	石川県（1996）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
18	京都府（1996）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
19	大阪府（1996）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
20	兵庫県（1996）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
21	広島県（1996）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
22	福岡県（1996）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査報告書
23	京都府（1997）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
24	兵庫県（1997）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
25	福岡県（1997）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査報告書
26	大気環境学会（1996）：温室効果ガス排出量推計手法調査報告書－排出量推計手法－
27	大阪府（1999）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査
28	兵庫県（2000）：固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査報告書
29	財団法人エネルギー総合工学研究所（2000）：大気環境負荷低減に資する燃料の品質動向に関する調査報告書
30	環境省（1999）平成11年度温室効果ガス排出量算定方法検討会実測データ
31	電気事業連合会提供データ
32	2006年IPCCガイドライン
33	林野庁木材利用課（2015）：平成26年度木材利用推進・省エネ省CO ₂ 実証事業
34	環境省（2018）：平成29年度バイオマスボイラーからの温室効果ガス排出量の実態把握に関する調査

表 3-23 燃料種別、炉種別 CH₄排出係数 (単位: kg-CH₄/TJ、高位発熱量ベース)

エネルギー源	コード	ボイラー		工業炉										内燃機関		
		ボイラー	金属(銅、鉛及び亜鉛を除く)精錬用焼結炉	金属(鉄鋼用、非鉄金属用)ベレット焼成炉	溶鉱炉、転炉、平炉	鉄鋼・非鉄金属用	金属熱処理炉、金属鍛造炉	金属圧延加熱炉、石油加熱炉、ガス加熱炉	触媒再生塔	レンガ焼成炉、陶磁器焼成炉、その他の焼成炉	骨材乾燥炉、セメント原料乾燥炉、レンガ原料乾燥炉	その他の乾燥炉	その他の工業炉	ガスタービン	ディーゼル機関	ガス機関、ガソリン機関
石炭	原料炭	\$0110	0.13	31	1.7	NA	13	13	NA	1.5	29	6.6	13	NA	NA	NA
	コークス用原料炭	\$0111														
	吹込用原料炭	\$0112														
	輸入一般炭	\$0121														
	汎用輸入一般炭	\$0122														
	発電用輸入一般炭	\$0123														
	国産一般炭	\$0124														
無煙炭	\$0130															
石炭製品	コークス	\$0211	0.13	31	1.7	NA	13	13	0.054	1.5	29	6.6	13	NA	NA	NA
	コークス用原料炭	\$0212														
	練豆炭	\$0213														
	コークス炉ガス	\$0221														
	高炉ガス	\$0222														
転炉ガス	\$0225															
原油	精製用原油	\$0310	0.10	31	1.7	NA	0.43	0.16	NA	1.5	29	6.6	0.83	0.81	0.70	54
	発電用原油	\$0320														
	瀝青質混合物	\$0321														
	NGL・コンデンセート	\$0330														
石油製品	純ナフサ	\$0420	0.26	31	1.7	NA	0.43	0.16	NA	1.5	29	6.6	0.83	0.81	0.70	54
	改質生成油	\$0421														
	ガソリン	\$0431														
	ジェット燃料油	\$0432														
	灯油	\$0433														
	軽油	\$0434														
	A重油	\$0436														
	C重油	\$0437														
	B重油	\$0438														
	一般用C重油	\$0439														
	発電用C重油	\$0440														
	潤滑油	\$0451														
	他重質石油製品	\$0452														
	オイルコークス	\$0455														
電気炉ガス	\$0456															
製油所ガス	\$0457															
液化石油ガス(LPG)	\$0458															
天然ガス	輸入天然ガス(LNG)	\$0510	0.23	31	1.70	NA	0.43	0.16	NA	1.5	29	6.62	2.29	0.81	0.70	54
	国産天然ガス	\$0520														
	ガス田・随伴ガス	\$0521														
	炭鉱ガス	\$0522														
	原油溶解ガス	\$0523														
都市ガス	一般ガス	\$0610	0.23	31	1.7	NA	0.43	0.16	NA	1.5	29	6.6	2.3	0.81	0.70	54
	簡易ガス	\$0620														
バイオマス	木材利用	発電施設	\$N131	0.2	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		熱利用施設	\$N131	16	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
	廃材利用	発電施設	\$N132	0.2	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		熱利用施設	\$N132	16	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
	黒液直接利用	\$N136	4.3	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
	バイオガス	\$N137	0.9	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
	バイオマスその他	\$N138	16	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA

表 3-24 燃料種別、炉種別 N₂O 排出係数 (単位 : kg-N₂O/TJ、高位発熱量ベース)

エネルギー源	コード	ボイラー			工業炉					内燃機関														
		ボイラー (流動床以外)	常圧流動床ボイラー	加圧流動床ボイラー	溶鉄・非鉄金属用 鉄鋼炉、転炉、平炉	石油加熱炉、ガス加熱炉	触媒再生塔	コークス炉	その他の工業炉	ガスタービン	ディーゼル機関	ガス機関、ガソリン機関												
石炭	原料炭	\$0110	0.85	54	0.85	NA	1.1	NA	NA	1.1	NA	NA	NA											
	コークス用原料炭	\$0111																						
	吹込用原料炭	\$0112																						
	輸入一般炭	\$0121																						
	汎用輸入一般炭	\$0122																						
	発電用輸入一般炭	\$0123																						
	国産一般炭	\$0124																						
無煙炭	\$0130	0.85																						
石炭製品	コークス	\$0211	0.85	54	0.85	NA	1.1	7.3	NA	1.1	NA	NA	NA											
	コールタール	\$0212	0.17	0.17	0.17	0.047 NA	0.21	NA	0.14	1.2	0.58	2.2	0.85											
	練豆炭	\$0213																						
	コークス炉ガス	\$0221																						
	高炉ガス	\$0222																						
転炉ガス	\$0225																							
原油	精製用原油	\$0310	0.22	0.22	0.22	NA	0.21	NA	NA	1.8	0.58	2.2	0.85											
	発電用原油	\$0320	0.22	0.22	0.22	NA	0.21	NA	NA	1.8	0.58	2.2	0.85											
	瀝青質混合物	\$0321																						
	NGL・コンデンセート	\$0330																						
石油製品	純ナフサ	\$0420	0.19	0.19	0.19	NA	0.21	NA	NA	1.8	0.58	2.2	0.85											
	改質生成油	\$0421																						
	ガソリン	\$0431																						
	ジェット燃料油	\$0432																						
	灯油	\$0433																						
	軽油	\$0434																						
	A重油	\$0436																						
	C重油	\$0437												0.22	0.22	0.22	NA	0.21	NA	0.14	1.2	0.58	2.2	0.85
	B重油	\$0438																						
	一般用C重油	\$0439																						
	発電用C重油	\$0440																						
	潤滑油	\$0451												0.19	0.19	0.19	NA	1.15	7.3	NA	1.1	NA	NA	NA
	他重質石油製品	\$0452												0.85	54	0.85								
	オイルコークス	\$0455												0.17	0.17	0.17								
電気炉ガス	\$0456																							
製油所ガス	\$0457																							
液化石油ガス (LPG)	\$0458	NA																						
天然ガス	輸入天然ガス (LNG)	\$0510	0.17	0.17	0.17	NA	0.21	NA	0.14	1.2	0.58	2.2	0.85											
	国産天然ガス	\$0520																						
	ガス田・随伴ガス	\$0521																						
	炭鉱ガス	\$0522																						
	原油溶解ガス	\$0523																						
都市ガス	一般ガス	\$0610	0.17	0.17	0.17	NA	0.21	NA	0.14	1.2	0.58	2.2	0.85											
	簡易ガス	\$0620																						
バイオマス	木材利用	発電施設	\$N131	0.87	0.87	0.87	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA										
		熱利用施設		1.60	1.60	1.60	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA										
	廃材利用	発電施設	\$N132	0.87	0.87	0.87	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA										
		熱利用施設		1.60	1.60	1.60	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA										
	黒液直接利用	\$N136	0.17	0.17	0.17	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA										
	バイオガス	\$N137	0.09	0.09	0.09	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA										
	バイオマスその他	\$N138	1.60	1.60	1.60	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA										

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーの燃料種別施設別 CH₄、N₂O 排出係数は、表 3-23、表 3-24 に示すとおり。

木材、廃材、バイオマスその他の排出係数は、環境省（2018）及び林野庁（2015）の実測結果をもとに、現状の木質バイオマスの利用状況を踏まえ、国独自の排出係数を設定した。

黒液の排出係数は、表 3-21 に示すパルプ廃液の理論排ガス量(乾)、理論空気量、高位発熱量を用いて設定した。

バイオガスの排出係数は、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いた (Vol.2、page 2.16-2.23、table 2.2-2.5)。デフォルト値は低位発熱量ベースで示されているため、0.9 を乗じて高位発熱量へ換算した (2006 年 IPCC ガイドライン Vol.2、page 1.16)。

○ コークス製造

コークス製造時の CH₄排出には、炭化室から燃焼室へのガス漏れによる燃焼排ガス中の CH₄と、石炭の乾留過程において発生した CH₄のうちコークス炉炉蓋、脱硫酸化塔、脱硫再生塔から排出される CH₄の二つの発生源がある。

【燃焼排ガス】

国内主要 5 社・7 事業所におけるコークス炉排ガス中の CH₄濃度（日本鉄鋼連盟調べ、1999 年度実績）を、コークス生産量を用いて加重平均した値を排出係数として設定した。排出係数は、0.089 [kgCH₄/t]。

【コークス炉炉蓋、脱硫酸化塔、脱硫再生塔】

日本鉄鋼連盟では、有害大気汚染物質の自主管理計画を 1997 年度より実施しており、コークス炉炉蓋等からの他物質の排出より CH₄排出量が推計されている。これらのデータを、コークス生産量を用いて加重平均した値を排出係数として設定した。

表 3-25 コークス炉炉蓋、脱硫酸化塔、脱硫再生塔の CH₄排出係数

項目	単位	1990-1996	1997-1999	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CH ₄ EFs	kg-CH ₄ /t	0.238	0.180	0.119	0.043	0.032	0.031	0.042	0.045	0.039	0.038	0.036	0.033	0.031	0.031

(出典) 日本鉄鋼連盟提供データ

(注) 1990～1996 年度については、排出係数の変動が小さいと仮定し、1995 年の実績値を実績のない他の年度に適用している。1997～1999 年度については、1998、1999 年度も 1997 年度値と同等と仮定している。2000 年度以降は実績値。

【コークス製造時の CH₄排出係数】

前述の、「燃焼排ガス」と「コークス炉炉蓋、脱硫酸化塔、脱硫再生塔」を加えた値を排出係数として用いた。

■ 活動量

○ 各種炉

「総合エネルギー統計」では、固定発生源における炉種別の燃料消費量は把握されていないため、固定発生源における炉種別・燃料種別の燃料消費量を把握できる環境省「大気汚染物質排出量総合調査」及び各燃料消費統計である経済産業省「石油等消費動態統計年報」、資源エネルギー庁「エネルギー消費統計」、資源エネルギー庁「電力調査統計」及び資源エネルギー庁「ガス事業生産動態統計」のデータを使用して炉種別の燃料消費量割合を推計した。具体的には、「総合エネルギー統計」の各燃料種の部門別（エネルギー転換部門、産業部門、業務他部門、家庭部門）の燃料消費量を「大気汚染物質排出量総合調査」等で推計した炉種別の燃料消費量割合で炉種別に按分することにより、部門別燃料種別炉種別の活動量を算定した。ただし、「大気汚染物質排出量総合調査」のデータは、常圧流動床ボイラー、加圧流動

床ボイラーとそれ以外のボイラーを区別できないため、これら流動床ボイラーにおける燃料消費量は別途計算した。加圧流動床炉の活動量については、電気事業連合会から提供された燃料消費量データを用いた。また、常圧流動床炉の活動量については、1990年度以降に稼働実績のある常圧流動床炉を保有する事業者から提供された燃料使用量データを用いた。

流動床炉以外の固体燃料ボイラーの活動量は、「大気汚染物質排出量総合調査」及び「総合エネルギー統計」から把握した全体の活動量から、別途推計した流動床炉の活動量を差し引くことにより推計した。

なお、「大気汚染物質排出量総合調査」は、概ね3年ごとに全てのばい煙発生施設を対象とした全数調査が行われている。各年度の炉種別の燃料消費量割合は表 3-26 のとおり設定した。

表 3-26 炉種別の燃料消費量割合の設定方法

年度	設定方法
1990～1991	1989年度と1992年度の調査結果による内挿値
1992	1992年度の調査結果
1993～1994	1992年度と1995年度の調査結果による内挿値
1995	1995年度の調査結果
1996	1996年度の調査結果
1997～1998	1996年度と1999年度の調査結果による内挿値
1999	1999年度の調査結果
2000～2007	1999年度と2008年度の調査結果による内挿値
2008	2008年度の調査結果
2009～2010	2008年度の調査結果を据え置き ¹⁾
2011	2011年度の調査結果
2012～2013	2011年度と2014年度の調査結果による内挿値
2014	2014年度の調査結果
2015～	2014年度の調査結果を据え置き

(注)

- 1) 2011年3月に発生した東日本大震災の影響で2011年度の調査結果は2008年度と大きく異なることから、内挿せず2008年度データを据え置きとした。

活動量の算定の具体的な手順は以下の通りである。

- 1) 「大気汚染物質排出量総合調査」の燃料消費量を、燃料種別－炉種別－部門別に集計する。
- 2) 各燃料種－部門において、それぞれの炉種の占める割合を求める。
- 3) 「総合エネルギー統計」における燃料種別－部門別の燃料消費量に 2)で求めた割合を乗じて、燃料種別－炉種別－部門別活動量を求める。

$$A_{ijk} = A_{EBik} \times w_{ijk}$$

$$w_{ijk} = A_{MAPijk} / \sum_m A_{MAPijk}$$

A_{ijk} : 燃料種 i 、炉種 j 、部門 k におけるエネルギー消費量 [TJ]

A_{EBik} : 「総合エネルギー統計」における燃料種 i 、部門 k のエネルギー消費量 [TJ]

w_{ijk} : 燃料種 i 、部門 k における炉種 j のエネルギー消費量の占める割合

i : 燃料種

j : 炉種

k : 部門

A_{MAPijk} : 「大気汚染物質排出量総合調査」における燃料種 i 、部門 k における炉種 j のエネルギー消費 [TJ]

【「大気汚染物質排出量総合調査」の概要】

「大気汚染物質排出量総合調査」とは、大気汚染防止法に基づき、地方自治体に届出されたばい煙発生施設、一般粉じん及び特定粉じん発生施設等の固定発生源に係る届出状況並びに規制事務実施状況等大気汚染防止法施行状況の把握、ばい煙発生施設に係る届出データの整備及びばい煙発生施設から排出される大気汚染物質の排出量を把握することにより、合理的かつ効率的な大気環境行政を推進することを目的とした調査である。調査は、工場・事業場に設置されている施設のうち、調査対象となる施設に調査用紙と調査方法書を配布し、アンケート方式により実施している。

【東日本大震災による炉種別の燃料消費量割合への影響について】

2011年3月に発生した東日本大震災の影響により、2011年度の「大気汚染物質排出量総合調査」の結果が部門によってはその前後の年度の炉種別の燃料消費量割合の変化に大きく影響することとなった。

2018年提出インベントリに対して UNFCCC インベントリ審査で受けた勧告 (FCCC/ARR/2018/JPN、パラグラフ E.12) では、石油精製部門 (1.A.1.b) の気体燃料の CH₄ の IEF (みかけの排出係数) が 2010 年度 (6.32 kg/TJ) から 2011 年度 (0.28 kg/TJ) に、N₂O の IEF が 2010 年度 (0.42 kg/TJ) から 2011 年度 (0.20 kg/TJ) に大きく減少したと指摘されたが、これは当該調査の炉種別の燃料消費量割合を活動量に反映したことにより、排出係数の大きい「ガス機関 (CH₄ 排出係数: 54 kg/TJ、N₂O 排出係数: 0.85 kg/TJ)」及び「その他の工業炉 (CH₄ 排出係数: 2.29 kg/TJ、N₂O 排出係数: 1.2 kg/TJ)」の気体燃料消費量が 2010 年度から 2011 年度にかけて大きく減少したことによる影響が大きい。

一方、同時に上記の勧告では同部門の気体燃料の IEF について 2018 年提出の再計算値が 2017 年提出に比べて大きい年があると指摘された (CH₄ の 2012 年度は 15.3% 増、2013 年度は 33.9% 増、2014 年度は 50.7% 増、2015 年度は 36.5% 増、N₂O の 2012 年度は 15.1% 増、2013 年度は 33.0% 増、2014 年度は 49.4% 増、2015 年度は 37.6% 増)。これは前述のケースとは逆に、2014 年度の「大気汚染物質排出量総合調査」結果での炉種別の燃料消費割合を同年度のインベントリに反映した結果、排出係数の大きい「ガスタービン (CH₄ 排出係数: 0.81 kg/TJ、N₂O 排出係数: 0.58 kg/TJ)」及び「その他の工業炉 (排出係数は前述のとおり)」の両炉種での気体燃料消費量が震災直後の 2011 年度調査結果反映時から大きく増加したことによる影響が大きい。2017 年提出インベントリでは 2011 年度調査結果での炉種別の燃料消費量割合が 2011 年度から 2015 年度までの活動量に反映されていた。2018 年提出インベントリでは、まず 2014 年度調査時の炉種別の燃料消費量割合を 2014 年度の炉種別の活動量に反映し、さらに年度間で炉種別の燃料消費量割合の内挿・据置処理を行って 2012、2013 及び 2015 年度の炉種別の活動量を計算して再計算を行った結果、2012～2015 年度の排出量及び IEF が大きく増加することとなった。

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーの活動量は、「総合エネルギー統計」の木材、廃材、黒液、バイオガス、バイオマスその他における部門別消費量を用いた。木材及び廃材については、「総合エネルギー統計」の事業用発電部門及び家用発電部門の消費量を発電施設、それ以外の部門の消費量を熱利用施設と想定した。

○ コークス製造

コークス製造時の CH₄ 排出の活動量として、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示されたコーク

スの生産量を用いた。

表 3-27 コークス生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
コークス生産量	kt	47,338	42,279	38,511	38,009	34,140	37,036	34,875	35,024	35,082	33,785	32,439	33,138	32,587	32,659

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

○ 各種炉（バイオマスボイラー含む）

2006年 IPCC ガイドラインのデフォルトの排出係数を使用している場合は、デフォルトの排出係数の不確実性を設定し、我が国独自の排出係数を使用している場合は、当該排出係数の不確実性を設定した。

活動量については、出典である「総合エネルギー統計」における燃料種別・部門別のエネルギー消費量の不確実性を設定することが困難であるため、1990～2016年度の「石炭・石炭製品」、「原油・石油製品」、「天然ガス・都市ガス」、「バイオマスエネルギー」の統計誤差率（対国内供給）の標準偏差から上限値、下限値を設定した。

その結果、各種炉における CH₄ 排出量の不確実性は燃料の燃焼部門全体で-33～+46%、N₂O 排出量の不確実性は-33～+33%と評価された。

○ コークス製造

コークスの排出係数の不確実性については、コークス炉燃焼排ガスの排出係数とコークス炉炉蓋等の排出係数の不確実性を別々に評価した。コークス炉燃焼排ガスの排出係数は98.5%、コークス炉炉蓋等の排出係数の不確実性は61.8%と評価された。活動量の不確実性については、環境省（2006a）に記載の5%を採用した。

○ エネルギー利用・回収を伴う廃棄物の焼却

7.4.3 節を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

○ 各種炉（バイオマスボイラー含む）

全ての時系列において一貫した算定方法を用いて排出量の算定を行っている。

CH₄、N₂O の排出係数については、1990年から直近年まで全ての時系列において同じ値を用いている。

活動量については、全ての時系列において「総合エネルギー統計」の値を使用しており、本統計は全ての時系列において一貫した方法にて作成されている。「総合エネルギー統計」の自家用発電部門の電気業に関する活動量については3.2.4. c) を参照のこと。

○ コークス製造

コークス製造の活動量は「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」をもとに、1990年度値から一貫した方法を使用して算定している。また、排出係数についても日本鉄鋼連盟からの提供データを受けて一貫した方法を使用して算定している。従って、コークス製造による CH₄ 排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

○ エネルギー利用・回収を伴う廃棄物の焼却

7.4.3 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

■ QA/QC

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

■ 検証

現在使用している各種燃料の燃焼による N_2O の排出係数は、1990年代に調査された実測値により作成されたものを使用している。それ以来、省エネ技術の進歩等により燃焼条件が変化しているに伴い排出係数が変化している可能性があること、また、排出係数を定期的に見直す必要があることなどが 2009 年度に温室効果ガス排出量算定方法検討会より指摘された。加えて、2013年の対日審査において専門家審査チームから、当時の測定が現在のボイラー形式・技術にも適用できることを正当化できる追加情報の提供を強く勧告された。

(FCCC/ARR/2013/JPN)

各種炉における排出量が多い固体燃料を燃焼する常圧流動床炉の N_2O 排出係数について、実測を 2009 年度に実施した。その結果、現状の排出係数と比較すると、値は同程度であり、1990年代の実測結果の妥当性が確認できた。

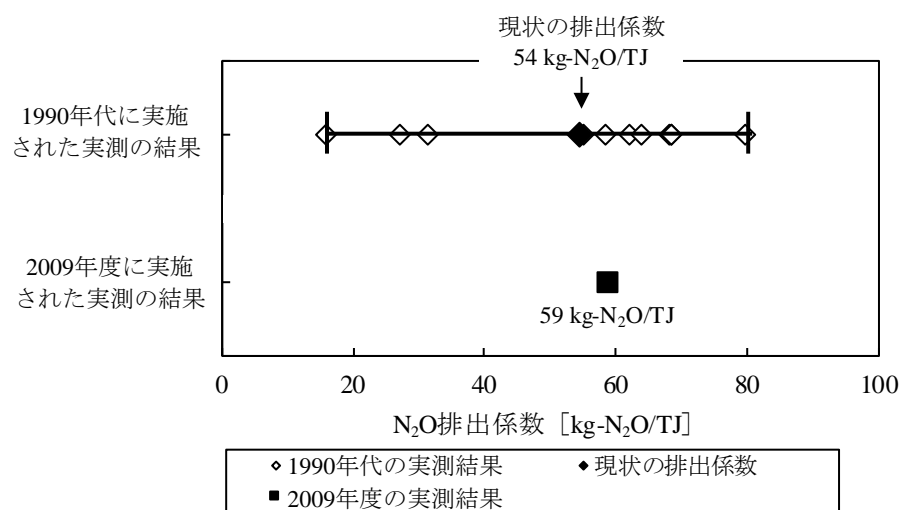


図 3-5 1990年代の調査結果と 2009年の調査結果との比較

(注) 図中 2009 年度の実測は 1 施設で 3 回測定した平均値を示す。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の 2013～2017 年度で活動量が更新されたため、当該年度の CH_4 及び N_2O 排出量を再計算した。また、一部燃料の 2007、2008～2013 年度の炉種別燃料消費量割合の修正に伴い、当該年度の CH_4 及び N_2O 排出量を再計算した。さらに日本鉄鋼連盟提供の 2017 年度のコークス生産量が更新されたため、当該年度の CH_4 排出量を再計算した。

再計算の影響の程度については第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.2.6. 製造業及び建設業（1.A.2）におけるCO₂の排出

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、鉄鋼（1.A.2.a）、非鉄金属（1.A.2.b）、化学（1.A.2.c）、パルプ・紙・印刷（1.A.2.d）、食品加工・飲料・煙草（1.A.2.e）、窯業土石（1.A.2.f）、その他（1.A.2.g）の各製造業及び鉱業・建設業部門におけるエネルギー消費に伴うCO₂排出を扱う。

2018年度における当該カテゴリーからのCO₂排出量は262,837 ktであり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCFを除く）の21.2%を占めている。うち「1.A.2.a 鉄鋼」からの排出が51.8%と、当該カテゴリーで最も多くを占めている。

b) 方法論

■ 算定方法

エネルギー産業（1.A.1）と同様、2006年IPCCガイドラインのデシジョンツリー（Vol.2、page 1.9、Fig.1.2）に従い、Tier 2 部門別アプローチ（Sectoral Approach）法を用いて排出量の算定を行った。3.2.4. b) 節を参照のこと。

2006年IPCCガイドラインに従い、「エネルギーとして利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出」に該当する熱量と排出量を、燃料の燃焼（1.A.）の「その他化石燃料（other fossil fuels）」及び「バイオマス（biomass）」に報告している。

エネルギー利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出量の算定には、2006年IPCCガイドラインに従い、廃棄物の焼却（カテゴリー5.C.）で用いる排出係数や算定方法を適用している。詳細な算定方法は第7章を参照のこと。

バイオマスからのCO₂排出は、2006年IPCCガイドラインに従い、我が国の総排出量には含めず、CRFに参考値として報告している。

■ 排出係数

エネルギー産業（1.A.1）に示した排出係数を用いた。3.2.4. b) 節を参照のこと。

■ 活動量

エネルギー産業（1.A.1）と同様に、当該部門の活動量は「総合エネルギー統計」を用いている。

表 3-28 製造業及び建設業（1.A.2）におけるエネルギー消費量（単位：PJ）

エネルギー源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
液体燃料	1,958	2,113	1,905	1,539	1,083	1,042	1,090	1,033	1,011	953	884	829	811	759
固体燃料	2,130	2,053	2,034	2,051	1,861	2,043	1,990	2,031	2,087	2,051	2,000	1,889	1,863	1,828
気体燃料	227	344	408	599	592	629	654	648	611	594	595	603	601	629
その他化石燃料	86	99	115	174	196	202	202	208	212	219	222	219	226	226
バイオマス	227	227	240	273	279	298	291	286	309	303	300	272	281	284
合計	4,628	4,835	4,701	4,637	4,011	4,214	4,228	4,206	4,231	4,120	4,001	3,811	3,782	3,726

製造業の各部門における活動量については、「総合エネルギー統計」に示された、工場・事業所内での生産活動により消費されたエネルギー消費量（最終エネルギー消費 #6xxxx¹⁰）、自らの工場・事業所内で使用するために行った発電に伴うエネルギー消費量（自家用発電 #25xxxx）、同じく自らの工場・事業所内で使用するために行った蒸気の発生に伴うエネルギー消費量（自家用蒸気発生 #26xxxx）の合計としている。なお、工場・事業所内での生産活動により消費されたエネルギー消費量（#6xxxx）には、原料用として用いられた分（非エネルギー利用 #95xxxx）が内数として含まれているため、当該分を差し引いている。

自家用発電及び自家用蒸気発生部門は、「総合エネルギー統計」においてはエネルギー転換

¹⁰ x は任意の数を表す。

部門に含まれるが、2006年 IPCC ガイドラインでは、発電等のために消費したエネルギーから排出される CO₂は、その発電等を行った部門に報告することを原則としているため、それに従い、最終エネルギー消費部門における各製造業からの CO₂排出量と合計し、「1.A.2」に報告している。

CRFにおける1.A.2部門と「総合エネルギー統計」の部門対応を表3-29に示す。

表3-29 「総合エネルギー統計」とインベントリ（CRF 共通報告様式）の部門対応（1.A.2）

CRF		総合エネルギー統計	
1A2	Manufacturing industries and construction		
1A2a	Iron and steel	自家用発電 鉄鋼業	#253250
		自家用蒸気発生 鉄鋼業	#263220
		最終エネルギー消費 鉄鋼業	#629100
		▲非エネルギー利用 鉄鋼	#951560
1A2b	Non-ferrous metals	自家用発電 非鉄金属製造業	#253230
		自家用蒸気発生 非鉄金属製造業	#263260
		最終エネルギー消費 非鉄金属製造業	#629300
		▲非エネルギー利用 非鉄金属地金	#951570
1A2c	Chemicals	自家用発電 化学工業	#253160
		自家用蒸気発生 化学工業	#263160
		最終エネルギー消費 化学工業	#626100
		▲非エネルギー利用 化学	#951530
1A2d	Pulp, paper and print	自家用発電 パルプ・紙・紙加工品製造業	#253140
		自家用蒸気発生 パルプ・紙・紙加工品製造業	#263140
		最終エネルギー消費 パルプ・紙・紙加工品製造業	#624000
		▲非エネルギー利用 パルプ紙板紙	#951520
		自家用発電 印刷・同関連業	#253150
		自家用蒸気発生 印刷・同関連業	#263150
		最終エネルギー消費 印刷・同関連業	#625000
1A2e	Food processing, beverages and tobacco	自家用発電 食料品製造業	#253090
		自家用蒸気発生 食料品製造業	#263090
		最終エネルギー消費 食品飲料製造業	#621000
		▲非エネルギー利用 食料品製造業	#951510
1A2f	Non-metallic minerals	自家用発電 窯業・土石製品製造業	#253210
		自家用蒸気発生 窯業・土石製品製造業	#263210
		最終エネルギー消費 窯業・土石製品製造業	#628100
		▲非エネルギー利用 窯業・土石製品製造業	#951550
1A2g	Other	自家用発電 農林水産鉱建設 (農林水産業[#251010-#251040]を除く。)	#251000
		自家用発電 製造業 (1A1b, 1A1c, 1A2aから1A2fに掲げられている業種を除く。)	#252000
		自家用蒸気発生 農林水産鉱建設 (農林水産業[#261010-#261040]を除く。)	#261000
		自家用蒸気発生 製造業 (1A1b, 1A1c, 1A2aから1A2fに掲げられている業種を除く。)	#262000
		最終エネルギー消費 農林水産鉱建設業 (農林水産業[#611000]を除く。)	#610000
		最終エネルギー消費 製造業 (1A1b, 1A1c, 1A2aから1A2fに掲げられている業種を除く。)	#620000
		▲非エネルギー利用 農林水産鉱建設業 (農林水産業を除く。)	#951100
		▲非エネルギー利用 製造業(大規模・指定業種) (1A1b, 1A1c, 1A2aから1A2fに掲げられている業種を除く。)	#951500
▲非エネルギー利用 製造業(中小規模他)	#951700		

(注) ▲非エネルギー利用：原料用として用いられた分を控除している。

c) 不確実性と時系列の一貫性

エネルギー産業（1.A.1）に記載した内容と同一である。3.2.4. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。Tier 1 QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。一般的なインベントリ QC 手続きについては、第1章に詳述している。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の更新に伴う活動量及び排出係数の更新により、2013～2017年度について排出量の再計算を行った。

廃棄物分野における統計データの更新及び算定方法の改善に伴い、2005～2017年度のその他化石燃料の CO₂ 排出量が再計算された。詳細は 7.4.3 節を参照のこと。

再計算の影響の程度については第10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.2.7. 製造業及び建設業（1.A.2）における CH₄ と N₂O の排出

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、鉄鋼（1.A.2.a）、非鉄金属（1.A.2.b）、化学（1.A.2.c）、パルプ・紙・印刷（1.A.2.d）、食品加工、飲料、煙草（1.A.2.e）、窯業土石（1.A.2.f）、その他（1.A.2.g）の各製造業及び鉱業・建設業部門におけるエネルギー消費に伴う CH₄、N₂O 排出を扱う。

また、移動発生源のうち特殊自動車（建設機械及び産業機械）や作業用船舶等におけるエネルギー消費に伴う CH₄、N₂O 排出も本カテゴリーで扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

○ 各種炉

エネルギー産業（1.A.1）と同様、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol.2、page 1.9、Fig.1.2）に従い、Tier 3 法を用いて排出量を算定した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーについては、エネルギー産業（1.A.1）と同様の方法で算定した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ 特殊自動車等

特殊自動車（建設機械及び産業機械）、作業用船舶等からの排出量を 2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol.2、page 3.34、Fig.3.3.1）に従い、Tier 1 法で算定し、排出量を CRF の製造業及び建設業（1.A.2）の各部門に報告した。

○ エネルギー利用・回収を伴う廃棄物の焼却

7.4.3 節を参照のこと。

■ 排出係数

○ 各種炉

エネルギー産業（1.A.1）で設定した各施設の排出係数を用いた。表 3-23、表 3-24 を参照のこと。

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーの排出係数は、エネルギー産業（1.A.1）と同様の方法で設定した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ 特殊自動車等

作業用船舶でのA重油の消費に係る排出係数については2006年IPCCガイドラインに記載の船舶のデフォルト値（Vol.2、page 3.50、Table 3.5.3）に0.95（Vol.2、page 1.16）を乗じて高位発熱量ベースに換算し用いた。また、ガソリン、軽油、及び船舶用途以外のA重油については、欧州環境機関（2016）のTable 3-1の「1.A.2.g.vii」の値を高位発熱量ベースに換算し用いた。

表 3-30 製造業及び建設業（1.A.2）における特殊自動車等からのCH₄、N₂O 排出係数

燃料種	単位	CH ₄ 排出係数	N ₂ O 排出係数	出典
ガソリン	g/t	665	59	欧州環境機関（2016）、Non-road mobile sources and machinery, Table 3-1
軽油（船舶用途外A重油を含む）	g/t	83	135	
船舶用A重油	kg/TJ(NCV)	7	2	2006年IPCCガイドライン Vol.2, Table 3.5.3

■ 活動量

○ 各種炉

「総合エネルギー統計」の部門別燃料種別燃料消費量に、平成26年度及び27年度の環境省調査結果に基づく移動・固定発生源別の燃料消費割合（表3-31）を乗じて、燃料消費量を移動発生源と固定発生源に振り分けた。

表 3-31 製造業及び建設業（1.A.2）における移動・固定発生源別の燃料消費割合

CRF 区分	総合エネルギー統計における 部門分類	ガソリン		軽油		A重油		
		移動発生源	固定発生源	移動発生源	固定発生源	移動発生源 (船舶)	移動発生源	固定発生源
1A2a	鉄鋼業	1%	99%	16%	84%			
1A2b	非鉄金属製造業	24%	76%	1%	99%			
1A2c	化学工業	100%	0%	1%	99%			
1A2d	パルプ・紙・紙加工品製造業	74%	26%	10%	90%			
	印刷・同関連業			0%	100%			
1A2e	食品飲料製造業			1%	99%			
1A2f	窯業・土石製品製造業	7%	93%	1%	99%			
1A2g	金属製品製造業			1%	99%			
	機械製造業	2%	98%	1%	99%			
	鉱業他			100%	0%	17%	25%	58%
	木材・木製品製造業			2%	98%			
	建設業			100%	0%	0%	100%	0%
	繊維工業	100%	0%					
	なめし革・同製品・毛皮製造業			0%	100%			
	家具・装備品製造業			0%	100%			
	ゴム製品製造業			0%	100%			
	プラスチック製品製造業			0%	100%			
他製造業			4%	96%				

（出典）環境省（2015b）、環境省（2016）を基に算出。

さらに、上記によって求めた固定発生源の燃料消費量に炉種別の燃料消費割合を乗じて

得られた燃料消費量を固定発生源すなわち各種炉の活動量とした。炉種別の燃料消費量割合は、エネルギー産業（1.A.1）と同様、「大気汚染物質排出量総合調査」及び各燃料消費統計である「石油等消費動態統計年報」、「エネルギー消費統計」、「電力調査統計」及び「ガス事業生産動態統計」のデータを使用して推計した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーの活動量は、「総合エネルギー統計」の部門別燃料別消費量を用いた。ただし、同統計では、2001年度以前の自家用蒸気発生部門におけるバイオマスその他の業種別消費量は把握されていない。したがって、2001年度以前のバイオマスその他の業種別消費量は、2002年度の業種別蒸気発生量を基に、2001年度以前の業種別蒸気発生量に比例すると仮定し、推計した。

○ 特殊自動車等

「総合エネルギー統計」の部門別燃料種別燃料消費量に、表 3-31 の移動発生源の燃料消費量割合を乗じて得られた燃料消費量を移動発生源すなわち特殊自動車等の活動量とした。

なお、表 3-31 に関して、「総合エネルギー統計」の建設業における軽油と A 重油の燃料消費量をすべて移動発生源とみなしたが、日本建設業連合会へのヒアリング結果によると、建設業の軽油・A 重油については固定発生源である発電機も含まれるとみられるが、燃焼機関はディーゼルエンジンに類似のものであると考えられるため、移動発生源の排出係数を適用することで問題がないものと考えられる。

c) 不確実性と時系列の一貫性

○ 各種炉（バイオマスボイラー含む）

エネルギー産業（1.A.1）に記載した内容と同一である。3.2.5. c) 節を参照のこと。

バイオマスボイラーについては、2001年度以前のバイオマスその他の業種別消費量が把握されていないため、2002年度の蒸気発生量を基に、2001年度以前の業種別蒸気発生量に比例すると仮定して推計し、時系列の一貫性を確保した。

○ 特殊自動車等

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値で代用した。活動量の不確実性は、「総合エネルギー統計」における液体燃料、気体燃料の統計誤差率（対国内供給）の標準偏差から設定した。移動発生源割合を乗じて算出している活動量については、平成 26 年度及び 27 年度の環境省調査において実施されたアンケート結果を基に移動発生源割合の不確実性を設定して誤差伝播式で合成した。その結果、特殊自動車等における CH₄ 排出量の不確実性は燃料の燃焼部門全体で -29~+41%、N₂O 排出量の不確実性は -23~+91% と評価された。

○ エネルギー利用・回収を伴う廃棄物の焼却

7.4.3 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述している。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の 2013~2017 年度で活動量が更新されたため、当該年度の CH₄ 及

び N₂O 排出量を再計算した。

常圧流動床炉一基において 1997、2010～2015 年度の活動量が更新されたため、当該年度の N₂O 排出量を再計算した。

廃棄物分野における統計データの更新に伴い、2017 年度の CH₄と N₂O の排出量を再計算した。詳細は 7.4.3.節を参照のこと。

再計算の影響の程度については第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

エネルギー産業 (1.A.1) に記載した内容と同一である。3.2.5. f) 節を参照のこと。

3.2.8. 運輸 (1.A.3) における CO₂ の排出

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、航空 (1.A.3.a)、自動車 (1.A.3.b)、鉄道 (1.A.3.c)、船舶 (1.A.3.d)、その他輸送 (1.A.3.e) からの CO₂ 排出を扱う。特殊自動車 (建設機械、農業機械等)、作業用船舶、漁船といった、主な用途が旅客や貨物の輸送でない移動発生源からの排出は、製造業及び建設業 (1.A.2) とその他部門 (1.A.4) において取り扱う。

2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 202,914 kt であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 16.4% を占めている。うち「1.A.3.b 自動車」からの排出が 89.4% と、当該カテゴリーで最も多くを占めている。

b) 方法論

■ 算定方法

○ ガソリン、軽油等の燃料

エネルギー産業 (1.A.1) と同様 2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.2、page 1.9、Fig.1.2) に従い、Tier 2 部門別アプローチ (Sectoral Approach) 法を用いて排出量の算定を行った。3.2.4. b) 節を参照のこと。

共通報告様式では、バイオ燃料の CO₂ 排出量を「総合エネルギー統計」の国内供給量 [#190000] から算定し、主な用途である自動車 (1.A.3.b) で参考値として報告する。2006 年 IPCC ガイドラインに従い、我が国の総排出量には含めない。

○ 潤滑油

エンジン内の潤滑油が使用中に酸化されることにより CO₂ が排出される。2006 年 IPCC ガイドライン Vol. 3、page 5.6 によれば、潤滑油と他の燃料とが混焼される 2 ストローク (2 サイクル) エンジンにおいては、潤滑油からの CO₂ 排出量をエネルギー分野で報告することとされている。わが国では自動車用エンジン油の 2 サイクルエンジン油及び船舶エンジン油の船舶用シリンダー油が該当する。この排出量を次式で算定し、2 サイクルエンジン油を 1.A.3.b に、船舶用シリンダー油を 1.A.3.d に報告する。

$$E = \sum_i (LC_i \times CC_i \times ODU_i \times 44/12)$$

E : 潤滑油の使用中の酸化に伴う排出量 [kt-CO₂]

LC_i : 潤滑油消費量 [TJ]

CC_i : 潤滑油の炭素含有量 [kt-C/TJ]

ODU_i : 使用時酸化 (Oxidized During Use: ODU) 係数

i : 潤滑油の油種 (自動車用エンジン油の 2 サイクルエンジン油、船舶エンジン油の船舶用シリンダー油)

■ 排出係数

○ ガソリン、軽油等の燃料

エネルギー産業（1.A.1）に示した排出係数を用いた。3.2.4. b）節を参照のこと。

なお、1.A.3.b（Road transportation）における液体燃料（軽油）の炭素排出係数は、附属書 I 国中で最も低い値であるが、これは自動車排出ガス規制の関係上、我が国では道路輸送用のガスオイルとして硫黄分の多い中東産原油を一度分解し超深度脱硫した低硫黄軽油（< 10ppm）が義務づけられており、軽油の品質規格が他国と異なること、道路輸送用以外のガスオイルは「A 重油」として厳格に区別して扱われていることに起因するものである。我が国では当該軽油や A 重油分を含めた石油精製の炭素収支がほぼ成立していることが統計上確認されており、これらの炭素排出係数は異常値ではない。

我が国における軽油の品質規格については別添 4（A4.3）に掲載しているので参照のこと。

○ 潤滑油

炭素含有量 CC については、エネルギー産業（1.A.1）に示した潤滑油の排出係数（表 3-11）を用いた。ODU 係数については、全量が燃焼すると想定し、1.0 を用いた。

■ 活動量

表 3-32 運輸（1.A.3）におけるエネルギー消費量（単位：PJ）

エネルギー源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
液体燃料	2,966	3,569	3,729	3,510	3,272	3,286	3,215	3,228	3,135	3,065	3,048	3,023	3,001	2,965
固体燃料	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
気体燃料	0	0	1	4	5	5	5	4	4	4	3	3	2	2
その他化石燃料	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
バイオマス	NO	NO	NO	0	1	9	9	9	10	12	15	18	19	20
合計	2,966	3,569	3,730	3,514	3,277	3,299	3,228	3,241	3,149	3,080	3,067	3,043	3,023	2,987

○ ガソリン、軽油等の燃料

エネルギー産業（1.A.1）と同様に、当該部門の活動量は「総合エネルギー統計」を用いている。

「総合エネルギー統計」に示された、航空 [#815000] [#854000]、自動車 [#811000] [#851000] [#811500] [#812000]、鉄道 [#813000] [#852000]、船舶 [#814000] [#853000] のエネルギー消費量から、非エネルギー利用 [#953000] に計上されているエネルギー消費量を除いた量を用いる。非エネルギー利用 [#953000] に計上されているエネルギー消費量は、燃料以外の用途に用いられており CO₂を排出していないものと考えられるため、この分を控除する。

CRF における 1.A.3 部門と「総合エネルギー統計」の部門対応を表 3-33 に示す。

表 3-33 「総合エネルギー統計」とインベントリ（CRF 共通報告様式）の部門対応(1.A.3)

CRF		総合エネルギー統計	
1A3	Transport		
1A3a	Domestic aviation	最終エネルギー消費 旅客 航空	#815000
		最終エネルギー消費 貨物 航空	#854000
		▲非エネルギー利用 運輸(航空)	#953000
1A3b	Road transportation		
i	Cars	最終エネルギー消費 旅客 乗用車	#811000
		▲非エネルギー利用 運輸(乗用車)	#953000
ii	Light duty trucks	IE (1A3biii)	-
iii	Heavy duty trucks and buses	最終エネルギー消費 旅客 バス	#811500
		最終エネルギー消費 貨物 貨物自動車/トラック	#851000
		▲非エネルギー利用 運輸(バス、貨物自動車/トラック)	#953000
iv	Motorcycles	最終エネルギー消費 旅客 二輪車	#812000
		▲非エネルギー利用 運輸(二輪車)	#953000
v	Other	IE (1A3biii)	-
1A3c	Railways	最終エネルギー消費 旅客 鉄道	#813000
		最終エネルギー消費 貨物 鉄道	#852000
		▲非エネルギー利用 運輸(鉄道)	#953000
1A3d	Domestic navigation	最終エネルギー消費 旅客 船舶	#814000
		最終エネルギー消費 貨物 船舶	#853000
		▲非エネルギー利用 運輸(船舶)	#953000
1A3e	Other transportation	NO	-

(注) ▲非エネルギー利用：燃料以外の用途に用いられた分を控除している。

○ 潤滑油

全潤滑油の販売量から自動車用・船舶用のエンジン油の販売量を推計し、推計された各エンジン油の販売量を基に全損型のエンジン油消費量を推計した。

自動車用エンジン油（ガソリンエンジン油及びディーゼルエンジン油）及び船舶エンジン油の販売量（体積ベース）は、「資源・エネルギー統計年報」及び「エネルギー生産・需給統計年報」に示された全潤滑油の国内向販売量 DS に、同年報から推計した潤滑油の消費者・販売業者向販売量¹¹に占める各エンジン油の割合 R_i を乗じて求めた。これに、各エンジン油に占める全損型の割合 R_{TLi} を乗じて全損型のエンジン油消費量を推計した。 R_{TLi} は、潤滑油協会（2013）に示された 2011 年度の 2 サイクルエンジン油、船舶用シリンダー油の製造・輸入量を、上記によって求めた 2011 年度の自動車用エンジン油、船舶エンジン油の国内向販売量でそれぞれ除して設定した（自動車用エンジン油については 0.92%、船舶エンジン油については 83%）。

体積ベースの消費量を「総合エネルギー統計」に示された潤滑油の発熱量を用いて熱量換算し、活動量とした。

$$LC_i = DS \times R_i \times R_{TLi} \times GCV$$

- LC_i : 各エンジン油の消費量 [TJ]
 DS : 全潤滑油の国内向販売量 [1,000 kL]
 R_i : 潤滑油の消費者・販売業者向販売量に占める各エンジン油の割合
 R_{TLi} : 各エンジン油に占める全損型の割合
 i : 自動車用エンジン油、船舶エンジン油
 GCV : 潤滑油の高位発熱量 [GJ/kL]

¹¹ 2001 年度以前は消費者向販売量

表 3-34 全損型のエンジン油消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
自動車用2サイクルエンジン油消費量 LC_1	TJ	207	215	210	194	183	183	172	157	158	154	142	135	137	149
船舶用シリンダー油消費量 LC_2	TJ	5,318	5,503	7,144	6,250	4,972	4,627	4,016	3,638	3,502	3,301	3,124	2,843	2,766	3,094
全潤滑油の国内向販売量 DS	1000 kL	2,439	2,335	2,192	2,047	1,681	1,763	1,695	1,538	1,531	1,511	1,460	1,414	1,433	1,588
自動車用エンジン油販売量の割合 R_1	-	23%	25%	26%	26%	30%	28%	28%	28%	28%	28%	26%	26%	26%	26%
船舶用エンジン油販売量の割合 R_2	-	6.5%	7.1%	9.8%	9.1%	8.9%	7.9%	7.1%	7.1%	6.8%	6.5%	6.4%	6.0%	5.8%	5.8%
潤滑油の総発熱量 GCV	GJ/kL	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2	40.2

c) 不確実性と時系列の一貫性

エネルギー産業 (1.A.1) に記載した内容と同一である。3.2.4. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述している。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の更新に伴う活動量及び排出係数の更新により、2013~2017 年度について排出量が再計算された。加えて、「資源・エネルギー統計年報」の修正に伴う活動量の更新により、2017 年度の潤滑油からの排出量が再計算された。

再計算の影響の程度については第 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.2.9. 運輸 (1.A.3) における CH₄ と N₂O の排出

本カテゴリーでは、航空 (1.A.3.a)、自動車 (1.A.3.b)、鉄道 (1.A.3.c)、船舶 (1.A.3.d)、その他輸送 (1.A.3.e) からの CH₄、N₂O 排出量の算定について記述する。特殊自動車 (建設機械、農業機械等)、作業用船舶、漁船といった、主な用途が旅客や貨物の輸送でない移動発生源からの排出は、製造業及び建設業 (1.A.2) とその他部門 (1.A.4) において取り扱う。

3.2.9.1. 航空 (1.A.3.a)

a) 排出源カテゴリーの説明

航空機の航行に伴うエネルギー消費からの CH₄ 及び N₂O の排出を扱う。我が国の国内の航空機の飛行に伴う温室効果ガスの排出は、ジェット燃料を使用するものが主である。その他小型軽飛行機、ヘリコプターなどに僅かに利用されている航空ガソリンからの排出が存在する。

b) 方法論

■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol. 2, page 3.60, Fig. 3.6.1) に従い、ジェット機に用いるジェット燃料については Tier 2 法を用いて離着陸時と巡航時に分けて排出量を算定する。離着陸時については、国内線航空機機種別の離着陸 1 回当たりの排出係数に、国内線航空機機種別の離着陸回数を乗じて、機種別に排出量を求めてそれらを積算する。ただ

し、2000年度以前については活動量が機種別に得られないため、2001年度のデータで得られる全機種の加重平均の排出係数を総活動量に乗じて離着陸時の排出量を求める。巡航時については、国内線航空機の巡航時ジェット燃料総消費量より排出量を求める。

小型軽飛行機等に用いる航空ガソリンについては Tier 1 法を用いて国内線燃料総消費量より排出量を算定する。

$$E_{jet} = \sum_i (EF_{LTO,i} \times AD_{LTO,i}) + EF_{cruise} \times AD_{cruise}$$

E_{jet} : ジェット機からの CH₄, N₂O 排出量
 $EF_{LTO,i}$: 機種別の離着陸 1 回あたりの排出係数
 $AD_{LTO,i}$: 国内線航空機機種別の離着陸回数
 EF_{cruise} : 巡航時の燃料消費に伴う排出係数
 AD_{cruise} : 国内線航空機の巡航時ジェット燃料消費量
 i : 機種

$$E_{gasoline} = EF_{gasoline} \times AD_{gasoline}$$

$E_{gasoline}$: 航空ガソリンの消費に伴う CH₄, N₂O 排出量
 $EF_{gasoline}$: 航空ガソリンの消費に伴う排出係数
 $AD_{gasoline}$: 国内線航空機の航空ガソリン消費量

■ 排出係数

【ジェット燃料】

離着陸時の CH₄, N₂O の排出係数は、2006 年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 3.70, Table 3.6.9 に示されたデフォルト値を用いる。巡航時の CH₄, N₂O の排出係数は、2006 年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 3.64, Table 3.6.5 に示されたデフォルト値を用いる。(表 3-35 参照)

【航空ガソリン】

航空ガソリンの CH₄, N₂O の排出係数は、2006 年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 3.64, Table 3.6.5 に示されたデフォルト値を用いる (表 3-35 参照)。

表 3-35 航空機の CH₄, N₂O の排出係数

航空機の種類 (燃料)	区分	CH ₄	N ₂ O
ジェット機 (ジェット燃料)	離着陸時	機種別に設定 (表 3-36 参照)	
	巡航時	— ¹⁾	2 [kg-N ₂ O/TJ(NCV)]
ジェット機以外 (航空ガソリン)	—	0.5 [kg-CH ₄ /TJ(NCV)]	2 [kg-N ₂ O/TJ(NCV)]

(出典) 2006 年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 3.64, Table 3.6.5

(注)

1) ガイドラインに negligible (無視可能) とあり、算定対象外とする。

表 3-36 ジェット機の主な機種別の離着陸時の CH₄, N₂O の排出係数、及び燃料消費量

機種	CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ /LTO] ¹⁾	N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O/LTO] ¹⁾	燃料消費量 [kg/LTO] ¹⁾
B737-300/400/500	0.08	0.1	780
B737-800	0.07	0.1	880
B747SR (B747-100, -200, -300)	4.84 ²⁾	0.4 ²⁾	3,440 ³⁾
B747-400	0.22	0.3	3,240
B767-300	0.12	0.2	1,780
B777-200/300	0.07	0.3	2,560
A320	0.06	0.1	770
2001 年度の全機種の平均的排出係数 (2000 年度以前の全機種に適用)	0.34	0.15	—

(出典) 2006 年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 3.70, Table 3.6.9

(注)

- 1) LTO : Landing and take off (離着陸)
- 2) B747-100, -200, -300 の最大値として設定
- 3) B747-100, -200, -300 の平均値として設定

■ 活動量

【ジェット燃料油】

離着陸時の活動量については、環境省「PRTR 届出外排出量算定資料」に示された機種別の離着陸回数を用いる。ただしこのデータは国際線の離着陸回数を含むため、国内線と国際線の両方に使用される機種については、国内線の総着陸回数が国土交通省「空港管理状況調書」の数値に一致するように、各機種とも同じ比率で離着陸回数を減じる。

離陸時のジェット燃料消費量は、上記の離着陸回数に 2006 年 IPCC ガイドラインに示された 1 回の離着陸時に消費される燃料消費量を乗じることによって算出する。

また、巡航時の燃料消費量については、国土交通省「航空輸送統計年報」に示されたジェット燃料消費量から、上記の離着陸時のジェット燃料消費量を差し引いて算出する。

【航空ガソリン】

活動量については、「総合エネルギー統計」に示された航空部門のガソリン消費量を用いる。

表 3-37 航空機からの排出の算定に使用する活動量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
離着陸回数	千回	669	783	865	895	892	882	882	938	993	1,006	997	994	999	1,003
ジェット燃料巡航時消費量	1000 kL	1,621	2,425	2,742	3,031	2,791	2,629	2,589	2,758	2,933	2,996	3,005	3,072	3,145	3,187
航空ガソリン消費量	1000 kL	5.3	6.0	4.3	7.7	2.4	1.9	1.7	1.9	1.9	1.7	1.7	1.7	1.9	2.6

表 3-38 ジェット機の主な機種別の離着陸回数 (2001 年度以降)

機種	単位	2001	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
B737-300/400/500	千回	123	103	90	84	130	129	131	132	80	68	38	38
B737-800		NO	NO	59	97	89	97	118	130	166	165	178	179
B747SR		43	30	2	3	2	1	1	NO	1	1	NO	NO
B747-400		56	54	36	22	15	16	14	8	5	7	5	5
B767-300		146	103	102	101	105	95	87	79	75	73	80	80
B777-200/300		69	76	87	89	86	91	93	87	78	74	71	71
A320		59	47	57	48	55	88	95	102	103	97	54	54

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインの機種別の離着陸回数あたり排出係数を採用しており (Tier 2)、Tier 1 よりも正確な推計であると考えられる。同ガイドラインに示された Tier 1 のデフォルト不確実性の値が上限になると考えられるため、その値 (CH₄ : -57 ~ +100%、N₂O : -70 ~ +150%) を採用した。活動量の不確実性については、「空港管理状況調書」は国土交通省が行う全数調査であり、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値 (-5 ~ +5%) を使用した。その結果、航空からの排出量の不確実性は CH₄ が -57 ~ +100%、N₂O が -70 ~ +150% と評価された。

■ 時系列の一貫性

離着陸当たりの排出係数は、機種別に 2001 年度以降毎年度同一の値を使用する。2000 年度以前は機種別の活動量のデータがないため、2001 年度のデータを基に全機種に用いる平均的排出係数を設定して、同一の値を 1990 年度まで遡って使用する。また、ジェット燃料油の活動量は「航空輸送統計年報」を、航空ガソリンの活動量は「総合エネルギー統計」を、1990 年度から直近年まで全ての時系列において一貫して使用する。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。

QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

ジェット燃料油について、「空港管理状況調書」の離着陸回数の更新により、2017年度のCH₄とN₂O排出量が再計算された。再計算の影響の程度については第10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.2.9.2. 自動車 (1.A.3.b)

本カテゴリーでは、下表に示す車種のエネルギー消費に伴うCH₄、N₂Oの排出を扱う。

表 3-39 自動車からの排出における報告区分とその定義

車種	定義	排出量を報告する燃料種			
		ガソリン	軽油	LPG	天然ガス
軽乗用車	軽自動車のうち、人の輸送用に供する車両	○	—	—	—
乗用車	普通自動車又は小型自動車のうち、人の輸送用に供する車両で、乗車定員10人以下の車両	○	○	○	○
バス	普通自動車又は小型自動車のうち、人の輸送用に供する車両で、乗車定員11人以上の車両	○	○	—	○
軽貨物車	軽自動車のうち、貨物の輸送用に供する車両	○	—	—	—
小型貨物車	小型自動車のうち、貨物の輸送用に供する車両	○	○	—	○(貨物車として分類)
普通貨物車	普通自動車のうち、貨物の輸送用に供する車両	○	○	—	
特種用途車	普通自動車、小型自動車又は軽自動車のうち、散水自動車、広告宣伝用自動車、霊柩自動車その他特種の用途に供する車両	○	○	—	○
二輪車	二輪車	○	—	—	—

表 3-40 車種とインベントリ (CRF 共通報告様式) の部門対応(1.A.3.b)

CRF	車種、または注釈記号
1A3b Road transportation	
i. Cars	軽乗用車、乗用車
ii. Light duty trucks	IE (iii. Heavy duty trucks and buses に含む)
iii. Heavy duty trucks and buses	バス、軽貨物車、小型貨物車、普通貨物車、特種用途車
iv. Motorcycles	二輪車
v. Other	IE (iii. Heavy duty trucks and buses に含む)

自動車のうち、二輪車とそれ以外の自動車では算定方法が異なるため、以下に「3.2.9.2.a. 自動車 (二輪車を除く)」と、「3.2.9.2.b. 二輪車」に分類して記述する。

3.2.9.2.a. 自動車 (二輪車を除く)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは二輪車を除く自動車、すなわち軽乗用車、軽貨物車、乗用車、バス、小型貨物車、普通貨物車、特種用途車からのCH₄、N₂O排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.2、page 3.14、Fig.3.2.3) に従い、Tier 3法を用いて排出量を算定する。

$$E = \sum_i (EF_i \times AD_i)$$

- E : 自動車（二輪車を除く）からの CH₄、N₂O 排出量
 EF_i : 車種別の走行量あたりの排出係数
 AD_i : 車種別の走行量
 i : 車種

■ 排出係数

CH₄及び N₂O の排出係数の設定方法は表 3-41 の通りである。

「自工会等データ」と記されたものについては、(一社)日本自動車工業会(以下、自工会)や研究機関等¹²により提供された排出係数データを基に構築されている。なお、「自工会データ」と記されたものについては、自工会のみより提供されたデータを基に構築されている。そのデータを排出ガス規制¹³年別のコンバインモード¹⁴排出係数等として整理したのち、規制年別保有台数を重みとした加重平均により、各年の排出係数を算出する。保有台数は自動車検査登録情報協会「自検協統計 自動車保有車両数」等を用いる。(表 3-42、表 3-43 参照)

「測定データ」と記されたものについては、我が国における実測データを基にしており、走行速度区別に推計した排出係数と、国土交通省「道路交通センサス」に示された走行速度区別の走行量割合の加重平均で設定する。当該排出係数は混雑時走行速度別の走行量割合を用いており、日本の自動車走行実態を反映させた排出係数となっている。

天然ガス燃料の普通貨物車の N₂O 排出係数は国内における実測値を用いており、走行速度区別に設定した排出係数を、「道路交通センサス」に示された走行速度区別の走行量割合により加重平均し設定する。

天然ガス燃料の乗用車、バス、特種用途車の N₂O 排出係数、及び天然ガス燃料の特種用途車の CH₄排出係数は国内における調査結果がないため、以下の表 3-41 で示す方法で設定する。

詳細な設定方法は、環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第2部(運輸分科会報告書)」(平成18年8月)に記されている。

¹² 環境省、東京都環境局、国立環境研究所、交通安全環境研究所及び石油エネルギー技術センター

¹³ CO、非メタン炭化水素(NMHC)、NOx、粒子状物質(PM)等が規制対象

¹⁴ データは試験モード別に提供されている。JC08モードの場合は、コンバインモード=暖機状態において測定した値×0.75+冷機状態において測定した値×0.25にて計算。

表 3-41 自動車の排出係数の設定方法

車種	ガソリン		軽油		天然ガス	
	CH ₄	N ₂ O	CH ₄	N ₂ O	CH ₄	N ₂ O
軽乗用車	自工会等データ	自工会等データ				
乗用車	自工会等データ	自工会等データ	自工会等データ	自工会等データ	自工会データ	車種の規格を考慮し、小型貨物車の排出係数を利用
バス	2006GL	2006GL	測定データ	2006GL	自工会データ	車両重量を考慮し、普通貨物車の排出係数を、等価慣性重量比率で補正して設定
軽貨物車	自工会等データ	自工会等データ				
小型貨物車	自工会等データ	自工会等データ	自工会等データ	自工会等データ		実測値を基に設定 (貨物車として分類)
普通貨物車	2006GL	2006GL	自工会等データ	自工会等データ	自工会データ	
特種用途車	2006GL	2006GL	測定データ	2006GL	普通貨物車の速度別排出係数と、天然ガ斯特種用途車の走行パターンを考慮して補正した走行速度別走行量割合を用いて設定	

(注)

- 1) 自工会等データ：日本自動車工業会や研究機関等による提供データを基に設定
- 2) 自工会データ：日本自動車工業会による提供データを基に設定
- 3) 測定データ：上記外の実測データを基に設定
- 4) 2006GL：2006年 IPCC ガイドラインに掲載されたデフォルト値を利用
- 5) LPG 燃料車はガソリン燃料車の乗用車と同じ

表 3-42 自動車の CH₄排出係数

燃料種	車種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
ガソリン	軽乗用車	mg-CH ₄ /km	8.3	8.3	8.2	6.9	5.4	5.0	4.8	4.5	4.2	4.0	3.8	3.6	3.5	3.3	
	乗用車 (非ハイブリッド)		14.5	14.5	14.3	11.3	8.6	8.0	7.5	7.1	6.6	6.3	6.0	5.8	5.5	5.3	
	乗用車 (ハイブリッド)		NO	NO	NO	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.3
	バス		14														
	軽貨物車		18.7	18.7	18.0	11.7	7.8	7.3	6.8	6.3	5.9	5.6	5.3	5.0	4.8	4.6	
	小型貨物車		21.2	21.2	21.2	14.5	9.5	8.7	8.0	7.4	6.8	6.2	5.8	5.4	5.0	4.7	
	普通貨物車		14														
	特種用途車		14														
	軽油		乗用車	11.3	12.2	12.6	12.8	12.8	12.8	12.7	12.8	12.9	12.7	12.5	12.2	12.1	11.9
			バス	19.0	18.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0
小型貨物車		9.6	10.7	10.1	8.7	8.3	8.3	8.2	8.1	7.9	7.8	7.7	7.6	7.5	7.4		
普通貨物車		17.0	16.0	15.0	13.9	11.5	11.1	10.6	10.1	9.6	9.0	8.4	7.9	7.3	6.7		
特種用途車		17.0	15.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0		
LPG	乗用車	14.5	14.5	14.3	11.3	8.6	8.0	7.5	7.1	6.6	6.3	6.0	5.8	5.5	5.3		
天然ガス	乗用車	13															
	バス	50															
	貨物車	93															
	特種用途車	105															

表 3-43 自動車の N₂O 排出係数

燃料種	車種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
ガソリン	軽乗用車	mg-N ₂ O/km	14.2	14.2	13.9	9.3	5.9	5.2	4.7	4.1	3.6	3.2	2.9	2.6	2.4	2.2	
	乗用車 (非ハイブリッド)		23.7	23.7	20.3	12.2	7.2	6.3	5.6	5.0	4.4	4.0	3.7	3.4	3.2	3.0	
	乗用車 (ハイブリッド)		NO	NO	NO	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
	バス		25														
	軽貨物車		23.7	23.7	21.7	12.8	8.0	7.4	6.8	6.3	5.8	5.4	5.1	4.8	4.5	4.3	
	小型貨物車		21.1	21.6	21.8	13.1	8.5	7.8	7.2	6.6	6.1	5.6	5.2	4.9	4.6	4.3	
	普通貨物車		25														
	特種用途車		25														
	軽油		乗用車	5.7	4.7	4.4	4.4	4.8	4.9	5.0	5.2	5.4	5.3	5.2	5.0	4.9	4.8
			バス	3													
小型貨物車		9.3	10.3	11.1	11.7	12.1	12.2	12.3	12.4	12.5	12.6	12.7	12.8	12.8	12.9		
普通貨物車		15.0	15.0	14.9	16.9	30.1	31.8	33.3	35.1	37.0	38.8	40.7	42.5	44.0	45.2		
特種用途車		3															
LPG	乗用車	23.7	23.7	20.3	12.2	7.2	6.3	5.6	5.0	4.4	4.0	3.7	3.4	3.2	3.0		
天然ガス	乗用車	0.2															
	バス	38.4															
	貨物車	12.8															
	特種用途車	14.5															

■ 活動量

車種別燃料種別の年間走行量の推計値を活動量として用いる。

2009 年度以前のガソリン、軽油、LPG 車については、国土交通省「自動車輸送統計年報」に示された車種別の走行量に、燃料消費量と燃費から算出される燃料種別の走行距離の割合を乗じて、車種別燃料種別の走行量を推計する。ガソリン乗用車の走行量からハイブリッド乗用車を区分するため、台数に一台当りの年間走行量を乗じて、ハイブリッド乗用車の走行量を推計する。なお、走行量の推計にあたり、国土交通省提供の接続係数により「自動車輸送統計年報」の値は 2010 年度以降の活動量と一貫するように予め換算しておく。

2010 年度以降のガソリン、軽油、LPG 車については、国土交通省「自動車燃料消費量統計年報」の車種別燃料種別走行量を用いる。なお、一部車種については国土交通省「自動車輸送統計月報」の車種別走行量を補助的に用いている。

天然ガス車については、車種別台数に一台当りの年間走行量を乗じて、車種別年間走行量を把握する。台数は 1990 年から 1996 年までは日本ガス協会データによる天然ガス自動車の車種別導入台数を用い、1997 年以後は自動車検査登録情報協会「自検協統計 自動車保有車両数」による天然ガス自動車登録台数とする。一台当りの車種別年間走行量は、「自動車燃料消費量統計年報」の天然ガス自動車の総走行量、「自動車輸送統計年報」の車種別年間走行量、「自検協統計 自動車保有車両数」の車種別登録台数から求める。

表 3-44 自動車の走行量

燃料種	車種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
ガソリン	軽乗用車	百万台km	15,800	40,725	72,436	106,089	132,957	136,641	137,626	146,354	150,254	156,748	160,607	169,649	176,155	180,362
	乗用車（非ハイブリッド）		272,902	304,297	342,901	348,524	325,115	318,911	322,697	315,837	302,713	281,922	272,858	266,825	260,401	255,328
	乗用車（ハイブリッド）		NO	NO	NO	2,560	9,809	14,333	19,549	29,419	38,353	48,023	58,258	67,183	77,866	88,399
	バス		90	30	20	43	81	314	234	181	188	193	212	212	213	221
	軽貨物車		90,707	89,828	79,560	78,333	76,812	75,073	73,153	75,164	77,421	77,724	75,876	76,331	75,192	72,936
	小型貨物車		28,972	20,286	19,582	20,853	20,437	22,228	23,058	23,162	23,172	23,176	22,994	21,467	21,365	21,342
	普通貨物車		364	294	270	605	891	1,411	1,438	1,506	1,385	1,337	1,404	1,376	1,349	1,368
軽油	特種用途車	662	693	1,283	1,272	1,503	2,841	2,728	2,714	2,604	2,474	2,461	2,415	2,476	2,513	
	乗用車	39,831	62,934	55,437	29,124	14,028	10,357	9,308	8,461	8,075	7,875	8,632	9,245	10,596	12,199	
	バス	6,889	6,619	6,488	6,506	6,372	6,178	6,020	6,040	5,975	5,921	5,851	5,709	5,592	5,513	
	小型貨物車	43,649	48,801	45,017	32,816	26,236	23,154	22,564	22,621	22,552	22,227	21,584	20,290	19,802	19,377	
LPG	普通貨物車	57,824	68,143	72,434	69,361	65,292	62,856	61,156	59,395	59,091	58,976	59,368	59,124	59,539	59,778	
	特種用途車	9,173	13,598	17,074	17,108	17,648	20,727	20,476	20,820	21,151	21,270	21,467	21,181	21,067	21,049	
天然ガス	乗用車	18,000	16,848	15,074	13,692	12,114	12,161	11,284	10,666	10,258	9,802	9,239	8,493	8,067	7,365	
	乗用車	0	0	2	6	7	6	5	4	3	2	2	1	1	0	
	バス	NO	NO	2	15	48	56	52	49	47	39	34	28	22	15	11
	貨物車	0	10	79	254	308	303	305	283	265	254	230	198	170	141	
天然ガス	貨物車	0	2	18	57	69	67	66	65	62	56	49	39	33	27	
	特種用途車	0	2	18	57	69	67	66	65	62	56	49	39	33	27	

○ ガソリン乗用車からの N₂O 排出量の推移について

ガソリン乗用車に対する大気汚染物質の排出ガス規制が 1978 年に強化され、床下型の三元触媒が装着され始めると、走行距離当たりの N₂O 排出量が増加した。三元触媒装着車が広く普及する 1986 年までは、走行距離あたりの N₂O 排出量は増加傾向にあった。その後しばらく新しい規制は定められず、そのため、1986 年～1997 年の間は走行距離当たりの N₂O 排出量は定常状態であった。しかし、1997 年より低排出ガス対策車販売、2000 年より新短期規制が導入され、直下型触媒コンバータが装着されたことにより、走行距離あたりの N₂O 排出量が減少し始め、1997 年以降減少傾向にある。

触媒による有害ガスの浄化は、触媒温度がある閾値を超えないと始まらない。そのため、冷始動時の触媒早期活性化（迅速な触媒の高温化）を図って、触媒が排気マニホールドの直下に配置されたものが直下型触媒コンバータである。N₂O は中間温度帯で生成されるが、直下型触媒コンバータは短時間でその温度帯以上の温度に達するため、N₂O 排出量を低減できる（後藤他、2003；依田他、2010）。床下型触媒搭載車両と直下型触媒搭載車両を同一の試験モードで走行させた際の N₂O 排出を下図に示す。

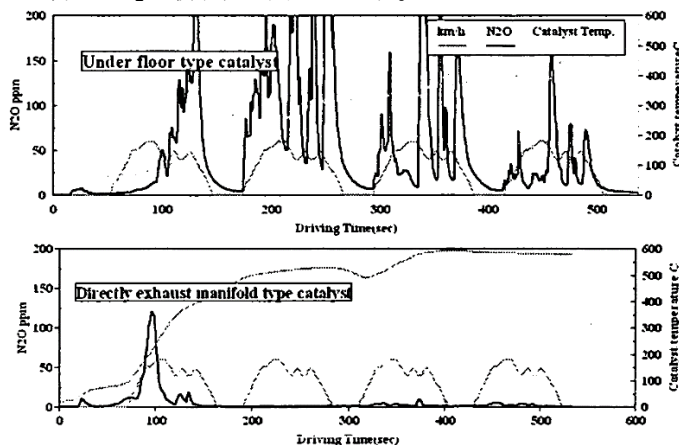


図 3-6 触媒設置位置による N₂O 排出の差異

試験モード：11 モード、上段：床下型、下段：直下型（出典）後藤他（2003）

■ 完全性について

【バイオ燃料】

バイオ燃料が近年使用されているが、自動車からの CH₄、N₂O 排出量は燃料消費量ではなく車種別の走行量を活動量としており、バイオ燃料分の走行距離を抽出することが困難であることから、既存のガソリン・軽油由来の CH₄、N₂O 排出量にすでに含まれているものとみなし、「IE」と報告している。

【メタノール燃料】

国内のメタノール自動車の保有台数は、二輪車を含めても9台（2016年3月末時点、自動車検査登録情報協会調べ）と活動量は微小であるため、排出量はごく微量であると仮定し報告を行わない。

【潤滑油】

2006年 IPCC ガイドライン Vol.3, page 5.7 によれば、潤滑油の使用による CH₄、N₂O の排出量は CO₂ に比べて極めて少なく、排出量の算定上無視できるとされているので「NE」と報告している。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

自動車の排出係数は、自工会等から提供された実測排出データから推計している。サンプル数が5を超えるものについては（対数）正規分布を仮定し95%信頼区間を求めることにより不確実性を算定した。サンプル数が5未満については2006年 IPCC ガイドラインの不確実性のデフォルト値を採用した。活動量の不確実性については、「自動車燃料消費量統計年報」の値を使用していることから、内閣府のサービス統計・企業統計部会において示されている自動車燃料消費量調査の標本誤差率を採用した。推計の結果、二輪車を含む自動車の排出量の不確実性は CH₄ が -36～+104%、N₂O が -37～+107% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、全ての時系列において同一の手法を用い構築している。ガソリン車、ディーゼル車、LPG車の2009年度までの活動量は、国土交通省提供の接続係数を用いて2010年度以降の活動量と一貫するように推計している。天然ガス車の活動量については、天然ガス車が広く普及する以前の1996年までの台数は日本ガス協会の累積普及台数を、1997年以降は実際の運用台数を把握し始めた「自検協統計 自動車保有車両数」の登録台数を用いて、より実態に近い台数の把握に努めている。その他の天然ガス車の活動量データは「自動車輸送統計年報」及び「自検協統計 自動車保有車両数」の値を元に、1990年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で推計している。

d) QA/QC と検証

■ QA/QC

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

■ 検証

2014年提出インベントリの対日審査（FCCC/ARR/2014/JPN パラグラフ40）において、車種別の年次台数、一台当たりの年間走行量、そして車種別の燃費の情報を追加することを ERT より勧告された。また、年間走行量と燃費がエネルギーバランス表に報告された燃料消費量と相違がないか比較することを勧告された。

まず、車種別の年次台数、一台当たりの年間走行量、そして車種別の燃費は次に示す表のとおりである。なお、前述のとおり必ずしもこれら全てのデータを活動量の算定に用いているわけではないことに留意されたい。

エネルギーバランス表) も一次統計として国土交通省の同統計の燃料消費量を用いており、したがって、CO₂、CH₄、N₂O いずれのガスについても、排出量の算定の基礎として同一の統計を使用している。

e) 再計算

排出係数の実測値が自工会より提供された。また、2017年度のQAWGにおける指摘を踏まえて、環境省、東京都環境局、国立環境研究所、交通安全環境研究所及び石油エネルギー技術センターからも排出係数の実測値が提供された。加えて、ディーゼル重量車の平成28年規制及び乗用車の平成30年規制を算定方法に反映した。(ただし、平成30年規制は2018年度以降にのみ適用されるため、再計算には当たらない。) これにより、2003年度以降のガソリンハイブリッド乗用車、2005年度以降の軽乗用車、ガソリン乗用車、ガソリン小型貨物車、ディーゼル小型貨物車、ディーゼル普通貨物車、2007年度以降の軽貨物車について排出係数が更新された。以上より、2003～2017年度のCH₄及びN₂O排出量が再計算された。再計算の影響の程度については第10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

排出係数をより我が国の実態に合った値に見直すかどうか必要に応じて検討する。

3.2.9.2.b. 二輪車

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、二輪車からのCH₄、N₂O排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

二輪車からのCH₄及びN₂Oの排出量は、2006年IPCCガイドラインのデシジョンツリー(Vol.2, page 3.14, Fig.3.2.3)に従い、Tier 3法を用いて算定する。同ガイドラインのTier 3算定式(Vol.2, page 3.15, Equation 3.2.5)は、エンジンが温まった状態(暖機状態)での排出量と、始動時にエンジンが冷えている状態(冷機状態)での排出量の、二つの状態区別の算定値を合計する方法を示している。

我が国では、二輪車に対して1999年より排出ガス規制¹⁵を実施しており、規制対象の各車種の「暖機状態」及び「冷機状態」におけるエンジンからのCH₄及びN₂O排出係数について、自工会が試験により排出ガスデータを把握している。排出ガス規制対応車についてはこれらの排出係数を、未規制車に対しては2006年IPCCガイドラインのデフォルト値を用い、以下の式より各車種・各規制対応別二輪車からのCH₄及びN₂O排出量を推計し、積算する。

$$E = \sum_{i,j} (EF_{hot,i,j} \times AD_{hot,i,j} + EF_{cold,i,j} \times AD_{cold,i,j})$$

E	: 二輪車からのCH ₄ 、N ₂ O排出量
$EF_{hot,i,j}$: 車種別、規制対応別の走行量あたりの排出係数
$AD_{hot,i,j}$: 車種別、規制対応別の年間総走行量
$EF_{cold,i,j}$: 車種別、規制対応別の1始動回あたりの排出係数
$AD_{cold,i,j}$: 車種別、規制対応別の年間始動回数
i	: 車種
j	: 規制対応

¹⁵ CO、炭化水素(HC)及びNO_xが規制対象

■ 排出係数

【暖機状態】

排出ガス規制対応車の CH₄及び N₂O 排出係数は、自工会提供の車種別排出係数を用いる。排出ガス規制未対応車の CH₄及び N₂O 排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いる。

表 3-48 二輪車「暖機状態」の CH₄、N₂O 排出係数 [mg/km]

車種 (排気量)	3次規制対応車 ¹⁾		1次2次規制対応車 ¹⁾		排出ガス規制未対応車 ²⁾	
	CH ₄	N ₂ O	CH ₄	N ₂ O	CH ₄	N ₂ O
原付一種 (50cc 以下)	2.1	0.18	13.3	2.64	53	4
原付二種 (51cc-125cc)	3.4	1.39	16.7	0.23		
軽二輪 (126cc-250cc)	6.7	0.18	12.5	0.85		
小型二輪 (250cc 超)	3.8	0.20	22.2	1.09		

(注)

- 1) 自工会提供データ
- 2) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 3.22, Table 3.2.3 Motorcycles/Uncontrolled/Running(hot)

【冷機状態】

排出ガス規制対応車の CH₄及び N₂O 排出係数は、自工会提供データを用いる。排出ガス規制未対応車の CH₄及び N₂O 排出係数は、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いる。

表 3-49 二輪車「冷機状態」の CH₄、N₂O 排出係数 [mg/回]

車種 (排気量)	3次規制対応車 ¹⁾		1次2次規制対応車 ¹⁾		排出ガス規制未対応車 ²⁾	
	CH ₄	N ₂ O	CH ₄	N ₂ O	CH ₄	N ₂ O
原付一種 (50cc 以下)	32.3	5.6	15.8	11.2	33	15
原付二種 (51cc-125cc)	41.7	18.9	18.3	4.2		
軽二輪 (126cc-250cc)	9.3	9.1	30.2	13.7		
小型二輪 (250cc 超)	35.0	11.8	26.1	6.9		

(注)

- 1) 自工会提供データ
- 2) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 3.22, Table 3.2.3 Motorcycles/Uncontrolled/Cold Start

■ 活動量

【暖機状態】

車種別・排出ガス規制対応別年間走行量の推計にあたっては、まず車種別の保有台数（自工会「自動車統計月報」）をベースに、販売年別・車種別販売台数（自工会及び全国軽自動車協会連合会）に車種別・経過年数別残存率（日本自動車研究所、2008）を乗じて各年度の保有台数の経過年別の割合を把握して、販売年別・車種別保有台数を推計し、これに1台あたり車種別年間走行距離（自工会「二輪車市場動向調査」から算出）と車種別・経過年数別使用係数（日本自動車研究所、2007）を乗じて販売年別・車種別年間走行量とする。排出ガス規制対応の区分については販売年により判断する。

【冷機状態】

車種別・排出ガス規制対応別年間始動回数の推計にあたっては、「暖機状態」の活動量の算定過程で得られた販売年別・車種別保有台数に、1台あたり車種別年間始動回数（「二輪車市場動向調査」から算出）と車種別・経過年数別使用係数（日本自動車研究所、2007）を乗じて販売年別・車種別年間始動回数とする。排出ガス規制対応の区分については販売年により判

断する。

表 3-50 二輪車の活動量

活動量	車種 (排気量)	規制対応	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
走行量	原付一種 (50cc以下)	3次規制	百万台km	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	522	852	
		1次2次規制		NO	NO	1,773	4,165	3,919	3,643	3,182	3,092	3,325	3,248	2,829	2,646	1,905	1,428		
		未規制		10,623	6,268	3,153	753	169	112	66	42	29	18	10	6	3	2		
	原付二種 (51cc-125cc)	3次規制		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	531	1,081
		1次2次規制		NO	NO	243	1,237	2,013	2,192	2,540	2,695	2,877	2,992	2,909	2,993	2,427	1,951		
		未規制		2,060	1,853	1,568	686	238	172	131	91	61	39	23	14	8	5		
	軽二輪 (126cc-250cc)	3次規制		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	478	926
		1次2次規制		NO	NO	565	2,664	3,194	3,127	3,025	3,053	3,141	3,208	3,268	3,277	2,494	2,131		
		未規制		6,111	3,577	2,209	1,055	418	330	252	195	147	109	79	56	35	23		
	小型二輪 (290cc超)	3次規制		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	474	920
		1次2次規制		NO	NO	317	1,662	2,637	2,751	2,781	2,952	2,883	3,037	3,471	3,568	2,896	2,552		
		未規制		3,568	3,083	2,505	1,292	677	559	448	367	271	212	179	136	93	69		
始動回数	原付一種 (50cc以下)	3次規制	百万回	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	110	179	
		1次2次規制		NO	NO	349	739	673	626	592	574	577	564	550	513	400	300		
		未規制		1,838	1,131	621	134	29	19	12	8	5	3	2	1	1	0		
	原付二種 (51cc-125cc)	3次規制		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	58	117
		1次2次規制		NO	NO	31	140	209	228	245	259	274	285	325	334	264	212		
		未規制		285	255	203	78	25	18	13	9	6	4	3	2	1	0		
	軽二輪 (126cc-250cc)	3次規制		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	28	54
		1次2次規制		NO	NO	41	177	197	193	195	196	179	183	204	204	146	124		
		未規制		361	223	159	70	26	20	16	13	8	6	5	4	2	1		
	小型二輪 (250cc超)	3次規制		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	10	20
		1次2次規制		NO	NO	19	78	107	111	111	117	95	87	111	114	62	55		
		未規制		187	177	154	60	28	23	18	14	9	6	6	4	2	1		

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

二輪車の排出量の不確実性は、二輪車を除く自動車とともに「3.2.9.2.a 自動車（二輪車を除く）」にまとめて報告しており、同項の不確実性の記述を参照されたい。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、全ての時系列において同一の値を用いて算定している。活動量については、保有台数、1台あたり走行量、及び一台あたり始動回数ともに自工会、軽自動車協会連合会、及び環境省のデータを元に、1990年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で推計している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

3次規制を算定方法に反映したこと、2017年度の原付自転車の保有台数が得られたこと、軽二輪車の2012年度の販売台数が更新されたこと、及び1次2次規制の排出係数の端数処理を変更したことから、1999～2017年度のCH₄、N₂O 排出量が再計算された。再計算の影響の程度については第10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.2.9.3. 鉄道 (1.A.3.c)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、鉄道の走行に伴うエネルギー消費からの CH₄、N₂O 排出を扱う。
鉄道からの CH₄、N₂O 排出量は、軽油を利用するディーゼル鉄道車両からの排出が主であり、石炭を利用する蒸気機関車からの排出が少量存在する。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol. 2, page 3.41, Fig. 3.4.2) に従い、Tier 1 法を用いて排出量を算定する。

$$E = \sum_i (EF_i \times AD_i)$$

E : 鉄道からの CH₄、N₂O 排出量
 EF_i : 鉄道における燃料別の排出係数
 AD_i : 燃料種別の年間燃料消費量
 i : 燃料種 (軽油・石炭)

■ 排出係数

ディーゼル鉄道車両における排出係数は、2006年 IPCC ガイドラインに示された「Diesel」のデフォルト値を軽油の発熱量を用いてリットルあたりに換算した値を用いる。

蒸気機関車における排出係数は、2006年 IPCC ガイドラインに示された「Sub-bituminous Coal」のデフォルト値を輸入一般炭の発熱量を用いて重量あたりに換算した値を用いる。

表 3-51 鉄道の排出係数のデフォルト値

ガス	単位	ディーゼル鉄道車両	蒸気機関車
CH ₄	kg-CH ₄ /TJ(NCV)	4.15	2
N ₂ O	kg-N ₂ O/TJ(NCV)	28.6	1.5

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, p. 3.43, Table 3.4.1

■ 活動量

ディーゼル鉄道車両における軽油の消費量及び蒸気機関車における石炭の消費量は、「総合エネルギー統計」に示された鉄道の軽油及び石炭の消費量をそれぞれ活動量として用いる。

表 3-52 鉄道からの排出の算定に使用する活動量

燃料種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
軽油	千L	356	313	270	248	225	218	211	211	205	199	198	189	189	189
石炭	kt	1.3	1.2	1.7	1.4	1.7	1.7	1.7	1.6	1.5	1.5	1.5	1.6	1.6	1.6

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

鉄道の排出係数は2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を採用しており、排出係数の不確実性については同ガイドラインに示された不確実性のデフォルト値 (CH₄: -60~+151%、N₂O: -50~+200%) を採用した。活動量は「総合エネルギー統計」の値を採用しており、活動量の不確実性については2006年 IPCC ガイドラインの示されたデフォルト値 (-5~+5%) を採用する。その結果、鉄道からの排出量の不確実性は、CH₄が-60~+151%、N₂O が-50~+200%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、全ての時系列において同一の値を使用している。また活動量は、全ての時系

列において「総合エネルギー統計」の値を一貫して使用している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」におけるエネルギー消費量の修正により、2017年度の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については第10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.2.9.4. 船舶 (1.A.3.d)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、旅客や貨物を輸送する内航船舶の航行におけるエネルギー消費に伴う CH₄、N₂O の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol. 2, page 3.49, Fig. 3.5.1) に従い、Tier 1 法を用いて、排出量を算定する。

$$E = \sum_i (EF_i \times AD_i)$$

- E : 内航船舶からの CH₄, N₂O 排出量
- EF_i : 内航船舶における燃料消費に伴う排出係数
- AD_i : 内航船舶における各燃料消費量
- i : 燃料 (軽油・A 重油・B 重油・C 重油)

■ 排出係数

2006年 IPCC ガイドラインに示された「Ocean-going Ships」のデフォルト値 (以下の表参照) を、燃料種 (軽油、A 重油、B 重油、C 重油) 別の発熱量を用いてリットルあたりに換算した値を使用する。

表 3-53 船舶の排出係数のデフォルト値

ガス	排出係数
CH ₄	7 [kg-CH ₄ /TJ(NCV)]
N ₂ O	2 [kg-N ₂ O/TJ(NCV)]

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, p. 3.50, Table 3.5.3

■ 活動量

「総合エネルギー統計」に示された船舶の燃料種別の消費量を活動量として用いる。

表 3-54 船舶からの排出の算定に使用する活動量

燃料種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
軽油	千L	133	208	204	195	163	154	149	141	142	157	139	147	155	155
A重油	千L	1,602	1,625	1,728	1,324	946	1,007	969	1,006	994	984	980	1,010	1,005	991
B重油	千L	526	215	152	63	20	18	16	16	14	12	9	6	6	5
C重油	千L	2,446	3,002	3,055	2,873	2,420	2,482	2,460	2,517	2,487	2,482	2,386	2,361	2,332	2,360

■ 完全性について

2006年 IPCC ガイドライン Vol.3, page 5.7によれば、潤滑油の使用による CH₄、N₂O の排出量は CO₂に比べて極めて少なく、無視できるとされていることから、排出量の算定は行わない。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

船舶の排出係数は2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を採用しており、排出係数の不確実性については同ガイドラインに示された不確実性のデフォルト値 (CH₄ : -50~+50%、N₂O : -40~+140%) を採用した。活動量は「総合エネルギー統計」の値を採用しており、活動量の不確実性については2006年 IPCC ガイドラインの示されたデフォルト値 (-13~+13%) を採用した。その結果、船舶からの排出量の不確実性は、CH₄が-52~+52%、N₂O が-42~+141%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、全ての時系列において同一の値を使用している。船舶の活動量は「総合エネルギー統計」の値を、1990年度から直近年まで全ての時系列において一貫して使用している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」におけるエネルギー消費量の修正により、2017年度の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については第10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.2.9.5. その他輸送 (1.A.3.e)

我が国ではパイプラインによる物資の輸送の際、化石燃料を燃焼させておらず、また他に該当する活動が存在しないため、本カテゴリーを「NO」と報告している。

3.2.10. その他部門 (1.A.4) 及びその他 (1.A.5) における CO₂ の排出

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、業務 (1.A.4.a)、家庭 (1.A.4.b)、農林水産業 (1.A.4.c)、その他 (1.A.5) におけるエネルギー消費からの CO₂排出を扱う。国防用途での燃料の燃焼に伴う排出については業務 (1.A.4.a) に含む。

2018年度における当該カテゴリからのCO₂排出量は139,247 ktであり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCFを除く）の11.2%を占めている。うち「1.A.4.a 業務」からの排出が51.5%と、当該カテゴリで最も多くを占めている。

b) 方法論

■ 算定方法

エネルギー産業（1.A.1）と同様に、2006年IPCCガイドラインのデシジョンツリー（Vol.2、page 1.9、Fig.1.2）に従い、Tier 2 部門別アプローチ（Sectoral Approach）法を用いて排出量の算定を行った。3.2.4. b) 節を参照のこと。

2006年IPCCガイドラインに従い、「エネルギーとして利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出」に該当する熱量と排出量を、燃料の燃焼（1.A.）の「その他化石燃料（other fossil fuels）」及び「バイオマス（biomass）」に報告している。

エネルギー利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出量の算定には、2006年IPCCガイドラインに従い、廃棄物の焼却（カテゴリ5.C.）で用いる排出係数や算定方法を適用している。詳細な算定方法は第7章を参照のこと。

バイオマスからのCO₂排出は、2006年IPCCガイドラインに従い、我が国の総排出量には含めず、CRFに参考値として報告している。

■ 排出係数

エネルギー産業（1.A.1）に示した排出係数を用いた。3.2.4. b) 節を参照のこと。

■ 活動量

エネルギー産業（1.A.1）と同様に、当該部門の活動量は「総合エネルギー統計」を用いている。

各部門の活動量については、「総合エネルギー統計」に示された、業務他部門（#650000）、家庭部門（#700000）、農林水産業部門（#611000）の最終エネルギー消費量、自らの事業所内で使用するために行った発電に伴うエネルギー消費量（自家用発電 #25xxxx）、同じく自らの事業所内で使用するために行った蒸気の発生に伴うエネルギー消費量（自家用蒸気発生 #26xxxx）の合計としている。なお、上記の最終エネルギー消費量には、原料用として用いられた分（非エネルギー利用 #951100、#951800、#952000）が内数として含まれているため、当該分を差し引いている。

「総合エネルギー統計」の農林水産業部門（#611000）における各燃料消費量に、平成26年度及び27年度の環境省調査結果に基づく移動・固定発生源別の燃料消費量割合（表3-57）を乗じて、燃料消費量を移動発生源と固定発生源に振り分けた。移動発生源、固定発生源それぞれのCRFにおける報告先は表3-56を参照のこと。

自家用発電及び自家用蒸気発生部門は、「総合エネルギー統計」においてはエネルギー転換部門に含まれるが、2006年IPCCガイドラインでは、発電等のために消費したエネルギーから排出されるCO₂は、その発電等を行った部門に報告することを原則としているため、それに従い、最終エネルギー消費部門における各事業所からのCO₂排出量と合計し、「1.A.4」に報告している。

表 3-55 その他部門（1.A.4）におけるエネルギー消費量（単位：PJ）

エネルギー源	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
液体燃料	1,939	2,093	2,200	2,231	1,568	1,581	1,515	1,423	1,451	1,356	1,299	1,286	1,293	1,174
固体燃料	3	2	1	1	17	19	15	12	15	12	12	29	21	81
気体燃料	418	537	649	731	835	835	847	826	836	832	846	850	909	862
その他化石燃料	196	219	257	278	241	243	242	257	248	246	239	274	278	278
バイオマス	15	18	22	44	52	59	62	63	65	73	84	64	68	72
合計	2,572	2,868	3,129	3,285	2,714	2,738	2,681	2,582	2,615	2,518	2,479	2,503	2,569	2,467

表 3-56 「総合エネルギー統計」とインベントリ (CRF 共通報告様式) の部門対応 (1.A.4、1.A.5)

CRF		総合エネルギー統計	
1A4	Other sectors		
1A4a	Commercial/institutional	自家用発電 (電気業[#255330] (2015まで)、農林水産鉱建設[#251000]、製造業[#252000]を除く。)	#250000
		自家用蒸気発生 (農林水産鉱建設[#261000]、製造業[#262000]を除く。)	#260000
		最終エネルギー消費 業務他	#650000
		▲非エネルギー利用 業務他	#951800
1A4b	Residential	最終エネルギー消費 家庭	#700000
		▲非エネルギー利用 家庭	#952000
1A4c	Agriculture/forestry/fishing		
i	Stationary	自家用発電 農林水産鉱建設(農林水産業)	#251000
		自家用蒸気発生 農林水産鉱建設(農林水産業)	#261000
		最終エネルギー消費 農林水産業(#611000)のうち固定発生源(推計値)	
		▲非エネルギー利用 農林水産鉱建設業(農林水産業)	#951100
ii	Off-road vehicles and other machinery	最終エネルギー消費 農業(#611100)のうち移動発生源(推計値)	
		最終エネルギー消費 林業(#611200)のうち移動発生源(推計値)	
iii	Fishing	最終エネルギー消費 漁業(#611300)のうち移動発生源(推計値)	
		最終エネルギー消費 水産養殖業(#611400)のうち移動発生源(推計値)	
1A5	Other	NO	-

(注) ▲非エネルギー利用：原料用として用いられた分を差し引いている。

表 3-57 農林水産業 (1.A.4.c) 部門における固定・移動排出源別の燃料消費割合

燃料種	農業部門		林業部門		水産養殖業部門			漁業部門		
	移動 発生源	固定 発生源	移動 発生源	固定 発生源	移動 発生源 (船舶)	移動 発生源	固定 発生源	移動 発生源 (船舶)	移動 発生源	固定 発生源
軽油	99%	1%	100%	0%	0%	100%	0%	0%	100%	0%
A 重油	5%	95%	0%	100%	100%	0%	0%	100%	0%	0%
灯油	2%	98%	0%	100%	0%	0%	100%	0%	0%	100%
LPG、 都市ガス	5%	95%	0%	100%	0%	0%	100%	0%	0%	100%

(出典) 環境省 (2015a)

c) 不確実性と時系列の一貫性

エネルギー産業 (1.A.1) に記載した内容と同一である。3.2.4. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の更新に伴う活動量及び排出係数の更新により、2013～2017年度について排出量が再計算された。

廃棄物分野における統計データの更新及び算定方法の改善に伴い、2005～2017年度のその他化石燃料のCO₂排出量が再計算された。詳細は7.4.3節を参照のこと。

再計算の影響の程度については第10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.2.11. その他部門（1.A.4）及びその他（1.A.5）における CH₄ と N₂O の排出

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、業務（1.A.4.a）、家庭（1.A.4.b）、農林水産業（1.A.4.c）、その他（1.A.5）におけるエネルギー消費からの CH₄、N₂O 排出を扱う。

移動発生源のうち、特殊自動車（農業機械、林業機械等）、漁船等におけるエネルギー消費に伴う CH₄、N₂O 排出も本カテゴリーで扱う。国防用途での燃料の燃焼に伴う排出については業務（1.A.4.a）に含む。

b) 方法論

■ 算定方法

○ 各種炉

業務（1.A.4.a）及び農林水産業（1.A.4.c）の固定発生源については、エネルギー産業（1.A.1）と同様、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol.2、page 1.9、Fig.1.2）に従い、Tier 3 法を用いて排出量を算定した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーについては、エネルギー産業（1.A.1）と同様の方法で算定した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ 家庭で使用される機器

家庭（1.A.4.b）については、炉種別の活動量が利用可能でないため、Tier 1 法で算定した。

○ 特殊自動車等

農林水産業（1.A.4.c）の移動発生源については、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol.2、page 3.34、Fig.3.3.1）に従い、Tier 1 法で算定した。

■ 排出係数

○ 各種炉

業務（1.A.4.a）及び農林水産業（1.A.4.c）については、エネルギー産業（1.A.1）で設定した各施設の排出係数を用いた。表 3-23、表 3-24 を参照のこと。

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーの排出係数は、エネルギー産業（1.A.1）と同様の方法で設定した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ 家庭で使用される機器

家庭（1.A.4.b）については、2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2、pages 2.22-2.23、Table 2.5 に示されるデフォルト排出係数を使用した。

表 3-58 家庭（1.A.4.b）におけるCH₄、N₂O 排出係数

炉種	燃料種	CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ /TJ]	N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O/TJ]
家庭で使用される機器	液体燃料	9.5	0.57
	固体燃料	290	1.4
	気体燃料	4.5	0.090
	バイオマス燃料	290	3.8

(注) デフォルト値（2006年 IPCC ガイドライン Vol.2, page 1.16）に 0.95（液体・固体・バイオマス燃料）ないし 0.9（気体燃料）を乗じて高位発熱量換算

○ 特殊自動車等

農業、漁業、水産養殖業の移動発生源で使用される軽油については欧州環境機関（2016）の表 3-1 の「Diesel」に記載の「1.A.4.c.ii-Agriculture」の排出係数を設定する。また、農業で使用される A 重油、灯油については、同ガイドブックに各燃料種固有の排出係数は示されていないが、主な使用機器がトラクターであることから、軽油と同じ値を使用する。農業の LPG、都市ガスについては同表の「LPG」の値を使用する。さらに林業の軽油には同表の「Diesel」に記載の「1.A.4.c.ii-Forestry」の排出係数を設定する。

また、漁業と水産養殖業の船舶で使用する A 重油には、2006 年 IPCC ガイドライン vol.2, page 3.50, Table 3.5.3 の「Default water-borne navigation CH₄ and N₂O emission factors」の排出係数を設定する。

表 3-59 農林水産業（1.A.4.c）の特殊自動車等からの CH₄、N₂O 排出係数

燃料種	単位	CH ₄ 排出係数	N ₂ O 排出係数	出典
軽油、灯油、船舶用途外 A 重油	g/t	87	136	欧州環境機関（2016）、Non-road mobile sources and machinery, Table 3-1
林業用軽油	g/t	49	138	
LPG、都市ガス	g/t	354	161	
船舶用 A 重油	kg/TJ(NCV)	7	2	2006 年 IPCC ガイドライン Vol.2, Table 3.5.3

■ 活動量

○ 各種炉

「総合エネルギー統計」の部門別、燃料種別の燃料消費量に、表 3-57 の固定発生源の割合及び炉種別燃料消費量割合を乗じて得られた燃料消費量を固定発生源すなわち各種炉の活動量とした。炉種別の燃料消費量割合は、エネルギー産業（1.A.1）と同様、「大気汚染物質排出量総合調査」及び各燃料消費統計である「石油等消費動態統計年報」、「エネルギー消費統計」、「電力調査統計」及び「ガス事業生産動態統計」のデータを使用して推計した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ バイオマスボイラー

バイオマスボイラーについては、製造業及び建設業（1.A.2）と同様の方法で設定した。3.2.5. b) 節を参照のこと。

○ 家庭で使用される機器

家庭部門については、「総合エネルギー統計」の燃料種別燃料消費量を活動量とする。

○ 特殊自動車等

「総合エネルギー統計」の農林水産業部門における燃料種別の燃料消費量に表 3-57 の移動発生源の割合を乗じて算出した燃料消費量を、移動発生源すなわち特殊自動車等の活動量とする。

c) 不確実性と時系列の一貫性

○ 各種炉（バイオマスボイラー含む）

製造業及び建設業（1.A.2）に記載した内容と同一である。3.2.7. c) 節を参照のこと。

○ 家庭で使用される機器

排出係数の不確実性については、デフォルト値を使用する。活動量の不確実性については、3.2.4. c) 節で設定した固体燃料、液体燃料、気体燃料の活動量の不確実性を使用する。

○ 特殊自動車等

製造業及び建設業（1.A.2）に記載した内容と同一である。3.2.7. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の2013～2017年度で活動量が更新されたため、当該年度のCH₄及びN₂Oの排出量を再計算した。

廃棄物分野における統計データの更新に伴い、2017年度のCH₄とN₂Oの排出量を再計算した。詳細は7.4.3.節を参照のこと。

再計算の影響の程度については第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

エネルギー産業（1.A.1）に記載した内容と同一である。3.2.5. f) 節を参照のこと。

3.2.12. エネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出量

エネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出には、以下のような方法で廃棄物が原料あるいは燃料として使用される場合が該当する。

- 「廃棄物が焼却される際にエネルギー回収が行われる場合」
- 「廃棄物が原燃料として直接利用される場合」
- 「廃棄物が燃料に加工された後に利用される場合」

これらに該当する排出源からの排出量の算定には、2006年 IPCC ガイドラインに従い廃棄物の焼却（カテゴリー5.C.）の方法論を適用し、算定した排出量は2006年 IPCC ガイドラインに従い燃料の燃焼（カテゴリー1.A.）で報告する。算定方法については、第7章を参照のこと。

排出量の報告カテゴリーは、廃棄物別に、原燃料としての利用用途に応じて、表3-60の通りエネルギー産業（1.A.1）、製造業・建設業（1.A.2）もしくはその他部門（1.A.4）に報告する。報告する際の燃料種は「その他化石燃料（other fossil fuels）」及び「バイオマス（biomass）」とする。なお、プラスチックの高炉還元剤利用やコークス炉化学原料利用のように、廃棄物を原料として直接利用する過程もしくは廃棄物を原料として製造した中間製品を利用する際に温室効果ガスが排出される場合も算定対象とする。

また、廃棄物から加工された燃料として、ごみ固形燃料（RDF：Refuse Derived Fuel、RPF：Refuse Paper and Plastic Fuel）も算定対象とする。

表 3-60 廃棄物の焼却等（エネルギー分野での報告）（1.A）で排出量の算定を行う区分

区分	算定対象		燃料種区分	処理方式	CO ₂	CH ₄	N ₂ O					
1.A.1. (7.4.3.1) ⁷⁾	一般廃棄物	プラスチック	石油由来プラスチック	Other fossil fuels	焼却される際にエネルギーを回収	○	○	○				
			バイオマスプラスチック	Biomass ⁸⁾								
		紙くず	石油由来成分	Other fossil fuels ⁹⁾					・焼却炉 -全連続 燃焼式	○	○ ²⁾	○ ²⁾
			生物起源成分	Biomass					-准連続 燃焼式	○		
		紙おむつ（石油由来成分）		Other fossil fuels					-バッチ 燃焼式	○		
		繊維くず	合成繊維	Other fossil fuels					・ガス化 溶融炉	○		
			天然繊維	Biomass						○		
	その他（生物起源）		Biomass		○							
	産業廃棄物	廃油	石油由来の廃油	Other fossil fuels	焼却炉	○	○	○				
			動植物性廃油	Biomass		○	○	○				
		廃プラスチック類	石油由来プラスチック	Other fossil fuels		○	○	○				
			バイオマスプラスチック	Biomass ⁸⁾		○	○	○				
		食物くず〔動植物性残さ・動物の死体〕		Biomass		○	○	○				
		紙くず	石油由来成分	Other fossil fuels ⁹⁾		○	○	○				
			生物起源成分	Biomass		○	○	○				
		木くず（生物起源）		Biomass		○	○	○				
		繊維くず	合成繊維	-		○	○	○				
			天然繊維	Biomass		○	○	○				
	汚泥	下水汚泥	-	○	○	○						
		下水汚泥以外	Biomass	○	○	○						
特別管理産業廃棄物			-	○	○	○						
1.A.1/2 (7.4.3.2) ⁷⁾	一般廃棄物	プラスチック	石油由来プラスチック	Other fossil fuels	原燃料として直接利用	○	○	○				
			バイオマスプラスチック	Biomass ⁸⁾								
	産業廃棄物	廃油	石油由来の廃油	Other fossil fuels					○	○	○	
			動植物性廃油	Biomass					○	○	○	
	廃プラスチック類	石油由来プラスチック	Other fossil fuels	○					○	○		
		バイオマスプラスチック	Biomass ⁸⁾	○					○	○		
	木くず		Biomass	○					○	○		
	廃タイヤ	石油由来成分	Other fossil fuels	○					○	○		
バイオマス起源成分		Biomass ⁸⁾	○	○	○							
1.A.1/2 (7.4.3.3) ⁷⁾	ごみ固形燃料 (RDF)	石油由来成分	Other fossil fuels	燃料に加工された後に利用	○	○	○					
		生物起源成分	Biomass ⁸⁾									
	ごみ固形燃料 (RPF)	石油由来成分	Other fossil fuels					○	○	○		
		生物起源成分	Biomass ⁸⁾					○	○	○		

(注)

- 2006年 IPCC ガイドラインに従い、生物起源の廃棄物の焼却に伴う CO₂排出量は、総排出量には含めず参考値として算定し、CRF には燃料種「Biomass」として報告する。
- 対象の算定区分をまとめて焼却方式別に算定し、CRF には燃料種「Other fossil fuels」として報告する。
- 石油由来プラスチックに含まれる。
- 紙くず（生物起源成分）に含まれる。
- エネルギー回収を伴わない特別管理産業廃棄物の焼却に含まれる。
- 石油由来成分に含まれる。
- 報告カテゴリーの詳細は該当節の記述を参照のこと。
- 固形廃棄物等（プラスチック、廃タイヤ、RDF、RPF）に含まれる生物起源成分について、混合された固形廃棄物の熱量データを分離する妥当な方法がなく、エネルギー分野で報告する熱量ベースでの活動量は石油由来成分から分離が困難なことから、「Other fossil fuels」に含めて IE として報告する。
- 紙くずに含まれる石油由来成分について、エネルギー分野で報告する熱量ベースでの活動量は生物起源成分から分離が困難なことから、「Biomass」に含めて IE として報告する。

表 3-61 廃棄物の焼却等（エネルギー分野での報告）（1.A）での排出量報告区分

処理方式	算定対象	燃料利用の内訳	主な用途	エネルギー分野 報告区分	CO ₂ ²⁾	CH ₄	N ₂ O		
廃棄物が焼却される際にエネルギーを回収	一般廃棄物	(区分無し)	エネルギー回収を伴う廃棄物の焼却	1.A.4.a 業務	○	○	○		
	産業廃棄物				○	○	○		
廃棄物を原燃料として直接利用	一般廃棄物 プラスチック	油化	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	○	○		
		高炉還元剤	高炉還元剤利用	1.A.2.a. 鉄鋼	○	NO ³⁾	NO ³⁾		
		コークス炉化学原料	コークス原料利用	1.A.1.c. 固体燃料製造	○	IE ⁴⁾	NO ⁵⁾		
		ガス化	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	NE ⁶⁾	NE ⁶⁾		
	産業廃棄物	廃油	(区分無し)	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	○	○	
			高炉還元剤	高炉還元剤利用	1.A.2.a. 鉄鋼	○	NO ³⁾	NO ³⁾	
		廃プラスチック類	化学工業	ボイラー燃料	1.A.2.c. 化学	○	○	○	
			製紙業	ボイラー燃料	1.A.2.d. 紙パルプ	○	○	○	
			セメント焼成	セメント焼成利用	1.A.2.f. 非金属鉱物	○	○	○	
			自動車製造業	ボイラー燃料	1.A.2.g. その他	○	○	○	
			油化	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	○	○	
			ガス化	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	NE ⁶⁾	NE ⁶⁾	
		廃タイヤ	(区分無し)	セメント焼成	セメント焼成利用	1.A.2.f. 非金属鉱物	○	○	○
				ボイラー	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	○	○
	製鉄		製鉄原燃料利用	1.A.2.a. 鉄鋼	○	NO ³⁾	NO ³⁾		
	ガス化		製鉄所燃料	1.A.2.a. 鉄鋼	○	○	○		
	金属精錬		金属精錬燃料利用	1.A.2.b. 非鉄地金	○	○	○		
	タイヤメーカー		タイヤメーカー燃料利用	1.A.2.c. 化学	○	○	○		
	製紙		製紙工場燃料利用	1.A.2.d. 紙パルプ	○	○	○		
	発電		発電利用	1.A.4.a 業務	○	○	○		
廃棄物が燃料に加工された後に利用	ごみ固形燃料 (RDF)	(区分無し)	一般燃料利用 (発電含む)	1.A.2.g. その他 ¹⁾	○	○	○		
	ごみ固形燃料 (RPF)	石油製品業	ボイラー燃料	1.A.1.b. 石油精製	○	○	○		
		化学工業	ボイラー燃料	1.A.2.c. 化学	○	○	○		
		製紙業	製紙工場燃料利用	1.A.2.d. 紙パルプ	○	○	○		
		セメント製造業	セメント焼成利用	1.A.2.f. 非金属鉱物	○	○	○		

(注)

- 1) 自家利用以外の発電・熱供給分は 1.A.1.a. で報告すべきだが、現時点では実態を把握できていないため、1.A.2.g. に含めて報告する。
- 2) 2006 年 IPCC ガイドラインに従い、生物起源成分の焼却に伴う CO₂ 排出量は、総排出量には含めず参考値として算定し、CRF には燃料種「Biomass」として報告する。表 3-60 を参照。
- 3) 鉄鋼業から発生する高炉ガスは全量回収される。
- 4) 同じ報告区分 (1.A.1.c) における固体燃料に含まれる。
- 5) コークス炉内は通常 1,000°C 以上の還元雰囲気であり、N₂O は発生しない。
- 6) 主にアンモニア合成原料等を得る目的で使用されており、燃料として燃焼される割合は少ないと考えられるため、算定は行わない。

廃棄物の焼却等（エネルギー分野での報告）（1.A）における温室効果ガス排出量を表 3-62 に示す。

表 3-62 廃棄物の焼却等（エネルギー分野での報告）（1.A）における排出量

Gas	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CO ₂ ¹⁾	1.A.1. エネルギー 産業	a.発電及び熱供給	kt-CO ₂	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
		b.石油精製	kt-CO ₂	NO	NO	1	6	5	6	5	6	5	5	6	4	5	0
		c.固体燃料製造及び 他エネルギー産業	kt-CO ₂	NO	NO	15	241	206	242	232	235	NO	24	39	34	44	24
	1.A.2. 製造業及び 建設業	a.鉄鋼	kt-CO ₂	NO	NO	310	637	446	547	487	537	473	579	561	589	624	528
		b.非鉄金属	kt-CO ₂	119	63	51	17	2	2	2	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
		c.化学	kt-CO ₂	14	64	89	67	67	73	72	84	82	65	68	63	65	63
		d.パルプ・紙	kt-CO ₂	NO	56	114	998	1,662	1,726	1,747	1,772	1,853	1,905	1,952	2,001	2,065	2,091
		e.食品加工・飲料	kt-CO ₂	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
		f.窯業土石	kt-CO ₂	197	492	879	1,088	1,391	1,324	1,355	1,359	1,455	1,639	1,593	1,714	1,780	1,965
		g.その他	kt-CO ₂	3,870	4,464	4,425	5,768	5,237	5,526	5,379	5,625	5,508	5,257	5,648	5,305	5,339	5,145
	1.A.4	a.業務	kt-CO ₂	6,679	7,292	9,330	8,255	6,615	6,444	6,685	7,516	7,328	6,855	6,973	7,855	8,278	8,224
		合計	kt-CO ₂	10,878	12,431	15,214	17,077	15,630	15,890	15,964	17,134	16,703	16,330	16,841	17,565	18,200	18,040
	CH ₄ ²⁾	1.A.1. エネルギー 産業	a.発電及び熱供給	kt-CH ₄	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
			b.石油精製	kt-CH ₄	NO	NO	1.7E-06	1.8E-05	1.3E-05	1.6E-05	1.3E-05	1.5E-05	1.3E-05	1.4E-05	1.7E-05	1.2E-05	1.4E-05
c.固体燃料製造及び 他エネルギー産業			kt-CH ₄	NO	NO	IE	IE	IE	IE	IE	IE	NO	IE	IE	IE	IE	IE
1.A.2. 製造業及び 建設業		a.鉄鋼	kt-CH ₄	NO	NO	NO	7.7E-04	1.4E-03	1.4E-03	1.3E-03	1.3E-03	1.2E-03	1.4E-03	1.4E-03	1.4E-03	1.6E-03	1.7E-03
		b.非鉄金属	kt-CH ₄	3.2E-04	1.8E-04	1.4E-04	7.7E-05	7.7E-06	7.7E-06	7.7E-06	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
		c.化学	kt-CH ₄	2.0E-05	1.0E-04	1.5E-04	1.7E-04	1.8E-04	1.9E-04	1.9E-04	2.2E-04	2.2E-04	1.8E-04	1.9E-04	1.7E-04	1.7E-04	1.6E-04
		d.パルプ・紙	kt-CH ₄	NO	1.0E-04	2.2E-04	2.7E-03	4.5E-03	4.6E-03	4.7E-03	4.8E-03	5.0E-03	5.1E-03	5.3E-03	5.5E-03	5.6E-03	5.7E-03
		e.食品加工・飲料	kt-CH ₄	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
		f.窯業土石	kt-CH ₄	0.03	0.08	0.14	0.20	0.23	0.22	0.22	0.22	0.23	0.26	0.25	0.27	0.28	0.31
		g.その他	kt-CH ₄	1.8	1.8	2.2	2.9	4.2	4.2	4.4	4.5	4.8	5.3	5.0	4.9	5.2	5.3
1.A.4		a.業務	kt-CH ₄	0.54	0.54	0.60	0.15	0.14	0.14	0.17	0.15	0.15	0.14	0.15	0.15	0.15	
		合計	kt-CH ₄	2.3	2.4	3.0	3.3	4.6	4.6	4.8	4.9	5.2	5.7	5.4	5.4	5.7	5.8
			kt-CO ₂ 換算	59	60	74	81	115	114	120	122	129	142	135	134	142	144
N ₂ O ³⁾		1.A.1. エネルギー 産業	a.発電及び熱供給	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
	b.石油精製		kt-N ₂ O	NO	NO	1.1E-05	1.2E-04	8.3E-05	1.0E-04	8.3E-05	1.0E-04	8.1E-05	9.0E-05	1.1E-04	8.0E-05	9.1E-05	5.6E-06
	c.固体燃料製造及び 他エネルギー産業		kt-N ₂ O	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	1.A.2. 製造業及び 建設業	a.鉄鋼	kt-N ₂ O	NO	NO	NO	9.1E-04	1.6E-03	1.6E-03	1.5E-03	1.5E-03	1.5E-03	1.7E-03	1.6E-03	1.7E-03	1.9E-03	2.0E-03
		b.非鉄金属	kt-N ₂ O	2.4E-04	1.3E-04	1.1E-04	5.6E-05	5.6E-06	5.6E-06	5.6E-06	5.6E-06	NO	NO	NO	NO	NO	NO
		c.化学	kt-N ₂ O	8.5E-03	6.8E-03	8.5E-03	4.5E-03	3.3E-03	3.3E-03	3.0E-03	3.2E-03	2.4E-03	1.7E-03	1.9E-03	1.5E-03	5.8E-03	6.5E-03
		d.パルプ・紙	kt-N ₂ O	NO	6.6E-04	5.9E-03	2.2E-02	5.6E-02	5.8E-02	5.6E-02	5.5E-02	5.5E-02	6.1E-02	5.9E-02	6.2E-02	6.5E-02	6.6E-02
		e.食品加工・飲料	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
		f.窯業土石	kt-N ₂ O	2.7E-03	6.9E-03	1.2E-02	1.7E-02	2.0E-02	1.9E-02	1.9E-02	1.9E-02	2.0E-02	2.3E-02	2.2E-02	2.4E-02	2.5E-02	2.7E-02
		g.その他	kt-N ₂ O	5.8E-02	5.1E-02	5.3E-02	6.1E-02	6.7E-02	6.8E-02	7.0E-02	7.1E-02	7.4E-02	7.9E-02	7.7E-02	7.5E-02	7.8E-02	7.9E-02
	1.A.4	a.業務	kt-N ₂ O	1.2	1.3	1.6	1.2	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9	1.0	1.1	1.0
		合計	kt-N ₂ O	1.3	1.4	1.7	1.3	1.1	1.1	1.1	1.2	1.1	1.1	1.1	1.2	1.2	1.2
			kt-CO ₂ 換算	381	421	494	383	340	336	330	349	337	338	322	360	365	365

(注)

- 1) 石油由来成分のみ含む。
生物起源の廃棄物（バイオマスプラスチック、動植物性廃油を含む）の焼却に伴う CO₂排出量は、2006 年 IPCC ガイドラインに従い総排出量には含めず参考値として算定し、CRF table 1.A(a)の「Biomass」に報告する。
- 2) 石油由来成分及び生物起源成分を含む。

3.3. 燃料からの漏出 (1.B)

燃料からの漏出カテゴリーは、化石燃料の採掘、生産、処理及び精製、輸送、貯蔵、配送時における意図的及び非意図的な非燃焼起源の温室効果ガスの排出、及び地熱発電所からの温室効果ガスの排出を扱う。

本カテゴリーは、主に、温室効果ガスの石炭採掘からの漏出を扱う「1.B.1 固体燃料」と、石油及び天然ガス産業からの漏出を扱う「1.B.2 石油及び天然ガス」の2つのカテゴリーから構成されている。固体燃料からの漏出の主な排出源は炭層からの CH₄であり、石油産業及び天然ガス産業からの主な排出源は、設備等からの漏出、通気弁・フレアリング、揮発、事故による排出、及び地熱発電所からの排出等である。

2018 年度における本カテゴリーからの温室効果ガス排出量は 1,155 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の約 0.1% を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 78% の減少となっている。

表 3-63 燃料からの漏出カテゴリー (1.B) の温室効果ガス排出量

Gas	部門	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
CH ₄	1.B.1 固体燃料	a. 石炭採掘	kt-CH ₄	187.9	93.3	60.5	24.8	22.1	21.5	21.2	20.9	20.4	20.7	20.1	19.7	20.1	18.5	
		b. 固体燃料転換		2.5	2.5	2.0	1.3	1.0	1.0	0.9	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	0.7	0.7	0.7
		c. その他(制御不能な燃焼および石炭ずりでの燃焼)		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	1.B.2 石油及び天然ガス	a. 石油		1.0	1.1	1.1	1.2	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9	0.9	0.8	0.8	0.8	0.7
		b. 天然ガス		7.0	7.8	8.8	10.7	11.8	11.1	10.9	10.5	9.8	9.2	9.3	10.0	9.9	9.9	9.3
		c. 通気弁及びフレアリング		0.3	0.5	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
		d. その他(地熱発電)		0.2	0.8	0.7	0.7	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.4	0.3	0.3
	合計			kt-CH ₄	198.9	105.9	73.4	39.1	36.7	35.4	34.7	34.0	32.6	32.2	31.5	31.8	32.0	29.6
				kt-CO ₂ 換算	4,973	2,647	1,836	976	916	885	867	851	816	806	788	794	800	741
	CO ₂	1.B.1 固体燃料		a. 石炭採掘	kt-CO ₂	5.3	2.4	1.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
b. 固体燃料転換			NE	NE		NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	
c. その他(制御不能な燃焼および石炭ずりでの燃焼)			NO	NO		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
1.B.2 石油及び天然ガス		a. 石油	0.03	0.03		0.03	0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02
		b. 天然ガス	0.6	0.7		0.8	1.0	1.1	1.0	1.0	1.0	0.9	0.9	0.8	0.9	0.9	0.9	0.8
		c. 通気弁及びフレアリング	81.2	109.1		122.6	164.3	258.2	221.7	224.0	232.2	221.6	209.8	223.3	245.2	264.7	242.3	
		d. その他(地熱発電)	104.4	409.2		386.6	341.9	241.0	251.2	251.9	256.5	215.2	237.9	200.1	210.5	170.0	170.0	
合計		kt-CO ₂	192	521		512	508	501	475	477	490	438	449	425	457	436	414	
		kt-CO ₂ 換算	0.11	0.15		0.11	0.11	0.11	0.10	0.10	0.10	0.09	0.09	0.08	0.08	0.08	0.07	
N ₂ O		1.B.1 固体燃料	a. 石炭採掘	kt-N ₂ O		NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE
	b. 固体燃料転換		NE		NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE		
	c. その他(制御不能な燃焼および石炭ずりでの燃焼)		NO		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	1.B.2 石油及び天然ガス	a. 石油	IE,NA		IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	IE,NA	
		b. 天然ガス	0.0004		0.0005	0.0004	0.0004	0.0004	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	
		c. 通気弁及びフレアリング	NO		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
		d. その他(地熱発電)	NO		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	合計		kt-N ₂ O		0.0004	0.0005	0.0004	0.0004	0.0004	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	
			kt-CO ₂ 換算		0.11	0.15	0.11	0.11	0.11	0.10	0.10	0.10	0.09	0.09	0.08	0.08	0.08	
	全ガス合計		kt-CO ₂ 換算		5,165	3,169	2,347	1,484	1,417	1,359	1,345	1,341	1,255	1,255	1,212	1,251	1,236	1,155

3.3.1. 固体燃料 (1.B.1)

3.3.1.1. 石炭採掘 (1.B.1.a)

3.3.1.1.a. 坑内掘 (1.B.1.a.i)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、坑内掘炭鉱における石炭の採掘時及び採掘後工程に伴う CH₄ と CO₂ の排出、及び閉山炭鉱からの CH₄ と CO₂ 排出の排出を扱う。

石炭はその石炭化過程で生じる CH₄ を含んでおり、その多くは炭鉱が開発されるまでに自然に地表から放散されるが、炭層中に残された CH₄ が採掘に伴い大気中に排出される。加えて、炭鉱が閉山されて以降も、一部の炭鉱では CH₄ が湧出する。また、CH₄ と比較すると濃

度は低い、石炭中には CO₂も含有されており、CH₄と同様のプロセスで大気中に排出される。

我が国では、稼働炭坑が減少し、それに伴って石炭生産量も大幅に減少している。その結果、石炭採掘時の CH₄排出量も年々減少傾向にある。

また、近年石炭採掘の仕方が変わってきており、その結果、IEF（見かけの排出係数）が減少傾向にある。これは深い場所で採掘するより浅い場所で採掘する方がコストがかからないため、浅い場所で採掘する割合が高くなってきており、浅い場所での採掘の方が CH₄排出量が少なくなるためである。それに加えて、炭鉱採掘は最新技術を用いてすでに以前採掘されて CH₄の抜け出た（去勢された）箇所も含まれた採掘坑からの再採掘を行っている。そのために石炭採掘量あたりの CH₄排出量は諸外国に比べても少なくなっている。

b) 方法論

■ 算定方法

○ CH₄

【採掘時】

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（vol. 2, page 4.11, fig. 4.1.1）に従い、Tier 3法を用いて各炭坑における実測データを CH₄排出量として報告する。

【採掘後工程】

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（vol. 2, page 4.11, fig. 4.1.1）に従い、デフォルト値の排出係数を用いた Tier 1法を用い、石炭坑で採掘された石炭の量に、排出係数を乗じて CH₄排出量を算定する。

【閉山炭鉱】

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 2法を用いて、下式のとおり水没していない閉山炭鉱数に石炭種類及び炭鉱閉鎖期間を考慮した排出係数を乗じて CH₄排出量を算定する。

$$E = N \times F \times ER \times EF \times CF, \quad EF = (1 + a \times T)^b$$

<i>E</i>	: 閉山炭鉱からの GHG 漏出量 [kt/年]
<i>N</i>	: 水没していない閉山炭鉱の数 [ヶ所]
<i>F</i>	: ガスを漏出する炭鉱の割合
<i>ER</i>	: 閉山前の炭鉱からの GHG 排出量 [m ³ /年]
<i>EF</i>	: 排出量の減少係数
<i>a, b</i>	: 排出量の減少カーブを決定するパラメータ
<i>T</i>	: 炭鉱閉鎖期間 [年]
<i>CF</i>	: ガスの密度 [kt/m ³] CH ₄ :0.67×10 ⁻⁶

○ CO₂

【採掘時】

石炭生産量に CO₂排出係数を乗じて CO₂排出量を算定する。

【採掘後工程】

石炭生産量に CO₂排出係数を乗じて CO₂排出量を算定する。

【閉山炭鉱】

CO₂排出量の算定方法は上記 CH₄の算定方法と同様であり、CO₂排出係数は CH₄排出係数から算定する。

■ 排出係数

○ CH₄

【採掘時】

採掘時のCH₄排出係数は、(財)石炭エネルギーセンターより提供されたCH₄総排出量の実測値を坑内掘石炭生産量で除することにより算出する。1991年度から1994年度についてはCH₄総排出量の実測値が得られなかったため、実測に基づき設定された1990年度と1995年度の排出係数を内挿することで排出係数を求める。

表 3-64 坑内掘 採掘時の排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	参照
坑内掘石炭生産量	kt	6,775	5,622	2,364	738	575	588	543	528	529	540	470	529	612	317	(財)石炭エネルギーセンター調べ
CH ₄ 総排出量	10 ⁶ m ³	262	92	57	4.2	2.1	2.0	1.8	1.8	1.9	2.3	2.4	2.4	2.9	1.5	(財)石炭エネルギーセンター調べ
CH ₄ 総排出量	kt-CH ₄	176	62	38	2.8	1.4	1.3	1.2	1.2	1.2	1.5	1.6	1.6	1.9	1.0	CH ₄ 総排出量(体積ベース)を、20℃ 1気圧におけるメタンの密度0.67 kt/10 ⁶ m ³ をもって重量に換算したもの
排出係数	kg-CH ₄ /t	26	11	16	3.8	2.4	2.2	2.2	2.2	2.3	2.8	3.4	3.0	3.1	3.2	CH ₄ 総排出量/坑内掘石炭生産量

【採掘後工程】

採掘後工程の排出係数は、我が国の排出実態が明らかでないため、2006年IPCCガイドライン Vol. 2, page 4.12, Equation 4.1.4 に示されたデフォルト値(平均値 2.5 [m³/t])を、20℃1気圧におけるCH₄の密度 0.67 [kt/10⁶m³]を用いて換算した値(1.675 [kg-CH₄/t])を用いる。

【閉山炭鉱】

ガスを排出する炭鉱の割合(F)には2006年IPCCガイドライン Vol. 2, page 4.24, Table 4.1.5 のデフォルト値の中間値(1900-1925: 5%、1926-1950: 26.5%、1951-1975: 40%、1976-2000: 54%、2001-: 54.5%)を、閉山前の炭鉱からのGHG排出量(ER)には炭鉱の規模を考慮して2006年IPCCガイドライン vol. 2, page 4.27, Table 4.1.8 の低位値(1.3 百万立方メートル/年/ヶ所)を用いる。また排出量の減衰カーブを決定するパラメータには2006年IPCCガイドライン Vol. 2, page 4.27, Table 4.1.9 の日本で一般的な亜瀝青炭の数値(a = 0.27、b = -1.00)を用いる。

○ CO₂

【採掘時】

CO₂排出係数は、CH₄排出係数(体積ベース)に北海道開発庁(1965)を用いて把握した「炭層ガス中のCO₂とCH₄の体積分率の比」(0.0088)及びCO₂の密度(1.84 kg/m³)を乗じて算定する。

【採掘後工程】

採掘時同様、CH₄排出係数(体積ベース)に0.0088を乗じる。

【閉山炭鉱】

採掘時同様、CH₄排出係数(体積ベース)に0.0088を乗じる。

■ 活動量

【採掘時、及び採掘後工程】

採掘時、採掘後工程の活動量は、「エネルギー生産・需給統計年報」(1990年度から2000年度まで)及び(財)石炭エネルギーセンター(2001年度以降)提供データに示された「石炭生産量合計」から「露天掘生産量」を差し引いた値を用いる。

表 3-65 石炭生産量の推移

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石炭生産量合計	kt	7,980	6,317	2,974	1,249	1,206	1,145	1,195	1,247	1,251	1,318	1,265	1,282	1,328	964
うち露天掘		1,205	695	610	511	631	557	652	719	721	778	795	753	716	647
うち坑内掘		6,775	5,622	2,364	738	575	588	543	528	529	540	470	529	612	317

【閉山炭鉱】

活動量については、石炭エネルギーセンター（2002）における閉山炭鉱リスト等から把握した水没していない炭鉱数を用いる。

表 3-66 閉山年度別閉山炭鉱数（水没なし）

閉山年度	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970
水没していない炭鉱数	39	34	28	48	12	32	91	103	61	46	33	42	21	42	29
閉山年度	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1980	1987	1989	1992	1994	1995	Total
水没していない炭鉱数	13	20	12	1	2	3	1	2	2	2	3	1	1	1	725

○ CH₄の回収とフレアリング

【採掘時】

採掘時に炭層から排出された CH₄をフレアリングにより燃焼させる事例は我が国には存在しないが、CH₄を回収し燃料として利用している事例は存在する。そのため、CH₄総排出量から回収量を控除して正味の排出量を報告する。回収量は「エネルギー生産・需給統計年報」（1990年度から1997年度まで）及び（財）石炭エネルギーセンター提供データ（1998年度以降）を用いる。

表 3-67 採掘時の CH₄回収量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
回収量	1000m ³	50,139	11,112	9,810	2,044	990	941	733	591	826	448	844	955	482	301

【採掘後工程】

採掘後工程の CH₄の回収やフレアリングについては、我が国の実態が明らかでないため、「NE」と報告する。

【閉山炭鉱】

閉山炭鉱における CH₄の回収やフレアリングは実施されておらず、「NO」と報告する。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

採掘時における CH₄排出量の不確実性は、（財）石炭エネルギーセンター提供の実測値を報告しているが、不確実性の把握が困難であることから、2006年 IPCC ガイドラインの設定値（測定誤差による不確実性と気体流速の変動による誤差の不確実性を誤差伝播式により合成）を使用して-5～+5%と設定した。また、採掘時における CO₂の不確実性は CH₄排出量の不確実性と、北海道開発庁資料掲載のデータから計算する炭層ガス中の CO₂と CH₄の体積分率の比の不確実性を誤差伝播式により合成して-19～+19%と設定した。

採掘後工程における CH₄排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、2006年 IPCC ガイドラインの設定値（-33～+300%）を使用した。採掘後工程における CO₂排出係数の不確実性は、CH₄排出係数の不確実性と、北海道開発庁資料掲載のデータから計算する炭層ガス中の CO₂と CH₄の体積分率の比の不確実性を誤差伝播式により合成して-38～+301%と設定した。採掘後工程における CH₄と CO₂の活動量の不確実性は、（財）石炭エネルギーセンター提供の実測値を報告しているが、不確実性の把握が困難であることから、2006年 IPCC ガイドラインの設定値（-2～+2%）を使用した。その結果、

採掘後工程における排出量の不確実性は、CH₄排出量が-33～+300%、CO₂排出量が-38～+301%と評価された。

閉山炭鉱におけるCH₄排出量の不確実性は、2006年IPCCガイドラインに示されたTier 2の不確実性に関する記述に基づき-50～+100%と設定した。閉山炭鉱におけるCO₂排出量の不確実性は、CH₄排出量の不確実性と、北海道開発庁資料掲載のデータから計算する炭層ガス中のCO₂とCH₄の体積分率の比の不確実性を誤差伝播式により合成して-53～+102%と設定した。

■ 時系列の一貫性

坑内掘の採掘時におけるCH₄総排出量は、(財)石炭エネルギーセンターが1990年度及び1995年度以降継続して調査を実施しており、時系列が一貫したデータである。1991年度から1994年度までは、排出係数を内挿により推計し、時系列の一貫性を確保する。

また、石炭生産量及び露天掘生産量は、1990～2000年度が「エネルギー生産・需給統計年報」、2001年度以降は(財)石炭エネルギーセンターの提供データを使用している。これは、2001年度以降、「エネルギー生産・需給統計年報」における石炭生産量及び露天掘生産量の項目が廃止されたためである。2000年まで使用していた「エネルギー生産・需給統計年報」のデータは(財)石炭エネルギーセンターによって経済産業省に提供されていたデータであり、「エネルギー生産・需給統計年報」及び(財)石炭エネルギーセンターのデータともに同じ国内の全石炭生産量をカバーしており、時系列の一貫性は担保される。

採掘時におけるCH₄回収量についても、石炭生産量及び露天掘生産量と同様の理由で、時系列の一貫性は担保される。

閉山炭鉱における活動量である閉山炭鉱数は、全年にわたり石炭エネルギーセンター(2002)より引用している。またガスを排出する炭鉱の割合、閉山前の炭鉱からのCH₄排出量、排出量の減衰カーブを決定するパラメータには2006年IPCCガイドラインのデフォルト値を用いている。さらに閉山前の炭鉱からのCO₂の排出量は体積比を一定としてCH₄排出量から類推しており、一貫性を確保している。

d) QA/QC と検証

2006年IPCCガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリQC手続きを実施している。一般的なインベントリQC手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC活動については、第1章に詳述する。

また、日本では炭鉱における就労者の安全のため、CH₄ガスやCOガス濃度をモニタリングすることが法律により定められている。この法律の下、事業者では管理に関する規定を定め、正確なモニタリングと厳しい管理・チェック、そして報告書の作成が行われている。さらに、国の監督署によって計測や保安報告のチェックが定期的に行われている。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.1.1.b. 露天掘 (1.B.1.a.ii)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、露天炭坑における石炭の採掘時及び採掘後工程に伴う CH₄と CO₂の排出を扱う。なお、露天掘における石炭採掘に伴う CH₄の回収・フレアリングは我が国の実態が明らかでないため、「NE」と報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

○ CH₄

【採掘時】

採掘時の排出については、2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 4.18, Fig. 4.1.2 のデシジョンツリーに従い、デフォルト値の排出係数を用いた Tier 1 法を用いて CH₄排出量を算定する。

【採掘後工程】

採掘後工程の排出については、2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 4.18, Fig. 4.1.2 のデシジョンツリーに従い、デフォルト値の排出係数を用いた Tier 1 法を用いて排出量の算定を行う。

いずれも露天掘炭坑で採掘された石炭の量に、排出係数を乗じて算定する。

○ CO₂

【採掘時】

石炭生産量に CO₂排出係数を乗じて CO₂排出量を算定する。

【採掘後工程】

石炭生産量に CO₂排出係数を乗じて CO₂排出量を算定する。

■ 排出係数

○ CH₄

【採掘時】

採掘時の排出係数は、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値(平均値 1.2[m³/t])を、20℃1気圧における CH₄の密度 0.67 [kt/10⁶m³] を用いて換算した値 (0.804 [kg CH₄/t]) を用いる。

【採掘後工程】

採掘後工程の排出係数は、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値(平均値 0.1 [m³/t])を、20℃1気圧における CH₄の密度 0.67 [kt/10⁶m³] を用いて換算した値 (0.067 [kg CH₄/t]) を用いる。

○ CO₂

【採掘時】

CO₂排出係数は、CH₄排出係数(体積ベース)に北海道開発庁(1965)を用いて把握した「炭層ガス中の CO₂と CH₄の体積分率の比」(0.0088)及び CO₂の密度(1.84 kg/m³)を乗じて算定する。

【採掘後工程】

採掘時同様、CH₄排出係数(体積ベース)に 0.0088 を乗じる。

■ 活動量

採掘時、採掘後工程の活動量は、「エネルギー生産・需給統計年報」及び（財）石炭エネルギーセンター提供データに示された「露天掘生産量」を用いる（表 3-65 参照）。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

採掘時における CH₄排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値（-50～+200%）を使用した。採掘時における CO₂排出係数の不確実性は、CH₄排出係数の不確実性と、北海道開発庁資料掲載のデータから計算する炭層ガス中の CO₂と CH₄の体積分率の比の不確実性を誤差伝播式により合成して-53～+201%と設定した。採掘時における CH₄と CO₂の活動量は、ともに（財）石炭エネルギーセンター提供の実測値を報告しているが、不確実性の把握が困難であることから、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値（-2～+2%）を使用した。その結果、採掘時における排出量の不確実性は、CH₄排出量が-50～+200%、CO₂排出量が-53～+201%と評価された。

採掘後工程における CH₄排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値（-33～+300%）を使用した。採掘後工程における CO₂排出係数の不確実性は、CH₄排出係数の不確実性と、北海道開発庁資料掲載のデータから計算する炭層ガス中の CO₂と CH₄の体積分率の比の不確実性を誤差伝播式により合成して-38～+301%と設定した。採掘後工程における CH₄と CO₂の活動量は、ともに（財）石炭エネルギーセンター提供の実測値を報告しているが、不確実性の把握が困難であることから、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値（-2～+2%）を使用した。その結果、採掘後工程における排出量の不確実性は、CH₄排出量が-33～+300%、CO₂排出量が-38～+301%と評価された。

■ 時系列の一貫性

石炭生産量及び露天掘生産量は、1990～2000 年度が「エネルギー生産・需給統計年報」、2001 年度以降は（財）石炭エネルギーセンターの提供データを使用する。これは、2001 年度以降、「エネルギー生産・需給統計年報」における石炭生産量及び露天掘生産量の項目が廃止されたためである。2000 年まで使用していた「エネルギー生産・需給統計年報」の石炭生産量及び露天掘生産量は（財）石炭エネルギーセンターによって経済産業省に提供されていたデータであり、「エネルギー生産・需給統計年報」及び（財）石炭エネルギーセンターのデータともに同じ国内の全石炭生産量をカバーしており、時系列の一貫性は担保される。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述する。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.1.2. 固体燃料転換（1.B.1.b）

a) 排出源カテゴリーの説明

木炭の原料となる木質材料を窯に入れて炭化する際に、木質材料に含まれる炭素が不完全燃焼して CH_4 が排出される。本カテゴリーでは、木炭の製造過程において発生する CH_4 の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

木炭生産量に排出係数を乗じて算定する。

■ 排出係数

2006年 IPCC ガイドラインにデフォルト値が与えられていないことから、1996年改訂 IPCC ガイドラインのデフォルト値（Vol. 3, page 1.46, Table 1-14）を用いる。木炭生産量が統計から得られることから、生産量 1TJ（NCV）当たりの排出係数（1000 kg/TJ）を採用する。

■ 活動量

木炭生産量に発熱量を乗じた値を活動量とする。木炭生産量は林野庁「特用林産基礎資料」及び林野庁「木炭関係資料」から把握し、発熱量は 1996年改訂 IPCC ガイドライン Vol. 3, page 1.46, Table 1-14 より 30 MJ/kg を用いる。

表 3-68 木炭生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
木炭生産量	t	83,225	82,278	67,428	44,919	34,449	34,095	31,227	30,263	29,588	27,749	25,865	23,733	23,096	21,711

■ 完全性について

木炭の製造過程で CO_2 も排出されるが、バイオマス由来のためその排出量は算定しない。木炭の消費に伴う排出量は、「1.A 燃料の燃焼」で別途報告する。ただし、2006年 IPCC ガイドラインに従い CO_2 排出量はわが国の総排出量に含めず、CRF に参考値として報告している。

なお、我が国において固体燃料転換にあたる活動として、練炭製造も該当すると考えられる。練炭の製造工程は、石炭に水分を加え圧縮乾燥させるものであり、本工程において化学的な反応は起こっていないと考えられるが、 CO_2 及び CH_4 、 N_2O の発生は否定できない。しかし、排出量の実測値は得られておらず、デフォルト値もないことから、排出量は算定していない。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数については、1996年改訂 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いているが、同ガイドラインには当該排出係数の不確実性が示されていないため、2006年 IPCC ガイドラインに示された木材の燃焼に伴う CH_4 排出係数の不確実性（95%信頼区間から計算した -67～+233%）で代用した。また、活動量については、木炭生産量（重量ベース）の不確実性（「特用林産基礎資料」の不確実性が把握できないため、石炭生産量の不確実性で代用）と 2006年 IPCC ガイドラインに示された木炭の発熱量の 95%信頼区間から計算される不確実性を誤差伝播式により合成して -50～+97% と設定した。その結果、木炭の生産に伴う CH_4 排出量の不確実性は、-84～+252% と評価された。

■ 時系列の一貫性

木炭生産量の出典は 1990 年度が「木炭関係資料」、1991 年度以降が「特用林産基礎資料」と異なっているが、ともに林野庁の資料であり捕捉範囲も同一としている。また CH₄の発熱量と排出係数は 1996 年改訂 IPCC ガイドラインのデフォルト値を全年にわたって使用しており、一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述する。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

1996 年改訂 IPCC ガイドラインに示された排出係数のデフォルト値が我が国の実態に即しているかどうか精査するとともに、我が国独自の排出係数開発の必要性について検討を行う必要がある。

3.3.1.3. その他（制御不能な燃焼および石炭ずり（coal dumps）での燃焼）（1.B.1.c）

本カテゴリーでは、炭鉱における火災により非意図的に燃焼した石炭から発生する CO₂の排出を扱う。

1999 年度については、池島炭鉱における火災によって石炭の燃焼が生じたが、石炭の燃焼量が把握できないため「NE」として報告する。1990 年以降のその他の年度については、石炭への引火を伴う火災は発生していないことから、「NO」として報告する。

3.3.2. 石油、天然ガス及びその他エネルギー生産由来の排出（1.B.2）

3.3.2.1. 石油（1.B.2.a）

3.3.2.1.a. 試掘（1.B.2.a.i）

本カテゴリーでは、油田の試掘時に漏出する CO₂、CH₄、N₂O の排出を扱う。

我が国における油田及び天然ガス田の試掘時の温室効果ガスの排出は、基本的にはフレアリングによるもののみである。従って本カテゴリーにおける漏出は、「1.B.2.c.Flaring.iii フレアリング（コンバインド）」において報告する。

なお、CRF における「1.B.2.a.1 石油の試掘」及び「1.B.2.b.1 天然ガスの試掘」の報告欄については、日本における石油・天然ガス試掘時の温室効果ガス排出は基本的にはフレアリングによるもののみであるが、「1.B.2.c.Flaring.iii フレアリング（コンバインド）」において後述のように GPG(2000)に示されている排出係数のデフォルト値を用いており、概念上フレアリング以外の漏出に伴う温室効果ガス排出についても「1.B.2.c.Flaring.iii フレアリング（コンバインド）」に含まれることになるため、ここでは各温室効果ガスの排出量を「IE」として報告する。

3.3.2.1.b. 生産 (1.B.2.a.ii.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、原油の生産時に漏出する CO₂及び CH₄の排出及び稼働中の油田の点検時に測定器を井中に下ろす際に漏出する CO₂及び CH₄の排出を扱う。なお、原油の生産時の漏出に伴う排出については、海上・陸上油田別に排出量を算定する。また、稼働中の油田の点検時の排出については、活動量となる生産井数について、石油生産井数と天然ガス生産井数が分割できないことから、「1.B.2.b.ii 天然ガスの生産」にまとめて報告することとし、本カテゴリーでは排出量の算定を行わない。

b) 方法論

■ 算定方法

石油の生産に伴う漏出については、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol. 2, page 4.39, Fig. 4.2.2) に従い、Tier 1 法を用いて算定を行う。

■ 排出係数

【生産時】

石油生産時の漏出の排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示されている一般原油の陸上油田および海上油田からの漏出のデフォルト値を用いる。なお、陸上油田の排出係数についてはデフォルト値の中間値を用いる。

表 3-69 石油生産時の漏出の排出係数 [kt/10³m³]

		CH ₄	CO ₂	N ₂ O ³⁾
一般原油 (Conventional Oil)	海上油田からの漏出	5.9×10 ⁻⁷	4.3×10 ⁻⁸	NA
	陸上油田からの漏出	1.8×10 ⁻³ 1)	1.3×10 ⁻⁴ 2)	NA

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 4.50, Table 4.2.4

(注)

1) デフォルト値は 1.5×10⁻⁶ ~ 3.6×10⁻³

2) デフォルト値は 1.1×10⁻⁷ ~ 2.6×10⁻⁴

3) デフォルト値が「NA」のため算定対象外とする。

【点検時】

点検時の排出量は、「1.B.2.b.ii 天然ガスの生産」にて一括計上しており、排出係数についても同カテゴリーを参照のこと。

■ 活動量

【生産時】

活動量には、海上・陸上油田別の原油生産量 (コンデンセート¹⁶を含まない) を用いる。このうち海上油田における原油生産量 (コンデンセートを含まない) については、コンデンセート生産量に国内における天然ガス総生産量中の海上油田分の割合を乗じて海上油田におけるコンデンセート生産量を推計し、海上油田における原油生産量からこの推計値を減じて求める。また陸上油田における原油生産量 (コンデンセートを含まない) については、国内における原油総生産量 (コンデンセートを含まない) から上記海上油田における原油生産量 (コンデンセートを含まない) を減じて求める。

天然ガス、原油、コンデンセートの国内における総生産量は、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」、「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」を用いて把握する。海上油田からの天然ガス、原油生産量は、天然ガス鉱業会「天然ガス資料年報」

¹⁶ ガス井よりガスの生産に伴って産出される軽質の液状炭化水素

を用いて把握する。

表 3-70 海上・陸上油田別の原油生産量（コンデンセートを含まない）

項目		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
原油生産量（コンデンセートを含まない）	海上	1000 kL	175	391	167	76	91	78	76	72	70	82	76	67	70	70
	陸上	1000 kL	245	232	218	295	218	215	208	209	195	180	164	152	141	125

【点検時】

点検時の排出量は、「1.B.2.b.ii 天然ガスの生産」にて一括計上しており、活動量についても同カテゴリーを参照のこと。

■ 完全性について

本カテゴリーの排出量算定においては、コンデンセートを含まない原油生産量を用いているが、コンデンセート生産に伴う温室効果ガス排出量は 1.B.2.b.ii 及び 1.B.2.b.iii の内数となっている（両カテゴリーの排出係数の中で、コンデンセートの生産に伴う排出も考慮されている）。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

石油生産時の排出係数は、すべて 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、同ガイドラインの設定値（-100～+100%）を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値（流量の計測に伴う不確実性（販売量以外）の-15～+15%）を使用した。その結果、石油生産時の CO₂、CH₄の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -101～+101%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記方法を使用して、1990 年度から直近年まで一定値を使用している。また、生産時の活動量は「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」、「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」及び「天然ガス資料年報」をもとに、1990 年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述する。

e) 再計算

「天然ガス資料年報」の 2017 年度の活動量が更新されたため、当該年度の CO₂及び CH₄排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

油田の点検に伴う排出について、2006 年 IPCC ガイドラインに基づいた算定方法では、天然ガス井の点検に伴う排出量と原油生産量との相関関係が不明であり、算定結果が実態から乖離する懸念があるため、GPG（2000）を用いて算定している。今後 2006 年 IPCC ガイドラインにおける算定方法設定の根拠について情報収集を行い、新たな情報が得られた場合、再度 2006 年 IPCC ガイドラインに基づく算定方法の適用について検討する。

3.3.2.1.c. 輸送 (1.B.2.a.iii.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、原油やコンデンセートをパイプライン、ローリー、タンク貨物車等で製油所へ輸送する際に漏出する CO₂、CH₄の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

原油、コンデンセートの輸送時の漏出については、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol. 2, page 4.40, Fig. 4.2.3) に従い、Tier 1 法を用い原油の生産量、コンデンセート生産量に排出係数を乗じて排出量を算定する。

当該区分では、国内の海上油田で生産された原油を陸地まで海上輸送する際の漏出と、陸上での輸送時の漏出を算定する。

海上輸送分は全量パイプライン輸送であり他の手段による輸送に伴う漏出はないものと考えられる。また、陸上輸送分はパイプライン、タンクローリー、タンク貨車など幾つかの手段で輸送されているが、これらを統計的に分離することが困難なことから、全量をタンクローリー及び貨車で輸送しているものと仮定して算定する。

■ 排出係数

排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示されているデフォルト値を用いる。

表 3-71 原油、コンデンセート輸送時の排出係数 [kt/10³m³]

項目	CH ₄	CO ₂	N ₂ O
原油輸送 (タンクローリー、タンク貨車)	2.5×10 ⁻⁵	2.3×10 ⁻⁶	NA
コンデンセート輸送	1.1×10 ⁻⁴	7.2×10 ⁻⁶	ND

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 4.50 及び 4.53, Table 4.2.4

(注) デフォルト値が「NA」または「ND」のため N₂O は算定対象外とする。

■ 活動量

輸送時の漏出の活動量については、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における原油生産量及びコンデンセート生産量を用いる。

表 3-72 我が国の原油生産量及びコンデンセート生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
原油生産量 (コンデンセートを含まない)	1000 kL	420	623	386	370	310	293	284	281	265	262	240	219	210	195
コンデンセート生産量		234	243	375	541	608	560	541	478	403	365	339	331	336	301
原油生産量 (合計)		655	866	761	911	917	853	824	759	668	626	578	549	546	496

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

原油及びコンデンセートの輸送に伴う CO₂、CH₄の漏出の排出係数については、すべて 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、同ガイドラインの設定値 (-100~+100%) を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006年 IPCC ガイドラインの設定値 (流量の計測に伴う不確実性 (販売量以外) : -15~+15%) を使用した。その結果、原油及びコンデンセートの輸送に伴う CO₂、CH₄の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -101~+101% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記した方法を使用して、1990年度から直近年まで一定値を使用している。また、輸送時の活動量は「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」をもとに、1990年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.1.d. 精製及び貯蔵 (1.B.2.a.iv.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、石油精製所で原油精製及び貯蔵する際に漏出する CH₄の排出を扱う。

なお、CO₂の排出については「NE」と報告している。我が国では原油及びNGL (Natural Gas Liquids : 天然ガス液) の精製及び貯蔵は行われており、原油中に CO₂が溶存している場合には当該活動により CO₂が排出されることが考えられる。当該活動による CO₂の排出はごく微量と考えられるが、原油中の CO₂含有量の測定例は存在せず、排出係数のデフォルト値もないことから、算定を行っていない。

b) 方法論

■ 算定方法

【原油の精製】

精製時の漏出については、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol. 2, page 4.40, Fig. 4.2.3) に従い、Tier 1 法を用いて排出量の算定を行う。

【原油の貯蔵】

貯蔵時の漏出については、日本の独自排出係数を用いることができるため、これを用いて排出量の算定を行う。

■ 排出係数

【原油の精製】

精製時の漏出の排出係数については、日本における原油の精製時の CH₄漏出は通常運転時には起こりえないため、原油精製に伴う CH₄排出量は非常に少量であると考えられる。このことから、2006年 IPCC ガイドラインに示されているデフォルト値の下限値を用いる。

表 3-73 原油精製時の CH₄排出係数

排出係数 [kt-CH ₄ /10 ³ m ³]	
原油精製	2.6×10 ⁻⁶

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 4.53, Table 4.2.4

(注) デフォルト値は、2.6×10⁻⁶~41.0×10⁻⁶

【原油の貯蔵】

原油の貯蔵施設としては、固定屋根タンクと浮屋根タンクの2種類がある。日本においては全ての原油貯蔵施設で浮屋根原油タンクを用いていることから、CH₄の漏出量は非常に少ないと考えられる。CH₄の漏出が起これば、貯蔵油を払い出す際の浮き屋根下降に伴い、原油で濡れた壁面が露出し付着した油が蒸発し、わずかなCH₄の漏出が起こればと考えられる。

石油連盟では浮屋根貯蔵タンクのモデルを作成して壁面からのCH₄蒸発に関する実験を行い、その結果に基づき、CH₄排出の推計を行っている。

原油の貯蔵に係る排出係数は、石油連盟の推計結果(0.007千トンCH₄/年(1998年度))を原油の石油精製業への投入量(「総合エネルギー統計」より)で除した値とする。

表 3-74 原油貯蔵時の排出係数の算出仮定

CH ₄ 排出量 [kt-CH ₄ /year]	原油の石油精製業への投入量 [10 ³ kL]	排出係数 [kt-CH ₄ /10 ³ kL]
7×10 ⁻³	242,861	2.9×10 ⁻⁸

■ 活動量

精製時、貯蔵時の活動量については「総合エネルギー統計」に示された、石油精製業で精製された原油及びNGLの体積ベース精製量を用いる。

表 3-75 原油・NGLの国内精製量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
原油・NGL精製量	10 ⁶ m ³	204	241	242	241	210	209	197	197	200	189	188	191	184	177

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

原油及びNGLの精製に伴うCH₄の漏出の排出係数は、すべて2006年IPCCガイドラインのデフォルト値を使用していることから、同ガイドラインの設定値(-100~+100%)を使用した。また、活動量については、原油及びNGLについて、それぞれ標準発熱量の不確実性と消費量の把握に使用されている統計の不確実性から、誤差伝播式により-21~+21%と設定した。ただし消費量の把握に使用されている統計(「資源・エネルギー統計年報」、「石油等消費動態統計年報」)の不確実性が把握できないため、それらは2006年IPCCガイドラインのデフォルト値(流量の計測に伴う不確実性(販売量以外))で代用した。その結果、原油及びNGLの精製に伴うCH₄の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ-102~+102%と評価された。

原油及びNGLの貯蔵に伴うCH₄の漏出の排出係数は我が国独自の数値を使用しているが、不確実性の設定が困難であるため2006年IPCCガイドラインの設定値(-100~+100%)を採用した。また、活動量については、原油及びNGLについて、それぞれ標準発熱量の不確実性と消費量の把握に使用されている統計の不確実性から、誤差伝播式により-21~21%と設定した。ただし消費量の把握に使用されている統計(「資源・エネルギー統計年報」、「石油等消費動態統計年報」)の不確実性が把握できないため、それらは2006年IPCCガイドラインのデフォルト値(流量の計測に伴う不確実性(販売量以外))で代用した。その結果、原油及びNGLの貯蔵に伴うCH₄の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ-102~+102%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記した方法を使用して、1990年度から直近年まで一定値を使用している。また、精製時、貯蔵時の活動量は「総合エネルギー統計」をもとに、1990年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の2017年度の活動量が更新されたため、当該年度のCH₄排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.1.e. 石油製品の供給 (1.B.2.a.v.)

石油製品中にCO₂及びCH₄が溶存している場合には当該活動によりCO₂及びCH₄が排出されることが考えられる。当該活動によるCO₂、CH₄の排出は、石油製品の組成を考慮するとほぼ無いと考えられるが、石油製品中のCO₂及びCH₄の溶存量の測定例は存在しないため現状は排出量の算定はできない。また、排出係数のデフォルト値もないことから「NE」として報告する。

3.3.2.2. 天然ガス (1.B.2.b)

我が国における天然ガスの供給網とその各プロセスから漏出する温室効果ガスのインベントリでの計上区分を図3-7に示す。

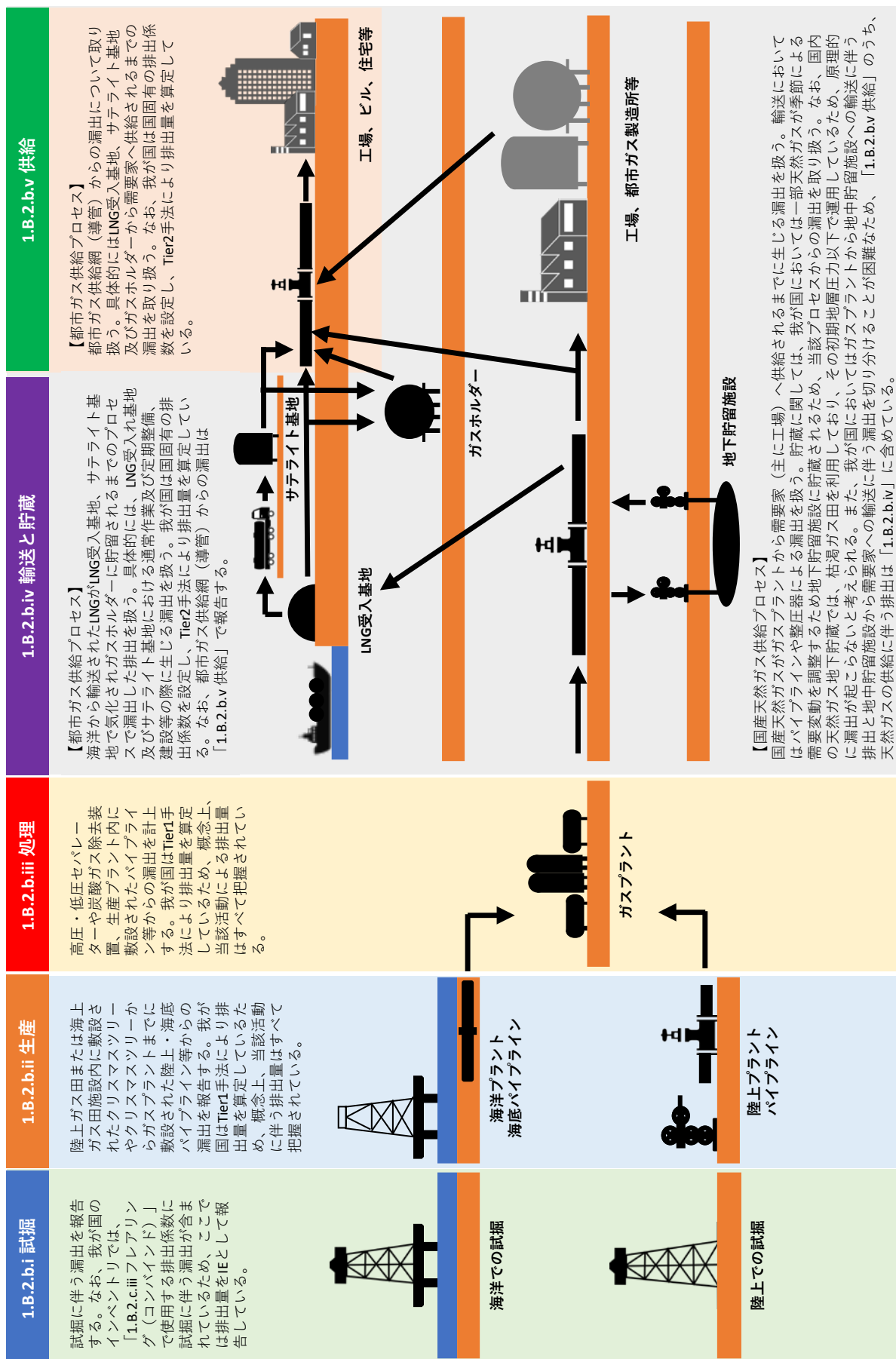


図 3-7 天然ガスの供給網とインベントリ計上区分

3.3.2.2.a. 試掘 (1.B.2.b.i)

本カテゴリーでは、天然ガス田の試掘時に漏出する CO₂、CH₄、N₂O の排出を扱う。

「1.B.2.a.i 石油の試掘」と同様に、本カテゴリーの漏出は基本的にフレアリングのみであるが、また統計上活動量を石油生産用と天然ガス生産用と区別することが困難であることから、「1.B.2.c.Flaring.iii フレアリング (コンバインド)」にまとめて報告する。なお、「1.B.2.a.i 石油の試掘」と同様に、概念上フレアリング以外の漏出に伴う温室効果ガス排出についても「1.B.2.c.Flaring.iii フレアリング (コンバインド)」に含まれることになるため、ここでは各ガスの排出量を「IE」として報告する。

3.3.2.2.b. 生産 (1.B.2.b.ii)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、天然ガスの生産時に漏出する CO₂、CH₄、及び生産井の点検時に測定器を井中に降ろす際に漏出する CO₂、CH₄の排出を扱う。なお、天然ガスの生産時の漏出に伴う排出については、海上・陸上油田別に排出量を算定する。

b) 方法論

■ 算定方法

天然ガス生産に伴う漏出については、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol. 2, page 4.38, Fig. 4.2.1) に従い、Tier 1 法を用いて算定を行う。

生産井の点検に伴う漏出については、2006年 IPCC ガイドラインでは原油生産量に排出係数を乗じて排出量を算定することになっているが、日本の場合原油生産量と天然ガス井の点検に伴う排出量との相関関係が不明であることから、より日本の実態に近いと考えられる GPG (2000) の Tier 1 法 (生産井数に排出係数を乗じる算定方法) を使用する。

■ 排出係数

【生産時】

天然ガス生産時の漏出の排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示されているデフォルト値を用いる。

表 3-76 天然ガス生産時の漏出の排出係数 [kt/10⁶m³]

		CH ₄	CO ₂	N ₂ O
天然ガス生産	海上ガス田からの漏出	3.8×10 ⁻⁴	1.4×10 ⁻⁵	NA
	陸上ガス田からの漏出	2.3×10 ⁻³	8.2×10 ⁻⁵	NA

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 4.48, Table 4.2.4

(注) デフォルト値が「NA」のため N₂O は算定対象外とする。

【点検時】

天然ガス生産井の点検時の漏出の排出係数については、GPG (2000) に示されているデフォルト値を用いる。

表 3-77 天然ガス生産井の点検時の排出係数 [kt/本]

	CH ₄	CO ₂	N ₂ O
生産井 (Servicing)	6.4×10 ⁻⁵	4.8×10 ⁻⁷	0

(出典) GPG (2000) Table 2.16

(注) デフォルト値が「0」のため N₂O は算定対象外とする。

■ 活動量

【生産時】

海上ガス田からの天然ガス生産量については、「天然ガス資料年報」に示された海域からの天然ガス生産量を用いる。

陸上ガス田からの天然ガス生産量については、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における天然ガス総生産量から、上記海上ガス田からの天然ガス生産量を減じて算定する。

【点検時】

油田とガス田を時系列に沿って統計的に区別することはできないため、油田とガス田を併せた生産井数を用いることとし、生産井の点検時の漏出の活動量については、「天然ガス資料年報」に示された生産井数を用いる。なお、最新年度については前年度値を代用する。

表 3-78 天然ガス生産量、天然ガス及び原油生産井数

項目		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
天然ガス 生産量	海上	10 ⁶ m ³	342	374	350	361	191	188	190	196	196	197	190	176	148	148
	陸上		1,724	1,863	2,149	2,779	3,364	3,155	3,144	2,981	2,744	2,549	2,525	2,621	2,777	2,508
	合計		2,066	2,237	2,499	3,140	3,555	3,343	3,334	3,177	2,940	2,746	2,715	2,797	2,926	2,657
天然ガス及び原油 生産井数	本	1,230	1,205	1,137	1,115	1,049	1,046	1,047	1,038	1,059	1,046	1,034	1,019	1,001	1,001	

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

天然ガス生産時の CO₂、CH₄の漏出の排出係数については、すべて 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、同ガイドラインの設定値 (-100~+100%) を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値 (流量の計測に伴う不確実性 (販売量以外) の -15~+15%) を使用した。その結果、天然ガス生産時の CO₂、CH₄の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -101~+101% と評価された。

また、生産井の点検に伴う CO₂、CH₄の漏出の排出係数については、すべて GPG (2000) のデフォルト値を使用していることから、同ガイダンスの設定値 (-25~+25%) を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値 (生産施設数の係数に伴う不確実性の -25~+25%) を使用した。その結果、生産井の点検に伴う CO₂、CH₄の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -35~+35% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記した方法を使用して、1990 年度から直近年まで一定値を使用している。また、生産時の活動量は「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」、「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」及び「天然ガス資料年報」をもとに、点検時の活動量は「天然ガス資料年報」をもとに、1990 年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述する。

e) 再計算

「天然ガス資料年報」の2017年度の活動量が更新されたため、当該年度のCO₂及びCH₄排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.2.c. 処理 (1.B.2.b.iii.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、天然ガスの成分調整等の処理時に漏出するCO₂、CH₄の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

天然ガス処理に伴う漏出については、2006年IPCCガイドラインのデシジョンツリー (Vol. 2, page 4.38, Fig. 4.2.1) に従い、Tier 1法を用いて算定を行う。

■ 排出係数

天然ガス処理時の漏出の排出係数については、2006年IPCCガイドラインに示されているデフォルト値の上限値と下限値の中間値を排出係数とする。

表 3-79 天然ガス処理時の漏出の排出係数 [kt/10⁶m³]

		CH ₄	CO ₂	N ₂ O ³⁾
天然ガス処理	処理時全般 (一般処理プラント)	7.55×10 ⁻⁴ 1)	2.35×10 ⁻⁴ 2)	NA

(出典) 2006年IPCCガイドライン Vol. 2, page 4.48, Table 4.2.4

(注)

- 1) CH₄のデフォルト値は、4.8×10⁻⁴~10.3×10⁻⁴
- 2) CO₂のデフォルト値は、1.5×10⁻⁴~3.2×10⁻⁴
- 3) デフォルト値が「NA」のため算定対象外とする。

■ 活動量

処理時の活動量については、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における天然ガス生産量を用いる (表 3-78 を参照のこと)。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

天然ガス処理時のCO₂、CH₄の漏出の排出係数については、すべて2006年IPCCガイドラインのデフォルト値を使用していることから、同ガイドラインの設定値 (-100~+100%) を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006年IPCCガイドラインの設定値 (流量の計測に伴う不確実性 (販売量以外) の-15~+15%) を使用した。その結果、天然ガス処理時のCO₂、CH₄の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -101~+101%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、デフォルト値を1990年度から直近年まで一定値を使用している。また、処理時の活動量は「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」をもとに、1990年度から直近年まで全ての時系列に

において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.2.d. 輸送と貯蔵 (1.B.2.b.iv.)

a) 排出源カテゴリーの説明

天然ガスの輸送においては、パイプラインの移設工事及び設置工事に伴うガスの放散、整圧器の駆動用ガスの放散など、国内において生産される天然ガスの輸送に伴う CH₄の排出を扱う。

また、天然ガスの貯蔵においては、国内の LNG (液化天然ガス) 受入、都市ガス生産基地、及びサテライト基地における通常作業及び定期整備、建設等の際に排出される CH₄の排出を扱う。

なお、本カテゴリーからの CO₂排出は、「NA」と報告する。都市ガスの9割程度を占める LNG 系の都市ガスには CO₂は存在しないが、我が国の一部の天然ガス層に存在する国産天然ガス中には CO₂が含まれている。この CO₂は天然ガスの生産プラントにてほとんど除去した後、天然ガス輸送パイプラインに送られているため、天然ガス輸送パイプラインからは CO₂はほとんど排出されず、また都市ガス事業者等へ供給されている天然ガス中の CO₂はほとんどないと考えられ、天然ガスの生産プラントにて除去された CO₂は通気弁 (天然ガス産業) (1.B.2.c.Venting.ii) にて排出量が報告されているため、当該排出源からの CO₂排出は「NA」とする。

b) 方法論

■ 算定方法

天然ガスの輸送においては、天然ガスの販売量に我が国独自の排出係数を乗じて CH₄排出量を算定する。

天然ガスの貯蔵においては、都市ガスの原料として利用された LNG 及び天然ガスの量に我が国独自の排出係数を乗じて CH₄排出量を算定する。

■ 排出係数

【輸送】

パイプラインの移設・設置工事に伴うガスの放散については2004年度及び2008年度以降、整圧器の駆動用ガスの放散については2004年度及び2011年度以降において、天然ガス鉱業会が会員企業の施設からの CH₄排出量を調査しており、わが国独自の排出係数の設定に当たってはこの調査結果を利用する。

パイプラインの移設・設置工事、整圧器の駆動用ガスの放散それぞれの排出係数を表 3-80

のように推計し、その合計値を天然ガスの輸送に伴う排出の排出係数とする。なお、排出係数の設定に用いる天然ガス販売量は、天然ガス鉱業会会員企業のデータ（天然ガス鉱業会提供）とする。

表 3-80 天然ガスの輸送における排出係数の推計方法

年度	パイプラインの移設・設置工事	整圧器の駆動用ガスの放散
1990～2003	2004年度と同じ値を一律に適用。	
2004	2004年度のCH ₄ 排出量実績を、同年度の天然ガス販売量で除して算出。	
2005～2007	2008年度の排出係数（2004年度と同様の方法で算定）を算定したうえで、2004年度と2008年度の排出係数から内挿して推計。	2011年度の排出係数（2004年度と同様の方法で算定）を算定したうえで、2004年度と2011年度の排出係数から内挿して推計。
2008～2010	各年度のCH ₄ 排出量実績を、同年度の天然ガス販売量で除して算出。	
2011～	各年度のCH ₄ 排出量実績を、同年度の天然ガス販売量で除して算出。	

上記推計の結果、各年度の排出係数は表 3-81 のとおりとなる。

表 3-81 天然ガスの輸送における排出係数の推計結果（単位 t-CH₄/10⁶m³）

項目	～2004	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
パイプラインの移設・設置工事	0.220	0.190	0.100	0.071	0.037	0.073	0.062	0.070	0.115	0.217	0.077	0.129
整圧器の駆動用ガス	0.087	0.077	0.038	0.028	0.018	0.013	0.009	0.005	0.001	0.001	0.001	0.001
合計	0.306	0.267	0.138	0.099	0.056	0.087	0.071	0.075	0.116	0.218	0.078	0.131

【貯蔵】

国内の主要な LNG 受入、都市ガス生産基地、及びサテライト基地において実測された通常作業及び定期整備、建設等の際に排出される CH₄の排出量を、投入された原料（LNG、天然ガス）の発熱量で除した値を排出係数として用いる。1998年度の実績から算定された排出係数は 905.41 [kg-CH₄/PJ] に対し、2007年度の実績から算定された排出係数は 264.07 [kg-CH₄/PJ] であった。排出係数が変化した主な要因は、LNG 受入・都市ガス生産基地において、ガス分析時のサンプリング回収ラインの新設（ガスを大気拡散から回収するラインへの変更）等の削減対策が進んだことにより、CH₄排出量が低減されたためである。CH₄排出量の削減対策は徐々にすすめられたものであるため、1999年度から2006年度の期間の排出係数については、線形に内挿することで設定する。また、現在は既に CH₄排出の削減対策が概ね実施済みであり、当面排出係数の大きな変化は無いと考えられるため、2008年度以降は2007年度値の排出係数を一定で用いる。

■ 活動量

【輸送】

「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された天然ガスの販売量を活動量に用いる。

表 3-82 天然ガスの販売量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
天然ガス販売量	10 ⁶ m ³	2,067	2,339	2,617	3,329	3,918	4,020	4,208	3,928	3,790	3,792	3,709	3,806	4,000	3,980

【貯蔵】

「総合エネルギー統計」に示された都市ガスの原料として用いられた LNG 及び天然ガスの量を用いる。

表 3-83 都市ガスの原料として用いられた液化天然ガス及び天然ガスの消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
都市ガス製造におけるLNG消費量	PJ	464	676	864	1,230	1,424	1,531	1,574	1,592	1,555	1,567	1,567	1,641	1,665	1,635
都市ガス製造における天然ガス消費量	PJ	40	48	61	86	127	115	118	112	107	106	103	101	96	85

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

天然ガスの輸送に伴う CH₄の漏出の排出係数は我が国独自の数値を使用しているが、不確実性の設定が困難であるため 2006 年 IPCC ガイドラインの設定値 (-100~+100%) を採用した。また、活動量についても、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値 (流量の計測に伴う不確実性 (販売量) の-2~+2%) を採用した。その結果、天然ガスの輸送に伴う CH₄の漏出の排出量の不確実性は、-100~+100%と評価された。

天然ガスの貯蔵に伴う CH₄の漏出の排出係数は我が国独自の数値を使用しているが、不確実性の設定が困難であるため 2006 年 IPCC ガイドラインの設定値 (-20~+500%) を採用した。また、活動量についても、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値 (流量の計測に伴う不確実性 (販売量以外) の-15~+15%) を採用した。その結果、天然ガスの貯蔵に伴う CH₄の漏出の排出量の不確実性は、-25~+500%と評価された。

■ 時系列の一貫性

2004 年度以降の天然ガスの輸送の排出係数については、排出量測定実施年度についてその捕捉範囲の排出量を相当の天然ガス生産量で除して設定しており、排出量を実測していない年度の排出係数は内挿によって設定している。排出量を実測していない 2003 年度以前の排出量は 2004 年度の設定値を全年にわたって使用している。また、活動量に用いた天然ガス販売量は「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」から引用している。

天然ガスの貯蔵の排出係数は、前述の説明のとおり 1998 年度と 2007 年度の調査により設定した排出係数をもとに、1997 年度以前の排出係数は 1998 年度値を、2008 年度以降の排出係数は 2007 年度値を、1999~2006 年度の排出係数は 1998 年度値と 2007 年度値から内挿してそれぞれ設定している。また、都市ガスの原料として用いられた LNG 及び天然ガスの活動量は、全年にわたり「総合エネルギー統計」より引用して一貫性を確保している。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述する。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の 2013~2017 年度の活動量が更新されたため、当該年度の CH₄排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.2.e. 供給 (1.B.2.b.v)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、都市ガス供給網（導管）からの CH₄の排出を扱う。

我が国では、液化石油ガス、石炭、コークス、ナフサ、原油、天然ガスなどの原料をガス製造工場で精製混合し、所定の発熱量に調整したガスを、ガス配管により都市部に供給している。このような気体燃料は「都市ガス」と称しており、その90%以上をLNG系のガスが占める。都市ガスの概要については3.2.4.b)方法論の都市ガスの排出係数についての説明(図3-4、表3-16等)を参照されたい。

なお、本カテゴリーからのCO₂排出は、「NA」と報告している。都市ガスの9割以上を占めるLNG系の都市ガスにはCO₂は存在しないが、我が国の一部の天然ガス層に存在する国産天然ガス中にはCO₂が含まれている。このCO₂は天然ガスの生産プラントにてほとんど除去した後、天然ガス輸送パイプラインに送られているため、都市ガス事業者等へ供給されている天然ガス中のCO₂はほとんどないと考えられ、天然ガスの生産プラントにて除去されたCO₂排出量は通気弁（天然ガス産業）(1.B.2.c.Venting.ii)にて報告されているため、「NA」としている。

b) 方法論

■ 算定方法

都市ガス供給網、すなわち高圧導管、中低圧導管ホルダー、及び供内管からのCH₄排出量については、都市ガス販売量に日本独自の排出係数を乗じてCH₄排出量を算定する。

■ 排出係数

国内において生産される都市ガスの供給に関わる排出源としては、(i)高圧導管、(ii)中低圧導管、ホルダー、(iii)供内管がある。排出源毎に、2004年度の実績から算定した一般ガス事業者の都市ガス供給網からのCH₄排出量は表3-84のとおりである。2004年度のCH₄排出量(292t-CH₄)を、同年度の一般ガス事業者の都市ガス販売量である30,696百万m³(出典:「ガス事業生産動態統計」)で除した 9.5×10^{-6} kt-CH₄/10⁶ m³を販売量当たりの排出係数として設定する。

表 3-84 都市ガス導管からのCH₄排出量 (2004年度実績)

排出源		CH ₄ 排出量 [t/年]
高圧導管	導管新設工事、導管移設工事	180
中低圧導管ホルダー	新設・撤去等工事、漏洩、ガバナール等点検、ホルダー建設及び開放検査	93
供内管	供給管取り出し工事、工事後パージ、撤去工事、メーター取替え、漏洩等、開栓・定期保安巡回、機器修理 (主に需要家(家庭)における工事時に排出)	19

■ 活動量

「ガス事業生産動態統計」の都市ガス販売量(熱量換算)を、「総合エネルギー統計」の発熱量で除して体積換算した値を使用する。都市ガス販売量は工業用、商業用、家庭用、その他用に分類されており、それらすべてを活動量に含めていることから、都市ガスの産業部門への供給に伴う排出量は算定に含まれている。

表 3-85 都市ガス販売量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
都市ガス販売量	PJ	643	877	1,064	1,419	1,546	1,644	1,691	1,688	1,667	1,681	1,671	1,738	1,779	1,740
体積当たり発熱量	MJ/m ³	41.9	41.9	41.1	44.8	44.8	44.8	44.8	44.8	40.8	40.8	40.7	40.7	40.8	40.0
都市ガス販売量 (体積換算)	10 ⁶ m ³	15,367	20,952	25,899	31,684	34,516	36,705	37,738	37,686	40,894	41,226	41,073	42,721	43,607	43,521

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

都市ガスの供給に伴う CH₄の漏出の排出係数は我が国独自の数値を使用しているが不確実性の設定が困難であるため、2006年 IPCC ガイドラインの設定値 (-20~+500%) を採用した。また、活動量についても、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006年 IPCC ガイドラインの設定値 (流量の計測に伴う不確実性 (販売量) の -2~+2%) を採用した。その結果、都市ガスの供給に伴う CH₄の漏出の排出量の不確実性は、-20~+500%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記した方法を使用して、1990年度から直近年まで一定値を使用している。また、活動量は「ガス事業生産動態統計」をもとに、1990年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

「総合エネルギー統計」の2013~2017年度の活動量が更新されたため、当該年度の CH₄排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.2.f. 工場及び発電所における漏出・家庭及び業務部門における漏出 (1.B.2.b.vi.)

当該排出源における CH₄の排出として、建物内のガス配管の工事等の排出が考えられるが、これらは「天然ガスの供給 (都市ガス供給網)」(1.B.2.b.v) における排出量に含まれているため、当該排出源からの CH₄排出量は「IE」として報告する。また、都市ガス成分には基本的に CO₂は含まれていないため、当該排出源からの CO₂排出量は「NA」として報告する。

3.3.2.3. 通気弁及びフレアリング (1.B.2.c)

本カテゴリーでは、石油産業、天然ガス産業における油田、ガス田の開発、輸送、精製、配送時の CO₂、CH₄の通気弁からの排出を扱う。

また、上記のプロセスにおける CO₂、CH₄及び N₂O のフレアリングによる排出を扱う。

3.3.2.3.a. 通気弁（石油産業）（1.B.2.c.Venting.i）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、石油産業における通気弁からの CO₂、CH₄の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol. 2, page 4.39, Fig. 4.2.2）に従い、Tier 1法を用いて排出量の算定を行う。原油生産量にデフォルトの排出係数を乗じて算定を行う。

■ 排出係数

油田の通気弁の排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示されている一般原油のデフォルト値を用いる。

表 3-86 油田の通気弁の排出係数

		CH ₄	CO ₂	N ₂ O
原油生産/一般原油 (Oil production/ Conventional oil)	通気弁 (Venting) [kt/1000 m ³]	7.2×10 ⁻⁴	9.5×10 ⁻⁵	NA

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 4.50, Table 4.2.4

(注) デフォルト値が「NA」のため、N₂O は算定対象外とする。

■ 活動量

通気弁からの漏出の活動量については、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における原油生産量を用いる。なお、コンデンセート生産量は対象外とする（表 3-72 参照）。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

石油産業における通気弁からの CO₂、CH₄の漏出の排出係数は、すべて 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、同ガイドラインの設定値（-50～+50%）を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006年 IPCC ガイドラインの設定値（流量の計測に伴う不確実性（販売量以外）：-15～+15%）を使用した。その結果、石油産業における通気弁からの CO₂、CH₄の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -52～+52%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、前述の方法を使用して、1990年度から直近年まで一定値を使用している。また、通気弁からの漏出の活動量は「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」をもとに、1990年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.3.b. 通気弁（天然ガス産業）（1.B.2.c.Venting.ii）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、天然ガス生産施設において生産された天然ガス中の CO₂含有量が需要家の設定する天然ガス中の非燃焼性ガス含有量の基準を満たさない場合に CO₂が分離除去されて大気放出されることに伴う CO₂排出を取り扱う。

なお、本カテゴリーの他の排出源として、2006年 IPCC ガイドラインに排出係数が設定されている天然ガスの輸送時の意図的な CO₂・CH₄排出が考えられる。天然ガスパイプラインからの意図的な CO₂排出については、我が国では天然ガスの輸送による CO₂排出量(1.B.2.b.iv)を「NA」と整理していることから、排出量は報告しない。また、CH₄排出については、天然ガス輸送時の排出(1.B.2.b.iv)に含まれているため「IE」と報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

1990年度、1995年度以降については、石油鉱業連盟提供の当該排出源からの CO₂排出量データ（実測値）を本カテゴリーの排出量として報告する。

1991～1994年度については、日本におけるガス田のうち、天然ガス中の CO₂の分離除去が実施されているガス田（南長岡ガス田、片貝ガス田）からの天然ガス生産量を活動量とし、排出係数を乗じて排出量を算定する。なお、排出係数については、石油鉱業連盟提供の1990年度、1995年度の排出量を同年度の活動量で除して見かけの排出係数を算定したうえで、両年度の排出係数から内挿によって推計する。

■ 排出係数

1990年度、1995年度以降については、石油鉱業連盟提供の排出量データを活動量で除して推計する。1991～1994年度については、1990年度、1995年度の排出係数から内挿により推計する（ただし、排出量の算定には1991～1994年度の排出係数のみ用いる）。

表 3-87 通気弁（天然ガス産業）の排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
排出係数	kg-CO ₂ /m ³	0.133	0.117	0.126	0.114	0.123	0.120	0.119	0.122	0.121	0.124	0.128	0.129	0.127	0.116

■ 活動量

「天然ガス資料年報」の南長岡ガス田、片貝ガス田からの天然ガス生産量の合計を用いる（ただし、排出量の算定には1991～1994年度の活動量のみ用いる）。

表 3-88 南長岡ガス田、片貝ガス田からの天然ガス生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
南長岡ガス田	10 ⁶ m ³	241	376	571	893	1,632	1,313	1,308	1,372	1,295	1,172	1,215	1,340	1,484	1,484
片貝ガス田	10 ⁶ m ³	191	281	219	336	279	346	395	358	369	370	384	421	460	460
合計	10 ⁶ m ³	432	657	789	1,229	1,911	1,660	1,704	1,731	1,664	1,542	1,598	1,761	1,944	1,944

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

天然ガス産業における通気弁からの排出については、1990年度、1995年度以降は石油鉱業連盟提供の排出量の実測データを用いて報告しているが、当該データの不確実性を把握する

ことが困難であるため、2006年 IPCC ガイドラインに示された、流量の計測に伴う不確実性の標準値 (-15~+15%) を採用した。

■ 時系列の一貫性

本カテゴリーの排出量は、1990年度、1995年度以降は一貫して石油鉱業連盟提供データを使用している。1991~1994年度については、石油鉱業連盟提供の1990年度、1995年度の排出量データ等を用いて推計している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.3.c. 通気弁（コンバインド）（1.B.2.c.Venting.iii）

我が国では統計上、石油と天然ガスの2区分で整理を行っており、石油産業・天然ガス産業における通気弁からの漏出については、(1.B.2.c.i) 石油産業及び(1.B.2.c.ii) 天然ガス産業における通気弁からの排出に含まれているため「IE」として報告する。

3.3.2.3.d. フレアリング（石油産業）（1.B.2.c.Flaring.i）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、石油産業におけるフレアリングからのCO₂、CH₄、N₂Oの排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol. 2, page 4.39, Fig. 4.2.2）に従い、Tier 1を用いて我が国の原油生産量にデフォルトの排出係数を乗じてCO₂、CH₄、N₂O排出量の算定を行う。

■ 排出係数

我が国における実測データ及び独自の排出係数が存在しないため、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値を採用する。

表 3-89 石油産業のフレアリングの排出係数

	単位	CH ₄	CO ₂	N ₂ O
フレアリング (Conventional oil)	kt/10 ³ m ³	2.5×10 ⁻⁵	4.1×10 ⁻²	6.4×10 ⁻⁷

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, p 4.50, Table 4.2.4

■ 活動量

石油産業におけるフレアリングの活動量については、「エネルギー生産・需給統計年報」、

「資源・エネルギー統計年報」、「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された原油の生産量を使用する。なお、コンデンセート生産量は対象外とする（表 3-72 参照）。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

石油産業におけるフレアリングからの CO₂、CH₄、N₂O の漏出の排出係数は、すべて 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、同ガイドラインの設定値（-50～+50%）を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006 年 IPCC ガイドラインの設定値（流量の計測に伴う不確実性（販売量以外）：-15～+15%）を使用した。その結果、石油産業におけるフレアリングからの CO₂、CH₄、N₂O の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -52～+52%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記した方法を使用して、1990 年度から直近年まで一定値を使用している。また、石油産業におけるフレアリングの活動量は、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」をもとに、1990 年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述する。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.3.e. フレアリング（天然ガス産業）（1.B.2.c.Flaring.ii）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、天然ガス産業におけるフレアリングからの CO₂、CH₄、N₂O の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

天然ガス産業におけるフレアリングの排出については、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol. 2, page 4.38, Fig. 4.2.1）に従い、Tier 1 を用いて CO₂、CH₄、N₂O 排出量の算定を行う。排出量は天然ガスの生産量に排出係数を乗じて算定する。ガスの生産時とガスの処理時におけるフレアリングに伴う排出量の合計を天然ガスにおけるフレアリングの排出量とする。

■ 排出係数

ガス田のフレアリングの排出係数については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている天然ガス産業におけるフレアリングのデフォルト値を用いる。

表 3-90 天然ガス産業におけるフレアリングの排出係数

		単位	CH ₄	CO ₂	N ₂ O
天然ガス産業におけるフレアリング (Flaring)	ガスの生産時 (Gas Production)	kt/10 ⁶ m ³	7.6×10 ⁻⁷	1.2×10 ⁻³	2.1×10 ⁻⁸
	ガス処理時/一般処理プラント (Gas Processing/ Sweet Gas Plant)	kt/10 ⁶ m ³	1.2×10 ⁻⁶	1.8×10 ⁻³	2.5×10 ⁻⁸

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol. 2, page 4.48, Table 4.2.4

■ 活動量

「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された天然ガスの国内生産量を用いる（表 3-78 参照）。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

天然ガス産業におけるフレアリングからの CO₂、CH₄、N₂O の漏出の排出係数は、すべて 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用していることから、同ガイドラインの設定値 (-25~+25%) を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006年 IPCC ガイドラインの設定値 (流量の計測に伴う不確実性 (販売量以外) : -15~+15%) を使用した。その結果、天然ガス産業におけるフレアリングからの CO₂、CH₄、N₂O の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -29~+29% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記した方法を使用して、1990 年度から直近年まで一定値を使用している。また、天然ガス産業におけるフレアリングの活動量は、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」をもとに、1990 年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述する。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.3.f. フレアリング (コンバインド) (1.B.2.c.Flaring.iii)

a) 排出源カテゴリーの説明

我が国では統計上、石油と天然ガスの 2 区分で整理を行っており、石油産業・天然ガス産業におけるフレアリングからの漏出のうち、どちらの産業におけるフレアリングであるか区別できる漏出については、「1.B.2.c.Flaring.i フレアリング (石油産業)」または「1.B.2.c.Flaring.ii フレアリング (天然ガス産業)」にて報告し、本カテゴリーでは石油産業と天然ガス産業の区別ができない、石油及び天然ガスの試掘や生産前テストに伴う漏出による CO₂、CH₄、N₂O の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインには、石油及び天然ガスの試掘や生産前テストに伴う漏出の排出係数のデフォルト値として、原油生産量を活動量とした排出係数が示されている。

しかし、日本の場合、天然ガスの試掘や生産前テストに伴う CO₂、CH₄、N₂O 等の排出量と原油生産量との相関関係や、試掘時やテスト時の生産に伴う温室効果ガス排出量と商業プラントからの生産量との相関関係が不明であり、2006年 IPCC ガイドラインに示された原油生産量を活動量とした算定方法を適用した場合に算定結果が実態から乖離する懸念がある。従って、本カテゴリーでは、より実態に近いと考えられる GPG (2000) の Tier 1 法、すなわち試掘井あるいはテスト井の井数を活動量とし、これにデフォルト値を乗じる算定方法を用いる。

■ 排出係数

GPG (2000) に示されたデフォルト値を採用する。

表 3-91 試掘井・テスト井の漏出の排出係数 [kt/井数]

	CH ₄	CO ₂	N ₂ O
試掘井 (Drilling)	4.3×10 ⁻⁷	2.8×10 ⁻⁸	0
テスト井 (Testing)	2.7×10 ⁻⁴	5.7×10 ⁻³	6.8×10 ⁻⁸

(出典) GPG (2000)、page 2.86 Table 2.16

■ 活動量

試掘井数については、「天然ガス資料年報」に記された値を用いる。

テスト井数について統計的に把握することは困難であり、また、テストを実施しても成功井とならない場合もある。このため、テスト井数については、「天然ガス資料年報」に示された試掘井数と成功井数の中間値を用いる。

なお、最新年度については前年度値を代用する。

表 3-92 試掘、生産前テストを実施した井数の推移

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
試掘井数	本	8	7	7	10	4	2	1	4	5	1	2	2	0	0
成功井数		1	3	4	5	2	0	1	2	3	1	1	0	0	0
試油試ガステストを実施した坑井数		5	5	6	8	3	1	1	3	4	1	2	1	0	0

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

本カテゴリー（コンバインド）におけるフレアリングからの CO₂、CH₄、N₂O の漏出の排出係数は、すべて GPG (2000) のデフォルト値を使用していることから、同ガイダンスの設定値 (-25~+25%) を使用した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006年 IPCC ガイドラインの設定値（生産施設数の係数に伴う不確実性の-25~+25%）を使用した。その結果、石油産業におけるフレアリングからの CO₂、CH₄、N₂O の漏出の排出量の不確実性は、それぞれ -35~+35% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記した方法を使用して、1990年度から直近年まで一定値を使用している。また、活動量は「天然ガス資料年報」をもとに、1990年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

「天然ガス資料年報」の2017年度の活動量が更新されたため、当該年度のCO₂、CH₄及びN₂O排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.3.2.4. その他（地熱発電における蒸気の生産に伴う漏出）（1.B.2.d）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、地熱発電所の蒸気生産井で生産される蒸気中のCO₂及びCH₄が冷却塔から大気放出されることに伴う排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインには、本カテゴリーの排出量算定方法に関する記述がないことから、各地熱発電所の蒸気の重量ベース生産量に蒸気中のCO₂及びCH₄の質量濃度を乗じて排出量を算定することとする。なお、生産井で生産される蒸気中のCO₂及びCH₄については、冷却塔から排出される前に、蒸気が復水器を通過する段階で水に溶解している可能性があるが、当該溶解量を把握することが困難であることから、生産される蒸気中のCO₂及びCH₄の全量が大気中に放出されるとみなして排出量を算定している。

■ 排出係数

蒸気中のCO₂の質量濃度は、日本地熱調査会（2000）に示された各地熱発電所の蒸気中の非凝縮性ガスの体積濃度、及び非凝縮性ガス中のCO₂の体積濃度等より推計する。

蒸気中のCH₄の質量濃度は、日本地熱調査会（2000）に示された各地熱発電所の蒸気中の非凝縮性ガスの体積濃度、Geothermal Energy Association（2012）に示された非凝縮性ガス中のCH₄濃度等より推計する。

■ 活動量

各地熱発電所の蒸気生産量は、日本地熱調査会「わが国の地熱発電の動向」、火力原子力発電技術協会「地熱発電の現状と動向」に示された各地熱発電所の単位時間当たり蒸気生産量に、生産井の稼働時間を乗じて算定する。生産井の稼働時間は発電所の稼働時間と等しいとみなし、「地熱発電の現状と動向」に示された各発電所の年間発電時間を用いる。

全国の地熱発電所のCO₂とCH₄の各排出係数と、蒸気生産量の推移を表3-93に示す。

表 3-93 地熱発電の排出係数と蒸気生産量の推移

発電所名	排出係数		蒸気生産量 [kt]													
	CO ₂ [t-CO ₂ /kt]	CH ₄ [t-CH ₄ /kt]	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
	松川	12.2	0.025	1,884	1,493	1,708	1,115	1,083	813	777	745	872	857	666	412	610
大岳	3.1	0.006	1,173	995	995	774	817	789	677	770	937	885	867	935	1,013	1,013
大沼	0.6	0.002	694	682	535	651	610	600	590	518	537	521	489	521	510	510
鬼首	2.6	0.008	1,018	1,015	1,035	982	1,026	1,185	456	348	357	381	334	402	NO	NO
八丁原1号	6.5	0.013	2,883	2,366	2,598	2,602	2,783	2,287	2,468	2,353	2,347	1,887	1,963	2,097	1,729	1,729
八丁原2号	5.8	0.011	2,514	2,686	2,532	2,452	2,215	2,291	1,943	2,219	2,342	2,264	2,209	1,848	2,107	2,107
葛根田1号	0.3	0.001	3,498	3,126	1,966	2,021	1,476	1,535	1,537	1,276	1,374	1,400	1,362	1,455	1,371	1,371
葛根田2号	0.4	0.001	NO	209	1,823	2,004	1,002	1,440	1,521	1,255	1,269	1,225	1,142	1,058	1,286	1,286
杉乃井	8.5	0.019	220	284	203	144	146	129	139	170	147	136	140	137	110	110
森	28.1	0.053	1,367	1,990	1,981	1,501	1,065	1,068	888	1,182	1,001	1,105	934	1,015	1,121	1,121
霧島国際ホテル	1.1	0.003	48	97	70	NO	NO	30	81	58	68	38	NO	NO	NO	NO
上の岱	6.5	0.014	NO	1,882	2,070	1,601	1,801	482	1,480	1,846	1,784	1,717	1,512	1,521	1,449	1,449
山川	5.8	0.012	NO	1,451	1,336	639	973	1,026	1,151	1,026	989	702	744	1,031	1,047	1,047
澄川	1.4	0.004	NO	3,234	2,846	2,908	2,593	2,611	2,145	1,853	2,038	2,903	2,903	2,676	2,334	2,334
柳津西山	68.8	0.130	NO	3,912	3,425	3,197	1,872	2,229	2,266	2,203	1,626	1,998	1,537	1,691	1,064	1,064
大霧	0.4	0.001	NO	219	2,373	2,306	2,117	2,286	2,079	1,983	1,969	2,073	1,928	1,910	1,457	1,457
滝上	1.9	0.004	NO	NO	2,111	2,075	2,242	2,239	2,358	2,251	2,374	2,087	2,422	2,299	2,239	2,239
八丈島	18.1	0.041	NO	NO	187	156	179	152	171	142	149	151	147	153	165	165
九重	8.5	0.019	NO	NO	10	136	129	124	56	26	120	58	108	108	108	108
わいた	8.5	0.019	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	148	174	181	181

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数については、蒸気中の非凝縮性ガス濃度及び、非凝縮性ガス中の温室効果ガス濃度から算定していることから、2006年 IPCC ガイドラインに示されたガス濃度の計測時の不確実性に基いて-7~+7%と計算した。また、活動量については、出典となる統計の不確実性が把握できないため、2006年 IPCC ガイドラインの設定値（流量の計測に伴う不確実性(販売量以外)の-15~+15%）を使用した。その結果、地熱発電の生産井で生産される蒸気中の CO₂ 及び CH₄ の排出量の不確実性は-17~+17%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は、上記した方法を使用して、1990年度から直近年まで一定値を使用している。また、活動量は「地熱発電の現状と動向」をもとに、1990年度から直近年まで全ての時系列において同一の方法で算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC 手続きには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述する。

e) 再計算

「地熱発電の現状と動向」の2013、2014、2017年度の活動量が更新されたため、当該年度の CO₂ 及び CH₄ 排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

3.4. CO₂の輸送と貯留（1.C）

CO₂の輸送と貯留カテゴリーでは、二酸化炭素の回収・貯留（CCS：Carbon Dioxide Capture and Storage）からのCO₂排出を扱う。なお、CCSとは、気体として大気に放出されるはずのCO₂を回収し、地中や海底下に隔離する技術あるいは方法を指す。

本カテゴリーは、CO₂の輸送段階からの排出を扱う「1.C.1 CO₂の輸送」、CO₂の圧入及び貯留段階からの排出を扱う「1.C.2 圧入及び貯留」及び「1.C.3 その他」の3部門から構成されている。日本において過去にCO₂の地中圧入が行われた事例は表3-94の5件存在する。なお、CO₂の輸送及び圧入段階の排出は、CO₂の輸送・圧入が行われた期間のみ起こる可能性があるが、CO₂の貯留段階の排出は、CO₂の圧入開始以降、継続的に起こる可能性がある。表3-95に「1.C CO₂の輸送と貯留」からの排出量を示す。

表 3-94 日本におけるCO₂の地中圧入の事例

圧入サイト	CO ₂ 圧入期間
頸城	1991年3月～1993年6月
申川	1997年9月～1999年9月
長岡	2003年7月～2005年1月
夕張	2004年11月～2007年10月
苫小牧	2016年4月～

表 3-95 CO₂の輸送と貯留（1.C）の温室効果ガス排出量

部門		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1.C.1 CO ₂ の輸送	a. パイプライン	NE	NO	NO	NE	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NA	NA	NA
	b. 船舶	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	c. その他	NE	NO	NO	NE	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
1.C.2 圧入及び貯留	a. 圧入	NE	NO	NO	NE	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NA	NA	NA
	b. 貯留	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE
1.C.3 その他		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO

3.4.1. CO₂の輸送（1.C.1）

3.4.1.1. パイプライン（1.C.1.a）

本カテゴリーでは、CO₂の地中圧入に伴いパイプラインによりCO₂が輸送される際のCO₂の漏えいを取り扱う。

表3-94の各事例の実施主体に対するヒアリングによれば、パイプラインによるCO₂輸送時の漏えいは基本的には起こらず、漏えいしたとしても微量であるとのことであった。特に圧入サイトのうち苫小牧は、構造上パイプライン内のガスが漏えいしないよう設計され、気密試験の実施により気密性が確保されていることが確認されている。また、2006年IPCCガイドラインに示された排出係数のデフォルト値（vol. 2, page5.10, Table. 5.2）等を用いて排出量を試算したところ、年間の排出量は平成24年度温室効果ガス排出量算定方法検討会で定めた算定対象となる3,000t-CO₂を上回らなかった。このためCO₂圧入が実施された年度は、重要でないという意味での「NE」と報告し（ただし気密性が確保されている苫小牧のみで圧入が実施された年度は「NA」）、その他の年度は「NO」と報告する。重要でないという意味での「NE」については、別添5も参照のこと。

3.4.1.2. 船舶（1.C.1.b）

本カテゴリーでは、CO₂の地中圧入に伴い船舶によりCO₂が輸送される際のCO₂の漏えいを取り扱う。日本における過去のCO₂地中圧入事例では、CO₂の輸送に船舶は使用されてい

ないことから、「NO」と報告する。

3.4.1.3. その他 (1.C.1.c)

本カテゴリーの排出源としては、液化炭酸ガスを製造工場から圧入サイトまでタンクローリーで輸送する際の排出や、液化炭酸ガス貯蔵タンクからの排出等が考えられる。当該排出源については、各事例の実施主体に対するヒアリングによれば、CO₂の漏えいは基本的には起こらず、漏えいしたとしても微量であり、また、各事例における年間のCO₂圧入量は最大でも約6,000 t-CO₂程度であることから、年間のCO₂漏えい量が3,000 tを上回ることは考え難い。このため、重要でないという意味での「NE」と報告する（CO₂圧入が実施された年度のみ「NE」と報告し、その他の年度は「NO」と報告）。重要でないという意味での「NE」については、別添5も参照のこと。

3.4.2. 圧入及び貯留 (1.C.2)

3.4.2.1. 圧入 (1.C.2.a)

本カテゴリーでは、CO₂の地中圧入に伴い圧入サイトにおけるコンプレッサーや圧入井等から漏えいするCO₂排出を取り扱う。

表 3-94 の各事例の実施主体に対するヒアリングによれば、CO₂の圧入段階の漏えいは基本的には起こらず、漏えいしたとしても微量であるとのことであつた。また、Koorneef *et al.* (2008) に示された排出係数等を用いて排出量を試算したところ、年間の排出量は平成 24 年度温室効果ガス排出量算定方法検討会で定めた算定対象となる3,000 t-CO₂を上回らなかった。このためCO₂圧入が実施された年度は、重要でないという意味での「NE」と報告し（ただし気密性が確保されている苫小牧のみで圧入が実施された年度は「NA」）、その他の年度は「NO」と報告する。重要でないという意味での「NE」については、別添5も参照のこと。

3.4.2.2. 貯留 (1.C.2.b)

本カテゴリーでは、CO₂の地中圧入に伴い、貯留サイトから漏えいするCO₂排出を取り扱う。表 3-94 の各事例の実施主体に対するヒアリングによれば、CO₂の貯留段階の漏えいは基本的には起こらず、漏えいしたとしても微量であるとのことであつた。また、IPCC (2005) に示された圧入されたCO₂のうち貯留層に貯留される割合等を用いて排出量を試算したところ、年間の排出量は平成 24 年度温室効果ガス排出量算定方法検討会で定めた算定対象となる3000 t-CO₂を上回らなかった。このため、重要でない「NE」として報告する（1990年度以降の全年度について「NE」と報告）。重要でないという意味での「NE」については、別添5も参照のこと。

3.4.3. その他 (1.C.3)

本カテゴリーでは、CCSからの排出であつて「1.C.1 CO₂の輸送」と「1.C.2 圧入及び貯留」に該当しないCO₂排出を取り扱う。我が国には該当する排出源がないため、本カテゴリーを「NO」と報告する。

3.4.4. 情報項目 (Information item)

本項ではCO₂の地中貯留のために回収されたCO₂量を扱う。CRF table 1.C の Information

item の Total amount captured for storage に CO₂回収量の報告欄があるが、CO₂回収量は 1.C ではなく回収の実施された各カテゴリーにおける CO₂排出量から控除することに留意されたい。

我が国における過去の CO₂地中圧入事例では、CO₂回収量は圧入された CO₂の量と概ね等しいと考えられることから、各事例の実施主体から提供を受けた CO₂圧入量と同じ値を、CO₂の圧入が実施された年度の CO₂回収量として報告する。なお、回収量は、各事例で圧入に使用された CO₂の発生源に応じて、「1.A.1.b. 石油精製」もしくは「2.B.1.アンモニア製造」に報告する。

表 3-96 地中貯留のために回収された CO₂量

圧入サイト	単位	1990	1991	1992	1993	1997	1998	1999	2003	2004	2005	2006	2007	2016	2017	2018	計上カテゴリー
頸城	kt	0.23	3.93	4.46	1.17	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	2.B.1 アンモニア製造
申川	kt	NO	NO	NO	NO	2.37	4.87	2.71	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	2.B.1 アンモニア製造
長岡	kt	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	3.98	6.43	NO	NO	NO	NO	NO	NO	2.B.1 アンモニア製造
夕張	kt	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	0.04	0.12	0.36	0.37	NO	NO	NO	1.A.1.b 石油精製
苫小牧	kt	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	29.22	126.80	79.58	1.A.1.b 石油精製

参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための1996年改訂IPCCガイドライン」(1997)
2. IPCC「国家温室効果ガスインベントリにおけるグッドプラクティスガイダンス及び不確実性管理報告書」(2000)
3. IPCC「IPCC Special Report on Carbon Dioxide Capture and Storage」(2005)
4. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」(2006)
5. UNFCCC「UNFCCCインベントリ報告ガイドライン」(決定24/CP.19 附属書I)(2013a)
6. UNFCCC「日本国年次提出の個別審査報告書(2013年7月)」(FCCC/ARR/2012/JPN)(2013b)
7. UNFCCC「日本国年次提出の個別審査報告書(2014年3月)」(FCCC/ARR/2013/JPN)(2014)
8. UNFCCC「日本国年次提出の個別審査報告書(2015年6月)」(FCCC/ARR/2014/JPN)(2015)
9. UNFCCC「日本国年次提出の個別審査報告書(2019年9月)」(FCCC/ARR/2018/JPN)(2019)
10. 欧州環境機関「EMEP/EEA air pollutant emission inventory guidebook 2016」(2016)
11. 環境庁「二酸化炭素排出量調査報告書(1992年5月)」(1992)
12. 環境庁「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第1部(平成12年9月)」(2000a)
13. 環境庁「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第2部(平成12年9月)」(2000b)
14. 環境庁「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第3部(平成12年9月)」(2000c)
15. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第1部(平成14年8月)」(2002a)
16. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第2部(平成14年8月)」(2002b)
17. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第3部(平成14年8月)」(2002c)
18. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第1部(平成18年8月)」(2006a)
19. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第2部(平成18年8月)」(2006b)
20. 環境省「平成26年度産業部門のうち非製造業における温室効果ガス排出実態調査」(2015a)
21. 環境省「平成26年度産業部門のうち製造業における温室効果ガス排出実態調査」(2015b)
22. 環境省「平成27年度産業部門のうち非製造業における温室効果ガス排出実態調査」(2016)
23. 環境省「平成29年度バイオマスボイラーからの温室効果ガス排出量の実態把握に関する調査」(2018)
24. 環境省「大気汚染物質排出量総合調査」
25. 環境省「PRTR届出外排出量算定資料」
26. 経済産業省「エネルギー生産・需給統計年報」
27. 経済産業省「資源・エネルギー統計年報」
28. 経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」
29. 経済産業省「石油等消費動態統計年報」
30. 経済産業省「鋳工業生産指数」
31. 経済産業省「第三次産業活動指数」
32. 資源エネルギー庁「ガス事業生産動態統計」
33. 資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」
34. 資源エネルギー庁「エネルギー消費統計」
35. 資源エネルギー庁「電力調査統計」
36. 資源エネルギー庁「エネルギー白書」(2019)
37. 資源エネルギー庁「エネルギー源別標準発熱量・炭素排出係数(2018年度改訂)の解説」(2020)
38. 国土交通省「航空輸送統計年報」

39. 国土交通省「自動車輸送統計年報」及び「同月報」
40. 国土交通省「道路交通センサス」
41. 国土交通省「自動車燃料消費量統計年報」
42. 国土交通省「空港管理状況調書」
43. 北海道開発庁「北海道鉱工業開発計画調査 ガス化学工業開発調査報告書 昭和 35-39 年度 炭田ガス埋蔵量」(1965)
44. 林野庁「特用林産基礎資料」
45. 林野庁「木炭関係資料」
46. 林野庁「平成 26 年度木材利用推進・省エネ省 CO₂実証事業」(2015)
47. 自動車検査登録情報協会「自検協統計 自動車保有車両数」
48. 日本自動車工業会「二輪車市場動向調査」
49. 日本自動車工業会「自動車統計月報」
50. 大気環境学会「温室効果ガス排出量推計手法調査報告書」(1996)
51. 天然ガス鉱業会「天然ガス資料年報」
52. 潤滑油協会「平成 24 年度潤滑油環境対策補助事業報告書 (平成 25 年 3 月)」(2013)
53. 日本ガス協会ウェブサイト (<http://www.gas.or.jp>)
54. 日本自動車工業会ウェブサイト (<http://www.jama.or.jp/>)
55. 全国軽自動車協会連合会ウェブサイト (<https://www.zenkeijikyo.or.jp/>)
56. 石炭エネルギーセンター「石炭政策史」(2002)
57. 日本地熱調査会「我が国の地熱発電所設備要覧」(2000)
58. 日本地熱調査会「わが国の地熱発電の動向」
59. 火力原子力発電技術協会「地熱発電の現状と動向」
60. Geothermal Energy Association, *Geothermal Energy and Greenhouse Gas Emissions* (2012)
61. 日本自動車研究所「平成 19 年度自工会受託研究報告書 軽二輪車の保有台数調査方法の精査」(2008)
62. 日本自動車研究所「平成 18 年度自工会受託研究報告書 二輪車の排出ガス寄与率調査」(2007)
63. Koornneef, J., van Keulen, T., Faaij, A., Turkenburg, W., *Life cycle assessment of a pulverized coal power plant with post-combustion capture, transport and storage of CO₂*, *International Journal of Greenhouse Gas Control*, Volume 2, Issue 4, 448-467 (2008)
64. 戒能一成「エネルギー源別炭素排出係数の妥当性の評価と分析」(2005)
65. 戒能一成「総合エネルギー統計の解説 2010 年度改訂版」(2012)
66. 戒能一成「エネルギー源別標準発熱量・炭素排出係数の改訂について」RIETI Discussion Paper Series 14-J-047 (2014)
67. 後藤雄一、小池章介、鈴木央一「自動車の N₂O の排出総量推計とその低減手法の中核技術の汎用化と普及に関する研究」平成 14 年度環境研究総合推進費終了研究成果報告書、B-51 (2003)
68. 依田公一、山下哲也、茂木和久「ガソリン車における N₂O 排出挙動解析と計測技術の検討」自動車技術会学術講演会前刷集、No.109-10、3-6 (2010)

第4章 工業プロセス及び製品の使用分野

4.1. 工業プロセス及び製品の使用分野の概要

工業プロセスにおける化学的、物理的変化により温室効果ガスが大気中に排出される。ここでは表 4-1 に示す工業プロセス及び製品の使用からの排出量を算定した。なお、各排出源の算定方法、排出係数、活動量等は、各分野の専門家により構成される温室効果ガス排出量算定方法検討会のエネルギー・工業プロセス分科会、HFC等4ガス分科会において検討され承認されたものである。(1章参照)

いくつかの年や排出源の排出量はゼロであるが、排出量は全ての年について推計されており、紙幅が許す限りかつ秘匿性に配慮した範囲で、関連指標は各サブカテゴリーの表中に示されている。また、各サブカテゴリー、各ガスの排出量は各カテゴリーの冒頭の表に記載している。

表 4-1 工業プロセス及び製品の使用分野におけるカテゴリー

排出区分		CO ₂	CH ₄	N ₂ O	HFCs	PFCs	SF ₆	NF ₃	
2.A 鉱物産業	2.A.1	セメント製造	○						
	2.A.2	石灰製造	○						
	2.A.3	ガラス製造	○						
	2.A.4	セラミックス製品 その他プロセスでの炭酸塩の使用 マグネシア製造 その他	○ ○ IE ○						
2.B 化学産業	2.B.1	アンモニア製造	○	NE	NA				
	2.B.2	硝酸製造			○				
	2.B.3	アジピン酸製造	NA		○				
	2.B.4	カプロラクタム、グリオキサール、グリオキシル酸製造	カプロラクタム			○			
			グリオキサール グリオキシル酸			○ ○			
	2.B.5	カーバイド製造	○	○					
	2.B.6	二酸化チタン製造	シリコンカーバイド	○	○				
			カルシウムカーバイド	○	NA				
	2.B.7	ソーダ灰製造	IE						
	2.B.8	石油化学及びカーボンブラック製造	メタノール	NO	NO				
			エチレン	○	○				
			1,2-ジクロロエタン、クロロエチレン	○	○				
			酸化エチレン	○	○				
アクリロニトリル			○	NA					
カーボンブラック			○	○					
スチレン				○					
無水フタル酸 無水マレイン酸 水素			○ ○ ○						
2.B.9	フッ化物製造				○	○	○		
2.C 金属製造	2.C.1	鉄鋼製造	鋼	IE	NA				
			鉄鋼製造における電気炉の使用	○	○				
			鋳鉄	IE	NA				
			鉄鋼製造における石灰石・ドロマイトの使用	○					
			直接還元鉄	NO	NO				
			焼結鉄 ペレット	IE IE	IE IE				
	2.C.2	フェロアロイ製造	IE	○					
	2.C.3	アルミニウム製造	副次的排出	IE			○		
鋳造時のFガスの使用							NO		
2.C.4	マグネシウム製造				○	○			
2.C.5	鉛製造	IE							
2.C.6	亜鉛製造	IE							
2.D 燃料からの非エネルギー製品及び溶剤の使用	2.D.1	潤滑油の使用	○						
	2.D.2	パラフィンろうの使用	○						
	2.D.3	その他	尿素触媒	○					
			NM VOCの焼却	○					
道路舗装 アスファルト屋根材									
2.E 電子産業	2.E.1	半導体			○	○	○		
	2.E.2	液晶			○	○	○		
	2.E.3	太陽電池				IE			
	2.E.4	熱伝導流体				IE			

表 4-1 工業プロセス及び製品の使用分野におけるカテゴリー (続き)

排出区分				CO ₂	CH ₄	N ₂ O	HFCs	PFCs	SF ₆	NF ₃			
2.F オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用	2.F.1	冷凍冷蔵及び空調	家庭用冷蔵庫		製造			○	NO	NO	NO		
					使用			○	NO	NO	NO	NO	
					廃棄			○	NO	NO	NO	NO	
			業務用冷凍空調機器	業務用冷凍空調機器		製造			○	NO	NO	NO	NO
						使用			○	NO	NO	NO	NO
						廃棄			○	NO	NO	NO	NO
			自動販売機		製造			○	NO	NO	NO	NO	
					使用			IE	NO	NO	NO	NO	
					廃棄			IE	NO	NO	NO	NO	
			輸送機器用冷蔵庫		製造			○	NO	NO	NO	NO	
					使用			○	NO	NO	NO	NO	
					廃棄			○	NO	NO	NO	NO	
			工業用冷蔵庫		製造			IE	NO	NO	NO	NO	
					使用			IE	NO	NO	NO	NO	
					廃棄			IE	NO	NO	NO	NO	
	固定空調機器		製造			○	NO	NO	NO	NO			
			使用			○	NO	NO	NO	NO			
			廃棄			○	NO	NO	NO	NO			
	輸送機器用空調機器		製造			○	NO	NO	NO	NO			
			使用			○	NO	NO	NO	NO			
			廃棄			○	NO	NO	NO	NO			
	2.F.2	発泡剤	閉鎖系気泡フォーム	ウレタンフォーム	製造			○	NO	NO	NO		
					使用			○	NO	NO	NO		
					廃棄			IE	NO	NO	NO		
			押出發泡ポリスチレンフォーム	製造			○	NO	NO	NO			
				使用			○	NO	NO	NO			
				廃棄			IE	NO	NO	NO			
			開放系気泡フォーム	高発泡ポリエチレンフォーム	製造			○	NO	NO	NO		
					使用			NO	NO	NO	NO		
					廃棄			NO	NO	NO	NO		
2.F.3	消火			製造			NO	NO	NO	NO			
				使用			○	NO	NO	NO			
				廃棄			NO	NO	NO	NO			
2.F.4	エアゾール	定量噴霧式吸入器		製造			○	NO	NO	NO			
				使用			○	NO	NO	NO			
				廃棄			IE	NO	NO	NO			
		エアゾール		製造			○	NO	NO	NO			
				使用			○	NO	NO	NO			
				廃棄			IE	NO	NO	NO			
2.F.5	溶剤			製造			NO	NO	NO	NO			
				使用			○	○	NO	NO			
				廃棄			IE	IE	NO	NO			
2.F.6	その他利用												
2.G その他製品の製造及び使用	2.G.1	電気設備		製造					○				
				使用					○				
				廃棄					IE				
	2.G.2	その他製品の使用からのSF ₆ 、PFCs	防衛利用		製造				NE	NE			
					使用				NE	○			
					廃棄				NE	NE			
			加速器		製造				NE	NE			
					使用				NO	○			
					廃棄				NE	NE			
			防音窓		製造				NE	NE			
					使用				NE	NE			
					廃棄				NE	NE			
			断熱特性:靴およびタイヤ		製造				NE	NE			
					使用				NO	NO			
					廃棄				NE	NE			
その他 鉄道用シリコン整流器		製造				NA	NA						
		使用				NA	NA						
		廃棄				○	NA						
2.G.3	製品の使用からのN ₂ O	医療利用				○							
		半導体・液晶製造工程における利用				○							
2.H その他	2.H.2	食品・飲料産業			○								
	2.H.3	輸入炭酸ガスからの排出			○								

なお、2018年度における当該分野からの温室効果ガス排出量は約 100,105 kt-CO₂換算であ

り、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF 分野を除く）の 8.1%を占めている。CO₂、CH₄ 及び N₂O 排出量を 1990 年度と比較すると 37.4%の減少となっている。HFCs、PFCs 及び SF₆ 及び NF₃の排出量を 1990 年と比較すると 49.3%の増加となっている。

1990 年度からの当該分野の排出量の減少は、特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律の下での規制により HCFC-22 の製造時の副生 HFC-23 が減少したこと（化学産業）、クリンカ生産量の減少に伴うセメント製造時の CO₂排出量（鉱物産業）が減少したこと、アジピン酸製造における N₂O 分解設備の稼働によるアジピン酸製造時の N₂O 排出量（化学産業）が減少したこと等によるものである。但し、オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用からの HFC 排出量は大きく増えている。

IPPU 分野で用いている方法論の Tier は、表 4-2 に示すとおりである。

表 4-2 IPPU 分野で用いている方法論の Tier

温室効果ガスの種類 カテゴリー	CO ₂		CH ₄		N ₂ O			
	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数		
2.A. 鉱物産業	CS,T2	CS						
2.B. 化学産業	CS,T1,T2,T3	CS,D	CS,T1	CS	CS,T1,T2,T3	CS,PS		
2.C. 金属産業	NA	NA	CS	CS				
2.D. 燃料からの非エネルギー製品及び溶剤の使用	D,T1,T2	CS,D	NA	NA	NA	NA		
2.E. 電子産業								
2.F. オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用								
2.G. その他製品の製造及び使用					CS	OTH		
2.H. その他	CS		NA	NA	NA	NA		
温室効果ガスの種類 カテゴリー	HFCs		PFCs		SF ₆		NF ₃	
	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数
2.A. 鉱物産業								
2.B. 化学産業	T2,T3	CS,OTH	T3	OTH	T3	OTH	T3	OTH
2.C. 金属産業	CS	CS	T2	D,CS	T2	OTH		
2.D. 燃料からの非エネルギー製品及び溶剤の使用								
2.E. 電子産業	T2	D,CS	T2	D,CS	T2	D,CS	T2	D,CS
2.F. オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用	CS	D,CS	CS	CS				
2.G. その他製品の製造及び使用			CS	CS	CS,T1,T2	CS,D		
2.H. その他								

(注) D: IPCC デフォルト値、T1~T3: IPCC Tier 1~3、CS: 国独自、PS: プラント特有、OTH: その他

4.2. 鉱物産業 (2.A.)

本カテゴリーは、鉱物原料（CaCO₃、MgCO₃、Na₂CO₃）の焼成などにより放出される CO₂ を扱う。当該カテゴリーは「2.A.1.セメント製造」、「2.A.2.石灰製造」、「2.A.3.ガラス製造」、「2.A.4.その他プロセスでの炭酸塩の使用」から構成される。

2018 年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は約 33,707 kt-CO₂であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF 分野を除く）の 2.7%を占めている。1990 年度の排出量と比較すると 31.5%の減少となっている。

表 4-3 2.A. 鉱物産業からの CO₂排出量

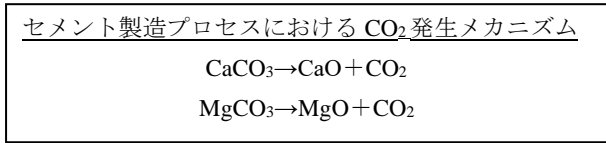
ガス	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
CO ₂	2.A.1 セメント製造	kt-CO ₂	38,701	42,142	35,086	32,280	25,308	24,321	24,983	25,625	26,805	26,557	25,936	25,969	26,429	26,183	
	2.A.2 石灰製造	kt-CO ₂	6,674	5,795	5,900	6,646	5,365	6,285	5,896	5,679	5,767	5,812	5,477	5,504	5,583	5,663	
	2.A.3 ガラス製造	kt-CO ₂	313	283	233	252	140	164	168	179	193	194	193	189	196	202	
	2.A.4 その他プロセスでの炭酸塩の使用	セラミックス製品	kt-CO ₂	930	1,066	981	737	896	891	855	903	930	932	855	766	738	678
		その他用途でのソーダ灰の使用	kt-CO ₂	119	118	102	78	65	63	61	52	48	51	49	47	41	45
		その他	kt-CO ₂	2,493	1,742	1,617	1,238	1,005	1,028	1,126	1,191	1,260	1,184	1,148	1,058	983	937
合計	kt-CO ₂	49,230	51,146	43,919	41,230	32,779	32,752	33,089	33,629	35,004	34,731	33,659	33,533	33,971	33,707		

4.2.1. セメント製造 (2.A.1.)

a) 排出源カテゴリーの説明

セメントの中間製品であり、酸化カルシウム(CaO)を主成分とするクリンカ¹⁾の生産の際、炭酸カルシウム(CaCO₃)を主成分とする石灰石の焼成により CO₂が排出される。また、石

灰石には CaCO_3 のほかに微量ながらも炭酸マグネシウム (MgCO_3) が含まれており、 MgCO_3 の焼成により CO_2 が排出される。



- 1) 主原料である石灰石をはじめ、粘土、けい石、鉄原料などを調合し予熱機から巨大な回転窯に投入し、高温焼成した後、空気で急冷するとセメントクリンカと呼ばれる直径 1cm 程度の火山岩のような黒い塊になる。これを粉砕し、せっこう等を加えることでセメントが完成する。(セメント協会ウェブサイトより、一部改変)

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源については、2006年 IPCC ガイドラインの Tier 2 手法に従い、クリンカ生産量に国独自の排出係数を乗じて CO_2 排出量を算定した。

$$E = EF_{cl} \times M_{cl} \times CF_{ckd}$$

- E : セメント製造に伴う CO_2 排出量 [t- CO_2]
- EF_{cl} : 排出係数 [t- CO_2 /t-clinker]
- M_{cl} : クリンカ生産量 [t]
- CF_{ckd} : セメントキルンダスト補正係数

■ 排出係数

我が国のセメント業界では、他産業から多量の廃棄物・副産物を受け入れ、セメントの原料代替として再資源化しているため、炭酸塩起源以外の CaO 、 MgO がクリンカ中に含まれている。この CaO 、 MgO は石灰石の焼成段階を経ておらず、クリンカ生産の段階で CO_2 を排出していないことから、廃棄物等由来の CaO 、 MgO を控除した炭酸塩起源のクリンカ中 CaO 、 MgO 含有率を求め、排出係数を設定した。なお、わが国ではセメントキルンダスト (CKD) は製造工程において通常ほぼ全量回収・リサイクルされていることが一般社団法人セメント協会 (以下、セメント協会) により確認されており、CKD 補正係数については 1.00 を使用した。

セメント製造に伴う CO_2 の排出係数は、以下のように設定した。

$$EF = EF_{CaO} + EF_{MgO}$$

- EF_{CaO} : CaCO_3 由来 CO_2 排出係数 (下式により設定)
- EF_{MgO} : MgCO_3 由来 CO_2 排出係数 (下式により設定)

$$EF_{CaO} = (CaO_{cl} - CaO_{cl-waste}) \times 0.785$$

$$CaO_{cl-waste} = \frac{W_{dry} \times CaO_{waste}}{M}$$

- CaO_{cl} : クリンカ中 CaO 含有率
- $CaO_{cl-waste}$: クリンカ中 CaO 含有率 (廃棄物等由来)
- 0.785 : CaO と CO_2 の分子量比
- W_{dry} : 廃棄物等投入量 (乾重量)
- CaO_{waste} : 廃棄物等原料中 CaO 含有率
- M : クリンカ生産量

$$EF_{MgO} = (MgO_{Cl} - MgO_{Cl-Waste}) \times 1.092$$

$$MgO_{Cl-Waste} = \frac{W_{dry} \times MgO_{Waste}}{M}$$

- MgO_{Cl} : クリンカ中 MgO 含有率
 $MgO_{Cl-Waste}$: クリンカ中 MgO 含有率 (廃棄物等由来)
 1.092 : MgO と CO₂ の分子量比
 W_{dry} : 廃棄物等投入量 (乾重量)
 MgO_{Waste} : 廃棄物等原料中 MgO 含有率
 M : クリンカ生産量

○ 原料工程で投入された廃棄物等乾重量

算定に使用する廃棄物等の種類として、石炭灰 (焼却残渣)、下水汚泥焼却灰、一般ごみ焼却灰、ガラスくず・陶磁器くず、コンクリートくず、高炉スラグ (水砕)、高炉スラグ (徐冷)、製鋼スラグ、非鉄鉱さい、鋳物砂、ばいじん・ダスト、石炭灰 (流動床灰)、石炭灰 (集塵機捕集ダスト)、の 13 種類を選定した (これらの廃棄物による廃棄物等由来 CaO のカバー率は 90% 以上、MgO のカバー率は 80% 以上)。廃棄物量 (排出ベース) 及び各廃棄物等における含水率はセメント協会調査より把握した (2000 年度以降のみ)。

○ クリンカ中の廃棄物等由来の CaO 含有率、MgO 含有率

上記の種類別廃棄物等乾重量に、セメント協会調査による種類別の CaO 含有率、MgO 含有率をそれぞれ乗じてクリンカ中の廃棄物等由来の CaO、MgO の総量をそれぞれ算出し、クリンカ生産量で除してクリンカ中の廃棄物等由来 CaO 含有率、MgO 含有率を設定した。

○ 廃棄物等由来の CaO、MgO を除いたクリンカ中の CaO 含有率、MgO 含有率

セメント協会調査によるクリンカ中の平均 CaO 含有率、MgO 含有率から廃棄物等由来の CaO 含有率、MgO 含有率をそれぞれ差し引いて、排出係数の設定に使用するクリンカ中の CaO 率、MgO 率をそれぞれ設定した。

表 4-4 廃棄物等由来原料の組成

大分類	種類	含水率	CaO 含有率	MgO 含有率
燃え殻 (焼却残渣)	石炭灰	7.2~15.3%	5.0~5.8%	1.0~1.1%
	下水汚泥焼却灰 ¹⁾	10.9~16.0%	7.4~12.5%	3.5~3.8%
	一般ごみ焼却灰 ¹⁾	19.2~24.6%	10.0~26.5%	2.6~2.8%
ガラスくず、コンクリートくず及び陶磁器くず	ガラスくず・陶磁器くず ¹⁾	12.1~32.7%	17.5~31.1%	1.0~2.5%
	コンクリートくず ¹⁾	0~37.2%	6.4~43.9%	1.0~1.1%
鉱さい	高炉スラグ (水砕)	5.0~16.9%	40.0~42.4%	4.7~5.8%
	高炉スラグ (徐冷)	5.5~11.2%	40.8~41.5%	6.1~6.5%
	製鋼スラグ	7.7~14.1%	34.8~40.5%	2.0~3.0%
	非鉄鉱さい	3.8~8.4%	6.4~10.0%	1.1~1.5%
	鋳物砂 ¹⁾	9.6~14.0%	6.5%	1.3~1.6%
ばいじん類 (集塵機捕集ダスト)	ばいじん、ダスト	8.9~14.3%	9.0~13.4%	1.2~1.5%
	石炭灰 (流動床灰) ¹⁾	0.1~3.2%	14.5~20.7%	0.7~0.9%
	石炭灰	1.0~3.9%	4.1~5.0%	1.0~1.1%

1) 2009 年度よりの新規追加分

表 4-5 セメント製造に伴う CO₂の排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
クリンカ中平均CaO含有率	%	65.9	65.9	66.0	65.9	65.8	65.8	65.8	65.8	65.8	65.8	65.8	65.8	65.8	65.8
クリンカ中廃棄物等由来のCaO含有率	%	2.6	2.6	2.9	2.0	1.7	1.7	2.0	1.8	1.7	1.6	1.6	1.6	1.7	1.8
廃棄物等を除いたクリンカ中のCaO含有率	%	63.3	63.3	63.0	63.9	64.1	64.1	63.7	64.0	64.1	64.1	64.2	64.1	64.1	64.0
CO ₂ /CaO		0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785	0.785
排出係数	t-CO ₂ /t	0.497	0.497	0.495	0.501	0.503	0.503	0.500	0.502	0.503	0.503	0.504	0.503	0.503	0.502
項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
クリンカ中平均MgO含有率	%	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3
クリンカ中廃棄物等由来のMgO含有率	%	0.3	0.3	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3
廃棄物等を除いたクリンカ中のMgO含有率	%	1.0	1.0	0.9	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.0
CO ₂ /MgO		1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092	1.092
排出係数	t-CO ₂ /t	0.010	0.010	0.010	0.011	0.011	0.011	0.011	0.011	0.012	0.012	0.012	0.012	0.012	0.011
項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
合計排出係数	t-CO ₂ /t	0.508	0.508	0.505	0.512	0.514	0.514	0.511	0.514	0.514	0.515	0.516	0.515	0.515	0.514

■ 活動量

クリンカの生産量はセメント協会の提供データにより把握した。1990～1999年度のクリンカ生産量は統計値が把握されていないため、2000～2003年度におけるクリンカ生産量（セメント協会データ）と経済産業省「窯業・建材統計年報」に示された石灰石消費量の比率の平均値を用いて過去（1990～1999年度）のクリンカ生産量を推計した。

表 4-6 クリンカ生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石灰石消費量 実績	kt (dry)	89,366	97,311	81,376	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クリンカ生産量 実績	kt	-	-	69,528	63,003	49,195	47,279	48,884	49,883	52,105	51,573	50,307	50,436	51,351	50,979
クリンカ生産量実績/石灰石消費量実績 ¹⁾		0.853	0.853												
補正後クリンカ生産量 ²⁾	kt	76,253	83,032	69,528	63,003	49,195	47,279	48,884	49,883	52,105	51,573	50,307	50,436	51,351	50,979

1) 1990～1999年度のクリンカ生産量実績/石灰石消費量実績の値は、2000～2003年度における比率の平均値。

2) 1990～1999年度のみ推計にて補正。2000年度以降は実績値。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

セメント製造における CO₂排出の排出係数、活動量の不確実性評価においては、それぞれ 2006 年 IPCC ガイドラインに示された不確実性のデフォルト値を使用した。その結果、排出量の不確実性は 4%と評価された。

■ 時系列の一貫性

1990～1999年度については、セメント協会提供データに基づく活動量・排出係数の推計値を用いて排出量を算定している。2000年度以降は、セメント協会より提供を受けたデータを用いて、上記の算定方法に従って一貫して算定している。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。

QA/QC 活動については、1 章に詳述している。

e) 再計算

特になし。

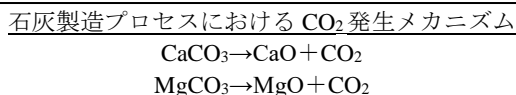
f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.2.2. 石灰製造 (2.A.2.)

a) 排出源カテゴリーの説明

石灰製造時に原料として使用される石灰石に含まれる CaCO_3 、 MgCO_3 を焼成（加熱分解）することにより、 CO_2 が放出される。



b) 方法論

■ 算定方法

石灰石消費量に我が国独自の排出係数を乗じて CO_2 排出量を算定した。

$$E = EF \times M$$

E : 石灰製造の原料の使用に伴う CO_2 排出量 [t- CO_2]
 EF : 排出係数 [t- CO_2 /t-原料]
 M : 石灰石消費量 [t-原料]

■ 排出係数

日本石灰協会から提供された原料（石灰石）当たりの排出係数（0.428 t- CO_2 /t-原料）を用いた。

原料当たりの排出係数は、原料成分や生石灰製品中の炭素量等をもとに推計した原料当たりの CO_2 排出量を、各地方の生産量で加重平均したものである。なお、石灰製造の排出係数は、年変動が少ないと考えられるため全年一定値とした。なお、上述のとおりこの排出係数は国独自のものである。

■ 活動量

「不均一価格物量表」における「窯業土石製品 他窯業土石製品」に計上された消費量のうち、生石灰直接・消石灰用途の石灰石消費量を用いている。なお、セメント用の石灰石の含水率を使用して乾重量ベースに換算している。

※ 不均一価格物量表（経済産業研究所）について

「不均一価格物量表」は、産業連関表の金額投入表と鉱工業統計に示された消費量を使用して作成された物量表であり、総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）における類似の推計手法を応用したものである。

既存の産業連関表附帯の物量表は、国内における製品の需給状況を漏れなく重複なく表現しているものの、各部門の物量は全産業の平均価格により投入額から換算されているため、実際の単価が異なっていれば、部門によっては物量値が過大・過小となっている恐れがあるが、一方、「不均一価格物量表」は、鉱工業統計等における統計値を可能な限り使用することで、各部門における製品の品質や形態の差異に基づく不均一な取引単価を考慮し、部門間の誤差を排除して従来の物量表における欠点を克服しようとするものである。

「不均一価格物量表」における消費量を活動量とすることで、二重計上や計上漏れなくあらゆる産業の活動量を把握することができ、また部門が細分化されているため排出・非排出用途の正確な分類が可能となると考えられる。

インベントリでは、「セメント製造 (2.A.1.)」を除いて、「不均一価格物量表」の部門別石灰石・ドロマイト消費量を各石灰石関連排出源の活動量に使用する。

ただし、軽焼ドロマイト製造で消費されるドロマイトについては、「その他プロセスでの炭酸塩の使用 (2.A.4.)」に含めて計上されるため、「石灰製造 (2.A.2.)」では算定しない。なお、「不均一価格物量表」では、軽質炭カル製造による CO₂再吸収分が控除されている。

さらに、製糖工場内における石灰製造については、国内3社のメーカーへのヒアリング（環境省「平成22年度温室効果ガス排出量算定・報告・公表制度基盤整備事業委託業務報告書」）によると、甘藷糖の場合、国内の製造会社は全て消石灰を外部から取得して使用して石灰乳を生成していることから、CO₂の排出はない。またビート糖の場合、石灰石の焼成により発生した CO₂はライムケーキに再吸収されている。この情報に基づき、製糖からの CO₂排出は算定していない。

また、アルミニウム製造における生石灰の生産実績について日本アルミニウム協会に確認したところ、1990年度以降、生石灰の製造実績はないことの確認が得られた。（なお、アルミニウムの生産は2014年に終了）この情報に基づき、CO₂排出は算定していない。

表 4-7 石灰石消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石灰石消費量 (dry)	kt	15,595	13,540	13,785	15,527	12,534	14,684	13,775	13,269	13,474	13,579	12,797	12,860	13,045	13,232

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の2%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の3%を採用した。その結果、排出量の不確実性は4%と評価された。

■ 時系列の一貫性

石灰製造の活動量は、「不均一価格物量表」の石灰石消費量を1990年度から一貫して使用している。また、排出係数は1990年度から一定値を使用している。従って、石灰製造による CO₂排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

2017年度について、「不均一価格物量表」における石灰石消費量が更新されたため、再計算が生じた。再計算の影響の程度については10章参照。

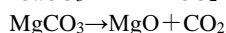
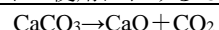
f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.2.3. ガラス製造 (2.A.3.)

a) 排出源カテゴリーの説明

石灰石には CaCO₃及び微量の MgCO₃が、ドロマイトには CaCO₃及び MgCO₃が含まれており、石灰石・ドロマイトを加熱すると、CaCO₃及び MgCO₃由来の CO₂が排出される。ソーダ灰、炭酸バリウム、炭酸カリウム、炭酸ストロンチウムおよび炭酸リチウムからも同様に CO₂が排出される。なお、骨灰については、現時点では国内での使用実績に関する詳細情報は入手できない。

石灰石、ドロマイトの使用における CO₂ 生成メカニズム

b) 方法論

■ 算定方法

ガラス製造において使用された石灰石、ドロマイト、ソーダ灰、炭酸バリウム、炭酸カリウム、炭酸ストロンチウムおよび炭酸リチウムの量に排出係数を乗じて、排出量の算定を行った。

■ 排出係数

○ 石灰石

排出係数は、化学反応式における CO₂ と CaCO₃ の分子量比に石灰石から取り出せる CaO の割合 (55.4% : 石灰石鉱業協会「石灰石の話」に示された割合「54.8~56.0%」の中間値) から求めた CaCO₃ の含有率を乗じた値と、CO₂ と MgCO₃ の分子量比に石灰石から取り出せる MgO の割合 (0.5% : 「石灰石の話」に示された割合「0.0~1.0%」の中間値) から求めた MgCO₃ の含有率を乗じた値を加えて算出した。なお、以下のとおり排出係数は国独自のものである。この排出係数については、適用を継続しても問題ない旨 2009 年に確認している。

・石灰石から取り出せる CaO の割合 (54.8~56.0%の中間値 ^{b)})	: 55.4%
・石灰石から取り出せる MgO の割合 (0.0~1.0%の中間値 ^{b)})	: 0.5% ^{b)}
・CaCO ₃ (石灰石の主成分) の分子量	: 100.0869 ^{a)}
・MgCO ₃ の分子量	: 84.3139 ^{a)}
・CaO の分子量	: 56.0774 ^{a)}
・MgO の分子量	: 40.3044 ^{a)}
・CO ₂ の分子量	: 44.0095 ^{a)}
・CaCO ₃ の含有率 = 石灰石から取り出せる CaO の割合 × CaCO ₃ の分子量 / CaO の分子量	
・MgCO ₃ の含有率 = 石灰石から取り出せる MgO の割合 × MgCO ₃ の分子量 / MgO の分子量	
○ 排出係数 = CO ₂ の分子量 / CaCO ₃ の分子量 × CaCO ₃ の含有率 + CO ₂ の分子量 / MgCO ₃ の分子量 × MgCO ₃ の含有率 = 440 [kg-CO ₂ /t]	

(出典)

a) *Atomic Weights of the Elements 1999* [<http://www.ciaaw.org/pubs/TSAW-1999.pdf>] (IUPAC)

b) 石灰石鉱業協会「石灰石の話」

○ ドロマイト

排出係数は、化学反応式における CO₂ と CaCO₃ の分子量比にドロマイトから取り出せる CaO の割合 (34.5% : 33.1~35.85%の中間値。「石灰石の話」) から求めた CaCO₃ の含有率を乗じた値と、CO₂ と MgCO₃ の分子量比にドロマイトから取り出せる MgO の割合 (18.3% : 17.2~19.5%の中間値。「石灰石の話」) から求めた MgCO₃ の含有率を乗じた値を加え排出係数を算定した。なお、以下のとおり排出係数は国独自のものである。この排出係数については、適用を継続しても問題ない旨 2009 年に確認している。

・ ドロマイトから取り出せる CaO の割合 (33.1~35.85%の中間値 ^{a)})	: 34.5%
・ ドロマイトから取り出せる MgO の割合 (17.2~19.5%の中間値 ^{a)})	: 18.3%
・ CaCO ₃ (ドロマイトの主成分) の分子量	: 100.0869
・ MgCO ₃ (ドロマイトの主成分) の分子量	: 84.3142
・ CaO の分子量	: 56.0774
・ MgO の分子量	: 40.3044
・ CO ₂ の分子量	: 44.0098
$\text{CaCO}_3\text{の含有率} = \text{ドロマイトから取り出せる CaO の割合} \times \frac{\text{CaCO}_3\text{の分子量}}{\text{CaO の分子量}}$	
$\text{MgCO}_3\text{の含有率} = \text{ドロマイトから取り出せる MgO の割合} \times \frac{\text{MgCO}_3\text{の分子量}}{\text{MgO の分子量}}$	
○ 排出係数	$= \frac{\text{CO}_2\text{の分子量}}{\text{CaCO}_3\text{の分子量}} \times \text{CaCO}_3\text{の含有率} + \frac{\text{CO}_2\text{の分子量}}{\text{MgCO}_3\text{の分子量}} \times \text{MgCO}_3\text{の含有率}$ $= 471 \text{ [kg-CO}_2\text{/t]}$
(出典)	
a) 石灰石鉱業協会「石灰石の話」	

○ ソーダ灰

2.A.4.b「その他用途でのソーダ灰の使用」を参照。

○ その他材料

炭酸バリウムについては、CO₂と炭酸バリウムの分子量比より、0.22t-CO₂/tを用いた。炭酸カリウムについては、CO₂と炭酸カリウムの分子量比より、0.32t-CO₂/tを用いた。炭酸ストロンチウムについては、CO₂と炭酸ストロンチウムの分子量比より、0.30t-CO₂/tを用いた。炭酸リチウムについては、CO₂と炭酸リチウムの分子量比より、0.60t-CO₂/tを用いた。

■ 活動量

○ 石灰石、ドロマイト及びソーダ灰

「不均一価格物量表」におけるガラス製品関連部門に計上された石灰石、ドロマイト及びソーダ灰消費量のうち、排出用途に分類される全部門の石灰石、ドロマイト及びソーダ灰消費量を本サブカテゴリー下に計上する。なお、活動量はセメント用の石灰石の含水率を使用して乾重量ベースに換算されたものである。

本用途分類に対応する「不均一価格物量表」の部門については以下の通りである。

表 4-8 「不均一価格物量表」の該当部門

用途	該当部門 (石灰石)	該当部門 (ドロマイト)	該当部門 (ソーダ灰)
ガラス製品	251 窯業土石製品 ガラス・ガラス製品	251 窯業土石製品 ガラス・ガラス製品	251 窯業土石製品 ガラス・ガラス製品

(注) 部門名に付されている番号は、「不均一価格物量表」内の分類番号。

表 4-9 石灰石、ドロマイト及びソーダ灰の消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石灰石消費量 (dry)	kt	66	42	26	31	12	17	16	20	23	23	23	22	24	26
ドロマイト消費量 (dry)	kt	264	250	203	230	126	151	154	164	176	176	174	169	176	180
ソーダ灰消費量 (dry)	kt	358	320	257	288	173	197	201	217	235	236	237	232	240	247

○ その他原料

炭酸バリウムについては、2000~2010 年度については石油天然ガス・金属鉱物資源機構「鉱物資源マテリアルフロー」に示された管球光学ガラス用炭酸バリウムの出荷量を純物質換算

(69%)として用いた。その他の期間は、経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示される電球類用・電子管用ガラスバルブ（管・棒を含む）の生産量を用いた外挿により推計した。

炭酸カリウムについては、1991年度以降は、財務省「貿易統計」の「カリウムの炭酸塩」の輸入量から輸出量を差し引いた値を国内需要とみなし、純物質換算（57%）して使用した。

炭酸ストロンチウムについては、2000～2006、2008、2010年度は「鉱物資源マテリアルフロー」に示される管球ガラス用（フラットパネルガラスおよびその他ガラスを含む）の純物質換算（59%）の需要量を用いた。2007および2009年度は内挿にて推計した。1990～1999年度については経済産業省「窯業・建材統計年報」に示される電球類用・電子管用ガラスバルブ（管・棒を含む）生産量を用いた外挿による推計、2011年度以降は「鉱物資源マテリアルフロー」に示される内需合計量を用いた外挿により推計した。

炭酸リチウムについては、2002年度以降については「鉱物資源マテリアルフロー」に記載の窯業添加用の純物質換算（19%）の炭酸リチウム需要量を使用した。1998～2001年度は、「鉱物資源マテリアルフロー」に記載のガラス添加量（需要量）を用いた外挿による推計を行った。1990～1997年度は、「窯業・建材統計年報」における板ガラス生産量による外挿により推計した。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の5%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の3%を採用した。その結果、排出量の不確実性は6%と評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は、1990年度から可能な限り一貫して使用している。また、排出係数は1990年度から一定値を使用している。従って、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

「不均一価格物量表」における石灰石（2017年度）、ドロマイト（2017年度）およびソーダ灰の消費量（2016～2017年度）が更新されたため再計算が生じた。「鉱物資源マテリアルフロー」における炭酸ストロンチウム（2017年度）および炭酸リチウム（2015～2017年度）の需要量の更新も再計算に寄与した。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.2.4. その他プロセスでの炭酸塩の使用（2.A.4.）

4.2.4.1. セラミックス製品（2.A.4.a）

a) 排出源カテゴリーの説明

石灰石には CaCO_3 及び微量の MgCO_3 が、ドロマイトには CaCO_3 及び MgCO_3 が含まれており、石灰石・ドロマイトを加熱すると、 CaCO_3 及び MgCO_3 由来の CO_2 が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

陶磁器等のセラミックス製品製造において使用された石灰石及びドロマイトの量に排出係数を乗じて、排出量の算定を行った。

■ 排出係数

○ 石灰石

4.2.3.b)を参照のこと。

○ ドロマイト

4.2.3.b)を参照のこと。

■ 活動量

「不均一価格物量表」におけるセラミックス製品関連部門に計上された石灰石及びドロマイト消費量のうち、排出用途に分類される全部門の石灰石及びドロマイト消費量を本サブカテゴリー下に計上する。なお、活動量はセメント用の石灰石の含水率を使用して乾重量ベースに換算されたものである。

本用途分類に対応する「不均一価格物量表」の部門については以下の通りである。

表 4-10 「不均一価格物量表」の該当部門

用途	「不均一価格物量表」の該当部門 (石灰石)	「不均一価格物量表」の該当部門 (ドロマイト)
セラミックス製品		063 鋳業 非金属鋳物
	2531-01 窯業土石製品 陶磁器	2531-01 窯業土石製品 陶磁器
	2591-01 窯業土石製品 耐火物	2591-01 窯業土石製品 耐火物
		2599-01 窯業土石製品 炭素黒鉛製品
		2599-09 窯業土石製品 他窯業土石製品
		2811-01 金属製品 建設用金属製品 ～2899-09 金属 他金属製品
	6741-09 対個人サービス 他娯楽	

(注) 部門名に付されている番号は、「不均一価格物量表」内の分類番号。

表 4-11 石灰石及びドロマイトの消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石灰石消費量															
セラミック製品用 (dry)	kt	442	1,110	1,138	467	417	400	423	426	629	761	799	670	617	632
ドロマイト消費量															
セラミック製品用 (dry)	kt	1,561	1,227	1,020	1,128	1,514	1,519	1,421	1,519	1,387	1,269	1,069	1,000	991	848

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

ガラス製造 (2.A.3) に記載した内容と同一である。4.2.3.c) 節を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

石灰石及びドロマイトの使用の活動量は、「不均一価格物量表」の石灰石及びドロマイト消費量を 1990 年度から一貫して使用している。また、排出係数は 1990 年度から一定値を使用している。従って、石灰石及びドロマイトの使用による CO₂排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

2011～2017年度について、「不均一価格物量表」における石灰石、ドロマイトの消費量が更新されたため再計算が生じた。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.2.4.2. その他用途でのソーダ灰の使用 (2.A.4.b)

a) 排出源カテゴリーの説明

ソーダ灰 (Na_2CO_3) の使用時に CO_2 が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

ソーダ灰消費量に我が国独自の排出係数を乗じて CO_2 排出量を算定した。

■ 排出係数

「不均一価格物量表」において排出用途に分類されているソーダ灰消費量については、国産品・輸入品の別が特定できないため、国内総出荷量と海外総輸入量により以下の国内産ソーダ灰排出係数と輸入分の排出係数の加重平均をとって排出係数を設定する。

なお、国内産ソーダ灰については純度を用いて以下のように排出係数が設定されている。(ソーダ灰の純度は経年変動が少ないため、排出係数は経年固定)

$$\begin{aligned} EF &= P \times MW_{\text{CO}_2} / MW_{\text{Na}_2\text{CO}_3} \\ &= 0.995 \times 44.01 / 105.99 \\ &= 0.413 \text{ [t-CO}_2\text{/t]} \end{aligned}$$

EF	: 国内産ソーダ灰排出係数
P	: ソーダ灰純度 (国内全2社算術平均)
MW_{CO_2}	: CO_2 分子量
$MW_{\text{Na}_2\text{CO}_3}$: Na_2CO_3 分子量

輸入ソーダ灰及び輸入されたその他炭酸二ナトリウムについては代表値を求めるための十分な情報が得られていないため、2006年 IPCC ガイドライン (vol.3 p.2.7) に示されるデフォルト値 (0.415 [t- CO_2 /t- Na_2CO_3]) を用いる。

■ 活動量

「不均一価格物量表」において排出用途に分類されているソーダ灰消費量を用いた。(ガラス製造用を除く)

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、石灰石・ドロマイトともに2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の5%を採用した。活動量の不確実性については、石灰石・ドロマイトともに2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の3%を採用した。その結果、石灰石・ドロマイトともに排出量の不確実性は6%と評価された。

■ 時系列の一貫性

ソーダ灰の使用に関する活動量は、「不均一価格物量表」のソーダ灰消費量を 1990 年度から一貫して使用している。また、排出係数は 1990 年度から一定値を使用している。従って、ソーダ灰の使用による CO₂排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

2011～2017 年度について、「不均一価格物量表」におけるソーダ灰消費量が更新されたため再計算が生じた。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.2.4.3. マグネシア製造 (2.A.4.c)

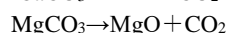
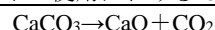
排出量は「2.A.4.d.その他」に含まれることから、「IE」と報告する。

4.2.4.4. その他 (2.A.4.d)

a) 排出源カテゴリーの説明

石灰石には CaCO₃及び微量の MgCO₃が、ドロマイトには CaCO₃及び MgCO₃が含まれており、石灰石・ドロマイトを加熱すると、CaCO₃及び MgCO₃由来の CO₂が排出される。

石灰石、ドロマイトの使用における CO₂生成メカニズム



b) 方法論

■ 算定方法

排煙脱硫・化学製品製造において使用された石灰石及びドロマイトの量に排出係数を乗じて、排出量の算定を行った。

■ 排出係数

○ 石灰石

4.2.3.b)を参照のこと。

○ ドロマイト

4.2.3.b)を参照のこと。

■ 活動量

「不均一価格物量表」における排煙脱硫・化学製品関連部門に計上された石灰石及びドロマイト消費量のうち、排出用途に分類される全部門の石灰石及びドロマイト消費量を本サブカテゴリー下に計上する。なお、活動量はセメント用の石灰石の含水率を使用して乾重量ベースに換算されたものである。

本用途分類に対応する「不均一価格物量表」の部門については以下の通りである。

表 4-12 主な用途と「不均一価格物量表」の該当部門

用途	「不均一価格物量表」の該当部門 (石灰石)	「不均一価格物量表」の該当部門 (ドロマイト)
排煙脱硫	063 鉱業 非金属鉱物	
化学製品	2011-01 化学製品 化学肥料	2011-01 化学製品 化学肥料
	2029-09 化学製品 他無機化学工業製品	2029-09 化学製品 他無機化学製品
		2081-011 化学製品 油脂加工製品
	2049-09 化学製品 他有機化学工業製品	2049-09 化学製品 他有機化学工業製品
		2071-01 化学製品 医薬品
		2089-09 化学製品 触媒他化学最終製品

(注) 部門名に付されている番号は、「不均一価格物量表」内の分類番号。

表 4-13 石灰石及びドロマイトの消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石灰石消費量															
排煙脱硫用 (dry)	kt	1,841	2,139	1,813	2,075	1,699	1,795	2,008	2,149	2,067	1,741	1,627	1,605	1,501	1,388
化学製品用 (dry)	kt	3,668	1,717	1,772	683	531	491	507	510	753	910	949	771	705	717
ドロマイト消費量															
化学製品用 (dry)	kt	147	96	84	54	52	47	41	44	41	38	32	27	27	22

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

ガラス製造 (2.A.3) に記載した内容と同一である。4.2.3. c)節を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

石灰石及びドロマイトの使用の活動量は、「不均一価格物量表」の石灰石及びドロマイト消費量を 1990 年度から一貫して使用している。また、排出係数は 1990 年度から一定値を使用している。従って、石灰石及びドロマイトの使用による CO₂排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

2011～2017 年度について、「不均一価格物量表」における石灰石およびドロマイトの消費量が更新されたため、再計算が生じた。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3. 化学産業 (2.B.)

化学産業カテゴリーでは、化学製品の製造過程から大気中に排出される CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃を扱う。当該カテゴリーは、「2.B.1.アンモニア製造」、「2.B.2.硝酸製造」、「2.B.3.アジピン酸製造」、「2.B.4.カプロラクタム、グリオキサール、グリオキシル酸製造」、「2.B.5.カーバイド製造」、「2.B.6.二酸化チタン製造」、「2.B.8.石油化学製品及びカーボンブラック製造」、「2.B.9.フッ化物製造」から構成される。

2018 年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は約 5,040kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF 除く) の 0.4%を占めている。このカテゴリーの CO₂、CH₄及び N₂O について 1990 年度の排出量と比較すると 71.6%の減少となっている。HFCs、PFCs、SF₆及び NF₃では 1990 年の排出量と比較すると 98.5%の減少となっている。

表 4-14 2.B. 化学産業からの排出量

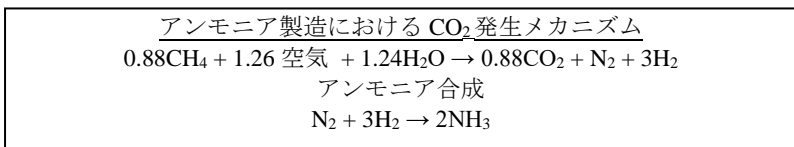
ガス	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
2.B.1 アンモニア製造	kt-CO ₂	3,418	3,457	3,184	2,167	1,923	2,123	2,008	1,855	1,932	1,890	1,947	1,658	1,726	1,458		
2.B.5 カーバイド製造	シリコンカーバイド	kt-CO ₂	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C		
	カルシウムカーバイド	kt-CO ₂	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C		
2.B.6 二酸化チタン製造	kt-CO ₂	102	39	53	59	43	62	65	51	60	62	53	58	58	59		
CO ₂	2.B.8 石油化学及びカーボンブラック製造	メタノール	kt-CO ₂	56	51	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
		エチレン	kt-CO ₂	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	
		1,2-ジクロロエタン、クロロエチレン	kt-CO ₂	150	171	193	200	191	184	146	130	148	150	169	170	175	172
		酸化エチレン	kt-CO ₂	171	191	231	240	190	202	202	204	220	214	221	212	227	214
		アクリロニトリル	kt-CO ₂	440	476	536	509	461	524	486	404	364	342	315	319	323	341
		カーボンブラック	kt-CO ₂	1,633	1,563	1,590	1,659	1,308	1,505	1,380	1,261	1,294	1,253	1,161	1,168	1,230	1,259
		無水フタル酸	kt-CO ₂	117	124	118	81	51	60	55	60	59	58	60	58	61	58
		無水マレイン酸	kt-CO ₂	123	138	163	114	94	102	91	78	89	88	90	91	94	92
		水素	kt-CO ₂	6	21	39	34	31	34	32	31	28	24	27	29	29	29
		合計	kt-CO ₂	7,041	7,014	6,810	5,795	4,872	5,427	5,103	4,652	4,787	4,683	4,591	4,300	4,485	4,220
CH ₄	2.B.5 カーバイド製造	シリコンカーバイド	kt-CH ₄	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	
		カルシウムカーバイド	kt-CH ₄	0.19	0.17	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	2.B.8 石油化学及びカーボンブラック製造	エチレン	kt-CH ₄	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	
		1,2-ジクロロエタン、クロロエチレン	kt-CH ₄	0.01	0.02	0.02	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
		酸化エチレン	kt-CH ₄	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	
		カーボンブラック	kt-CH ₄	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	
		スチレン	kt-CH ₄	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	
合計	kt-CH ₄	1.50	1.48	1.37	1.35	1.43	1.45	1.43	1.13	1.13	1.01	1.27	1.07	1.01	0.91		
合計	kt-CO ₂ 換算	37.49	37.09	34.15	33.69	35.83	36.23	35.71	28.14	28.20	25.22	31.79	26.76	25.26	22.71		
N ₂ O	2.B.2 硝酸製造	kt-N ₂ O	2.47	2.46	2.57	2.52	1.54	1.81	1.49	1.53	1.54	1.55	1.40	1.28	1.16	1.07	
	2.B.3 アジピン酸製造	kt-N ₂ O	24.20	24.03	12.56	1.68	3.49	1.66	1.05	0.51	0.77	0.48	0.38	0.49	0.30	0.20	
	2.B.4 カプロラクタム、グリオキサール、グリオキシル酸製造	カプロラクタム	kt-N ₂ O	4.66	4.93	5.20	3.36	2.52	2.56	2.48	2.30	1.92	1.26	0.90	0.50	0.55	0.43
		グリオキサール、グリオキシル酸	kt-N ₂ O	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	
	合計	kt-N ₂ O	32.28	32.43	21.30	8.58	7.92	6.08	5.06	4.34	4.22	3.28	2.68	2.27	2.01	1.70	
合計	kt-CO ₂ 換算	9,620	9,665	6,348	2,558	2,360	1,813	1,507	1,293	1,259	979	798	676	599	506		
CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O合計	kt-CO ₂ 換算	16,698	16,716	13,193	8,387	7,267	7,276	6,646	5,973	6,074	5,687	5,420	5,003	5,109	4,749		
ガス	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
HFCs	2.B.9 フッ化物製造	HCFC-22の製造に伴う副生HFC-23の排出	kt-CO ₂ 換算	15,929	21,460	15,688	586	50	53	16	18	16	24	30	24	38	12
		製造時の漏出	kt-CO ₂ 換算	2	559	296	449	234	128	151	120	131	101	83	149	95	88
合計	kt-CO ₂ 換算	15,930	22,019	15,984	1,035	284	181	168	138	147	124	113	172	133	100		
PFCs	製造時の漏出	kt-CO ₂ 換算	331	914	1,661	1,041	459	248	206	148	111	107	115	97	78	87	
SF ₆	2.B.9 フッ化物製造	t	152	197	36	41	10	8	6	5	4	3	2	2	2		
		kt-CO ₂ 換算	3,471	4,492	821	930	233	189	132	123	93	62	52	50	41	46	
NF ₃	製造時の漏出	t	0.2	1.0	7.0	72.1	66.8	76.9	93.1	76.4	86.4	56.1	23.5	25.1	13.6	3.4	
		kt-CO ₂ 換算	3	17	120	1,240	1,149	1,323	1,601	1,314	1,486	965	404	432	234	58	
Fガス合計	kt-CO ₂ 換算	19,735	27,442	18,587	4,246	2,124	1,942	2,108	1,723	1,837	1,258	684	752	486	291		

4.3.1. アンモニア製造 (2.B.1.)

a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂

アンモニア製造においては、原料の炭化水素を分解して H₂ を生成する過程で CO₂ が排出される。



2) CH₄

実測例よりアンモニア製造に伴う CH₄ の排出は確認されているが、排出係数を設定するだけの十分な実測例が存在しないため、現状では排出量の算定はできない。また、排出係数のデフォルト値が 2006 年 IPCC ガイドラインに示されていないことから、「NE」と報告している。

3) N₂O

我が国ではアンモニアの製造は行われているが、アンモニア製造に伴う N₂O の排出は原理的に考えられず、また実測例でも N₂O の排出係数は測定限界以下であったことから「NA」と報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

アンモニアの原料として使用された各燃料種の消費量に国独自の排出係数を乗じて、CO₂ 排出量の算定を行った。なお、1990～1993年、1997～1999年、2003年、2004年については、主にアンモニア製造プラントから供給された炭酸ガスが地中圧入されたため、その分を排出量から控除している。（詳細は3.4.4節（1.C.）参照）

■ 排出係数

表 4-15 に示す原料毎に、燃料の燃焼分野からの CO₂ 排出量の算定に用いている排出係数と同じ値を用いた（第3章参照のこと）。なお、使用原料の割合は年ごとに変動するため、見かけの排出係数もまた年次可変となる。2004/2005（-9%）、2011/2012（+8%）、2015/2016（-11%）の年において生じているアンモニアの CO₂ の見かけの排出係数の年次変化は、主にオイルコークスの消費からの排出量のそれぞれ減少、増加、減少によるものである。

表 4-15 アンモニア製造時に使用する原料、排出係数及び発熱量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
ナフサ	総発熱量	MJ/l	33.63	33.63	33.57	33.55	33.53	33.53	33.53	33.31	33.31	33.31	33.31	33.31	33.31
	炭素排出係数	tC/TJ	18.17	18.17	18.17	18.17	18.17	18.17	18.17	18.17	18.63	18.63	18.63	18.63	18.63
液化石油ガス	総発熱量	MJ/kg	50.53	50.63	50.70	50.75	50.72	50.77	50.76	50.78	50.07	50.09	50.10	50.11	50.10
	炭素排出係数	tC/TJ	16.54	16.51	16.49	16.48	16.48	16.47	16.47	16.47	16.38	16.37	16.36	16.36	16.35
石油系炭化水素ガス	総発熱量	MJ/m ³	39.35	39.35	44.90	44.90	44.90	44.90	44.90	46.12	46.12	46.12	46.12	46.12	46.12
	炭素排出係数	tC/TJ	14.15	14.15	14.15	14.15	14.15	14.15	14.15	14.44	14.44	14.44	14.44	14.44	14.44
天然ガス	総発熱量	MJ/m ³	42.09	42.39	42.55	42.87	44.84	44.67	44.74	44.75	39.62	39.62	39.62	39.62	39.62
	炭素排出係数	tC/TJ	13.90	13.90	13.90	13.90	13.90	13.90	13.90	13.90	13.97	13.97	13.97	13.97	13.97
石炭（一般炭、輸入炭）	総発熱量	MJ/kg	25.95	25.95	26.60	25.70	25.70	25.70	25.70	25.97	25.97	25.97	25.97	25.97	26.08
	炭素排出係数	tC/TJ	24.71	24.71	24.71	24.71	24.71	24.71	24.71	24.71	24.42	24.42	24.42	24.42	24.42
オイルコークス	総発熱量	MJ/kg	35.58	35.58	35.60	29.90	29.90	29.90	29.90	33.29	33.29	33.29	33.29	33.29	33.29
	炭素排出係数	tC/TJ	25.35	25.35	25.35	25.35	25.35	25.35	25.35	25.35	24.50	24.50	24.50	24.50	24.50
液化天然ガス	総発熱量	MJ/kg	54.54	54.53	54.52	54.51	54.49	54.49	54.48	54.47	54.46	54.46	54.46	54.46	54.70
	炭素排出係数	tC/TJ	13.94	13.95	13.94	13.94	13.95	13.95	13.95	13.96	13.96	13.95	13.96	13.96	13.87
コークス炉ガス	総発熱量	MJ/m ³	21.51	21.57	21.27	21.42	21.15	21.32	21.12	20.75	18.87	18.87	18.87	18.87	18.87
	炭素排出係数	tC/TJ	10.99	10.99	10.99	10.99	10.99	10.99	10.99	10.99	10.93	10.93	10.93	10.93	10.88

（出典）資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」

■ 活動量

経済産業省「石油等消費動態統計年報」に示された表 4-16 の燃料種の固有単位（重量、容積等）を、資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」に示された発熱量を用いて換算した値を用いた。なお、一部の燃料種の消費量については秘匿データである。

表 4-16 アンモニア製造に係る原料用消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
ナフサ	kl	189,714	477,539	406,958	92,453	72,045	70,067	67,646	67,869	71,494	66,079	73,612	18,421	NO	NO
液化石油ガス	t	226,593	45,932	5,991	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
石油系炭化水素ガス	10 ³ m ³	C	230,972	240,200	147,502	140,783	143,634	126,809	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
天然ガス	10 ³ m ³	C	100,468	86,873	77,299	21,773	41,640	41,169	45,808	47,956	51,858	17,498	637	979	1,011
石炭（一般炭、輸入炭）	t	C	209,839	726	1,239	522	629	879	390	919	787	362	891	483	928
オイルコークス	t	C	273,125	420,862	353,983	351,594	394,116	365,340	405,557	401,721	426,743	468,684	416,722	462,107	371,819
液化天然ガス	t	C	46,501	23,395	165,606	145,699	157,918	161,588	169,109	168,155	127,824	122,453	131,446	122,081	122,818
コークス炉ガス	10 ³ m ³	C	35,860	55,333	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO

（注）C：秘匿情報

■ 留意事項

当該区分における燃料消費量は、エネルギー分野の活動量から控除されている（第3章参照のこと）。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

アンモニアの原料種別に不確実性を評価した。排出係数の不確実性については、炭素排出係数の95%信頼区間の上限値・下限値より設定した。活動量の不確実性については、燃料の燃焼と同様の値を使用した。その結果、ナフサの不確実性は-3~+1%、LPGは-3~+1%、石油系炭化水素ガスは-4~+3%、天然ガスは-1~+1%、石炭（一般炭、輸入炭）は-4~+3%、オイルコークスは-3~+1%、液化天然ガスは-1~+1%、コークス炉ガスは-4~+3%と評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は経済産業省「石油等消費動態統計年報」をもとに、1990年度値から一貫して使用している。また、排出係数は1990年度から「総合エネルギー統計」に基づいて設定している。従って、アンモニア製造によるCO₂排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

2017年度について、ナフサの活動量を訂正したため、CO₂排出量の再計算が生じた。液化天然ガスの総発熱量（2013-2017年度）の改定も再計算に寄与した。再計算の影響の程度については10章参照。

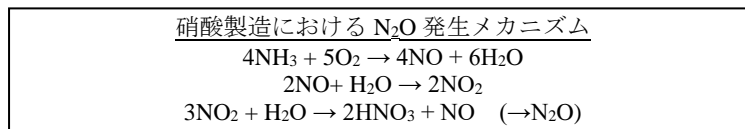
f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.2. 硝酸製造（2.B.2.）

a) 排出源カテゴリーの説明

アンモニアを原料とする硝酸（HNO₃）の製造に伴いN₂Oが排出される。



日本国内の硝酸製造においては、オストワルド法の化学反応をベースとした新ファウザー法（中圧）、ケミコ式（高圧）などが主流となっている。なお、N₂O分解については一部触媒を用いた装置を稼働させている。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年IPCCガイドラインに示されたTier 2手法に基づき、硝酸の生産量に排出係数を乗じてN₂O排出量を算定した。なお、各工場における排出量のデータは秘匿情報であるため、硝酸生産量及び排出係数は我が国全体の総量に対して設定した。N₂O破壊量は現時点では把

握されていないが、排出係数で考慮されている。

$$E = EF \times NAP$$

E : 硝酸製造に伴う N_2O 排出量 [kg- N_2O]

EF : 排出係数 [kg N_2O /t]

NAP : 硝酸生産量 [t]

■ 排出係数

工場別のデータは秘匿情報であるため、我が国で硝酸の製造を行なっている国内全 10 工場の排出係数（実測値）を各工場の硝酸製造量で加重平均して排出係数を設定した。なお、この排出係数は N_2O の回収・破壊を考慮した値である。

表 4-17 硝酸製造に伴う N_2O 排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
硝酸製造に伴う排出係数	kg- N_2O /t	3.50	3.51	3.92	4.18	3.34	3.58	3.49	3.38	3.55	3.54	3.60	3.59	3.27	3.26

■ 活動量

硝酸製造時の N_2O 排出の活動量には、経済産業省より提供のデータを用いている。

表 4-18 硝酸生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
硝酸生産量	kt	706	701	656	602	461	506	426	453	434	437	388	356	355	328

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

硝酸製造に伴う N_2O の排出係数の不確実性については、工場別の排出係数及び生産量から排出係数の標準偏差を算出し、73%と評価した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の2%を採用した。その結果、排出量の不確実性は73%と評価された。

■ 時系列の一貫性

経済産業省より提供を受けた活動量・排出係数データをもとに、1990年度値から一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.3. アジピン酸製造（2.B.3.）

a) 排出源カテゴリーの説明

アジピン酸 ($C_6H_{10}O_4$) の製造過程で、シクロヘキサノンとシクロヘキサノールと硝酸の化学反応で N_2O が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

当該事業所における N_2O 発生率、 N_2O 分解量、アジピン酸生産量を用いて排出量を算定した。

■ 排出係数

国独自の排出係数は以下のパラメータを用いて設定した。なお、排出係数及びパラメータの各データは秘匿扱いである。

○ N_2O 発生率

我が国でアジピン酸を目的生産物として生産を行っている唯一の事業所における実測データを用いた。

○ N_2O 分解率

当該事業所における N_2O 分解率の実測結果を用いた。

○ N_2O 分解装置稼働率

当該事業所において全ての N_2O 分解装置を対象に毎年調査される N_2O 分解装置運転時間及びアジピン酸製造プラント運転時間に基づいて算定された値を用いた。

■ 活動量

アジピン酸製造に伴う N_2O 排出の活動量は、当該メーカーから経済産業省に提供されたアジピン酸の生産量を用いた。なお、データは秘匿扱いである。

■ 留意事項

アジピン酸製造過程における N_2O 排出量は、1990年から1997年にかけて、概ね増加傾向にあった。しかし、1999年3月より、アジピン酸製造プラントにおいて N_2O 分解装置の稼働を開始したため、1999年以降は N_2O 排出量が大幅に減少することとなった。なお、2000年は N_2O 分解装置の故障により稼働率が低下したために N_2O 排出量が一時的に増加している。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

アジピン酸の排出係数は複数のパラメータにより算定しているため、各パラメータの不確実性を合成して排出係数の不確実性を算定した。 N_2O 発生率、 N_2O 分解率、分解装置の稼働率の不確実性を合成した結果、排出係数の不確実性は9%と評価された。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示された値を採用した(2%)。その結果、排出量の不確実性は9%と評価された。

■ 時系列の一貫性

当該メーカーから経済産業省に提供された活動量・排出係数データを用い、1990年度値から一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造(2.A.1.)に記載した内容と同一である。4.2.1.d)節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.4. カプロラクタム、グリオキサール、グリオキシル酸製造 (2.B.4.)

4.3.4.1. カプロラクタム (2.B.4.a)

a) 排出源カテゴリーの説明

カプロラクタムは、カーペット等の繊維素材や樹脂素材として利用されるナイロン6のモノマーであり、開環重合によりナイロン6となる。製造プロセスにおけるアンモニアの酸化工程においてN₂Oが排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

国内総生産量に、2006年IPCCガイドラインのTier1~3手法に基づき事業者別に設定された排出係数の加重平均値を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

日本化学工業協会より、現在国内でカプロラクタムを生産している5事業所における生産量・排出係数・排出量算定結果のデータ提供を受けたため、各事業所の合計排出量を生産量の合計で割った、生産量当たり排出量を我が国の独自の排出係数として設定する。各事業所における排出係数については、年次可変となっている。

■ 活動量

経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」に示されたカプロラクタム生産量を用いた。

表 4-19 カプロラクタム生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
カプロラクタム生産量	kt	516	546	575	455	401	411	392	366	342	266	241	220	223	210

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、事業所別の排出係数及び生産量から排出係数の標準偏差を算出し、99%と評価した。活動量の不確実性については、2006年IPCCガイドラインに示されたデフォルト値の2%を採用した。その結果、排出量の不確実性は99%と評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は「生産動態統計年報 化学工業統計編」のデータをもとに、1990年度から一貫した方法を使用して算定している。排出係数については1990年度から同一の設定方法による値を使用している。従って、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造(2.A.1.)に記載した内容と同一である。4.2.1.d)節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

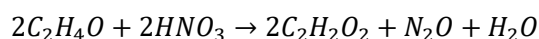
f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.4.2. グリオキサール (2.B.4.b)

a) 排出源カテゴリーの説明

グリオキサールは、主にアクリル樹脂、消毒剤、ゼラチン硬化剤、繊維仕上げ剤等において架橋剤として使用される。濃硝酸とアセトアルデヒドの酸化、あるいはエチレングリコールの接触酸化により製造され、アセトアルデヒドの酸化工程において N_2O が排出される（下式参照）。



b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 3 手法に基づき、国内総生産量に、実測結果から得られた我が国独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。なお、2010年度以降、国内に生産活動はない。ただし2010～2011年度のグリオキシル酸の秘匿性を考慮し1990～2011年度を“C”として報告する。

■ 排出係数

生産活動を行っていた事業者より提供を受けた、生産量ベースの国独自の排出係数を使用する。事業者における、各々の製品の製造工程からの排ガス流量、 N_2O 濃度の実測値を基に設定されたものであり、この排出係数を全年度に適用することとする。

■ 活動量

グリオキサールの生産量については、統計値等は公表されていないため、直近まで生産実績のあった事業者の生産量合計を活動量とする。なお、2010年度以降、国内に生産活動はない。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の10%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の2%を採用した。その結果、排出量の不確実性は10%と評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は直近まで生産実績のあった事業者のデータをもとに、1990年度から一貫した方法を使用して算定している。排出係数については1990年度から一定値を使用している。従って、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.4.3. グリオキシル酸 (2.B.4.c)

a) 排出源カテゴリーの説明

グリオキシル酸は、合成香料、農薬、医薬中間体の原料として使用される。グリオキサールの硝酸酸化によって製造され、硝酸が還元される過程において N_2O が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 3 手法に基づき、国内総生産量に、実測結果から得られた我が国独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。なお、2012年度以降、国内に生産活動はない。

■ 排出係数

生産活動を行っていた事業者より上記の活動量データと併せて提供を受けた、生産量ベースの N_2O 排出係数を使用する。事業者における、各々の製品の製造工程からの排ガス流量、 N_2O 濃度の実測値を基に設定されたものであり、この排出係数を全年度に適用することとする。

■ 活動量

グリオキシル酸の生産量については、統計値等は公表されていないため、直近まで生産実績のあった事業者の生産量合計を活動量とする。なお、2012年度以降、国内に生産活動はない。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の10%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の2%を採用した。その結果、排出量の不確実性は10%と評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は直近まで生産実績のあった事業者のデータをもとに、1990年度から一貫した方法を使用して算定している。排出係数については1990年度から一定値を使用している。従って、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

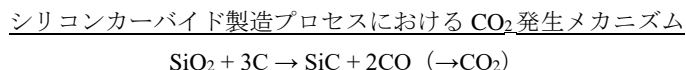
4.3.5. カーバイド製造 (2.B.5.)

4.3.5.1. シリコンカーバイド製造 (2.B.5.a)

a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂

シリコンカーバイド製造時に原料のシリカと石油コークスの反応に伴い CO₂が排出される。

2) CH₄

我が国においてシリコンカーバイドは電気炉で製造されており、シリコンカーバイド製造時には、還元剤として使用されるコークスが酸化する際に CH₄が発生すると考えられる。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

シリコンカーバイドの原料として使用された石油コークスの消費量に排出係数を乗じて排出量を算定した。

■ 排出係数

我が国における実測データ及び独自の排出係数が存在しないため、2006年 IPCC ガイドラインに示されたシリコンカーバイドの製造に伴う排出係数のデフォルト値 2.3 [t-CO₂/t] を用いた。

■ 活動量

シリコンカーバイドの製造に伴う CO₂排出の活動量は、我が国でシリコンカーバイドの製造を行なっている唯一の事業所から提供された石油コークスの消費量を用いた。なお、データは秘匿扱いである。

2) CH₄

■ 算定方法

燃料の燃焼分野 (1.A.固定発生源) からの CH₄排出量の算定と同様の手法を用い、我が国の実測データより設定した排出係数を、電気炉における電力消費量に乗じて排出量を算定した。

■ 排出係数

我が国で行われた実測調査のデータを基に、排ガス中の CH₄濃度、単位時間当たりの実測乾き排ガス量、及び単位時間当たりの発生熱量の測定結果より電気炉からの電力消費に伴う排出係数 (12.8 kg-CH₄/TJ) を設定した (第3章の 3.2.5 エネルギー産業 (1.A.1) における CH₄ と N₂O の排出参照)。

■ 活動量

シリコンカーバイドの製造に伴う CH₄排出の活動量は、我が国でシリコンカーバイドの製造を行っている唯一の事業所から提供された電力消費量を用いた。なお、データは秘匿扱いである。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

1) CO₂

排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の10%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性は11%と評価された。

2) CH₄

排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の10%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性は11%と評価された。

■ 時系列の一貫性

CO₂、CH₄いずれも活動量は事業所からの提供を受けたデータをもとに、1990年度から一貫した方法を使用して算定している。排出係数についてはCO₂、CH₄いずれも1990年度から一定値を使用している。従って、シリコンカーバイド製造によるCO₂、CH₄排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.5.2. カルシウムカーバイドの製造及び使用 (2.B.5.b)

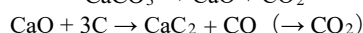
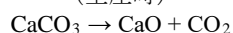
a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂

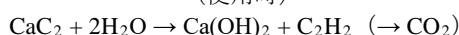
カルシウムカーバイド製造に使用される生石灰を製造する過程でCO₂が発生し、生石灰からカルシウムカーバイドを製造する過程で発生したCOが燃焼することによりCO₂が排出される。しかし前者は「炭酸塩のその他のプロセスでの使用 (2.A.4.)」の化学製品からの排出に含まれるため、ここでは還元剤起源分のみを計上する。また、カルシウムカーバイドを水と反応させて得られるアセチレンを燃焼させた際に発生するCO₂を計上する。

カルシウムカーバイド製造プロセスにおけるCO₂発生メカニズム

(生産時)



(使用時)

2) CH₄

カーバイド製造時に発生する副生ガス (一酸化炭素ガスが主) には微量のCH₄が含まれるが、全て回収して燃焼させ燃料として使用しており、系外には排出していない。従って、当

該排出源からの排出は「NA」と報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 2 手法に基づき、カルシウムカーバイドの生産量に、以下の排出係数を乗じて CO₂排出量を算定した。

■ 排出係数

2007年度以前については、我が国における実測データ及び独自の排出係数が存在しないため、2006年 IPCC ガイドラインに示された以下のデフォルトの排出係数を用いた。

表 4-20 カルシウムカーバイドの生産及び消費に伴う CO₂の排出係数 (2007年度以前)

単位	生産時還元剤起源	使用時
t-CO ₂ /t	1.09	1.10

2008年度以降については、わが国でカルシウムカーバイドを製造している国内全2社における実測データに基づいた還元剤起源の排出係数(年次可変)を使用する。なお、データは秘匿扱いである。使用時の排出係数については、2008年度以降もデフォルト値(1.10 t-CO₂/t)を用いる。

なお、CO₂排出係数の算定に使用しているカルシウムカーバイド生産量にはカルシウムカーバイドだけでなく、原料として使用された未反応の生石灰も含まれるため、排出係数の値は純粋なカルシウムカーバイドのみの反応による化学量論的理論値よりも小さくなっている。これは、我が国では生石灰が過剰な状態でカルシウムカーバイドの生産を行っているためである。カルシウムカーバイドは高純度なほど融点が高くなるため、低温部では粘度が大きくなり固まってしまい製造に支障を来すことから、意図的にカルシウムカーバイドの純度を抑えて融点を下げている。また、安全性の観点からも、製品の反応性を下げるために純度を抑えている。

■ 活動量

カルシウムカーバイドの生産量については、カーバイド工業会により提供されたカルシウムカーバイドの生産量を用いた。この生産量は、原料として使用された未反応の生石灰を含んでいる。なお、データは秘匿扱いである。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、還元剤起源、使用時ともに2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の10%を採用した。活動量の不確実性については、還元剤起源、使用時ともに2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性は還元剤起源、使用時ともに11%と評価された。

■ 時系列の一貫性

カルシウムカーバイド製造の活動量はカーバイド工業会より提供を受けたデータをもとに、1990年度値から一貫して使用している。排出係数については、1990年度から2007年度まで一定値を使用している。2008年度以降は我が国独自の排出係数を使用しているが、1990年度まで遡っての、生産規模や製造技術改良等、国独自の排出係数を設定するためのデータが把握できないことから、2007年度以前の算定にはデフォルトの排出係数を使用した。

d) QA/QC と検証

セメント製造(2.A.1)に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

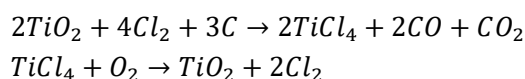
特になし。

4.3.6. 二酸化チタン製造 (2.B.6.)

a) 排出源カテゴリーの説明

二酸化チタン (TiO₂) は白色顔料の一種であり、紙、プラスチック、ゴム、セラミック、織物、床カバー、印刷インキ、塗料等の顔料として一般的に使用されている。結晶構造によってアナターゼ型 (正方晶) とルチル型 (正方晶) に分類され、アナターゼ型は硫酸チタンを加水分解して焼成 (硫酸法)、あるいはチタンスラグから製造され、ルチル型は合成ルチルからの分離、あるいは塩化チタンに高温で酸素と反応させて製造 (塩素法) される。

チタンスラグ製造における電気炉での炭素電極の酸化反応、合成ルチル製造中の黒炭の酸化反応、及び塩素法におけるオイルコークスの酸化反応により CO₂が排出される。塩素法による CO₂発生メカニズムは下式の通り。



b) 方法論

■ 算定方法

ルチル型二酸化チタン (塩素法) については、2006年 IPCC ガイドラインの Tier 1 手法に基づき、CO₂排出を伴う塩素法により生産される酸化チタン生産量 (ルチル型) に、事業者固有の排出係数を乗じて排出量を算定する。

ルチル型二酸化チタン (合成ルチルからの分離) については、2006年 IPCC ガイドラインの Tier 1 手法に基づき、合成ルチル生産量に、デフォルトの排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

ルチル型二酸化チタン (塩素法) については、事業者におけるプロセスへのコークス投入量等を基に以下のように算出した排出係数を使用する。

$$E = (CI - CO) \times CC \times \frac{44}{12}$$

$$EF = E / AD$$

<i>E</i>	: CO ₂ 排出量
<i>CI</i>	: コークス投入量
<i>CO</i>	: キャリーオーバー量 (未反応のまま残った原料)
<i>CC</i>	: コークス固定炭素純度
<i>EF</i>	: CO ₂ 排出係数
<i>AD</i>	: 二酸化チタン生産量

なお、上記算出法により排出係数が得られているのは 2011~2013 年度の 3 カ年のみのため、1990~2010 年度については 3 カ年の平均値を使用する。(2011 年度以降は酸化チタン工業会から提供された国独自の排出係数を用いている)

2006年 IPCC ガイドラインに記載されている上述の化学反応に従うと、二酸化チタン 2mol

につき、3mol の CO_2 が発生することになるが、日本の事業者の場合、約 $1,000^\circ\text{C}$ の高温状態での反応であり、上述の化学反応に加え、2 番目の反応 ($\text{TiO}_2 + 2\text{Cl}_2 + 2\text{CO} \rightarrow \text{TiCl}_4 + 2\text{CO}_2$ の反応) も同時に生じており、 CO が消費されていることから、ルチル型二酸化チタンの CO_2 排出係数は IPCC デフォルト値よりも低い。 CO が全て 1 番目に述べた反応で消費されると仮定すると、二酸化チタン 1 mol につき、1 mol の CO_2 しか生じないことになる。(プロセス中の余剰炭素は存在せず、 CO_2 はすべて投入したコークス由来のものである。)

ルチル型二酸化チタン (合成ルチルからの分離) については、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (1.43 t- CO_2 /t) を用いた。

■ 活動量

ルチル型二酸化チタンの生産量 (塩素法) については、酸化チタン工業会により提供された CO_2 排出を伴う塩素法により生産される酸化チタンの生産量を用いた。

ルチル型二酸化チタン (合成ルチルからの分離) の生産量については、経済産業省により提供された合成ルチルの生産量を用いた。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、ルチル型二酸化チタン、合成ルチルともに 2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の 15%、10% をそれぞれ採用した。活動量の不確実性については、ルチル型二酸化チタン、合成ルチルともに 2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値の 5% を採用した。その結果、排出量の不確実性はそれぞれ 16%、11% と評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は酸化チタン工業会・経済産業省より提供を受けたデータをもとに、1990 年度値から一貫して使用している。排出係数については、酸化チタン工業会から提供されたデータを一貫して使用している。従って、二酸化チタン製造による CO_2 排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.7. ソーダ灰の製造 (2.B.7.)

我が国では、塩安 (NH_4Cl) ソーダ法によりソーダ灰 (Na_2CO_3) の生産が行われている。ソーダ灰の製造工程においては、石灰石とコークスを石灰炉で焼成しており、その際に CO_2 が排出される。石灰起源の CO_2 はそのほとんどが製品中へ取り込まれる。

ソーダ灰の製造工程において、購入した CO_2 をパイプラインで投入する場合があるが、この排出量はアンモニア工業から排出される CO_2 であるため、「アンモニア製造 (2.B.1.)」で既に計上されている。また、コークスの消費量については、加熱用として「石油等消費動態統計」に記載されているため、コークス起源の CO_2 排出量は既に「燃料の燃焼分野 (1.A.)」に

計上されている。従って、当該排出源からの排出量は、全て他分野にて既に計上されているため、「IE」と報告している。また、コークスについては熱源及びCO₂源として投入されている。なお、コークス起源のCO₂排出量の計上先に関する考え方は鉄鋼製造と同様である。

なお、2006年IPCCガイドラインには、トロナ(Na₂CO₃・NaHCO₃・2H₂O)の焼成等によるCO₂排出量の算定方法が示されているが、我が国ではトロナを焼成してソーダ灰を製造している実績がないため、排出量は算定しない。

4.3.8. 石油化学及びカーボンブラック製造 (2.B.8.)

4.3.8.1. メタノール製造 (2.B.8.a.)

a) 排出源カテゴリーの説明

メタノールの製造に伴いCO₂及びCH₄が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

メタノールの製造に伴うCO₂及びCH₄排出については、2006年IPCCガイドラインのTier 1手法に基づいて算定した。

関連業界団体によれば、メタノールの生産(合成)は、内外価格差のため、我が国においては1995年で終了し、その後はメタノールを全て輸入しており、1995年頃には国内のメタノール生産プラントもなくなっている。

従って、1990～1995年度までは、業界団体統計による生産量を使用して、排出量を報告し、1996年度以降については、我が国ではメタノールの生産(合成)が行われていないと考えられることから「NO」と報告している。

■ 排出係数

CO₂については、2006年IPCCガイドラインに示された、メタノールのデフォルト値のうち、我が国固有の製法に応じた値を用いた。排出係数は、0.67 [t-CO₂/t] (2006年IPCCガイドライン vol.3 p3.73 Table 3.12)。

CH₄については、2006年改訂IPCCガイドラインに示された、メタノールのデフォルト値を用いた。排出係数は、2.3 [kg-CH₄/t] (2006年改訂IPCCガイドライン vol.3 p3.74)。

■ 活動量

メタノール製造に伴うCO₂及びCH₄排出の活動量については、メタノールの生産量(暦年値、メタノール・ホルマリン協会調べ)を用いた。

表 4-21 メタノール生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
メタノール生産量	kt	84	75	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、2006年IPCCガイドラインに示されたデフォルト値の-30～+30% (CO₂)、-80～+30% (CH₄)を採用した。活動量の不確実性については、2006年IPCCガイドラインに示された類似化学製品のデフォルト値の-5～+5%を採用した。その結果、CO₂及びCH₄の排出量の不確実性はそれぞれ-30～+30%、-80～+30%と評価された。

■ 時系列の一貫性

メタノール製造の活動量はメタノール・ホルマリン協会からの提供データをもとに、1990年から1995年まで一貫して使用している。また、排出係数は1990年から一定値を使用している。従って、メタノール製造によるCO₂及びCH₄排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.8.2. エチレン製造 (2.B.8.b)

a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂、CH₄

エチレンの生産工程でCO₂が排出される。また、エチレン生産の過程で、スチーム・クラッキング法によるナフサ分解によりCH₄が排出される。

なお、エチレン生産における炭素ロス分は、総合エネルギー統計 (エネルギーバランス表) のエネルギー転換部門の石油化学で計上している。石油化学は、ナフサ・改質生成油から基礎化学原料を生産する工場、製油所ガスや燃料油などの各種の石油製品が副生する過程をエネルギー転換とみなして表している部門である。

2) N₂O

エチレン原料のナフサには窒素がほとんど含まれず、また、エチレン製造は酸素がほとんど存在しない状態で行われる。原理的にN₂Oの排出はない、と専門家判断している。

b) 方法論

■ 算定方法

エチレン製造に伴うCH₄、CO₂排出については、2006年IPCCガイドラインに示されたTier 1手法に基づき、エチレンの生産量に我が国独自の排出係数を乗じて、排出量を算定した。

なお、エチレン製造 (スチーム・クラッキングプロセス) における原料に起因する副生ガスのエネルギー利用に伴うCO₂排出量については、総合エネルギー統計の「石油化学製品動力燃料」部門における「製油所ガス」による排出量に含まれると考えられ、当該排出量については、「1.A.2.c. 製造業及び建設業—化学」における排出量として計上済みである。

■ 排出係数

○ CO₂

石油化学工業協会がエチレン製造に伴うCO₂排出係数に関する調査を2009年に実施したので、その調査結果を用いて、排出係数を設定した。

CO₂排出係数は、デコーキング等からのCO₂排出量とエチレン生産量データに基づき設定している。なお、原料に由来する副生ガスのエネルギー利用に伴うCO₂排出量を「1.A.燃料の燃焼」において計上しているため、国独自の排出係数とIPCCデフォルト値との間に差異が生

じている。

なお、当該排出係数は秘匿とする。

○ CH₄

我が国の実態を踏まえ、全事業所における定常運転時・非定常運転時におけるフレアスタックからの排ガス量の推計値（入り口量の98%が燃焼したものと仮定）、ナフサ分解炉及び再生ガス加熱炉からの排ガス量の測定値を生産量で除して各社ごとの排出係数を算出し、各社の生産量による加重平均をとって排出係数を設定した。（石油化学工業協会調べ）なお、当該排出係数は秘匿とする。

■ 活動量

エチレン製造に伴う CH₄、CO₂排出の活動量については、経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」に示されたエチレン生産量を用いた。

表 4-22 エチレン生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
エチレン生産量	kt	5,966	6,951	7,566	7,549	7,219	6,999	6,474	6,261	6,764	6,687	6,780	6,286	6,459	6,186

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

エチレン製造の CO₂、CH₄の不確実性については同じ方法で評価した。排出係数の不確実性については、統計的処理により95%信頼区間を求め不確実性評価を行った。その結果、排出係数の不確実性は、CO₂、CH₄ともに77%と評価された。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の5%を採用した。その結果、エチレン製造に伴う CO₂、CH₄の排出量は共に77%と評価された。

■ 時系列の一貫性

エチレン製造の活動量は「生産動態統計年報 化学工業統計編」をもとに、1990年度値から一貫して使用している。また、排出係数は1990年度から一定値を使用している。従って、エチレン製造による CO₂、CH₄排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.8.3. 1,2-ジクロロエタン及びクロロエチレン製造（2.B.8.c）

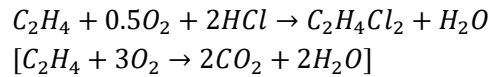
a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂

1,2-ジクロロエタンは、ポリ塩化ビニルの前駆体とされ、主にクロロエチレンの生産に使用

¹ IPCC グッドプラクティスガイダンスに示されるフレアリング効率98%の値（Table 2.16 note e）をもとに仮定したもの。

される。その他には、洗浄剤、溶媒、殺虫剤、薫蒸剤等に使用される。直接塩素化法あるいはオキシ塩素化法、さらには両者を併用した製法によって製造され、直接塩素化法では塩素とエチレンの気相反応により 1,2-ジクロロエタンが生成し、オキシ塩素化法では塩酸と酸素とエチレンの気相反応により 1,2-ジクロロエタンが生成する。オキシ塩素化法のエチレン酸化反応の過程において CO₂が排出される（下式）。



生成した 1,2-ジクロロエタンは、加熱により、ポリ塩化ビニルの前駆物質であるクロロエチレンモノマーと塩化水素に分解される。オキシ塩素化法では、このときに生成する塩化水素を利用できるため、直接塩素化法とオキシ塩素化法を併用した製法が普及した。両者併用プロセスにおいても上式により CO₂が排出される。

2) CH₄

1,2-ジクロロエタンは洗浄、精製工程、熱分解工程を経てクロロエチレン (C₂H₃Cl) となるが、反応の際に発生する排ガス、洗浄、精製工程の排ガス中にごくわずかの CH₄が生成される。

b) 方法論

■ 算定方法

CO₂排出については、2006年 IPCC ガイドラインの Tier 1 手法に基づき、国内総生産量に、工場別データを基に設定した我が国独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。

CH₄排出については、1990～2000年度については、2006年 IPCC ガイドラインの Tier 1 手法に基づき、国内総生産量に、工場別データを基に設定した我が国独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。但し、塩ビ工業・環境協会によると、排ガス燃焼設備の導入が全てのプラントにおいて完了し、排ガス中の CH₄が検出限界未満となったことから、2001年度以降は、NO として報告する。（燃焼処理した分は回収量として報告）。

■ 排出係数

○ CO₂

塩ビ工業・環境協会より提供を受けた、クロロエチレン生産量ベースの CO₂排出係数 (0.0647 t-CO₂/t-VCM) を全年度に適用する。

この排出係数は、我が国において、1,2-ジクロロエタン・クロロエチレンを製造している事業者 5 社の 2012 年における CO₂排出量実測値の合計値を同年のクロロエチレン国内総生産量で除したものである。

なお、デフォルト値 0.294 t-CO₂/t-VCM には補助燃料の燃焼に伴う CO₂も含まれるが、本排出係数はエネルギー分野との二重計上を回避するため、補助燃料の燃焼に伴う CO₂排出を除いており、デフォルト値よりも小さい値となっている。

○ CH₄

1990～2000年度については、塩ビ工業・環境協会加盟 3 社（生産量の約 70%）の排ガス中 CH₄濃度を実測し、加重平均して排出係数を設定した。排出係数は、0.0050 [kg-CH₄/t]。1,2-ジクロロエタンを製造している各社の製造プロセスに関する情報を踏まえ、この排出係数の代表性は確認されている。（塩ビ工業・環境協会調べ）排ガス燃焼装置の設置が進んでおり、テールガス中の CH₄の割合は IPCC デフォルト値より低く、現在は検出可能なレベル以下になっている。2001年度以降については、排出係数は設定しない。

■ 活動量

CO₂排出の活動量については、経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」に示された塩化ビニルモノマー（クロロエチレン）の生産量（年度値）を用いた。

CH₄排出の活動量については、「生産動態統計年報 化学工業統計編」に示された二塩化エチレン（1,2-ジクロロエタン）の生産量（年度値）を用いた。

表 4-23 塩化ビニルモノマー（クロロエチレン）生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
塩化ビニルモノマー生産量	kt	2,316	2,648	2,976	3,098	2,958	2,850	2,253	2,009	2,286	2,315	2,616	2,621	2,706	2,664

表 4-24 二塩化エチレン（1,2-ジクロロエタン）生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1,2-ジクロロエタン生産量	kt	2,683	3,014	3,346	3,639	3,213	3,155	2,841	2,558	2,733	2,730	3,003	3,012	3,158	3,113

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

CO₂、CH₄の排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の-50～+20%、-10～+10%をそれぞれ採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性はそれぞれ-50～+21%、-11～+11%と評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は「生産動態統計年報 化学工業統計編」をもとに、1990年度値から一貫して使用している。また、排出係数は1990年度から一定値を使用している。従って、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

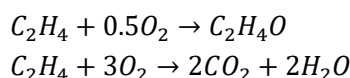
特になし。

4.3.8.4. 酸化エチレン（2.B.8.d）

a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂、CH₄

酸化エチレンは、触媒存在下で酸素とエチレンを反応させることにより製造され、副生成物としてCO₂が排出される（下式）。酸素は、空気で供給あるいは空気を分離した純酸素で供給の二つの方法がある。



発生したCO₂は一部がベントにより大気放出され、一部が炭酸塩溶液により回収され食料品製造等に利用される。

一般的に酸化エチレン製造は、ガスを循環利用するプロセスであり、原料ガス中に含まれる微量の反応しない不純物（アルゴンや窒素など）の蓄積による圧力上昇を抑えるために一部系外にパージする必要があるため、排ガスとなる。この排ガスには、エチレンやメタン、酸素、アルゴンなどが含まれ、一般的にはそのまま燃焼処理するが、漏出やベントにより CH₄が排出される場合もある。

b) 方法論

■ 算定方法

○ CO₂

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 3 手法に基づき、国内総生産量に、工場別データを基に設定した我が国独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。また、回収を反映していない排出係数と、回収量を差し引いた実排出係数の2通りの排出係数により排出量を算定し、その差分を CO₂回収量として「2.H.2.食品・飲料産業」で計上することとする（下式参照）。

$$E_{CO_2} = EO \times EF_1$$

E_{CO_2} : 酸化エチレン製造に伴う CO₂排出量

EO : 酸化エチレンの年間生産量

EF_1 : 酸化エチレンの生産量当たり CO₂排出量 (CO₂回収を考慮)

$$R_{CO_2} = EO \times EF_2 - E_{CO_2}$$

R_{CO_2} : 酸化エチレン製造プロセスからの CO₂回収量

EO : 酸化エチレンの年間生産量

EF_2 : 酸化エチレンの生産量当たり CO₂排出量 (CO₂回収を考慮せず)

○ CH₄

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 1 手法に基づき、排出がみられる事業者における酸化エチレン生産量に、当該事業者による実測結果に基づく事業者独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

○ CO₂

生産量あたりの排出係数（回収を考慮：0.24 t-CO₂/t、回収を考慮せず：0.33 t-CO₂/t）を使用する（石油化学工業協会提供）。排出係数は、国内の全工場における工場別の排出係数を単純平均したものであり、各工場において投入された原料及び副資材の量と、製品及び副産物の生産量の炭素収支等を基に算出されている。工場別の生産量データは秘匿情報に当たり加重平均が困難であること、我が国では酸化エチレンは全て同一の製造プロセス（酸素法）により製造されていることから、単純平均としても実態からの乖離は軽微であると判断した。なお、我が国の酸素法では触媒の選択性がデフォルト値の設定よりも高いため、排出係数（回収を考慮せず）はデフォルト値 0.663 t-CO₂/t よりも低い値となっている。

○ CH₄

当該事業者での実測結果に基づく事業者独自の排出係数を使用する。排出係数設定に用いられた CH₄排出量データは、当該事業者において、プロセスから排ガスをパージする際に外部から導入したガス中の CH₄量を基に、大気中に排出された CH₄量を推定したものである。ただし、データが把握されているのは 2004 年度以降のみのため、2003 年度以前については、2004～2006 年度の3カ年平均排出係数を固定値として使用する。なお、データは秘匿情報である。

■ 活動量

○ CO₂

経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」における酸化エチレン生産量を使用する（表 4-25）。

表 4-25 酸化エチレン生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
酸化エチレン生産量	kt	714	795	961	1,001	792	843	842	849	915	894	923	882	945	893

○ CH₄

当該事業者における酸化エチレン生産量を使用する。なおデータは秘匿情報である。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

CO₂の排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の10%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性は11%と評価された。

CH₄の排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の60%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性は60%と評価された。

■ 時系列の一貫性

酸化エチレン製造の活動量は、CO₂は「生産動態統計年報 化学工業統計編」、CH₄は排出事業者提供のデータをもとに、それぞれ1990年度値から一貫して使用している。また、排出係数もそれぞれ同じソースのデータをもとに設定されている。従って、酸化エチレン製造によるCO₂、CH₄排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.8.5. アクリロニトリル（2.B.8.e）

a) 排出源カテゴリーの説明

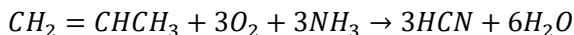
1) CO₂

アクリロニトリル（C₃H₃N）は、アクリル繊維や合成樹脂の原料として利用されており、主に金属触媒の存在下でプロピレンにアンモニアと酸素を作用（アンモ酸化）させるソハイオ法により生産されている。プロピレンの約85%が反応してアクリロニトリル、あるいは副産品であるアセトニトリル、シアン化水素を生成する（下式 1~3）。残りのプロピレンについては、副反応により他の炭化水素を介して、あるいは直接酸化されてCO₂として排出される（下式 4）。

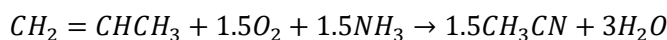
式1 アクリロニトリルの生成反応



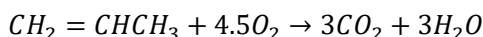
式2 シアン化水素の生成反応



式3 アセトニトリルの生成反応



式4 CO₂の生成反応



2) CH₄

我が国のアクリロニトリルプラントにおいては、CH₄についてオフガスを分析しているが、検出されていないため、注釈記号 NA により報告を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 3 手法に基づき、国内総生産量に、工場別データに基づく我が国独自の排出係数を乗じて排出量を算定した。

■ 排出係数

生産量ベースの CO₂排出係数(0.73 t-CO₂/t)を全年度に適用する。(石油化学工業協会提供)
この排出係数は、各工場において投入された原料・副資材投入量と製品・副産物産出量の炭素収支等を基に設定した各工場別 CO₂排出係数を、国内の全工場について単純平均したものである。これは、工場別の生産量データが秘匿情報に当たり加重平均が困難であること、我が国ではアクリロニトリルは全て同一の製造プロセス(ソハイオ法)により製造されていることから、単純平均としても実態からの乖離は軽微であるためである。

なお、我が国のアクリロニトリル製造プロセスにおいては、アセトニトリルとシアン化水素が製品として回収されているため、2006年 IPCC ガイドラインにおけるアセトニトリルとシアン化水素が製品として回収されている場合のデフォルト値(0.79 t-CO₂/t)に近い値となっている。やや下回っているのは、原単位改善等の効果によるものである。

■ 活動量

経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」におけるアクリロニトリル生産量を使用する。

表 4-26 アクリロニトリル生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
アクリロニトリル生産量	kt	602	652	734	697	631	718	665	553	499	468	431	437	443	467

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の 60%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の 5%を採用した。その結果、排出量の不確実性評価は 60%として評価された。

■ 時系列の一貫性

アクリロニトリル製造の活動量は「生産動態統計年報 化学工業統計編」をもとに、1990年度値から一貫して使用している。また、排出係数は1990年度から一定値を使用している。従って、アクリロニトリル製造によるCO₂排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.8.6. カーボンブラック製造 (2.B.8.f)

a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂、CH₄

カーボンブラックは主に石油精製や金属精錬過程で副生成物として得られるオイルやガスを高温ガス中で不完全燃焼させて製造される。(ファーネスブラック法) カーボンブラック製造プロセスから排出されるテールガス (オフガス) に含まれるCO₂、CH₄が大気中に排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

○ CO₂

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 1 手法に基づき、国内総生産量に我が国独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。

○ CH₄

2006年 IPCC ガイドラインの Tier 1 手法に基づき、カーボンブラックの生産量に工場別データをもとに設定した我が国独自の排出係数を乗じて算定する。

■ 排出係数

○ CO₂

反応炉を加熱するために投入される天然ガス起源 (二次原料起源) のCO₂については、「燃料の燃焼分野 (1.A.)」において既に計上されていると考えられるため、カーボンブラックの直接的な原料となるオイル・ガス起源 (一次原料起源) のCO₂のみを計上する。排出係数は、カーボンブラック協会より提供を受けた生産量ベースのCO₂排出係数 (2.06 t-CO₂/t) を使用する。この値は、カーボンブラック協会会員会社 5 社における実測値 (原料中の炭素分からカーボンブラック製品中の残留分を差し引いたものをCO₂換算し、製品重量当たりとしたもの) を生産量により加重平均したものであり、協会会員 5 社で国内生産・販売量の95%以上を占めているため、代表性を有すると考えられる。なお、5 社はいずれもオイルファーネス法により製造しており、各社の排出係数のばらつきはそれほど大きくなく、年次変動もほとんどない。

○ CH₄

我が国のカーボンブラック生産プラントにおいて、CH₄が大気中に排出されるのは、定常運転ではない停止・立ち上げ時のベントによるもののみである。また、「カーボンブラック便覧（カーボンブラック協会）」によると、我が国のカーボンブラック生産プラントから排出される平均的テールガスにおいては、CH₄濃度が0.6wt%、CO、CO₂、CH₄の合計濃度は21.5wt%とのことであり、定常運転時も停止・立ち上げ時も同じ組成とのことである。したがって、CO₂排出係数（2.06 t-CO₂/t）より、CH₄排出係数は下式により算出される。データは秘匿である。

$$EF_{CH_4} = 2.06[t-CO_2/t] \times R \times \frac{0.6[wt\%]}{21.5[wt\%]} \times \frac{16}{44}$$

EF_{CH_4} ：カーボンブラックの製造に伴うCH₄排出係数

R：全稼働時間に占める停止・立ち上げ時のベント時間の割合

なお、我が国のカーボンブラック製造においては、プロセス中は負圧となっており、基本的に系外にガスが漏出することはないため、ベントによる排出量のみを算定する。

■ 活動量

カーボンブラック製造に伴うCO₂、CH₄排出の活動量については、経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」に示されたカーボンブラック生産量を用いた。

表 4-27 カーボンブラック生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
カーボンブラック生産量	kt	793	759	772	805	635	730	670	612	628	608	563	567	597	611

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、統計的処理により95%信頼区間を求め不確実性評価を行った。その結果、排出係数の不確実性は、CO₂、CH₄ともに55%と評価された。活動量の不確実性については、CO₂、CH₄ともに2006年IPCCガイドラインのデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性評価はCO₂、CH₄ともに55%として評価された。

■ 時系列の一貫性

カーボンブラック製造の活動量は「生産動態統計年報 化学工業統計編」をもとに、1990年度値から一貫して使用している。また、排出係数は1990年度から一定値を使用している。従って、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.8.7. スチレン製造 (2.B.8.g.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

スチレンの製造に伴い CH₄が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

スチレン製造に伴う CH₄排出については、2006年 IPCC ガイドラインに示された手法に基づき、スチレンの生産量に我が国独自の排出係数を乗じて算定した。

■ 排出係数

国内全事業所における定常運転時・非定常運転時におけるフレアスタックからの排ガス量の推計値(入り口量の98%が燃焼したものと仮定²⁾)及び加熱炉等からの排ガス量の測定値を生産量で除して各社ごとの排出係数を算出し、各社の生産量による加重平均をとって排出係数を設定した。(石油化学工業協会調べ)。なお、当該排出係数は秘匿とする。

■ 活動量

スチレン製造に伴う CH₄排出の活動量については、経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」に示されたスチレンモノマーの生産量を用いた。

表 4-28 スチレン (モノマー) 生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
スチレン生産量	kt	2,227	2,952	3,020	3,375	3,043	3,019	2,594	2,426	2,539	2,518	2,260	1,952	2,100	1,994

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

スチレン製造に伴う CH₄の排出係数の不確実性については、統計的処理により95%信頼区間を求め不確実性評価を行った。その結果、排出係数の不確実性は、113%と評価された。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性は113%と評価された。

■ 時系列の一貫性

スチレン製造の活動量は、1990年度値から一貫して使用している。また、排出係数は1990年度から一定値を使用している。従って、スチレン製造による CH₄排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

² 脚注1参照。

4.3.8.8. 無水フタル酸製造 (2.B.8.g.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

無水フタル酸は、可塑剤、合成樹脂、塗料、染料等の原料として使用されている。無水フタル酸製造時には、ナフタレン酸化、*o*-キシレン酸化の反応により CO、CO₂が排出される。CO も燃焼され最終的には CO₂として排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

無水フタル酸生産量に生産量当たり排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

製品及びその他の副生物とならなかった C が最終的に CO₂になるとみなし、無水フタル酸の製法別の製品・副生物の収率 [mol%] (石油学会「石油化学プロセス」) より CO₂の生成比率 [mol%] を算出する。さらに、CO₂と製品の生成比率と各物質の分子量より、製品の生産量当たりの CO₂排出量を算出し、製法別の排出係数とする。なお、「石油化学プロセス」においては、収率は上限値及び下限値が示されているため、ここでは中央値を基に排出係数を設定する。

表 4-29 無水フタル酸製造における製法別物質生成率

製法	製品収率 [mol%]	無水マレイン酸 [mol%]	その他 [mol%]	CO ₂ ※ [mol%]	排出係数※ [t-CO ₂ /t]
ナフタレン酸化	87-91	3-5	1	2-8	0.19
<i>o</i> -キシレン酸化	80-83	4-6	1-2	10-16	0.54

(出典)「石油化学プロセス (石油学会)」(但し※を除く)

さらに、重化学工業通信社「化学品ハンドブック」の我が国における各年度別・製法別の無水フタル酸生産能力により、年度ごとに加重平均を行い、我が国を代表する排出係数とする。

表 4-30 無水フタル酸生産能力に基づく加重平均排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
加重平均排出係数	t-CO ₂ /t	0.39	0.39	0.41	0.37	0.37	0.37	0.37	0.37	0.37	0.37	0.37	0.37	0.37	0.37

(注) 1995 年度以前は製法別の生産能力不明のため 1996 年度の排出係数を用いる。

■ 活動量

経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」における無水フタル酸生産量を使用する。

表 4-31 無水フタル酸生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
無水フタル酸生産量	kt	300	319	288	216	137	160	148	162	158	156	159	156	163	155

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、排出係数の設定に使用した収率の理論値の上限値・下限値より設定した 32%を使用した。活動量の不確実性については、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の 5%を採用した。その結果、排出量の不確実性は 32%と評価された。

■ 時系列の一貫性

無水フタル酸の活動量は「生産動態統計年報 化学工業統計編」をもとに、1990年度値から一貫した方法を使用して、算定している。また、排出係数についても一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.8.9. 無水マレイン酸製造 (2.B.8.g.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

無水マレイン酸は、不飽和ポリエステル樹脂原料をはじめとして、樹脂改良材、食品添加物、医薬原料、リンゴ酸、コハク酸等の有機酸の合成原料として使用されている。無水マレイン酸製造時には、ベンゼン法、n-ブタン法の反応により CO、CO₂が排出される。CO も燃焼され最終的には CO₂として排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

無水マレイン酸生産量に生産量当たり排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

製品及びその他の副生物とならなかった C が最終的に CO₂になるとみなし、無水マレイン酸の製法別の製品・副生物の収率 [mol%] (石油学会「石油化学プロセス」) より CO₂の生成比率 [mol%] を算出する。さらに、CO₂と製品の生成比率と各物質の分子量より、製品の生産量当たりの CO₂排出量を算出し、製法別の排出係数とする。なお、「石油化学プロセス」においては、収率は上限値及び下限値が示されているため、ここでは中央値をもとに排出係数を設定する。

表 4-32 無水マレイン酸製造における製法別物質生成率

製法	製品収率 [mol%]	CO ₂ ※ [mol%]	排出係数※ [tCO ₂ /t]
ベンゼン法	70-80	20-30	0.74
n-ブタン法	55-60	40-45	1.65

(出典)「石油化学プロセス (石油学会)」(但し※を除く)

さらに、重化学工業通信社「化学品ハンドブック」の我が国における各年度別・製法別の無水マレイン酸生産能力により、年度ごとに加重平均を行い、我が国を代表する排出係数とする。

表 4-33 無水マレイン酸生産能力に基づく加重平均排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
加重平均排出係数	t-CO ₂ /t	1.20	1.20	1.23	1.11	1.11	1.11	1.04	1.04	1.04	1.04	1.04	1.04	1.04	1.04

(注) 1995年度以前は製法別の生産能力不明のため1996年度の排出係数を用いる。

■ 活動量

経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」における無水マレイン酸生産量を使用する。

表 4-34 無水マレイン酸生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
無水マレイン酸生産量	kt	103	116	132	103	85	93	88	75	86	85	87	88	90	89

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、排出係数の設定に使用した収率の理論値の上限値・下限値より設定した 16%を使用した。活動量の不確実性については、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の 5%を採用した。その結果、排出量の不確実性は 17%と評価された。

■ 時系列の一貫性

無水マレイン酸の活動量は、1990 年度値から一貫した方法を使用して、算定している。また、排出係数についても一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.8.10. 水素製造 (2.B.8.g.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

天然ガスや石油等の化石燃料を水蒸気改質して水素を製造する際に CO₂が発生する。なお、石油精製やエチレン製造等においても水素が副生し、回収利用されているが、関連排出量はすでに他のカテゴリーで計上済みであるため、ここでは、水素そのものを得ることを目的として、原料から水素を製造している場合の CO₂排出量を対象とする。

b) 方法論

■ 算定方法

水素生産量に生産量当たり排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

日本産業・医療ガス協会加盟企業からの報告値に基づく産業ガスメーカーにおける CO₂排出量の合計値を、同アンケート結果に基づく水素生産量の合計値で割った生産量当たりの CO₂排出量を排出係数とする。

表 4-35 水素製造における排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
排出係数	t-CO ₂ / 10 ³ Nm ³	0.82	0.83	0.83	0.88	0.87	0.87	0.87	0.88	0.86	0.85	0.85	0.84	0.86	0.86

■ 活動量

日本産業・医療ガス協会加盟企業からの報告値に基づく CO₂排出を伴う製造プロセスにより生産された水素生産量を使用する。

表 4-36 水素生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
水素生産量	10 ³ Nm ³	7,431	25,116	46,562	37,911	36,277	38,889	37,437	34,846	32,170	28,394	32,257	34,235	34,095	33,574

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、エチレン製造の不確実性 77%を使用した。同様に、活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の 5%を採用した。その結果、水素製造に伴う CO₂の排出量の不確実性は 77%と評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は 1990 年度値から一貫した方法を使用して、算定している。また、排出係数についても一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

排出係数が更新されたため、2013～2017 年度について、再計算が行われた。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.3.9. フッ化物製造 (2.B.9.)

4.3.9.1. 副生ガスの排出—HCFC-22 の製造 (2.B.9.-)

a) 排出源カテゴリの説明

HCFC-22 の製造に伴い HFC-23 が副生ガスとして排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

国内の HCFC-22 製造プラントにおける HFC-23 の副生量から、副生 HFC-23 の回収・破壊量 (実測値) を減じて排出量を算定した。HFC-23 の副生量は、HCFC-22 の製造量に、HFC-23 副生率 (リアクター内部の組成分析を実施し、分析結果から設定) をかけて求めた。排出係数は国独自のものである。

プラントの稼働中は回収・除害装置は常に稼働しており、もし、装置にトラブルが発生した場合には、プラントの稼働を止める運転管理を行っており、回収・除害を実施できなかった部分についてはデータに反映されている。

$$E = P_{\text{HCFC-22}} \times EF - R$$

E : HCFC-22 の製造に伴う副生 HFC-23 の排出量
 $P_{\text{HCFC-22}}$: HCFC-22 生産量 [t]

EF : HFC-23 副生率 [%]
R : 回収・破壊量 [t]

表 4-37 HCFC-22 の製造に伴う副生 HFC-23 の排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HCFC-22の生産量	t	60,122	81,000	95,271	65,715	26,682	46,149	45,314	54,388	47,546	51,753	49,121	48,833	52,646	56,933
HFC-23副生率	%	2.13%	2.13%	1.70%	1.90%	2.34%	2.01%	1.53%	1.60%	1.41%	1.46%	1.46%	1.38%	1.47%	1.80%
HCFC-22生産に対する排出割合	%	1.79%	1.79%	1.11%	0.06%	0.01%	0.01%	0.002%	0.002%	0.002%	0.003%	0.004%	0.003%	0.005%	0.001%
排出量	t	1,076	1,450	1,060	40	3	4	1	1	1	2	2	2	3	1
	kt-CO ₂ 換算	15,929	21,460	15,688	586	50	53	16	18	16	24	30	24	38	12

(出典) 経済産業省産業構造審議会製造産業分科会化学物質政策小委員会フロン類等対策ワーキンググループ資料 (以下、フロン類等対策ワーキンググループ資料)、平成 25 年度温室効果ガス排出量算定方法検討会第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料 (以下、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料)

(注) 2004 年に全ての製造設備に回収・破壊装置が設置されたことにより、排出量が減少している。HCFC-22 生産に対する排出割合が低いのは、破壊設備の運転管理、保守技術の向上による設備稼働率低下防止に取り組んだためである。その後も継続的に運転管理技術等の改善に取り組んだため、排出の抑制が進んでいる。

なお、1990～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年についてはフッ素樹脂生産量・フッ素樹脂生産量に対するフッ素樹脂原料用の HCFC-22 の割合 (データ入手可能な 1995～2006 年の平均) から推計したフッ素樹脂原料用の HCFC-22 生産量、および HCFC 総出荷量³・1995 年の冷媒用途の HCFC-22 出荷量から推計した冷媒用途の HCFC-22 生産量推計値の合算値を総 HCFC-22 生産量とし、1995 年の HCFC-22 の生産量に対する排出割合のデータを用いて外挿をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出量の不確実性は 2006 年 IPCC ガイドラインの 2%を採用した。

■ 時系列の一貫性

1995 年以降の排出量については、経済産業省の製造産業分科会において、HFC 等 4 ガスの排出量を毎年継続的に集計している。1990～1994 年については、1995 年以降の関連データの外挿等をして算定を行っており、可能な限り時系列の一貫性に配慮している。

d) QA/QC と検証

製造産業分科会において集計されたデータを温室効果ガス排出量算定方法検討会において確認した上で、インベントリに使用している。また、日本国内全てのプラントで排出量の調査を行っている。組成分析の実施頻度については、あるプラントでは毎日測定を実施しているなど頻繁に実施している。濃度測定もプラントの排出口部分において実施している。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

³ 通商産業省平成 9 年第 1 回化学品審議会リスク管理部会温室効果化学物質分科会通商産業省作成資料。

4.3.9.2. 製造時の漏出 (2.B.9.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

HFCs、PFCs、SF₆、NF₃製造時にガスが漏洩する。なお、回収容器の残存ガスを破壊処理して容器を洗浄する場合や、大気中に放出される場合は、これらの排出量は本サブカテゴリーの下で報告される。

b) 方法論

■ 算定方法

国内のHFCs、PFCs、SF₆、NF₃製造の各プラントにおいて、排出量を実測して計上した。回収除害等も考慮されている。プラントの稼働中は回収・除害装置は常に稼働しており、もし、装置にトラブルが発生した場合には、プラントの稼働を止める運転管理を行っている。

関連指標を下表に示す。

表 4-38 HFCs の製造時の漏出の排出量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
排出量	kt-CO ₂ 換算	2	559	296	449	234	128	151	120	131	101	83	149	95	88

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料 (日本フロンカーボン協会データ)、経済産業省提供データ、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

(注) 国の支援を受けた除害装置の設置や製造工程の見直し等による排出削減の取組により、排出削減が進められている。

表 4-39 PFCs の製造時の漏出の排出量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
排出量	kt-CO ₂ 換算	331	914	1,661	1,041	459	248	206	148	111	107	115	97	78	87

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料 (日本化学工業協会データ)、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

(注) 国の支援を受けた除害装置の設置や製造工程の見直し等による排出削減の取組により、排出削減が進められている。また、2011 年には希薄排出ガスの燃焼除害装置の設置で更なる排出削減を達成している。

表 4-40 SF₆ の製造時の漏出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
SF ₆ の生産量	t	1,848	2,392	1,556	2,313	2,562	2,201	1,993	2,230	2,128	1,997	2,027	2,003	1,680	1,658
排出量	t	152	197	36	41	10	8	6	5	4	3	2	2	2	2
	kt-CO ₂ 換算	3,471	4,492	821	930	233	189	132	123	93	62	52	50	41	46

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料 (日本化学工業協会データ)、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

(注) 2009 年に全ての製造設備に回収・破壊装置が設置されたことにより、排出量が減少している。また、製造工程や出荷時の作業見直しによる排出削減が進められている。

表 4-41 NF₃ の製造時の漏出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
NF ₃ の生産量	t	6	37	208	1,663	2,887	3,642	3,612	3,501	4,148	4,660	4,963	4,366	4,649	4,719
排出量	t	0.2	1.0	7.0	72.1	66.8	76.9	93.1	76.4	86.4	56.1	23.5	25.1	13.6	3.4
	kt-CO ₂ 換算	3	17	120	1,240	1,149	1,323	1,601	1,314	1,486	965	404	432	234	58

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料 (日本化学工業協会データ)

なお、1990～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年につ

いては HFCs、PFCs、SF₆生産量と比例すると考えられる HFCs、PFCs、SF₆出荷量⁴、1995 年の HFCs、PFCs、SF₆、NF₃の生産量に対する排出割合、1995 年の HFCs、PFCs の加重平均 GWP 値のデータを用いて外挿をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出量の不確実性は、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃いずれについても 2006 年 IPCC ガイドラインの 2%を採用した。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.4. 金属製造 (2.C.)

金属の生産カテゴリーは、金属製品の製造過程で大気中に排出される CO₂、CH₄、HFCs、PFCs、SF₆を扱う。当該カテゴリーは、「2.C.1.鉄鋼製造」、「2.C.2.フェロアロイ製造」、「2.C.3.アルミニウム製造」、「2.C.4.マグネシウム製造」、「2.C.5.鉛製造」、「2.C.6.亜鉛製造」から構成される。

2018 年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は約 6,006kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF 分野を除く) の 0.5%を占めている。このカテゴリーの CO₂及び CH₄について 1990 年度の排出量と比較すると 21.2%の減少となっている。HFCs、PFCs 及び SF₆では 1990 年の排出量と比較すると 21.4%の減少となっている。

⁴ 通商産業省「平成 9 年第 1 回化学品審議会リスク管理部会温室効果化学物質分科会通商産業省作成資料」。以下 1990～1994 年排出量推計に用いている「国内出荷量」は同出典。

表 4-42 2.C. 金属製造からの排出量

ガス			単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CO ₂	2.C.1	鉄鋼製造	鉄鋼製造における電気炉の使用	kt-CO ₂	356	357	201	242	112	160	162	174	145	161	132	143	170	175
			鉄鋼製造における石灰石・ドロマイトの使用	kt-CO ₂	6,888	6,492	6,538	6,255	5,356	5,941	5,803	5,889	6,044	5,961	5,808	5,693	5,576	5,538
CH ₄	2.C.2	鉄鋼製造	鉄鋼製造における電気炉の使用	kt-CH ₄	0.74	0.72	0.67	0.68	0.51	0.59	0.60	0.59	0.60	0.59	0.55	0.55	0.59	0.60
			フェロアロイ製造	kt-CH ₄	0.19	0.14	0.13	0.13	0.11	0.12	0.11	0.13	0.13	0.12	0.12	0.11	0.11	0.11
	合計		kt-CH ₄	0.92	0.85	0.80	0.80	0.62	0.71	0.72	0.72	0.73	0.71	0.67	0.66	0.70	0.71	
	合計		kt-CO ₂ 換算	23.05	21.34	20.04	20.10	15.43	17.70	17.96	17.99	18.16	17.68	16.69	16.50	17.43	17.79	
CO ₂ 、CH ₄ 合計				kt-CO ₂ 換算	7,267	6,871	6,760	6,517	5,484	6,118	5,983	6,081	6,208	6,139	5,956	5,852	5,764	5,730
ガス			単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
HFCs	2.C.4	マグネシウム製造	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	NO	NO	NO	1.00	1.29	1.29	1.29	0.86	1.14	1.43	1.72	
PFCs	2.C.3	アルミニウム製造	kt-CO ₂ 換算	203.66	103.55	26.41	21.76	16.22	15.28	15.24	13.27	9.59	1.91	0.00	0.00	0.00	0.00	
			t	6.43	5.00	43.00	48.42	10.00	12.88	8.00	7.00	8.00	10.00	13.80	10.80	12.00		
SF ₆	2.C.4	マグネシウム製造	kt-CO ₂ 換算	146.54	114.00	980.40	1,104.05	228.00	293.73	182.40	182.40	159.60	182.40	228.00	314.64	246.24	273.60	
			Fガス合計		kt-CO ₂ 換算	350	218	1,007	1,126	244	309	199	197	170	186	229	316	248

4.4.1. 鉄鋼製造 (2.C.1.)

総合エネルギー統計は、国内のエネルギー需給の状況を表した統計（エネルギーバランス表）である。2006年 IPCC ガイドラインの 4.2.1 で述べられているように、炭素は製鉄プロセスで主に酸化鉄を鉄に変換する還元剤としての役割だけでなく、炭素と酸素が発熱反応したときに熱を供給するエネルギー源としての役割をも果たす。我が国では、還元剤として用いられるコークス等は総合エネルギー統計において燃料消費量の内数として含まれ、関連する排出量は 1.A.2.a（エネルギー分野－鉄鋼）で包括的に捕捉している。したがって、還元剤用途からの CO₂ 排出量をエネルギー分野に割り当てても、総排出量に差は生じず、むしろ完全性が確保されるためより正確であり、1.A.2.a（エネルギー分野－鉄鋼）と 2.C.1.（IPPU 分野－鉄鋼製造）の合計は、2006年 IPCC ガイドラインに沿って計算された排出量と同様である（下表参照）。

表 4-43 鉄鋼製造における CO₂ 排出量（エネルギー用途と還元剤用途）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1.A.2.a (エネルギー分野－鉄鋼)	kt-CO ₂	150,689	143,096	152,113	154,175	135,644	153,172	148,896	151,309	157,569	155,124	148,897	142,785	139,784	136,047
2.C.1. (IPPU 分野－鉄鋼製造)	kt-CO ₂	7,244	6,850	6,740	6,497	5,468	6,101	5,965	6,063	6,189	6,122	5,939	5,836	5,746	5,712
CO ₂ 合計	kt-CO ₂	157,933	149,946	158,853	160,671	141,112	159,273	154,861	157,372	163,759	161,245	154,836	148,621	145,530	141,759

鉄鋼製造において使用される還元剤については、表 3-10 および表 3-62 を参照。2.C.1 の見かけの排出係数については、鉄鋼製造における電気炉の使用 (2.C.1.a) を参照のこと。

4.4.1.1. 鋼製造 (2.C.1.a)

1) CO₂

鋼の製造に伴い発生する CO₂ は、還元剤として使用されるコークスが酸化されることで排出される。コークスの使用量は、燃料の燃焼分野 (1.A.) における燃料使用量に含まれており、還元剤として使用されるコークスの酸化により発生する CO₂ は燃料の燃焼分野 (1.A.) において既に算定されている。

4.4.1.2. 鉄鋼製造における電気炉の使用 (2.C.1.a)

a) 排出源カテゴリーの説明

製鋼用電気炉（アーク炉）の使用時に、炭素電極から CO₂ が排出される。また、鉄鋼製造

に使用される電気炉から CH₄が排出される。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

鉄鋼製造における電気炉の使用に伴う CO₂排出量については、炭素電極の生産量と輸入量の合計から輸出量を差し引いた重量に相当する炭素量が電気炉において CO₂として大気に放散されると仮定し、排出量を算定した。

総合エネルギー統計において表現されている電気炉ガスに含まれる炭素分は、「1.A. 燃料の燃焼」分野にて計上されているため、排出量から控除した。

活動量の CO₂換算値が排出量となるため、見かけの排出係数は CO₂と C の分子量比 44/12 となる。

■ 活動量

経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」における炭素電極の生産量、及び財務省「貿易統計」炭素電極輸入量、輸出量を用いた。

表 4-44 電気炉の電極からの CO₂排出量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
#A 輸入量	t	12,341	18,463	11,363	15,075	11,218	17,321	20,437	20,027	19,960	19,226	18,209	19,773	16,653	15,720
#B 国内生産量	t	211,933	186,143	184,728	216,061	169,545	205,081	217,847	197,278	180,322	180,555	151,979	141,193	161,919	160,049
#C 輸出量	t	87,108	92,812	107,998	138,409	116,489	139,757	154,204	135,863	128,435	121,079	103,834	90,664	104,032	100,268
#D 電気炉ガス	t	39,983	14,300	33,201	26,700	33,709	39,017	39,949	33,898	32,146	34,760	30,444	31,273	28,049	27,806
国内消費 (#A + #B - #C - #D)	t	97,184	97,493	54,892	66,028	30,564	43,629	44,132	47,544	39,700	43,941	35,910	39,029	46,491	47,695
CO ₂ 排出量	kt-CO ₂ 換算	356	357	201	242	112	160	162	174	145	161	132	143	170	175

2) CH₄

■ 算定方法

燃料の燃焼分野 (1.A.固定発生源) からの CH₄排出量の算定と同様の手法を用い、我が国の実測データより設定した排出係数を、電気炉における電力消費量に乗じて排出量を算定した。

■ 排出係数

我が国で行われた実測調査のデータを基に設定した電気炉における電力消費に伴う排出係数 (12.8 kg-CH₄/TJ) を用いた (第3章の 3.2.5.節及び第4章の 4.3.5.1. 節を参照)。

■ 活動量

総合エネルギー統計における鉄鋼業の細目分類である「電気炉」に計上された電力消費量を用いた。

表 4-45 電気炉における電力消費量

電力消費量	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
電気炉	TJ	57,564	55,986	52,457	52,747	39,753	45,793	47,185	46,195	46,786	46,156	42,919	43,045	46,109	46,697

c) 不確実性と時系列の一貫性

1) CO₂

■ 不確実性

電気炉の電極からの CO₂は、全量が大気中に放出されるとして排出量の算定を行っており、排出係数は設定されていないため、活動量の不確実性を評価することで排出量の不確実性を評価した。活動量のパラメータの不確実性を合成した結果、電気炉の電極からの CO₂排出量

の不確実性は5%と評価された。

■ 時系列の一貫性

鉄鋼製造における電気炉の使用の活動量（排出量）は、1990年度値から一貫した方法を使用して、算定している。

2) CH₄

■ 不確実性

電気炉の排出係数の不確実性は163%、活動量の不確実性は5%と評価された（第3章参照のこと）。その結果、電気炉のCH₄排出の不確実性は163%と評価された。

■ 時系列の一貫性

鉄鋼製造における電気炉の使用の活動量は資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」をもとに、1990年度値から一貫した方法を使用して、算定している。また、排出係数は1990年度から一定値を使用している。従って、鉄鋼製造における電気炉の使用によるCH₄排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

2013～2017年度について、総合エネルギー統計の電気炉ガスが更新されたため、CO₂排出量の再計算が生じた。2017年度について、総合エネルギー統計の電気炉における電力消費量が修正されたため、CH₄排出量の再計算が生じた。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.4.1.3. 銑鉄製造（2.C.1.b）

1) CO₂

銑鉄の製造に伴い発生するCO₂は、還元剤として使用されるコークス等が酸化されることで排出される。コークス等の使用量は、燃料の燃焼分野（1.A.）における燃料使用量に含まれており、還元剤として使用されるコークス等の酸化により発生するCO₂は燃料の燃焼分野（1.A.）において既に算定されている。

2) CH₄

銑鉄の製造に伴うCH₄の発生は原理的に考えられず、また実測例でもCH₄の排出はないことが確認されていることから「NA」と報告している。

4.4.1.4. 鉄鋼製造における石灰石・ドロマイトの使用（2.C.1.b）

a) 排出源カテゴリーの説明

石灰石にはCaCO₃及び微量のMgCO₃が、ドロマイトにはCaCO₃及びMgCO₃が含まれており、石灰石・ドロマイトを加熱すると、CaCO₃及びMgCO₃由来のCO₂が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

鉄鋼製造において使用された石灰石及びドロマイトの量に排出係数を乗じて、排出量の算定を行った。

■ 排出係数

○ 石灰石

4.2.3.b)を参照のこと。

○ ドロマイト

4.2.3.b)を参照のこと。

■ 活動量

「不均一価格物量表」における鉄鋼・精錬関連部門に計上された石灰石及びドロマイト消費量のうち、排出用途に分類される全部門の石灰石及びドロマイト消費量を本サブカテゴリー下に計上する。なお、活動量はセメント用の石灰石の含水率を使用して乾重量ベースに換算されたものである。

本用途分類に対応する「不均一価格物量表」の部門については以下の通りである。

表 4-46 「不均一価格物量表」の該当部門

用途	「不均一価格物量表」の該当部門 (石灰石)	「不均一価格物量表」の該当部門 (ドロマイト)
鉄鋼・精錬	2611-01 鉄鋼 銑鉄 ～2611-04 鉄鋼 粗鋼 (電気炉)	2611-01 鉄鋼 銑鉄 ～2631-03 鉄鋼 鋳鉄品・鍛工品
	2631-02 鉄鋼 鋳管、-03 鉄鋼 鋳鉄品・鍛工品	
	2711-01 非鉄金属 銅、-02 非鉄金属 鉛亜鉛	2711-02 非鉄金属 鉛亜鉛
	2729-03 非鉄金属 非鉄金属素型材	

(注) 部門名に付されている番号は、「不均一価格物量表」内の分類番号。

表 4-47 石灰石及びドロマイトの消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石灰石消費量															
鉄鋼・製錬用 (dry)	kt	14,430	13,590	13,619	12,577	11,000	11,815	11,542	11,669	11,895	11,732	11,504	11,263	11,053	10,987
ドロマイト消費量															
鉄鋼・製錬用 (dry)	kt	1,144	1,089	1,160	1,530	1,096	1,576	1,539	1,603	1,720	1,695	1,584	1,565	1,512	1,493

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、石灰石、ドロマイトとも 2006 年 IPCC ガイドラインに示された不確実性のデフォルト値 3%を採用した。活動量の不確実性については、石灰石、ドロマイトとも 2006 年 IPCC ガイドラインに示された不確実性のデフォルト値 3%を採用した。その結果、石灰石の排出量の不確実性は 4%、ドロマイトの排出量の不確実性は 4%と評価された。

■ 時系列の一貫性

石灰石及びドロマイトの使用の活動量は、「不均一価格物量表」の石灰石及びドロマイト消費量を 1990 年度から一貫して使用している。また、排出係数は 1990 年度から一定値を使用している。従って、石灰石及びドロマイトの使用による CO₂排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

2011～2017 年度について、「不均一価格物量表」における石灰石およびドロマイトの消費量が更新されたため、CO₂排出量の再計算が生じた。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.4.1.5. 直接還元鉄製造 (2.C.1.c)

1) CO₂

直接還元鉄の製造に伴い、還元剤として使用される天然ガスや石炭が酸化されることでCO₂が排出される。ただし、我が国において、これまで還元鉄の生産実績はないことから、「NO」と報告している。

2) CH₄

直接還元鉄の製造に伴い、天然ガスや石炭の燃焼によりCH₄が発生する。ただし、我が国において、これまで還元鉄の生産実績はないことから、「NO」と報告している。

4.4.1.6. 焼結鉱製造 (2.C.1.d)

1) CO₂

焼結鉱の製造により発生するCO₂のうち、粉コークスの燃焼により発生する排出は燃料の燃焼分野 (1.A.) に該当する。当該排出量は、燃料の燃焼分野 (1.A.) において既に算定されているため「IE」と報告している。

焼結鉱製造時の石灰石及びドロマイトの使用に伴うCO₂の排出は、「4.4.1.4. 鉄鋼製造における石灰石・ドロマイトの使用」で計上している。

2) CH₄

焼結鉱の製造により発生するCH₄は、全て粉コークスの燃焼により発生するものであり、その排出は燃料の燃焼分野 (1.A.) に該当する。また、当該排出量は、燃料の燃焼分野 (1.A.) において既に算定されているため「IE」と報告している。

4.4.1.7. ペレット製造 (2.C.1.e)

1) CO₂

ペレットの製造により発生するCO₂は、微粉鉱石の燃焼により発生するものであり、その排出は燃料の燃焼分野 (1.A.) に該当する。当該排出量は、燃料の燃焼分野 (1.A.) において既に算定されているため「IE」と報告している。

ペレット製造時の石灰石及びドロマイトの使用に伴うCO₂の排出は、「4.4.1.4. 鉄鋼製造における石灰石・ドロマイトの使用」で計上している。

2) CH₄

ペレットの製造により発生する CH₄は、微粉鉍石の燃焼により発生するものであり、その排出は燃料の燃焼分野（1.A.）に該当する。また、当該排出量は、燃料の燃焼分野（1.A.）において既に算定されているため「IE」と報告している。

ペレット製造時の石灰石及びドロマイトの使用に伴う CO₂の排出は、「4.4.1.4. 鉄鋼製造における石灰石・ドロマイトの使用」で計上している。

4.4.2. フェロアロイ製造（2.C.2.）

a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂

我が国ではフェロアロイが製造されており、フェロアロイの製造に伴い発生する CO₂は、還元剤として使用されるコークスの酸化によって排出される。コークスの使用量は、燃料の燃焼分野（1.A.）における燃料使用量に含まれており、還元剤として使用されるコークスの酸化により発生する CO₂は燃料の燃焼分野（1.A.）において既に算定されている。なお、コークス起源の CO₂排出量の計上先に関する考え方は鉄鋼製造と同様である。フェロアロイ製造において使用される還元剤については、表 3-10 を参照。また、フェロアロイ中に残存する炭素分は、鉄鋼の生産に使用される過程で酸化され、CO₂として大気中に放出される。

スラグ形成材料として投入されている石灰石及びドロマイトに由来する CO₂については、「2.C.1.鉄鋼製造」からの製造時に使用する石灰石及びドロマイトに由来する CO₂排出量として計上済みである。

上記のことから、CO₂排出量は「IE」と報告している。

なお、鉍石に含有される炭素については、我が国のフェロアロイの主要な原料（現在は輸入マンガン鉍、ニッケル鉍、クロム鉍）は、いずれも炭酸塩鉍物として輸入されることはほとんどないと考えられ⁵、CO₂排出量への寄与が小さいと考えられることから算定していない。

2) CH₄

我が国においてフェロアロイは電気炉、小型高炉、テルミット炉等で製造されており、フェロアロイの製造に伴い発生する CH₄は、還元剤として使用されるコークスが酸化する際に発生すると考えられる。

b) 方法論

■ 算定方法

フェロアロイ製造に伴う CH₄排出量は、我が国の実測データより設定した排出係数を、電気炉における電力消費量に乗じて排出量を算定した。

■ 排出係数

フェロアロイが製造される炉種を考慮し、電気炉からの CH₄排出係数と同じ値（12.8 kg-CH₄/TJ）を用いた。

この排出係数は、CH₄の実測濃度、単位時間あたり実測乾き排ガス量、単位時間あたり発生熱量（電力）を用いて構築されたものであり、そのため電気（TJ）あたりである必要がある。また、炉のオペレーションやフェロアロイの種類が同様であれば、電力消費量はコークスの

⁵我が国で流通しているマンガン鉍の多くが高品位の酸化マンガン鉍（MnO₂）であり、低品位の炭酸マンガン鉍は少ないとみられる。

消費量やフェロアロイ生産量に比例すると考えられる。この排出係数は実測時の日本全体の平均的な炉のオペレーションやフェロアロイの種類を反映したものである。以下に、排出係数の導出過程を記す。

$$EF = C_{CH_4} \times G \times MW / V_m / H$$

EF	: 排出係数 [kg-CH ₄ /TJ]
C_{CH_4}	: 排ガス中の実測 CH ₄ 濃度 [ppm]
G	: 単位時間あたりの実測乾き排ガス量 [m ³ N/h]
MW	: CH ₄ の分子量=16 [g/mol]
V_m	: 理想気体 1 モルの標準状態での体積=22.4 [10 ⁻³ m ³ /mol]
H	: 単位時間あたりの発生熱量 [MJ/h]

上記のパラメータのいくつかは実測値を用いて設定したが、その実測作業は、代表性のあるサンプル取得に努めるなど、概ね 2006 年 IPCC ガイドラインのガイダンスに沿う形で実施された。

■ 活動量

総合エネルギー統計における鉄鋼業の細目分類である「フェロアロイ」に計上された電力消費量を用いた。

表 4-48 フェロアロイ製造における電力消費量

電力消費量	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
電気炉 (フェロアロイ)	TJ	14,456	10,699	10,181	10,072	8,458	9,510	8,938	10,038	9,956	9,102	9,228	8,507	8,362	8,894

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

電気炉の排出係数の不確実性は 163%、活動量の不確実性は 5% と評価された (第 3 章参照のこと)。その結果、電気炉の CH₄排出の不確実性は 163% と評価された。

■ 時系列の一貫性

フェロアロイ製造の活動量は資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」をもとに、1990 年度値から一貫した方法を使用して、算定している。また、排出係数は 1990 年度から一定値を使用している。従って、フェロアロイ製造による CH₄排出に関して、時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.4.3. アルミニウム製造 (2.C.3.)

4.4.3.1. 副次的排出 (2.C.3.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

1) CO₂

アルミニウムの精錬では、還元剤として使用される陽極ペーストの酸化によって CO₂が排出される。陽極ペーストの主原料であるコークスの使用量は燃料の燃焼分野 (1.A.) における燃料使用量に含まれており、還元剤として使用されるコークスの酸化により発生する CO₂は燃料の燃焼分野 (1.A.) において既に算定されていることから「IE」と報告している。

なお、アルミ精錬用の陽極ペーストには、コークス以外にバインダー材としてピッチも使用されている。このピッチは全て国内のコークス炉で副生されたコールタールを原料として製造されたものであり、輸入品は使用していない。総合エネルギー統計上はこのコールタールの消費量は産業部門におけるエネルギー利用として扱われている。よって、エネルギー分野の燃料の燃焼の固定排出源の下で計上されていることとなる。

2) PFCs

氷晶石などのふっ化物を溶かした電解浴を使用するため、アルミニウムの精錬時に PFCs が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

アルミニウムの一次精錬による生産量に 2006 年 IPCC ガイドラインに規定された算出式に基づいて算出された我が国独自の排出係数を乗じて、排出量を算定した。

なお、1990～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については関連データの外挿等をして算定を行っている。

■ 排出係数

2006 年 IPCC ガイドラインの Tier 2 手法において規定された算定式と技術毎に設定されている係数、ガス重量比等を用いて、排出係数を設定した。排出係数は下表の通り。

1990～1994 年については、1995 年の排出係数を用いている。

表 4-49 アルミニウム製造に伴う PFCs 排出係数、生産量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
PFC-14 (CF ₄) 発生係数	kg-PFC-14/t	0.709	0.709	0.482	0.398	0.390	0.388	0.387	0.386	0.386	0.386	0	0	0	0
PFC-116 (C ₂ F ₆) 発生係数	kg-PFC-116/t	0.060	0.060	0.041	0.034	0.033	0.033	0.033	0.033	0.033	0.033	0	0	0	0
アルミニウム生産量	t	34,100	17,338	6,500	6,490	4,930	4,670	4,670	4,075	2,950	588	0	0	0	0

(出典) 資源統計年報、フロン類等対策ワーキンググループ資料

■ 活動量

アルミニウムの精錬に伴う PFCs 排出の活動量については、経済産業省「資源統計年報」(1995～1997 年)、フロン類等対策ワーキンググループ (旧経済産業省産業構造審議会化学・バイオ部会地球温暖化防止小委員会) 資料 (1998 年～) に示されたアルミニウム生産量を用いた。(2014 年に生産終了)

1990～1994 年については、経済産業省「資源統計年報」に示されたアルミニウム生産量を用いた。

f) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数、及び活動量の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の44%及び2%をそれぞれ採用した。その結果、排出量の不確実性は44%と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1.c) 節を参照のこと。

g) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1.d) 節を参照のこと。

h) 再計算

特になし。

i) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.4.3.2. 鋳造時の F ガスの使用 (2.C.3.-)

我が国における、アルミニウム鋳造時の SF₆は使用実績がないことを確認したため、「NO」と報告している。

4.4.4. マグネシウム製造 (2.C.4.)

a) 排出源カテゴリーの説明

マグネシウム溶湯用酸化防止カバーガスとして使用されるため、マグネシウムの鋳造に伴って HFCs、SF₆が排出される。

b) 方法論

マグネシウム鋳造を行う各事業者の HFCs、SF₆使用量を全て排出量として計上している。マグネシウムの鋳造に伴う HFCs、SF₆排出については、「フロン類等対策ワーキンググループ資料」に示された値を報告した。関連指標を下表に示す。

表 4-50 マグネシウムの鋳造に伴う HFCs、SF₆排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC-134a使用量	t	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.9	0.9	0.9	0.6	0.8	1.0	1.2
SF ₆ 使用量	t	6.4	5.0	43.0	48.4	10.0	12.9	8.0	8.0	7.0	8.0	10.0	13.8	10.8	12.0

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成25年度第1回 HFC等4ガス分科会資料

なお、1990～1994年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年についてはマグネシウム溶解量と比例すると考えられるその他ダイカスト生産量(アルミニウム、亜鉛以外)、1995年の SF₆使用量のデータを用いて外挿をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出量の不確実性は2006年 IPCC ガイドラインの Tier 2 手法の上限値の5%を採用した。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.4.5. 鉛製造 (2.C.5.)

鉛製造で発生する CO₂は、還元剤として利用されるコークスが酸化されることで排出される。鉛の製造で使用される還元剤としてのコークス消費量は、石油等消費動態統計における非鉄金属地金工業の燃料区分である「直接加熱用」に含まれており、エネルギー部門における製造業および建設業(1.A.2)で既に排出量として計上されているため、「IE」として報告する。なお、コークス起源の CO₂排出量の計上先に関する考え方は鉄鋼製造と同様である。

4.4.6. 亜鉛製造 (2.C.6.)

鉛と同様に、亜鉛の製造に伴い発生する CO₂は、還元剤として利用されるコークスが酸化されることで排出される。亜鉛の製造で使用される還元剤としてのコークス消費量は、石油等消費動態統計における非鉄金属地金工業の燃料区分である「直接加熱用」に含まれており、エネルギー部門における製造業および建設業(1.A.2)で既に排出量として計上されているため、「IE」として報告する。なお、コークス起源の CO₂排出量の計上先に関する考え方は鉄鋼製造と同様である。

なお、鉱石中に炭素を含む菱亜鉛鉱(ZnCO₃)を原料として用いた場合、還元過程で鉱石由来の CO₂が発生する可能性があるが、現在我が国で菱亜鉛鉱を使用している例は存在しない。

4.5. 燃料からの非エネルギー製品及び溶剤の使用 (2.D.)

本カテゴリーでは、燃料からの非エネルギー製品及び溶剤の使用により大気中に排出される CO₂を扱う。当該カテゴリーでは、「2.D.1.潤滑油の使用」、「2.D.2.パラフィンろうの使用」、「2.D.3.その他尿素の使用」から構成される。

2018年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は約 2,644 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量(LULUCF分野を除く)の0.2%を占めている。1990年度比の排出量と比較すると29.6%の増加となっている。

表 4-51 2.D. 燃料からの非エネルギー製品及び溶剤の使用からの排出量

ガス		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CO ₂	2.D.1 潤滑油の使用	kt-CO ₂	343	353	350	324	302	303	284	259	269	263	243	230	233	253	
	2.D.2 パラフィンろうの使用	kt-CO ₂	50	37	36	36	30	35	30	27	28	26	25	24	24	26	
	2.D.3 その他	尿素触媒	kt-CO ₂	0.00	0.00	0.00	0.12	0.64	0.98	1.57	2.46	3.51	4.60	5.54	5.66	6.74	7.91
		NMVOOCの焼却	kt-CO ₂	1,648	1,986	2,273	2,504	2,532	2,410	2,385	2,261	2,385	2,234	2,213	2,323	2,418	2,358
	合計		kt-CO ₂	2,040	2,377	2,659	2,865	2,864	2,748	2,701	2,551	2,685	2,527	2,486	2,583	2,682	2,644

4.5.1. 潤滑油の使用 (2.D.1.)

a) 排出源カテゴリーの説明

潤滑油・グリースの使用時の酸化に伴い、CO₂が排出される。なお、全損タイプのエンジン油はエネルギー分野で報告し (1.A.3 参照)、全損タイプ以外のエンジン油は本分野で報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインに示された Tier 2 手法に基づき、潤滑油・グリースの油種別消費量に、油種別の炭素含有量及び ODU 係数を乗じて排出量を算定した。(下式)

$$E = \sum_i \left(LC_i \times CC_i \times ODU_i \times \frac{44}{12} \right)$$

E	: 潤滑油・グリースの使用中の酸化に伴う排出量 [kt-CO ₂]
LC_i	: 潤滑油・グリース消費量 [TJ]
CC_i	: 潤滑油・グリースの炭素含有量 [kt-C/TJ]
ODU_i	: ODU (Oxidized During Use) 係数
i	: 潤滑油・グリースの油種

■ 排出係数

炭素含有量については、資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」に示された潤滑油及び他重質石油製品の炭素排出係数を用いる。ODU 係数については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (潤滑油: 0.2、グリース: 0.05) を用いる。

■ 活動量

潤滑油は、各エンジン油の消費量から全損タイプの消費量 (3.2.8 節「活動量」参照) を減じて全損タイプ以外の消費量を算出する。

グリースの消費量は、「資源・エネルギー統計年報」及び「エネルギー生産・需給統計年報」に示されたグリースの国内向販売量に、総合エネルギー統計に示された他重質石油製品の発熱量を乗じた値を用いる。但し、1992~1999年度については、同出典にグリースの国内向販売量のデータが掲載されていないため、同出典に示されたグリースの「年初在庫・生産量・輸入量の和」から「輸出品・年末在庫の和」を減じた量を用いてグリースの国内向販売量を推計する。

表 4-52 全損タイプ以外のエンジン油、グリース消費量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
全損タイプ以外のエンジン油消費量	TJ	23,449	24,385	24,144	22,298	20,804	20,768	19,476	17,756	17,788	17,384	15,998	15,168	15,389	16,786
グリース消費量	TJ	3,152	2,503	2,435	2,658	2,299	2,622	2,573	2,397	2,478	2,486	2,464	2,337	2,164	2,146

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、潤滑油、グリースともに2006年IPCCガイドラインのデフォルト値の50%を採用した。活動量の不確実性については、潤滑油、グリースともに2006年IPCCガイドラインのデフォルト値の5%を採用した。その結果、潤滑油、グリースともに排出量の不確実性評価は50%として評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は「エネルギー生産・需給統計年報」等をもとに、1990年度値から可能な限り一貫した方法を使用して、算定している。また、排出係数についても一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造(2.A.1.)に記載した内容と同一である。4.2.1.d)節を参照のこと。

e) 再計算

2017年度について、潤滑油の消費量が改定されたため再計算が生じた。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.5.2. パラフィンろうの使用(2.D.2.)

a) 排出源カテゴリーの説明

パラフィンろうの使用時の酸化に伴い、CO₂が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年IPCCガイドラインのTier 1手法に基づき算定する。(下式)

$$E_{CO_2} = PW \times CC_{Wax} \times ODU_{Wax} \times \frac{44}{12}$$

E_{CO_2} : パラフィンろうの使用に伴う排出量 [t-CO₂]

PW : パラフィンろう消費量 [TJ]

CC_{Wax} : パラフィンろうの炭素含有量 [kg-C/GJ]

ODU_{Wax} : ODU (Oxidized During Use) 係数

■ 排出係数

炭素含有量は、資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」における他重質石油製品の炭素排出係数を用いる。ODU係数は、2006年IPCCガイドラインのデフォルト値(0.2)を使用する。

■ 活動量

経済産業省「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」におけるパラフィンの国内向販売量全量に、資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」における他重質石油製品の発熱量を乗じて算定する。

c) 不確実性と時系列の一貫性

排出係数の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の100%を採用した。活動量の不確実性については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の5%を採用した。その結果、排出量の不確実性評価は100%として評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は経済産業省「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」をもとに、1990年度値から一貫した方法を使用して、算定している。また、排出係数についても一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

パラフィンろうの発熱量が2017年度について改訂されたため、再計算が生じた。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

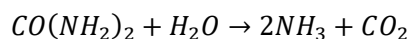
特になし。

4.5.3. その他 (2.D.3.)

4.5.3.1. 触媒として使用される尿素 (2.D.3.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

自動車の尿素 SCR システムは、アンモニアにより排ガス中の NO_x を還元し、N₂ と H₂O に分解することで NO_x 排出量を削減する技術である。尿素水を高温排気ガス中に噴射することで加水分解させ、アンモニアガスを得るが、その際に下式の反応式に従い CO₂ が排出される。



b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの手法に基づき算定する。(下式)

$$E_{CO_2} = AD \times \frac{12}{60} \times P \times \frac{44}{12}$$

AD : 尿素 SCR システムにおける尿素系添加剤消費量 [kt]

P : 尿素系添加剤中の尿素割合 [%] (デフォルト値 : 32.5%)

■ 排出係数

尿素系添加剤中の尿素割合 P については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 32.5% を使用する。

■ 活動量

自動車工業会提供による尿素 SCR システム搭載車の累積販売台数に、1台当たり軽油消費量を乗じ、尿素系添加剤/軽油消費割合を乗じて尿素系添加剤消費量を算出し、さらに国内の

尿素消費量における輸入分の割合を乗じて、輸入分のみの尿素系添加剤消費量とする⁶。

$$AD = N \times L \times R \times D \times I$$

- AD : 尿素 SCR システムにおける尿素系添加剤消費量 [kt]
- N : 尿素 SCR 搭載自動車の累積販売台数 [千台]
- L : 1 台当たり軽油消費量 [kL/台]
- R : 尿素系添加剤消費割合/軽油 [%]
- D : 軽油密度 [t/kL]
- I : 輸入率 [%]

表 4-53 尿素系添加剤消費量の算定における各パラメータの出典・設定方法

項目	出典・設定方法
尿素 SCR システム搭載車の累積販売台数 [千台]	日本自動車工業会提供データ
1 台当たり軽油消費量 [kL/台]	国土交通省「自動車輸送統計年報」・「自動車燃料消費量統計年報」に基づく総軽油消費量を総登録台数で割って算定。
尿素系添加剤消費割合/軽油 [%]	2006 年 IPCC ガイドラインに記載の 1~3%の中央値として 2%。
軽油密度 [t/kL]	経済産業研究所「総合エネルギー統計の解説」を基に 0.8831 t/kL と設定
輸入率 [%]	農林統計協会「ポケット肥料要覧」における尿素的の各年の輸入量/(国内向け出荷数量+輸入量) 比率

c) 不確実性と時系列の一貫性

排出係数の不確実性については、2006 年 IPCC ガイドラインの自動車の燃料起源のデフォルト値の 5%を採用した。活動量の不確実性については、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の 5%を採用した。その結果、排出量の不確実性評価は 7%として評価された。

■ 時系列の一貫性

活動量は日本自動車工業会提供データ等をもとに、1990 年度値から一貫した方法を使用して、算定している。また、排出係数についても一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

活動量の計算に一部用いている、ポケット肥料要覧における尿素的の国内向け出荷数量が更新されたことに伴い、2015~2017 年度について再計算が生じた。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.5.3.2. NMVOC の焼却 (2.D.3.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

溶剤使用施設等における NMVOC の焼却処理に伴い CO₂が排出される。

⁶ 国内で生産される尿素については、アンモニアの製造工程において副生した CO₂を回収して原料としており、当該 CO₂はインベントリでは、すでに「2.B.1.アンモニア製造」の排出量に含まれている。

b) 方法論

■ 算定方法

塗料、洗浄剤、印刷、化学製品、その他の5種類の用途別に、溶剤の国内供給量、大気への排出量、マテリアルリサイクル量をそれぞれ推計し、溶剤の国内供給量から大気への排出量とマテリアルリサイクル量を差し引くことで焼却処理量を導いて、NMVOCの焼却処理に伴うCO₂排出量を算定した。なお、一部の使用済み溶剤の焼却からのCO₂排出量については、エネルギー分野（原燃料利用）及び廃棄物分野（廃棄物の焼却（エネルギー回収を伴わない））で既に計上しているため、本カテゴリーの排出から控除する。

$$E_{CO_2} = \sum_i \left(I_i \times C_i \times \frac{44}{12} \right)$$

E_{CO_2} : NMVOCの焼却処理に伴うCO₂排出量 [t]
 I_i : 用途iにおけるNMVOC焼却処理量 [t]
 C_i : 用途iにおけるNMVOCの平均炭素含有率

$$I_i = S_i - E_i - R_i$$

I_i : 用途iにおけるNMVOC焼却処理量 [t]
 S_i : 用途iにおける溶剤の国内供給量 [t]
 E_i : 用途iにおける大気中へのNMVOC排出量 [t]
 R_i : 用途iにおけるマテリアルリサイクル量 [t]

■ 排出係数

「NMVOC中の平均炭素含有率」については、各排出源から排出されるNMVOC各物質の炭素含有率を各物質の構成比率を用いて加重平均して算出した値を使用した。（間接CO₂への換算に用いた値と共通の値を使用）各物質の炭素含有率は分子式より設定し、各排出源に含まれる物質及びその構成比は、VOC排出インベントリ等、各種資料より推定した。2015年度以降は、本カテゴリーの平均炭素含有率（0.64）を用いる。

■ 活動量

各パラメータの設定方法は以下の通りである。

○ 用途iにおける溶剤の国内供給量

塗料については、日本塗料工業会「塗料からのVOC排出実態推計のまとめ」における塗料中溶剤合計及び日本塗料工業会「塗料製造業実態調査」における塗料関係のシンナー出荷数量のデータ等を用いた。洗浄剤、印刷、化学製品、その他については、VOC排出インベントリ報告書（平成19年3月、環境省）の用途別全国溶剤販売量のデータ及び重化学工業通信社「日本の石油化学工業」に記載のアセトンの「その他」用途の需要量のデータ等を用いた。（いずれもデータのない年については内挿、製品販売数量等を使用した外挿にて推計）

○ 用途iにおける大気中へのNMVOC排出量

大気へのNMVOC排出量 E_i については、排出源別NMVOC排出量を使用した。（算定方法の詳細は別添3参照）

○ 用途iにおけるマテリアルリサイクル量

用途iの2011年度における溶剤の国内供給量に、用途iの2011年度における溶剤供給量に対する用途iの2011年度における外部リサイクル量（日本溶剤リサイクル工業会「有機溶剤使用量・排出処理に関する調査（2012年5月）」）の比を乗じることによって、用途iの2011年度の溶剤のマテリアルリサイクル量を推計し、これに溶剤回収量の2011年度からの伸び率（日本溶剤リサイクル工業会「溶剤リサイクル数量調査」に基づく）を乗じて推計した。

表 4-54 NMVOC 焼却処理量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
塗料	kt	266	289	331	339	298	296	262	264	263	260	285	303	329	309
洗浄剤	kt	85	100	90	108	67	65	67	44	45	48	46	53	51	49
印刷	kt	172	195	237	234	221	231	235	235	232	220	219	210	210	204
化学製品	kt	51	79	131	150	172	182	183	179	190	183	193	201	205	209
その他	kt	155	208	209	302	343	336	336	331	366	346	367	381	394	397

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、特別管理産業廃棄物（廃油）の不確実性 2%を採用した。活動量の不確実性については、特別管理産業廃棄物（廃油）の不確実性 60%を採用した。その結果、排出量の不確実性評価は 60%として評価された。

■ 時系列の一貫性

1990 年度値から可能な限り一貫した方法、活動量・排出係数データを使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

塗料向け溶剤の国内供給量の設定方法が見直されたため、すべての年度について再計算が生じた。溶剤の供給量の推計に用いている鉱工業生産指数の更新、その他用途における大気中への NMVOC 排出量の更新（排出源の追加）も、すべての年度について再計算に寄与した。2015～2017 年度については溶剤の国内供給量の推計に用いている化学工業統計が更新されたことも再計算に寄与した。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.5.3.3. 道路舗装（2.D.3.-）

我が国ではアスファルト道路舗装は行われており、その工程で CO₂はほとんど排出されないと考えられるが、その排出を完全には否定できない。また排出量の実測値も得られておらず、排出係数のデフォルト値もないため排出量は算定していない。

4.5.3.4. アスファルト屋根材（2.D.3.-）

我が国ではアスファルト屋根葺き製造は行われており、製造工程や活動量等についての十分な情報が得られていないが、アスファルト屋根葺き製造に伴う CO₂の排出は否定出来ない。また排出量の実測値も得られておらず、排出係数のデフォルト値もないため排出量は算定していない。

4.6. 電子産業（2.E.）

電子産業カテゴリーでは、各製品の製造時に大気中に排出される HFCs、PFCs、SF₆、NF₃を扱う。当該カテゴリーでは、「2.E.1.半導体製造」、「2.E.2 液晶製造」、「2.E.3.太陽光発電」、

「2.E.4.熱伝導流体」から構成される。

2018年度における当該カテゴリからの温室効果ガス排出量は約 2,542 kt-CO₂ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF 分野を除く）の 0.2%を占めている。1990年比の排出量と比較すると 33.5%の増加となっている。

表 4-55 2.E. 電子産業からの排出量

ガス		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
HFCs	2.E.1	半導体製造	kt-CO ₂ 換算	1	271	283	224	150	165	142	122	109	113	113	117	123	113
	2.E.2	液晶製造	kt-CO ₂ 換算	0.001	0.3	1.8	3.0	2.3	3.0	3.3	2.4	2.4	2.3	1.9	1.9	1.9	0.4
	合計		kt-CO ₂ 換算	1	271	285	227	152	168	145	124	112	115	115	119	125	113
PFCs	2.E.1	半導体製造	kt-CO ₂ 換算	1,423	3,933	6,771	4,594	2,109	2,214	1,863	1,624	1,556	1,617	1,582	1,721	1,847	1,776
	2.E.2	液晶製造	kt-CO ₂ 換算	31	87	214	152	39	46	59	68	76	90	86	71	84	79
	合計		kt-CO ₂ 換算	1,455	4,020	6,986	4,746	2,148	2,261	1,922	1,692	1,631	1,707	1,669	1,792	1,931	1,855
SF ₆	2.E.1	半導体製造	t	13.6	17.5	27.6	23.7	9.3	9.9	8.6	8.1	8.0	7.7	8.1	8.4	8.8	8.0
	2.E.2	液晶製造	t	4.8	6.2	38.5	31.2	8.7	11.8	8.7	7.5	7.4	8.4	8.4	6.9	7.1	7.3
	合計		t	18.4	23.8	66.1	54.9	18.0	21.7	17.3	15.6	15.4	16.0	16.5	15.3	15.9	15.3
	合計		kt-CO ₂ 換算	419	542	1506	1252	410	494	394	356	351	366	375	349	363	349
NF ₃	2.E.1	半導体製造	t	1.6	9.8	5.8	9.4	10.6	11.1	10.2	10.3	6.4	7.7	8.4	10.6	11.3	11.8
	2.E.2	液晶製造	t	0.1	0.9	3.8	4.1	1.3	1.5	1.4	1.2	1.2	1.5	1.3	1.1	1.3	1.2
	合計		t	1.7	10.7	9.6	13.5	11.9	12.6	11.6	11.5	7.6	9.2	9.7	11.8	12.5	13.1
	合計		kt-CO ₂ 換算	30	184	165	232	205	217	199	198	131	158	167	203	216	225
全ガス合計		kt-CO ₂ 換算	1,904	5,016	8,941	6,457	2,916	3,140	2,661	2,370	2,225	2,346	2,326	2,463	2,634	2,542	

4.6.1. 半導体製造 (2.E.1.)

a) 排出源カテゴリの説明

半導体の製造時に HFCs、PFCs、SF₆、NF₃が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

半導体の算定方法は 2006 年 IPCC ガイドラインの Tier 2a 手法に則っている。使用している各ガスの購入量、プロセス供給率、反応消費率、除害効率、副生成物の発生率、副生成物の除害効率を用いて算定した。なお、反応消費率、副生成物の発生率はデフォルト値を用いている。

プロセス供給率の残存分 10%の取り扱いについては、容器に 90%を再充填して出荷される場合は当区分で排出量が計上される。また、残存分の 10%を破壊処理して容器を洗浄する場合や、大気中に放出される場合は、ガスメーカーにおける排出量として「フッ化物製造—製造時の漏出 (2.B.9.)」で計上されている。

各ガスの購入量は、電子情報技術産業協会によるデータを使用した。

半導体製造に伴う F ガスの排出量は、ガスごとに、以下の考え方を用いて計算している。

$$E = FC \times P \times (1 - U) \times (1 - a \times d)$$

E : HFC-23、PFCs (PFC-14、PFC-116、PFC-218、PFC-c318)、SF₆、NF₃排出量

FC : ガス購入量

P : プロセス供給率

U : 反応消費率

a : 除害装置設置率

d : 除害効率

$$BPE = FC \times B \times P \times (1 - a \times d)$$

BPE : 副生 PFC-14 等排出量

FC : ガス購入量

B : 副生成物発生率

P : プロセス供給率
 a : 除害装置設置率
 d : 除害効率

関連指標を下表に示す。なお、除害装置設置率は秘匿である。

表 4-56 半導体製造時の F ガス排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC-23の購入量	t	0.1	47.8	49.4	42.1	53.8	67.1	68.4	66.7	66.7	77.2	86.2	83.2	84.3	85.2
PFC-14の購入量	t	113.3	313.0	299.9	231.5	208.9	265.3	248.3	222.4	218.1	253.6	285.5	317.1	365.1	376.3
PFC-116の購入量	t	75.8	209.5	561.2	393.2	171.5	194.3	159.9	139.4	117.8	105.5	96.4	102.3	126.1	92.6
PFC-218の購入量	t	0.01	0.03	9.91	181.80	129.47	166.96	137.00	115.48	106.08	117.19	110.90	107.55	130.08	126.95
PFC-c318の購入量	t	0.2	0.6	38.6	24.8	33.3	35.8	36.8	39.7	42.2	52.6	63.3	70.4	106.6	166.8
SF ₆ の購入量	t	70.1	90.8	131.9	96.8	60.2	76.7	65.2	63.7	57.6	64.9	68.0	73.4	86.5	87.2
NF ₃ の購入量	t	8.8	54.4	106.3	406.7	724.8	860.7	834.5	880.5	905.4	1,055.3	1,232.1	1,310.1	1,597.4	1,876.3
プロセス供給率	%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%
PFCs等の反応消費率	%	10 - 98 %													
PFCs、SF ₆ の除害効率	%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%
NF ₃ の除害効率	%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%
副生CF ₄ 等発生率	%	2 - 20 %													
副生CF ₄ 等除害効率	%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%
HFCs排出量	kt-CO ₂ 換算	0.73	270.62	282.71	223.98	149.81	164.93	142.19	121.63	109.24	112.89	113.08	117.33	123.13	112.74
PFCs排出量	kt-CO ₂ 換算	1,423.43	3,933.17	6,771.47	4,594.11	2,109.08	2,214.33	1,863.33	1,624.17	1,555.73	1,616.86	1,582.22	1,721.27	1,846.95	1,776.32
SF ₆ 排出量	kt-CO ₂ 換算	309.09	399.99	628.71	540.21	210.92	224.79	196.50	183.55	181.46	174.76	183.97	192.15	199.95	182.11
NF ₃ 排出量	kt-CO ₂ 換算	27.29	168.28	99.55	161.04	182.13	190.69	174.82	177.03	109.78	132.01	144.65	183.10	193.74	203.40

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、経済産業省提供データ、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

表 4-57 半導体製造時のガスの反応消費率

ガス	反応消費率
HFC-23	60%
PFC-14	10%
PFC-116	40%
PFC-218	60%
PFC-c318	90%
SF ₆	80%
NF ₃	80%
NF ₃ remote	98%

(出典) 2006 年 IPCC ガイドライン (Table 6.3 Tier 2a) のデフォルト値。

表 4-58 半導体製造時の CF₄、C₂F₆副生率

ガス	CF ₄ 副生率	C ₂ F ₆ 副生率
HFC-23	7%	NA
PFC-116	20%	NA
PFC-218	10%	NA
PFC-c318	10%	10%
NF ₃	9%	NA
NF ₃ remote	2%	NA

(出典) 2006 年 IPCC ガイドライン (Table 6.3 Tier 2a) のデフォルト値。

なお、1990~1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については HFCs、PFCs、SF₆、NF₃排出量と比例すると考えられる入手可能な HFCs、PFCs、SF₆ 国内出荷量、及び NF₃生産量のデータを用いて外挿をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性においては、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用い、HFCs、

PFCs、SF₆、NF₃についてそれぞれ 100%、80%、300%、70%を使用した。活動量の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインの不確実性の上限値 10%を HFCs、PFCs、SF₆、NF₃いずれにも採用した。その結果、排出量の不確実性は HFCs、PFCs、SF₆、NF₃についてそれぞれ 100%、81%、300%、71%と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1.c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1.d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.6.2. 液晶製造 (2.E.2.)

a) 排出源カテゴリーの説明

液晶の製造時に HFCs、PFCs、SF₆、NF₃が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

液晶も、半導体と同様の算定を行った。反応消費率、副生成物の発生率は基本的にデフォルト値を用いている。世界液晶産業協力会議で PFCs 削減自主行動計画を策定して削減の取組みを行っており、IPCC 基準に準拠することが前提とされているためである。

関連指標を下表に示す。なお、除害装置設置率は秘匿である。

表 4-59 液晶製造時の F ガス排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC-23の購入量	t	0.0003	0.1	0.7	1.6	1.1	1.1	1.2	1.0	1.3	1.5	1.1	1.1	1.1	1.3
PFC-14の購入量	t	7.5	20.7	47.3	77.8	51.9	93.7	124.3	121.1	154.5	191.7	177.1	151.8	185.0	176.4
PFC-116の購入量	t	0.1	0.4	2.7	9.9	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
PFC-c318の購入量	t	0.0	0.0	0.0	0.8	1.7	1.6	1.9	1.7	1.4	1.8	1.1	1.1	1.1	0.6
SF ₆ の購入量	t	8.9	11.5	85.3	101.4	127.1	176.9	129.0	104.1	107.4	126.2	126.6	109.6	116.4	117.0
NF ₃ の購入量	t	1.3	8.1	106.9	232.2	532.2	764.1	718.0	668.0	783.8	918.9	808.0	691.9	813.2	767.0
プロセス供給率	%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%
PFCs等の反応消費率	%	40 - 97 %													
PFCs、SF ₆ の除害効率	%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%
NF ₃ の除害効率	%	95%	95%	95%	95%	95%	95%	95%	95%	95%	95%	95%	95%	95%	95%
副生CF ₄ 等発生率	%	0.9 - 7 %													
副生CF ₄ 等除害効率	%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%	90%
HFCs排出量	kt-CO ₂ 換算	0.0007	0.27	1.84	2.98	2.30	3.02	3.28	2.39	2.37	2.26	1.93	1.93	1.91	0.41
PFCs排出量	kt-CO ₂ 換算	31.35	86.62	214.10	152.03	39.32	46.50	59.12	68.22	75.63	89.74	86.46	71.21	84.16	78.70
SF ₆ 排出量	kt-CO ₂ 換算	109.62	141.86	877.24	711.76	199.39	268.88	197.92	172.05	169.84	191.07	191.25	156.60	162.66	166.91
NF ₃ 排出量	kt-CO ₂ 換算	2.53	15.61	65.82	70.59	23.06	26.37	24.24	20.74	21.38	26.19	22.18	19.61	21.94	21.13

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

表 4-60 液晶製造時のガスの反応消費率

ガス	反応消費率
HFC-23	80%
PFC-14	40%
PFC-116	0%
PFC-c318	90%
SF ₆	40%
NF ₃	70%
NF ₃ remote	97%

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン (Table 6.4 Tier 2a) のデフォルト値。但し、PFC-116 はデフォルト値がないため、排出量が過小評価にならないよう 0%とした。

表 4-61 液晶製造時の CHF₃、CF₄、C₂F₆副生率

ガス	CHF ₃ 副生率	CF ₄ 副生率	C ₂ F ₆ 副生率
HFC-23	NA	7%	5%
PFC-c318	2%	0.9%	NA

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン (Table 6.4 Tier 2a) のデフォルト値。

なお、1990～1994年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については HFCs、PFCs、SF₆、NF₃排出量と比例すると考えられる入手可能な HFCs、PFCs、SF₆ 国内出荷量、NF₃生産量のデータを用いて外挿をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

半導体 (2.E.1.) に記載した内容と同一である。4.6.1. c) 節を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造一副生ガスの排出-HCFC-22の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造一副生ガスの排出-HCFC-22の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.6.3. 太陽光発電 (2.E.3.)

国内における光電池製造事業者のうち、製造プロセスにおいて PFC を使用する事業者は一家のみで秘匿であるため、排出量は半導体製造からの PFC 排出量に含め、「IE」と報告している。

4.6.4. 熱伝導流体 (2.E.4.)

電子製品製造の過程で、温度管理のためにフッ素化合物が利用される。装置を冷却する際の蒸発ロス等によってこのフッ素化合物が排出される。液体 PFC 等をまとめて把握している「4.7.5. 溶剤 (2.F.5.)」の合計に含まれているため、「IE」と報告している。

4.7. オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用 (2.F.)

本カテゴリーでは、オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用により大気中に排出される HFCs、PFCs を扱う。当該カテゴリーでは、「2.F.1. 冷蔵庫及び空調機器」、「2.F.2 発泡剤」、「2.F.3. 消火剤」、「2.F.4. エアゾール」、「2.F.5. 溶剤」から構成される。

2018 年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は約 48,278 kt-CO₂ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF 分野を除く) の 3.9%を占めている。1990 年の排出量と比較すると 10.6 倍になっている。

表 4-62 2.F.オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用からの排出量

ガス		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFCs	2.F.1 冷蔵庫及び空調機器	kt-CO ₂ 換算	NO	925	2,977	8,876	17,998	20,482	23,139	26,353	29,007	32,535	35,875	38,905	41,104	43,179
	2.F.2 発泡剤	kt-CO ₂ 換算	1	497	484	937	1,608	1,749	1,923	2,081	2,229	2,373	2,484	2,651	2,801	2,922
	2.F.3 消火剤	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	5	7	8	8	8	9	9	9	9	10	10	10
	2.F.4 エアゾール	kt-CO ₂ 換算	NO	1,502	3,117	1,695	845	666	634	561	489	503	540	587	600	544
	2.F.5 溶剤	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	6	39	60	86	94	109	122	126	130	116	117
	合計	kt-CO ₂ 換算	1	2,923	6,583	11,522	20,498	22,966	25,791	29,097	31,844	35,543	39,034	42,282	44,631	46,772
PFCs	2.F.5 溶剤	kt-CO ₂ 換算	4,550	12,572	3,200	2,815	1,420	1,721	1,605	1,583	1,518	1,537	1,517	1,465	1,484	1,505
全ガス合計		kt-CO ₂ 換算	4,551	15,496	9,783	14,336	21,918	24,686	27,396	30,680	33,361	37,079	40,551	43,747	46,115	48,278

4.7.1. 冷蔵庫及び空調機器 (2.F.1.)

4.7.1.1. 家庭用冷蔵庫の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

1) HFCs

家庭用冷蔵庫の生産時、使用時 (故障時を含む)、及び廃棄時に HFCs が漏洩する。

2) PFCs

国内における製品製造時は使用実績がないため、「NO」と報告している。輸入製品についても PFCs が使用されていることは考えにくく、冷媒を補充することもないと考えられるため、使用時及び廃棄時についても「NO」と報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

①生産時漏洩量、②使用時 (故障時を含む) 漏洩量、③廃棄時の機器に含まれる冷媒量から法に基づく回収量を減じたものをそれぞれ推定し、合計した。

使用時、廃棄時の排出量は機器の製造年別に計算を行い、合計値を排出量とした。排出係数は国独自のものである。

$$E_{total} = M_{manufacturing} \times k + \sum (N_{operated} \times m_{operation} \times X_{operation}) + \sum (N_{disposed} \times m_{disposal}) - R$$

E_{total} : 家庭用冷蔵庫からの HFCs の排出量

$M_{manufacturing}$: 製造時 HFCs 充填総量

k : 生産時漏洩率

- $N_{operated}$: HFCs 使用機器国内稼働台数
- $m_{operation}$: 稼働機器 1 台当たり充填量
- $x_{operation}$: 使用時漏洩率
- $N_{disposed}$: HFCs 使用機器廃棄台数
- $m_{disposal}$: 廃棄機器 1 台当たり充填量
- R : HFCs 回収量

関連指標を下表に示す。

表 4-63 家庭用冷蔵庫からの HFCs 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
製造時HFC充填総量	t	NO	520	590	0.3	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
生産時漏洩率	%	1%	1%	1%	0%	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
HFC使用機器国内稼働台数	千台	NO	7,829	33,213	41,796	31,471	28,085	24,509	20,984	17,637	14,520	11,691	9,182	7,045	5,280
1台当たり充填量	g	150	150	125	125	125	125	125	125	125	125	125	125	125	125
使用時（故障時含む）漏洩率	%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%
HFC使用機器廃棄台数	千台	NO	NO	177	1,839	3,445	3,588	3,600	3,456	3,204	2,850	2,451	2,027	1,620	1,249
法律に基づくHFC回収量	t/年	—	—	—	52	111	111	160	169	189	166	144	138	132	136
機器製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	7.436	8.437	0.001	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
機器稼働時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	5.038	17.811	22.413	16.876	15.061	13.143	11.253	9.458	7.786	6.269	4.924	3.778	2.831
機器廃棄時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	31.060	246.196	436.464	460.170	391.114	352.286	279.422	250.686	213.029	148.607	87.154	17.769
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	12.474	57.308	268.609	453.340	475.231	404.257	363.539	288.880	258.472	219.298	153.531	90.932	20.600

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

(注) 廃棄時の排出量は機器の製造年別に計算を行っており、廃棄機器あたりの冷媒充填量は単純に示せない。しかし、冷蔵庫は密閉されているという前提のもと、推計モデルの「廃棄機器あたりの冷媒残存量」は、「一台あたり冷媒充填量」と同じと考えられている。

なお、1990～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については家庭用冷蔵庫出荷台数、出荷台数中の HFC 割合、および 1995 年の出荷台数・1995 年の出荷台数中の HFC 割合・1995 年の製造時 HFC 充填総量から導いた出荷台数当たりの HFC 充填量、1995 年の生産時漏洩率、1995 年の一台あたり充填量、1995 年の使用時漏洩率、1995 年の HFC 使用機器廃棄台数のデータを用いて外挿等をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性においては、製造・使用時は 2006 年 IPCC ガイドラインの電気設備の上限値 30%を採用した。活動量の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインの金属工業の Tier 2 手法の 10%を製造・使用・廃棄時のいずれにも採用した。その結果、排出量の不確実性は、製造・使用時は 32%、廃棄時は 10%と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造一副生ガスの排出-HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。

4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造一副生ガスの排出-HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。

4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.1.2. 業務用冷凍空調機器の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)

4.7.1.2.a. 業務用冷凍空調機器

a) 排出源カテゴリーの説明

1) HFCs

業務用冷凍空調機器の生産時、現場設置時、冷媒補充時、故障時、廃棄時において HFCs が排出される。

2) PFCs

国内における製品製造時は、過去から現在に至るまで PFCs の使用実績がないため、「NO」と報告している。また、輸入製品についても直近 3 ヶ年の国内に輸入される製品のフロン類の調査結果において PFCs の使用は確認されておらず、輸入製品への PFCs の補充はないと考えられることから、使用時及び廃棄時についても「NO」と報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドラインの考え方にに基づき、機種や機器の製造年等を考慮しつつ主にモデルを用いて算定している。以下に分類された機種及びそれらに使用されている冷媒毎に、各年の生産台数及び冷媒充填量等を使用して、①生産時漏洩量、②現場設置時の漏洩量、③機器稼働時漏洩量、④廃棄時排出量をそれぞれ推定し、合計した。

遠心式冷凍機、スクリーン冷凍機、冷凍冷蔵ユニット、輸送用冷凍冷蔵ユニット、別置型ショーケース、内蔵型ショーケース、製氷器、冷水器、業務用冷凍冷蔵庫、パッケージエアコン、ガスヒートポンプ、チリングユニット

排出係数は、機器の種類ごとに一定期間中の冷媒充てん量と事故故障の発生率について大規模なサンプリング調査を行い決定した⁷⁾。(サンプル数：26 万台、2007～2009 年に実施)

業務用冷凍空調機器からの HFCs の排出量は、機種及び冷媒ごとに、以下の考え方をを用いて計算している。

○ 生産時漏洩量

$$E_{\text{manufacturing}} = \Sigma (N_{\text{produced}} \times m_{\text{manufacturing}} \times X_{\text{manufacturing}})$$

$E_{\text{manufacturing}}$: 生産時漏洩量
 N_{produced} : 生産台数
 $m_{\text{manufacturing}}$: 生産時冷媒充填量
 $X_{\text{manufacturing}}$: 冷媒漏洩率

○ 現場設置時漏洩量

$$E_{\text{installation}} = \Sigma (N_{\text{installation}} \times m_{\text{installation}} \times X_{\text{installation}})$$

$E_{\text{installation}}$: 現場設置時漏洩量
 $N_{\text{installation}}$: 現場充填実施台数
 $m_{\text{installation}}$: 冷媒充填量
 $X_{\text{installation}}$: 冷媒漏洩率

⁷⁾ 詳細は、2009 年 3 月 17 日の産業構造審議会化学バイオ部会第 21 回地球温暖化防止対策小委員会の資料 1-1 及び資料 1-2 参照。

○ 機器稼働時漏洩量

$$E_{operation} = \Sigma (N_{operated} \times m_{operation} \times X_{operation}) - R_{operation}$$

- $E_{operation}$: 機器稼働時漏洩量
- $N_{operated}$: 市中稼働台数
- $m_{operation}$: 稼働時冷媒充填量
- $X_{operation}$: 使用時冷媒漏洩率
- $R_{operation}$: 整備時回収量

○ 廃棄時排出量

$$E_{disposal} = \Sigma (N_{disposed} \times X_{disposal}) - R_{disposal}$$

- $E_{disposal}$: 廃棄時排出量
- $N_{disposed}$: 使用済機器発生台数
- $X_{disposal}$: 廃棄時平均冷媒充填量
- $R_{disposal}$: 使用済回収量

(注) 機器稼働時漏洩量の計算において、稼働時冷媒充填量は毎年の減少を考慮している。また、市中稼働台数及び使用済機器発生台数は、各年の出荷台数及び機器寿命より推定。

関連指標を下表に示す。

表 4-64 業務用冷凍空調機器からの HFCs 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC機器生産台数	千台	NO	214	374	1,413	987	1,122	1,198	1,212	1,303	1,250	1,228	1,296	1,350	1,355
工場生産時平均冷媒充填量	g/台	372	372	597	3,378	3,276	3,280	3,360	3,462	3,413	3,539	3,473	3,358	3,329	3,480
工場生産時冷媒排出係数	%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.1%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.1%	0.3%	0.2%	0.2%	0.2%
HFC機器現場充填実施台数	千台	NO	9	32	138	175	171	190	239	225	260	240	246	249	229
現場設置時平均冷媒充填量	g/台	17,806	17,806	9,221	23,914	25,955	24,527	24,276	22,826	20,754	20,394	20,073	19,520	18,388	18,816
現場設置時冷媒排出係数	%	1%	1%	1%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%
HFC機器市中稼働台数	千台	NO	375	1,957	6,770	10,847	11,743	12,678	13,616	14,568	15,414	16,134	16,859	17,571	18,183
機器稼働時平均冷媒充填量	g/台	1,012	1,012	1,043	4,549	5,802	5,981	6,192	6,440	6,596	6,799	6,950	7,041	7,074	7,123
機器稼働時冷媒排出係数	%	7.3%	7.3%	7.4%	5.3%	5.8%	6.0%	6.1%	6.2%	6.2%	6.3%	6.4%	6.4%	6.3%	6.3%
使用済HFC機器発生台数	千台	NO	1	23	127	325	397	453	512	576	663	748	816	887	972
法律に基づく整備時HFC回収量	t	NO	NO	NO	NO	503	548	571	671	682	759	772	861	979	1,016
法律に基づく使用済HFC回収量	t	NO	NO	NO	183	230	269	352	522	689	668	735	952	1,158	1,296
機器製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	3	9	150	202	198	220	269	225	256	228	229	209	191
機器稼働時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	40	258	3,415	9,035	10,524	12,233	14,231	15,850	17,638	18,998	20,150	20,880	21,425
機器廃棄時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	4	51	586	2,372	2,777	3,141	3,466	3,741	4,739	6,033	7,336	8,319	9,644
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	47	318	4,151	11,609	13,499	15,594	17,965	19,815	22,633	25,259	27,716	29,408	31,260

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、経済産業省提供データ、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

(注)

- 2002 年以降、業務用パッケージエアコンの増加により大型化が進み、平均冷媒充填量や現場設置時漏洩率が増加している。
- 2018 年の機器製造時の加重平均 GWP は 2,283、機器稼働時の加重平均 GWP は 2,626、機器廃棄時の加重平均 GWP は 2,201 である。ガス種別に排出量を計算しているが、秘匿性に配慮して Unspecified mix として報告している。

表 4-65 業務用冷凍空調機器の機種別の HFCs の種類、機器稼働時冷媒排出係数

機種	HFCs の種類	冷媒使用量	排出係数※	HFCs 機器 市中稼働台数中 の割合(2010年)
小型冷凍冷蔵機器(内蔵型等)	R-404A、HFC-134a 等	0.1～3 kg	2%	40%
別置型ショーケース	R-404A、R-407C 等	20～41 kg	16%	3%
中型冷凍冷蔵機器(除、別置型ショーケース)	R-404A、R-407C 等	2～30 kg	13～17%	6%
大型冷凍機	HFC-134a、R404A 等	300～2,300 kg	7～12%	0.05%
ビル用パッケージエアコン	R-410A、R-407C 等	37 kg	3.5%	7%
その他業務用空調機器(除、ビル用パッケージエアコン)	R-410A、R-407C 等	3～43 kg	3～5%	44%

(出典) 経済産業省産業構造審議会化学・バイオ部会地球温暖化防止小委員会第2回冷媒対策ワーキンググループ(2010年7月26日)資料、経済産業省提供データ

(注) ※は整備時、事故、故障時も含む

なお、1990～1994年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については HFC 機器生産台数・HFC 機器現場充填実施台数と比例すると考えられる HFC 国内出荷量、および 1995 年の工場生産時平均冷媒充填量、1995 年の工場生産時冷媒漏洩率、1995 年の現場設置時平均冷媒充填量、1995 年の現場設置時冷媒漏洩率、1995 年の機器稼働時平均冷媒充填量、1995 年の使用時冷媒漏洩率のデータを用いて外挿等をして算定を行っている。

冷媒コンテナからの漏洩については、2006 年 IPCC ガイドラインに算定方法が示されているが、他の排出源で捕捉済みでない再充填禁止容器(NRC 容器)からの漏洩について容器あたりの冷媒残存量と NRC 容器数を乗じて排出量を検討したところ、算定方法検討会で定めた算定対象となる、50 万 t-CO₂換算を超える排出量かつ活動量となりうる統計・調査が存在するものではないため、重要でないという意味での「NE」として報告した(別添5参照)。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性においては、製造時は 2006 年 IPCC ガイドラインの電気設備の上限値 30%、使用時は経済産業省調査値 5%を採用した。活動量の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインの金属工業の Tier 2 手法の 10%を製造・使用・廃棄時のいずれにも採用した。その結果、排出量の不確実性は、製造は 32%、使用時は 11%、廃棄時は 10%と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. c) 節を参照のこと。1995 年以降の全ての期間で生産量は同一の機器製造業者の業界団体から入手し、排出係数についても経済産業省が平成 21 年に報告した値を使用している。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.1.2.b. 自動販売機の製造、使用、及び廃棄

a) 排出源カテゴリーの説明

1) HFCs

自動販売機の生産時、故障時、廃棄時に HFCs が排出される。

2) PFCs

国内における製品製造時は使用実績がないため、「NO」と報告している。輸入製品についても PFCs が使用されていることは考えにくく、冷媒を補充することもないと考えられることから、使用時及び廃棄時についても「NO」と報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

生産・出荷台数及び冷媒充填量を使用して、①生産時漏洩量、②故障時排出量、③廃棄時排出量を推定した。排出係数は国独自のものである。

○ 生産時漏洩量

$$E_{\text{manufacturing}} = \Sigma (N_{\text{produced}} \times m_{\text{manufacturing}} \times X_{\text{manufacturing}})$$

$E_{\text{manufacturing}}$: 生産時漏洩量
N_{produced}	: 生産台数
$m_{\text{manufacturing}}$: 生産時冷媒充填量
$X_{\text{manufacturing}}$: 冷媒漏洩率

○ 故障時排出量

$$E_{\text{accident}} = \Sigma (N_{\text{operated}} \times m_{\text{operation}} \times A \times X_{\text{accident}})$$

E_{accident}	: 故障時排出量
N_{operated}	: 市中稼働台数
$m_{\text{operation}}$: 稼働時冷媒充填量
A	: 事故・故障発生率
X_{accident}	: 故障時平均漏洩率

○ 廃棄時排出量

a) 2001年まで $E_{\text{disposal}} = \Sigma \{N_{\text{disposed}} \times m_{\text{disposal}} \times (1-\eta)\}$

b) 2002年以降 $E_{\text{disposal}} = \Sigma (N_{\text{disposed}} \times m_{\text{disposal-avg}}) - R$

E_{disposal}	: 廃棄時排出量
N_{disposed}	: 使用済機器発生台数
m_{disposal}	: 廃棄時冷媒充填量
η	: 回収率
$m_{\text{disposal-avg}}$: 廃棄時平均冷媒充填量
R	: 法律に基づく回収量

自動販売機関連の HFCs の排出については、産業構造審議会製造産業分科会資料に示された値を報告した。関連指標を下表に示す。

表 4-66 自動販売機からの HFCs 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC使用機器生産（販売）台数	千台	NO	NO	272	355	173	173	124	30	10	8	7	7	6	6
1台当たり充填量	g	NO	NO	300	220	219	219	219	219	219	219	219	219	219	219
生産時漏洩率	%	NO	0.4%	0.4%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%
稼働台数	千台	NO	NO	284	1,999	2,368	2,279	2,055	1,759	1,530	1,068	748	431	330	187
事故・故障発生率	%	NO	0.004	0.004	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003
故障時平均漏洩率	%	NO	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
修理時平均漏洩率	%	NO	0.009	0.009	0.005	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004
廃棄台数	千台	NO	NO	NO	NO	293	286	347	277	273	299	266	264	196	188
排出量	t	NO	NO	0	1	17	16	19	15	15	17	15	15	11	10
	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	1	1	30	29	34	22	22	24	21	21	16	15

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

なお、1990～1994 年については、HFCs が充填された自動販売機は用いられていなかったことが確認されたため、排出量は NO とした。(環境省報道発表、平成 12 年 7 月 31 日、冷媒フロンの廃棄等の見通しについて<参考 1>)

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性においては、製造時・使用時・廃棄時いずれも 2006 年 IPCC ガイドラインの電気設備の上限値 30%を採用した。活動量の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインの金属工業の Tier 2 手法の 10%を製造・使用・廃棄時のいずれにも採用した。その結果、排出量の不確実性は、製造時・使用時・廃棄時いずれも 32%と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.1.3. 輸送機器用冷蔵庫の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

1) HFCs

輸送機器用冷蔵庫の生産時、使用時、廃棄時において HFCs が排出される。

2) PFCs

「4.7.1.2.a 業務用冷凍空調機器」と同様。

b) 方法論

■ 算定方法

「4.7.1.2.a 業務用冷凍空調機器」と同様。関連指標を下表に示す。

表 4-67 輸送機器用冷蔵庫（鉄道）からの HFCs 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC機器生産台数 ¹⁾	台	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1台あたり製造時HFC充填量 ¹⁾	kg	0	0	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
製造時漏えい率	%	0%	0%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%
使用時漏えい率	%	0%	0%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%
使用済HFC機器発生台数	台	0	0	0	0	10	14	9	13	14	17	21	23	19	0
廃棄時充填量	kg	0	0	0	0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
回収率	%	0	0	0	0	30%	31%	29%	34%	34%	32%	38%	39%	38%	39%
機器製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	0.001	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
機器稼働時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	0.080	0.395	0.665	0.648	0.644	0.644	0.634	0.619	0.600	0.596	0.596	0.596
機器廃棄時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	NO	0.041	0.057	0.038	0.050	0.054	0.068	0.077	0.083	0.069	NO
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	0.081	0.395	0.706	0.704	0.682	0.695	0.688	0.687	0.677	0.679	0.666	0.596

(出典) 鉄道統計年報、IPCC デフォルト値等、但し 1)はメーカーヒアリングに基づく

表 4-68 輸送機器用冷蔵庫（船舶）からの HFCs 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
製造時漏えい率	%	0%	0%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%
使用時漏えい率	%	0%	0%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%
回収率	%	0%	0%	0%	0%	30%	31%	29%	34%	34%	32%	38%	39%	38%	39%
機器製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	0.008	0.066	0.138	0.124	0.215	0.305	0.361	0.256	0.241	0.432	0.433	0.342
機器稼働時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	1.163	23.783	61.934	77.103	94.722	124.018	161.961	176.000	191.411	207.277	223.892	250.081
機器廃棄時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	NO	0.009	0.024	0.102	0.081	0.761	1.842	1.713	2.565	4.110	5.418
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	1.171	23.850	62.081	77.250	95.039	124.404	163.082	178.098	193.366	210.274	228.435	255.841

(出典) IPCC デフォルト値、海事レポート等

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

「4.7.1.2.a 業務用冷凍空調機器」と同様。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。

4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。

4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

2007年、2010年、2015年、2017年については製造時冷媒充填量の合計が、2007～2017年については稼働時冷媒充填量の合計が修正されたことに伴い、船舶における冷凍機器からの排出量の再計算が生じた。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.1.4. 工業用冷蔵庫の製造、使用、及び廃棄 (2.F.1.-)

1) HFCs

「4.7.1.2. 業務用冷凍空調機器」の合計に含まれているため、「IE」と報告している。

2) PFCs

国内における製品製造時は使用実績がないため、「NO」と報告している。輸入製品についても PFCs が使用されていることは考えにくく、冷媒を補充することもないと考えられることから、使用時及び廃棄時についても「NO」と報告している。

4.7.1.5. 固定空調機器（家庭用エアコン）の製造、使用、及び廃棄（2.F.1.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

1) HFCs

家庭用エアコンの生産時、機器稼働時、廃棄時において HFCs が排出される。

2) PFCs

国内における製品製造時は使用実績がないため、「NO」と報告している。輸入製品についても PFCs が使用されていることは考えにくく、冷媒を補充することもないと考えられることから、使用時及び廃棄時についても「NO」と報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

IPCC ガイドラインに準拠し、生産・出荷台数及び冷媒充填量を使用して、ガスごとに①生産時漏洩量、②機器稼働時漏洩量、③廃棄時の機器に含まれる冷媒量から法に基づく回収量を減じたものをそれぞれ推定し、合計した。排出係数は国独自のものである。

○ 生産時漏洩量

$$E_{\text{manufacturing}} = \Sigma (N_{\text{produced}} \times m_{\text{manufacturing-avg}} \times X_{\text{manufacturing}})$$

$E_{\text{manufacturing}}$: 生産時漏洩量
N_{produced}	: 生産台数
$m_{\text{manufacturing-avg}}$: 生産時平均冷媒充填量
$X_{\text{manufacturing}}$: 生産時冷媒漏洩率

○ 機器稼働時漏洩量

$$E_{\text{operation}} = \Sigma (N_{\text{operated}} \times m_{\text{operation-avg}} \times X_{\text{operation}})$$

$E_{\text{operation}}$: 機器稼働時漏洩量
N_{operated}	: 市場保有台数
$m_{\text{operation-avg}}$: 稼働時平均冷媒充填量
$X_{\text{operation}}$: 使用時漏洩率

○ 廃棄時排出量

$$E_{\text{disposal}} = \Sigma (N_{\text{disposed}} \times m_{\text{disposal-avg}}) - R$$

E_{disposal}	: 廃棄時排出量
N_{disposed}	: 廃棄台数
$m_{\text{disposal-avg}}$: 廃棄時平均冷媒充填量
R	: 法律に基づく回収量

(注) 機器稼働時漏洩量の計算において、稼働時平均冷媒充填量は毎年の減少を考慮している。また、市場保有台数及び廃棄台数は、各年の出荷台数及び機器寿命より推定。

関連指標を下表に示す。

表 4-69 家庭用エアコンからの HFCs 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC使用機器生産台数	千台	NO	NO	1,077	3,981	2,618	3,169	3,155	3,263	3,581	3,076	8,166	8,528	9,055	9,815
1台当たり充填量	g	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
生産時排出係数	%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%
HFC機器市中稼働台数	千台	NO	NO	1,726	26,091	53,966	61,540	68,769	75,833	83,349	89,020	94,197	99,157	104,067	109,193
機器稼働時平均冷媒充填量	g/台	NO	NO	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
機器稼働時冷媒排出係数	%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	2%
使用済HFC機器発出台数	千台	NO	NO	2	83	524	764	1,075	1,456	1,907	2,423	2,990	3,567	4,145	4,688
機器廃棄時平均冷媒充填量	g/台	NO	NO	954	911	856	841	827	814	803	796	792	795	796	804
法律に基づく使用済HFC回収量	t/年	-	-	-	10	122	231	264	322	466	508	570	700	892	1,181
機器製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	4	17	13	12	10	10	8	7	9	7	6	6
機器稼働時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	72	1,089	2,253	2,569	2,871	3,165	3,424	3,534	3,549	3,523	3,480	3,425
機器廃棄時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	3	139	710	916	1,322	1,833	2,301	2,984	3,767	4,486	5,059	5,437
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	80	1,245	2,976	3,498	4,204	5,008	5,733	6,524	7,325	8,015	8,546	8,868

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

なお、1990～1994 年については、HFCs が充填された固定空調機器（家庭用エアコン）は用いられていなかったことが確認されたため、排出量は NO とした。（環境省報道発表、平成 12 年 7 月 31 日、冷媒フロンの廃棄等の見通しについて〈参考 1〉）

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

業務用冷凍空調機器（2.F.1.-）に記載した内容と同一である。4.7.1.2.a.c) 節を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造副生ガスの排出－HCFC-22 の製造（2.B.9.-）に記載した内容と同一である。4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造副生ガスの排出－HCFC-22 の製造（2.B.9.-）に記載した内容と同一である。4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.1.6. 輸送機器用空調機器の製造、使用、及び廃棄（2.F.1.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

1) HFCs

輸送機器用空調機器の生産時、使用時、故障時、事故時、廃棄時において HFCs が排出される。

2) PFCs

国内における製品製造時は使用実績がないため、「NO」と報告している。輸入製品についても PFCs が使用されていることは考えにくく、冷媒を補充することもないと考えられることから、使用時及び廃棄時についても「NO」と報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

IPCC ガイドラインに準拠し、生産・出荷台数及び冷媒充填量を使用して、①生産時漏洩量、②使用時漏洩量、③故障時排出量、④事故時排出量、⑤廃棄時の機器に含まれる冷媒量から法に基づく回収量を減じたものをそれぞれ推定し、合計した。排出係数は国独自のものである。車種ごとに、以下の考え方をを用いて計算している。なお、鉄道・船舶における空調機器からの排出も同様の方法で算定されている。

○ 生産時漏洩量

$$E_{\text{manufacturing}} = \Sigma (N_{\text{produced}} \times m_{\text{manufacturing}} \times X_{\text{manufacturing}})$$

$E_{\text{manufacturing}}$: 生産時漏洩量
N_{produced}	: 生産台数
$m_{\text{manufacturing}}$: 生産時冷媒充填量
$X_{\text{manufacturing}}$: 冷媒漏洩率

○ 使用時漏洩量

$$E_{\text{operation}} = \Sigma (N_{\text{operated}} \times m_{\text{operation}} \times X_{\text{operation}})$$

$E_{\text{operation}}$: 使用時漏洩量
N_{operated}	: 市中車輛台数
$m_{\text{operation}}$: 稼働時冷媒充填量
$X_{\text{operation}}$: 冷媒漏洩率

(注) 使用時漏洩量の計算において、稼働時冷媒充填量は毎年減少を考慮している。

○ 故障時排出量

$$E_{\text{breakdowns}} = \Sigma (N_{\text{operated}} \times m_{\text{operation}} \times A \times X_{\text{accident}})$$

$E_{\text{breakdowns}}$: 故障時排出量
N_{operated}	: 市中車輛台数
$m_{\text{operation}}$: 稼働時冷媒充填量
A	: 故障発生率
X_{accident}	: 故障発生時冷媒漏洩率

○ 事故時排出量

$$E_{\text{accident}} = \Sigma (N_{\text{operated}} \times m_{\text{operation}})$$

E_{accident}	: 事故時排出量
N_{operated}	: 全損事故車輛数
$m_{\text{operation}}$: 全損事故時冷媒充填量

○ 廃棄時排出量

$$\text{a) 2001 年まで } E_{\text{disposal}} = \Sigma \{ N_{\text{disposed}} \times m_{\text{disposal}} \times (1 - \eta) \}$$

$$\text{b) 2002 年以降 } E_{\text{disposal}} = \Sigma (N_{\text{disposed}} \times m_{\text{disposal-avg}}) - R$$

E_{disposal}	: 廃棄時排出量
N_{disposed}	: 使用済車輛台数
m_{disposal}	: 廃棄時冷媒充填量
η	: 回収率
$m_{\text{disposal-avg}}$: 廃棄時平均冷媒充填量
R	: 法律に基づく回収量

関連指標を次表に示す。

表 4-70 カーエアコンからの HFC-134a の排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFCエアコン生産台数	千台	0	9,745	9,761	10,407	7,653	9,292	8,136	9,856	9,613	9,753	9,273	9,205	9,639	9,362
1台当たり生産時漏洩量	g	4	4	4	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
HFCエアコン車両保有台数	千台	0	15,655	42,374	60,364	65,375	66,043	67,366	70,406	72,054	72,813	73,272	72,216	72,722	72,898
1台当たり平均冷媒充填量	g	700	700	615	548	497	497	497	497	497	497	497	497	497	497
1台当たり年間使用時漏洩量（普通自動車）	g	15	15	15	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
故障発生割合	%	4%	4%	4%	4%	4%	4%	4%	4%	4%	4%	4%	4%	4%	4%
故障事故車両冷媒漏洩率	%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%
全損事故車両数	千台	0	50	136	193	209	211	216	225	231	233	234	231	233	233
全損事故車両冷媒充填量	g	681	681	610	522	461	448	439	426	417	409	404	399	393	387
使用済HFC車国内台数	千台	0	116	789	2,058	2,498	2,895	2,235	2,709	2,835	2,839	2,694	2,666	2,927	2,941
使用済HFC車冷媒充填量	g	676	676	593	522	456	444	427	404	412	393	380	370	360	349
HFC回収量（2002年度以降は法律に基づく）	t/年	-	-	-	531	787	898	645	786	785	773	710	682	720	718
機器製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	49	49	45	13	13	9	11	11	10	10	10	10	10
機器稼働時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	704	1,798	2,331	2,255	2,222	2,226	2,274	2,276	2,255	2,230	2,166	2,144	2,115
機器廃棄時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	112	669	778	503	555	444	442	548	492	449	436	477	443
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	865	2,516	3,153	2,771	2,791	2,679	2,728	2,835	2,757	2,690	2,612	2,631	2,568

（出典）フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

表 4-71 鉄道用空調機器からの HFCs 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
製造時漏えい率	%	0%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%
使用時漏えい率	%	0%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%
機器製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	0.003	0.033	0.062	0.081	0.075	0.065	0.052	0.060	0.059	0.058	0.049	0.063	0.073
機器稼働時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	0.710	3.224	13.734	27.336	31.015	34.290	36.833	39.667	42.601	45.451	48.087	51.158	54.168
機器廃棄時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	0.066	0.134	0.091	0.100	0.191	0.146	0.106	0.060	0.078	0.082	0.047	0.050	0.073
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	0.779	3.391	13.887	27.516	31.281	34.502	36.991	39.787	42.737	45.591	48.184	51.270	54.314

（出典）鉄道統計年報、鉄道車両等生産動態統計年報、IPCC デフォルト値等

表 4-72 船舶用空調機器からの HFCs 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
製造時漏えい率	%	0%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%
使用時漏えい率	%	0%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%	15%
回収率	%	0%	0%	0%	0%	30%	31%	29%	34%	34%	32%	38%	39%	38%	39%
機器製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	0.0003	0.004	0.070	0.200	0.246	0.263	0.223	0.186	0.177	0.153	0.142	0.114	0.111
機器稼働時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	0.077	0.739	19.384	66.696	80.925	92.989	103.133	110.083	116.936	121.421	127.563	131.859	135.694
機器廃棄時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	NO	0.084	0.011	0.030	0.005	0.123	0.283	0.211	0.446	0.557	0.848
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	0.077	0.743	19.454	66.979	81.182	93.282	103.361	110.393	117.397	121.785	128.151	132.530	136.652

（出典）IPCC デフォルト値、海事レポート等

なお、カーエアコンについては、HFC が使用された 1992～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については HFC エアコン車生産台数と比例すると考えられる HFCs 国内出荷量、および 1995 年の 1 台当たり生産時漏洩量、1995 年の 1 台当たり平均冷媒充填量、1995 年の 1 台当たり年間使用時漏洩量（普通自動車）、1995 年の故障発生割合、1995 年の故障事故車両冷媒漏洩率、1995 年の全損事故車両台数、1995 年の HFC エアコン車両保有台数、1995 年の全損事故車両冷媒充填量、1995 年の使用済 HFC 車国内台数、1995 年の使用済 HFC 車冷媒充填量のデータを用いて外挿等をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

自動販売機 (2.F.1.-) に記載した内容と同一である。4.7.1.2.b.c) を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造副生ガスの排出－HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1.c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.2. 発泡剤 (2.F.2.)

4.7.2.1. 閉鎖系気泡フォーム (2.F.2.-)

4.7.2.1.a. ウレタンフォーム (2.F.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

発泡剤として使用される HFC-134a、HFC-245fa、HFC-365mfc が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

IPCC ガイドライン (閉鎖系気泡フォーム) に準拠し、各年の発泡剤使用量のうち、10%が製造初年度に排出され、残りが 4.5%ずつ 20 年かけて使用時に全量排出されるとして算定した。各年の発泡剤使用量はウレタンフォーム工業会、ウレタン原料工業会によるデータを使用した。

また、ウレタンフォームの廃棄は様々な時期に行われ、現実的に「使用」と「廃棄」を区分することは困難である。「使用」と「廃棄」は一体として取扱い、「使用」に全量を計上し、「廃棄」は「IE」として報告している。

$$E = E_{\text{manufacturing}} + E_{\text{use}}$$

$$= (M \times EF_{\text{FYL}}) + (\text{Bank} \times EF_{\text{AL}})$$

E	: HFC 排出量 [t]
$E_{\text{manufacturing}}$: 製造時排出量 [t]
E_{use}	: 使用時排出量 [t]
M	: HFC の使用量 [t]
EF_{FYL}	: 発泡時漏洩率 [%]
Bank	: 前年までの使用量の合計 [t]
EF_{AL}	: 使用時年間排出割合 [%]

表 4-73 ウレタンフォームからの HFC 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC-134a 使用量	t	NO	NO	167	224	109	66	65	34	28	14	12	NO	NO	NO
HFC-245fa 使用量	t	NO	NO	NO	3,893	2,440	2,365	2,597	2,613	2,570	2,533	2,230	2,577	2,596	2,365
HFC-365mfc 使用量	t	NO	NO	NO	1311	847	900	960	977	921	866	779	794	802	744
発泡時漏洩率	%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%	10%
使用時HFC年間排出率	%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%	4.5%
HFC-134a 総排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	24	112	132	133	137	137	138	138	139	138	138	138
HFC-245fa 総排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	490	1,039	1,144	1,277	1,399	1,516	1,631	1,718	1,857	1,978	2,075
HFC-365mfc 総排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	130	284	318	355	391	421	450	474	503	532	556

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、経済産業省提供データ、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

(注) HFC-245fa、HFC-365mfc に関しては、2004 年 1 月に生産全廃された HCFC-141b の代替として使用され使用が増えた。

なお、1990～1994 年については、HFCs を使用したウレタンフォームは用いられていなかったことが確認されたため、排出量は NO とした。(環境省、平成 23 年度 PRTR 届出外排出量の推計方法)

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出量の不確実性は、製造時・使用時ともに 2006 年 IPCC ガイドラインの 50%を採用した。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造副生ガスの排出－HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。

4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造副生ガスの排出－HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。

4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.2.1.b. 押出發泡ポリスチレンフォーム (2.F.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

発泡剤として使用される HFC-134a が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

各年の発泡剤使用量のうち、25%が製造初年度に排出され、残りが 0.75%ずつ排出されるとして算定した。各年の発泡剤使用量は押出發泡ポリスチレン工業会によるデータを使用した。

なお、この考え方は、2006 年 IPCC ガイドラインや PRTR における押出發泡ポリスチレン製造事業所の HCFCs の移動量の算出方法と整合している。

断熱材は、建物の改修時、被災時、解体時など様々な時期に「廃棄」されるため、現実的には「使用」と「廃棄」を区別することは困難である。廃棄されたものは使用されているものと同じように HFCs を排出すると考えられることから、これらを一体で扱うこととし、全量を「使用」で計上したと考えて「廃棄」は「IE」としている。

$$E = E_{\text{manufacturing}} + E_{\text{use}}$$

$$= (M \times EF_{\text{FYL}}) + (\text{Bank} \times EF_{\text{AL}})$$

E	: HFC-134a 排出量 [t]
$E_{\text{manufacturing}}$: 製造時排出量 [t]
E_{use}	: 使用時排出量 [t]
M	: HFC-134a の使用量 [t]
EF_{FYL}	: 発泡時漏洩率 (25%)
Bank	: 前年までの使用量の合計 [t]
EF_{AL}	: 使用時年間排出割合 [%]

表 4-74 押出發泡ポリスチレンフォームからの HFC-134a の排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC-134a 使用量	t	NO	NO	NO	26	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
フォーム製品化率	%	-	-	-	75%	75%	75%	75%	75%	75%	75%	75%	75%	75%	75%
使用時HFC年間排出率	%	-	-	-	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%
製造時排出量	t	NO	NO	NO	6.50	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
使用時排出量	t	NO	NO	NO	9.00	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23
排出量	t	NO	NO	NO	15.50	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23	9.23
製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	9.30	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
使用時排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	12.87	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20
排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	22.17	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20	13.20

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料他

なお、1990～1994 年については、HFCs を使用した押出發泡ポリスチレンフォームは用いられていなかったことが確認されたため、排出量は NO とした。(環境省「平成 23 年度 PRTR 届出外排出量の推計方法」)

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

ウレタンフォーム製造 (2.F.2.-) に記載した内容と同一である。4.7.2.1.a.c) 節を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造 (2.B.9.-) に記載した内容と同一である。4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造 (2.B.9.-) に記載した内容と同一である。4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.2.2. 開放系気泡フォーム (2.F.2.-)

4.7.2.2.a. 高発泡ポリエチレンフォーム (2.F.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

発泡剤として使用される HFC-134a、HFC-152a が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

IPCC ガイドライン (開放系気泡フォーム) に準拠し、各年の発泡剤使用量が、製造時に全量排出されるとして計算した。各年の発泡剤使用量は高発泡ポリエチレン工業会によるデータを使用した。

表 4-75 高発泡ポリエチレンフォームからの HFC-134a 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC-134a使用量	t	1	346	322	128	98	98	98	98	98	98	98	98	98	98
排出量	t	1	346	322	128	98	98	98	98	98	98	98	98	98	98
	kt-CO ₂ 換算	1.34	494.78	460.46	183.04	140.29	140.29	140.29	140.29	140.29	140.29	140.29	140.29	140.29	140.29

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、経済産業省提供データ、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

表 4-76 高発泡ポリエチレンフォームからの HFC-152a 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC-152a使用量	t	0.038	14	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
排出量	t	0.038	14	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	kt-CO ₂ 換算	0.005	1.736	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

なお、1990～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については発泡剤使用量と比例すると考えられる HFCs 国内出荷量のデータを用いて外挿をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

ウレタンフォーム (2.F.2.-) に記載した内容と同一である。4.7.2.1.a.c) 節を参照のこと。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造一副生ガスの排出-HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造一副生ガスの排出-HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.3. 消火剤 (2.F.3.)

a) 排出源カテゴリーの説明

消火剤として使用される HFCs が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

製造時については、HFC-23 と HFC-227ea が使用されている。2004 年時点において消火設備のボンベに充填されているのは HFC-227ea のみである。HFC-23 消火剤については、各社とも HFC-23 が既にボンベに充填されたものを購入しているため、製造時の排出は起こらない。2004 年度における製造時の HFC-227ea の排出量を計算したところ、0.0007(t)と非常に少ないことから、専門家判断により「NO」とした。

使用時については、1995 年時点においては HFCs を充填した消火剤はほとんど出回っておらず、使用実績が無いと考えられることから、1995 年、およびそれ以前は「NO」とした。1996 年以降の排出量は、HFCs 消火剤の設置・ストック量をもとに以下の式で算定した。

$$E = Bank \times EF$$

E : HFCs 排出量 [t]

$Bank$: HFCs 消火剤の設置・ストック量 [t]

EF : 使用時の排出係数

廃棄時については、消火剤用途として HFCs が使用され始めてからの年次が浅く、建物の耐用年数 (30~40 年) から考えても、現時点において廃棄されることは考えにくいことから、現状では「NO」とする。

■ 排出係数

HFCs 消火剤使用時の排出係数について現在、知見が得られていない。よって同様の消火剤であるハロンの補充量実績 (消防庁提供) から求めた排出率 (0.00088) をこの区分の排出係数として採用した。

表 4-77 排出係数の参考値 (ハロン消火剤の排出率)

	単位	2002	2003	2004	2005	2006	2007	平均
ハロン設置量 (A)	t	17,094	17,090	17,060	16,994	17,075	16,889	17,034
ハロン補充量 (B)	t	13	13	22	13	14	15	15
(B) / (A)	-	0.00076	0.00076	0.00129	0.00076	0.00082	0.00089	0.00088

■ 活動量

消火剤の使用に伴う HFCs 排出の活動量については、消防庁提供の HFCs 設置・ストック量を用いた。

表 4-78 消火剤設置・ストック量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
HFC-23 ストック量	t	NO	NO	306	478	512	523	528	533	537	546	559	567	573	579
HFC-23 排出量	t	NO	NO	0.27	0.42	0.45	0.46	0.46	0.47	0.47	0.48	0.49	0.50	0.50	0.51
	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	3.99	6.23	6.67	6.81	6.87	6.94	6.99	7.11	7.29	7.38	7.46	7.54
HFC-227ea ストック量	t	NO	NO	225	392	498	522	544	596	640	686	738	754	800	810
HFC-227ea 排出量	t	NO	NO	0.20	0.34	0.44	0.46	0.48	0.52	0.56	0.60	0.65	0.66	0.70	0.71
	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	0.64	1.11	1.41	1.48	1.54	1.69	1.81	1.94	2.09	2.14	2.27	2.29
合計排出量	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	4.63	7.34	8.08	8.29	8.42	8.63	8.80	9.06	9.38	9.51	9.72	9.84

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出量の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインの16%を採用した。

■ 時系列の一貫性

消防庁より提供を受けた排出係数・活動量データをもとに、1995年度からの一貫した方法を使用して算定している。1990～1994年については、1995年時点でHFCsを充填した消火剤の使用実績がないことに照らし、排出量は「NO」とした。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.4. エアゾール（2.F.4.）

4.7.4.1. 医療用エアゾール（定量噴射剤：MDI）（2.F.4.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

定量噴射剤の製造時・使用時にHFCsが排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

IPCC ガイドラインに準拠し、各年に使用された量のうち、50%が製造年に排出され、残りの50%が次年に排出されるとして算定を行った。

ガス購入量、国内生産MDI（Metered Dose Inhalers）使用量、輸入MDI使用量、廃棄処理量はそれぞれ日本製薬団体連合会のデータによる。また、廃棄処理量には同会が主として製造工程の不良品を破壊処理したMDIに含まれるHFCs量を計上した。

$$E_n = E_{\text{manufacturing}} + E_{\text{potential}(n-1)} \times EF_{\text{first}} + E_{\text{potential}(n)} \times (1 - EF_{\text{first}}) - R_{(n)}$$

E_n	: n 年度における当該 F-gas (HFC-134a、HFC-227ea) 排出量 [t]
$E_{\text{manufacturing}}$: 製造時漏洩量 [t]
$E_{\text{potential}(n-1)}$ 、 $E_{\text{potential}(n)}$: (n-1) または (n) 年度における F-gas 潜在排出量 [t]
EF_{first}	: 50 [%]
$R_{(n)}$: n 年度における F-gas 廃棄処理量 [t]

$$E_{\text{potential}} = U_{\text{domestic}} + U_{\text{import}}$$

U_{domestic}	: 国内生産 MDI 使用量 [t]
U_{import}	: 輸入 MDI 使用量 [t]

関連指標を下表に示す。

表 4-79 医療品製造の排出量算定結果 (HFC-134a)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
国内生産MDI使用量	t	NO	NO	1.4	0.9	0.9	1.1	0.8	0.8	0.6	0.9	0.6	0.9	0.6	0.8
輸入MDI使用量	t	NO	NO	42.0	70.7	57.1	57.1	54.0	48.3	46.0	42.4	41.3	39.2	34.2	35.0
廃棄処理量	t	NO	NO	0.1	1.9	0.4	2.5	2.4	0.8	0.7	0.2	3.6	0.4	0.1	0.0
排出量	t	NO	NO	37.2	62.8	60.0	55.5	54.1	51.3	47.2	44.9	39.3	40.7	37.4	35.3
	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	53.2	89.7	85.7	79.4	77.4	73.3	67.5	64.2	56.3	58.2	53.5	50.5

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、経済産業省提供データ、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

表 4-80 医療品製造の排出量算定結果 (HFC-227ea)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
国内生産MDI使用量	t	NO	NO	NO	41.0	27.8	36.0	30.9	25.8	25.1	21.0	23.0	21.4	17.8	18.4
輸入MDI使用量	t	NO	NO	3.6	2.1	1.6	0.4	0.8	0.7	0.7	0.4	18.8	20.2	27.5	26.2
廃棄処理量	t	NO	NO	NO	1.2	0.9	0.8	0.9	0.8	0.8	0.5	0.7	0.2	0.3	0.3
排出量	t	NO	NO	1.8	48.1	42.8	33.1	34.3	29.8	26.9	23.9	31.7	32.1	43.9	45.4
	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	5.8	154.7	137.7	106.7	110.4	96.0	86.7	77.1	102.1	135.0	141.5	146.2

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、経済産業省提供データ、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

(注) 1997 年に HFC-134a、2001 年に（輸入分については 2000 年から）HFC-227ea を用いた MDI の生産を開始している。

なお、1990～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については HFC-134a は 1995 年、1996 年の国内製品 MDI 使用量・輸入 MDI 使用量がそれぞれゼロ、HFC-227ea は 1995～1999 年の国内製品 MDI 使用量・輸入 MDI 使用量がそれぞれゼロであることから、排出がないとした。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

MDI の製造時及び使用・廃棄時における排出係数については、最終的に使用量が排出量となることから不確実性は 0% とした。活動量の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインの金属工業の Tier 2 手法の 10% を製造時及び使用・廃棄時のいずれにも採用した。その結果、排出量の不確実性は製造時及び使用・廃棄時ともに 10% と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.4.2. 一般用エアゾール (2.F.4.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

エアゾールの製造時・使用時に HFCs が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインに則り、各年に製品に充填された量（潜在排出量）のうち、50%が製造年に排出され、残りの50%が次年に排出されるとして算定した。

また、製造時漏洩量についても、製造に使用した量と、製品に充填された量の実測値の差として把握しており、排出量に含めた。製造に使用した量と製品に充填された量は日本エアゾール協会によるデータを使用した。

「廃棄」については、実態としては廃棄されるエアゾール中に HFCs がある程度残っていると考えられるが、「使用」に「廃棄」分を含めて潜在排出量の全量が計上されているので「廃棄」については「IE」としている。

$$E_n = E_{\text{manufacturing}} + E_{\text{potential}(n-1)} \times EF_{\text{first}} + E_{\text{potential}(n)} \times (1 - EF_{\text{first}})$$

- E_n : n 年度における当該 HFC 排出量 [t]
- $E_{\text{manufacturing}}$: 製造時漏洩量 [t]
- $E_{\text{potential}(n-1)}, E_{\text{potential}(n)}$: (n-1) または (n) 年度における当該 HFC 潜在排出量 [t]
- EF_{first} : 50 [%]

$$E_{\text{manufacturing}(n)} = M_{(n)} - E_{\text{potential}(n)}$$

- $E_{\text{manufacturing}(n)}$: n 年度における製造時漏洩量 [t]
- $M_{(n)}$: n 年度における製造時 HFC 使用量 [t]
- $E_{\text{potential}(n)}$: n 年度における HFCs 潜在排出量 [t]

関連指標を下表に示す。

表 4-81 エアゾールからの HFC-134a 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
潜在排出量	t	NO	1,300	2,044	604	230	200	190	168	168	223	206	236	193	159
製造時漏洩量	t	NO	NO	80	25	10	8	7	8	7	12	15	22	35	39
製造年使用時排出量	t	NO	650	1,022	302	115	100	95	84	84	112	103	118	97	80
残存量 (次年排出量)	t	NO	650	1,022	302	115	100	95	84	84	112	103	118	97	80
排出量	t	NO	1,050	2,137	908	297	223	202	187	175	208	230	243	250	215
	kt-CO ₂ 換算	NO	1,502	3,056	1,299	424	319	289	268	250	297	328	347	357	307

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料他

(注) 1992~1997 年の製造時漏洩量は潜在排出量に含まれている。

表 4-82 エアゾールからの HFC-152a 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
潜在排出量	t	NO	NO	34	1,300	764	558	502	542	320	353	279	328	276	226
製造時漏洩量	t	NO	NO	1	29	494	638	730	464	249	185	109	68	89	75
製造年使用時排出量	t	NO	NO	17	650	382	279	251	271	160	177	140	164	138	113
残存量 (次年排出量)	t	NO	NO	17	650	382	279	251	271	160	177	140	164	138	113
排出量	t	NO	NO	18	1,217	1,584	1,299	1,260	986	680	522	425	372	391	326
	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	2.3	150.9	196.4	161.1	156.2	122.3	84.3	64.7	52.6	46.1	48.5	40.4

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料他

(注) 2000 年に HFC-152a を用いたエアゾールの生産を開始している。

表 4-83 エアゾールからの HFC-245fa 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
潜在排出量	t	NO	NO	NO	0.795	0.318	0.388	2.034	1.094	0.17	1.1	0.275	0	0	0
製造時漏洩量	t	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
製造年使用時排出量	t	NO	NO	NO	0.398	0.159	0.194	1.017	0.547	0.085	0.550	0.138	NO	NO	NO
残存量 (次年排出量)	t	NO	NO	NO	0.398	0.159	0.194	1.017	0.547	0.085	0.550	0.138	NO	NO	NO
排出量	t	NO	NO	NO	0.547	0.493	0.353	1.211	1.564	0.632	0.635	0.688	0.138	NO	NO
	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	0.5629	0.5073	0.3636	1.2473	1.6109	0.651	0.6541	0.7081	0.1416	NO	NO

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 26 年度温室効果ガス排出量算定方法検討会第 2 回 HFC 等 4 ガス分科会資料他

表 4-84 エアゾールからの HFC-365mfc 排出の関連指標

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
潜在排出量	t	NO	NO	NO	1.115	NO	NO	NO	0.274	NO	0.244	0.24	NO	NO	NO
製造時漏洩量	t	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
製造年使用時排出量	t	NO	NO	NO	0.558	NO	NO	NO	0.137	NO	0.122	0.12	NO	NO	NO
残存量 (次年排出量)	t	NO	NO	NO	0.558	NO	NO	NO	0.137	NO	0.122	0.12	NO	NO	NO
排出量	t	NO	NO	NO	0.74	0.28	NO	NO	0.137	0.137	0.122	0.242	0.12	NO	NO
	kt-CO ₂ 換算	NO	NO	NO	0.5876	0.2223	NO	NO	0.1088	0.1088	0.0969	0.1921	0.0953	NO	NO

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、平成 26 年度温室効果ガス排出量算定方法検討会第 2 回 HFC 等 4 ガス分科会資料他

本サブカテゴリーにおける HFC-43-10mee の排出は、2006 年 IPCC ガイドラインに算定方法が示されているが、算定方法検討会で定めた算定対象となる 3,000t-CO₂換算を超える排出量とはならないため、重要でないという意味での「NE」として報告した(別添 5 参照)。

なお、1990～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については潜在排出量と比例すると考えられる HFCs 国内出荷量のデータを用いて外挿等をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

エアゾールの製造時及び使用・廃棄時における排出係数については、使用量が排出量となることから不確実性は 0%とした。活動量の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインの金属工業の Tier 2 手法の 10%を製造時及び使用・廃棄時のいずれにも採用した。その結果、排出量の不確実性は製造時及び使用・廃棄時ともに 10%と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。

4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。

4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.5. 溶剤 (2.F.5.)

a) 排出源カテゴリーの説明

液体状の HFC-365mfc がソルカンドライという名称で業務用ドライクリーニングの溶剤として使用されており、揮発等によって大気中に排出されている。

また、一般電子部品洗浄時、半導体・液晶製造時の溶剤として使用される HFCs 及び PFCs が排出される。使用されている液体 PFCs は、C₅F₁₂ (PFC-41-12)、C₆F₁₄ (PFC-51-14) である。なお、一般電子部品洗浄時、半導体・液晶製造時の溶剤の用途で使用する HFCs については秘匿情報に該当するため PFCs の内数として報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

○ HFCs

国内のメーカーのソルカンドライ用クリーニング機の累積出荷台数から廃棄台数を減じたものに、1 台あたりの年間平均溶剤使用量を乗じて、年別溶剤使用量を推計し、当該年に使用された溶剤 (= 補充される溶剤) の全量を HFC-365mfc 排出量とした。

$$E = (N_{special} - D_{special}) \times U_{special} + (N_{partial} - D_{partial}) \times U_{partial}$$

<i>E</i>	: HFC-365mfc 排出量
<i>N_{special}</i>	: 専用機累積出荷台数
<i>D_{special}</i>	: 専用機累積廃棄台数
<i>U_{special}</i>	: 専用機の年間平均溶剤使用量
<i>N_{partial}</i>	: 混合機累積出荷台数
<i>D_{partial}</i>	: 混合機累積廃棄台数
<i>U_{partial}</i>	: 混合機の年間平均溶剤使用量

ソルカンドライ専用クリーニング機の 1 台あたりの年間平均溶剤使用量については、大手メーカーのソルカンドライ溶剤販売実績及び実稼働台数より把握した各年の 1 台あたりの年間平均溶剤使用量 (下表) とした。ソルカンドライ専用クリーニング機の 2011 年以前の 1 台あたりの年間平均溶剤使用量については、2012~2017 年の 1 台あたりの年間平均溶剤使用量の平均値とした。また、ソルカンドライ混合クリーニング機の 1 台あたりの年間平均溶剤使用量については、専用機使用量に係数を乗じて算出した。

2002 年以前のソルカンドライ用クリーニング機の出荷台数は 0 であるので、排出は 2003 年以降からになる。

表 4-85 ソルカンドライ用クリーニング機累積出荷台数及び年間平均溶剤使用量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
専用機及び混合機累積台数	台	0	0	0	12	81	121	170	192	216	234	246	259	268	272
専用機の年間平均溶剤使用量	kg/台	0	0	0	673	673	673	673	653	678	713	699	692	602	602

○ PFCs

液体 PFCs 出荷量のほぼ全量が溶剤、洗浄等の用途に使用され、これを排出量として使用時に計上している。(2018 年の平均 GWP は 2,588、ガス種別に排出量を計算しているが、秘匿性に配慮して Unspecified mix として報告) 製造時の排出についてはブレンドして使用する実態はないため「NO」と報告している。PFCs の廃棄処理の実態については把握が困難であるため、安全側の観点より使用時に廃棄分も含めた全量が排出されるとして「IE」と報告している。なお、1995 年当時においては、廃棄処理が実施されていないことが確認されている。

液体 PFCs 排出量から鉄道用整流器内蔵量 (詳細は 2.G.2.参照) を差し引いたものが溶剤

PFCs 排出量となる。

なお、1990～1994年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年についてはPFCs排出量と比例すると考えられるPFCs国内出荷量のデータを用いて外挿をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

HFCsの排出係数の不確実性については、-5%～+5%を採用した。活動量の不確実性は、2006年IPCCガイドラインの金属工業のTier 2手法の10%を採用した。その結果、排出量の不確実性は-11%～+11%と評価された。

PFCsの排出係数の不確実性については、使用量全量を排出量として計上しているため0%を使用した。活動量の不確実性は、2006年IPCCガイドラインの金属工業のTier 2手法の10%を採用した。その結果、排出量の不確実性は10%と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.7.6. その他利用 (2.F.6.)

研究・医療の用途に使用される部品に充填された冷媒量は把握し、他区分の冷媒に含めて計上している。

4.8. その他製品の製造および使用 (2.G.)

本カテゴリーでは、その他製品の製造及び使用により大気中に排出されるN₂O、PFCs、SF₆を扱う。当該カテゴリーは、「2.G.1. 電気設備」、「2.G.2 防衛利用」、「2.G.2 加速器」、「2.G.2 その他鉄道用シリコン整流器」、「2.G.3. 医療利用」、「2.G.3. 半導体・液晶製造工程における利用」から構成される。

2018年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は約1,784kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量(LULUCF分野を除く)の0.1%を占めている。このカテゴリーのN₂Oについて1990年度の排出量と比較すると27.2%の増加となっている。PFCs及びSF₆では1990年の排出量と比較すると84.0%の減少となっている。

表 4-86 2.G.その他製品の製造および使用からの排出量

ガス		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
N ₂ O	2.G.3	医療利用	kt-N ₂ O	0.93	1.41	1.10	0.86	0.39	0.32	0.31	0.29	0.25	1.11	0.22	0.23	0.21	
		半導体・液晶製造工程における利用	kt-N ₂ O	0.05	0.10	0.15	0.38	0.48	0.60	0.59	0.74	0.95	0.99	1.13	1.22	1.18	1.03
	合計		kt-N ₂ O	0.98	1.51	1.25	1.23	0.87	0.92	0.91	1.03	1.20	2.10	1.35	1.44	1.41	1.24
	合計		kt-CO ₂ 換算	291	449	371	368	259	275	270	308	359	627	402	429	420	370
ガス		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
PFCs	2.G.2	その他 鉄道用シリコン整流器	t	NO	NO	NO	0.03	0.34	0.47	0.64	NO	1.11	0.97	0.84	2.24	2.10	4.22
SF ₆	2.G.1	電気設備	t	355.8	460.5	127.6	39.4	31.2	27.3	31.0	31.5	28.2	26.4	26.8	28.7	27.2	25.1
		防衛利用	t	NO	NO	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
	2.G.2	加速器	t	30.8	35.2	34.5	35.7	35.5	33.8	34.1	35.1	35.1	35.1	34.3	33.4	33.9	34.0
			t	386.6	495.6	163.3	76.4	67.9	62.3	66.4	67.8	64.5	62.7	62.3	63.4	62.3	60.3
Fガス合計		kt-CO ₂ 換算	8,814	11,300	3,724	1,741	1,552	1,426	1,519	1,546	1,482	1,438	1,427	1,466	1,440	1,414	

4.8.1. 電気設備 (2.G.1.)

a) 排出源カテゴリーの説明

電気設備の製造時・使用時において SF₆が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

製造時については、SF₆購入量に製造時漏洩率を乗じたものが排出量となっている。

使用時については、設置されている機器に対する使用中の漏洩率から排出量を計算した。

排出係数は国独自のものである。点検時及び廃棄時には、SF₆の排出量を実測により求めた。

CRF における報告では、廃棄時の排出を使用時に含め「IE」として報告している。

○ 製造時排出量

$$E_{\text{manufacturing}} = AD \times EF_{\text{manufacturing}}$$

- $E_{\text{manufacturing}}$: 製造時 SF₆排出量
- AD : SF₆ガス購入量
- $EF_{\text{manufacturing}}$: 製造時漏洩率 [%]

○ 使用時排出量

$$E_{\text{use}} = \text{Stock} \times EF_{\text{use}}$$

- E_{use} : 使用時 SF₆排出量
- Stock : SF₆ガス保有量
- EF_{use} : 使用中の環境中への排出率 (0.1%)

○ 点検時排出量

$$E_{\text{inspection}} = E_{\text{measured}}$$

- $E_{\text{inspection}}$: 点検時 SF₆排出量
- E_{measured} : 実測による SF₆ガス排出量

○ 廃棄時排出量

$$E_{\text{disposed}} = E_{\text{measured}}$$

- E_{disposed} : 廃棄時 SF₆排出量
- E_{measured} : 実測による SF₆ガス排出量

電気絶縁ガス使用機器からの SF₆の排出量の関連指標を下表に示す。

表 4-87 電気設備からの SF₆排出

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
製造時排出量	kt-CO ₂ 換算	7,047.27	9,120.00	2,291.17	523.09	250.80	157.32	168.72	145.92	125.40	136.80	163.43	179.07	141.36	118.56
使用・点検・廃棄時 SF ₆ 排出量	kt-CO ₂ 換算	1,065.20	1,378.49	618.52	376.32	460.35	464.91	537.87	572.98	517.35	464.91	446.67	476.31	478.59	453.51

(出典) フロン類等対策ワーキンググループ資料、経済産業省提供データ、平成 25 年度第 1 回 HFC 等 4 ガス分科会資料

なお、1990～1994 年の排出量の算定に必要なデータが不足しているため、これらの年については SF₆購入量・機器 SF₆ガス保有量と比例すると考えられる SF₆国内出荷量、および 1995 年の絶縁機器への SF₆補充量、1995 年の製造時漏洩率、1995 年の使用時漏洩率のデータを用いて外挿をして算定を行っている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性においては、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用い、製造・使用時は-30～+30%、廃棄時は-20～+40%を使用した。活動量の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインの金属工業の Tier 2 手法の 10%を製造・使用時及び廃棄時の両方に使用した。その結果、製造・使用時の排出量の不確実性は-32～+32%、廃棄時の排出量の不確実性は-22～+41%と評価された。

■ 時系列の一貫性

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. c) 節を参照のこと。

d) QA/QC と検証

フッ化物製造—副生ガスの排出—HCFC-22 の製造(2.B.9.-)に記載した内容と同一である。
4.3.9.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.8.2. その他製品の使用からの SF₆、PFCs (2.G.2.)

4.8.2.1. 防衛利用 (2.G.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

早期警戒管制機 (AWACS) のレーダーシステム内の絶縁体として SF₆が使用されており、飛行機が上昇する際、気圧差維持のため自動的に SF₆がシステムから排出される。また、飛行機が降下する際には、機上の SF₆コンテナから自動的に SF₆がシステムに充填される。

b) 方法論

■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドラインの Tier 2 手法 (マスバランス法) に相当する算定方法で排出量を算定する。

$$E = D + M - R - I$$

<i>E</i>	: SF ₆ 排出量
<i>D</i>	: AWACS の SF ₆ コンテナ中の SF ₆ 減少量
<i>M</i>	: AWACS の SF ₆ コンテナ購入・交換に伴う SF ₆ 漏洩量
<i>R</i>	: SF ₆ 回収・破壊量
<i>I</i>	: AWACS 充填量の純増分

なお、AWACS 4 機は、1999 年 3 月 24 日に運用試験開始されていることから、1999 年から SF₆の排出が始まったものとする。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数を設定していないため、活動量の不確実性を評価することで排出量の不確実性を評価した。活動量の不確実性は、金属製造の 10%を採用した。その結果、排出量の不確実性は 10%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造 (2.A.1.) に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.8.2.2. 加速器 (2.G.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

SF₆は大学・研究施設、及び産業用・医療用 (がん治療) の粒子加速器の充填ガスとして使われている。機器の保守の際、SF₆は貯蔵タンクに移されるため、排出は主にガスの移動の際に起こる。

b) 方法論

■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドラインの Tier 1 手法で排出量を算定する。

$$E = N \times U \times C \times EF$$

<i>E</i>	: SF ₆ 排出量
<i>N</i>	: 加速器の数
<i>U</i>	: SF ₆ 使用率
<i>C</i>	: SF ₆ 充填量
<i>EF</i>	: SF ₆ 排出率

排出量の算定に用いた各加速器の種類毎の SF₆使用率、SF₆充填量、SF₆排出率、加速器数を以下に示す。

表 4-88 加速器の種類毎の SF₆使用率、SF₆充填量、SF₆排出率

項目	大学・研究施設設置の粒子加速器	産業用粒子加速器	医療用粒子加速器 ¹⁾	小規模(1MeV未満)の電子加速器
SF ₆ 使用率	33%	100%	100%	100%
SF ₆ 充填量	2,400kg	1,300kg	0.5kg	400kg ²⁾
SF ₆ 排出率	下表参照	0.07kg/kg	2.0kg/kg	0.07kg/kg

(注) 1) の医療用粒子加速器のうち、サイクロトロン及びシンクロトロンについては、SF₆を使用している機器はないと考えられるため、算定対象から除いている。

(出典) 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値。但し 2) は主要加速器メーカーへのヒアリング結果。

表 4-89 大学・研究施設設置の粒子加速器の SF₆排出率

項目	1990～2004年	2005～2009年	2010～2014年	2015～2018年
SF ₆ 排出率 [kg/kg]	0.070	0.063	0.063	0.052

(出典) JAEA-Technology 2010-023 「タンデム加速器高圧ガス製造施設の運転管理」、及び日本原子力研究開発機構 環境報告書 2011～2018 をもとに算出。

表 4-90 加速器の種類毎の数

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
粒子加速器数(大学・研究施設)	188	214	212	209	219	218	216	231	225	222	241	245	242	242
粒子加速器数(産業用)	143	164	145	181	181	174	179	184	188	190	193	183	191	191
粒子加速器数(医療用)	531	641	754	857	936	926	986	1,028	1,068	1,081	1,108	1,114	1,116	1,116
小規模電子加速器(1MeV未満)数	243	276	314	282	255	218	215	203	201	197	201	196	192	196

(出典) 日本アイソトープ協会「放射線利用統計」但し、小規模電子加速器のみ日本原子力産業会議「原子力年鑑」等

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインの医療用の粒子加速器の-50～+400%を採用した。活動量の不確実性は、金属製造の-10～+10%を採用した。その結果、排出量の不確実性は-51～+400%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造(2.A.1.)に記載した内容と同一である。4.2.1.d)節を参照のこと。

e) 再計算

2017年の加速器数が更新され、また、2005年以降の大学・研究施設設置の粒子加速器の SF₆排出率を見直したため、再計算が生じた。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.8.2.3. 防音窓(2.G.2.-)

本サブカテゴリーは、2006年 IPCC ガイドラインに算定方法が示されているが、算定方法検討会で定めた算定対象となる 3000t-CO₂換算を超える排出量とはならないため、重要な

いという意味での「NE」として報告した（別添5参照）。

4.8.2.4. 断熱特性：靴およびタイヤ（2.G.2.-）

断熱性用途のゴムにおける PFC 及び SF₆ の使用実績は確認されなかったため、「NO」と報告する。

4.8.2.5. その他 鉄道用シリコン整流器（2.G.2.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

鉄道用シリコン整流器の廃棄時において PFC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

環境省のハロン・液体 PFC 等管理方策検討調査（2006 年度）、ハロン・PFC 破壊処理実態等調査（2010 年度）から、地上設置機器、車載機器それぞれについて PFC-51-14 保有機器の設置台数、保有量、耐用年数が得られたため、これらを用いて、年度別の鉄道用シリコン整流器の廃棄台数に 1 台当たりの PFC 内蔵量を乗じて、鉄道用シリコン整流器に使用された PFC-51-14 の年度別廃棄量を推計した。これより当該年度の回収破壊量を減じて PFC 排出量を算定する。

$$E = M_{disposal} - R$$

E : 廃棄時における PFC 排出量
 $M_{disposal}$: PFC 廃棄量
 R : 回収破壊量

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、類似排出源である溶剤の不確実性 0% を採用した。活動量の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインの金属工業の Tier 2 手法の 10% を採用した。その結果、排出量の不確実性は 10% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.8.3. 製品の使用からの N₂O (2.G.3.)

4.8.3.1. 医療利用 (2.G.3.a)

a) 排出源カテゴリーの説明

麻酔剤（笑気ガス）の使用に伴い N₂O が排出される。2006 年より一部の病院で N₂O 分解装置が導入されているので、その削減量も排出量に反映している。なお、我が国では、麻酔剤として CO₂ は使用されていない。

b) 方法論

■ 算定方法

麻酔剤の使用に伴い排出される N₂O の排出量については、2005 年までは麻酔剤として医薬品の製造業者又は輸入販売業者から出荷された N₂O の量をそのまま計上した。2006 年以降については、麻酔の N₂O 分解装置を導入している国内病院における笑気ガス使用量、分解率 (99.9%) を用いて計算した N₂O 回収量を薬事用 N₂O 出荷量から差し引いて排出量として計上した。

$$E = S - (U \times DR)$$

E : 麻酔剤（笑気ガス）の使用に伴う N₂O 排出量
S : 薬事用 N₂O 出荷量
U : N₂O 分解装置を導入している病院における笑気ガス使用量
DR : 分解率

■ 排出係数

麻酔剤として使用される N₂O は、回収されない限り全量が大気中に放出されると仮定したため、排出係数は設定していない。

■ 活動量

2005 年までは厚生労働省「薬事工業生産動態統計年報」に示された、全身麻酔剤（亜酸化窒素）の出荷数量（暦年値）を用いた。2006 年以降 2009 年までは、上記出荷数量から麻酔の N₂O 分解装置を導入している国内 3 病院、2010 年以降については国内 4 病院における N₂O 回収量を差し引いた量を用いた。

表 4-91 全身麻酔剤 (N₂O) の出荷量及び国内病院における回収量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
笑気ガス出荷量	kg-N ₂ O	926,030	1,411,534	1,099,979	859,389	389,749	320,110	314,155	292,971	253,218	1,111,265	219,011	219,011	234,691	211,842
国内病院におけるN ₂ O	kg-N ₂ O	NO	NO	NO	NO	1,049	914	779	450	509	NO	NO	NO	NO	NO

a) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

医療用ガスとして使用される N₂O は、全量が大気中に放出されるとして排出量を算定しており、排出係数が設定されていないため、活動量の不確実性を評価することで排出量の不確実性を評価した。「薬事工業生産動態統計年報」は統計法に基づく基幹統計であるため、5%を採用した。

■ 時系列の一貫性

1990 年以来笑気ガスの出荷量は「薬事工業生産動態統計年報」に示された全身麻酔剤（亜酸化窒素）を一貫して使用している。

b) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

c) 再計算

2017年度について、笑気ガスの出荷量が更新されたため再計算が生じた。

d) 今後の改善計画及び課題

特になし。

4.8.3.2. その他（2.G.3.b）

4.8.3.2.a. 半導体・液晶製造工程における利用（2.G.3.b.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

半導体・液晶製造工程における絶縁酸化膜形成のための酸化剤として N_2O が使用されるが、未反応分が大気中に排出されているとみられる。

b) 方法論

■ 算定方法

半導体・液晶製造用 N_2O 出荷量全量を排出量とする。

$$E = AD$$

E : 半導体・液晶製造における N_2O 排出量

AD : 半導体・液晶製造向け N_2O 出荷量

■ 排出係数

活動量＝排出量とするため、排出係数は設定しない。

■ 活動量

日本産業・医療ガス協会ウェブサイトにおいて報告されている半導体・液晶製造用 N_2O 出荷量を活動量とする。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

半導体・液晶製造工程において使用される N_2O は、全量が大気中に放出されるとして排出量を算定しており、排出係数が設定されていないため、活動量の不確実性を評価することで排出量の不確実性を評価した。活動量の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 5%を採用した。

■ 時系列の一貫性

1990年以來半導体・液晶製造用 N_2O 出荷量は日本産業・医療ガス協会において報告されているものを一貫して使用している。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

半導体・液晶製造用 N₂O 出荷量全量を排出量として計上しているため、過大推計の可能性がある。

4.9. その他 (2.H.)

表 4-92 食品・飲料産業からの排出量

ガス		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO ₂	2.H.2 食品・飲料産業	kt-CO ₂	64.27	71.54	86.50	90.05	71.29	75.85	75.81	76.41	82.33	80.44	83.04	79.41	85.07	80.41
	2.H.3 輸入炭酸ガスからの排出	kt-CO ₂	0.34	0.31	0.17	0.18	0.89	0.94	12.31	23.50	11.20	10.16	13.69	27.54	25.57	24.92
	合計	kt-CO ₂	64.61	71.85	86.67	90.23	72.19	76.79	88.12	99.91	93.53	90.60	96.74	106.95	110.64	105.33

4.9.1. 食品・飲料産業 (2.H.2.)

「2.B.8.d.酸化エチレン製造」の排出量算定と併せて算定した CO₂回収量を、本カテゴリーにおいて計上する。

なお、我が国における炭酸ガス・ドライアイス製造用の主な CO₂供給源として、他に石油精製プラント、アンモニア製造プラント、製鉄プラント等が存在するが、石油精製プラント・製鉄プラントについては「1.A.燃料の燃焼」、アンモニア製造プラントについては「2.B.1.アンモニア製造」においてすでに計上されている。

4.9.2. 輸入炭酸ガスからの排出 (2.H.3.)

a) 排出源カテゴリーの説明

輸入炭酸ガス（すべてドライアイス）の使用に伴い CO₂が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

炭酸ガスの輸入量全量を CO₂排出量として計上する。

■ 排出係数

活動量をそのまま排出量とするため排出係数は設定しない。

■ 活動量

「貿易統計（財務省）」における二酸化炭素の輸入量を排出量とする。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

炭酸ガスの輸入量が全量大気中に放出されるとして排出量を算定しており、排出係数が設定されていないため、活動量の不確実性を評価することで排出量の不確実性を評価した。活動量の不確実性は、活動量に貿易統計を用いる鉄鋼製造における電気炉の使用の不確実性 5%を採用した。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

セメント製造（2.A.1.）に記載した内容と同一である。4.2.1. d) 節を参照のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリに関する1996年改訂IPCCガイドライン」(1997)
2. IPCC「温室効果ガスインベントリにおけるグッドプラクティスガイダンス及び不確実性管理報告書」(2000年)
3. IPCC「国家温室効果ガスインベントリに関する2006年IPCCガイドライン」(2006)
4. IUPAC「*Atomic Weights of the Elements 1999* (<http://www.ciaaw.org/pubs/TSAW-1999.pdf>)」2001
5. 環境省報道発表「冷媒フロンの廃棄等の見通しについて<参考1>」(平成12年7月31日)
6. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第2部」(平成14年8月)
7. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第1部」(平成18年8月)
8. 環境省「揮発性有機化合物(VOC)排出インベントリについて(報告)」(平成19年3月)
9. 環境省「ハロン・液体PFC等管理方策検討調査」(2006年度)
10. 環境省「ハロン・PFC破壊処理実態等調査」(2010年度)
11. 環境省「平成23年度PRTR届出外排出量の推計方法」
12. 環境省「平成25年度温室効果ガス排出量算定方法検討会第1回HFC等4ガス分科会資料」(平成26年1月)
13. 環境省「平成26年度温室効果ガス排出量算定方法検討会第2回HFC等4ガス分科会資料」(平成27年1月)
14. 環境省「業務用冷凍空調機器からのフロン類充填量及び回収量等集計結果の詳細」
15. 経済産業省「エネルギー生産・需給統計年報」
16. 経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」
17. 経済産業省「産業構造審議会製造産業分科会化学物質政策小委員会フロン類等対策ワーキンググループ資料」
18. 経済産業省「産業構造審議会化学・バイオ部会第21回地球温暖化防止対策小委員会資料」(2009年)
19. 経済産業省「産業構造審議会化学・バイオ部会地球温暖化防止小委員会第2回冷媒対策ワーキンググループ資料」(2010年7月26日)
20. 経済産業省資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」
21. 経済産業省「資源・エネルギー統計年報」
22. 経済産業省「資源統計年報」
23. 経済産業省「石油等消費動態統計年報」
24. 経済産業省「窯業・建材統計年報」
25. 経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」
26. 通商産業省「平成9年第1回化学品審議会リスク管理部会温室効果化学物質分科会通商産業省作成資料」
27. 財務省「貿易統計」
28. 国土交通省「自動車輸送統計年報」
29. 国土交通省「自動車燃料消費量統計年報」
30. 国土交通省「鉄道統計年報」
31. 国土交通省「鉄道車両等生産動態統計年報」
32. 国土交通省「海事レポート」
33. 厚生労働省「薬事工業生産動態統計年報」
34. 農林統計協会「ポケット肥料要覧」
35. 日本溶剤リサイクル工業会「有機溶剤使用量・排出処理に関する調査」(2012年5月)
36. 日本溶剤リサイクル工業会「溶剤リサイクル数量調査」

37. 経済産業研究所「不均一価格物量表」
38. 石灰石鉱業協会「石灰石の話」(2005年)
39. カーボンブラック協会「カーボンブラック便覧」
40. 石油学会「石油化学プロセス」(2001年)
41. 重化学工業通信社「化学品ハンドブック」
42. 重化学工業通信社「日本の石油化学工業」
43. 日本アイソトープ協会「放射線利用統計」
44. 日本原子力産業会議「原子力年鑑」
45. 放射線利用振興協会「放射線と産業 No.69」(1996)
46. 海洋水産システム協会「海洋水産エンジニアリング」
47. 石油天然ガス・金属鉱物資源機構「鉱物資源マテリアルフロー」
48. 日本塗料工業会「塗料からのVOC排出実態推計のまとめ」
49. 日本塗料工業会「塗料製造業実態調査」
50. 日本産業・医療ガス協会ウェブサイト (<http://www.jimga.or.jp>)
51. JAEA-Technology 2010-023「タンデム加速器高圧ガス製造施設の運転管理」
52. 日本原子力研究開発機構「環境報告書」

第5章 農業分野

5.1. 農業分野の概要

農業分野における温室効果ガス排出量は、3A、3B、3C、3D、3F、3G、3Hの7つのカテゴリにおいて算定を行なう。「3A：消化管内発酵」では牛、水牛、めん羊、山羊、馬、豚の消化管内のメタン発酵により生成されたCH₄の体内からの排出について報告を行う。「3B：家畜排せつ物の管理」では牛、水牛、めん羊、山羊、馬、豚、家禽類（採卵鶏とブロイラー）、うさぎ、ミンクが排せつする排せつ物の処理に伴うCH₄及びN₂Oの発生について報告を行う。「3C：稲作」では稲を栽培するために耕作された水田（常時湛水田、間断灌漑水田）からのCH₄の排出について報告を行う。「3D：農用地の土壌」では農用地の土壌からのN₂Oの直接排出及び間接排出について報告を行う。「3E：サバンナの野焼き」については、我が国には発生源が存在しないためNOとして報告する。「3F：農作物残さの野焼き」では農業活動に伴い穀物、豆類、根菜類、さとうきびを焼却した際のCH₄及びN₂Oの排出について報告を行う（CH₄、N₂O以外にもCO、NO_xが発生する。CO、NO_xは別添3参照）。「3G：石灰施用」および「3H：尿素施用」では、それぞれ土壌に石灰（炭酸カルシウム等）、尿素を施用した際に発生するCO₂について報告を行う。

2018年度における当該分野からの温室効果ガス排出量は33,252 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCFを除く）の2.7%を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると11.1%の減少となっている。

農業分野で用いている方法論のTierは、表5-1に示すとおりである。

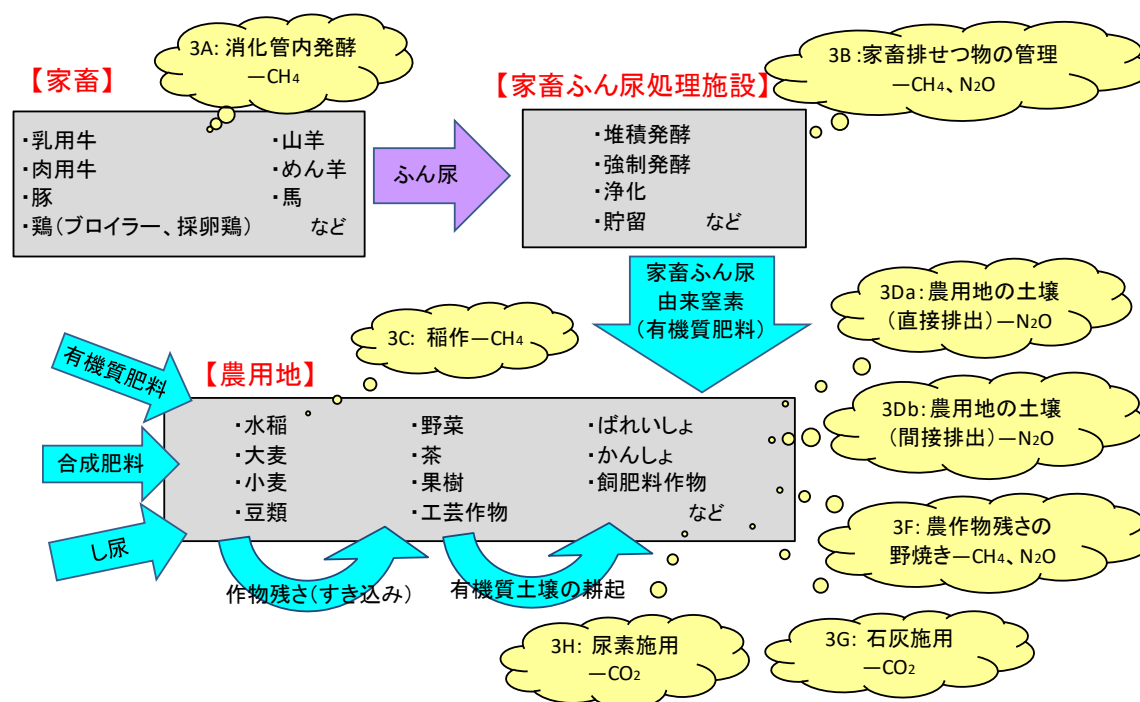


図 5-1 我が国の農業分野におけるカテゴリ間関係

表 5-1 農業分野で用いている方法論の Tier

温室効果ガスの種類 カテゴリー	CO ₂		CH ₄		N ₂ O	
	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数
3.A. 消化管内発酵			CS,T1	CS,D		
3.B. 家畜排せつ物の管理			CS,T1	CS,D	CS,T1	CS,D
3.C. 稲作			T3	CS		
3.D. 農用地の土壌					CS,T2	CS,D
3.F. 農作物残さの野焼き			T1	D	T1	D
3.G. 石灰施用	T1	D				
3.H. 尿素施肥	T1	D				

D: IPCC デフォルト値、T1: IPCC Tier1、T2: IPCC Tier2、T3: IPCC Tier3、CS: 国独自の方法または排出係数

5.2. 消化管内発酵 (3.A.)

牛、水牛、めん羊、山羊などの反すう動物は複胃を持っており、第一胃でセルロース等を分解するために嫌氣的発酵を行い、その際に CH₄が発生する。馬、豚は反すう動物ではなく単胃であるが、消化管内発酵により CH₄を微量に発生させ、大気中に放出している。消化管内発酵 (3.A.) ではこれらの CH₄排出に関する算定、報告を行なう。

2018 年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は 7,466 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 0.6% を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 20.8% の減少となっている。この 1990 年度からの減少の主な要因は牛の家畜頭数の減少によるものである。

表 5-2 消化管内発酵に伴う CH₄排出量 (3.A.)

ガス	家畜種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CH ₄	3.A.1.- 乳用牛	kt-CH ₄	192.1	184.4	171.2	162.9	149.5	146.3	146.2	143.4	139.7	137.0	136.4	133.5	133.5	133.5
	3.A.1.- 肉用牛		166.6	172.2	171.7	168.0	174.3	166.5	164.7	159.6	154.8	150.0	150.3	151.1	151.7	150.7
	3.A.2. めん羊		0.167	0.115	0.097	0.071	0.113	0.159	0.160	0.129	0.138	0.140	0.140	0.143	0.158	0.162
	3.A.3. 豚		15.9	13.9	13.7	13.5	13.8	13.7	13.6	13.6	13.4	13.2	13.0	13.1	12.9	12.8
	3.A.4.- 水牛		0.011	0.007	0.006	0.005	0.004	0.004	0.004	0.005	0.005	0.006	0.006	0.006	0.006	0.006
	3.A.4.- 山羊		0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
	3.A.4.- 馬		2.1	2.1	1.9	1.6	1.5	1.3	1.4	1.3	1.3	1.2	1.3	1.3	1.4	1.4
	合計		kt-CH ₄	376.9	372.7	358.7	346.0	339.2	328.1	326.2	318.1	309.5	301.7	301.4	299.2	299.8
	kt-CO ₂ 換算	9,423	9,318	8,966	8,651	8,480	8,202	8,154	7,953	7,737	7,543	7,534	7,481	7,494	7,466	

5.2.1. 牛 (3.A.1.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは牛の消化管内発酵による CH₄排出に関する算定、報告を行なう。

b) 方法論

■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Volume 4, Page 10.25, Fig.10.2) に従うと、乳用牛及び肉用牛については Tier 2 法を用いて算定を行うこととされている。Tier 2 法では、家畜の総エネルギー摂取量にメタン変換係数を乗じて排出係数を算定することとされているが、日本では畜産関係の研究において乾物摂取量を用いた算定を行っており、研究結果を利用することによってより排出実態に即した算定結果が得られると考えられる。このため、牛の消化管内発酵に伴う CH₄排出量については、Tier 2 法と類似した日本独自の手法を用い、牛 (乳用牛、肉用牛) の飼養頭数に、乾物摂取量に基づき設定した排出係数を乗じて CH₄排出量を求めた。

$$E = \sum (EF_i \times A_i)$$

- E : 牛の消化管内発酵による CH₄排出量 [kg-CH₄]
 EF_i : 牛の種類 i の消化管内発酵に関する CH₄排出係数 [kg-CH₄/頭]
 A_i : 牛の種類 i の頭数 [頭]

牛は、月齢3ヶ月頃から粗飼料を本格的に摂取し始めるため、月齢3ヶ月以上の牛を消化管内発酵によるCH₄排出の算定対象とする（月齢3ヶ月未満の牛は算定対象外）。我が国の排出実態を反映するために、牛の消化管内発酵に伴うCH₄排出の算定区分を表5-3に示すように定義し、種類、年齢ごとに排出量の算定を行った。

表 5-3 牛の消化管内発酵に伴う CH₄排出の算定区分

家畜種		排出量算定の前提条件等		区分の補足情報	
乳用牛	搾乳牛	初産	飼養頭数に、乳用牛群能力検定成績に記載の産次別頭数から算出した産児別頭数割合を用いて算出する。	搾乳している牛。畜産統計において、2歳以上の頭数が記載されている。	
		2産			
		3産以上			
	乾乳牛		—	現在、搾乳していない期間の搾乳目的の牛。	
	育成牛	2歳未満、7ヶ月以上	飼養頭数の6/24に相当する牛は月齢6ヶ月以下と仮定し、当算定区分の対象外としている。よって、2歳未満の飼養頭数の18/24が対象となる。	2歳未満の牛で搾乳目的の牛。畜産統計において、2歳未満の頭数が記載されている。	
		月齢3～6ヶ月	2歳未満の飼養頭数の4/24に相当する、3～6ヶ月の育成牛が対象となる。		
月齢3ヶ月未満		2歳未満の飼養頭数の2/24に相当する。CH ₄ 排出量算定の対象外。			
肉用牛	繁殖雌牛	2歳以上	—	繁殖を目的とした雌牛（乳用牛を除く）。畜産統計において、1歳未満、1歳、2歳、3歳以上の頭数が記載されている。	
		2歳未満、7ヶ月以上	1歳未満の飼養頭数の6/12に相当する牛は月齢6ヶ月以下と仮定し、当算定区分の対象外としている。よって、1歳未満の飼養頭数の6/12と2歳未満である1歳の飼養頭数を合算している。		
		月齢3～6ヶ月	1歳未満の飼養頭数の4/12に相当する、3～6ヶ月の牛が対象となる。		
		月齢3ヶ月未満	1歳未満の飼養頭数の2/12に相当する。CH ₄ 排出量算定の対象外。		
	肥育牛	和牛（雄）	1歳以上	—	日本在来種であり、食肉専用種。畜産統計において、肉用種おすととして、1歳未満、1歳、2歳以上の頭数が記載されている。
			1歳未満、7ヶ月以上	1歳未満の飼養頭数の6/12に相当する牛は月齢6ヶ月以下と仮定し、当算定区分の対象外としている。よって、1歳未満の飼養頭数の6/12が対象となる。	
			月齢3～6ヶ月	1歳未満の飼養頭数の4/12に相当する、3～6ヶ月の牛が対象となる。	
			月齢3ヶ月未満	1歳未満の飼養頭数の2/12に相当する。CH ₄ 排出量算定の対象外。	
		和牛（雌）	1歳以上	—	日本在来種である食肉専用種の雌。畜産統計において、肉用種めすととして、1歳未満、1歳、2歳など（8区分）以上の頭数が記載されている。
			1歳未満、7ヶ月以上	和牛（雄）の同月齢区分と同様	
			月齢3～6ヶ月	和牛（雄）の同月齢区分と同様	
			月齢3ヶ月未満	和牛（雄）の同月齢区分と同様	
乳用種	乳用種	月齢7ヶ月以上	飼養頭数の6/24に相当する牛は月齢6ヶ月以下と仮定し、当算定区分の対象外としている。よって、2歳未満の飼養頭数の18/24が対象となる。	肉用目的の乳用種の牛（ホルスタインなど）。	
		月齢3～6ヶ月	2歳未満の飼養頭数の4/24に相当する、3～6ヶ月の牛が対象となる。		
		月齢3ヶ月未満	2歳未満の飼養頭数の2/24に相当する。CH ₄ 排出量算定の対象外。		
	交雑種	月齢7ヶ月以上	乳用種の月齢7ヶ月以上の区分と同様	乳用種の雌に肉用種の雄を交配して肉用目的に生産されたF1牛など。	
		月齢3～6ヶ月	乳用種の月齢3～6ヶ月以上の区分と同様		
		月齢3ヶ月未満	乳用種の月齢3ヶ月未満の区分と同様		

■ 排出係数

牛の消化管内発酵に伴う CH₄の排出係数については、日本における反すう家畜を対象とし

た呼吸試験の結果（乾物摂取量に対する CH₄排出量の測定データ）に基づいて設定した。測定結果によると、反すう家畜の消化管内発酵に伴う CH₄排出量は、乾物摂取量を説明変数とする次式により算定できることが明らかにされている（柴田ら（1993））。

$$EF = Y / L_{CH_4} \times Mol_{CH_4} \times Day$$

$$Y = -17.766 + 42.793 \times DMI - 0.849 \times (DMI)^2$$

<i>EF</i>	: 牛の消化管内発酵 CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ /頭]
<i>Y</i>	: 1頭あたり1日あたりの CH ₄ 発生量 [l/頭/日]
<i>L_{CH₄}</i>	: CH ₄ 1mol 体積 [l/mol]
<i>Mol_{CH₄}</i>	: CH ₄ 分子量 [kg/mol]
<i>Day</i>	: 年間日数 [日]
<i>DMI</i>	: 乾物摂取量 [kg/日]

この算定式に、牛の種類ごとの乾物摂取量を当てはめ、毎年の排出係数をそれぞれ設定した。乾物摂取量は農業・食品産業技術総合研究機構 編「日本飼養標準」に記載の牛の種類ごとに設定した算定式に、体重及び増体日量を代入することで算定した。乳用牛では乾物摂取量算定に脂肪補正乳量の値も用いた。なお、乳用牛（搾乳牛及び乾乳牛）は2006年に、肉用牛（和牛・雄）は2008年に乾物摂取量の算定式が改訂された。

脂肪補正乳量については、農林水産省「牛乳乳製品統計」及び農林水産省「畜産統計」を基に計算した乳量と、農林水産省「畜産物生産費統計」に記載の乳脂肪率とを使用して算出し、毎年度データを更新した。

乳用牛の内の搾乳牛と乾乳牛の体重は、(社)家畜改良事業団「乳用牛群能力検定成績」に記載の産次別平均分娩時月齢を「日本飼養標準」に記載の成長曲線に当てはめて産次別体重を求め、各産次別体重の平均値を採用した。ただし、「乳用牛群能力検定成績」に記載の産次別平均分娩時月齢について、初産牛の平均分娩時月齢は毎年掲載されているものの、2産以上の牛の月齢は2014年以前の記載がなく、2014年以前の2産以上の牛の値は、2015年度値で代用した。また、乳用牛の成長曲線を示す回帰式は、1994年、1999年、2006年に改訂されており、当該年以降はそれぞれの改訂された式を用いた。育成牛と肉用牛の体重及び増体日量は、「日本飼養標準」の各巻末にある牛の種類ごとの各月齢における体重の一覧表を用いた。

表 5-4 牛の乾物摂取量 (DMI) の算定式

家畜種		算定式
乳用牛	搾乳牛	2006 年以降: $DMI = 1.3922 + 0.05839 \times W^{0.75} + 0.40497 \times FCM$ $DMI = 1.9120 + 0.07031 \times W^{0.75} + 0.34923 \times FCM$ (初産牛) $FCM = (15 \times FAT / 100 + 0.4) \times MILK$ 2005 年以前: $DMI = 2.98120 + 0.00905 \times W + 0.41055 \times FCM$ $FCM = (15 \times FAT / 100 + 0.4) \times MILK$
	乾乳牛	$DMI = 0.017 \times W$
	育成牛	$DMI = 0.49137 + 0.01768 \times W + 0.91754 \times DG$
肉用牛	繁殖雌牛	48 カ月まで: $DMI = [0.1067 \times W^{0.75} + (0.0639 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / (q \times 4.4)$ $q = 0.4213 + 0.1491 \times DG$ 49 カ月以降: $DMI = [0.1119 \times W^{0.75} + (0.0639 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / 1.81$ 妊娠末期の維持 (妊娠末期 2 カ月に加算): DMI に 1.0 kg/日を加算 授乳中の維持 (授乳期 5 カ月に加算): DMI に 0.5 kg/日/乳量を加算 ※ 対象の月齢は 120 カ月まで
	和牛 (雄)	2008 年以降: $DMI = -3.481 + 2.668 \times DG + 4.548 \times 10^{-2} \times W - 7.207 \times 10^{-5} \times W^2 + 3.867 \times 10^{-8} \times W^3$ 2007 年以前: $DMI = [0.1124 \times W^{0.75} + (0.0546 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / \{q \times (1.653 - 0.00123 \times W)\} / (q \times 4.4)$ $q = 0.5304 + 0.0748 \times DG$
	和牛 (雌)	$DMI = [0.1108 \times W^{0.75} + (0.0609 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / (q \times 4.4)$ $q = 0.5018 + 0.0956 \times DG$
	乳用種 (月齢 7 ヶ月以上)	$DMI = [0.1291 \times W^{0.75} + (0.0510 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / (q \times 4.4)$ $q = (0.933 + 0.00033 \times W) \times (0.498 + 0.0642 \times DG)$
	乳用種 (月齢 3~6 ヶ月)	$DMI = [0.1291 \times W^{0.75} + \{1.00 + 0.030 \times W^{0.75}\} \times DG] / (0.78 \times q + 0.006) / (q \times 4.4)$ $q = (0.859 - 0.00092 \times W) \times (0.790 + 0.0411 \times DG)$
	交雑種	$DMI = [0.1208 \times W^{0.75} + (0.0531 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / (q \times 4.4)$ $q = (0.933 + 0.00033 \times W) \times (0.498 + 0.0642 \times DG)$

(注) W: 体重、FCM: 脂肪補正乳量、FAT: 乳脂肪率、MILK: 乳量、DG: 増体日量、q: エネルギー代謝率 (出典)「日本飼養標準」

表 5-5 牛の乳量 (MILK) 及び乳脂肪率 (FAT)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
乳量 (搾乳牛) 三産以上	kg/頭/日	21.9	23.6	24.7	26.6	27.1	26.9	26.9	27.3	27.4	28.0	28.6	28.7	28.8	28.8
乳量 (搾乳牛) 二産	kg/頭/日	21.4	23.1	24.2	26.0	26.5	26.4	26.3	26.8	26.9	27.3	27.9	28.0	28.1	28.1
乳量 (搾乳牛) 初産	kg/頭/日	18.5	19.9	20.9	22.4	22.8	22.7	22.7	23.0	23.1	23.5	24.0	24.2	24.5	24.4
乳脂肪率 (搾乳牛)	%	3.7	3.8	3.9	4.0	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9

表 5-6 牛の体重 (W) [kg・頭⁻¹]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
乳用牛	搾乳牛 (三産以上)	653.8	653.5	673.7	673.4	685.8	685.6	685.9	685.7	685.2	684.7	684.7	684.3	683.9	683.8		
	搾乳牛 (二産)	598.4	601.6	622.6	622.6	623.9	623.9	623.9	623.9	623.9	623.9	623.9	623.4	622.5	622.5		
	搾乳牛 (初産)	517.2	528.0	551.1	538.3	524.6	523.6	525.6	524.6	524.6	523.6	523.6	522.6	521.6	520.5		
	乾乳牛	601.0	602.4	625.3	618.5	625.6	623.3	621.3	619.9	620.1	618.7	617.4	616.8	616.9	616.6		
	育成牛 (2歳未満、7ヶ月以上)	342.4	349.3	364.9	374.2	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1		
	育成牛 (月齢3~6ヶ月)	118.9	119.2	123.0	135.3	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8		
肉用牛	繁殖雌牛	2歳以上	471.1	471.1	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	
		2歳未満、7ヶ月以上	314.9	314.9	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	
		月齢3~6ヶ月	118.4	118.4	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	
	肥育牛	和牛・雌 (1歳以上)	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	
		和牛・雄 (1歳未満、7ヶ月以上)	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	
		和牛・雄 (月齢3~6ヶ月)	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	
		和牛・雌 (1歳以上)	382.4	382.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	
		和牛・雌 (1歳未満、7ヶ月以上)	219.8	219.8	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	
		和牛・雌 (月齢3~6ヶ月)	118.4	118.4	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	
		乳用種 (月齢7ヶ月以上)	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8
		乳用種 (月齢3~6ヶ月)	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	
		交雑種 (月齢7ヶ月以上)	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	
交雑種 (月齢3~6ヶ月)	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4			

表 5-7 牛の増体日量 (DG) [kg・頭⁻¹日⁻¹]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
乳用牛	搾乳牛	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	乾乳牛	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	育成牛 (2歳未満、7ヶ月以上)	0.60	0.63	0.65	0.59	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58		
肉用牛	繁殖雌牛	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	2歳以上	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01		
	2歳未満、7ヶ月以上	0.50	0.50	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60		
	月齢3~6ヶ月	0.74	0.74	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93		
	肥育牛	和牛・雄 (1歳以上)	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	
		和牛・雄 (1歳未満、7ヶ月以上)	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	
		和牛・雄 (月齢3~6ヶ月)	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	
		和牛・雌 (1歳以上)	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	
		和牛・雌 (1歳未満、7ヶ月以上)	0.71	0.71	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	
		和牛・雌 (月齢3~6ヶ月)	0.74	0.74	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	
		乳用種 (月齢7ヶ月以上)	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93
		乳用種 (月齢3~6ヶ月)	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14
		交雑種 (月齢7ヶ月以上)	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93
交雑種 (月齢3~6ヶ月)	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14		

表 5-8 牛の乾物摂取量 (DMI) [kg・日⁻¹]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
乳用牛	搾乳牛 (三産以上)	17.5	18.3	19.1	19.9	20.1	20.0	20.0	20.1	20.1	20.3	20.6	20.7	20.7	20.7		
	搾乳牛 (二産)	16.9	17.7	18.4	19.3	19.3	19.2	19.2	19.4	19.4	19.6	19.8	19.8	19.9	19.9		
	搾乳牛 (初産)	14.9	15.7	16.4	17.0	17.5	17.4	17.5	17.6	17.6	17.7	17.9	17.9	18.0	18.0		
	乾乳牛	10.2	10.2	10.6	10.5	10.6	10.6	10.6	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5		
	育成牛 (2歳未満、7ヶ月以上)	7.1	7.2	7.5	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7		
	育成牛 (月齢3~6ヶ月)	3.2	3.2	3.4	3.7	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	
肉用牛	繁殖雌牛	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	2歳以上	7.7	7.7	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0		
	2歳未満、7ヶ月以上	6.3	6.3	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4		
	月齢3~6ヶ月	3.4	3.4	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7		
	肥育牛	和牛・雄 (1歳以上)	8.2	8.2	8.2	8.2	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	
		和牛・雄 (1歳未満、7ヶ月以上)	6.5	6.5	6.5	6.5	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	
		和牛・雄 (月齢3~6ヶ月)	3.6	3.6	3.6	3.6	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	
		和牛・雌 (1歳以上)	5.6	5.6	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	
		和牛・雌 (1歳未満、7ヶ月以上)	4.7	4.7	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	
		和牛・雌 (月齢3~6ヶ月)	3.0	3.0	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	
		乳用種 (月齢7ヶ月以上)	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5
		乳用種 (月齢3~6ヶ月)	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4
		交雑種 (月齢7ヶ月以上)	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3
交雑種 (月齢3~6ヶ月)	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6		

表 5-9 牛の消化管内発酵に関する CH₄排出係数 [kg-CH₄・頭⁻¹年⁻¹]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
乳用牛	搾乳牛 (三産以上)	122.9	125.9	127.7	129.8	130.1	129.9	130.3	130.3	130.3	130.7	131.6	131.4	131.5	131.5		
	搾乳牛 (二産)	120.5	123.8	125.8	128.1	128.3	128.0	128.4	128.4	128.5	128.9	129.9	129.6	129.7	129.7		
	搾乳牛 (初産)	112.7	116.4	118.9	121.1	122.9	122.6	123.0	123.0	123.0	123.4	124.4	124.3	124.5	124.4		
	乾乳牛	86.3	86.6	89.0	88.2	89.0	88.7	88.8	88.4	88.4	88.2	88.3	88.0	88.0	88.0		
	育成牛 (2歳未満、7ヶ月以上)	63.4	64.7	66.9	67.8	68.0	68.0	68.1	68.0	68.0	68.0	68.1	68.0	68.0	68.0		
	育成牛 (月齢3~6ヶ月)	29.1	29.3	30.4	33.8	34.4	34.4	34.5	34.4	34.4	34.4	34.4	34.5	34.4	34.4	34.4	
肉用牛	繁殖雌牛	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	2歳以上	68.3	68.5	70.7	70.7	70.7	70.7	70.9	70.7	70.7	70.7	70.9	70.7	70.7	70.7		
	2歳未満、7ヶ月以上	56.9	57.0	66.0	66.0	66.0	66.0	66.1	66.0	66.0	66.0	66.1	66.0	66.0	66.0		
	月齢3~6ヶ月	30.3	30.3	33.7	33.7	33.7	33.7	33.8	33.7	33.7	33.7	33.8	33.7	33.7	33.7		
	肥育牛	和牛・雄 (1歳以上)	72.1	72.3	72.1	72.1	68.5	68.5	68.7	68.5	68.5	68.5	68.7	68.5	68.5	68.5	
		和牛・雄 (1歳未満、7ヶ月以上)	58.8	59.0	58.8	58.8	61.7	61.7	61.8	61.7	61.7	61.7	61.8	61.7	61.7	61.7	
		和牛・雄 (月齢3~6ヶ月)	33.0	33.1	33.0	33.0	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	
		和牛・雌 (1歳以上)	51.0	51.2	57.2	57.2	57.2	57.2	57.3	57.2	57.2	57.2	57.3	57.2	57.2	57.2	
		和牛・雌 (1歳未満、7ヶ月以上)	43.1	43.2	53.7	53.7	53.7	53.7	53.8	53.7	53.7	53.7	53.8	53.7	53.7	53.7	
		和牛・雌 (月齢3~6ヶ月)	26.7	26.8	30.9	30.9	30.9	30.9	31.0	30.9	30.9	30.9	31.0	30.9	30.9	30.9	30.9
		乳用種 (月齢7ヶ月以上)	74.2	74.4	74.2	74.2	74.2	74.2	74.4	74.2	74.2	74.2	74.4	74.2	74.2	74.2	74.2
		乳用種 (月齢3~6ヶ月)	5.4	4.4	2.7	2.9	2.6	2.5	2.4	2.3	2.2	2.2	2.1	2.0	1.9	1.8	1.7
		交雑種 (月齢7ヶ月以上)	73.0	73.2	73.0	73.0	73.0	73.0	73.2	73.0	73.0	73.0	73.2	73.0	73.0	73.0	73.0
交雑種 (月齢3~6ヶ月)	42.1	42.2	42.1	42.1	42.1	42.1	42.2	42.1	42.1	42.1	42.2	42.1	42.1	42.1	42.1		

■ 活動量

当該カテゴリーの活動量については、「畜産統計」に示された、毎年2月1日時点の各種牛の飼養頭数を用いた。

表 5-10 牛の飼養頭数 [1000 頭]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
乳用牛	搾乳牛（三産以上）	510	467	447	391	392	374	364	347	334	324	317	308	309	308
	搾乳牛（二産）	260	250	241	229	208	196	197	203	202	191	194	193	194	193
	搾乳牛（初産）	313	318	283	280	230	235	251	248	236	235	241	234	228	228
	乾乳牛	332	299	249	231	200	195	200	194	185	184	185	179	176	171
	育成牛（2歳未満、7ヶ月以上）	491	445	379	379	341	351	328	323	328	328	306	307	316	323
	育成牛（月齢3～6ヶ月）	109	99	84	84	76	78	73	72	73	73	68	68	70	72
	育成牛（月齢3ヶ月未満）	55	49	42	42	38	39	36	36	36	36	34	34	35	36
乳用牛合計		10,187	9,266	8,515	7,745	7,219	7,106	6,984	6,858	6,762	6,699	5,328	3,983	3,330	2,002
肉用牛	繁殖雌牛														
	2歳以上	612	591	555	536	588	575	560	541	520	505	511	511	517	528
	2歳未満、7ヶ月以上	84	69	68	71	79	78	68	64	62	61	64	69	75	79
	月齢3～6ヶ月	12	9	8	9	11	11	9	9	9	9	9	12	12	13
	月齢3ヶ月未満	6	4	4	5	6	5	5	4	5	4	5	6	6	6
	和牛・雄（1歳以上）	368	412	385	374	425	409	405	396	381	368	371	374	379	380
	和牛・雄（1歳未満、7ヶ月以上）	125	133	114	119	132	127	123	116	115	112	109	110	116	120
	和牛・雄（月齢3～6ヶ月）	83	89	76	80	88	85	82	77	77	75	72	73	77	80
	和牛・雄（月齢3ヶ月未満）	42	44	38	40	44	42	41	39	38	37	36	37	39	40
	和牛・雌（1歳以上）	197	265	246	290	339	336	343	337	328	313	293	310	312	310
	和牛・雌（1歳未満、7ヶ月以上）	102	105	93	89	106	101	98	93	91	89	86	81	84	89
	和牛・雌（月齢3～6ヶ月）	68	70	62	59	70	67	65	62	60	59	57	54	56	60
	和牛・雌（月齢3ヶ月未満）	34	35	31	30	35	34	33	31	30	30	29	27	28	30
	乳用種（月齢7ヶ月以上）	665	541	333	351	316	309	294	282	276	259	249	235	221	206
	乳用種（月齢3～6ヶ月）	148	120	74	78	70	69	65	63	61	58	55	52	49	46
	乳用種（月齢3ヶ月未満）	74	60	37	39	35	34	33	31	31	29	28	26	25	23
	交雑種（月齢7ヶ月以上）	140	267	511	438	410	362	374	373	363	362	379	391	388	371
交雑種（月齢3～6ヶ月）	31	59	114	97	91	81	83	83	81	80	84	87	86	82	
交雑種（月齢3ヶ月未満）	16	30	57	49	46	40	42	41	40	40	42	43	43	41	
肉用牛合計		2,805	2,901	2,806	2,755	2,892	2,763	2,723	2,642	2,567	2,489	2,479	2,499	2,515	2,503

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は算定式の95%信頼区間から算出した（乳用牛：-26%～+32%、肉用牛：-40%～+49%）。牛の頭数（活動量）は「畜産統計」における全頭調査の結果であり標準誤差が示されていないことから、「畜産統計」の豚の数値（1%）で代用した。その結果、排出量の不確実性は乳用牛で-26%～+32%、肉用牛で-40%～+49%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は上記した方法を使用して、1990年度から一貫した方法で算定している。活動量は「畜産統計」を使用し、1990年度から一貫した方法を使用している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

また、2016年度に開催されたQA活動（QAワーキンググループ）の実施により、「乳用牛なら3か月程度で離乳し、活発にCH₄を生成する」との指摘を受けたことから、算定方法検討会における議論を経て、月齢3～4か月の牛の排出量を算定に含むよう2017年提出インベントリで改善が行われた。

加えて、我が国の算定方法と IPCC Tier 2 法による排出量算定結果との比較を行った。その際、Tier 2 法には2006年 IPCC ガイドラインで示された式（Vol.4, Chapter 10, EQUATION 10.3～10.16）を用い、上記表 5-3 に示した分類でそれぞれ算定を行った。なお、わが国のデータが利用可能なものは利用し（例：上記の表 5-4～表 5-8 の値、「日本飼養標準」に示された値

から計算した DE 値など)、利用可能でないものは 2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値を用いた (例: Y_m 値、 C_{f_i} 値、 $C_{pregnancy}$ 値など)。その結果、肉用牛と乳用牛の両方に関して、 CH_4 変換率 (Y_m) の誤差範囲を踏まえると ($Y_m=6.5\% \pm 1.0\%$)、我が国の算定方法による排出量は IPCC Tier2 法で算出した排出量が取りうる範囲内にあった。したがって、わが国の方法と IPCC Tier2 法による排出量に重大な差異はないと考えられる。

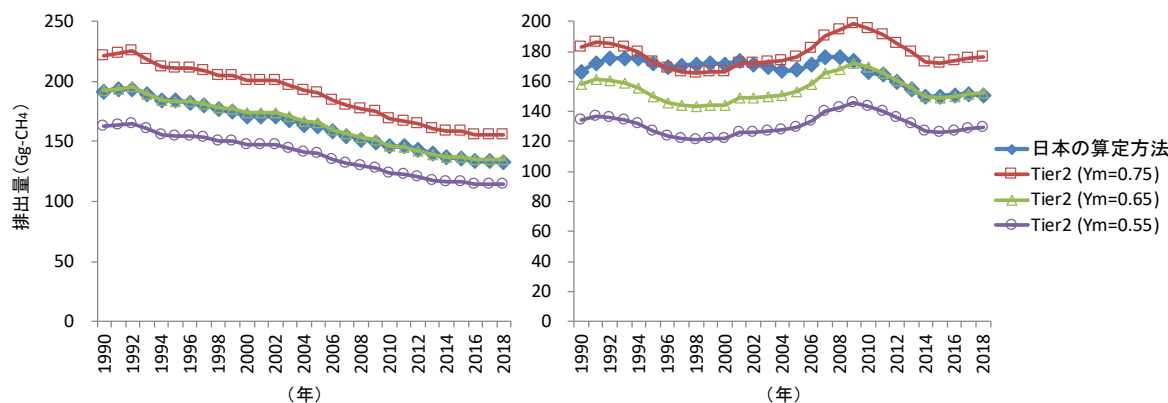


図 5-2 我が国の算定方法と IPCC Tier2 法の比較 (左: 乳用牛、右: 肉用牛)

e) 再計算

牛の算定区分が改訂されたため、全年度の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

ルーメン内発酵の制御 (飼料への脂肪酸カルシウムの添加等) によるメタン発生抑制技術や混合飼料給与 (TMR 給与) による飼料利用効率の向上に伴う排出削減を反映できるような算定方法の構築について検討を行う予定である。

5.2.2. 水牛、めん羊、山羊、馬、豚 (3.A.2., 3.A.3., 3.A.4.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは水牛、めん羊、山羊、馬、豚の消化管内発酵による CH_4 排出に関する算定、報告を行なう。

b) 方法論

■ 算定方法

CH_4 排出については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデシジョンツリーに従い、Tier1 法により算定を行った。

$$E = EF \times A$$

- E : 各家畜の消化管内発酵による CH_4 排出量 [kg- CH_4]
- EF : 各家畜の消化管内発酵に関する CH_4 排出係数 [kg- CH_4 /頭]
- A : 各家畜の頭数 [頭]

■ 排出係数

豚の CH_4 排出係数については、日本国内の研究成果に基づく値を設定した。

めん羊、山羊、馬、水牛の CH₄排出係数については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値を用いた。

表 5-11 豚、めん羊、山羊、馬、水牛の消化管内発酵に関する CH₄排出係数

家畜種	CH ₄ 排出係数 [kg/頭/年]	参考文献
豚	1.4	齋藤 (1988) をもとに算出 2006 年 IPCC ガイドライン
めん羊	8	
山羊	5	
馬	18.0	
水牛	55.0	

■ 活動量

めん羊及び山羊の活動量に関して、2009 年度までは (社) 中央畜産会「家畜改良関係資料」、2010 年度からは農林水産省「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」に示されたそれぞれの飼養頭数を用いた。豚の活動量については、「畜産統計」に示された、毎年 2 月 1 日時点の豚の飼養頭数を用いた。なお、2004 年度、2009 年度および 2014 年度は値を内挿した。馬の活動量に関して、2009 年度までは農林水産省「馬関係資料」、2010 年度からは「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」に示された飼養頭数を用いた。水牛の活動量は沖縄県「家畜・家きん等の飼養状況調査結果」に示された飼養頭数を用いた。

表 5-12 水牛、めん羊、山羊、豚、馬の飼養頭数 [1000 頭]

家畜種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
めん羊	21	14	12	9	14	20	20	16	17	17	18	18	20	20
山羊	26	19	22	16	14	19	19	19	20	20	17	16	19	19
豚	11,336	9,900	9,788	9,621	9,834	9,768	9,736	9,684	9,536	9,424	9,313	9,346	9,190	9,157
馬	116	118	105	87	81	75	75	74	74	69	74	75	76	78
水牛	0.21	0.12	0.10	0.08	0.08	0.08	0.08	0.09	0.10	0.11	0.11	0.12	0.11	0.11

(注) 豚の 2009 年度、2014 年度値は内挿値。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

各家畜分類で不確実性の評価を行った。豚の排出係数の不確実性は算定方法検討会で設定した値を採用した。豚以外の家畜の排出係数の不確実性は 2006 年 IPCC ガイドラインに示された 50% を採用した。活動量については、豚は「畜産統計」に掲載の標準誤差 1% を採用し、豚以外の家畜の活動量の不確実性は、「畜産統計」に掲載のブロイラーの標準誤差で代替し、9% とした。その結果、排出量の不確実性は豚が -72~+157%、水牛、めん羊、山羊、馬が 51% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は一定値を使用している。活動量には、「家畜改良関係資料」、「畜産統計」、「馬関係資料」、沖縄県「家畜・家きん等の飼養状況調査結果」、「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」を用いており、それぞれの家畜で 1990 年度から一貫した算定方法を用いている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1 章に詳述している。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.2.3. その他の家畜 (3.A.4.-)

2006年 IPCC ガイドラインに排出係数のデフォルト値が掲載されていて、上記で報告されていない家畜として、日本では鹿、アルパカが存在する。しかし、飼育頭数が少なく、いずれも算定方法検討会で定めた算定対象となる 3,000 t-CO₂換算という閾値を超える排出量とはならないため、重要でない「NE」として報告した (別添5 参照)。

5.3. 家畜排せつ物の管理 (3.B.)

家畜の排せつ物の管理過程において、排せつ物中に含まれる有機物がメタン発酵によって分解される際に CH₄が生成される。さらに、排せつ物中に消化管内発酵由来の CH₄が溶けていてそれが通気や攪拌により大気中へ放出される。また、家畜の排せつ物の管理過程において、主に微生物の作用による硝化・脱窒過程で N₂O が発生する。

2018年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は CH₄が 2,324 kt-CO₂換算、N₂O が 3,922 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) のそれぞれ 0.2%、0.3%を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると CH₄は 25.5%の減少、N₂O は 6.8%の減少となっている。この 1990年度からの CH₄排出量減少の主な要因は乳用牛の家畜頭数の減少によるものであり、N₂O 排出量減少の主な要因は家畜頭数の減少に伴い大気沈降による間接 N₂O 排出量が減少したことによるものである。

表 5-13 家畜排せつ物管理に伴う CH₄及び N₂O 排出量 (3.B.)

ガス	家畜種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CH ₄	3.B.1.- 乳用牛	kt-CH ₄	106.7	102.8	96.2	94.2	88.8	86.7	86.6	85.1	83.0	81.5	81.4	79.8	79.9	79.8	
	3.B.1.- 肉用牛		4.3	4.5	4.5	5.2	6.2	6.0	5.9	5.7	5.5	5.4	5.4	5.4	5.4	5.4	5.4
	3.B.2. めん羊		0.006	0.004	0.003	0.002	0.004	0.006	0.006	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.006	0.006
	3.B.3. 豚		11.1	9.7	9.1	6.6	5.1	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7
	3.B.4.- 水牛		0.0004	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002
	3.B.4.- 山羊		0.005	0.004	0.004	0.003	0.003	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.003	0.003	0.004	0.004
	3.B.4.- 馬		0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
	3.B.4.- 家禽類		2.3	2.2	2.1	2.4	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.7	2.7	2.7	2.8	2.8
	3.B.4.- うさぎ		0.001	0.001	0.002	0.002	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
	3.B.4.- ミング		0.105	0.007	0.004	0.0004	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005
	合計		kt-CH ₄	124.8	119.5	112.2	108.7	102.9	100.5	100.3	98.6	96.2	94.6	94.5	92.9	93.0	92.9
	kt-CO ₂ 換算	3,121	2,988	2,804	2,717	2,573	2,513	2,508	2,465	2,406	2,364	2,362	2,321	2,324	2,324		
N ₂ O	3.B.1.- 乳用牛	kt-N ₂ O	2.1	2.1	2.1	2.4	2.5	2.5	2.5	2.4	2.4	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	
	3.B.1.- 肉用牛		2.3	2.4	2.4	2.5	2.8	2.7	2.6	2.6	2.5	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	
	3.B.2. めん羊		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	3.B.3. 豚		3.7	3.2	3.2	3.8	4.4	4.5	4.5	4.4	4.3	4.2	4.1	4.1	4.1	4.3	
	3.B.4.- 水牛		0.00012	0.00007	0.00006	0.00005	0.00005	0.00004	0.00005	0.00005	0.00005	0.00006	0.00006	0.00007	0.00006	0.00006	
	3.B.4.- 山羊		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	3.B.4.- 馬		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	3.B.4.- 家禽類		1.4	1.4	1.3	1.3	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1	1.1	1.1	1.2	1.2	1.2	
	3.B.4.- うさぎ		0.004	0.004	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	
	3.B.4.- ミング		0.0223	0.0016	0.0008	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	
	3.B.5. 間接排出		4.6	4.3	3.9	3.5	3.2	3.1	3.0	3.0	2.9	2.9	2.9	2.9	2.9	3.0	
合計	kt-N ₂ O	14.1	13.4	12.9	13.4	14.2	13.9	13.7	13.5	13.2	13.0	12.9	12.9	13.2	13.2		
	kt-CO ₂ 換算	4,208	3,983	3,850	3,994	4,218	4,136	4,093	4,024	3,927	3,865	3,849	3,847	3,926	3,922		
全ガス合計	kt-CO ₂ 換算	7,329	6,971	6,654	6,711	6,791	6,649	6,601	6,489	6,334	6,229	6,210	6,169	6,250	6,245		

5.3.1. 牛、豚、家禽類（採卵鶏、ブロイラー）（3.B.1., 3.B.3., 3.B.4.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、牛（乳用牛、肉用牛）、豚、家禽類（採卵鶏、ブロイラー）の家畜排せつ物の管理による CH₄、N₂O 排出に関する算定、報告を行なう。

なお、放牧家畜の CH₄ に関してはこのカテゴリーで報告し、N₂O に関しては「3.D.a.3.放牧家畜の排せつ物」で報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

排せつ物の管理に伴う CH₄ 排出については、家畜種ごとの排せつ物中に含まれる有機物量に、排せつ物管理区分ごとの排出係数を乗じて算定を行った。

$$E_{CH_4} = \sum (EF_{CH_4-n} \times A_{CH_4-n})$$

- E_{CH_4} : 牛、豚、家禽の排せつ物管理に伴う CH₄ 排出量 [kt-CH₄]
- EF_{CH_4-n} : 排せつ物管理区分 n の排出係数 [g-CH₄/g 有機物]
- A_{CH_4-n} : 排せつ物管理区分 n の排せつ物中に含まれる有機物量 [kt-有機物]

N₂O 排出については、家畜種ごとの排せつ物中に含まれる窒素量に、排せつ物管理区分ごとの排出係数を乗じて算定を行った。

$$E_{N_2O} = \sum (EF_{N_2O-n} \times A_{N_2O-n}) \times 44/28$$

- E_{N_2O} : 牛、豚、家禽の排せつ物管理に伴う N₂O 排出量 [kt-N₂O]
- EF_{N_2O-n} : 排せつ物管理区分 n の排出係数 [g-N₂O-N/g-N]
- A_{N_2O-n} : 排せつ物管理区分 n の排せつ物中に含まれる窒素量 [kt-N]

■ 排出係数

家畜排せつ物の管理に伴う CH₄ 及び N₂O の排出係数については、我が国における実測の研究結果を踏まえ、図 5-3 のデシジョンツリーに従い妥当性を検討し、家畜種別、処理方法別に設定し、表 5-14 及び表 5-15 に示した。

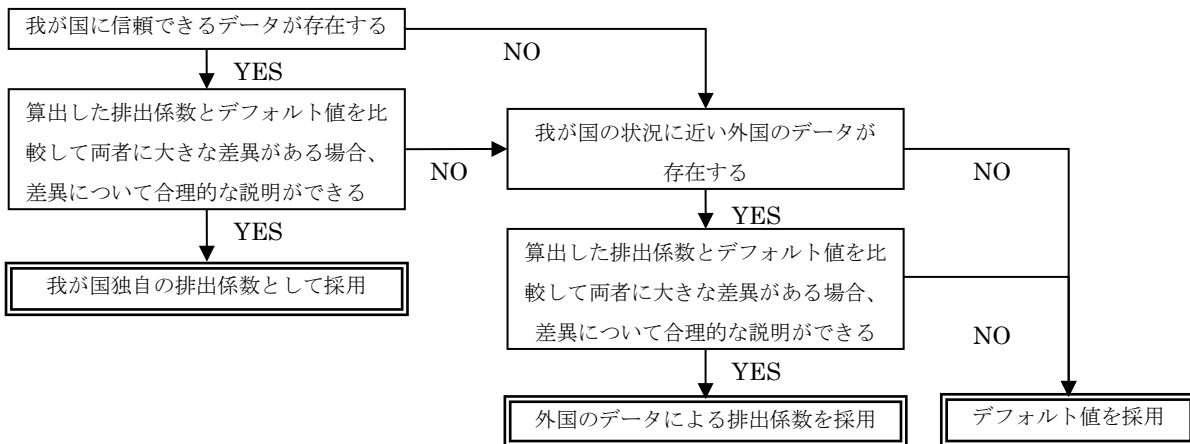


図 5-3 排出係数決定のためのデシジョンツリー

表 5-14 及び表 5-15 において、「D (デフォルト値)」と示されている CH₄排出係数は 2006 年 IPCC ガイドラインに示された Asia の Bo (最大 CH₄発生ポテンシャル) (乳用牛 : 0.13、肉用牛 : 0.10、豚 : 0.29) および MCF (メタン発生係数、表 5-16) を用いて、以下の式で示すように計算した。なお、2006 年 IPCC ガイドラインにおいて、貯留および強制発酵の MCF は気候区分別に掲載されているため、地域別平均気温から設定した MCF 値を地域別家畜頭数で加重平均して算出した。MCF 値の設定に使用した地域別の平均気温は表 5-17 の通り。各家畜が主に飼養されている市町村の平均気温から設定した。

また、わが国独自の排出係数については、実測結果から直接排出係数を算出しているため、MCF の値は設定していない。

$$EF_{CH_4-n} = Bo \times 0.67 \times MCF$$

EF_{CH_4-n}	: 排せつ物管理区分 n の排出係数 [g-CH ₄ /g 有機物]
Bo	: 最大 CH ₄ 発生ポテンシャル [m ³ -CH ₄ /kg-有機物]
0.67	: 体積から重量への換算係数 [kg-CH ₄ /m ³ -CH ₄]
MCF	: メタン発生係数 [%]

乳用牛の「貯留」および「メタン発酵」の CH₄の排出係数について、フロートチャンバー法などを用いて貯留システムおよびメタン発酵システムにおいて実測した値から気温を変数として全国 9 地域別の排出係数が構築されており (農林水産省「平成 23 年度農林水産分野における地球環境対策推進手法の開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2012) (以下、平成 23 年度 調査事業 報告書)、地域別の飼養頭数 (「畜産統計」に記載) で加重平均した排出係数 (表 5-18) を用いた。排出係数が 1990 年に比べて最新年で小さくなっているのは、気温が低く、排出係数の小さい北海道地域の飼養割合が徐々に増加しているためである (1990 年 : 42%、2018 年 : 60%)。

採卵鶏・ブロイラーの「天日乾燥」の排出係数については、鶏糞乾燥処理施設 (トンネル換気型でベルトコンベアを用いて鶏糞を移動・攪拌しながら乾燥させる施設) で発生する温室効果ガスの排出量を実測した値をもとに設定した。詳細な方法は、土屋他 (2014) の論文に記述されている。

豚の「強制発酵・ふん」及び「強制発酵・ふん尿混合」は「平成 20 年度環境バイオマス総合対策推進事業のうち農林水産分野における地球温暖化対策調査事業報告書 (全国調査事業) (以下、「平成 20 年度地球温暖化対策調査事業報告書」) を参照した。

採卵鶏・ブロイラーの「強制発酵・ふん」の排出係数には、専門家判断により豚の排出係数を適用している。

わが国で最も一般的に行われている家畜排せつ物処理方法である「堆積発酵」に関して、Osada et.al. (2005) は堆肥盤を覆うチャンバーを用いて CH₄と N₂O 排出を実測した。この値をもとにわが国の乳用牛、肉用牛、豚の排出係数を設定している。採卵鶏・ブロイラーの「堆積発酵」の排出係数については、国内 3 地域の堆肥化処理施設において、堆積物をチャンバーで覆って温室効果ガスの排出量を実測し、その値をもとに設定した。詳細な方法は、農林水産省「平成 25 年度農林水産分野における地球環境対策推進手法開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2014) (以下、平成 25 年度 調査事業 報告書) に記載されている。

「焼却」に関する係数は (社) 畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」(2002) に記述されている。牛の「浄化」について、白石、他 (2017) は、乳用牛の尿およびふん尿から発生する CH₄と N₂O 排出を浄化処理施設において実測した。この結果を基に設定された排出係数を、乳用牛および肉用牛の尿およびふん尿の「浄化」に適用している。

豚の「浄化」は農林水産省「平成 24 年度農林水産分野における地球環境対策推進手法開発

事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2013)(以下、平成24年度 調査事業 報告書)の結果を参照している。

乳用牛および肉用牛の「放牧」の排出係数は、採取したふん尿を放牧地のチャンバー内に設置し、実測した値をもとに設定している。詳細な方法は Mori et.al (2015) の論文に記述されている。

表 5-14 牛、豚、採卵鶏、ブロイラーの排せつ物管理に伴う CH₄排出係数 [g-CH₄/g 有機物]

処理区分	乳用牛		肉用牛		豚		採卵鶏 ブロイラー		
	貯留	表 5-18	J ⁹⁾	1.6 %	D ¹⁾	4.9 %	D ¹⁾	-	
天日乾燥	0.20 %		J ³⁾	0.20 %	J ³⁾	0.20 %	J ³⁾	0.14 %	J ¹¹⁾
火力乾燥	0 %							Z ⁴⁾	
強制発酵 (ふん)	0.052 %	D ¹⁾	0.054 %	D ¹⁾	0.080 %	J ⁸⁾	0.080 %	Sw	
堆積発酵	3.8 %	J ⁵⁾	0.13 %	J ⁵⁾	0.16 %	J ⁵⁾	採卵鶏: 0.13 % ブロイラー: 0.02 %	J ¹³⁾	
焼却	0.4 %							O ⁴⁾	
強制発酵 (尿)	0.052 %	D ¹⁾	0.054 %	D ¹⁾	0.097 %	D ¹⁾	-		
強制発酵 (ふん尿混合)					0.080 %	J ⁸⁾			
浄化	0.3 %			J ¹⁴⁾	0.91 %	J ¹²⁾			
メタン発酵 (ふん)	3.8 %	PI	0.13 %	PI	0.16 %	PI	採卵鶏: 0.13 % ブロイラー: 0.02 %	PI	
メタン発酵 (ふん尿混合)	表 5-18	J ⁹⁾	3.5 %	DC	3.6 %	DC	-		
放牧	0.076 %			J ¹⁰⁾	-		0.14 %	SD	
その他 (ふん)	3.8 %	M	0.4 %	M	0.4 %	M	0.4 %	M	
その他 (ふん尿混合)	3.8 %	M	3.5 %	M	4.9 %	M	-		

(注) 表 5-15 の注釈と、出典を参照

表 5-15 牛、豚、採卵鶏、ブロイラーの排せつ物管理に伴う N₂O 排出係数 [g-N₂O-N/g-N]

処理区分	乳用牛		肉用牛		豚		採卵鶏 ブロイラー		
	貯留	0.02 %	J ⁹⁾	0 %		D ¹⁾		-	
天日乾燥	2.0 %				D ¹⁾		0.33 %	J ¹¹⁾	
火力乾燥	2.0 %							D ¹⁾	
強制発酵 (ふん)	0.25 %			J ⁶⁾	0.16 %	J ⁸⁾	0.16 %	Sw	
堆積発酵	2.4 %	J ⁵⁾	1.6 %	J ⁵⁾	2.5 %	J ⁵⁾	採卵鶏: 0.54 % ブロイラー: 0.08 %	J ¹³⁾	
焼却	0.1 %							O ⁴⁾	
強制発酵 (尿)	0.6 %				D ¹⁾		-		
強制発酵 (ふん尿混合)	0.6 %	D ¹⁾	0.25 %	J ⁷⁾	0.16 %	J ⁸⁾			
浄化	2.88 %			J ¹⁴⁾	2.87 %	J ¹²⁾			
メタン発酵 (ふん)	2.4 %	PI	1.6 %	PI	2.5 %	PI	採卵鶏: 0.54 % ブロイラー: 0.08 %	PI	
メタン発酵 (ふん尿混合)	0.15 %	J ⁹⁾	0.15 %		DC		-		
放牧	0.684 %			J ¹⁰⁾	-		0.33 %	SD	
その他 (ふん)	2.4 %	M	2.0 %	M	2.5 %	M	2.0 %	M	
その他 (ふん尿混合)	2.88 %	M	2.88 %	M	2.87 %	M	-		

(注) 採卵鶏・ブロイラーについては、ふんに近いふん尿混合状態であるため、ふんとして扱う。

D: 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を利用 (Asia の値を利用)

- J: 我が国の観測データより設定
 - O: 他国のデータより設定
 - Z: 原理的に排出は起こらないとの仮定により設定
 - Pl: 堆積発酵の値を適用
 - SD: 天日乾燥の値を適用
 - Sw: 豚の排出係数を適用
 - DC: 乳用牛の地域別排出係数もとに設定 (N₂O は乳用牛の排出係数を適用)
 - M: 「ふん」または「ふん尿混合」に対する処理区分の最大値を適用
(出典)
- 1) 2006年 IPCC ガイドライン (2006)
 - 2) 石橋他 (2003)
 - 3) (社) 畜産技術協会 (2002)
 - 4) Osada et.al. (2005)
 - 5) Osada et.al. (2000)
 - 6) Osada (2003)
 - 7) 平成 20 年度 地球温暖化対策調査事業報告書
 - 8) 平成 23 年度 調査事業 報告書
 - 9) Mori et.al. (2015)
 - 10) 土屋他 (2014)
 - 11) 平成 24 年度 調査事業 報告書
 - 12) 平成 25 年度 調査事業 報告書
 - 13) 白石他 (2017)

表 5-16 デフォルトの排出係数の計算に用いた MCF (メタン発生係数)

処理区分	MCF	2006年 IPCC ガイドラインの分類
貯留 (肉用牛)	24 %	Liquid/ Slurry- Without natural crust cover (加重平均で算出)
貯留 (豚)	25 %	Liquid/ Slurry- Without natural crust cover (加重平均で算出)
強制発酵 (乳用牛)	0.6 %	Composting – In-vessel (加重平均で算出)
強制発酵 (肉用牛)	0.8 %	Composting – In-vessel (加重平均で算出)

(注) 上記以外の区分には国独自の排出係数等を用いているため、MCF の値は設定していない。

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン、Vol.4 Table 10.17

表 5-17 MCF 値の設定に使用した地域別の平均気温 [°C]

地域	乳用牛	肉用牛	豚
北海道	5.3	6.2	7.4
東北	8.5	11.0	10.1
関東	11.9	12.1	14.4
北陸	14.0	14.0	12.7
東海	16.0	14.3	15.0
近畿	15.9	16.0	13.5
中国	14.6	15.0	14.4
四国	16.3	16.1	15.5
九州沖縄	15.8	16.5	16.3

表 5-18 乳用牛の「貯留」および「メタン発酵」の CH₄排出係数 [g-CH₄/g-有機物]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
貯留	2.47%	2.44%	2.42%	2.40%	2.38%	2.37%	2.37%	2.37%	2.37%	2.37%	2.36%	2.36%	2.36%	2.35%
メタン発酵	3.22%	3.17%	3.14%	3.11%	3.07%	3.06%	3.06%	3.06%	3.06%	3.05%	3.05%	3.04%	3.03%	3.03%

(注) 平成 23 年度 調査事業 報告書に記載の地域別排出係数をもとに、地域別の飼養頭数で加重平均している

■ 活動量

活動量については、年間に各家畜種から排せつされる有機物量及び窒素量の推計値をそれぞれ用いた。

$$A_{CH_4-n} = P \times Ex \times Day \times Org \times Mix_n \times MS_n / 1000$$

$$A_{N2O-n} = P \times Nex \times Day \times Mix_n \times MS_n / 1000$$

A_{CH4-n}	: 各家畜種から排せつされる有機物量 [kt]
A_{N2O-n}	: 各家畜種から排せつされる窒素量 [kt]
P	: 家畜の飼養頭数 [千頭]
Ex	: 1頭あたり1日あたりの排せつ物量 [kg/頭/日]
Org	: 排せつ物中の有機物含有率 [%]
Nex	: 1頭あたり1日あたりの排せつ物中窒素量 [kg-N/頭/日]
Day	: 年間日数[日]
Mix_n	: 排せつ物分離・混合処理の割合 [%]
MS_n	: 排せつ物管理区分割合 [%]

各家畜種から排せつされる年間有機物量は、家畜種ごとの飼養頭数に一頭当たりの排せつ物量と有機物含有率を乗じることによって総量を算定し、年間窒素量は、家畜種ごとの飼養頭数に一頭当たりの排せつ物中窒素量を乗じることによって総量を算定した（表 5-25、表 5-26、表 5-27、表 5-28）。その総量に、排せつ物分離処理割合及び各排せつ物管理区分割合を乗じ、各排せつ物管理区分に有機物量及び窒素量を割り振った。

乳用牛、肉用牛、豚の飼養頭数は「3.A.消化管内発酵」と同じ出典のものを使用している。

採卵鶏は「畜産統計」および農林水産省「畜産物流通統計」に示された羽数を用いた（表 5-19 参照）。ただし、調査のなかった 2004 年度、2009 年度、2014 年度の値は内挿値である。ブロイラーに関して、1990 年度から 2008 年度までは「畜産物流通統計」の飼養羽数を用いた。2009 年度以降はその統計で飼養羽数が把握されなくなったことから、「畜産物流通統計」の出荷羽数を用いて飼養羽数を推計している（表 5-20 参照）。具体的にはブロイラーの飼養羽数／出荷羽数の 2004～2008 年度の 5 か年平均値 (0.170) を毎年度の出荷羽数に乘じ、さらに過去より出荷日齢が短くなっていることから、現在（農林水産省「鶏の改良増殖目標」(2015)）と過去（畜産技術協会「ブロイラー飼養実態アンケート調査」(2008)）の出荷日齢の比 0.919 (=49 日／53.3 日) を乗じて飼養羽数を算出した。

乳用牛の 1 頭あたり 1 日あたりの排せつ物量の内、ふん量は「日本飼養標準 乳牛」に記載の DMI と中性デタージェント繊維割合 (%) (NDFom) を説明変数とした重回帰式より算出し、尿量は大谷他 (2010) に記載の窒素摂取量 (NI)、カリウム摂取量 (KI)、乳量を説明変数とした重回帰式より算出した。乾物摂取量、乳量は 3.A.1 牛の消化管内発酵と同じものを用いた。中性デタージェント繊維割合 (%) (NDFom) は、「日本飼養標準 乳牛」を参考に 35% と設定した。窒素摂取量 (NI) は粗タンパク質量 (CP) を 6.25 で割って算出した。粗タンパク質量 (CP) は、乳量、体重、乳脂肪率、増体日量に 3.A.1 牛の消化管内発酵と同じ値を用いて、「日本飼養標準」の算出式を使用して算出した（表 5-21）。「日本飼養標準」では、ルーメン内での飼料の消化と微生物による発酵を高めるために、飼料乾物中の望ましい CP 含量は 12% 以上としている。その指針に沿って、算出式から算出された CP が DMI の 12% を下回る場合は、CP を 12% に補正した。カリウム摂取量 (KI) は、Kume et al. (2010) を参考に設定した（表 5-21）。

また、乳用牛の 1 頭あたり 1 日あたりの排せつ物中窒素量は、ふん、尿とも長命、他 (2006) に示された回帰式を使用して算出した（表 5-21）。

肉用牛の排せつ物中窒素量も、ふん、尿ともに長命、他 (2006) に示された回帰式を使用して算出した（表 5-22）。ふん中窒素量は DMI を変数とする式より算出し、尿中窒素量は CP を変数とする式より算出した。DMI は、既出の表 5-8 の値を用いた。CP は表 5-23 に記載の式で計算した。また、乳用牛と同様に算出式から算出された CP が DMI の 12% を下回る場合は、CP を 12% に補正した。

豚の排せつ物中窒素量は、温室効果ガス算定方法検討会農業分科会での検討結果を踏まえ、「日本飼養標準 豚」に示された体重区分ごとに、摂取した窒素量から体内に蓄積された窒素量を控除して求めた。各区分の合計値を飼養日数の合計値で除することで1日当たりの排せつ物中窒素量とした。得られた1日当たりの排せつ物中窒素量にふん・尿の配分割合を乗じて、1日当たりのふん・尿中窒素量を算出した(表 5-24)。なお、摂取した窒素量は摂取する飼料のCP含有率と摂取量から算定する。算定区分は、「肥育豚」および「繁殖豚」の2種類とした。

排せつ物分離処理割合及び各排せつ物管理区分割合は、1997年の調査結果「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」(2002)と2009年の調査結果である農林水産省「家畜排せつ物処理状況調査結果」(2009)を用いて設定している。1997年の調査は「家畜排せつ物法」(1999年施行、不適切な排せつ物管理を禁止する法律で、排せつ物管理区分割合が変わる契機となった)施行以前のデータである。そのため、1997年の調査結果を1999年以前に適用し、2009年度以降は2009年の調査結果を用いた。2000~2008年度はそれらを内挿した(表 5-29、表 5-30、表 5-31)。

表 5-19 採卵鶏の羽数 [1000羽]

家畜種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
採卵鶏	188,786	190,634	186,202	180,697	179,770	178,546	177,607	174,784	174,806	175,270	175,733	178,900	184,350	184,917

(注) 調査のなかった2009年度、2014年度の値は内挿値。

(出典) 「畜産統計」、「畜産物流通統計」

表 5-20 ブロイラーの羽数 [1000羽]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
「畜産物流通統計」のブロイラー 飼養羽数	142,740	118,123	106,311	103,687										
ブロイラー 出荷羽数				606,898	634,692	633,799	617,176	649,629	653,999	661,030	666,859	677,332	685,105	700,571
インベントリで用いたブロイラー 飼養羽数	142,740	118,123	106,311	103,687	99,053	98,913	96,319	101,384	102,066	103,163	104,073	105,707	106,920	109,334

(注) 2008年度までは統計上の飼養羽数を使用。2009年度以降の飼養羽数は出荷羽数を用いて推計。

(出典) 「畜産物流通統計」

表 5-21 乳用牛の排せつ物量と排せつ物中窒素量の算定式

	算定式
ふん量 ¹⁾	$F = -8.4753 + 1.8657 \times DMI + 0.4948 \times NDFom$ (NDFom : 35%)
尿量 ²⁾	$U = -2.2870 + 0.0231 \times NI + 0.0581 \times KI - 0.3350 \times MILK$ (NI = CP / 6.25)
カリウム摂取量 ³⁾	KI : 380g/日 (初産搾乳牛) : 350g/日 (2産以上) : 250g/日 (乾乳牛) : 220g/日 (育成牛7~24ヵ月) : 100g/日 (育成牛3~6ヵ月)
ふん・尿中窒素量 ⁴⁾	$N_f = 5.01 \times DMI^{1.2}$ (搾乳牛) $N_f = 4.97 \times DMI^{1.21}$ (乾乳牛・育成牛)
尿中窒素量 ⁴⁾	$N_u = 16.57 \times (CP / 1000 / DMI) \times 100 - 138.6$ (搾乳牛) $N_u = 0.24 \times (CP / 6.25)^{1.14}$ (乾乳牛・育成牛)

(注) 表 5-23 の注釈と、出典を参照

表 5-22 肉用牛の排せつ物中窒素量の算定式

	算定式
ふん・尿中窒素量 ⁴⁾	$N_f = 7.22 \times DMI^{1.00}$ (乳用種) $N_f = 4.97 \times DMI^{1.21}$ (乳用種 + 黒毛和牛)
尿中窒素量 ⁴⁾	$N_u = -14.96 + 0.60 \times NI$ (乳用種) $N_u + N_m = 0.24NI^{1.14}$ (乳用種 + 黒毛和牛) ただし $N_m = 0$ として計算、NI = CP / 6.25

(注) 表 5-23 の注釈と、出典を参照

表 5-23 粗タンパク質量 (CP) の算定式¹⁾

	算定式
搾乳牛	$CP = (CPI + CP2) \times CFA$ $CPI = 2.71 \times W^{0.75} / 0.6 \times \text{産次補正值 (初産:1.3、二産:1.15、三産以上:1)}$ $CP2 = (26.6 + 5.3 \times FAT) \times MILK / 0.65$ $CFA = 1 + MILK / 15 \times 0.04$
乾乳牛	$CP = 2.71 \times W^{0.75} / 0.6$
育成牛	$CP = NP / EP$ $NP = FN \times 6.25 + UN \times 6.25 + SP + RP$ $FN = 30 \times DMI / 6.25 \quad UN = 2.75 \times W^{0.5} / 6.25$ $SP = 0.2 \times W^{0.6} \quad RP = 10 \times DG \times 23.5505 \times W^{-0.0645}$ $EP : 0.51 \text{ (体重 120kg 以上)} : 0.63 \text{ (体重 67~119kg)}$
肉用牛 (2007 年度まで)	$CP = NP / EP$ $NP = FN \times 6.25 + UN \times 6.25 + SP + RP$ $FN = 4.80 \times DMI \quad UN = 0.44 \times W^{0.5} \quad SP = 0.2 \times W^{0.6}$ $RP = DG \times (235 - 0.195 \times W) \text{ (乳用種)}$ $RP = DG \times (235 - 0.234 \times W) \text{ (交雑種、肥育牛雄)}$ $RP = DG \times (235 - 0.293 \times W) \text{ (肥育牛雌、繁殖雌牛 48 カ月まで)}$ $RP = 0 \text{ (成雌牛の維持 49 カ月以上)}$ $EP : 0.51 \text{ (体重 150kg 以上)} : 0.56 \text{ (体重 101~149kg)} : 0.66 \text{ (体重 51~100kg)}$ (繁殖雌牛 妊娠末期維持加算用 CP) $CP = DCPR / 0.75$ $DCPR = TP / 38.5 \times 30.0 / 63 / 0.6 \times 1000 + FN \times 6.25$ $TP = TP(t) - TP(t-63)$ $TP(t) = (1.486 \times 10^{-4} \times t^3 - 4.247 \times 10^{-2} \times t^2 + 3.173 \times t - 0.328) \times$ $(-0.323 \times 10^{-6} \times t^3 + 3.000 \times 10^{-4} \times t^2 - 9.430 \times 10^{-2} \times t + 11.263) \times 6.25$ $FN = 4.80 \times 3.21 / 2.7$ (繁殖雌牛 授乳中維持加算用 CP) $CP = DCPR / 0.65$ $DCPR = 53 \times MILK$
肉用牛 (2008 年度以降)	$CP = (MCP / 0.85 + MPu / 0.80) / 1.15$ $MCP = 100 \times TDN \text{ (繁殖雌牛以外)} \quad MCP = 130 \times TDN \text{ (繁殖雌牛)}$ $MPu = MPR - MPd$ $MPR = MPm + MPg$ $MPd = 0.8 \times 0.8 \times MCP$ $MPm = (FN \times 6.25 + UN \times 6.25 + SP) / 0.67$ $FN = 4.80 \times DMI - Adj \quad UN = 0.44 \times W^{0.5} \quad SP = 0.2 \times W^{0.6}$ $MPg = RP / 0.492$ $RP = DG \times (235 - 0.195 \times W) \text{ (乳用種)}$ $RP = DG \times (235 - 0.234 \times W) \text{ (交雑種、肥育牛雄)}$ $RP = DG \times (235 - 0.293 \times W) \text{ (肥育牛雌、繁殖雌牛 48 カ月まで)}$ $RP = 0 \text{ (成雌牛の維持 (49 カ月以上))}$ $Adj = (100 \times TDN \times 0.64 \times 0.25 \times 0.5) / 6.25$ $Adj = (130 \times TDN \times 0.64 \times 0.25 \times 0.5) / 6.25 \text{ (繁殖雌牛)}$ (体重 200kg 未満の乳用種) $CP = NP / EP$ $NP = FN \times 6.25 + UN \times 6.25 + SP + RP$ $FN = 4.80 \times DMI \quad UN = 0.44 \times W^{0.5} \quad SP = 0.2 \times W^{0.6}$ $RP = DG \times (235 - 0.234 \times W)$ $EP : 0.51$ (繁殖雌牛 妊娠末期維持加算用) $MPc = PP(t) / 0.65$ $PP(t) = BW / 40 \times TP(t) \times 34.37 e^{-0.00262t}$ $TP(t) = 10^{3.707 - 5.698e^{-0.0022t}}$ (繁殖雌牛 授乳中維持加算用) $MP\theta = (38 \times MILK) / 0.65$

(注) 表 5-21、表 5-22、表 5-23 に共通

F: ふん量 (kg/日) DMI: 乾物摂取量 (kg/日) NDFom: 中性ダタージェント繊維割合 (%)

U: 尿量 (kg/日) *NI*: 窒素摂取量 (kg/日) *KI*: カリウム摂取量 (kg/日) *MILK*: 乳量 (kg/日)
N_f: ふん中窒素量 *N_u*: 尿中窒素量 *CP*: 粗タンパク質 (g) *CFA*: 補正係数
W: 体重 (kg) *FAT*: 乳脂肪率 (%) *NP*: 成長時の維持・増体に要する正味の蛋白質量
EP: 成長時の粗蛋白質を正味蛋白質にする変換効率 *UN*: 内因性尿中窒素 (g/day)
FN: 離乳後の育成牛 (体重 66kg 以上) の代謝性ふん中窒素 (g/day) *SP*: 脱落表皮蛋白質 (g/day)
RP: 増体に伴う蛋白質蓄積量 (g/day) *DG*: 増体日量 (kg/日) *DCPR*: 可消化粗蛋白質の要求量
PP(t): 妊娠(t)日目における妊娠子宮の蛋白質蓄積量 *t*: 妊娠期間日数 *MCP*: 微生物蛋白質 (g/日)
TP(t): 妊娠(t)日までの妊娠子宮の蛋白質蓄積量 *BW*: 生時体重
MP_u: 飼料からの非分解性蛋白質供給量 (g/日) *MP_d*: 微生物によって供給される代謝蛋白質供給量
MP_m: 維持における代謝蛋白質の要求量 *MP_g*: 成長における代謝エネルギー要求量
MP_c: 妊娠に要する代謝蛋白質量 (g/日) *TDN*: 可消化養分総量 *MPR*: 代謝蛋白質要求量 (g/日)
MP_l: 泌乳に要する代謝蛋白質量 (g/日) *Adj*: 補正值

(出典)

- 1) 「日本飼養標準」
- 2) 大谷他 (2010)
- 3) Kume et.al. (2010)
- 4) 長命他 (2006)

表 5-24 豚の排せつ物中窒素量の算定式

	算定式
ふん中窒素量	$N_f = N_{out} \times f$
尿中窒素量	$N_u = N_{out} \times u$
排せつ物中窒素量	$N_{out} = N_{in} - N_{PR}$ $N_{out} = N_{in} - N_M$ (授乳豚) $N_{in} = (CP \times F_{intake}) / 6.25$ $F_{intake} = F_{demand} \times Day$

N_f: ふん中窒素量 (kg/day) *N_u*: 尿中窒素量 (kg/day) *N_{out}*: 排せつ物中窒素量 (g) *f*: ふん分配割合
u: 尿分配割合 *N_{in}*: 摂取飼料中窒素量 (g) *N_{PR}*: 体内蓄積窒素量 (g) *N_M*: 乳中窒素量
CP: 摂取飼料中 CP 含有率 (%) *F_{intake}*: 飼料摂取量 (kg) *F_{demand}*: 1 日当たりの飼料摂取量 (kg/day)

表 5-25 肉用牛と豚の排せつ物量 (Ex)

家畜種		排せつ物量 [kg/頭/日]	
		ふん	尿
肉用牛	2 歳未満	17.8	6.5
	2 歳以上	20.0	6.7
	乳用種	18.0	7.2
豚	肥育豚	2.1	3.8
	繁殖豚	3.3	7.0

(出典) 築城他 (1997)

表 5-26 乳用牛、肉用牛、豚の排せつ物量 (Ex) 及び排せつ物中窒素量 (Nex)

項目		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018			
排せつ物量	乳用牛	ふん量	搾乳牛(三産以上)	kg/頭/日	41.5	43.1	44.5	46.0	46.3	46.1	46.1	46.4	46.4	46.8	47.3	47.4	47.5		
			搾乳牛(二産)	kg/頭/日	40.3	41.8	43.3	44.8	44.9	44.7	44.7	45.0	45.0	45.3	45.8	45.9	46.0	46.0	
			搾乳牛(初産)	kg/頭/日	36.7	38.2	39.5	40.6	41.5	41.4	41.4	41.6	41.6	41.8	42.2	42.3	42.5	42.4	
		乾乳牛・未経産牛	kg/頭/日	27.9	27.9	28.7	28.5	28.7	28.6	28.5	28.5	28.5	28.5	28.4	28.4	28.4	28.4	28.4	
		育成牛(7-24ヵ月)	kg/頭/日	22.1	22.4	22.9	23.1	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	
		育成牛(3-6ヵ月)	kg/頭/日	14.9	14.9	15.1	15.8	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	
		尿量	搾乳牛(三産以上)	kg/頭/日	16.9	16.9	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	16.9	16.9	16.9	16.9	16.9	
			搾乳牛(二産)	kg/頭/日	17.1	17.1	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1	
			搾乳牛(初産)	kg/頭/日	18.8	18.8	18.9	18.9	18.8	18.8	18.8	18.8	18.8	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7	
	乾乳牛・未経産牛		kg/頭/日	82.7	83.0	86.8	85.6	86.8	86.4	86.1	85.9	85.9	85.7	85.5	85.4	85.4	85.3		
	育成牛(7-24ヵ月)		kg/頭/日	12.3	12.3	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5		
	育成牛(3-6ヵ月)		kg/頭/日	4.4	4.4	4.8	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1		
	排せつ物中窒素量	乳用牛	ふん	搾乳牛(三産以上)	g-N/頭/日	155.7	164.4	172.7	181.7	183.2	182.1	182.2	183.8	184.0	186.0	189.1	189.6	190.1	190.3
				搾乳牛(二産)	g-N/頭/日	148.5	157.4	165.5	174.3	175.0	173.9	174.0	175.6	175.7	177.6	180.5	180.8	181.3	181.4
				搾乳牛(初産)	g-N/頭/日	128.6	136.7	144.1	150.2	155.6	154.7	155.0	156.0	156.1	157.4	159.5	160.1	160.9	160.5
			乾乳牛・未経産牛	g-N/頭/日	82.7	83.0	86.8	85.6	86.8	86.4	86.1	85.9	85.9	85.7	85.5	85.4	85.4	85.3	
			育成牛(7-24ヵ月)	g-N/頭/日	53.3	54.5	57.2	58.3	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	
			育成牛(3-6ヵ月)	g-N/頭/日	20.6	20.7	21.6	24.3	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	
尿			搾乳牛(三産以上)	g-N/頭/日	76.1	81.0	83.2	87.9	89.9	89.5	89.4	90.5	90.8	92.1	93.5	93.9	94.2	94.2	
			搾乳牛(二産)	g-N/頭/日	85.8	90.2	92.2	96.6	98.7	98.4	98.4	99.3	99.6	100.7	102.1	102.3	102.6	102.6	
			搾乳牛(初産)	g-N/頭/日	88.8	92.5	94.4	98.7	93.2	92.8	92.7	93.9	94.2	95.5	97.2	97.9	98.8	98.5	
		乾乳牛・未経産牛	g-N/頭/日	98.6	98.8	103.1	101.9	103.2	102.8	102.4	102.1	102.2	101.9	101.7	101.5	101.6	101.5		
		育成牛(7-24ヵ月)	g-N/頭/日	65.1	66.6	69.7	70.9	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1		
		育成牛(3-6ヵ月)	g-N/頭/日	27.4	27.6	37.4	43.1	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2		
肉用牛		ふん	繁殖雌牛: 2歳以上	g-N/頭/日	58.9	58.9	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	
			繁殖雌牛: 7ヵ月~2歳未満	g-N/頭/日	46.1	46.1	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	
			繁殖雌牛: 3ヵ月~6ヵ月	g-N/頭/日	21.5	21.5	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	
			肥育牛・雄: 1歳以上	g-N/頭/日	63.5	63.5	63.5	63.5	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	
			肥育牛・雄: 7ヵ月~1歳未満	g-N/頭/日	48.1	48.1	48.1	48.1	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	
			肥育牛・雄: 3ヵ月~6ヵ月	g-N/頭/日	23.7	23.7	23.7	23.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7		
	肥育牛・雌: 1歳以上		g-N/頭/日	40.1	40.1	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4		
	肥育牛・雌: 7ヵ月~1歳未満		g-N/頭/日	32.5	32.5	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7		
	肥育牛・雌: 3ヵ月~6ヵ月		g-N/頭/日	18.7	18.7	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0			
	尿	乳用種: 7ヵ月以上	g-N/頭/日	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3		
		乳用種: 3ヵ月~6ヵ月	g-N/頭/日	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8			
		交雑種: 7ヵ月以上	g-N/頭/日	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2			
		交雑種: 3ヵ月~6ヵ月	g-N/頭/日	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2			
		繁殖雌牛: 2歳以上	g-N/頭/日	73.9	73.9	76.7	76.7	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9			
		繁殖雌牛: 7ヵ月~2歳未満	g-N/頭/日	57.5	57.5	69.4	69.4	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6			
		繁殖雌牛: 3ヵ月~6ヵ月	g-N/頭/日	35.5	35.5	43.6	43.6	54.3	54.3	54.3	54.3	54.3	54.3	54.3	54.3	54.3			
		肥育牛・雄: 1歳以上	g-N/頭/日	76.9	76.9	76.9	76.9	71.9	71.9	71.9	71.9	71.9	71.9	71.9	71.9	71.9			
		肥育牛・雄: 7ヵ月~1歳未満	g-N/頭/日	65.1	65.1	65.1	65.1	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6			
豚	ふん	肥育豚	g-N/頭/日	4.6	4.6	4.4	4.0	3.9	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	3.9	3.9	4.1	4.1		
		繁殖豚	g-N/頭/日	4.9	4.9	4.9	4.6	4.5	4.6	4.6	4.6	4.5	4.5	4.5	4.4	4.4	4.4		
		肥育豚	g-N/頭/日	11.3	11.3	10.8	10.1	9.9	10.0	10.1	10.1	9.9	9.8	9.7	9.7	10.3	10.3		
	尿	繁殖豚	g-N/頭/日	15.6	15.5	15.5	14.8	14.4	14.6	14.7	14.7	14.3	14.2	14.2	14.1	14.1	14.1		

表 5-27 採卵鶏とブロイラーの排せつ物中窒素量 (Nex)

家畜種		排せつ物量 [kg/頭/日]	ふん中の窒素量 [g-N/頭/日]		
			ふん	1990~1997	1998~2011
採卵鶏	雛	0.059	1.54	1.54	1.54
	成鶏	0.136	3.28	内挿	2.20
ブロイラー		0.130	2.62	内挿	1.87

(出典) 採卵鶏 雛: 築城他 (1997)

成鶏およびブロイラー: 1990~1997: 築城他 (1997) 2012~ : Ogino et al. (2016)

表 5-28 家畜種ごとの排せつ物中の有機物含有率（湿ベース）（Org）

家畜種	有機物含有率	
	ふん	尿
乳用牛	16 %	0.5 %
肉用牛	18 %	0.5 %
豚	20 %	0.5 %
採卵鶏	15 %	—
ブロイラー	15 %	—

（出典）畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」（2002）

表 5-29 家畜種ごとの排せつ物分離・混合処理の割合（Mix_n）

家畜種	ふん尿分離			ふん尿混合		
	~1999	2000~2008	2009~	~1999	2000~2008	2009~
乳用牛	60 %	内挿	45.5 %	40 %	内挿	54.5 %
肉用牛	7 %	内挿	4.8 %	93 %	内挿	95.2 %
豚	70 %	内挿	73.9 %	30 %	内挿	26.1 %
採卵鶏	100 %	内挿	100 %	—	内挿	—
ブロイラー	100 %	内挿	100 %	—	内挿	—

（出典）1999 年以前：畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」（2002）

2009 年以降：農林水産省「家畜排せつ物処理状況調査結果」（2009）

表 5-30 家畜種ごとの排せつ物管理区分割合（乳用牛、肉用牛、豚）（MS_n）

ふん尿 分離状況	処理方法	乳用牛			肉用牛			豚			
		~1999	2000~ 2008	2009~	~1999	2000~ 2008	2009~	~1999	2000~ 2008	2009~	
ふん尿 分離 処理	ふん	天日乾燥	2.8%	内挿	2.0%	1.5%	内挿	0.9%	7.0%	内挿	0.7%
		火力乾燥	0%	—	0%	0%	—	0%	0.7%	内挿	0.1%
		強制発酵	9.0%	内挿	6.6%	11.0%	内挿	8.1%	62.0%	内挿	48.2%
		堆積発酵等	88.0%	内挿	90.1%	87.0%	内挿	89.8%	29.6%	内挿	49.3%
		焼却	0.2%	内挿	0%	0.5%	内挿	—	0.7%	内挿	0.6%
		メタン発酵	—	—	—	—	—	—	—	内挿	0.1%
		公共下水道	—	—	0%	—	—	—	—	—	—
		放牧	—	—	0%	—	—	—	—	—	—
	その他	—	内挿	1.3%	—	内挿	1.2%	—	内挿	1.0%	
	尿	天日乾燥	—	—	0%	—	—	0%	—	—	0%
		強制発酵	1.5%	内挿	1.7%	9.0%	内挿	1.2%	10.0%	内挿	5.4%
		浄化	2.5%	内挿	5.1%	2.0%	内挿	4.4%	45.0%	内挿	76.3%
		貯留	96.0%	内挿	89.6%	89.0%	内挿	91.5%	45.0%	内挿	15.3%
		メタン発酵	—	内挿	1.9%	—	—	0%	—	内挿	0.5%
公共下水道		—	内挿	0.8%	—	内挿	0.6%	—	内挿	0.4%	
その他	—	内挿	0.9%	—	内挿	2.4%	—	内挿	2.1%		
ふん尿 混合 処理	天日乾燥	4.4% ¹⁾	内挿	1.1%	3.4% ¹⁾	内挿	0.7%	6.0%	内挿	0.2%	
	火力乾燥	0%	—	0%	0%	—	0%	0%	—	0%	
	強制発酵	18.7% ¹⁾	内挿	22.9%	21.8% ¹⁾	内挿	10.8%	29.0%	内挿	21.3%	
	堆積発酵	13.1% ¹⁾	内挿	50.9%	73.2% ¹⁾	内挿	85.6%	20.0%	内挿	51.3%	
	浄化	0.3% ¹⁾	内挿	0.2%	0%	—	0%	22.0%	内挿	18.5%	
	貯留	57.0% ¹⁾	内挿	15.4%	0.6% ¹⁾	内挿	0.1%	23.0%	内挿	4.0%	
	焼却	—	内挿	0.1%	—	—	0%	—	—	0%	
	メタン発酵	—	内挿	1.7%	—	—	0%	—	内挿	2.0%	
	公共下水道	—	内挿	0.1%	—	—	0%	—	内挿	0.7%	
	放牧	6.5% ¹⁾	内挿	6.5%	1.1% ¹⁾	内挿	1.1%	—	—	0%	
その他	—	内挿	1.2%	—	内挿	1.6%	—	内挿	1.9%		

（出典）1999 年以前：畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 第四集」（1999）

2009 年以降：農林水産省「家畜排せつ物処理状況調査結果」（2009）

(注)

- 1) 乳用牛、肉用牛に関して、畜産技術協会（1999）では放牧の区分割合は記載されていなかったが、農林水産省（2009）の調査結果では放牧の区分割合が記載されている。算定方法の一貫性を示すため、2008年以前についても2009年以降と同じ割合を適用し、排せつ物管理区分割合の合計が100%になるよう、調整を行った。

表 5-31 家畜種ごとの排せつ物管理区分割合（採卵鶏、ブロイラー）（MS_n）

ふん尿 分離状況	処理方法	採卵鶏			ブロイラー		
		~1999	2000~ 2008	2009~	~1999	2000~ 2008	2009~
ふん尿 分離 処理	天日乾燥	30.0%	内挿	8.2%	15.0%	内挿	2.5%
	火力乾燥	3.0%	内挿	2.2%	0%	内挿	1.1%
	強制発酵	42.0%	内挿	49.6%	5.1%	内挿	19.3%
	堆積発酵等	23.0%	内挿	36.8%	66.9%	内挿	36.7%
	焼却	2.0%	内挿	1.6%	13.0%	内挿	30.5%
	メタン発酵	—	—	—	—	内挿	0.1%
	公共下水道	—	—	—	—	—	—
	放牧	—	—	0%	—	内挿	0.1%
	その他	—	内挿	1.6%	—	内挿	9.9%

(出典) 上記表 5-30 参照

■ 日本の家畜排せつ物管理の背景情報

欧州においてはスラリー散布（液状処理）が一般的な家畜排せつ物管理である。一方、日本においては堆肥化（強制発酵、堆積発酵）が一般的な家畜排せつ物管理となっている。堆積発酵の排出係数を実測調査した Osada et al. (2005) は、「単位面積あたりの家畜密度が特に高い地域において、家畜ふん尿からの栄養塩の適切なりサイクルはその地域における循環のみによって完結することはできない。それゆえ、家畜排せつ物は堆肥化プロセスによってより管理しやすくすることができ、その結果得られる生産物を広い範囲に分散させることができる。」と記述している。我が国で堆肥化処理が多く行われている理由としては、①我が国の畜産農家の場合、発生する排せつ物の還元に必要な面積を所有していない場合が多く、経営体外での利用向けに排せつ物を仕向ける必要性が高いため、堆肥化による運搬性、取扱い性の改善が不可欠であること、②我が国は降雨量が多く施肥の流失が生じやすく、水質保全、悪臭防止、衛生管理といった観点からの要請も強いため、様々な作物生産への施肥において、スラリーや液状物に比べ、堆肥に対する需要はるかに大きいことなどがあげられる。

■ 共通報告様式（CRF）での報告方法について

CRF では、当該区分の窒素排せつ物量（MMS）について処理方法ごと（嫌気性ラグーン（Anaerobic Lagoons）、汚水処理（Liquid Systems）、逐次散布（Daily Spread）、固形貯留及び乾燥（Solid Storage and Dry Lot）、放牧（Pasture, Range and Paddock）、堆肥化（Composting）、消化（Digesters）、燃料および廃棄物としての焼却（Burned for fuel or as waste）、その他（Other））に報告することとされている。

牛、豚、家禽類については、我が国独自の家畜種ごとの排せつ物管理区分、及び排せつ物管理区分の実施割合を設定している。表 5-32 にその詳細を示した。

「嫌気性ラグーン」については、「NO」として報告した。家畜ふん尿を貯留して散布するだけの農地を有する畜産家がほとんど存在せず、農地への散布を行う場合でも、事前に攪拌を行ってから散布しており「嫌氣的 (anaerobic)」な処理方法は存在しないといえるためである。

表 5-32 我が国の排せつ物管理区分と CRF における報告区分及び排せつ物管理区分の概要

我が国の区分		CRF における報告区分	排せつ物管理区分の概要
排せつ物分離状況	排せつ物管理区分		
ふん尿分離処理	ふん	天日乾燥	Solid storage and dry lot 天日により乾燥し、ふんの取扱性（貯蔵施用、臭気等）を改善する。
		火力乾燥	Other system 火力により乾燥し、ふんの取扱性を改善する。
		強制発酵	Composting 堆肥化方法の一つ。開閉式または密閉式の強制通気攪拌発酵槽で数日～数週間発酵させる。
		堆積発酵	Composting 堆肥化方法の一つ。堆肥盤、堆肥舎等に高さ 1.5-2m 程度で堆積し、時々切り返しながら数ヶ月かけて発酵させる。
		焼却	Burned for fuel or as waste ふんの容積減少や廃棄、及びエネルギー利用（鶏ふんボイラー）のため行う。
		メタン発酵	Digesters スラリー状の家畜排せつ物を嫌氣的条件下で発酵させる。発生したメタンガスはエネルギー利用する。
		公共下水道	- 浄化処理や曝気処理等を行わず、公共下水道へ放流する。排出量は廃棄物分野で計上。
		放牧	Pasture range and paddock 採食のための植生を有する土地で家畜を飼養する。N ₂ O は「放牧家畜の排せつ物（3.D.a.3）」で計上。
	その他	Other system 上記以外の処理を行っている。	
	尿	強制発酵	Composting 貯留槽において曝気処理する。
		浄化	Aerobic treatment 活性汚泥など、好気性微生物によって、汚濁成分を分離する。
		貯留	Liquid system 貯留槽に貯留する。
		メタン発酵	Digesters 上記メタン発酵に同じ。
		公共下水道	- 上記公共下水道に同じ。
その他		Other system 上記以外の処理を行っている。	
ふん尿混合処理	天日乾燥	Solid storage and dry lot 天日により乾燥し、ふんの取扱性を改善する。	
	火力乾燥	Other system ふん尿分離処理の記述に同じ。	
	強制発酵	Composting 貯留槽において曝気処理する。	
	堆積発酵	Composting ふん尿分離処理の記述に同じ。	
	浄化	Aerobic treatment ふん尿分離処理の記述に同じ。	
	貯留	Liquid system 貯留槽（スラリーストア等）に貯留する。	
	メタン発酵	Digesters ふん尿分離処理に同じ。	
	公共下水道	- 上記公共下水道に同じ。	
	放牧	Pasture range and paddock 上記放牧に同じ。	
	その他	Other system 上記以外の処理を行っている。	

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

CH₄排出係数の不確実性は 2006 年 IPCC ガイドラインの Tier2 の値（20%）を採用した。N₂O 排出係数の不確実性は 2006 年 IPCC ガイドラインの各パラメータの不確実性のデフォルト値を使用し、それらを合成して算出した。

活動量の不確実性は、豚は「畜産統計」掲載の標準誤差 1%を採用し、鶏は「畜産統計」掲載のブロイラーの標準誤差 9%を採用した。牛は「消化管内発酵 牛」と同様に 1%を採用した。

その結果、排出量の不確実性は、乳用牛、肉用牛および豚の CH₄、N₂O でそれぞれ-20%～+20%、-71%～+112%、鶏の CH₄、N₂O でそれぞれ-22%～+22%、-72%～+112%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は 1990 年度値から一貫した方法で算定している。活動量は「畜産統計」をもとに、1990 年度値から一貫した方法を使用している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

放牧牛の CH₄、N₂O の排出係数に国独自の排出係数を用いており、これらの値は 2006年 IPCC ガイドラインに掲載されているデフォルト値から計算した値よりも小さい。日本の放牧地の土壌は排水性のよい黒ボク土・褐色森林土が大半を占めており、そのため日本の CH₄、N₂O の排出係数は小さくなっているのではないかと推測される。

乳用牛の貯留の CH₄、N₂O の排出係数に国独自の排出係数を用いており、この値は 2006年 IPCC ガイドラインに掲載されているデフォルト値から計算した値よりも小さい。CH₄については、我が国におけるスラリー貯留期間は比較的短期であり、スラリーからの CH₄発生が盛んになる前に農地や採草地に散布されているためと考えられる。N₂O の排出係数が小さいことについても同様で、長期貯留を行わないため、N₂O 排出源と推定されるスカムが貯留槽を覆うまでに至っていないことが理由として考えられる。

インベントリ審査において、乳用牛の見かけの CH₄排出係数が他の附属書 I 国と比べてかなり高いと指摘を受けた。これは、日本において堆積発酵が一般的なふん尿管理方法であり、その堆積発酵の排出係数が大きいためである。なお、乳用牛のふんは含水率が高く嫌気性環境になりやすいことから、ふんの堆積発酵における CH₄排出係数が大きな数値になっていると考えられる。

鶏の堆積発酵の排出係数に関して、採卵鶏の排出係数がブロイラーよりも大きくなっている。CH₄については採卵鶏のふんの含水率が高いことが理由として考えられる。また、N₂O の国独自の排出係数がデフォルト値よりも小さいのは、デフォルト値が鶏だけのものではない（牛や豚も含まれている）ことが理由として考えられる（牛、豚より鶏のふんの方が、硝化作用が起きにくい）。

鶏の天日乾燥の国独自の N₂O 排出係数がデフォルト値よりも小さい。これは鶏の堆積発酵の排出係数と同様、デフォルト値の対象が鶏だけではないことが理由として考えられる。

e) 再計算

乳用牛群能力検定成績 検定牛の産次別頭数が更新されたため、乳用牛の 2017 年の排出量が更新された。肉用牛および豚の排せつ物中窒素量の計算方法が改訂されたことにより、肉用牛および豚の全年度の排出量が更新された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

排出実態に関する研究や排出削減対策の情報収集が関係機関により継続して実施されているため、新たな成果が得られた場合には、排出係数及び各種パラメータの見直しを検討する。

5.3.2. 水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンク (3.B.2., 3.B.4.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンクの家畜排せつ物の管理による CH₄、N₂O 排出に関する算定、報告を行なう。

b) 方法論

■ 算定方法

CH₄、N₂O 排出量については、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol.4, Page 10.36, Fig.10.3 及び Page 10.55, Fig.10.4）に従い Tier 1 法を用いて算定を行った。

$$E_{CH_4} = EF_{CH_4} \times P$$

$$E_{N_2O} = \sum (EF_{N_2O-n} \times P \times Nex \times MS_n)$$

E_{CH_4}	: 家畜排せつ物管理に伴う CH ₄ 排出量 [kg-CH ₄]
E_{N_2O}	: 家畜排せつ物管理に伴う N ₂ O 排出量 [kg-N ₂ O]
EF_{CH_4}	: CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ 頭 ⁻¹ 年 ⁻¹]
EF_{N_2O-n}	: 排せつ物処理区分 n の N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O (kg-N) ⁻¹]
P	: 家畜の飼養頭数 [頭]
Nex	: 1 頭あたりの排せつ物中窒素量 [kg-N 頭 ⁻¹]
MS_n	: 排せつ物管理区分割合 [%]

■ 排出係数

CH₄排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示された先進国の温帯のデフォルト値を使用した。水牛については「Asia」温帯のデフォルト値を採用した（表 5-33）。

N₂O 排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値を使用した（表 5-34）。

表 5-33 水牛、めん羊、山羊、馬の CH₄排出係数

家畜種	CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ 頭 ⁻¹ 年 ⁻¹]	出典
めん羊	0.28	2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、p10.40、Table10.15
山羊	0.20	
馬	2.34	
水牛	2	2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、p10.39、Table10.14
うさぎ	0.08	2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、p10.41、Table10.16
ミンク	0.68	

表 5-34 水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンクの N₂O 排出係数

排せつ物管理区分		N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O-N (kg-N) ⁻¹]
Dry lot	乾燥	2.0 %
Pasture Range and Paddock (水牛)	その他 (放牧地/牧野/牧区)	2.0 %
Pasture Range and Paddock (めん羊、山羊、馬)	その他 (放牧地/牧野/牧区)	1.0 %
Daily spread	逐次散布	0 %
Burned for fuel	燃料利用	0 %

(出典) Dry lot, Daily Spread : 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、page 10.62、Table 10.21

Pasture Range and Paddock : 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、page 11.11、Table 11.1

■ 活動量

めん羊、山羊、馬、水牛の家畜頭数は「3.A.消化管内発酵」と同じデータを使用した（表 5-12 参照）。うさぎ、ミンクに関しては、農林水産省「小動物及び実験動物等の飼養状況」に示された飼養頭数を用いた（表 5-35 参照）。

N₂O に関して、各家畜の飼養頭数に家畜 1 頭あたりの排せつ物中窒素量（または体重に体重あたりの排せつ物窒素量を掛け合わせて算出した値）を乗じて総窒素量を算出し、その総窒素量に排せつ物管理区分ごとの割合を掛け合わせ、排出処理区分ごとの窒素量を算出した（表 5-36）。水牛の排せつ物管理区分割合は 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用した（排せつ物管理区分割合は「Asia」のデフォルト値）（表 5-37）。

2006年 IPCC ガイドラインでデフォルト値が示されていないうさぎ、ミンクの排せつ物管

理割合に関しては専門家判断により、100%乾燥処理されるとした。2006年 IPCC ガイドラインでデフォルト値が示されていないめん羊、山羊、馬の排せつ物管理割合については「その他の家畜カテゴリーからのふん尿は概して放牧地で管理される」（2006年 IPCC ガイドライン、Vol.4, p10.61）と記述されていることから、これら家畜の排せつ物は放牧により処理されるとみなした。

表 5-35 うさぎ、ミンクの飼養頭数 [1000 頭]

家畜種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
うさぎ	15	16	21	19	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
ミンク	155	11	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

(出典)「小動物及び実験動物等の飼養状況」

表 5-36 水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンクの体重および排せつ物中窒素量 (Nex)

家畜種	体重 [kg]	体重あたりの排せつ物中窒素量 [kg-N (1000kg-家畜体重) ⁻¹ 日 ⁻¹]	家畜排せつ物中窒素量 [kg-N (頭) ⁻¹ 年 ⁻¹]
水牛	380	0.32	(44.4)
めん羊	48.5	1.17	(20.7)
山羊	38.5	1.37	(19.3)
馬	377	0.46	(63.3)
うさぎ	-	-	8.10
ミンク	-	-	4.59

(注) 括弧内の数値は、計算値。

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4, page 10.79, Table 10A-6, page 10.82, Table 10A-9, page 10.59, Table 10.19

表 5-37 水牛の排せつ物管理処理区分割合 (MS_n)

排せつ物管理区分		処理区分割合
Lagoons	嫌気性ラグーン	0 %
Liquid /Slurry	汚水処理	0 %
Solid Storage	固形貯留	0 %
Dry lot	乾燥	41 %
Pasture Range and Paddock	放牧地／牧野／牧区	50 %
Daily Spread	逐次散布	4 %
Digester	消化処理	0 %
Burned for Fuel	燃料利用	5 %
Other	その他	0 %

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4, page 10.79, Table 10A-6

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

家畜ごとに不確実性の評価を行った。CH₄排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインの Tier1 の値 (30%) を採用した。N₂O 排出係数の不確実性は 2006年 IPCC ガイドラインの各パラメータの不確実性のデフォルト値を使用し、それらを合成して算出した。活動量の不確実性は、畜産統計のブロイラーの値で代替し、9%とした。その結果、各家畜の CH₄、N₂O の不確実性は、それぞれ、-31%～+31%、-72%～+112%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数はすべての年で一定値を使用している。活動量については、「家畜改良関係資料」、「馬関係資料」、「家畜・家きん等の使用状況調査結果」、「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」を用い、それぞれ 1990 年度値から一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.3.3. その他の家畜 (3.B.4.-)

上述した家畜以外に、農林水産省「小動物及び実験動物等の飼養状況」においては、鹿、トナカイ、銀ぎつね、その他の家禽類（あひる・あいがも、七面鳥など）が掲載されているが、飼育頭数が少なく、いずれも算定方法検討会で定めた算定対象となる 3,000t-CO₂換算という閾値を超える排出量とはならないため、排出量を報告していない（別添5参照）。

5.3.4. 間接 N₂O 排出量 (3.B.5.)

5.3.4.1. 大気沈降 (3.B.5.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、家畜排せつ物処理過程で NH₃や NO_xとして揮発した窒素化合物の大気沈降に伴い発生した N₂O の排出量の算定、報告を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデンジョンツリー (Vol.4 Page 10.55, Fig.10.4) に従い、Tier2法で N₂O 排出量の算定を行った。

$$E = N_{Volatilization-MMS} \times EF \times 44/28$$

E : 大気沈降による N₂O 排出量 (家畜排せつ物処理過程) [kg-N₂O]

$N_{Volatilization-MMS}$: 家畜排せつ物処理過程で NH₃や NO_xとして揮発した窒素量 [kg (NH₃-N+NO_x-N)]

EF : 排出係数 [kg-N₂O-N/kg (NH₃-N+NO_x-N)]

■ 排出係数

0.010 [kg-N₂O-N/kg-NH₃-N & NO_x-N deposited] (2006年 IPCC ガイドライン Vol.4, Page10.24, Table11.3)

■ 活動量

牛、豚、鶏（採卵鶏、ブロイラー）に関して、活動量は下記の式で示したように、家畜のふん尿管理から NH₃や NO_xとして揮発した窒素量 ($N_{Volatilization-MMS}$) は、上記 5.3.1.で算出した各処理方式の家畜排せつ物中の窒素量 (N_{Bi}) と各処理方式の畜舎における家畜排せつ物からの揮散割合 ($Frac_{GASMi}$) と各処理方式の処理時における家畜排せつ物からの揮散割合

($Frac_{GASM2i}$) から算出した。各処理方式の揮散割合は寶示戸、他 (2003) に示されたデータから設定した (表 5-39)。浄化処理に関しては処理時に揮散しないと設定した。なお、放牧家畜のふん尿から NH_3 や NO_x として揮発した窒素からの間接 N_2O 排出量は 3.D.b.1. で報告している。

$$N_{Volatilization-MMS} = \sum \{N_{Bi} \times (Frac_{GASM1i} + Frac_{GASM2i})\}$$

- $N_{Volatilization-MMS}$: 家畜排せつ物処理過程で NH_3 や NO_x として揮発した窒素量 [kg (NH_3-N+NO_x-N)]
- N_{Bi} : 処理方式 i における家畜排せつ物中の窒素量 [kg-N]
- $Frac_{GASM1i}$: 処理方式 i の畜舎における家畜排せつ物から NH_3 や NO_x として揮発する割合 [kg- $NH_3-N + NO_x-N$ /kg-N]
- $Frac_{GASM2i}$: 処理方式 i の処理時に家畜排せつ物から NH_3 や NO_x として揮発する割合 [kg- $NH_3-N + NO_x-N$ /kg-N]

表 5-38 家畜排せつ物からの揮散割合 (畜舎・処理時)

家畜種	処理区分		畜舎からの揮散割合 ($Frac_{GASM1}$)	処理時揮散割合 ($Frac_{GASM2}$)
乳用牛	ふん	強制発酵以外	10.3 %	13.7 %
		強制発酵	10.3 %	1.9 %
	尿	浄化以外	10.3 %	11.0 %
		浄化	10.3 %	0 %
	ふん尿混合	浄化・貯留・メタン発酵以外	4.5 %	13.7 %
		浄化	10.3 %	0 %
肉用牛	ふん	強制発酵以外	6.38 %	13.7 %
		強制発酵	6.38 %	1.9 %
	尿	浄化以外	6.38 %	11 %
		浄化	6.38 %	0 %
	ふん尿混合	浄化・貯留・メタン発酵以外	6.38 %	13.7 %
		貯留・メタン発酵	6.38 %	10.8 %
豚	ふん	すべての処理	14.7 %	19.7 %
	尿	浄化以外	14.7 %	27.0 %
		浄化	14.7 %	0 %
	ふん尿混合	浄化・貯留・メタン発酵以外	15.8 %	24.2 %
		貯留・メタン発酵	14.7 %	25.0 %
	採卵鶏・ブロイラー	ふん	すべての処理	8.4 %

(出典) 寶示戸他 (2003)

水牛、うさぎ、ミンクに関しては、ふん尿全量に 2006 年 IPCC ガイドラインで示されたデフォルトの揮散割合 (Other-Solid storage : 12%) を掛けることにより、 NH_3 や NO_x として揮発する量を算出した。

表 5-39 家畜排せつ物処理過程で NH_3 や NO_x として揮発した窒素量 [kt(NH_3-N+NO_x-N)]

家畜種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
乳用牛	26.6	26.1	24.6	23.4	21.0	20.5	20.5	20.2	19.7	19.4	19.5	19.1	19.1	19.1
肉用牛	22.3	23.0	23.0	22.5	23.5	22.5	22.2	21.5	20.9	20.3	20.3	20.4	20.5	20.3
豚	54.7	47.5	44.7	38.3	35.9	36.2	36.2	36.0	34.8	34.0	33.4	33.3	34.7	34.5
鶏 (採卵鶏、ブロイラー)	187.6	177.5	157.2	136.3	121.8	118.1	113.8	111.2	111.5	112.1	113.0	114.5	117.0	118.5
その他の家畜 (水牛、ミンク、うさぎ)	0.10	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
合計	291.3	274.0	249.6	220.5	202.4	197.3	192.8	189.0	186.9	185.8	186.2	187.4	191.3	192.4

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

後述の「農用地の土壌（大気沈降）」の節で算出した不確実性（-106%～+447%）を用いた。

■ 時系列の一貫性

排出係数はすべての年で一定値（デフォルト値）を使用している。活動量に関して、揮発割合はすべての年で一定値を使用し、家畜排せつ物量は 5.3.1. で算出した値を用いており、1990 年度値から一貫した方法を使用して、算定している。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1 章に詳述している。

e) 再計算

肉用牛と豚の排せつ物中窒素量の算定方法が改訂されたので、全年で再計算された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

「5.3.1. 牛、豚、家禽類（採卵鶏、ブロイラー）（3.B.1., 3.B.3., 3.B.4.-）」に同じ。

5.3.4.2. 窒素溶脱・流出（3.B.5.-）

「家畜排せつ物法」が制定されており、家畜排せつ物管理の際に施設から汚水が流出しない処置を施すこと（床をコンクリート張りにしたり、防水シートを敷くなど）が義務付けられていることから、家畜排せつ物処理時に地下水等に窒素が溶脱・流出する可能性については極めて低い。そのため、この排出源については「NO」として報告する。

5.4. 稲作（3.C.）

CH₄は嫌気性条件で微生物の働きによって生成されるため、水田は CH₄生成に好適な条件が整っていると言える。日本ではすべての水田が灌漑されており、間断灌漑水田（中干しされる水田）と常時湛水田に分かれ、これらが算定の対象となる。日本では主に、間断灌漑水田で稲作が営まれている。

2018 年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は 13,561 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF を除く）の 1.1%を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 6.2%の増加となっている。この 1990 年度からの排出量増加の主な要因は有機物投入量が増加したことによるものである。

表 5-40 稲作に伴う CH₄排出量（3.C.）

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CH ₄	3.C.1.- 常時湛水田	kt-CH ₄	69.8	77.9	72.0	78.2	78.2	83.8	83.7	82.6	83.3	82.7	79.4	78.6	77.6	75.5
	3.C.1.- 間断灌漑水田		441.1	466.3	437.9	459.6	476.3	517.8	503.5	490.4	499.3	494.8	476.9	477.6	467.5	467.0
	合計	kt-CH ₄	510.8	544.2	510.0	537.8	554.5	601.6	587.2	573.0	582.6	577.5	556.3	556.3	545.1	542.4
		kt-CO ₂ 換算	12,771	13,605	12,749	13,445	13,863	15,041	14,680	14,325	14,565	14,437	13,908	13,907	13,627	13,561

5.4.1. 灌漑水田（間断灌漑水田（中干し）、常時湛水田）（3.C.1.）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、灌漑水田（間断灌漑水田、常時湛水田）からの CH₄排出の算定、報告を行う。

■ 日本の水田における水管理について

日本の一般的な水田農家の間断灌漑（中干し）水田は、2006年 IPCC ガイドラインの間断灌漑水田（複数落水）とは性質が異なるため、CRF 上では「Intermittently flooded (Single aeration)」で報告する。概要を下図に示す。

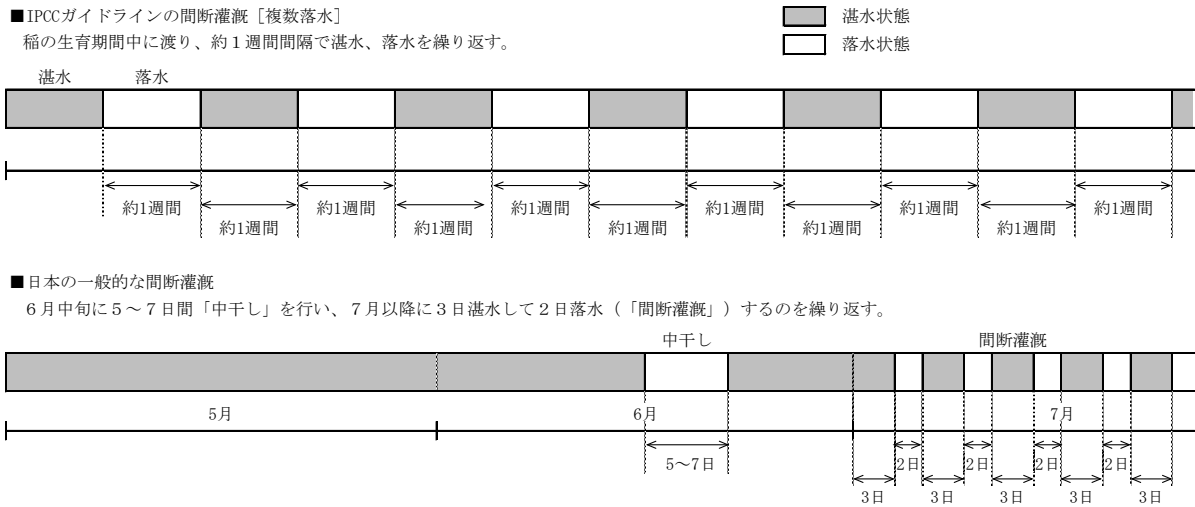


図 5-4 2006年 IPCC ガイドラインの間断灌漑（複数落水）水田と日本の一般的な間断灌漑（中干し）水田

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの算定方法をもとに、水田の有機物施用方法や水管理によるメタン発生量の変化を推定する数理モデルである DeNitrification-DeComposition-Rice モデル（DNDC-Rice モデル（麓、他（2010））を用いて決定した算定方法（下記式）とそのモデルから算出した排出係数をもとに算定をおこなった。なお、DNDC-Rice モデルは DNDC モデルをベースに日本における水稻の CH₄排出量を推定できるよう日本で改良を加えたモデルである。図 5-5 は DNDC-Rice モデルの概念図である。

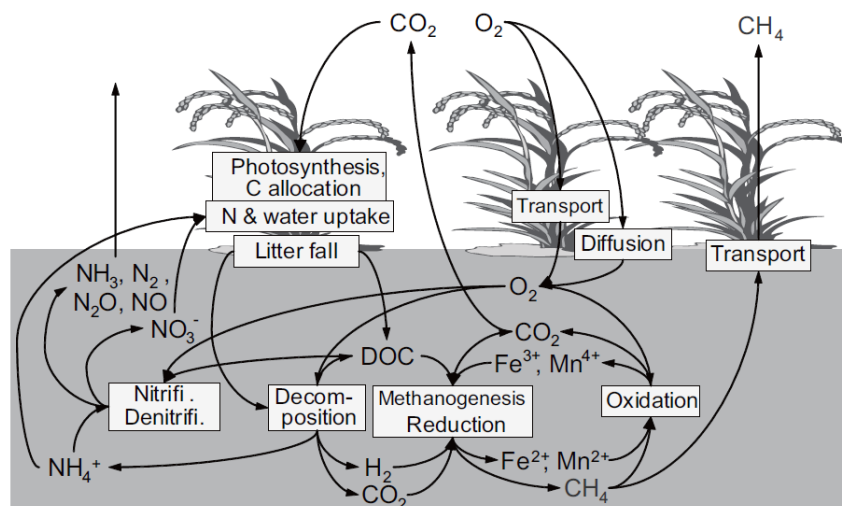


図 5-5 DNDC-Rice モデルの概念図

(出典) 麓他 (2010)

排出係数の算出には Tier3 法 (DNDC-Rice モデル) を用い、排出量の算定には Tier2 法を変形した方法を用いている。

なお、ここで用いられている算定方法については Katayanagi et al. (2016)、Katayanagi et al. (2017) および関連文献に記述されているものをもとに算定方法検討会において検討し、構築している。

$$E = \sum_{i,j,k,l} \{(A_i \times f_{Dij} \times f_{wi,k} \times f_{ol}) \times EF_{ij,k,l}\} \times 16/12$$

$$EF = aX + b$$

E	: 水田からの CH_4 の排出量 [$\text{kgCH}_4/\text{年}$]
i	: 地域 (全国 7 地域)
j	: 排水性 (排水不良、日排除、4 時間排除)
k	: 水管理 (間断灌漑、常時湛水)
l	: 施用有機物 (稲わら、堆肥、無施用)
A	: 地方別水稲作付面積 [ha]
f_D	: 排水性割合
f_w	: 水管理割合
f_o	: 有機物管理割合
EF	: 地方別・排水性別・水管理別・有機物管理割合別排出係数 [$\text{kgCH}_4\text{-C}/\text{ha}/\text{年}$]
X	: 有機物施用量 [$\text{tC}/\text{ha}/\text{年}$]
a	: 傾き (有機物施用量と DNDC-Rice モデルによって算出された CH_4 排出量の回帰式より算出)
b	: 切片 (有機物施用量と DNDC-Rice モデルによって算出された CH_4 排出量の回帰式より算出)

■ 排出係数

排出係数の算出には DNDC-Rice モデルを用いている。

今回使用した排出係数は全国 986 地点の水田の情報を基に構築している。入力データには、土壌 (土壌有機態炭素量、pH、粘土含量、乾燥密度など)、圃場の排水性 (最大排水速度)、気象データ (気温、降水量)、圃場管理情報 (移植日、収穫日、耕起日、耕起法、施肥日、施肥量、有機物施用日、有機物施用量、有機物 C/N 比、湛水日、落水日) を用いている。入力データの出典と概要は以下の通りである。

- ・ 土壌理化学性：農林水産省「土壌環境基礎調査」の 1,2 巡目のデータのうち、DNDC-Rice

モデルで入力する必要がある全てのデータが記載されている 986 地点のデータ。

- ・ 圃場の排水性：農林水産省「第 4 次土地利用基盤整備基本調査」(2006) の「湛水状況」の記載 (4 時間排除、日排除、排水不良) に基づき、調査地点の最大排水速度を 15 mm day⁻¹、10 mm day⁻¹、または 5 mm day⁻¹ と設定した。
- ・ 気象データ：調査地点の最寄りの AMeDAS 地点の日最低気温、日最高気温、降水量を用いた。
- ・ 圃場管理情報：日本全体を気象庁の一次細分区域に従って 136 に区分し、各地の JA 等が公表している栽培歴に基づき作成したデータセット (Hayano et al., 2013) を用いた。
- ・ 有機物施用量：Yagasaki and Shirato (2014) の方法により、県別に 1981~2010 年の稲わら等の作物残渣すき込み量および堆肥の施用量を推定した。すなわち、稲わら等の作物残渣の平均すき込み量は、水稻と裏作の麦および肥飼料作物の県別収穫量統計値から推定したそれぞれの残渣発生量とそのうち土壌にすき込まれた割合をかけあわせたのち、水稻作付面積でその量を除して算出した。堆肥施用量は、「土壌環境基礎調査」(1990)、温暖化対策土壌機能調査協議会「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」(2013) のアンケート結果等から年別の平均施用量を推定した。

DNDC-Rice モデルと上記の入力値を用いて、986 地点の 1981~2010 年 (30 年間) のメタン排出フラックスを、水管理 2 シナリオ (間断灌漑および常時湛水)、有機物施用 4 シナリオ (わらと堆肥¹、わらのみ、堆肥のみ、施用なし) の計 8 シナリオで推定した。その結果から統計の有意差を考慮し、メタン排出フラックス推定値を 7 地域、排水性 (3 段階) および水管理と有機物施用シナリオで区分し、年別の平均値を求めた。さらに、有機物施用量 (区分毎の各年の平均値) から CH₄排出フラックスを予測する回帰式 (1 次関数) を導出した。なお、回帰式の切片 (b) は、有機物施用なしで推定した平均メタン排出フラックスに固定した。

地域別の有機物施用総量は Yagasaki and Shirato (2014) の方法で求めた県別の施用量からまとめた。さらに、インベントリの算定には、有機物管理方法別の施用量 (有機物施用量) (X) が必要となるため、その総量と有機物管理方法の割合 (表 5-46) から求めた。有機物管理方法の割合は「土壌環境基礎調査」、「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」、農林水産省「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業」、「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業」の調査結果を基にした。地域別の各投入区分における有機物施用量およびそれらから算出された各区分の排出係数はそれぞれ下記表 5-41、表 5-42 に示したとおりである。

表 5-41 地域別の各施用区分における有機物投入量 (X) [t-C/ha]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
稲わら	北海道	1.68	2.16	2.39	2.74	2.31	2.74	2.68	2.50	2.50	2.56	2.57	2.52	2.56	2.28
	東北	1.83	2.25	2.62	2.66	2.60	2.85	2.59	2.46	2.52	2.54	2.53	2.48	2.43	2.46
	北陸	2.97	2.99	3.41	2.36	2.43	3.60	3.34	2.31	2.37	2.33	2.38	2.52	2.34	2.38
	関東	1.76	2.09	2.54	2.56	2.48	2.58	2.44	2.34	2.41	2.36	2.26	2.30	2.26	2.31
	東海・近畿	2.29	2.65	2.87	2.97	2.83	3.06	2.83	2.75	2.84	2.70	2.82	2.87	2.80	2.79
	中国・四国	1.96	2.51	2.72	2.74	2.50	2.90	2.71	2.58	2.59	2.48	2.57	2.68	2.67	2.63
	九州・沖縄	1.39	1.50	1.65	1.57	1.75	1.96	1.53	1.75	1.77	1.72	1.75	1.80	1.79	1.79
	九州・沖縄	1.39	1.50	1.65	1.57	1.75	1.96	1.53	1.75	1.77	1.72	1.75	1.80	1.79	1.79
堆肥	北海道	1.24	0.61	0.68	1.78	2.32	2.22	2.61	2.49	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15
	東北	1.24	0.61	0.67	1.78	2.30	2.18	2.52	2.41	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15
	北陸	1.23	0.61	0.67	1.78	2.31	2.20	2.58	2.47	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15
	関東	1.38	0.74	0.73	2.14	2.73	2.57	2.99	2.85	2.50	2.49	2.49	2.49	2.49	2.50
	東海・近畿	1.25	0.61	0.68	1.80	2.34	2.22	2.61	2.48	2.16	2.16	2.16	2.16	2.16	2.16
	中国・四国	1.33	0.67	0.71	1.94	2.49	2.37	2.77	2.65	2.31	2.31	2.33	2.33	2.34	2.35
	九州・沖縄	1.60	0.95	0.85	2.82	3.82	3.58	4.33	4.11	3.67	3.70	3.73	3.77	3.75	3.79
	九州・沖縄	1.60	0.95	0.85	2.82	3.82	3.58	4.33	4.11	3.67	3.70	3.73	3.77	3.75	3.79

¹ わらと堆肥を同時に投入したシナリオはモデル上で構築されているが、わらと堆肥を同時に投入している有機物管理割合 (fo) が得られないことから、インベントリ排出量の算定には使用していない。

表 5-42 各区分の稲作からの CH₄排出係数 [kg-CH₄-C/ha/年]

項目		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
排水不良・常時湛水	稲わら	北海道	571	701	765	859	743	859	843	794	795	811	812	798	811	734	
		東北	664	775	875	886	871	936	867	833	847	854	850	839	825	833	
		北陸	805	810	909	664	679	953	892	653	666	655	668	701	660	668	
		関東	235	276	331	333	324	335	319	306	316	309	297	302	297	303	
		東海・近畿	492	562	606	627	600	644	599	583	600	574	596	606	593	591	
		中国・四国	464	573	615	619	571	650	611	587	589	568	585	606	605	597	
		九州・沖縄	185	198	216	206	229	254	202	228	231	224	228	235	234	234	
		堆肥	北海道	452	279	298	600	746	717	823	792	698	698	698	698	698	698
			東北	505	337	355	651	790	757	848	820	748	748	748	748	748	748
	北陸		401	254	270	529	652	627	715	689	613	613	613	613	613	613	
	関東		188	109	108	282	355	335	387	370	326	325	325	325	325	326	
	東海・近畿		284	157	170	394	500	478	554	530	466	466	466	466	466	466	
	中国・四国		341	210	218	460	570	546	624	600	534	534	537	538	539	541	
	九州・沖縄		211	131	119	358	481	450	542	515	462	465	469	474	471	476	
	無施用		北海道	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114
			東北	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175
		北陸	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	
		関東	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	
東海・近畿		35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35		
中国・四国		77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77		
九州・沖縄		16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16		
排水不良・間断灌漑		稲わら	北海道	571	701	765	859	743	859	843	794	795	811	812	798	811	734
			東北	637	747	846	856	842	906	838	805	818	825	821	810	797	804
	北陸		605	609	691	488	501	727	677	479	490	481	492	519	485	492	
	関東		212	249	298	300	292	302	287	275	284	278	267	272	268	273	
	東海・近畿		399	457	493	510	488	525	487	473	488	466	485	493	482	480	
	中国・四国		416	518	556	560	515	589	553	530	533	512	528	548	547	540	
	九州・沖縄		162	173	188	180	199	220	176	198	201	195	198	204	203	203	
	堆肥		北海道	452	279	298	600	746	717	823	792	698	698	698	698	698	698
			東北	480	314	332	624	762	730	819	792	720	720	720	720	720	720
		北陸	271	150	163	377	479	458	531	509	447	447	447	447	447	447	
		関東	170	99	98	254	319	301	348	333	293	293	292	293	293	293	
		東海・近畿	227	122	133	318	406	387	450	430	377	377	377	377	377	377	
		中国・四国	302	180	187	412	514	492	565	543	481	481	484	484	486	487	
		九州・沖縄	183	116	106	308	412	386	464	441	396	399	402	406	404	408	
		無施用	北海道	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114
			東北	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153
	北陸		33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	
	関東		17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	
東海・近畿	21		21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21		
中国・四国	57		57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57		
九州・沖縄	19		19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19		
日排除・常時湛水	稲わら		北海道	333	417	458	519	444	518	508	477	477	488	488	479	488	438
			東北	492	576	653	661	649	699	646	621	631	637	634	625	615	620
		北陸	608	612	692	493	506	728	678	484	495	486	497	523	490	497	
		関東	156	182	218	219	213	220	210	201	208	203	196	199	196	200	
		東海・近畿	225	258	279	289	276	297	275	268	276	264	274	279	273	272	
		中国・四国	184	232	250	252	231	265	248	238	239	229	237	246	246	242	
		九州・沖縄	155	166	180	172	191	212	169	190	193	187	191	196	195	195	
		堆肥	北海道	256	145	157	352	446	427	495	475	415	415	415	415	415	415
			東北	371	242	256	482	588	563	632	611	556	556	556	556	556	556
	北陸		280	160	173	384	484	464	535	514	452	452	452	452	452	452	
	関東		126	75	75	186	233	220	253	242	214	214	213	214	214	214	
	東海・近畿		125	65	71	178	229	218	254	243	212	212	212	212	212	212	
	中国・四国		131	74	77	183	230	220	254	244	215	215	216	216	217	218	
	九州・沖縄		176	109	99	300	403	377	455	432	387	390	393	398	395	399	
	無施用		北海道	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39
			東北	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119
		北陸	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	
		関東	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	
東海・近畿		6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6		
中国・四国		17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17		
九州・沖縄		12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12		

表 5-42 各区分の稲作からの CH₄排出係数 [kg-CH₄-C/ha/年] (つづき)

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018			
日排除・間断灌漑	稲わら	北海道	229	289	318	360	307	360	353	331	331	339	339	333	339	303	
		東北	349	412	469	475	467	504	465	445	453	457	455	448	441	445	
		北陸	441	444	502	357	366	529	492	351	358	352	360	379	355	360	
		関東	115	134	160	161	156	162	154	148	153	149	144	146	144	147	
		東海・近畿	101	116	126	130	124	134	124	121	124	119	123	126	123	122	
		中国・四国	98	125	135	136	124	144	134	128	129	124	128	133	132	131	
		九州・沖縄	88	94	103	98	109	121	96	109	110	107	109	112	111	111	
		堆肥	北海道	175	96	105	242	309	296	344	330	287	287	287	287	287	287
		東北	259	163	173	342	421	402	454	438	397	397	397	397	397	397	
北陸	201	114	124	277	350	335	388	372	327	327	327	327	327	327			
関東	93	57	56	137	171	161	186	178	157	157	157	157	157	157			
東海・近畿	56	29	32	80	103	98	114	109	95	95	95	95	95	95			
中国・四国	69	37	39	98	124	118	137	131	115	116	116	116	117	117			
九州・沖縄	100	62	56	171	230	215	260	247	221	223	225	227	225	228			
無施用	北海道	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21		
	東北	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71		
	北陸	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31		
	関東	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15		
	東海・近畿	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
	中国・四国	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5		
	九州・沖縄	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7		
	4時間排除・常時灌水	稲わら	北海道	300	376	413	468	400	468	459	430	430	440	441	433	440	395
			東北	451	532	605	612	601	649	598	574	584	589	586	578	568	574
北陸			578	582	659	469	481	693	646	461	471	463	473	498	466	472	
関東			208	242	288	289	282	291	277	267	275	269	259	263	259	264	
東海・近畿			240	275	296	307	293	316	293	285	294	281	292	297	290	289	
中国・四国			250	313	337	339	312	357	335	321	322	310	319	332	331	327	
九州・沖縄			185	198	216	206	229	255	202	228	232	225	229	235	234	234	
堆肥			北海道	230	130	140	317	402	385	447	429	374	374	374	374	374	374
東北			336	214	227	442	543	519	585	565	512	512	512	512	512	512	
北陸	266	152	165	365	460	441	509	489	430	430	430	430	430	430			
関東	169	103	102	247	307	291	334	320	283	282	282	282	283	283			
東海・近畿	137	73	80	191	244	233	271	259	227	227	227	227	227	227			
中国・四国	179	104	108	248	311	297	342	328	290	290	292	292	293	294			
九州・沖縄	211	130	118	360	484	454	547	519	465	469	473	478	475	480			
無施用	北海道	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33		
	東北	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97		
	北陸	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43		
	関東	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27		
	東海・近畿	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13		
	中国・四国	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27		
	九州・沖縄	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13		
	4時間排除・間断灌漑	稲わら	北海道	166	210	231	263	224	263	257	241	241	247	247	242	247	221
			東北	316	374	427	432	424	458	422	404	412	415	413	407	400	404
北陸			390	392	445	315	323	468	436	309	316	310	317	334	313	317	
関東			143	167	199	200	195	201	192	184	190	186	179	182	179	182	
東海・近畿			135	154	167	173	165	178	165	160	165	158	164	167	163	163	
中国・四国			173	217	233	235	216	248	222	223	214	221	230	229	229	226	
九州・沖縄			109	117	128	122	136	151	120	135	137	133	135	139	139	139	
堆肥			北海道	126	69	75	176	225	215	251	240	209	209	209	209	209	209
東北			232	144	154	309	382	365	412	398	360	360	360	360	360	360	
北陸	175	97	106	243	309	295	342	328	288	288	288	288	288	288			
関東	115	69	68	170	213	201	231	221	195	195	195	195	195	196			
東海・近畿	76	40	44	107	137	131	152	145	127	127	127	127	127	127			
中国・四国	123	71	74	171	215	206	237	227	201	201	202	202	203	204			
九州・沖縄	125	76	69	214	288	270	325	309	276	279	281	284	282	285			
無施用	北海道	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14		
	東北	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59		
	北陸	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22		
	関東	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16		
	東海・近畿	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6		
	中国・四国	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17		
	九州・沖縄	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7		

■ 活動量

地域別水稲作付面積 (A) は農林水産省「耕地及び作付面積統計」に示された値を用いた。排水性割合 (f_D)、水管理割合 (f_w)、有機物管理割合 (f_o) はそれぞれ下記表 5-43～表 5-46 に示した農林水産省等の調査データをそれぞれ用いている。

表 5-43 地域別水稲作付面積 (A) [kha]

地域	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
北海道	146	163	135	119	115	115	114	113	113	112	111	108	107	106
東北	525	539	456	444	421	429	406	414	419	419	415	414	413	412
北陸	258	260	221	218	211	213	213	213	215	216	214	213	212	213
関東	386	390	336	331	320	322	323	324	324	323	322	321	318	316
東海	117	116	95	91	87	88	88	88	87	86	85	85	84	84
近畿	145	148	122	117	111	111	111	111	111	110	108	107	106	106
中国・四国	236	232	187	182	176	178	176	175	175	173	170	167	165	162
九州・沖縄	246	251	207	206	196	202	202	203	203	201	199	196	195	193
合計	2,058	2,098	1,758	1,708	1,637	1,657	1,632	1,641	1,647	1,639	1,623	1,611	1,600	1,592

(注) 算定上では東海と近畿は1地域としてまとめられ計算されている

(出典) 「耕地及び作付面積統計」

表 5-44 排水性割合 (f_D)

地域	4時間排除割合	日排除程度割合	排水不良割合
北海道	51%	42%	7%
東北	63%	31%	6%
北陸	69%	26%	4%
関東	59%	32%	9%
東海・近畿	69%	23%	8%
中国・四国	65%	27%	8%
九州・沖縄	74%	21%	5%

(出典) 「第4次土地利用基盤整備基本調査」

表 5-45 水管理割合 (f_w)

地域	常時湛水田割合	間断灌漑水田割合
北海道	48%	52%
東北	5%	95%
北陸	4%	96%
関東	14%	86%
東海・近畿	11%	89%
中国・四国	8%	92%
九州・沖縄	7%	93%

(出典) 「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」

表 5-46 日本の有機物管理方法の割合 (f_o)

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
わら施用	60%	60%	60%	60%	61%	57%	62%	65%	64%	64%	61%	61%	61%	61%
各種堆肥施用	20%	20%	20%	20%	23%	26%	22%	23%	27%	27%	27%	27%	27%	27%
無施用	20%	20%	20%	20%	16%	17%	16%	12%	9%	9%	12%	12%	12%	12%

(出典) 1990～2007年値：「土壌環境基礎調査」

2008～2012年値：「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」

2013～2014年値：「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業」

2015年以降：「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業」

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、DNDC-Rice モデルから算出した 6%を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に示された水田面積の標準誤差 (1%) を採用した。その結果、排出量の不確実性は 6%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、出典を用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

2016年提出で報告した有機物投入量データについて検証した結果、DNDC-Rice モデルに入力する稲わらのデータの代わりに、稲わらと堆肥の合計値を入力して計算しており、堆肥の有機物投入量が重複計上されていた。従って、2017年提出で有機物投入量データを修正した。

なお、DNDC-Rice モデルから算出されたメタン排出量の推定値と圃場におけるメタン排出量の実測値の比較は、Minamikawa et al. (2014)、麓他 (2010)、Katayanagi et al. (2016) の論文などで実施され、報告されている。下図 5-6 は Katayanagi et al. (2016) に記載されている年間メタン排出量の実測値と DNDC-Rice モデルによる推定値の比較である。論文によると、CH₄排出量の推定値は地点間の条件の違いによるばらつきを反映し、実測値と高い相関をもっていた ($r=0.861$) と報告している。

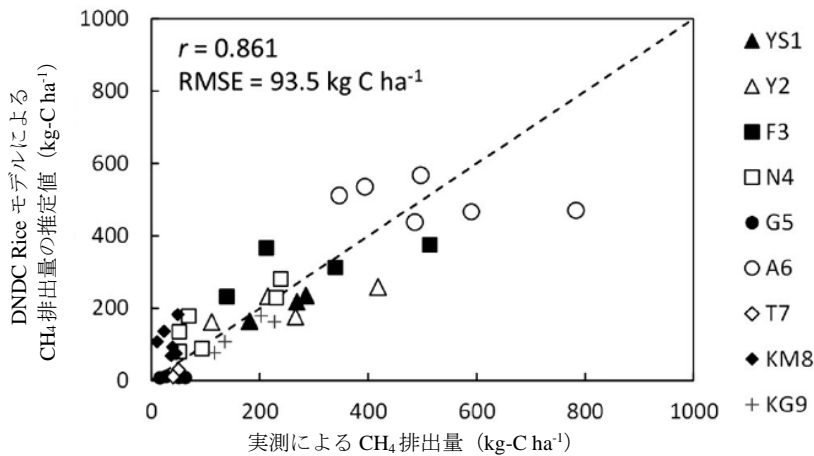


図 5-6 年間メタン排出量の実測値と DNDC-Rice モデルによる推定値の比較

(出典) Katayanagi et al. (2016) Fig.3 より引用

また、DNDC-Rice モデルから算出された排出係数を我が国のインベントリに適用することの妥当性確認については、Katayanagi et al (2016) の中で行うとともに、算定方法検討会の農業分科会においても検討を行っている。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

将来的に DNDC-Rice モデルの研究が進み、改良・アップデートされた際には、改良版 DNDC-Rice モデルの適用を検討する。

5.4.2. 天水田、深水田、その他の水田 (3.C.2., 3.C.3., 3.C.4.)

天水田、深水田については、International Rice Research Institute (IRRI) の *World Rice STATISTICS 1993-94* (1995) に示されている通り、日本には存在しないため、「NO」として報告した。

その他の水田については、*World Rice STATISTICS 1993-94* (1995) に示されている通り、陸

稲の作付田が考えられるが、陸稲の作付田は湛水しないため畑土壌と同様に好氣的である。CH₄生成菌は絶対嫌気性菌であり、土壌が嫌気性に保たれなければ CH₄は排出されない。従って、「NA」として報告した。

5.5. 農用地の土壌 (3.D.)

農用地からの N₂O の直接排出（無機質肥料の施肥、有機質肥料の施肥、放牧家畜の排せつ物、作物残渣のすき込み、土壌有機物の損失／獲得による無機化／固定化、有機質土壌の耕起）及び間接排出（大気沈降、窒素溶脱）を対象に算定、報告を行う。

2018 年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は 5,412 kt-CO₂換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF を除く）の 0.4% を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 23.9% の減少となっている。この 1990 年度からの排出量減少の主な要因は無機質肥料（化学肥料）施用量、家畜ふん尿由来の有機質肥料施用量が減少したことによるものである。その主な理由には日本の農地の栽培面積が減少していること（表 5-50）と、一部の地域においては、地下水の窒素汚染を緩和するために環境保全農業が推奨されたことによる。

表 5-47 農用地の土壌からの N₂O 排出量 (3.D.)

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
N ₂ O	3.D.a. 直接排出	1.無機質肥料	6.2	5.3	5.0	4.8	3.6	4.2	4.0	4.1	4.2	4.1	3.9	3.9	3.9	3.9	
		2.有機質肥料	5.3	5.0	4.8	4.2	4.1	4.2	4.2	4.1	4.1	4.1	4.2	4.5	4.4	4.6	4.6
		3.放牧地のふん尿	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
		4.作物残渣	2.4	2.3	2.5	2.3	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	1.9	1.9	1.8	1.8
		5.無機化	1.4	1.3	1.3	1.3	1.3	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
		6.有機質土壌の耕起	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4
	3.D.b. 間接排出	1.大気沈降	2.7	2.5	2.3	2.1	1.9	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.1	2.0	2.1	2.1
		2.窒素溶脱・流出	5.4	5.1	4.8	4.5	4.0	4.2	4.1	4.1	4.2	4.1	4.1	4.1	4.1	4.2	4.1
	合計	kt-N ₂ O	23.9	22.1	21.2	19.8	17.4	18.5	18.1	18.1	18.3	18.1	18.2	18.1	18.3	18.2	
		kt-CO ₂ 換算	7,115	6,580	6,327	5,894	5,175	5,506	5,391	5,397	5,448	5,388	5,426	5,390	5,440	5,412	

5.5.1. 直接排出 (3.D.a.)

農用地の土壌からは、無機質肥料の施肥、有機質肥料の施肥、放牧家畜の排せつ物、作物残渣のすき込みにより土壌中にアンモニウムイオンが発生し、好気条件下でそのアンモニウムイオンが硝酸態窒素に酸化される過程で N₂O が発生する。また、硝酸態窒素が脱窒する過程で N₂O が発生する。

また、鉍質土壌において有機物が分解することや有機質土壌を耕起することにより、窒素分の硝化・脱窒により N₂O が発生する。

5.5.1.1. 無機質窒素肥料 (3.D.a.1.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、農用地の土壌への無機質窒素肥料（化学肥料）の施肥に伴う N₂O 排出の算定を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

N₂O 排出量については、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー（Vol.4, p.11.9, Fig.11.2）に従い、我が国独自の排出係数が存在するため、Tier2 法で算定を行った。

また、硝化抑制剤入り化学肥料を投入し、土壌からの N₂O 排出量を抑制する排出削減対策についても算定に組み込んだ。

$$E = \sum_{ij} (F_{SNi,j} \times EF_{1i,j}) \times 44/28$$

- E : 農用地の土壌への無機質肥料（化学肥料）の施肥に伴う N₂O 排出量 [kg-N₂O]
- $F_{SNi,j}$: 作物種 i の農用地土壌に投入された化学肥料 j の施用量 [kg-N]
- $EF_{1i,j}$: 作物種 i の化学肥料 j を投入した場合の排出係数 [kg-N₂O-N/kg-N]
- i : 作物種
- j : 肥料の種類（硝化抑制剤入りまたはなし）

■ 排出係数

排出係数については、日本の各地で測定されたデータを解析し、化学肥料の投入窒素量と N₂O 排出量から、我が国独自の排出係数を設定した。また、硝化抑制剤入り化学肥料を投入した場合の排出係数は、我が国独自の排出係数に N₂O の削減率をかけて設定した。

また、作物の種類による排出係数の違いを比較したところ、他の作物に比べ茶が有意に高く、水稻が有意に低いことが判明した。しかし、他の作物については有意な差はなかったため、農用地の土壌への施肥に伴う N₂O の排出係数は、水稻、茶、その他の作物の3種類に区分して設定した。なお、我が国には火山灰由来の土壌が広く分布しており、排水性のよいこの土壌からの N₂O 排出量が少ないことが、我が国の排出係数が 2006 年 IPCC ガイドラインに示される排出係数のデフォルト値に比べ低い理由であると考えられる。なお、水稻の排出係数は、2006 年 IPCC ガイドラインにデフォルト値の 1 つとして採用されており、国際的に妥当性が認められている数値である。

硝化抑制剤入り化学肥料を投入した際の N₂O の削減率は Akiyama et.al (2010) におけるジシアンジアミド入り肥料による N₂O 削減率（26～36%）の下限值である 26% と設定した。なお、日本において硝化抑制剤として添加されているのは多くがジシアンジアミドであるが、一部の化学肥料では別の物質が添加されていることから、削減量の過大評価を避けるためジシアンジアミドの削減率の下限值を用いた。また、水稻については湛水され硝化が起きにくいことから、硝化抑制剤入り化学肥料が施用される可能性がほとんどないため、排出係数は設定しない。

表 5-48 農用地の土壌への化学肥料の施肥に伴う N₂O 排出係数

作物種	排出係数（硝化抑制剤なし） [kg-N ₂ O-N/kg-N]	排出係数（硝化抑制剤入り） [kg-N ₂ O-N/kg-N]
水稻	0.31 %	—
茶	2.9 %	2.1 % [=2.9%×(1-0.26)]
その他の作物	0.62 %	0.46 % [=0.62%×(1-0.26)]

(出典) Akiyama et.al. (2006 a)
Akiyama et.al. (2006 b)
Akiyama et.al. (2010)

■ 活動量

化学肥料施用総量は農林統計協会「ポケット肥料要覧」の「窒素質肥料需要量」を用いた。この値から森林への施用量を除いたものを農用地の土壌の化学肥料施用量として用いた（表 5-46）。さらに、上記排出係数を考慮し、作物別の化学肥料施用量を算出するため、各作物種の作付面積（表 5-53）に、各作物種の単位面積当たり化学肥料由来窒素施用量の我が国の調査結果を乗じて作物別の窒素施用量に相当する値を求め、作物別の施肥相当量に応じて化学肥料施用量を各作物別に配分した。

$$F_{SNi} = (F_T - F_{FRST}) \times \frac{(RA_i \times RF_i \times 10)}{\sum (RA_n \times RF_n \times 10)}$$

F_{SNi}	: 作物種 i の農用地に投入された化学肥料施用量 [t-N]
F_T	: 化学肥料施用総量 [t-N]
F_{FRST}	: 森林への化学肥料施用量 [t-N]
RA_i	: 作物種 i の作付面積 [ha]
RF_i	: 作物種 i の単位面積当たり化学肥料施用量 [kg-N/10a]
RA_n	: 各作物種別作付面積 [ha]
RF_n	: 各作物種の単位面積当たり化学肥料施用量 [kg-N/10a]

作物別の肥料施用量については、2000年に行われた営農調査（鶴田（2001））により各作物別の施肥量が化学肥料、有機質肥料別に把握されている。専門家判断によると、水稻、茶を除く作物においては経年的な施肥量の変化が余りないと考えられることから、これらの作物については、鶴田（2001）による単位面積当たり化学肥料施用量のデータを全ての年に対して一律に適用した。

茶の施肥量については、自治体の策定する施肥基準等の影響を受け経年的に変化している。野中（2005）がまとめた1993、1998、2002年における茶畑に対する窒素施用量（化学肥料と有機質肥料由来窒素量の合計値）と鶴田（2001）における茶の化学肥料と有機質肥料の比を用いて、1993年、1998年、2002年それぞれの化学肥料施用量と有機質肥料施用量を推計した。また、推計した3カ年の施肥量を用いて1993年から2002年までは数値を内挿、1993年以前は1993年値を据え置き、2002年以降は2002年値を据え置きし、時系列データを作成した（表5-52参照）。

水稻の単位面積当たり化学肥料施用量については、「ポケット肥料要覧」により把握できる各年の施肥量データを用い、陸稲については、水稻の値で代用した。

硝化抑制剤入り化学肥料については、1996年より調査を開始した出荷量（製品ベース）（「化学肥料施用量（農地）」の内数）に関する農林水産省のデータを使用し、それらに含まれる窒素含有率は主要メーカー製品の平均値である13%を用いた。また、硝化抑制剤入り化学肥料は、水稻および飼肥料作物に対して施用される可能性がほとんどないため、水稻および飼肥料作物は施用対象から除いた。

表 5-49 化学肥料施用量 [t-N]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
化学肥料施用総量	611,955	527,517	487,406	471,190	350,135	409,590	387,201	396,783	409,918	394,629	372,339	374,879	374,879	374,879
化学肥料施用量（森林）	288	248	229	222	165	193	182	187	193	186	175	176	176	176
化学肥料施用量（農地）	611,667	527,269	487,177	470,968	349,970	409,397	387,019	396,596	409,725	394,443	372,164	374,703	374,703	374,703

（注）硝化抑制剤入り化学肥料を含む

（出典）化学肥料施用総量：「ポケット肥料要覧」

化学肥料施用量（森林）：林野庁調べをもとに算出

表 5-50 硝化抑制剤入り化学肥料の出荷量（窒素量ベース） [t-N]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
硝化抑制剤入り化学肥料出荷量（窒素ベース）	NO	NO	4,030	4,290	5,980	4,940	5,850	5,070	7,800	4,550	5,070	5,330	5,070	5,590

（出典）農林水産省調査：製品中の窒素含有率を13%として算出

表 5-51 作物種別単位面積当たり化学肥料施用量（水稻、茶以外）

作物種	施用量 [kg-N/10a]
野菜	21.27
果樹	14.70
ばれいしょ	12.70
豆類	3.10
飼肥料作物	10.00
かんしょ	6.20
麦	10.00
雑穀（そばを含む）	4.12
桑	16.20
工芸作物	22.90
たばこ	15.40

（出典）鶴田（2001）

表 5-52 単位面積当たり化学肥料施用量（水稻、茶） [kg-N/10a]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
化学肥料施用量（水稻）	9.65	8.71	7.34	6.62	5.80	5.95	5.93	6.04	6.10	5.97	5.85	5.85	5.85	5.85
化学肥料施用量（茶）	57.23	54.88	48.06	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76

（出典）水稻：「ポケット肥料要覧」 茶：野中（2005）、鶴田（2001）

表 5-53 作物種別作付面積 [kha]

作物種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
野菜	620.1	564.4	524.9	476.3	468.7	465.4	460.4	457.9	453.4	452.1	448.9	444.1	441.7	437.3
水稻（子実用）	2,055.0	2,106.0	1,763.0	1,702.0	1,621.0	1,625.0	1,574.0	1,579.0	1,597.0	1,573.0	1,505.0	1,478.0	1,465.0	1,470.0
果樹	346.3	314.9	286.2	265.4	250.7	246.9	243.5	240.3	237.0	233.8	230.2	226.7	222.9	218.8
茶	58.5	53.7	50.4	48.7	47.3	46.8	46.2	45.9	45.4	44.8	44.0	43.1	42.4	41.5
ばれいしょ	115.8	104.4	94.6	86.9	83.1	82.5	81.0	81.2	79.7	78.3	77.4	77.2	77.2	76.5
豆類	256.6	155.5	191.8	193.9	197.5	189.0	186.2	180.2	178.5	181.0	187.6	187.7	187.9	185.4
飼肥料作物	1,096.0	1,013.0	1,026.0	1,030.0	1,008.0	1,012.0	1,030.0	1,029.0	1,012.0	1,019.0	1,072.0	1,082.0	1,084.9	1,068.6
かんしょ	60.6	49.4	43.4	40.8	40.5	39.7	38.9	38.8	38.6	38.0	36.6	36.0	35.6	35.7
麦	366.4	210.2	236.6	268.3	266.2	265.7	271.7	269.5	269.5	272.7	274.4	275.9	273.7	272.9
雑穀（そばを含む）	29.6	23.4	38.4	45.9	47.5	49.7	58.1	62.6	62.9	61.4	59.7	62.2	64.5	65.5
桑	59.5	26.3	5.9	3.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
工芸作物	142.9	124.5	116.3	110.3	106.4	104.8	101.9	100.2	98.5	97.8	98.8	99.3	100.3	98.2
たばこ	30.0	26.4	24.0	19.1	15.8	15.0	13.0	9.0	8.9	8.6	8.3	8.0	7.6	7.1
陸稲	18.9	11.6	7.1	4.5	3.0	2.9	2.4	2.1	1.7	1.4	1.2	0.9	0.8	0.8

（出典）ばれいしょ：「野菜生産出荷統計」、たばこ：日本たばこ産業株式会社資料、桑：農林水産省生産局調べ、それ以外の作物：「耕地及び作付面積統計」（ただし、「工芸作物」については茶、なたね、てんさい、さとうきびの合計から推計した面積からたばこの面積を差し引いた値である。2016年度値までの「野菜」については、ばれいしょの面積を差し引いた値である。また2017年度の野菜・果樹・豆類・飼肥料作物・雑穀については、作物分類合計の作付面積調査が廃止されたため、それらの作物分類に対象として含まれる作物の作付面積の合計から過去5年間のカバー率を算出して推計した。）

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、排出係数の出典である Akiyama et al. (2006)に示されている不確実性（31%）を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に示された水田面積の標準誤差（1%）で代替した。その結果、排出量の不確実性は31%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

なお、我が国の排出係数と IPCC ガイドラインのデフォルト値が大きく異なる理由については上記「排出係数」に記載している。

e) 再計算

2015年以降の化学肥料及び2016年以降の硝化抑制剤入り化学肥料の統計値が改訂されたので、2015年以降の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.5.1.2. 有機質窒素肥料 (3.D.a.2.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、農用地土壌への有機質肥料(畜産廃棄物由来およびその他有機質肥料)の施用に伴う N₂O 排出の算定を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.4、p.11.9、Fig.11.2) に従い、Tier2 法で N₂O 排出量の算定を行った。

$$E = \sum_i (N_{ONi} \times EF_{1i}) \times 44/28$$

E	: 農用地の土壌への有機質肥料の施用に伴う N ₂ O 排出量 [kg-N ₂ O]
N_{ONi}	: 作物種 i の農用地に投入された有機質肥料に含まれる窒素量 [kg-N]
EF_{1i}	: 作物種 i の有機質肥料を投入した場合の排出係数 [kg-N ₂ O-N/kg-N]
i	: 作物種

■ 排出係数

化学肥料と有機質肥料の投入窒素量と N₂O 排出量を調査したところ、化学肥料と有機質肥料で排出係数に有意差がなかったため、無機質窒素肥料の排出係数と同じ値を使用した。

■ 活動量

活動量(有機質肥料に含まれる総窒素量)については、2006年 IPCC ガイドラインに示された式 (Vol.4、p11.12、Equation 11.3) をもとに、下記の窒素量を対象とした。

$$N_{ON} = N_{AM} + N_{SEW} + N_{FU} + N_{COMPsub} + N_{OOA}$$

N_{ON}	: 農用地土壌に施用される有機質肥料に含まれる窒素量
N_{AM}	: 農用地土壌に施用される家畜排せつ物に含まれる窒素量
N_{SEW}	: 農用地土壌に施用される下水汚泥に含まれる窒素量
N_{FU}	: 農用地土壌に施用されるし尿に含まれる窒素量
$N_{COMPsub}$: 農用地土壌に施用される堆肥副資材(稲わら、もみがら、麦わら)に含まれる窒素量

N_{00A} : 農用地土壌に施用されるその他有機質肥料（魚かす、大豆粕、なたね油粕など）に含まれる窒素量

○ 農用地土壌に施用される家畜排せつ物に含まれる窒素量 (N_{AM})

農用地土壌に施用された家畜排せつ物に含まれる窒素量 (N_{AM}) は下記の式で示したように、家畜排せつ物中の総窒素量 ($N_{Total-AW}$) から、放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 (N_{PRP})、大気中に N_2O として揮発する窒素量 (放牧家畜を除く) (N_{N_2O})、大気中に $NH_3 + NO_x$ として揮発する窒素量 (放牧家畜を除く) ($N_{NH_3+NO_x}$)、「焼却」・「浄化」処理に含まれる窒素量 ($N_{inc+pur}$)、廃棄物として直接埋立処分される家畜排せつ物に含まれる窒素量 ($N_{disposal}$) を除いた量を使用した。

$$N_{AM} = N_{Total-AW} - N_{PRP} - N_{N_2O} - N_{NH_3+NO_x} - N_{inc+pur} - N_{disposal}$$

N_{AM} : 農用地に施用された家畜排せつ物中の窒素量 [kg-N]
 $N_{Total-AW}$: 家畜から排せつされた窒素総量 [kg-N]
 N_{PRP} : 放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 [kg-N]
 N_{N_2O} : 家畜排せつ物から N_2O として大気中に揮発した窒素量 (放牧家畜を除く) [kg-N]
 $N_{NH_3+NO_x}$: 家畜排せつ物から NH_3 や NO_x として揮発した窒素量 (放牧家畜を除く) [kg- NH_3-N+NO_x-N]
 $N_{inc+pur}$: 「焼却」及び「浄化」処理された窒素量 [kg-N]
 $N_{disposal}$: 廃棄物として「直接最終処分」される家畜排せつ物に含まれる窒素量 [kg-N]

放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 (N_{PRP})、大気中に N_2O として揮発する窒素量 (放牧家畜を除く) (N_{N_2O})、「焼却」・「浄化」処理に含まれる窒素量 ($N_{inc+pur}$) は「3.B.家畜排せつ物の管理」で計算された結果を用いた。

廃棄物として直接埋立処分される家畜排せつ物に含まれる窒素量 ($N_{disposal}$) は、何らかの処理がされた後に埋め立てられる分 (以後、「処理後最終処分」と、特に何の処理も施されずにそのまま直接的に埋め立てられる分 (以後、「直接最終処分」) を含んでいる。しかし、「処理後最終処分」される家畜排せつ物量については極少量であり、また、どの処理区分で処理されているか不明であるため、「直接最終処分」に加えることとした。

直接最終処分された家畜排せつ物中の窒素量 ($N_{disposal}$) は、次式のように算出した。

$\frac{\text{直接最終処分された家畜排せつ物中の窒素量 } (N_{disposal})}{\text{直接最終処分量と処理後最終処分量の合計値}} \times \text{家畜排せつ物中の平均窒素含有率}$

「直接最終処分量と処理後最終処分量の合計値」は環境省環境再生・資源循環局「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用実態調査報告書」で示された値を用いた。「家畜排せつ物中の平均窒素含有率」は各家畜のふん尿中窒素量の合計値と各家畜のふん尿量の合計値から算定した。

なお、農用地土壌に施用されずに直接最終処分された家畜排せつ物は廃棄物分野の「7.2.1.管理処分場からの排出 (5.A.1.)」の算定に含まれている。

表 5-54 農用地土壌に施用された家畜排せつ物に含まれる窒素量 (N_{AM}) [t-N]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
ふん尿中の窒素総量 ($N_{Total-AW}$)	786,060	743,633	692,290	634,484	603,321	589,142	580,013	569,103	558,658	551,719	551,507	552,595	563,117	564,245
放牧家畜のふん尿中の窒素総量 (N_{PRP})	12,987	12,836	11,935	11,162	11,072	10,709	10,721	10,505	10,390	9,996	10,278	10,237	10,399	10,568
大気中に N_2O として排出される窒素量 (浄化・焼却以外) (N_{N2O})	4,460	4,363	4,318	4,690	5,080	4,943	4,898	4,798	4,679	4,593	4,591	4,577	4,639	4,629
大気中に NH_3 、 NO_x として排出される窒素量 (放牧分を除く) ($N_{NH3+NNOx}$)	270,977	256,432	232,562	199,757	179,093	174,361	170,407	166,455	164,621	163,662	164,003	165,046	168,511	169,377
浄化・焼却によって消失する窒素量 ($N_{inc+pur}$)	77,554	67,389	66,526	78,933	90,246	90,096	88,956	88,922	86,773	85,687	84,707	84,961	87,580	87,746
埋立され消失する窒素量 ($N_{disposal}$)	317	301	272	248	315	235	239	278	285	293	280	288	280	280
農用地に施用される家畜排せつ物に含まれる窒素量 (N_{AM})	419,764	402,311	376,677	339,692	317,514	308,799	304,792	298,144	291,909	287,489	287,648	287,486	291,708	291,645

○ 農用地土壌に施用された下水汚泥に含まれる窒素量 (N_{SEW})

農用地土壌に施用される下水汚泥 (N_{SEW}) は、「ポケット肥料要覧」に記載された汚泥肥料の流通量に日本下水道協会のデータから設定した窒素含有率を掛けることによって算出した。

○ 農用地土壌に施用された人間のし尿に含まれる窒素量 (N_{FU})

し尿に含まれる窒素量 (N_{FU}) は、環境省環境再生・資源循環局「日本の廃棄物処理」等から算出した人間のし尿由来の窒素量を用いた。

○ 農用地土壌に施用される堆肥副資材 (稲わら、もみがら、麦わら) に含まれる窒素量 ($N_{COMPsub}$)

堆肥副資材量については、稲わら、もみ殻、麦わらの用途別データ (都道府県において把握しているデータより算出) の「堆肥」、「畜舎敷料」の値を使用した。稲わら、もみ殻、麦わらの窒素含有率に関しては、後述の 5.5.1.4. 作物残渣で記述している値 (表 5-62) を用いた。

○ 農用地土壌に施用されたその他有機質肥料に含まれる窒素量 (N_{OOA})

農用地土壌に施用されるその他有機質肥料 (魚かす、大豆粕、なたね油粕など) に含まれる窒素量 (N_{OOA}) は、「ポケット肥料要覧」に記載された有機質肥料の流通量に「ポケット肥料要覧」から設定した窒素含有率を掛けることによって算出した。

表 5-55 有機質肥料 (汚泥肥料、その他有機質肥料) の流通量 [kt]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
動物質肥料	384.1	389.4	341.0	262.7	271.2	268.3	259.8	302.6	298.3	268.2	300.6	310.0	285.4	285.4
魚かす	111.5	88.6	89.0	73.9	70.0	62.2	52.1	55.4	60.0	51.7	52.9	54.7	53.3	53.3
蒸製骨粉	113.1	134.2	112.8	11.4	21.3	16.7	17.6	19.4	16.2	18.5	20.0	22.3	20.0	20.0
その他の動物質肥料	159.5	166.6	139.2	177.5	179.9	189.4	190.1	227.7	222.1	198.1	227.7	233.0	212.1	212.1
植物質肥料	635.9	725.7	982.4	494.8	643.2	1,064.3	1,190.9	1,079.2	1,203.7	1,455.4	1,852.7	1,810.9	2,012.0	2,012.0
大豆油粕	3.5	4.7	28.9	1.1	36.1	209.5	138.5	134.4	167.7	265.0	477.0	494.5	491.3	491.3
なたね油粕	451.0	437.2	620.7	241.0	228.0	221.4	396.3	347.9	288.4	399.5	474.8	486.8	449.3	449.3
その他の植物質肥料	181.4	283.8	332.8	252.7	379.1	633.5	656.1	596.9	747.6	790.9	900.9	829.6	1,071.4	1,071.4
汚泥	787.3	935.2	817.7	1,287.4	1,295.0	1,395.6	1,361.5	1,329.3	1,355.5	1,292.9	1,395.7	1,351.7	1,377.8	1,377.8

(出典)「ポケット肥料要覧」

表 5-56 各有機質肥料の窒素含有率

有機質肥料	窒素含有割合
魚かす	8.0%
蒸製骨粉	4.1%
その他の動物質肥料	7.5%
大豆油粕	7.5%
なたね油粕	5.1%
その他の植物質肥料	4.6%
汚泥	2.7%

(出典) 汚泥以外：「ポケット肥料要覧」
 汚泥：日本下水道協会データより設定

表 5-57 農用地土壌に施用される有機質肥料に含まれる窒素量 [t-N]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
家畜ふん尿由来 (N _{AM})	419,764	402,311	376,677	339,692	317,514	308,799	304,792	298,144	291,909	287,489	287,648	287,486	291,708	291,645
下水汚泥由来 (N _{SEW})	21,257	25,250	22,078	34,760	34,965	37,682	36,759	35,892	36,599	34,907	37,685	36,497	37,202	37,202
し尿由来 (N _{FI})	10,394	4,747	2,116	874	457	427	369	351	286	273	231	204	223	260
堆肥副資材由来 (N _{COMPsub})	18,316	15,514	11,485	11,217	9,270	8,864	8,443	8,803	8,879	7,700	6,816	6,774	6,480	6,494
その他有機質肥料由来 (N _{OOA})	57,128	60,790	71,314	43,685	51,743	76,006	79,927	77,593	83,796	96,378	123,560	122,844	130,034	130,034
合計 (農用地土壌に施用される有機質肥料に含まれる窒素量) (N _{ON})	526,859	508,611	483,670	430,229	413,949	431,779	430,289	420,784	421,469	426,747	455,940	453,804	465,647	465,635

○ 作物種 *i* の農用地に投入された有機質肥料に含まれる窒素量の推計

作物種 *i* の農用地に投入された有機質肥料に含まれる窒素量は、上記した農用地土壌に施用された有機質肥料に含まれる総窒素量 (N_{ON}) に、作物種 *i* に施用されるべき窒素量が総窒素量 (N_{ON}) に占める割合 (施肥量割合) を乗じて推計した。施肥量割合は、作物種 *i* の単位面積当たり有機質肥料由来窒素施用量と各作物 *i* の作付面積の積を、全作物種の積の総和で除して求めた。

$$N_{ONi} = N_{ON} \times \frac{(RA_i \times RF_i / 10)}{\sum (RA_n \times RF_n / 10)}$$

- N_{ONi} : 作物種 *i* の農用地に投入された有機質肥料に含まれる窒素量 [t-N]
- N_{ON} : 農用地土壌に施用された有機質肥料に含まれる総窒素量 [t-N]
- RA_{*i*} : 作物種 *i* の作付面積 [ha]
- RF_{*i*} : 作物種 *i* の単位面積当たり有機質肥料施用量 [kg-N/10a]
- RA_{*n*} : 各作物種別作付面積 [ha]
- RF_{*n*} : 各作物種の単位面積当たり有機質肥料施用量 [kg-N/10a]

茶の単位面積当たりの有機質肥料に含まれる窒素施用量に関して、化学肥料同様に、野中 (2005) がまとめた 1993、1998、2002 年における茶畑に対する窒素施用量 (化学肥料、有機質肥料の合計値) と鶴田 (2001) における茶の化学肥料と有機質肥料の比を用いて、有機質肥料別の施肥量を推計し、時系列データを作成した (表 5-58 参照)。

茶以外の作物種別の単位面積当たりの有機質肥料施用量は、化学肥料と同様に鶴田 (2001) のデータを使用した。陸稲については、水稻の値で代用した。なお、作物種別の作付面積は化学肥料の算定に用いたものと同様である。

表 5-58 単位面積当たり有機質肥料施用量（茶）[kg-N/10a]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
有機質肥料施用量（茶）	20.77	19.92	17.44	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24

（出典）野中（2005）、鶴田（2001）

表 5-59 作物種別単位面積当たり有機質肥料として施用された窒素量（茶以外）

作物種	施用量[kg-N/10a]
野菜	23.62
水稻	3.2
果樹	10.90
ばれいしょ	7.94
豆類	6.24
飼肥料作物	10.00
かんしょ	8.85
麦	5.70
雑穀（そばを含む）	1.81
桑	0.00
工芸作物	3.96
たばこ	11.41

（出典）鶴田（2001）

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、Akiyama et al. (2006)に示されている不確実性（31%）を用いた。活動量の不確実性に関して、家畜ふん尿由来は、「畜産統計」に示されたブロイラーの頭数の標準誤差（9%）を採用し、それ以外は、「耕地及び作付面積統計」に示された水田面積の標準誤差（1%）で代替した。その結果、排出量の不確実性は32%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

e) 再計算

2015年以降の有機質肥料の統計値が改訂され、全年度にわたり、肉用牛と豚の排せつ物量に含まれる窒素量の算定方法が改訂されたことにより、全年度の排出量が変更された。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

現在、無機質窒素（化学肥料）・有機質肥料について同一の排出係数を使用していることから、別々に設定できるよう検討している。

5.5.1.3. 放牧家畜の排せつ物 (3.D.a.3.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、放牧家畜の排せつ物からの N₂O 排出の算定を行う。

b) 方法論

放牧家畜の排せつ物からの CH₄、N₂O 排出量の算定方法は「5.3.1.節 家畜排せつ物の管理」の「牛、豚、家禽類（採卵鶏、ブロイラー）(3.B.1., 3.B.3., 3.B.4.)」および「水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンク (3.B.2., 3.B.4.-)」でまとめて記述している。

5.5.1.4. 作物残渣 (3.D.a.4.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、作物残渣の農用地の土壌へのすき込みに伴う N₂O 排出の算定を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

N₂O 排出量は 2006 年 IPCC ガイドラインをもとにして算出している。排出係数には 2006 年ガイドラインのデフォルト値を用いた。ただし、活動量の算定において、2006 年 IPCC ガイドラインの方法よりも正確に排出量を算定できると考えられるいくつかの作物（稲、茶、野菜類、さとうきび、てんさい）についてはわが国独自の方法を用いた。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

<i>E</i>	: N ₂ O 排出量 [kg-N ₂ O]
<i>EF</i>	: 残渣のすき込みの N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O-N/kg-N]
<i>A</i>	: 土壌にすき込まれる残渣由来の窒素量 [kg-N]

■ 排出係数

0.01[kg-N₂O-N/kg-N] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

■ 活動量

【稲】

地上部の稲の作物残渣すき込み量は、都道府県において把握しているデータより算出した稲わら・もみがらの残渣すき込み量のデータを使用した。作物残渣中の窒素量は、このデータに伊達昇 (1988) から設定した「作物残渣当たりの窒素量」を乗じ推計した。また、地下部の計算には生産量、生産量に対する乾物割合、生産量に対する地下部残渣割合、地下部の窒素含有率から推計した。生産量に対する地下部残渣割合 (*Frac_{BGR-P}*) は小川、他 (1988) で示されている 27% を用いた。生産量に対する乾物割合 (*DRY*) は 2006 年 IPCC ガイドラインで示されているデフォルト値の 0.89 を用いた。

$$A_{Rice} = Residue \times N_{AG} + P \times DRY \times Frac_{BGR-P} \times N_{BG}$$

<i>A_{Rice}</i>	: 土壌にすき込まれる残渣由来の窒素量 [tN] (稲わら・もみ殻)
<i>Residue</i>	: 稲の作物残渣すき込み量 (稲わら・もみ殻) [t]
<i>N_{AG}</i>	: 稲の地上部残渣の窒素含有率 [kg-N/kg]
<i>P</i>	: 米の生産量 [t]
<i>DRY</i>	: 生産物に対する乾物割合 [%]

- $Frac_{BGR-P}$: 生産量に対する地下部残渣割合 [%]
 N_{BG} : 稲の地下部残渣の窒素含有率 [kg-N/kg]

【茶】

茶に関しては、毎年土中に還る残渣として「落葉」分と「秋整枝」分を対象とし、加えて数年に一度土中に還る残渣として、5年に1度程度実施される「中切り」（地面から約30～50cm上の部分を剪枝）分を対象とした。「中切り」に関しては、茶の総面積のうち1/5で毎年実施され、5年ですべての茶園の更新が行われると仮定した。「落葉」、「秋整枝」、「中切り」の単位栽培面積当たり残渣中窒素量に栽培面積を乗じ、残渣中の窒素量を推計した。栽培面積は農林水産省「耕地及び作付面積統計」のデータを用いた。

$$A_{Tea} = (A_{AP} + A_{LF} + A_{MP} / 5) \times 10 \times Area$$

- A_{Tea} : 土壌にすき込まれた窒素量 [kg-N] (茶)
 A_{AP} : 秋整枝による残渣量 [kg-N/10a]
 A_{LF} : 落葉による残渣量 [kg-N/10a]
 A_{MP} : 中切りによる残渣量 [kg-N/10a]
 $Area$: 茶作付面積 [ha]

表 5-60 剪枝された残渣部の窒素含有量

剪枝の種類		窒素含有量 [kg-N/10a]	出典
秋整枝	毎年	7.7	保科他 (1982)、木下他 (2005)、橘他 (1996)
中切り	5年に一度	19.4	太田他 (1996)
落葉	毎年	11.5	保科他 (1982)

【野菜類、さとうきび、てんさい】

各作物の農地にすき込まれた作物残渣に含まれる窒素量は、松本 (2000) から設定した「作物生産量当たりの残渣中に含まれる窒素量」に、年間作物収穫量（「作物統計」または「野菜出荷統計」）を乗じ、それに持ち出し割合、野焼きされる割合（燃焼係数を考慮後）を除いた割合を乗じて推計した。

なお、「作物生産量当たりの残渣中に含まれる窒素量」について、さとうきびには鹿児島県農業総合開発センター提供値を、てんさい、だいこん、たまねぎには北海道農政部「北海道施肥ガイド2010」のデータを、はくさい、レタスには尾和 (1996) のデータを用いた。

「作物生産量に対する残渣中に含まれる窒素含有率」のデータがない作物については、種類が近い作物の数値を用いた。また全ての年度について同一の数値を使用した。

$$A_{Vegetable} = P \times (1 - Frac_{Remove} - Frac_{burnt} \times CF) \times N_R$$

- $A_{Vegetable}$: 土壌にすき込まれる残渣由来の窒素量 [t-N] (野菜類、さとうきび、てんさい)
 P : 生産量 [t]
 $Frac_{Remove}$: 作物 T の持ち出し割合 [%]
 $Frac_{burnt}$: 作物 T の焼却割合 (面積) [%]
 CF : 燃焼係数
 N_R : 残渣の窒素含有率 (作物生産量当たりの残渣中に含まれる窒素量) [kg-N/kg]

表 5-61 主な作物の地上部残渣の持ち出し割合 ($Frac_{Remove}$)、残渣の焼却割合 ($Frac_{burnt}$)、燃焼係数 (CF)、地上部バイオマスに対する地下部残渣の割合 (R_{BG-BIO})

作物	地上部残渣の持ち出し割合 ($Frac_{Remove}$)	残渣の焼却割合 ($Frac_{burnt}$)	燃焼係数 (CF)	地下部残渣割合 (R_{BG-BIO})
野菜類	47 %	7 %	0.80 ⁴⁾	-
てんさい	47 % ¹⁾	7 % ¹⁾	0.80 ⁴⁾	-
さとうきび	47 % ¹⁾	7 % ¹⁾	0.80 ⁴⁾	-
飼肥料作物 (緑肥用)	0 % ²⁾	0 % ²⁾	-	牧草 : 0.80
飼肥料作物 (飼料用)	100 % ³⁾	0 % ³⁾	-	ソルガム : 0.24 ⁹⁾
麦類 (小麦、大麦、ライ麦、オート麦)	表 5-63 参照	表 5-63 参照	0.90 ⁵⁾	小麦 : 0.24 大麦 : 0.22 ライ麦 : 0.25 ¹⁰⁾ オート麦 : 0.25
豆類	13 %	12 %	0.80 ⁴⁾	0.19 ⁶⁾
とうもろこし、いも類、その他作物 (そば、たばこ等)	47 % ¹⁾	7 % ¹⁾	0.80 ⁴⁾	とうもろこし : 0.22 いも類 : 0.20 ⁷⁾ その他作物 : 0.22 ⁸⁾

(出典) 麦類以外の $Frac_{Remove}$ 、 $Frac_{burnt}$: 「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」

CF 、 R_{BG-BIO} : 2006年 IPCC ガイドライン

(注)

- 1) 野菜の値で代替、2) すべて土壌にすき込まれると設定、
- 3) 地上部すべてが飼料用として持ち出されると設定、4) とうもろこし・さとうきびの値、
- 5) 小麦の値、6) 大豆の値、7) ばれいしょの値、8) 穀物類で代用、
- 9) とうもろこしとオート麦の平均値、10) オート麦の値で代用

表 5-62 主な作物の地上部残渣の窒素含有率 (N_{AG})、地下部残渣の窒素含有率 (N_{BG})

作物	地上部残渣の窒素含有率 (N_{AG})	地下部残渣の窒素含有率 (N_{BG})	備考
稲 (地上部)	稲わら : 0.541% ^{a)} もみ殻 : 0.423% ^{a)}	-	現物重比
稲 (地下部)	-	0.9% ²⁾³⁾	乾物重比
野菜類	だいこん : 0.093% ^{b)c)} はくさい : 0.071% ^{c)} キャベツ : 0.183% ^{e)} レタス : 0.164% ^{c)} たまねぎ : 0.019% ^{b)c)}		現物重比
てんさい	0.095% ^{b)c)}		
さとうきび	0.548% ^{d)}		
飼肥料作物	牧草 : 1.5% ²⁾ ソルガム : 0.7% ²⁾	牧草 : 1.2% ²⁾ ソルガム : 0.6% ²⁾	
小麦	0.43% ^{e)}	0.9% ²⁾	
大麦	二条大麦 : 2.14% ^{e)} 六条大麦 : 0.31% ^{e)}	1.4% ²⁾	乾物重比
ライ麦	0.50% ²⁾	1.1% ²⁾	
オート麦	0.70% ²⁾	0.8% ²⁾	
とうもろこし	1.64% ^{e)}	0.7% ²⁾	
大豆	0.65% ^{e)}	0.8% ²⁾	
小豆	0.84% ^{e)}	1.0% ²⁾¹⁾	
ばれいしょ	2.42% ^{e)}	1.4% ²⁾²⁾	

(出典)

- a): 伊達 (1988)
- b): 北海道農政部 (2010)
- c): 尾和 (1996)
- d): 鹿児島県農業総合開発センター資料

- e): 松本 (2000)
- z): 2006年 IPCC ガイドライン
(注)
- 1): Dry bean で代用
- 2): ばれいしょの値で代用
- 3): 小麦の値で代用

【飼肥料作物、麦類、とうもろこし、豆類、いも類、その他の作物（そば、たばこ等）】

活動量は、2006年 IPCC ガイドラインに従い、下記の式で示した方法で算出した。なお、パラメータに関しては表 5-62～表 5-63 に示した値を用いた。麦類の野焼きされる割合および残渣の持ち出し割合については、農林水産省が調査した麦稈の処理方法別作付面積から表 5-60 に示すように設定した。なお、2006年度以前は調査データがないため、2007年度値を適用している。更新割合 ($Frac_{Renew}$) は、飼肥料作物（飼料用）のみ、各種調査結果を踏まえた専門家判断により 3%と設定しているが、それ以外の作物は 100%更新されるとして計算している。

$$A = \sum_T \left\{ \left[\frac{(Area_{(T)} - Areaburnt_{(T)} \times CF) \times Frac_{Renew(T)} \times AG_{DM(T)} \times N_{AG(T)} \times (1 - Frac_{Remove(T)}) + (AG_{DM(T)} \times 1000 + Crop_{(T)}) \times R_{BG-BIO(T)} \times N_{BG(T)}}{1000} \right] \right\}$$

$$Areaburnt_{(T)} = Area_{(T)} \times Frac_{burnt(T)}$$

- A : 土壌にすき込まれる残渣由来の窒素量 [t-N]
- $Area_{(T)}$: 作物 T の作付面積 [ha]
- $Areaburnt_{(T)}$: 作物 T の焼却面積 [ha]
- CF : 燃焼係数
- $Frac_{Renew(T)}$: 作物 T の更新割合 [%]
- $AG_{DM(T)}$: 作物 T の地上部残渣の乾物重量 [Mg/ha]
- $N_{AG(T)}$: 作物 T の地上部残渣の窒素含有率 [%]
- $Frac_{Remove(T)}$: 作物 T の持ち出し割合 [%]
- $Crop_{(T)}$: 作物 T の生産物の乾物重量 [kg/ha]
- $R_{BG-BIO(T)}$: 作物 T の地上部バイオマスに対する地下部残渣の割合
- $N_{BG(T)}$: 作物 T の地下部残渣の窒素含有率 [%]
- $Frac_{burnt(T)}$: 作物 T の焼却割合 [%]

表 5-63 麦類の残渣持ち出し割合、焼却割合 [%]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
残渣の持ち出し割合	32.1	32.1	32.1	32.1	35.9	37.8	39.8	40.2	41.0	41.0	37.9	40.2	38.5	39.5
焼却割合	13.5	13.5	13.5	13.5	11.6	10.6	9.5	9.2	8.8	8.3	8.0	7.7	7.7	6.9

(注) 都道府県において把握しているデータより算出

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (-70%～+200%) を採用した。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」で示された水田面積の標準誤差 1% で代替した。その結果、排出量の不確実性は、-70%～+200%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

2012年度の算定方法検討会農業分科会において、稲の窒素含有率の精査が実施された。その結果、稲わらともみがらの窒素含有率を分け、日本各地の数値の中で中間的な数値であり、日本全体の値として使用するのが最も適切であると考えられる伊達（1988）の値を用いることとした。

e) 再計算

稲わら・もみがらの残渣すき込み量のデータが更新されたので、2017年度の排出量が変更された。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

排出係数について我が国独自の排出係数が使用できるよう検討している。

5.5.1.5. 土壌有機物中の炭素の消失により無機化された窒素からの N₂O 排出 (3.D.a.5.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、鈹質土壌における土壌有機物中の有機物が酸化され炭素が失われる際に無機化された窒素由来の N₂O の算定を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの算定方法を使用する場合、鈹質土壌有機物中の炭素消失量(活動量の一部)が把握できない。そのため、鈹質土壌の耕地面積と面積あたりの N₂O 排出量(農地のバックグラウンドからの N₂O 排出量)を用いたわが国独自の方法で算定を行った。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

<i>E</i>	: 鈹質土壌における無機化された窒素由来の N ₂ O 排出量 [kg-N ₂ O]
<i>EF</i>	: 鈹質土壌 1ha あたりの無機化された窒素由来の N ₂ O 排出量[kg-N ₂ O-N/ha]
<i>A</i>	: 鈹質土壌の耕地面積 [ha]

■ 排出係数

5.5.1.1 無機質窒素肥料 (3.D.a.1.) で使用した論文の Akiyama et al. (2006) で示されているバックグラウンドの N₂O 排出係数である 0.65 kgN₂O-N/ha をベースとし、農地への大気沈降と作物残さから発生する N₂O 排出量を控除した。

国内の研究事例をもとに農地に沈降する NH₃+NO_x は 10 kgN/ha と判断した。さらに、作物残渣による面積当たりの窒素のすき込み量は上記「5.5.1.4. 作物残渣 (3.D.a.4.)」の値から 32 kgN/ha を用いた。その農地への大気沈降と作物残渣のすき込み量から発生する面積当たりの N₂O 排出量 0.10 kgN₂O-N/ha+0.32 kgN₂O-N/ha (排出係数は大気沈降の 1% および作物残渣の 1%) をダブルカウント分として控除した。補正後の排出係数である 0.23 (=0.65 -0.10 -0.32) kgN₂O-N/ha を用いた。

■ 活動量

鉱質土壌の面積は、「耕地及び作付面積統計」から把握した水田及び普通畑の作付面積から我が国の水田及び普通畑における有機質土壌（泥炭土及び黒泥土）面積を減じることにより設定する。また、鉱質土壌のうち転用された水田・畑地については、土地利用、土地利用変化及び林業分野で計上する。詳細については土地利用、土地利用変化及び林業分野の算定（後述 6.6.1 b) 2)の「活動量」の項目）を参照されたい。

表 5-64 農業分野で対象となる鉱質土壌面積 [kha]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
対象となる水田	2,612	2,549	2,469	2,386	2,334	2,325	2,303	2,295	2,288	2,279	2,268	2,252	2,236	2,219
対象となる畑地	1,162	1,117	1,095	1,112	1,127	1,131	1,128	1,129	1,126	1,122	1,117	1,115	1,107	1,101

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、Akiyama et al. (2006)に示されている不確実性（31%）を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」で示された水田面積の標準誤差 1%を用いた。その結果、排出量の不確実性は、31%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

e) 再計算

LULUCF 分野における土地利用の転用に伴う鉱質土壌面積の算定方法が変更されたことにより、全年度の排出量が更新された。再計算の影響の程度については 10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

Akiyama et al. (2006) の排出係数における N₂O 排出量のダブルカウント分の控除方法については、引き続き精緻化を図っていく。

5.5.1.6. 有機質土壌の耕起 (3.D.a.6.)

a) 排出源カテゴリーの説明

我が国では、北海道を中心に有機質土壌が存在している。本カテゴリーでは「黒泥土」と「泥炭土」の2種類の土壌区分を有機質土壌として取り扱っている。我が国では有機質土壌における農地造成は 1970年代までにはほぼ終了しており、一般的に客土が行われた土地が耕作に利用されている。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインに従い、耕起された有機質土壌の水田面積、普通畑面積及び草地面積にそれぞれの排出係数を乗じて有機質土壌の耕起による N₂O 排出量を算定する。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

- E : 有機質土壌の耕起に伴う N_2O 排出量 [kg- N_2O]
- EF : 有機質土壌の耕起の際の N_2O 排出係数 [kg- N_2O -N/ha]
- A : 耕起された有機質土壌の面積 [ha]

■ 排出係数

有機質土壌の水田耕作においては、畑作に比べ N_2O 排出量が低くなることが知られている。我が国では北海道の有機質土壌耕作地で行われた N_2O 排出の観測事例（永田他（2006）が存在するが、窒素施用分の排出も含めた観測結果であることから、施肥による排出分（上記表 5-45 で示した排出係数（0.31% [kg- N_2O -N/kg-N]）を用いて算出）を控除して我が国独自の排出係数 0.30 [kg- N_2O -N/ha/年]を設定した。

有機質土壌における畑作に関しても若干の観測事例（永田他（2006）、永田他（2009））が存在するが、2006年 IPCC ガイドラインに示された温帯におけるデフォルト値 8[kg- N_2O -N/ha/年]と大きな違いはないことから、デフォルト値を利用する。草地についても、同じデフォルト値(8 [kg- N_2O -N/ha/年])を使用する。

■ 活動量

有機質土壌の面積は、1992年、2001年時点の水田と普通畑、牧草地における有機質土壌面積に対し、他の土地利用から転用された水田と普通畑、牧草地における有機質土壌面積の加算、水田と普通畑、牧草地から他の土地利用に転用した有機質土壌面積の減算、を毎年実施することで、時系列としての有機質土壌面積を求めた。

耕起された有機質土壌の面積は、農地の内の水田と普通畑における有機質土壌のすべてと更新した牧草地の有機質土壌面積とし、樹園地、更新されていない牧草地、採草放牧地、原野の面積を含んでいない。これは、樹園地、採草放牧地及び原野は、耕起されないためである。（6.7.1.転用のない草地）

牧草地の更新とは、再耕転と新しい種まきを伴った、数年に一度行われる牧草地管理の作業である。毎年の牧草地の有機質土壌の耕起面積は牧草地の更新割合と当該地域の牧草地の有機質土壌面積を乗じて算出した。牧草地の更新割合は、波多野（2017）の調査結果を使用した。波多野の結果は、2006年から2015年に渡り、北海道と他の都府県の2つに地域を区分した更新割合からなる。2005年度以前と2016年度以降については、2006年度～2010年度の平均値（北海道：3.0%、都府県 1.3%）を使用した。

表 5-65 牧草地の更新割合

年度	2005年度以前	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016年度以降
北海道	3.0%	2.5%	2.8%	3.0%	3.7%	2.9%	3.5%	3.6%	3.3%	3.9%	4.1%	3.0%
都府県	1.3%	1.0%	1.2%	1.0%	1.4%	2.1%	3.8%	15.7%	9.6%	5.2%	3.5%	1.3%

（出典）波多野（2017）

表 5-66 農業分野で対象となる有機質土壌面積 [kha]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
対象となる水田	161.9	161.3	160.6	159.9	159.7	159.6	159.5	159.7	160.0	160.2	160.2	160.2	160.4	160.7
対象となる畑地	24.7	24.4	24.2	24.0	24.0	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	24.0	24.2
対象となる牧草地（北海道）	1.2	1.2	1.2	1.2	1.5	1.2	1.4	1.5	1.3	1.6	1.7	1.2	1.2	1.2
対象となる牧草地（都府県）	0.005	0.004	0.004	0.004	0.004	0.006	0.010	0.043	0.026	0.014	0.009	0.004	0.003	0.003

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインで示されている不確実性(-75%～+200%)

を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に示された水田面積の標準誤差(1%)を採用した。その結果、排出量の不確実性は-75%~+200%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

我が国独自の有機質土壌の水田の排出係数 0.30 [kg-N₂O-N/ha/年]は、北海道の泥炭土の水田で行われた N₂O 排出の実測値(永田(2006))を基にして設定している。泥炭土の水田からの N₂O は 8つの観測点で測定され、排出量実測値は-0.28~1.27 [kgN₂O-N/ha/年]であった。永田が行った観測では施肥が行なわれているため、排出係数設定の際には、施肥に伴う排出量を控除している。水田への施肥に伴う N₂O の排出推測値は 0.11~0.29 [kgN₂O-N/ha/年]であり、泥炭土の水田における N₂O の排出係数は 0.30 [kgN₂O-N/ha/年]となった。

また、永田は、同時に泥炭土の畑地でも N₂O 排出の観測を行っている。畑地での測定は9つの観測点で実施され、排出量実測値は 2.87~13.60 [kgN₂O-N/ha/年]の範囲に有った。施肥に伴う N₂O 排出量は、0.17~2.38 [kgN₂O-N/ha/年]であり、N₂O の排出実測値から施肥に伴う N₂O の排出推測値を控除した泥炭土の畑地における N₂O の排出係数は 7.42 [kgN₂O-N/ha/年]となった。この値は、デフォルトの排出係数 8 [kg N₂O-N/ha/年] (2006 IPCC ガイドライン, Volume 11, 表 11.1)と同程度である。永田(2006)は、有機質土壌においても、灌漑水田と畑地では N₂O の排出量に明確な差がある事を示している。

e) 再計算

LULUCF 分野における土地利用の転用に伴う有機質土壌面積の算定方法が変更されたことにより、全年度の排出量が更新された。再計算の影響の程度については 10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.5.2. 間接排出 (3.D.b.)

農用地土壌へ施用された無機質肥料および有機質肥料、放牧家畜のふん尿から揮発したアンモニアなどの窒素化合物が乱流拡散、分子拡散、静電力効果、化学反応、植物呼吸、降雨洗浄などの作用によって大気から土壌に沈着して微生物活動を受けて N₂O が発生する。

農用地土壌へ施用された無機質肥料、有機質肥料などの窒素が硝酸として溶脱・流出したことから、微生物の作用により N₂O が発生する。

5.5.2.1. 大気沈降 (3.D.b.1.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から NH₃や NO_x として揮散した窒素化合物による大気沈降に伴い発生した N₂O の排出量の算定、報告を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.4, Page 11.20, Fig.11.3) に従い、N₂O 排出量の算定を行った。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

- E* : 大気沈降による N₂O 排出量 [kg N₂O]
- EF* : 大気沈降による N₂O 排出量に関する排出係数 [kg-N₂O-N/ kg-NH₃-N+NO_x-N volatilized]
- A* : 無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から NH₃や NO_xとして揮発した窒素量 [kg-NH₃-N+NO_x-N]

■ 排出係数

0.01 [kg-N₂O-N/kg-NH₃-N+NO_x-N volatilized] (デフォルト値、2006年 IPCC ガイドライン Vol4, Table11.3)

■ 活動量

活動量は下記の式で示したように、無機質窒素肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から NH₃や NO_xとして揮発した窒素量で構成されている。なお、家畜排せつ物処理過程で NH₃や NO_xとして揮発した窒素量は 3.B.5.で報告している。

$$A = N_{FERT} \times Frac_{GASF} + N_{ON} \times Frac_{GASM3} + N_{PRP} \times Frac_{GASM4}$$

- A* : 無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から NH₃や NO_xとして揮発した窒素量 [kg-NH₃-N+NO_x-N]
- N_{FERT}* : 無機質窒素施用量 [kg-N]
- Frac_{GASF}* : 無機質窒素肥料から NH₃や NO_xとして揮発する割合 [kg-NH₃-N + NO_x-N/kg-N]
- N_{ON}* : 農用地に施用された有機質肥料由来肥料中の窒素量 [kg-N]
- Frac_{GASM3}* : 農用地に施用された有機質肥料中の窒素のうち NH₃や NO_xとして揮発する割合 [kg-NH₃-N + NO_x-N/kg-N]
- N_{PRP}* : 放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 [kg-N]
- Frac_{GASM4}* : 家畜排せつ物の処理の際に家畜排せつ物から NH₃や NO_xとして揮発する割合 [kg-NH₃-N + NO_x-N/kg-N]

○ 農用地土壌に施用された無機質窒素肥料から NH₃や NO_xとして揮発した窒素量 (*N_{FERT}* × *Frac_{GASF}*)

窒素施用量 (*N_{FERT}*) は無機質窒素肥料 (3.D.a.1.) で算出した「化学肥料施用量 (表 5-49)」の内「化学肥料施用量 (農地)」の値を用い、揮散割合 (*Frac_{GASF}*) は、下記の表 5-67 に示した 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いた。

表 5-67 無機質肥料及び有機質肥料中の窒素から NH₃や NO_xとして揮発する割合

	値	単位
<i>Frac_{GASF}</i>	0.10	kg-NH ₃ -N + NO _x -N/kg of synthetic fertilizer nitrogen applied
<i>Frac_{GASM}</i>	0.20	kg-NH ₃ -N + NO _x -N/kg of nitrogen excreted by livestock

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4 Table11.3

○ 農用地土壌に施用された有機質肥料から NH₃や NO_xとして揮発した窒素量 (*N_{ON}* × *Frac_{GASM3}*)

農用地土壌に施用された家畜排せつ物に含まれる窒素量 (*N_{ON}*) は有機質窒素肥料 (3.D.a.2.) で記述した値を用いた。NH₃+NO_x 揮散割合 (*Frac_{GASM3}*) は上記の表 5-67 に示した 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (*Frac_{GASM}* = 0.20) を用いた。

○ 放牧家畜の排せつ物から NH₃ や NO_x として揮発した窒素量 ($N_{PRP} \times Frac_{GASM4}$)

放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 (N_{PRP}) は、3.B で計算された値を用いた。NH₃+NO_x 揮発割合 ($Frac_{GASM4}$) については、上記の表 5-67 に示した 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 ($Frac_{GASM} = 0.20$) を用いた。

表 5-68 無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から
NH₃ や NO_x として揮発した窒素量 [t (NH₃-N+NO_x-N)]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
無機質肥料由来 ($N_{FERT} \times Frac_{GASF}$)	61,167	52,727	48,718	47,097	34,997	40,940	38,702	39,660	40,973	39,444	37,216	37,470	37,470	37,470
有機質肥料由来 ($N_{ON} \times Frac_{GASM3}$)	105,372	101,722	96,734	86,046	82,790	86,356	86,058	84,157	84,294	85,349	91,188	90,761	93,129	93,127
放牧家畜由来 ($N_{PRP} \times Frac_{GASM4}$)	2,597	2,567	2,387	2,232	2,214	2,142	2,144	2,101	2,078	1,999	2,056	2,047	2,080	2,114
合計 (NH ₃ +NO _x として 揮散した窒素量) (A)	169,136	157,016	147,839	135,375	120,001	129,437	126,904	125,917	127,344	126,793	130,460	130,278	132,679	132,711

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている各パラメータの不確実性から合成して算出した値 (-106%~+447%) を用いた。活動量の不確実性は、家畜の中で最も大きいブロイラーの値 (9%) で代替した。その結果、排出量の不確実性は-106%~+447%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1 章に詳述している。

e) 再計算

2015 年度以降の化学肥料 (硝化抑制剤含まない) 統計値と、2016 年度以降の硝化抑制剤入り化学肥料の統計値が更新された。また、肉用牛と豚の排せつ物に含まれる窒素量の算出方法が改訂された。従って、全年度の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

排出係数や投入した窒素の揮発率などについて、我が国独自の数値が設定出来るよう、検討している。

5.5.2.2. 窒素溶脱・流出 (3.D.b.2.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、農用地の土壌からの窒素溶脱・流出に伴う N₂O 排出の算定を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

N₂O 排出量は、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー(Vol. 4, Page 11.20, Fig11.3)に従い、デフォルトの排出係数に、溶脱・流出した窒素量を乗じて算定を行なった。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

- E : 窒素溶脱・流出に伴う N₂O 排出量 [kg-N₂O]
- EF : 窒素の溶脱及び流出に伴う排出係数 [kg-N₂O-N/kg-N]
- A : 無機質肥料、有機質肥料などから溶脱・流出した窒素量 [kg-N]

■ 排出係数

0.0075 [kg-N₂O-N/kg-N] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

■ 活動量

活動量は下記の式で示したように、無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿、作物残さ、炭素消失による無機化からそれぞれ溶脱・流出する窒素量で構成されている。上述の 3.D.a.1～3.D.a.5.でそれぞれ算定した窒素量に、2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルトの溶脱・流出割合(0.30 [kg-N/kg-N])を乗じて算定した。

$$A = (N_{FERT} + N_{ON} + N_{PRP} + N_{CR} + N_{SOM}) \times Frac_{LEACH}$$

- A : 無機質窒素肥料、有機質肥料などから流出した窒素量 [kg-N]
- N_{FERT} : 農用地に施用された無機質窒素肥料に含まれる窒素量 [kg-N]
- N_{ON} : 農用地に施用された有機質肥料由来肥料中の窒素量 [kg-N]
- N_{PRP} : 放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 [kg-N]
- N_{CR} : 作物残さのすき込みによる窒素投入量 [kg-N]
- N_{SOM} : 鉦質土壌の炭素消失時に無機化された窒素量 [kg-N]
- Frac_{LEACH} : それぞれの活動で溶脱・流出する窒素割合 [kg-N/kg-N]
(=0.30) (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値(Vol.4 Table11.3))

表 5-69 無機質肥料、有機質肥料などから溶脱・流出した窒素量 [t (NH₃-N+NO_x-N)]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
無機質肥料由来 (N _{FERT} ×Frac _{LEACH})	183,500	158,181	146,153	141,291	104,991	122,819	116,106	118,979	122,918	118,333	111,649	112,411	112,411	112,411
有機質肥料由来 (N _{ON} ×Frac _{LEACH})	158,058	152,583	145,101	129,069	124,185	129,534	129,087	126,235	126,441	128,024	136,782	136,141	139,694	139,690
放牧家畜由来 (N _{PRP} ×Frac _{LEACH})	3,896	3,851	3,580	3,349	3,322	3,213	3,216	3,152	3,117	2,999	3,083	3,071	3,120	3,170
作物残さのすきこみ由来 (N _{CR} ×Frac _{LEACH})	45,299	44,780	47,719	43,955	38,834	37,750	37,521	38,290	38,276	37,328	36,916	35,332	35,157	34,147
無機化された窒素由来 (N _{SOM} ×Frac _{LEACH})	71,071	69,161	67,136	65,482	64,499	64,332	63,814	63,644	63,455	63,219	62,910	62,531	62,083	61,644
合計 (溶脱流出した窒素量) (A)	461,824	428,556	409,689	383,144	335,831	357,648	349,744	350,299	354,206	349,903	351,340	349,486	352,464	351,063

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている各パラメータの不確実性から合成して算出した値 (-115%～+287%) を用いた。活動量の不確実性は、上記「大気沈降」同様に 9%を採用した。その結果、排出量の不確実性は-115%～+287%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

e) 再計算

2015年度以降の化学肥料（硝化抑制剤含まない）統計値と、2016年度以降の硝化抑制剤入り化学肥料の統計値が更新された。また、肉用牛と豚の排せつ物に含まれる窒素量の算出方法が改訂された。従って、全年度の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

排出係数や窒素の溶脱・流出割合などについて、我が国独自の数値が設定出来るよう、検討している。

5.6. サバンナを計画的に焼くこと (3.E.)

当該排出区分では、2006年 IPCC ガイドラインにおいて「亜熱帯における草地の管理のために…」と記されているが、我が国では該当する活動が存在しないため、「NO」として報告する。

5.7. 野外で農作物の残留物を焼くこと (3.F.)

a) 排出源カテゴリーの説明

野外における作物残渣の不完全な燃焼により、 CH_4 、 N_2O が大気中に放出される。本カテゴリーでは、これらの CH_4 、 N_2O 排出に関する算定、報告を行なう。

2018年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は CH_4 が 63kt- CO_2 換算、 N_2O が 20kt- CO_2 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量(LULUCFを除く)のそれぞれ0.005%、0.002%を占めている。また、1990年度の排出量と比較するとそれぞれ50.1%、50.1%の減少となっている。

表 5-70 野外で農作物の残留物を焼くことによる CH₄及び N₂O 排出量 (3.F.)

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
CH ₄	3.F.1. 穀物	小麦	kt-CH ₄	0.38	0.22	0.27	0.31	0.26	0.24	0.22	0.21	0.20	0.19	0.18	0.18	0.18	0.16	
		大麦		0.15	0.09	0.08	0.08	0.07	0.07	0.06	0.06	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05
		とうもろこし		0.08	0.07	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.04	0.05
		稲		1.96	2.05	1.38	1.03	0.71	0.70	0.70	0.66	0.75	0.68	0.56	0.57	0.47	0.47	0.47
		その他穀物類		0.06	0.05	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.11	0.12	0.12	0.12	0.11	0.12	0.12	0.13
	3.F.2. 豆類	大豆		0.47	0.22	0.40	0.43	0.47	0.45	0.44	0.42	0.42	0.43	0.46	0.49	0.49	0.49	0.47
		その他豆類		0.35	0.27	0.22	0.19	0.16	0.16	0.16	0.15	0.16	0.16	0.14	0.12	0.12	0.12	0.12
	3.F.3. 根菜類	ばれいしょ		0.23	0.20	0.18	0.17	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.15	0.15	0.15	0.15	0.15
		てんさい		0.14	0.14	0.14	0.13	0.13	0.12	0.12	0.12	0.12	0.11	0.11	0.11	0.12	0.11	0.11
		その他根菜類(野菜類除く)		0.20	0.17	0.15	0.13	0.13	0.12	0.12	0.12	0.12	0.12	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11
	3.F.4. さとうきび			0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03
	3.F.5. 野菜類			0.95	0.87	0.81	0.74	0.72	0.72	0.71	0.71	0.70	0.69	0.69	0.69	0.68	0.68	0.68
	3.F.5. その他	その他作物		0.08	0.06	0.05	0.04	0.04	0.03	0.03	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
	合計			kt-CH ₄	5.1	4.4	3.8	3.4	3.0	2.9	2.9	2.8	2.9	2.8	2.7	2.7	2.6	2.5
				kt-CO ₂ 換算	127	111	96	86	76	74	73	71	72	70	67	67	64	63
	N ₂ O	3.F.1. 穀物		小麦	kt-N ₂ O	0.010	0.006	0.007	0.008	0.007	0.006	0.006	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005
大麦			0.004	0.002		0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
とうもろこし			0.002	0.002		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
稲			0.051	0.053		0.036	0.027	0.018	0.018	0.018	0.017	0.019	0.018	0.015	0.015	0.012	0.012	0.012
その他穀物類			0.002	0.001		0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003
3.F.2. 豆類		大豆	0.012	0.006		0.010	0.011	0.012	0.012	0.011	0.011	0.011	0.011	0.011	0.012	0.013	0.013	0.012
		その他豆類	0.009	0.007		0.006	0.005	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.003	0.003	0.003
3.F.3. 根菜類		ばれいしょ	0.006	0.005		0.005	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004
		てんさい	0.004	0.004		0.004	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003
		その他根菜類(野菜類除く)	0.005	0.004		0.004	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003
3.F.4. さとうきび			0.001	0.001		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
3.F.5. 野菜類			0.025	0.023		0.021	0.019	0.019	0.019	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018
3.F.5. その他		その他作物	0.002	0.002		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.000
合計		kt-N ₂ O	0.13	0.12		0.10	0.09	0.08	0.08	0.08	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	
		kt-CO ₂ 換算	39	34		30	26	23	23	22	22	22	22	21	21	20	20	
全ガス合計		kt-CO ₂ 換算	166	145		126	112	99	96	95	93	94	92	88	88	84	83	

b) 方法論

■ 算定方法

CH₄、N₂O の排出については、2006 年 IPCC ガイドラインに示された方法を用いて算定した。

$$E = A \times M_B \times C_f \times G_{ef} \times 10^{-3}$$

E : 農作物残渣の野焼きによる温室効果ガス排出量 [t-CH₄ or t-N₂O]

A : 野焼き対象の面積 [ha]

M_B : 単位面積当たり燃焼重量[t/ha]

C_f : 燃焼係数

G_{ef} : 排出係数 [g-CH₄/kg or g-N₂O/kg]

■ 排出係数

CH₄: 2.7 [g-CH₄/kg (乾物)] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

N₂O: 0.07 [g-N₂O/kg (乾物)] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

■ 活動量

算定に使用したパラメータは表 5-71 に記載している。残渣の焼却割合と燃焼係数は、作物残渣のすき込みと共通のものを使用している。稲については、焼却処理される稲わら及びもみ殻量のデータ(表 5-72) が得られるため、単位面積当たり燃焼重量(M_B) は乗じないこととする。なお、麦類の野焼きされる割合については、作物残渣(3.D.a.4.) の表 5-63 で示したものをを用いている。

表 5-71 残さの焼却割合、単位当たり燃焼重量×燃焼係数 ($M_B \times C_f$)、稲の燃焼係数

作物	残渣の焼却割合	$M_B \times C_f$	燃焼係数(C_f)
稲	—	—	0.80
豆類	12% ¹⁾	10 ³⁾	—
野菜類、てんさい、とうもろこし、 いも類、そば、なたね、い、葉たばこ	7% ²⁾	10 ³⁾	—
さとうきび	7% ²⁾	6.5	—
麦類	表 5-63 参照	4 ⁴⁾	—

(出典) 残さの焼却割合：「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」

$M_B \times C_f$ ：2006年 IPCC ガイドライン

(注)

1): 豆類の値、2): 野菜の値、3): とうもろこしの値、4): 小麦の値

稲の野焼きされる作物残渣量は、都道府県において把握しているデータより算出した稲わら・もみがらのうち焼却処理される量のデータを使用した(表 5-72)。その他の作物については「作物統計」および「野菜生産出荷統計」に掲載されている面積データから推計した。

表 5-72 焼却処理される稲わら及びもみがら量 [kt]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
稲わら	438.2	536.9	429.1	276.6	163.5	149.3	187.0	149.4	183.4	161.7	144.2	152.8	129.3	129.3
もみがら	581.3	528.3	291.3	260.3	206.0	212.9	179.2	195.6	206.6	193.9	147.5	142.6	114.2	114.2
計	1,019.5	1,065.2	720.4	536.9	369.4	362.2	366.2	345.0	390.0	355.6	291.7	295.4	243.5	243.5

(出典) 都道府県において把握しているデータより算出

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインに示されている各パラメータの不確実性から合成して算出した値(CH₄: 296%、N₂O: 300%)を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に記載されている水田面積の標準誤差(1%)で代替した。その結果、CH₄、N₂O 排出量の不確実性はそれぞれ、296%、300%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

e) 再計算

焼却処理される稲わら及びもみがら量が更新されたため 2017 年度の排出量が更新された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.8. 石灰施用 (3.G.)

a) カテゴリーの説明

炭酸カルシウム (CaCO₃) 肥料やドロマイト (CaMg(CO₃)₂) 肥料の土壌への施用により、土壌水中で炭酸水素イオン (HCO₃⁻) が遊離され、さらに CO₂ となり大気中に放出される。本カテゴリーではそれらの農地土壌への石灰施用に伴う CO₂ 排出量を取り扱う。2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 294kt-CO₂ であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 0.02% を占めている。1990 年度比 46.7% の減少となっている。

表 5-73 石灰施用に伴う CO₂ 排出量 (3.G.)

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO ₂	3.G.-炭酸カルシウム	kt-CO ₂	550	303	332	231	270	242	246	369	379	362	258	252	293	293
	3.G.-ドロマイト		0.3	0.5	0.5	0.6	0.6	1.0	1.1	0.6	1.1	1.0	0.8	0.8	0.9	0.9
	合計	kt-CO ₂	550	304	333	231	270	243	247	370	380	363	259	253	294	294

b) 方法論

■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドライン (Vol.4, 11.27, Figure11.4) のデシジョンツリーに従い、Tier 1 法を用いて算定方法を行った。

$$E = (M_{Limestone} \times EF_{Limestone} + M_{Dolomite} \times EF_{Dolomite}) \times 44/12$$

- E* : 農地土壌への石灰施用に伴う CO₂ 排出量 [t-CO₂/yr]
- M_{Limestone}* : 炭酸カルシウムの施用量 [t/yr]
- EF_{Limestone}* : 炭酸カルシウムの排出係数 [t-C/t]
- M_{Dolomite}* : ドロマイトの施用量 [t/yr]
- EF_{Dolomite}* : ドロマイトの排出係数 [t-C/t]

■ 排出係数

- 炭酸カルシウム (CaCO₃) : 0.12 [t-C/t] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)
- ドロマイト (CaMg(CO₃)₂) : 0.13 [t-C/t] (2006 年 IPCC ガイドライン デフォルト値)

■ 活動量

○ 炭酸カルシウムおよびドロマイト施用量

「ポケット肥料要覧」に示される肥料の種類別生産量及び輸入量を積算して求めた。なお専門家判断に基づき、同統計に示される肥料のうち「炭酸カルシウム肥料」の全量、「貝化石肥料」、「粗砕石灰石」、「貝殻肥料」の 70% を炭酸カルシウム、また「炭酸苦土肥料」の全量及び「混合苦土肥料」の 74% をドロマイトと想定した。

表 5-74 炭酸カルシウムとドロマイトの施用量 [kt]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
炭酸カルシウム施用量	1,250	689	755	524	613	550	558	839	860	822	586	573	665	665
ドロマイト施用量	0.7	1.1	1.1	1.4	1.2	2.0	2.4	1.3	2.2	2.0	1.7	1.7	2.0	2.0

(出典)「ポケット肥料要覧」のデータより算出

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている 50% を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に記載されている水田面積の標準誤差 (1%) で代替した。その結果、排出量の不確実性は 50% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

e) 再計算

2015年以降の炭酸カルシウムとドロマイトの施用量の統計値が改訂されたので、2015年以降の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.9. 尿素施用 (3.H.)

a) カテゴリーの説明

尿素 ((NH₃)₂CO) の施肥により、土壌水中で炭酸水素イオン (HCO₃⁻) が遊離され、さらに CO₂ となり大気中に放出される。本カテゴリーでは、この CO₂ 排出に関する算定、報告を行う。

なお、国内生産された尿素に関しては、工業プロセス部門で CO₂ 排出量を使用段階まで一括して取り扱い計上しているため、輸入された尿素の使用に伴う CO₂ 排出量の算定を行う。

2018年度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 193 kt-CO₂ であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 0.02% を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると 229% の増加となっている。

表 5-75 尿素施用に伴う CO₂ 排出量 (3.H.)

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO ₂	3.H. 尿素肥料	kt-CO ₂	59	56	110	179	120	160	168	150	198	189	201	193	193	193

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドライン (Vol.4, 11.33, Figure11.5) のデシジョンツリーに従い、Tier 1 法を用いて算定方法を行った。

$$E = (M \times EF) \times 44/12$$

E : 農地土壌への尿素肥料に伴う CO₂ 排出量 [t-CO₂/yr]

M : 尿素の施用量 (輸入分) [t/yr]

EF : 尿素肥料の排出係数 [t-C/t]

■ 排出係数

0.20 t-C/t (2006年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

■ 活動量

「ポケット肥料要覧」に示されている「尿素肥料需要量」から「尿素国内生産量のうち肥料用」を差し引いて算出した尿素肥料輸入量を用いた。

表 5-76 尿素肥料輸入量 [kt]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
尿素肥料輸入量	80	76	149	244	164	218	229	205	270	258	274	263	263	263

(出典)「ポケット肥料要覧」のデータより算出

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインに示されている 50%を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に記載されている水田面積の標準誤差（1%）で代替した。その結果、排出量の不確実性は 50%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

e) 再計算

2015年以降の尿素の統計値が改訂されたので、2015年以降の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.10. その他の炭素を含む肥料 (3.I.)

当該排出区分に該当する活動が存在しないため、「NO」として報告する。

5.11. その他 (3.J.)

その他として考えられる排出源がないため、「NO」として報告する。

参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」(2006)
2. IPCC“*IPCC 1995 Report: Agricultural Options for Mitigation of Greenhouse Gas Emissions*”, 747-771, 1995.
3. International Rice Research Institute (IRRI), “*World Rice STATISTICS 1993-94*”
4. 環境庁「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第1部(平成12年9月)」(2000)
5. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第3部(平成14年8月)」(2002)
6. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果(平成18年2月)」(2006)
7. 環境省環境再生・資源循環局「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用量実態調査報告書(廃棄物等循環利用量実態調査編)」
8. 環境省環境再生・資源循環局「日本の廃棄物処理」
9. 気象庁「日本気候表」
10. 農林水産省生産局畜産部畜産企画課「家畜排せつ物処理状況調査結果」(2009)
11. 農林水産省「平成23年度農林水産分野における地球環境対策推進手法の開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2012)
12. 農林水産省「平成24年度農林水産分野における地球環境対策推進手法開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2013)
13. 農林水産省「平成25年度農林水産分野における地球環境対策推進手法開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2014)
14. 農林水産省「土壌環境基礎調査 基準点調査(一般調査) 中間とりまとめデータ集」(1990)
15. 農林水産省「わが国の農地の現況 第4次土地利用基盤整備基本調査」(2006)
16. 農林水産省「鶏の改良増殖目標」(2015)
17. 農林水産省「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業 報告書」(2014)
18. 農林水産省「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業 報告書」(2018)
19. 農林水産省「作物統計」
20. 農林水産省「畜産統計」
21. 農林水産省「小動物及び実験動物等の飼養状況」
22. 農林水産省「耕地及び作付面積統計」
23. 農林水産省「畜産物生産費統計」
24. 農林水産省「畜産物流通統計」
25. 農林水産省「牛乳乳製品統計」
26. 農林水産省「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」
27. 農林水産省「飼料月報」
28. 農林水産省「野菜生産出荷統計」
29. 農林水産省生産局畜産部畜産振興課「馬関係資料」
30. 平成20年度環境バイオマス総合対策推進事業のうち農林水産分野における地球温暖化対策調査事業報告書(全国調査事業) 事業課題名 我が国の気候条件等を踏まえた家畜排せつ物管理に伴う温室効果ガス排出量算定方法の検討
31. 北海道農政部「北海道施肥ガイド2010」(2010)
32. 沖縄県「家畜・家きん等の飼養状況調査結果」
33. (財)農林統計協会「ポケット肥料要覧」
34. 農業・食品産業技術総合研究機構 編「日本飼養標準」(社)中央畜産会
35. 農業・食品産業技術総合研究機構 編「日本標準飼料成分表」(社)中央畜産会
36. (社)中央畜産会「家畜改良関係資料」

37. (社) 家畜改良事業団「乳用牛群能力検定成績」
38. (社) 畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 第四集」(1999)
39. (社) 畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」(2002)
40. (社) 畜産技術協会「ブロイラー飼養実態アンケート調査」(2008)
41. (社) 日本下水道協会 資料
42. 日本たばこ産業株式会社 資料
43. 温暖化対策土壌機能調査協議会「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業 報告書」
44. Akiyama, H., Yagi, K., and Yan, X., “*Direct N₂O emissions and estimate of N₂O emission factors from Japanese agricultural soils*”, In program and Abstracts of the International Workshop on Monsoon Asia Agricultural Greenhouse Gas Emissions, March 7-9, 2006, Tsukuba, Japan, 27 (2006 a)
45. Akiyama, H., Yan X. and Yagi, K., “*Estimations of emission factors for fertilizer-induced direct N₂O emissions from agricultural soils in Japan: Summary of available data*”, Soil Science and Plant Nutrition, 52, 774-787 (2006 b)
46. Akiyama, H., Yan X. and Yagi, K., “*Evaluation of effectiveness of enhanced-efficiency fertilizers as mitigation options for N₂O and NO emissions from agricultural soils: meta-analysis*”, Global Change Biology, 16(6), 1837-1846 (2010)
47. 長命洋佑、寺田文典、広岡博之「乳牛と肉牛における窒素排せつ量の予測と比較」畜産学会報、77 (4) , 485-494 (2006)
48. 伊達昇「便覧 有機質肥料と微生物資材」、農山漁村文化協会、pp. 116-117、(1988)
49. 麓 多門、柳原哲司、齋藤 隆、八木一行「農地からの温室効果ガス発生量の推定 -プロセスモデルによるアプローチ-」、土壌の物理性 114、49-52、(2010)
50. 波多野隆介「草地飼料畑の管理実態調査事業」平成 28 年度日本中央競馬会畜産振興事業の報告書 (2017)
51. Hayano, M., Fumoto, T., Yagi, K. and Shirato, Y., “*National-scale estimation of methane emission from paddy fields in Japan: Database construction and upscaling using a process-based biogeochemistry model*” Soil Science Plant Nutrition, 59(5), 812–823 (2013)
52. 寶示戸雅之、池口厚男、神山和則、島田和宏、荻野暁史、三島慎一郎、賀来康一「わが国農耕地における窒素負荷の都道府県別評価と改善シナリオ」日本土壌肥料学雑誌、74 (4) , 467-474 (2003)
53. 保科次雄、香西修治、本荘吉男「土壌中におけるチャ有機物の分解と茶樹による窒素の再吸収」、茶業研究報告 55 号、30-36 (1982)
54. 石橋誠、橋口純也、古閑護博「畜産における温室効果ガス排出削減技術の開発 (第 2 報)」畜産環境保全に関する試験研究 平成 15 年度畜産研究所試験成績書、熊本県農業研究センター畜産研究所 (2003)
55. Katayanagi, N., Fumoto, T., Hayano, M., Takata, Y., Kuwagata, T., Shirato, Y., Sawano, S., Kajiura, M., Sudo, S., Ishigooka, Y. and Yagi, K., “*Development of a method for estimating total CH₄ emission from rice paddies in Japan using the DNDC-Rice model*”, Science of the Total Environment, 547, 429–440 (2016)
56. Katayanagi, N., Fumoto, T., Hayano, M., Shirato, Y., Takata, Y., Leon, A. and Yagi, K., “*Estimation of total CH₄ emission from Japanese rice paddies using a new estimation method based on the DNDC-Rice simulation model*”, Science of the Total Environment, 601–602, 346–355 (2017)
57. 木下忠孝、辻正樹「てん茶園の窒素収支」、茶業研究報告 100 号、52-54 (2005)
58. Kume, S., Nonaka, K., Oshita, T. and Kozakai, T., “*Evaluation of drinking water intake, feed water intake and total water intake in dry and lactating cows fed silages*”, Livestock Science, 128(1-3), 46-51 (2010)

59. 松本成夫「地域における窒素フローの推定方法の確立とこれによる環境負荷の評価」、農業環境技術研究所報告 18 号、81-152 (2000)
60. Minamikawa, K., Fumoto, T., Itoh, M., Hayano, M., Sudo, S. and Yagi, K., “*Potential of prolonged midseason drainage for reducing methane emission from rice paddies in Japan: a long-term simulation using the DNDC-Rice model*”, *Biology and Fertility of Soils*, 50(6), 879-889 (2014)
61. Mori, A. and Hojito, M., “*Methane and nitrous oxide emissions due to excreta returns from grazing cattle in Nasu, Japan*”, *Grassland Science*, 61(2), 109-120 (2015)
62. 丹羽太左衛門「養豚ハンドブック」養賢堂
63. 野中邦彦「茶園における窒素環境負荷とその低減のための施肥技術」、茶業研究報告 100 号、29-41 (2005)
64. 永田修、鮫島良次「石狩川泥炭地の土地利用と温室効果ガス—湿原、水田、転換畑の比較—」、新しい研究成果：北海道地域、115-121 (2006)
65. 永田修、杉戸智子、小林創平、鮫島良次「小麦残渣および肥料が施与された慣行耕起・省耕起・不耕起栽培体系における亜酸化窒素の発生」、*Journal of Agricultural Meteorology*, 65(2), 151-159. (2009)
66. 小川和夫、竹内豊、片山雅弘「北海道の耕草地におけるバイオマス生産量及び作物による無機成分吸収量」北海道農業試験場研究報告、149、57-91 (1988)
67. Ogino, A., Murakami, H., Yamashita, T., Furuya, M., Kawahara, H., Ohkubo, T. and Osada, T., “*Estimation of nutrient excretion factors of broiler and layer chickens in Japan*”, *Animal Science Journal* 88(4), 659-668 (2016)
68. 太田充、岩橋光育、森田明雄「一番茶後の更新茶園における整せん枝有機物の分解と窒素の消長」茶業研究報告 84 号別冊、130-131 (1996)
69. 大谷文博、甘利雅弘、田鎖真澄、久米新一「泌乳牛の尿量は窒素およびカリウム摂取量と乳量から推定できる」畜産草地研究所成果情報 (2010)
70. Osada, T., Kuroda, K. and Yonaga, M., “*Determination of nitrous oxide, methane, and ammonia emissions from a swine waste composting process*”, *Journal of Material Cycles and Waste Management*, 2(1), 51-56 (2000)
71. Osada, T., “*Nitrous Oxide Emission from Purification of Liquid Portion of Swine Wastewater*”, *Greenhouse Gas Control Technologies - 6 International Conference, Volume I*, J. Gale and Y. Kaya (Eds.), 1299-1304 (2003)
72. Osada, T., Fukumoto, Y., Tamura, T., Shiraihi, M. and Ishibashi, M., “*Greenhouse gas generation from livestock waste composting*”, *Proceedings of the Fourth International Symposium on Non-CO₂ Greenhouse Gases (NCGG-4), Science, Control, Policy and Implementation*, Millpress, Rotterdam, 105-111 (2005)
73. 尾和尚人「我が国の農作物の栄養収支」(「平成 8 年度関東東海農業環境調和型農業生産における土壌管理技術に関する第 6 回研究会「養分の効率的利用技術の新たな動向」) (1996)
74. 斎藤守「肥育豚及び妊娠豚におけるメタンの排泄量」日本畜産学会報 59 (9)、773-778 (1988)
75. 柴田正貴、寺田文典、栗原光規、西田武弘、岩崎和雄「反芻家畜におけるメタン発生量の推定」、日本畜産学会報、64 (8) , 790-796 (1993)
76. 白石 誠、長田 隆、水木 剛、高取 健治「牛舎排水浄化処理施設から発生する温室効果ガス」日本畜産学会報、88 (4)、479-490 (2017)
77. 橘尚明、池田敏久、池田勝彦「茶樹における樹齢の進行および多肥条件下での窒素吸収特性」、日本作物学会紀事 65 (1)、8-15 (1996)
78. 高田裕介、中井信、小原洋「1992 年の農耕地分布に基づくデジタル農耕地土壌図の作成」、日本土壌肥科学雑誌、第 80 巻第 5 号 502-505 (2009)

79. 土屋いづみ、悦永秀雄、堂岸宏、坂本卓馬、石田三佳、長谷川三喜、長田隆「鶏糞乾燥処理施設における温室効果ガス発生量の測定」 日本畜産学会報、85 (1)、61-69 (2014)
80. 築城幹典、原田靖生「家畜の排泄物量推定プログラム」、システム農学 (J、JASS)、13 (1)、17-23 (1997)
81. 鶴田治雄「温室効果ガス削減農法モデルの構築 – 亜酸化窒素について –」「平成 12 年度温室効果ガス排出量削減定量化法調査報告書」、(財) 農業技術協会、p.42 (2001)
82. Yagasaki, Y., and Shirato, Y., “Assessment on the rates and potentials of soil organic carbon sequestration in agricultural lands in Japan using a process-based model and spatially explicit land-use change inventories – Part 1: Historical trend and validation based on nation-wide soil monitoring” *Biogeosciences*, 11(16), 4429–4442 (2014)

第6章 土地利用、土地利用変化及び林業分野

6.1. 土地利用、土地利用変化及び林業分野の概要

土地利用、土地利用変化及び林業（LULUCF）分野では、森林等の土地利用及びその変化に伴う温室効果ガス排出・吸収を取り扱う。我が国では2006年IPCCガイドラインに基づき、国土を森林、農地、草地、湿地、開発地、及びその他の土地の6つの土地利用カテゴリーに分類し、さらにそれぞれの土地利用カテゴリーを過去からの土地転用の有無に応じて区分した。土地転用の有無を区分する際には、2006年IPCCガイドラインのデフォルト値である20年を適用した。

本分野における温室効果ガスの排出・吸収量の算定対象は、それぞれの土地利用カテゴリーにおける5つの炭素プール（地上バイオマス、地下バイオマス、枯死木、リター、土壌）及び森林から伐採された伐採木材製品（HWP）の炭素蓄積変化量、森林土壌への窒素施肥に伴う N_2O 排出量、有機質土壌排水に伴う CH_4 、 N_2O 排出量、土地利用変化・管理変化に伴う無機化された窒素からの N_2O 排出量、土壌からの N_2O 間接排出量、バイオマスの燃焼に伴う非 CO_2 排出量であり、用いている方法論のTierは、それぞれ表6-1に示すとおりである。なお、本章では、地上・地下バイオマスを併せて「生体バイオマス」、枯死木・リターを併せて「枯死有機物」と記述する。

我が国の2018年度における国土面積は全体で約3,780万haであり、1990年度比0.06%の増加となっている。この増加は海面の干拓及び埋め立てに起因する¹。国土面積のうち最も大きい部分は森林であり、約2,491万haである。次に大きい部分は農地であり、約424万haとなっている。この他、草地在約95万ha、湿地が約135万ha、開発地が約387万ha、その他の土地が約247万haとなっている。わが国では、陸域のみをLULUCF分野の算定・報告対象としており、2006年IPCCガイドラインに対する2013年追補：湿地（以下、湿地ガイドライン）ガイドラインにて一部方法論が提示されている海域は対象に含めない。

我が国の国土は、北海道、本州、四国、九州及びその他の島嶼から構成される列島であり、ユーラシア大陸の東方に位置している。列島は北東から南西に渡って弧状に延びており、最北端は北緯約45度、最南端は北緯約20度に位置する。また、国土の大部分は温帯湿潤気候に属しているが、南方の諸島は亜熱帯気候、北方は冷帯気候に属する。温帯湿潤気候に属する首都東京における年平均気温及び平均年間降水量はそれぞれ15.4℃及び1,528.8mmであり、冷帯に属する北海道の札幌市では8.9℃及び1,106.5mm、亜熱帯に属する沖縄県那覇市では23.1℃及び2,040.8mmである²。

LULUCF分野には排出源及び吸収源の両方が含まれるが、我が国では1990年度以降継続して純吸収となっている。我が国における2018年度のLULUCF分野の温室効果ガス純吸収量は57,390kt- CO_2 換算であり、これは我が国の総排出量（LULUCFを除く）の4.6%に相当する。2018年度の純吸収量はまた、1990年度比7.8%の減少、前年度比2.0%の減少となっている。我が国の純吸収量は、2003年までは増加傾向であったが、2003年以降継続的に減少となっている。1990年から2003年までの吸収量の増加は、森林吸収量の増加及び土地転用面積の減少に起因する土地転用由来の排出量の減少が主要因となっている。また、それに続く、減少は、森林における吸収量の減少に起因している。変動理由の詳細は各カテゴリーの説明

¹ 「国土地理院」全国都道府県市区町村別面積調<<http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO-title.htm>>

² 年平均気温及び平均年間降水量は1981年から2010年までの平均値である。自然科学研究機構国立天文台編「理科年表 2019年」pp.184-185及びpp.196-197。緯度に関しては、国土地理院「日本の東西南北端点の緯度経度」<<http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/center.htm>>を参照のこと。

を参照のこと。

表 6-1 土地利用、土地利用変化及び林業分野で用いている方法論の Tier

温室効果ガスの種類 カテゴリー	CO ₂		CH ₄		N ₂ O	
	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数
A. 森林	T1,T2,T3	CS,D	T1	D	T1,T2	CS,D
B. 農地	T1,T2,T3	CS,D	T1	D	T1,CS	CS,D
C. 草地	T1,T2,T3	CS,D	T1	D	T1,CS	CS
D. 湿地	T1,T2	CS,D	NO,NA,NE	NA	NO,NA,NE	NA
E. 開発地	T1,T2	CS,D	T1	CS,D	T1	CS,D
F. その他の土地	T2	CS,D	NO	NO	T1	D
G. 伐採木材製品	T2,T3	CS,D				

(注) D: IPCC デフォルト値、T1: IPCC Tier1、T2: IPCC Tier2、T3: IPCC Tier3、CS: 国独自の的方法または排出係数

6.2. 土地利用カテゴリーの設定方法及び面積把握方法

2006年 IPCC ガイドラインに従って、我が国のすべての土地を6つの土地利用カテゴリーのうちいずれかの土地に分類する。我が国では、表 6-2 の通り、既存統計の定義に基づいて土地をそれぞれの土地利用カテゴリーへ割り当てている。また、各土地利用カテゴリーにおける面積は、既存統計の土地区分ごとに示された値を用いて直接把握している。ただし、「その他の土地」は他の5つの土地利用カテゴリーのいずれにも該当しない土地とした上で、国土総面積と5つの土地利用カテゴリーの合計面積との差分により面積を把握している。なお、森林及び農地、草地については我が国独自に下位区分を設定している（森林：立木地（人工林/天然林）/無立木地/竹林、農地：田/普通畑/樹園地/耕作放棄地、草地：牧草地/採草放牧地/原野）。我が国独自に設定したうちの森林における下位区分の定義は表 6-3 の通りである。

表 6-2 IPCC 土地利用カテゴリーへの我が国における土地利用区分の割り当て基準と面積把握のためのデータ及び情報源

IPCC 土地利用カテゴリー	土地利用区分の割り当ての基準	面積把握のためのデータ及び情報源
森林	森林法第5条及び7条の2に基づく森林計画対象森林とする。	2004年までは林野庁「森林資源現況調査」、2005年以降は林野庁「国家森林資源データベース ³ 」の森林計画対象森林の立木地（人工林、天然林）、無立木地、竹林とする。
農地	田、普通畑、樹園地、耕作放棄地とする。	農林水産省「耕地及び作付面積統計」の田、普通畑、樹園地、農林水産省「世界農林業センサス」における耕作放棄地とする。
草地	牧草地、採草放牧地、原野 ⁴ （牧草地及び採草放牧地以外の草生地）とする。	「耕地及び作付面積統計」の牧草地、「世界農林業センサス」における採草放牧地（森林に含まれる場合を除く）、及び国土交通省「土地利用現況把握調査」より把握された牧草地及び採草放牧地以外の草生地「原野等」から「世界農林業センサス林業地域調査報告書」の採草放牧地を除いた土地の面積とする。
湿地	湿地のうち湛水地に該当する、水面（ダム等）、河川、水路とする。	「土地利用現況把握調査」の水面、河川、水路とする。ただし、それらのうち植生回復活動の対象となる河川・砂防緑地は開発地区区分に含まれるものとする。
開発地	森林、農地、草地、湿地に該当しない都市地域とする。このうち都市緑地は、森林に該当しない総ての樹木植生地とする。	「土地利用現況把握調査」の道路及び宅地。ならびにその他各種データより把握した、同統計の「その他」に含まれる土地のうち学校教育施設用地、公園・緑地等、交通施設用地、環境衛生施設用地、ゴルフ場、スキー場及びレクリエーション用施設、その他を開発地に含めた。また、内数である都市緑地に関する情報は、国土交通省が管轄する都市緑地に関する統計や調査にて把握（詳細は表 11-11 に掲載）。
その他の土地	上記の土地利用区分のいずれにも該当しない土地とする。	国土院「全国都道府県市町村別面積調」の国土面積から他の土地利用区分の合計面積を差し引いて把握する。

表 6-3 森林における下位区分の定義

下位区分	定義
立木地	無立木地以外の森林のうち、立木の樹冠の占有面積歩合が 0.3 以上の林分（幼齢林にあつては、同歩合が 0.3 未満であっても、立木度 ⁵ 3 以上の林分を含む。）をいう。ただし、立木の樹冠の占有面積歩合が 0.3 未満であつて、立木及び竹の占有面積歩合の合計が 0.3 以上の森林のうち、立木の樹冠の占有面積歩合が竹のそれと等しいか又は上回るものを含む。
人工林	植栽又は人工下種により成立した林分で、植栽樹種又は人工下種の対象樹種の立木材積（又は本数）の割合が 50% 以上を占めるものをいう。
天然林	立木地のうち、人工林以外の森林をいう。
無立木地	立木及び竹の樹冠の占有面積歩合の合計が 0.3 未満の林分をいう。
竹林	立木地以外の森林のうち、竹（笹類を除く）の樹冠の占有面積歩合が 0.3 以上の林分をいう。ただし、竹の樹冠の占有面積歩合が 0.3 未満であつて、立木及び竹の樹冠の占有面積歩合の合計が 0.3 以上の森林のうち、竹の樹冠の占有面積歩合が立木のそれを上回るものを含む。

（出典）林野庁「森林資源現況調査」（平成 19 年 3 月 31 日）を一部改変

³ 森林資源現況調査及び国家森林資源データベースは、同様の森林の定義及び調査方法を適用しており、これら 2 つのデータは時系列的に一貫性を有している。

⁴ 現況は主に野草地（永年牧草地、退化牧草地、耕作放棄した土地で野草地化した土地を含む）である。

⁵ 立木度とは、当該林分における期待材積に対する実際の材積の比を十分率で表したものである。

2006年 IPCC ガイドラインに従って、それぞれの土地利用カテゴリーは、さらに過去からの土地転用の有無に応じて「転用のない土地」と「転用された土地」とに区分され、それぞれの面積は、いずれも既存統計をもとにした推計により把握している。このうち、他の土地利用カテゴリーから森林に転用された土地の面積は、既存統計に加え、1989年末の空中写真オルソ画像及び直近の衛星画像を用いて把握している京都議定書第3条3における新規植林・再植林面積を基に推計している。森林から他の土地利用カテゴリーに転用された面積は、「世界農林業センサス」及び林野庁業務資料に加え、新規植林・再植林と同様の方法で把握している森林減少の面積から推計している。新規植林・再植林及び森林減少の面積把握方法の詳細については第11章の11.4.2.3節を参照のこと。また、既存統計より直接把握できない土地面積区分については、現況面積の比率等を用いた転用面積の按分等の推計手段を用いて把握する。

6.3. 土地利用データベース及び土地面積の推計方法

6.3.1. 主な土地面積統計の調査方法及び調査期日

主な土地面積統計の調査方法及び調査期日は表 6-4 の通りである。

表 6-4 主な土地面積統計の調査方法及び調査期日

統計 / 調査名		調査方法	調査期日	調査頻度	所管
森林資源現況調査		全数調査	3月31日	概ね5年 (2004年以前)	農林水産省 (林野庁)
国家森林資源データベース		全数調査	4月1日	毎年 (2005年以降)	農林水産省 (林野庁)
耕地及び作付面積統計 原調査：耕地面積調査	【耕地面積】	対地標本実測調査	7月15日	毎年	農林水産省
	【耕地の拡張・かい廃面積】	巡回調査（関係機関資料、空中写真等を利用）	前年7月15日～7月14日		
世界農林業センサス		全数調査	【～2000年】8月1日 【2005年～】2月1日	【～2000年】10年 【2005年～】5年	農林水産省
土地利用現況把握調査		全数調査	---	毎年	国土交通省
全国都道府県市町村別面積調		全数調査	10月1日	毎年	国土地理院

(注) 施設緑地に関するデータについては表 11-11 に掲載

6.3.2. 土地面積の推計方法

一部の土地については既存統計より直接把握できないため、以下の方法により推計を行っている。

- 内挿による推計
 - 各土地カテゴリーの現況面積の比率を用いた転用面積の按分推計
 - ある年の転用面積比率を用いた転用面積の按分推計
- 推計方法の詳細は各節に記述しているので、各該当節を参照されたい。

■ 内挿による推計

【方法】

我が国では、2004年以前の森林の面積は概ね5年間隔で調査されており、調査実施年以外

の年の面積を直接把握することは困難である。従って、調査実施年以外の年の森林面積は、調査された年の面積を基に一次式による内挿により推計を行う。

【推計対象】

4.A.2 他の土地利用から転用された森林（1991～1994年度、1996～2001年度、2003～2004年度）

■ 現況面積の比率を用いた転用面積の按分推計

【方法】

我が国では、「畑（普通畑、樹園地、牧草地を含む）から転用された森林」の転用面積は既存統計においてまとめて報告されているため、「普通畑から転用された森林」、「樹園地から転用された森林」、「牧草地から転用された森林」の各面積を直接把握することは困難である。従って、これらの面積を、普通畑、樹園地、牧草地の現況面積の比率を「畑から転用された森林」の転用面積に乗じて推計する。

【推計対象】

- 4.A.2 他の土地利用（農地、草地）から転用された森林
- 4.B.2 他の土地利用（森林、草地、湿地、その他の土地）から転用された農地
- 4.C.2 他の土地利用（森林、農地、湿地、その他の土地）から転用された草地
- 4.E.2 他の土地利用（農地、草地）から転用された開発地
- 4.F.2 他の土地利用（農地、草地）から転用されたその他の土地

■ ある年の転用面積比率を用いた転用面積の按分推計

【方法】

我が国では、毎年農地、草地、開発地、その他の土地から転用された湿地の面積をそれぞれ直接把握することは困難である。従って、毎年「他の土地利用から転用された湿地」に対する農地、草地、開発地、その他の土地から転用された湿地の面積比率を1998年度の比率と同一と想定し、その比率を既存統計で毎年把握される「他の土地利用から転用された湿地」の面積に乗じることにより、毎年のそれぞれの土地利用から転用された湿地の面積を推計する。

【推計対象】

- 4.D.2. 他の土地利用（農地、草地、開発地、その他の土地）から転用された湿地

6.3.3. 土地利用転用マトリクス

6.2.節及び6.3.の前小節の説明に従って面積の把握を行った6つの土地利用カテゴリー間で、その年度内に生じた土地転用を1990年度から現在に至るまで毎年マトリクスを作成している。次の各表において、1990年度に生じた土地転用（表6-5）と2018年度に生じた土地転用（表6-6）のマトリクスを示す。また、1990年から2018年の間に起こった各土地カテゴリー間の転用を累計して作成した土地転用マトリクスを表6-7に示す。我が国の土地はすべて管理地であるため、非管理地に該当する土地は存在しないため、グレーの網掛けを施した。

表 6-5 我が国の土地利用転用マトリックス（1990年度）（単位：kha）

転用前 \ 転用後	森林	農地	草地	湿地	開発地	その他の土地	合計
森林	24,945.4	5.41	0.76	0.31	14.94	3.70	24,970.5
農地	2.71	4,806.9	0.90	0.02	21.35	2.16	4,834.1
草地	0.67	0.004	1,029.8	0.007	3.19	0.36	1,034.0
湿地	NO	0.34	0.12	1,308.4	IE	IE	1,308.9
開発地	0.75	IE	NO	0.002	3,169.5	IE	3,170.3
その他の土地	0.75	0.21	0.01	0.09	IE	2,455.0	2,456.0
合計	24,950.3	4,812.9	1,031.6	1,308.8	3,209.0	2,461.2	37,773.7

表 6-6 我が国の土地利用転用マトリックス（2018年度）（単位：kha）

転用前 \ 転用後	森林	農地	草地	湿地	開発地	その他の土地	合計
森林	24,914.8	0.16	0.37	0.07	5.10	0.51	24,921.0
農地	NO	4,236.0	0.39	0.01	11.64	0.78	4,248.8
草地	0.08	0.005	946.6	0.001	1.83	0.14	948.7
湿地	NO	NO	NO	1,348.1	IE	IE	1,348.1
開発地	0.01	IE	NO	0.0003	3,851.4	IE	3,851.4
その他の土地	NO	7.51	1.20	0.02	IE	2,470.6	2,479.3
合計	24,914.9	4,243.7	948.6	1,348.2	3,870.0	2,472.0	37,797.4

表 6-7 我が国の土地利用転用マトリックス（1990-2018年度）（単位：kha）

2018 \ 1990	森林 (管理)	森林 (非管理)	農地	草地 (管理)	草地 (非管理)	湿地 (管理)	湿地 (非管理)	開発地	その他の土地	非管理土地 合計	合計
森林(管理)	24,808.3		27.7	14.7		16.0		212.4	52.3		25,131.3
森林(非管理)											
農地	35.1		4,175.7	23.1		1.3		381.4	64.5		4,681.0
草地(管理)	12.7		1.1	907.7		0.3		58.8	8.9		989.3
草地(非管理)											
湿地(管理)	0.1		1.1	0.4		1,326.1		IE	IE		1,327.7
湿地(非管理)											
開発地	31.0		IE	NO		0.1		3,217.5	IE		3,248.5
その他の土地	27.8		38.2	2.8		4.4		IE	2,346.4		2,419.5
非管理土地合計											
合計	24,914.9		4,243.7	948.6		1,348.2		3,870.0	2,472.0		37,797.4
変化	-216.4		-437.4	-40.7		20.5		621.5	52.5		0.0

(注)「IE」で示されている面積は、国土総面積との調整項としての意味合いを持つ「転用のないその他の土地」に含まれている。

6.4. 土地転用に伴う炭素ストック変化量の算定に用いるパラメータ

土地転用は土地利用カテゴリー横断で行われるため、土地利用カテゴリー毎の方法論の詳細を示す各節に先立ち、土地転用に伴う炭素ストック変化量の算定に用いる一般的なパラメータを表 6-8a から表 6-11 に示す。備考において、パラメータの設定や計算方法、設定根拠等を示す。表中、値ではなく、－と示している箇所については、別途記載がある場合、精査中である場合等が含まれるので、これについても備考欄を参照されたい。また、値が 0 となっているパラメータについては、2006 年 IPCC ガイドラインに従って、0 (デフォルト値) としている場合と炭素ストックは存在するが方法論がない、または変化がないとみなして我が国で 0 と仮定して用いている場合とがある。詳細については、備考欄を参照されたい。

表 6-8a 土地転用前及び直後の土地利用カテゴリー毎の生体バイオマスストック量

土地利用カテゴリー		バイオマス ストック量 または 炭素ストック量	備考	
転用前	森林	100.4 [t-d.m./ha] (2018 年度)	国家森林資源データベースから提供される京都議定書第 3 条 3 の森林減少対象地におけるバイオマスストック量を用いて計算。なお、1990～2007 年度までは 2008～2012 年度の平均値を用いている。(参考値は表 6-12 を参照)	
	農地	田畑平均	1.7 [t-C/ha]	水田と普通畑にすき込まれた作物残さ中炭素量の 1990-2017 年平均値より設定 (各年の作物作付面積で加重平均した値の平均値)
		田	2.0 [t-C/ha]	水田にすき込まれた作物残さ中炭素量の 1990-2017 年の平均値より設定
		普通畑	1.3 [t-C/ha]	普通畑にすき込まれた作物残さ中炭素量の 1990-2017 年平均値より設定 (各年の作物作付面積で加重平均した値の平均値)
		樹園地	IE	転用のない農地の算定に含まれる。
	草地	13.50 [t-d.m./ha]	デフォルト値 (2006 年 IPCC ガイドライン Table 6.4 warm temperate wet)	
	湿地、開発地、 その他の土地	0	0 と仮定	
転用直後	すべての土地	0	0 と仮定	

表 6-8b 土地転用後の土地利用カテゴリー毎の生体バイオマス成長量

土地利用カテゴリー		バイオマス成長量	備考	
転用後	森林	3.0 [t-C/ha/yr]	京都議定書第3条3の新規植林・再植林の見かけの吸収係数を基に転用された森林の吸収量を直接推計。2008～2010年度の平均値を用いている。	
	農地	田畑平均	1.7 [t-C/ha/yr]	表 6-8a の炭素ストック量まで1年で到達するとして設定
		田	2.0 [t-C/ha/yr]	表 6-8a の炭素ストック量まで1年で到達するとして設定
		普通畑	1.3 [t-C/ha/yr]	表 6-8a の炭素ストック量まで1年で到達するとして設定
		樹園地	IE	転用のない農地の算定に含まれる。
	草地	2.70 [t-d.m./ha/yr]	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン Table6.4 warm temperate wet の値) 13.5 の5分の1	
	開発地	—	6.9.2.b)1)節を参照	
湿地、その他の土地	0	0と仮定		

表 6-9 土地転用前後の土地利用カテゴリー毎の枯死木の炭素ストック量

土地利用カテゴリー		炭素ストック量	備考
転用前	森林	14.65 [t-C/ha] (2018年度)	森林面積と CENTURY-jfos で得られた森林における枯死木の炭素ストック量から計算。なお、2004年度以前の値は、2005年度値を代挿。(参考値は表 6-12を参照)
	農地、草地、湿地、開発地、その他の土地	0	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン第4巻 5.3.2節等、Tier 1)。
転用直後	すべての土地	0	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン第4巻 5.3.2節等、Tier 1)。
転用後	森林	13.01 [t-C/ha]	CENTURY-jfos で得られた20年生森林における単位面積当たり炭素ストック量の平均値。
	農地、草地、湿地、その他の土地	0	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン第4巻 5.3.2節等、Tier 1)。
	開発地	0	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン第4巻 8.3.2節等、Tier 1)。

表 6-10 土地転用前後の土地利用カテゴリー毎のリターの炭素ストック量

土地利用カテゴリー		炭素ストック量	備考
転用前	森林	7.31 [t-C/ha] (2018年度)	森林面積と CENTURY-jfos で得られた森林におけるリターの炭素ストック量から計算。なお、2004年度以前の値は、2005年度値を代挿。(参考値は表 6-12 を参照)
	農地、草地、 湿地、開発地、 その他の土地	0	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン第4巻 5.3.2節等、Tier 1)。
転用直後	すべての土地	0	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン第4巻 5.3.2節等、Tier 1)。
転用後	森林	5.637 [t-C/ha]	CENTURY-jfos で得られた 20年生森林における単位面積当たり炭素ストック量の平均値。
	農地、草地、 湿地、 その他の土地	0	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン第4巻 5.3.2節等、Tier 1)。
	開発地	—	6.9.2.b)2)節を参照

表 6-11 土地利用カテゴリー毎の土壌炭素ストック量 (鉱質土壌)

土地利用カテゴリー		炭素ストック量	備考	
転用前	森林	85.42 [t-C/ha] (2018年度)	深度 0-30 cm において CENTURY-jfos で計算した、インベントリ年の前年の全国平均値。なお、2004年度以前の値は、2005年度値を代挿。(参考値は表 6-12 を参照)	
	農地	田	71.38 [t-C/ha]	深度 0-30 cm におけるデータ 農業環境技術研究所 中井信委員 提供データ (未公表) ※「農地から転用された草地」及び「草地から転用された農地」にはこの炭素ストック量を適用しない。
		普通畑	86.97 [t-C/ha]	
		樹園地	77.46 [t-C/ha]	
		農地 (平均)	76.46 [t-C/ha]	
	草地	134.91 [t-C/ha]		
	湿地	88.00 [t-C/ha]	デフォルト値 (2006年 IPCC ガイドライン Table 2.3, Wetland soils/ Warm temperate)。	
	開発地	-	現在精査中	
その他の土地	-	土地転用状況に応じて設定		
転用後	森林	82.907 [t-C/ha]	深度 0-30cm において CENTURY-jfos で得られた 20年生森林における単位面積当たり炭素ストック量の平均値。	
	農地	IE	転用のない農地の算定に含まれる。	
	草地	IE	転用のない草地の算定に含まれる。	
	湿地	-	現在精査中	
	開発地	-	土地転用状況に応じて設定	
	その他の土地	-		

(注) 森林への転用前土壌炭素ストック量は専門家判断により全て 80 tC/ha を利用。

表 6-12 転用前の森林における各炭素プールの炭素ストック量

土地利用カテゴリー	炭素プール	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
転用前	森林	生体バイオマス ストック量	[t-d.m./ha]	113.4	113.4	113.4	113.4	108.3	99.8	100.6	123.2	98.5	99.1	99.5	99.9	100.3	100.4
		枯死木	[t-C/ha]	15.08	15.08	15.08	15.08	14.99	14.97	14.95	14.93	14.86	14.82	14.77	14.77	14.70	14.65
		リター	[t-C/ha]	7.24	7.24	7.24	7.24	7.27	7.28	7.28	7.29	7.29	7.29	7.30	7.33	7.31	7.31
		土壌	[t-C/ha]	85.07	85.07	85.07	85.07	85.12	85.17	85.20	85.30	85.31	85.34	85.36	85.69	85.48	85.42

6.5. 森林 (4.A.)

森林は、光合成活動により大気から CO₂ を吸収し、炭素を有機物として固定し一定期間貯留する。他方、伐採や自然撓乱などの影響により CO₂ を排出する。

我が国の森林は全て管理された森林であり、人工林、天然林、竹林及び無立木地で構成される。2018 年度における我が国の森林面積は、国土面積の約 65.9% に相当する約 2,491 万 ha である。2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 純吸収量は 59,027 kt-CO₂ (ただし、以下の炭素ストック変化以外の GHG 排出分は除く。バイオマスの燃焼に伴う CH₄ 及び N₂O 排出量 2.64 kt-CO₂ 換算、森林土壌への施肥に伴う N₂O 排出量 0.78 kt-CO₂ 換算、土地利用変化・管理変化に伴う無機化された窒素からの N₂O 排出量 157.84 kt-CO₂ 換算) であり、1990 年度比 25.3% の減少、前年度比 3.0% の減少となっている。この吸収量の減少傾向は、我が国の森林の成熟化によるものである。

本節では、森林を「転用のない森林(4.A.1.)」及び「他の土地利用から転用された森林(4.A.2.)」の 2 つのカテゴリーに区分し、以下の小節においてそれらについて別個に記述する。

表 6-13 森林における炭素ストック変化量に起因する排出・吸収量

ガス	カテゴリー	炭素プール	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO ₂	4.A. 森林	合計	kt-CO ₂	-79,061	-87,606	-90,637	-92,662	-75,867	-76,371	-78,110	-77,676	-69,991	-68,279	-63,108	-58,562	-60,849	-59,027
		生体バイオマス	kt-CO ₂	-73,002	-79,826	-83,660	-87,551	-72,712	-73,886	-76,214	-76,242	-68,872	-67,330	-62,244	-57,735	-59,983	-58,135
		枯死木	kt-CO ₂	-2,860	-3,803	-2,837	-1,082	414	914	1,342	1,655	1,830	1,873	1,854	1,787	1,665	1,546
		リター	kt-CO ₂	-2,697	-2,352	-1,774	-1,078	-669	-571	-499	-451	-413	-384	-371	-355	-350	-330
		鉱質土壌	kt-CO ₂	-503	-1,625	-2,367	-2,950	-2,900	-2,829	-2,739	-2,638	-2,536	-2,437	-2,347	-2,259	-2,182	-2,108
		有機質土壌	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	4.A.1. 転用のない森林	合計	kt-CO ₂	-72,386	-84,289	-88,229	-90,819	-74,489	-75,018	-76,790	-76,388	-68,740	-67,086	-61,979	-57,494	-59,843	-58,093
		生体バイオマス	kt-CO ₂	-68,098	-77,389	-81,891	-86,197	-71,706	-72,898	-75,251	-75,303	-67,954	-66,455	-61,416	-56,952	-59,243	-57,448
		枯死木	kt-CO ₂	-1,791	-3,272	-2,451	-787	638	1,135	1,557	1,865	2,031	2,065	2,036	1,960	1,826	1,695
		リター	kt-CO ₂	-2,233	-2,122	-1,607	-950	-572	-475	-405	-360	-326	-301	-292	-280	-280	-265
		鉱質土壌	kt-CO ₂	-264	-1,506	-2,281	-2,884	-2,850	-2,779	-2,691	-2,591	-2,491	-2,395	-2,306	-2,221	-2,146	-2,075
		有機質土壌	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	4.A.2. 他の土地利用から転用された森林	合計	kt-CO ₂	-6,675	-3,317	-2,408	-1,843	-1,378	-1,353	-1,320	-1,288	-1,251	-1,193	-1,129	-1,068	-1,006	-934
		生体バイオマス	kt-CO ₂	-4,904	-2,437	-1,768	-1,354	-1,006	-988	-963	-939	-918	-875	-828	-783	-740	-687
		枯死木	kt-CO ₂	-1,069	-531	-386	-295	-224	-221	-215	-210	-201	-192	-182	-172	-161	-149
		リター	kt-CO ₂	-463	-230	-167	-128	-97	-96	-93	-91	-87	-83	-79	-75	-70	-65
		鉱質土壌	kt-CO ₂	-239	-119	-86	-66	-50	-49	-48	-47	-45	-43	-41	-38	-36	-33
		有機質土壌	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO

6.5.1. 転用のない森林 (4.A.1.)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、転用のない森林 (2018 年現在で過去 20 年間転用されず、継続して森林であった土地) における炭素ストック変化量を取り扱う。2018 年度における当該カテゴリーの CO₂ 純吸収量は 58,093 kt-CO₂ (炭素ストック変化以外の GHG 排出分は除く) であり、1990 年度比 19.7% の減少、前年度比 2.9% の減少となっている。転用のない森林における純吸収量は、2003 年以降継続的に減少している (ただし、単年度ごとの吸収量は景気の動向等による国産材の伐採量の増減が要因となって変動する)。この長期的に表れている吸収量の減少傾向は、我が国の森林 (特に人工林) の成熟化によるものである。これは日本の主要な植栽木において林齢 50 年以上の林分において蓄積量の増加が緩やかになるためである。また、日本の人工林は年々成熟化が進んでおり、2017 年度において林齢 51 年以上の人工林が全体の森林面積の 50% を占めている (Forestry Agency, 2018 ; 図 6-1)。これは 1960 年代に大規模な植林が行われたためである。1960 年代に植林された人工林の成熟化が日本の炭素ストックの変化に大きな影響を及ぼしている。我が国では 1960 年代に植えられたこれらの大規模な植林地が吸収を続け、伐採などによる損失量を上回ってきたため、一貫して吸収となっている。

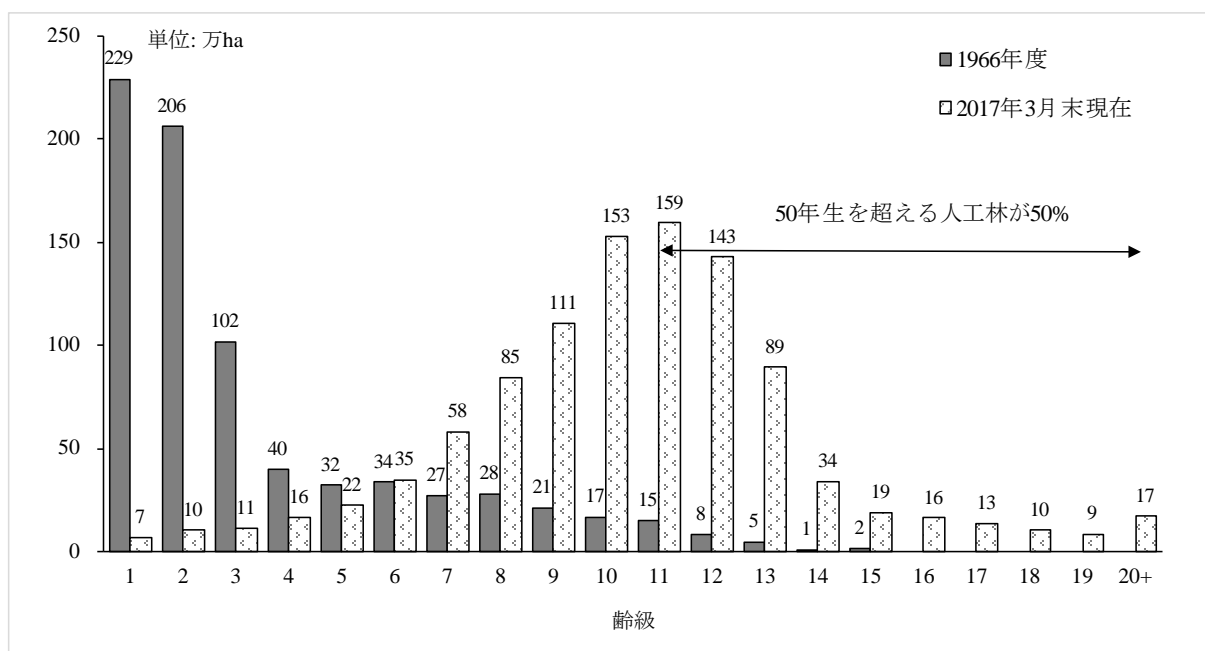


図 6-1 人工林の年齢構成の変化

(出典) 林野庁「森林資源の現況」(2017年3月31日現在)、林野庁「日本の森林資源」(1968年4月)

(注) 年齢は、林齢を5年の幅でくくった単位。苗木を植栽した年を1年生として、1～5年生を「1年齢」と数える。

転用のない森林の下位区分である竹林の5つの炭素プールは、成林している竹林における竹幹の毎年の成長量と枯死量が均衡していると見なし、全て「NA」として報告している。竹には形成層がないため、発生した最初の年で成長の極限に達するがその後は二次肥大成長せず、一定の密度に達した竹林においては、竹が発生する量と枯死する量が同程度であると言われている。さらに、FAO(2007)は、アジア、アフリカの数カ国における1990年、2000年及び2005年の竹の資源状況を調査しており、2000年、2005年の5年間をみると、各国とも単位面積当たりのストックがほぼ横ばいとなっている。また、無立木地については、無立木地の枯死有機物及び鉍質土壌の炭素ストック量の増加と損失が長期的に均衡しているため(FRA、2010 - Country Report, Japan)、生体バイオマスのみ報告し、枯死有機物及び鉍質土壌については「NA」として報告している。

転用のない森林における枯死有機物の炭素ストック変化量は1990年から2008年までの期間に関しては純吸収、2009年以降は純排出であった。当該炭素プールにおける傾向の変化は、間伐や伐採の作業が周期的に行われている人工林の年齢に起因するものである。具体的には、1960年代に造林された森林における間伐が1990年代に実施され、地上バイオマスから枯死有機物への炭素ストック量の移行が促進された。しかしながら、その後間伐量が減ったため、枯死有機物に移行してくる炭素ストック増加量が減少し、かつ移行した炭素の分解による炭素ストック損失量が増加した。その炭素ストックの損失が2009年度から増加より大きくなったため、1990年から2008年まで純吸収で、2009年以降は純排出になっている。

b) 方法論

1) 転用のない森林における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインに示されているデンジョンツリーに従い、国独自のバイオマス蓄積量を用いる Tier 2 の蓄積変化法を用いて算定した。この方法においては、当該生体バイオマスプールの炭素ストック変化量は、2 時点の炭素ストックの絶対量の差を求めることで算定した⁶。

$$\Delta C_{LB} = \sum_k \{(C_{t2} - C_{t1}) / (t_2 - t_1)\}_k$$

ΔC_{LB}	: 生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]
t_1, t_2	: 炭素ストック量を調査した時点
C_{t1}	: 調査時点 t_1 における炭素ストック量 [t-C]
C_{t2}	: 調査時点 t_2 における炭素ストック量 [t-C]
k	: 森林施業タイプ

生体バイオマスの炭素ストック量は、材積に、容積密度、バイオマス拡大係数、地上部に対する地下部の比率、乾物重当たりの炭素含有率を乗じて算定した。炭素含有率以外のパラメータは樹種ごとに設定した。

$$C = \sum_j \{V_j \times D_j \times BEF_j \times (1 + R_j) \times CF\}$$

C	: 生体バイオマスの炭素ストック量 [t-C]
V	: 材積 [m ³]
D	: 容積密度 [t-d.m./m ³]
BEF	: バイオマス拡大係数 [無次元]
R	: 地上部に対する地下部の比率 [無次元]
CF	: 乾物重当たりの炭素含有率 [t-C/t-d.m.]
j	: 樹種

なお、我が国では、この方法により森林全体の生体バイオマスの炭素ストック変化量を算定しているため、当該変化量から「他の土地利用から転用された森林」の変化量を減じて「転用のない森林」の生体バイオマスの炭素ストック変化量を把握した。「他の土地利用から転用された森林」の変化量の把握方法は、6.5.2. b) 1) 節を参照のこと。

■ 各種パラメータ

○ 材積

林野庁は森林からの温室効果ガス排出・吸収量を算定するための国家森林資源データベースを整備している。当該データベースのデータは都道府県及び森林管理局が作成した森林簿に

⁶ 我が国は後述のとおり都道府県及び森林管理局が作成した森林簿の情報を基に国家森林資源データベースを整備し、そのデータから炭素ストック量を算出しているが、都道府県及び森林管理局が森林簿を更新する際に、森林の現況（樹種、面積等）を正しく反映するための修正を行う場合がある。このような場合、蓄積変化法の下では時点 t_1 における修正前の炭素ストック量と時点 t_2 における修正後の炭素ストック量の差を取ることになり、正しい炭素ストック変化量が得られないことがあるため、生体バイオマスの炭素ストック変化量はその正しい状況と合致するように補正を行っている。

含まれている面積、樹種、及び林齢等の情報を基にしている。

材積は、当該データベースに蓄積されている樹種別・林齢別の面積に、収穫表における樹種別・林齢別の単位面積当たり材積を乗じて算定される。単位面積当たり材積の元データは表 6-14 の通りである。人工林の代表的な樹種であるスギ、ヒノキ、カラマツの民有林の材積の算定については、最新の調査結果を反映した新収穫表の推計値を適用している。

$$V = \sum_{m,j} (A_{m,j} \times v)$$

V	: 材積 [m ³]
A	: 面積 [ha]
v	: 単位面積当たり材積 [m ³ /ha]
m	: 齢級又は林齢
j	: 樹種

表 6-14 材積の算定に用いる樹種別収穫表

樹種			使用する収穫表	
			民有林	国有林
人工林	針葉樹	スギ、ヒノキ、カラマツ	新収穫表	森林管理局 作成の収穫表
		その他の針葉樹	都道府県作成 の収穫表	
	広葉樹			
天然林				

【都道府県及び森林管理局作成の収穫表と森林簿の作成について】

民有林及び国有林において地域森林計画等（全国を 158 の計画区に区分し 1/5 ずつ（毎年 30 計画区程度）樹立する）を立てようとするときに、その地域の森林に関して調査を行い、面積、林齢、樹種別の材積等を取りまとめた森林簿を作成している。森林簿は、民有林は都道府県、国有林は森林管理局が、地域森林計画等の樹立の際に更新しており、成長や伐採、攪乱による材積変化が反映される。この森林簿に記載する材積は、基本的に一定の地域・樹種・地位ごとに標準的な施業を行ったときの成長経過を示した「収穫表」（林齢または齢級と単位面積当たり材積との関係を示したもの）を用いて、面積から求められる。

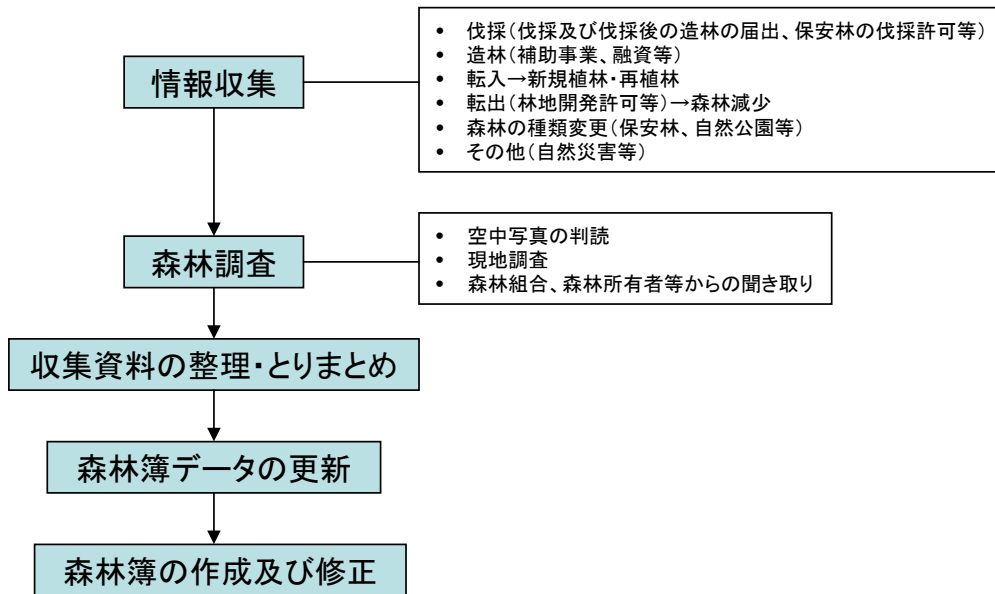


図 6-2 森林簿の作成手順

【新収穫表（スギ、ヒノキ、カラマツ）について】

(国研) 森林総合研究所は、全国の調査結果をもとに、2006年にスギ、ヒノキ及びカラマツを対象とした新たな収穫表を作成した。この3樹種による民有林人工林のカバー率は82%であった。なお、新収穫表は、スギについては7地域別、ヒノキは4地域別、カラマツは2地域別に作成した。

○ バイオマス拡大係数及び地上部に対する地下部の比率

(国研) 森林総合研究所による主要樹種のバイオマス量データ現地調査結果と既存文献データの収集結果に基づき、バイオマス拡大係数 (BEF) [地上部バイオマス/幹バイオマス] 及び地上部に対する地下部の比率 (R) を設定した (表 6-15)。

バイオマス拡大係数については、若齢林と壮齢林以上とで差異があることが認められたことから、樹種別に林齢 20 年生以下と 21 年生以上の 2 区分に分けて算定することとした。他方、地上部に対する地下部の比率については、林齢との相関が認められなかったため、樹種別のみで設定した。

○ 容積密度

(国研) 森林総合研究所による主要樹種のバイオマス量データ収集調査結果と既存文献データ収集結果に基づき容積密度 (D) を設定した (表 6-15)。容積密度については、林齢との相関は認められなかったため、樹種別に値を設定することとした。

○ 炭素含有率

乾物中の炭素含有率 (CF) は、我が国の研究結果に基づいて設定した値を採用した (表 6-15)。

表 6-15 樹種別のバイオマス拡大係数、地上部に対する地下部の比率、容積密度等

		BEF [-]		R [-]	D [t-d.m./m ³]	CF [t-C./t-d.m.]	備考
		≤20	>20				
針葉樹	スギ	1.57	1.23	0.25	0.314	0.51	
	ヒノキ	1.55	1.24	0.26	0.407		
	サウラ	1.55	1.24	0.26	0.287		
	アカマツ	1.63	1.23	0.26	0.451		
	クロマツ	1.39	1.36	0.34	0.464		
	ヒバ	2.38	1.41	0.20	0.412		
	カラマツ	1.50	1.15	0.29	0.404		
	モミ	1.40	1.40	0.40	0.423		
	トドマツ	1.88	1.38	0.21	0.318		
	ツガ	1.40	1.40	0.40	0.464		
	エゾマツ	2.18	1.48	0.23	0.357		
	アカエゾマツ	2.17	1.67	0.21	0.362		
	マキ	1.39	1.23	0.20	0.455		
	イチイ	1.39	1.23	0.20	0.454		
	イチョウ	1.50	1.15	0.20	0.450		
外来針葉樹	1.41	1.41	0.17	0.320			
その他針葉樹	2.55	1.32	0.34	0.352		北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、栃木、群馬、埼玉、新潟、富山、山梨、長野、岐阜、静岡に適用	
〃	1.39	1.36	0.34	0.464		沖縄に適用	
〃	1.40	1.40	0.40	0.423		上記以外の都道府県に適用	
広葉樹	ブナ	1.58	1.32	0.26	0.573	0.48	
	カシ	1.52	1.33	0.26	0.646		
	クリ	1.33	1.18	0.26	0.419		
	クヌギ	1.36	1.32	0.26	0.668		
	ナラ	1.40	1.26	0.26	0.624		
	ドノロキ	1.33	1.18	0.26	0.291		
	ハンノキ	1.33	1.25	0.26	0.454		
	ニレ	1.33	1.18	0.26	0.494		
	ケヤキ	1.58	1.28	0.26	0.611		
	カツラ	1.33	1.18	0.26	0.454		
	ホオノキ	1.33	1.18	0.26	0.386		
	カエデ	1.33	1.18	0.26	0.519		
	キハダ	1.33	1.18	0.26	0.344		
	シナノキ	1.33	1.18	0.26	0.369		
	センノキ	1.33	1.18	0.26	0.398		
	キリ	1.33	1.18	0.26	0.234		
	外来広葉樹	1.41	1.41	0.16	0.660		
	カンバ	1.31	1.20	0.26	0.468		
その他広葉樹	1.37	1.37	0.26	0.469		千葉、東京、高知、福岡、長崎、鹿児島、沖縄に適用	
〃	1.52	1.33	0.26	0.646		三重、和歌山、大分、熊本、宮崎、佐賀に適用	
〃	1.40	1.26	0.26	0.624		上記以外の都道府県に適用	

(注) BEF: バイオマス拡大係数 (「20」は林齢)、R: 地上部に対する地下部の比率、D: 容積密度、CF: 炭素含有率

■ 活動量 (面積)

○ 森林面積の把握

2004年度以前は林野庁「森林資源現況調査」、2005年度以降は林野庁「国家森林資源データベース」のデータを用い、森林計画対象森林の人工林、天然林、無立木地、竹林の面積を把握した。データが存在しない1991～1994年度、1996～2001年度、2003～2004年度の値は、一次式による内挿により推計した。また、1990年度以前のトドマツ、エゾマツ、クヌギ、ナ

ラ類の面積データは個別に存在しないため、「その他の針葉樹」または「その他の広葉樹」の面積を1995年度の面積比率で按分することにより各面積を推計した。

表 6-16 森林資源現況調査及び国家森林資源データベースの樹種区分

針葉樹		広葉樹	
2004年度以前	2005年度以降	2004年度以前	2005年度以降
スギ	スギ	クスギ	クスギ
ヒノキ	ヒノキ	ナラ類	ナラ
マツ類	アカマツ	その他の広葉樹	ブナ
	クロマツ		カシ
カラマツ	カラマツ		クリ
トドマツ	トドマツ		ドロノキ
エゾマツ	エゾマツ		ハンノキ
	アカエゾマツ		ニレ
その他の針葉樹	サワラ		ケヤキ
	ヒバ		カツラ
	モミ		ホオノキ
	ツガ		カエデ
	マキ		キハダ
	イチイ		シナノキ
	イチョウ		センノキ
	外来針葉樹		キリ
その他針葉樹	カンバ		
		外来広葉樹	
		その他広葉樹	

○ 転用のない森林の面積の把握

当該年度の全森林面積から「他の土地利用から転用された森林」面積の20年間の累計値を差し引くことにより算定した。その際、「他の土地利用から転用された森林」は総て人工林であると仮定した。「他の土地利用から転用された森林」の活動量の説明は、6.5.2. b) 1) を参照のこと。

表 6-17 転用のない森林面積 (20年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
転用のない森林	kha	24,501.9	24,674.1	24,714.2	24,868.5	24,853.8	24,873.8	24,877.8	24,871.3	25,088.7	25,033.6	24,829.9	24,736.6	24,809.1	24,852.3
人工林	kha	9,839.4	10,132.8	10,168.7	10,212.8	10,204.4	10,192.6	10,190.3	10,183.6	10,156.5	10,144.9	10,125.5	10,053.6	10,073.0	10,077.1
天然林	kha	13,354.5	13,220.3	13,195.2	13,315.7	13,349.6	13,360.8	13,359.5	13,355.2	13,369.3	13,380.7	13,401.4	13,389.2	13,426.2	13,441.2
無立木地	kha	1,159.0	1,171.0	1,197.4	1,186.0	1,142.8	1,161.7	1,169.0	1,170.8	1,400.6	1,355.6	1,150.0	1,146.9	1,155.2	1,167.0
竹林	kha	149.0	150.0	152.9	154.0	157.1	158.6	159.1	161.7	162.3	152.4	153.0	146.8	154.8	167.0

(出典) 林野庁「森林資源現況調査」、林野庁「国家森林資源データベース」

2) 転用のない森林における枯死有機物、土壌の炭素ストック変化量

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインに示されているデシジョンツリーに従い、Tier 3 のモデル法を用いて算定した。

枯死木、リター、鉍質土壌の炭素ストック変化量は、森林施業タイプ別に、それぞれの単位面積当たり平均炭素ストック変化量に森林施業タイプ別面積を乗じて算定した。

$$\Delta C_{dls} = \sum_{k,m,j} \{A_{k,m,j} \times (d_{k,m,j} + l_{k,m,j} + S_{k,m,j})\}$$

ΔC_{dls} : 枯死木、リター、土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

A : 面積 [ha]

d : 単位面積当たり平均枯死木炭素ストック変化量 [t-C/ha/yr]

l : 単位面積当たり平均リター炭素ストック変化量 [t-C/ha/yr]

s : 単位面積当たり平均土壌炭素ストックの変化量 [t-C/ha/yr]

k : 森林施業タイプ

m : 齢級又は林齢

j : 樹種

なお、我が国では、北海道を中心に有機質土壌が存在している。ここでは「黒泥土」と「泥炭土」の2種類の土壌区分を有機質土壌として取り扱う。我が国の場合、林業経営が厳しい状況にある中、林業用樹種の育成に適さない有機質土壌において、わざわざ排水してまで植林し、経営を行うことは考えられない。また、有機質土壌のある場所は貴重な自然環境を有する場合が多く、法律等により土地の形質の変更が規制されている。さらに森林専門家にヒアリングした結果、森林の有機質土壌における排水活動の事例は承知していないとのことであった。これらのことから総合的に判断し、我が国では、有機質土壌の森林における土壌排水は実施されていないと考えられるため、有機質土壌からのCO₂排出は「NO」として報告した。

■ 各種パラメータ

単位面積当たり平均枯死木、リター、土壌炭素ストックの変化量は、CENTURY-jfos モデルで求めた。CENTURY-jfos は CENTURY モデル（米国コロラド州立大学）を日本の森林の気候、土壌、樹種に適用できるように調整したものである。

○ CENTURY-jfos のキーとなる仮定とパラメータ

気候・立地条件によって樹木の成長量や安定的な土壌炭素蓄積量が異なると考えられるため、都道府県毎、樹種毎に気候値及び土壌炭素蓄積量の集約を行った（表 6-18）。森林が定常的に存在し利用されつつ、土壌炭素量もほぼ定常状態にあると仮定し、これらの状態をモデル上で再現するために、CENTURY-jfos では下記のパラメータ調整を行った。都道府県毎、樹種毎に算出される気候値に対応して収穫表の成長を示すように地上部の成長パラメータを調整し、60年伐期、3000年間のスピナップ（spinup）後の土壌炭素蓄積量が、Morisada et al.

(2004) から計算される都道府県毎、樹種毎の土壌炭素蓄積量に合うようにパラメータを調整した。各パラメータの調整方法は、Sakai et al. (2010) に従って行った。

CENTURY-jfos の調整について

(国研) 森林総合研究所は、CENTURY モデルを日本の森林に適用するための調整を行った。すなわち、都道府県毎に森林を樹種別（スギ、ヒノキ、マツ類、カラマツ、トドマツ、アカエゾマツ、広葉樹、その他針葉樹）に区分し、各樹種の地理的分布と土壌条件を都道府県毎に把握した。モデルを動かす気象条件はメッシュ気候値 2000（気象庁、2002）から作成した。モデルの樹木成長が収穫表による結果とほぼ一致するように樹木成長量のパラメータを調整し、さらにモデルの土壌の炭素ストック出力結果が現地調査を基にした都道府県毎、樹種毎の土壌炭素蓄積量（表 6-18）にほぼ一致するようにチューニングを行った。調整後のモデルを CENTURY-jfos モデルと名付けた。その後、CENTURY-jfos を用い、間伐などの施業が行われる場合と行われない場合の森林施業タイプ別に枯死木、リター、土壌の炭素蓄積量とそれらの変化を求めた。

生体バイオマスと同じ活動量データで算定を行うため、森林施業タイプ別に、CENTURY-jfos により算出される枯死木、リター、土壌プール毎の炭素吸収排出量を 1～19 齢級（100 年間）について計算し、それぞれのプールの単位面積あたりの年平均炭素ストック変化量とした。

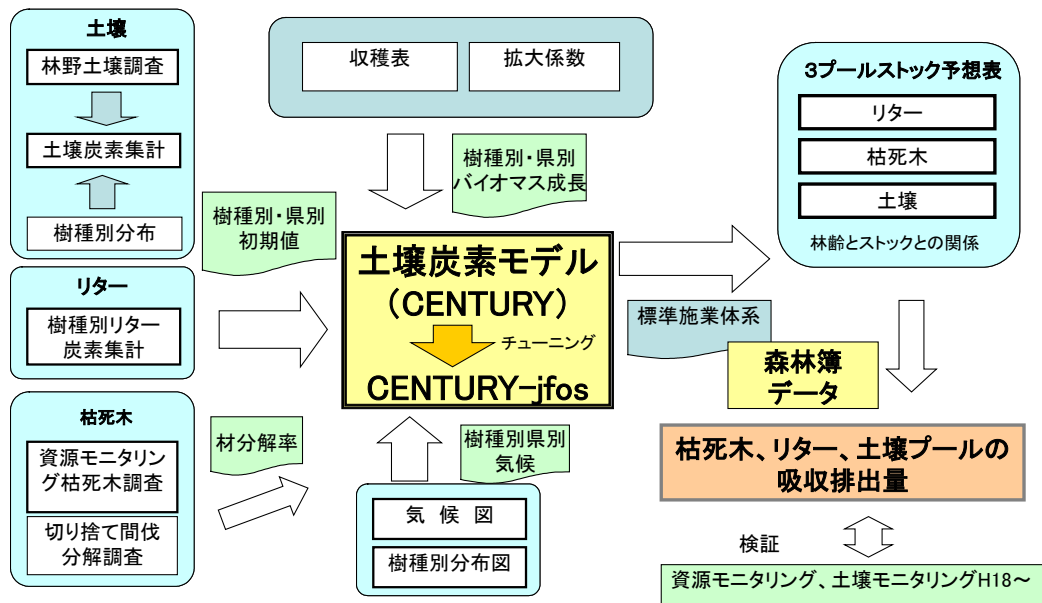


図 6-3 枯死木、リター、土壌プールの排出・吸収量の算定

表 6-18 CENTURY-jfos モデルに用いた基準土壌炭素量

県番号	都道府県	樹種 (t-C/ha [30 cm深])							
		スギ	ヒノキ	マツ類	カラマツ	トドマツ	アカエゾマツ	広葉樹	その他針葉樹
1	北海道	98.0	NA	95.0	91.0	88.0	93.7	91.0	83.5
2	青森県	92.1	NA	94.3	83.3	109.1	NA	89.0	89.8
3	岩手県	89.5	93.6	92.7	93.9	98.1	NA	91.3	93.3
4	宮城県	86.1	70.8	78.5	90.3	110.9	NA	82.8	80.5
5	秋田県	81.1	NA	72.4	81.0	108.5	NA	82.6	79.6
6	山形県	83.2	79.7	68.0	81.0	97.4	NA	74.4	76.9
7	福島県	84.3	83.7	81.1	89.3	108.6	NA	81.4	85.0
8	茨城県	84.3	83.4	97.6	NA	NA	NA	91.2	90.8
9	栃木県	83.0	86.1	91.6	100.6	133.4	NA	93.1	96.4
10	群馬県	88.7	88.3	93.9	95.1	98.1	NA	86.5	93.9
11	埼玉県	81.3	82.4	96.2	106.8	NA	NA	85.8	94.7
12	千葉県	93.9	85.7	65.6	NA	NA	NA	84.6	76.4
13	東京都	79.2	81.6	85.7	94.7	NA	NA	63.9	84.3
14	神奈川県	91.9	99.8	89.8	NA	NA	NA	94.9	99.1
15	新潟県	83.9	51.3	63.4	86.7	133.0	NA	85.3	86.9
16	富山県	90.3	NA	72.5	88.5	106.0	NA	94.5	100.2
17	石川県	82.7	80.2	70.2	NA	133.4	NA	86.6	74.3
18	福井県	88.7	85.8	79.8	NA	NA	NA	90.1	80.6
19	山梨県	93.0	93.9	98.0	99.3	NA	NA	93.9	95.6
20	長野県	102.1	100.5	96.0	108.4	106.0	NA	97.9	103.3
21	岐阜県	100.5	94.8	79.1	99.6	107.8	NA	95.8	93.9
22	静岡県	94.6	96.7	69.1	90.7	NA	NA	90.0	93.7
23	愛知県	91.2	85.0	60.1	NA	NA	NA	78.5	77.2
24	三重県	92.1	84.4	63.8	97.1	NA	NA	78.7	80.5
25	滋賀県	83.5	73.0	59.6	NA	NA	NA	79.5	65.8
26	京都府	74.0	67.4	63.3	NA	NA	NA	66.4	64.6
27	大阪府	78.9	74.0	60.9	NA	NA	NA	67.5	66.0
28	兵庫県	88.3	71.8	53.0	123.6	NA	NA	63.4	61.9
29	奈良県	79.6	69.8	65.5	NA	NA	NA	73.4	69.4
30	和歌山県	72.1	70.5	58.2	NA	NA	NA	62.8	69.9
31	鳥取県	73.8	74.9	75.6	121.2	NA	NA	72.3	75.4
32	島根県	69.0	66.6	61.2	77.3	NA	NA	64.6	63.2
33	岡山県	80.3	73.7	51.4	121.2	NA	NA	65.2	63.6
34	広島県	74.0	71.8	54.0	71.2	NA	NA	65.0	58.7
35	山口県	64.9	60.9	49.3	NA	NA	NA	55.2	54.8
36	徳島県	72.9	63.7	63.6	NA	NA	NA	66.7	63.7
37	香川県	57.7	61.9	56.6	NA	NA	NA	57.2	57.7
38	愛媛県	80.1	75.1	63.2	85.4	NA	NA	67.4	74.1
39	高知県	81.4	76.1	73.8	NA	NA	NA	74.1	76.2
40	福岡県	97.3	88.9	77.5	NA	NA	NA	86.5	88.3
41	佐賀県	83.6	83.0	69.1	NA	NA	NA	79.6	82.9
42	長崎県	82.9	84.5	82.6	NA	NA	NA	78.9	84.5
43	熊本県	108.7	96.0	79.3	NA	NA	NA	93.5	95.6
44	大分県	109.9	100.5	108.3	130.3	NA	NA	99.1	101.4
45	宮崎県	106.1	102.0	93.7	NA	NA	NA	98.0	99.6
46	鹿児島県	108.4	102.4	75.7	NA	NA	NA	90.8	97.0
47	沖縄県	58.5	NA	58.9	NA	NA	NA	58.0	58.5

■ 活動量（面積）

CENTURY-jfos モデルに入力される活動量として、国家森林資源データベースの森林面積を算定に適用した。なお、参考値として土壌図及び有機質土壌の県別分布状況より森林の有機質土壌面積を推計した。ただし、わが国では、有機質土壌の土地は天然林のみに存在することから、全ての有機質土壌面積を天然林で報告し、人工林、竹林、無立木地の有機質土壌面積は「NO」として報告した。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

生体バイオマスに関するパラメータ及び活動量の不確実性については、現地調査データ、専門家判断、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。枯死有機物及び土壌に関しては、CENTURY-jfos モデル出力値の分散を求めることにより不確実性を評価した。その結果、転用のない森林による吸収量全体の不確実性は13%と評価された。主な個別のパラメータに対する不確実性の推計値を表 6-19 に示す。

表 6-19 森林カテゴリーの主なパラメータに対する不確実性の推計値

		不確実性 [%]	我が国独自の値 (CS) 又は デフォルト値 (D)	備考	
森林面積		5.9	CS	国家森林資源データベースの土地面積に関する不確実性を元に推計 樹種を区別せずに5.9%を使用	
単位面積当たり材積		22.0	CS	森林簿の収穫表と現地調査結果の比較を元にした分析より推計	
バイオマス 拡大係数	スギ	≤20	3.5	CS	測定値を元に推計
		>20	1.1	CS	
	ヒノキ	≤20	3.2	CS	
		>20	1.6	CS	
	ナラ	≤20	8.6	CS	
		>20	2.1	CS	
容積密度	スギ		2.5	CS	
	ヒノキ		1.7	CS	
	ナラ		1.6	CS	
炭素含有率	全樹種	6.0	D	2006年 IPCC ガイドラインで示された 数値幅を踏まえて設定値を使用	
枯死木	全森林	22.1	CS	CENTURY-jfos モデルの不確実性分析 の結果	
リター		51.0			
土壌		19.9			

■ 時系列の一貫性

活動量である森林面積は、1991～1994年度、1996～2001年度、2003～2004年度のデータが存在しないため、当該年度の森林面積は内挿により推計し、時系列の一貫性を確保している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

■ AR 面積の修正に伴う再計算

転用のない森林における人工林の面積推計の元データとして用いている新規植林・再植林の面積 (AR 面積) の修正に伴い、転用のない森林における人工林の面積を再計算した。この面積の再計算に伴い、1990年度～2017年度の転用のない森林の人工林における生体バイオマス、枯死有機物、及び鉱質土壌の炭素ストック変化量が再計算された。新規植林・再植林の面積把握方法の修正の詳細については、本 NIR の第11章第11.5.1.7節の「AR 面積及び D 面積の見直し」を参照のこと。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

6.5.2. 他の土地利用から転用された森林 (4.A.2)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、他の土地利用から転用された森林（20年以内に他の土地利用から転用されて森林になった土地）における炭素ストック変化量を取り扱う。2018年度における当該カテゴリーのCO₂純吸収量は934kt-CO₂であり、1990年度比86.0%の減少、前年度比7.1%の減少となっている。1990年度以降の当該吸収量は植林面積の減少により一貫して減少傾向にある。この減少傾向の原因は、我が国における林業採算性が悪化していることにより、新規に造林面積を拡大する林業経営者数が少なくなったためと推測される。

b) 方法論

1) 他の土地利用から転用された森林における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

他の土地利用から転用された森林における炭素ストック変化量 (ΔC_{LF}) については、Tier 2の方法では、転用に伴い失われるバイオマス蓄積量 (ΔC_L) と転用後に蓄積される年間バイオマス蓄積変化量 (ΔC_F) を合算して算定することになっている。国家森林資源データベースでは、「転用のない森林」と「他の土地利用から転用された森林」における転用後の生体バイオマス炭素ストック変化を一括して扱っており、転用後の植林に伴う吸収量のみを切り分けるのは困難である。一方、別途推計を行っている京都議定書第3条3における新規植林・再植林 (AR) 活動の対象森林と「他の土地利用から転用された森林」の性質は大きくは変わらないと考えられる。このため、 ΔC_F については、当該カテゴリーの面積にAR活動の単位面積当たり吸収量を乗じて求めた。なお、 ΔC_F は、CRFの「田から転用された森林」にて一括して報告しているが、 ΔC_L は土地利用区分毎に報告した。転用前の生体バイオマスストック量は農地（田、普通畑）及び草地からの転用に伴い失われるバイオマス炭素量について算定し、ゼロと仮定されている湿地、開発地、及びその他の土地からの転用に伴う損失は「NA」と報告した。

$$\Delta C_{LF} = \Delta C_L + \Delta C_F$$

$$\Delta C_L = \sum_i \{A_i \times (B_a \times CF_a - B_{bi} \times CF_{bi})\}$$

$$\Delta C_F = A_{LF} \times IEF_{AR}$$

ΔC_{LF} : 他の土地利用から転用された森林における炭素ストック変化量 [t-C/yr]

ΔC_L : 他の土地利用から転用された際の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

ΔC_F : 転用後20年以内にあった炭素ストック変化量 [t-C/yr]

i : 転用前の土地利用カテゴリー

A_i : 当該年に土地利用カテゴリー*i*から森林に転用された面積 [ha/yr]

B_a : 森林に転用された直後の単位面積当たり乾物重 [t-d.m./ha]、デフォルト値=0

B_{bi} : 森林に転用される前の土地利用カテゴリー*i*における単位面積当たり乾物重 [t-C/ha]

A_{LF} : 過去20年に転用された森林面積 [ha]

IEF_{AR} : AR活動における単位面積当たり吸収量（見かけの吸収係数に相当） [t-C/ha/yr]

CF_a : 転用後の土地利用カテゴリーの炭素含有率（森林） [t-C/t-d.m.]

CF_{bi} : 転用前の土地利用カテゴリーの炭素含有率 [t-C/t-d.m.]

■ 各種パラメータ

○ 新規植林・再植林活動における単位面積あたり吸収量

2008～2010年度のAR活動における単位面積あたり吸収量の平均値(3.0t-C/ha)を、全ての年に適用した。本値に使用するAR面積及び吸収量の値については第一約束期間確定の報告値を固定で用いる。

○ 土地転用前の生体バイオマスストック量

表6-8aの転用前の農地及び草地のパラメータを用いた。なお、農地は炭素量換算でパラメータを設定した。

○ 炭素含有率(CF)

森林の炭素含有率は我が国の針葉樹と広葉樹の平均値(0.50 t-C/t-d.m.)を用いた。草地の炭素含有率は、2006年IPCCガイドラインに従い、デフォルト値0.47 t-C/t-d.m.を用いた。

■ 活動量(面積)

他の土地利用から転用された森林の単年度面積の過去20年間分の積算値を、過去20年以内に他の土地利用から森林に転用された土地面積とした。各土地利用カテゴリーからの単年度転用面積の把握方法を以下に示す。

○ 他の土地利用から転用された森林の面積

他の土地利用から転用された森林の面積には、論理的にはAR面積のほか、荒廃地等において自然遷移により森林が回復した土地や、その他の理由により土地利用カテゴリーが「森林」に変更された土地の面積が含まれると考えられる。ただし、我が国の場合、自然遷移により森林化した場所が、表6-2にある森林法第5条及び第7条2に基づく森林計画対象森林と行政的に整理されることは一般的にはなく、森林以外の土地のままで区分されている。

このため、「他の土地利用から転用された森林」の面積はAR面積に近い値を取るとみなし、2006年IPCCガイドライン第1巻5.3.3.1節に時系列一貫性と再計算のアプローチとして記載されている「重複」手法の概念に準拠し、「耕地及び作付面積統計」における農地への植林面積とAR面積を用いて把握した。

AR面積は1989年末の空中写真オルソ画像及び2005年度以降撮影の衛星画像を用いて詳細に把握されているため、2005年度以降の他の土地利用から転用された森林の単年度面積については、単年度に発生したAR面積を用いた。AR面積の把握方法の詳細は、第11章の11.4.2.3節を参照のこと。

空中写真判読による情報の得られない2005年度以前の他の土地から転用された森林面積について1990～2004年度の推計方法とそれ以前の1971～1989年度の推計方法が異なるため分けて推計を行う。

【1990年度から2004年度まで】

1990～2004年度の他の土地利用から転用された森林の各年度面積については、1989年度末の空中写真オルソ画像と2005年撮影の衛星画像判読により把握した2005年度におけるAR総面積を各年度に平均的に配分し、他の土地利用から転用された森林の単年度面積とした。

【1971年度から1989年度まで】

1971～1989年度の他の土地から転用された森林の各年度面積については、「世界農林業センサス」から得られる森林面積及び森林減少面積の統計値を用いて推計した。また、土地利用別の転用面積把握のために「耕地及び作付面積統計」を補助データとして用いた。算出方法の具体的手順は下記の通り。

①1970年、1980年、1990年の森林面積統計値を用い、1970～1980年、1980～1990年にかけての森林面積変化量を計算する。

②同期間の森林減少面積統計値と①で求めた森林面積変化量から、10年間の間に森林に転用された面積を計算する。

③統計値による農用地の植林面積（「耕地及び作付面積統計」）を10年分合計し、②で求めた森林に転用された合計面積との差を取り、それを農用地以外への植林面積とみなす。

④③の計算で1970～1979年、1980～1989年の農用地への10年累計植林面積と、農用地以外への10年累計植林面積が求められることから、その比率をとり、それぞれ1970～1979年、1980～1989年の期間における毎年の農用地植林面積の統計値に対してその比率を乗じ、農用地以外への毎年の植林面積を推計した。

○ 農地及び草地から転用された森林の面積

2004年度以前の農地から転用された森林面積は、「耕地及び作付面積統計」における田畑への植林面積を用いた。その内訳として、農地から転用された森林面積は田から転用された森林、普通畑から転用された森林、及び樹園地から転用された森林に分類される。田から転用された森林面積は「耕地及び作付面積統計」における田への植林面積を用い、普通畑から転用された森林面積及び樹園地から転用された森林面積は「耕地及び作付面積統計」における畑への植林面積を現行の普通畑、樹園地、牧草地の面積割合を用いて按分することで推計した。

また、草地から転用された森林面積は、「耕地及び作付面積統計」から推計した牧草地への植林面積と農林水産省「農地の移動と転用」における採草放牧地での植林面積を合計することで算定した。

2005年度以降の農地及び草地から転用された森林の面積は、KP-LULUCFにおけるAR面積の把握方法を用いて把握したAR各年度面積に、各年度のAR判読プロット総数のうち農地及び草地から転用されたと判読されたプロット数のパーセントを乗じてそれぞれ面積を算定した。

○ 湿地、開発地及びその他の土地から転用された森林の面積

2004年度以前の湿地、開発地及びその他の土地から転用された森林の面積は、統計からデータを直接入手できないため、「他の土地利用から転用された森林の総面積」から、「農地から転用された森林」及び「草地から転用された森林」の面積を差し引き、差分の面積にAR判読結果の傾向を基にした湿地、開発地、その他の土地から森林に転用された面積の割合を乗じることで算定した。

2005年度以降の湿地、開発地及びその他の土地から転用された森林の面積は、KP-LULUCFにおけるAR面積の把握方法を用いて把握したAR各年度の面積に、各年度のAR判読プロット総数のうち湿地、開発地及びその他の土地から転用されたと判読されたプロット数のパーセントを乗じてそれぞれ面積を算定した。

表 6-20 他の土地利用から転用された森林の面積（単年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された森林	kha	4.89	4.89	4.89	4.89	3.24	3.24	2.73	2.73	0.97	0.97	0.84	0.84	0.09	0.09
農地から転用された森林	kha	2.71	1.22	1.08	0.57	1.64	1.64	1.30	1.30	0.51	0.51	0.22	0.22	0	0
田	kha	0.92	0.47	0.41	0.17	0.67	0.70	0.47	0.47	0.19	0.18	0.07	0.08	0	0
普通畑	kha	1.31	0.57	0.51	0.31	0.76	0.74	0.66	0.66	0.26	0.27	0.12	0.12	0	0
樹園地	kha	0.49	0.19	0.15	0.09	0.21	0.20	0.17	0.17	0.07	0.07	0.030	0.03	0	0
草地から転用された森林	kha	0.67	0.31	0.28	0.17	0.87	0.87	1.01	1.01	0.24	0.24	0.43	0.43	0.08	0.08
湿地から転用された森林	kha	NO	NO	NO	NO	NO	NO	0.03	0.03	0.01	0.01	NO	NO	NO	NO
開発地から転用された森林	kha	0.75	1.68	1.77	2.07	0.58	0.58	0.34	0.34	0.14	0.14	0.14	0.14	0.01	0.01
その他の土地から転用された森林	kha	0.75	1.68	1.77	2.07	0.16	0.16	0.05	0.05	0.07	0.07	0.04	0.04	NO	NO

（出典）：林野庁「森林資源現況調査」、林野庁「国家森林資源データベース」

表 6-21 他の土地利用から転用された森林の面積 (20年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された森林	kha	448.4	222.8	161.9	123.7	94.1	92.5	90.3	88.1	84.2	80.3	76.3	72.2	67.4	62.6
農地から転用された森林	kha	121.9	57.7	40.6	30.0	29.4	28.3	27.2	26.7	25.8	24.9	23.9	23.0	21.8	20.6
田	kha	53.8	23.7	15.9	11.0	11.3	11.1	10.7	10.5	10.0	9.7	9.3	8.9	8.4	8.0
普通畑	kha	46.8	23.7	17.7	14.0	13.7	13.2	12.7	12.6	12.2	11.9	11.4	11.0	10.5	9.9
樹園地	kha	21.4	10.3	6.9	4.9	4.3	4.0	3.8	3.7	3.5	3.4	3.2	3.1	2.9	2.7
草地から転用された森林	kha	19.3	11.6	9.0	7.3	8.3	8.5	8.9	9.5	9.4	9.3	9.5	9.6	9.4	9.2
湿地から転用された森林	kha	NO	NO	NO	NO	0.03	0.03	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
開発地から転用された森林	kha	153.6	76.7	56.1	43.2	29.1	29.0	28.3	27.3	25.9	24.5	22.9	21.4	19.7	18.0
その他の土地から転用された森林	kha	153.6	76.7	56.1	43.2	27.3	26.7	25.8	24.5	23.0	21.5	19.8	18.2	16.4	14.7

(出典)：林野庁「森林資源現況調査」、林野庁「国家森林資源データベース」

2) 他の土地利用から転用された森林における枯死有機物、土壌の炭素ストック変化量

■ 算定方法

枯死木、リター及び鋳質土壌の炭素ストックは、森林以外の土地利用の炭素ストックから森林土壌の炭素ストックに 20 年かけて直線的に変化するものとして算定した。算定は CENTURY-jfos モデルで得られた平均炭素ストック量を用いて実施した。当該カテゴリーの有機質土壌からの排出は、転用のない森林と同様に「NO」として報告した。

$$\Delta C_{LF_i} = A_i \times (C_{after} - C_{before_i}) / 20$$

ΔC_{LF_i} : 他の土地利用 i から転用された森林における枯死木、リター又は土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

A_i : 過去 20 年間に他の土地利用 i から森林に転用された面積 [ha]

C_{after} : 転用後の土地利用 (森林) における枯死木、リター又は土壌の平均炭素ストック量 [t-C/ha]

C_{before_i} : 転用前の土地利用 i における枯死木、リター又は土壌の平均炭素ストック量 [t-C/ha]

i : 転用前の土地利用

■ 各種パラメータ

表 6-9 (枯死木)、表 6-10 (リター)、表 6-11 (土壌) の転用前の農地、草地、湿地、開発地、その他の土地、及び転用後の森林のパラメータを用いた。

■ 活動量 (面積)

他の土地利用から転用された森林の面積は表 6-21 を参照のこと。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

生体バイオマス、枯死有機物、及び土壌に関する不確実性は、各パラメータ及び活動量ごとに、現地調査データ、専門家判断、または 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。その結果、他の土地利用から転用された森林による吸収量全体の不確実性は 13% と評価された。

■ 時系列の一貫性

当該カテゴリーの時系列の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施して

いる。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

■ AR 面積の修正に伴う再計算

6.5.1.e) で詳述した通り、AR 面積の修正に伴う他の土地利用から転用された森林面積の再計算を行った。これに伴い 1990 年度~2017 年度当該カテゴリーの生体バイオマス、枯死有機物、及び土壌の炭素ストック変化量を再計算した。

■ 転用前の単年生作物バイオマスストック量の修正に伴う再計算

単年生作物のバイオマスストック量の設定値を変更したため、農地から他の土地への転用が生じた際のバイオマス損失量に変更となり、農地から転用された森林における生体バイオマスの炭素変化量は全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

■ 農地及び草地から転用された森林の土壌炭素ストック変化量

普通畑、樹園地及び牧草地から転用された森林面積は、農地から森林への転用面積に普通畑、樹園地及び牧草地の各面積比率を乗じることによって各転用面積を推計しているが、実態を反映していない可能性がある。このため、推計の妥当性や面積把握方法の精度向上は将来的な課題である。

6.6. 農地 (4.B)

農地に該当する土地は、一年生及び多年生の作物を生産している土地であり、一時的に休耕地になっている土地も含む。我が国のインベントリにおける農地は田、普通畑、樹園地、耕作放棄地によって構成されている。

2018 年度における我が国の農地面積は約 424 万 ha であり、国土面積の約 11.2% を占めている。そのうち有機質土壌面積は 21.8 万 ha である。2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 3,530 kt-CO₂ であり、1990 年度比 69.8% の減少、前年度比 10.8% の減少となっている。(ただし、以下の炭素ストック変化以外の GHG 排出分は除く。有機質土壌の排水に伴う非 CO₂ 排出量 35.2 kt-CO₂ 換算、土地利用変化・管理変化に伴う無機化された窒素からの N₂O 排出量 7.1 kt-CO₂ 換算、バイオマス燃焼に伴う CH₄、N₂O 排出量 20.6 kt-CO₂ 換算)

本節では農地を「転用のない農地 (4.B.1.)」及び「他の土地利用から転用された農地 (4.B.2.)」のカテゴリーに区分し、以下の小節においてその 2 つのカテゴリーについて別個に記述する。

表 6-22 農地における炭素ストック変化量に起因する排出・吸収量

ガス	カテゴリー	炭素プール	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO ₂	4.B. 農地	合計	kt-CO ₂	11,697	5,436	34	2,266	8,007	5,503	5,908	4,929	3,658	4,422	4,350	4,831	3,956	3,530
		生体バイオマス	kt-CO ₂	1,371	456	216	230	339	302	288	269	200	201	252	254	163	190
		枯死木	kt-CO ₂	299	60	19	30	46	46	43	42	27	26	26	26	9	8
		リター	kt-CO ₂	144	29	9	15	22	22	21	21	13	13	13	13	4	4
		鉱質土壌	kt-CO ₂	8,231	3,251	-1,834	375	5,986	3,520	3,946	2,984	1,804	2,567	2,444	2,924	2,161	1,702
		有機質土壌	kt-CO ₂	1,653	1,640	1,624	1,617	1,613	1,612	1,611	1,612	1,614	1,615	1,615	1,615	1,619	1,625
	4.B.1. 転用のない農地	合計	kt-CO ₂	10,098	5,100	-67	2,102	7,767	5,278	5,699	4,713	3,550	4,306	4,225	4,700	3,928	3,507
		生体バイオマス	kt-CO ₂	280	245	157	121	177	154	151	127	144	137	179	175	167	205
		枯死木	kt-CO ₂	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		リター	kt-CO ₂	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		鉱質土壌	kt-CO ₂	8,231	3,251	-1,834	375	5,986	3,520	3,946	2,984	1,804	2,567	2,444	2,924	2,161	1,702
		有機質土壌	kt-CO ₂	1,588	1,603	1,609	1,606	1,604	1,603	1,602	1,602	1,602	1,602	1,602	1,601	1,600	1,599
	4.B.2. 他の土地から転用された農地	合計	kt-CO ₂	1,598	337	101	164	239	226	209	216	108	116	125	131	28	23
		生体バイオマス	kt-CO ₂	1,091	211	59	109	161	148	137	142	56	63	73	79	-3	-15
		枯死木	kt-CO ₂	299	60	19	30	46	46	43	42	27	26	26	26	9	8
		リター	kt-CO ₂	144	29	9	15	22	22	21	21	13	13	13	13	4	4
		鉱質土壌	kt-CO ₂	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
		有機質土壌	kt-CO ₂	65	37	15	11	9	9	9	11	13	13	14	14	19	26

6.6.1. 転用のない農地（4.B.1）

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、転用のない農地（過去 20 年間に於いて転用されず、継続して農地であった土地）における炭素ストック変化量を取り扱う。2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 3,507 kt-CO₂ であり、1990 年度比 65.3% の減少、前年度比 10.7% の減少となっている。（炭素ストック変化以外の GHG 排出分は除く。）本カテゴリーの排出・吸収量の増減傾向に寄与しているのが、鉱質土壌における炭素ストック変化量の増減である。2018 年度における鉱質土壌からの CO₂ 排出量は 1,702 kt-CO₂ であり、1990 年度比 79.3% の減少、前年度比 21.2% の減少となっている。

この増減傾向については、1990 年以降、2003 年までは排出減少傾向にあり一時は吸収にまで転じたが、2004 年に再び排出に転じてからは、一時的な排出減少は見られるものの、排出が増加した。それ以降は再び排出減少傾向にある。時系列的な変動は、土壌への炭素投入量（特に堆肥由来の炭素量）と気象（特に気温）の年次変動による影響が考えられる。鉱質土壌の炭素ストック変化は後述の通りモデル算定により実施されており、各都道府県の総和で国レベルの変動が生ずる。ただし、農地の 3 つの地目のうち、特に普通畑による年次変動が大きく、わが国の普通畑の 1/4 以上の面積を占める北海道における変動が日本全体への炭素ストック変化に対して比較的大きな影響を与えることが分かっている。また、全体的な炭素増減の傾向はほぼ堆肥の施用量の全体傾向に連動し、作物の各年の収穫量の変動が更なる細かな年次変動として効いている傾向が見受けられる。

生体バイオマスについては、2006 年 IPCC ガイドラインに従い樹園地における木本性永年作物のみを対象とし、バイオマス変化量の算定を行った。

枯死有機物の炭素ストック変化については、2006 年 IPCC ガイドライン第 4 巻 5.2.2.1 の記載に従い、当該炭素ストック量が変化しないと想定している Tier 1 を適用し、ゼロと推計した。従って当該炭素ストック変化量は「NA」として報告した。

鉱質土壌の炭素ストック変化量については、土壌炭素動態モデル Roth C (Rothamsted Carbon Model) を用いた Tier 3 で水田、普通畑及び樹園地における炭素ストック変化量を算定した。

加えて、バイオ炭の農地への施用に伴う農地土壌における炭素貯留量の変化を算定した。2018年度のバイオ炭の炭素貯留効果による排出削減量は 5.02 kt-CO₂ である。有機質土壌からのCO₂ 排出については、水田及び普通畑における有機質土壌の耕起に伴う排出 (on-site) 及び有機質土壌の水溶性炭素による排出 (off-site) を算定対象とした。樹園地・耕作放棄地における有機質土壌の耕起及び排水は実施されないため、「NO」として報告した。

過去 20 年間転用のない農地の面積を表 6-23 に示した。本表面積には、鉱質及び有機質土壌の両方の面積を含んでいる。

表 6-23 転用のない農地の面積 (20 年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
転用のない農地	kha	4,597	4,463	4,417	4,385	4,346	4,339	4,317	4,312	4,305	4,295	4,279	4,258	4,228	4,199
水田	kha	2,768	2,707	2,628	2,545	2,493	2,484	2,462	2,453	2,446	2,438	2,426	2,412	2,394	2,377
普通畑	kha	1,186	1,140	1,119	1,136	1,150	1,154	1,152	1,152	1,150	1,146	1,142	1,139	1,131	1,124
樹園地	kha	426	371	328	318	308	306	303	300	296	293	289	284	280	274
耕作放棄地	kha	217	244	343	386	394	396	401	407	412	418	423	423	423	423

b) 方法論

1) 転用のない農地 (樹園地) における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

生体バイオマスについては木本性永年作物のみ算定対象となるため、農地のうち樹園地のみ算定対象とした。2006 年 IPCC ガイドライン第 4 巻 5.2.1.1 節に記載されている Tier 2 の Method 2 (蓄積変化法) を用いて樹園地の生体バイオマスの炭素ストック変化量を算定した。

生体バイオマスの炭素ストック量は、果樹別の栽培面積に、各果樹 1 本当たりの乾物重、植栽密度、乾物重当たりの炭素含有率を乗じて算定し、地上部に対する地下部の比率を用いて、地上バイオマスと地下バイオマス別に配分した。炭素含有率以外のパラメータは果樹種類ごとに設定した。

$$\Delta C = C_{t+1} - C_t$$

$$C_t = \sum_j (A_{t,j} \times D_j \times W_j) \times 10/1000 \times CF$$

(注) 10/1000 を乗じているのは、単位変換のため

- ΔC : 樹園地の生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]
- C_t : t 年における樹園地の生体バイオマスの炭素ストック量 [t-C]
- A_t : t 年における果樹栽培面積 [ha]
- D : 植栽密度 [本/10a]
- W : バイオマス乾物重 [kg/本]
- CF : 乾物重当たりの炭素含有率 [t-C/t-d.m.]
- j : 果樹種類

■ 各種パラメータ

果樹別の植栽密度、バイオマス乾物重量、地上部に対する地下部の比率は、国内文献情報を元に、2006 年 IPCC ガイドラインにおける Tier 2 の記載に従い、主要な果樹に対して独自の値を設定した。茶のバイオマス乾物重は 48 t-d.m./ha、果樹のバイオマス乾物重は 8~24 t-d.m./ha、地上部：地下部比率は 7:3~5:4 である。炭素含有率は我が国の森林 (広葉樹) の炭素含有率 0.48 t-C/t-d.m. を一律に適用した。

■ 活動量（栽培面積の変化量）

「耕地及び作付面積統計」より把握した主要果樹 15 品目の都道府県別栽培面積、及び「特産果樹生産出荷実績調査」より把握した主要果樹以外の果樹の栽培面積を用い、前年との差を果樹栽培面積の変化量として把握した。新植、廃園などの移動の数値を種別に把握できないため種別ごとの移動の結果としての面積の変化量を活動量に用いている。よって、本活動量（面積）には他の土地から転用された樹園地の面積も含んでいる。

2) 転用のない農地における土壌の炭素ストック変化量

■ 算定方法

○ 鈹質土壌の炭素ストック変化量

鈹質土壌の炭素ストック変化は土壌炭素動態モデル Rothamsted Carbon Model（以下、Roth C）に基づいて、日本全国の農耕地における土壌有機炭素量の経年変化を Tier3 法で計算することにより、鈹質土壌からの CO₂ 排出・吸収量の算定を行っている。

図 6-4 は Roth C モデルの概念図である。Roth C モデルは長期の圃場における実測データを用いて検証された土壌炭素動態モデルであり（Coleman and Jenkinson, 1996）、日本の農耕地への適用に当たり、我が国の農耕地における長期連用試験結果を踏まえたテストを実施している。その結果、非火山灰土の農耕地については元々のモデルが特に修正やキャリブレーションなく適用できることが分かったが（Shirato and Taniyama, 2003）、黒ボク土及び水田についてはその土壌の特性から修正が必要なが判明し、必要な改良を施した上で土壌有機炭素ストック変化量を推計している。黒ボク土については、アルミニウム-腐植複合体の存在により土壌有機物が安定で分解が生じにくくなる特性があることから、Roth C の腐植（humified organic matter, HUM）プールの分解率を小さく設定している（Shirato et al., 2004）。水田については、水稻成長期に水を張ることから、普通畑とは土壌有機物の分解率が異なり、Roth C のすべてのプールの分解率を小さく設定している（Shirato and Yokozawa, 2005）。

Roth C 算定に必要な地理的位置情報を含む土地利用面積データと、GHG インベントリで公式に用いている統計値由来の土地利用面積データが完全に一致しないことから、GHG インベントリでは、Roth C モデルによる炭素ストック変化量の算定結果を直接利用するのではなく、Roth C により、都道府県別地目（田、普通畑、樹園地、牧草地）別の単位面積あたりの土壌炭素ストック平均変化率を算出し、これを統計で把握される都道府県別地目別の鈹質土壌面積に掛け合わせることで、鈹質土壌炭素変化量 [t-C/year] を算出した。

このモデル算定では、土地転用の履歴も含み、1970 年以降に一度でも農地になった土地をすべて計算の地理的範囲に含めているため、算出された結果は、転用の有無にかかわらず全ての農地を含むことになる。したがって、転用の有無で区別することなく報告することとし、他の土地利用から転用された農地における土壌の炭素ストックを含んで本算定で報告している。算定式は以下のとおりである。

$$\Delta C_{national} = \sum_{i,j} (\Delta SOC_{i,j} \times A_{i,j})$$

$\Delta C_{national}$: 鈹質土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

SOC : 都道府県 i の地目 j における単位面積当たり土壌炭素変化量 [t-C/ha/yr]、Roth C より計算

A : 統計値で把握される都道府県 i の地目 j の農地面積（鈹質土壌）[ha]

i : 都道府県

j : 地目

○ バイオ炭の農地施用に伴う土壌の炭素ストック量の変化

バイオ炭の農地への施用に伴う土壌炭素ストック量の変化については、2006年 IPCC 国家温室効果ガスインベントリガイドラインの2019年改良（以下、2019年改良 IPCC ガイドライン）で提示された Tier 1 の方法論を用いて算定を行った。

算定対象とするバイオ炭はデータの入手性を踏まえ、国内で製造されている白炭、黒炭、竹炭、粉炭、オガ炭とした。なお、地目別のバイオ炭施用量の情報は入手できないため、転用のない農地の鉱質土壌に一括して報告した。算定式は以下のとおりである。

$$\Delta BC_{Mineral} = \sum_p (BC_{TOTp} \times F_{Cp} \times F_{perm_p})$$

$\Delta BC_{Mineral}$: バイオ炭施用に伴う鉱質土壌の炭素ストック変化 [t-C/yr]

BC_{TOTp} : 当該年に鉱質土壌耕地に施用されたバイオ炭 p の量 [t-d.m/yr]

F_{Cp} : バイオ炭 p の炭素含有率 [t-C/t-d.m]

F_{perm_p} : バイオ炭 p の 100 年後残存率 [t-C/t-C]

p : バイオ炭の種類（白炭、黒炭、竹炭、粉炭、オガ炭）

○ 有機質土壌の耕起・排水に伴う CO₂ 排出量

有機質土壌からの二酸化炭素排出量の算定については、水田及び普通畑における有機質土壌の耕起に伴う排出（on-site）及び有機質土壌の水溶性炭素による排出（off-site）を算定対象とした。

【有機質土壌の耕起に伴う CO₂ 排出量（on-site）の算定】

水田、普通畑における有機質土壌の耕起に伴う CO₂ 排出量炭素ストック変化量は、2006年 IPCC ガイドライン第4巻 5.2.3.1 節に記載されている Tier 1、及び Tier 2 の算定方法を用いて算定した。また我が国独自の排出係数が適用できる土地利用区分においては Tier 2 を用いた。算定式は以下のとおりである。

$$\Delta C_{os} = \sum_c (A \times EF)_c$$

ΔC_{os} : 有機質土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

A : 有機質土壌面積 [ha]

EF : CO₂ 排出係数 [t-C/ha/yr]

c : 気候帯

【有機質土壌における水溶性炭素由来の CO₂ 排出量（off-site）】

水田、普通畑における排水された有機質土壌における水溶性炭素損失による CO₂ 排出量は湿地ガイドライン 2.2.1.2 節に記載されている Tier 1 の算定方法を用いて算出した。算定式は以下のとおりである。

$$CO_2 - C_{DOC} = \sum (A \times EF_{DOC})$$

$$EF_{DOC} = DOC_{FLUX_NATURAL} \times (1 + \Delta DOC_{DRAINAGE}) \times F_{rac_{DOC-CO_2}}$$

$CO_2 - C_{DOC}$: 有機質土壌からの水溶性炭素損失による CO₂-C 排出 [t-C/yr]

A : 有機質土壌面積 [ha]

EF_{DOC}	: DOC 由来の排出係数 [t-C/ha]
$DOC_{FLUX_NATURAL}$: 排水を行っていない状態のバックグラウンドの排出 [t-C/ha/yr]
$\Delta DOC_{DRAINAGE}$: 排水を行っていない状態から排水された状態に変化した場合のフラックス増加割合
$Frac_{DOC_CO2}$: 対象地から移送される水溶性炭素のうち、CO ₂ として排出される割合

■ 各種パラメータ

○ 鉱質土壌の算定を行った Roth C モデルのキーとなる仮定とパラメータ

図 6-4 に示した通り、Roth C モデルは、気象データ（月別平均気温、降水量及び水面蒸発量）、土壌特性データ（土壌粘土含量、作土深、初期の炭素含有率、仮比重）、土地利用データなどのパラメータ及び作物残さ・堆肥からの炭素投入量を入力データとして土壌の炭素を分解率の異なる 5 つのコンパートメントに分けて土壌炭素量の変化を月ごとに計算する。このモデルを全国に適用するに当たり、気象データは 1km メッシュ、土壌特性データ及び土地利用データは 100m メッシュ、炭素投入量は都道府県別、地目別（田、普通畑、樹園地、牧草地）に、既存の統計資料、地図データ及び調査データを用いて入力データを整備した。気象データ、土壌特性データ及び土地利用データについて空間的なデータセットとして利用可能であり、一方作物残さ及び堆肥からの投入量は都道府県の行政界基準に基づいて入手可能な統計データ及び調査データによって計算されている。作物残さの投入量は、都道府県別の各作物の収穫量（統計データ）に各種係数を乗じて農作物残さのうち土壌に還元される量を算定している。地目別の堆肥投入量については、統計データから得られないため、1980 年、1985 年、1990 年、1995 年、2000 年、2010 年を対象とするアンケート調査における作物別（水稲、畑作物、野菜、果樹、茶、飼料作、牧草）堆肥施用量（全国共通値）から求めている。

モデルは整備されている入力データを使用し、全国土を網羅する約 100m×100m のメッシュごとに、地目別単位面積あたりの土壌炭素量 (t-C/ha) が毎月計算され、月別の値の合計が当該年度の値となる。前年度との当該年度の土壌炭素量の差がその年度の単位面積あたりの土壌炭素変化量 (t-C/ha/year) となり、メッシュごとの単位面積あたりの土壌炭素変化量と都道府県行政界と重ねあわせることにより、都道府県別地目別の単位面積あたりの土壌炭素変化量 (t-C/ha/year) を得ている。

ローザムステッド・カーボン・モデル (ロスシー)
Rothamsted Carbon Model (RothC)

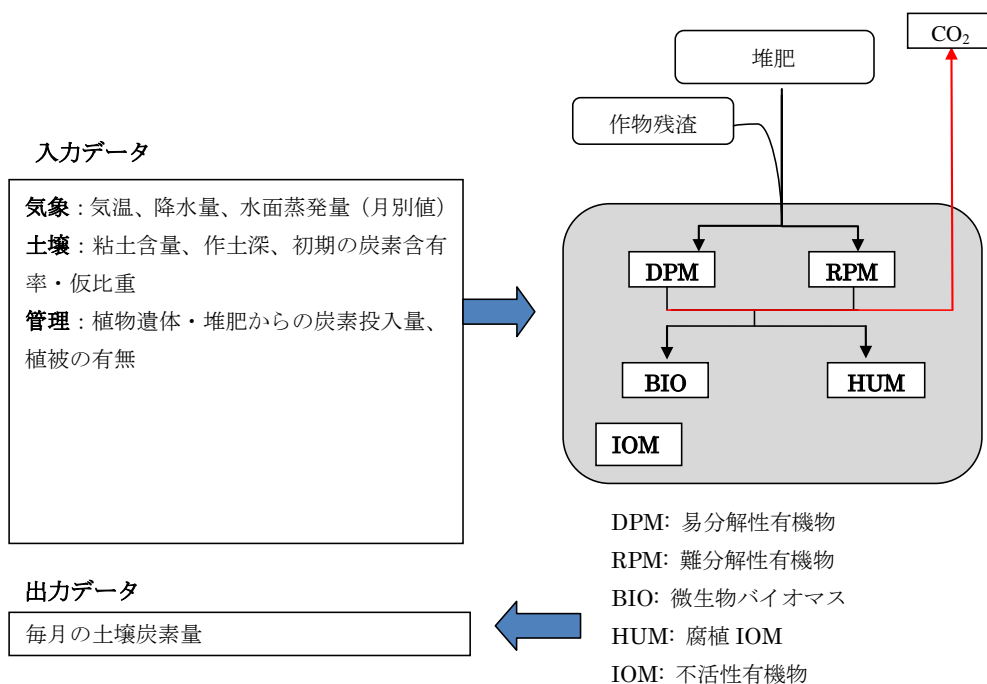


図 6-4 Roth C モデルの概要

○ バイオ炭のパラメータ (炭素含有率、100 年後の炭素残存率)

バイオ炭の炭素含有率は、2019 年改良 IPCC ガイドライン Table 4Ap.1 で提示されている木材の熱分解プロセスのデフォルト値 (0.77 t-C/t-d.m.) を適用した。100 年後の炭素残存率は、我が国のそれぞれのバイオ炭の焼成温度を踏まえ、2019 年改良 IPCC ガイドライン Table 4Ap.2 のデフォルト値から、白炭、黒炭、オガ炭は焼成温度 600℃以上に対応する値 (0.89 t-C/t-C)、粉炭は焼成温度 450-600℃に対応する値 (0.80 t-C/t-C) を適用した。なお、竹炭については、南雲ら (2014) により、国内の竹炭成分の分析結果が得られたため、国独自の値 (43.6%) を用いた。この値は炭素含有率と 100 年後の炭素残存率を包含した値に対応している。

○ 有機質土壌からの on-site CO₂ 排出係数 (EF)

水田、普通畑における有機質土壌からの CO₂ 排出係数については以下の表の値を適用した。

表 6-24 有機質土壌の耕起に伴う CO₂ 排出係数

地目	気候帯	排出係数 [t-C/ha/yr]	出典
水田	Cold temperate	1.55	実測データ ¹⁾
	Warm temperate	1.55	Cold temperate の実測データを使用 ²⁾
普通畑	Cold temperate	4.18	実測データ
	Warm temperate	10.0	デフォルト値 2006 年 IPCC ガイドライン第 4 巻 Table 5.6

(注)

1) 水田の実測データは湛水時期の排出は 0 と見なして作成した排出係数。

2) 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト排出係数は Paddy field は除外されているため、我が国の実測結果にて代用。

- 有機質土壌の off-site CO₂ 排出（水溶性炭素に由来する排出）に関するパラメータ
湿地ガイドラインに提示されている Tier 1 のデフォルトパラメータを適用した。

表 6-25 水溶性炭素排出に関するデフォルトパラメータ

気候帯	DOC _{FLUX_NATURAL} [t-C/ha/yr]	DOC _{DRAINAGE}	FracDOC-CO ₂	EF _{DOC} [t-C/ha/yr]
Temperate	0.21	0.60	0.9	0.31

(出典) 湿地ガイドライン Table 2.2

■ 活動量（面積）

○ 鉱質土壌面積

Roth C モデル算定に用いる面積は「耕地及び作付面積統計」に掲載されている田（水稲作付田のみ）、普通畑（水稲以外作物作付田、不作付水田含む）及び、樹園地とし、地目ごとに有機質土壌面積（表 6-26）を減じた面積を用いる。モデル算定では、土地転用の履歴も含み、1970 年以降に一度でも農地になった土地をすべて計算の地理的範囲に含めているため、他の土地利用から転用された農地（鉱質土壌）の面積も含んでいる。

○ 農地へのバイオ炭の施用量

活動量となる鉱質土壌農地へのバイオ炭の施用量は、農業用途の木炭の生産量に、農地土壌への施用割合及び鉱質土壌面積の割合を乗じて算出した。

農業用途の木炭の生産量については、農林水産省「特用林産物生産統計調査」に掲載されている種類別木炭の生産量のうち、用途区分が「農業用」の値を使用した。一部年次では、データが欠損していることから、内挿または按分により補完した。また、一部の木炭は飼料等の用途向けに利用されているため、農業用途の木炭生産量から飼料等の用途分を控除した。専門家ヒアリングに基づき、確実に農地へ施用されている割合を 95% と想定した。また、農地土壌に施用されたバイオ炭については、鉱質土壌、有機質土壌に分けた施用量の把握は困難であるため、我が国では全国の農地にバイオ炭が一律の割合（単位面積当たりの施用量）で投入されると仮定した上で、インベントリで報告されている鉱質土壌と有機質土壌の面積比に基づき、土壌タイプ別の施用量を把握した。なお、2019 年改良 IPCC ガイドラインでは有機質土壌におけるバイオ炭の 100 年後残存率が提示されておらず、我が国においても知見が十分でないことから、現時点では有機質土壌へのバイオ炭施用による炭素貯留は算定対象外とした。

なお、我が国では農業用途の木炭の輸出入実績がほとんどないため、輸出入に伴うバイオ炭施用量の加減は考慮していない。

○ 有機質土壌面積

各地目の農耕地における有機質土壌面積は 1992 年、2001 年の情報が把握できるため、① 1992 年、2001 年時点の各地目の農耕地における有機質土壌面積に対し、②他の土地利用から転用された各地目の農耕地における有機質土壌面積の加算、③各農耕地から他の土地利用に転用した有機質土壌面積の減算、を毎年実施することで、時系列としての有機質土壌面積を求め、過去 20 年以内に転用された土地の有機質土壌面積の合計値を転用された土地利用区分で、それ以外の有機質土壌面積を転用のない土地利用区分報告した。なお、1992～2001 年の間の有機質土壌面積は、両者の数値の線形内挿で求めている。

転用された農耕地における有機質土壌面積は、基本的には土地利用区分ごとの土地利用総面積に、元の土地利用区分における有機質土壌率を乗じて設定している。ただし、湿地からの転用については、この活動に該当する干拓地において、干拓地周辺の土壌図において有機質土壌が存在していなかったことから、この土地転用における有機質土壌割合は 0% とした（「NO」で報告）。

農耕地からの転用については、基本的に1992～2001年に間に生じた各地目の土地転用における有機質土壌面積の割合を、各地目の総転用面積に乗じて地目ごと、土地転用先ごとの有機質土壌面積を推計した。

この推計は都道府県ごとに行われている。この方法によって算定された我が国の有機質土壌面積（転用のない農地と転用された農地の合計）は以下のとおりである。なお、農業分野で報告されている農地における有機質土壌の面積（CRF 3.D.a.6 参照）は、農耕地の有機質土壌のうち、実際に耕起を行った活動量面積を報告している。具体的には、水田と普通畑における有機質土壌のすべての面積、更新率（3%）を考慮した牧草地の有機質土壌面積を含み、樹園地、採草牧草地及び原野の有機質土壌は耕起されないため、含まれていない。LULUCF 分野の有機質土壌由来の排出計算については、活動量として用いた数値は農業分野と同一の面積値であるが、LULUCF 分野の CRF では耕起・排水の有無にかかわらず総有機質土壌面積の報告を求めているため、LULUCF 分野の CRF で報告された有機質土壌面積と農業分野で報告された値が異なる。

地目別の有機質土壌面積は表 6-26 に示されている通りであるが、水田の有機質土壌面積は1990年以來約1,300ha減少したと報告している。現在の算定制度では、水田から他の土地利用への転用が厳密にどの土壌タイプにおいて生じたかは把握できないことから、現状水田における土壌面積割合と同じ割合で水田から他の土地利用への転用が生じたと推計している。水田から他の土地利用に転用された土地の主な転用先は開発地、普通畑である。

表 6-26 農地における有機質土壌面積（20年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
合計	kha	222.1	219.6	217.8	216.8	216.5	216.5	216.4	216.6	216.8	216.8	216.8	216.6	217.0	217.6
水田	kha	161.9	161.3	160.6	159.9	159.7	159.6	159.5	159.7	160.0	160.2	160.2	160.2	160.4	160.7
普通畑	kha	24.7	24.4	24.2	24.0	24.0	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	24.0	24.2
樹園地	kha	1.4	1.2	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.9	0.9
耕作放棄地	kha	34.1	32.6	32.2	32.0	32.1	32.1	32.1	32.1	32.0	31.9	31.8	31.7	31.7	31.8

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性の評価

果樹バイオマスに関する活動量及びパラメータの不確実性については、統計データの不確実性及び2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト不確実性を利用する。RothC モデルによる鉱質土壌における炭素ストック変化に関する不確実性は、モデルの構造に起因する不確実性については、入力値及び土壌炭素の実測値がそろっている圃場試験におけるモデルと実測の比較により、約10%程度の不確実性があることが明らかになっている。モデルの入力値に起因する不確実性については、まだ定量化されておらず、今後の課題である。バイオ炭の農地への施用に伴う土壌における炭素ストック貯留量に関する不確実性は、統計データの不確実性、及び2019年改良 IPCC ガイドラインのデフォルト値の不確実性を利用した。有機質土壌に関する不確実性については、統計データの不確実性、及び2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト不確実性を利用する。その結果、転用のない農地における排出量全体の不確実性は41%と評価された。

■ 時系列の一貫性

当該カテゴリーの時系列の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施して

いる。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

なお、Roth C では特にキャリブレーションは実施していないが、地目と土壌タイプの違いにより3つの改良バージョン（水田、黒ボク、非黒ボク）を使い分けることにより、実測データと精度よく一致することが確かめられており、長期の圃場における実測データを用いたプロットスケールの検証及び改良を行っている。

圃場は、土壌の性質で水田、非水田黒ボク、非水田黒ボクで分類している。よってこの3種ですべての土壌種を網羅していると考えている。検証と改良についての詳細は、白戸(2006)、Shirato & Taniyama (2003)、Shirato et al. (2004)、Shirato & Yokozawa (2005)、Takata et al. (2011)、Shirato (2011) を参照。

e) 再計算

■ D 面積の修正に伴う再計算

森林から転用された個々の土地利用面積を求めるには森林減少面積（D 面積）を使用している。今回の提出において、森林減少面積（D 面積）が再計算されたため、転用のない農地の面積が全年にわたり再計算された。この面積の再計算に伴い、鉱質土壌の炭素ストック変化量及び有機質土壌からの CO₂ 排出が全年にわたり再計算された。森林減少面積の把握方法の修正の詳細については、本 NIR の第11章第11.5.1.7節の「AR 面積及び D 面積の見直し」を参照のこと。

■ 果樹栽培面積の更新に伴う再計算

2016 年特産果樹の栽培面積の統計データが公表されたため 2016 年以降の転用のない農地（樹園地）における生体バイオマスの炭素ストック変化量が再計算された。

■ 鉱質土壌炭素ストック係数の修正による再計算

2017 年度の普通畑の土壌炭素ストック係数を再計算したため、2017 年の転用のない農地における土壌炭素ストック変化量が再計算された。

■ バイオ炭の農地施用による農地の炭素ストック量変化の新規算定に伴う再計算

今次提出よりバイオ炭の農地への施用による農地の炭素ストック量の算定を行ったため、転用のない農地における土壌炭素ストック変化量は全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

鉱質土壌の炭素ストック変化量の算定においては Tier3 の Roth C モデルを用いているが、本計算結果及び、入力値における変動要因についてより明確に説明ができるよう、詳細な解析を進めていく。

6.6.2. 他の土地利用から転用された農地（4.B.2）

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、他の土地利用から転用された農地（過去 20 年間に於いて他の土地利用から転用されて農地になった土地）における炭素ストック変化量を取り扱う。2018 年度までの過去 20 年間に於いて他の土地利用から転用された農地は 44.7 kha であり、国土総面積の 0.1% に相当する。

2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 23 kt-CO₂ であり、1990 年度比 98.5%

の減少、前年度比 16.2%の減少となっている。(炭素ストック変化以外のGHG排出分は除く。)他の土地から転用された農地からの排出量は、1990年以降大きくは減少傾向にあるが、多少の年変動が見られる。この変動には、炭素ストック量の高い森林から農地への転用面積の増減が影響している。

生体バイオマスに関しては、他の土地利用から農地に転用される際の炭素ストック変化量を算定対象とした。当該プロセスは、転用前後の土地における生体バイオマスの一時的な損失とその後の増加が含まれる。ただし、樹園地については転用のない農地で一括して算定し報告している(IE)。

枯死有機物に関しては、CENTURY-jfosモデルを用いて森林の枯死有機物の炭素ストック量を把握し、森林から転用された農地の炭素ストック変化量を算定した。森林以外の土地利用カテゴリーから転用された農地の枯死有機物の炭素ストック変化量は、炭素ストックの変化が発生しないと見なし「NA」と報告した。

森林、草地及び湿地から転用された農地の鉱質土壌における炭素ストック変化量に関しては、Tier 3モデルを適用して転用のない農地で一括して算定し報告しているため「IE」として報告した。有機質土壌におけるCO₂排出量は牧草地から転用された水田及び普通畑における有機質土壌の耕起に伴う排出(on-site)及び有機質土壌の水溶性炭素による排出(off-site)を算定対象とした。

b) 方法論

1) 他の土地利用から転用された農地における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

森林から農地への転用については、国独自のバイオマス蓄積量を使ったTier 2の算定方法を用いた。森林以外の土地利用から農地への転用については、デフォルト値を使ったTier 1の算定方法を用いた。

$$\Delta C = \Delta C_i + \Delta C_j$$

$$\Delta C_i = A \times (CR_a \times CF_a - CR_i \times CF_i)$$

$$\Delta C_j = A \times CR_j \times CF_a$$

ΔC	: 他の土地利用から転用された土地における炭素ストック変化量 [t-C/yr]
ΔC_i	: 他の土地利用から転用された際の炭素ストック変化量 [t-C/yr]
ΔC_j	: 転用後その年度内にあった炭素ストック変化量 [t-C/yr]
i	: 転用前の土地利用カテゴリー
j	: 転用後の土地利用カテゴリー
A	: 当該年に転用された土地の面積 [ha]
CR_a	: 転用された直後のバイオマス蓄積量 [t-d.m./ha/yr]、デフォルト値=0
CR_i	: 転用される前の土地利用カテゴリー <i>i</i> における平均バイオマス蓄積量 [t-d.m./ha/yr]
CR_j	: 転用された後に蓄積される平均バイオマス蓄積変化量 [t-C/ha/yr]
CF_a	: 転用後の土地利用カテゴリーの炭素含有率 [t-C/t-d.m.]
CF_i	: 転用前の土地利用カテゴリーの炭素含有率 [t-C/t-d.m.]

■ 各種パラメータ

○ 土地利用毎の生体バイオマスストック量

転用に伴うバイオマスストック変化量及び転用地におけるバイオマス成長によるストック変化量の算定には表 6-8、表 6-8b のパラメータを用いた。

表 6-8a に記載している単年生作物のバイオマス量は、収穫等で現場から持ち出されるバイオマスを、農地における炭素ストック量に含めることは不適であると整理し、農業分野の農作物残さのすき込みの算定で利用している、収穫後に農地に残される作物残さ量の値で代用することとした。この際、すき込まれる作物残さ量は作物別に異なる値であることから、毎年の栽培面積に応じて面積当たりのすき込み残さ中炭素量を加重平均した上で、パラメータの精度を踏まえ 1990-2017 年の平均値を全年度に一律に適用することとした（表 6-8a）。

また、この単年生作物の面積当たりバイオマス炭素量は、転用後の 1 年間における単年生作物栽培地のバイオマス成長量としても利用している（表 6-8b）。

○ 炭素含有率（CF）

森林の炭素含有率は我が国の針葉樹と広葉樹の平均値（0.50 t-C/t-d.m.）を用いた。森林以外の炭素含有率は、2006 年 IPCC ガイドラインに従い、デフォルト値（草地は 0.47 t-C/t-d.m.、それ以外は 0.5 t-C/t-d.m.）を用いた。

■ 活動量（面積）

他の土地利用から転用された農地の生体バイオマスの炭素ストック変化量の算定については、毎年の農地への転用面積を用いた。

○ 森林から他の土地利用区分への転用面積

森林から他の土地利用（農地、草地、湿地、開発地、その他の土地）に転用された面積は、京都議定書第 3 条 3 の下での森林減少面積（D 面積）の報告と整合しているものと捉え、D 面積を基準にその内訳を推計することにより、森林から転用された農地の面積を把握した。なお、衛星画像判読による D 調査は 2005 年度より実施されていることから、D 面積の把握とその内訳の推計は、1970～2004 年度までと 2005 年度以降とでそれぞれ以下の方法で行った。

【1990 年度から 2004 年度まで】

1990～2004 年度は D 面積の調査により毎年の森林からの転用総面積が把握されている（詳細は、11.4.2.3.a.a）を参照のこと）。1989 年以前については、当該面積は「世界農林業センサス」及び林野庁業務資料の統計値から得られるが、D 調査の面積が統計から得られる面積よりも多いことから、1989 年以前の森林からの転用総面積は、1990 年度以降の D 面積と「世界農林業センサス」及び林野庁業務資料から得られた森林からの転用面積との比率から調整係数を設定し、「世界農林業センサス」及び林野庁業務資料から得られる 1970 年度以降の森林からの転用面積に当該調整係数を乗じて推計した。

森林から各土地利用への転用面積は、民有林における林地開発に係る土地転用先面積（林野庁業務資料）から転用比率を設定し、森林からの総転用面積に転用比率を乗ずることで推計した。森林からの土地転用は民有林における転用が全体の 9 割を占めていることから、全森林に適用する転用比率と想定した。

【2005 年度以降】

森林から農地、草地、湿地、開発地、その他の土地へ転用された土地の面積は、D 面積に、D 調査の判読結果より把握した森林からそれぞれの土地に転用された面積の比率を乗じて把握した。D 面積の把握方法の詳細については、第 11 章の 11.4.2.3 節を参照のこと。

○ 森林以外からの転用面積

森林以外の土地利用から農地に転用された土地の面積は、「耕地及び作付面積統計」の田畑拡張面積を用いて把握した。このうち畑の転用面積を現状の普通畑、樹園地、牧草地の面積割合を用いて按分した。田、普通畑、樹園地の面積を農地の面積として割り当て、牧草地の面積を草地に割り当てた。なお、開発地から転用された農地は転用のないその他の土地に含まれるとして「IE」として報告している。

なお、CRFの「Table 4.B SECTORAL BACKGROUND DATA FOR LAND USE, LAND-USE CHANGE AND FORESTRY—Cropland」に示されている面積は、2018年度単年の転用面積ではなく、過去20年間の積算値であることに留意されたい。

表 6-27 他の土地利用から転用された農地面積（単年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された農地	kha	6.0	2.2	1.8	1.0	0.9	0.9	0.9	4.6	4.5	3.5	2.0	1.2	5.3	7.7
森林から転用された農地	kha	5.4	1.1	0.3	0.5	0.8	0.8	0.8	0.8	0.5	0.5	0.5	0.5	0.2	0.2
田	kha	0.009	0.01	0.002	0.0003	0.06	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1
普通畑	kha	3.9	0.8	0.3	0.4	0.6	0.5	0.5	0.5	0.3	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1
樹園地	kha	1.5	0.3	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.06	0.06	0.01	0.02
草地から転用された農地	kha	0.004	0.05	0.03	0.06	0.009	0.001	0.002	0.001	0.001	0.007	0.007	0.004	0.006	0.005
湿地から転用された農地	kha	0.34	0.03	0.07	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
開発地から転用された農地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
その他の土地から転用された農地	kha	0.2	1.1	1.3	0.4	0.05	0.04	0.1	3.8	4.0	3.1	1.5	0.7	5.1	7.5
田	kha	0.2	1.0	1.3	0.3	0.05	0.03	0.1	3.7	3.7	2.7	1.2	0.5	3.2	3.9
普通畑	kha	0.02	0.03	0.02	0.1	0.001	0.01	0.01	0.1	0.3	0.3	0.2	0.2	1.5	2.9
樹園地	kha	0.01	0.01	0.01	0.02	0.0001	0.002	0.001	0.03	0.1	0.1	0.1	0.1	0.4	0.7

2) 他の土地利用から転用された農地における枯死有機物の炭素ストック変化量

■ 算定方法

「森林から転用された農地」における枯死有機物の炭素ストック変化量は、CENTURY-jfosモデルより把握される枯死有機物の森林における炭素ストック量を使った Tier 2 の方法を用いて算定した。なお、2006年 IPCC ガイドラインにある 5.3.2.1 節の記述に従い、当該サブカテゴリーの枯死有機物の炭素ストックは、転用が行われた年に全て酸化し CO₂ として排出されると想定した。なお、後述のパラメータでの説明の通り、我が国での農地における枯死有機物炭素ストック量はゼロと想定している。

$$\Delta C_{DOM} = \sum_i \{ (C_{after,i} - C_{before,i}) \times A \}$$

ΔC_{DOM} : 転用された土地における枯死有機物の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

$C_{after,i}$: 転用後の枯死木又はリターの平均炭素ストック量 [t-C/ha]

※転用後の炭素ストック量はゼロと想定

$C_{before,i}$: 転用前の枯死木又はリターの平均炭素ストック量 [t-C/ha]

A : 当該年に転用された面積 [ha]

i : 枯死有機物のタイプ (枯死木又はリター)

「草地から転用された農地」については、草地における枯死有機物プールは、存在はするものの炭素ストック量は微量であり、土地利用変化に伴う炭素ストック変化量も無視できるとして「NA」と報告した。「湿地、開発地から転用された農地」については、我が国では湿地から農地への転用は干拓による農地化を対象としており、干拓前の土地には基本的に枯死有機物プールは存在しないこと、開発地については転用前の土地に存在する枯死有機物プール

は無視できると見なせることを踏まえ、炭素ストック変化はゼロからゼロへの変化として「NA」と報告した。「その他の土地から転用された農地」については、我が国では農地の復旧を対象としているが、2006年 IPCC ガイドラインの Tier.1 では非森林地の枯死有機物量はゼロと設定していることを踏まえ、「NA」と報告した。

■ 各種パラメータ

転用前の森林における枯死木及びリターの平均炭素ストック量は表 6-9 及び表 6-10 の通りである。また、転用直後は枯死有機物の蓄積がゼロになり、その後の蓄積はないという想定の下で算定を行っている。

■ 活動量（面積）

他の土地利用から転用された農地の枯死有機物の炭素ストック変化量の算定には、農地への毎年の転用面積を利用した。

3) 他の土地利用から転用された農地における土壌の炭素ストック変化量

■ 算定方法

鈹質土壌の算定については 6.6.1.b)2)節で記述した通り、転用の有無で区別することなく転用のない農地における鈹質土壌の下で一括報告されるため、他の土地利用から転用された農地における鈹質土壌の炭素ストックは「IE」とした。有機質土壌からの二酸化炭素排出量の算定について、他の土地から転用された水田及び普通畑における有機質土壌の耕起に伴う排出 (on-site) 及び有機質土壌の水溶性炭素による排出 (off-site) を算定対象とした。詳細について 6.6.1 節を参照のこと。

他の土地利用から転用された農地面積（鈹質土壌面積と有機質土壌面積の合計）は表 6-28 に示されている。CRF の 4.B 表に報告された転用された農地における鈹質土壌面積は、CRF 4(III)表で報告している転用された農地における土壌無機化に伴う N₂O 排出量の算定においても使用されている。

表 6-28 他の土地利用から転用された農地面積（20年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された農地	kha	215.9	158.5	111.0	61.8	37.5	32.4	29.7	30.5	33.1	33.4	33.2	33.4	37.9	44.7
森林から転用された農地	kha	125.9	117.2	96.1	48.8	23.1	18.5	16.3	13.7	13.1	12.4	11.8	11.5	11.0	10.5
田	kha	11.4	7.2	0.9	0.4	0.5	0.7	0.7	0.8	0.9	1.0	1.2	1.4	1.4	1.5
普通畑	kha	76.5	77.2	67.3	35.0	16.9	13.5	11.8	9.9	9.4	8.9	8.3	7.9	7.5	7.0
樹園地	kha	38.1	32.8	27.9	13.3	5.7	4.4	3.7	3.0	2.8	2.6	2.3	2.2	2.1	1.9
草地から転用された農地	kha	33.7	15.8	1.2	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9	0.7	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4
湿地から転用された農地	kha	11.0	3.2	1.7	1.2	1.1	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.5
開発地から転用された農地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
その他の土地から転用された農地	kha	45.2	22.2	12.0	10.8	12.3	12.1	11.7	15.2	18.7	19.9	20.3	20.9	25.9	33.3
田	kha	23.3	13.3	10.7	9.4	11.0	10.8	10.4	13.8	17.1	18.2	18.4	18.7	21.9	25.7
普通畑	kha	11.7	6.1	1.0	1.1	1.0	1.0	1.0	1.1	1.2	1.3	1.5	1.7	3.2	6.1
樹園地	kha	10.2	2.8	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.4	0.5	0.8	1.5

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性の評価

生体バイオマス、枯死有機物に関する不確実性は、各パラメータ及び活動量毎に、現地調査データ、専門家判断、または 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。その結果、他の土地利用から転用された農地による排出量全体の不確実性は 19% と評価された。

■ 時系列の一貫性

6.6.2.b)1)節で説明した通り、森林からの転用面積の把握方法が1990～2004年度までと2005年度以降とで異なっているものの、当該カテゴリーの時系列の一貫性は基本的に確保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

■ D 面積の修正に伴う再計算

森林から転用された土地利用の面積推計に利用している森林減少面積（D 面積）が再計算されたため、当該カテゴリーの生体バイオマス、枯死有機物の炭素ストック変化量、及び有機質土壌からの CO₂ 排出量を全年にわたり再計算した。

■ 転用後の単年生作物のバイオマスストック量の修正に伴う再計算

農地への転用後の単年生作物のバイオマス成長量の修正に伴い、他の土地から転用された農地における生体バイオマスの炭素ストック量は全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

■ 草地から農地への転用に関する面積把握方法

草地から農地への転用に関する面積把握方法については、現在、草地（牧草地）－農地（田）間以外の転用面積が統計より把握できないため、当該土地利用区分における炭素ストック変化量の算定が実態を完全には反映していないと考えられる。そのため、以下の転用面積の把握方法について現在検討を行っている。

- ・ 牧草地→普通畑
- ・ 牧草地→樹園地
- ・ 採草放牧地→田
- ・ 採草放牧地→普通畑
- ・ 採草放牧地→樹園地

■ その他の土地から農地への転用に伴う土壌炭素ストック変化量の算定方法

新たな知見等が入手できた際には、算定方法に関する検討を行う。

6.7. 草地（4.C）

草地は一般的に多年生牧草の植生で覆われており、主に牧草採取や放牧が行われる。我が国における2018年度の草地面積は約95万haであり、国土面積の約2.5%を占めている。そのうち有機質土壌面積は5.5万haである。当該カテゴリーにおける炭素蓄積変化量は、1990年度に1,062 kt-CO₂の排出、前年度に181 kt-CO₂の吸収、2018年度では266 kt-CO₂の吸収となった。（ただし、以下の炭素ストック変化以外のGHG排出分は除く。土壌排水に伴うCH₄排出量2.2 kt-CO₂換算、土地利用変化・管理変化に伴う無機化された窒素からのN₂O排出量2.2 kt-CO₂換算、バイオマス燃焼に伴うCH₄、N₂O排出量26.4 kt-CO₂換算）。

本節では草地を「転用のない草地 (4.C.1.)」及び「他の土地利用から転用された草地 (4.C.2.)」の categories に区分し、以下の小節においてその2つの categories について別個に記述する。

表 6-29 草地における炭素ストック変化量に起因する排出・吸収量

ガス	カテゴリー	炭素プール	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CO ₂	4.C. 草地	合計	kt-CO ₂	1,062	689	48	-966	-36	124	256	-19	-35	147	-12	-67	-181	-266	
		生体バイオマス	kt-CO ₂	109	14	-6	88	206	188	80	112	151	155	94	95	39	39	36
		枯死木	kt-CO ₂	42	9	3	29	71	71	37	37	37	57	57	36	36	20	20
		リター	kt-CO ₂	20	4	1	14	34	34	18	18	18	28	28	18	18	10	10
		鉱質土壌	kt-CO ₂	862	633	20	-1,126	-384	-198	87	-221	-303	-130	-199	-244	-278	-360	
		有機質土壌	kt-CO ₂	29	29	29	29	36	28	34	36	32	38	39	29	29	28	
	4.C.1. 転用のない草地	合計	kt-CO ₂	881	658	48	-1,098	-349	-171	120	120	-187	-273	-94	-161	-217	-251	-333
		生体バイオマス	kt-CO ₂	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		枯死木	kt-CO ₂	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		リター	kt-CO ₂	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		鉱質土壌	kt-CO ₂	862	633	20	-1,126	-384	-198	87	-221	-303	-130	-199	-244	-278	-360	
		有機質土壌	kt-CO ₂	20	25	28	28	34	27	32	34	31	36	38	27	27	27	
	4.C.2. 他の土地から転用された草地	合計	kt-CO ₂	181	31	0	133	313	294	136	168	237	241	149	150	70	67	
		生体バイオマス	kt-CO ₂	109	14	-6	88	206	188	80	112	151	155	94	95	39	36	
		枯死木	kt-CO ₂	42	9	3	29	71	71	37	37	37	57	57	36	36	20	20
		リター	kt-CO ₂	20	4	1	14	34	34	18	18	18	28	28	18	18	10	10
		鉱質土壌	kt-CO ₂	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO	IE,NO
		有機質土壌	kt-CO ₂	9	4	2	1	2	1	1	2	1	2	2	1	1	1	

6.7.1. 転用のない草地 (4.C.1)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、過去 20 年間に於いて転用のない草地における炭素ストック変化量を、「牧草地」、「採草放牧地」及び「原野」の3つのサブカテゴリーに分けて報告する。

当該カテゴリーにおける炭素ストック変化量は、1990 年度には 881 kt-CO₂ の排出、前年度は 251 kt-CO₂ の吸収、2018 年度には 333 kt-CO₂ の吸収となっている。(炭素ストック変化以外の GHG 排出分は除く。) 1990 年度以降、年変動があるものの 2000 年代は吸収に転じ、2008 年に吸収のピークを迎えた。2009 年以降、吸収量は減少傾向にあり、2018 年まで小さな増減をくりかえしている。本増減に大きく寄与しているのが、鉱質土壌における炭素ストック変化量の増減である。

本変動は、炭素投入量(特に堆肥施用量)と気温の年次変動の影響を受けていると考えられる。堆肥施用量が特に 2000 年代に増加傾向にあり、その後横ばいとなっており、気温は、近年は寒い年が無いことが特徴で、有機物分解が進んでいる状況となっている。これらが、変動に影響を与える主な要因となっていると考えられる。

生体バイオマスに関しては、「牧草地」及び「採草放牧地」は 2006 年 IPCC ガイドラインの 6.2.1.1 節に記載されている Tier 1 の算定方法に従い「バイオマスの炭素ストック量が一定で変化しない」と仮定し、「NA」として報告した。

枯死有機物の炭素ストック変化量については、「牧草地」及び「採草放牧地」においては 2006 年 IPCC ガイドライン 6.2.2.1 節に記載に従い、当該炭素ストック変化量が変化しないと想定している Tier 1 を適用し、ゼロと推計した。従って、当該炭素ストック変化量は「NA」として報告した。

土壌の炭素ストック変化量については、鉱質土壌における炭素ストック変化量については、「牧草地」は転用のない農地と同様に Roth C モデルを用いた Tier 3 の方法で算定を行った。「採草放牧地」は、劣化しておらず持続的に管理されているが大きな管理改善も行われていない草地である。そのため、2006 年 IPCC ガイドラインの表 6.2 における「Nominally managed (non-degraded)」の炭素ストック変化係数のデフォルト値「1.0」を適用する。この場合、土壌炭素ストック量は経年的に変化しないため、当該炭素ストック変化量は「NA」として報告した。有機質土壌からの CO₂ 排出量については、「牧草地」における有機質土壌の耕起に伴う排

出 (on-site) 及び有機質土壌の水溶性炭素による排出 (off-site) を Tier 1 法で算定した。「採草放牧地」における有機質土壌からの CO₂ 排出量については、更新や排水といった営農活動を行っていないと考えられることから「NO」として報告した。

「原野」については人為的な管理が一般的に実施されていないため、全ての炭素プールにおけるストック変化量を「NA」として報告した。

表 6-30 転用のない草地面積 (20年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
転用のない草地	kha	709.8	856.6	950.9	978.2	967.3	965.0	927.2	925.6	922.7	928.8	927.1	913.4	920.7	917.5
牧草地	kha	324.8	495.7	584.1	601.7	590.9	588.6	587.2	585.6	582.7	578.8	577.1	573.4	570.7	567.5
採草放牧地	kha	105.0	100.9	96.8	96.5	96.4	96.4	96.4	96.4	96.3	96.3	96.3	96.3	96.3	96.2
原野	kha	280.0	260.0	270.0	280.0	280.0	280.0	243.6	243.6	243.7	253.7	253.7	243.7	253.7	253.8

b) 方法論

1) 転用のない草地における土壌の炭素ストック変化量

■ 算定方法

○ 鉱質土壌の炭素ストック変化量

牧草地について、Tier 3 のモデル法を用いて算定した。方法は、6.6.1 節の転用のない農地 (4.B.1) における記述と同様であるため、省略する。

○ 有機質土壌の耕起に伴う CO₂ 排出量

牧草地における有機質土壌の耕起・排水に伴う CO₂ 排出量は、2006 年 IPCC ガイドラインの 6.2.3.1 節に記載されている Tier 1 の算定方法を用いて算定した。算定式は 6.6.1 節の転用のない農地の記述と同様であるため、省略する。

○ 有機質土壌の水溶性炭素による off-site CO₂ 排出

排水された有機質土壌における水溶性炭素損失による CO₂ 排出量は湿地ガイドライン 2.2.1.2 に記述されている Tier 1 算定方法を用いて算出した。方法は、6.6.1 節の転用のない農地 (4.B.1) における記述と同様であるため、省略する。

■ 各種パラメータ

○ 鉱質土壌の算定に用いた Roth C モデルのキーとなる仮定とパラメータ

方法は、6.6.1 節の転用のない農地 (4.B.1) における記述と同様であるため、省略する。

○ 有機質土壌からの CO₂ 排出係数 (EF)

我が国の牧草地に適用できる CO₂ 排出係数に関する調査データがほとんどないため、on-site 排出の排出係数は、我が国の牧草地の分布及び管理状況等を勘案し、最も我が国の状況に適合すると考えられる湿地ガイドラインのデフォルト値 (6.1 t-C/ha/year 湿地ガイドライン、Table 2.1、Grassland, deep-drained, nutrient-rich) を適用した。Off-site 排出については、6.6.1 節の転用のない農地 (4.B.1) と同じパラメータを用いたため、省略する。

■ 活動量 (面積)

○ 鉱質土壌面積

「耕地及び作付面積統計」に掲載されている、牧草地面積値から下表の牧草地における有機質土壌面積を減じた面積を用いる。この面積は、CRF 4(III)で報告している N₂O 排出量の算定においても使われている。

○ 有機質土壌面積

牧草地については 6.6.1.b)2)節に記載された農地における有機質土壌面積の推計方法と同様

の方法で、転用のない牧草地、転用された牧草地における有機質土壌面積を推計した。牧草地における有機質土壌面積を推計したのちその推計値に牧草地更新率を乗じて活動量（実際に耕起及び排水などの活動が生じた面積）とした。牧草地更新率は牧草地の管理実態を調査した報告書（波多野、2017）に掲載された、北海道及び北海道以外の都府県における牧草地の更新割合の調査結果を使用した（第5章3.D.a.6節を参照のこと）。なお、2005年度以前については単年度の更新割合が調査されていないことから、2006年度～2010年度の平均値（北海道：3.0%、北海道以外：1.3%）を使用する。また、2016年度以降についてもまだ調査値がないことから、同様に2006年度～2010年度の平均値を使用した。

採草放牧地及び原野における有機質土壌面積については、2009年時点の採草放牧地（「世界農林業センサス」）、原野（「土地利用現況把握調査」）の有機質土壌面積割合を地理情報システム（Geographic information system, GIS）データ解析により求め、この値を2009年の各土地利用面積に乘じて2009年の有機質土壌面積を求めた。2009年以前、及び2009年以降の各年度の有機質土壌面積については、他の土地利用から採草放牧地・原野に転用された有機質土壌面積を加算し、採草放牧地・原野から他の土地利用に転用した有機質土壌面積を減算することにより求めた。なお、6.6.1節に記述している通り、農業分野では報告されている牧草地における耕起有機質土壌の面積には採草牧草地、原野の有機質土壌面積が含まれていないため、LULUCF分野と農業分野で報告された値が異なる。

表 6-31 転用のない草地における有機質土壌面積（20年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
転用の無い草地	kha	45.9	52.2	56.7	57.5	57.4	57.3	55.5	55.4	55.3	55.7	55.5	54.9	55.3	55.2
牧草地	kha	28.2	35.4	39.4	39.8	39.7	39.6	39.5	39.5	39.4	39.2	39.1	39.0	38.9	38.8
採草放牧地	kha	4.6	4.6	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
原野	kha	13.2	12.2	12.7	13.2	13.2	13.2	11.4	11.4	11.4	11.9	11.9	11.4	11.9	11.9

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性の評価

鉍質土壌に関する不確実性は、転用のない農地（4.B.1）における記述と同様であるため、省略する。有機質土壌に関する活動量及びパラメータの不確実性は、統計データの不確実性、及び湿地ガイドラインのデフォルト不確実性を利用した。その結果、転用のない草地における排出量全体の不確実性は9%と評価された。

■ 時系列の一貫性

当該カテゴリーの時系列の一貫性は基本的に確保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

■ D 面積の修正に伴う再計算

森林から転用された個々の土地利用面積を求めるには森林減少面積（D 面積）を使用している。今回の提出において森林減少面積（D 面積）が再計算されたため、転用のない草地面積が再計算された。この面積の再計算に伴い、鉍質土壌の炭素ストック変化量及び有機質土壌からの CO₂ 排出が全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

鉱質土壌の炭素ストック変化量の算定においては Tier3 の Roth C モデルを用いているが、本計算結果及び、入力値における変動要因について明確に説明ができるよう、より詳細な解析を進めていく。

6.7.2. 他の土地利用から転用された草地 (4.C.2)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、他の土地利用から転用された草地（過去 20 年間に於いて他の土地利用から転用されて草地になった土地）における炭素ストック変化量を取り扱う。2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 67 kt-CO₂ であり、1990 年度比 63.0%の減少、前年度比 4.4%の減少となっている。

生体バイオマスに関しては、他の土地利用から草地に転用される際の炭素ストック変化量を算定対象とした。当該炭素ストック変化量は、当該地における転用前後の生体バイオマスの一時的な損失量及び後続する増加量を含む。

枯死有機物に関しては、森林から転用された場合には CENTURY-jfos モデルを用いて転用前の森林の枯死有機物の炭素ストック量を把握し、森林から転用された草地の炭素ストック変化量を算定した。森林以外の土地利用カテゴリーから転用された草地の枯死有機物の炭素ストック変化量は、炭素ストックの変化が発生しないと見なし「NA」、もしくは「NO」と報告した。

土壌に関しては、他の土地利用から草地に転用される際に変化する土壌炭素ストック量を取り扱う。鉱質土壌における炭素ストック変化量については、森林、農地、湿地及びその他の土地から転用された草地の炭素ストック変化量は Tier 3 モデルを適用して転用のない草地で一括して算定し報告しているため「IE」として報告した。有機質土壌からの CO₂ 排出量については、農地から転用された牧草地における有機質土壌を算定した。我が国では有機質土壌の森林の草地への転用は実施されないため、森林から転用された草地における有機質土壌については「NO」として報告した。湿地及びその他の土地利用から転用された草地の有機質土壌における炭素ストック変化量については、転用のない草地に含まれるため「IE」として報告した。

開発地から転用された草地は、当該土地転用が日本では一般的に実施されないため、各炭素プールにおける炭素ストック変化量は「NO」として報告した。

b) 方法論

1) 他の土地利用から転用された草地における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

森林及び農地（田）から草地（牧草地）への転用については、国独自及び暫定値によるバイオマス蓄積量を使った Tier 2 の算定方法を用いた。それ以外の土地利用から草地への転用については、デフォルト値を使った Tier 1 の算定方法を用いた。算定式は 6.6.2.b)1)節にある通りである。なお、転用に伴う生体バイオマスの損失の算定には単年の転用面積を用いた一方で、転用後の草地のバイオマスの成長は、転用後 5 年かけて一定の割合で定常状態に達すると想定し、直近 5 年間の転用面積の積算値を用いて算定を行った。

■ 各種パラメータ

○ 土地利用毎の生体バイオマスストック量

転用に伴うバイオマスストック変化量及び転用地におけるバイオマス成長によるストック

変化量の推定には表 6-8a 及び表 6-8b のパラメータを用いた。

○ 炭素含有率 (CF)

森林の炭素含有率は我が国の針葉樹と広葉樹の平均値 (0.50 t-C/t-d.m.) を用いた。森林以外の炭素含有率は、2006 年 IPCC ガイドラインに従い、デフォルト値 (草地は 0.47 t-C/t-d.m.、それ以外は 0.5 t-C/t-d.m.) を用いた。

■ 活動量 (面積)

他の土地利用から転用された草地の生体バイオマスの炭素ストック変化量の算定は、転用前後の生体バイオマスの一時的な損失については毎年の草地への転用面積 (表 6-32)、後続する増加については直近年 5 年間の転用面積の積算値 (表 6-33) を用いた。

○ 森林からの転用面積

6.6.2.b)1)節「○森林から他の土地利用区分への転用面積」で詳述している方法を用いて把握している。

○ 森林以外からの転用面積

表 6-2 に示したとおり、草地は日本の統計において農地の一部として取り扱われている。そのため、森林以外の土地利用から転用された草地 (牧草地) は、6.6.2.b)1)節に記述した「他の土地利用から転用された農地 (4.B.2)」と同様の方法で把握した。ただし、開発地から草地への転用は発生しないため、開発地から転用された草地の面積は「NO」として報告した。

なお、CRF の「Table 4.C SECTORAL BACKGROUND DATA FOR LAND USE, LAND-USE CHANGE AND FORESTRY – Grassland」に示されている面積は、2018 年度単年の転用面積ではなく、過去 20 年間の積算値であることに留意されたい。

表 6-32 他の土地利用から転用された草地面積 (単年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された草地	kha	1.8	0.8	1.1	2.3	2.0	2.0	1.3	1.1	1.5	1.4	1.2	1.3	1.3	2.0
森林から転用された草地	kha	0.8	0.2	0.1	0.5	1.3	1.3	0.7	0.7	1.0	1.0	0.7	0.7	0.4	0.4
農地から転用された草地	kha	0.9	0.6	1.0	1.7	0.7	0.7	0.6	0.4	0.3	0.3	0.4	0.5	0.5	0.4
湿地から転用された草地	kha	0.12	0.01	0.03	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
開発地から転用された草地	kha	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
その他の土地から転用された草地	kha	0.01	0.01	0.01	0.04	0.0003	0.004	0.003	0.05	0.1	0.1	0.1	0.1	0.4	1.2

表 6-33 他の土地利用から転用された草地面積 (5 年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された草地	kha	11.6	5.1	5.1	7.2	11.0	10.7	10.0	8.7	7.8	7.3	6.5	6.5	6.8	7.2
森林から転用された草地	kha	4.7	1.4	0.5	0.7	5.1	5.8	6.0	5.3	4.9	4.7	4.1	4.1	3.8	3.1
農地から転用された草地	kha	6.5	3.4	4.5	6.2	5.7	4.6	3.8	3.2	2.6	2.2	1.9	1.9	2.0	2.1
湿地から転用された草地	kha	0.3	0.1	0.03	NO	0.2	0.2	0.2	0.2	NO	NO	NO	NO	NO	NO
開発地から転用された草地	kha	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
その他の土地から転用された草地	kha	0.1	0.2	0.04	0.3	0.1	0.1	0.02	0.1	0.2	0.3	0.5	0.6	1.0	2.0

2) 他の土地利用から転用された草地における枯死有機物の炭素ストック変化量

■ 算定方法

本カテゴリでは「森林から転用された草地」における枯死有機物の炭素ストック変化量を算定した。算定方法は、「他の土地利用から転用された農地 (4.B.2)」の算定方法と同様に、Tier 2 の方法を用い、転用前のストック量と転用後のストック量 (ゼロ) の比較により算定した。なお、草地については、一般的に土地表層に幾分か炭素ストックが存在するものの、その規模は極微量で現時点では定量化できるデータがないため、転用後の草地での枯死有機物ストックの増加はゼロと見なしている (2006 年 IPCC ガイドライン第 4 巻 6.3.2, Tier 1)。「農地から転用された草地」については、6.6.2.b)2)節に記載している通り、枯死有機物ストック量をゼロと想定しているため、炭素ストック変化が発生しないものと見なし「NA」として報告

した。「湿地、その他の土地から転用された草地」については、農地への転用と同様、それぞれ干拓、復旧を対象としているため、6.6.2.b)2)節と同様の理由により、「NA」で報告した⁷。

■ 各種パラメータ

転用前の森林における枯死木及びリターの平均炭素ストック量は表 6-9 及び表 6-10 の通りである。1990 年度から 2004 年度にかけて平均炭素ストック量は求められていないため、それらの年には 2005 年度値を代用している。また、転用直後は枯死有機物の蓄積がゼロになり、その後の蓄積はないという想定の下で算定を行っている。なお、2006 年 IPCC ガイドライン 6.3.2.2 節の記述に従い、当該サブカテゴリーの枯死有機物の炭素ストックは、転用が行われた年に全て酸化し CO₂ として排出されると想定した。

■ 活動量（面積）

過去 20 年間の各年に生じた転用面積を積算した値を、20 年間以内に草地へ転用された面積とした。当該面積を表 6-34 に示す。

表 6-34 他の土地利用から転用された草地面積（20 年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された草地	kha	321.8	165.0	60.6	28.9	27.9	28.1	28.0	27.7	28.4	29.0	29.4	30.0	30.3	31.1
森林から転用された草地	kha	182.6	106.4	35.1	7.3	7.9	8.4	8.7	8.8	9.7	10.6	11.1	11.6	11.9	12.2
農地から転用された草地	kha	70.6	38.5	23.9	20.7	19.0	18.8	18.5	18.0	17.7	17.5	17.3	17.2	16.8	16.2
湿地から転用された草地	kha	1.7	1.6	1.0	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
開発地から転用された草地	kha	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
その他の土地から転用された草地	kha	66.8	18.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.8	0.9	1.4	2.6

3) 他の土地利用から転用された草地における土壌の炭素ストック変化量

■ 算定方法

6.1. b) 2) 節の転用のない農地と同様、草地の中の牧草地について、鉱質土壌については Tier 3 モデルを用いて算定を行った。このモデル算定では、土地転用の履歴も含め、1970 年以降に一度でも牧草地になった土地をすべて計算の地理的範囲に含めているため、算出された結果は、転用の有無にかかわらず全ての牧草地を含むことになる。したがって、鉱質土壌については転用の有無で区別することなく報告することとし、他の土地利用から転用された牧草地における土壌の炭素ストックは、転用のない牧草地における土壌の炭素ストックに含まれるために「IE」とした。有機質土壌の耕起に伴う CO₂ 排出量 (on-site and off-site) については他の土地から転用された牧草地を算定対象とし、他の土地から転用された農地と同様な方法を用いて算定している。詳細については 6.6.1.b)2) の記述を参照のこと。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性の評価

生体バイオマス、枯死有機物、及び土壌に関する不確実性は、各パラメータ及び活動量ごとに、現地調査データ、専門家判断、または 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。その結果、他の土地利用から転用された草地による吸収量全体の不確実性は 19% と評価された。

■ 時系列の一貫性

6.6.1. b) 1) 節で説明した通り、森林からの転用面積の把握方法が 1990～2004 年度までと 2005 年度以降とで異なっているものの、当該カテゴリーの時系列の一貫性は基本的に確保されている。

⁷ 我が国で使用する統計では、農地化された土地の一部は牧草地（草地）である。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

■ D 面積の修正に伴う再計算

森林から転用された土地利用面積推計に利用している森林減少面積 (D 面積) が再計算されたため、当該カテゴリーの生体バイオマス及び、枯死有機物の炭素ストック変化量、及び有機質土壌からの CO₂ 排出量を全年にわたり再計算した。

■ 単年作物の転用前後のバイオマスストック量の修正に伴う再計算

単年作物のバイオマスストック量の設定値を変更したため、農地から転用された草地における転用時のバイオマス損失量に変更となり、生体バイオマス炭素変化量は全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

■ 他の土地利用カテゴリーから草地へ転用された面積に関するデータの取得方法

他の土地利用カテゴリーから転用された草地の面積データ取得に用いている方法を改善する必要がある。例えば、森林から草地への転用に関する面積把握方法については、現在は森林から農地及び草地へ転用された面積の合計に農地及び牧草地の面積比率を乗じることによって各転用面積を算定しているが、実態を反映していない可能性があるため、算定の妥当性や面積把握方法について現在検討を行っている。

■ 農地から草地への転用に関する面積把握方法

農地から草地への転用に関する面積把握方法については、現在、農地 (田) - 草地 (牧草地) 間以外の転用面積が統計より把握できないため、当該土地利用カテゴリーにおける炭素ストック変化量の算定が実態を完全には反映していないと考えられる。そのため、以下の転用面積の把握方法について現在検討を行っている。

- ・ 普通畑→牧草地
- ・ 樹園地→牧草地
- ・ 田→採草放牧地
- ・ 普通畑→採草放牧地
- ・ 樹園地→採草放牧地

■ その他の土地から草地への転用に伴う土壌炭素ストック変化量の算定方法

新たな知見等が入手できた際には、算定方法に関する検討を行う。

6.8. 湿地 (4.D)

湿地は通年に渡って水に覆われている、または水に浸されている土地であり、かつ森林、農地、草地、または開発地に該当しない土地を指す。2006年 IPCC ガイドライン及び湿地ガイドラインにおいては、湿地は泥炭地、湛水地、その他の湿地に大きく区分される。ただし、わが国ではその他の湿地に該当する報告は行っていない。

我が国における湿地面積は約 135 万 ha であり、国土面積の約 3.6% を占めている。2018 年

度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 17 kt-CO₂ であり、1990 年度比 80.9%の減少、前年度比 0.1%の減少となっている。

本節では湿地を「転用のない湿地(4.D.1.)」及び「他の土地利用から転用された湿地(4.D.2.)」のカテゴリーに区分し、以下の小節においてその2つのカテゴリーについて別個に記述する。

表 6-35 湿地における炭素ストック変化量に起因する排出・吸収量

ガス	カテゴリー	炭素プール	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CO ₂	4.D. 湿地	合計	kt-CO ₂	91	359	426	42	121	114	59	68	24	24	59	59	17	17	
		生体バイオマス	kt-CO ₂	65	257	305	30	85	79	41	50	16	17	40	41	12	12	
		枯死木	kt-CO ₂	17	69	82	8	24	24	12	12	5	5	12	12	4	4	
		リター	kt-CO ₂	8	33	39	4	12	12	6	6	2	2	6	6	2	2	
		鉱質土壌	kt-CO ₂	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA
		有機質土壌	kt-CO ₂	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA
	4.D.1. 転用のない湿地	合計	kt-CO ₂	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA
		生体バイオマス	kt-CO ₂	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA
		枯死木	kt-CO ₂	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA
		リター	kt-CO ₂	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA	NO,NE,NA
		鉱質土壌	kt-CO ₂	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA
		有機質土壌	kt-CO ₂	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA
	4.D.2. 他の土地利用から転用された湿地	合計	kt-CO ₂	91	359	426	42	121	114	59	68	24	24	59	59	17	17	
		生体バイオマス	kt-CO ₂	65	257	305	30	85	79	41	50	16	17	40	41	12	12	
		枯死木	kt-CO ₂	17	69	82	8	24	24	12	12	5	5	12	12	4	4	
		リター	kt-CO ₂	8	33	39	4	12	12	6	6	2	2	6	6	2	2	
		鉱質土壌	kt-CO ₂	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE	NA,NE
		有機質土壌	kt-CO ₂	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO	NA,NE,NO

6.8.1. 転用のない湿地 (4.D.1)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、転用のない湿地(過去 20 年間に於いて転用されず、継続して湿地であった土地)における炭素ストック変化量を取り扱う。

泥炭採掘のために管理された有機質土壌の炭素ストック変化量(4.D.1)については、国内調査を行った結果、我が国で泥炭採掘の実態はあるものの、信頼のある精度での排出量算定は難しい状況であり、想定される排出計算量の規模を踏まえ、改訂 UNFCCC インベントリ報告ガイドラインの微小排出量基準を適用した「NE」で報告した。転用のない湛水地の炭素ストック変化量(4.D.1)は、2006年 IPCC ガイドラインでは、Appendix 扱いのため現時点では算定をしておらず「NE」として報告した。転用のないその他の湿地は、わが国で該当する活動を定義していないため「NA」として報告した。

表 6-36 転用のない湿地面積 (20年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
転用のない湿地	kha	1,280.3	1,293.8	1,321.2	1,316.5	1,308.1	1,307.9	1,318.0	1,318.9	1,319.5	1,320.0	1,321.4	1,314.2	1,334.7	1,337.0
泥炭地	kha	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE
湛水池	kha	1,280.3	1,293.8	1,321.2	1,316.5	1,308.1	1,307.9	1,318.0	1,318.9	1,319.5	1,320.0	1,321.4	1,314.2	1,334.7	1,337.0
その他の湿地	kha	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA

b) 方法論

1) 泥炭採掘からの排出

微小排出基準の適用においては、以下の様な推計を実施した。採掘される現場 (on-site) 及び、採掘後持ち出しされた泥炭 (off-site) の両方について、いずれも 2006 年 IPCC ガイドラインの第 7 章の Tier.1 の方法論に則った試算を行った。泥炭採掘は基本的に我が国で最も北方に位置する北海道地方で行われており、専門家判断により、気候・土壌条件は Boreal and Temperate, Nutrient-Poor に当てはまるとした。

採掘現場 (on-site) における CO₂ 排出量については、我が国において泥炭採掘が行われている面積は、民間事業者へのヒアリングより約 150ha、排出係数(泥炭の炭素含有量)はデフォルト係数 0.2tC/ha (2006 年 IPCC ガイドライン, Vol.4, Chp.7, Table 7.4 Boreal and Temperate,

Nutrient- Poor) を用いた。この結果の概算値はおよそ 0.1ktCO₂であった。

採掘後持ち出された泥炭 (off-site) の CO₂ 排出量については、2003 年以降、土壤改良資材の生産量及び輸入手調査 (農林水産省) に、およそ 17~34kt (dry ベース) の泥炭生産量が報告されている。排出係数 (泥炭の炭素含有量) はデフォルト係数 0.45tC / t (dry) (2006 年 IPCC ガイドライン, Vol.4, Chp.7, Table 7.5 Boreal and Temperate, Nutrient- Poor) を用いた。この結果の概算値はおよそ 30~50 kt-CO₂であった。

N₂O の排出については、Tier.1 では Nutrient-Rich の場合のみが対象となることから、試算には含めていない。

以上の結果より、泥炭採掘による GHG 排出量は 24/CP.19 の閾値に加え、我が国で独自に設定した基準値 (2005 年の LULUCF 吸収量の 0.1%に相当する 90 kt-CO₂) を下回るレベルにあると想定され、「重要でない NE」とした。詳細は別添 5 を参照のこと。

c) 再計算

■ D 面積の修正に伴う再計算

森林から転用された個々の土地利用面積を求めるには森林減少面積 (D 面積) を使用している。今回の提出において森林減少面積 (D 面積) が再計算されたため、転用のない湿地の面積が全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

6.8.2. 他の土地利用から転用された湿地 (4.D.2)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、他の土地利用から転用された湿地 (過去 20 年間に於いて他の土地利用から転用されて湿地 (湛水地) になった土地) における炭素ストック変化量を取り扱う。2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 排出量は 17 kt-CO₂ であり、1990 年度比 80.9%の減少、前年度比 0.1%の減少となっている。

生体バイオマスに関しては、他の土地利用から湿地 (湛水地) に転用される際の炭素ストック変化量 (転用前の土地に存在していた生体バイオマスの損失) を算定対象とした。

枯死有機物に関しては、森林から転用された場合には CENTURY-jfos モデルを用いて転用前の森林の枯死有機物の炭素ストック量を把握し、森林から転用された湿地の炭素ストック変化量を算定した。森林以外の土地利用カテゴリーから転用された湿地の枯死有機物の炭素ストック変化量は、炭素ストックの変化が発生しないと見なし「NA」と報告した。

森林から転用された湿地における土壌の炭素ストック変化量は、転用後は貯水池 (ダム) となり土壌が嫌気状態になると想定され、有機物の分解に伴う CO₂ 排出は極めて少ないとみなされるため、「NA」として報告した。森林以外の他の土地利用から転用された湿地 (湛水地) における土壌炭素ストック変化量は、2006 年 IPCC ガイドラインに方法論が提示されておらず、現在データ不足のため算定を行っていない。したがって当該炭素プールの炭素ストック変化量は「NE」として報告した。

b) 方法論

1) 他の土地利用から転用された湿地における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

他の土地利用から湿地 (湛水地) への転用については Tier 2 の算定方法を用いた。算定式は 6.6.2.b)1)節の通りである。

■ 各種パラメータ

○ 土地利用毎の生体バイオマスストック量

土地利用の転用に伴うバイオマスストック変化量の推定には表 6-8a 及び表 6-8b のパラメータを用いた。

○ 炭素含有率 (CF)

森林の炭素含有率は我が国の針葉樹と広葉樹の平均値 (0.50 t-C/t-d.m.) を用いた。森林以外の炭素含有率は、2006年 IPCC ガイドラインに従い、デフォルト値 (草地は 0.47 t-C/t-d.m.、それ以外は 0.5 t-C/t-d.m.) を用いた。

■ 活動量 (面積)

他の土地利用から転用された湿地 (ダム) 面積は、森林から転用されたダム面積と、転用前の土地利用毎の面積割合のうち森林に該当する割合を基に推計した。森林から転用された面積は、6.6.2. b) 1) 節に記述した方法で把握した。ダム転換前の土地の種類別面積については、一部の大規模ダムにおける水没農地面積、水没戸数の情報より、農用地 (農地及び草地)、開発地、それ以外の土地利用からダムに転用された割合を推計した。農用地から転用された湿地面積の内訳は、他のカテゴリーと同様に、現況土地利用の面積割合を用いて農地と草地に按分して把握した。他の土地利用から転用された湿地の総面積から、森林、農地、草地、開発地からの転用面積を差し引いた剰余分は、その他の土地からの転用面積とした。

なお、CRF の「Table 4.D SECTORAL BACKGROUND DATA FOR LAND USE, LAND-USE CHANGE AND FORESTRY – Wetlands」に示されている面積は、2018 年度単年の転用面積ではなく、過去 20 年間の積算値であることに留意されたい。

表 6-37 他の土地利用から転用された湿地面積 (単年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された湿地	kha	0.43	1.72	2.04	0.20	0.60	0.60	0.31	0.31	0.13	0.13	0.31	0.31	0.09	0.09
森林から転用された湿地	kha	0.31	1.24	1.48	0.15	0.43	0.43	0.22	0.22	0.09	0.09	0.22	0.22	0.07	0.07
農地から転用された湿地	kha	0.02	0.10	0.13	0.01	0.04	0.04	0.02	0.02	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01
田	kha	0.01	0.02	0.09	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01	0.003	0.01	0.01	0.01	0.003	0.003
普通畑	kha	0.01	0.05	0.03	0.001	0.01	0.01	0.01	0.01	0.003	0.002	0.006	0.005	0.002	0.002
樹園地	kha	0.005	0.02	0.01	0.0004	0.003	0.003	0.002	0.002	0.001	0.001	0.001	0.001	0.0005	0.001
草地から転用された湿地	kha	0.007	0.029	0.019	0.001	0.006	0.006	0.004	0.004	0.002	0.001	0.003	0.003	0.001	0.001
開発地から転用された湿地	kha	0.002	0.006	0.007	0.001	0.002	0.002	0.001	0.001	0.0005	0.0005	0.001	0.001	0.0003	0.0003
その他の土地から転用された湿地	kha	0.09	0.34	0.41	0.04	0.12	0.12	0.06	0.06	0.03	0.03	0.06	0.06	0.02	0.02

2) 他の土地利用から転用された湿地における枯死有機物の炭素ストック変化量

■ 算定方法

○ 枯死有機物炭素ストック量

森林から転用された湿地における枯死有機物の炭素ストック変化量は、6.6.2. b) 2) 節の算定方法と同様に、Tier 2 の算定方法を適用して算定した。

■ 各種パラメータ

○ 枯死有機物炭素ストック量

転用前の森林における枯死木及びリターの平均炭素ストック量は表 6-9 及び表 6-10 の通りである。転用直後は枯死有機物の蓄積がゼロになり、その後の蓄積はないという想定の下で算定を行っている。

■ 活動量 (面積)

過去 20 年間に他の土地利用から転用された湿地の面積は、当該年の湿地の総面積から過去 20 年間転用されなかった湿地の面積を差し引くことで把握した。当該面積は表 6-38 に示さ

れている。

表 6-38 他の土地利用から転用された湿地面積 (20年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された湿地	kha	28.5	24.7	27.0	21.5	19.8	20.0	19.9	19.0	18.5	18.0	16.6	13.9	13.4	11.2
森林から転用された湿地	kha	20.6	17.9	19.6	15.5	14.4	14.5	14.4	13.8	13.4	13.1	12.0	10.1	9.7	8.1
農地から転用された湿地	kha	1.8	1.5	1.6	1.3	1.2	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1	1.0	0.9	0.8	0.7
田	kha	0.7	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.4
普通畑	kha	0.8	0.7	0.7	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.2
樹園地	kha	0.3	0.3	0.3	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
草地から転用された湿地	kha	0.3	0.3	0.4	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1
開発地から転用された湿地	kha	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.05	0.05	0.04
その他の土地から転用された湿地	kha	5.7	4.9	5.4	4.3	4.0	4.0	4.0	3.8	3.7	3.6	3.3	2.8	2.7	2.2

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性の評価

生体バイオマス、枯死有機物、及び土壌に関する不確実性は、各パラメータ及び活動量ごとに、現地調査データ、専門家判断、または2006年IPCCガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。その結果、排出量が計算されている年については、他の土地利用から転用された湿地による排出量全体の不確実性は21%と評価された。

■ 時系列の一貫性

6.6.2. b) 1) 節で説明した通り、森林からの転用面積の把握方法が1990～2004年度までと2005年度以降とで異なっているものの、当該カテゴリーの時系列の一貫性は基本的に確保されている。

d) QA/QC と検証

2006年IPCCガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリQC手続きを実施している。一般的なインベントリQCには、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

■ D面積の修正に伴う再計算

森林から転用された土地利用の面積推計に利用している森林減少面積(D面積)が再計算されたため、当該カテゴリーの生体バイオマス(全年度)及び2005年度以降の枯死有機物の炭素ストック変化量を再計算した。

■ 単年生作物の転用前後のバイオマスストック量の修正に伴う再計算

単年生作物のバイオマスストック量の設定値を変更したため、農地から他の土地への転用が生じた際のバイオマス損失量に変更となり、農地から転用された湿地における生体バイオマス炭素変化量は全年にわたり再計算した。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

■ 湿地面積把握の想定の妥当性

現在の算定では、湿地を国土利用区分における「水面」、「河川」、「水路」と想定した上で面積を把握しているが、把握漏れがある可能性がある。したがって、面積把握の想定妥当性について現在検討を行っている。

■ 溜め池の面積把握方法

人為的な貯水池の造成については、ダムその他に溜め池の造成が考えられるが、現在は把握していない。したがって、溜め池の面積把握方法について現在検討を行っている。

■ 他の土地利用から湿地への転用に伴う土壌炭素ストック変化量の算定方法

新たな知見等が入手できた際には、算定方法に関する検討を行う。

6.9. 開発地 (4.E)

開発地は、他の土地利用カテゴリーに該当しない、交通基盤や居住地を含んだ全ての開発された土地である。開発地では、都市公園や特別緑地保全地区等の都市緑地において生育している樹木が炭素を固定している。

我が国における開発地面積は約 387 万 ha であり、国土面積の約 10.2% を占めている。当該カテゴリーにおける炭素蓄積変化量は、1990 年度に 2,865 kt-CO₂ の排出、前年度に 156 kt-CO₂ の吸収、2018 年度では 27 kt-CO₂ の吸収となった(ただし、有機質土壌地が開発地に転用された場合、転用後の排水等活動に伴う CH₄、N₂O 排出量 6.6 kt-CO₂ 換算は除く)。

本節では開発地を「転用のない開発地 (4.E.1.)」及び「他の土地利用から転用された開発地 (4.E.2.)」のカテゴリーに区分し、以下の小節においてその 2 つのカテゴリーについて別個に記述する。

開発地において算定される炭素プールは生体バイオマス、枯死有機物の内リター及び土壌である。一部下位区分の枯死木は生体バイオマスに含まれている。

算定対象である都市緑地を都市公園等の造成する「施設緑地」と、保全措置が講じられ永続性が担保される「特別緑地保全地区」に分類する。

【都市緑地】

- 「施設緑地」(都市公園、道路緑地、港湾緑地、下水道処理施設における外構緑地、緑化施設整備計画認定緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地)
- 特別緑地保全地区

表 6-39 開発地における炭素ストック変化量に起因する排出・吸収量

ガス	カテゴリー	炭素プール	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO ₂	4.E. 開発地	合計	kt-CO ₂	2,865	1,288	-447	-962	-296	-384	-814	-570	-443	-283	107	196	-156	-27
		生体バイオマス	kt-CO ₂	1,875	728	-537	-928	-466	-557	-843	-601	-563	-406	-97	-12	-239	-115
		枯死木	kt-CO ₂	826	575	292	230	364	363	261	260	316	315	366	365	276	275
		リター	kt-CO ₂	384	261	122	91	158	158	109	109	137	137	164	164	121	121
		鉱質土壌	kt-CO ₂	-270	-323	-368	-394	-386	-381	-372	-368	-361	-355	-352	-346	-339	-331
		有機質土壌	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	4.E.1. 転用のない開発地	合計	kt-CO ₂	-1,386	-1,666	-1,879	-2,041	-2,052	-2,040	-1,994	-1,960	-1,910	-1,785	-1,665	-1,586	-1,512	-1,424
		生体バイオマス	kt-CO ₂	-1,154	-1,377	-1,543	-1,673	-1,685	-1,675	-1,636	-1,603	-1,559	-1,437	-1,320	-1,246	-1,178	-1,097
		枯死木	kt-CO ₂	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE	IE,NE
		リター	kt-CO ₂	-11	-13	-15	-17	-17	-17	-16	-16	-16	-16	-16	-15	-15	-15
		鉱質土壌	kt-CO ₂	-222	-276	-321	-351	-351	-348	-342	-341	-335	-331	-329	-324	-319	-312
		有機質土壌	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	4.E.2. 他の土地から転用された開発地	合計	kt-CO ₂	4,251	2,954	1,432	1,079	1,756	1,656	1,180	1,390	1,467	1,502	1,772	1,782	1,356	1,397
		生体バイオマス	kt-CO ₂	3,029	2,104	1,006	745	1,218	1,119	793	1,002	996	1,031	1,223	1,234	939	982
		枯死木	kt-CO ₂	826	575	292	230	364	363	261	260	316	315	366	365	276	275
		リター	kt-CO ₂	394	274	138	108	174	175	125	125	153	153	179	179	136	136
		鉱質土壌	kt-CO ₂	-48	-47	-47	-43	-35	-33	-30	-28	-25	-24	-23	-21	-20	-19
		有機質土壌	kt-CO ₂	65	59	55	49	43	41	39	36	35	33	32	31	29	29

6.9.1. 転用のない開発地 (4.E.1)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、転用のない開発地（過去 20 年間に於いて転用されず、継続して開発地であった土地）の中の都市緑地における生体バイオマス、枯死有機物の内リター及び土壌の炭素ストック変化量を取り扱う。「転用のない開発地」は「特別緑地保全地区」、「施設緑地」及び「その他」の 3 つの下位区分に分けられる。このうち「特別緑地保全地区」及び「施設緑地」における炭素ストック変化量を算定する。また、京都議定書第 3 条 4 の下での植生回復（Revegetation、以下、「RV」）活動において報告される炭素ストック変化量は、1990 年以降に造成された「施設緑地」における炭素ストック変化量に相当し⁸、「特別緑地保全地区」は植生回復活動の該当地には含まれない。CRF においては、「特別緑地保全地区」は「RV 非対象緑地」、「施設緑地」は「RV 対象地」、「その他」は「都市緑地以外」と記載する。「その他」に含まれている可能性のある炭素ストック変化量（個人住宅の庭に生育する樹木など）は、活動量が入手不可能であるため、「NE」として報告する。また、リター及び土壌については、パラメータが入手可能な「都市公園」及び「港湾緑地」の炭素ストック変化量のみを報告する。2018 年度における当該カテゴリーからの CO₂ 純吸収量は 1,424 kt-CO₂ であり、1990 年度比 2.7% の増加、前年度比 5.8% の減少となっている。

b) 方法論

1) 転用のない開発地における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

緑地の特性の違いにより、地域制緑地である特別緑地保全地区には Tier 2a の算定方法を用い、施設緑地には Tier 2b の算定方法を用いた。なお、開発地内の緑地における我が国での実測調査の結果、2006 年 IPCC ガイドラインにおける Tier 2a 及び Tier 2b で設定されたデフォルト実成長期間の 20 年を超えても成長が続いていることが確認され、30 年生までについては、0～20 年生の樹木吸収と同じ係数を用いた算定が可能との結論となった。したがって、造成後 30 年までを対象として、Tier 2 法の 20 年生以下の緑地と同様の算定方法を用いて算定を行った。

○ Tier 2a：特別緑地保全地区

$$\Delta C_{SSaLB} = \Delta C_{LBaG} - \Delta C_{LBaL}$$

$$\Delta C_{LBaG} = A \times PW \times BI$$

ΔC_{SSaLB} : 特別緑地保全地区における生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]

ΔC_{LBaG} : 特別緑地保全地区における生体バイオマス成長に伴う炭素ストック増加量 [t-C/yr]

ΔC_{LBaL} : 特別緑地保全地区における生体バイオマス損失に伴う炭素ストック損失量 [t-C/yr]

※2006 年 IPCC ガイドラインに準拠し「0」と想定

A : 指定後 30 年以下の特別緑地保全地区面積 [ha]

PW : 樹林面積率（保全地区面積当りの樹林率）（100%と仮定）

BI : 単位樹林面積当りの成長量 [-C/ ha crown cover/yr]

○ Tier 2b：施設緑地

$$\Delta C_{SSbLB} = \sum_i (\Delta C_{LBbG_i} - \Delta C_{LBbL_i})$$

$$\Delta C_{LBbG_i} = \Delta B_{LBbG_i}$$

⁸ 特別緑地保全地区は植生回復活動の定義から外れるため、当該活動には含まれない。

$$\Delta B_{LBbGi} = \sum_j NT_{i,j} \times C_{Ratei,j}$$

- ΔC_{SSbLB} : 施設緑地における生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]
- ΔC_{LBbGi} : 施設緑地 i における生体バイオマス成長に伴う炭素ストック増加量 [t-C/yr]
- ΔC_{LBbLi} : 施設緑地 i における生体バイオマス損失に伴う炭素ストック損失量 [t-C/yr]
※2006年 IPCC ガイドラインに準拠し「0」と想定
- ΔB_{LBbGi} : 施設緑地 i における年間バイオマス成長量 [t-C/yr]
- $C_{Ratei,j}$: 気候区分 j の施設緑地 i における樹木個体当たりの年間生体バイオマス成長量 [t-C/本/yr]
※表 6-40 参照
- $NT_{i,j}$: 気候区分 j の施設緑地 i における樹木本数
- i : 施設緑地タイプ (都市公園、道路緑地、港湾緑地、下水道処理施設における外構緑地、緑化施設整備計画認定緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地)
- j : 気候区分 (北海道、北海道以外)

■ 各種パラメータ

○ Tier 2a : 単位樹林面積当たりの年間生体バイオマス成長量 (特別緑地保全地区)

特別緑地保全地区における樹木の年間生体バイオマス成長量は、2006年 IPCC ガイドライン、8.9頁に示されるデフォルト値 2.9 t-C/ha crown cover/yr を用いた。

○ Tier 2b : 樹木個体当たりの年間生体バイオマス成長量 (施設緑地)

施設緑地における樹木の年間生体バイオマス成長量は、以下のパラメータを用いた。

表 6-40 施設緑地における樹木の年間生体バイオマス成長量

気候区分		高木 1 本当たりの 年間生体バイオマス成長量 [t-C/本/yr]	備考
施設緑地	北海道	(道路緑地以外) 0.0098 (道路緑地) 0.0103	2006年 IPCC ガイドラインの 8.10 頁、表 8.2 に示されているデフォルト値 0.0033~0.0142 (t-C/本/yr) と、日本の樹種別の年間生体バイオマス成長量 (ケヤキ 0.0204、イチョウ 0.0103、シラカシ 0.0095、クスノキ 0.0122 t-C/本/yr) を用いて、サンプル抽出した都市公園の樹種構成比により合成した ⁹ 。また、道路緑地は、道路緑地のみの樹種構成比 ¹⁰ から合成した。
	北海道以外	(道路緑地以外) 0.0105 (道路緑地) 0.0108	

■ 活動量

CRF テーブルにおいて報告される「転用のない開発地」の面積は、算定対象年度の全開発地面積から、「他の土地利用から転用された開発地」面積の 20 年間の累計値を差し引くことによって算定した。また、「転用のない開発地」面積を「特別緑地保全地区」、「施設緑地」及び「その他」の 3 つの下位区分に分けて報告している。このうち「特別緑地保全地区」及び「施設緑地」における 30 年生以下の樹木の炭素ストック変化量を算定する。

我が国は、30 年生以下の樹木を、「造成・指定後 30 年以内の都市緑地に生育する樹木」と

⁹ ケヤキ、イチョウ、シラカシ、クスノキの年間生体バイオマス成長量については、国土交通省国土技術政策総合研究所が実測した結果を用いて算出した各樹種の生体バイオマスの成長曲線 (松江他、2009) に、都市公園における現地調査に基づく樹種毎の平均胸高直径 (国土交通省公園緑地課、2005) を適用し算出した。

¹⁰ 全国の道路緑地を対象とした国土技術政策総合研究所資料 (国土交通省、2009) から樹種構成比を把握。

想定した。Tier 2aには、特別緑地保全地区における樹林面積（＝指定後30年以下の特別緑地保全地区の面積×樹林面積率）を活動量として適用した。Tier 2bには、施設緑地内における高木本数を活動量として適用した。

表 6-41 転用のない開発地における面積（20年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
転用のない開発地	kha	2,344.9	2,681.2	2,900.4	3,090.5	3,245.3	3,288.7	3,319.2	3,372.6	3,404.6	3,441.6	3,465.3	3,486.7	3,520.9	3,538.1
施設緑地	kha	89.8	107.1	121.2	131.4	131.6	130.8	127.6	125.5	122.3	114.8	107.7	102.9	98.4	92.9
特別緑地保全地区	kha	1.9	3.7	3.8	4.1	4.2	4.2	4.4	4.4	4.5	4.5	4.6	4.7	4.7	4.7
その他	kha	2,253.3	2,570.4	2,775.4	2,955.0	3,109.4	3,153.7	3,187.1	3,242.6	3,277.9	3,322.3	3,352.9	3,379.2	3,417.8	3,440.5

○ Tier 2a：樹林面積（特別緑地保全地区）

特別緑地保全地区における樹木の貯蔵量の変化の活動量については、国土交通省調べの特別緑地保全地区の面積に樹林面積率を乗じて算定しており、その樹林面積率は100%と仮定されている。

表 6-42 指定後30年以下の特別緑地保全地区面積

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
合計	kha	1.9	3.7	3.8	4.1	4.2	4.2	4.4	4.4	4.5	4.5	4.6	4.7	4.7	4.7
特別緑地保全地区	kha	0.6	0.9	1.4	1.9	2.0	1.9	1.9	2.0	2.0	2.0	2.1	2.2	2.2	2.2
近郊緑地特別保全地区	kha	1.2	2.7	2.4	2.2	2.3	2.3	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5

○ Tier 2b：高木本数（施設緑地）

施設緑地における高木本数の算出方法については、京都議定書第3条4の下での植生回復活動と同様の方法で算定した。各施設緑地における活動量算定方法の概要は以下の通りである。なお、これら活動量の算定方法の詳細については第11章の11.4.2.7.a.節に詳述されている。

【都市公園、港湾緑地、下水道処理施設における外構緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地】

これら施設緑地における高木本数は、各施設緑地の面積全体に国土の土地利用比率を乗じて対象面積を算出し、それぞれの対象面積に単位面積当たりの高木本数を乗ずることで算定した。各施設緑地における単位面積当たりの高木本数は表6-43の通り。

表 6-43 単位面積当たりの高木本数

項目	単位	単位面積当たりの高木本数	
		北海道	北海道以外
都市公園	本/ha	329.5	222.3
港湾緑地	本/ha	329.5	222.3
下水道処理施設における外構緑地	本/ha	129.8	429.2
河川・砂防緑地	本/ha	1470.8	339.0
官庁施設外構緑地	本/ha	108.8	108.8
公的賃貸住宅地内緑地	本/ha	219.9	219.9

【道路緑地】

本施設緑地における高木本数は、以下の手順で算定を行った。

1. 1987年度、1992年度、2007年度、及び約束期間の当該年度に関する道路緑地樹木現況調査のデータより整備後30年間の樹木本数を把握。
2. 「1」の高木本数に対し、500m²以上の土地に植栽されている割合を乗じる。
3. 「2」の高木本数に、国土の土地転用割合において、転用のない開発地の割合を乗じる。

「3」の値が、道路緑地において活動量となる高木本数となる。

【緑化施設整備計画認定緑地】

本施設緑地における高木本数は、全ての施設における個別の植栽本数が把握できることから、それらを積み上げた高木本数を用いた。

2) 転用のない開発地におけるリターの炭素ストック変化量

本カテゴリーにおいては、都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック変化量を算定する。枯死木については、生体バイオマスの活動量データに含まれているため「IE」とする。都市公園及び港湾緑地以外の各下位区分におけるリターの炭素ストック変化量は、活動量の入手が困難であるため算定対象外とする。

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインに示されているデシジョンツリーに従い、我が国独自の算定方法を用いた。算定式は以下の通りである。

$$\Delta C_{SSLit} = \sum_i (A_i \times L_{it_i})$$

ΔC_{SSLit} : 転用のない開発地におけるリターの炭素ストック変化量 [t-C/yr]

A : 転用のない開発地における都市公園又は港湾緑地の面積 [ha]

L_{it} : 都市公園又は港湾緑地におけるリターの単位面積当たりの炭素ストック変化量 [t-C/ha/yr]

i : 施設緑地タイプ (都市公園又は港湾緑地)

■ 各種パラメータ

本カテゴリーにおけるリターの対象は、高木からの自然落下による落葉・落枝のみを対象としている。都市公園における単位面積当たりのリターの炭素ストック変化量は、都市公園における現地調査の結果より得られた高木1本当たりの年間リター発生量（北海道、北海道以外共通：0.0006 t-C/本/yr、単位面積当たりの高木本数、及び清掃等による敷地外への持ち出し率（54.4%）を用いて算定した。その結果、北海道 0.0882 t-C/ha/yr、北海道以外 0.0594 t-C/ha/yr となった。なお、リターにおける炭素含有率は、2006年 IPCC ガイドライン（8.21頁）に示されているデフォルト値（0.4 t-C/t-d.m.）を用いた。

■ 活動量

第11章の11.5.1.1.f.a)節「転用のない土地：地上バイオマス、地下バイオマス」の活動量データに記述されている都市公園及び港湾緑地と同じ。

3) 転用のない開発地における土壌の炭素ストック変化量

単位面積当たりの土壌の炭素ストック変化量を設定した都市公園及び都市公園と整備方法が類似している港湾緑地を対象とした。植生回復地の土壌は、一般的に有機質土壌（泥炭土及び黒泥土）に該当しないため、有機質土壌は「NO」として報告し、鉱質土壌に関して報告する。

■ 算定方法

開発地に関する土壌の炭素ストック変化量については Tier 2（我が国独自のデータを使用）の算定方法に基づき算定を行った。

$$\Delta C_{SSSoils} = \sum_i (\Delta C_{Mineral_i} - L_{Organic_i})$$

$$\Delta C_{Mineral_i} = A_i \times \Delta C_{Soil_i}$$

$\Delta C_{SSSoils}$: 転用のない開発地における土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]
$\Delta C_{Mineral}$: 開発地における鉱質土壌の有機炭素ストック変化量 [t-C/yr]
$L_{Organic}$: 開発地における有機質土壌の排出に伴う炭素損失量 (=0) [t-C/yr]
A	: 転用のない開発地における都市公園又は港湾緑地の面積 [ha]
C_{Soil}	: 都市公園又は港湾緑地における単位面積当たりの年間有機炭素ストック変化量 [t-C/ha/yr]
i	: 施設緑地タイプ (都市公園又は港湾緑地)

■ 各種パラメータ

都市公園又は港湾緑地における単位面積当たりの土壌の炭素ストック変化量（整備後 0～20 年の統合年変化量 1.28t-C/ha/yr、整備後 21～30 年の統合年変化量 1.38t-C/ha/yr）は、第 11 章の 11.5.1.1.f. d) 節に記述している通り、整備後 30 年以内の都市公園における土壌調査結果から設定している (Tonosaki et al., 2013、国土交通省公園緑地・景観課、2015)。このため、当該パラメータを造成後（整備後）30 年以内の都市公園及び港湾緑地に適用する。

■ 活動量

第 11 章の 11.5.1.1.f. a) 節「転用のない土地：地上バイオマス、地下バイオマス」の活動量データに記述されている都市公園及び港湾緑地の面積と同じ。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性の評価

特別緑地保全地区における樹木の年間炭素ストック変化量については、2006 年 IPCC ガイドライン 8.10 頁に示されるデフォルト値を採用している。したがって、排出・吸収係数の不確実性評価のデシジョンツリーに従い、2006 年 IPCC ガイドライン 8.12 頁に示された不確実性の標準値を採用し、 $\pm 50\%$ とする。また、特別緑地保全地区の生体バイオマスにおける活動量の不確実性は、活動量のデシジョンツリーに従い、専門家判断による値を採用した。

一方、都市公園、道路緑地、港湾緑地、下水道処理施設における外構緑地、緑化施設整備計画認定緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地におけるバイオマス、リター、土壌に関する不確実性は 41%、61%、38%であった。

その結果、転用のない開発地による吸収量全体の不確実性は 33%と評価された。

■ 時系列の一貫性

6.6.2. b) 1) 節で説明した通り、森林からの転用面積の把握方法が 1990～2004 年度までと 2005 年度以降とで異なっているものの、当該カテゴリーの時系列の一貫性は基本的に確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に記述している。

e) 再計算

■ D 面積の修正に伴う再計算

森林から転用された個々の土地利用面積を求めるには森林減少面積 (D 面積) を使用している。今回の提出において森林減少の面積 (D 面積) が再計算されたため、転用のない開発

地の面積、及び当該カテゴリーにおける生体バイオマス、枯死有機物、鉍質土壌の炭素ストック変化量が全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

■ 特別緑地保全地区における単位緑化面積あたりの生体バイオマス成長量

特別緑地保全地区における単位緑化面積あたりの生体バイオマス成長量は、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いているが、最終的に適用するパラメータについて、更なる精査を進める必要がある。そのため対象活動の性質を踏まえ、我が国の実情に最適なパラメータの精査を進める。

■ 開発地の面積把握方法の妥当性

国土利用カテゴリーにおける開発地の想定の妥当性について現在検討中である。

6.9.2. 他の土地利用から転用された開発地 (4.E.2)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、過去20年以内に他の土地利用から転用されて開発地になった土地における炭素ストック変化量を取り扱う。枯死有機物については、CENTURY-jfos モデルを用いて森林の枯死有機物の炭素ストック量を把握し、森林から転用された開発地の炭素ストック変化量を算定した。なお、現在の方法は「湿地から転用された開発地」及び「その他の土地から転用された開発地」の面積を把握できないため、当該サブカテゴリーの炭素ストック変化量はいずれも「NO」を報告した。

2018年度における当該カテゴリーからのCO₂排出量は1,397 kt-CO₂であり、1990年度比67.1%の減少、前年度比3.0%の増加となっている。他の土地利用から転用された開発地からの排出量は、1990年度から1993年度まで増加し、1993年度の後には、2003年度まで減少傾向にあり、2003年度から現在までは増減の変動を繰り返す傾向にある。これらの傾向の要因は、森林から開発地への土地転用面積の年次変化に起因する。

b) 方法論

1) 他の土地利用から転用された開発地における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

他の土地利用から転用された開発地の生体バイオマスの炭素ストック変化量は、転用直前直後の炭素ストック変化量に、施設緑地に転用された部分の炭素ストック変化量を加算することで算定した。他の土地利用から転用された開発地の転用直後の生体バイオマスの炭素ストック変化量は、2006年 IPCC ガイドライン第4巻 2.3.1.2節の式を用いて各土地利用から開発地に転用された面積に、転用前の生体バイオマス蓄積量から転用直後の生体バイオマス蓄積量の差分と、炭素含有率を乗じることにより算定した。他の土地利用から転用された施設緑地に関しては、転用後に植栽された樹木の成長により生体バイオマスが増加するため、転用直後の炭素ストック変化量に、2006年 IPCC ガイドライン第4巻 8.2.1.1節の Tier 2bの方法を用いて算定した転用後の年次炭素ストック変化量を加算した。

$$\Delta C_{LSLB} = \sum_i \{A_i \times (CR_a \times CF_a - CR_{bi} \times CF_{bi})\} + \sum_i (\Delta C_{LS(UG)G_i} - \Delta C_{LS(UG)L_i})$$

$$\Delta C_{LS(UG)G_i} = \Delta B_{LS(UG)G_i}$$

$$\Delta B_{LS(UG)Gi} = \sum_j NT_{ij} \times C_{Rate_{i,j}}$$

- ΔC_{LSLB} : 他の土地利用から転用された開発地における生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]
- A_I : 他の土地利用 I から転用された開発地面積 [ha/yr]
- CR_a : 開発地に転用された直後のバイオマス乾物重 [t-d.m./ha]
- CR_{bI} : 開発地に転用される前の土地利用 I におけるバイオマス乾物重 [t-dm/ha]
- CF_a : 転用後の土地利用カテゴリーの炭素含有率（開発地） [t-C/t-d.m.]
- CF_{bI} : 転用前の土地利用カテゴリーの炭素含有率 [t-C/t-d.m.]
- $\Delta C_{LS(UG)Gi}$: 他の土地利用から転用された施設緑地 i における生体バイオマス成長に伴う炭素ストック増加量 [t-C/yr]
- $\Delta C_{LS(UG)Li}$: 他の土地利用から転用された施設緑地 i における生体バイオマス損失に伴う炭素ストック減少量 [t-C/yr] ※算定対象となる樹木の平均樹齢が 30 年生以下であるため、国内の調査結果を踏まえた上で 2006 年 IPCC ガイドラインに従いゼロと想定する。
- $\Delta B_{LS(UG)Gi}$: 施設緑地 i における年間生体バイオマス成長量 [t-C/yr]
- NT_{ij} : 気候区分 j の施設緑地 i における樹木本数 [本]
- $C_{Rate_{ij}}$: 気候区分 j の施設緑地 i における樹木個体当たりの年間生体バイオマス成長量 [t-C/本/yr] (表 6-40 参照)
- i : 転用後の施設緑地タイプ（都市公園、道路緑地、港湾緑地、下水道処理施設における外構緑地、緑化施設整備計画認定緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地）
- j : 気候区分（北海道、北海道以外）

■ 各種パラメータ

○ 土地利用毎の生体バイオマスストック量

転用前後の生体バイオマスストック量については表 6-8a 及び表 6-8b に示すとおりである。転用後の都市緑地における樹木の生体バイオマス損失に伴う炭素ストック損失量は、対象となる都市緑地が 1990 年以降に造成された都市緑地であり、対象となる樹木の樹齢が 30 年生以下であるため、国内の調査結果（国土交通省公園緑地・景観課、2014）を踏まえた上で 2006 年 IPCC ガイドラインに従いゼロと想定した。転用後の都市緑地における樹木の年間生体バイオマス成長量は表 6-40 に示すとおりである。

○ 炭素含有率（CF）

森林の炭素含有率は我が国の針葉樹と広葉樹の平均値（0.50 t-C/t-d.m.）を用いた。森林以外の炭素含有率は、2006 年 IPCC ガイドラインに従い、デフォルト値（草地は 0.47 t-C/t-d.m.、それ以外は 0.5 t-C/t-d.m.）を用いた。

■ 活動量

○ 他の土地利用から開発地への転用面積

他の土地利用から開発地への転用面積に関しては、森林、農地及び草地から開発地への転用面積のみを把握した。湿地及びその他の土地から開発地へ転用された土地の面積は、データの入手が不可能なため、当該土地利用区分において計上は行わず、「IE」として報告し、「転用のないその他の土地」において計上することとした。なお、CRF の「Table 4.E SECTORAL BACKGROUND DATA FOR LAND USE, LAND-USE CHANGE AND FORESTRY – Settlement」

に示されている面積は、単年の転用面積ではなく、過去20年間の積算値であることに留意されたい。

【森林からの転用】

6.6.2. b) 1) 節に記述したのと同様の方法で把握した。

【農地からの転用】

「耕地及び作付面積統計」のかい廃面積における工場用地、道路・鉄道用地、宅地等、農林道等への転用面積のうちの田、普通畑、樹園地面積を用いた。

【草地からの転用】

「耕地及び作付面積統計」のかい廃面積における工場用地、道路・鉄道用地、宅地等、農林道等、への転用面積のうちの牧草地面積、「農地の移動と転用」の採草放牧地における開発地転用面積を用いた。

表 6-44 他の土地利用から転用された開発地の面積（単年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された開発地	kha	39.5	33.0	21.9	14.7	16.1	15.1	12.2	12.2	14.6	16.2	17.4	17.2	14.3	18.6
森林から転用された開発地	kha	14.9	10.4	5.3	4.2	6.6	6.6	4.7	4.7	5.8	5.8	6.7	6.7	5.1	5.1
農地から転用された開発地	kha	21.4	19.5	14.5	9.2	8.2	7.2	6.3	6.4	7.5	8.8	9.0	8.9	7.8	11.6
田から転用された開発地	kha	13.0	12.1	9.5	6.0	5.0	4.1	3.5	3.9	4.3	5.0	5.1	5.3	4.6	7.4
普通畑から転用された開発地	kha	0.5	0.3	0.3	0.3	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
樹園地から転用された開発地	kha	12.5	11.8	9.2	5.8	4.8	4.0	3.4	3.8	4.2	5.0	5.1	5.2	4.6	7.3
草地から転用された開発地	kha	3.2	3.1	2.1	1.3	1.3	1.3	1.2	1.1	1.4	1.6	1.6	1.5	1.4	1.8
湿地から転用された開発地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
その他の土地から転用された開発地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE

○ 他の土地利用から都市緑地への転用面積及び樹木本数

他の土地利用から都市緑地への転用面積は、各都市緑地（都市公園、道路緑地、港湾緑地、下水道処理施設における外構緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地）のそれぞれの面積全体に、開発地面積に対する転用された開発地面積比率を乗じて算出した。樹木本数については、他の土地利用からそれぞれの都市緑地への転用面積に単位面積当たりの樹木本数を乗じて算出した。これら活動量についての詳細な説明は、第11章の11.4.2.7.a.節で提供されている。

2) 他の土地利用から転用された開発地における枯死有機物の炭素ストック変化量

本カテゴリーにおいては、森林から転用された開発地における枯死木及びリターの炭素ストック変化量、並びに他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック変化量を算定する。

枯死木に関しては、森林から転用された開発地における枯死木の炭素ストック変化量についてのみ算定した。算定方法としては2006年IPCCガイドラインの「他の土地利用から農地への転用」の算定方法に従い、Tier2の算定方法を用いた。他の土地利用から転用された施設緑地において、転用後1年間で発生する枯死木については、生体バイオマスの活動量データに含まれているため「IE」とする。

リターに関しては、森林から転用された開発地におけるリターの炭素ストック変化量、及び他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック変化量について算定した。森林から転用された開発地におけるリターの炭素ストック変化量の算定方法としては2006年IPCCガイドラインの「他の土地利用から農地への転用」の算定方法に従い、Tier2の算定方法を用いた。また、他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック変化量の算定方法は、2006年IPCCガイドラインに算定方法

が記載されていないため、我が国独自の算定方法を用いた。また、都市公園及び港湾緑地以外の各下位区分におけるリターの炭素ストック変化量は、活動量の入手が困難であるため算定対象外とする。

現在の方法は「湿地から転用された開発地」及び「その他の土地から転用された開発地」の面積を把握できないため、当該炭素プールの炭素ストック変化量はいずれも「NO」を報告した。

■ 算定方法

$$\Delta C_{LS} = \Delta C_{FS} + \Delta C_{LSLit}$$

ΔC_{LS} : 他の土地から転用された開発地における枯死有機物の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

ΔC_{FS} : 森林から転用された開発地における枯死有機物の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

ΔC_{LSLit} : 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック変化量 [t-C/yr]

○ 森林から転用された開発地における枯死有機物の炭素ストック変化量

「森林から転用された開発地」における枯死有機物の炭素ストック変化量は、CENTURY-jfos モデルを用いて計算した国独自の係数を用いた Tier2 の方法を用いて算定した。なお、当該サブカテゴリーの枯死有機物の炭素ストックは、転用が行われた年に全て酸化し CO₂ として排出されると想定した。

$$\Delta C_{FS} = \sum_i \{(C_{after_i} - C_{before_i}) \times A\}$$

ΔC_{FS} : 森林から転用された開発地における枯死有機物の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

C_{after_i} : 転用後の枯死木又はリターの炭素ストック量 [t-C/ha]

※転用後の炭素ストック量はゼロと想定

C_{before_i} : 転用前の枯死木又はリターの炭素ストック量 [t-C/ha]

A : 算定対象年度に森林から開発地に転用された面積 [ha]

i : 枯死有機物のタイプ (枯死木又はリター)

○ 他の土地利用から転用された都市緑地内の都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック変化量

$$\Delta C_{LSLit} = \sum_{I,i} \{A_i \times (C_{AfterLit_i} - C_{BeforeLit_i}) + A_i \times Lit_i\}$$

ΔC_{LSLit} : 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック変化量 [t-C/yr]

A : 過去1年間に他の土地利用から転用された面積 [ha]

$C_{AfterLit}$: 土地転用直後のリターの炭素ストック量 [t-C/ha]

$C_{BeforeLit}$: 土地転用直前のリターの炭素ストック量 [t-C/ha]

Lit : 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地における単位面積当たりのリターの1年間の炭素ストック変化量 [t-C/ha/yr]

I : 転用前の土地利用カテゴリー

i : 転用後の施設緑地タイプ (都市公園、港湾緑地)

■ 各種パラメータ

○ 森林から転用された開発地における枯死有機物炭素ストック量

転用前の森林における枯死木及びリターの平均炭素ストック量は表 6-9 及び表 6-10 にあ

る通りである。1990年度から2004年度にかけて平均炭素ストック量は求められていないため、それらの年には2005年度値を代用している。また、一般的な開発地への転用については、転用直後は枯死有機物の蓄積がゼロになり、その後の蓄積はないという想定の下で算定を行っている。

○ 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック量

他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地においては、リターを含んだ転用前の地盤をそのまま活用するか、または地盤の上に客土を施すことで転用前の枯死有機物の蓄積を地中に封印するため、リターを外部へ持ち出すことがない。従って、転用前の土地にストックされていたリターは、土地の転用後も減少することはない。また、土地転用直後に植栽された樹木が即座にリターを生じさせることはないため、リターの新規蓄積はほとんど発生しない。以上のことから転用前後のリターの炭素ストック変化量はゼロとみなすこととした。転用後1年間で発生するリターの量については、転用後の緑地内の高木からの落葉・落枝の自然落下により炭素ストックが転用のない都市公園及び港湾緑地と同様に蓄積されるとい調査結果に基づき、転用のない都市公園及び港湾緑地と同様の方法により算定を行った。

■ 活動量（面積）

○ 森林から転用された開発地における枯死有機物炭素ストック量

過去20年に森林から転用された開発地面積を用いた。面積については表6-45を参照のこと。

表 6-45 他の土地利用から転用された開発地の面積（20年）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用された開発地	kha	864.1	747.8	693.6	607.5	514.7	490.3	459.8	426.4	403.4	385.4	369.7	356.3	341.1	331.9
森林から転用された開発地	kha	284.2	281.5	261.5	218.5	161.0	152.7	140.2	126.0	118.0	112.9	109.2	107.7	105.3	103.1
農地から転用された開発地	kha	520.6	409.1	376.8	338.8	307.8	293.7	278.0	261.3	247.9	236.5	226.0	215.3	204.0	197.6
田から転用された開発地	kha	320.9	252.1	236.6	215.2	197.6	188.7	178.9	168.3	159.3	151.8	144.8	137.2	129.1	124.4
普通畑から転用された開発地	kha	137.2	110.5	101.8	91.9	83.4	79.8	75.7	71.3	68.3	65.5	63.1	60.9	58.6	57.5
樹園地から転用された開発地	kha	62.4	46.5	38.5	31.6	26.8	25.2	23.4	21.7	20.4	19.2	18.1	17.2	16.3	15.7
草地から転用された開発地	kha	59.3	57.2	55.3	50.3	45.9	44.0	41.7	39.2	37.5	36.0	34.5	33.2	31.9	31.2
湿地から転用された開発地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
その他の土地から転用された開発地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE

○ 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地におけるリターの炭素ストック量

他の土地利用から都市緑地への転用面積は、生体バイオマスと同様に、都市公園及び港湾緑地それぞれの面積全体に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。他の土地利用から都市公園及び港湾緑地への転用面積及び樹木本数についての詳細な説明は、第11章の11.5.1.1.f.f)節を参照のこと。

3) 他の土地利用から転用された開発地における鉱質土壌の炭素ストック変化量

本カテゴリーにおいては、森林から転用された開発地、並びに都市公園及び都市公園と整備方法が類似している港湾緑地を対象とした。

■ 算定方法

開発地に関する土壌の炭素ストック変化量は、Tier 2（我が国独自のデータを使用）の算定方法に基づき算定を行った。

$$\Delta C_{LSSoils_all} = \Delta C_{FSSoils} + \Delta C_{LSSoils}$$

$\Delta C_{LSSoils_all}$: 他の土地利用から転用された開発地における土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

$\Delta C_{FSSoils}$: 森林から転用された開発地における土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

$\Delta C_{LS\text{Soils}}$: 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地における
 土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

$$\Delta C_{LS\text{Soils}} = \sum_i (\Delta C_{LS\text{Mineral}_i} - L_{LS\text{Organic}_i})$$

$$\Delta C_{LS\text{Mineral}_i} = \Delta A_i \times (C_{\text{AfterSoil}} - C_{\text{BeforeSoil}}) + A_i \times \Delta C_{\text{Soil}_i}$$

$\Delta C_{LS\text{Mineral}}$: 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地における
 鉱質土壌の炭素ストック変化量 [t-C/yr]

$L_{LS\text{Organic}}$: 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地における
 有機質土壌の排出に伴う炭素損失量 (=0) [t-C/yr]

ΔA : 過去1年間に他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地の面積 [ha/yr]

$C_{\text{AfterSoil}}$: 土地転用直後の土壌の炭素ストック量 [t-C/ha]

$C_{\text{BeforeSoil}}$: 土地転用直前の土壌の炭素ストック量 [t-C/ha]

A : 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地の面積 [ha]

ΔC_{Soil} : 他の土地利用から転用された都市公園及び港湾緑地における
 単位面積当たりの年間炭素ストック変化量 [t-C/ha/yr]

i : 転用後の施設緑地タイプ (都市公園又は港湾緑地)

■ 各種パラメータ

森林から転用された開発地における鉱質土壌炭素ストック変化量の算定には、表 6-11 に記載されているパラメータを用いた。なお、都市公園の造成においては転用前の場所にあった土壌は当該場所から移動されることはほとんどない。一般的に、これら土壌は転用後も同じ場所で継続的に使用されるか、または客土で覆われることになる。従って、土地の転用に伴う土壌炭素ストック変化は生じないとみなされる。

他の土地利用から転用された施設緑地における鉱質土壌炭素ストックの変化量の算定には、転用のない開発地における都市公園及び港湾緑地と同様のパラメータを用いた。

■ 活動量

○ 森林から転用された開発地

森林から転用された開発地には表 6-45 の値を用いた。

■ 他の土地利用から転用された開発地

土地利用から転用された開発地の活動量は、第 11 章の 11.5.1.1.f.f) 節に記載されている都市公園及び港湾緑地と同じ。

4) 開発地への転用時の有機質土壌からの CO₂ 排出

■ 算定方法

有機質土壌地が開発地に転用された場合は、土地利用目的に応じて地盤改良がおこなわれるのが一般的であるが、例えば道路工事などではある程度沈み込みを前提とした設計をしており、有機質土壌の分解に伴う排出が起ることが想定される。

従って、湿地ガイドラインの有機質土壌の排水に関する方法論を用い、開発地に転用された有機質土壌地の排水等に伴う排出 (on-site) 及び有機質土壌の水溶性炭素による排出 (off-site) を算定した。算定式については、6.6.1 節の転用のない農地と同様の算定式を用いたため、省略する。

■ 各種パラメータ

他の土地から転用された開発地における有機質土壌からの CO₂ 排出の算定について、2006 年 IPCC ガイドライン及び湿地ガイドラインでは開発地特有のデフォルト係数は提示されておらず、我が国の実態に即した係数は検討中であるため、我が国は主に開発地への転用が水田地域で生ずることから、水田に適用している値を代用した（6.6.1 節を参照）。

■ 活動量データ

活動量は、転用後 20 年以内の開発地の有機質土壌面積とした。他の土地から転用された開発地有機質土壌面積は、6.6.1 節に記述した方法と同様で把握した。この面積は、CRF 4(II)で報告している CH₄ 及び N₂O 排出量の算定にも使われている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性の評価

生体バイオマス、枯死有機物、及び土壌に関する不確実性は、各種パラメータ及び活動量ごとに、現地調査データ、専門家判断、または 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。その結果、他の土地利用から転用された開発地による排出量全体の不確実性は 21% と評価された。

■ 時系列の一貫性

6.6.2. b) 1) 節で説明した通り、森林からの転用面積の把握方法が 1990～2004 年度までと 2005 年度以降とで異なっているものの、当該カテゴリーの時系列の一貫性は基本的に確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に記述している。

e) 再計算

■ D 面積の修正に伴う再計算

森林から転用された個々の土地利用の面積推計に利用している森林減少面積（D 面積）が再計算されたため、当該カテゴリーの生体バイオマス、枯死有機物、鉱質土壌の炭素ストック変化量、及び有機質土壌からの CO₂ 排出量を全年にわたり再計算した。

■ 開発地への転用時の有機質土壌からの排出の新規算定に伴う再計算

有機質土壌地が開発地に転用された場合の、転用後土地からの CO₂ 排出を新たに算定したことにより、当該カテゴリーの排出量は全年にわたり再計算された。

■ 単年生作物の転用前後のバイオマスストック量の修正に伴う再計算

単年生作物のバイオマスストック量の設定値を変更したため、農地から他の土地への転用が生じた際のバイオマス損失量に変更となり、農地から転用された開発地における生体バイオマス炭素変化量は全年にわたり再計算した。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

■ 開発地の面積把握方法の妥当性

現在は、国土利用カテゴリーにおける「道路」、「宅地」、及びその他の土地の内訳として把

握できる「学校教育施設用地」、「公園・緑地等」、「交通施設用地」、「環境衛生施設用地」、「ゴルフ場、スキー場」及び「レクリエーション施設その他」をまとめて開発地と想定した上で面積を把握しているが、把握漏れがある可能性がある。そのため想定の妥当性について検討を行う。

6.10. その他の土地（4.F）

その他の土地とは、他の5つの土地利用カテゴリーに該当しない土地を指す。その他の土地の具体例として、2006年IPCCガイドラインは裸地、岩石地帯、氷床、他の5つの区分に分類されない土地を挙げている。2018年度における我が国におけるその他の土地の面積は約247万haであり、国土面積の約6.5%を占め、以下の表6-46に示されているように細分化される¹¹。

表 6-46 「その他の土地」の内訳

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
その他の土地	kha	2,204	2,267	2,223	2,206	2,276	2,275	2,310	2,304	2,300	2,295	2,302	2,314	2,335	2,357
防衛施設用地	kha	139	140	140	140	140	140	140	140	140	139	139	135	135	135
海浜	kha	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46
北方領土	kha	504	504	504	504	504	504	504	504	504	504	504	504	504	504
荒地	kha	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
その他	kha	1,516	1,577	1,534	1,517	1,586	1,585	1,620	1,615	1,610	1,607	1,613	1,629	1,650	1,672

2018年度における当該カテゴリーからのCO₂排出量は164kt-CO₂であり、1990年度比86.1%の減少、前年度比0.9%の減少となっている。

本節ではその他の土地を「転用のないその他の土地（4.F.1.）」及び「他の土地利用から転用されたその他の土地（4.F.2.）」のカテゴリーに区分し、以下の小節においてその2つのカテゴリーについて別個に記述する。

表 6-47 その他の土地の炭素ストック変化量に起因する排出・吸収量

ガス	カテゴリー	炭素プール	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CO ₂	4.F. その他の土地	合計	kt-CO ₂	1,180	976	706	189	272	254	317	221	182	190	198	207	165	164	
		生体バイオマス	kt-CO ₂	782	641	453	102	164	149	235	141	105	116	121	132	99	101	
		枯死木	kt-CO ₂	205	165	117	18	43	43	30	29	29	29	33	33	28	28	
		リター	kt-CO ₂	98	79	56	8	21	21	14	14	14	14	16	16	14	14	
		鉱質土壌	kt-CO ₂	95	90	80	61	44	41	38	36	33	30	28	26	25	21	
		有機質土壌	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	4.F.1. 転用のないその他の土地	合計	kt-CO ₂															
		生体バイオマス	kt-CO ₂															
		枯死木	kt-CO ₂															
		リター	kt-CO ₂															
		鉱質土壌	kt-CO ₂															
		有機質土壌	kt-CO ₂															
	4.F.2. 他の土地から転用されたその他の土地	合計	kt-CO ₂	1,180	976	706	189	272	254	317	221	182	190	198	207	165	164	
		生体バイオマス	kt-CO ₂	782	641	453	102	164	149	235	141	105	116	121	132	99	101	
		枯死木	kt-CO ₂	205	165	117	18	43	43	30	29	29	29	33	33	28	28	
		リター	kt-CO ₂	98	79	56	8	21	21	14	14	14	14	16	16	14	14	
		鉱質土壌	kt-CO ₂	95	90	80	61	44	41	38	36	33	30	28	26	25	21	
		有機質土壌	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO

6.10.1. 転用のないその他の土地（4.F.1）

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーは過去20年間継続してその他の土地であった土地における炭素ストック変

¹¹ 防衛施設用地は防衛省「防衛白書」、海浜は国土交通省「国土数値情報」、北方領土は「全国都道府県市町村別面積調」に基づく。

化量を取り扱う。当該カテゴリーの面積は、「全国都道府県市町村別面積調」における総国土面積から他の土地利用区分の合計面積を差し引くことにより把握している。しかしながら、本カテゴリーにおける炭素ストック変化量は、2006年 IPCC ガイドラインの記述に従い考慮していない。

表 6-48 転用のないその他の土地の面積 (20年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
転用のないその他の土地	kha	2,287.7	2,344.8	2,299.0	2,198.1	2,289.9	2,271.5	2,310.3	2,307.2	2,098.4	2,146.6	2,367.3	2,502.3	2,417.6	2,398.3

b) 再計算

特になし。

c) 今後の改善計画及び課題

特になし。

6.10.2. 他の土地利用から転用されたその他の土地 (4.F.2)

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、過去20年間に於いて他の土地利用から転用されてその他の土地になった土地における炭素ストック変化量を取り扱う。本カテゴリーの土地面積は土石採掘用に転用された土地、及び自然災害の被災地を含む。土石採掘地は人為的に岩山などが切り崩され裸地化した土地であるが、表層土壌炭素が存在しないためその他の土地に区分している。また、統計区分との一貫性という観点からも、我が国ではそのような判断となっている。衛星画像を用いた判読による土地転用の把握においても、土石採掘地は「その他の土地」に区分され、それ以外の「その他の土地」と分離できない。

2018年度における当該カテゴリーからのCO₂排出量は164 kt-CO₂であり、1990年度比86.1%の減少、前年度比0.9%の減少となっている。

生体バイオマスに関しては、森林、農地、草地からその他の土地に転用される際の炭素ストック変化量を算定対象とした。

枯死有機物に関しては、CENTURY-jfosモデルを用いて森林の枯死有機物の炭素ストック量を把握し、森林から転用されたその他の土地の炭素ストック変化量を算定した。農地及び草地から転用されたその他の土地における枯死有機物の炭素ストック変化量は、6.6.2. b) 2) 節、6.7.2. b) 2) 節の通り、転用前後の枯死有機物プールをゼロと想定していることから「NA」で報告した。

他の土地利用から転用されたその他の土地における土壌炭素ストック量に関しては、森林から転用されたその他の土地の土壌炭素ストック変化量を算定した。森林以外の土地利用カテゴリー（農地及び草地）からの転用における土壌炭素ストック量は転用前後の土壌プールを同じと想定していることから「NA」で報告した。

なお、現在の方法は「湿地から転用されたその他の土地」及び「開発地から転用されたその他の土地」の面積を把握できないため、当該カテゴリーの炭素ストック変化量はいずれも「NO」を報告した。

b) 方法論

1) 他の土地利用から転用されたその他の土地における生体バイオマスの炭素ストック変化量

■ 算定方法

他の土地利用からその他の土地への転用について、6.6.2. b) 1) 節と同様に、Tier 2 の算定方法を用いた。ただし、その他の土地での生体バイオマス成長に伴う炭素ストック変化は、ゼロと想定している。

■ 各種パラメータ

○ 土地利用毎の生体バイオマスストック量

転用に伴うバイオマスストック変化量及び転用地におけるバイオマス成長によるストック変化量の推定には表 6-8a 及び表 6-8b のパラメータを用いた。

○ 炭素含有率 (CF)

森林の炭素含有率は我が国の針葉樹と広葉樹の平均値 (0.50 t-C/t-d.m.) を用いた。森林以外の炭素含有率は、2006 年 IPCC ガイドラインに従い、デフォルト値 (草地は 0.47 t-C/t-d.m.、それ以外は 0.5 t-C/t-d.m.) を用いた。

■ 活動量 (面積)

森林、農地及び草地からその他の土地への転用面積のみ把握した。湿地及び開発地からその他の土地へ転用された土地の面積はデータの入手が不可能なため、当該土地利用区分において計上は行わず「IE」として報告し、「転用のないその他の土地」において計上することとした。

なお、CRF の「Table 4.F SECTORAL BACKGROUND DATA FOR LAND USE, LAND-USE CHANGE AND FORESTRY—Other land」に示されている面積は、2018 年度単年の転用面積ではなく、過去 20 年間の積算値であることに留意されたい。

○ 森林からの転用

6.6.2. b) 1) 節に記述したのと同様の方法で把握した。

○ 農地からの転用

「耕地及び作付面積統計」のかい廃面積におけるその他、自然災害面積のうちの田、普通畑、樹園地面積を用いた。

○ 草地からの転用

「耕地及び作付面積統計」のかい廃面積におけるその他、自然災害面積のうちの牧草地面積、及び「農地の移動と転用」の採草放牧地におけるその他分類不明の面積を用いた。

表 6-49 他の土地利用から転用されたその他の土地の面積 (単年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用されたその他の土地	kha	6.2	6.1	4.3	5.0	2.2	1.8	18.2	3.1	1.5	2.8	2.0	3.5	1.2	1.4
森林から転用されたその他の土地	kha	3.7	3.0	2.1	0.3	0.8	0.8	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5
農地から転用されたその他の土地	kha	2.2	2.6	2.0	4.5	1.2	0.9	16.8	2.3	0.8	2.0	1.2	2.7	0.6	0.8
田	kha	1.2	1.5	1.6	4.2	0.8	0.6	14.9	1.7	0.3	1.3	0.8	2.3	0.3	0.5
普通畑	kha	0.7	0.9	0.3	0.2	0.4	0.2	1.6	0.5	0.4	0.5	0.4	0.4	0.2	0.3
樹園地	kha	0.3	0.3	0.1	0.1	0.1	0.1	0.4	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
草地から転用されたその他の土地	kha	0.4	0.5	0.2	0.2	0.2	0.1	0.8	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2	0.1	0.1
湿地から転用されたその他の土地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
開発地から転用されたその他の土地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE

2) 他の土地利用から転用されたその他の土地における枯死有機物の炭素ストック変化量

■ 算定方法

「森林から転用されたその他の土地」における枯死有機物の炭素ストック変化量は、「他の土地利用から転用された農地 (4.B.2)」と同様に、Tier 2 の方法に従って算定した。

■ 各種パラメータ

○ 森林における枯死有機物炭素ストック量

転用前の森林における枯死木及びリターの平均炭素ストック量は表 6-9 及び表 6-10 にある通りである。また、転用直後は枯死有機物の蓄積がゼロになり、その後の蓄積はないという想定のもとで算定を行っている。

■ 活動量 (面積)

各土地利用について過去 20 年間に生じた転用面積を累計した値を、20 年間以内にその他の土地へ転用された面積と仮定した。

表 6-50 他の土地利用から転用されたその他の土地の面積 (20 年)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
他の土地利用から転用されたその他の土地	kha	173.4	150.3	130.3	110.9	90.1	85.7	97.9	96.0	90.1	85.7	81.6	80.4	76.4	73.7
森林から転用されたその他の土地	kha	102.4	97.2	86.2	65.4	47.1	44.2	40.6	37.8	34.3	31.3	28.9	26.8	23.5	21.3
農地から転用されたその他の土地	kha	55.8	41.1	36.9	38.3	36.3	35.1	50.5	51.5	49.7	48.8	47.4	48.6	47.9	47.5
田	kha	32.4	20.9	20.3	22.8	23.2	22.6	36.9	38.1	37.1	36.8	36.1	37.9	37.4	37.1
普通畑	kha	16.1	14.2	12.0	11.5	10.0	9.5	10.4	10.3	9.7	9.4	8.8	8.4	8.3	8.2
樹園地	kha	7.3	5.9	4.5	4.0	3.2	3.0	3.2	3.1	2.9	2.7	2.5	2.3	2.3	2.2
草地から転用されたその他の土地	kha	15.1	12.0	7.3	7.3	6.6	6.3	6.8	6.7	6.0	5.6	5.3	5.1	5.0	4.9
湿地から転用されたその他の土地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
開発地から転用されたその他の土地	kha	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE

3) 他の土地利用から転用されたその他の土地における土壌の炭素ストック変化量

本カテゴリーにおいては、森林から転用されたその他の土地の鉱質土壌の炭素ストック変化量を算定した。

■ 算定方法

本カテゴリーの鉱質土壌炭素ストック変化量は、6.6.2. b) 3) 節と同様に算定した。

■ 各種パラメータ

森林から転用されたその他の土地における鉱質土壌炭素ストック変化量の算定には、表 6-11 に記載されているパラメータを用いた。

■ 活動量

20 年間の森林から転用されたその他の土地面積は、過去 20 年分の年次転用面積を積算することによって算出した。当該面積については表 6-50 を参照のこと。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性の評価

生体バイオマス及び枯死有機物に関する不確実性は、各パラメータ及び活動量ごとに、現地調査データ、専門家判断、または 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。その結果、他の土地利用から転用されたその他の土地による排出量全体の不確実性は 19% と評価された。

■ 時系列の一貫性

6.6.2. b) 1) 節で説明した通り、森林からの転用面積の把握方法が 1990~2004 年度までと 2005 年度以降とで異なっているものの、当該カテゴリーの時系列の一貫性は基本的に確保さ

れている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

■ D 面積の修正に伴う再計算

森林から転用された個々の土地利用の面積推計に利用している森林減少面積（D 面積）が再計算されたため、当該カテゴリーの生体バイオマス、枯死有機物の炭素ストック変化量、及び鉱質土壌の炭素ストック変化量を全年にわたり再計算した。

■ 単年生作物の転用前後のバイオマスストック量の修正に伴う再計算

単年生作物のバイオマスストック量の設定値を変更したため、農地から他の土地への転用が生じた際のバイオマス損失量に変更となり、農地から転用されたその他の土地における生体バイオマス炭素変化量は全年にわたり再計算した。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

■ その他の土地の面積の内訳の特定と土地の再分類

その他の土地の内訳の再分類において特定できない土地利用があったため、今後も引き続き検討を行う必要がある。

■ 他の土地利用から転用されたその他の土地の生体バイオマスの炭素ストック変化量

生体バイオマスの炭素ストック変化量に関し、その他の土地については文献不足のためバイオマスストックをゼロと仮定しているが、実態と乖離している可能性がある。そのため、この点につき現在検討を行っている。

■ 森林、農地、草地から転用されたその他の土地の土壌炭素ストック変化量の算定方法

新たな知見等が入手できた際には、算定方法に関する検討を行う。

6.11. 伐採木材製品（HWP）による炭素蓄積変化（4.G）

森林から伐採され、搬出された木材（伐採木材製品）は、木材が住宅資材や家具などに利用されている間は木材中に炭素を固定し、一定期間蓄積する。最終的に焼却、腐朽などにより廃棄されたときに CO₂ を排出する。

本カテゴリーは、HWP による炭素蓄積変化を取り扱う。計算アプローチは生産法を採用しており、京都議定書の LULUCF ルールに則った方法論を条約インベントリ報告にも適用している。従って、計上の対象となるのは、我が国の森林のうち「森林経営」を行っている育成林から生産された国産材由来の伐採木材製品（製材、木質パネル、紙）であり、これらの利用または廃棄に伴う炭素蓄積の変化量を計上する。輸入材の炭素蓄積変化量は算定から控除しているほか、森林減少由来の木材については林外に搬出した時点で排出計上とし、伐採木材製品の炭素蓄積変化は計算していない。当該カテゴリーにおける炭素蓄積変化量は、2018年度では 2,046 kt-CO₂ の吸収であり、1990年度比 453.1% の増加、前年度比 15.1% の増加となっている。1990年度以降は経済状況、災害等の影響により増減を繰り返している。

本節では、伐採木材製品を「建築物」、「その他木材利用」及び「紙製品」の3つのサブカテゴリーに区分し、以下の小節においてそれらについて別個に記述する。

表 6-51 HWP の炭素ストック変化量に起因する排出・吸収量

ガス	カテゴリー	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CO ₂	合計	kt-CO ₂	-370	1,475	1,821	621	642	50	2,461	62	321	-843	-1,230	-1,200	-1,777	-2,046	
	建築物	合計	kt-CO ₂	-476	-853	-3	-845	-1,591	-1,575	873	-1,508	-799	-1,391	-1,752	-1,611	-1,660	-1,896
		製材	kt-CO ₂	-257	-535	416	-358	-930	-830	1,623	-761	34	-567	-873	-667	-750	-992
		木質ボード	kt-CO ₂	-209	-324	-435	-377	-317	-330	-386	-314	-312	-372	-357	-395	-394	-396
		合板	kt-CO ₂	-11	6	17	-109	-344	-414	-364	-432	-521	-452	-522	-549	-516	-509
	その他木材利用	合計	kt-CO ₂	639	1,155	1,395	1,257	1,173	989	942	898	746	507	345	124	-198	-284
		製材	kt-CO ₂	954	1,295	1,478	1,485	1,481	1,421	1,227	1,313	1,235	1,171	1,095	1,089	1,055	960
		木質ボード	kt-CO ₂	-326	-219	-198	-132	40	24	4	-98	-112	-96	-87	-116	-119	-94
		合板	kt-CO ₂	11	80	115	-96	-348	-457	-289	-317	-377	-567	-663	-850	-1,134	-1,149
	紙製品	kt-CO ₂	-533	1,173	429	208	1,059	636	646	672	374	41	177	287	80	134	

6.11.1. 建築物

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、建築物において使用される製材、木質ボード、合板ごとの炭素蓄積変化量を取り扱う。当該カテゴリーにおける炭素蓄積変化量は2018年度では1,896 kt-CO₂の吸収であり、1990年度比298.0%の増加、前年度比14.2%の増加となっている。

b) 方法論

■ 算定方法

製材、木質ボード、合板については、我が国では建築物への利用が大部分を占めており、かつ建築物に係る統計類は一定の精度で取りまとめられていることから、その炭素蓄積変化量の推計は、建築物に含まれている炭素量の変化を直接把握する、我が国独自のストック・インベントリ法 (Tier 3) により算定した。

建築物に利用される製材、木質ボード、合板の炭素ストック量の変化は、建築着工に投入される製材、木質ボード、合板の炭素量をインフロー、建築解体時において排出される炭素量をアウトフローとして算定し、別々に計算したインフローとアウトフローを合算して推計した。建物に使用されたすべての炭素は、その建物が解体されたときに即時に排出されるとしている。算定式は以下のとおりである。

なお、建築物に利用される製材、木質ボード、合板は、CRFの「Solid wood」の下の「Sawnwood」「Wood panels」、「Other solid wood products」にて報告している。

$$\Delta C_{j,i} = Inflow_{j,i} - Outflow_{j,i}$$

- j : サブカテゴリー (製材、合板、木質ボード)
 i : 年
 $Inflow_{j,i}$: i 年の間にサブカテゴリー j のHWPプールに投入される炭素量 [t-C/年]
 $Outflow_{j,i}$: i 年の間にサブカテゴリー j のHWPプールから排出される炭素量 [t-C/年]
 $\Delta C_{j,i}$: i 年の間のサブカテゴリー j のHWPストックの炭素蓄積変化量 [t-C/年]

各年の建築着工に投入される木材の炭素量 (インフロー) 及び建築物解体時において排出される炭素量 (アウトフロー) は以下の通り求めた。

○ インフロー (Inflow)

インフローについては、各年の住宅・非住宅別、構造別の建築物の着工床面積に、着工床面積あたりの木材使用量 (以下、着工原単位)、及び建築物に投入される木材の国産材率を乗

じて建築物に使用される国産木材量を算出後、各年の建築物に投入される木材の炭素量を算定した（下記算定式を参照）。

$$Inflow_{j,i} = \left\{ S_{P_{st,i}} \times v_{DP_{j,st,i}} \times f_{DP_{j,i}} - V_{IM_i} \right\} \times D_j \times CF_j$$

○ アウトフロー（Outflow）

アウトフローについては、各年の住宅・非住宅別、構造別の建築物の解体床面積に、解体された建築物の建築年の単位床面積あたりの木材使用量（以下、解体原単位）、解体建築物の着工年の国産材率（以下、解体国産材率）を乗じて建築物解体時に投入される国産木材量を算出後、輸入住宅における木材量を差し引いて、木材容積密度及び炭素含有率に掛け合わせることで、各年の建築物解体時において排出される炭素量を算定した（下記算定式を参照）。このアウトフローの算定は2019年改良IPCCガイドラインで言及されているような減衰関数を用いるものではなく、直接的に建築解体量から把握していることに留意のこと。

$$Outflow_{j,i} = \left\{ S_{W_{st,i}} \times v_{DW_{j,st,i}} \times f_{DW_{j,i}} - V_{IM_i} \right\} \times D_j \times CF_j$$

単位面積当たり木材使用量や国産材率は経年的に変化することから、解体時の炭素量の算定に用いる解体原単位（ v_{DW_i} ）及び解体国産材率（ f_{DW_i} ）については、経年的な変化を反映すべくそれぞれ*i*年に解体された面積のうち、*n*年に建築された床面積が占める割合を用いて加重平均を行うことで推計している（下記算定式を参照）。

$$v_{DW_i} = \sum_n \left(\frac{S_{W_i(n)}}{S_{W_i}} \times v_{DP_{i(n)}} \right)$$

$$f_{DW_i} = \sum_n \left(\frac{S_{W_i(n)}}{S_{W_i}} \times f_{DP_{i(n)}} \right)$$

なお、算定対象年*i*の解体床面積（ S_{W_i} ）は、前年（*i-1*）の建築物床面積から、*i*年の建築物床面積と*i*年の建築物着工床面積の差分を差し引いて算定した（下記算定式参照）。*i-1*年及び*i*年の建築床面積、及び*i*年の建築物着工床面積には、基本的に増築面積が含まれており、増築後に解体された建築物の床面積データは計算に反映されていることになる。ただし、床面積の増減を伴わない改築については、「建築物（Tier3）」の計算には含まれず、「その他木材利用（Tier2）」の計算に含まれる。

$$S_{W_{st,i}} = S_{S_{st,i-1}} - (S_{S_{st,i}} - S_{P_{st,i}})$$

<i>j</i>	: サブカテゴリー（製材、合板、木質ボード）
<i>i</i>	: 算定対象年
<i>st</i>	: 建築物の使用用途（住宅または非住宅）及び種類（構造別）
<i>n</i>	: 建築年
$Inflow_{j,i}$: <i>i</i> 年の間にサブカテゴリー <i>j</i> のHWPプールに投入される炭素量 [t-C/年]
$Outflow_{j,i}$: <i>i</i> 年の間にサブカテゴリー <i>j</i> のHWPプールから排出される炭素量 [t-C/年]
$S_{P_{st,i}}$: <i>i</i> 年の住宅・非住宅別、構造別着工床面積（増築面積を含む） [m ² /年]
$S_{W_{st,i}}$: <i>i</i> 年の住宅・非住宅別、構造別の建築物の解体床面積（増築後に解体された面積を含む） [m ²]
$S_{W_{i,(n)}}$: <i>i</i> 年に解体された床面積のうち、 <i>n</i> 年に建築された建築物の床面積 [m ²]
$S_{S_{st,i}}$: <i>i</i> 年の住宅・非住宅別、構造別床面積ストック（ <i>i</i> 年に建築された床面積と増築面積を含む） [m ² /年]

$VDP_{j, st, i}$: i年の住宅・非住宅別、構造別のサブカテゴリ-jの着工原単位 [m^3/m^2]
$VDP_i(n)$: i年に解体された建築物のうち、n年に建築された建築物の着工原単位 [m^3/m^2]
VDW_i	: i年の建築物の解体原単位 [m^3/m^2]
$fDP_{j, i}$: i年の建築物に投入されるサブカテゴリ-jの木材の国産材率 [%]
$fDP_i(n)$: i年に解体された建築物のうち、n年に建築された建築物の国産材率 [%]
fDW_i	: i年の建築物の解体材国産材率 [%]
VIM_i	: i年の輸入住宅における木材の量 [m^3]
D_j	: サブカテゴリ-jの容積密度 [$t\cdot d.m./m^3$]
CF_j	: サブカテゴリ-jの炭素含有率 [$t-C/t\cdot d.m.$]

■ 各種パラメータ

○ 木材投入量原単位 (m^3/m^2)

【製材】

木造住宅においては1991年から2011年までは国土交通省「建設資材・労働力需要実態調査」の値を用いた。非木造住宅においては1991年までしか上記調査の値がないため新たに調査を行ない、2013年度の値を取得し、2014年度以降は2013年度の値を用いた。1992年～2012年の値は内挿法により求めた。

【木質ボード】

経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」の木質ボードの種類別の出荷量に日本繊維板工業会「木質ボード用途別出荷量」の割合を乗じて木質ボードの種類別・用途別木材投入量を算出した。算出された木質ボードの種類別・用途別木材投入量を着工床面積で除することにより、床面積あたりの木質ボード投入量を算出した。

【合板】

「建設資材・労働力需要実態調査」の値を用いた。データが欠落している年度は内挿法より求めた。

○ 国産材率

【製材】

針葉樹・広葉樹別に、建築用製材出荷量のうち国産材の出荷量を「建築用製材品出荷量と輸入製材製品の合計量」で除することにより建築用製材の国産材率を算出した。

【木質ボード】

建築用木質ボード出荷量にパーティクルボード、ファイバーボードの原材料の割合、及び各原材料(素材、工場残材、林地残材、解体材、廃材)の国産材率を乗じて原材料別の建築用木質ボード(国産材)出荷量を算出した。各原材料の国産材率は、国産チップ生産量、輸入チップ量、チップ用素材入荷量(国産材・外材)から求めた。算出された原材料別の建築用木質ボード(国産材)出荷量を「建築用木質ボード出荷量と建築用木質ボード輸入量の合計値」で除することにより、種類別の木質ボードの国産材率を算出した。

【合板】

合板生産量(国内)が合板使用量(合板生産量と輸入生産量の合計)に占める比率に、合板の国産材率を乗じることにより、着工建築物に使用される合板の国産材率を算出した。

○ 容積密度、炭素含有率

2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスに提示されているデフォルト値を使用した。

表 6-52 カテゴリー別の容積密度・炭素含有率

HWP カテゴリー		容積密度 [Mg/m ³]	炭素含有率 [Mg -C/Mg-d.m.]
製材	針葉樹	0.45	0.5
	広葉樹	0.56	0.5
木質ボード	パーティクルボード(PB)	0.596	0.451
	硬質繊維板(HB)	0.788	0.425
	中質繊維板(MDF)	0.691	0.427
	軟質繊維板(LDF)	0.159	0.474
合板		0.542	0.493

(出典) : 2013年京都議定書補足的方法論ガイダンス、Table 2.8.1

表 6-53 各種パラメータに用いるデータ (建築物)

No	変数等	出典	備考
1	製材品出荷量(建築用材)国産材	農林水産省「木材需給報告書」	
2	製材品出荷量(建築用材)外材	農林水産省「木材需給報告書」	
3	製材用素材入荷量	農林水産省「木材統計調査」	
4	輸入製材製品(針葉樹)	財務省「貿易統計」	※建築用途の輸入量が不明のため、針葉樹分を建築用途と仮定
5	木質ボード出荷量	経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」	※自家消費分含む
6	木質ボード輸入量	財務省「貿易統計」	
7	輸入チップ	財務省「貿易統計」	
8	国産チップ生産量	農林水産省「木材需給報告書」	
9	チップ用素材入荷量(国産材)	農林水産省「木材需給報告書」	
10	チップ用素材入荷量(外材)	農林水産省「木材需給報告書」	
11	木質ボード用途別出荷量	日本繊維板工業会「木質ボード用途別出荷量」	
12	合板国内生産量	農林水産省「木材需給報告書」	
13	合板用単板輸入量	財務省「貿易統計」	※FAOSTAT (Veneer sheets) より所収した単板輸入量に「貿易統計」より単板輸入量に占める合板用単板輸入量の比率をかけて合板用単板輸入量を算出。
14	合板輸入量	FAO「FAOSTAT」 財務省「貿易統計」	※FAOSTAT で把握した集成材から、「貿易統計」の合板内の集成材、竹製のものを除く。
15	合板用素材入荷量(国産材)	農林水産省「木材需給報告書」	
16	合板用素材入荷量(外材)	農林水産省「木材需給報告書」	

■ 活動量

活動量は建築物の着工床面積(インフロー)と解体床面積(アウトフロー)である。着工床面積は、国土交通省「建築着工統計」、「住宅着工統計」より得られる住宅・非住宅別、構造別着工面積を用いた。解体床面積は、総務省「固定資産の価格等の概要調書(家屋)」から得られる毎年の家屋の総床面積の前年床面積から、当年の床面積と当年の着工床面積の差分を差し引いて推計した。前述の通り増築後に解体された床面積は含まれている。着工・解体のデータは統計に基づいており、景気の減衰や自然災害も考慮し、適切に算定されている。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

統計データの不確実性及び 2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスのデフォルト不確

実性を利用し、全体で30%と評価された。

■ 時系列の一貫性

面積原単位に用いる「建設資材・労働力需要実態調査」は3年毎の調査であるためデータが欠落している年度は内挿により推計し、時系列の一貫性を確保している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

2017年度の木材需給統計の更新に伴い、2017年度値は再計算された。解体国産材率と解体原単位についても計算式を修正したため、アウトフローを全年にわたり再計算された。また、解体国産材率の変更に伴い、木質ボードのインフローも全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

建築基準法の改正による木材の利用増加や Cross Laminated Timber (CLT)の普及などにより、今後、面積原単位が変動する可能性がある。

6.11.2. その他木材利用

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーは建築以外で使用される製材、木質ボード、合板の炭素蓄積変化量を取り扱う。当該カテゴリーにおける炭素蓄積変化量は、1990年度では639 kt-CO₂の排出、2017年度では198 kt-CO₂の吸収であり、2018年度では284 kt-CO₂の吸収となっている。

b) 方法論

■ 算定方法

その他木材利用の炭素蓄積変化量は、2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスに記載のFOD法(Tier 2)を用い、当該年と前年のHWPプールの炭素量の差分から、算定した。1年間にHWPプールに投入される炭素量は、建築以外に利用される木材の量に国産材率、及び炭素変換係数を乗じて算出した。算定式は以下のとおりである。

なお、その他木材利用(製材、木質ボード、合板)については、CRFの「Other (please specify)」の下の「Sawnwood for non-buildings」「Wooden board for non-buildings」、「Plywood for non-buildings」にて報告している。

$$C_{j,i+1} = e^{-k_j} \times C_{j,i} + \left[\frac{(1 - e^{-k_j})}{k_j} \right] \times Inflow_{j,i}$$

$$\Delta C_{j,i} = C_{j,i+1} - C_{j,i}$$

i : 年

j : サブカテゴリー (製材、木質ボード、合板)

$C_{j,i}$: i 年初めにサブカテゴリー j のHWPプールにストックされている炭素量 [t-C]

$Inflow_{j,i}$: i 年の間にサブカテゴリー j のHWPプールに投入される炭素量 [t-C/年]

- k_j : $k_j = \ln(2) / HL_j$
 HL_j : サブカテゴリーjのHWPプールの半減期
 $\Delta C_{j,i}$: i年の間のサブカテゴリーjのHWPストックの炭素蓄積変化量 [t-C/年]
 $C_{j,(1900)}$: 1900年ストックを0とみなす

$$Inflow_{j,i} = V_{p,j,i} \times f_{DP,j,i} \times D_j \times CF_j$$

- i : 年
 j : サブカテゴリー（製材、合板、木質ボード）
 $V_{p,j,i}$: i年の建築以外に利用されるサブカテゴリーjの木材の量 [m³/年]
 $f_{DP,j,i}$: i年の建築以外に利用されるサブカテゴリーjの木材の国産材率 [%]
 D_j : サブカテゴリーjの容積密度 [t-d.m./m³]
 CF_j : 炭素含有率 [t-C/t-d.m]

■ 各種パラメータ

○ 国産材率

【製材】

建築物以外に利用される製材の国産材率は、樹種別の国産材製材品出荷量を製材品出荷量で除して算出した。

【木質ボード】

木質ボード生産に用いられる木材の国産材率は、パーティクルボード、ファイバーボードに用いられる原材料の割合に各原材料（素材、工場残材、林地残材、解体材、廃材）の国産材率を乗じて算出した。各原材料の国産材率は、国産チップ生産量、輸入チップ量、チップ用素材入荷量（国産材・外材）から求めた。

【合板】

国産材由来の合板用素材入荷量を合板用素材入荷量と合板用単板輸入量（丸太換算）の合計量で除して合板の国産材率として算出した。

○ 半減期

2013年京都議定書補足方法論ガイダンス（Table 2.8.2）に提示されているデフォルト値（製材：35年、木質ボード・合板：25年）を使用した。

○ 容積密度、炭素含有率

建築物（6.11.1.節）と同じデフォルト値を使用した。（表 6-52 を参照のこと）

表 6-54 各種パラメータに用いるデータ（その他木材利用）

No	変数等	出典	備考
1	製材品出荷量（国産材、建築用材以外）	農林水産省「木材需給報告書」	
2	木質ボード出荷量	経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」	※自家消費分含む
3	輸入チップ	財務省「貿易統計」	
4	国産チップ生産量	農林水産省「木材需給報告書」	
5	国産チップ（パルプ用）	日本製紙連合会「パルプ材集荷実績推移」	
6	チップ用素材入荷量（国産材）	農林水産省「木材需給報告書」	
7	チップ用素材入荷量（外材）	農林水産省「木材需給報告書」	
8	合板用単板輸入量	財務省「貿易統計」	※FAOSTAT(Veneer sheets)より所収した単板輸入量に「貿易統計」より単板輸入量に占める合板用単板輸入量の比率をかけて合板用単板輸入量を算出。
9	合板用素材入荷量（国産材）	農林水産省「木材需給報告書」	
10	合板用素材入荷量（外材）	農林水産省「木材需給報告書」	

■ 活動量

活動量は、製材投入量、木質ボード販売量と合板生産量を用いた。製材投入量は「木材統計調査（木材需給報告書）」の製材品出荷量から建築用材を除いた出荷量とした。木質ボード販売量は、経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」のPB、HB、MDF、LDFそれぞれの販売面積から体積を求め、「木質ボード用途別出荷量」の建築用販売量を除いた量とした。合板生産量は、「木材統計調査（木材需給報告書）」を用いた。

○ 1900年までのデータ遡及方法

2006年 IPCC ガイドライン（Equation 12.6）に提示されている方法を用いて推計した。また、産業用丸太消費量の推定連続率（U）については、アジア 1900~1961年のデフォルト値 0.0217（Table 12.3）を適用した。

$$V_t = V_{1961} \times e^{[U \times (t-1961)]}$$

V_t : その他木材に使用される製材、木質ボード、合板の生産量 [kt C/年]

t : 年

V_{1961} : 1961年 その他木材に使用される製材、木質ボード、合板の生産量 [kt C/年]

U : 1900~1961年、報告国を含む地域の産業用丸太消費量変化の推定連続率

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

統計データの不確実性及び 2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスのデフォルト不確実性を利用し、全体で30%と評価された。

■ 時系列の一貫性

1961年以前のデータは、2006年 IPCC ガイドライン（Equation 12.6）に提示されている方法を用いて、1900年までデータを遡及しており、時系列の一貫性は保たれている。

1962年以後のデータは、活動量、パラメータともに、一貫した統計を使用している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

2017年度の木材需給統計の更新に伴い、2017年度値は再計算された。解体国産材率と解体原単位の計算式についても修正したため、アウトフローを全年にわたり再計算された。また、解体国産材率の変更に伴い、木質ボードのインフローも全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

主に土木分野において丸太形態で利用されている木材については、現在算定の対象とはなっていない。

6.11.3. 紙製品

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーは、紙製品（紙・板紙（古紙含む））の炭素蓄積変化量を取り扱う。当該カテゴリーにおける炭素蓄積変化量は、1990年度に533 kt-CO₂の吸収、2017年度に80 kt-CO₂の排出、2018年度では134 kt-CO₂の排出となった。

b) 方法論

■ 算定方法

その他木材利用と同様に紙製品の炭素蓄積変化量については、2013年京都議定書補足的な方法論ガイダンスに記載のFOD法（Tier2）を用い、当該年と前年のHWPプールの炭素量の差分から、算定した。1年間にHWPプールに投入される炭素量は、紙製品生産量に国産材率、及び炭素変換係数を乗じて算出した。算定式は以下のとおりである。

$$C_{j,i+1} = e^{-k_j} \times C_{j,i} + \left[\frac{(1 - e^{-k_j})}{k_j} \right] \times Inflow_{j,i}$$

$$\Delta C_{j,i} = C_{j,i+1} - C_{j,i}$$

- i : 年
- j : サブカテゴリー（紙製品）
- $C_{j,i}$: i 年初めにHWPプールにストックされている炭素量 [t-C]
- $Inflow_{j,i}$: i 年の間にサブカテゴリー j のHWPプールに投入される炭素量 [t-C/年]
- k_j : $k_j = \ln(2) / HL_j$
 HL_j : サブカテゴリー j のHWPプールの半減期（2年）
- $\Delta C_{j,i}$: i 年の間のサブカテゴリー j のHWPストックの炭素蓄積変化量 [t-C/年]
- $C_{j,(1990)}$: 1990年ストックを0とみなす

$$Inflow_{j,i} = PP_{p,j,i} \times f_{DP,j,i} \times D_j \times CF_j$$

- i : 年

j	: サブカテゴリー (紙製品)
$PP_{Pj,i}$: i 年の紙製品生産量 [t]
$fdP_{j,i}$: 各年の紙製品の国産材率 [%]
D_j	: 含水率補正值
CF_j	: 炭素含有率 [t-C/t-d.m.]

■ 各種パラメータ

○ 国産材率

紙製品全体の国産材率は、国産材から作られた製紙用パルプの消費量を国産材から作られた紙製品、古紙及び古紙パルプの国内生産量で除することにより算出した。国産材から作られた紙パルプ、古紙、及び古紙パルプの国内生産量がそれぞれ推定された。

製紙用パルプは、経済産業省「生産動態統計年報 紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計編」において、全原材料消費量とその国産材・輸入材由来消費量が、原木由来、チップ由来別に把握できることから、それらのデータを用いて国産材率を推計した。ただし、同統計の国産材チップは、外材由来の木材を国内の事業所でチップ化した量も含まれていることから、国産材率の推計においては、チップ用素材の国産材・外材入荷量や、建築物の推計で利用した国産材率のデータも用いて、外材由来の国内生産チップを控除して算定した。

古紙・古紙パルプは、経済産業省「生産動態統計調査」の古紙生産量と「貿易統計」の古紙の輸出入量から国内供給量を推計することで国産材率を推計した。

表 6-55 各種パラメータに用いるデータ (紙製品)

No	変数等	出典	備考
1	パルプの原材料消費量 (m ³)	経済産業省「生産動態統計調査 (紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計)」	パルプの国産材率の算定に利用
	国産材由来		
	原木		
	チップ		
	輸入材由来 (すべてチップ)		
2	古紙生産量	経済産業省「生産動態統計調査 (紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計)」	FAOSTAT (Recovered paper)
3	古紙輸出入量	財務省「貿易統計」	FAOSTAT (Recovered paper)
4	紙、板紙の輸出入量	財務省「貿易統計」	FAOSTAT (Recovered paper)
5	入手区分別チップ生産量の比率	農林水産省「木材需給報告書」	パルプ生産用チップの国産材比率の推計に利用
6	チップ用素材入荷量 (国産材)	農林水産省「木材需給報告書」	
7	チップ用素材入荷量 (外材)	農林水産省「木材需給報告書」	

○ 半減期

2013 年京都議定書補足的方法論ガイダンス (Table 2.8.2) に提示されているデフォルト値 (2 年) を使用した。

○ 含水率補正值、炭素含有率

2013 年京都議定書補足的方法論ガイダンス (Table 2.8.2) に提示されているデフォルト値 (含水率補正值 : 0.9 t-d.m./t、炭素含有率 : 0.386 t-C/t-d.m.) を使用した。

■ 活動量

○ 1961年以降のデータ

活動量となる紙製品（紙・板紙）の国内生産量は、経済産業省「生産動態統計調査（紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計）」の紙生産量、板紙生産量の合計値で、これは FAOSTAT の Paper and Paperboard の Production データと同一の値である。

○ 1900年までのデータ遡及方法

紙製品の、1900年までのデータ遡及方法は「その他木材」と同様である（詳細は 6.11.2 節を参照のこと。）

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

統計データの不確実性及び 2013 年京都議定書補足的な方法論ガイダンスのデフォルト不確実性を利用し、全体で 30% と評価された。

■ 時系列の一貫性

1961 年以前のデータは、2006 年 IPCC ガイドライン (Equation 12.6) に提示されている方法を用いて、1900 年までデータを遡及しており、時系列の一貫性は保たれている。

1962 年以後のデータは、活動量、パラメータともに、一貫した統計を使用している。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に記述している。

e) 再計算

パルプの原材料消費量については、解体材由来の国産材率の再計算に伴ってインフローの値が再計算された。このインフローの再計算により、一次減衰関数に基づいて計算されたアウトフローも再計算された。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

6.12. 施肥に伴う N₂O 排出 (4.(I))

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、農用地以外の土壌への窒素施肥に伴う N₂O 直接排出量の算定を行う。森林土壌への窒素施肥に伴う N₂O 直接排出量を算定し、湿地、開発地土壌への窒素施肥に伴う N₂O 排出は農業分野の算定に含まれるため「IE」と報告した。2018 年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は 0.51 kt-CO₂ 換算であり、1990 年度比 38.7% の減少となっている。

表 6-56 無機肥料施肥に伴う N₂O 排出量

ガス	カテゴリー	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
N ₂ O	合計	kt-N ₂ O	0.003	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	
		kt-CO ₂ 換算	0.84	0.72	0.67	0.64	0.48	0.56	0.53	0.54	0.56	0.54	0.51	0.51	0.51	0.51	
	森林	kt-N ₂ O	0.003	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002
		転用のない森林	kt-N ₂ O	0.003	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002
		他の土地利用から転用された森林	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
	湿地	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
		転用のない湿地	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
		他の土地利用から転用された湿地	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
	開発地	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
		転用のない開発地	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
		他の土地利用から転用された開発地	kt-N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
		その他	kt-N ₂ O	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	

b) 方法論

■ 算定方法

森林土壌への窒素施肥に伴う N₂O 排出量は 2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリーに従い、我が国独自の排出係数が存在するため、Tier 2 法を用いて算定した。算定式は農業分野で適用しているものと同様とした。

■ 各種パラメータ

農用地土壌への化学肥料の施用に伴う N₂O 排出量の算定に適用している排出係数 (0.62% [kg-N₂O-N/kg-N]¹²) を、森林土壌への窒素施肥に伴う N₂O 排出量の算定にも適用した。本排出係数の詳細な情報については、第 5 章 5.5.1.1.b) 節を参照のこと。

■ 活動量

林野庁調査による 2006～2008 年に森林で行われた施肥実績の調査結果を用いた。実績値が存在しない年次の森林土壌に施用される化学肥料施用量は、「ポケット肥料要覧」の「窒素質肥料需要量」に、森林土壌への施用分の割合 (2006～2008 年の平均値) を乗じて算出した。当該割合は化学肥料施用総量の 0.047% である。森林土壌に施用された肥料の種類については、林野庁調査によると、大部分が化学肥料であることから、森林土壌に施用される肥料は化学肥料であるとみなすこととした。また、森林土壌への作物残さの施用、及び森林での放牧が実施されていないため、作物残さの施用量及び牧草地、放牧場、小放牧地での排せつ物量はゼロとした。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

施肥に伴う N₂O 直接排出量の不確実性は、農業分野の当該算定と同じ値を用いて、31% と評価した。

■ 時系列の一貫性

パラメータは、一定値を使用しており、活動量は、同一の統計から同じ割合を乗じて算出しており、当該カテゴリーの時系列の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸

¹² Akiyama et al. (2006)

収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

2015年以降の化学肥料及びと2016年以降の硝化抑制剤入り化学肥料の統計値が改訂されたので、2015年以降の排出量が再計算された。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

6.13. 土壌排水等に伴う非CO₂排出 (4.(II))

a) カテゴリーの説明

土壌排水・再湛水やその他の鉱質・有機質土壌管理に伴う非CO₂排出(4.(II))について、わが国では有機質土壌の土壌排水に伴う排出のみを算定対象とし、農地(普通畑)、草地(牧草地)における有機質土壌の排水に伴うCH₄排出について算定を行う(稲作からのCH₄排出は農業分野で報告している)。また、有機質土壌地が開発地に転用された場合、転用後の排水等活動に伴うCH₄、N₂O排出について算定を行う。湿地ガイドラインで方法論が提示されている土壌再湛水や沿岸湿地については算定方法を適用せず当該排出は「NA」として報告する。我が国では森林での排水活動は実施されていないと判断されるため、この活動に起因するGHG排出は生じないと整理し、森林土壌の排水に伴うCH₄、N₂O排出については「NO」として報告する。湿地区分に存在する泥炭地については、4.D.1のCO₂排出で説明をしたとおり、微小排出源と考えられることから「NE」、湛水地、その他の湿地については、当該算定方法を適用していないため、「NA」として報告する。2018年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は44.0kt-CO₂換算であり、1990年度比16.9%の減少、前年度比0.3%の増加となっている。

表 6-57 土壌排水に伴う非CO₂排出

ガス	カテゴリー	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018			
全ガス	合計	kt-CO ₂ 換算	53.0	51.2	50.0	48.4	47.4	46.3	46.3	45.9	45.2	45.3	45.1	44.0	43.9	44.0			
	CH ₄	合計	kt-CH ₄	2.09	2.02	1.97	1.91	1.87	1.83	1.83	1.82	1.79	1.79	1.79	1.74	1.74	1.75		
			kt-CO ₂ 換算	52.1	50.4	49.3	47.8	46.8	45.8	45.8	45.4	44.8	44.9	44.7	43.6	43.5	43.6		
		森林	kt-CH ₄	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO		
		農地	kt-CH ₄	1.44	1.42	1.41	1.40	1.40	1.39	1.39	1.39	1.39	1.39	1.39	1.39	1.40	1.41		
		草地	kt-CH ₄	0.09	0.09	0.09	0.09	0.11	0.09	0.11	0.11	0.10	0.12	0.12	0.09	0.09	0.09		
		湿地	kt-CH ₄	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	
			泥炭地	kt-CH ₄	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	
			湛水地	kt-CH ₄	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	
			その他の湿地	kt-CH ₄	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	
		その他(開発地への転用時の有機質土壌)	kt-CH ₄	0.6	0.5	0.5	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	
		N ₂ O	合計	kt-N ₂ O	0.003	0.003	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.001	0.001	0.001	0.001	
				kt-CO ₂ 換算	0.8	0.8	0.7	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	
			森林	kt-N ₂ O	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
			湿地	kt-N ₂ O	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA
				泥炭地	kt-N ₂ O	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE
				湛水地	kt-N ₂ O	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
その他の湿地	kt-N ₂ O			NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA		
その他(開発地への転用時の有機質土壌)	kt-N ₂ O		0.003	0.003	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001		

b) 方法論

■ 算定方法

農地、草地及び転用された開発地について、排水された有機質土壌からの CH₄ 排出量は湿地ガイドライン 2.2.2.1 に記述されている Tier 1 算定方法を用いて算出した。算定式は以下のとおりである。

$$CH_{4-organic} = \sum \{A \times [(1 - Frac_{ditch}) \times EF_{CH_4_{land}} + Frac_{ditch} \times EF_{CH_4_{ditch}}]\}$$

<i>CH_{4-organic}</i>	: 有機質土壌からの CH ₄ 排出 [kg-CH ₄]
<i>A</i>	: 有機質土壌面積 [ha]
<i>EF_{CH₄_{land}}}</i>	: CH ₄ 直接排出係数 [kg-CH ₄ /ha]
<i>EF_{CH₄_{ditch}}}</i>	: 排水路からの CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ /ha]
<i>Frac_{ditch}</i>	: 排水対象地のうち排水路が占める割合

開発地に転用された有機質土壌地からの N₂O 排出量は、湿地ガイドライン 2.2.2.1 に記述されている Tier 2 算定方法を用いて算出した。算定式は以下のとおりである。-

$$N_2O_{Nos} = A \times EF_2$$

<i>N₂O_{Nos}</i>	: 有機質土壌排水に伴う N ₂ O 排出量 [t-N ₂ O/yr]
<i>A</i>	: 開発地に転用された有機質土壌地面積 [kha]
<i>EF₂</i>	: 有機質土壌排水に伴う N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O-N/ha/yr]

■ 各種パラメータ

農地及び草地について、CH₄ 直接排出の排出係数、排水路からの CH₄ 排出係数及び排水対象地のうち排水路が占める割合は、湿地ガイドライン Table 2.3、Table 2.4 に提示されている Tier 1 のデフォルト排出係数を適用した。他の土地から転用された開発地について、2006 年 IPCC ガイドライン及び湿地ガイドラインでは開発地特有のデフォルト係数は提示していないため、わが国は主に開発地への転用が水田地域で生ずるという状況を踏まえ、わが国の独自の水田における N₂O 排出係数を適用した。

表 6-58 CH₄ 及び N₂O 排出に関するデフォルトパラメータ（地表からの排出）

土地利用	排出係数	単位	土地利用・気候帯
農地	0	kgCH ₄ /ha/yr	Cropland, temperate
牧草地	16	kgCH ₄ /ha/yr	Grassland, deep-drained, nutrient rich, temperate
水田	0.297	kgN ₂ O-N/ha/yr	国独自の排出係数（北海道での実測値）

（出典）湿地ガイドライン Table 2.3

表 6-59 CH₄ 排出に関するデフォルトパラメータ（排水路からの排出）

土地利用	排出係数	単位	排水路の割合	土地利用・気候帯
農地	1165	kgCH ₄ /ha/yr	0.05	Boreal/Temperate, Deep-drained
牧草地				Grassland, Cropland

（出典）湿地ガイドライン Table 2.4

■ 活動量

普通畑、牧草地、転用された開発地における有機質土壌面積の把握方法は 6.6.1 節、6.7.1 節を参照のこと。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

湿地ガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。その結果、有機質土壌の排水に伴う非 CO₂ 排出量の不確実性は 67% と評価された。

■ 時系列の一貫性

パラメータは、一定値を使用しており、活動量は、同一の統計から算出しており、当該カテゴリーの時系列の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に記述している。

e) 再計算

■ D 面積の修正

森林減少面積 (D 面積) が再計算されたため、1990-2017 年度について当該カテゴリーにおける排出量の再計算を行った。

■ 開発地への転用時の有機質土壌からの CH₄ 及び N₂O 排出の新規算定に伴う再計算

有機質土壌地が開発地に転用された場合の有機質土壌の排水に伴う CH₄、N₂O 排出について今次提出より算定を行ったため、全年にわたり再計算が生じた。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

6.14. 土地利用変化・管理変化に伴う無機化された窒素からの N₂O 排出 (4.(III))

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは土地利用変化・管理変化に伴う土壌有機物中の炭素の消失により無機化された窒素からの N₂O 排出量を取り扱う。わが国では本区分において、2006 年 IPCC ガイドラインの記述に従い、土壌炭素増加が生じている場合の窒素固定は算定対象とせず、土壌中の炭素が損失した場合の窒素の無機化に伴う排出のみを算定対象とした。

転用のない森林、転用されたその他の土地については、土壌炭素損失に伴う Tier 1 式にて算定を行った。転用された農地と草地については、農業分野で適用したものと同様のわが国独自の排出係数を用いた方法を適用した。草地の 3 つのサブカテゴリーのうち、土壌有機物の変化が計算されているのは牧草地のみである。そのため、採草放牧地、原野は算定から除いた。それ以外の区分においては、土壌炭素ストックの減少が生じていないことから「NA」で報告した (転用された湿地のみ、方法論が存在しないため「NE」)。2018 年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は 137.4 kt-CO₂ 換算であり、1990 年度比 10.6% の減少、前年度比 1.6% の増加となっている。

表 6-60 土壤無機化に伴う N₂O 排出量

ガス	カテゴリー	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
N ₂ O	合計	kt-N ₂ O	0.52	0.50	0.48	0.46	0.44	0.44	0.44	0.44	0.44	0.44	0.45	0.45	0.45	0.46	
		kt-CO ₂ 換算	153.7	148.2	142.4	135.6	131.4	130.3	130.2	131.3	131.4	132.2	133.0	133.9	135.3	137.4	
	森林	kt-N ₂ O	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.41	0.41	0.42	0.42	0.43	0.43
		転用のない森林	kt-N ₂ O	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.40	0.41	0.41	0.42	0.42	0.43	0.43
		他の土地から転用された森林	kt-N ₂ O	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
	農地	kt-N ₂ O	0.08	0.06	0.04	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02
		他の土地から転用された農地	kt-N ₂ O	0.08	0.06	0.04	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02
	草地	kt-N ₂ O	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
		転用のない草地	kt-N ₂ O	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
		他の土地から転用された草地	kt-N ₂ O	IE		IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
	湿地	kt-N ₂ O	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA	NE,NA
		転用のない湿地	kt-N ₂ O	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		他の土地から転用された湿地	kt-N ₂ O	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE
	開発地	kt-N ₂ O	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		転用のない開発地	kt-N ₂ O	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
		他の土地から転用された開発地	kt-N ₂ O	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
	その他の土地	kt-N ₂ O	0.04	0.03	0.03	0.02	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01

b) 方法論

■ 算定方法

転用のない森林、その他の土地については、2006年 IPCC ガイドライン 11.2.1.1 に記述されている Tier 1 の算定方法を用いて算定した。算定式は以下のとおりである。土壤炭素の損失量について、2006年 IPCC ガイドライン 2.3.3.1 に記述されている方法（式 2.25）を用いて算定した。

$$N_2O_{direct} - N_{Mineral} = F_{SOM} \times EF_1$$

$$F_{SOM} = \sum_{LU} \left[\left(\Delta C_{Mineral,LU} \times \frac{1}{R} \right) \times 1000 \right]$$

$N_2O_{direct} - N_{Mineral}$: 鈹質土壤の有機物の無機化に伴う N₂O 直接排出量 [kg-N₂O-N]

F_{SOM} : 鈹質土壤の有機物の無機化による年間窒素放出量 [kg-N]

EF_1 : 排出係数 [kg-N₂O-N/kg-N input]

$\Delta C_{Mineral,LU}$: 各土地利用 (LU) における土壤炭素の損失量 [t-C]

R : 土壤有機物の炭素窒素比

農地、草地については、2006年 IPCC ガイドラインに提示されている算定方法を使用する場合、鈹質土壤有機物中の炭素消失量（活動量の一部）が把握できない。そのため、転用された農地、草地における鈹質土壤の面積と面積あたりの N₂O 排出量（農地のバックグラウンドからの N₂O 排出量）を用いたわが国独自の方法で算定を行った。草地の3つのサブカテゴリーのうち、土壤有機物の変化が計算されているのは牧草地のみである。そのため、採草放牧地、原野は算定から除いた。詳細は農業分野を参照のこと。

$$N_2O_{direct} - N_{Mineral_{CG}} = \sum_i A_i \times EF_{1_{CG}}$$

$N_2O_{direct} - N_{Mineral_{CG}}$: 鈹質土壤における無機化された窒素由来の N₂O 排出量 [kg-N₂O]

A : 転用された農地、草地における鈹質土壤 20 年間面積の累積値

$EF_{1_{CG}}$: 鈹質土壤 1ha あたりの無機化された窒素由来の N₂O 排出量 [kg-N₂O-N/ha]

i : 地目

■ 各種パラメータ

【土壌中の CN 比】

我が国独自の土壌調査結果 11.3（環境省、2006）を適用した。

【土壌における N-N₂O 排出係数】

森林、その他の土地については、2006 年 IPCC ガイドラインに記載されているデフォルト値 [0.01 kg-N₂O-N/kg-N] を利用した。農地、草地については、農業分野で使用されている値 [0.23 kg-N₂O-N/ha] を適用した（詳細は、第 5 章 5.5.1.5.b) 節を参照のこと）。

■ 活動量

転用のない森林、その他の土地における無機化された窒素量は、鉍質土壌炭素ストック変化の算定に用いた鉍質土壌炭素ストック減少量を利用した。（6.5.2. b) 2)、6.10.2 参照）

転用された農地については、転用された農地のうち鉍質土壌面積のみを抽出して活動量とした。（6.6.1. b) 2) 参照）。草地における鉍質土壌面積は、統計データより把握された牧草地面積に、牧草地の更新率（6.7.1.節参照）、牧草地における鉍質土壌面積の割合を乗じて把握した（6.7.1. b) 1) 参照）。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

森林、その他の土地における土壌炭素排出・吸収量の不確実性については、土壌炭素ストック変化、C:N 比の不確実性を合成して活動量の不確実性を設定した。排出係数の不確実性は 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を利用した。他の土地利用から転用された農地及び草地における土壌炭素排出・吸収量の不確実性を、農業分野の当該排出の不確実性と同様な数値 31%を利用した。その結果、土壌有機質の無機化に伴う N₂O 排出量の不確実性は-70%～+189%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は一定値を使用しており、活動量は一貫した統計から算定しているため、当該カテゴリーの時系列の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に記述している。

e) 再計算

新規植林・再植林面積（AR 面積）、森林減少面積（D 面積）が再計算されたため、全年にわたり森林、農地、草地、その他の土地の土壌有機物の無機化に伴う排出量が全年にわたり再計算された。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

6.15. 土壌からの N₂O 間接排出 (4.(IV))

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは土壌からの N₂O 間接排出量を取り扱う。土壌からの N₂O 間接排出については、NH₃やNO_xとして揮散した窒素化合物による大気沈降に伴う N₂O 排出、及び窒素が硝酸として溶脱・流出したのち微生物の作用による N₂O 排出を含む。わが国では、森林土壌の施肥に伴う間接排出（大気沈降・溶脱・流出）と、土壌有機物の無機化に伴う間接排出（溶脱・流出）を算定対象とする。

2018 年度における当該カテゴリーからの N₂O 排出量は 33.0 kt-CO₂換算であり、1990 年度比 19.8%の減少、前年度比 2.2%の増加となっている。

表 6-61 土壌からの間接 N₂O 排出量

ガス	カテゴリー	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
NO ₂	合計	kt-N ₂ O	0.14	0.13	0.12	0.11	0.10	0.10	0.10	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11
		kt-CO ₂ 換算	41.2	37.6	34.7	32.4	31.1	30.8	30.7	31.3	31.4	31.6	31.7	31.8	32.3	33.0
	大気沈降	kt-N ₂ O	0.0005	0.0004	0.0004	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003
	溶脱・流出	kt-N ₂ O	0.14	0.13	0.12	0.11	0.10	0.10	0.10	0.10	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11	0.11

b) 方法論

1) 大気沈降に伴う N₂O 排出量

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドライン 11.2.2.1 に記述されている Tier 1 の算定方法を用いて算定した。算定式は以下のとおりである。

$$N_2O_{(ATD)-N} = [(F_{SN} \times Frac_{GASF}) + ((F_{ON} + F_{PRP}) \times Frac_{GASM})] \times EF_4$$

$N_2O_{(ATD)-N}$: 大気沈降による N₂O 排出量 [kg N₂O-N]

F_{SN} : 森林土壌へ施用される化学肥料に含まれる窒素量 [kg-N]

F_{ON} : 森林土壌へ施用される有機質肥料に含まれる窒素量 [kg-N]

F_{PRP} : 森林土壌へ沈澱される牧草地、放牧場、小放牧地の排せつ物 [kg-N]

$Frac_{GASF}$: 化学窒素肥料から NH₃や NO_xとして揮発する割合 [kg-NH₃-N + NO_x-N/kg-N applied]

$Frac_{GASM}$: 有機質肥料、排せつ物から NH₃や NO_xとして揮発する割合 [kg-NH₃-N + NO_x-N/kg-N]

EF_4 : 大気沈降による N₂O 排出係数 [kg-N₂O-N/kg-NH₃-N+NO_x-N]

■ 各種パラメータ

○ 化学肥料から NH₃や NO_xとして揮発する割合

0.1 [kg NH₃-N + NO_x-N/kg N applied] (2006 年 IPCC ガイドライン Vol.4 Table 11.3)

○ 大気沈降による間接 N₂O 排出係数

0.01 [kg N₂O-N/kg NH₃-N+NO_x-N volatilised] (2006 年 IPCC ガイドライン Vol.4 Table 11.3)

■ 活動量

窒素施肥量について 6.12.節を参照のこと。

2) 溶脱・流出に伴う N₂O 排出

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドライン 11.2.2.1 に記述されている Tier 1 の算定方法を用いて算定した。

$$N_2O_{(L)} - N = (F_{SN} + F_{ON} + F_{PRP} + F_{CR} + F_{SOM}) \times Frac_{LEACH-(H)} \times EF_5$$

$N_2O_{(L)} - N$: 窒素溶脱・流出に伴う N ₂ O 排出量 [kg N ₂ O-N]
F_{CR}	: 森林土壌へ施用される作物残さに含まれる窒素量 [kg-N]
F_{SOM}	: 土壌の有機物無機化による年間窒素放出量 [kg-N]
$Frac_{LEACH-(H)}$: 施用される窒素のうち溶脱・流出する割合 [kg-N/kg-N]
EF_5	: 溶脱・流出に伴う N ₂ O の排出係数 [kg-N ₂ O-N]

■ 各種パラメータ

○ 窒素のうち溶脱・流出する割合

0.3 [kg N/kg nitrogen of fertilizer] (2006年 IPCC ガイドライン Vol.4 Table 11.3)

○ 溶脱・流出の N₂O 間接排出係数

0.0075 [kg N₂O-N / (kg N leaching/runoff)] (2006年 IPCC ガイドライン Vol.4 Table 11.3)

■ 活動量

窒素施肥量については、6.12 節を参照のこと。土壌有機質の無機化に伴う窒素の損失量については、6.13 節を参照のこと。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

窒素施肥に伴う N₂O 間接排出量の算定に用いられる排出係数の不確実性 (2006年 IPCC ガイドライン、11.24 頁) 及び窒素施肥活動量の不確実性に基つき評価を行った。土壌有機質の無機化に伴う N₂O 間接排出量の不確実性は、土壌有機質の無機化に伴う N₂O 直接排出量の不確実性と同等な値 288% を利用した。その結果、土壌からの N₂O 間接排出量の不確実性は -107% ~ +360% と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は一定値を使用しており、活動量は一貫した統計から算定しているため、当該カテゴリーの時系列の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

新規植林・再植林面積 (AR 面積)、森林減少面積 (D 面積) の再計算に伴い土地利用変化・管理変化に伴う無機化された窒素からの間接 N₂O 排出が全年にわたり再計算された (6.14 節参照)。また、2015年以降の化学肥料及び2016年以降の硝化抑制剤入り化学肥料の統計値が改訂されたので、2015年以降の排出量が再計算された (6.12 節参照)。

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

6.16. バイオマスの燃焼 (4.(V))

a) カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、バイオマスの燃焼に伴い排出される CH₄、CO、N₂O、NO_x の排出量を取り扱う。CO、NO_x の排出については、別添3を参照。

転用のない森林及び他の土地利用から転用された森林における野火に起因する排出量については、森林火災の統計データが両方のカテゴリーで生じた野火を含むため、転用のない森林の野火において一括して報告する。また、我が国においては、森林における計画的な焼却活動及び森林以外の土地利用区分から森林への転用に伴う計画的な焼却活動は、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」及び「消防法」によって厳しく制限されているため実施されない。そのため、計画的な焼却活動からの排出量は生じず「NO」として報告する。

農地における計画的な焼却活動からの CH₄、N₂O 排出については、果樹剪定枝等の木本性バイオマスの焼却に伴う排出を算定する。我が国の農地は集約的な管理を特徴としており、この管理形態の下での農地において野火が起こることはほぼ皆無と考えられるため、農地における野火に伴う CH₄、N₂O、排出については「NO」として報告する。また、草地の野焼きに伴う CH₄、N₂O 排出について算定する。草地の野火に伴う排出について農地と同様な理由で「NO」として報告する。

森林及び農地、草地以外における野火に伴う CH₄、N₂O 排出については、当該野火に関する情報が十分把握されていないため「NE」として報告する。このうち、湿地における火災については、重要でない「NE」に該当する。なお、CO₂ 排出については既に炭素ストック変化算定において計上済みのため、本区分には含めていない。

2018 年度における当該カテゴリーからの温室効果ガス排出量は 49.6 kt-CO₂ 換算であり、1990 年度比 28.5%の減少、前年度比 31.7%の減少となっている。これらのトレンド変動は、長期的には主に果樹残さ焼却量の減少を反映しているが、短期的には森林における野火の発生量が一定していないことが影響している。

表 6-62 バイオマスの燃焼に伴う非 CO₂ 排出量

ガス	カテゴリー	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
全ガス	合計	kt-CO ₂ 換算	69.4	66.8	63.0	62.9	60.9	54.9	56.1	51.0	53.0	73.1	54.7	49.2	72.6	49.6	
		kt-CH ₄	1.9	1.8	1.7	1.7	1.6	1.4	1.5	1.3	1.3	2.1	1.4	1.2	2.1	1.2	
CH ₄	合計	kt-CO ₂ 換算	47.2	45.3	42.2	42.4	40.8	35.3	36.5	31.8	33.7	52.3	35.3	30.3	52.0	30.8	
		kt-CH ₄	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.2	0.3	0.1	0.2	0.9	0.2	0.1	0.9	0.1	
	森林	kt-CH ₄	1.0	0.9	0.8	0.8	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6	0.6
	農地	kt-CH ₄	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
	草地	kt-CH ₄	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO
	湿地	kt-CH ₄	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	開発地	kt-CH ₄	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
	その他の土地	kt-CH ₄	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
	その他	kt-CH ₄	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
N ₂ O	合計	kt-N ₂ O	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.06	0.06	0.07	0.06	0.06	0.07	0.06	
		kt-CO ₂ 換算	22.1	21.5	20.8	20.5	20.1	19.6	19.7	19.2	19.3	20.8	19.4	18.9	20.6	18.8	
	森林	kt-N ₂ O	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.001	0.002	0.001	0.001	0.006	0.002	0.0004	0.006	0.001	
	農地	kt-N ₂ O	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	
	草地	kt-N ₂ O	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	
	湿地	kt-N ₂ O	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO	NE,NO
	開発地	kt-N ₂ O	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	その他の土地	kt-N ₂ O	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	その他	kt-N ₂ O	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA

b) 方法論

1) 森林火災に伴う非 CO₂ 排出

■ 算定方法

GPG-LULUCF に示された Tier 1 の算定方法を用いた。

○ 森林

【CH₄】

$$bbGHG_f = L_{forest\ fires} \times ER$$

【N₂O】

$$bbGHG_f = L_{forest\ fires} \times ER \times NC_{ratio}$$

bbGHG_f : 森林によるバイオマス燃焼に伴う温室効果ガス排出量

L_{forest fires} : 森林の火災に伴う炭素ストック損失量 [t-C/yr]

ER : 排出比 (CH₄ : 0.012、N₂O : 0.007)

NC_{ratio} : バイオマス中の窒素炭素比

■ 各種パラメータ

○ 排出比

バイオマスの燃焼に伴う非 CO₂ ガスの排出比には以下のパラメータを用いた。

CH₄ : 0.012、N₂O : 0.007

(出典 : GPG-LULUCF デフォルト値 Table3A.1.15)

○ NC 比

バイオマスの燃焼に伴う非 CO₂ ガスの NC 比には、以下のパラメータを用いた。

NC 比 : 0.01 (出典 : GPG-LULUCF 3.50 頁、デフォルト値)

■ 活動量

○ 森林

2006 年 IPCC ガイドラインに示された Tier 3 の算定方法を用いて、火災による炭素ストック損失量を、国有林と民有林それぞれの火災被害材積に容積密度、バイオマス拡大係数、及び乾物重における炭素含有率を乗じて算定した。

$$L_{forest\ fires} = \Delta C_n + \Delta C_p$$

L_{forest fires} : 火災に伴う炭素ストック損失量 [t-C/yr]

ΔC_n : 国有林の火災による炭素ストック損失量 [t-C/yr]

ΔC_p : 民有林の火災による炭素ストック損失量 [t-C/yr]

被害材積の把握は、国有林については、林野庁「森林・林業統計要覧」に示された火災立木被害材積を用いた。民有林については、齢級別の実損面積及び被害材積(林野庁調べ)に一部推計を加えて、火災被害材積を求めた。すなわち、4 齢級以下の被害材積については、森林資源現況調査及び国家森林資源データベースより推計された 4 齢級以下の単位面積当り蓄積量に、5 齢級以上の民有林における損傷比率(蓄積量に対する被害材積の割合)を乗ずることにより推計した。ここで、損傷比率は齢級に関わらず一定であると仮定した。

$$\Delta C_{n,p} = Vf_{n,p} \times D_{n,p} \times BET_{n,p} \times CF_{n,p}$$

$\Delta C_{n,p}$: 国有林、民有林の火災による炭素ストック損失量 [t-C/yr]
$Vf_{n,p}$: 国有林、民有林の火災被害材積[m ³ /yr]
$D_{n,p}$: 国有林、民有林容積密度 [t-d.m./m ³]
$BEF_{n,p}$: 国有林、民有林バイオマス拡大係数
$CF_{n,p}$: 炭素含有率 [t-C/t-d.m.]

国有林及び民有林における容積密度、バイオマス拡大係数の値は、人工林、天然林の面積比を用いた加重平均により求めた。

表 6-63 国有林、民有林の容積密度とバイオマス拡大係数

種類	容積密度 [t-d.m./m ³]	バイオマス拡大係数
国有林	0.49	1.61
民有林	0.46	1.61

(出典) 林野庁調べより推計

表 6-64 野火による被害材積

カテゴリー	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
国有林における火災被害材積	m ³	3,688	1,014	1,599	359	976	16,091	934	360	279	5,326	2,472	916	75	112	
民有林における火災被害材積	m ³	63,602	68,361	60,228	72,575	67,417	15,810	41,537	12,269	26,620	147,989	38,571	8,151	157,051	16,309	
Ⅳ/5	実損面積	kha	0.29	0.94	0.48	0.35	0.37	0.07	0.59	0.10	0.18	0.53	0.22	0.04	0.35	0.09
	被害材積	m ³	47,390	58,129	54,487	59,235	55,628	12,780	40,477	11,566	25,204	137,078	36,693	7,370	153,412	15,148
Ⅳ/4	実損面積	kha	0.27	0.51	0.16	0.27	0.28	0.06	0.07	0.03	0.04	0.18	0.05	0.02	0.04	0.03
	被害材積	m ³	16,212	10,232	5,741	13,340	11,789	3,030	1,060	703	1,416	10,911	1,878	781	3,639	1,161

(出典) 国有林の被害材積は「森林・林業統計要覧」より。民有林の実損面積、被害材積は林野庁提供値。

■ 留意事項

我が国では、森林火災情報を報告する手続きが国有林と民有林とで個別に規定されているため、国有林と民有林とで別々にバイオマスの燃焼に伴う排出量を算定している。しかしながら、我が国の森林火災は国有林及び民有林の両データセットにより把握されており、算定された排出量に適切に反映されている。

2) 果樹剪定枝の焼却に伴う非 CO₂ 排出

■ 算定方法

果樹剪定枝の焼却に伴う CH₄ 及び N₂O の排出は 2006 年 IPCC ガイドラインに示された式 (Equation 2.27, p2.42, Vol.4) を適用して計算を行った。算定式は以下のとおりである。

$$L_{fire} = W_B \times C_f \times G_{ef} \times 10^{-6}$$

L_{fire}	: 焼却に伴う炭素ストック損失量 [kt-GHG]
W_B	: 焼却量 [t-d.m]
C_f	: 燃焼率
G_{ef}	: 排出係数 [t/kt-d.m.]

■ 各種パラメータ

燃焼率についてはわが国の農業分野の農作物残さの野焼きで一般的に利用されている値 (0.90) を利用することとする。排出係数は 2006 年 IPCC ガイドラインに記載されたデフォルト排出係数のうち「Agricultural residue」の値を適用することとする。

表 6-65 焼却に伴うデフォルト排出係数 (t/kt-d.m.)

区分	CH ₄	N ₂ O
Agricultural residue	2.7	0.07

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン, Vol.4, chp.2, Table 2.5

■ 活動量 (焼却量)

4.B の炭素ストック変化の算定に用いているのと同じ果樹別の栽培面積に、単位面積あたり乾物残さ発生量 (400kg/10a : 科学技術庁資源調査所、1982) 及び果樹園の茎葉処理における残さ焼却率 (25% : 土壌モニタリング調査結果、2008) を乗じて、果樹剪定枝 (残さ) の焼却量を算定した。

$$W_B = \sum_i (A_i \times E \times 10) \times R$$

W_B	: 果樹剪定枝 (残さ) の焼却量 [kg-d.m.]
A	: 栽培面積 [ha]
E	: 面積あたり乾物残さ発生量 [kg-d.m./10a]
R	: 果樹残さ焼却率
i	: 果樹種類

3) 草地の燃焼に伴う非 CO₂ 排出

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの Tier.1、Tier.2 に適用されるバイオマス燃焼の算定式 (Equation 2.27, p2.42, Vol.4) に従い、草地の燃焼に伴う排出量の算出を行った。算定式は以下のとおりである。

$$L_{fire} = A \times M_B \times C_f \times G_{ef} \times 10^{-6}$$

L_{fire}	: 焼却に伴う炭素ストック損失量 [kt-GHG]
A	: 燃焼面積 [ha]
M_B	: 単位面積あたり焼却量 [t-d.m./ha]
C_f	: 燃焼率
G_{ef}	: 排出係数 [t/kt-d.m.]

■ 各種パラメータ

燃焼率については我が国における調査データも鑑み、専門家判断により 90% を利用した。排出係数は 2006年 IPCC ガイドラインに記載されたデフォルト排出係数のうち「Savanna and grassland」のデフォルト値を適用した。

表 6-66 焼却に伴うデフォルト排出係数 (t/kt-d.m.)

区分	CH ₄	N ₂ O
Savanna and grassland	2.3	0.21

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン, Vol.4, chp.2, Table 2.5

■ 活動量 (焼却量)

草地の燃焼面積 (野焼きの実施面積) に、単位面積あたりの平均焼却量を乗じて、活動量として草地の焼却量を算定した。草地の燃焼面積については網羅的な統計情報がとられておらず、公式データが存在していない。ただし、我が国の GHG 排出に影響するような大規模な

野焼きが実施されている場所は限られており、阿蘇、東富士演習場、北富士演習場、渡良瀬遊水地、秋吉台の5か所（実施予定面積が1,000haを超える場所を抽出）の野焼き実施予定面積の合計を用い全年次一律で燃焼面積（24,400ha）を設定した。また、単位面積あたりの平均燃焼量について我が国における調査データも鑑み、専門家判断により10t-d.m/haを利用した。

4) 湿地におけるバイオマス焼却に伴う非CO₂排出

我が国の湿地では、河川敷における野焼き活動や野火が生じている。

Tier1の方法論（2006年IPCCガイドライン式2.27）に従い、河川敷におけるバイオマス燃焼からの排出量の試算を行った。

CH₄とN₂Oの排出係数は2006年IPCCガイドラインTable2.5のAll savanna and grasslandの値を用い、‘MB・Cf’については、2006年IPCCガイドラインTable2.4のAll savanna grasslands (mid/late dry season burns)の10.0t-d.m./haパラメータを用いた（この場合、CO₂換算の面積当たり排出係数は1.2 t-CO₂eq./haとなる）。

統計情報から把握できる火災の発生件数のうち、河川敷火災を含む「その他の火災」という区分については、毎年5,500～8,000件の火災発生している。この火災をすべて河川敷での火災と仮定して、わが国の算定方法検討会で設定したLULUCF分野の「significant」の基準に到達するまでのGHG排出となる場合は、1件当たりの焼損面積が11ha必要となる。

我が国の林野火災の年次発生面積が多い年で数百haであること、また10haを超える火災はわが国の状況ではかなりの大火に匹敵する規模であることを踏まえ、試算に適用したパラメータの不確実性を踏まえてもNE基準に該当すると判断し、重要でない「NE」として報告した。なお、河川敷火災の個別データが入手できる荒川下流部の火災発生状況の焼損面積の事例を踏まえて年間排出量を推計すると約300t-CO₂程度であり、この値をNE基準適用区分の積算に用いた。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

森林火災に関する各種パラメータ及び活動量の不確実性については、現地調査データ、専門家判断、または2006年IPCCガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った。果樹園剪定枝の焼却に関するパラメータ及び活動量の不確実性について、農業分野の農作物残さ焼却の不確実性（CH₄：296%、N₂O：300%）で代用した。草地の野焼きに関するパラメータ及び活動量の不確実性について、実測データ、2006年IPCCガイドラインのデフォルト値に基づき評価を行った（CH₄：56%、N₂O：63%）。その結果、バイオマスの燃焼に伴う排出量の不確実性はCH₄で81%、N₂Oで48%と評価された。

■ 時系列の一貫性

転用のない森林におけるバイオマス燃焼の時系列の一貫性は、同じデータ源（「森林・林業統計要覧」及び林野庁提供データ）並びに1990年度から2014年度まで同一の方法論を使用することにより確保されている。果樹剪定枝の焼却及び草地の焼却の時系列の一貫性は、同じデータ源（「耕地及び作付面積統計」）を使用することにより確保されている。

d) QA/QCと検証

2006年IPCCガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリQC手続きを実施している。一般的なインベントリQCには、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC活動については、第1章に記述している。

e) 再計算

2016年度特産果樹栽培面積の統計データの公表に伴い、2016年度以降の果樹剪定枝の焼却に伴うCH₄、N₂O排出量が再計算された。

再計算の影響の程度については10章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」(2006)
2. IPCC「2006年IPCCガイドラインに対する2013年追補：湿地」(2014)
3. IPCC「2013年京都議定書補足的方法論ガイダンス」(2014)
4. IPCC「2006年IPCC国家温室効果ガスインベントリガイドラインの2019年改良」(2019)
5. FAO「WORLD BAMBOO RESOURCES A thematic study prepared in the framework of the Global Forest Resources Assessment 2005」(2007)
6. FAO「Food and Agriculture Organization Corporate Statistical Database」
7. FRA「Global Forest Resources Assessment 2010, Country Reports, Japan」(2010)
8. UNFCCC「改訂UNFCCCインベントリ報告ガイドライン」(FCCC/SBSTA/2013/10/Add.3)(2014)
9. UNFCCC「土地利用、土地利用変化及び林業における共通報告様式の表について」(FCCC/SBSTA/2013/L.29、FCCC/SBSTA/L.29/Add.1)(2013)
10. 科学技術庁資源調査所「バイオマス資源のエネルギー的総合利用に関する調査」(1982)
11. 環境庁「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第1部」(平成12年9月)(2000)
12. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第3部」(平成14年8月)(2002)
13. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第5部」(平成18年8月)(2006)
14. 経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」
15. 経済産業省「生産動態統計年報 紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計編」
16. 国土交通省「土地利用現況把握調査」
17. 国土交通省「都市公園等整備現況把握調査」
18. 国土交通省「道路緑化樹木現況調査」
19. 国土交通省「下水道処理場・ポンプ場における吸収源対策に関する実態調査」
20. 国土交通省「都市緑化施策の実績調査」
21. 国土交通省「河川における二酸化炭素吸収源調査」
22. 国土交通省「公的賃貸住宅緑地整備現況調査」
23. 国土交通省公園緑地課「平成16年度 地球温暖化防止に資する都市緑地効果把握技術に関する調査」(2005)
24. 国土交通省都市局公園緑地・景観課「平成25年度 都市緑化等による温室効果ガス吸収源対策等の次期枠組への対応方針等検討調査」(2014)
25. 国土交通省都市局公園緑地・景観課「平成26年度 都市緑化等による温室効果ガス吸収源対策の推進等に関する調査」(2015)
26. 国土交通省国土技術政策総合研究所「国土技術政策総合研究所資料 No.506 わが国の街路樹VI」(2009)
27. 国土交通省「国土数値情報」
28. 国土交通省「建築着工統計」
29. 国土交通省「建設資材・労働力需要実態調査」
30. 国土庁計画・調整局、国土政策研究グループ「国土プランナー必携」(平成8年11月)
31. 国土地理院「日本の東西南北端点の緯度経度」
32. 国土地理院「全国都道府県市町村別面積調」
33. 財務省「貿易統計」
34. 総務省「住宅・土地統計調査」
35. 総務省「固定資産概要調書」
36. 農林水産省「世界農林業センサス」
37. 農林水産省「耕地及び作付面積統計」

38. 農林水産省「農地の移動と転用」
39. 農林水産省「木材統計調査（木材需給報告書）」
40. 農林水産省「特用林産物生産統計調査」
41. 防衛省「防衛白書」
42. 林野庁「森林・林業統計要覧」
43. 林野庁「森林資源現況調査」
44. 林野庁「国家森林資源データベース」
45. Forestry Agency 「Annual Report on Forest and Forestry in Japan」
<https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/hakusyo/30hakusyo/attach/pdf/index-1.pdf>
46. 気象庁、*Mesh climatic data of Japan for the 1970-2000* [CD-ROM] , Japan Meteorological Business Support-Center, Tokyo (2002)
47. (財) 日本ダム協会「ダム年鑑」
48. 自然科学研究機構国立天文台編「理科年表 平成 31 年」(2019)
49. 日本繊維板工業会「木質ボード用途別出荷量」
50. 日本製紙連合会「パルプ材集荷実績推移」
51. 農業環境技術研究所「日本の水田と黒ボク土畑に適合する改良 Roth C モデル」研究成果情報 27、p. 56-57 (2011)
52. 農業環境技術研究所「リン酸吸収係数を用いた汎用的な黒ボク土用改良 Roth C (Roth C-26.3_vPAC)」研究成果情報 28、p. 18-19 (2012)
53. Coleman, K. & Jenkinson, D. S. “*Roth C-26.3 - A model for the turnover of carbon in soil. In Evaluation of Soil Organic Matter Models: Using Existing Long-Term Datasets*”, Ed. D. S. Powlson, P. Smith and J. U. Smith, p. 237-246, Springer, Berlin, (1996)
54. 清野 豁「アメダスデータのメッシュ化について」農業気象、48(4)、p. 379-383 (1993) .
55. 白戸康人「日本およびタイの農耕地における土壌有機物動態モデルの検証と改良」農業環境技術研究所報告 24 号、p.23-94 (2006)
56. Sakai, H., Hashimoto, S., Ishizuka, S., Kaneko, S. & Takahashi, M., “*Estimation of the effect of forest management on the carbon stocks in Japanese planted forests using CENTURY-jfos: a modified CENTURY model.*”, The International Forestry Review,12(5):31-32(Forests for the Future: Sustaining Society and the Environment XXIII IUFRO World Congress, Republic of Korea Abstracts), (2010)
57. Shirato, Y. & Taniyama, I., “*Testing the suitability of the Rothamsted Carbon model for long-term experiments on Japanese non-volcanic upland soils*”, Soil Science and Plant Nutrition, 49(6). p.921-925, (2003)
58. Shirato, Y., Hakamata, T. & Taniyama, I., “*Modified rothamsted carbon model for andosols and its validation: changing humus decomposition rate constant with pyrophosphate-extractable Al*”, Soil Science and Plant Nutrition, 50(1). p.149-158, (2004)
59. Shirato, Y. & Yokozawa, M., “*Applying the Rothamsted Carbon Model for Long-Term Experiments on Japanese Paddy Soils and Modifying It by Simple Tuning of the Decomposition Rate*”, Soil Science and Plant Nutrition, 51(3). p.405-415, (2005)
60. Shirato, Y., Yagasaki, Y. & Nishida, M., “*Using different versions of the Rothamsted Carbon Model to simulate soil carbon in long-term experimental plots subjected to paddy-upland rotation in Japan*”, Soil Science and Plant Nutrition, 57, p.597-606, (2011)
61. Takata, Y., Ito, T., Ohkura, T., Obara, H., Kohyama, K. & Shirato, Y., “*Phosphate adsorption coefficient can improve the validity of Roth C model for Andosols*”, Soil Science and Plant Nutrition, 57, p.421-428, (2011)
62. Tonosaki, K., Murayama, K., Imai, K. & Nagino, Y., “*Estimation of Soil Carbon Accumulation Rate in*

- Urban Parks*”, Journal of the Japanese Society of Revegetation Technology, Vol. 38 (3), p.373-380, (2013)
63. 中井信「土壌管理による土壌への炭素蓄積」(財)農業技術協会「平成12年度温室効果ガス排出削減定量化法調査」
 64. 半田真理子、外崎公知、今井一隆、後藤伸一「植生回復地における土壌及びリターに関する炭素固定量の把握に向けた研究について」都市緑化技術 69、p.18-22 (2008)
 65. 波多野隆介「草地飼料畑の管理実態調査事業」平成28年度日本中央競馬会畜産振興事業報告書」(2017)
 66. Morisada, K., Ono, K. & Kanomata, H., “Organic carbon stock in forest soil in Japan”, *Geoderma*, 119, p.21-32 (2004)
 67. 松江正彦、長濱庸介、飯塚康雄、村田みゆき、藤原宣夫「日本における都市樹木のCO₂固定量算定式」、日本緑化工学会誌 35 (2)、p. 318-324 (2009)
 68. Yagasaki, Y. & Shirato, Y., “Assessment on the rates and potentials of soil organic carbon sequestration in agricultural lands in Japan using a process-based model and spatially explicit land-use change inventories –Part 1: Historical trend and validation based on nation-wide soil monitoring”, *Biogeosciences*, 11, 4429-4442, doi:10.5194/bg-11-4429-2014, (2014)
 69. 南雲俊之、安藤真奈実、森智郁「竹炭の成分組成から見た土壌改良資材としての特徴」、日本土壌肥料科学雑誌 Vol. 85 (1) , 37-42 (2014)

第7章 廃棄物分野

7.1. 廃棄物分野の概要

7.1.1. 廃棄物処理及び算定カテゴリーの概要

廃棄物分野では、廃棄物の処理に伴い発生する温室効果ガスを処理方式に応じ、固形廃棄物の処分（5.A.）、固形廃棄物の生物処理（5.B.）、廃棄物の焼却と野焼き（5.C.）、排水の処理と放出（5.D.）及びその他（5.E.）の区分で排出量の算定を行う¹。日本における廃棄物・排水処理方式及び区分別の温室効果ガス算定カテゴリーを図7-1及び図7-2に記す。

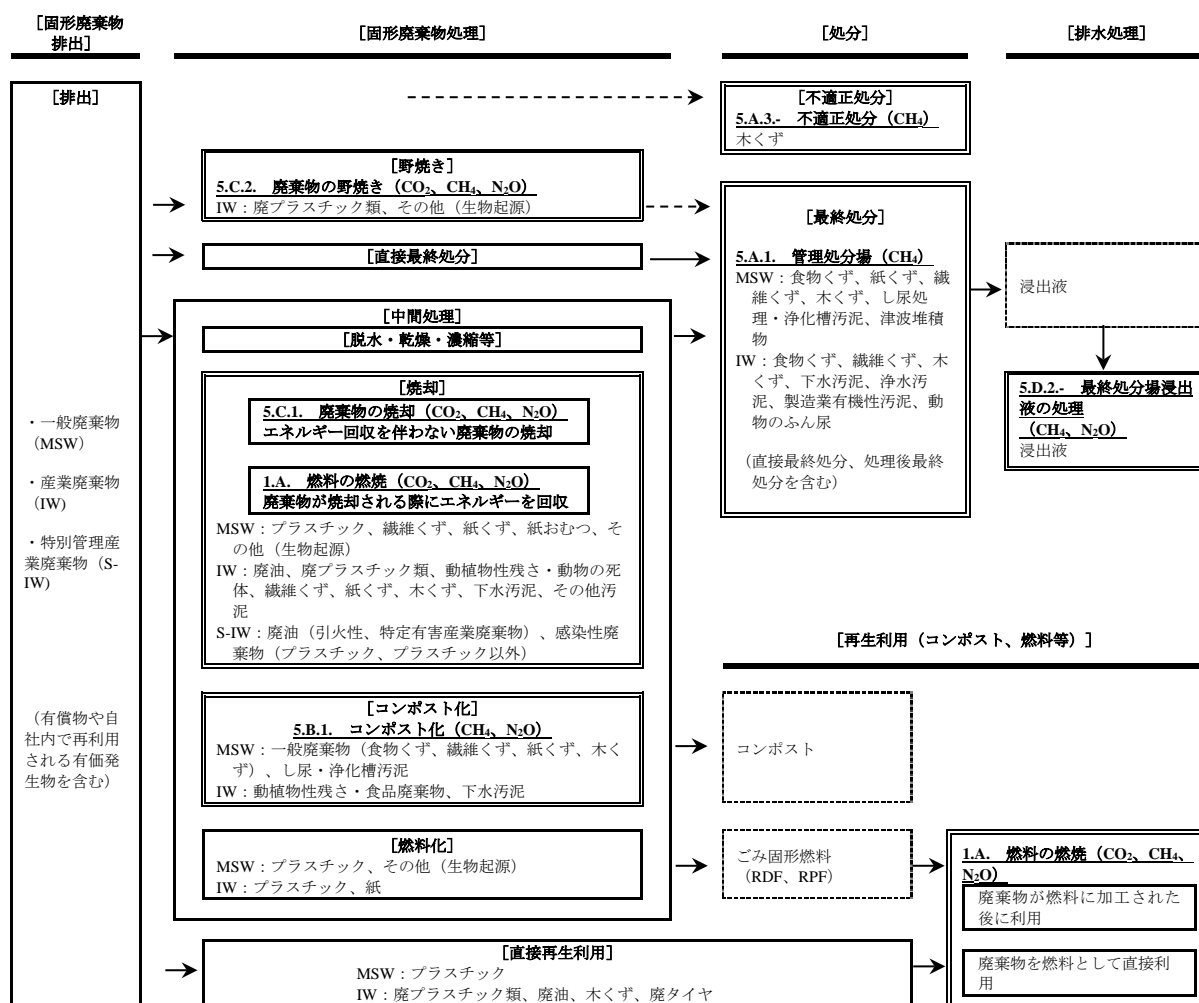


図 7-1 温室効果ガス排出量の算定対象となる固形廃棄物、その処理方式及び算定カテゴリーのフロー

¹ 廃棄物分野のいくつかの排出源では、過去の年度の統計データや関連データ等を入手できない場合、推計により値の補完を行っているが、本章では、これらの推計方法の内容については割愛している。推計方法の詳細については環境省のホームページ「温室効果ガス排出量算定方法検討会」(<http://www.env.go.jp/earth/ondanka/ghg-mrv/committee/>)を参照のこと。

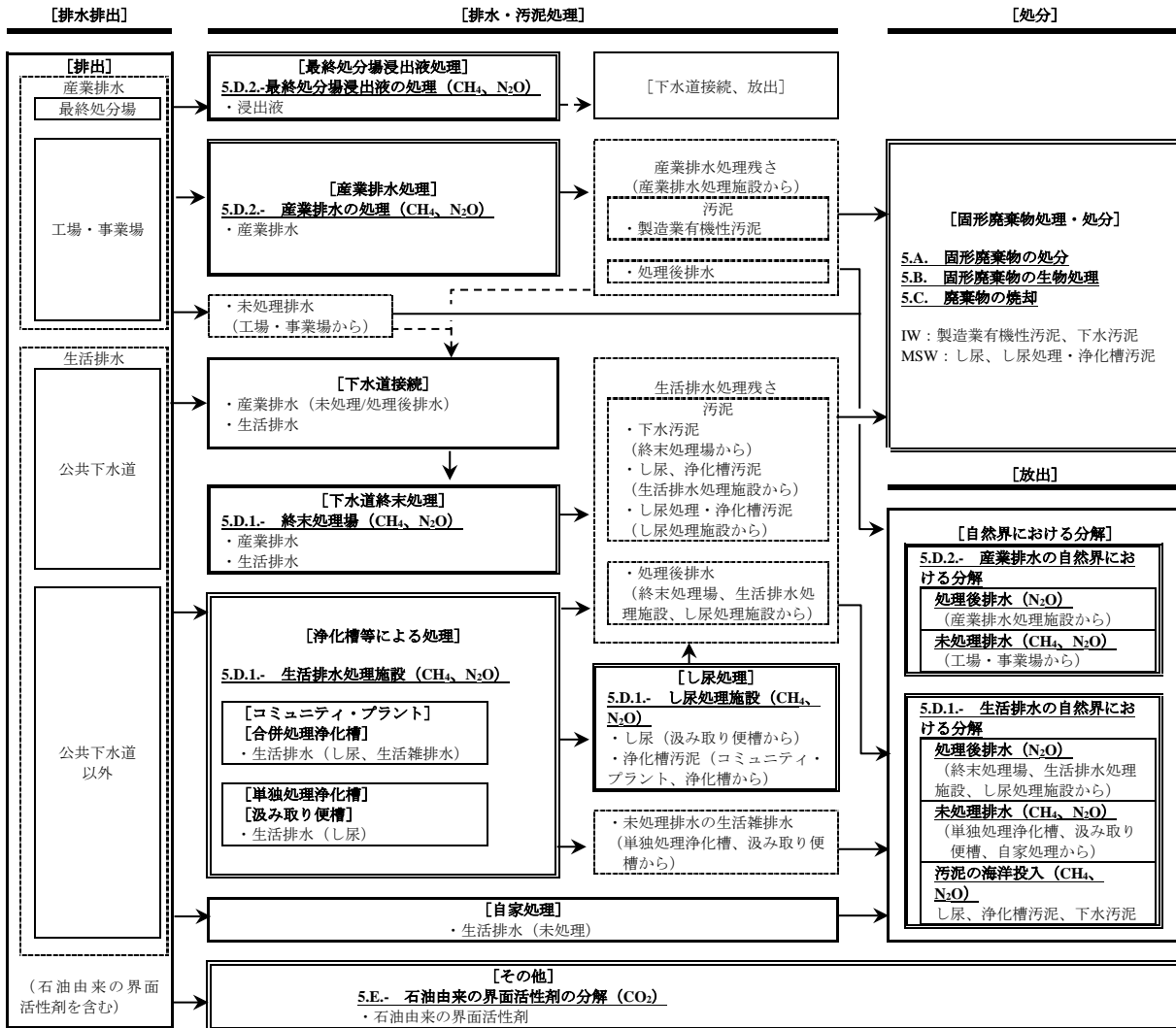


図 7-2 温室効果ガス排出量の算定対象となる排水・汚泥、その処理方式及び算定カテゴリーのフロー

廃棄物分野で算定対象とする「廃棄物」とは、2006年 IPCC ガイドラインの考え方に基づく廃棄物であり、日本の場合、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」(以下、廃掃法という。)の定義に基づく一般廃棄物及び産業廃棄物のほか、有償物や自社内で再利用される有価発生物等も算定対象に含まれる(具体的には「7.3.1.コンポスト化(5.B.1.)」「7.4.3.2.廃棄物が原燃料として直接利用される場合(1.A.)」「7.4.3.3.廃棄物が燃料に加工された後に利用される場合(1.A.)」で報告)。日本における廃棄物関連の統計データは、一般廃棄物と産業廃棄物に分かれて取りまとめられていることから、廃棄物分野の多くの排出源では、一般廃棄物と産業廃棄物に分けて算定方法等の検討を行っている。なお、2011年3月11日に発生した東日本大震災に伴い発生した災害廃棄物の処理に伴う温室効果ガスの排出量は当該分野で算定されている。

7.1.2. 廃棄物分野における温室効果ガス排出量の概要

2018年度における当該分野からの温室効果ガス排出量は19,267 kt-CO₂換算であり、日本の温室効果ガス総排出量(LULUCFを除く)の1.6%を占め、1990年度比においては35.2%の減少、前年度比においては3.0%の減少となっている。廃棄物分野の総排出量に対するカテゴリー別排出量の割合は、廃棄物の焼却と野焼き(5.C.) (エネルギー分野で報告する廃棄物の焼

却等を除く)が60.6%(1990年度比16.0%の減少)と最も多く、次いで排水の処理と放出(5.D.)が18.7%(1990年度比32.4%の減少)、固形廃棄物の処分(5.A.)が15.2%(1990年度比69.4%の減少)、その他(5.E.)が3.5%(1990年度比4.2%の減少)、固形廃棄物の生物処理(5.B.)が2.0%(1990年度比64.0%の増加)の結果となっている。ガス別の排出量割合は、主に廃プラスチックや廃油等の石油由来の廃棄物の焼却及び野焼きに伴うCO₂排出量が最も多く(53%)、次いで固形廃棄物の埋立処分に伴うCH₄の排出(15%)、排水の処理と放出に伴うN₂Oの排出(10%)の結果となっている。

1990年度以降の廃棄物分野の温室効果ガス排出量推移の傾向の特徴として、循環型社会形成推進基本法及び個別リサイクル法等の制定によりリサイクル率が向上し、生分解可能廃棄物最終処分量の減少に伴う最終処分場からのCH₄排出量が減少したことが挙げられる。具体的には、廃棄物のリサイクル率は1990年度の7.4%から2016年度には15.4%に増加し、また一方では廃棄物の最終処分量が1990年度の109Mt/年から2016年度には約14Mt/年に減少している(環境省、2019)。ただし、エネルギー分野で排出量が計上される原燃料利用及びエネルギー回収を伴う石油由来の廃棄物の焼却に伴う排出量は、リサイクル率に伴い増加している(1990年度比63.9%の増加)。

7.1.3. 廃棄物分野における一般的な方法論

■ 算定方法、排出係数

廃棄物分野からの温室効果ガス排出量の算定には、主に国独自の算定方法及び排出係数を用いる。国内研究の十分でないカテゴリーについて、部分的に2006年IPCCガイドラインにおけるデフォルト法やデフォルト排出係数を用いる。カテゴリーごとの詳細は各節に記す。

表 7-1 廃棄物分野で用いる算定方法と排出係数の概要

温室効果ガス排出・ 吸収カテゴリー	CO ₂		CH ₄		N ₂ O	
	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数
5. 廃棄物分野	CS	CS	CS, D, T2, T3	CS, D	CS, D, T2	CS, D
A. 固形廃棄物の処分	NA	NA	T3	CS		
B. 固形廃棄物の生物処理			T2	CS	T2	CS
C. 廃棄物の焼却と野焼き	CS	CS	CS, T2	CS, D	CS, T2	CS, D
D. 排水の処理と放出			CS, D	CS, D	CS, D	CS, D
E. その他	CS	CS	NA	NA	NA	NA

(注) D: IPCC デフォルト値、T1: IPCC Tier1、T2: IPCC Tier2、T3: IPCC Tier3、CS: 国独自の的方法または排出係数

■ 活動量

廃棄物分野からの温室効果ガス排出量の算定では、活動量として主に環境省環境再生・資源循環局「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用量実態調査報告書(廃棄物等循環利用量実態調査編)」(以下、循環利用量調査報告書)や環境省環境再生・資源循環局「日本の廃棄物処理」、(社)日本下水道協会「下水道統計(行政編)」(以下、下水道統計)等の値を用いる。その他、各種廃棄物に関する統計及び関係省庁・団体からの提供データを用いるが、詳細は各カテゴリーの該当節を参照のこと。

なお、東日本大震災の発生した2011年以降の災害廃棄物の処理・処分量については環境省環境再生・資源循環局により調査され、温室効果ガス排出量の推計の活動量に考慮されている。

7.1.4. 廃棄物分野における一般的な不確実性評価

廃棄物分野からの温室効果ガス排出量の不確実性は、2006年 IPCC ガイドライン及び環境省（2013a）に基づき評価されている。一般的な不確実性評価の方法論を以下に記す。カテゴリごとの不確実性評価の詳細は各節に記す。

■ 排出係数

各排出源に係る変数や排出係数については、実測データから計算される95%信頼区間もしくは専門家判断により評価する。様々な変数をもとに計算式により排出係数を求める場合、各変数の不確実性を誤差伝搬式で合成して排出係数の不確実性を評価する。

■ 活動量

活動量の不確実性については、統計の誤差に関する情報が無く、具体的な根拠に基づく不確実性の設定が困難なため、表 7-2 のように専門家判断に基づく不確実性を適用する。

表 7-2 廃棄物分野の活動量に用いられる統計データの不確実性

活動量に用いられる統計値	設定する不確実性		不確実性の設定根拠
	(-)	(+)	
一般廃棄物 (下水を除く生活排水)	-10%	+10%	2006年 IPCC ガイドラインがデフォルト値として設定する不確実性のうち「トラックスケールにより廃棄物重量を測定している場合」の値(±10%)を専門家判断により設定する。
産業廃棄物 (産業排水)	-30%	+30%	2006年 IPCC ガイドラインがデフォルト値として設定する不確実性のうち「定期的に廃棄物発生量データを収集している場合」の値(±30%)を専門家判断により設定する。
特別管理産業 廃棄物	-60%	+60%	産業廃棄物統計の2倍の不確実性を専門家判断により設定する。
有価発生物	-30%	+30%	2006年 IPCC ガイドラインがデフォルト値として設定する不確実性のうち「定期的に廃棄物発生量データを収集している場合」の値(±30%)を専門家判断により設定する。
下水道	-5%	+5%	全国の終末処理場に対する悉皆調査であり、データの把握精度は高いと考えられることから、専門家判断により5%と設定する。
上水道	-5%	+10%	統計値の誤差(標本誤差)は下水道統計と同様に専門家判断により5%と設定する。なお、水道統計の調査対象は、認可を得ている計画給水人口が5,001人以上の水道事業及び水道用水供給事業であり、簡易水道事業等の小規模浄水場から発生する汚泥は未把握となっている。簡易水道事業の人口割合は約5%であることから、上限側の不確実性に5%を追加する。

■ 排出量

排出係数・活動量をもとに計算式により排出量を求めるため、各量の不確実性を誤差伝搬式で合成して排出量の不確実性を評価する。

7.1.5. 廃棄物分野における一般的な再計算

日本における多くの統計は日本の会計年度(4月1日～翌年3月31日)に基づき作成されている。そのため廃棄物分野の活動量の出典として用いるいくつかの統計は、インベントリ取りまとめの時期までに最新年度の統計値の集計が完了しない。

この場合、一般的には2006年 IPCC ガイドラインに従い最新年度の活動量は前年データを据え置くこととなるが、主要な活動量についてはより適切な推計値の適用が望まれる。適切な活動量を得る取り組みとして、主要な出典である循環利用量調査報告書から引用する固形廃棄物データについては、環境省環境再生・資源循環局「循環利用量調査改善検討会」において各種経済指標(廃棄物等となる製品の出荷量や出荷額等)に基づき最新年度値の速報値として毎年推計している(環境省環境再生・資源循環局「廃棄物統計の精度向上及び迅速化のための検討調査報告書」)。廃棄物分野における最新年度の温室効果ガス排出量の推計にはこの速報値による活動量を用いている。翌年のインベントリ提出の際、これらの速報値を確定値に更新しているため、当該年度のGHG排出量については、例年、再計算を行っている。

7.2. 固形廃棄物の処分（5.A.）

本カテゴリーでは、最終処理場に埋め立てられた廃棄物から発生する CH₄ の排出量を算定する。なお、本排出源では日本における廃棄物区分に準じ、一般廃棄物と産業廃棄物に分けて算定方法の検討を行い、表 7-3 に示す算定区分で排出量を推定する。

表 7-3 固形廃棄物の陸上における処分（5.A.）で排出量の算定を行う区分

区分	算定対象		処分方式	CO ₂	CH ₄			
5.A.1. (7.2.1)	一般廃棄物	食物くず	嫌気性埋立/ 準好気性埋立	NO	○			
		紙くず			○			
		木くず			○			
		繊維くず			天然繊維くず ¹⁾	○		
		汚泥			し尿処理・浄化槽汚泥 津波堆積物 ²⁾	○		
	産業廃棄物	管理処分場	食物くず ³⁾ [動植物性残さ・動物の死体]	嫌気性埋立/ 準好気性埋立	NO	○		
			紙くず			○		
			木くず			○		
			繊維くず			天然繊維くず ¹⁾	○	
			汚泥			下水汚泥	消化汚泥由来の汚泥 ⁴⁾ その他下水汚泥	○
						浄水汚泥		○
						製造業有機性汚泥		○
						動物のふん尿 ⁵⁾		○
								○
5.A.2. (7.2.2)	-		非管理処分場	NO	NO			
5.A.3. (7.2.3)	産業廃棄物	木くず	不適正処分 ⁶⁾ (嫌気性埋立)	NE	○			

(注)

- 1) 合成繊維くずは埋立処分場内で生物分解されないと見なし、天然繊維くずのみを算定対象とする。
- 2) 2011年3月11日の東日本大震災に伴い発生した津波堆積物の一部を最終処分している。処分される津波堆積物には有機物が含まれており、専門家判断により、木くずの排出係数を適用して CH₄ 排出量を算定している。
- 3) 産業廃棄物の国内での区分「動植物性残さ」及び「動物の死体」をまとめて「食物くず」としている。
- 4) 消化された後に脱水された下水汚泥の埋立を指す。汚泥の消化により、汚泥中の生物分解される炭素量が減少するため、消化後の下水汚泥の埋立と、未消化の下水汚泥の埋立を分けてメタン排出量を算定する。
- 5) 動物のふん尿は日本の法律上の区分は汚泥ではないが、性状が類似する汚泥のカテゴリーで算定を行う。
- 6) 生分解可能な炭素を含む不適正処分廃棄物として、現時点で実態が把握されている木くずからの排出を算定対象としている。
- 7) 津波堆積物を最終処分した処分方式を特定できないことから、排出量が大きくなる嫌気性埋立 (MCF=1.0) と保守的に仮定している。

表 7-4 固形廃棄物の陸上における処分（5.A.）から発生する温室効果ガス排出量

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
CO ₂	5.A.1. 管理処分場	a. 嫌気性埋立	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO		
		b. 準好気性埋立	kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO		
	5.A.2. 非管理処分場		kt-CO ₂	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO		
	5.A.3. その他の廃棄物処分場	不適正処分	kt-CO ₂	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE		
	合計	kt-CO ₂	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE	NO,NE		
CH ₄	5.A.1. 管理処分場	a. 嫌気性埋立	一廃	kt-CH ₄	218.0	187.2	145.3	110.2	85.6	79.8	74.8	70.2	65.8	62.1	58.1	54.3	51.3	48.2
			産廃	kt-CH ₄	141.5	135.7	111.9	83.1	63.1	58.9	55.7	52.8	49.9	47.1	44.7	42.7	40.9	39.2
		b. 準好気性埋立	一廃	kt-CH ₄	18.7	28.0	31.8	34.6	30.6	28.8	27.4	26.3	25.6	24.0	23.2	21.4	20.6	19.3
			産廃	kt-CH ₄	4.2	7.7	11.3	13.2	11.8	11.0	10.8	10.8	10.8	10.3	10.0	9.5	9.3	9.0
	5.A.2. 非管理処分場		kt-CH ₄	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	5.A.3. その他の廃棄物処分場	不適正処分	kt-CH ₄	0.3	0.8	2.5	2.4	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	1.9	1.8	1.9	1.8	1.6	
		合計	kt-CH ₄	382.8	359.4	302.8	243.6	193.4	180.8	170.9	162.3	154.2	145.4	137.8	129.9	123.7	117.2	
		kt-CO ₂ 換算	9,570	8,985	7,570	6,090	4,835	4,521	4,272	4,058	3,855	3,635	3,444	3,247	3,093	2,930		
	合計	kt-CO ₂ 換算	9,570	8,985	7,570	6,090	4,835	4,521	4,272	4,058	3,855	3,635	3,444	3,247	3,093	2,930		

推計した固形廃棄物の処分からの温室効果ガス排出量を表 7-4 に示す。2018 年度における当該排出源カテゴリからの温室効果ガス排出量は 2,930 kt-CO₂ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF を除く）の 0.2% を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 69.4% の減少となっている。排出量の減少は、廃棄物の減容化のための焼却の増加による生分解可能廃棄物の最終処分量の減少にともない、最終処分場からのメタンの発生が減少した結果である。

管理処分場における生分解性廃棄物の最終処分量は 1990 年以降経年的に減少しているが、廃棄物の分解に伴う CH₄ 発生量は FOD 法に基づき半減期（例えば紙くずは 7 年）を考慮して算定されるため比較的緩やかな減少となり、1990 年度以降の見かけの排出係数（IEF）は上昇傾向にある。また、その他処分場（不適正処分）では発覚している処分量のみ考慮するため、処分量の経年変化は不規則になる一方、CH₄ 排出量は FOD 法に基づき緩やかに経年変化するため、IEF の経年変化が不規則になりやすい。

7.2.1. 管理処分場（5.A.1.）

a) 排出源カテゴリの説明

日本では一般廃棄物及び産業廃棄物中の食物くず、紙くず、繊維くず、木くず、汚泥の一部は焼却されずに埋立処分されており、処分場内における有機成分の生物分解に伴い CH₄ が発生している。日本における埋立処分場は廃掃法に基づき適正な管理が行われているため、放出される CH₄ 量は「管理処分場（5.A.1.）」に報告する。日本では管理処分場での廃棄物の焼却は行われていないため、管理処分場での廃棄物の焼却に伴う CO₂ 排出は「NO」として報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

生分解性廃棄物の埋立から CH₄ の発生までの時間差（分解遅延時間）を考慮することが可能な 2006 年 IPCC ガイドラインの改訂 FOD 法を用いることとする。当該ガイドラインのデシジョンツリーに従い、改訂 FOD 法に日本独自のパラメータを用いた Tier3 を適用し排出量の算定を行う。

日本では排出係数を「生物分解された廃棄物から発生する CH₄ 量」、活動量を「算定対象年度内に生物分解された廃棄物量」と定義する。

$$E = \left\{ \sum_{i,j} (EF_{i,j} \times A_{i,j}) - R \right\} \times (1 - OX)$$

- E : 管理処分場からの CH_4 排出量 [kg- CH_4]
 $EF_{i,j}$: 構造 j の埋立処分場に焼却されずに埋め立てられた生分解性廃棄物 i の排出係数 (乾燥ベース) [kg- CH_4/t]
 $A_{i,j}$: 構造 j の埋立処分場に焼却されずに埋め立てられた生分解性廃棄物 i のうち算定対象年度内に分解した量 (乾燥ベース) [t]
 R : 埋立処分場における CH_4 回収量 [kg- CH_4]
 OX : 埋立処分場の覆土による CH_4 酸化率 [-]

■ 排出係数

焼却されずに埋め立てられた生分解性廃棄物 1t (乾燥ベース) が分解した際に排出される CH_4 の量 [kg] を対象とし、生分解性廃棄物の種類 (食物くず、紙くず、繊維くず、木くず、下水汚泥、し尿・浄水汚泥、製造業有機性汚泥、動物のふん尿) 及び埋立処分場 (嫌気性埋立、好気性埋立) 別に設定する。排出係数は以下の式で求める。

$$EF_{i,j} = DOC_i \times DOCF \times MCF_j \times F \times 1000 \times \frac{16}{12}$$

- DOC_i : 生分解性廃棄物 i の炭素含有率
 $DOCF$: ガス化率
 MCF_j : 構造 j の埋立処分場における好気分解補正係数
 F : 生ガス CH_4 比率

○ 炭素含有率 (DOC : 乾燥ベース)

環境省 (2006b) 及び環境省 (2010) 等を基に、表 7-5 のように設定する。各廃棄物とも経年的に性状が大きく変化しないと考えられるため毎年度一律の値を用いる。

表 7-5 管理処分場に埋め立てられる廃棄物中の炭素含有率 (乾燥ベース)

項目	炭素含有率	出典
食物くず	43.4 %	一般廃棄物は東京都、横浜市、川崎市、神戸市、福岡市提供データ (1990~2004 年度) を単純平均する。産業廃棄物は一般廃棄物のデータを代用する (環境省、2006b)。
紙くず	40.9 %	
木くず	45.2 %	
天然繊維くず	45.0 %	天然繊維の種類 (綿糸、毛糸、絹糸、麻糸、再生繊維) ごとに構成成分から推定した炭素含有率を、天然繊維内需量 (1990~2004 年度) で加重平均する (環境省、2006b)。
し尿処理・浄化槽汚泥	40.0 %	その他下水汚泥の値を代用する。
津波堆積物	4.5 %	津波堆積物中の有機成分割合に有機成分中の炭素含有率を乗じて推計する。専門家判断により、最終処分される津波堆積物の有機成分割合を 10%、津波堆積物に含まれる有機成分の炭素含有率を 45.2% (木くずの値) と設定する。
消化汚泥由来の汚泥	30.0 %	藤本 (2002)、藤島他 (2004)、大嶋他 (1986)、田中他 (1980) を基に専門家判断。
その他下水汚泥	40.0 %	国内の研究事例をもとに専門家判断 (環境省、2006b)。
浄水汚泥	6.0 %	23ヶ所の浄水施設における調査結果の平均値 (環境省、2010)。
製造業有機性汚泥	45.0 %	最終処分量が最も多い製紙業からの有機性汚泥の値を用いる。この主成分はペーパースラッジであるため、セルロース中の炭素含有率を基に設定する (環境省、2006b)。
動物のふん尿	40.0 %	その他下水汚泥の値を代用する。

○ 廃棄物のガス化率 (DOCF)

伊藤 (1992) をもとに、生分解性廃棄物中のガス化率を 50% と設定する。

○ 好気分解補正係数 (MCF)

【嫌気性埋立処分場】

嫌気性埋立処分場での好気分解補正係数 (MCF_{an}) については、2006 年 IPCC ガイドライン

のデフォルト値 (1.0) を用いる。

【準好気性埋立処分場】

理想状態の準好気性埋立処分場における好気分解補正係数 (MCF_{semi}) については、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (0.5) を用いる。ただし、国内の準好気性埋立処分場では浸出液集排水管の出口が水没する、集排水管が満水で管理される、集排水管内に保有水の内部貯留がある、集排水管・ガス抜き管の延伸工事が適切に行われていない等の場合、処分場内部は嫌気性状態となる。このような集排水管の管理状態を考慮した国独自の変数「集排水管末端開放率」を定義し、次のように一般廃棄物及び産業廃棄物の最終処分場について別々に実際の準好気性埋立処分場 ($MCF_{semi,act}$) の好気分解補正係数を推計する。

$$MCF_{semi,act} = \{P \times MCF_{semi} + (1 - P) \times MCF_{an}\}$$

- $MCF_{semi,act}$: 実際の準好気性埋立処分場の好気分解補正係数
- MCF_{semi} : 理想状態の準好気性埋立処分場の好気分解補正係数 (0.5)
- MCF_{an} : 嫌気性埋立処分場の好気分解補正係数 (1.0)
- P : 算定対象年度における集排水管末端開放率

ここで、

$$P = W' / W$$

- W' : 理想状態 (浸出液集排水管の末端を開放) で管理している準好気性埋立構造の最終処分場における算定対象年度の最終処分量 (一般廃棄物 : t、産業廃棄物 : m³)
- W : 準好気性埋立構造の最終処分場における算定対象年度の総最終処分量 (一般廃棄物 : t、産業廃棄物 : m³)

一般廃棄物の各最終処分場における浸出液集排水管の末端の開放状態及び最終処分量は、環境省「一般廃棄物処理実態調査」を参照する。産業廃棄物の各最終処分場における浸出液集排水管の末端の開放状態及び最終処分量は、環境省の廃棄物規制課アンケート調査データを参照する。

表 7-6 一般廃棄物及び産業廃棄物の準好気性埋立処分場における集排水管末端開放率

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
一般廃棄物	%	64.7	64.7	64.7	64.7	66.7	69.1	71.2	71.2	69.7	71.9	70.3	73.2	71.2	71.2
産業廃棄物	%	57.9	57.9	57.9	57.9	57.9	55.9	57.2	57.2	57.2	57.2	57.2	57.2	57.2	57.2

- 発生ガス中の CH₄ 比率 (F)
2006年 IPCC ガイドラインに示されるデフォルト値を用い 50%と設定する。
- 排出係数 (EF)
以上の計算より得られた排出係数を表 7-7 に記す。

表 7-7 生分解性廃棄物の種類及び埋立処分場別の排出係数

項目	嫌気性埋立 [kg-CH ₄ /t]	準好気性埋立 ¹⁾ [kg-CH ₄ /t]
食物くず	145	72
紙くず	136	68
天然繊維くず	150	75
木くず	151	75
し尿処理・浄化槽汚泥	133	67
津波堆積物	15	NA
消化汚泥由来の汚泥	100	50
その他下水汚泥	133	67
浄水汚泥	20	10
製造業有機性汚泥	150	75
動物のふん尿	133	67

(注) 1) 理想状態の準好気性埋立 (MCF=0.5) の場合。

■ 活動量

焼却されずに埋め立てられた生分解性廃棄物のうち、算定対象年度内に分解した量（乾燥ベース）に、算定対象前年度末までに残存する生分解性廃棄物量に埋立廃棄物の分解率を乗じて算定する。

一般廃棄物、産業廃棄物別の生分解性廃棄物量は、廃棄物の種類及び埋立処分場の構造別に把握する。各年度の最終処分量は生物分解可能最終処分量（排出ベース）に、埋立処分場別最終処分量割合（排出ベース）を乗じた上で、廃棄物の種類ごとの含水量を差し引いて乾燥ベースの値を求めた。算定の起点年は、旧清掃法（現、廃掃法）施行時点の1954年度とする。

$$A_{i,j}(T) = W_{i,j}(T-1) \times (1 - e^{-k_i})$$

$$W_{i,j}(T) = W_{i,j}(T-1) \times e^{-k_i} + w_{i,j}(T)$$

$A_{i,j}(T)$: 構造 j の埋立処分場で算定対象年度（ T 年度）に分解する廃棄物 i の量（活動量：乾燥ベース） [t (dry)]

$W_{i,j}(T)$: T 年度に構造 j の埋立処分場内に残存する廃棄物 i の量（乾燥ベース） [t (dry)]

$w_{i,j}(T)$: T 年度に構造 j の埋立処分場内に埋め立てられた廃棄物 i の量（乾燥ベース） [t (dry)]

k_i : 廃棄物 i の分解速度定数 [1/年]

ここで、

$$w_{i,j}(T) = w_{i,wet}(T) \times S_j \times (1 - u_i)$$

$$k_i = \ln(2)/H_i$$

$w_{i,wet}(T)$: T 年度に埋め立てられた廃棄物 i の量（排出ベース） [t (wet)]

S_j : 埋立処理構造 j の埋立処分場割合 [%]

u_i : 廃棄物 i の含水率 [%]

H_i : 廃棄物 i の半減期（埋め立てられた廃棄物 i の量が半分になるまでの時間） [年]

○ 生分解可能最終処分量

最終処分される生分解可能廃棄物の年間最終処分量（乾燥ベース）を表 7-8 に示す。

表 7-8 生分解可能廃棄物の年間最終処分量（嫌気性埋立及び準好気性埋立の合計値）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
一般廃棄物															
食物くず	kt / year (dry)	424	272	196	78	30	30	27	22	21	18	16	13	13	13
紙くず	kt / year (dry)	1,140	859	698	492	300	311	294	260	226	182	142	125	97	95
天然繊維くず	kt / year (dry)	59	46	34	67	4	3	5	4	3	3	3	2	1	1
木くず	kt / year (dry)	363	200	155	81	42	40	36	31	65	27	22	21	18	19
し尿処理・浄化槽汚泥	kt / year (dry)	78	51	46	47	17	20	14	15	10	8	7	8	9	12
津波堆積物 ¹⁾	kt / year (dry)	NO	NO	NO	NO	NO	NO	9	10	29	NO	NO	NO	NO	NO
産業廃棄物															
食物くず	kt / year (dry)	65	177	109	45	22	22	23	30	11	15	12	13	14	14
紙くず	kt / year (dry)	102	125	137	89	44	31	37	32	16	17	12	15	11	11
天然繊維くず	kt / year (dry)	4	16	15	17	6	7	10	7	6	10	11	11	9	10
木くず	kt / year (dry)	465	490	235	230	125	145	149	106	111	116	124	110	129	129
消化汚泥由来の汚泥	kt / year (dry)	59	50	31	11	3	3	5	5	4	5	3	3	3	3
その他下水汚泥	kt / year (dry)	219	185	114	42	17	17	34	22	11	12	12	12	10	10
浄水汚泥	kt / year (dry)	199	166	146	66	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67
製造業有機性汚泥	kt / year (dry)	345	157	69	48	22	31	39	27	17	14	13	11	12	11
動物のふん尿	kt / year (dry)	12	12	11	11	14	11	11	9	12	13	13	13	12	12

(注)

- 2011年の東日本大震災により大量発生した津波堆積物は、処理後の復興資材の活用先が動き出したことにより、処理が本格化した2013年に処分量が増えている。この津波堆積物の最終処分は2013年で終了したため、2014年度以降は0 kt/年となった。

生分解可能廃棄物の種類別最終処分量の把握方法の概要を表 7-9 に示す。日本の管理処分場で処分される生分解可能廃棄物の最終処分量には、循環利用量調査報告書や下水道統計等の値を用いる。

算定の起点年は、旧清掃法（現、廃掃法）施行時点の1954年度とし、把握できない過去の最終処分量データ（主に1980年度以前）については、得られる直近年度の値（主に1980年度のデータ）を代用する。最終処分量の統計調査の開始（1980年代）以降においてもデータが得られない期間については、内挿により推計する。詳細については、表 7-9 の時系列項目下の記載を参照のこと。

表 7-9 生分解可能廃棄物の最終処分量把握方法の概要

算定対象		出典	詳細	時系列	
一般廃棄物	食物くず	環境省「循環利用量調査報告書」及び同調査データ	<ul style="list-style-type: none"> 直接最終処分量 中間処理後最終処分量 ※繊維くず中の天然繊維の割合は「7.4.1.1. 一般廃棄物 (5.C.1.-)」の合成繊維くずの項を参照。	<ul style="list-style-type: none"> 一部の年度は内挿値 1980年度以前は1980年度値を代用 	
	紙くず				
	木くず				
	繊維くず (天然繊維くず) ※				
	し尿処理・浄化槽汚泥	(直接最終処分)	環境省「日本の廃棄物処理」	し尿のその他処理量 (体積ベース) を重量に換算 (1.0 kg/L) して用いる。	1978年度以前は1978年度値を代用
(処理後最終処分)		環境省「循環利用量調査報告書」、及び同調査データ	処理後最終処分量 (焼却灰を除いた量)	1998年度以前は、し尿処理・浄化槽汚泥 (直接最終処分) データをもとに推計	
津波堆積物		環境省「日本の廃棄物処理」	津波堆積物の最終処分量	2011年度より最終処分開始	
産業廃棄物	食物くず (動植物性残さ、動物の死体)	環境省「循環利用量調査報告書」及び同調査データ	<ul style="list-style-type: none"> 直接最終処分量 中間処理後最終処分量 (出典データをを用い焼却灰を除く量を推計) ※繊維くずは廃掃法の規定により、全量を天然繊維くずと見なす	<ul style="list-style-type: none"> 一部の年度は内挿値 1980年度以前は1980年度値を代用 	
	紙くず				
	木くず				
	繊維くず (天然繊維くず) ※				
	消化汚泥由来の汚泥		国交省提供データ	国土交通省により別途集計された値を使用	<ul style="list-style-type: none"> 一部の年度は内挿値 1985年度以前は1985年度値を代用
	その他下水汚泥		(社) 日本下水道協会「下水道統計」	下水汚泥総量より消化汚泥由来の汚泥を差し引いた量	
	浄水汚泥		(社) 日本水道協会「水道統計」	各浄水場の「処分土量合計」及び「最終処分割合」より推計	1980年度以前は1980年度値を代用。
	製造業有機性汚泥	製紙業	日本製紙連合会・紙パルプ技術協会提供データ	製紙業の有機性汚泥最終処分量	1989年度以前は1989年度値を代用。
		化学工業	経済産業省「産業分類別の副産物 (産業廃棄物・有価発生物) 発生状況等に関する調査」等	食品製造業及び化学工業における有機性汚泥最終処分量	<ul style="list-style-type: none"> 一部の年度は内挿値 2015年度以降は(社)日本経済団体連合会『環境自主行動計画(廃棄物対策編)フォローアップ結果』及び環境省「産業廃棄物排出・処理状況調査報告書」データを用いて推計 1998年度以前は(社)日本経済団体連合会『環境自主行動計画(廃棄物対策編)フォローアップ結果』より推計 1990年度以前は1990年度値を代用
		食品製造業			
動物のふん尿		環境省調査		1980年度以前は1980年度値を代用	

○ 廃棄物中の含水率

わが国では、廃棄物中の炭素量をより精度よく推計可能な乾燥ベースで活動量を定義している。乾燥ベースの活動量を求める際に使用する各廃棄物中の含水率の値と出典は表 7-10 の通りである。本カテゴリーの他、「7.4. 廃棄物の焼却と野焼き (5.C.)」における CO₂ 排出量の算定においても同様の理由で乾燥ベースの活動量を用いている。

表 7-10 管理処分場に埋め立てられる廃棄物中の含水率

算定対象		中間処理	含水率	出典	
一般廃棄物	食物くず	無し	75%	「循環利用量調査報告書」における食物くずの含水率	
		有り	30%	マテリアルフローを考慮して設定	
	紙くず	(区別無し)	20%	専門家判断	
	木くず	(区別無し)	45%	専門家判断	
	天然繊維くず	(区別無し)	20%	専門家判断	
	し尿処理・浄化槽汚泥	無し	85%	廃掃法施行令で規定された埋立基準（汚泥）の含水率基準	
		有り	70%	専門家判断	
津波堆積物	(区別無し)	45%	専門家判断により木くずの含水率を代用		
産業廃棄物	食物くず	無し	75%	「循環利用量調査報告書」における食物くずの含水率	
		有り	年度ごとに設定	マテリアルフローを考慮して設定	
	紙くず	(区別無し)	15%	専門家判断	
	木くず	(区別無し)	45%	専門家判断	
	天然繊維くず	(区別無し)	15%	専門家判断	
	下水汚泥	消化汚泥由来の汚泥	(区別無し)	処理場ごとに設定	「下水道統計」の「引き渡し又は最終処分汚泥」の平均含水率
		その他下水汚泥	(区別無し)		
	浄水汚泥	(区別無し)	設定なし	乾燥ベースで埋立量のデータが提供されるため、含水率を設定しない。	
	製造業有機性汚泥	製紙業	(区別無し)	設定なし	(財) クリーン・ジャパン・センター参考値
		化学工業	(区別無し)	57%	
		食品製造業	(区別無し)	77%	
動物のふん尿	無し	83.1%	畜産技術協会 (2002)		
	有り	70%	専門家判断		

○ 構造別の埋立処分場割合

【一般廃棄物処理場の埋立処理構造別埋立処分場割合】

各年度の環境省環境再生・資源循環局「一般廃棄物処理実態調査結果」の施設別整備状況（最終処分場）に示される日本の一般廃棄物埋立処分場において、浸出水処理施設を有すると共に遮水工が行われている処分場を準好気性埋立処分場と見なし、埋立容量 [m³] の合計値の割合を準好気性埋立処分量割合とする。

ただし、1996年度までの準好気埋立の比率に関する情報は得られていないため、以下の推計を行う。

- ・ 1997年度以降は実データに基づき設定する。
- ・ 1977年の共同命令以前に埋立が開始された処分場及び全ての海面・水面埋立処分場は嫌気性埋立処分場と扱う。
- ・ 準好気性埋立が始まった1977年度から1996年度については、専門家判断により、統計データが得られる1997年度のデータを用いて線形内挿を行い設定する。

【産業廃棄物処理場の埋立処理構造別埋立処分場割合】

産業廃棄物処理場の埋立処理構造別埋立処分場割合は以下とする。

- ・ 2008年度以降の最終処分量ベースの準好気性埋立構造（準好気性埋立処分量）の割合は、環境省「産業廃棄物処理施設状況調査」に基づき設定する。
- ・ 1977年の共同命令以前に埋立が開始された処分場及び全ての海面・水面埋立処分場は嫌気性埋立処分場と扱う。
- ・ 1990～2007年度の同割合は、最終処分量及び現時点で準好気性埋立構造であることが確認できる各施設での2008年度の最終処分量のデータをもとに推計する。
- ・ 準好気性埋立が始まった1977年度から1989年度については、専門家判断により、統計データが得られる1990年度のデータを用いて線形内挿を行い設定する。

表 7-11 埋立処分場構造別の埋立処分量割合

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
一般廃棄物															
嫌気性埋立割合	%	74.2	64.2	54.4	43.5	36.5	36.1	38.7	33.1	39.9	28.4	29.0	29.6	36.6	36.6
準好気性埋立割合	%	25.8	35.8	45.6	56.5	63.5	63.9	61.3	66.9	60.1	71.6	71.0	70.4	63.4	63.4
産業廃棄物															
嫌気性埋立割合	%	90.2	81.1	66.4	48.3	36.9	47.0	36.7	28.5	30.0	35.0	37.7	33.4	33.4	33.4
準好気性埋立割合	%	9.8	18.9	33.6	51.7	63.1	53.0	63.3	71.5	70.0	65.0	62.3	66.6	66.6	66.6

○ 半減期

半減期とは、ある年度に埋め立てられた廃棄物の50%が分解されるまでの経過年数である。伊藤（1992）は、当時日本最大だった東京都の一般廃棄物最終処分場である中央防波堤内側処分場における実測調査に基づき半減期を設定している。これを温暖/寒冷湿潤気候にある日本の代表的な管理処分場についての研究事例と見做し、食物くず、紙くず、天然繊維くず、木くずについて国独自の半減期を設定する（それぞれ3年、7年、7年、36年）。汚泥については日本独自の半減期を設定するための研究成果が得られないため、2006年 IPCC ガイドライン付属のスプレッドシートに記述されたデフォルト値を用いて3.7年と設定する。津波堆積物については、専門家判断により木くずの半減期を適用する。

表 7-12 生分解性廃棄物の埋立処分場における半減期

項目	半減期 [年]	出典	
食物くず ¹⁾	3	伊藤（1992）	
紙くず	7		
天然繊維くず	7		
木くず ²⁾	36		
汚泥	津波堆積物	36	専門家判断により木くずの半減期を適用
	し尿処理・浄化槽汚泥	3.7	2006年 IPCC ガイドライン
	消化汚泥由来の汚泥		
	その他下水汚泥		
	し尿汚泥		
	浄水汚泥		
	製造業有機性汚泥		
	動物のふん尿 ³⁾		

(注)

- 1) 伊藤（1992）が示す食物くずの半減期は2006年 IPCC ガイドラインの温帯湿潤気候におけるデフォルト値（4年）よりも短い。これはデフォルト値で想定される埋立条件と比べて我が国の気候が温暖かつ湿潤であるため、分解が比較的速く進むことが理由と考えられる（環境省、2006b）。
- 2) 伊藤（1992）が示す木くずの半減期は2006年 IPCC ガイドラインの温帯湿潤気候におけるデフォルト値（23年）よりも長い。これは IPCC デフォルト値が木くず／藁くずを対象としているのに対し、伊藤（1992）の値は木くずのみを対象としていることが理由と考えられる（環境省、2006b）。
- 3) 「動物のふん尿」は廃掃法上における汚泥ではないが、性状は比較的汚泥に類似すると考えられることから、汚泥の半減期デフォルト値を用いる。

○ 分解遅延時間（delay time）

分解遅延時間（delay time）は、算定対象廃棄物が埋め立てられた時点から分解が起こるまでのタイムラグのことであり、日本の場合、独自の分解遅延時間を設定するための知見等が得られていないことから、2006年 IPCC ガイドラインに示されるデフォルト値を用い6ヶ月と設定する。

表 7-13 算定対象年度内に分解した生分解性廃棄物量（活動量）

項目		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
a. 嫌気性埋立	一般廃棄物	食物くず	kt / year (dry)	358	278	172	99	53	44	37	32	27	23	19	16	14	12
		紙くず	kt / year (dry)	1,042	913	724	545	423	393	367	343	319	297	274	252	232	213
		天然繊維くず	kt / year (dry)	54	48	38	31	25	23	21	19	18	16	15	13	12	11
		木くず	kt / year (dry)	186	186	179	167	157	155	152	149	147	144	142	139	137	134
		し尿処理・浄化槽汚泥	kt / year (dry)	96	66	44	29	20	17	16	14	12	11	10	8	7	7
		津波堆積物	kt / year (dry)	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	0	0	1	1	1	1	1
	産業廃棄物	食物くず	kt / year (dry)	69	102	117	74	38	32	28	24	21	17	15	12	11	10
		紙くず	kt / year (dry)	137	138	121	99	80	74	68	63	58	53	49	44	41	37
		天然繊維くず	kt / year (dry)	22	16	15	12	10	10	9	8	8	7	7	7	6	6
		木くず	kt / year (dry)	224	261	258	247	235	232	228	225	221	218	214	211	208	205
		消化汚泥由来の汚泥	kt / year (dry)	59	52	38	22	12	10	9	8	7	6	5	4	4	3
		その他下水汚泥	kt / year (dry)	221	196	144	83	46	39	34	30	26	22	19	17	15	13
		浄水汚泥	kt / year (dry)	180	165	127	85	56	51	48	44	40	36	34	33	31	30
		製造業有機性汚泥	kt / year (dry)	341	263	154	88	50	43	38	34	30	25	22	19	17	14
b. 嫌気性埋立	一般廃棄物	動物のふん尿	kt / year (dry)	11	11	9	7	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5
		食物くず	kt / year (dry)	70	94	90	81	51	45	39	35	31	27	24	21	19	17
		紙くず	kt / year (dry)	119	191	232	262	254	248	243	237	231	222	214	203	192	180
		天然繊維くず	kt / year (dry)	6	10	12	18	18	16	15	14	13	12	11	10	9	8
		木くず	kt / year (dry)	10	16	21	25	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
		し尿処理・浄化槽汚泥	kt / year (dry)	14	18	20	22	18	17	16	15	14	13	12	10	10	9
	産業廃棄物	食物くず	kt / year (dry)	4	15	36	39	26	23	21	19	20	17	16	14	13	12
		紙くず	kt / year (dry)	6	12	21	31	35	35	33	32	31	29	28	26	24	23
		天然繊維くず	kt / year (dry)	1	1	2	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
		木くず	kt / year (dry)	6	15	20	27	33	34	35	36	37	37	38	39	39	40
		消化汚泥由来の汚泥	kt / year (dry)	3	6	9	8	6	5	5	4	4	4	4	4	3	3
		その他下水汚泥	kt / year (dry)	13	23	33	32	22	20	18	19	18	17	15	14	13	12
		浄水汚泥	kt / year (dry)	12	20	30	36	36	37	37	38	39	41	41	41	42	42
		製造業有機性汚泥	kt / year (dry)	21	28	29	31	24	22	21	22	22	20	18	16	15	14
動物のふん尿	kt / year (dry)	1	1	2	4	5	5	5	6	6	6	7	7	7	7		

(注) ごみ減量処理率の向上に伴う直接最終処分量の減少が、生分解性廃棄物分解量全般の減少傾向に大きな影響を与えている。

○ 埋立処分場における CH₄ 回収量

日本の廃棄物処理では、埋立前に有機物含有量を減らし、埋立後に CH₄ 排出が少なくなるような中間処理ならびに埋立工法が採用されているため、埋立処分場における CH₄ 回収はあまり一般的には行われていない。日本において一般廃棄物の埋立処分場からの CH₄ 回収は、東京都中央防波堤処分場における発電利用事例のみである。産業廃棄物については、メタンの回収が行われていない。なお、回収された CH₄ の焼却に伴い排出される CO₂ はバイオマス起源であるため、排出量合計値には集計されない。

$$R = r \times f \times 16 / 22.4 / 1000$$

- R : 埋立処分場における CH₄ 回収量 [g]
- r : 回収された埋立ガスの発電利用量 [m³N]
- f : 回収された埋立ガス中の CH₄ 比率 [-]

【中央防波堤処分場において回収された埋立ガスの発電利用量】

東京都廃棄物埋立管理事務所の発電用埋立ガス使用量データより把握する。

【回収された埋立ガス中の CH₄ 比率】

中央防波堤処分場において回収された埋立ガス中の CH₄ 比率は 2005 年度以降、東京都廃棄物埋立管理事務所より毎年データの提供を受けている。それ以前の値は東京都廃棄物埋立管理事務所ヒアリング結果を参考に、埋立ガス回収が開始された 1987 年度の CH₄ 比率を 60%、1996 年度を 40% と設定し、1988~95 年度は線形内挿により設定する。また、1997~2004 年度の CH₄ 比率は 1996 年度データを代用して設定する。

表 7-14 日本の埋立処分場における CH₄ 使用量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
埋立ガス使用量	km ³ N	1,985	2,375	2,372	140	1,154	1,266	1,032	1,681	1,734	1,612	1,565	1,488	NO	NO
メタン濃度	%	53.3	42.2	40.0	48.5	40.0	43.8	51.2	49.5	44.9	41.0	39.2	40.2	NA	NA
メタン使用量	km ³ N	1,059	1,003	949	68	462	555	528	832	779	661	613	598	NO	NO
メタン重量換算	Gg-CH ₄	0.76	0.72	0.68	0.05	0.33	0.40	0.38	0.59	0.56	0.47	0.44	0.43	NO	NO

(注) 埋立ガス使用量は中央防波堤処分場の一つしかない発電施設の運転状況に大きく依存している。2017年の年初以降、発電施設は休止している。

○ 埋立処分場の覆土による CH₄ 酸化率

日本の一般廃棄物及び産業廃棄物管理型最終処分場は、廃掃法施行令や自治体条例に基づき即日覆土、中間覆土及び最終覆土が実施されていることから、2006年 IPCC ガイドラインに従い、管理された埋立処分場のデフォルト酸化率である 0.1 を採用する。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性については、一般廃棄物及び産業廃棄物とも、炭素含有率実測データ・ガス化率・メタン比率・好気分解補正係数 (MCF)・酸化率の不確実性を実測データから計算される 95%信頼区間もしくは専門家判断により設定し、それぞれの不確実性を合成して評価する。

活動量の不確実性については、統計の誤差に関する情報が無く、具体的な根拠に基づく不確実性の設定が困難なため、表 7-2 のように専門家判断により不確実性を評価する。

廃棄物の種類別の不確実性評価の詳細は表 7-15 に記す。

表 7-15 管理処分場 (5.A.1.) における廃棄物種類別の不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法	
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)				
一般廃棄物	食物くず	CH ₄	-47%	+47%	-10%	+10%	-48%	+48%	炭素含有率実測データの95%信頼区間、専門家判断によるガス化率・メタン比率の不確実性、2006年IPCCガイドラインデフォルト値を用いるMCF・酸化係数の不確実性を誤差伝播式により合成して排出係数の不確実性を算定(方法1)。 算定対象は木くずを想定していることから、木くずの排出係数の不確実性を代用。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	紙くず	CH ₄	-47%	+47%	-10%	+10%	-48%	+48%			
	繊維くず	CH ₄	-47%	+47%	-10%	+10%	-48%	+48%			
	木くず	CH ₄	-47%	+47%	-10%	+10%	-48%	+48%			
	し尿処理・浄化槽汚泥	CH ₄	-49%	+49%	-10%	+10%	-50%	+50%			
	津波堆積物	CH ₄	-47%	+47%	-10%	+10%	-48%	+48%			
産業廃棄物	食物くず	CH ₄	-47%	+47%	-30%	+30%	-56%	+56%	方法1と同様。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	紙くず	CH ₄	-47%	+47%	-30%	+30%	-56%	+56%			
	繊維くず	CH ₄	-47%	+47%	-30%	+30%	-56%	+56%			
	木くず	CH ₄	-47%	+47%	-30%	+30%	-56%	+56%			
	下水汚泥	CH ₄	-49%	+49%	-5%	+5%	-49%	+49%	方法1と同様。炭素含有率の不確実性は専門家判断により設定。	専門家判断により設定した下水道統計の不確実性を適用。	
	浄水汚泥	CH ₄	-51%	+51%	-5%	+10%	-51%	+52%	方法1と同様。	専門家判断により設定した水道統計の不確実性を適用。	
	製造業有機性汚泥	CH ₄	-58%	+58%	-30%	+30%	-65%	+65%	方法1と同様。炭素含有率の不確実性は専門家判断により設定。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	
	動物のふん尿	CH ₄	-51%	+51%	-30%	+30%	-59%	+59%	方法1と同様。炭素含有率の不確実性は2006年IPCCガイドラインの不確実性デフォルト値より設定。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	
メタン回収量	CH ₄	-10%	+10%	-10%	+10%	-14%	+14%	回収ガス中のメタン濃度を専門家判断により設定。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成	

■ 時系列の一貫性

排出量算定において一貫した方法を適用している。ただし一部の活動量について、1990～直近年度まで全ての年のデータが揃っていないものがあるため、活動量の記載で説明した方法を用い時系列的に一貫性を持つデータの構築を行っている。

d) QA/QC と検証

2006年IPCCガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリQC手続きを実施している。一般的なインベントリQCには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。詳細は「7.1.5. 廃棄物分野における一般的な再計算」を参照のこと。再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

我が国独自のパラメータ設定等(例えば生分解性廃棄物の種類別のガス化率の設定、最終

処分場における日本独自の汚泥の半減期、など)については長期的な改善を図ることとし、技術的観点から更なる検討を行う。

7.2.2. 非管理処分場 (5.A.2.)

a) 排出源カテゴリーの説明

日本における埋立処分場は廃掃法に基づき適正な管理が行われているため、非管理処分場は存在しない。従って、当該排出源からの排出は「NO」と報告する。

7.2.3. その他の廃棄物処分場 (5.A.3.)

7.2.3.1. 不適正処分 (5.A.3.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

日本では、廃掃法の規定に違反した廃棄物の処分を(具体的には、最終処分場ではない場所への廃棄物の投棄行為)を「不適正処分」と定義する。当該カテゴリーでは不適正処分として、不定期な事象である1) 不法投棄、かつ2) 発覚した事案を扱う。法律に基づく処理量と比べると、不適正処分された量の割合は非常に小さい。多くの不適正処分地は、2006年 IPCC ガイドラインに定義される管理処分場の条件を実態として概ね満たしているが、法に基づく適正な管理が行われているわけではないことから、不適正処分に伴う CH₄ 排出量は「その他 (5.A.3.)」に報告する。

なお、不適正処分地では件数は非常に少ないながらも火災が発生しており、石油由来の CO₂ が排出されている可能性があるが、実態は不明であることから、不適正処分地での火災に伴う排出量は「NE」として報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

焼却されずに不適正処分された生物分解可能な炭素分を含む廃棄物としては「木くず」及び「紙くず」があるが、紙くずの残存量は微量であることから、「木くず」のみを算定対象とする。

算定は「7.2.1. 管理処分場 (5.A.1.)」と同様に日本のパラメータを用いた FOD 法による算定を行う。焼却されずに不適正処分された木くずのうち、算定対象年度内に分解した量(乾燥ベース)に排出係数を乗じて排出量を算定する。不適正処分された廃棄物からの CH₄ 発生状況は不明のため、嫌気性埋立と同様と見なして排出量を計算する。

■ 排出係数

排出係数は嫌気性埋立での好気分解補正係数 (1.0) 及び木くずの炭素含有率 (45.2%) を用いて設定し、表 7-7 に示す「管理処分場からの木くずの排出」における嫌気性埋立処分の排出係数と同一の排出係数を用いる。

■ 活動量

不適正処分された木くずの残存量(排出ベース)から含水量を差し引いて乾燥ベースに変換し、分解率を乗じて活動量の把握を行う。不適正処分された木くずの量は、環境省環境再生・資源循環局「不法投棄等産業廃棄物残量調査結果」における「廃棄物の種類別残存件数と残存量」の木くず(建設系)より把握する。含水率と分解率は、「7.2.1. 管理処分場 (5.A.1.)」の算定に用いた木くずの値と同様のものを用いる。

表 7-16 各算定対象年度中に分解された不適正処分の木くず量（活動量）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
活動量	kt (dry)	2.3	5.5	16.3	16.3	14.7	14.7	14.5	14.4	13.6	12.7	12.2	12.3	11.9	10.3

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数、活動量共に 5.A.1 管理処分場と同様の方法を用いて不確実性評価を行う。不確実性評価の詳細は表 7-17 に記す。

表 7-17 不適正処分（5.A.3.-）における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
不適正処分廃棄物	CH ₄	-42%	+41%	-60%	+60%	-74%	+73%	算定対象は木くずを想定していることから、木くずの排出係数の不確実性を代用。	専門家判断により産業廃棄物統計の不確実性の2倍の値を設定。	誤差伝播式で合成

■ 時系列の一貫性

不適正処分に関する統計データが 2002 年以降しか入手できないことから、2001 年以前の活動量は推計により求めている。算定方法自体の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については、第 1 章を参考のこと。

e) 再計算

不適正処分された廃棄物の除去、過去に処分された不適正処分廃棄物の発覚などに伴い、把握済みの過去の不適正処分残存量のデータが毎年更新される。過去の不適正処分廃棄物の残存量の変化に伴い、排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については、第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

我が国独自のパラメータ設定等については長期的な改善を図ることとし、技術的観点から更なる検討を行う。

7.3. 固形廃棄物の生物処理（5.B.）

本カテゴリーでは、固形廃棄物の生物処理に伴う CH₄ と N₂O を算定する。本排出源では日本における廃棄物区分に準じ、表 7-18 に示す算定区分で排出量を推定する。

表 7-18 固形廃棄物の生物処理 (5.B.) で排出量の算定を行う区分

区分	算定対象		CRF に報告する区分	処理方式	CH ₄	N ₂ O		
5.B.1. (7.3.1)	一般廃棄物	食物くず	Municipal solid waste (excl. human waste)	コンポスト化	○	○		
		紙くず						
		繊維くず						
		木くず (剪定枝)						
		し尿、浄化槽汚泥	Human waste				○	○
	産業廃棄物	食物くず (動植物性残さ、その他の食品廃棄物)	Food waste (industrial waste)				○	○
下水汚泥		Sewage sludge	○	○				
5.B.2. (7.3.2)	-	-	-	嫌気性消化	NE	NO		

推計したこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量を表 7-19 に示す。2018 年度における当該排出源カテゴリーからの温室効果ガス排出量は 385 kt-CO₂ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 0.03% を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 64.0% の増加となっている。本カテゴリーの排出量の増加には、廃棄物の資源としての有効利用が増加したことが大きく寄与している。なお、本カテゴリーでは国独自の排出係数 (排出ベース) を用いているが、コンポスト化される廃棄物の組成変化が乏しく、全体での IEF (乾燥ベース) には大きな経年変化が見られない (約 2.8 kg-CH₄/t [dry] 及び約 0.78-0.79 kg-N₂O/t [dry])。

表 7-19 固形廃棄物の生物処理 (5.B.) から発生する温室効果ガス排出量

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CH ₄	5.B.1. コンポスト化	一般廃棄物 (し尿・浄化槽汚泥除く)	kt-CH ₄	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	
		し尿・浄化槽汚泥	kt-CH ₄	NO	NO	NO	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		食物くず (産業廃棄物)	kt-CH ₄	2.0	2.0	2.0	3.6	3.9	3.4	3.8	3.8	3.7	3.7	3.8	3.8	3.3	3.3
		下水汚泥	kt-CH ₄	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
	5.B.2. バイオガス施設における嫌気性消化	kt-CH ₄	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	NE	
	合計	kt-CH ₄	2.2	2.1	2.2	3.8	4.2	3.7	4.1	4.1	4.0	4.0	4.1	4.1	3.6	3.6	
	kt-CO ₂ 換算	54	53	54	95	106	93	102	101	100	100	102	103	90	89		
N ₂ O	5.B.1. コンポスト化	一般廃棄物 (し尿・浄化槽汚泥除く)	kt-N ₂ O	0.02	0.01	0.01	0.02	0.03	0.03	0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.04	0.04	
		し尿・浄化槽汚泥	kt-N ₂ O	NO	NO	NO	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
		食物くず (産業廃棄物)	kt-N ₂ O	0.56	0.56	0.56	1.01	1.09	0.96	1.06	1.06	1.05	1.04	1.06	1.07	0.93	0.92
		下水汚泥	kt-N ₂ O	0.03	0.03	0.04	0.04	0.05	0.04	0.05	0.04	0.04	0.04	0.04	0.03	0.03	0.03
	5.B.2. バイオガス施設における嫌気性消化	kt-N ₂ O	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	合計	kt-N ₂ O	0.61	0.60	0.61	1.07	1.19	1.04	1.15	1.14	1.12	1.12	1.14	1.15	1.00	0.99	
	kt-CO ₂ 換算	181	179	181	319	354	309	342	338	335	333	340	343	298	296		
合計	kt-CO ₂ 換算	235	233	235	414	460	402	444	440	435	433	441	446	388	385		

7.3.1. コンポスト化 (5.B.1)

a) 排出源カテゴリーの説明

日本で発生する一般廃棄物及び産業廃棄物の一部はコンポスト化されており、その過程で発生する CH₄、N₂O がコンポスト化設備から排出されている。なお、動物のふん尿のコンポスト化からの排出は農業分野の「5.3. 家畜排せつ物の管理 (3.B)」において報告している。

b) 方法論

■ 算定方法

我が国の統計情報から把握したコンポスト化された有機性廃棄物の量に、国独自の排出係数を乗じて算定する。算定方法は CH₄、N₂O で同様である。

$$E = \sum_i EF_i \times A_i$$

- E : 有機性廃棄物のコンポスト化に伴う CH_4 、 N_2O 排出量 [kg- CH_4]、[kg- N_2O]
- EF_i : 有機性廃棄物 i の排出係数(排出ベース) [kg- CH_4/t]、[kg- $\text{N}_2\text{O}/\text{t}$]
- A_i : 有機性廃棄物 i のコンポスト化量(排出ベース) [t]

■ 排出係数

環境省 (2018 a)により得られた実測調査 (9 施設における夏季及び冬季調査) に基づく国独自の排出係数を適用する (環境省、2018 b)。

表 7-20 コンポスト化 (5.B.1) で適用する排出係数 (排出ベース)

算定対象		CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ /t]	N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O/t]	備考
一般廃棄物	木くず (剪定枝)	0.35	0.0015	堆肥化されにくい有機物
	食物くず	0.96	0.27	
	紙くず			
	繊維くず			
	し尿、浄化槽汚泥			
産業廃棄物	食物くず (動植物性残さ、 その他の食品廃棄物)			
	下水汚泥			

(注) 日本のコンポスト化施設では、好気性に保つように定期的に発酵廃棄物の切り替えしや発酵槽の下部からの通気を行っていることから、 CH_4 の排出係数は 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値よりも小さな値となっている。また、剪定枝は汚泥や生ごみ等よりも分解性が低いいため、剪定枝の CH_4 及び N_2O 排出係数はより低い値となっている。

■ 活動量

コンポスト化にかかる活動量の出典を表 7-21 に示す。

表 7-21 コンポスト化 (5.B.1) で用いる活動量の出典 (排出ベース)

算定対象		活動量の出典	備考
一般廃棄物	食物くず	環境省「日本の廃棄物処理」 環境省「循環利用量調査報告書」	「日本の廃棄物処理」に示されるごみ堆肥化施設に投入される一般廃棄物量に、「循環利用量調査報告書」に示される高速堆肥化施設に投入される一般廃棄物のごみ組成割合を乗じて廃棄物組成別に活動量を求める。
	紙くず		
	繊維くず		
	木くず (剪定枝)		
	し尿、浄化槽汚泥	環境省「日本の廃棄物処理」	
産業廃棄物	食物くず (動植物性残さ、その他の食品廃棄物)	環境省「廃棄物統計の精度向上及び迅速化のための検討調査報告書」	以下のものを含む。 ・食品・飲料製造業起源の動植物性残さ。 ・上記以外の食品廃棄物 (有償分含む)。この区分は廃掃法上産業廃棄物に該当しないが、発生源・性状を考慮し、産業廃棄物に含めて報告する。
	副資材 (木くず等)	専門家判断	食品廃棄物に対して 30% の添加割合を乗じて推計。添加割合は「循環利用量調査報告書」を参考に専門家判断。
	下水汚泥	日本下水道協会「下水道統計」	
	副資材 (木くず等)	国交省提供データ	

得られた活動量 (排出ベース) を表 7-22 に示す。CRF で報告する活動量は、表 7-10 に示される含水率 (区別のある場合は中間処理無しの含水率) を用いて乾燥ベースに換算する。

表 7-22 コンポスト化される廃棄物の量（排出ベース）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
一般廃棄物															
食物くず	kt (wet)	35	20	29	66	108	117	143	120	121	115	122	134	141	132
紙くず	kt (wet)	28	16	23	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
繊維くず	kt (wet)	3	2	2	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
木くず(剪定枝)	kt (wet)	8	5	4	33	44	48	41	40	45	60	60	85	84	80
し尿、浄化槽汚泥	kt (wet)	NO	NO	NO	4	58	17	15	21	19	25	35	30	21	21
産業廃棄物															
食品廃棄物(副資材含む)	kt (wet)	2,063	2,063	2,063	3,747	4,051	3,564	3,923	3,920	3,883	3,861	3,923	3,973	3,439	3,421
下水汚泥(副資材含む)	kt (wet)	118	126	135	147	186	144	168	145	136	139	140	129	105	105

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は排出係数調査(環境省、2018a)に基づき設定する。活動量の不確実性については、活動量の多くを有価発生物が占めることから、専門家判断により、表 7-2 に示される有価発生物データの不確実性を適用する。不確実性評価の詳細は表 7-23 に記す。

表 7-23 コンポスト化 (5.B.1) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
コンポスト化	CH ₄	-79%	+79%	-30%	+30%	-84%	+84%	環境省(2018a)に基づき不確実性を設定。	専門家判断により設定した活動量の多くを有価発生物が占めることから、有価発生物データの不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-167%	+167%	-30%	+30%	-170%	+170%			

■ 時系列の一貫性

産業廃棄物の動植物性残さ及び食品廃棄物のコンポスト量(有償分含む)の1990~2000年度データが得られないため、2001年度データを代用する。下水汚泥コンポスト化施設で下水汚泥に添加される木くず等の副資材量の1990~1995年度データが得られないため、1996年度の当該副資材の添加比率を1990~1995年度の下水汚泥投入量に乗じて推計する。このため、算定方法自体の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。詳細は「7.1.5. 廃棄物分野における一般的な再計算」を参照のこと。再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

業務用・家庭用の生ゴミ処理機からの排出(短期間での排出把握は困難なため、中長期的な取り組み課題として整理)を検討する。

7.3.2. バイオガス施設における嫌気性消化（5.B.2.）

a) 排出源カテゴリーの説明

■ 日本におけるバイオガス施設

我が国では、有機性廃棄物のバイオガス化施設として、「終末処理場における下水汚泥の嫌気性消化設備」、「一般廃棄物のメタンガス化施設」、「産業廃棄物のメタンガス化施設」がある。

○ 終末処理場における下水汚泥の嫌気性消化設備

（社）日本下水道協会（2009）によると終末処理場の汚泥消化タンクでは、ガス漏れによる爆発の危険及び臭気の発生を防ぐため気密な構造とすることとされている。また、未利用の消化ガスについては、安全及び地球温暖化防止の観点から必ず燃焼させることとされている。加えて、「生活・商業排水の処理に伴う $\text{CH}_4 \cdot \text{N}_2\text{O}$ 排出（終末処理場）」では、汚泥処理プロセスにおける汚泥濃縮タンク及び脱水機室から大気中に放出される $\text{CH}_4 \cdot \text{N}_2\text{O}$ 排出量を排出係数に含める形で算定しており、2006年 IPCC ガイドラインで想定されるバイオガス化に伴い大気中に放出される CH_4 量を既に算定していることとなる。

○ 一般廃棄物のメタンガス化施設

環境省（2008）によると終末処理場と同様、一般廃棄物のメタンガス化施設においても、メタン発酵設備は気密構造にすることとされている。また、非常時やメンテナンス等によりバイオガス設備にガスを供給できない場合は、余剰ガス燃焼装置によりバイオガスを燃焼して安全に放出することとされている。

○ 産業廃棄物のメタンガス化施設

産業廃棄物のメタンガス化施設については、一般廃棄物のようなマニュアル・ガイドラインは無いが、事業者が施設を設置する際は、安全対策として気密構造が取られると考えられる。

■ 排出量

日本の一般廃棄物及び産業廃棄物のメタンガス化施設から CH_4 がわずかながら漏出している。製造されるバイオガスの漏洩率を2%（排出実態を考慮）、バイオガス中の CH_4 濃度を60%（地域資源循環技術センター「バイオマス利活用技術情報データベース」）として漏出 CH_4 排出量を試算したところ、多い年でも1.4kt- CO_2 換算であった。以上より、当該排出源からの CH_4 排出は別添5の図A5-2のデシジョンツリーに記される重要でないという意味での注釈記号「NE」と報告する。

当該排出源からの N_2O 排出量は2006年 IPCC ガイドラインに従い無視しうるとみなし、「NO」と報告する。

7.4. 廃棄物の焼却と野焼き（5.C.）

我が国では廃棄物の多くが焼却により減量化されている。廃棄物の焼却に伴う排出は表7-24のように分類され、このうち本カテゴリーでは「7.4.1. 廃棄物の焼却（エネルギー回収を伴わない）（5.C.1.）」及び「7.4.2. 廃棄物の野焼き（5.C.2.）」からの CO_2 、 CH_4 、 N_2O 排出量を報告する。

表 7-24 廃棄物の焼却及び野焼き (5.C) で排出量の算定を行う区分

区分	算定対象		CRF に報告する区分	処理方式	CO ₂	CH ₄	N ₂ O			
5.C.1 (7.4.1)	一般廃棄物 (7.4.1.1)	プラスチック	石油由来プラスチック	Non-biogenic/MSW	エネルギー回収を伴わない焼却 ・焼却炉 -全連続燃焼式 -准連続燃焼式 -バッチ燃焼式 ・ガス化溶融炉	0 ²⁾	0 ²⁾			
			バイオマスプラスチック	Biogenic/MSW						
		紙くず	石油由来成分	Non-biogenic/MSW						
			生物起源成分	Biogenic/MSW						
		紙おむつ (石油由来成分)		Non-biogenic/MSW						
		繊維くず	合成繊維	Non-biogenic/MSW						
			天然繊維	Biogenic/MSW						
	その他 (生物起源)		Biogenic/MSW							
	産業廃棄物 (7.4.1.2)	廃油	石油由来の廃油	Non-biogenic/Fossil liquid waste		各種焼却方式 ⁵⁾	0	0	0	
			動植物性廃油	Biogenic/Non-fossil liquid waste			NA ¹⁾	0	0	
		廃プラスチック類	石油由来プラスチック	Non-biogenic/ISW			0	0	0	
			バイオマスプラスチック	Biogenic/ISW			NA ¹⁾	IE ³⁾	IE ³⁾	
		食物くず [動植物性残さ・動物の死体]					Biogenic/ISW	NA ¹⁾	0	0
			紙くず	石油由来成分			Non-biogenic/ISW	0	IE ⁴⁾	IE ⁴⁾
		生物起源成分		Biogenic/ISW	NA ¹⁾		0	0		
		木くず			Biogenic/ISW		NA ¹⁾	0	0	
			繊維くず	合成繊維	-		IE ³⁾	IE ³⁾	IE ³⁾	
		天然繊維		Biogenic/ISW	NA ¹⁾		0	0		
	汚泥	下水汚泥	Biogenic/Sludge	NA ¹⁾	0	0				
		下水汚泥以外	Biogenic/Sludge	NA ¹⁾	0	0				
	産業廃棄物 特別管理 (7.4.1.3)	廃油	廃油 (引火性)	Non-biogenic/Hazardous waste	焼却炉	0	0	0		
廃油 (特定有害産業廃棄物)			Non-biogenic/Hazardous waste	0		0	0			
感染性廃棄物		プラスチック (石油由来)	Non-biogenic/Clinical waste	0		0	0			
		その他 (プラスチック以外)	Biogenic/Clinical waste	NA ¹⁾		0	0			
5.C.2 (7.4.2)	一般廃棄物 (7.4.2.1)			-	NO	NO	NO			
産業廃棄物 (7.4.2.2)	廃プラスチック類 (石油由来)			野焼き	0	0	0			
		その他 (生物起源)	Biogenic/ISW		NA ¹⁾	IE ⁶⁾	IE ⁶⁾			

(注)

- 2006年 IPCC ガイドラインに従い、生物起源の廃棄物の焼却に伴う CO₂ 排出量は、総排出量には含まず参考値として算定し、CRF の「Table 5.C」の「Biogenic」に報告する。
- 対象の算定区分をまとめて焼却方式別に算定し、CRF の「Table 5.C」の「Non-biogenic/MSW」に報告する。
- 産業廃棄物 (ISW) の石油由来プラスチックに含まれる。
- 紙くず (生物起源成分) に含まれる。
- 下水汚泥の焼却方式については 7.4.1.2. 節を参照のこと。
- 産業廃棄物の野焼きに伴う CH₄ 及び N₂O 排出量は「Non-biogenic/ISW」に全てまとめて報告する。

その他、廃棄物の焼却には、以下のような方法で廃棄物が原料あるいは燃料として使用される場合がある。

- ・ 廃棄物が焼却される際にエネルギーが回収される場合 (1.A.) (7.4.3.1. 節参照)
- ・ 廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.) (7.4.3.2. 節参照)
- ・ 廃棄物が燃料に加工された後に利用される場合 (1.A.) (7.4.3.3. 節参照)

これらに該当する排出源からの排出量は「7.4.3. 廃棄物の焼却等 (エネルギー分野での報告 (1.A.))」として、2006年 IPCC ガイドラインに従いエネルギー分野 (カテゴリー1) で報告する。エネルギー分野での報告カテゴリーの詳細は表 7-26 を参照のこと。

表 7-24、表 7-25 及び表 7-26 に記されたすべての算定区分は、重複計上・報告漏れを防ぐ目的でエネルギー利用の有無に関わらず一元的に排出量の算定を行い、NIR ではこれらの算定方法について本カテゴリーで説明する。

表 7-25 廃棄物の焼却等（エネルギー分野での報告）（1.A.）で排出量の算定を行う区分

区分	算定対象		エネルギー分野での燃料種区分	処理方式	CO ₂	CH ₄	N ₂ O					
1.A.1. (7.4.3.1) ⁷⁾	一般廃棄物	プラスチック	石油由来プラスチック	Other fossil fuels	・焼却炉 -全連続燃焼式 -准連続燃焼式 -バッチ燃焼式 ・ガス化溶融炉	○ ²⁾	○ ²⁾					
			バイオマスプラスチック	Biomass ⁸⁾				○				
		紙くず	石油由来成分	Other fossil fuels ⁹⁾				○				
			生物起源成分	Biomass				NA ¹⁾				
		紙おむつ（石油由来成分）		Other fossil fuels				○				
		繊維くず	合成繊維	Other fossil fuels				○				
	天然繊維		Biomass	NA ¹⁾								
	その他（生物起源）		Biomass	NA ¹⁾								
	産業廃棄物	廃油	石油由来の廃油	Other fossil fuels				焼却される際にエネルギーを回収 焼却炉	○	○	○	
			動植物性廃油	Biomass								
		廃プラスチック類	石油由来プラスチック	Other fossil fuels								NA ¹⁾
			バイオマスプラスチック	Biomass ⁸⁾								○
		食物くず〔動植物性残さ・動物の死体〕		Biomass	NA ¹⁾							
		紙くず	石油由来成分	Other fossil fuels ⁹⁾	○							
			生物起源成分	Biomass	IE ⁴⁾							
		木くず（生物起源）		Biomass	NA ¹⁾							
		繊維くず	合成繊維	-	IE ³⁾							
			天然繊維	Biomass	○							
		汚泥	下水汚泥	-	NO							
			下水汚泥以外	Biomass	NA ¹⁾							
特別管理産業廃棄物			-	IE ⁵⁾	IE ⁵⁾	IE ⁵⁾						
1.A.1/2 (7.4.3.2) ⁷⁾		一廃	プラスチック	石油由来プラスチック	Other fossil fuels	原燃料として直接利用	○					○
	バイオマスプラスチック			Biomass ⁸⁾	IE ³⁾							
	産業廃棄物	廃油	石油由来の廃油	Other fossil fuels	○							
			動植物性廃油	Biomass	NA ¹⁾							
	廃プラスチック類	石油由来プラスチック	Other fossil fuels	○								
		バイオマスプラスチック	Biomass ⁸⁾	NA ¹⁾								
	木くず		Biomass	○								
	廃タイヤ	石油由来成分	Other fossil fuels	○								
バイオマス起源成分		Biomass ⁸⁾	IE ⁶⁾									
1.A.1/2 (7.4.3.3) ⁷⁾	ごみ固形燃料（RDF）	石油由来成分	Other fossil fuels	燃料に加工された後に利用	○	○	○					
		生物起源成分	Biomass ⁸⁾					NA ¹⁾				
	ごみ固形燃料（RPF）	石油由来成分	Other fossil fuels					○				
		生物起源成分	Biomass ⁸⁾					NA ¹⁾				

(注)

- 2006年 IPCC ガイドラインに従い、生物起源の廃棄物の焼却に伴う CO₂ 排出量は、総排出量には含まず参考値として算定し、CRF には燃料種「Biomass」として報告する。
- 対象の算定区分をまとめて焼却方式別に算定し、CRF には燃料種「Other fossil fuels」として報告する。
- 石油由来プラスチックに含まれる。
- 紙くず（生物起源成分）に含まれる。
- エネルギー回収を伴わない特別管理産業廃棄物の焼却に含まれる。
- 石油由来成分に含まれる。
- 報告カテゴリーの詳細は表 7-26 を参照のこと。
- 固形廃棄物等（プラスチック、廃タイヤ、RDF、RPF）に含まれる生物起源成分について、混合された固形廃棄物の熱量データを分離する妥当な方法がなく、エネルギー分野で報告する熱量ベースでの活動量は石油由来成分から分離が困難なことから、「Other fossil fuels」に含めて IE として報告する。
- 紙くずに含まれる石油由来成分について、エネルギー分野で報告する熱量ベースでの活動量は生物起源成分から分離が困難なことから、「Biomass」に含めて IE として報告する。

表 7-26 廃棄物の焼却等（エネルギー分野での報告）（1.A.）の排出量報告区分

処理方式	算定対象	燃料利用の内訳	主な用途	エネルギー分野 報告区分	CO ₂ ²⁾	CH ₄	N ₂ O	
廃棄物が焼却される際にエネルギーを回収	一般廃棄物	(区分無し)	エネルギー回収を伴う廃棄物の焼却	1.A.4.a. 業務	○	○	○	
	産業廃棄物				○	○	○	
廃棄物を原料として直接利用	陸一 プラスチック	油化	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	○	○	
		高炉還元剤	高炉還元剤利用	1.A.2.a. 鉄鋼	○	NO ³⁾	NO ³⁾	
		コークス炉化学原料	コークス原料利用	1.A.1.c. 固体燃料製造	○	IE ⁴⁾	NO ⁵⁾	
		ガス化	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	NE ⁶⁾	NE ⁶⁾	
	産業廃棄物	廃油	(区分無し)	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	○	○
			高炉還元剤	高炉還元剤利用	1.A.2.a. 鉄鋼	○	NO ³⁾	NO ³⁾
		廃プラスチック類	化学工業	ボイラー燃料	1.A.2.c. 化学	○	○	○
			製紙業	ボイラー燃料	1.A.2.d. 紙パルプ	○	○	○
			セメント焼成	セメント焼成利用	1.A.2.f. 非金属鉱物	○	○	○
			自動車製造業	ボイラー燃料	1.A.2.g. その他	○	○	○
			油化	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	○	○
			ガス化	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	NE ⁶⁾	NE ⁶⁾
		木くず	(区分無し)	一般燃料利用	1.A.2.g. その他	NA	○	○
		廃タイヤ	セメント焼成	セメント焼成利用	1.A.2.f. 非金属鉱物	○	○	○
	ボイラー		一般燃料利用	1.A.2.g. その他	○	○	○	
	製鉄		製鉄原料燃料利用	1.A.2.a. 鉄鋼	○	NO ³⁾	NO ³⁾	
	ガス化		製鉄所燃料	1.A.2.a. 鉄鋼	○	○	○	
	金属精錬		金属精錬燃料利用	1.A.2.b. 非鉄地金	○	○	○	
	タイヤメーカー		タイヤメーカー燃料利用	1.A.2.c. 化学	○	○	○	
	製紙		製紙工場燃料利用	1.A.2.d. 紙パルプ	○	○	○	
発電	発電利用	1.A.4.a. 業務	○	○	○			
廃棄物が燃料に加工された後に利用	ごみ固形燃料(RDF)	(区分無し)	一般燃料利用(発電含む)	1.A.2.g. その他 ¹⁾	○	○	○	
	ごみ固形燃料(RPF)	石油製品業	ボイラー燃料	1.A.1.b. 石油精製	○	○	○	
		化学工業	ボイラー燃料	1.A.2.c. 化学	○	○	○	
		製紙業	製紙工場燃料利用	1.A.2.d. 紙パルプ	○	○	○	
	セメント製造業	セメント焼成利用	1.A.2.f. 非金属鉱物	○	○	○		

(注)

- 1) 自家利用以外の発電・熱供給分は 1.A.4.a.で報告すべきだが、現時点では実態を把握できていないため、1.A.2.g.に含めて報告する。
- 2) 2006年 IPCC ガイドラインに従い、生物起源成分の焼却に伴う CO₂ 排出量は、総排出量には含めず参考値として算定し、CRF には燃料種「Biomass」として報告する。表 7-25 を参照。
- 3) 鉄鋼業から発生する高炉ガスは全量回収される。
- 4) 同じ報告区分（1.A.1.c）における固体燃料に含まれる。
- 5) コークス炉内は通常 1,000 度以上の還元雰囲気であり、N₂O は発生しない。
- 6) 主にアンモニア合成原料等を得る目的で使用されており、燃料として燃焼される割合は少ないと考えられるため、算定は行わない。

推定した廃棄物の焼却からの温室効果ガス排出量を表 7-27 に示す。2018 年度における廃棄物の焼却（カテゴリー 5.C.）からの温室効果ガス排出量は 11,678 kt-CO₂ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF を除く）の 0.9% を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 16.0% の減少となっている。

1990~1997 年度には、最終処分量の削減のために焼却による中間処理が増え、CO₂ 排出量が増加した。2001 年度以降は、化石由来廃棄物の焼却による中間処理が廃棄物を原料あるいは燃料として利用することで代替され、当該排出源からの CO₂ 排出量がエネルギー分野に移行し、廃棄物分野で報告する CO₂ 排出量は減少した。（CO₂ の IEFs はトレンドに大きな変化は

なく、2.48~2.60 [t-CO₂/t-廃棄物 (排出ベース)] の範囲で推移する。)

一方、下水汚泥の焼却が 1990~1997 年度で増加したことに伴い、N₂O 排出量は当該期間に増加している。2005 年度以降は、下水汚泥の高温焼却が普及し、N₂O 排出量は減少している。

表 7-27 廃棄物の焼却 (5.C.) に伴う温室効果ガス排出量

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CO ₂	5.C.1. 産業廃棄物の焼却	プラスチック ¹⁾	kt-CO ₂	5,092	5,082	5,275	3,091	2,399	2,109	2,429	2,601	2,721	2,293	2,504	1,661	1,641	1,628
		紙くず ¹⁾	kt-CO ₂	71	74	71	60	52	53	58	55	56	52	54	36	32	32
		紙おむつ ¹⁾	kt-CO ₂	32	38	34	39	46	49	52	52	58	59	73	48	44	44
		合成繊維くず ¹⁾	kt-CO ₂	508	545	425	433	665	593	547	446	449	411	508	318	298	296
		廃油 ¹⁾	kt-CO ₂	3,670	4,366	4,799	4,270	3,172	4,128	3,966	4,430	3,652	3,990	3,324	3,856	3,699	3,466
		廃プラスチック類 ¹⁾	kt-CO ₂	2,131	4,539	4,380	4,332	3,474	3,785	3,185	3,450	3,947	3,397	3,777	3,715	3,884	3,770
		紙くず ¹⁾	kt-CO ₂	3	7	7	3	3	3	2	3	1	1	1	1	1	1
		廃油 (引火性) ¹⁾	kt-CO ₂	698	1,036	1,526	1,402	1,845	1,143	815	784	796	782	692	816	561	482
		廃油 (特定有害産業廃棄物) ¹⁾	kt-CO ₂	19	28	41	38	39	42	44	25	55	124	149	131	127	127
		感染性廃棄物廃 (プラスチック) ¹⁾	kt-CO ₂	199	328	428	435	366	395	452	336	341	452	426	411	395	393
	5.C.2. 野焼き (産廃 廃プラスチック類) ¹⁾	kt-CO ₂	5	5	1	0.3	0.3	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.03	0.07	0.07	0.07	
	合計	kt-CO ₂	12,429	16,046	16,988	14,103	12,062	12,300	11,549	12,183	12,076	11,561	11,508	10,992	10,682	10,239	
	CH ₄	5.C.1. 産業廃棄物の焼却	一般廃棄物 ²⁾	kt-CH ₄	0.5	0.4	0.4	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
			廃油 ²⁾	kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
廃プラスチック類 ²⁾			kt-CH ₄	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
動植物性残さ・動物の死体 ³⁾			kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
紙くず ²⁾			kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
木くず ³⁾			kt-CH ₄	0.1	0.1	0.1	0.4	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.3	
天然繊維くず ³⁾			kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
汚泥 (下水汚泥・下水汚泥以外) ³⁾			kt-CH ₄	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
廃油 (引火性) ¹⁾			kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
廃油 (特定有害産業廃棄物) ¹⁾			kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
感染性廃棄物廃 (プラスチック) ¹⁾		kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
感染性廃棄物廃 (プラスチック以外) ³⁾		kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
5.C.2. 野焼き (産業廃棄物) ²⁾		kt-CH ₄	0.5	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
合計		kt-CH ₄	1.1	1.2	0.8	0.7	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4		
	kt-CO ₂ 換算	28	29	21	18	13	12	11	11	12	10	10	9	10			
N ₂ O	5.C.1. 産業廃棄物の焼却	一般廃棄物 ²⁾	kt-N ₂ O	1.03	1.05	0.98	0.52	0.48	0.46	0.49	0.46	0.47	0.43	0.47	0.30	0.28	
		廃油 ²⁾	kt-N ₂ O	0.02	0.02	0.02	0.10	0.07	0.09	0.09	0.10	0.08	0.09	0.08	0.09	0.08	
		廃プラスチック類 ²⁾	kt-N ₂ O	0.15	0.32	0.31	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	
		動植物性残さ・動物の死体 ³⁾	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
		紙くず ²⁾	kt-N ₂ O	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
		木くず ³⁾	kt-N ₂ O	0.06	0.10	0.06	0.14	0.09	0.08	0.07	0.08	0.10	0.08	0.08	0.07	0.09	
		天然繊維くず ³⁾	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
		下水汚泥 ³⁾	kt-N ₂ O	2.65	3.94	4.86	5.48	4.30	4.16	4.17	4.22	4.25	3.92	4.16	3.69	4.07	
		下水汚泥以外の汚泥 ³⁾	kt-N ₂ O	0.89	0.92	0.94	0.22	0.20	0.19	0.19	0.16	0.18	0.17	0.16	0.16	0.18	
		廃油 (引火性) ¹⁾	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.01	0.03	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	0.01	0.01	
	廃油 (特定有害産業廃棄物) ¹⁾	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01		
	感染性廃棄物廃 (プラスチック) ¹⁾	kt-N ₂ O	0.01	0.02	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		
	感染性廃棄物廃 (プラスチック以外) ³⁾	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01		
	5.C.2. 野焼き (産業廃棄物) ²⁾	kt-N ₂ O	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		
合計	kt-N ₂ O	4.83	6.40	7.23	6.59	5.27	5.08	5.09	5.11	5.15	4.77	5.03	4.40	4.78			
	kt-CO ₂ 換算	1,438	1,908	2,156	1,963	1,570	1,515	1,518	1,523	1,535	1,423	1,498	1,312	1,423			
合計	kt-CO ₂ 換算	13,876	17,963	19,157	16,083	13,643	13,826	13,077	13,717	13,623	12,994	13,016	12,313	12,115			

(注) 1) 石油由来成分のみ含む
 2) 石油由来成分及び生物起源成分を含む
 3) 生物起源成分のみ含む

(注) 生物起源の廃棄物 (バイオマスプラスチック、動植物性廃油を含む) の焼却に伴う CO₂ 排出量は、2006 年 IPCC ガイドラインに従い総排出量には含めず参考値として算定し、CRF の「Table 5.C」の「Biogenic」に報告する。

参考情報として、エネルギーとして利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う廃棄物焼却からの排出量を含めた廃棄物の焼却からの温室効果ガス排出量を表 7-28 に示す。2018 年度におけるこの排出量は 30,228 kt-CO₂ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 2.4% を占める。1990 年度の排出量と比較すると 19.9% の増加となっている。

表 7-28【参考値】廃棄物の焼却に伴い発生する全ての温室効果ガス排出量
エネルギーとして利用された廃棄物及びエネルギー回収を伴う
廃棄物焼却からの排出量を含めた場合の排出量

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018			
CO ₂	5.C. 廃棄物の焼却及び野焼き (エネルギー回収を伴わない) ¹⁾	kt-CO ₂	12,429	16,046	16,988	14,103	12,062	12,300	11,549	12,183	12,076	11,561	11,508	10,992	10,682	10,239			
	I.A. 燃料の燃焼	廃棄物が焼却される際にエネルギーを回収	一般廃棄物 ²⁾	kt-CO ₂	5,916	6,373	8,270	6,677	4,687	4,267	4,545	5,458	5,388	4,826	4,644	5,435	5,909	5,865	
			廃油 ²⁾	kt-CO ₂	83	93	112	129	102	107	108	116	111	110	101	117	114	114	
			紙くず ³⁾	kt-CO ₂	38	48	53	83	90	99	98	109	114	125	135	156	160	160	
			合成繊維くず ³⁾	kt-CO ₂	591	683	667	935	1,299	1,200	1,025	935	889	865	942	1,040	1,072	1,066	
		廃棄物を原燃料として直接利用	産廃	kt-CO ₂	21	30	28	109	67	176	170	105	152	175	169	176	117	110	
			廃プラスチック類 ²⁾	kt-CO ₂	31	66	188	307	351	581	688	732	608	679	899	838	830	805	
			紙くず ³⁾	kt-CO ₂	0.0	0.1	0.1	0.0	0.1	0.2	0.3	0.4	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	
			廃プラスチック類 ²⁾	kt-CO ₂	NO	NO	92	512	413	455	435	465	234	227	263	253	266	219	
			廃油 ²⁾	kt-CO ₂	3,592	4,193	4,150	5,215	4,559	4,778	4,733	4,952	4,796	4,592	5,015	4,678	4,680	4,492	
			産廃	kt-CO ₂	55	59	450	1,238	1,707	1,835	1,741	1,820	1,892	2,184	2,098	2,244	2,366	2,483	
	廃棄物が燃料に加工された後に利用	廃プラスチック類 ²⁾	kt-CO ₂	527	845	1,044	869	951	1,008	976	951	958	1,014	1,037	997	1,036	1,064		
		廃タイヤ ²⁾	kt-CO ₂	26	30	114	320	289	292	299	295	296	297	275	274	273	276		
		RDF ²⁾	kt-CO ₂	NO	NO	11	46	683	1,114	1,093	1,148	1,196	1,265	1,237	1,357	1,376	1,387		
		RPF ²⁾	kt-CO ₂	NO	NO	11	46	683	1,114	1,093	1,148	1,196	1,265	1,237	1,357	1,376	1,387		
		合計	kt-CO ₂	23,307	28,477	32,202	31,180	27,692	28,190	27,512	29,316	28,779	27,891	28,349	28,557	28,881	28,279		
	CH ₄	5.C. 廃棄物の焼却及び野焼き (エネルギー回収を伴わない) ²⁾	kt-CH ₄	1.1	1.2	0.8	0.7	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4		
		I.A. 燃料の燃焼	一般廃棄物 ²⁾	kt-CH ₄	0.5	0.5	0.6	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	
				廃油 ²⁾	kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
産廃				kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
廃プラスチック類 ²⁾				kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
廃棄物を原燃料として直接利用			産廃	kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
			廃油 ²⁾	kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
			産廃	kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	
			廃プラスチック類 ²⁾	kt-CH ₄	1.8	1.8	2.2	2.9	4.2	4.2	4.4	4.5	4.8	5.2	5.0	4.9	5.2	5.3	
			木くず ³⁾	kt-CH ₄	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
			天然繊維くず ³⁾	kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
廃棄物が燃料に加工された後に利用		RDF ²⁾	kt-CH ₄	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
		RPF ²⁾	kt-CH ₄	NO	NO	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
		合計	kt-CH ₄	3.5	3.6	3.8	4.0	5.1	5.0	5.2	5.3	5.6	6.1	5.8	5.7	6.1	6.2		
		kt-CO ₂ 換算	86	89	95	99	128	126	130	133	141	152	145	143	152	154			
N ₂ O		5.C. 廃棄物の焼却及び野焼き (エネルギー回収を伴わない) ²⁾	kt-N ₂ O	4.83	6.40	7.23	6.59	5.27	5.08	5.09	5.11	5.15	4.77	5.03	4.40	4.78	4.80		
		I.A. 燃料の燃焼	一般廃棄物 ²⁾	kt-N ₂ O	1.19	1.32	1.53	1.13	0.95	0.93	0.91	0.97	0.93	0.91	0.86	0.99	1.00	1.00	
				廃油 ²⁾	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
				産廃	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00
	廃プラスチック類 ²⁾			kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
	廃棄物を原燃料として直接利用		産廃	kt-N ₂ O	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	
			廃油 ²⁾	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
			産廃	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
			廃プラスチック類 ²⁾	kt-N ₂ O	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	
			木くず ³⁾	kt-N ₂ O	0.02	0.02	0.03	0.03	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	
			天然繊維くず ³⁾	kt-N ₂ O	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	
	廃棄物が燃料に加工された後に利用	RDF ²⁾	kt-N ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01		
		RPF ²⁾	kt-N ₂ O	NO	NO	0.00	0.01	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03		
		合計	kt-N ₂ O	6.11	7.81	8.89	7.87	6.41	6.21	6.20	6.28	6.28	5.91	6.11	5.61	6.00	6.02		
		kt-CO ₂ 換算	1,819	2,328	2,650	2,346	1,910	1,851	1,849	1,872	1,873	1,760	1,820	1,672	1,789	1,795			

(注) 1) 石油由来成分のみ含む
2) 石油由来成分及び生物起源成分を含む
3) 生物起源成分のみ含む

7.4.1. 廃棄物の焼却（エネルギー回収を伴わない）（5.C.1.）

7.4.1.1. 一般廃棄物（5.C.1.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、施設外に電気もしくは熱を供給しない一般廃棄物の焼却に伴う排出の算定・報告を行う。CO₂排出量は表 7-24 のように廃棄物の種類に応じて「Biogenic, Municipal solid waste (MSW)」、「Non-biogenic, Municipal solid waste」に報告する。CH₄排出量、N₂O排出量は焼却される炉種ごとに排出量を計算するが、この際用いる一般廃棄物の焼却データでは生物起源廃棄物と非生物起源廃棄物を区分できないことから、生物起源分も含めた全排出量を「Non-biogenic, Municipal solid waste」にまとめて報告する。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

当該排出源から排出される CO₂ については、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Volume 5, Page 5.9, Fig 5.1) に従い、我が国独自のデータを用いた排出係数と焼却量 (乾燥ベース) 及びエネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合を用いて排出量を算定する。石油由来の廃棄物の焼却に伴う CO₂ を算定対象とするため、一般廃棄物中の石油由来プラスチック、合成繊維くず、紙くずの石油由来成分、紙おむつの石油由来成分を算定対象とする²。

$$E = \sum_i EF_i \times A_i \times (1 - R)$$

E	: 一般廃棄物 i の焼却に伴う CO ₂ 排出量 [kg-CO ₂]
EF_i	: 廃棄物 i の焼却に伴う排出係数 (乾燥ベース) [kg-CO ₂ /t]
A_i	: 廃棄物 i の焼却量 (乾燥ベース) [t]
R	: エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合

■ 排出係数

○ 計算式

2006 年 IPCC ガイドラインの考え方に従い、下記のように算定する。

【石油由来プラスチック及び合成繊維くず】

$$EF_i = CF_i \times OF \times 44/12$$

EF_i	: 廃棄物 i の焼却に伴う排出係数 (乾燥ベース) [kg-CO ₂ /t]
CF_i	: 廃棄物 i 中の炭素含有率 (乾燥ベース) [%]
OF	: 酸化係数 [%]

【紙くず及び紙おむつ】

$$EF_i = CF_i \times FCF_i \times OF \times 44/12$$

EF_i	: 廃棄物 i の焼却に伴う排出係数 (乾燥ベース) [kg-CO ₂ /t]
CF_i	: 廃棄物 i 中の炭素含有率 (乾燥ベース) [%]
FCF_i	: 廃棄物 i 中の炭素の石油由来割合 [%]
OF	: 酸化係数 [%]

○ 炭素含有率

一般廃棄物中のプラスチックの炭素含有率は、石油由来・生物起源とも、1990 年度-2008 年度の 4 自治体 (秋田市、川崎市、神戸市、大阪府) での実測値の平均値を用い、全年度一律に適用する (環境省、2010)。

一般廃棄物中の合成繊維くずの炭素含有率は、繊維製品中の合成繊維の炭素含有率を用いる事とし、合成繊維種類ごとのポリマーの分子式から求めた炭素含有率を合成繊維消費量で加重平均して設定する。

一般廃棄物中の紙くずの炭素含有率は、保守的に国内での実測値 (表 7-5) よりも大きい 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いる。一般廃棄物中の紙おむつの炭素含有率は、国独自の調査結果がないことから 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いる。

² 「Biogenic Municipal solid waste」として食物くず、紙くずの生物起源成分、天然繊維くず、木くず、バイオマスプラスチックの焼却による CO₂ 排出量を参考値として報告している。排出量の算定方法は石油由来廃棄物の焼却に伴う排出と同様である。

表 7-29 一般廃棄物中のプラスチック及び合成繊維くずの炭素含有率（乾燥ベース）

項目	炭素含有率	出典
プラスチック	75.1%	4 自治体の平均
ペットボトル	62.5%	(参考値) ポリエチレンテレフタラートの分子式からの推計値 ※CO ₂ 排出量の算定には使用しない
合成繊維くず	63.0%	合成繊維種類ごとの炭素含有率を消費量で加重平均
紙くず	46.0%	2006 年 IPCC ガイドライン
紙おむつ	70.0%	2006 年 IPCC ガイドライン

○ 廃棄物中の炭素の石油由来割合

一般廃棄物中の紙くず及び紙おむつ中の炭素の石油由来割合は、国独自の調査結果がないことから 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いる。

表 7-30 一般廃棄物中の紙くず及び紙おむつ中の炭素の石油由来割合

項目	炭素の石油由来割合 [%]	出典
紙くず	1	2006 年 IPCC ガイドライン
紙おむつ	10	2006 年 IPCC ガイドライン

○ 酸化係数

日本の実態を考慮し、2006 年 IPCC ガイドラインに示されるデフォルト値の 100%を採用する。

○ 排出係数

以上の計算より得られた排出係数を表 7-31 に記す。

表 7-31 一般廃棄物の焼却に関する CO₂ 排出係数（乾燥ベース）

項目	単位	排出係数
プラスチック	kg-CO ₂ /t	2,754
合成繊維くず	kg-CO ₂ /t	2,310
紙くずの石油由来成分	kg-CO ₂ /t	17
紙おむつの石油由来成分	kg-CO ₂ /t	257

表 7-32 【参考値】 ペットボトルの排出係数（乾燥ベース）

項目	単位	排出係数	備考
ペットボトル	kg-CO ₂ /t	2,292	CO ₂ 排出量の算定には使用しない

■ 活動量

活動量推計の基本情報として、「循環利用量調査報告書」及び同調査データに示されたプラスチック、プラスチックから区別されたペットボトル、繊維くず及び紙くずの焼却量の値を用いる。ここで報告されるプラスチック及びペットボトルの焼却量には、潜在的にバイオマスプラスチックが含まれている。活動量推計の詳細は下記の通り。

○ 石油由来プラスチック

一般廃棄物の石油由来プラスチックの焼却に伴う CO₂ 排出の活動量は、プラスチック類の焼却量（排出ベース）から含水量を差し引いて乾燥ベースの焼却量に変換した後、焼却される一般廃棄物プラスチックの石油由来割合を乗じて求める。

$$A_{plastics} = MSW_{plastics} \times (1 - u_{plastics}) \times FPF_{msw}$$

$A_{plastics}$: 石油由来プラスチック焼却の活動量（一般廃棄物）（乾燥ベース）[t (dry)]

$MSW_{plastics}$: 一般廃棄物プラスチック焼却量（排出ベース）[t (wet)]
 $u_{plastics}$: プラスチックの含水率 [%]
 FPF_{msw} : 一般廃棄物プラスチックの石油由来割合 [%]

この方法論では、一般廃棄物の石油由来プラスチック焼却の活動量はペットボトルとペットボトル以外のプラスチックに区別して推計する。

$$A_{plastics} = A_{plastic\ bottle} + A_{other\ plastics}$$

$A_{plastics}$: 石油由来プラスチック焼却（一般廃棄物）の活動量
 $A_{plastic\ bottle}$: 石油由来ペットボトル焼却（一般廃棄物）の活動量
 $A_{other\ plastics}$: ペットボトル以外の石油由来プラスチック焼却（一般廃棄物）の活動量

【プラスチックの含水率】

ペットボトル（一般廃棄物）及びペットボトル以外のプラスチック（一般廃棄物）中のプラスチックの含水率は「循環利用量調査報告書」に示される値（20%）を用いる。

【プラスチック（ペットボトル/ペットボトル以外）の石油由来割合】

プラスチックの石油由来割合はペットボトル（一般廃棄物）及びペットボトル以外のプラスチック（一般廃棄物）に区別のうえ、次の式で求める。

$$FPF_{msw}(T) = 1 - \frac{BPW_{msw}(T)}{PW_{msw}(T)}$$

$FPF_{msw}(T)$: T 年度のプラスチック（一般廃棄物）の石油由来割合 [%]
 $BPW_{msw}(T)$: T 年度のプラスチック（一般廃棄物）中のバイオマス起源成分量 [t]
 $PW_{msw}(T)$: T 年度のプラスチック（一般廃棄物）の排出量 [t]

T 年度の一般廃棄物プラスチック（ペットボトル及びペットボトル以外のプラスチック）の排出量（ $PW_{msw}(T)$ ）は「循環利用量調査報告書」の値を用いる。 T 年度に廃棄されるプラスチック（一般廃棄物）のバイオマス起源成分量（ $BPW_{msw}(T)$ ）はペットボトル及びペットボトル以外のプラスチックとともに以下の式で求める。

$$BPW_{msw}(T) = \sum_t \sum_i (BP_{i,t} \times DP_{i,t} \times B_i \times W_{msw\ i,t}(T) \times DW_{msw}(T))$$

$BP_{i,t}$: t 年度におけるバイオマスプラスチック製品 i の生産量 [t]
 $DP_{i,t}$: t 年度におけるバイオマスプラスチック製品 i の国内出荷割合 [%]
 B_i : バイオマスプラスチック製品 i のバイオマス起源成分重量割合 [%]
 $W_{msw\ i,t}(T)$: t 年度に生産されたバイオマスプラスチック製品 i が製品の使用に伴い T 年度に一般廃棄物として廃棄される割合 [%]
 $DW_{msw}(T)$: プラスチック（一般廃棄物）が T 年度に国内処理される割合 [%]

バイオマスプラスチック製品の生産量（ $BP_{i,t}$ ）、国内出荷割合（ $DP_{i,t}$ ）、バイオマス成分重量割合（ B_i ）は、日本バイオマス製品推進協議会及び日本バイオプラスチック協会による調査より把握する。なお、当該調査では、最終商品としてのバイオマスプラスチック製品をバイオマスプラスチックの種類別（バイオPE、バイオPET、ポリ乳酸、等）・用途別（包装資材、容器、日用品、液晶機器、等）に分類している。

同調査では中間製品としてのバイオマスプラスチック樹脂（バイオPE、バイオPET、ポリ乳酸）の供給量も把握している。このバイオマスプラスチック樹脂の供給量から樹脂別に上述の把握済み最終製品に含まれるバイオマスプラスチック樹脂量を減じ、同調査では未把握

となっている最終製品量 (BP) を樹脂量として推計する。未把握の最終製品の国内出荷割合 (DP) 及びバイオマス起源成分重量割合 (B) は専門家判断により設定する。

なお、我が国で普及するバイオマスプラスチック樹脂のうちボトル用途に含まれるバイオPET樹脂の一部は、最終製品の使用後に回収・マテリアルリサイクルされ、再び最終商品(ボトル、日用品)となった後に廃棄・焼却されている。このような状況を踏まえ、一般廃棄物中のバイオマス起源成分量 ($BPW_{msw}(T)$) については、一次利用された後のバイオマスプラスチック廃棄量に加え、マテリアルリサイクルされた後に廃棄されるバイオPET樹脂量も考慮し設定する。マテリアルリサイクル由来のバイオPET樹脂量はPETボトルリサイクル推進協議会「PETボトル年次報告書」にあるペットボトルのマテリアルリサイクルデータを考慮して推計する。

一般廃棄物として廃棄される割合 $W_{msw\ i,t}(T)$ は専門家判断に基づき推計する。

プラスチック(一般廃棄物)が T 年度に国内処理される割合 ($DW_{msw}(T)$) は、ペットボトル以外の製品については輸出する割合が不明なため、100%とする。ペットボトルについては、PETボトルリサイクル推進協議会「PETボトル年次報告書」より求める(表7-33)。

表 7-33 廃プラスチック類が国内処理される割合 (DW)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
プラスチック (一般廃棄物、ペットボトル以外)	%	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
ペットボトル(一般廃棄物)	%	48.6	48.6	48.6	48.6	47.4	47.5	50.5	50.9	51.6	57.1	52.0	54.4	59.6	61.7
廃プラスチック類(産業廃棄物)	%	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

以上より得られるプラスチックの石油由来割合を表7-34に記す。

表 7-34 廃プラスチック類の石油由来割合 (FPF)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
プラスチック (一般廃棄物、ペットボトル以外)	%	100.0	100.0	100.0	100.0	99.7	99.5	99.5	99.5	99.3	99.1	98.8	98.7	98.7	98.7
ペットボトル(一般廃棄物)	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	99.8	99.7	99.5	99.5	99.4	99.3
廃プラスチック類(産業廃棄物)	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	99.9	99.8	99.8	99.8	99.8	99.8	99.8	99.8	99.8

○ 合成繊維くず

一般廃棄物の合成繊維くずの活動量は、一般廃棄物の繊維くず焼却量(排出ベース)に、繊維くず中の合成繊維くず割合を乗じ、繊維くずの含水量(含水率20%:表7-10参照)を差し引いて乾燥ベースの焼却量に変換して求める。

$$A_{textiles} = MSW_{textiles} \times (1 - u_{textiles}) \times F_{synthetic}$$

$A_{textiles}$: 合成繊維くず焼却の活動量(乾燥ベース) [t (dry)]
$MSW_{textiles}$: 一般廃棄物の繊維くず焼却量(排出ベース) [t (wet)]
$u_{textiles}$: 繊維くずの含水率 [%]
$F_{synthetic}$: 繊維くず中の合成繊維割合 [%]

【繊維くず中の合成繊維割合】

一般廃棄物中の繊維くず中の合成繊維くず割合は、「繊維・生活用品統計年報」及び「繊維ハンドブック」から把握した各年の合成繊維内需量と全繊維製品内需量の比を用いて設定した繊維製品中の合成繊維製品割合を用いて設定する。

表 7-35 繊維くず中の合成繊維・天然繊維の割合

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
合成繊維	%	49.1	50.7	53.5	52.8	56.6	59.6	63.2	64.1	61.9	63.1	63.6	63.6	63.6	63.6
天然繊維	%	50.9	49.3	46.5	47.2	43.4	40.4	36.8	35.9	38.1	36.9	36.4	36.4	36.4	36.4

○ 紙くず

一般廃棄物の紙くずの活動量は、一般廃棄物の紙くず焼却量（排出ベース）に、紙くずの含水量（含水率 20%：表 7-10 参照）を差し引いて乾燥ベースの焼却量に変換して求める。

$$A_{paper} = MSW_{paper} \times (1 - u_{paper})$$

- A_{paper} : 紙くず焼却の活動量（乾燥ベース）[t (dry)]
- MSW_{paper} : 紙くず焼却量（排出ベース）[t (wet)]
- u_{paper} : 紙くずの含水率 [%]

○ 紙おむつ

紙おむつは一般廃棄物において紙くずあるいは繊維くずの一部として分類されるが、その焼却量は不明である。よって紙おむつは保守的に、上記の一般廃棄物の紙くず及び繊維くずとは別途の活動量とし、焼却量は排出年度における国内生産量の全量とみなす。

紙おむつの国内生産量は、（一社）日本衛生材料工業連合会「日衛連 NEWS」に掲載される紙おむつの生産量（大人用、乳幼児用の合計値：乾燥ベース）より求める。

○ 活動量

以上の計算より得られる活動量を表 7-36 に記す。

表 7-36 CO₂ 排出量の計算に使用する一般廃棄物の活動量（乾燥ベース）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石油由来プラスチック	kt / 年 (dry)	3,998	4,160	4,919	3,547	2,573	2,316	2,533	2,927	2,945	2,585	2,596	2,577	2,742	2,721
合成繊維くず	kt / 年 (dry)	476	531	473	592	850	776	681	598	579	552	628	588	593	590
紙くず	kt / 年 (dry)	9,157	9,916	10,863	11,193	9,150	9,447	9,796	10,187	9,881	9,617	9,186	9,078	8,652	8,634
紙おむつ	kt / 年 (dry)	272	333	340	475	531	576	584	627	670	716	811	795	795	795

■ エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合

エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合とは、施設外に電気もしくは熱を供給する一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合であり、「一般廃棄物処理実態調査」より把握する。

表 7-37 エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
場外での発電・熱利用あり	%	53.7	55.6	61.1	68.4	66.1	66.9	65.2	67.7	66.4	67.8	65.0	76.6	78.3	78.3
場外での発電・熱利用なし	%	46.3	44.4	38.9	31.6	33.9	33.1	34.8	32.3	33.6	32.2	35.0	23.4	21.7	21.7

2) CH₄

■ 算定方法

該当排出源である焼却炉とガス化溶融炉からの CH₄ 排出量について算定する。

焼却炉からの CH₄ 排出量は、燃焼方式別の一般廃棄物焼却量（排出ベース）に、各々定めた排出係数を乗じ算定する。ガス化溶融炉からの CH₄ 排出量は、ガス化溶融炉での一般廃棄物焼却量（排出ベース）に、排出係数を乗じ算定する。

これら算定した排出量について、エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設からの排出量を差し引いて、廃棄物分野で計上する。

$$E = \sum_i (EF_i \times A_i) \times (1 - R)$$

- E : 一般廃棄物の焼却に伴う CH₄ 排出量 [kg-CH₄]
 EF_i : 燃焼方式 i (あるいは炉種 i) の排出係数 (排出ベース) [kg-CH₄/t]
 A_i : 燃焼方式 i (あるいは炉種 i) の焼却量 (排出ベース) [t]
 R : エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合

■ 排出係数

○ 焼却炉

我が国の焼却炉は 1990 年後半から 2000 年代前半にかけてダイオキシン類削減対策のため施設の更新・改修が行われたため、2000 年度以降に対策が施された施設は、それ以前の施設に比べ CH₄ 排出係数の改善が認められる (環境省、2010) との専門家判断により、焼却炉の炉種別 (ストーカ炉、流動床炉)・燃焼方式別 (全連続燃焼式、准連続燃焼式、バッチ燃焼式) の CH₄ 排出係数は、2001 年以前 (環境省、2006b) と、2002 年度以降 (環境省、2010) において設定した値を用いる。採用した排出係数はいずれも実測調査に基づいている。

活動量は燃焼方式ごとの焼却量を使用するため、排出係数は「日本の廃棄物処理」から算出した各年度の炉種別焼却量の比率で加重平均をおこない、燃焼方式 (全連続燃焼式、准連続燃焼式、バッチ燃焼式) ごとに推計する。これら CH₄ 排出係数は大気中の CH₄ 濃度を考慮した補正は行っていない。

○ ガス化溶融炉

炉種 (シャフト式、流動床式、ロータリー式) ごとに設定した排出係数を用いる (環境省、2010)。ただし、活動量はガス化溶融炉での総焼却量を使用するため、排出係数は各年度の炉種別焼却量の比率で加重平均を行い、推計する。

表 7-38 燃焼方式別 CH₄ 排出係数 (一般廃棄物)

焼却方式	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
全連続燃焼式焼却炉	g-CH ₄ /t	8.2	8.2	8.3	2.6	2.6	2.7	2.7	2.7	2.7	2.7	2.7	2.7	2.7	2.7
准連続燃焼式焼却炉	g-CH ₄ /t	69.6	69.6	75.1	19.9	20.6	20.9	20.8	21.1	20.9	21.1	20.7	20.4	20.5	20.5
バッチ燃焼式焼却炉	g-CH ₄ /t	80.5	80.5	84.1	13.2	13.4	11.6	11.6	11.6	11.7	11.7	11.8	11.8	10.9	10.9
ガス化溶融炉	g-CH ₄ /t	NA	NA	5.6	6.9	7.0	7.0	7.0	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9

(出典) 環境省 (2000)、環境省 (2010)、環境省「日本の廃棄物処理」、石川県他 (1991-1997)、大気環境学会 (1996)、上野他 (1992)

■ 活動量

焼却炉及びガス化溶融炉における CH₄ 排出の活動量は、「循環利用量調査報告書」及び同調査データに示された一般廃棄物焼却量 (排出ベース) に、「日本の廃棄物処理」から算出した焼却炉の各燃焼方式あるいはガス化溶融炉の焼却比率を乗じて推計する。

表 7-39 燃焼方式別の焼却量 (一般廃棄物)

焼却方式	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
全連続燃焼式焼却炉	kt / 年 (wet)	26,215	29,716	32,749	32,246	28,444	27,603	27,892	28,702	28,246	27,360	27,364	26,961	26,883	26,796
准連続燃焼式焼却炉	kt / 年 (wet)	4,810	5,455	5,882	4,047	3,155	2,968	2,932	2,849	2,827	2,524	2,349	2,164	2,072	2,065
バッチ燃焼式焼却炉	kt / 年 (wet)	5,643	4,328	3,131	1,562	1,144	1,078	1,057	1,061	970	867	842	744	693	691
ガス化溶融炉	kt / 年 (wet)	NO	NO	370	2,397	3,245	3,605	3,857	4,122	4,098	4,161	4,328	4,423	4,599	4,584

3) N₂O

■ 算定方法

CH₄ 排出量と同様に、該当排出源である焼却炉及びガス化溶融炉からの N₂O 排出について算定する。

焼却炉からの N₂O 排出量は、燃焼方式別の一般廃棄物焼却量（排出ベース）に、各々定めた排出係数を乗じ算定する。ガス化溶融炉からの N₂O 排出量は、ガス化溶融炉での一般廃棄物焼却量（排出ベース）に、排出係数を乗じ算定する。

これら算定した排出量について、エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設からの排出量を差し引いて、廃棄物分野で計上する。

$$E = \sum_i (EF_i \times A_i) \times (1 - R)$$

- E : 一般廃棄物の焼却に伴う N₂O 排出量 [kg-N₂O]
- EF_i : 燃焼方式 i(あるいは炉種 i) の排出係数(排出ベース) [kg-N₂O/t]
- A_i : 燃焼方式 i(あるいは炉種 i) の焼却量(排出ベース) [t]
- R : エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合

■ 排出係数

○ 焼却炉

CH₄ 排出係数と同様に、焼却炉の炉種別・燃焼方式別の排出係数は 2001 年度以前（環境省、2006b）と 2002 年度以降（環境省、2010）で異なる値を用いる。活動量は燃焼方式ごとの焼却量を使用するため、排出係数は「日本の廃棄物処理」から算出した各年度の炉種別焼却量の比率で加重平均をおこない、燃焼方式（全連続燃焼式、准連続燃焼式、バッチ燃焼式）ごとに推計する。

○ ガス化溶融炉

炉種（シャフト式、流動床式、ロータリー式）ごとに設定した排出係数を用いる（環境省、2010）。ただし、活動量はガス化溶融炉での総焼却量を使用するため、排出係数は「日本の廃棄物処理」から算出した各年度の炉種別焼却量の比率で加重平均を行い、推計する。

表 7-40 燃焼方式別 N₂O 排出係数（一般廃棄物）

焼却方式	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
全連続燃焼式焼却炉	g-N ₂ O/t	58.8	58.8	59.1	37.9	37.9	38.0	38.0	38.0	38.0	38.1	38.1	38.1	37.9	37.9
准連続燃焼式焼却炉	g-N ₂ O/t	56.8	56.8	57.3	71.5	72.7	73.2	73.1	73.4	73.1	73.5	72.8	72.3	72.5	72.5
バッチ燃焼式焼却炉	g-N ₂ O/t	71.4	71.4	74.8	76.0	76.0	76.2	76.2	76.2	76.2	76.2	76.2	76.2	76.3	76.3
ガス化溶融炉	g-N ₂ O/t	NA	NA	16.9	12.0	11.2	11.5	11.9	11.7	11.7	12.0	12.2	12.5	12.1	12.1

（出典）環境省（2006b）、環境省（2010）、環境省「日本の廃棄物処理」、石川県他（1991-1997）、大気環境学会（1996）、上野他（1992）

■ 活動量

焼却炉及びガス化溶融炉ともに、CH₄ 排出量算定に用いた活動量を用いる。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

CO₂ 排出係数については、石油由来廃棄物の炭素含有率データから計算される 95%信頼区間より不確実性を算定する。CH₄ 及び N₂O 排出係数については、排出係数算定に用いられた実測データから計算される 95%信頼区間より不確実性を評価する。活動量の不確実性については、表 7-2 に基づき一般廃棄物データの不確実性を適用する。不確実性評価の詳細は表 7-41 及び表 7-42 に記す。

表 7-41 一般廃棄物のエネルギー回収を伴わない焼却 (5.C.1.-) における不確実性評価 (CO₂)

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
プラスチック	CO ₂	-2%	+2%	-10%	+10%	-10%	+10%	排出係数の出典である環境省(2010)より引用。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
合成繊維くず	CO ₂	-2%	+2%	-10%	+10%	-10%	+10%	繊維くずの炭素含有率実測データの95%信頼区間より設定。		
紙くず	CO ₂	-100%	+400%	-10%	+10%	-101%	+400%	炭素含有率実測データの95%信頼区間、2006年IPCCガイドラインのデフォルト値を用いる化石由来炭素割合を合成。		
紙おむつ	CO ₂	-23%	+29%	-10%	+10%	-25%	+30%	排出係数は2006年IPCCガイドラインのデフォルト値であることから、同ガイドラインの不確実性デフォルト値算定の考え方にに基づき不確実性を設定。		

表 7-42 一般廃棄物のエネルギー回収を伴わない焼却 (5.C.1.-) における不確実性評価 (CH₄ 及び N₂O)

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法	
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)				
区分なし(CH ₄)	連続燃焼式・ストーカー式	CH ₄	-39%	+39%	-10%	+10%	-40%	+40%	排出係数出典の環境省(2010)より引用。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	連続燃焼式・流動床式	CH ₄	-100%	+719%	-10%	+10%	-100%	+719%			
	准連続燃焼式・ストーカー式	CH ₄	-82%	+82%	-10%	+10%	-83%	+83%			
	准連続燃焼式・流動床式	CH ₄	-100%	+162%	-10%	+10%	-100%	+162%			
	バッチ燃焼式・ストーカー式	CH ₄	-75%	+75%	-10%	+10%	-76%	+76%			
	バッチ燃焼式・流動床式	CH ₄	-100%	+394%	-10%	+10%	-100%	+394%			
	ガス化溶解炉・シャフト式	CH ₄	-100%	+203%	-10%	+10%	-100%	+203%			
	ガス化溶解炉・流動床式	CH ₄	-100%	+133%	-10%	+10%	-100%	+134%			
	ガス化溶解炉・回転式	CH ₄	-54%	+54%	-10%	+10%	-55%	+55%			
区分なし(N ₂ O)	連続燃焼式・ストーカー式	N ₂ O	-34%	+34%	-10%	+10%	-35%	+35%	排出係数出典の環境省(2010)より引用。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	連続燃焼式・流動床式	N ₂ O	-98%	+98%	-10%	+10%	-99%	+99%			
	准連続燃焼式・ストーカー式	N ₂ O	-82%	+82%	-10%	+10%	-82%	+82%			
	准連続燃焼式・流動床式	N ₂ O	-64%	+64%	-10%	+10%	-64%	+64%			
	バッチ燃焼式・ストーカー式	N ₂ O	-100%	+111%	-10%	+10%	-100%	+111%			
	バッチ燃焼式・流動床式	N ₂ O	-100%	+133%	-10%	+10%	-100%	+134%			
	ガス化溶解炉・シャフト式	N ₂ O	-45%	+45%	-10%	+10%	-46%	+46%			
	ガス化溶解炉・流動床式	N ₂ O	-100%	+252%	-10%	+10%	-100%	+252%			
	ガス化溶解炉・回転式	N ₂ O	-87%	+87%	-10%	+10%	-88%	+88%			

■ 時系列の一貫性

1997年度以前はごみ種別の焼却量データが無いことから、各年の一般廃棄物焼却全量と1998年度のごみ種別焼却量の割合を用いて、データの推計を行っている。排出量算定において時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

バイオマスプラスチック製品データの改訂に伴い、CO₂排出量の再計算を行った。

統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。詳細は「7.1.5. 廃棄物分野における一般的な再計算」を参照のこと。

再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.4.1.2. 産業廃棄物 (5.C.1.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは施設外に電気もしくは熱を供給しない産業廃棄物の焼却に伴う CO₂、CH₄、N₂O の排出量を産業廃棄物の種類ごとに算定し、それぞれ該当する「Biogenic, Industrial solid waste (ISW)」、「Biogenic, Non-fossil liquid waste」、「Biogenic, Sludge」、「Non-biogenic, Industrial solid waste」、「Non-biogenic, Fossil liquid waste」のカテゴリーで報告する（表 7-24 を参照）。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

産業廃棄物の廃油、廃プラスチック類、紙くずの焼却に伴い排出される石油由来の CO₂ について、日本独自の排出係数と焼却量及びエネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物の割合を用いて排出量を算定する。ここで、含水率の推計が困難な産業廃棄物の廃油及び廃プラスチック類については、排出ベースでの排出係数を適用する。なお、産業廃棄物の繊維くずには廃掃法の規定では合成繊維くずが含まれないため、全て天然繊維くずと見なし、生物起源の CO₂ 排出として日本の総排出量には含めない。

$$E_i = EF_i \times A_i \times (1 - R_i)$$

E_i	: 産業廃棄物 i の焼却に伴う CO ₂ 排出量 [kg-CO ₂]
EF_i	: 産業廃棄物 i の焼却に伴う排出係数 [kg-CO ₂ /t] (廃油、廃プラスチック類は排出ベース、紙くずは乾燥ベース)
A_i	: 廃棄物中 i の焼却量 [t] (廃油、廃プラスチック類は排出ベース、紙くずは乾燥ベース)
R_i	: エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物 i の割合

■ 排出係数

○ 計算式

2006年 IPCC ガイドラインの考え方に従い、各廃棄物種別の炭素含有率に焼却施設における酸化係数を乗じて算定する。

【石油由来の廃油、廃プラスチック類】

$$EF_i = CF_i \times OF \times 44/12$$

EF_i : 廃棄物 i の焼却に伴う排出係数 (排出ベース) [kg-CO₂/t]
 CF_i : 廃棄物 i 中の炭素含有率 (排出ベース) [%]
 OF : 酸化係数 [%]

【紙くず】

$$EF_i = CF_i \times FCF_i \times OF \times 44/12$$

EF_i : 紙くずの石油由来成分の焼却に伴う排出係数 (乾燥ベース) [kg-CO₂/t]
 CF_i : 紙くず中の炭素含有率 (乾燥ベース) [%]
 FCF_i : 紙くず中の炭素の石油由来割合 [%]
 OF : 酸化係数 [%]

○ 炭素含有率

廃油の炭素含有率は、環境庁 (1992) に示される係数 0.8 [t-C/t] より、80%とする (排出ベース)。

廃プラスチック類の炭素含有率は、同報告書に示される係数 0.7 [t-C/t] より、70%とする (排出ベース)。

産業廃棄物の紙くずの炭素含有率は、一般廃棄物の焼却と同様に 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (46%) を適用する。

表 7-43 産業廃棄物中の廃油及び廃プラスチック類の炭素含有率

項目	炭素含有率	備考	出典
廃油	80%	排出ベース	環境庁 (1992)
廃プラスチック類	70%	排出ベース	環境庁 (1992)
紙くず	46%	乾燥ベース	2006年 IPCC ガイドライン

○ 紙くず中の炭素の石油由来割合

産業廃棄物中の紙くず中の炭素の石油由来割合は、一般廃棄物と同様に 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (1%) を用いる。

○ 酸化係数

2006年 IPCC ガイドラインに示されるデフォルト値の 100%を採用する。

○ 排出係数

以上の計算より得られた排出係数を表 7-44 に記す。

表 7-44 産業廃棄物中の廃油、廃プラスチック類及び紙くずの石油由来成分の排出係数

項目	単位	排出係数
廃油	kg-CO ₂ /t (wet)	2,933
廃プラスチック類	kg-CO ₂ /t (wet)	2,567
紙くず	kg-CO ₂ /t (dry)	17

■ 活動量

産業廃棄物の廃油、廃プラスチック類及び紙くずの焼却に伴う CO₂ 排出の活動量は、「循環

利用量調査報告書」及び同調査データに示された当該区分の焼却量を用いる。この統計では、当該焼却量について特別管理産業廃棄物を包含して報告しているため、重複計上を防ぐ目的で特別管理産業廃棄物の焼却（次節参照）の計上分を差し引いている。活動量推計の詳細は以下の通り。

$$A_{oil} = IW_{oil} \times (1 - F_{bio}) - SIW_{oil}$$

- A_{oil} : 石油由来の廃油の活動量（排出ベース） [t (wet)]
- IW_{oil} : 産業廃棄物廃油焼却量（排出ベース） [t (wet)]
- SIW_{oil} : 特別管理産業廃棄物の廃油焼却量（排出ベース）¹⁾ [t (wet)]
- F_{bio} : 動植物性廃油割合²⁾ [%]

(注)

- 1) 特別管理産業廃棄物の廃油は全量が石油由来の廃油とする。
- 2) 環境省調査より

表 7-45 動植物性廃油割合

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
動植物性廃油割合	%	2.6	3.5	4.5	5.4	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0

$$A_{plastics} = (IW_{plastics} - SIW_{inf.plastics}) \times FPF_{iw}$$

- $A_{plastics}$: 廃プラスチック類焼却の活動量（排出ベース） [t (wet)]
- $IW_{plastics}$: 産業廃棄物廃プラスチック類焼却量（排出ベース） [t (wet)]
- $SIW_{inf.plastics}$: 特別管理産業廃棄物廃プラスチック類焼却量（排出ベース） [t (wet)]
- FPF_{iw} : 産業廃棄物廃プラスチック類の石油由来割合 [%]

(注) 産業廃棄物廃プラスチックの石油由来割合は、「7.4.1.1. 一般廃棄物 (5.C.1.-) b) 1) CO₂」の活動量と同様に求める（表 7-34）。なお、産業廃棄物廃プラスチックでは、一般廃棄物と異なりペットボトルは含まないものとする。

$$A_{paper} = \{IW_{paper} - (SIW_{inf.} - SIW_{inf.plastics})\} \times (1 - u_{paper})$$

- A_{paper} : 紙くず焼却の活動量（乾燥ベース） [t (dry)]
- IW_{paper} : 産業廃棄物紙くず焼却量（排出ベース） [t (wet)]
- $SIW_{inf.}$: 特別管理産業廃棄物感染性廃棄物の焼却量（排出ベース） [t (wet)]
- $SIW_{inf.plastics}$: 特別管理産業廃棄物廃プラスチック類焼却量（排出ベース） [t (wet)]
- u_{paper} : 産業廃棄物紙くずの含水率 [%]

(注) 産業廃棄物紙くずの含水率は「固形廃棄物の処分 (5.A.)」と同様に 15%とする（表 7-10 参照）。

推計した活動量の詳細は表 7-48 を参照のこと。

■ エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物の割合（種類別）

エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物の割合とは、施設外に電気もしくは熱を供給する産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物の種類ごとの割合であり、環境省 環境再生・資源循環局「産業廃棄物処理施設状況調査」より把握する。

我が国の場合、産業廃棄物焼却施設は主に民間の廃棄物処理業者によって設置されており、主に自治体が設置する一般廃棄物焼却施設と比べて、エネルギー回収（発電・熱利用）は普及途上にあるため、本割合は産業廃棄物の方が小さくなっている。

表 7-46 エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物の割合

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
廃油 ¹⁾	%	0.6	0.7	0.6	2.5	2.1	4.1	4.1	2.3	4.0	4.2	4.8	4.4	3.1	3.1
廃プラスチック類	%	1.4	1.4	4.1	6.6	9.2	13.3	17.8	17.5	13.3	16.7	19.2	18.4	17.6	17.6
木くず ²⁾	%	0.2	0.8	1.1	1.5	4.8	5.9	15.7	13.1	8.5	10.5	10.2	9.7	8.5	8.5
汚泥 ³⁾	%	0.9	0.8	1.0	1.1	2.1	2.2	3.0	3.4	8.3	12.5	12.2	12.0	10.6	10.6
その他 ⁴⁾	%	0.2	0.8	1.1	1.5	2.5	1.5	2.2	1.8	1.9	2.6	4.2	5.0	3.3	3.3

(注)

- 1) 「石油由来の廃油」及び「動植物性廃油」に適用する。
- 2) 「紙くず」及び「木くず」に適用する。
- 3) 「下水汚泥」には適用しない。
- 4) 「天然繊維くず」及び「動植物性残渣・動物の死体」に適用する。

2) CH₄

■ 算定方法

産業廃棄物の焼却に伴い排出される CH₄ は、ごみ種類別の廃棄物焼却量に日本独自の排出係数を乗じ、更にエネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物の割合を用いて排出量を算定する。

$$E = \sum_j \{EF_j \times A_j \times (1 - R_j)\}$$

- E : 産業廃棄物の焼却に伴う CH₄ 排出量 [kg-CH₄]
 EF_j : 産業廃棄物 j の排出係数 (排出ベース) [kg-CH₄/t]
 A_j : 産業廃棄物 j の焼却量 (排出ベース) [t]
 R_j : エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物 j の割合

■ 排出係数

廃棄物の種類別の排出係数については、専門家判断により、焼却炉のダイオキシン類対策を考慮して 2001 年度以前 (環境省、2006b) と 2002 年度以降 (環境省、2010) で異なる値を用いる。これら排出係数は実測調査により設定されており、また、大気中 CH₄ 濃度による排出係数の補正は行っていない。「天然繊維くず」「動植物性残さ・動物の死体」の排出係数は環境省 (2006b) 及び環境省 (2010) にある「紙くず又は木くず」の値を代用している。

表 7-47 産業廃棄物の種類別の CH₄ 排出係数

項目	単位	1990-2001 年度	2002 年度以降
廃油 (石油由来及び動植物性)	g-CH ₄ /t	4.8	4.0
廃プラスチック類	g-CH ₄ /t	30	8.0
紙くず	g-CH ₄ /t	22	225
木くず	g-CH ₄ /t	22	225
天然繊維くず	g-CH ₄ /t	22	225
動植物性残さ・動物の死体	g-CH ₄ /t	22	225
下水汚泥	g-CH ₄ /t	14	1.5
下水汚泥以外の汚泥	g-CH ₄ /t	14	1.5

(出典) 環境庁 (2000)、環境省 (2006b)、環境省 (2010)、石川県他 (1991-1999)、大気環境学会 (1996)

■ 活動量

産業廃棄物の焼却に伴う CH₄ 排出の活動量については、廃棄物の種類ごとの焼却量 (排出ベース) を用いた。

○ 紙くず、木くず、天然繊維くず、動植物性残渣・動物の死体

「循環利用量調査報告書」及び同調査データに示された種類ごとの焼却量を用いる。動植物性残渣・動物の死体は文献中にある「動植物性残渣」及び「動物の死体」の焼却量の合計値である。

○ 汚泥

「循環利用量調査報告書」及び同調査データに示された「その他有機性汚泥焼却量」及び国土交通省調査の「下水汚泥焼却量」の合計値を活動量とする。

○ 廃油、廃プラスチック類

「循環利用量調査報告書」及び同調査データに示された当該区分の焼却量を用いる。この統計では当該焼却量について特別管理産業廃棄物を包含して報告しているため、重複計上を防ぐ目的で特別管理産業廃棄物の焼却(5.C.1.)の計上分を差し引いている。廃油についてはCO₂排出量の活動量と異なり、石油由来の廃油に加え動植物性廃油も算定対象に含める。また、廃プラスチック類の活動量にはバイオマスプラスチックを含めている。

表 7-48 産業廃棄物の種類別焼却量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
石油由来の廃油	kt / 年 (wet)	1,258	1,498	1,646	1,493	1,104	1,467	1,410	1,546	1,297	1,420	1,191	1,375	1,301	1,219
動植物性廃油	kt / 年 (wet)	40	69	103	115	113	121	110	117	103	115	100	113	103	96
廃プラスチック類(石油由来)	kt / 年 (wet)	842	1,794	1,780	1,808	1,490	1,701	1,509	1,629	1,775	1,588	1,822	1,774	1,836	1,783
バイオマスプラスチック	kt / 年 (wet)	NO	NO	NO	0.1	0.1	2.1	2.3	2.9	3.4	3.1	3.8	3.1	3.5	3.2
紙くず	kt / 年 (wet)	335	712	718	323	299	292	225	349	152	130	114	109	116	114
木くず	kt / 年 (wet)	2,679	4,744	3,114	1,865	1,283	1,101	1,135	1,181	1,388	1,137	1,120	1,062	1,263	1,284
天然繊維くず	kt / 年 (wet)	31	49	50	43	26	24	26	24	35	39	27	36	29	29
動植物性残渣・動物の死体	kt / 年 (wet)	77	125	272	167	181	190	184	153	151	153	168	154	133	130
下水汚泥	kt / 年 (wet)	3,060	3,827	4,300	4,988	4,731	4,694	4,734	4,817	4,934	4,753	4,550	4,452	4,684	4,709
下水汚泥以外の汚泥	kt / 年 (wet)	1,972	2,023	2,071	2,288	2,106	2,010	2,020	1,713	1,954	2,021	1,880	1,884	2,003	1,931

3) N₂O

■ 算定方法

当該排出源から排出されるN₂Oについては、主要な排出源である下水汚泥とそれ以外に分けて排出量を算定する。下水汚泥については、凝集剤別・炉種別に排出係数をそれぞれ設定し、高分子系凝集剤・流動床炉については、さらに燃焼温度別に排出係数を設定して排出量を算定する。下水汚泥以外の産業廃棄物については、焼却量に日本独自の排出係数を乗じ排出量を算定する。算定した排出量についてエネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物の割合を用いて廃棄物分野で報告する排出量を算定する。

$$E = \sum \{EF_j \times A_j \times (1 - R_j)\}$$

- E : 産業廃棄物の焼却に伴うN₂O排出量 [kg-N₂O]
- EF_j : 産業廃棄物jの排出係数(排出ベース) [kg-N₂O/t]
- A_j : 産業廃棄物jの焼却量(排出ベース) [t]
- R_j : エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物jの割合

■ 排出係数

○ 下水汚泥

下水汚泥の焼却のN₂O排出係数は、国土交通省による実測調査が行われた各焼却施設のN₂O排出係数を当該施設の下水汚泥焼却量で加重平均して排出係数を算定する。下水汚泥凝集剤の種類、焼却炉の種類、炉内温度別によって排出係数は異なることから、表 7-49 に示す区分ごとの排出係数を設定する(環境省、2006b)。

表 7-49 下水汚泥の焼却における N₂O 排出係数 (排出ベース)

凝集剤の種類	炉の形式	焼却温度	排出係数 ¹⁾ [g-N ₂ O/t]
高分子凝集剤	流動床炉	通常燃焼 (燃焼温度約 800 度)	1,508
高分子凝集剤	流動床炉 ²⁾	高温燃焼 (燃焼温度約 850 度)	645
高分子凝集剤	多段炉	—	882
その他	—	—	
石灰系	—	—	294
—	多段吹込燃焼式流動床炉 二段燃焼式循環流動床炉 ストーカー炉	高温燃焼 (燃焼温度約 850 度)	263
—	炭化固形燃料化炉	—	31.2

(出典) 環境省 (2013b)、兵庫県 (1994)、神奈川県 (1994)、国土技術政策総合研究所 (2001)、国土技術政策総合研究所 (2002)、中村他 (1998)、松原他 (1994)、竹石他 (1994)、竹石他 (1996)

(注)

- 1) 排出係数は各年度で同じ値とする。
- 2) 多段吹込燃焼式流動床炉、二段燃焼式循環流動床炉を除く。

○ 下水汚泥以外

廃棄物の種類別の排出係数について、専門家判断により、焼却炉のダイオキシン類対策を考慮して 2001 年度以前 (環境省、2006b) と 2002 年度以降 (環境省、2010) で異なる値を用いる。これら排出係数は実測調査により設定されており、また、大気中 N₂O 濃度による排出係数の補正は行っていない。「天然繊維くず」「食物くず」の排出係数は環境省 (2006b) 及び環境省 (2010) にある「紙くず又は木くず」の値を代用する。

表 7-50 産業廃棄物の種類別の N₂O 排出係数 (排出ベース)

項目	単位	1990-2001 年度	2002 年度以降
廃油 (石油由来及び動植物性)	g-N ₂ O / t	12	62
廃プラスチック類	g-N ₂ O / t	180	15
紙くず	g-N ₂ O / t	21	77
木くず	g-N ₂ O / t	21	77
天然繊維くず	g-N ₂ O / t	21	77
動植物性残さ・動物の死体	g-N ₂ O / t	21	77
汚泥 (下水汚泥を除く)	g-N ₂ O / t	457	99

(出典) 環境省 (2000)、環境省 (2010)、石川県他 (1991-1997)、大気環境学会 (1996)、中村他 (1998)、松原他 (1994)、鈴木他 (2001)、竹石他 (1994)、竹石他 (1996)、上野他 (1995)、安田他 (1994)

■ 活動量

○ 下水汚泥

国土交通省調査の「凝集剤別・炉種別・燃焼温度別の下水汚泥焼却量」を活動量 (排出ベース) とする。

表 7-51 下水汚泥の焼却量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
高分子・流動床・通常	kt / 年 (wet)	1,112	1,869	2,397	2,839	1,664	1,535	1,532	1,552	1,549	1,318	1,695	1,218	1,531	1,551
高分子・流動床・高温	kt / 年 (wet)	128	219	723	1,469	2,508	2,581	2,587	2,641	2,644	2,644	2,283	2,665	2,503	2,522
高分子・多段炉	kt / 年 (wet)	560	656	572	102	64	61	52	43	40	NO	NO	NO	NO	NO
石灰系	kt / 年 (wet)	1,010	663	272	289	142	109	83	74	22	1	1	1	1	1
その他	kt / 年 (wet)	55	161	175	8	1	1	3	0.5	12	70	27	27	27	27
多段吹込燃焼式流動床炉 二段燃焼式循環流動床炉 ストーカー炉	kt / 年 (wet)	195	259	161	280	282	338	439	444	565	604	411	412	465	431
炭化固形燃料化炉	kt / 年 (wet)	NO	NO	NO	NO	71	70	39	63	103	116	133	128	156	177

○ 下水汚泥以外の産業廃棄物

産業廃棄物からの CH₄ 排出と同様に活動量（排出ベース）を把握する。但し汚泥（下水汚泥を除く）については、「その他有機性汚泥焼却量」を活動量とする。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

CO₂ 排出係数については、石油由来廃棄物の炭素含有率データから計算される 95%信頼区間より不確実性を算定する。CH₄ 及び N₂O 排出係数については、排出係数算定に用いられた実測データから計算される 95%信頼区間より不確実性を算定する。活動量の不確実性については、表 7-2 に基づき産業廃棄物データの不確実性を適用する。不確実性評価の詳細は表 7-52 に記す。

表 7-52 産業廃棄物のエネルギー回収を伴わない焼却（5.C.1.-）における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
廃油	CO ₂	-2%	+2%	-30%	+30%	-30%	+30%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により一般廃棄物のプラスチックの不確実性を代用。 排出係数の不確実性は環境省（2010）より引用。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	CH ₄	-100%	+181%	-30%	+30%	-104%	+184%			
	N ₂ O	-76%	+76%	-30%	+30%	-81%	+81%			
廃プラスチック類	CO ₂	-2%	+2%	-30%	+30%	-30%	+30%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により一般廃棄物のプラスチックの不確実性を代用。 排出係数出典の環境省（2010）より引用。		誤差伝播式で合成
	CH ₄	-100%	+216%	-30%	+30%	-104%	+218%			
	N ₂ O	-44%	+44%	-30%	+30%	-53%	+53%			
紙くず	CO ₂	-100%	+400%	-30%	+30%	-104%	+401%	炭素含有率実測データの 95%信頼区間、化石由来炭素割合（2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値）の値域から求めた不確実性を合成。		誤差伝播式で合成
紙くず又は木くず	CH ₄	-100%	+412%	-30%	+30%	-104%	+413%	排出係数出典の環境省（2010）より引用。		誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-64%	+64%	-30%	+30%	-71%	+71%			
汚泥	CH ₄	-100%	+201%	-30%	+30%	-104%	+203%			誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-84%	+84%	-30%	+30%	-89%	+89%			
天然繊維くず	CH ₄	-100%	+412%	-30%	+30%	-104%	+413%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により紙くず又は木くずの不確実性を代用。		誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-64%	+64%	-30%	+30%	-71%	+71%			
動植物性残渣、動物の死体	CH ₄	-100%	+412%	-30%	+30%	-104%	+413%			誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-64%	+64%	-30%	+30%	-71%	+71%			

■ 時系列の一貫性

算定方法、排出係数、活動量のいずれにおいても時系列の一貫性が確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章を参照。

e) 再計算

バイオマスプラスチック製品データの改訂に伴い、CO₂排出量の再計算を行った。

統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。詳細は「7.1.5. 廃棄物分野における一般的な再計算」を参照のこと。

再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.4.1.3. 特別管理産業廃棄物（5.C.1.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

特別管理産業廃棄物とは産業廃棄物のうち、爆発性、毒性、感染性など人の健康又は生活環境に係る被害を生ずるおそれがある性状を有するものである。算定対象となる廃棄物を表7-53に記す。

表 7-53 特別管理産業廃棄物の焼却での算定対象

項目	主な対象物質
廃油（引火性）	揮発油類、灯油類、軽油類
廃油（特定有害産業廃棄物）	トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、ジクロロメタン、四塩化炭素、1,2-ジクロロエタン、1,1-ジクロロエタン、シス-1,2-ジクロロエチレン、1,1,1-トリクロロエタン、1,1,2-トリクロロエタン、1,3-ジクロロプロペン、チウラム、シマジン、チオベンカルブ、ベンゼン、セレン、1,4-ジオキサン
感染性廃棄物（プラスチック）	プラスチック
感染性廃棄物（プラスチック以外）	ガラス類、繊維類、紙

特別管理産業廃棄物の焼却に伴い排出されるCO₂、CH₄、N₂Oの排出量を廃棄物の種類ごとに算定し、「Non-biogenic, Hazardous waste」、「Non-biogenic, Clinical waste」、「Biogenic, Clinical waste」のカテゴリーで報告する（表7-24を参照）。

なお、特別管理産業廃棄物焼却時のエネルギー回収については、実態を十分に把握できていないことから、特別管理産業廃棄物の焼却に伴う排出量の全量を廃棄物の焼却（カテゴリー5.C.）で報告する。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

特別管理産業廃棄物中の廃油（引火性、特定有害産業廃棄物）及び感染性廃棄物中の廃プラスチック類の焼却に伴い排出されるCO₂について、2006年IPCCガイドラインのデシジョンツリー（Page 5.9, Fig. 5.1）に従い、日本独自の排出係数と焼却量を用いて排出量を算定する。

■ 排出係数

【廃油（引火性）】

産業廃棄物中の廃油の炭素含有率と酸化係数に大きな違いはないと考えられるため、この排出係数を代用する。

【廃油（特定有害産業廃棄物）】

2006年 IPCC ガイドラインの考え方に従い、廃棄物の炭素含有率に焼却施設における酸化係数を乗じて算定する。

$$EF = CF \times OF \times (1 - u) \times 44/12$$

- EF : 廃油（特定有害産業廃棄物）の焼却に伴う排出係数（排出ベース）[kg-CO₂/t]
- CF : 廃油（特定有害産業廃棄物）中の炭素含有率（乾燥ベース）[%]
- OF : 酸化係数 [%]
- u : 廃油（特定有害産業廃棄物）中の含水率 [%]

当該排出源の平均炭素含有率（乾燥重量ベース）を、対象物質（表 7-53）の炭素含有率及び環境省（2010-2011）に基づく対象物質の 2009～2010 年度の廃棄量を用いて加重平均して求める。酸化係数は 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値（1.0）を用いる。当該排出源の含水率は専門家判断により、5%とする。

【感染性廃棄物（プラスチック）】

産業廃棄物中の廃プラスチック類の炭素含有率と酸化係数に大きな違いはないと考えられるため、この排出係数を代用する。

表 7-54 特別管理産業廃棄物中の廃油、感染性廃棄物（プラスチック）の CO₂ 排出係数

項目	単位	排出係数
廃油（引火性）	kg-CO ₂ /t (wet)	2,933
廃油（特定有害産業廃棄物）	kg-CO ₂ /t (wet)	1,024
感染性廃棄物（プラスチック）	kg-CO ₂ /t (wet)	2,567

■ 活動量

2008年以降については「循環利用量調査報告書」及び同調査データに示される特別管理産業廃棄物の焼却量を用いる。同調査データの無い過去の焼却量については、特別管理産業廃棄物の排出が全量焼却されるとの仮定の下、厚生省生活衛生局水道環境部「産業廃棄物行政組織等調査報告書」に掲載された特別管理産業廃棄物の排出量を用いる。

【廃油（引火性）】

「循環利用量調査報告書」及び同調査データに示される特別管理産業廃棄物の廃油の焼却量を用いる。当該焼却量には引火性及び特定有害産業廃棄物の廃油が含まれるため、廃油（引火性）の焼却量は次の式で求める。なお、当該廃油はすべて石油由来の廃油である。

$$A_{flam.oil} = SIW_{oil} - A_{s-hazard.oil}$$

- A_{flam.oil} : 廃油（引火性）の焼却量（排出ベース）[t]
- SIW_{oil} : 特別管理産業廃棄物の廃油の総焼却量（排出ベース）[t]
- A_{s-hazard.oil} : 特定有害産業廃棄物の廃油の焼却量（排出ベース）[t]

【廃油（特定有害産業廃棄物）】

環境省 環境再生・資源循環局「特別管理産業廃棄物に係る温室効果ガス排出量推計調査」に示される特定有害産業廃棄物の廃油の減量化量及び「循環利用量調査報告書」に示される廃油の焼却処理残渣率を用いて、以下の式で求める。

$$A_{s-hazard.oil} = R_{s-hazard.oil} \times (1 + r)$$

- A_{s-hazard.oil} : 特定有害産業廃棄物の廃油の焼却量（排出ベース）[t]

$R_{s-hazard.oil}$: 特定有害産業廃棄物の廃油の減量化量（排出ベース）[t]
r	: 焼却処理残さ率 [%]

【感染性廃棄物（プラスチック）】

「循環利用量調査報告書」及び同調査データに示される感染性廃棄物の焼却量及び、廃棄物学会（1997）に掲載された感染性廃棄物の組成分析結果より求めたプラスチック類組成割合を用いて、以下の式で求める。なお、感染性廃棄物中のプラスチックはすべて石油由来と見なしている。

$$A_{inf.plastics} = ISW_{inf.} \times C_{inf.plastics}$$

$A_{inf.plastics}$: 感染性廃棄物（プラスチック）の焼却量（排出ベース）[t]
$ISW_{inf.}$: 感染性廃棄物の総焼却量（排出ベース）[t]
$C_{inf.plastics}$: 感染性廃棄物のプラスチック類組成割合 [%]

2) CH₄

■ 算定方法

特別管理産業廃棄物中の「廃油」「感染性廃棄物」の焼却に伴い排出される CH₄ は、ごみ種類別廃棄物焼却量（排出ベース）に日本独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

実測結果が得られないことから、いずれも産業廃棄物の焼却に伴う排出係数を代用して、特別管理産業廃棄物種類別の排出係数を設定する。石油由来の廃油（引火性、特定有害産業廃棄物）は産業廃棄物の石油由来の廃油、感染性廃棄物中のプラスチック類は産業廃棄物の廃プラスチック類、感染性廃棄物中のその他（プラスチック以外）は産業廃棄物の紙くず・木くずの排出係数を用いる。

■ 活動量

【感染性廃棄物（プラスチック）】

CO₂ 排出量の算定に用いる活動量と同一の値を用いる。

【廃油（特定有害産業廃棄物）】

CO₂ 排出量の算定に用いる活動量と同一の値を用いる。

【感染性廃棄物（プラスチック）】

CO₂ 排出量の算定に用いる活動量と同一の値を用いる。

【感染性廃棄物（プラスチック以外）】

感染性廃棄物（プラスチック）の焼却量と同様に、以下の式で求める。

$$A_{inf.exc.plastics} = ISW_{inf.} \times (1 - C_{inf.plastics})$$

$A_{inf.exc.plastics}$: 感染性廃棄物（プラスチック以外）の焼却量（排出ベース）[t]
$ISW_{inf.}$: 感染性廃棄物の総焼却量（排出ベース）[t]
$C_{inf.plastics}$: 感染性廃棄物のプラスチック類組成割合 [%]

3) N₂O

■ 算定方法

特別管理産業廃棄物の「廃油」「感染性廃棄物」の焼却に伴い排出される N₂O は、ごみ種類別廃棄物焼却量（排出ベース）に日本独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

実測結果が得られないことから、いずれも産業廃棄物の焼却に伴う排出係数を代用して、特別管理産業廃棄物種類別の排出係数を設定する。廃油（引火性、特定有害産業廃棄物）は産業廃棄物の廃油、感染性廃棄物（プラスチック）は産業廃棄物の廃プラスチック類、感染性廃棄物中のその他（プラスチック以外）は産業廃棄物の紙くず・木くずの排出係数を用いる。

■ 活動量

CH₄ 排出量の算定に用いた活動量と同一の値を用いる。

表 7-55 特別管理産業廃棄物の焼却量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
廃油(引火性)	kt / 年 (wet)	238	353	520	478	629	390	278	267	271	266	236	278	191	164
廃油(特定有害産業廃棄物)	kt / 年 (wet)	18	27	40	37	38	41	43	25	54	122	145	128	124	124
感染性廃棄物(プラスチック)	kt / 年 (wet)	78	128	167	169	143	154	176	131	133	176	166	160	154	153
感染性廃棄物(プラスチック以外)	kt / 年 (wet)	105	172	225	228	99	106	121	90	92	121	114	110	106	106

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

産業廃棄物の焼却に係る不確実性と同様の評価を行う。活動量の不確実性については、表 7-2 に基づき産業廃棄物データの不確実性を適用する。不確実性評価の詳細は表 7-56 に記す。

表 7-56 特別管理産業廃棄物の焼却 (5.C.1.-) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
特別管理産業廃棄物	CO ₂	-2%	+2%	-60%	+60%	-60%	+60%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により産業廃棄物の廃プラスチック類の不確実性を代用。	専門家判断により設定した特別管理産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	CH ₄	-100%	+216%	-60%	+60%	-117%	+224%			
	N ₂ O	-44%	+44%	-60%	+60%	-74%	+74%			

■ 時系列の一貫性

活動量の元データが一部期間でしか入手できない事から、推計により時系列的に一貫した活動量を構築している。排出量算定における時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述している。

e) 再計算

特別管理産業廃棄物焼却量の統計データ更新に伴い、排出量を再計算した。詳細は「7.1.5. 廃棄物分野における一般的な再計算」を参照のこと。再計算の影響の程度については、第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.4.2. 廃棄物の野焼き (5.C.2.)

7.4.2.1. 一般廃棄物 (5.C.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

日本では廃掃法により廃棄物の野焼きは禁止されているため、一般廃棄物の野焼きに伴う排出は「NO」と報告する。

7.4.2.2. 産業廃棄物 (5.C.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは産業廃棄物（木くず、建設混合廃棄物、廃プラスチック、その他／不明）の違法な野焼きに伴い排出される CO₂、CH₄、N₂O の排出量を算定し、「Non-biogenic, Industrial solid waste」のカテゴリーで報告する。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

産業廃棄物の廃プラスチック類の野焼きに伴い排出される CO₂ について、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリーに従い、日本独自の排出係数と焼却量を用いて排出量を算定する。

■ 排出係数

2006 年 IPCC ガイドラインの考え方に従い、産業廃棄物の廃プラスチック類の炭素含有率に野焼きにおける酸化係数を乗じて求める。

$$EF = CF \times OF \times 44/12$$

EF : 産業廃棄物（廃プラスチック類）の焼却に伴う CO₂ 排出係数（排出ベース）[kg-CO₂/t]
CF : 産業廃棄物（廃プラスチック類）中の炭素含有率（排出ベース）[%]
OF : 酸化係数 [%]

表 7-57 廃棄物廃プラスチック類の野焼きに伴う CO₂ 排出係数及び推計用パラメータ

項目	値	出典	備考
<i>EF</i>	1,489 [kg-CO ₂ /t (wet)]	-	国独自の排出係数
<i>CF</i>	70 %	環境庁 (1992)	「7.4.1.2. 産業廃棄物 (5.C.1.-)」を参照のこと
<i>OF</i>	58 %	2006 年 IPCC ガイドライン	デフォルト値

■ 活動量

1996 年度以降については、環境省環境再生・資源循環局「産業廃棄物行政組織等調査報告書」に示される、野外焼却される産業廃棄物廃プラスチック類の量を用いる。1995 年度以前の産業廃棄物の野外焼却量は同報告書から把握できないが、適切な推計方法を想定することが困難なため、1996 年度データを 1990～1995 年度にも代用する。なお、野外焼却される廃プラスチック類はバイオマスプラスチックの含有が不明なため、すべて石油由来と見做している。

表 7-58 石油由来の産業廃棄物の野外焼却量（排出ベース）

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
廃プラスチック類	kt / 年 (wet)	3.4	3.4	0.9	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.02	0.05	0.05	0.05

2) CH₄ 及び N₂O

■ 算定方法

産業廃棄物の野焼きに伴い排出される CH₄ 及び N₂O について、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリーに従い、IPCC デフォルト排出係数と日本独自の焼却量を用いて排出量を算定する。

■ 排出係数

我が国独自の知見が無いことから、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いる。

表 7-59 産業廃棄物の野焼きに伴う CH₄・N₂O 排出係数

ガス種類	排出係数	単位	出典
CH ₄	6.5	kg-CH ₄ /t (wet)	2006 年 IPCC ガイドライン
N ₂ O	0.15	kg-N ₂ O/t (dry)	2006 年 IPCC ガイドライン

■ 活動量

CH₄ 排出量推計の活動量は、環境省環境再生・資源循環局「産業廃棄物行政組織等調査報告書」に記載される野外焼却されるすべての産業廃棄物を合計した焼却量（排出ベース）を用いる。N₂O 排出量推計の活動量については、上述の焼却量（排出ベース）を廃棄物種類別の含水率を用いて乾燥ベースに換算する。適用する IPCC デフォルト排出係数との整合性を考慮し、含水率には 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を適用する（木くず：15%、廃プラスチック類：0%、建設混合廃棄物：0%、その他／不明：10%）。1995 年度以前の産業廃棄物の野外焼却量は同報告書から把握できないが、適切な推計方法を想定することが困難なため、1996 年度データを 1990～1995 年度にも代用する。

表 7-60 産業廃棄物の野外焼却量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
総重量（排出ベース）	kt / 年 (wet)	72.2	72.2	28.9	3.5	1.7	1.3	1.2	0.9	1.3	0.6	1.0	0.5	0.5	0.5
総重量（乾燥ベース）	kt / 年 (dry)	62.4	62.4	25.5	3.1	1.5	1.1	1.0	0.8	1.2	0.5	0.8	0.5	0.5	0.5

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

不確実性評価の詳細を表 7-61 に記す。

表 7-61 廃棄物の野焼き（5.C.2.）における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法	
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)				
産業廃棄物	CO ₂	-2%	+2%	-30%	+30%	-30%	+30%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により産業廃棄物の廃プラスチック類の不確実性を代用。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成	
		CH ₄	-100%	+100%	-30%	+30%	-104%				+104%
		N ₂ O	-100%	+100%	-30%	+30%	-104%				+104%

■ 時系列の一貫性

調査に基づく活動量データが 1996 年度以降しか入手できないことから、推計により時系列的に一貫した活動量を構築している。排出量算定における時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章に詳述している。

e) 再計算

統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.4.3. 廃棄物の焼却等（エネルギー分野での報告）（1.A.）

7.4.3.1. 廃棄物が焼却される際にエネルギーが回収される場合（1.A.）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、一般廃棄物及び産業廃棄物が焼却される際にエネルギーが回収される場合の CO₂、CH₄、N₂O 排出量の算定・報告を行う。排出量の報告カテゴリーは「その他部門（カテゴリー1.A.4.）」とし、燃料種を表 7-25 に従い「Other fossil fuels」あるいは「Biomass」とする。

b) 方法論

「7.4.1.1. 一般廃棄物（5.C.1.-）」及び「7.4.1.2. 産業廃棄物（5.C.1.-）」と同様の方法論を用いる。排出量算定式は以下のとおり設定する。

1) CO₂

■ 算定方法

○ 一般廃棄物

$$E = EF \times A \times R$$

E : 各廃棄物の焼却に伴う CO₂ 排出量 [kg-CO₂]

EF : 各廃棄物の焼却に伴う排出係数(乾燥ベース) [kg-CO₂/t]

A : 各廃棄物中の焼却量(乾燥ベース) [t]

R : エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合

○ 産業廃棄物

$$E = EF \times A \times R$$

E : 各廃棄物の焼却に伴う CO₂ 排出量 [kg-CO₂]

EF : 各廃棄物の焼却に伴う排出係数(排出ベース) [kg-CO₂/t]

A : 各廃棄物中の焼却量(排出ベース) [t]

R : エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物の割合(種類別)

2) CH₄ 及び N₂O

■ 算定方法

○ 一般廃棄物

$$E = \sum_i (EF_i \times A_i) \times R$$

- E : 一般廃棄物の焼却に伴う CH₄ または N₂O 排出量 [kg-CH₄]、[kg-N₂O]
 EF_i : 一般廃棄物の焼却方式 i の排出係数(排出ベース) [kg-CH₄/t]、[kg-N₂O/t]
 A_i : 一般廃棄物の焼却方式 i の焼却量(排出ベース) [t]
 R : エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合

○ 産業廃棄物

$$E = \sum_j (EF_j \times A_j \times R_j)$$

- E : 産業廃棄物の焼却に伴う CH₄ または N₂O 排出量 [kg-CH₄]、[kg N₂O]
 EF_j : 産業廃棄物 j の排出係数(排出ベース) [kg-CH₄/t]、[kg N₂O/t]
 A_j : 産業廃棄物 j の焼却量(排出ベース) [t]
 R_j : エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物 j の割合

■ 熱量に換算した活動量(参考値)

CRF で報告する熱量に換算した活動量は、以下の式で計算する。

○ 一般廃棄物

$$A_E = A \times GCV \times R / 10^6$$

- A_E : 一般廃棄物の熱量に換算した活動量 [TJ]
 A : 一般廃棄物の総焼却量 [kg (wet)]
 GCV : 一般廃棄物の発熱量 [MJ/kg]
 R : エネルギー回収を行う一般廃棄物焼却施設で焼却される一般廃棄物の割合
 一般廃棄物の発熱量は、自治体での測定事例を参考に 9.9 [MJ/kg] を用いる。

○ 産業廃棄物

$$A_E = \sum_j A_j \times GCV_j \times R / 10^6$$

- A_E : 産業廃棄物の熱量に換算した活動量 [TJ]
 A_j : 産業廃棄物 j の焼却量 [kg (wet)]
 GCV_j : 産業廃棄物 j の発熱量 [MJ/kg]
 R : エネルギー回収を行う産業廃棄物焼却施設で焼却される産業廃棄物 j の割合

産業廃棄物の発熱量は表 7-66 の値を用いる(後述)。

c) 不確実性と時系列の一貫性

「7.4.1.1. 一般廃棄物(5.C.1.-)」及び「7.4.1.2. 産業廃棄物(5.C.1.-)」と同様である。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述

している。

e) 再計算

廃棄物の焼却と同じ理由で再計算を行った。詳細は「7.4.1.1. 一般廃棄物 (5.C.1.-)」及び「7.4.1.2. 産業廃棄物 (5.C.1.-)」節を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.4.3.2. 廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、廃棄物が燃料として直接利用される場合の CO₂、CH₄、N₂O 排出量の算定・報告を行う。排出量の報告カテゴリーは、廃棄物ごとに、原燃料としての利用用途に応じて、表 7-26 のように「エネルギー産業 (1.A.1.)」、「製造業及び建設業 (1.A.2.)」もしくは「その他部門 (1.A.4.)」とする。報告する際の燃料種は表 7-25 に従い「Other fossil fuels」あるいは「Biomass」とする。

なお、プラスチックの高炉還元剤利用やコークス炉化学原料利用のように、廃棄物を原料として直接利用する過程もしくは廃棄物を原料として製造した中間製品を利用する際に温室効果ガスが排出される場合は、本カテゴリーにおいて排出量を算定する。これらの原料利用と燃料利用を合わせて、本章では「原燃料利用」と表記する。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

原燃料として利用された各廃棄物の量に日本独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。算定対象は一般廃棄物のプラスチック、産業廃棄物の廃プラスチック類及び石油由来の廃油、廃タイヤの原燃料利用分である。

■ 排出係数

一般廃棄物プラスチックのコークス炉化学原料利用、廃タイヤの排出係数を本カテゴリー独自に設定する。残りの排出源については、「7.4.1. 廃棄物の焼却 (エネルギー回収を伴わない) (5.C.1.)」で用いた排出係数をそのまま利用する。

表 7-62 本カテゴリーで独自に設定する CO₂ 排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
一般廃棄物-コークス炉	kg-CO ₂ /t(dry)	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434	1,434
廃タイヤ	kg-CO ₂ /t(dry)	1,867	1,794	1,799	1,746	1,738	1,759	1,744	1,743	1,744	1,736	1,698	1,677	1,673	1,661

■ 活動量

原燃料として利用された廃棄物量の把握方法の詳細は7.4.3.2.a~7.4.3.2.cの各節を参照のこと。

表 7-63 廃棄物の原燃料利用量（排出ベース）

算定対象	燃料利用の内訳	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018			
一般廃棄物	プラスチック	油化	kt (wet)	NO	NO	3	7	7	1	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO			
		高炉還元剤	kt (wet)	NO	NO	25	37	28	27	26	26	30	27	31	29	28	29		
		コークス炉化学原料	kt (wet)	NO	NO	11	175	150	177	169	171	NO	17	29	25	32	18		
		ガス化	kt (wet)	NO	NO	1	59	45	53	51	62	58	51	55	55	57	46		
産業廃棄物	廃油	(区分無し)	kt (wet)	1,243	1,461	1,452	1,848	1,620	1,701	1,686	1,764	1,707	1,633	1,786	1,664	1,664	1,596		
		プラスチック類	高炉還元剤	kt (wet)	NO	NO	57	160	97	134	114	134	107	149	144	156	168	131	
			化学産業	kt (wet)	5	4	5	2	1	1	1	1	1	0.4	0.4	0.2	3.0	3.5	
			製紙業	kt (wet)	NO	NO	3	3	17	18	16	15	14	18	16	17	18	18	
			セメント焼成	kt (wet)	NO	9	102	302	457	445	469	479	518	595	576	623	643	718	
			自動車製造業	kt (wet)	16	10	8	4	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
			油化	kt (wet)	NO	NO	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0.1	NO	1	
			ガス化	kt (wet)	NO	NO	NO	11	92	117	78	79	97	90	81	79	91	97	
			木くず	(区分無し)	kt (wet)	1,635	1,635	2,061	2,683	3,918	3,900	4,065	4,151	4,425	4,878	4,628	4,555	4,832	4,906
			廃タイヤ	セメント焼成	kt (wet)	111	275	361	181	112	95	77	66	62	53	59	63	70	64
ボイラー	kt (wet)	119		126	75	12	9	8	6	6	6	2	2	5	3	3			
製鉄	kt (wet)	NO		NO	57	51	28	30	31	30	27	27	20	19	17	14			
ガス化	kt (wet)	NO		NO	NO	27	48	49	45	45	44	50	49	51	58	61			
金属精錬	kt (wet)	67		37	30	10	1	1	1	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO			
タイヤメーカー	kt (wet)	NO		32	39	24	18	23	20	27	27	22	23	23	21	20			
製紙	kt (wet)	NO		26	42	210	349	388	377	363	372	415	439	407	436	446			
発電	kt (wet)	NO		NO	7	9	11	9	32	37	40	46	51	58	47	66			
ごみ固形燃料(RDF)	(区分無し)	kt (wet)	34	39	148	415	376	380	389	384	386	388	361	360	359	362			
ごみ固形燃料(RPF)	石油製品業	kt (wet)	NO	NO	0.4	5	3	4	3	4	3	4	4	3	4	0.2			
	化学工業	kt (wet)	NO	NO	7	15	25	22	26	27	26	20	22	19	18	17			
	製紙業	kt (wet)	NO	8	25	465	753	747	783	820	869	852	872	948	960	970			
セメント製造業	kt (wet)	NO	NO	0.2	8	21	15	16	14	16	17	14	11	13	15				

(注)

- CO₂ 排出量の算定に用いる活動量には、生物起源（バイオマスプラスチック、動植物性廃油、木くず）の利用量は含めない。
- CO₂ 排出量の算定に用いる活動量は、産業廃棄物の廃油及び廃プラスチック類を除き、含水率を用いて乾燥ベース重量に換算する。
- 廃油には「使用済み潤滑油」及び「使用済み溶剤」を含む。

2) CH₄、N₂O

■ 算定方法

原燃料として利用された各廃棄物の量に我が国独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

廃棄物の原燃料利用の排出係数は、該当するエネルギー分野の CH₄ 及び N₂O 排出係数に、廃棄物別の発熱量を乗じて重量ベースの排出係数に換算して設定する。利用したデータは表 7-64 の通りである。

$$EF_i = EF_{E,i} \times GCV_i / 1000$$

- EF_i : 廃棄物 i の排出係数 [kg-CH₄ / t (wet)], [kg-N₂O / t (wet)]
- EF_{E,i} : 廃棄物 i の熱量ベースの排出係数 [kg-CH₄ / TJ], [kg-N₂O / TJ]
- GCV_i : 廃棄物 i の高位発熱量 [MJ/kg]

表 7-64 廃棄物の原燃料利用に伴う CH₄ 及び N₂O 排出係数の設定に用いるデータ一覧

算定対象	燃料利用の内訳	エネルギー分野の排出係数		発熱量		
		CH ₄	N ₂ O			
一般廃棄物	プラスチック	油化	ボイラー (A 重油、軽油、灯油、ナフサ、その他液体燃料)		廃プラスチック類発熱量	
		高炉還元剤	NA		NA	
		コークス炉化学原料	NA		NA	
		ガス化	NA		NA	
産業廃棄物	廃油	(区分無し)	ボイラー (A 重油、軽油、灯油、ナフサ、その他液体燃料)		再生油発熱量 / 廃油比重 ¹⁾	
		高炉還元剤	NA		NA	
	廃プラスチック類	化学工業	ボイラー (一般炭、コークス、その他固体燃料)	常圧流動床ボイラー (固体燃料)		廃プラスチック類発熱量
		製紙業				
		自動車製造業				
		セメント焼成	その他の工業炉 (固体燃料)			
		油化	ボイラー (A 重油、軽油、灯油、ナフサ、その他液体燃料)			
	ガス化	NA		NA		
木くず	(区分無し)	ボイラー (木材、木炭)	ボイラー (流動床炉以外) (固体燃料)		木材の発熱量 ²⁾	
廃タイヤ	製鉄	NA		NA		
	セメント焼成	その他の工業炉 (固体燃料)		廃タイヤ発熱量		
	ガス化	その他工業炉 (気体燃料) 及びその他の工業炉 (液体燃料) ³⁾				
	金属精錬 (乾留用)	ボイラー (気体燃料)				
	ボイラー					
	タイヤメーカー	ボイラー (一般炭、コークス、その他固体燃料)、	ボイラー (流動床炉以外) (固体燃料)			
	製紙					
発電						
ごみ固形燃料 (RDF)	(区分無し)	ボイラー (一般炭、コークス、その他固体燃料)	ボイラー (流動床炉以外) (固体燃料)		RDF 発熱量	
ごみ固形燃料 (RPF)	石油製品業	ボイラー (一般炭、コークス、その他固体燃料)	ボイラー (流動床炉以外) (固体燃料)		RPF 発熱量 ⁴⁾	
	化学工業					
	製紙業					
	セメント製造業	その他の工業炉 (固体燃料)				

(注)

- 1) 廃棄物学会 (1997) より把握した廃油比重(0.9 kg/l)で除して体積あたりの発熱量を設定。
- 2) 環境庁 (1995) より。
- 3) 廃タイヤのガス化に伴い回収される物質割合 (兵庫県、2003) におけるガス、油の割合 (0.22、0.43) を用いて加重平均を行う。
- 4) 日本 RPF 工業会 (2004) による石炭相当品 RPF とコークス相当品 RPF の発熱量を製造量割合で加重平均。

表 7-65 エネルギー分野において適用されている排出係数

炉種・燃料種	CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ /TJ]	N ₂ O 排出係数 [kg-N ₂ O/TJ]
ボイラー (A 重油、軽油、灯油、ナフサ、その他液体燃料)	0.26	0.19
ボイラー (気体燃料)	0.23	0.17
ボイラー (一般炭、コークス、その他固体燃料)	0.13	-
ボイラー (木材、木炭)	74.9	-
ボイラー (流動床炉以外) (固体燃料)	-	0.85
常圧流動床ボイラー (固体燃料)	-	54.39
その他の工業炉 (液体燃料)	0.83	1.8
その他の工業炉 (固体燃料)	13.1	1.1
その他の工業炉 (気体燃料)	2.3	1.2

(出典) 環境省 (2006a)

表 7-66 廃棄物の焼却及び原燃料利用に伴う発熱量

項目	単位	発熱量	発熱量の出典	
廃油（再生油を含む）	TJ/l	40.2	資源・エネルギー庁「総合エネルギー統計」； 0.9 [kg/L]（廃棄物学会、1997）として計算	
廃プラスチック類	MJ/kg	29.3	資源・エネルギー庁「総合エネルギー統計」	
紙くず	MJ/kg	15.1	廃棄物学会（1997）（乾燥ベース）； 含水率を基に排出ベースに換算する	
木くず（木材を含む）	MJ/kg	14.4	資源・エネルギー庁「総合エネルギー統計」	
繊維くず	MJ/kg	17.9	廃棄物学会（1997）（乾燥ベース）； 含水率を基に排出ベースに換算する	
食物くず	MJ/kg	4.4	廃棄物学会（1997）（乾燥ベース）； 含水率を基に排出ベースに換算する	
汚泥（下水汚泥を含む）	MJ/kg	4.7	資源・エネルギー庁「総合エネルギー統計」（乾燥ベース）； 含水率を基に排出ベースに換算する	
廃タイヤ	2004年度以前	MJ/kg	20.9	資源・エネルギー庁「総合エネルギー統計」
	2005年度以降	MJ/kg	33.2	資源・エネルギー庁「総合エネルギー統計」
ごみ固形燃料（RDF）	MJ/kg	18.0	資源・エネルギー庁「総合エネルギー統計」	
ごみ固形燃料（RPF）	MJ/kg	29.3	資源・エネルギー庁「総合エネルギー統計」	

■ 活動量

○ 原燃料利用量

活動量はいずれも排出ベースで把握する（表 7-63）。把握方法の詳細は各節参照。

○ 熱量に換算した活動量（参考値）

CRF で報告する熱量に換算した活動量は以下の式で計算する。

$$A_{E,i} = N_i \times GCV_i / 10^6$$

- $A_{E,i}$: 熱量に換算した廃棄物 i の活動量 [TJ]
- N_i : 廃棄物 i の原燃料利用量 [kg (wet)]
- GCV_i : 廃棄物 i の高位発熱量 [MJ/kg]

c) 不確実性と時系列の一貫性

各節にて詳述する。

d) QA/QC と検証

各節にて詳述する。

e) 再計算

各節にて詳述する。

f) 今後の改善計画及び課題

各節にて詳述する。

7.4.3.2.a. 一般廃棄物（プラスチック）の原燃料利用に伴う焼却（1.A.1 及び 1.A.2）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、一般廃棄物（プラスチック）の原燃料利用に伴う排出を報告する。容器包装リサイクル法（以下、容リ法）に基づき回収された一般廃棄物のプラスチックは原燃料利用のため処理（油化、高炉還元剤化、コークス炉化学原料化、ガス化）される。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

一般廃棄物の石油由来プラスチックの利用用途別（油化、高炉還元剤、コークス炉化学原料、ガス化）の原燃料利用量に、それぞれ日本独自の排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

一般廃棄物プラスチックの油化・高炉還元剤・ガス化利用の排出係数は、「7.4.1.1. 一般廃棄物（5.C.1.-）」と同じ値を利用する。プラスチックのコークス炉化学原料利用の排出係数には、一般廃棄物（プラスチック）の焼却に伴う排出係数から、プラスチック中炭素の炭化水素油への炭素ベース移行割合（47.9%）を控除し、化学原料として製品利用され、大気中へのCO₂排出を伴わない炭化水素油分を除いた排出係数を設定する。

$$EF_{coke} = EF_{plastics} \times (1 - M)$$

EF_{coke}	: プラスチックのコークス炉化学原料利用に伴う CO ₂ 排出係数（乾燥ベース）
$EF_{plastics}$: 一般廃棄物中のプラスチックの燃焼に伴う排出係数（乾燥ベース）
M	: コークス炉化学原料プラスチックのうち炭化水素油に移行する割合

■ 活動量

一般廃棄物のプラスチックのうち利用用途別の原燃料利用量（排出ベース）は、指定法人ルート及び市町村独自処理ルートで処理された利用用途別の原燃料利用量（排出ベース）を合わせた値とする。当該排出源における活動量を推計する方法は7.4.1.1. 一般廃棄物（5.C.1.-）と同様である。ただし、当該排出源にはペットボトルの焼却は含まれていないため、石油由来割合はペットボトル以外の一般廃棄物プラスチックの値を用いる。

$$A_i = WP_i \times (1 - u_{plastics}) \times FPF$$

A_i	: 利用用途 i の石油由来プラスチック原燃料利用量の活動量 [t (dry)]
WP_i	: 利用用途 i のプラスチック原燃料利用量 [t (wet)]
$u_{plastics}$: プラスチックの含水率 [%]
FPF	: ペットボトル以外の一般廃棄物プラスチックの石油由来割合 [%]

○ 一般廃棄物プラスチック利用用途別の原燃料利用量（排出ベース）

【指定法人ルートにおける一般廃棄物プラスチック原燃料利用の処理量】

（財）日本容器包装リサイクル協会「再商品化（リサイクル）実績」に示される「プラスチック製容器包装（その他プラスチック、食品用トレイ）」の再商品化方法別の再商品化製品量（熱分解油：油化・高炉還元剤・コークス炉化学原料及び合成ガス：ガス化）から把握する。ただしCO₂を排出しない製品原料としての利用量は控除する。

【市町村独自ルートにおける一般廃棄物プラスチック原燃料利用の処理量】

市町村独自ルートにおける一般廃棄物プラスチックの原燃料利用量を以下のように計算する。

$$P_{LG} = \sum (PR - P_{JCPRA}) \times F_i \times R_i$$

- P_{LG} : 市町村独自ルートにおける一般廃棄物プラスチック原燃料利用の処理量 [t (wet)]
- PR : 容り法に基づき再商品化されたプラスチック量 (排出ベース) ¹⁾ [t (wet)]
- P_{JCPR} : 指定法人ルートにて再商品化されたプラスチック量 (排出ベース) ²⁾ [t (wet)]
- F_i : 再商品化方法 i のプラスチック量割合 ³⁾ [%]
- R_i : 再商品化方法 i の再商品化製品量割合 ⁴⁾ [%] (指定法人ルートの値を求め市町村独自ルートの値に適用)

(注)

- 1) 環境省環境再生・資源循環局「容器包装リサイクル法に基づく市町村の分別収集及び再商品化の実績について」に示される「年度別年間再商品化量」。
- 2) 「再商品化 (リサイクル) 実績」に示される「プラスチック製容器包装引き取り実績量」。
- 3) (社) プラスチック処理促進協会「平成 13 年度 廃プラスチック処理に関する自治体アンケート調査報告書」に示される市町村独自処理ルートにおける再商品化方法の割合。
- 4) 指定法人ルートにおける再商品化方法別の再商品化製品量 (再商品化物量) を再商品化方法別の再商品化量 (再商品化工程への投入量) で除して求める。再商品化方法別の再商品化量は、指定法人ルートで再商品化量に、(財) 日本容器包装リサイクル協会「容器包装リサイクル法の評価・検討」に示される再商品化方法別の再商品化量割合を乗じて求める。

○ 含水率

(財) 日本容器包装リサイクル協会提供値より、4%と設定する。

○ プラスチックの化石燃料由来割合 (ペットボトル以外のプラスチック(一般廃棄物))

7.4.1.1. 一般廃棄物 (5.C.1.-) の表 7-34 を参照のこと。

2) CH₄、N₂O

算定方法と排出係数については「7.4.3.2. 廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.)」節を参照。活動量の利用用途別の原燃料利用量 (排出ベース) は、指定法人ルート及び市町村独自処理ルートで処理された利用用途別の原燃料利用量 (排出ベース) を合わせた値とする。ここにはバイオマスプラスチック使用量も含まれる。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

一般廃棄物の焼却に係る不確実性と同様の評価を行う。詳細を表 7-67 に記す。

表 7-67 一般廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.1 及び 1.A.2) の不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
プラスチック	CO ₂	-2%	+2%	-10%	+10%	-10%	+10%	「5.C 焼却」の一般廃棄物のプラスチックの不確実性と同値。 「5.C 焼却」の一般廃棄物の不確実性と同値。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	CH ₄	-39%	+39%	-10%	+10%	-40%	+40%			
	N ₂ O	-34%	+34%	-10%	+10%	-35%	+35%			

■ 時系列の一貫性

排出量算定において時系列の一貫性は担保されている。なお、2000 年度以前において廃棄物の原燃料利用は一般的でなかったため、統計情報として活動量が報告されるのは 2000 年度以降である。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については、第 1 章

を参考のこと。

e) 再計算

バイオマスプラスチック製品データの改訂に伴い、CO₂ 排出量の再計算を行った。
統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.4.3.2.b. 産業廃棄物（廃プラスチック類、廃油、木くず）の原燃料利用に伴う焼却（1.A.2）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、産業廃棄物（廃プラスチック類、廃油、木くず）の原燃料利用に伴う排出を報告する。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法、排出係数

原燃料として利用された石油由来廃プラスチック類の焼却量、石油由来の廃油の焼却量に産業廃棄物の焼却で用いた排出係数を乗じて算定する。

■ 活動量

○ 廃プラスチック類

鉄鋼業、化学工業、製紙業、セメント製造業、自動車製造業及びその他業務における産業廃棄物中の廃プラスチック類の原燃料利用量（排出ベース）を算定対象とする。鉄鋼業における原燃料利用量は(社)日本鉄鋼連盟「廃プラ等利用の現状と今後の課題」から把握する。セメント製造業における原燃料利用量は(社)セメント協会「セメントハンドブック」から把握する。化学工業、製紙業及び自動車製造業における原燃料利用量は、それぞれ日本化学工業協会、日本製紙連合会及び日本自動車工業会から提供されたボイラーにおける廃プラスチック類使用量のデータより把握する。その他業務における原燃料利用量は、油化・ガス化された製品化量を区別して環境省環境再生・資源循環局「廃棄物統計の精度向上及び迅速化のための検討調査報告書」より把握する。廃プラスチック類（産業廃棄物）の石油由来割合は、「7.4.1.2. 産業廃棄物（5.C.1.-) b) 1) CO₂」の活動量と同様に求める。

○ 廃油（石油由来の廃油）

廃油の活動量は、主に「循環利用量報告書」から把握する。「循環利用量報告書」に含まれない有価発生物については、「使用済み潤滑油」及び「使用済み溶剤」として別途、活動量を把握する。

【廃油】

「循環利用量報告書」に示される、産業廃棄物の「直接循環利用」の「燃料化」及び「処理後循環利用」の「燃料化」に示される廃油の量から把握する。これには生物起源の廃油も含まれている。よってCO₂ 排出量算定では、この量から「7.4.1.2. 産業廃棄物（5.C.1.-) b) 1) CO₂」節で示される方法と同様に生物起源の「動植物性廃油」量を差し引き石油由来の量を求める。1997年度以前のデータは、産業廃棄物の廃油焼却量の推移を用いて推計する。

【使用済み潤滑油】

(社)潤滑油協会「潤滑油リサイクルハンドブック」に示される、使用済み潤滑油由来の再生重油の製造量から把握する。この項目はすべて石油由来と見なす。2001年度以前のデータは、産業廃棄物の廃油焼却量の推移を用いて推計する。

【使用済み溶剤】

日本溶剤リサイクル工業会調べによる、使用済み溶剤の燃料利用量データのうち有価物由来の量から把握する。この項目はすべて石油由来と見なす。

2) CH₄、N₂O

■ 算定方法、排出係数

算定方法と排出係数については「7.4.3.2. 廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.)」節を参照。

■ 活動量

○ 廃プラスチック類

当該排出源のCO₂排出量の算定の際に求めた活動量を用いる。ただし、高炉還元剤として用いられる廃プラスチック類及びガス化された廃プラスチック類は、活動量に含めない(表7-26参照)。

○ 廃油(石油由来の廃油・動植物性廃油)

当該排出源のCO₂排出量の算定の際に求めた原燃料利用量を用いる。ただし、CO₂排出量の活動量と異なり、動植物性廃油も算定対象に含める。

○ 木くず

「循環利用量報告書」に示された、産業廃棄物の「直接循環利用」の「燃料化」及び「処理後循環利用」の「燃料化」に示される木くずの量から把握する。1997年度以前のデータは、1998～2002年度の平均値を適用する。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

産業廃棄物の焼却に係る不確実性と同様の評価を行う。不確実性評価の詳細は表7-68に記す。

表 7-68 産業廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.2) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
廃プラスチック類	CO ₂	-2%	+2%	-30%	+30%	-30%	+30%	「5.C 焼却」の産業廃棄物の廃プラスチック類の不確実性と同値。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	CH ₄	-100%	+216%	-30%	+30%	-104%	+218%			
	N ₂ O	-44%	+44%	-30%	+30%	-53%	+53%			
廃油	CO ₂	-2%	+2%	-30%	+30%	-30%	+30%	「5.C 焼却」の産業廃棄物の廃油の不確実性と同値。		誤差伝播式で合成
	CH ₄	-100%	+181%	-30%	+30%	-104%	+184%			
	N ₂ O	-76%	+76%	-30%	+30%	-81%	+81%			
木くず	CH ₄	-100%	+412%	-30%	+30%	-104%	+413%	「5.C 焼却」の産業廃棄物の紙くず又は木くずの不確実性と同値。		誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-64%	+64%	-30%	+30%	-71%	+71%			

■ 時系列の一貫性

廃油と木くずの燃料利用に関するデータが1998年以降しかデータが存在しない。廃油は燃料利用を伴わない廃油全体の焼却量の推移を用いて、木くずは1998～2002年度5カ年のデー

タの平均値を用いて、過去量の推計を行い活動量の構築を行っている。算定方法自体の時系列の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については、第1章を参考のこと。

e) 再計算

バイオマスプラスチック製品データの改訂に伴い、CO₂ 排出量の再計算を行った。統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。詳細は「7.1.5. 廃棄物分野における一般的な再計算」を参照のこと。
再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.4.3.2.c. 廃タイヤの原燃料利用に伴う焼却（1.A.1 及び 1.A.2）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、原燃料として利用された廃タイヤの焼却に伴う排出を報告する。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

原燃料利用された廃タイヤの焼却量に日本独自の排出係数を乗じて算定を行う。

■ 排出係数

廃タイヤ中の石油由来の炭素含有率、廃タイヤの燃料利用施設における廃タイヤの酸化係数を乗じて算定する。廃タイヤ中の石油由来の炭素含有率は、新品タイヤ中の原材料構成を用いて求める。廃タイヤの酸化係数は2006年 IPCC ガイドラインに示されるデフォルト値の100%を採用する。

$$EF = C \times OF \times 1000 \times 44/12$$

<i>EF</i>	: 廃タイヤの燃料利用に伴う CO ₂ 排出係数（乾燥ベース）[kg-CO ₂ /t]
<i>C</i>	: 廃タイヤ中の石油由来の炭素含有率 [-]
<i>OF</i>	: 廃タイヤの酸化係数 [-]

■ 活動量

「日本のタイヤ産業」で把握した原燃料利用された廃タイヤ量（排出ベース）に、「廃棄物基本データ集 Fact Book 2000（財）日本環境衛生センター」に示された分割タイヤの三成分分析例を用いて設定した廃タイヤ中の含水量を差し引いて廃タイヤ焼却量（乾燥ベース）を求める。

2) CH₄、N₂O

■ 算定方法、排出係数

算定方法については「7.4.3.2. 廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.)」節を参照。

■ 活動量

CO₂ 排出量の算定の際に把握した「用途別廃タイヤ原燃料利用量」を用いる。セメント焼成用は「セメント焼成用」、ボイラー用は「中・小ボイラー」「タイヤメーカー工場用」「製紙」「発電」、乾留用は「金属精錬」、ガス化は「ガス化」にそれぞれ計上されている廃タイヤの量を活動量とする。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

産業廃棄物の焼却に係る不確実性と同様の評価を行う。詳細を表 7-69 に記す。

表 7-69 廃タイヤが原燃料として直接利用される場合 (1.A.1 及び 1.A.2) の不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
廃タイヤ	CO ₂	-2%	+2%	-30%	+30%	-30%	+30%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により産業廃棄物の廃プラスチック類の不確実性を代用。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	CH ₄	-100%	+216%	-30%	+30%	-104%	+218%			
	N ₂ O	-44%	+44%	-30%	+30%	-53%	+53%			

■ 時系列の一貫性

排出量算定において時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については、第 1 章を参考のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.4.3.3. 廃棄物が燃料に加工された後に利用される場合 (1.A.)

7.4.3.3.a. ごみ固形燃料 (RDF、RPF) の燃料利用 (1.A.1 及び 1.A.2)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、廃棄物が燃料に加工された後に利用される場合の CO₂、CH₄、N₂O 排出量の算定・報告を行う。廃棄物から加工された燃料として、ごみ固形燃料 (RDF: Refuse Derived Fuel、RPF: Refuse Paper and Plastic Fuel) を算定対象とする。排出量の報告カテゴリーは、燃料の利用用途に応じて、表 7-26 の通り「エネルギー産業 (1.A.1)」及び「製造業及び建設業

(1.A.2)」の各業種とする。報告する際の燃料種は表 7-25 に従い「Other fossil fuels」あるいは「Biomass」とする。

b) 方法論

1) CO₂

■ 算定方法

RDF、RPF の各焼却量に日本独自の排出係数を乗じて求める。

$$E_{RDF} = EF_{RDF} \times AD_{RDF}$$

E_{RDF} : 廃棄物の RDF 利用に伴う CO₂ 排出量 [kg-CO₂]
 EF_{RDF} : RDF の利用に伴う排出係数 (乾燥ベース) [kg-CO₂/t]
 AD_{RDF} : RDF の利用に伴う活動量 (乾燥ベース) [t]

$$E_{RPF} = EF_{RPF} \times AD_{RPF}$$

E_{RPF} : 廃棄物の RPF 利用に伴う CO₂ 排出量 [kg-CO₂]
 EF_{RPF} : RPF の利用に伴う排出係数 (乾燥ベース) [kg-CO₂/t]
 AD_{RPF} : RPF の利用に伴う活動量 (乾燥ベース) [t]

■ 排出係数

ごみ固形燃料 (RDF・RPF) の燃料利用に伴う排出係数は、RDF、RPF 別に以下に示す式で求める。

○ RDF

RDF の利用に伴う排出係数は、RDF 中のプラスチック由来成分の割合 (乾燥ベース) にプラスチック中の炭素含有率、RDF 利用施設における RDF の酸化係数及び RDF 中のプラスチックにおける石油由来割合を乗じて算定する。

$$\begin{aligned} EF_{RDF} &= 1000 \times P_{RDF} \times C \times OF_{RDF} \times 44 / 12 \times FPF_{RDF} \\ &= 1000 \times 0.296 \times 0.751 \times 1.0 \times 44 / 12 \times FPF_{RDF} \\ &= 816 \text{ [kg-CO}_2\text{/t]} \times FPF_{RDF} \end{aligned}$$

P_{RDF} : RDF 中のプラスチック由来成分の割合 (乾燥ベース)
 C : プラスチック中の炭素含有率 (乾燥ベース)
 OF_{RDF} : RDF 利用施設における RDF の酸化係数
 FPF_{RDF} : RDF 中のプラスチックにおける石油由来割合

【RDF 中のプラスチック由来の成分割合 (乾燥ベース) (P_{RDF})】

RDF 中のプラスチック由来成分の割合 (乾燥ベース) は、RDF 中のプラスチック由来成分の割合 (排出ベース) を乾燥ベースに換算して設定する。RDF 中のプラスチック由来成分の割合 (排出ベース) は、「ごみ固形燃料の適正管理方策について、平成 15 年 12 月、ごみ固形燃料適正管理検討会」に示される各施設の「ごみ組成分析結果」の「合成樹脂・ゴム類」の平均値を用いる (24.7%)。乾燥ベースへの換算に用いる含水率は、「管理処分場 (5.A.1.) CH₄」及び「一般廃棄物 (プラスチック) の焼却に伴う排出 (5.C.1.) CO₂」において設定した一般廃棄物組成別の含水率 (20%) を用いる。

【プラスチック中の炭素含有率 (乾燥ベース) (C)】

RDF 中のプラスチックの大部分は一般廃棄物由来であることから、各年度のプラスチック中の炭素含有率 (乾燥ベース) は、「7.4.1.1. 一般廃棄物 (5.C.1.-)」における一般廃棄物中のプラスチックの平均炭素含有率 (表 7-29 を参照) を用いる。

【RDF 利用施設における酸化係数 (OF_{RDF})】

RDF 利用施設における RDF 酸化係数は、「一般廃棄物（プラスチック）の焼却に伴う排出（5.C）CO₂」と同様に、2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値の 100%と設定する。

【RDF 中のプラスチックにおける石油由来割合 (FPF_{RDF})】

RDF 中のプラスチックの大部分は一般廃棄物由来であることから、「7.4.1.1. 一般廃棄物（5.C.1.-) b) 1) CO₂」と同じ値を用いる。なお、RDF に含まれるプラスチックには一般廃棄物焼却量に係るプラスチックと同じ割合でペットボトルが含まれているものとする。

○ RPF

RPF の品質には「石炭相当品」と「コークス相当品」があることから（日本 RPF 工業会、2004）、石炭相当品及びコークス相当品に分けて RPF の排出係数を設定する。ただし、活動量を算定する際に、それぞれの燃料利用量を把握できない場合には、石炭相当品及びコークス相当品の排出係数を両者の平均的な燃料利用量割合を用いて加重平均し設定した排出係数を適用する（「RPF の利用に伴う排出係数（加重平均排出係数）（乾燥ベース）」を参照）。

石炭相当品

$$\begin{aligned} EF_{RPF,coal} &= 1000 \times P_{RPF,coal} \times C \times OF_{RPF} \times 44 / 12 \times FPF_{RPF} \\ &= 1000 \times 0.528 \times 0.737 \times 1.0 \times 44 / 12 \times FPF_{RPF} \\ &= 1426 \text{ [kg-CO}_2\text{/t]} \times FPF_{RPF} \end{aligned}$$

コークス相当品

$$\begin{aligned} EF_{RPF,coke} &= 1000 \times P_{RPF,coke} \times C \times OF_{RPF} \times 44 / 12 \times FPF_{RPF} \\ &= 1000 \times 0.910 \times 0.737 \times 1.0 \times 44 / 12 \times FPF_{RPF} \\ &= 2457 \text{ [kg-CO}_2\text{/t]} \times FPF_{RPF} \end{aligned}$$

$EF_{RPF,coal}$: RPF（石炭相当品）の利用に伴う排出係数（乾燥ベース）[kg-CO ₂ /t]
$EF_{RPF,coke}$: RPF（コークス相当品）の利用に伴う排出係数（乾燥ベース）[kg-CO ₂ /t]
$P_{RPF,coal}$: RPF（石炭相当品）中の廃プラスチック類由来成分割合（乾燥ベース）
$P_{RPF,coke}$: RPF（コークス相当品）中廃プラスチック類由来成分割合（乾燥ベース）
C	: 廃プラスチック類中の炭素含有率（乾燥ベース）
OF_{RPF}	: RPF 利用施設における RPF の酸化係数
FPF_{RPF}	: RPF 中のプラスチックにおける石油由来割合

【RPF 中の廃プラスチック類由来成分割合（乾燥ベース）($P_{RPF,coal/coke}$)】

RPF 中の廃プラスチック類由来成分割合（乾燥ベース）は、RPF 中の廃プラスチック類由来成分割合（排出ベース）を乾燥ベースに換算して設定する。RPF 中の廃プラスチック類由来成分割合（排出ベース）は、日本 RPF 工業会ヒアリング結果に基づき、石炭相当品 50%、コークス相当品 90%と設定する。

RPF 中の含水率は、RPF 製造に用いられる産業廃棄物中の廃プラスチック類の平均的な含水率とし、専門家判断により 5%と設定する。

【廃プラスチック類中の炭素含有率（乾燥ベース）(C)】

RPF の製造原材料に用いられる廃プラスチック類の大部分は産業廃棄物由来であることから（関、2004）、「産業廃棄物（廃プラスチック類）の焼却に伴う排出（5.C）CO₂」において設定した産業廃棄物中の廃プラスチック類の炭素含有率（排出ベース）（70%）を、RPF 製造に用いられる産業廃棄物中の廃プラスチック類の含水率（5%）で乾燥ベースに換算して算定する（73.7%）。

【RPFの利用施設におけるRPF酸化係数 (OF_{RPF})】

RPF利用施設におけるRPF酸化係数は、「7.4.1.2. 産業廃棄物 (5.C.1.-)」と同様に、2006年IPCCガイドラインのデフォルト値である100%と設定する。

【RPF中のプラスチックにおける石油由来割合 (FPF_{RPF})】

産業廃棄物廃プラスチックの物と同値を用いる (表 7-34 を参照)。

【RPFの利用に伴う排出係数 (加重平均排出係数) (乾燥ベース) ($EF_{RPF,av}$)】

石炭相当品及びコークス相当品の各燃料利用量を把握できない場合には、石炭相当品及びコークス相当品の排出係数を両者の平均的な燃料利用量割合を用いて加重平均し、設定した排出係数を適用する。

日本 RPF 工業会ヒアリング結果に基づいた RPF の石炭相当品及びコークス相当品の製造量割合 (排出ベース) を乾燥ベースに換算した割合を当該燃料利用量割合 (乾燥ベース) として代用する。

乾燥ベースへの換算に用いる RPF 中の含水率は、日本 RPF 工業会制定の RPF 品質基準に示される石炭相当品及びコークス相当品の水分品質を用い、それぞれ3%及び1%と設定する。なお、算定した乾燥ベース製造量割合は変動の状況を把握できる統計等が得られないことから、設定した割合を各年度一律に用いる。

$$\begin{aligned} EF_{RPF,av} &= EF_{RPF,coal} \times P_{coal} + EF_{RPF,coke} \times P_{coke} \\ &= (1426 \times FPF_{RPF}) \times 0.797 + (2457 \times FPF_{RPF}) \times 0.203 \\ &= 1636 \text{ [kg-CO}_2\text{/t]} \times FPF_{RPF} \end{aligned}$$

$EF_{RPF,av}$: RPF の利用に伴う排出係数 (加重平均排出係数) (乾燥ベース) [kg-CO ₂ /t]
P_{coal}	: RPF (石炭相当品) の利用量割合 (乾燥ベース)
P_{coke}	: RPF (コークス相当品) の利用量割合 (乾燥ベース)
FPF_{RPF}	: RPF 中のプラスチックにおける石油由来割合

表 7-70 ごみ固形燃料 (RDF、RPF) の燃料利用に伴う CO₂ 排出係数

項目	排出係数 [kg-CO ₂ /t (dry)]
RDF	816
RPF (石炭相当品)	1,426
RPF (コークス相当品)	2,457
RPF (加重平均値)	1,636

(注) いずれもプラスチック中の石油由来割合 (FPF) が 100% の場合。

■ 活動量

○ RDF

RDF の燃料利用量は RDF 燃料製造量の値を代用する。「一般廃棄物処理実態調査結果」に示されたごみ燃料化施設での燃料製造量 (排出ベース) と RDF の含水率から RDF 燃料製造量 (乾燥ベース) を求める。データの入手できない年度は、ごみ処理能力の値を用いて推計を行っている。

$$A_{RDF} = a_{RDF} \times (1 - u_{RDF})$$

A_{RDF}	: RDF の利用に伴う活動量 (乾燥ベース)
a_{RDF}	: ごみ燃料化施設における RDF 製造量 (排出ベース) [t]
u_{RDF}	: RDF の含水率

○ RPF

RPF の燃料利用量は化学工業、製紙業、セメント製造業及び石油製品業を対象として把握する (表 7-63 を参照)。製紙業における RPF 燃料利用量 (乾燥ベース) は日本製紙連合会の取りまとめ結果を用いる。化学工業、セメント製造業及び石油製品業における RPF 燃料利用量 (乾燥ベース) はそれぞれ日本化学工業協会、セメント協会及び石油連盟による取りまとめ結果 (排出ベース) と RPF の平均的な含水率から把握する。

2) CH₄、N₂O

■ 算定方法、排出係数

算定方法と排出係数については「7.4.3.2. 廃棄物が原燃料として直接利用される場合 (1.A.)」を参照。

■ 活動量

○ RDF

RDF は CO₂ 排出量算定の際に把握した RDF の製造量 (排出ベース) の全量を RDF のボイラーにおける利用量と設定する。

○ RPF

RPF は CO₂ 排出量算定の際に把握した燃料利用量のうち、化学工業、製紙業及び石油製品業で利用された量をボイラーにおける燃料利用量 (排出ベース) とする。また、セメント製造業で利用された量をセメント焼成炉における燃料利用量 (排出ベース) とした。製紙業における RPF 燃料利用量は乾燥ベースのため、RPF の平均的な含水量を加算して排出ベースの重量に換算する。

○ 熱量に換算した活動量 (参考値)

CRF で報告する熱量に換算した活動量は以下の式で計算する。

$$A_{E,i} = A_i \times GCV_i / 10^6$$

$A_{E,i}$: 熱量に換算した燃料種 i の活動量 [TJ]
A_i	: 燃料種 i (RDF、RPF) の消費量 [kg (wet)]
GCV_i	: 燃料種 i の高位発熱量 [MJ/kg]

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

一般廃棄物及び産業廃棄物の焼却に係る不確実性と同様の評価を行う。詳細を表 7-71 に記す。

表 7-71 ごみ固形燃料（RDF、RPF）の燃料利用（1.A.1 及び 1.A.2）における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
RDF	CO ₂	-2%	+2%	-10%	+10%	-10%	+10%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により一般廃棄物のプラスチックの不確実性を代用。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	CH ₄	-39%	+39%	-10%	+10%	-40%	+40%			
	N ₂ O	-34%	+34%	-10%	+10%	-35%	+35%			
RPF	CO ₂	-2%	+2%	-30%	+30%	-30%	+30%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により産業廃棄物の廃プラスチック類の不確実性を代用。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	CH ₄	-100%	+216%	-30%	+30%	-104%	+218%			
	N ₂ O	-44%	+44%	-30%	+30%	-53%	+53%			

■ 時系列の一貫性

RDF 製造量について、1997 年度以前のデータが存在しないことから、ごみ燃料化施設の処理能力の推移を用いて RDF 製造量を推計し、時系列データを構築する。算定方法自体の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については、第 1 章を参考のこと。

e) 再計算

バイオマスプラスチック製品データの改訂に伴い、CO₂ 排出量の再計算を行った。統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については、第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.5. 排水の処理と放出（5.D.）

排水の処理と放出（5.D.）では、排水処理に伴い発生する CH₄、N₂O の排出量を報告する。日本における算定区分は表 7-72 の通りである。

なお、日本では、排水処理プロセスからの排出と汚泥処理プロセスからの排出の両方を考慮した排出係数を用い、両プロセスからの排出量をまとめて計算している。また、当該カテゴリーでは、様々な形態の排出源を含むことから、IEF の解析が困難である。

表 7-72 排水の処理と放出（5.D.）で排出量の算定を行う区分

区分	算定対象			処理方式		CH ₄	N ₂ O			
5.D.1. (7.5.1)	生活排水	公共下水道	下水	終末処理場 (7.5.1.1)	標準活性汚泥法	○	○			
					嫌気好気活性汚泥法		○			
					嫌気無酸素好気法及び循環式硝化脱窒法		○			
					循環式硝化脱窒型膜分離活性汚泥法		○			
		処理施設	公共下水道以外	生活雑排水	生活排水処理施設（主に浄化槽） (7.5.1.2)	生活排水処理施設（主に浄化槽） (7.5.1.2)	コミュニティ・プラント	○	○	
							合併処理浄化槽	性能評価型	○	○
								窒素除去型高度処理		
								窒素・リン除去型高度処理		
								BOD除去型高度処理		
							その他性能評価型	○	○	
				構造例示型	○	○				
				単独処理浄化槽	○	○				
				汲み取り便槽	○	○				
				収集し尿	し尿及び浄化槽汚泥 (生活排水処理施設から)	し尿処理施設 (7.5.1.3)	し尿処理施設 (7.5.1.3)	高負荷脱窒素	○	○
膜分離	○	○								
嫌気性処理	○	○								
好気性処理	○									
標準脱窒素	○	○								
その他	○	○								
公共用水域	排水	未処理排水	生活排水の自然界における分解 (7.5.1.4)	未処理放出	単独処理浄化槽から	○	○			
					汲み取り便槽から	○	○			
					自家処理から	○	○			
	汚泥	し尿及び浄化槽汚泥 下水汚泥		汚泥の海洋投入処 ¹⁾	処理後放出	(各種処理施設から)	NA	○		
						(生活排水処理施設から)	○	○		
						(終末処理場から)	○	○		
5.D.2. (7.5.2)	産業排水	処理施設	産業排水の処理 (7.5.2.1)	産業排水の処理 (7.5.2.1)	(産業排水処理施設)	○	○			
						○	○			
						○	○			
						○	○			
						○	○			
						○	○			
						○	○			
						○	○			
						○	○			
						○	○			
		公共用水域	排水	未処理排水	産業排水の自然界における分解 (7.5.2.2)	未処理放出	(工場・事業場から)	○	○	
処理後放出	(産業排水処理施設から)						NA	○		
埋立最終処分場浸出液			埋立最終処分場浸出液の処理 (7.5.2.3)		○	○				

(注)

1) 法的規制により、2009年度以降は行われていない。

推定した排水処理に伴い発生する温室効果ガス排出量を表 7-73 に示す。2018年度における当該排出源カテゴリーからの温室効果ガス排出量は、3,600 kt-CO₂ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCFを除く）の0.3%を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると32.4%の減少となっている。本カテゴリーの排出量の減少は、排水処理施設の普及により「生活排水の自然界における分解」からのCH₄排出量が減少したことが原因である。同様の理由で、「終末処理場（5.D.1.-）」から排出されるN₂Oは、1995~1998年度にかけて増加している。

表 7-73 排水の処理 (5.D.) に伴い発生する温室効果ガスの排出量

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CH ₄	5.D.1. 生活排水	終末処理場	kt-CH ₄	8.6	9.9	11.1	12.1	12.7	12.7	12.1	12.5	12.6	12.4	12.6	12.1	12.1	
		生活排水処理施設	kt-CH ₄	30.4	35.0	38.8	38.3	37.0	36.8	36.2	35.8	35.3	34.7	34.3	33.8	32.9	32.4
		し尿処理施設	kt-CH ₄	5.2	3.2	1.8	1.0	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.3	0.3
		生活排水の自然界における分解	kt-CH ₄	61.7	50.8	39.5	28.7	22.4	21.1	20.0	19.3	18.1	17.2	16.4	15.8	15.0	14.3
	5.D.2. 産業排水	産業排水の処理	kt-CH ₄	2.2	2.2	2.1	1.9	1.9	1.8	1.7	1.7	1.6	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7
		産業排水の自然界における分解	kt-CH ₄	8.2	7.8	7.9	8.3	4.9	4.9	4.8	4.5	4.1	4.3	4.6	4.1	3.7	3.7
		最終処分場浸出液の処理	kt-CH ₄	1.2	1.2	1.1	0.8	0.4	0.4	0.3	0.4	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2
	合計		kt-CH ₄	117.7	110.0	102.2	91.2	79.9	78.1	76.3	74.2	72.5	71.2	70.0	68.6	65.9	64.7
			kt-CO ₂ 換算	2,942	2,750	2,556	2,280	1,997	1,954	1,908	1,855	1,811	1,779	1,749	1,714	1,648	1,617
	N ₂ O	5.D.1. 生活排水	終末処理場	kt-N ₂ O	1.39	1.55	1.58	1.67	1.70	1.67	1.67	1.55	1.59	1.59	1.55	1.55	1.45
生活排水処理施設			kt-N ₂ O	1.52	1.65	1.70	1.57	1.52	1.53	1.54	1.56	1.56	1.56	1.55	1.56	1.56	1.55
し尿処理施設			kt-N ₂ O	0.22	0.26	0.12	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01
生活排水の自然界における分解			kt-N ₂ O	2.79	2.72	2.49	2.29	2.09	2.11	2.13	2.04	2.08	2.01	2.02	2.00	1.98	1.96
5.D.2. 産業排水		産業排水の処理	kt-N ₂ O	1.00	0.96	0.81	1.10	1.02	1.09	1.12	1.16	1.15	1.13	1.13	1.13	1.13	1.13
		産業排水の自然界における分解	kt-N ₂ O	1.06	1.02	1.02	0.97	0.67	0.66	0.65	0.62	0.59	0.56	0.54	0.55	0.55	0.55
		最終処分場浸出液の処理	kt-N ₂ O	0.03	0.03	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00
合計		kt-N ₂ O	8.01	8.18	7.72	7.65	7.03	7.10	7.14	6.94	6.99	6.86	6.80	6.80	6.69	6.66	
		kt-CO ₂ 換算	2,387	2,439	2,301	2,280	2,094	2,115	2,129	2,069	2,082	2,045	2,027	2,028	1,992	1,983	
合計			kt-CO ₂ 換算	5,329	5,189	4,857	4,560	4,091	4,069	4,037	3,925	3,893	3,825	3,777	3,742	3,640	3,600

7.5.1. 生活排水 (5.D.1.)

日本で発生する生活・商業排水は様々な排水処理施設（例えば終末処理場、生活排水処理施設、し尿処理施設など）で処理されており、当該排出を「生活排水 (5.D.1.)」に報告する。CH₄、N₂O の発生特性は排水処理施設ごとに異なることから、排水処理施設別に排出量算定方法を設定する。

日本では汚水処理の各種システムの特性、効果、経済性等を十分検討し、各地域に最も適したシステムを選択し、過大な投資を避け効率的な整備を図っている。「日本の廃棄物処理（環境省）」に示されている通り、2018年度末時点の公共下水道水洗化率は79.4%であり、普及の中心は大都市地域から中小市町村に移行している。一般的に人口密度が低く平坦地の割合も低いことが多い中小市町村では、合併処理浄化槽等の生活排水処理施設が下水道整備と並んで有効な施設であり、生活排水対策の重要な柱として計画的に整備推進を図っている。2018年度における浄化槽水洗化率は20.3%である。残りは収集後処理されるか自家処理される。

なお、国独自の算定方法を用いている各排出源の活動量は、排出ガス及び排水処理施設ごとに異なるため、BOD ベースの有機炭素量を指定している CRF の活動量記述欄には NA として報告している。

7.5.1.1. 終末処理場 (5.D.1.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

本サブカテゴリーでは、下水道により収集された排水が下水の終末処理場で処理される際に排出される CH₄、N₂O を算定する。

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される CH₄ 及び N₂O については、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Page 6.10, Fig. 6.2) に従い日本独自の算定方法を用い、終末処理場における下水処理量に排出係数を乗じて排出量を算定する。

$$E = EF \times A$$

E : 生活・商業排水の処理に伴う終末処理場からの CH₄、N₂O 排出量 [kg-CH₄]、[kg-N₂O]

EF : 排出係数 [kg-CH₄/m³]、[kg-N₂O/m³]

A : 終末処理場における年間下水処理量 [m³]

■ 排出係数

1) CH₄

終末処理場の水処理プロセス及び汚泥処理プロセスにおいて実測された CH₄ の放出量を国内の研究事例（8 施設における測定）より引用し、処理プロセスごとの単純平均値を合計して排出係数を設定する（環境省、2006b）。

$$EF_{CH_4} = EF_{WWTT} + EF_{SSTT} \\ = 8.8 \times 10^{-4} \text{ [kg-CH}_4\text{/m}^3\text{]}$$

- EF_{CH_4} : CH₄ 排出係数
- EF_{WWTT} : 水処理プロセスの排出係数 (528.7 [mg-CH₄/m³])
- EF_{SSTT} : 汚泥処理プロセスの排出係数 (348.0 [mg-CH₄/m³])

2) N₂O

終末処理場の水処理プロセス及び汚泥処理プロセスにおいて実測された N₂O の放出量を国内の研究事例より引用し、排出係数を設定する。

国内の研究事例（42 施設における測定）より、終末処理場における排水処理方法に応じて N₂O 発生量が異なることが明らかになっていることから、水処理方式別の排出係数を用いる（環境省、2013b）。

$$EF_{N_2O} = EF_{WWTTi} + EF_{SSTT}$$

- EF_{N_2O} : N₂O 排出係数
- EF_{WWTTi} : 水処理プロセス（方式）i の排出係数（表 7-74 参照）
- EF_{SSTT} : 汚泥処理プロセスの排出係数 (0.6 [mg-N₂O/m³])

表 7-74 終末処理場における N₂O 排出係数

水処理方式	N ₂ O 排出係数 ³⁾ (水処理プロセス) [mg-N ₂ O/m ³]	N ₂ O 排出係数 (汚泥処理プロセス) [mg-N ₂ O/m ³]
標準活性汚泥法 ¹⁾	142	0.6
嫌気好気活性汚泥法	29.2	0.6
嫌気無酸素好気法及び循環式硝化脱窒法 ²⁾	11.7	0.6
循環式硝化脱窒型膜分離活性汚泥法	0.5	0.6

(注)

- 1) 本分類に該当しない処理法を含む。
- 2) 当該方法と同程度以上に窒素を処理することができる方法を含み、循環式硝化脱窒型膜分離活性汚泥法を除く。
- 3) 標準活性汚泥法は主として BOD を除去することを目的としており、硝化反応が十分に進行する前に処理が終わってしまうため、硝化反応の副生成物である N₂O 発生量が多くなる。それに対して嫌気好気活性汚泥法、嫌気無酸素好気法、循環式硝化脱窒法といった高度処理においては、窒素除去等のために硝化反応が十分に行われるため、N₂O 発生量が少ない。

■ 活動量

終末処理場における水処理に伴う N₂O 排出の活動量については、国土交通省提供の水処理方式別の排水処理量を用いる。CH₄ 排出の活動量については N₂O 排出で用いた排水処理量の合計値を用いる。

表 7-75 終末処理場における下水処理の活動量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
標準活性汚泥法	10 ⁶ m ³	9,761	10,780	10,686	11,405	11,552	11,358	11,288	10,485	10,736	10,699	10,401	10,394	9,648	9,648
嫌気好気活性汚泥法	10 ⁶ m ³	73	446	1,523	1,039	868	909	909	953	931	938	933	962	1,107	1,107
嫌気無酸素好気法及び循環式硝化脱窒法	10 ⁶ m ³	23	89	487	1,374	2,049	2,181	2,308	2,355	2,629	2,684	2,819	3,033	2,998	2,998
循環式硝化脱窒型膜分離活性汚泥法	10 ⁶ m ³	NO	NO	NO	0.1	1	2	20	20	15	0.1	0.2	5	0.4	0.4
合計	10 ⁶ m ³	9,857	11,316	12,696	13,818	14,470	14,450	14,525	13,813	14,311	14,320	14,153	14,393	13,754	13,754

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

終末処理場の CH₄ 及び N₂O 排出係数については、排出係数算定に用いられた実測データから計算される 95%信頼区間より不確実性を評価する。活動量の不確実性については、表 7-2 にある下水道の値を適用する。不確実性評価の詳細を表 7-76 に記す。

表 7-76 終末処理場 (5.D.1.-) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
終末処理場	CH ₄	-31%	+31%	-5%	+5%	-31%	+31%	環境省(2006b)を参考に、同報告書で用いられた実測データの95%信頼区間より不確実性を査定。	専門家判断により設定した下水道統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-100%	+146%	-5%	+5%	-100%	+146%			

■ 時系列の一貫性

排出量算定において時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第1章を参考のこと。

e) 再計算

統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.5.1.2. 生活排水処理施設（主に浄化槽）(5.D.1.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

日本では公共下水道で処理されない生活・商業排水の一部が、コミュニティ・プラント、合併処理浄化槽、単独処理浄化槽、汲み取り便槽といった生活排水処理施設及び設備で処理されている。

表 7-77 生活排水処理施設・設備の概要

施設			処理対象	概要	
コミュニティ・プラント			し尿及び 雑排水	地域ごとに設置される小規模な排水処理施設	
浄化槽	合併処理浄化槽	性能評価型		個別の世帯 に設置され る分散型排 水処理設備	2001 年度改正建築基準法に基づく 性能評価型
		窒素除去型高度処理			
		窒素・リン除去型高度処理			
単独処理浄化槽	し尿のみ	旧建築基準法に基づく構造例示型 浄化槽法の改正により 2001 年度より 新設禁止			
汲み取り便槽			個別の世帯に設置		

本カテゴリではこれらの生活排水処理施設における処理プロセスにより発生する CH₄、N₂O の排出量を報告する。なお、汲み取り便槽については、し尿が汲み取り便槽内に滞留している期間内の排出が本カテゴリでの報告対象であり、汲み取り便槽から収集されたし尿を収集後に処理する際に発生する CH₄、N₂O は、「7.5.1.3. し尿処理施設 (5.D.1.-)」で取り扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される CH₄ 及び N₂O については、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Page 6.10, Fig. 6.2) に従い、日本独自の算定方法を用いる。各生活排水処理施設の種類ごとの年間処理人口に排出係数を乗じて、排出量を算定する。

$$E = \sum_i (EF_i \times A_i)$$

E : 生活排水処理施設 (主に浄化槽) における生活・商業排水の処理に伴う CH₄、N₂O 排出量 [kg-CH₄]、[kg-N₂O]

EF_i : 生活排水処理施設 i の排出係数 [kg-CH₄/人]、[kg-N₂O/人]

A_i : 生活排水処理施設 i における年間処理人口 [人]

■ 排出係数

国内の研究事例より、当該排出源から排出される CH₄ 及び N₂O の排出係数を表 7-78 のように設定する。

表 7-78 生活排水処理施設の CH₄・N₂O 排出係数

CH ₄ 排出係数 (単位: kg-CH ₄ /人・年)						
施設		1990~ 1995 年度	1996~ 2000 年度	2001~ 2004 年度	2005 年度~	出典
コミュニティ・プラント ¹⁾		0.195	内挿		0.062	1990~1995 年度: 田中 (1998) 2005 年度~: 池・惣田 (2010)
合併 処理 浄化 槽	性能 評価 型	窒素除去型高度処理	NA ²⁾		1.044	環境省 (2012) 及び環境省 (2013c)
		窒素・リン除去型高度処理				
		BOD 除去型高度処理				
		その他性能評価型			1.984	
構造例示型 ³⁾	2.477					
単独処理浄化槽 ³⁾		0.46				
汲み取り便槽 ³⁾		0.062				
N ₂ O 排出係数 (単位: kg-N ₂ O/人・年)						
施設		1990~ 1995 年度	1996~ 2000 年度	2001~ 2004 年度	2005 年度~	出典
コミュニティ・プラント ¹⁾		0.0394	内挿		0.0048	1990~1995 年度: 田中他 (1995) ⁴⁾ 2005 年度~: 池・惣田 (2010)
合併 処理 浄化 槽	性能 評価 型	窒素除去型高度処理	NA ²⁾		0.123	環境省 (2012) 及び環境省 (2013c)
		窒素・リン除去型高度処理				
		BOD 除去型高度処理				
		その他性能評価型			0.055	
構造例示型 ³⁾	0.0717					
単独処理浄化槽 ³⁾		0.039				
汲み取り便槽 ³⁾		0.000022				

(注)

- 2005 年度以降はプラントの性能向上を考慮して排出係数を設定
- 2001 年度の建築基準法の改正に伴い導入
- 期間中に大きな技術の変化が無い場合、全年度を通じて同じ排出係数を適用
- 出典の実測値の上限値及び下限値の単純平均値

■ 活動量

生活排水処理施設における水処理に伴う CH₄ 及び N₂O の排出の活動量については「日本の廃棄物処理」に示された、コミュニティ・プラント、合併処理浄化槽、単独処理浄化槽、汲み取り便槽の年間処理人口を用いる。合併処理浄化槽の活動量については、性能評価型及び構造例示型の設置基数（環境省「浄化槽指導普及に関する調査」）より求められる設置割合を浄化槽年間処理人口割合とみなし、これを用いて構造例示型及び性能評価型に区別する。

表 7-79 浄化槽種類別処理人口 [千人]

浄化槽種類	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
コミュニティ・プラント	千人	493	398	414	552	297	293	286	289	304	302	294	286	320	336
合併処理浄化槽 (小計)	千人	6,274	8,515	10,806	12,792	13,792	14,082	14,276	14,341	14,492	14,564	14,600	14,630	14,557	14,490
性能評価型															
窒素除去型高度処理	千人	NO	NO	NO	263	1,061	1,433	1,900	2,261	2,612	2,948	3,105	3,447	3,862	3,950
窒素・リン除去型高度処理	千人	NO	NO	NO	3	10	14	16	28	35	37	39	40	42	43
BOD 除去型高度処理	千人	NO	NO	NO	34	43	33	46	22	25	22	19	18	20	29
その他性能評価型	千人	NO	NO	NO	4,501	5,997	6,132	6,129	6,095	6,123	6,098	6,153	6,022	5,666	5,685
構造例示型	千人	6,274	8,515	10,806	7,991	6,682	6,471	6,184	5,935	5,697	5,459	5,284	5,103	4,968	4,783
単独処理浄化槽	千人	26,828	26,105	23,289	18,303	14,712	13,948	13,315	13,052	12,383	11,822	11,415	11,018	10,543	10,154
汲み取り便槽	千人	38,920	29,409	20,358	13,920	10,671	9,984	9,348	8,849	8,242	7,727	7,197	6,871	6,528	6,099
合計	千人	72,515	64,427	54,867	45,567	39,472	38,307	37,225	36,531	35,421	34,415	33,506	32,805	31,948	31,079

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

合併処理浄化槽、単独処理浄化槽、汲み取り便槽の CH₄ 及び N₂O 排出係数については、排出係数算定に用いられた実測データから計算される 95%信頼区間より不確実性を算定する。コミュニティ・プラントの CH₄ 及び N₂O 排出係数については、類似する排出源の不確実性を代用する。活動量の不確実性については、表 7-2 にある一般廃棄物（下水を除く生活排水）の値を適用する。不確実性評価の詳細を表 7-80 に記す。

表 7-80 生活排水処理施設 (5.D.1.-) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法			
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)						
コミュニティ・プラント	CH ₄	-32%	+32%	-10%	+10%	-33%	+33%	専門家判断により排出係数の不確実性を設定(合併処理浄化槽の不確実性を代用) 出典の環境省(2013c)より引用。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成			
	N ₂ O	-45%	+45%	-10%	+10%	-46%	+46%						
合併処理浄化槽	CH ₄	-32%	+32%	-10%	+10%	-33%	+33%						
	N ₂ O	-45%	+45%	-10%	+10%	-46%	+46%						
単独処理浄化槽	CH ₄	-84%	+84%	-10%	+10%	-84%	+84%						誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-87%	+87%	-10%	+10%	-88%	+88%						
汲み取り便槽	CH ₄	-49%	+49%	-10%	+10%	-50%	+50%						誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-72%	+72%	-10%	+10%	-73%	+73%						

■ 時系列の一貫性

排出量算定において時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章を参考のこと。

e) 再計算

性能評価型合併処理浄化槽にかかる排出係数を再検討し、2001 年度以降の CH₄・N₂O 排出量の再計算を行った。

統計データの更新に伴い 2017 年度の排出量の再計算を行った。

再計算の影響の程度については、第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.5.1.3. し尿処理施設 (5.D.1.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、し尿処理施設に収集された汲み取りし尿及び浄化槽汚泥がし尿処理施設で処理される際に発生する CH₄、N₂O の排出量を算定している。

b) 方法論

1) CH₄

■ 算定方法

当該排出源から排出される CH₄ については、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Page 6.10, Fig. 6.2) に従い、日本独自の算定方法を用いた。し尿処理施設における生活排水処理量に排出係数を乗じて、排出量を算定する。

$$E = \sum_i (EF_i \times A_i)$$

E : し尿処理施設における生活・商業排水の処理に伴う CH₄ 排出量 [kg-CH₄]

EF_i : し尿処理施設 (処理方式 i) の排出係数 [kg-CH₄/m³]

A_i : し尿処理施設 (処理方式 i) に投入されたし尿及び浄化槽汚泥量 [m³]

■ 排出係数

し尿処理施設の処理方式別に、嫌気性処理、好気性処理、標準脱窒素処理、高負荷脱窒素処理、膜分離、その他の各処理形式の CH₄ の排出係数を設定する (環境省、2006b)。

表 7-81 処理形式ごとの CH₄ 排出係数

処理方法	CH ₄ 排出係数 [kg-CH ₄ /m ³]	出典
嫌気性処理	0.543	日本環境衛生センター (1990) に示された CH ₄ 排出量の実測値に (1-メタンの回収率 (90%)) を乗じて算定
好気性処理	0.00545	排出実態が不明なため、標準脱窒素処理と高負荷脱窒素処理の単純平均値を採用
標準脱窒素処理	0.0059	田中他 (1995)
高負荷脱窒素処理	0.005	田中他 (1995)
膜分離	0.00545	排出実態が不明なため、好気性処理の排出係数にて代用
その他	0.00545	排出実態が不明なため、好気性処理の排出係数にて代用

■ 活動量

し尿処理施設における水処理に伴う CH₄ の排出の活動量は、「日本の廃棄物処理」に示されたし尿処理施設で処理されたし尿及び浄化槽汚泥の総量 (表 7-82) に、し尿処理方式別の処理能力 (表 7-83) から求めた処理能力割合を乗じて、各処理方式別の処理量 (表 7-84) を求める。

$$A_i = W_H \times C_i / C_T$$

A_i : し尿処理方式 i の活動量 [kl]

W_H : し尿及び浄化槽汚泥の総量 [kl]

C_i : し尿処理方式 i による処理能力 [kl]

C_T : 全し尿処理方式による処理能力の合計 [kl]

表 7-82 し尿処理施設に投入されたし尿及び浄化槽汚泥量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
汲み取りし尿量	千kl/年	20,406	18,049	14,673	10,400	8,353	7,917	7,365	7,018	6,771	6,375	6,153	5,890	5,627	5,823
浄化槽汚泥量	千kl/年	9,224	11,545	13,234	13,790	13,989	13,760	13,547	13,519	13,726	13,562	13,537	13,648	13,536	13,518
合計	千kl/年	29,630	29,594	27,907	24,190	22,342	21,677	20,912	20,537	20,497	19,937	19,690	19,538	19,163	19,341

表 7-83 処理形式ごとの処理能力

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
嫌気性処理	k/日	34,580	19,869	10,996	6,476	4,144	3,891	3,265	3,159	3,059	2,779	2,245	2,155	1,799	1,574
好気性処理	k/日	26,654	19,716	12,166	8,465	6,961	6,753	6,200	6,469	6,001	5,899	5,979	5,600	4,743	4,468
標準脱窒素	k/日	25,196	30,157	31,908	29,655	27,748	26,173	25,694	25,608	25,153	24,663	24,023	22,812	21,544	21,113
高負荷脱窒素	k/日	8,158	13,817	16,498	17,493	16,285	16,104	15,778	15,030	14,529	14,336	13,831	13,651	13,838	13,289
膜分離	k/日	NO	1,616	2,375	3,055	3,573	3,684	3,684	4,062	4,074	2,204	3,373	3,184	2,853	2,404
その他	k/日	13,777	20,028	25,917	30,277	34,654	34,577	34,622	33,556	33,975	34,983	33,940	36,074	37,430	40,223

表 7-84 処理形式ごとのし尿処理量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
嫌気性処理	千k/年	9,455	5,589	3,073	1,642	992	925	765	738	722	653	530	504	419	366
好気性処理	千k/年	7,288	5,546	3,400	2,146	1,666	1,605	1,453	1,512	1,417	1,386	1,412	1,311	1,106	1,040
標準脱窒素	千k/年	6,889	8,483	8,917	7,518	6,640	6,222	6,021	5,984	5,940	5,794	5,672	5,339	5,022	4,916
高負荷脱窒素	千k/年	2,231	3,887	4,611	4,435	3,897	3,828	3,697	3,512	3,431	3,368	3,266	3,195	3,226	3,094
膜分離	千k/年	NO	455	664	774	855	876	863	949	962	518	796	745	665	560
その他	千k/年	3,767	5,634	7,243	7,676	8,293	8,220	8,113	7,841	8,024	8,219	8,014	8,443	8,725	9,365
合計	千k/年	29,630	29,594	27,907	24,190	22,342	21,677	20,912	20,537	20,497	19,937	19,690	19,538	19,163	19,341

2) N₂O

■ 算定方法

当該排出源から排出される N₂O については、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Page 6.10, Fig. 6.2) に従い、日本独自の算定方法を用いた。し尿処理施設における投入窒素量に排出係数を乗じて、排出量を算定する。

$$E = \sum_i (EF_i \times A_i)$$

- E : し尿処理施設における生活・商業排水の処理に伴う N₂O 排出量[kg-N₂O]
- EF_i : し尿処理施設(処理方式 i)の排出係数[kg-N₂O/kg-N]
- A_i : し尿処理施設(処理方式 i)に投入されたし尿及び浄化槽汚泥中の窒素量[kg-N]

■ 排出係数

高負荷脱窒素処理、膜分離処理、その他の各処理形式ごとに我が国の研究事例を用いて N₂O 排出係数を設定する (環境省、2006b)。

我が国のし尿処理施設の排出係数について、1994 年度 (田中他、1997) 及び 2003 年度 (大村他、2004) に調査が行われている。この間、し尿処理施設の施設構造及び維持管理技術が向上しており、測定により高負荷脱窒素処理及び膜分離処理における排出係数が改善していることが確認されている。よって、当該処理の排出係数について 1994 年度以前と 2003 年度以降で別の値を用いる。

表 7-85 処理形式ごとの N₂O 排出係数

処理方法	N ₂ O 排出係数[kg-N ₂ O-N/kg-N]		
	1990~1994 年度	1995~2002 年度	2003 年度~
高負荷脱窒素処理	0.033 ¹⁾	内挿	0.0029 ²⁾
膜分離	0.033 ¹⁾	内挿	0.0024 ²⁾
その他 (嫌気性処理、好気性処理、標準脱窒素処理を含む)	0.0000045 ³⁾		

(注)

- 1) 田中他 (1998) に示された 13 施設における実測値の中央値を採用
- 2) 大村他 (2004) に示された 13 施設における実測値の中央値を採用

- 3) 田中他（1995）（標準脱窒処理における上限値（0.00001 [kg-N₂O/m³]）を、1994年度における投入窒素濃度 2,211 [mg/l] で除して算出）

■ 活動量

活動量であるし尿処理施設における投入窒素量は、収集し尿及び収集浄化槽汚泥中の窒素量をし尿処理施設で処理されたし尿及び浄化槽汚泥の量で加重平均して算出した投入窒素濃度に、「日本の廃棄物処理」に示されたし尿処理施設におけるし尿処理量（汲み取りし尿及び浄化槽汚泥の合計量）を乗ずることによって算出する。

$$A_i = (W_H \times N_H + W_J \times N_J) \times F_i / 1000$$

- A_i : し尿処理方式 i の活動量 [kg-N]
 W_H : し尿処理施設に投入されたし尿量 [m³]
 W_J : し尿処理施設に投入された浄化槽汚泥量 [m³]
 N_H : し尿中の窒素濃度 [mg-N/l]
 N_J : 浄化槽汚泥中の窒素濃度 [mg-N/l]
 F_i : し尿処理方式 i による処理能力割合 [%]

○ し尿処理施設に投入されたし尿量及び浄化槽汚泥量

し尿処理施設からの CH₄ 排出量算定に用いたデータ（表 7-82）と同様。

○ し尿処理方式別のし尿処理割合

し尿処理施設からの CH₄ 排出量算定に用いたデータ（表 7-83）と同様。

○ 投入されたし尿及び浄化槽汚泥の窒素濃度

投入されたし尿及び浄化槽汚泥の窒素濃度は、岡崎他（2001）に従い、1989～1991年度、1992～1994年度、1995～1997年度、1998～2000年度の4回に分けて分析された値を使用し、2001年度以降の値は2000年度値で代替する（表 7-86）。

表 7-86 収集し尿及び収集浄化槽汚泥中の窒素濃度

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
し尿	mg-N/l	3,940	3,100	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700	2,700
浄化槽汚泥	mg-N/l	1,060	300	580	580	580	580	580	580	580	580	580	580	580	580
加重平均値	mg-N/l	3,043	2,008	1,695	1,491	1,373	1,354	1,327	1,304	1,280	1,258	1,242	1,219	1,203	1,218

表 7-87 活動量：し尿処理施設で処理されたし尿及び浄化槽汚泥中の窒素量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
嫌気性処理	kt-N	28.8	11.2	5.2	2.4	1.4	1.3	1.0	1.0	0.9	0.8	0.7	0.6	0.5	0.4
好気性処理	kt-N	22.2	11.1	5.8	3.2	2.3	2.2	1.9	2.0	1.8	1.7	1.8	1.6	1.3	1.3
標準脱窒素	kt-N	21.0	17.0	15.1	11.2	9.1	8.4	8.0	7.8	7.6	7.3	7.0	6.5	6.0	6.0
高負荷脱窒素	kt-N	6.8	7.8	7.8	6.6	5.3	5.2	4.9	4.6	4.4	4.2	4.1	3.9	3.9	3.8
膜分離	kt-N	NO	0.9	1.1	1.2	1.2	1.2	1.1	1.2	1.2	0.7	1.0	0.9	0.8	0.7
その他	kt-N	11.5	11.3	12.3	11.4	11.4	11.1	10.8	10.2	10.3	10.3	10.0	10.3	10.5	11.4
合計	kt-N	90.2	59.4	47.3	36.1	30.7	29.4	27.7	26.8	26.2	25.1	24.5	23.8	23.0	23.6

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

し尿処理施設（5.D.1.-）における CH₄ 及び N₂O 排出係数については、類似する排出源の不確実性を代用する。活動量の不確実性については、表 7-2 にある一般廃棄物（下水を除く生活排水）の値を適用する。詳細を表 7-88 に記す。

表 7-88 生活排水処理施設 (5.D.1.-) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
し尿処理施設	CH ₄	-84%	+84%	-10%	+10%	-84%	+84%	専門家判断により排出係数の不確実性を設定(単独処理浄化槽の不確実性を代用)	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-87%	+87%	-10%	+10%	-88%	+88%			

■ 時系列の一貫性

N₂O 排出係数について実測データが得られない期間は、表 7-85 に記載したとおりの方法でデータを補完している。その他のパラメータは一貫したデータを利用している。算定方法自体の一貫性も担保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に詳述している。

e) 再計算

統計データの更新に伴い 2017 年度の排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については、第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.5.1.4. 生活排水の自然界における分解 (5.D.1.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

我が国で発生する生活排水の多くは排水処理施設において処理されているが、公共用水域に放出されている処理後排水にも窒素が残存する。また、一部の生活雑排水は未処理のまま公共用水域に放出されている。本カテゴリーでは、公共用水域で分解する未処理の生活排水及び汚泥から発生する CH₄、N₂O、及び処理後排水から発生する N₂O の報告を行う。本カテゴリーで算定対象とする排出源は表 7-89 の通りである。

表 7-89 生活排水の自然界における分解 (5.D.1.-) で扱う排出源

排出源	詳細
未処理排水 (CH ₄ 、N ₂ O)	単独処理浄化槽を利用する家庭等における未処理の生活雑排水
	汲み取り便槽を利用する家庭等における未処理の生活雑排水
	自家処理を行う家庭等における未処理の生活雑排水
処理後排水 (N ₂ O)	終末処理場で処理された生活排水
	コミュニティ・プラント及び合併処理浄化槽 (性能評価型/構造例示型) で処理された生活排水
	単独処理浄化槽で処理されたし尿由来の排水 し尿処理施設におけるし尿・浄化槽汚泥の処理に伴う排水
汚泥 (CH ₄ 、N ₂ O)	海洋投入処分されたし尿及び浄化槽汚泥
	海洋投入処分された下水汚泥

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインに記載された方法に従い算定方法を設定する。自然界における排水の分解では、汚泥として引き抜かれた有機物量と CH₄ 回収量はゼロとなるため、CH₄ 排出量は未処理のまま公共用水域に放出された生活排水中の有機物量に排出係数を乗じて算定する。N₂O 排出量は排水中に含まれる窒素量に排出係数を乗じて算定する。

$$E = EF \times A$$

E : 生活排水の自然界における分解に伴う CH₄、N₂O 排出量 [kg-CH₄]、[kg-N₂O]
 EF : 排出係数 [kg-CH₄/kg-BOD]、[kg-N₂O/kg-N]
 A : 生活排水中の有機物量 [kg-BOD] または窒素量 [kg-N]

■ 排出係数

CH₄ 排出係数は、2006年 IPCC ガイドラインに従い最大メタン生成能 (B_0) にメタン変換係数 (MCF) を乗じて設定する。最大メタン生成能は2006年 IPCC ガイドラインに示される生活排水 (Domestic Waste Water) のデフォルト値を用いて 0.6 [kg-CH₄/kg BOD] と設定する。メタン変換係数は「Untreated system」の「Sea, river and lake discharge」のデフォルト値を用いて 0.1 と設定する。

$$\begin{aligned} EF_{CH_4} &= MCF \times B_0 \\ &= 0.6 \text{ [kg-CH}_4\text{/kg-BOD]} \times 0.1 \\ &= 0.06 \text{ [kg-CH}_4\text{/kg-BOD]} \end{aligned}$$

N₂O の排出係数は、2006年 IPCC ガイドラインに示されるデフォルト値 0.005 [kg N₂O-N/kg N] を単位換算して設定する。

$$\begin{aligned} EF_{N_2O} &= 0.005 \text{ [kg-N}_2\text{O-N/kg-N]} \times 44/28 \\ &= 0.0079 \text{ [kg-N}_2\text{O/kg-N]} \end{aligned}$$

■ 活動量

○ 未処理排水

未処理排水からの CH₄ 及び N₂O 排出量にかかる活動量は次の式で求める。

$$A = \sum_i P_i \times U$$

A : 家庭等から未処理のまま排出する生活排水の活動量 [g-BOD]、[g-N]
 P_i : 生活排水処理方式 i (単独処理浄化槽、汲み取り便槽、自家処理) の利用人口¹⁾ [人]
 U : 生活雑排水の BOD 原単位 (40 [g-BOD/人日]²⁾、窒素原単位 (2 [g-N/人日]²⁾)

(出典)

- 1) 環境省「日本の廃棄物処理」
- 2) 日本下水道協会 (1999)

なお、我が国ではし尿の自家処理として農地還元が行われているが、これに伴う N₂O 排出量は農業分野の「土壌からの直接排出 (3.D.1.)」において計上していることから、本排出源の算定対象には含めていない。

○ 処理後排水

処理後排水からの N₂O 排出量にかかる活動量は以下の式で求める。

$$A = A_{sp} + A_{dp} + A_{hp}$$

- A : 生活排水の処理後排水中の窒素量 (活動量) [t-N]
- A_{sp} : 終末処理場での処理後排水中の窒素量 [t-N]
- A_{dp} : 生活排水処理施設での処理後排水中の窒素量 [t-N]
- A_{hp} : し尿処理施設での処理後排水中の窒素量 [t-N]

【終末処理場】

終末処理場の処理後排水中窒素量は以下の式で求める。

$$A_{sp} = \sum_i (W_i \times D_i) \times 10^{-6}$$

- W_i : 終末処理場 i における排水処理量 [m³]
- D_i : 終末処理場 i における処理後排水中の窒素濃度 [mg-N/l]

(出典) いずれのパラメータとも、日本下水道協会「下水道統計」

【生活排水処理施設】

生活排水処理施設 (コミュニティ・プラント、合併処理浄化槽 (性能評価型/構造例示型)、単独処理浄化槽) の処理後排水中窒素量は、次の式で求める。

$$A_{dp} = \sum_i \{TN_i \times d \times P_i \times (1 - R_i)\} \times 10^{-6}$$

- TN_i : 処理施設 i における一人一日当たり流入 TN 負荷量 [g-N/人日] (表 7-90 参照)
- P_i : 処理施設 i の利用人口 [人] (表 7-79 参照)
- R_i : 処理施設 i の窒素除去率 [%] (表 7-91 参照)
- d : 年間日数 [日/年]

ここで、各処理施設における一人当たり流入 TN 負荷量及び窒素除去率は下表のとおりである。

表 7-90 各処理施設における一人当たり流入 TN 負荷量、

処理施設	処理水	一人一日当たり流入 TN 負荷量 [g-N/人日]	出典
コミュニティ・プラント	し尿及び生活雑排水	10	環境省 (2009)
合併処理浄化槽 (性能評価型及び構造例示型)			
単独処理浄化槽	し尿のみ	8	

表 7-91 各処理施設の窒素除去率

処理施設		窒素除去率 [%]	出典	
コミュニティ・プラント		20	専門家判断	
合併処理浄化槽	性能評価型	窒素除去型高度処理		60
		窒素・リン除去型高度処理		
		BOD 除去型高度処理		
	その他性能評価型	20		
構造例示型				
単独処理浄化槽				

【し尿処理施設】

し尿処理施設での処理後排出中の窒素量は次の式で求める。

$$A_{hp} = W \times D \times 10^{-6}$$

W : し尿処理施設におけるし尿・浄化槽汚泥の処理量¹⁾ [m³]

D : し尿処理施設の処理後排水中窒素濃度 [mg-N/l]

(出典)

- 1) 環境省「日本の廃棄物処理」

ここで、処理後排水中の窒素濃度はし尿処理方式別の放流水質調査データ(表 7-92)の処理能力(表 7-83)での加重平均を用いる。

表 7-92 し尿処理方式別の処理後排水中の窒素濃度

処理方式	窒素濃度 [mg-N/l]	出典
嫌気性処理	98.0	岡崎他 (2001)
好気性処理	32.5	
標準脱窒素	5.5	
高負荷脱窒素	19.0	
膜分離	10.0	

○ 汚泥

汚泥の海洋投入からの CH₄ 及び N₂O 排出量にかかる活動量は次の式で求める。

【し尿・浄化槽汚泥】

$$A = V_H \times D_H + V_J \times D_J$$

A : 海洋投入されるし尿及び浄化槽汚泥の活動量 [g-BOD]、[g-N]

V_H : 海洋投入処分されるし尿量¹⁾ [kl]

D_H : し尿中の有機物濃度/窒素濃度²⁾ [mg-BOD/l]、[mg-N/l]

V_J : 海洋投入処分される浄化槽汚泥¹⁾ [kl]

D_J : 浄化槽汚泥中の有機物濃度/窒素濃度²⁾ [mg-BOD/l]、[mg-N/l]

(出典)

- 1) 環境省「日本の廃棄物処理」

- 2) 岡崎他 (2001)

【下水汚泥】

$$A = V \times D$$

A : 海洋投入される下水汚泥の活動量 [g-BOD]、[g-N]

V : 海洋投入処分される下水汚泥量¹⁾ [kl]

D : 下水汚泥中の有機物濃度/窒素濃度²⁾ [mg-BOD/l]、[mg-N/l]

(出典)

- 1) 日本下水道協会「下水道統計」

- 2) 岡崎他 (2001) を基に専門家判断(浄化槽汚泥の値を代用)

見積もった活動量は表 7-93 に記す。

表 7-93 活動量：公共用水域に放出された生活排水中の有機物量及び窒素量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
有機物量															
未処理排水 (単独処理浄化槽から)	kt-BOD	392	381	341	267	215	204	194	191	181	173	167	161	154	148
未処理排水 (汲み取り便槽から)	kt-BOD	568	429	298	203	156	146	136	130	120	113	105	101	95	89
未処理排水 (自家処理から)	kt-BOD	46	21	9	4	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1
し尿・浄化槽汚泥 (海洋投入処分)	kt-BOD	22	14	9	4	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
下水汚泥 (海洋投入処分)	kt-BOD	1	1	0	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
合計	kt-BOD	1,029	846	658	478	373	351	333	322	302	287	273	263	250	238
窒素量															
未処理排水 (単独処理浄化槽から)	kt-N	19.6	19.1	17.0	13.4	10.7	10.2	9.7	9.6	9.0	8.6	8.3	8.1	7.7	7.4
未処理排水 (汲み取り便槽から)	kt-N	28.4	21.5	14.9	10.2	7.8	7.3	6.8	6.5	6.0	5.6	5.3	5.0	4.8	4.5
未処理排水 (自家処理から)	kt-N	2.3	1.1	0.5	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.05	0.05	0.06
処理後排水	kt-N	297.0	301.2	281.8	267.0	247.1	251.6	255.0	243.2	250.0	241.3	243.0	241.9	239.2	238.0
し尿・浄化槽汚泥 (海洋投入処分)	kt-N	7.2	3.2	2.2	0.8	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
下水汚泥 (海洋投入処分)	kt-N	0.1	0.1	0.01	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
合計	kt-N	354.6	346.0	316.4	291.5	265.7	269.1	271.6	259.3	265.1	255.6	256.7	255.0	251.7	249.9

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

生活排水の自然界における分解 (5.D.1.-) における CH₄ 及び N₂O 排出係数については、類似する排出源の不確実性を代用する。活動量の不確実性については、表 7-2 にある一般廃棄物 (下水を除く生活排水) の値を適用する。不確実性評価の詳細を表 7-94 に記す。

表 7-94 生活排水の自然界における分解 (5.D.1.-) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
生活排水の自然界における分解	CH ₄	-58%	+58%	-10%	+10%	-59%	+59%	排出係数は 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値であることから、同ガイドラインの不確実性デフォルト値算定の考え方に基づき不確実性を設定。 排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、CH ₄ の不確実性を代用。	専門家判断により設定した一般廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-58%	+58%	-10%	+10%	-59%	+59%			

■ 時系列の一貫性

排出量算定において時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については、第 1 章に詳述している。

e) 再計算

性能評価型合併処理浄化槽の窒素除去率を再検討し、2001年度以降の N_2O 排出量の再計算を行った。

統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。

再計算の影響の程度については、第10章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.5.2. 産業排水 (5.D.2.)

水質汚濁防止法や下水道法に基づき工場等で処理される産業排水からの CH_4 及び N_2O の排出(産業排水の処理(5.D.2.-))、工場等から放出される未処理あるいは処理後の産業排水が自然界において分解することに伴う CH_4 及び N_2O の排出(産業排水の自然界における分解(5.D.2.-))及び最終処分場(埋立)浸出液の処理に伴う CH_4 及び N_2O の排出(最終処分場浸出液の処理(5.D.2.-))を「産業排水(5.D.2.)」に報告する。

7.5.2.1. 産業排水の処理 (5.D.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

水質汚濁防止法や下水道法に基づき工場等で処理される産業排水からの CH_4 及び N_2O の排出を「産業排水の処理(5.D.2.-)」に報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年IPCCガイドラインのデシジョンツリー (Page 6.19, Fig. 6.3) に従い、排水中の有機物量が大きな産業を対象に、 CH_4 、 N_2O 排出量を算定する。 CH_4 排出量の算定は、2006年IPCCガイドラインで設定されているデフォルト値が日本の実態に即していないと考えられるため、日本独自の算定方法を適用し、算定対象とした産業排水中に含まれる年間有機物量をBODベースで把握し、BODあたりの日本独自の排水処理に伴う CH_4 排出係数を乗じて算定する。なお、 CH_4 は排水処理時の生物処理プロセスより発生するため、活動量(生物処理により分解される排水中の有機物量)を把握するにはCODベースよりもBODベースの方が望ましいと考えられることから、日本ではBODベースで CH_4 排出量の計算を行っている。 N_2O 排出量はIPCCガイドラインに算定方法が示されていないため、 CH_4 排出算定方法と同様の方法で、産業排水中の窒素量に日本独自の N_2O 排出係数を乗じて算定を行う。

$$E = EF \times A$$

E : 産業排水の処理に伴う CH_4 、 N_2O 排出量 [kg- CH_4]、[kg- N_2O]

EF : 排出係数 [kg- CH_4 /kg-BOD]、[kg- N_2O /kg-N]

A : 産業排水中の有機物量 [kg-BOD]、産業排水中の窒素量 [kg-N]

■ 排出係数

環境省(2018 a)により得られた実測調査(8施設における夏季及び冬季調査)に基づく国独自の排出係数を適用する(環境省、2018 b)。

表 7-95 産業排水処理施設の排出係数

業種	CH ₄ 排出係数 [g-CH ₄ /kg-BOD]	N ₂ O 排出係数 [g-N ₂ O/kg-N]
食料品製造業	1.2	0.47
パルプ・紙・紙加工品製造業	2.5	0.014
化学工業	0.92	17
鉄鋼業	7.3	4.0
その他の業種（上記業種の平均値）	3.0	5.3

なお、日本での嫌気性排水処理ではメタンがすべて回収されている。また、好気性処理においては、部分的に発生する嫌気状態から少量のメタンが発生していることから、国独自の排出係数を設定している。このため、我が国独自の排出係数は、嫌気性処理からの発生量に対する排出係数のデフォルト値（2006年 IPCC ガイドライン）とは意味が異なる。

■ 活動量

CH₄ 排出に係る活動量は、排水中に含まれる有機物量を BOD ベースで把握する。算定対象は、1996年改訂 IPCC ガイドラインに示されている業種を参考に、排水中の BOD 濃度が高く、排水の処理に伴うメタンの排出量が多い業種について設定する（表 7-96）。産業別の有機物量は、日本下水道協会（2009）にある産業細分類ごとに行った後、中分類ごとに集計する。

ここで、CRF への活動量の報告は COD ベースが指定されているため、国独自の算定方法を採用している当該排出源の活動量を NE として報告している。

$$A_{CH_4,i} = W_i \times BOD_i / 1000$$

ここで、

$$W_i = I_i \times F_{CH_4,i} \times F_{onsite,i}$$

- $A_{CH_4,i}$: 産業細分類 i の活動量 [kg-BOD]
- W_i : CH₄ を発生する排水処理施設に流入する産業細分類 i の産業排水量 [m³]
- BOD_i : 産業細分類 i の流入排水中の BOD 濃度 [mg-BOD/l]
- I_i : 製品の処理及び洗浄に用いられる産業細分類 i の用水量 [m³]
- $F_{CH_4,i}$: CH₄ 発生処理施設において処理される産業細分類 i の産業排水量割合 [%]
- $F_{onsite,i}$: 工場内で処理される産業細分類 i の産業排水割合 [%]

N₂O 排出に係る活動量は産業排水中の窒素量で把握する。活動量は CH₄ 排出量の算定と同じ業種区分で集計する。

$$A_{N_2O,i} = W_i \times TN_i / 1000$$

ここで、

$$W_i = I_i \times F_{N_2O,i} \times F_{onsite,i}$$

- $A_{N_2O,i}$: 産業細分類 i の活動量 [kg-N]
- W_i : N₂O を発生する排水処理施設に流入する産業細分類 i の産業排水量 [m³]
- TN_i : 産業細分類 i の流入排水中の窒素濃度 [mg-N/l]
- I_i : 製品の処理及び洗浄に用いられる産業細分類 i の用水量 [m³]
- $F_{N_2O,i}$: N₂O 発生処理施設において処理される産業細分類 i の産業排水量割合 [%]
- $F_{onsite,i}$: 工場内で処理される産業細分類 i の産業排水割合 [%]

○ 排水処理施設に流入する産業排水量

排水処理施設に流入する産業排水量は経済産業省「工業統計表 用地・用水編」の産業細分

類別製品処理用水及び洗浄用水量を用いる。

○ CH₄ 発生処理施設において処理される産業排水量割合

産業排水処理に伴い、活性汚泥法による排水処理及び嫌気性処理において CH₄ が発生すると考えられる。よって、環境省水・大気環境局「発生負荷量管理等調査」における、「活性汚泥」、「その他生物処理」、「膜処理」、「硝化脱窒」、「その他高度処理」の届出排水量の全排水量に対する割合を産業排水処理割合として産業中分類別に設定する。

○ N₂O 発生処理施設において処理される産業排水量割合

産業排水処理に伴い、主に脱窒等の生物処理プロセスにおいて N₂O が発生すると考えられる。CH₄ 発生処理施設において処理される産業排水量割合を N₂O 排出量の算定でも同様に用いる。

○ 工場内で処理される産業排水割合

当該情報を把握できる統計情報が得られないことから、全ての産業細分類において 1.0 と設定する。

○ 流入排水中の BOD 濃度、窒素濃度

BOD 濃度には、日本下水道協会（1999）に示される産業細分類別の BOD 原水水質を用いる。窒素濃度は、同調査の産業細分類別の排出量原単位（TN）を用いる。

表 7-96 活動量の算定対象業種から排出される BOD 及び窒素濃度

産業中分類	業種	mg-BOD/L	mg-N/L
9	食料品製造業	1,470	62
10	飲料・たばこ・飼料製造業	1,138	77
11	繊維工業	386	36
14	パルプ・紙・紙加工品製造業	556	37
16	化学工業	1,093	191
17	石油製品・石炭製品製造業	975	289
18	プラスチック製品製造業	268	11
19	ゴム製品製造業	112	32
20	なめし革・同製品・毛皮製造業	1,810	60
22	鉄鋼業	246	310

表 7-97 産業排水中の BOD 量 [kt-BOD] 及び窒素量 [kt-N]

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
流入排水中有機物量															
食料品製造業	kt-BOD	297.8	326.2	306.8	289.4	305.7	311.7	299.8	288.0	307.2	348.4	348.4	348.4	348.4	348.4
飲料・たばこ・飼料製造業	kt-BOD	88.7	100.5	92.0	71.5	62.6	58.0	56.9	55.7	52.8	62.0	62.0	62.0	62.0	62.0
繊維工業	kt-BOD	98.1	94.2	65.5	47.7	40.2	40.1	42.8	45.4	38.2	36.4	36.4	36.4	36.4	36.4
パルプ・紙・紙加工品製造業	kt-BOD	471.8	422.7	457.3	423.4	401.0	365.4	353.1	340.9	321.4	324.0	324.0	324.0	324.0	324.0
化学工業	kt-BOD	110.2	95.3	103.0	160.1	151.8	162.9	157.1	151.3	154.2	146.1	146.1	146.1	146.1	146.1
石油製品・石炭製品製造業	kt-BOD	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3
プラスチック製品製造業	kt-BOD	6.2	5.9	6.2	6.9	7.8	6.9	7.1	7.4	7.1	6.2	6.2	6.2	6.2	6.2
ゴム製品製造業	kt-BOD	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
なめし革・同製品・毛皮製造業	kt-BOD	1.3	1.1	0.8	0.5	0.3	0.4	0.4	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
鉄鋼業	kt-BOD	1.2	1.3	1.3	1.5	1.8	1.8	1.7	1.7	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
流入排水中窒素量															
食料品製造業	kt-N	15.5	16.9	16.3	15.0	15.1	16.0	15.3	14.6	15.8	17.4	17.4	17.4	17.4	17.4
飲料・たばこ・飼料製造業	kt-N	3.8	4.2	4.3	3.9	2.7	2.6	2.5	2.4	2.8	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3
繊維工業	kt-N	10.8	10.5	7.4	5.2	4.5	4.4	4.8	5.3	4.3	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1
パルプ・紙・紙加工品製造業	kt-N	18.4	16.5	17.7	16.2	20.2	14.4	13.8	13.2	11.8	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0
化学工業	kt-N	40.0	38.8	30.1	48.5	47.3	50.8	50.7	50.6	50.8	49.8	49.8	49.8	49.8	49.8
石油製品・石炭製品製造業	kt-N	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
プラスチック製品製造業	kt-N	0.2	0.2	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4
ゴム製品製造業	kt-N	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
なめし革・同製品・毛皮製造業	kt-N	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
鉄鋼業	kt-N	57.7	53.9	55.5	54.7	42.3	45.6	53.4	61.2	58.9	57.5	57.5	57.5	57.5	57.5

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は排出係数調査(環境省、2018a)に基づき設定する。活動量の不確実性については、表 7-2 にある産業廃棄物(産業排水)の値を適用する。詳細を表 7-98 に記す。

表 7-98 産業排水の処理(5.D.2.-)における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
産業排水の処理	CH ₄	-60%	+60%	-30%	+30%	-67%	+67%	環境省(2018a)に基づき不確実性を設定。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-95%	+95%	-30%	+30%	-100%	+100%			

■ 時系列の一貫性

CH₄、N₂O 発生処理施設において処理される産業排水量割合のデータが、2001 年以降は 2004 年の調査結果のみが反映可能な状態であるため、残りの期間は内挿及び据え置きを行い一貫した活動量データを構築している。算定方法自体の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については、第 1 章を参考のこと。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.5.2.2. 産業排水の自然界における分解 (5.D.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

我が国で発生する産業排水の多くは産業排水処理施設において処理されているが、公共用水域に放出されている処理後排水にも窒素が残存する。また、一部の産業排水は未処理のまま公共用水域に放出されている。本カテゴリーでは、公共用水域で分解する未処理の産業排水から発生する CH₄、N₂O、及び処理後排水から発生する N₂O の報告を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

公共用水域に放出される未処理あるいは処理後の産業排水から排出される CH₄・N₂O 排出量は、2006年 IPCC ガイドラインの方法論に基づき、以下のように推計する。

$$E = EF \times A$$

- E* : 産業排水の自然界における分解に伴う CH₄、N₂O 排出量 [kg-CH₄]、[kg-N₂O]
EF : 排出係数 [kg-CH₄/kg-BOD]、[kg-N₂O/kg-N]
A : 産業排水中の有機物量 [kg-BOD] または窒素量 [kg-N]

■ 排出係数

未処理排水・処理後排水ともに CH₄ 及び N₂O の排出係数は、「7.5.1.4.生活排水の自然界における分解 (5.D.2.-)」と同様に 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いる。

表 7-99 産業排水の自然界における分解の CH₄・N₂O 排出係数

ガス	単位	排出係数	出典
CH ₄	kg-CH ₄ /kg-BOD	0.06	2006年 IPCC ガイドライン
N ₂ O	kg-N ₂ O/kg-N	0.0079	2006年 IPCC ガイドライン

■ 活動量

算定対象の業種は、「7.5.2.1. 産業排水の処理 (5.D.2.-)」にある表 7-96 に示す 10 区分の産業中分類とする。

○ 未処理排水

活動量は工場・事業場から公共用水域に直接放出される未処理の産業排水中の BOD または窒素負荷量の合計値とする。各工場・事業場における排水中の BOD または窒素負荷量は環境省 水・大気環境局「水質汚濁物質排出量総合調査」に示される排水量と BOD または窒素濃度を乗じて計算する。

$$A = \sum (V_i \times Q_i)$$

- A* : 未処理排水の活動量 (BOD または TN 負荷量) [kg-BOD/L]、[kg-N/L]
V_i : 公共用水域に産業排水を直接排出する工場・事業場 *i* における産業排水量 [m³]
Q_i : 工場・事業場 *i* における未処理産業排水中の BOD または TN 濃度 [g-BOD/L]、[g-N/L]

表 7-100 活動量：公共用水域に放出された未処理の産業排水中の BOD 及び窒素負荷量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
未処理排水中の有機物量															
食料品製造業	kt-BOD	8.0	8.5	9.0	16.3	6.0	6.2	6.3	5.3	4.3	4.6	5.0	5.3	5.5	5.5
飲料・たばこ・飼料製造業	kt-BOD	0.6	0.6	0.6	0.6	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.3	0.4	0.4
繊維工業	kt-BOD	3.4	2.9	2.2	2.2	4.4	4.4	4.5	4.8	5.1	3.8	2.5	2.9	3.3	3.3
パルプ・紙・紙加工品製造業	kt-BOD	9.4	8.9	8.9	8.4	3.7	3.6	3.6	5.3	6.9	5.2	3.4	3.7	4.1	4.1
化学工業	kt-BOD	49.5	50.6	44.9	46.7	28.2	28.3	28.4	25.9	23.4	25.3	27.2	24.0	20.8	20.8
石油製品・石炭製品製造業	kt-BOD	25.4	20.8	24.6	26.9	12.3	11.3	10.2	9.3	8.5	9.8	11.2	10.2	9.1	9.1
プラスチック製品製造業	kt-BOD	0.6	0.6	0.6	0.8	0.7	0.7	0.7	0.6	0.5	0.6	0.6	0.4	0.1	0.1
ゴム製品製造業	kt-BOD	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.04	0.1	0.1	0.1	0.04	0.04
なめし革・同製品・毛皮製造業	kt-BOD	0.3	0.3	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
鉄鋼業	kt-BOD	39.7	37.3	40.3	36.5	25.7	26.1	26.4	22.8	19.1	22.5	26.0	22.2	18.5	18.5
未処理排水中の窒素量															
食料品製造業	kt-N	5.0	5.3	5.6	5.3	3.1	3.2	3.3	3.3	3.3	2.9	2.6	2.5	2.4	2.4
飲料・たばこ・飼料製造業	kt-N	0.6	0.6	0.6	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3
繊維工業	kt-N	0.8	0.7	0.5	0.4	1.7	1.7	1.7	1.8	1.8	1.7	1.6	1.6	1.6	1.6
パルプ・紙・紙加工品製造業	kt-N	0.7	0.7	0.7	0.5	0.6	0.6	0.6	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
化学工業	kt-N	31.4	32.2	28.5	28.2	22.1	21.3	20.6	18.3	16.1	15.8	15.5	15.9	16.2	16.2
石油製品・石炭製品製造業	kt-N	19.6	16.0	18.9	8.8	7.6	7.6	7.6	7.4	7.2	7.0	6.7	6.5	6.3	6.3
プラスチック製品製造業	kt-N	0.3	0.3	0.3	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.2	0.1	0.1
ゴム製品製造業	kt-N	0.3	0.3	0.2	0.3	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
なめし革・同製品・毛皮製造業	kt-N	0.01	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
鉄鋼業	kt-N	33.3	31.2	33.7	41.8	17.6	17.6	17.6	16.3	14.9	14.6	14.2	14.7	15.2	15.2

○ 処理後排水

活動量は、工場・事業場から公共用水域に排出される処理後の産業排水中の窒素負荷量の合計値とする。各工場・事業場における排水中の窒素負荷量は環境省 水・大気環境局「水質汚濁物質排出量総合調査」に示される排水量と窒素濃度を乗じて計算する。

$$A = \sum (V_i \times TN_i)$$

- A : 処理後排水の活動量 (TN 負荷量) [kg-N/L]
- V_i : 産業排水処理施設で処理した後、公共用水域に産業排水を排出する工場・事業場 i における産業排水量 [m³]
- TN_i : 工場・事業場 i の産業排水中の TN 濃度 [g-N/L]

表 7-101 活動量：公共用水域に放出された処理後の産業排水中の窒素負荷量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
食料品製造業	kt-N	5.8	6.2	6.5	7.0	3.9	4.0	4.2	6.0	7.9	6.6	5.3	5.3	5.4	5.4
飲料・たばこ・飼料製造業	kt-N	1.1	1.1	1.1	0.7	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.4	0.4	0.7	1.1	1.1
繊維工業	kt-N	2.5	2.1	1.6	2.1	1.7	1.7	1.7	1.6	1.5	1.3	1.1	1.2	1.4	1.4
パルプ・紙・紙加工品製造業	kt-N	8.4	8.0	8.0	8.0	5.4	5.4	5.4	4.6	3.8	4.1	4.4	5.6	6.8	6.8
化学工業	kt-N	17.0	17.4	15.5	14.2	16.5	15.9	15.4	14.6	13.7	13.2	12.7	11.2	9.7	9.7
石油製品・石炭製品製造業	kt-N	2.2	1.8	2.1	1.1	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
プラスチック製品製造業	kt-N	0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
ゴム製品製造業	kt-N	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
なめし革・同製品・毛皮製造業	kt-N	0.28	0.23	0.18	0.09	0.04	0.04	0.04	0.03	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.02
鉄鋼業	kt-N	5.3	5.0	5.4	4.1	3.1	3.1	3.1	2.6	2.1	2.4	2.7	2.8	2.9	2.9

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

産業排水の自然界における分解 (5.D.2.-) における CH₄ 及び N₂O 排出係数については、類似する排出源の不確実性を代用する。活動量の不確実性については、表 7-2 にある産業廃棄物 (産業排水) の値を適用する。不確実性評価の詳細を表 7-102 に記す。

表 7-102 産業排水の自然界における分解 (5.D.2.-) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
産業排水の自然界における分解	CH ₄	-58%	+58%	-30%	+30%	-66%	+66%	排出係数は2006年IPCCガイドラインのデフォルト値であることから、同ガイドラインの不確実性デフォルト値算定の考え方に基づき不確実性を設定。 排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、CH ₄ の不確実性を代用。	専門家判断により設定した産業廃棄物統計の不確実性を適用。	誤差伝播式で合成
	N ₂ O	-58%	+58%	-30%	+30%	-66%	+66%			

■ 時系列の一貫性

排出量算定において時系列の一貫性は担保されている。

d) QA/QC と検証

2006年IPCCガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリQC手続きを実施している。一般的なインベントリQCには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC活動の詳細については、第1章に詳述している。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.5.2.3. 最終処分場浸出液の処理 (5.D.2.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

最終処分場（埋立）における浸出液処理に伴うCH₄及びN₂Oの排出を「最終処分場浸出液の処理 (5.D.2.-)」に算定・報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

一般廃棄物及び産業廃棄物最終処分場に埋め立てられた有機性廃棄物から将来的に浸出液中に移行する有機物量 (kg-BOD/年) 及び窒素量 (kg-N/年) を活動量として、2006年IPCCガイドラインに示された生活排水の自然界における分解に伴うCH₄・N₂O排出量算定方法を適用し、以下のとおりCH₄及びN₂O排出量を算定する。

$$E = EF \times L_i$$

E : CH₄・N₂O 排出量

EF : CH₄・N₂O 排出係数

L_i : 埋め立てられた有機性廃棄物から将来的に浸出液中に移行する有機物量・窒素量 [kg-BOD/年]、[kg-N/年]

■ 排出係数

2006年IPCCガイドラインに示された生活排水の自然界における分解に伴うCH₄及びN₂O

各排出係数の算定方法に基づき設定する。

CH₄ 排出係数

2006年 IPCC ガイドラインに従い、最大メタン生成能 (B_0) にメタン変換係数 (MCF) を乗じて設定する。最大メタン生成能は 2006年 IPCC ガイドラインに示される「生活排水 (Domestic Waste Water)」のデフォルト値を用いて 0.6 [kg-CH₄/kg-BOD] と設定する。メタン変換係数は、「処理設備 (treated system)」の「嫌気処理槽 (anaerobic reactor)」の場合のデフォルト値である 0.8 を採用する。

$$\begin{aligned} EF_{CH_4} &= B_0 \times MCF \\ &= 0.6 \text{ [kg-CH}_4\text{/kg-BOD]} \times 0.8 \\ &= 0.48 \text{ [kg-CH}_4\text{/kg-BOD]} \end{aligned}$$

B_0 : 最大メタン生成能 [kg-CH₄/kg-BOD] (IPCC デフォルト値 : 0.6)

MCF : メタン変換係数 (IPCC デフォルト値 : 0.8)

N₂O 排出係数

N₂O の排出係数 (排水中の窒素負荷量あたりの N₂O 排出量) は、2006年 IPCC ガイドラインに示されるデフォルト値 0.005 (kg N₂O-N/kg N) を単位換算して設定する。

$$\begin{aligned} EF_{N_2O} &= 0.005 \text{ [kg-N}_2\text{O-N/kg-N]} \times 44/28 \\ &= 0.0079 \text{ [kg-N}_2\text{O /kg-N]} \end{aligned}$$

■ 活動量

CH₄・N₂O の排出に係る活動量は、環境省 (2010) に基づき、一般廃棄物及び産業廃棄物最終処分場における有機性廃棄物最終処分量あたりの有機物量・窒素量の浸出液中への移行率を設定し、埋め立てられた有機性廃棄物から将来的に浸出液中に移行する BOD 量・TN 量 (潜在量) にて把握する。

CH₄ 排出の活動量

$$L_{BODi} = F_{BOD} \times W \times T_i$$

L_{BODi} : 埋め立てられた有機性廃棄物から将来的に浸出液中に移行する有機物量 [kg-BOD/年]

F_{BOD} : 有機性廃棄物最終処分量あたりの有機物の浸出液中への移行率 [kg-BOD/t]
環境省 (2010) より 0.188 [kg-BOD/t] と設定する。

W : 有機性廃棄物最終処分量 [t/年] (直接最終処分+処理後最終処分 (焼却灰含む))
循環利用量調査報告書より把握する。

T_i : i 処分場において生物処理される浸出液の割合
環境省 (2010) より、87.6% と設定する。

N₂O 排出の活動量

$$L_{TNi} = F_{TN} \times W \times T_i$$

- L_{TNi} : 埋め立てられた有機性廃棄物から将来的に浸出液中に移行する窒素量 [kg-N/年]
 F_{TN} : 有機性廃棄物最終処分量 [t/年] (直接最終処分+処理後最終処分 (焼却灰含む))
 環境省 (2010) より、0.254 [kg-N/t] と設定する。
 W : 有機性廃棄物最終処分量 [t/年] (直接最終処分+処理後最終処分 (焼却灰含む))
 循環利用量調査報告書より把握する。
 T_i : i 処分場において生物処理される浸出液の割合
 環境省 (2010) より、87.6%と設定する。

表 7-103 最終処分場浸出液処理に伴う有機物量 (kt-BOD) 及び窒素量 (kt-N)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
有機物量	kt-BOD	2.6	2.5	2.2	1.6	0.8	0.8	0.7	0.8	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4
窒素量	kt-N	3.5	3.3	3.0	2.2	1.1	1.1	0.9	1.0	0.8	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

最終処分場浸出液の処理 (5.D.2.-) における CH_4 及び N_2O 排出係数については、類似する排出源の不確実性を代用する。活動量の不確実性については、表 7-2 にある産業廃棄物 (産業排水) の値を適用する。詳細を表 7-104 に記す。

表 7-104 最終処分場浸出液の処理 (5.D.2.-) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
最終処分場浸出液の処理	CH_4	-39%	+39%	-100%	+100%	-107%	+107%	排出係数出典の環境省 (2010) より引用。	活動量の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により設定。	誤差伝播式で合成
	N_2O	-39%	+39%	-100%	+100%	-107%	+107%	排出係数の不確実性に関する情報が把握できないため、 CH_4 の不確実性を代用。		

■ 時系列の一貫性

排出量算定において時系列の一貫性は確保されている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については、第 1 章を参考のこと。

e) 再計算

統計データの更新に伴い排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については、第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

7.6. その他 (5.E.)

本カテゴリーでは、石油由来の界面活性剤の分解に伴い排出される CO_2 排出量を算定する。

推定したその他カテゴリーからの温室効果ガス排出量を表 7-106 に示す。

表 7-105 その他 (5.E.) で排出量の算定を行う区分

区分	算定対象	処理方式	CO ₂	CH ₄	N ₂ O
5.E.1. (7.6.1)	石油由来の界面活性剤	排水処理施設及び自然界における分解	○	NA	NA

2018 年度における当該排出源カテゴリーからの温室効果ガス排出量は 673 kt-CO₂ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 0.05% を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 4.2% の減少となっている。本カテゴリーの排出量の減少には、PRTR (Pollutant Release and Transfer Register) 制度によりアルキルベンゼン系界面活性剤の使用量が減少したことが寄与している。

表 7-106 その他 (5.E.) カテゴリーからの温室効果ガス排出量

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO ₂	5.E. その他 (石油由来の界面活性剤の分解)	kt-CO ₂	703	668	656	507	514	527	524	528	605	617	625	619	637	673

7.6.1. 石油由来の界面活性剤の分解 (5.E.-)

a) 排出源カテゴリーの説明

日本では家庭や工場等における各種洗浄の際に界面活性剤が使用されている。排水処理施設及び自然界に排出された石油由来の界面活性剤の分解に伴い CO₂ が排出される。本排出源は廃棄物分野の既存区分 (5.A.~5.D.) に対応しないことから、「その他 (5.E.)」に報告する。「排水処理に伴う CH₄・N₂O 排出」と「石油由来の界面活性剤の分解に伴う CO₂ 排出」は異なるガス種類を算定対象としており、温室効果ガスの重複計上等の相互関係は存在しない。

b) 方法論

■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドラインには該当する排出量算定方法が記載されていないため、日本独自の算定方法を適用する。排水処理施設及び自然界に排出された界面活性剤中の炭素は、界面活性剤の分解に伴い最終的に CO₂ として大気中に排出されることから、排水処理施設及び自然界に排出された界面活性剤中の炭素量をベースに CO₂ 排出量の算定を行う。算定対象は石油由来の界面活性剤中炭素であり、界面活性剤中炭素の全量が最終的に CO₂ に分解されると想定する。また、国内で使用された界面活性剤の全量が排水処理施設及び自然界に排出されるとする。石油由来の界面活性剤中炭素量は、界面活性剤生産企業における界面活性剤原料消費量の集計結果と界面活性剤の輸出入量を用いて把握する。

以上より、CO₂ 排出量は石油由来の界面活性剤原料別の使用量に、当該原料中の炭素含有率を乗じて算定する。算定対象は「合成アルコール」「アルキルベンゼン」「アルキルフェノール」「エチレンオキサイド」とする。

なお、排水処理施設に排出された石油由来の界面活性剤中の炭素分の一部は汚泥により吸着及び資化される。これらの炭素分は微生物による分解ではなく、余剰汚泥の焼却及び埋立処分に伴い大気中に排出されるが、本算定における CO₂ 排出に含めて計算されている。

■ 排出係数

石油由来の界面活性剤原料別の種類別に、分子中の平均的な炭素含有率より 1t の界面活性剤が分解された際に排出される kg で表した CO₂ の量を求め、排出係数を設定する。

$$EF_i = C_i \times 1,000 \times 44/12$$

- EF_i : 原料界面活性剤の石油由来の原料 i の排出係数
 C_i : 界面活性剤の石油由来の原料 i 中の平均的な炭素含有率

表 7-107 界面活性剤の石油由来の原料別の平均的な炭素含有率

原料種類	炭素数	分子量	炭素含有率	設定根拠
合成アルコール	12	186	77.4%	C12 アルコールを代表的な成分として設定
アルキルベンゼン	18	250	86.4%	C12 アルキルベンゼンを代表的な成分として設定
アルキルフェノール	15	210	85.7%	C9 アルキルフェノールを代表的な成分として設定
エチレンオキシド	2	44	54.5%	エチレンオキシドの分子より設定 (C ₂ H ₄ O)

■ 活動量

活動量は、排水処理施設及び自然界に排出された界面活性剤の製造に用いられた石油由来界面活性剤原材料使用量である。日本で生産される界面活性剤は一部輸出されるため、界面活性剤原料使用統計から把握した界面活性剤使用量に輸出入量補正係数を乗じて活動量を算定する。

○ 界面活性剤使用量

界面活性剤原料別使用量は経済産業省「生産動態統計 化学工業統計編」に示される界面活性剤等の原材料消費量を用いる。2002年度以降は消費量の取りまとめが行われていないことから、同統計の界面活性剤生産量と、1990～2001年度における消費量と生産量の割合の単純平均値(k値)を用いて使用量の推計を行った。

○ 輸出入量補正係数

財務省「貿易統計」に示された「陰イオン系界面活性剤」「陽イオン系界面活性剤」「非イオン系界面活性剤」「その他の有機界面活性剤」の分類別輸出入量と界面活性剤使用量より算定する。界面活性剤原料の中にはいくつかの界面活性剤の原料として用いられるものがあるため、その場合は該当する界面活性剤の分類ごとの輸出入量補正係数を界面活性剤生産量で加重平均して輸出入量補正係数を設定する。

$$F_{corr.} = (P + I - E)/P$$

- $F_{corr.}$: 輸出入量補正係数
 P : 界面活性剤生産量 [t]
 I : 界面活性剤輸入量 [t]
 E : 界面活性剤輸出量 [t]

表 7-108 石油由来の界面活性剤の分解に伴う活動量

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
合成アルコール	t	29,239	16,253	28,285	31,609	32,872	33,750	34,870	36,193	43,324	42,947	44,299	45,551	45,601	47,839
アルキルベンゼン	t	105,432	102,794	80,832	47,349	50,206	50,519	46,369	44,502	44,980	47,494	44,044	39,485	42,769	44,565
アルキルフェノール	t	10,141	8,798	7,454	3,448	2,044	2,054	2,263	2,910	4,318	4,885	4,873	4,638	5,661	6,208
エチレンオキシド	t	124,984	132,175	146,509	127,150	126,301	131,148	134,532	136,679	161,969	163,777	171,380	174,243	176,247	187,717

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

CO₂ 排出係数の不確実性については、排出係数算定に用いた分子量データをもとに専門家判断により設定する。活動量については、不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により一般廃棄物統計と同値を設定する。

表 7-109 石油由来の界面活性剤の分解 (5.E-) における不確実性評価

項目	GHGs	排出・吸収係数の不確実性		活動量の不確実性		排出・吸収量の不確実性		排出・吸収係数の不確実性設定方法	活動量の不確実性設定方法	排出・吸収量の不確実性設定方法
		(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)			
石油由来の界面活性剤の分解	CO ₂	-1%	+1%	-10%	+10%	-10%	+10%	排出係数算定に用いた分子量データをもとに専門家判断により不確実性を設定。	活動量の不確実性に関する情報が把握できないため、専門家判断により一般廃棄物統計と同値を設定。	誤差伝播式で合成

■ 時系列の一貫性

排出量算定において一貫した手法を用いている。ただし、活動量として利用している界面活性剤原材料消費量の統計値が 2001 年で廃止されているため、2002 年以降は生産量から推計する方法を適用している。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動の詳細については第 1 章を参照のこと。

e) 再計算

統計データの修正に伴い排出量の再計算を行った。再計算の影響の程度については、第 10 章を参照のこと。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための1996年改訂IPCCガイドライン」(1997)
2. IPCC「温室効果ガスインベントリにおけるグッドプラクティスガイダンス及び不確実性管理報告書」(2000)
3. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」(2006)
4. 環境庁「二酸化炭素排出量調査報告書」(1992)
5. 環境庁「平成7年度大気汚染物質排出量総合調査」(1995)
6. 環境庁「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第2部」(2000)
7. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第1部」(2006a)
8. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第4部」(2006b)
9. 環境省廃棄物・リサイクル対策部「メタンガス化(生ごみメタン)施設整備マニュアル,平成20年1月」(2008)
10. 環境省廃棄物・リサイクル対策部「よりよい水環境のための浄化槽の自己管理マニュアル,平成21年3月」(2009)
11. 環境省「平成21年度廃棄物分野の温室効果ガス排出係数正確化に関する調査業務報告書」(2010)
12. 環境省廃棄物・リサイクル対策部「特別管理産業廃棄物に係る温室効果ガス排出量推計調査報告書(平成21年度及び22年度)」(2010-2011)
13. 環境省地球環境局低炭素社会推進室「平成23年度温室効果ガスインベントリ作成のための排出係数開発等調査」(2012)
14. 環境省地球環境局低炭素社会推進室「我が国の温室効果ガスインベントリにおける不確実性評価ガイドライン」(2013a)
15. 環境省「平成24年度温室効果ガス排出量算定方法検討会第2回廃棄物分科会」(2013b)
16. 環境省地球環境局低炭素社会推進室「平成24年度温室効果ガスインベントリ作成のための分散型生活排水処理に係る排出係数開発調査」(2013c)
17. 環境省地球環境局低炭素社会推進室「廃棄物分野の温室効果ガス排出量削減対策効果の算定に向けた排出係数開発等調査」(2018a)
18. 環境省「平成29年度温室効果ガス排出量算定方法検討会第2回廃棄物分科会」(2018b)
19. 環境省「環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書」(2019)
20. 環境省環境再生・資源循環局「日本の廃棄物処理」
21. 環境省環境再生・資源循環局「一般廃棄物処理実態調査」
22. 環境省環境再生・資源循環局「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用量実態調査報告書(廃棄物等循環利用量実態調査編)」
23. 環境省環境再生・資源循環局「廃棄物統計の精度向上及び迅速化のための検討調査報告書」
24. 環境省環境再生・資源循環局「不法投棄等産業廃棄物残存量調査結果」
25. 環境省環境再生・資源循環局「容器包装リサイクル法に基づく市町村の分別収集及び再商品化実績について」
26. 環境省環境再生・資源循環局「浄化槽の指導普及に関する調査」
27. 環境省環境再生・資源循環局「産業廃棄物処理施設状況調査」
28. 環境省環境再生・資源循環局「産業廃棄物排出・処理状況調査報告書」
29. 環境省環境再生・資源循環局「産業廃棄物行政組織等調査報告書」
30. 環境省水・大気環境局「発生負荷量管理等調査」
31. 環境省水・大気環境局「水質汚濁物質排出量総合調査」
32. 厚生労働省生活衛生局水道環境部「産業廃棄物行政組織等調査報告書」(1995-1999)

33. 国土交通省都市・地域整備局下水道部「バイオソリッド利活用基本計画策定マニュアル(案)」(2003)
34. 経済産業省「工業統計表 用地・用水編」
35. 経済産業省「生産動態統計 化学工業統計編」
36. 経済産業省「繊維・生活用品統計年報」
37. 経済産業省「産業分類別の副産物(産業廃棄物・有価発生物)発生状況等に関する調査」
38. 資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」
39. 財務省「貿易統計」
40. ごみ固形燃料適正管理検討会「ごみ固形燃料の適正管理方策について」(2003)
41. 石川県、大阪市、神奈川県、京都府、神戸市、新潟県、広島県、兵庫県、福岡県、北海道「固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査」(1991-1997)
42. 石川県、大阪市、神奈川県、京都府、広島県、兵庫県「固定発生源からの温室効果ガス排出量原単位作成調査」(1991-1999)
43. 兵庫県「固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査」(1994)
44. 兵庫県「ひょうごエコタウン構想」(2003)
45. 神奈川県「固定発生源からの温室効果ガス排出係数調査」(1994)
46. 国土技術政策総合研究所「平成12年度下水道関係調査研究年次報告書集」国総研資料第10号 p. 93-96 (2001)
47. 国土技術政策総合研究所「平成13年度下水道関係調査研究年次報告書集」国総研資料第64号 p. 119-122 (2002)
48. (財)容器包装リサイクル協会「再商品化(リサイクル)実績」
49. (財)容器包装リサイクル協会「容器包装リサイクル法の評価・検討」(中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会(第20回)、産業構造審議会環境部会廃棄物・リサイクル小委員会容器包装リサイクルWG(第8回)合同会合(第1回)(2004)
50. (財)日本環境衛生センター「廃棄物基本データ集 Fact Book 2000」(2001)
51. (財)日本環境衛生センター「メタン等排出量分析調査結果報告書 平成元年度環境庁委託業務」(1990)
52. (財)東京都環境公社「水辺環境と窒素 ―脱窒素型の小規模合併処理浄化槽の開発―」東京都環境科学研究所ニュース No.7 (1996年5月号)(1996)
53. (社)日本経済団体連合会「環境自主行動計画(循環型社会形成編)フォローアップ調査結果」
54. (社)日本鉄鋼連盟「廃プラ等利用の現状と今後の課題」
55. (社)セメント協会「セメントハンドブック」
56. (社)日本自動車タイヤ協会「日本のタイヤ産業」
57. (社)日本衛生材料工業連合会「日衛連 NEWS」
58. (社)畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御」(2002)
59. (社)潤滑油協会「潤滑油リサイクルハンドブック」
60. (社)日本下水道協会「流域別下水道整備総合計画調査 指針と解説 平成11年版」(1999)
61. (社)日本下水道協会「下水道施設計画・設計指針と解説」(2009)
62. (社)日本下水道協会「下水道統計(行政編)」
63. (社)日本水道協会「水道統計(施設・業務編)」
64. (社)地域資源循環技術センター「バイオマス利活用技術情報データベース」
65. 日本化学繊維協会「繊維ハンドブック」
66. 日本RPF工業会、RPF品質基準(2004年3月制定)
67. 廃棄物学会「廃棄物ハンドブック」(1997)

68. 大気環境学会「温室効果ガス排出量推計手法調査報告書」(1996)
69. PET ボトルリサイクル推進協議会「PET ボトルリサイクル年次報告書」
70. 藤本政裕「下水汚泥と街路樹剪定枝葉の有効利用について」地域技術第15号、福井県雪対策・建設技術研究所(2002)
71. 藤島夕喜代、北川賀津一、中村静夫、木津良一「多段蒸留方式による有機汚泥ゼロエミッション処理技術の確立」平成15年度研究報告、石川県工業試験場(2004)
72. 池道彦、惣田訓「B-071 わが国の排水処理ストリームにおける炭素・窒素フローの評価とCH₄およびN₂Oの削減対策の評価」環境省地球温暖化環境研究総合推進費研究(2010)
73. 伊藤和憲「LFG発生量の推定についての一考察」東京都清掃技報第18号(1992)
74. 上野広行、辰市祐久、岩崎好陽「ごみ焼却炉からの亜酸化窒素及びメタンの排出要因の検討」東京都環境科学研究所年報(1992)
75. 中村富雄、安田憲二、田所正晴、桜井敏郎「下水汚泥焼却における亜酸化窒素の排出実態について」第20回全国都市清掃研究発表会講演論文集、p. 391-393(1998)
76. 松原誠、水落元之「下水処理場からの亜酸化窒素放出量調査」環境衛生工学研究8(3)(1994)
77. 岡崎貴之、清水敏秀、森田昭「し尿処理施設の精密機能検査にみる運転実績の現状について(第4報)」日本環境衛生センター所報第28号(2001)
78. 大村友章、河窪義男、山田正人「高負荷型し尿処理施設における亜酸化窒素排出係数に関する考察」都市清掃第57巻第260号(2004+)
79. 大嶋吉雄・河井竹彦「下水汚泥の燃料化に関する調査」土木研究所資料第2509号、昭和61年度下水道関係調査研究年次報告書集、建設省土木研究所(1986)
80. 関勝四郎「新型固形燃料RPFの現状と新技術C-RPFについて」環境管理40(8)(2004)
81. 鈴木善三、落修一、宮田和男「下水汚泥流動焼却炉の亜酸化窒素排出量の連続測定」第11回環境工学総合シンポジウム2001講演論文集、p. 387-390(2001)
82. 竹石和夫、渡部春樹、松原誠、佐藤和明、前橋隆介、田中忠美、三羽宏明、若杉泰弘、山下研二「流動炉における排ガス成分の挙動解明及び削減に関する共同研究報告書、建設省土木研究所・名古屋市下水道局」(1994)
83. 竹石和夫、渡部春樹、松原誠、平山孝浩、前橋隆介、高麗昭憲、若杉泰弘、吉川開二「流動炉における排ガス成分の挙動解明及び削減に関する共同研究報告書、建設省土木研究所・名古屋市下水道局」(1996)
84. 田中伸行、安達忠弘、瀬野尾昭吾、吉田昭「下水処理汚泥の成分について」東北農業研究27(1980)
85. 田中勝、井上雄三、松澤裕、大迫政治、渡辺征夫「B-2(1) 廃棄物処理場からの放出量の解明に関する研究」平成6年度地球環境研究総合推進費研究調査報告書(1995)
86. 田中勝、井上雄三、大迫政治、山田正人、渡辺征夫「B-16(7) 廃棄物分野におけるCH₄・N₂Oの発生抑制対策に関する研究」平成9年度地球環境研究総合推進費研究調査報告書(1998)
87. 田中勝、「廃棄物学概論」丸善(1998)
88. 上野広行、辰市祐久、大岩川由有子「下水処理場におけるN₂Oの削減対策の検討」東京都環境科学研究所年報(1995)
89. 安田憲二、高橋通正、矢島巖、金子幹宏「下水汚泥焼却にともなう亜酸化窒素の排出挙動」廃棄物学会論文誌vol. 5、No.4(1994)

第8章 その他の分野

8.1. 分野の概要

UNFCCC インベントリ報告ガイドライン（決定 24/CP.19）の paragraph 29 において、各締約国は、国家インベントリ報告書（NIR）に IPCC ガイドラインに含まれていない各国独自の排出源についての説明を記すべきとされている。この規定に従い、その他の分野の排出状況の概要を以下に示す。

8.2. CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃

CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃のうち、その他の分野で報告している排出量及び吸収量はない。

8.3. NO_x、CO、NMVOC、SO_x

前駆物質（NO_x、CO、NMVOC）及び硫黄酸化物（SO_x）のうち、喫煙起源の CO 排出をその他の分野で報告している。（別添3参照）

第9章 二酸化炭素と一酸化二窒素の間接排出

9.1. 分野の概要

a) カテゴリーの説明

間接 CO₂については、UNFCCC 報告ガイドラインのパラグラフ 29 に従い、報告することも選択できることになり、また我が国の実態を踏まえた算定方法が確立されたことから、我が国は、CH₄、CO、NMVOCs の大気中での酸化による間接 CO₂の排出を報告することを選択する。ただし、農業、LULUCF 分野以外の排出源からの間接 N₂O の排出について報告することを選択しない。

表 9-1 に示したカテゴリーからの蒸発起源 NMVOC 及び CH₄からの間接 CO₂排出量を計上する。蒸発起源 NMVOC 及び CH₄以外に、燃料の燃焼起源の CH₄、CO 及び NMVOC や、自動車からの燃料蒸発ガス¹、石油由来廃棄物の燃焼起源の CH₄、CO 及び NMVOC も大気中での酸化が起きるが、これらの排出に伴う間接 CO₂は、燃料の燃焼部門 (1.A.) の CO₂排出量、廃棄物分野の焼却と野焼き (5.C.) からの CO₂排出量にすでに含まれている²ため、計上対象外とする。また、農業分野や、LULUCF 分野、廃棄物分野、その他の分野におけるバイオマス起源の CH₄、CO、NMVOC に由来する間接 CO₂は、2006 年 IPCC ガイドラインに従い、カーボンニュートラルの観点から計上対象外とする。

表 9-1 間接 CO₂排出サブカテゴリー

サブカテゴリー	CH ₄ 由来	CO 由来	NMVOC 由来
1.B 燃料からの漏出	○	NE, NO	○
2 工業プロセス及び製品の使用	○	NE	○

b) 方法論

■ 算定方法

蒸発起源の NMVOC 及び CH₄が大気中で酸化されることによる CO₂を、2006 年 IPCC ガイドラインに記載されている下記換算式に基づき、算定する。

【間接 CO₂排出量算定式】

$$E_{CO_2} = E_{CH_4} \times \frac{44}{16}$$

$$E_{CO_2} = E_{NMVOC} \times C \times \frac{44}{12}$$

E_{CO_2} : 間接 CO₂排出量 [kt]

E_{CH_4} : CH₄排出量 [kt]

E_{NMVOC} : NMVOC 排出量 [kt]

C : NMVOC 中の平均炭素含有率

¹ 「1.A. 燃料の燃焼」の「3. 運輸」にて計上。

² 「1.A. 燃料の燃焼」「5. 廃棄物」分野における化石燃料の燃焼においては、化石燃料に含まれる炭素の全量が CO₂になると想定している。

■ 各種パラメータ

「NMVOC 中の平均炭素含有率」については、各排出源から排出される NMVOC 各物質の炭素含有率を各物質の構成比率を用いて加重平均して算出した値を使用する。各物質の炭素含有率は分子式より設定し、各排出源に含まれる物質及びその構成比は、VOC 排出インベントリ等、各種資料より推定する。なお、2014 年度までは各発生源別に平均炭素含有率を設定するが、数値の経年変動が小さいことより 2015 年度以降は 2014 年度における全平均の炭素含有率 0.73 をすべての発生源に使用する。ただし、塗膜剥離剤等の 2018 年以降の提出から報告を開始した排出源については、全期間について 0.73 を用いる。

■ 活動量

燃料からの漏出 (1.B.) 分野からの CH₄排出量は 3 章を参照。化学産業 (2.B.) 及び金属製造 (2.C.) からの CH₄排出量は 4 章を参照。各分野からの CO、NMVOC については別添 3 を参照。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

別添 2 参照。

■ 時系列の一貫性

「NMVOC 中の平均炭素含有率」については、それぞれ一貫した統計から各物質の構成比率を算出している。活動量については、関連の章を参照。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出・吸収量の算定に用いている活動量、排出・吸収係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、第 1 章に記述している。

e) 再計算

再計算の影響の程度については 10 章参照。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

参考文献

1. IPCC 「温室効果ガスインベントリのための 2006 年 IPCC ガイドライン」(2006)
2. UNFCCC 「改訂 UNFCCC インベントリ報告ガイドライン」(決定 24/CP.19 附属書 I) (FCCC/CP/2013/10/Add.3) (2014)
3. 環境省 「揮発性有機化合物 (VOC) 排出インベントリ」

第10章 再計算及び改善点

10.1. 再計算に関する解説と正当性

ここでは、2020年提出インベントリにおける排出・吸収量の算定に関する改善点について解説を行う。

UNFCCC インベントリ報告ガイドライン及び2006年IPCCガイドラインでは、1) 新しい算定手法の適用、2) 新規排出・吸収区分の追加、3) データの改訂が行われた場合、基準年以降全年にわたり排出量・吸収量を再計算することを附属書I国に求めている。以下に、前年提出インベントリからの主な変更点について示す。

10.1.1. 全般的事項

我が国固有の事情として一般に、インベントリ作成時点での最新年活動量データについては、会計年度値の公表等の理由により、翌年に見直されることが多い。本年提出インベントリでは、多くの排出区分において2017年度の活動量データが見直されたことにより、当該年における排出量が再計算された。

10.1.2. 各分野における再計算

我が国固有の事情・理由による、分野（エネルギー、工業プロセス及び製品の利用、農業、土地利用、土地利用変化及び林業、及び廃棄物）の再計算に関する情報は、第3章から第7章の中の「再計算」のセクションで個別に記述されている。

10.2. 排出量に対する影響

「10.1. 再計算に関する解説と正当性」で示した再計算がインベントリ全体に及ぼす変化を以下に示す。

10.2.1. 温室効果ガスインベントリ

本年度提出インベントリを昨年度提出インベントリと比較すると、気候変動枠組条約の下での基準年（1990年）の総排出量（LULUCF分野を除く、間接CO₂を含む）については0.004%の増加、2017年度の総排出量については0.03%の減少となった（表10-1）。

なお、各分野のカテゴリー毎、ガス毎の昨年度提出インベントリとの比較は、表10-2～表10-6の通りである。再計算の理由の詳細は各カテゴリーの記述を参照されたい。

表 10-2 2019年提出インベントリと2020年提出インベントリの排出・吸収量の比較 (エネルギー分野)

カテゴリー	ガス	[百万t-CO ₂ 換算]																													
		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017		
A. 燃料の燃焼	CO ₂	JNGI 2019	368.5	369.4	374.3	357.0	391.5	378.9	381.2	377.5	365.0	386.9	395.5	386.6	413.4	432.5	430.2	449.7	440.7	490.9	471.7	441.4	473.8	534.8	581.5	582.0	552.8	526.9	522.1	507.1	
	JNGI 2020	368.5	369.4	374.3	357.0	391.5	378.9	381.2	377.5	365.0	386.9	395.5	386.6	413.4	432.5	430.2	449.7	440.7	490.9	471.7	441.4	473.8	534.8	581.5	583.4	581.5	552.9	527.3	522.1	508.8	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.02%	0.08%	0.13%	0.33%
I. エネルギー産業	CH ₄	JNGI 2019	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	
	JNGI 2020	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
2. 製造業及び建設業	N ₂ O	JNGI 2019	0.9	0.9	0.9	0.9	1.0	1.4	1.4	1.4	1.4	1.5	1.6	1.6	1.8	1.8	1.8	1.9	1.9	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.3	2.3	2.4	2.3	2.2	2.3	
	JNGI 2020	0.9	0.9	0.9	0.9	1.0	1.4	1.4	1.4	1.4	1.5	1.6	1.6	1.8	1.8	1.8	1.9	1.9	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.3	2.3	2.4	2.3	2.2	2.3	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
A. 燃料の燃焼	CO ₂	JNGI 2019	349.7	346.2	341.1	342.0	350.8	357.6	360.5	356.8	332.2	336.6	346.6	346.6	346.3	344.2	343.7	334.2	331.6	329.7	300.8	283.8	300.4	299.3	299.0	306.6	299.2	290.4	275.9	272.7	
	JNGI 2020	349.7	346.2	341.1	342.0	350.8	357.6	360.5	356.8	332.2	336.6	346.6	346.6	346.3	344.2	343.7	334.2	331.6	329.7	300.8	283.8	300.4	299.3	299.0	306.6	299.2	290.4	275.9	272.7	269.8	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
3. 運輸	CH ₄	JNGI 2019	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	
	JNGI 2020	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
A. 燃料の燃焼	CO ₂	JNGI 2019	201.0	212.7	219.4	223.2	232.6	242.0	248.8	250.7	248.9	253.0	252.7	256.8	253.2	249.2	243.2	237.8	235.1	232.4	224.8	221.5	222.0	217.1	218.0	215.1	210.1	208.9	207.0	208.2	
	JNGI 2020	201.0	212.7	219.4	223.2	232.6	242.0	248.8	250.7	248.9	253.0	252.7	256.8	253.2	249.2	243.2	237.8	235.1	232.4	224.8	221.5	222.0	217.1	218.0	215.1	210.1	208.9	206.9	206.4	208.8	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
4. その他部門	CH ₄	JNGI 2019	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	
	JNGI 2020	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
I. 固体燃料	N ₂ O	JNGI 2019	3.7	3.9	4.0	3.9	4.0	4.1	4.2	4.2	4.1	4.1	4.0	3.8	3.6	3.3	3.0	2.8	2.6	2.5	2.3	2.2	2.1	1.9	1.9	1.8	1.7	1.7	1.7	1.7	
	JNGI 2020	3.7	3.9	4.0	3.9	4.0	4.1	4.2	4.2	4.1	4.1	4.0	3.8	3.6	3.3	3.0	2.8	2.6	2.5	2.3	2.2	2.1	1.9	1.9	1.8	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
B. 燃料からの排出	CO ₂	JNGI 2019	159.6	160.9	163.2	170.2	168.5	176.4	175.3	176.1	181.4	187.3	191.2	190.0	193.5	189.7	194.3	196.4	187.9	178.4	166.9	156.4	157.1	153.0	146.2	148.5	141.0	138.2	142.0	143.4	
	JNGI 2020	159.6	160.9	163.2	170.2	168.5	176.4	175.3	176.1	181.4	187.3	191.2	190.0	193.5	189.7	194.3	196.4	187.9	178.4	166.9	156.4	157.1	153.0	146.2	148.5	141.0	138.2	142.0	143.4	144.4	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
2. 石油及び天然ガス	CH ₄	JNGI 2019	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	
	JNGI 2020	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
I. 合計	GHG	JNGI 2019	1,091.9	1,102.2	1,110.6	1,104.5	1,155.3	1,167.4	1,178.2	1,173.4	1,139.4	1,176.0	1,198.0	1,185.7	1,217.4	1,226.1	1,221.8	1,228.5	1,205.6	1,241.8	1,174.2	1,112.6	1,162.5	1,213.2	1,261.1	1,253.7	1,261.1	1,211.9	1,173.0	1,155.4	1,137.0
	JNGI 2020	1,091.9	1,102.2	1,110.6	1,104.5	1,155.3	1,167.4	1,178.2	1,173.4	1,139.4	1,176.0	1,198.0	1,185.7	1,217.4	1,226.1	1,221.8	1,228.5	1,205.7	1,241.8	1,174.2	1,112.6	1,162.6	1,213.3	1,261.1	1,253.7	1,261.1	1,210.5	1,171.6	1,152.7	1,137.0	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%

※開閉CO₂を含まない

表 10-3 2019年提出インベントリと2020年提出インベントリの排出・吸収量の比較（工業プロセス分野及び製品の使用分野）
(1/2)

ガスを 扱う製品	[百万t-CO ₂ 換算]																											
	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
A. 燃料製品	JNGI 2019	49.2	50.5	51.0	50.3	51.3	51.1	51.5	48.8	43.9	43.6	43.0	40.5	40.1	39.8	41.2	41.2	40.2	37.4	32.8	32.8	33.1	33.7	35.1	34.8	33.7	33.6	34.1
	JNGI 2020	49.2	50.5	51.0	50.3	51.3	51.1	51.5	48.8	43.9	43.6	43.0	40.5	40.1	39.8	41.2	41.2	40.2	37.4	32.8	32.8	33.1	33.6	35.0	34.7	33.7	33.5	34.0
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	-0.10%	-0.15%	-0.19%	-0.23%	-0.26%	-0.22%
B. 化学産業	JNGI 2019	7.0	7.0	6.8	6.4	6.8	7.0	7.1	7.1	6.4	6.9	6.8	6.3	6.2	6.1	6.1	5.8	5.9	6.0	5.1	4.9	5.4	5.1	4.7	4.8	4.7	4.6	4.3
	JNGI 2020	7.0	7.0	6.8	6.4	6.8	7.0	7.1	7.1	6.4	6.9	6.8	6.3	6.2	6.1	6.1	5.8	5.9	6.0	5.1	4.9	5.4	5.1	4.7	4.8	4.7	4.6	4.3
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	-0.03%	-0.03%	-0.01%	0.00%	0.00%
CH ₄	JNGI 2019	0.04	0.04	0.03	0.03	0.03	0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.04	0.04	0.04	0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03
	JNGI 2020	0.04	0.04	0.03	0.03	0.03	0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.04	0.04	0.04	0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
N ₂ O	JNGI 2019	9.6	9.1	9.0	8.7	9.8	9.7	10.7	11.3	10.0	3.8	6.3	3.0	2.8	2.9	3.1	2.6	2.7	2.0	2.2	2.4	1.8	1.5	1.3	1.3	1.0	0.8	0.7
	JNGI 2020	9.6	9.1	9.0	8.7	9.8	9.7	10.7	11.3	10.0	3.8	6.3	3.0	2.8	2.9	3.1	2.6	2.7	2.0	2.2	2.4	1.8	1.5	1.3	1.3	1.0	0.8	0.7
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
HFCs	JNGI 2019	15.9	17.3	17.6	17.1	18.9	22.0	20.3	19.0	17.7	18.0	16.0	12.2	8.1	6.9	1.9	1.0	1.2	0.6	0.9	0.3	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
	JNGI 2020	15.9	17.3	17.6	17.1	18.9	22.0	20.3	19.0	17.7	18.0	16.0	12.2	8.1	6.9	1.9	1.0	1.2	0.6	0.9	0.3	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
PFCs	JNGI 2019	0.3	0.4	0.4	0.6	0.7	0.9	1.2	1.7	1.6	1.6	1.7	1.3	1.3	1.2	1.1	1.0	1.1	1.0	0.6	0.5	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
	JNGI 2020	0.3	0.4	0.4	0.6	0.7	0.9	1.2	1.7	1.6	1.6	1.7	1.3	1.3	1.2	1.1	1.0	1.1	1.0	0.6	0.5	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
SF ₆	JNGI 2019	3.5	3.9	4.3	4.3	4.1	4.5	4.0	2.5	2.0	1.5	0.8	0.8	0.8	0.8	0.7	0.9	1.3	1.1	1.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
	JNGI 2020	3.5	3.9	4.3	4.3	4.1	4.5	4.0	2.5	2.0	1.5	0.8	0.8	0.8	0.8	0.7	0.9	1.3	1.1	1.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
NF ₃	JNGI 2019	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.02	0.02	0.02	0.03	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	1.2	1.1	1.2	1.2	1.1	1.3	1.6	1.3	1.5	1.0	0.4
	JNGI 2020	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.02	0.02	0.02	0.03	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	1.2	1.1	1.2	1.2	1.1	1.3	1.6	1.3	1.5	1.0	0.4
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
CO ₂	JNGI 2019	7.2	7.1	6.8	6.7	6.7	6.8	6.9	6.8	6.5	6.5	6.7	6.8	6.6	6.4	6.5	6.6	6.7	6.2	5.5	6.1	6.0	6.1	6.2	6.1	5.9	5.8	5.7
	JNGI 2020	7.2	7.1	6.8	6.7	6.7	6.8	6.9	6.8	6.5	6.5	6.7	6.8	6.6	6.4	6.5	6.6	6.7	6.2	5.5	6.1	6.0	6.1	6.2	6.1	5.9	5.8	5.7
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
CH ₄	JNGI 2019	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
	JNGI 2020	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
HFCs	JNGI 2019	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
	JNGI 2020	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO
差異	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
PFCs	JNGI 2019	0.20	0.17	0.11	0.11	0.10	0.10	0.09	0.07	0.04	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.01	0.00	NO	NO
	JNGI 2020	0.20	0.17	0.11	0.11	0.10	0.10	0.09	0.07	0.04	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.01	0.00	NO	NO
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
SF ₆	JNGI 2019	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.4	0.6	1.0	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.0	0.6	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
	JNGI 2020	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.4	0.6	1.0	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.0	0.6	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
燃料からの 非エネルギー製品 及び溶剤の使用	JNGI 2019	2.2	2.1	2.1	2.2	2.4	2.4	2.7	2.8	2.6	2.8	2.9	3.0	2.9	3.0	3.2	3.4	3.4	3.1	3.2	3.1	3.1	3.0	3.1	2.9	2.8	2.9	2.9
	JNGI 2020	2.0	2.1	2.1	2.1	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.7	2.8	2.9	2.9	3.1	3.0	2.8	2.9	2.9	3.1	3.0	2.8	2.9	2.7	2.7	2.6	2.7	2.5
差異	-5.73%	0.86%	-0.54%	-3.40%	-2.89%	-2.87%	-7.44%	-7.34%	-6.62%	-6.31%	-4.79%	-4.68%	-3.50%	-4.81%	-5.66%	-9.07%	-10.31%	-11.39%	-10.92%	-10.23%	-11.67%	-12.29%	-15.32%	-14.06%	-13.87%	-10.31%	-10.18%	-7.51%

※不明なCO₂を含む

表 10-3 2019年提出インベントリと2020年提出インベントリの排出・吸収量の比較（工業プロセス分野及び製品の使用分野）
(2/2)

ガスの カテゴリー	[百万tCO ₂ 換算]																														
	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017			
E. 電子産業	HFCs	0.00	0.02	0.14	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	
	JNGI 2019	0.00	0.02	0.14	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
PFCS	JNGI 2019	1.5	1.7	1.7	2.5	3.1	4.0	4.7	6.0	6.1	6.5	7.0	5.3	5.4	5.3	5.6	4.7	5.1	4.5	3.4	2.1	2.3	1.9	1.7	1.6	1.7	1.7	1.8	1.9		
	JNGI 2020	1.5	1.7	1.7	2.5	3.1	4.0	4.7	6.0	6.1	6.5	7.0	5.3	5.4	5.3	5.6	4.7	5.1	4.5	3.4	2.1	2.3	1.9	1.7	1.6	1.7	1.7	1.8	1.9		
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
SF ₆	JNGI 2019	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.8	1.1	1.2	1.4	1.5	1.3	1.4	1.4	1.4	1.4	1.3	1.0	0.8	0.6	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.4	
	JNGI 2020	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.8	1.1	1.2	1.4	1.5	1.3	1.4	1.4	1.4	1.4	1.3	1.0	0.8	0.6	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.4
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
NF ₃	JNGI 2019	0.03	0.03	0.03	0.04	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.2	0.3	0.4	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2		
	JNGI 2020	0.03	0.03	0.03	0.04	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.2	0.3	0.4	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2		
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
F. オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用	HFCs	0.00	0.01	0.9	1.9	2.9	4.1	5.1	5.7	6.1	6.6	7.0	7.9	9.1	10.3	11.5	13.2	15.8	18.2	20.5	23.0	25.8	29.1	31.8	35.5	39.0	42.3	44.6			
	JNGI 2019	0.00	0.01	0.9	1.9	2.9	4.1	5.1	5.7	6.1	6.6	7.0	7.9	9.1	10.3	11.5	13.2	15.8	18.2	20.5	23.0	25.8	29.1	31.8	35.5	39.0	42.3	44.6			
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.01%	0.01%		
PFCS	JNGI 2019	4.5	5.3	5.4	7.8	9.6	12.6	12.2	12.3	8.8	5.0	3.2	3.2	2.6	2.3	2.5	2.8	2.8	2.4	1.6	1.4	1.7	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	1.5			
	JNGI 2020	4.5	5.3	5.4	7.8	9.6	12.6	12.2	12.3	8.8	5.0	3.2	3.2	2.6	2.3	2.5	2.8	2.8	2.4	1.6	1.4	1.7	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	1.5			
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
G. その他製品の製造及び使用	N ₂ O	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.6	0.4	0.4	0.4			
	JNGI 2019	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.6	0.4	0.4			
	JNGI 2020	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.6	0.4	0.4			
PFCS	JNGI 2019	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02		
	JNGI 2020	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	NANO	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02		
	差異	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%			
SF ₆	JNGI 2019	8.8	9.7	10.7	10.8	10.3	11.3	12.1	10.8	9.6	5.7	3.7	2.9	2.4	2.2	2.0	1.8	1.8	1.7	1.7	1.5	1.4	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5			
	JNGI 2020	8.8	9.7	10.7	10.8	10.3	11.3	12.1	10.8	9.6	5.7	3.7	2.9	2.4	2.2	2.0	1.8	1.8	1.7	1.7	1.5	1.4	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5			
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
H. その他	CO ₂	0.06	0.07	0.07	0.06	0.07	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.08	0.08	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.07	0.07	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08			
	JNGI 2019	0.06	0.07	0.07	0.06	0.07	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.08	0.08	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.07	0.07	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08			
	JNGI 2020	0.06	0.07	0.07	0.06	0.07	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.08	0.08	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.07	0.07	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08			
2. 合計	GHG	111.1	115.4	117.3	119.5	127.0	137.2	136.5	123.8	111.1	109.2	98.1	91.2	89.8	86.4	87.7	90.6	89.7	85.3	77.8	81.1	83.1	85.7	90.0	92.6	93.6	96.6	99.3			
	JNGI 2019	111.1	115.4	117.3	119.5	127.0	137.2	136.5	123.8	111.1	109.2	98.1	91.2	89.8	86.4	87.7	90.6	89.7	85.3	77.8	81.1	83.1	85.7	90.0	92.6	93.6	96.6	99.3			
	JNGI 2020	110.9	115.4	117.3	119.4	127.0	137.1	136.3	123.6	110.9	109.0	98.0	91.1	89.7	86.3	87.4	90.2	89.3	84.9	77.5	80.7	82.7	85.2	89.5	92.1	93.2	96.2	99.0			
差異	-0.11%	0.02%	-0.01%	-0.06%	-0.05%	-0.15%	-0.15%	-0.14%	-0.16%	-0.12%	-0.14%	-0.11%	-0.16%	-0.20%	-0.36%	-0.42%	-0.46%	-0.45%	-0.48%	-0.48%	-0.45%	-0.58%	-0.56%	-0.52%	-0.43%	-0.47%	-0.52%	-0.43%			

※間接CO₂を含む

表 10-4 2019年提出インベントリと2020年提出インベントリの排出・吸収量の比較（農業分野）

カテゴリー	ガス	[百t-CO ₂ 換算]																											
		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
A. 消化管内発酵	CH ₄	9.4	9.5	9.6	9.5	9.4	9.3	9.2	9.1	9.1	9.0	8.9	9.0	8.9	8.8	8.6	8.5	8.5	8.4	8.2	8.0	7.9	7.7	7.5	7.3	7.3	7.3	7.3	
	JNGI 2019	9.4	9.6	9.7	9.6	9.4	9.3	9.2	9.1	9.1	9.0	8.9	9.0	8.9	8.8	8.6	8.5	8.5	8.4	8.2	8.0	7.9	7.7	7.5	7.3	7.3	7.5	7.5	
	差異	0.77%	0.79%	0.78%	0.74%	0.70%	0.66%	0.57%	0.50%	0.44%	0.38%	0.35%	0.50%	0.79%	1.03%	1.30%	1.53%	1.99%	2.36%	2.79%	2.88%	2.95%	2.90%	2.85%	2.82%	2.70%	2.78%	2.83%	2.90%
B. 家畜排せつ物のCH ₄ 管理	CH ₄	3.1	3.1	3.1	3.1	3.0	3.0	3.0	2.9	2.9	2.9	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.4	2.4	2.4	2.3	2.3	
	JNGI 2019	3.1	3.1	3.1	3.1	3.0	3.0	3.0	2.9	2.9	2.9	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.4	2.4	2.4	2.3	2.3	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
C. 稲作	N ₂ O	4.1	4.1	4.2	4.1	4.0	3.9	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9	3.9	3.9	4.0	4.1	4.2	4.2	4.1	4.1	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	3.9	
	JNGI 2019	4.1	4.1	4.2	4.1	4.0	3.9	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9	3.9	3.9	4.0	4.1	4.2	4.2	4.1	4.1	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8
	差異	2.27%	1.91%	1.69%	1.57%	1.41%	1.07%	0.88%	1.08%	1.06%	1.06%	1.22%	0.88%	0.45%	0.21%	0.09%	-0.46%	-0.66%	-0.88%	-1.29%	-1.20%	-0.52%	-0.48%	-1.01%	-1.24%	-1.57%	-1.65%	0.26%	
D. 農用土壌の土壌	CH ₄	12.8	12.0	13.3	10.2	14.4	13.6	13.1	13.0	11.8	12.2	12.7	12.5	12.7	11.8	13.3	13.4	13.3	13.9	14.2	13.9	15.0	14.7	14.3	14.6	14.4	13.9	13.6	
	JNGI 2019	12.8	12.0	13.3	10.2	14.4	13.6	13.1	13.0	11.8	12.2	12.7	12.5	12.7	11.8	13.3	13.4	13.3	13.9	14.2	13.9	15.0	14.7	14.3	14.6	14.4	13.9	13.6	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
E. 農用土壌の土壌	N ₂ O	7.1	7.0	6.9	7.0	6.9	6.6	6.5	6.4	6.3	6.3	6.3	6.1	6.1	6.0	5.9	5.9	5.9	5.8	5.8	5.2	5.5	5.4	5.4	5.4	5.4	5.4	5.4	
	JNGI 2019	7.1	7.0	6.9	7.0	6.9	6.6	6.5	6.4	6.3	6.3	6.3	6.1	6.1	6.0	5.9	5.9	5.9	5.8	5.8	5.2	5.5	5.4	5.4	5.4	5.4	5.4	5.4	
	差異	-0.08%	-0.17%	-0.21%	-0.25%	-0.31%	-0.36%	-0.37%	-0.33%	-0.26%	-0.23%	-0.35%	-0.43%	-0.54%	-0.57%	-0.69%	-0.75%	-0.78%	-0.98%	-1.02%	-0.83%	-0.77%	-0.83%	-0.83%	-0.83%	-0.83%	-0.83%	-0.58%	
F. 野外で農作物のCH ₄ 残留物を燃くこと	CH ₄	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	
	JNGI 2019	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
G. 石灰施用	CO ₂	0.6	0.5	0.5	0.5	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	
	JNGI 2019	0.6	0.5	0.5	0.5	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
H. 尿素肥料	CO ₂	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	
	JNGI 2019	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
3. 合計	GHG	37.3	36.5	37.8	34.6	38.2	36.9	36.1	35.8	34.5	34.7	35.2	34.7	35.0	33.9	35.1	35.2	34.9	36.0	35.4	34.7	35.7	35.2	34.6	34.1	33.6	33.4	33.2	
	JNGI 2019	37.3	36.5	37.8	34.6	38.2	36.9	36.1	35.8	34.5	34.7	35.2	34.7	35.0	33.9	35.1	35.2	34.9	36.0	35.4	34.7	35.7	35.2	34.6	34.1	33.6	33.4	33.2	
	差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
3. 合計	GHG	37.4	36.7	37.9	34.7	38.3	37.0	36.2	35.9	34.5	34.7	35.3	34.8	35.0	34.0	35.1	35.2	35.0	36.1	35.5	34.8	35.9	35.3	34.8	34.2	33.6	33.5	33.4	
	JNGI 2019	37.4	36.7	37.9	34.7	38.3	37.0	36.2	35.9	34.5	34.7	35.3	34.8	35.0	34.0	35.1	35.2	35.0	36.1	35.5	34.8	35.9	35.3	34.8	34.2	33.6	33.5	33.4	
	差異	0.43%	0.39%	0.34%	0.27%	0.21%	0.17%	0.17%	0.19%	0.18%	0.17%	0.16%	0.16%	0.19%	0.19%	0.23%	0.20%	0.28%	0.32%	0.38%	0.47%	0.47%	0.48%	0.32%	0.32%	0.32%	0.32%	0.56%	

表 10-5 2019年提出インベントリと2020年提出インベントリの排出・吸収量の比較（土地利用変化及び林業分野）

ガス	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	
A. 森林																												
CO ₂	-791	-862	-866	-869	-873	-876	-913	-911	-910	-908	-906	-903	-903	-903	-903	-927	-868	-855	-808	-759	-764	-781	-777	-770	-683	-631	-58.6	-60.9
差異	-0.02%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.01%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.02%	-0.01%
CH ₄	0.01	0.01	0.03	0.02	0.01	0.03	0.04	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	0.03	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.02
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
N ₂ O	0.01	0.01	0.03	0.03	0.02	0.01	0.03	0.04	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.03	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.02
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
N ₂ O	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
差異	0.16%	0.17%	0.18%	0.19%	0.19%	0.19%	0.18%	0.16%	0.15%	0.14%	0.13%	0.14%	0.15%	0.16%	0.16%	0.17%	0.18%	0.18%	0.19%	0.19%	0.19%	0.18%	0.17%	0.16%	0.15%	0.14%	0.13%	
CO ₂	1.1	0.8	0.1	-0.2	0.1	0.7	0.3	0.1	0.02	-0.4	0.04	-0.3	-0.5	-1.2	-0.9	-1.0	-0.4	-0.7	-1.0	-0.13	0.03	0.25	-0.03	-0.09	0.09	-0.04	-0.10	-0.16
差異	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%	0.88%
CH ₄	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
N ₂ O	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
CO ₂	0.1	0.1	0.3	0.1	0.1	0.4	0.6	0.1	0.5	0.5	0.4	0.4	0.9	0.6	0.6	0.4	0.4	0.8	0.9	1.1	1.1	0.6	0.6	0.6	0.2	0.2	0.5	0.5
差異	0.13%	0.13%	0.13%	0.13%	0.12%	0.12%	0.13%	0.18%	0.18%	0.18%	0.17%	0.17%	0.18%	0.18%	0.19%	0.19%	0.19%	0.18%	0.18%	0.18%	0.19%	0.18%	0.17%	0.16%	0.15%	0.14%	0.13%	
CO ₂	2.9	3.5	3.9	2.4	1.5	1.3	0.6	0.2	0.1	-0.3	-0.6	-0.8	-1.4	-1.5	-1.0	-1.0	-1.0	-0.9	-0.9	-0.21	0.41	-0.21	-0.30	-0.38	-0.44	-0.28	0.00	-0.11
差異	8.32%	7.07%	6.71%	9.98%	15.64%	17.86%	45.56%	98.26%	295.38%	-58.27%	-24.80%	-17.12%	-8.42%	-7.24%	-6.83%	-6.96%	-7.33%	-379.10%	-92.33%	40.03%	27.88%	-9.65%	-13.77%	-11.06%	-17.93%	-241.22%	1292.81%	-40.62%
CO ₂	1.2	1.3	1.0	1.3	1.1	1.0	0.9	1.2	0.9	0.9	0.7	0.7	0.7	0.6	0.6	0.2	0.2	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
差異	2.16%	1.67%	1.74%	2.27%	2.54%	2.76%	2.16%	1.78%	2.13%	3.90%	3.23%	2.30%	2.28%	2.17%	3.47%	4.28%	8.64%	8.96%	19.86%	19.58%	81.88%	24.93%	14.17%	19.47%	8.64%	14.68%	12.10%	
N ₂ O	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
差異	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%	0.04%
CO ₂	-0.4	-0.6	0.5	1.2	1.7	1.5	3.0	1.8	0.4	1.7	1.8	1.7	1.2	1.4	0.9	0.6	0.4	-0.4	-0.4	0.6	0.1	2.5	0.1	0.3	-0.9	-1.2	-1.2	-1.4
差異	1.22%	0.27%	3.32%	-0.83%	-0.07%	-0.36%	-0.07%	-0.08%	8.63%	-0.49%	1.77%	4.16%	-0.15%	-0.17%	0.37%	1.03%	-1.15%	-3.65%	-3.31%	-21.91%	-2.36%	4.58%	-0.07%	-3.53%	5.73%	3.49%	29.74%	
H. その他(開採地への転用時の有機炭土壌)																												
CH ₄	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
N ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
差異	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
(IV) 土壌からのN ₂ O間接排出	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04
差異	0.14%	0.14%	0.14%	0.14%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%	0.15%	0.16%	0.16%	0.17%	0.16%	0.16%	0.16%	0.16%	0.17%	0.19%	0.20%	0.20%	0.21%	0.21%	0.14%	0.15%	
4. 合計	-62.5	-70.5	-73.6	-76.6	-77.3	-77.3	-81.9	-84.3	-85.7	-87.9	-88.4	-89.9	-100.1	-96.3	-91.3	-85.9	-81.0	-70.7	-67.0	-70.5	-69.9	-72.9	-66.2	-66.2	-64.5	-59.6	-54.5	-57.5
差異	-0.22%	-0.33%	-0.39%	-0.31%	-0.25%	-0.22%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%	-0.23%

表 10-6 2019年提出インベントリと2020年提出インベントリの排出・吸収量の比較（廃棄物分野）

		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017		
5. 廃棄物																															
A. 固形廃棄物の処分		9.6	9.5	9.5	9.3	9.2	9.0	8.7	8.5	8.2	7.9	7.6	7.3	7.0	6.7	6.4	6.1	5.8	5.5	5.1	4.8	4.5	4.3	4.1	3.9	3.6	3.4	3.2	3.1		
	JNGI 2019	9.6	9.5	9.5	9.3	9.2	9.0	8.7	8.5	8.2	7.9	7.6	7.3	7.0	6.7	6.4	6.1	5.8	5.5	5.1	4.8	4.5	4.3	4.1	3.9	3.6	3.4	3.2	3.1		
	JNGI 2020	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
	差異																														
B. 固形廃棄物の生物処理		0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1		
	JNGI 2019	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1		
	JNGI 2020	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	
	差異																														
C. 廃棄物の焼却と野焼き		12.4	12.5	13.5	13.3	15.8	16.0	16.5	17.1	17.1	16.8	17.0	15.8	15.2	14.6	14.1	13.2	13.4	14.5	12.1	12.3	11.5	12.2	12.1	11.6	11.5	10.9	10.8			
	JNGI 2019	12.4	12.5	13.5	13.3	15.8	16.0	16.5	17.1	17.1	16.8	17.0	15.8	15.2	14.6	14.1	13.2	13.4	14.5	12.1	12.3	11.5	12.2	12.1	11.6	11.5	10.9	10.8			
	JNGI 2020	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
	差異																														
CH ₄		0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01		
	JNGI 2019	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01		
	JNGI 2020	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
	差異																														
N ₂ O		1.4	1.5	1.6	1.6	1.8	1.9	2.0	2.1	2.1	2.2	2.2	2.1	1.9	1.9	1.9	2.0	1.8	1.7	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.5	1.3	1.4		
	JNGI 2019	1.4	1.5	1.6	1.6	1.8	1.9	2.0	2.1	2.1	2.2	2.2	2.1	1.9	1.9	1.9	2.0	1.8	1.7	1.6	1.6	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.5	1.3	1.4		
	JNGI 2020	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
	差異																														
D. 排水の処理と放出		2.9	2.9	2.9	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.4	2.3	2.2	2.2	2.2	2.1	2.0	1.9	1.9	1.9	1.8	1.7	1.7	1.7	1.7			
	JNGI 2019	2.9	2.9	2.9	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	2.5	2.4	2.3	2.2	2.2	2.2	2.1	2.0	1.9	1.9	1.9	1.8	1.7	1.7	1.7	1.7			
	JNGI 2020	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
	差異																														
E. その他		2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.2	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.0	2.0	2.0			
	JNGI 2019	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.2	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	2.0	2.0	2.0			
	JNGI 2020	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
	差異																														
GHG		29.7	29.7	30.9	30.4	32.9	33.1	33.3	33.7	33.3	32.7	32.5	30.8	29.7	29.4	28.4	27.6	26.3	25.9	26.6	23.5	23.3	22.3	22.6	22.4	21.5	21.3	20.3	20.1		
	JNGI 2019	29.7	29.7	30.9	30.4	32.9	33.1	33.3	33.7	33.3	32.7	32.5	30.8	29.7	29.4	28.4	27.6	26.3	25.9	26.6	23.5	23.3	22.3	22.6	22.4	21.5	21.3	20.3	20.1		
	JNGI 2020	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
	差異																														

10.2.2. KP-LULUCF インベントリ

本年度提出インベントリを昨年度提出インベントリと比較すると、2017年度のKP-LULUCF活動に伴う排出・吸収量については、1.86%の吸収量増加となった（表10-7）。

表 10-7 2019年提出インベントリと2020年提出インベントリの
KP-LULUCF活動に伴う排出・吸収量の比較

KP-LULUCF活動		[百万t-CO ₂ 換算]						
活動	ガス	1990	2013	2014	2015	2016	2017	
新規植林、再植林	CO ₂	JNGI 2019	-	-1.6	-1.6	-1.6	-1.6	-1.6
		JNGI 2020	-	-1.6	-1.6	-1.6	-1.6	-1.5
		差異	-	-3.03%	-2.95%	-2.59%	-2.29%	-2.13%
	CH ₄	JNGI 2019	-	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		JNGI 2020	-	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		差異	-	-2.97%	-2.88%	-2.58%	-2.28%	-2.22%
	N ₂ O	JNGI 2019	-	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		JNGI 2020	-	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		差異	-	-2.97%	-2.88%	-2.58%	-2.28%	-2.22%
森林減少	CO ₂	JNGI 2019	-	2.0	2.0	2.1	2.1	1.8
		JNGI 2020	-	2.0	2.1	2.3	2.3	1.6
		差異	-	1.33%	1.43%	6.53%	6.71%	-12.50%
	CH ₄	JNGI 2019	-	NO	NO	NO	NO	NO
		JNGI 2020	-	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		差異	-	NA	NA	NA	NA	NA
	N ₂ O	JNGI 2019	-	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
		JNGI 2020	-	-0.00	-0.00	-0.00	-0.00	0.00
		差異	-	-109.61%	-115.71%	-106.27%	-109.66%	-84.57%
森林経営	CO ₂	JNGI 2019	-	-51.2	-51.5	-49.1	-46.6	-46.3
		JNGI 2020	-	-51.2	-51.6	-49.3	-46.7	-46.6
		差異	-	0.16%	0.11%	0.43%	0.40%	0.72%
	CH ₄	JNGI 2019	-	0.00	0.02	0.00	0.00	0.02
		JNGI 2020	-	0.00	0.02	0.00	0.00	0.02
		差異	-	0.02%	0.02%	0.02%	0.01%	0.01%
	N ₂ O	JNGI 2019	-	0.09	0.10	0.10	0.10	0.10
		JNGI 2020	-	0.09	0.10	0.10	0.10	0.10
		差異	-	0.13%	0.12%	0.02%	0.01%	0.02%
農地管理	CO ₂	JNGI 2019	10.2	3.6	4.3	4.2	4.7	4.5
		JNGI 2020	10.2	3.6	4.4	4.4	4.9	4.1
		差異	-0.16%	1.90%	2.45%	2.89%	3.25%	-8.44%
	CH ₄	JNGI 2019	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05
		JNGI 2020	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05
		差異	0.00%	0.09%	0.20%	0.32%	0.42%	0.56%
	N ₂ O	JNGI 2019	0.04	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
		JNGI 2020	0.04	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
		差異	0.16%	0.07%	-0.05%	-0.79%	-1.94%	0.63%
牧草地管理	CO ₂	JNGI 2019	0.8	-0.3	-0.1	-0.2	-0.2	-0.3
		JNGI 2020	0.8	-0.2	0.0	-0.1	-0.1	-0.1
		差異	-0.13%	-29.87%	-102.68%	-54.14%	-44.87%	-49.29%
	CH ₄	JNGI 2019	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		JNGI 2020	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		差異	0.00%	8.18%	15.36%	22.84%	41.82%	51.43%
	N ₂ O	JNGI 2019	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		JNGI 2020	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		差異	-0.13%	-0.44%	-0.42%	-0.40%	-0.37%	-0.38%
植生回復	CO ₂	JNGI 2019	-0.1	-1.2	-1.2	-1.3	-1.3	-1.3
		JNGI 2020	-0.1	-1.2	-1.2	-1.3	-1.3	-1.3
		差異	3.75%	0.40%	0.44%	0.44%	0.42%	1.38%
合計	JNGI 2019	11.0	-48.5	-47.9	-45.6	-42.7	-42.9	
	JNGI 2020	11.0	-48.4	-47.7	-45.4	-42.4	-43.7	
	差異	-0.18%	-0.27%	-0.46%	-0.37%	-0.55%	1.86%	

10.3. 排出量の推移に対する影響（時系列の一貫性を含む）

「10.1. 再計算に関する解説と正当性」で示した再計算が温室効果ガス排出量の推移に及ぼす変化を表 10-8 に示す。2019 年報告値との比較は 2017 年度における 1990 年度比を用いている。

10.3.1. 温室効果ガスインベントリ

2020 年提出インベントリにおける 2017 年度と 1990 年度の総排出量（LULUCF 分野を除く、間接 CO₂含む）の差異は昨年報告値と比べて約 50 万トン（CO₂換算）減少となり、昨年報告値から 0.04 パーセントポイントの減少となった。

表 10-8 2019 年提出インベントリと 2020 年提出インベントリにおける 2017 年度と 1990 年度の総排出量（LULUCF 分野を除く、間接 CO₂含む）の差異の比較

	排出量（2017）－ 排出量（1990） [百万t-CO ₂ 換算]			排出量（2017）／排出量（1990）－1 [%]		
	JNGI 2019	JNGI 2020	差異	JNGI 2019	JNGI 2020	差異
CO ₂	29.6	29.3	-0.3	2.6%	2.5%	0.0%
CH ₄	-14.3	-14.2	0.1	-32.2%	-31.9%	0.3%
N ₂ O	-11.3	-11.5	-0.1	-35.6%	-35.9%	-0.3%
HFCs	29.0	29.0	0.0	181.7%	181.8%	0.0%
PFCs	-3.0	-3.0	0.0	-46.3%	-46.3%	0%
SF ₆	-10.7	-10.8	-0.1	-83.4%	-83.9%	-0.5%
NF ₃	0.4	0.4	0.0	1279.3%	1279.3%	0%
間接 CO ₂	-3.4	-3.4	0.0	-61.3%	-62.1%	-1%
合計	16.3	15.8	-0.5	1.28%	1.24%	-0.04%

10.4. インベントリ審査への対応を含めた再計算とインベントリの改善計画

10.4.1. インベントリ提出以降の改善点

2019 年インベントリ提出以降に改善を行った主要な点を以下に列記する。

10.4.1.1. 排出・吸収量の算定方法

変更のあった算定方法は下表（表 10-9）のとおりである。詳細は各カテゴリーの当該記述を参照されたい。

10.4.1.1.a. 温室効果ガスインベントリ

表 10-9 算定方法の変更内容

分野・カテゴリー		算定方法の変更内容
1.A	燃料の燃焼からの CO ₂ の排出	2018 年度の炭素排出係数が設定された。
1.A	燃料の燃焼からの GHG の排出	2018 年度の発熱量が設定された。
1.A.3.b	自動車からの CH ₄ 及び N ₂ O の排出	排出係数の実測値が自工会より提供された。また、2017 年度の QAWG における指摘を踏まえて、環境省、東京都環境局、国立環境研究所、交通安全環境研究所及び石油エネルギー技術センターからも排出係数の実測値が提供された。加えて、ディーゼル重量車の平成 28 年規制及び乗用車の平成 30 年規制を算定方法に反映した。これにより、2003 年度以降のガソリンハイブリッド乗用車、2005 年度以降の軽乗用車、ガソリン乗用車、ガソリン小型貨物車及びディーゼル小型貨物車、ディーゼル普通貨物車、2007 年度以降の軽貨物車について排出係数が更新された。また、二輪車の 3 次規制を算定方法に反映した。
2.D.3.-	NMVOC の焼却	塗料向け溶剤の国内供給量の設定方法を変更した。
2.D.3	合成皮革溶剤の使用	合成皮革溶剤の使用に係る活動量の設定方法を変更した。
2.D.3	湿し水溶剤の使用	新たに NMVOC 排出量の算定を行った。
2.G.2	加速器	大学・研究施設設置の粒子加速器の SF ₆ 排出率を見直した。
2.H.2	食品・飲料産業	スピリッツ類、リキュール類のエチルアルコール含有率を変更した。
2.H.3	輸入炭酸ガスからの排出	新たに輸入炭酸ガスからの排出量の算定を行った。
3.A.1	消化管内発酵/牛	牛の算定区分を改訂した。
3.B.1 3.B.5 3.D.a.2 3.D.b.1	家畜排せつ物の管理/牛 家畜排せつ物の管理/間接 排出/大気沈降 農用地の土壌/直接排出/ 有機窒素肥料 農用地の土壌/間接排出	肉用牛の排せつ物中窒素量の計算方法を改訂した。
3.B.2 3.B.5 3.D.a.2 3.D.b.1	家畜排せつ物の管理/豚 家畜排せつ物の管理/間接 排出/大気沈降 農用地の土壌/直接排出/ 有機窒素肥料 農用地の土壌/間接排出	豚の排せつ物中窒素量の計算方法を改訂した。
3.D.a.5	農用地の土壌/直接排出/ 無機化された窒素	土地利用の転用に伴う鉱質土壌面積の算定方法が変更された。
3.D.a.6	農用地の土壌/直接排出/ 有機質土壌の耕起	土地利用の転用に伴う有機質土壌面積の算定方法が変更された。
4.B.1	転用のない農地	2017 年度の普通畑における炭素変化係数の修正に伴い、2017 年度の鉱質土壌の炭素ストック変化量が再計算された。また、今次提出よりバイオ炭の農地施用による農地の炭素ストック量の算定を行ったため、転用のない農地における土壌炭素ストック変化量は全年にわたり再計算された。

分野・カテゴリー		算定方法の変更内容
4.B.2	他の土地利用から農地への転用	農地への転用後のバイオマスストック量の修正に伴い、農地への転用後のバイオマス炭素ストック量が全年にわたり再計算された。
4.A.2 4.C.2 4.D.2 4.E.2 4.F.2	農地から森林、草地、湿地、開発地及びその他の土地利用への転用	農地から他の土地への転用前のバイオマスストック量の修正に伴い、農地から転用された森林、草地、湿地及びその他の土地における生体バイオマス炭素変化量が全年にわたり再計算された。
4.E.2	他の土地利用から転用された開発地	今次提出より有機質土壌地から転用された開発地の場合有機質土壌からのCO ₂ 排出量の算定を行ったため、他の土地から転用された開発地における有機質土壌からのCO ₂ 排出量が全年にわたり再計算された。
4.G	伐採木材製品(HWP)による炭素蓄積変化 建築物その他木材利用	解体国産材率と解体原単位の計算式の修正に伴うアウトフローの値が全年にわたり再計算された。また、解体国産材率の変更に伴い、木質ボードのインフローは全年にわたり再計算された。
4.G	伐採木材製品(HWP)による炭素蓄積変化 紙製品	パルプの原材料消費量については、解体材由来の国産材率の再計算に伴ってインフローの値が再計算された。このインフローの再計算により、一次減衰関数に基づいて計算されたアウトフローも再計算された。
4.(II)	土壌排水等に伴う非CO ₂ 排出	有機質土壌地が開発地に転用された場合の有機質土壌の排水に伴うCH ₄ 、N ₂ O排出について今次提出より算定を行ったため、全年にわたり再計算された。
5.D.1	生活排水（生活排水処理施設）	性能評価型合併処理浄化槽にかかる排出係数を再検討し、2001年度以降のCH ₄ ・N ₂ O排出量の再計算を行った。
5.D.1	生活排水（生活排水の自然界における分解）	性能評価型合併処理浄化槽の窒素除去率を再検討し、2001年度以降のN ₂ O排出量の再計算を行った。処理後排水からのN ₂ O排出量の再計算を行った。

10.4.1.1.b. KP-LULUCF インベントリ

表 10-10 算定方法の変更内容

カテゴリー	算定方法の変更内容
新規植林 (A)、再植林 (R)、森林減少 (D)	単年作物栽培農地から森林への転用に伴う農地生体バイオマスの損失を AR 活動下で、また、森林から単年作物栽培農地への転用に伴う農地での成長分を D 活動下で算定することとしたため、2013~2017 年度の AR および D 活動下の生体バイオマスの炭素ストック変化量が再計算された。さらに、各活動下の土地から開発地へ転用後の有機質土壌地において排水に伴う CO ₂ 、CH ₄ 排出が新規に算定された。これに伴い、D 活動下での 2013~2017 年度の有機質土壌排水活動からの CO ₂ 及び CH ₄ 排出量が再計算された。
森林経営 (FM)	HWP 算定に利用している活動量の見直し及びパラメータの更新のため、2013 年度~2017 年度の HWP における炭素蓄積変化量の再計算を行った。
農地管理 (CM)	単年作物栽培農地での転用前後の生体バイオマスの損失及び増加の算定を行うこととしたため、1990 年度、2013~2017 年度の CM における生体バイオマス、有機質土壌、及び鉱質土壌からの排出・吸収量が再計算された。さらに、各活動下の土地から開発地へ転用後の有機質土壌地において排水に伴う CO ₂ 、CH ₄ 排出が新規に算定された。これに伴い、CM 活動下での 2013~2017 年度の有機質土壌排水活動からの CO ₂ 及び CH ₄ 排出量が再計算された。
牧草地管理 (GM)	牧草地から森林以外の他の土地への転用に伴う草地生体バイオマスの損失量の算定を GM 下で行うこととしたため、1990 年度、2013~2017 年度の GM における生体バイオマス、有機質土壌及び鉱質土壌における排出・吸収量が再計算された。さらに、各活動下の土地から開発地へ転用後の有機質土壌地において排水に伴う CO ₂ 、CH ₄ 排出が新規に算定された。これに伴い、GM 活動下での 2013~2017 年度の有機質土壌排水活動からの CO ₂ 及び CH ₄ 排出量が再計算された。
植生回復 (RV)	RV への転用前の各活動下での生体バイオマスの損失を計算することとしたため、1990 年度、2013~2017 年度の RV 活動の下の全ての炭素プールの炭素ストック変化量について再計算を行った。

10.4.1.2. 国家インベントリ報告書 (NIR)

前回提出時以降、重要な変更なし。

10.4.1.3. UNFCCC インベントリ審査への対応事項

UNFCCC インベントリ審査の勧告への対応を以下に記述する。詳細は各カテゴリーの当該記述を参照されたい。

なお、温室効果ガス算定方法検討会（「1 章 1.2.1.2.温室効果ガス排出量算定方法検討会」を参照）では、UNFCCC インベントリ年次審査報告書における勧告事項の全てを検討課題の対象とし、優先度を考慮の上、対応への取り組みを進めている。

表 10-11 UNFCCC インベントリ審査への対応状況の概要

分野/カテゴリー	専門家審査チームによる勧告事項	日本の対応	NIR/CRF 該当箇所
エネルギー/レファレンスアプローチ	全燃料種について GCV から NCV への変換に使う係数の詳細な情報を NIR に含めること。(2018 年審査報告書パラ E.1)	換算係数を NIR に記載した。	NIR 別添 4 (A4.4)

分野/カテゴリー	専門家審査チームによる勧告事項	日本の対応	NIR/CRF 該当箇所
エネルギー/燃料の非エネルギー利用	あらゆる潜在的な排出量の漏れがないことを論証するために、燃料が非エネルギー利用される際、注釈記号「NE」の適用について一層の透明性と根拠を NIR や CRF (例えば備考欄) に提供すること (2018 年審査報告書パラ E.4)	BTX (ベンゼン・トルエン・キシレン) の原料として製油所ガスを投入していることが判明したことから、2012 年度以降の other oil の注釈記号を「NE」から「NO」に変更した。今回の提出で CRF 表 1.A(d) で「NE」と報告している項目はなくなった。	CRF 表 1.A(d)
エネルギー/発電熱供給 (1.A.1.a)	CO ₂ の IEF を正当化し報告の比較可能性を確保するために、発電熱供給 (1.A.1.a) のその他燃料の成分について、報告の透明性を向上させること。 (2018 年審査報告書パラ E.5)	NIR 表 3-57 脚注 8 及び 9 に、熱量ベースでの活動量を石油由来成分と生物起源成分とで分離することが困難な理由を追記した。	NIR3 章 (3.2.12)
エネルギー/天然ガス (1.B.2.b)	天然ガスの産業部門への供給の際に生じる漏出について、NIR の記述を明確にすること。(2018 年審査報告書パラ E.10)	NIR に新たに図を掲載し説明した。	NIR3 章 (3.3.2.2) / 図 3-7
エネルギー/レファレンスアプローチ	レファレンスアプローチ (CRF 表 1.A(b)) に廃棄物 (非バイオマス分) の排出量を報告すること。(2018 年審査報告書パラ E.11)	レファレンスアプローチに廃棄物の排出量を報告した。	CRF 表 1.A(b)
エネルギー/石油精製 (1.A.1.b)	大気汚染排出量総合調査により 2012 年から 2015 年において排出係数の大きな炉の数の増加が (炉種と燃料消費量に基づき) 特定されたことから、(2014 年に実施された) 同調査の新しいデータがインベントリに反映されたことにより 2012 年から 2015 年の CH ₄ と N ₂ O の IEF が増加した理由を NIR に記述すること。2010 年と 2011 年の間でみられる CH ₄ と N ₂ O の IEF の激減の理由を NIR に説明すること。(2018 年審査報告書パラ E.12)	説明を NIR に記載した。	NIR3 章 (3.2.5.b)
IPPU/全般	UNFCCC 附属書 I 国インベントリガイドラインと 2006 年 IPCC ガイドラインに沿って、ソーダ灰製造、銑鉄、フェロアロイおよび鉛垂鉛製造のための還元剤の消費からの排出量を、それぞれ 2.B.7、2.C.1、2.C.2、2.C.5 および 2.C.6 に再計上すること。(2018 年審査報告書パラ I.1)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.3.7、4.4.1、4.4.2、4.4.5、4.4.6)
IPPU/石灰製造 (2.A.2)	製糖工場における石灰製造は、再吸収のため CO ₂ 排出は生じないことを正当づける情報を提供すること (2018 年審査報告書パラ I.3)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.2.2.b)
IPPU/石灰製造 (2.A.2)	アルミニウム製造の工業会と協力して、アルミニウム製造における石灰製造はないことを確認する情報を得ること (2018 年審査報告書パラ I.4)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.2.2.b)
IPPU/ガラス製造 (2.A.3)	CO ₂ を微量排出するガラス製造の原材料からの CO ₂ 排出量を算定しインベントリに計上すること。(2018 年審査報告書パラ I.5)	CO ₂ 排出量をインベントリに計上した。説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.2.3) / Table2(I).A-Hs1

分野/カテゴリー	専門家審査チームによる勧告事項	日本の対応	NIR/CRF 該当箇所
IPPU/石油化学および カーボンブラック製造 (2.B.8)	国独自の CO ₂ 排出係数が、2006年 IPCC ガイドラインに一貫した方法で開発しており、スチームクラッキングプロセスからの CO ₂ 総排出量を網羅し、IPCC デフォルト排出係数よりも正確に考慮されていることを正当化すること。(2018年審査報告書パラ I.8)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.3.8.2.b)
IPPU/アンモニア製造 (2.B.1)	CO ₂ の IEF の年次変化 (2004/2005 (-9.6%)、2011/2012 (8.0%)、2015/2016 (-11.1%)) の理由を、NIR に含めること (2018年審査報告書パラ I.23)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.3.1.b)
IPPU/二酸化チタン製 造 (2.B.6)	ルチル型二酸化チタンの CO ₂ 排出係数が、IPCC デフォルト値よりも低いことを明確にする文章を NIR に追加すること (2018年審査報告書パラ I.24)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.3.6.b)
IPPU/石油化学および カーボンブラック製造 (2.B.8)	二塩化エチレンおよびクロロエチレン製造に関する CH ₄ の IEF が低い (IPCC デフォルト値と比較して) 理由を、NIR に含めること (2018年審査報告書パラ I.25)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.3.8.3.b)
IPPU/鉄鋼製造 (2.C.1)	1.A.2.a と 2.C.1 カテゴリーからの CO ₂ 排出量の合計を NIR に含め、この合計値が 2006年 IPCC ガイドラインにそって算定された排出量とどの程度比較可能であるかの定性的な説明を、NIR に含めて提供すること。日本が 2.C.1 カテゴリーの国独自の CO ₂ 排出係数が IPCC デフォルト値よりも高い理由の説明を NIR に含めること (2018年審査報告書パラ I.27)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.4.1、 4.4.1.2.b)
IPPU/鉄鋼製造 (2.C.1.c)	2.C.1.c の CRF 表 2(I).A-Hs2 (製造・消費量) における注釈記号を「NA」から「NO」に訂正すること (2018年審査報告書パラ I.28)	CRF 表の注釈記号を訂正した。	CRF Table2(I).A-Hs2
IPPU/鉄鋼製造 (2.C.1)	NIR に鉄鋼製造におけるすべての還元剤の使用の記述 (または表) を含め、また還元剤の情報がどこで見つけうのかの相互参照を NIR に含めること (2018年審査報告書パラ I.29)	説明と相互参照を NIR に記載した。	NIR3 章 (3.2.3)、NIR4 章 (4.4.1)
IPPU/鉄鋼製造 (2.C.1)	NIR の表 3-10 に、吹込み用微粉炭に関して、非エネルギー用途の燃料として (例えば原料として)、その用途を説明する情報を含めること (2018年審査報告書パラ I.30)	説明を NIR に記載した。	NIR3 章 (3.2.3)
IPPU/フェロアロイ製 造 (2.C.2)	その他の炭素含有材料 (鉍石およびスラグの形成など) に関する CO ₂ 排出量を算定すること (2018年審査報告書パラ I.31)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.4.2.a)
IPPU/フェロアロイ製 造 (2.C.2)	CH ₄ 排出量と国独自の CH ₄ 排出係数をどのように算定したかのもっと詳細な説明を提供し、フェロアロイ製造 1 トン当たりの国独自の排出係数 (CRF 表 2(I).A-Hs2 と 2006年 IPCC ガイドラインの通り) を設定しない理由をもっと詳細に説明すること (2018年審査報告書パラ I.32)	説明を NIR に記載した。	NIR4 章 (4.4.2.b)

分野/カテゴリー	専門家審査チームによる勧告事項	日本の対応	NIR/CRF 該当箇所
IPPU/潤滑油の使用 (2.D.1)	CRF に報告された単位を検証し訂正すること。(2018年審査報告書パラ I.33)	CRF 表の単位を修正した。	CRF Table2(I).A-Hs2
IPPU/半導体製造 (2.E.1)	NIR において、ガスごとの「反応消費率」(use rate)、C ₂ F ₆ の副生率の情報を報告すること(2018年審査報告書パラ I.10)	反応消費率と副生率の表を追加した。	NIR4 章 (4.6.1)
IPPU/液晶製造 (2.E.2)	NIR において、ガスごとの「反応消費率」(use rate)、CHF ₃ の副生率の情報を報告すること(2018年審査報告書パラ I.13)	反応消費率と副生率の表を追加した。	NIR4 章 (4.6.2)
IPPU/冷凍空調機器 (2.F.1)	こうしたタイプの機器は密閉されているので、「稼働装置あたりの冷媒充填量」のパラメータが「一台あたりの廃棄時の冷媒残存量」、「一台あたりの製造時冷媒充填量」に等しいことについて報告すること。(2018年審査報告書パラ I.17)	NIR 表の下の注に追記した。	NIR4 章 (4.7.1.1) 表 4-63 下
IPPU/冷凍空調機器 (2.F.1)	業務用冷凍機器について、すべての年の製造・使用・廃棄時について PFC が排出されていないという説明を裏付ける情報を NIR に記載すること(2018年審査報告書パラ I.34)	PFC の使用に関する追加説明を記載した。	NIR4 章 (4.7.1.2.a)
IPPU/冷凍空調機器 (2.F.1)	鉄道・船舶に関する活動量・排出量を業務用冷凍機器から輸送機器用冷蔵庫に計上場所を変更すること(2018年審査報告書パラ I.35)	計上場所を変更した。	NIR4 章 (4.7.1.3) 及び CRF Table2(II).B-Hs2
IPPU/発泡剤 (2.F.2)	閉鎖系気泡フォーム・開放系気泡フォームの発泡剤の活動量を、NIR において現在報告されているデータを用い、CRF Table2(II)B-Hs2 に、透明性をもって報告すること(2018年審査報告書パラ I.21)	CRF の活動量を修正した。	CRF Table2(II)B-Hs2
IPPU/発泡剤 (2.F.2)	使用時の平均年間ストック量が 203.6%増加した 2005/2006 年に、HFC-245fa と HFC-365mfc の使用が増えた理由を NIR において説明すること(2018年審査報告書パラ I.36 (奨励事項))	使用が増えた理由を記載した。	NIR4 章 (4.7.2.1.a) 表 4-73 下
農業/全般	CRF の表 3.As.2 の中で注釈記号「NE」が使われている箇所がある。しかし、日本はこれらの注釈記号を「NE」から「NA」に改訂すること。(2018年審査報告書パラ A.3)	CRF の表 3.As.2 の注釈記号を NA に変更した。	CRF Table3.As.2
農業/稲作 (3.C)	2017 提出時の再計算のために用いた有機物施用量の新しいデータが、なぜより正確なものであると言えるのか、検証に関する情報を含めること。(2018年審査報告書パラ A.4)	古い有機物施用量が、重複計上された間違いであった旨を記載した。	NIR5 章 (5.4.1)
農業/農用地の土壌 (3.D.a)	1990 年から 2016 年の間に、日本の無機窒素肥料と有機質肥料の窒素量が、それぞれ 35%、20%減少している背景情報を NIR に記載すること。(2018年審査報告書パラ A.5)	背景情報を記載した。	NIR5 章 (5.5、 5.5.1.1)
農業/農用地の土壌/ 直節排出/有機質土壌 の耕起 (3.D.a.6)	CRF の表 3.D の原則活動量の入力求められる農業分野と、有機質土壌全面積の入力が求められる LULUCF 分野間で数値が異なる。3.D.a.6 の下で報告した面積を NIR の中で明確に説明にすること。(2018年審査報告書パラ A.6)	農業分野で報告している面積について、説明を追記した。	NIR5 章 (5.5.1.6)

分野/カテゴリー	専門家審査チームによる勧告事項	日本の対応	NIR/CRF 該当箇所
農業／農用地の土壌／直節排出／有機質土壌の耕起 (3.D.a.6)	日本の有機質土壌の N ₂ O の見かけの排出量がガイドラインと比べて低い理由となっている国独自の有機質土壌の水田からの N ₂ O の排出係数について正当化する理由を記述すること。(2018年審査報告書パラ A.7)	正当性を示す理由を記載した。	NIR5 章 (5.5.1.6)
LULUCF／転用のない農地 (4.B.1)	農業分野の有機質土壌 (ヒストスル) と LULUCF 分野の農地及び草地の有機質土壌の報告間にある相違についての説明を NIR で加えること (2018年審査報告書パラ L.4)。	LULUCF 分野で報告される面積と農業分野での数値の違いについて 2019 年 NIR に追記した。	NIR6 章 (6.6.1)
LULUCF／転用のない農地 (4.B.1)	Roth C モデルの算定結果及び、そのトレンドについて NIR で明確に説明すること。(2018年審査報告書 L.6)	Roth C モデルの算出結果の変動とその要因について 2019 年 NIR に記載した。より詳細な要因については究明中である。	NIR6 章 (6.6.1.a)
LULUCF／転用のない草地 (4.C.1)	Roth C モデルを用いた算定結果や、その値の変動について NIR に明確な説明を行うこと (2018年審査報告書 L.8)	Roth C モデルの算出結果の変動とその要因について 2019 年 NIR に記載した。より詳細な要因については究明中である。	NIR6 章 (6.7.1.a)
LULUCF／無機化された窒素からの直接 N ₂ O 排出 (4.(III))	CRF 4.B、4.C、4.(III)で報告されている鉱質土壌面積の一貫性について改善すること (2018年審査報告書パラ L.11)	CRF に報告している面積が修正されました。	CRF 表 4.B、 4.C 及び 4.(III)
LULUCF／伐採木材製品 (HWP) による炭素蓄積変化 (4.G)	使用された方法がどのように建築物の解体や改築による炭素ロスを計上するかをよりよく説明することにより、4G 下に報告される各 HWP commodity に含まれるものの NIR 記述を改善すること (2018年審査報告書パラ L.14)	NIR に算定式及び説明を掲載した。	NIR6 章 (6.11.1)
LULUCF／転用のない森林 (4.A.1)	1990 年以降、森林の炭素ストック量が増加している要因と、炭素増加につながる森林経営活動の情報を NIR に含めること (2018年審査報告書パラ L.16)	その説明を NIR に掲載した。	NIR6 章 (6.5.1)
LULUCF／他の土地利用から転用された森林 (4.A.2)	2006 年 IPCC ガイドラインでは、単年生作物の転用前後のバイオマス量のデフォルト値を与えているが、日本は 0 を用いている。日本が 0 を適用する理由を NIR で説明するか、デフォルト値を利用すること (2018年審査報告書パラ L.17)	2020 年提出において単年生作物バイオマス炭素ストック量の算定を新たに追加した。また、その説明を NIR に掲載した。	NIR6 章 (表 6-8a、6-8b)
LULUCF／転用のない農地 (4.B.1)	水田の有機質土壌面積減少の理由を NIR で説明すること (2018年審査報告書パラ L.18)	その説明を NIR に掲載した。	NIR6 章 (6.6.1)
LULUCF／転用された開発地 (4.E.2)	有機質土壌地が開発地へ転用された場合に、排出が生じていないとする方法について、より明解な説明を行うこと (2018年審査報告書パラ L.19)	2020 年提出において新たに算定を追加した。また、その説明を NIR に掲載した。	NIR6 章 (6.9.2、6.13)
廃棄物／固形廃棄物の陸上における処分 (5.A)	固形廃棄物の処分に伴う CH ₄ 排出量の計算に国独自の生分解の半減期 (k) を用いることの正当化を提供すること。もし適切な正当化が不可能な場合、2006 年 IPCC ガイドライン (volume 3, chapter 3) の表 3.4 による生分解の IPCC デフォルト半減期を仮定して、固形廃棄物の処分からの CH ₄ 排出量の計算をすること。(2018年審査報告書パラ W.5)	国独自の生分解の半減期を用いることの正当化を NIR に提供した。	NIR7 章 (7.2.1)

分野/カテゴリー	専門家審査チームによる勧告事項	日本の対応	NIR/CRF 該当箇所
廃棄物/バイオガス施設における嫌気性消化 (5.B.2)	UNFCCC 附属書 I 国報告ガイドラインの para 37 (b) に従い、重要性の閾値に基づき CRF の Table 5.B に固形廃棄物の嫌気性消化に伴う CH ₄ 排出量を「NE」と報告し、NIR の別添 5 にこの注釈記号の使用を正当化すること。(2018 年審査報告書 para W.6)	CRF の Table 5.B に固形廃棄物の嫌気性消化に伴う CH ₄ 排出量を「NE」と報告し、NIR の別添 5 にこの注釈記号の使用を正当化した。	CRF 表 5D NIR7 章 (7.3.2)
廃棄物/生活排水 (5.D.1)	旧世代の浄化槽 (2001 年以前) から新建築基準に従った新しい嫌気-好気処理浄化槽へのより段階的な置換えの計算を組み込むことによって、CH ₄ 排出係数の効果のより現実的なシナリオを仮定して、合併処理浄化槽からの CH ₄ 排出量を計算すること。(2018 年審査報告書 para W.7)	算定方法を再検討して、合併処理浄化槽からの CH ₄ 排出量を再計算した。	NIR7 章 (7.5.1)

10.4.2. 今後の改善計画

以下のような改善を継続的に行い、適宜インベントリの作成プロセスに反映している。詳細については、各カテゴリーの当該記述を参照のこと。

1. 算定方法、活動量、排出係数等の見直し

毎年度、温室効果ガス排出量算定方法検討会を開催し、現在のインベントリにおいて使用されている算定方法、活動量、排出係数等の改善に関する検討を実施している。検討にあたっては、キーカテゴリーに関する課題、過去の審査において指摘がなされた課題など、重要度の高い課題から優先的に対応している。

2. 透明性の向上

排出・吸収量の算定に関わる方法論、仮定、各種データ等に関する NIR の記載内容について適宜精査を行い、必要な情報を追加していくことで、更なる透明性の向上を図っている。

第11章 京都議定書第3条3及び4の下でのLULUCF活動の補足情報

11.1. 京都議定書第3条3及び4の下での排出・吸収の算定についての概要

京都議定書第8回締約国会議（COP/MOP8）における決定2/CMP.8パラグラフ4の要請に従って報告する。京都議定書の第2約束期間の下での第3条3及び4活動に関する吸収源活動は、我が国では新規植林・再植林（AR）、森林減少（D）、森林経営（FM）、農地管理（CM）、牧草地管理（GM）、植生回復（RV）を含める。報告状況は表11-1の通りである。また、それらの活動の2018年度の吸収量は合計43,008kt-CO₂換算の吸収となった（表11-2）。方法論のTierは表11-3に示す。

表11-1 第3条3及び4活動に関する報告情報（CRF-Table NIR 1）

活動	炭素プール毎の変化量の報告状況								温室効果ガス排出源の報告状況								
	地上バイオマス	地下バイオマス	リター	枯死木	土壌		伐採木材製品	施肥	排水、再湛水及びその他土壌			鉱質土壌中の窒素無機化		管理土壌からの間接N ₂ O		バイオマスの燃焼	
					鉱質	有機質			N ₂ O	CH ₄	N ₂ O	N ₂ O	CO ₂	CO ₂	CH ₄	N ₂ O	
第3条3活動	新規植林・再植林	R	R	R	R	R	NO	NO	IE	NO	NO	NA	IE	IE	R	R	
	森林減少	R	R	R	R	R	R	IO	IE	R	NO	R	R	NO	NO	NO	
第3条4活動	森林経営	R	R	R	R	R	NO	R	R	NO	NO	R	R	IE	R	R	
	農地管理	R	R	NR	NR	R	R			R		R		IE	R	R	
	牧草地管理	R	R	NR	NR	R	R			R		R		NO	NO	NO	
	植生回復	R	R	R	IE	R	NO		IE	NO	NO	NA	IE,NA	NO	NO	NO	
	湿地の排水・再湛水	NA	NA	NA	NA	NA	NA		NA	NA	NA		NA	NA	NA	NA	

(注) R：報告。NR：報告しない。IO：即時排出。
他の注釈記号については別添5を参照のこと。

表11-2 第3条3及び4活動による排出・吸収量（CRF-Information table on accounting より）

温室効果ガス排出・吸収活動	純排出/吸収量 [kt CO ₂ 換算]						
	1990 (基準年)	2013	2014	2015	2016	2017	2018
A. 3条3項活動							
A.1. 新規植林・再植林		-1,558	-1,563	-1,562	-1,562	-1,536	-1,442
自然擾乱により除外される排出量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
自然擾乱を受けた土地での除外される再吸収量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
A.2. 森林減少		2,049	2,055	2,274	2,275	1,611	1,605
B. 3条4項活動							
B.1. 森林経営							
純排出/吸収量		-51,149	-51,449	-49,216	-46,650	-46,469	-45,361
自然擾乱により除外される排出量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
自然擾乱を受けた土地での除外される再吸収量		NA	NA	NA	NA	NA	NA
代替植林に起因するデビット(CEF-ne)		NA	NA	NA	NA	NA	NA
FM参照レベル(FMRL)		0	0	0	0	0	0
FMRLへの技術的調整		1,069	1,252	1,404	1,544	1,687	1,821
上限値							
B.2. 農地管理		10,265	3,693	4,476	4,413	4,197	3,721
B.3. 牧草地管理		840	-190	9	-70	-118	-209
B.4. 植生回復		-82	-1,228	-1,247	-1,267	-1,285	-1,322
B.5. 湿地の排水・再湛水 (非選択)		NA	NA	NA	NA	NA	NA
合計(FMRLへの技術的調整を除く)		-	-48,382	-47,718	-45,427	-42,423	-43,689

(注) 四捨五入表記の関係で、各要素の累計と合計値が一致していない箇所がある。

表11-3 第3条3及び4活動で用いている方法論のTier

活動	CO ₂		CH ₄		N ₂ O		
	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	
第3条3活動	新規植林・再植林	T2	CS	T1	D	T1	D
	森林減少	T2	CS,D	T1	CS,D	T1	CS,D
第3条4活動	森林経営	T2,T3	CS,D	T1	D	T1,T2	CS,D
	農地管理	T2,T3	CS,D	T1	CS,D	T1,CS	CS,D
	牧草地管理	T2,T3	CS,D	T1	CS,D	CS	CS
	植生回復	T2	CS,D				
	湿地の排水・再湛水						

D: IPCCデフォルト値、T1: IPCC Tier1、T2: IPCC Tier2、T3: IPCC Tier3、CS: 国独自の方法または排出係数

11.2. 決定3/CMP.11パラグラフ8に関する情報

決定3/CMP.11パラグラフ8に従い、我が国の第2約束期間中の京都議定書3条4項LULUCF活動の算定対象及び報告方法を以下に記載する。

- ・ わが国では、第2約束期間に義務報告となった森林経営、第1約束期間に選択をした植生回復に加え、農地管理、牧草地管理を新規の第3条4活動として報告する。
- ・ 森林経営、植生回復活動については、第1約束期間に適用した土地特定に関する方法論を第2約束期間にも適用しており、第1約束期間に計上された土地は第2約束期間の計上対象にも含まれている。第2約束期間より追加された農地管理、牧草地管理については、条約インベントリ報告でも用いてきた統計情報を元に土地特定を行っている。詳細は、各活動の関連節にて説明する。

11.3. 一般的な情報

11.3.1. 森林の定義とその他の判断基準

決定16/CMP.1、決定2/CMP.7附属書パラグラフ20及び2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスの記載に基づき、我が国の森林の定義を以下の通りとする。

- ・ 最小面積 0.3 [ha]
- ・ 最小樹冠被覆率 30 [%]
- ・ 最低樹高 5 [m]
- ・ 最小の森林幅 20 [m]

上記の森林定義は、最小面積、最小樹冠被覆率及び最小の森林幅について、我が国の既存の森林計画制度上の対象森林と一致する。最低樹高については既存の制度に定義されていないが、我が国の森林を構成する樹種や気候条件を勘案すると、森林計画対象森林において成林時の樹高が5mを下回することは極めて稀である。森林計画対象森林においては、都道府県等が計画樹立等のために調査を行い、森林簿として森林資源に関する情報を取りまとめている。このため、我が国においては、条約に基づくインベントリ報告と同様に森林計画対象森林をもって京都議定書に基づく森林とみなし、報告の基礎データとして森林簿を用いることとする。京都議定書の第2約束期間報告に利用する森林の定義は第1約束期間と一致している。

なお、この定義は国連食糧農業機関（FAO）が調査を行っているFRA「世界森林資源評価国別報告書」における我が国の報告対象森林の定義（表11-4）と一致している。

表 11-4 我が国がFAOの報告に用いている森林区分及び定義

区分	定義
森林	木竹が集団して生育している土地及びその土地の上にある立木竹、もしくは木竹の集団的な生育に供される、0.3ヘクタール以上の土地。ただし、主として農地又は住宅地若しくはこれに準ずる土地として使用される土地及びこれらの上にある立木竹を除く。
立木地	森林のうち、樹冠疎密度0.3以上の林分（幼齢林にあつては立木度3以上の林分を含む）。
無立木地	森林のうち、立木地と竹林以外の林分。
竹林	立木地以外の森林のうち、主に竹（笹類を除く）が生立する林分。

(注) 各区分の詳細は第6章6.2節も参照のこと。

我が国の森林資源現況調査においては、1995年以前までは森林（立木地）のサブカテゴリーとして、人工林と天然林に区分していたが、2002年以降の調査においては、森林の育成（人

為)の程度及び階層構造に着目し、育成林と天然生林のサブカテゴリーを加えている。育成林には、伐採後主として植栽等によって更新を図る人工林のほか、植栽等によらず、地表かきおこし等の補助作業により更新を図る一部の天然林が含まれる。人工林、天然林と、育成林、天然生林の定義については以下に示すとおりである。

表 11-5 我が国の人工林、天然林、育成林、天然生林の定義¹

更新方法による区分		管理方法による区分	
人工林	植栽等により更新する森林	育成林	森林を構成する林木を皆伐により伐採し、単一の樹冠層を構成する森林として人為により成立させ維持する森林（育成単層林）、及び森林を構成する林木を択伐等により伐採し、複数の樹冠層を構成する森林として人為により成立させ維持する森林（育成複層林）。
天然林	人工林の定義に合致しない森林	天然生林	主として天然力を活用することにより成立させ維持する森林。

11.3.2. 選択された京都議定書第3条4の活動

我が国としては、京都議定書第3条4に規定する「吸収源による吸収量の変化に関連する追加的人為活動」（以下、「人為的吸収源活動」という）として、決定2/CMP.7 附属書パラグラフ6、7の規定を踏まえ、森林経営（Forest Management）に加え、農地管理（Cropland Management）、牧草地管理（Grazing Land Management）、及び植生回復（Revegetation）を選択した。

各活動においては、決定6/CMP.9パラグラフ9において締約国に対して使用が義務づけられている2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスを考慮しつつ、我が国における定義を以下の様に解釈している。

11.3.2.1. 森林経営

決定16/CMP.1 附属書パラグラフ1(f)において『「森林経営」とは、森林に関連する生態学的機能（生物多様性を含む）や森林の経済的及び社会的な機能を持続可能な形で満たすことを目的とした森林の管理と利用のための施業システムである』と定義されている。我が国の定義は以下のとおり解釈することとする。

- ・ 育成林については、森林を適切な状態に保つために1990年以降に行われる森林施業（更新（地拵え、地表かきおこし、植栽等）、保育（下刈り、除伐等）、間伐、主伐）
- ・ 天然生林については、法令等に基づく伐採・転用規制等の保護・保全措置

11.3.2.2. 農地管理

決定16/CMP.1 附属書パラグラフ1(g)において『「農地管理」とは、農作物が育てられる土地、及び作物生産のため確保されている土地または一時的に利用されていない土地での実践方法システム』と定義されている。我が国の定義は以下のとおり解釈することとする。

- ・ 田、畑、樹園地において耕作を行う行為²

11.3.2.3. 牧草地管理

決定16/CMP.1 附属書パラグラフ1(h)において『「牧草地管理」とは、植生と生産される家畜の量とタイプを操作することを目指した、家畜生産に用いられる土地での実践方法のシス

¹ 「森林・林業基本計画」が変更されたのに伴い育成林及び天然生林の説明が変更されているが、いずれも対象となる森林に変更はない。

² 条約インベントリで農地に含めている耕作放棄地は、適切な管理が行われていない土地であり、農地管理には含まない。

テム』と定義されている。我が国の定義は以下のとおり解釈することとする。

- ・ 牧草地において採草や放牧等を行う行為³

11.3.2.4. 植生回復

決定16/CMP.1 附属書パラグラフ1(e)において『「植生回復」は、新規植林及び再植林の定義に該当しない、最小面積0.05 ha以上の植生を造成することを通じ、その場所の炭素蓄積を増加させる直接的人為的活動である』と定義されている。我が国の定義は以下のとおり解釈することとする。

- ・ 1990年以降に行われる開発地における公園緑地や公共緑地、又は行政により担保可能な民有緑地を新規に整備する活動であり⁴、最小面積が0.05 ha未満または新規植林及び再植林の定義に合致する土地は、植生回復地には含まない。

11.3.3. 第3条3及び4活動に関する定義の一貫性について

11.3.1節に記載している森林の定義は全期間同一で変化はない。京都議定書第3条3の新規植林・再植林(AR)及び森林減少(D)においても、京都議定書第3条4の森林経営(FM)についても、同じ森林の定義を用いている。11.3.2節に記載している森林経営(FM)、農地管理(CM)、牧草地管理(GM)、植生回復(RV)に関する定義についても、全期間同一で変化はない。

11.3.4. 選択された京都議定書第3条4の活動間の階層構造及び土地区分の一貫した適用について

我が国では、森林経営活動は森林地、農地管理活動、牧草地管理活動、植生回復活動は非森林地(それぞれ、農地、草地、開発地)においてのみ発生する活動として解釈しているため、森林経営活動と、それ以外の農地管理活動、牧草地管理活動、植生回復活動の重複はない。農地管理と牧草地管理は同一データソースの別項目を用いて分類しているため重複は生じない。農地や草地が開発地に転用され新規植栽が行われた場合では、農地管理活動、牧草地管理活動と植生回復活動が重複する可能性があるが、第3条4活動をまたぐ土地転用においては、基本的に転用された土地面積及び転用に伴う炭素ストックの損失は元の活動下で報告するが、転用後の成長などに伴う炭素ストックの増加については新しい活動下で報告し、排出・吸収量の算定に二重計上が生じないように整理している。

11.4. 土地に関する情報

11.4.1. 京都議定書第3条3に基づく土地ユニットの面積を決定するための空間評価単位

「11.3.1. 我が国が設定した森林の定義」に示す森林の定義に従って、京都議定書第3条3に基づく土地ユニット(Unit of land)の空間評価単位を0.3 haとする。

³ 条約インベントリで草地に含めている「採草放牧地」は、特に管理変化が生じていない土地であり、「原野」は放牧のために供されている土地ではないため、牧草地管理の対象とはしていない。

⁴ 我が国で植生回復活動が行われている施設緑地は、「都市公園」、「道路緑地」、「港湾緑地」、「下水道処理施設における外構緑地」、「緑化施設整備計画認定緑地」、「河川・砂防緑地」、「官庁施設外構緑地」、「公的賃貸住宅地内緑地」である。

11.4.2. 土地転用マトリクスの作成方法

11.4.2.1. 共通報告様式 Table NIR 2 の説明について

京都議定書対象活動に関する我が国の土地転用マトリクスは表 11-6 の通りである。我が国においては、森林経営対象地の把握において、2013 年京都議定書補足的方法論ガイダンスの 2.7.1 節に定めるナローアプローチを基にした方法を用いている。そのため、それまで森林経営の対象ではなかった管理森林が、当該年度の森林経営活動の進捗によって新たに森林経営対象林となる。その値がその他から森林経営への転用面積として把握される。同様に、植生回復対象地においても、新たに植生回復活動が行われる土地が新規に第 3 条 4 活動の対象となるため、表 11-6 においてその値がその他から植生回復への転用面積として把握される。

農地管理・牧草地管理においては、それぞれ、原則現状農地である土地（耕作放棄地を除く）、及び現状牧草地である土地を対象としているが、2013 年以降に他の土地利用に転用された場所（かい廃地等）についても 2/CMP.7 附属書パラグラフ 24 の規定に従い農地管理・牧草地管理の報告対象に含めている。ただし、かい廃地のうち植林地については新規植林・再植林対象地への転用、開発地に転用され、その土地で新規の植栽が行われた場合は、植生回復対象地への転用として整理した。また、新規造成地のうち森林からの転用に由来する土地は森林減少活動下の報告対象となるため、この場合も農地管理・牧草地管理地に含めない。なお、農地管理、牧草地管理をまたぐ土地利用については土壌炭素モデル算定では考慮しているが、変化面積を明示的に切り分けていないため「IE」としている。

2018 年の土地転用マトリクスについては、2017 年に報告した値からの変化を計上した。

表 11-6 京都議定書対象活動を踏まえた我が国の土地転用マトリクス（CRF-Table NIR 2）

2017年度 時点の状況		2018年度の 該当地		3条3 活動		3条4 活動					その他	合計 (2017年度末 時点)
		新規植林・ 再植林	森林減少	森林経営	農地管理	牧草地管理	植生回復	湿地の排水・再 湛水(非選択)				
		(kha)										
3条3 活動	新規植林・再植林	105.70	0.12									105.82
	森林減少		316.78									316.78
3条4 活動	森林経営		3.97	15,824.15								15,828.12
	農地管理	NO		NA	3,932.77	IE	NO	NA				3,932.77
	牧草地管理	0.08		NA	IE	607.58	NO	NA				607.66
	植生回復	NO		NA	NA	NA	87.76	NA				87.76
	湿地の排水・再 湛水(非選択)	NA		NA	NA	NA	NA	NA				NA
その他		0.01	2.11	122.25	7.78	2.61	0.83	NA	16,782.91			16,918.51
全面積(2018年度末時点)		105.79	322.98	15,946.40	3,940.55	610.19	88.59	NA	16,782.91			37,797.42

11.4.2.2. 新規植林・再植林、森林減少、森林経営排出・吸収量の算定手順

土地転用マトリクスの作成方法に関する説明にあたって、AR、D、FM 活動に伴う排出・吸収量の算定手順を以下に示す。ARD 活動については、サンプル調査に基づいて都道府県別の面積を把握した上で、各排出・吸収量の算定を行う。また、FM 活動については、都道府県別の森林排出・吸収量(ΔC) から AR 活動及び D 活動に伴う排出・吸収量を差し引き、さらにサンプル調査から求めた FM 率を適用することによって、排出・吸収量の算定を行う。

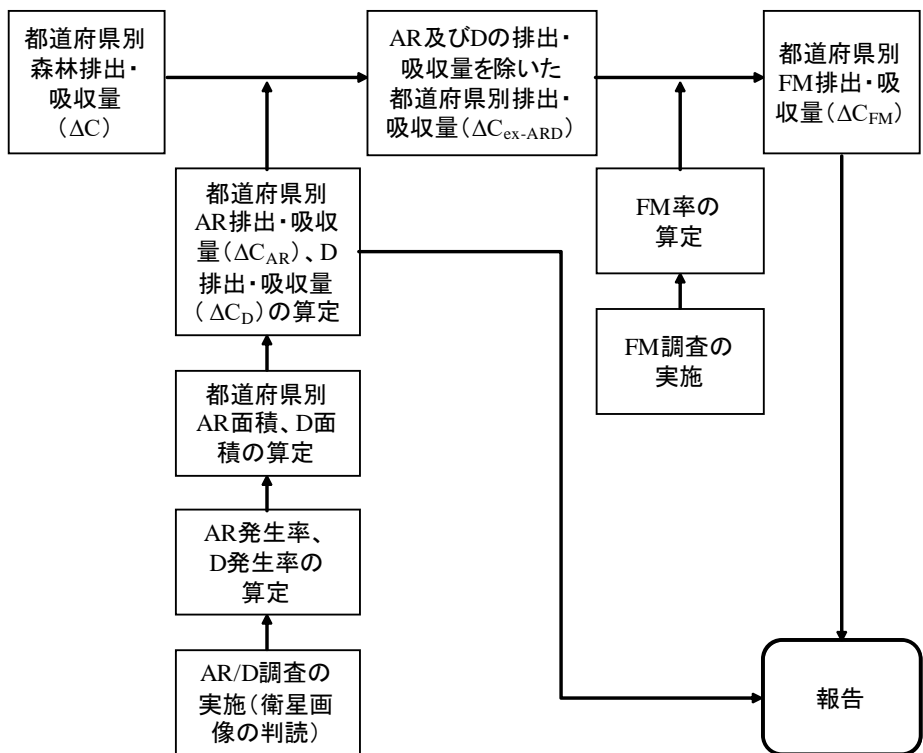


図 11-1 新規植林・再植林、森林減少、森林経営活動に伴う排出・吸収量の算定手順

11.4.2.3. 新規植林・再植林面積及び森林減少面積の把握方法

11.4.2.3.a. 方法論と手順

a) 判読の設計

我が国では、1989年末の空中写真オルソ画像及び2005年以降撮影の衛星画像を用いて、土地ユニットの空間評価単位（面積0.3ha、幅20m）を考慮しつつ、各プロットにおける森林被覆の変化を把握している。非森林から森林への変化のうち、人為的な植林活動と判読されたものをAR対象活動、森林から非森林への変化をD対象活動として判読している（林ら（2008））。具体的には、全国に500m間隔で格子状に約150万プロットを設定し森林被覆の変化について判読を実施している。判読に使用する衛星画像は2005年以降に撮影された画像とし、1989年末の空中写真と直近年の比較判読により、判読対象年までに森林被覆の変化の発生したプロットを把握している。各年の判読は、全国を2分し総プロットの半分を対象に、毎年交互に実施しており、日本全国の判読が2年で一巡するように設計されている。AR面積及びD面積は直近2回分の判読結果（林野庁、2018・2019）を用いて計算されている。何らかの理由で判読が難しかったプロットについては後述のAR及びD発生率の推計に用いる有効判読プロットから除外している。また、ARDと判読されたプロット毎の転用前または転用後の土地利用状況を衛星画像から判読しており、その情報から新規植林・再植林がどの土地利用から変化したのか、及び、森林減少地がどの土地利用に変化したかを推計している。

b) 新規植林・再植林面積及び森林減少面積の算定

1990～2018年度AR発生率の算定：

1989年末の空中写真と直近2回分（2017年、2018年撮影）のSPOT6/7HRV-Pの衛星画像の比較より、1990年から2018年度までのAR発生個所を把握した。また、2018年度までに発生したARがいつの期間に発生したかを、1989年末の空中写真及び2005年以降はおおよそ2年間隔で撮影された衛星画像を用いて画像間ごとの発生地点数を把握し

た（使用したデータについては、表 11-7 参照）。1990 年から 2005 年度の間発生については総発生数を有効判読点数で除して 1990 年度から 2005 年度までの総 AR 発生率とした (①)。2005 年以降の発生については、2 年間隔で撮影された画像を用いて発生数のカウントが行われた。各画像間の発生数は 2 年分の発生数となるため 2 で除した値を 1 年分の発生とみなした。これを有効判読点数で除して、2007 年度から 2018 年度までの各単年度の発生率とした (②)。1 巡の判読を 1 セットとし、発生数はこの 1 巡の判読結果を合計する。前述の通り判読が一巡するのに 2 年かかるため直近の判読年が中間年に当たる場合は、前回の巡目の後半の判読結果との合計で、国土全域を網羅する発生地点数が推計される。2006 年度の発生率は上述の計算に含まれていないので、①で求めた 1990 年から 2005 年度の総発生率を 16 等分した値を 2006 年度の発生率として用いた (③)。以上の①から③を合計して、1990 年度から 2018 年度までの総 AR 発生率とした。

1990～2018 年度 D 発生率の算定：

上述した AR の発生率の計算手順と同様にして、1990～2018 年度総 D 発生率を計算した。ただし、2006 年度の D 発生率の計算は、AR の計算とは異なる。具体的には、統計値「林地転用面積」の発生面積に応じて 1990 年度から 2005 年度までの累積の D 発生率を配分した。2006 年度の値は 2005 年度値を代用している。

1990～2018 年度 AR 及び D 面積の算定：

上述の手順で算定した 1990～2018 年度の総 AR 発生率に都道府県別の国土面積を乗じることにより、1990～2018 年度の都道府県別の AR 面積を算定する。同様に、1990～2018 年度の各年度の D 発生率を積算して 1990～2018 年度の総 D 発生率を求め、それに都道府県別の国土面積を乗じることにより、1990～2018 年度の都道府県別の D 面積を算定する。

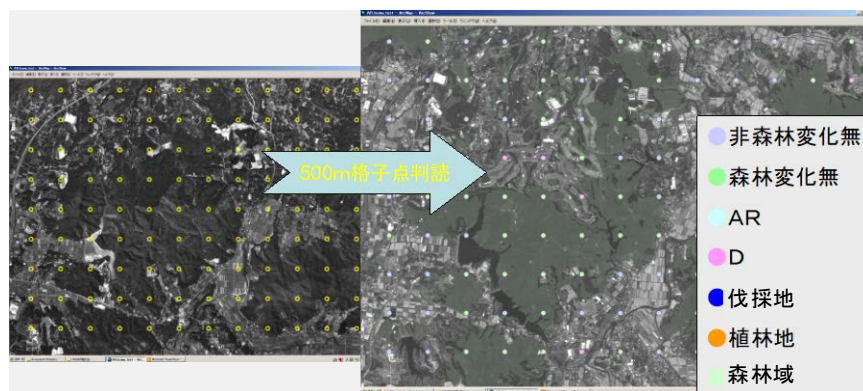


図 11-2 画像判読による ARD の把握

なお、我が国では、森林計画対象森林をもって京都議定書に基づく森林とみなし、報告の基礎データとして森林簿を用いているが、AR 及び D については森林簿ではなく空中写真オルソ画像・衛星画像の判読により把握しているのは、森林簿では 1990～2005 年度の森林状況の再現が困難であること、及び森林簿上で直接的人為による AR とそれ以外の原因による森林増加の区分が困難であることによる。

空中写真オルソ画像及び衛星画像を元にした森林減少率に関してあり得る過大または過小推計については、D 率は過大推計されている可能性がある。その理由は、衛星画像を判読する際に、森林被覆損失であるが森林減少には分類されない伐採跡地や、森林以外の土地における樹木被覆の減少地のプロットを D プロットと誤判読している可能性があるためである。

そのため、これまで日本はDプロットと判読されたプロットの一部について現地調査を行っている。調査の結果、これまでのところ、Dプロットと判読されたプロットのうち約9割は実際にDプロットであったが、約1割は伐採跡地や、森林以外の土地における樹木被覆の減少地などとなっている。一方、変化していないと判読されたプロットの一部についてのダブルチェックの結果として、誤判読はほとんどなく、D率の過小推計の可能性は極めて低いことが判明した。以上のことから、D率の過小推計の可能性は極めて低い、過大推計されている可能性はあるといえる。

11.4.2.3.b. 使用データ

ARD面積を把握する際に使用したデータは以下の通りである。

表 11-7 ARD面積を把握する際に使用したデータ

	解像度 [m]	データフォーマット
Ortho air-photo (1989 年末)	1	ラスター
SPOT5/HRV-P (2005 年、2007 年、2009 年–2014 年)	2.5	ラスター
SPOT6/7/HRV-P (2015 年–2018 年)	1.5	ラスター

11.4.2.3.c. 森林減少活動後の土地利用変化について

我が国ではD対象地の面積を上記「11.4.2.3.a 方法論と手順」の方法に基づき把握しているが、このシステムではD活動後の土地利用変化の継続的把握は行っていないため、別途、D活動が起こった土地のその後の土地利用変化の状況把握について検討を行った。

我が国では、土地データとして国土数値情報土地利用メッシュデータを継続的に整備しているが、上記システムとは定義、解像度、判読方法等が完全には整合していないため、上記システムの全てのD判読プロットにおける土地転用を精緻に追跡するものとはならない。しかし、D判読プロットにおける土地転用の状況について国土数値情報土地利用メッシュデータを分析した結果、Dを受けた土地が再転用を受けるケースは極めて稀であることが判明したことから、我が国ではD判読プロットにおける再転用は発生しないと想定した。

11.4.2.4. 森林経営対象森林面積の把握方法

11.4.2.4.a. 手順

我が国では、育成林及び天然生林別に以下の手順に従ってFM対象森林面積を把握した。セクション 11.3.2.1 で説明した通り、1990年以降の施業があった森林がFMの対象となるため、条約報告で対象としている管理森林であっても、当該要件を満たさない森林はFMの計上対象とはならない。そのため、FM対象森林の面積は、条約の下での管理森林の面積と同じではない。

また、森林経営面積は、前年の管理森林の総面積から森林減少分を差し引いた後で、残りの管理森林面積から抽出されるため、森林経営面積は森林減少に起因する減少が適切に反映されたものとなっている。

a) 育成林

1. FM活動を行っている森林がどの程度あるのかを調査するため、全国の民有林と国有林を対象に調査を実施（調査設計にあたっては、樹種別、地域別等に調査点数を配分し、調査箇所は国家森林資源データベースからランダムに選定）。
調査事項：森林の現況（樹種、林齢、本数等）、1990年以降の施業の有無・内容等
2. 調査結果から調査箇所に対するFM対象森林の割合（FM率）を求めた。
3. 全森林面積から都道府県別にARの発生面積を除外し、残りの都道府県別森林面積に

樹種、地域、年齢毎のFM率を適用しFM対象森林面積を算定した。

表 11-8 育成林の民有林・国有林別のFM率

区分/樹種		地域	民有林	国有林
人工林	スギ	東北・北関東・北陸・東山	0.88	0.91
		南関東・東海	0.71	0.87
		近畿・中国・四国・九州	0.78	0.90
	ヒノキ	東北・関東・中部	0.83	0.92
		近畿・中国・四国・九州	0.87	0.93
	カラマツ	全国	0.88	0.84
その他	全国	0.70	0.83	
天然林/全樹種		全国	0.43	0.67

(注)

- 1) 2018年度末時点の値で、調査箇所は全国で約22,400点
- 2) 地域は我が国で一般的に使用されている都道府県をいくつかまとめた区分である。
- 3) ここに掲載した値は、年齢別のFM率を森林面積で加重平均した値である。
- 4) FM率の不確実性推計値は日本全体で5%である。

b) 天然生林

天然生林については、法令等に基づく伐採・転用規制等の保護・保全措置が講じられている対象森林について、国家森林資源データベースから該当する森林を抽出した。京都議定書第3条4の下での天然生林は、以下の表11-9にあるとおり、保安林や国立公園特別保護地区及び特別地域及び他の保護森林/地域により構成されている。保安林は、公益的機能（例えば水源涵養や災害防止など）の発揮のため「森林法」（昭和26年（1951年）6月26日法律第249号）に基づき指定され、保安林における伐採、土地の形質変更等については、事前許可なしに実施することは禁止されている。また、保安林区域であることを示す標識の設置や巡視活動、衛星写真を用いたモニタリングが実施されている。国立公園については、自然公園法（昭和32年（1957年）6月1日法律第161号）に基づき、開発制限、動植物の捕獲・採取の禁止、土地の形質変更の制限、人の立ち入り・車両等の乗り入れ制限等を実施することにより保護されている。これらの措置は1990年以降も継続的に京都議定書第3条4の下での天然生林に適用されている。

表 11-9 天然生林の制限林面積

(単位：千ha)

制限林の種類	民有林	国有林	計
保安林	2,849	4,553	7,402
保安施設地区	1	0	1
保護林	0	603	603
国立公園特別保護地区	44	113	157
国立公園第1種特別地域	43	164	207
国立公園第2種特別地域	142	201	343
国定公園特別保護地区	9	37	46
国定公園第1種特別地域	31	104	135
国定公園第2種特別地域	94	84	178
自然環境保全地域特別地区	1	9	10
特別母樹林	1	1	1
計	3,214	5,869	9,083
(重複指定を除く面積の計)	(2,735)	(4,311)	(7,046)

(出典) 国家森林資源データベース (平成31年4月1日)

(注) 無立木地を含む。

11.4.2.4.b. 使用データ

a) 推計の基礎データ

FM に関する推計の基礎データには、条約報告に用いているものと同じ都道府県及び森林管理局作成の森林簿と収穫表（収穫表については一部（国研）森林総合研究所が作成）を利用している。収穫表と森林簿の作成に関する詳細は第6章 6.5.1.b) 1)節を参照のこと。

b) 国家森林資源データベースの整備について

林野庁は森林における GHG 排出量・吸収量を算定するための国家森林資源データベースを整備している。国家森林資源データベースは、算定・報告の基礎となる森林簿、森林計画図などの行政情報、位置情報としてオルソフォト及びランドサット TM、SPOT 等の衛星情報を保持・管理するものである。

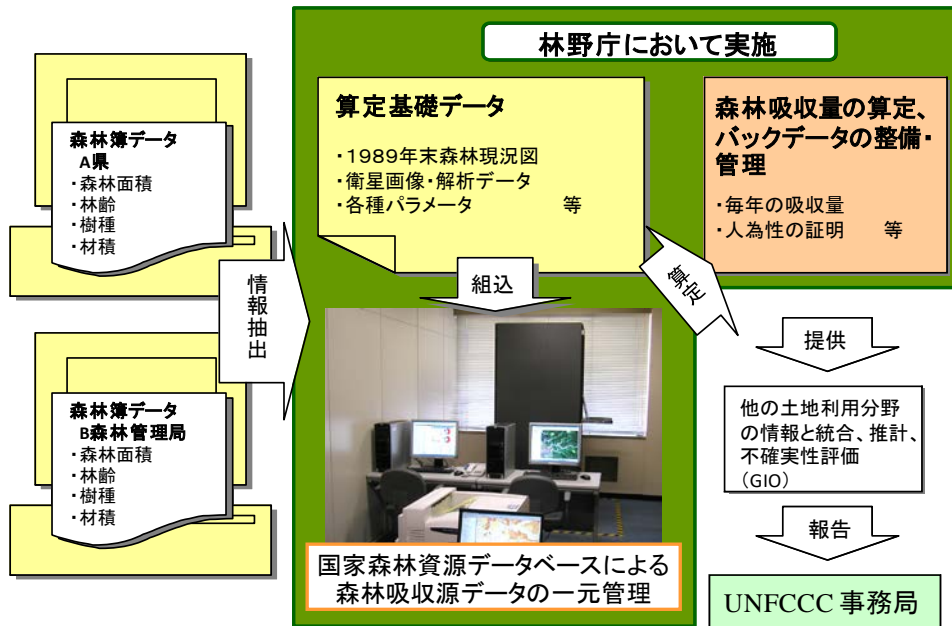


図 11-3 国家森林資源データベースの概要

11.4.2.5. 農地管理面積の把握方法

CM 面積は農林水産省「耕地及び作付面積統計」の都道府県別水田、普通畑、樹園地面積から把握し、原則的に現状農地である場所を対象地としている。この情報源及び土地利用定義は基本的に条約インベントリで用いているものと同様である（NIR 第6章 6.6 節を参照のこと）。

農地のうち、森林の転用により造成されたものは D 活動の対象地となるため、1990 年以降に森林から農地に転用された土地面積を D 調査から把握し、都道府県毎の水田、普通畑、樹園地の現状面積から差し引いている。

1991～2012 年の間に農地から他の土地利用に転用された土地は、2013 年京都議定書補足方法論ガイダンスに従い、農地管理の対象とならないため対象面積には含めない。第2約束期間中に農地から転用された土地は、2/CMP.7 附属書パラグラフ 24 の規定により CM 報告対象面積に含まれるため、「耕地及び作付面積統計」等より 2013 年以降の地目別都道府県別の毎年の農地減少面積を把握し、「現状非農地の CM 対象地」として CM 対象面積に含めた。このうち、植林に伴う農地減少は AR 活動の対象地となるため、AR 調査から 2013 年以降の毎年の農地における植林面積を把握し、CM 対象地面積からは差し引いた。

11.4.2.6. 牧草地管理面積の把握方法

GM面積の把握方法及び手順はCMと同様であり、「耕地及び作付面積統計」より把握される都道府県別牧草地栽培面積を基本情報として、CMと同様の方法を用いて2013年以降に転用された現状非牧草地のGM面積、D対象・AR対象となる面積を把握し、GM面積を求めた。

11.4.2.7. 植生回復面積の把握方法

11.4.2.7.a. 手順

我が国では、施設緑地の種類別に以下の手順に従ってRV対象面積を把握した。

a) 都市公園

1. 我が国に設置されている全ての都市公園について、告示年月日、約束期間の該当年度末現在の開設面積を整理。
2. 1990年1月1日以降告示で、かつ「開設面積が500m²以上」の都市公園を抽出。
3. 2で抽出した公園を所在地別に整理し、地理的境界別（都道府県別）開設面積を集計。
4. 「国土における単年の森林から開発地に転用された土地の割合」を積算し、「1990年から約束期間の該当年度までの国土における森林から開発地に転用された土地の割合」を算定する。この割合と3で集計した開設面積を乗ずることにより、1989年12月31日時点で森林であった面積を推計し、これを除外した面積を活動面積とする。
5. 4で算定された活動面積に、「国土における単年⁵の各土地利用（4で除外済みのため森林は除く）から開発地に転用された割合」を乗ずることで、「転用のない土地（開発地から開発地）」と「他の土地利用から転用をされた土地（農地・草地・湿地・その他の土地から開発地への転用）」を算定。

b) 道路緑地

1. 約束期間の該当年度末の高木本数を、「道路緑化樹木現況調査」の結果から、地理的境界別（都道府県別）に高木本数を集計。
2. 「道路緑化樹木現況調査」の1986年及び1991年の2回の実測データを用いて、直線回帰により1990年3月31日時点の全国の高木本数を推計する。この推計値に、2006年度末の都道府県別本数割合を乗ずることで、1990年3月31日時点の都道府県別高木本数を推計した。1990年3月31日の都道府県別高木本数は、2006年度末で固定する。
3. 1と2の差を取ることで、1990年4月1日以降に植栽された高木本数を把握する（RVでは1990年1月1日以降の活動が対象となるが、「道路緑化樹木現況調査」が年度区切りでのデータ収集であるため、4月1日以降とする）。
4. 道路に植栽されている高木のうち、植栽区間面積が500m²に満たない土地に植栽されている割合のモデル値は、2006年度に実施したサンプル調査（有意水準95%）により設定したモデル値（一般道路：1.00%、高速道路：0.00%）を用いる。
5. 高木1本当たりの活動面積は、2006年度に実施したサンプル調査（有意水準95%）により設定したモデル値（一般道路：0.0062ha/本、高速道路：0.0008ha/本）を用いる（モデル値は、RVに該当する土地をランダムに抽出し、その土地の面積をその土地に植栽された高木本数を除した値）。

⁵ 単年の場合、各年度の値に対して、前年度から該当年度までの土地利用変化を適用。

6. 3で算定した地理的境界別（都道府県別）の高木本数に、4、5で設定したモデル値を乗ずることにより、高木が植栽された500 m²以上の土地の面積を算定。

1990年4月1日以降に高木を植栽された500 m ² 以上の土地の面積 [ha] = 1990年4月1日以降に植栽された高木本数 [本] × 500 m ² 以上の土地に植栽されている高木の割合 [%] × 高木1本当たりの活動面積 [ha/本]

7. 「国土における単年の森林から開発地に転用された土地の割合」を積算し、「1990年から約定期間の該当年度までの国土における森林から開発地に転用された土地の割合」を算定する。この割合と6で算定した面積を乗ずることにより、1989年12月31日時点で森林であった面積を推計し、これを除外した面積を活動面積とする。
8. 7の活動面積に、「国土における単年の各土地利用（7で除外済みのため森林は除く）から開発地に転用された割合」を乗ずることで、「転用のない土地（開発地から開発地）」と「他の土地利用から転用をされた土地（農地・草地・湿地・その他の土地から開発地への転用）」のそれぞれの面積を算定。

c) 港湾緑地

1. 1990年1月1日以降の開設で、かつ供用面積が500 m²以上の施設を抽出し、地理的境界別に面積を整理する（港湾緑地は、全ての施設において、1989年12月31日時点で森林ではなかったと判断されるため、該当する全施設が報告対象となる）。
2. 1で算定された活動面積に、「国土における単年の各土地利用から開発地に転用された割合」を乗ずることで、「転用のない土地（開発地から開発地）」と「他の土地利用から転用をされた土地（農地、草地、湿地、その他の土地から開発地への転用）」の各面積を算定。

d) 下水道処理施設における外構緑地

1. 1990年1月1日以降の開設で、かつ緑化面積が500 m²以上の施設を抽出し、その緑化面積を地理的境界別に整理する。
2. 「国土における単年の森林から開発地に転用された土地の割合」を積算し、「1990年から約定期間の該当年度までの国土における森林から開発地に転用された土地の割合」を算定する。この割合と1で集計した緑化面積を乗ずることにより、1989年12月31日時点で森林であった面積を推計し、これを除外した面積を活動面積とする。
3. 2で算定された活動面積に、「国土における単年の各土地利用（2で除外済みのため森林は除く）から開発地に転用された割合」を乗ずることで、「転用のない土地（開発地から開発地）」と「他の土地利用から転用をされた土地（農地・草地・湿地・その他の土地から開発地への転用）」それぞれの面積を算定。

e) 緑化施設整備計画認定緑地

1. 我が国に設置されている全ての緑化施設整備計画認定緑地のうち、緑化施設面積（壁面緑化面積は除く）が500 m²以上の施設を抽出し、地理的境界別に整理する。なお、認定制度は2001年5月施行のため、全施設が1990年1月1日以降の活動である。
2. 今回、報告対象としている施設は、全て1989年12月31日時点で森林ではなく、また、直近年の土地の転用は開発地であることから、全施設が転用を伴わない施設となる。

f) 河川・砂防緑地

- 1990年1月1日以降の竣工で、かつ「植栽面積が500m²以上」の河川区域における山腹工を伴う緑化事業（下表の(1)～(8)）及び砂防関連事業（下表の(9)～(11)）を抽出。

表 11-10 河川・砂防緑地におけるRV対象事業と植栽面積の定義

河川・砂防におけるRV対象事業	植栽面積の定義
(1) 掘込河道の河川管理用通路における植樹	堤防法肩から一般民地との境界までの面積
(2) 掘込河道の河岸法面における植樹	堤防法肩から一般民地との境界までの面積
(3) 堤防裏小段における植樹	盛土部の面積
(4) 堤防側帯における植樹（第2種及び第3種側帯）	緑化事業を実施した側帯部面積
(5) 高水敷における植樹	低水路法肩から堤防法尻までの面積
(6) 遊水池における植樹	遊水池面積
(7) 湖沼の前浜における植樹	低水路法肩から堤防法尻までの面積
(8) 高規格堤防における植樹	掘込河道における植樹と同じ考え方。
(9) 砂防事業における緑化事業	山腹工を行った面積
(10) 地すべり対策事業における緑化事業	山腹工を行った面積
(11) 急傾斜地崩壊対策等事業における緑化事業	山腹工を行った面積

- 1で抽出した河川・砂防緑地の地理的境界別（都道府県別）植栽面積を集計。なお、1の調査時に、1989年12月31日以前に森林であった土地は対象外としているため、Dとのダブルカウントはない。
- 2で算定された活動面積に、「国土における単年の各土地利用（森林を除く）から開発地に転用された割合」を乗ずることで、「転用のない土地（開発地から開発地）」と「他の土地利用から転用をされた土地（農地・草地・湿地・その他の土地から開発地への転用）」を算定。

g) 官庁施設外構緑地

- 1990年1月1日以降に竣工で、かつ「敷地面積から建築面積を除いた面積（対象面積）が500m²以上」の官庁施設外構緑地を抽出。
- 1で抽出した官庁施設外構緑地の地理的境界別（都道府県別）対象面積を集計。
- 「国土における単年の森林から開発地に転用された土地の割合」を積算し、「1990年から約定期間の該当年度までの国土における森林から開発地に転用された土地の割合」を算定する。この割合と2で集計した対象面積を乗ずることにより、1989年12月31日時点で森林であった面積を推計し、これを除外した面積を活動面積とする。
- 3で算定された活動面積に、「国土における単年の各土地利用（森林からの転用は3で除外済みのため除く）から開発地に転用された割合」を乗ずることで、「転用のない土地（開発地から開発地）」と「他の土地利用から転用をされた土地（農地・草地・湿地・その他の土地から開発地への転用）」を算定。

h) 公的賃貸住宅地内緑地

- 1990年1月1日以降の竣工で、かつ「敷地面積から建築面積を除いた面積（対象面積）が500m²以上」の公的賃貸住宅地内緑地を抽出。
- 1で抽出した公的賃貸住宅地内緑地の地理的境界別（都道府県別）対象面積を集計。
- 「国土における単年の森林から開発地に転用された土地の割合」を積算し、「1990年から約定期間の該当年度までの国土における森林から開発地に転用された土地の割合」を算定する。この割合と2で集計した対象面積を乗ずることにより、1989年12月31

日時点で森林であった面積を推計し、これを除外した面積を活動面積とする。

4. 3で算定された活動面積に、「国土における単年の各土地利用（森林からの転用は3で除外済みのため除く）から開発地に転用された割合」を乗ずることで、「転用のない土地（開発地から開発地）」と「他の土地利用から転用をされた土地（農地・草地・湿地・その他の土地から開発地への転用）」を算定。

11.4.2.7.b. 使用データ

RVの活動面積を把握する際に使用したデータは以下の通りである。

表 11-11 活動面積の算定に使用したデータ

施設緑地	データの種類	使用データの取得方法
都市公園	個別施設ごとの敷地面積	都市公園等整備現況調査（2008年度以降毎年実施）
道路緑地	高木本数	道路緑化樹木に関する現況調査（2007年度以降毎年実施）
	高木1本当たりの活動面積	道路の植栽高木に関する基礎データ収集調査（2007年2月実施）
港湾緑地	個別施設ごとの供用面積	全数調査（2008年度以降毎年実施）
下水道処理施設における外構緑地	個別施設ごとの緑化面積	下水処理場・ポンプ場における吸収源対策に関する実態調査（2009年度以降毎年実施）
緑化施設整備計画認定緑地	緑化施設面積 壁面緑化面積 高木本数	・緑化施設整備計画認定申請書 ・都市緑化施策の実績調査（2008年度以降毎年実施）
河川・砂防緑地	個別施設ごとの植栽面積	河川における二酸化炭素吸収源調査（2008年度以降毎年実施）
官庁施設外構緑地	個別施設ごとの敷地面積と建築面積	全数調査（2008年度以降毎年実施）
公的賃貸住宅地内緑地	個別施設ごとの敷地面積と建築面積	公的賃貸住宅緑地整備現況調査（2008年度以降毎年実施）

11.4.3. 地理的境界を特定するために用いる地図情報及び地理的境界のIDシステム

2013年京都議定書補足的方法論ガイダンス 2.2.2節では、議定書第3条3及び4活動に関する土地の特定方法として、活動を受けた複数の土地を含む領域を法的、行政的、生態学的境界を用いることによって表す「報告方法1」と、活動を受けた土地の地理的特定を空間的に明確かつ完全に行う「報告方法2」が提示されている。我が国は、2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスの図2.2.2のデシジョンツリーに従い「報告方法1」を選択し、都道府県界を用いて国土を区分し、各境界内で第3条3及び4の各活動を受けた土地面積の合計を報告している。ID番号は、以下の日本地図に従って都道府県別に設定する（表11-12を参照）。各第3条3及び4活動のデータ把握方法は11.4.2.3～11.4.2.7節に記載している通りであり、それぞれの活動が都道府県界内において「報告方法1」に応じた位置特定がなされている。この地理的境界は、第3条3活動の土地単位、第3条4活動（森林経営及び選択された活動）の土地、決定2/CMP.7附属書パラグラフ9の規定の下で第3条3活動を受けなければ第3条4活動に含まれた土地単位の全ての報告に利用している。

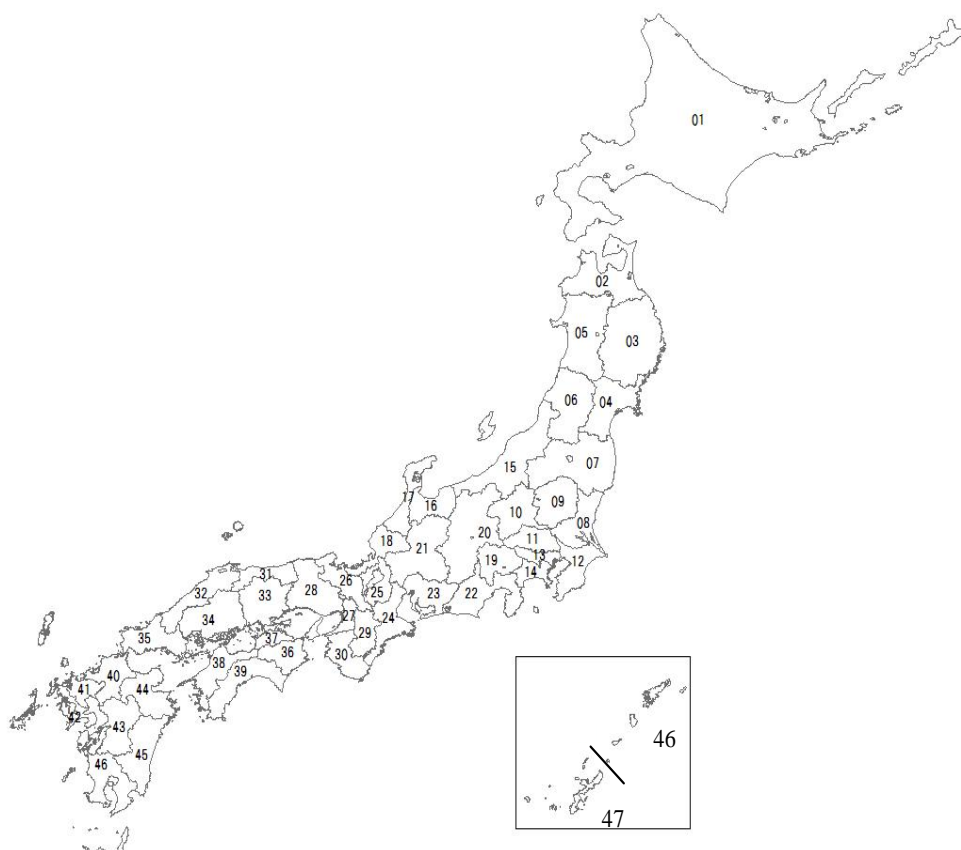


図 11-4 我が国における ID 番号の設定

表 11-12 ID 番号と都道府県との対応

ID	都道府県	ID	都道府県	ID	都道府県	ID	都道府県	ID	都道府県
01	北海道	11	埼玉	21	岐阜	31	鳥取	41	佐賀
02	青森	12	千葉	22	静岡	32	島根	42	長崎
03	岩手	13	東京	23	愛知	33	岡山	43	熊本
04	宮城	14	神奈川	24	三重	34	広島	44	大分
05	秋田	15	新潟	25	滋賀	35	山口	45	宮崎
06	山形	16	富山	26	京都	36	徳島	46	鹿児島
07	福島	17	石川	27	大阪	37	香川	47	沖縄
08	茨城	18	福井	28	兵庫	38	愛媛		
09	栃木	19	山梨	29	奈良	39	高知		
10	群馬	20	長野	30	和歌山	40	福岡		

11.5. 活動別の情報

11.5.1. 炭素ストック変化量及びGHG排出・吸収量の算定方法

11.5.1.1. 算定方法と算定の基になる仮定について

11.5.1.1.a. 新規植林・再植林活動

a) 地上バイオマス、地下バイオマス

■ 算定方法

ARにおける生体バイオマスの炭素ストック変化量 (ΔC_{AR_LB}) は、森林への転用に伴い失われるバイオマス蓄積量 ($\Delta C_{LB_conversion_to_AR}$) と転用後に蓄積される年間バイオマス蓄積量 ($\Delta C_{AR_LB_CS}$) を合算して求めた。

$$\Delta C_{AR_LB} = \Delta C_{LB_conversion_to_AR} + \Delta C_{AR_LB_CS}$$

- ΔC_{AR_LB} : ARにおける生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]
 $\Delta C_{LB_conversion_to_AR}$: 森林への転用に伴う炭素ストック変化量 (損失) [t-C/yr]
 $\Delta C_{AR_LB_CS}$: ARにおける成長、伐採・薪炭材収集・攪乱による生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr] ※6.5.1.b)1) 節参照

森林への転用に伴う炭素ストック変化量 ($\Delta C_{LB_conversion_to_AR}$) は、「他の土地利用から転用された森林 (4.A.2)」と同様の方法で求めた。

$$\Delta C_{LB_conversion_to_AR} = \sum_i \{ \Delta A_{i-AR} \times (B_{after} - B_{before_i}) \times CF_i \}$$

- ΔA_{i-AR} : 土地利用 i から森林に転用された年間面積 [ha/yr]
 B_{after} : 転用された直後の単位面積当たり乾物重 [t-d.m./ha] ※0と仮定
 B_{before_i} : 転用される前の土地利用 i における単位面積当たり乾物重 [t-d.m./ha]
 CF_i : 土地利用 i の炭素含有率 [t-C/t-d.m.]
 i : 土地利用区分 (水田・普通畑、樹園地、草地、湿地、開発地、その他の土地)

転用後に蓄積される年間バイオマス蓄積量 ($\Delta C_{AR_LB_CS}$) については、「転用のない森林 (4.A.1.) 同様、Tier2の蓄積変化法を用い算定式及びパラメータについては6.5.1.b)1)節を参照のこと。

■ 各種パラメータ

転用に伴う炭素ストック変化量の算定に用いた土地利用区分別バイオマスストック量は、第6章表6-8aの通りである。

■ 活動量データ

活動量はARの発生面積であり、11.4.2.3節の方法で求めた面積を用いている。

b) 枯死木、リター、土壌

■ 算定方法

ARにおける枯死木、リター及び土壌の炭素ストック変化量は、「他の土地利用から転用された森林 (4.A.2)」同様、森林以外の炭素ストックから20年生時の森林の平均炭素ストックに20年かけて直線的に変化するものとして算定した。算定式については6.5.2.b)2)節を参照のこと。

なお、6.5.1.b)2)節に記述した通り、我が国では森林における有機質土壌の排水活動は一般的に実施されておらず、植林が行われた森林でも同様に考えられるため、有機質土壌からの排出は「NO」として報告した。

■ 各種パラメータ

パラメータは CENTURY-jfos 及び文献から設定した。

■ 活動量データ

AR の発生面積は、11.4.2.3 節の方法で求めた面積を用いた。

c) 伐採木材製品 (HWP)

我が国では AR 対象森林において HWP として利用する木材の供給が発生していないことから、AR における HWP は「NO」として報告した。

d) その他のガス

1) 施肥に伴う N₂O 排出

森林への施肥量は AR と FM で分離することができないため、森林への施肥に伴う N₂O 排出量は FM で一括報告し、AR では「IE」として報告した。

2) 有機質土壌の排水に伴う N₂O、CH₄ 排出

森林における有機質土壌の排水活動は我が国では実施していないことから、当該区分については「NO」として報告した。

3) 土地利用変化・管理変化に伴う土壌有機質の無機化に伴う N₂O 排出

AR 活動では土壌炭素ストック変化量は増加と報告しており 2006 年 IPCC ガイドラインの Tier 2 以下の方法論では、当該区分について N₂O 固定量は算定対象とならない。従って、「NA」として報告した (CRF-Table NIR 1 において「NA」が入力できないため、「NO」として報告)。

4) バイオマスの燃焼

我が国の森林では、NIR 第 6 章 6.16.b) 1) 節の通り、野火による GHG 排出が存在する。AR 対象地のバイオマス燃焼状況を直接把握できるデータが無いことから、全森林を対象とする火災による GHG 排出量を、全森林面積における AR 面積の比率で按分することにより算定した。全森林を対象とする火災による炭素排出量は、国有林と民有林それぞれの火災被害材積に容積密度、バイオマス拡大係数、炭素含有率を乗じて算定した。このうち CO₂ 排出量については炭素ストック変化の算定内で把握されているため、上記の算定は非 CO₂ ガスを対象に実施した。なお、我が国において、森林における計画的な焼却活動及び森林以外の土地利用区分から森林への転用に伴う計画的な焼却活動は、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律 (廃掃法)」及び「消防法」によって厳しく制限されているため、実施されない。

e) 算定結果

表 11-13 AR 活動による排出・吸収量

	2013	2014	2015	2016	2017	2018
	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]
AR	-1,558.42	-1,562.77	-1,562.41	-1,561.77	-1,535.62	-1,441.91
地上バイオマス	-892.21	-891.03	-891.25	-887.57	-864.55	-848.64
地下バイオマス	-227.58	-227.17	-223.08	-222.22	-221.94	-217.61
枯死木	-309.25	-319.54	-327.24	-334.57	-336.16	-274.62
リター	-97.82	-94.18	-89.79	-85.42	-79.79	-66.64
土壌	-31.58	-30.95	-31.07	-32.00	-33.29	-34.42
伐採木材製品 (HWP)	NO	NO	NO	NO	NO	NO
その他のガス	0.02	0.11	0.03	0.01	0.11	0.01

11.5.1.1.b. 森林減少

a) 地上バイオマス、地下バイオマス

■ 算定方法

D 対象地における生体バイオマスの炭素ストック変化量 (ΔC_{D_LB}) は、転用により損失する森林バイオマス蓄積量 ($\Delta C_{LB_conversion_to_others}$) と、D 活動後の生体バイオマスの成長に伴う炭素ストック変化量 ($\Delta C_{D_LB_SC}$) から算定を行った。

転用により損失する生体バイオマスからの排出量 ($\Delta C_{LB_conversion_to_others}$) は、国家森林資源データベースを用いて都道府県毎の樹種や林齢の状況を勘案して算定した。森林減少により生じた排出は、森林減少の生じた年にすべて計上した。

D 活動後の生体バイオマスの成長に伴う炭素ストック変化量 ($\Delta C_{D_LB_SC}$) は、D 対象地におけるその後の土地利用の状況に応じて算定した。条約インベントリ同様、土地転用後の生体バイオマス成長量の算定対象は、農地、草地及び開発地への転用とした。D 活動後の転用後の活動下で得られる炭素ストックの増加、すなわち、第3条3活動と第3条4活動を重複して受けた土地における炭素ストックの増加についてはD活動の下で報告を行うものである。11.4.2.3.c 節でも説明した通り、我が国では森林からの土地転用が行われた土地で、再度土地転用が行われる事はほとんど無いと想定されるため、森林減少活動直後の土地利用状況に着目し当該算定を行った。

$$\Delta C_{D_LB_SC} = \Delta C_{D-CL_LB_SC} + \Delta C_{D-GL_LB_SC} + \Delta C_{D-SL_LB_SC}$$

$$\Delta C_{D-CL_LB_SC} = \Delta A_{D-annualcrop} \times C_{annualcrop_LB}$$

$$\Delta C_{D-GL_LB_SC} = \Delta A_{D-GL,5} \times b_{GL}$$

$$\Delta C_{D-SL_LB_SC} = \Delta C_{RV_LB_SC} \times RA_{D-RV}$$

$\Delta C_{D_LB_SC}$: D 活動後の生体バイオマスの成長に伴う炭素ストック変化量 [t-C/yr]

$\Delta C_{D-CL_LB_SC}$: D 活動を受けた農地における生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]

(※算定は単年生作物のみ。樹園地への転用時の樹園地の炭素ストック変化は適用している算定方法により CM に含まれる。)

$\Delta C_{D-GL_LB_SC}$: D 活動を受けた草地における生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]

$\Delta C_{D-SL_LB_SC}$: D 活動を受けた開発地における生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]

$\Delta A_{D-annualcrop}$: D 活動を受けた農地 (水田・普通畑) の年間面積 [ha]

$C_{annualcrop_LB}$: 農地 (水田・普通畑) 単年生作物における単位面積あたりの生体バイオマスの炭素ストック蓄積量 [t-C/ha/yr]

$\Delta A_{D-GL,5}$: D 活動を受けた草地の5年間累積面積 [ha]

- b_{GL} : 草地における単位面積あたりの生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/ha/yr]
 $\Delta C_{RV_LB_SC}$: RV活動に伴う生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr] (11.5.1.1.f節を参照)
 RA_{D-RV} : RV活動を受けた土地のうちD活動を重複して受けた面積割合

■ 各種パラメータ

森林バイオマスストック損失に関する情報は国家森林資源データベースによる値を用いた。D活動後の生体バイオマスの成長に伴う炭素ストック変化量の算定には、第6章表6-8bを用いた。開発地におけるRVに伴うストック変化量については、RV活動と同じパラメータを用いた。

■ 活動量データ

Dの発生面積は、11.4.2.3節の方法で求められた面積を用いた。森林減少地でRV活動を行っている面積の把握方法は、11.5.1.1.f節にて説明する。

b) 枯死木、リター、土壌

D活動に伴う枯死木、リター、土壌の炭素ストック変化の算定は、2006年IPCCガイドラインのTier2の方法に則って行った。森林減少が生じた年に枯死木・リターの炭素ストックがすべて排出されるとした。鈣質土壌の炭素ストック変化量は、森林の炭素ストックから森林以外の土地利用の炭素ストックに20年かけて直線的に変化するものとして算定した。転用前後のそれぞれの炭素プールの炭素ストック量は第6章表6-9~表6-11及びCENTURY-jfosモデルで得られる値を基に設定した。

我が国では有機質土壌の森林からの土地転用はほとんど存在しないが、開発地に転用された場合は有機質土壌からの排出が起こることが想定されたため、今次提出より算定を行った。算定方法については第6章6.6.1.b)2)節と同様の算定式を用いて、有機質土壌の排水に伴うCO₂排出量(on-site)及び、有機質土壌における水溶性炭素由来のCO₂排出量(off-site)について算定を行った。

c) 伐採木材製品 (HWP)

D対象地におけるHWPは決定2/CMP.7附属書パラグラフ31に従い即時排出で算定しており、該当するストック変化量を「IO」として報告した。

d) その他のガス

1) 施肥に伴うN₂O排出

森林減少活動時に施肥は行われず、転用後の土地で施肥が行われた場合のN₂O排出は農業分野での算定に含まれているため、当該区分については「IE」として報告した。

2) 有機質土壌の排水に伴うN₂O、CH₄排出

上述のb)の項と同様、開発地に転用された場合のみ算定を行った。排水された有機質土壌からのCH₄排出量は、第6章1.13.b)節と同様、湿地ガイドラインセクション2.2.2.1に記載されているTier1の算定方法を用いて算出した。なお、排水された有機質土壌からのN₂Oの排出については、湿地ガイドラインを適用しないとし、算定対象外とした。

3) 土地利用変化・管理変化に伴う土壌無機化に伴うN₂O排出

土地利用変化・管理変化に伴い無機化された土壌炭素量を活動量としてN₂O排出を求める2006年IPCCガイドラインのTier1の算定方法により計算を行った。算定式と利用した各種パラメータはNIR第6章6.14節と同様である。森林減少地での土地転用により無機化された土壌炭素量は、D活動による全土壌炭素排出量データを使用した。

4) バイオマスの燃焼

我が国においては、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）」及び「消防法」によって焼却活動が厳しく制限されているため、森林減少活動及び他の土地への転用後の計画的な焼却活動は原則として実施されない。また転用地では自然火災は生じていない。したがって、D活動におけるバイオマスの燃焼に伴う非CO₂排出は「NO」として報告した。

e) 算定結果

表 11-14 D活動による排出・吸収量

	2013	2014	2015	2016	2017	2018
	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]
D	2,049.45	2,055.14	2,274.41	2,274.72	1,611.15	1,605.29
地上バイオマス	1,082.34	1,089.37	1,203.73	1,207.06	850.98	850.49
地下バイオマス	263.07	265.78	297.32	298.15	206.72	208.91
枯死木	512.80	511.92	560.86	558.58	396.39	395.10
リター	206.59	206.56	227.31	227.54	161.96	161.98
土壌（鉱質土壌）	-17.94	-21.13	-17.57	-19.45	-8.79	-14.46
土壌（有機質土壌）	2.09	2.16	2.23	2.31	2.37	2.43
伐採木材製品（HWP）	IO	IO	IO	IO	IO	IO
その他のガス	0.50	0.48	0.53	0.53	1.53	0.85

11.5.1.1.c. 森林経営活動

a) 地上バイオマス、地下バイオマス

■ 算定方法

1. 国家森林資源データベースで把握された全国の森林蓄積から、蓄積変化法により森林全体の吸収・排出量を求めた。
2. 全体の吸収・排出量から AR 及び D 活動によるものを除外した上で、育成林については、樹種、地域、齢級毎に FM 率を適用し⁶、FM 森林による吸収・排出量を算定した⁷。天然生林については、国家森林資源データベースより法令等に基づく伐採・転用規制等の保護・保全措置がとられている森林面積（立木地）を抽出し、吸収・排出量を算定した。

■ 各種パラメータ

AR 活動と同様である。

b) 枯死木、リター、土壌

■ 算定方法

「転用のない森林（4.A.1.）」同様、Tier 3 のモデル法を用いて枯死木、リター、鉱質土壌プールの炭素ストック変化量を算定した。算定は、プール毎に森林施業タイプ別に単位面積当たりの吸収・排出量を CENTURY-jfos モデルにより計算し、森林施業タイプ別面積を乗じ、合計した。算定式については NIR 第 6 章 6.5.1.b)2)節を参照のこと。

なお、有機質土壌の森林における土壌排水は我が国では実施されないため、有機質土壌に

⁶ 蓄積変化法により求めた森林吸収量にそのまま FM 率を乗じてしまうと、FM 活動の一環として実施された伐採による蓄積損失が一部しか FM 吸収・排出量に含まれない可能性がある。このような状況を避けるため、伐採による蓄積損失全量が FM 吸収・排出量に含まれるような算定を行っている。

⁷ 都道府県及び森林管理局が森林簿を更新する際に、森林の現況（樹種、面積等）を正しく反映するための修正を行う場合がある。このような場合、蓄積変化法の下では修正前の炭素ストック量と修正後の炭素ストック量の差を取ることで、正しい炭素ストック変化量が得られないことがあるため、正しい炭素ストック変化量による FM 吸収・排出量となるように補正を行っている。

おけるCO₂排出は「NO」として報告した。

■ 各種パラメータ

CENTURY-jfos モデル及び使用したパラメータについてはNIR第6章6.5.1.b)2)節を参照のこと。

c) 伐採木材製品 (HWP)

FMのHWP報告値は、条約のHWP報告値と同様に、建築物に使用される製材、木質ボード、合板については国独自の方法(Tier 3)を用いて炭素ストック変化量を算定した。その他木材利用(製材、木質ボード、合板)、紙製品(紙・板紙(古紙含む))については、2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスに提示されているTier 2方法を用いて算定した。算定式、利用した各種パラメータ及び活動量は、NIR第6章6.11節を参照のこと。

d) その他のガス

1) 施肥に伴うN₂O排出

森林への施肥量はARとFMで分離することができないため、森林への施肥に伴うN₂O排出量はFMで一括報告した。このカテゴリに適用した算定式と利用した各種パラメータについては、NIR第6章6.12節を参照のこと。

2) 有機質土壌の排水に伴うN₂O、CH₄排出

森林における有機質土壌の排水活動は我が国では実施していないことから、当該区分については「NO」として報告した。

3) 土地利用変化・管理変化に伴う土壌有機質無機化に伴うN₂O排出

2006年IPCCガイドラインのTier 1の算定方法に基づき、土壌炭素量が減少している場合のN₂O排出を算定対象とした。算定式と利用した各種パラメータはNIR第6章6.14節、6.15節と同様である。活動量は、森林経営対象地において、都道府県別林齢別樹種別で土壌炭素が減少している場所のみを抜き出した、グロスの土壌炭素の損失量データを使用した。

4) バイオマスの燃焼

AR活動と同様に、全森林を対象とする火災による排出量を、全森林面積におけるFM面積の比率で按分することにより算定した。このうちCO₂排出量については炭素ストック変化の算定内で把握されているため「IE」とし、上記の算定は非CO₂ガスを対象に実施した。なお、AR活動と同様に、我が国において、森林における計画的な焼却活動は、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律(廃掃法)」及び「消防法」によって厳しく制限されているため、実施されない。

e) 算定結果

表 11-15 FM活動による排出・吸収量

	2013	2014	2015	2016	2017	2018
	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]
FM	-51,149.26	-51,449.41	-49,215.52	-46,649.87	-46,469.11	-45,360.92
地上バイオマス	-41,420.51	-40,832.63	-38,858.34	-36,821.49	-36,224.38	-35,184.14
地下バイオマス	-10,471.12	-10,344.76	-9,817.10	-9,426.52	-9,263.86	-8,931.71
枯死木	2,019.47	2,090.48	2,143.54	2,178.69	2,147.73	2,074.22
リター	-199.72	-195.36	-184.00	-163.95	-160.65	-151.00
土壌	-1,516.68	-1,454.63	-1,392.36	-1,329.38	-1,275.96	-1,210.13
伐採木材製品(HWP)	344.25	-822.94	-1,207.75	-1,186.73	-1,809.03	-2,062.00
その他のガス	95.04	110.43	100.48	99.51	117.04	103.84

11.5.1.1.d. 農地管理活動

a) 地上バイオマス、地下バイオマス

■ 算定方法

CMにおける生体バイオマスの炭素ストック変化量 (ΔC_{CM_LB}) は、木本性永年作物(樹園地)及び単年生作物において蓄積される年間バイオマス蓄積量 ($\Delta C_{Orchard_LB_SC}$ 及び $\Delta C_{annualcrop_LB_SC}$)と農地からの転用に伴い失われる農地のバイオマス蓄積量 ($\Delta C_{Orchard_LB_SC}$ 及び $\Delta C_{LB_conversion_to_others}$)から算定した。樹園地における生体バイオマスの炭素ストック変化量 ($\Delta C_{Orchard_LB_SC}$)については、「転用のない農地(4.B.1.)」同様、Tier 2の蓄積変化法を用いて算定した。単年生作物における炭素ストック変化は農地との間の土地転用時のみ算定された。転用のない単年生作物栽培農地における炭素ストック変化は想定しなかった。従って、水田または普通畑(以下、田畑)への(D地以外からの)転用が生じた場合は、転用後に発生する単年生作物の成長に伴う平均炭素ストック量までの増加分 ($\Delta C_{annualcrop_LB_SC}$)を算定した。また、(AR地以外の)他の土地利用への転用が生じた場合、それに伴う単年生作物の損失に伴う炭素損失 ($\Delta C_{LB_conversion_to_others}$)について、11.3.4節に記載した通りCM下の算定に含めた。算定式は下記の通り。利用した各種パラメータ及び活動量データはNIR表6-8及び第6章6.6.1.b)1節を参照のこと。

$$\Delta C_{CM_LB} = \Delta C_{Orchard_LB_SC} + \Delta C_{annualcrop_LB_SC} - \Delta C_{LB_conversion_to_others}$$

$$\Delta C_{annualcrop_LB_SC} = \Delta A_{others-annualcrop} \times C_{annualcrop_LB}$$

$$\Delta C_{LB_conversion_to_others} = \Delta A_{annualcrop-others} \times C_{annualcrop_LB}$$

ΔC_{CM-LB}	: CM地における生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr]
$\Delta C_{Orchard_LB_SC}$: 樹園地の生体バイオマスの炭素ストック変化量 [t-C/yr] ※6.6.1.b)1)を参照
$\Delta C_{annualcrop_LB_SC}$: 田畑における単年生作物の生体バイオマスの炭素ストック変化量(増加) [t-C/yr]
$\Delta C_{LB_conversion_to_others}$: 農地からの転用に伴う炭素ストック変化量(損失) [t-C/yr]
$\Delta A_{others-annualcrop}$: 森林以外の土地利用から田畑へ転用した年間面積 [ha/yr]
$C_{annualcrop_LB}$: 田畑における単位面積あたりの生体バイオマスの炭素ストック量 [t-C/ha]
$\Delta A_{annualcrop-others}$: 田畑から森林以外の他の土地利用に転用した年間面積 [ha/yr]

b) 枯死木、リター

水田・普通畑において枯死木、リターは発生せず、樹園地では一般的にこれらの枯死有機物を土壌表面に蓄積させる管理は行わない。従って、経年的に枯死木、リターにおける炭素ストック変化は生じておらず、排出にもなっていないため、当該区分の炭素ストック変化量は「NA」として報告した(CRF-Table NIR 1において「NR」として報告)。

c) 土壌

■ 算定方法

1) 鉱質土壌

鉱質土壌については、土壌炭素モデルRothCを用いたTier 3の方法を適用した。NIR第6章6.6.1.b)2)で記述した通り、計算はメッシュ単位で実施され、RothCモデルの計算単位グリッド(100メッシュ)ごとに土壌炭素ストック変化量が出力される。都道府県別、地目別に土壌炭素量を集計して単位面積あたりの土壌炭素ストック変化量平均値(土壌炭素変化係

数 [t-C/ha/yr] を得る。その値に統計から得られる都道府県別、地目別の面積値をかけ合わせて農地土壌の炭素蓄積変化量を算定した。当該算定値の年次変動と変動の要因、及び RothC モデルのパラメータや炭素投入量などのインプットデータの詳細については、第6章 6.6節を参照のこと。

2) 有機質土壌

水田、普通畑における有機質土壌の耕起・排水に伴う on-site CO₂排出量は、2006年 IPCC ガイドラインに記載されている Tier 1、2 の算定方法を用いて、水溶性炭素由来の off-site CO₂排出量は湿地ガイドライン 2.2.1.2 に記述されている Tier 1 算定方法を用いて算出した。樹園地では耕起・排水は実施されていないため「NO」として報告した。ただし、第二約束期間中にそれらの土地が開発地に転用された場合は、開発地に転用された土地における有機質土壌排水からの排出については CM 算定に含めた。方法の詳細については、11.5.1.1.b.b)節及び第6章 6.6.1.b)2)節を参照のこと。

■ 各種パラメータ

利用した各種パラメータは NIR 第6章 6.6.1.b)2)節と同様である。

■ 活動量データ

11.4.2.5 節で説明している方法で把握した現状農地の CM 対象地については、水田、普通畑、樹園地ごとの都道府県別有機質土壌割合を用いて鉱質土壌、有機質土壌面積を推計し、それぞれの算定における活動量とした。現状非農地の CM 対象地については、開発地へ転用した分を対象とし、水田、普通畑、樹園地から開発地へ転用した面積に有機質土壌割合を乗じて推計した。有機質土壌割合の算出は NIR 第6章 6.6.1.b)2)節を参照のこと。

d) その他のガス

1) 有機質土壌の排水に伴う CH₄ 排出

普通畑における有機質土壌からの CH₄排出量は湿地ガイドライン 2.2.2.1 に記述されている Tier 1 算定方法を用いて算出した。算定式と利用した各種パラメータは、NIR 第6章 6.13 節と同様である。活動量データは NIR 第6章 6.6.1.b)2)節と同様である。

2) 土地利用変化・管理変化に伴う土壌無機化に伴う N₂O 排出

転用された農地で生じる当該排出が CM 対象となることから、条約インベントリで算定した当該排出を報告した。算定式、利用した各種パラメータ及び活動量データは NIR 第6章 6.14 節と同様である。

3) バイオマスの燃焼

CM 対象地の計画的な焼却活動からの排出については、樹園地の果樹剪定枝の焼却に伴う排出を算定する。このうち CO₂排出量については炭素ストック変化の算定内で把握されているため、N₂O、CH₄排出を報告した。算定方法、利用したパラメータ及び活動量データは、NIR 第6章 6.16.b)2)節と同様である。また、我が国の農地管理形態の下で自然火災が起こることはほぼ皆無と考えられるため、自然火災からの排出は報告していない。

e) 算定結果

表 11-16 CM活動による排出・吸収量

	1990	2013	2014	2015	2016	2017	2018
	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]
CM	10,265.40	3,693.26	4,475.96	4,413.01	4,916.91	4,139.15	3,720.57
地上バイオマス	157.89	157.22	190.57	234.15	261.18	240.74	255.82
地下バイオマス	118.80	54.45	51.86	66.36	65.42	62.41	76.69
枯死木	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
リター	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
土壌(鉱質土壌)	8,235.39	1,807.13	2,557.89	2,436.91	2,915.61	2,156.06	1,700.60
土壌(有機質土壌)	1,652.36	1,613.70	1,615.07	1,615.51	1,615.39	1,619.22	1,625.92
非CO ₂ (有機質土壌)	35.96	34.81	34.86	34.91	34.96	35.15	35.53
非CO ₂ (土壌無機化)	32.86	3.62	3.66	3.50	3.04	4.60	5.46
非CO ₂ (バイオマス燃焼)	32.13	22.33	22.04	21.67	21.31	20.97	20.57

11.5.1.1.e. 牧草地管理活動

a) 地上バイオマス、地下バイオマス

■ 算定方法

GMにおける生体バイオマスの炭素ストック変化量 (ΔC_{GM_LB}) については、転用された草地におけるバイオマスの炭素ストック変化量 ($\Delta C_{GM_LB_SC}$) 及び他の土地への転用に伴うバイオマスの炭素ストック変化量 ($\Delta C_{LB_conversion_to_others}$) を対象とした。転用のない牧草地における炭素ストック変化はないものとした。算定方法、利用したパラメータ、及び活動量データについては、表 6-8 及び NIR 第 6 章 6.7.2.b) 1) 節、11.4.2.6 節を参照のこと。

b) 枯死木、リター

我が国の牧草地では枯死木、リターにおける炭素ストック量は 2006 年 IPCC ガイドラインの記載に従い、当該炭素ストック変化量が変化しないと当該区分の炭素ストック変化量は「NA」として報告した (CRF-Table NIR 1 において「NR」として報告)。

c) 土壌

■ 算定方法

1) 鉱質土壌

鉱質土壌については、土壌炭素モデル RothC を用いた Tier 3 の方法を適用した。方法の詳細については、NIR 第 6 章 6.6.1.b) 2) 節を参照のこと。GMにおける鉱質土壌炭素ストック変化における年次変動及び要因について、NIR 第 6 章 6.7 節を参照のこと。

2) 有機質土壌

牧草地における有機質土壌の耕起・排水に伴う on-site CO₂排出量については、2006 年 IPCC ガイドラインの 6.2.3.1 節に記載されている Tier 1 の算定方法を用いて、水溶性炭素損失による off-site CO₂排出量は湿地ガイドライン 2.2.1.2 に記述されている Tier 1 算定方法を用いて算出した。第二約束期間中に現状非牧草地となった牧草地から開発地に転用された有機質土壌における排水からの排出についても GM 算定に含めた。方法の詳細については、CM 同様、11.5.1.1.b.b) 節及び第 6 章 6.7.1.b) 2) 節を参照のこと。

■ 各種パラメータ

利用した各種パラメータは NIR 第 6 章 6.7.1.b) 2) 節と同様である。

■ 活動量データ

11.4.2.6節で説明している方法で把握した現状牧草地のGM対象地について、牧草地の都道府県別有機質土壌割合を用いて鉱質土壌、有機質土壌面積を推計し、それぞれの算定における活動量とした。現状非牧草地のGM対象地については、2013年議定書補足方法ガイドラインのBox1.1の記載の通り、排出・吸収量の算定はゼロとして扱っているため、推計に用いる活動量面積には含めていない。牧草地の有機質の割合についてはNIR第6章6.7.1.b)1)節を参照のこと。

d) その他のガス

1) 有機質土壌の排水に伴うCH₄排出

牧草地における有機質土壌からのCH₄排出量は湿地ガイドライン2.2.2.1に記述されているTier 1算定方法を用いて算出した。算定式と利用した各種パラメータはNIR第6章6.13節と同様である。活動量データはNIR第6章6.7.1.b)1)節と同様である。

2) 土地利用変化・管理変化に伴う土壌無機化に伴うN₂O排出

算定式と利用した各種パラメータ、活動量データはNIR第6章6.14節と同様である。

3) バイオマスの燃焼

我が国では牧草地の野焼きは存在しないため、「NO」として報告した。

e) 算定結果

表 11-17 GM活動による排出・吸収量

	1990	2013	2014	2015	2016	2017	2018
	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]	[kt-CO ₂ 換算]
GM	840.17	-189.55	9.46	-69.51	-117.74	-127.20	-209.20
地上バイオマス	-10.76	13.65	17.88	15.04	16.72	21.20	20.67
地下バイオマス	-43.03	54.60	71.50	60.16	66.90	84.78	82.67
枯死木	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
リター	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
土壌(鉱質土壌)	860.47	-297.34	-126.34	-194.22	-239.61	-272.54	-353.41
土壌(有機質土壌)	28.88	33.21	39.68	42.50	32.90	33.81	35.06
非CO ₂ (有機質土壌)	2.26	2.73	3.39	3.77	3.17	3.37	3.64
非CO ₂ (土壌無機化)	2.36	3.61	3.36	3.24	2.18	2.18	2.17

11.5.1.1.f. 植生回復活動

RV活動については、以前より開発地であった土地(転用のない土地)でRV活動が行われた場合と、他の土地利用からの開発地に転用された土地(転用された土地)でRVが行われた場合に分けて算定方法を記載する。

a) 転用のない土地：地上バイオマス、地下バイオマス

地上バイオマス及び地下バイオマスの算定は、高木を対象とする。なお、高木の定義は、公共用緑化樹木品質寸法規格基準(案)に基づく高木⁸とする。

■ 算定方法

転用のないRV地における生体バイオマスの炭素ストック変化量は、「転用のない開発地(4.E.1.)」における算定式(Tier 2b)と同様の式により算定した。NIR6章6.9.1.b)1)節を参照

⁸ 公共用緑化樹木品質寸法規格基準(案)は、公共施設等の緑化事業のより適切な執行の推進のため、都市緑化のための公共用緑化樹木等の品質寸法規格基準を国土交通省が定めたものであり、高木は3~5m以上の樹高になる樹木をさすと定義されている。

のこと。

■ 各種パラメータ⁹

施設緑地タイプごとの各種パラメータについては以下の通り。

○ 都市公園

都市公園における生体バイオマス損失に伴う炭素ストック変化量は、サンプル公園¹⁰における毎木調査の結果、平均樹齢が30年以下（国土交通省公園緑地・景観課、2014）であったことから、2006年IPCCガイドラインのTier 2b（8.9頁）に従いゼロとした。

都市公園における樹木の年間生体バイオマス成長量は、2006年IPCCガイドライン（8.10頁）Table 8.2に示されるデフォルト値0.0033~0.0142 t-C/本/yrと、日本の樹種別の年間生体バイオマス成長量（ケヤキ0.0204、イチョウ0.0103、シラカシ0.0095、クスノキ0.0122 t-C/本/yr）を用いて、サンプル都市公園¹¹の樹種構成比により我が国独自の樹木1本当たりの年間生体バイオマス成長量を合成した。ケヤキ、イチョウ、シラカシ、クスノキの年間生体バイオマス成長量については、国土交通省国土技術政策総合研究所が実測した結果を用いて算出した各樹木の生体バイオマスの成長曲線（松江他、2009）に、都市公園における現地調査に基づく樹種毎の平均胸高直径（国土交通省公園緑地課、2005）を適用し算出した。

生体バイオマスの地上部と地下部への分離は2006年IPCCガイドライン（8.9頁）に示されるデフォルト値0.26（生体バイオマスの地上部に対する地下部の割合）を用いた。

○ 道路緑地

道路緑地における生体バイオマス損失に伴う炭素ストック変化量は、ランダムに抽出したサンプル路線の植栽時の樹齢から平均樹齢を算定したところ、平均樹齢が30年以下であったことからゼロとした。

道路緑地における樹木の年間生体バイオマス成長量は、都市公園で用いたものと同じ2006年IPCCガイドラインのデフォルト値及び、日本の樹種別の年間生体バイオマス成長量（4種類）を、道路緑地の現況調査から算定した樹種構成比¹²で加重平均し、我が国独自の樹木1本当たりの年間生体バイオマス成長量を合成した。

また、生体バイオマスの地上部と地下部への分離は都市公園と同様のパラメータを用いて算定した。

○ 港湾緑地、下水道処理施設における外構緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地

当該緑地における生体バイオマス損失に伴う炭素ストック変化量は、植栽時の樹木の規格や植栽樹種、植栽の配置等、都市公園と同様の考え方が採用されていることが多いことから、都市公園と同様にゼロとした。

樹木の年間生体バイオマス成長量及び生体バイオマスの地上部と地下部への分離についても、都市公園と同様のパラメータを利用した。

⁹ 樹木個体当たりの年間生体バイオマス成長量は、2006年IPCCガイドラインにおけるTier 2bの算定方法と、我が国独自の樹種別の年間生体バイオマス成長量を用いたTier 2の算定方法の組合せを採用している。なお、今後更に精度向上を行っていく予定である。

¹⁰ 日本の標準的な気候帯に位置し、都市公園の種類（公園種別）が豊富である神奈川県において、1990年1月1日以降告示の都市公園を対象として、129箇所サンプルをランダムに抽出。また、神奈川県に未設置の公園種別を補足すべく、隣県の千葉県において3箇所同様の調査を実施。

¹¹ 北海道では釧路市及び夕張市の全都市公園を、北海道以外では全国の都市公園からランダムに抽出した321箇所を対象として、樹木台帳や植栽平面図等から樹種構成比を把握。

¹² 全国の道路緑地を対象とした「国土技術政策総合研究所資料 No.506 わが国の街路樹 VI」（国土交通省国土技術政策総合研究所、平成21年1月）から樹種構成比を把握。

○ 緑化施設整備計画認定緑地

緑化施設整備計画認定緑地における生体バイオマス損失に伴う炭素ストック変化量は、植栽時の樹木の規格が都市公園と同様の考え方で選択されていること、そして最も古い施設でも2002年認定のものであることから、平均樹齢30年以下と判断しゼロとした。

樹木の年間生体バイオマス成長量及び生体バイオマスの地上部と地下部への分離についても、都市公園と同様のパラメータを利用した。

■ 活動量データ

○ 都市公園

土地の転用を伴わない都市公園の面積は、都市公園の面積に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。都市公園における生体バイオマスの炭素ストック変化量の活動量については、都市公園等整備現況調査で得られた敷地面積に単位面積当たりの高木本数（北海道：329.5本/ha、北海道以外：222.3本/ha）を乗ずることで都市公園に植栽された高木本数を算定した。なお、単位面積当たりの高木本数は、有意水準95%を満たすサンプル数を設定し、サンプル公園の高木本数及び敷地面積から算定した¹³。

表 11-18 1989年12月31日時点で森林ではない都市公園の土地利用別設置面積

2018年度末時点				
	土地利用区分	国土における1990年度から2018年度までの森林から開発地に転用された土地の割合	活動面積 [ha]	RVへの適合
1990年以降告示かつ500 m ² 以上の都市公園	森林	5.49%	3,482.45	対象外
	森林以外	94.51%	59,982.14	対象
	合計	100.00%	63,464.59	—

表 11-19 RV対象都市公園における土地転用の有無別の活動面積と活動量

2018年度末時点				
	土地利用区分	国土における単年度の転用割合	活動面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
1990年以降告示かつ500 m ² 以上のRV対象都市公園	土地転用あり (森林からの土地転用を除く)	0.37%	220.98	51,682
	土地転用なし	99.63%	59,761.15	13,976,561
	合計	100.00%	59,982.14	14,028,243

○ 道路緑地

土地の転用を伴わない道路緑地における活動量（植栽本数）は以下の手順で算定した。

- 1987年度、1992年度及び約束期間の当該年度に関する道路緑地樹木現況調査のデータより、1990年3月31日及び約束期間の当該年度末時点における全国の道路緑地における高木本数を推計。
- 約束期間の当該年度末の本数から1990年3月31日の本数を差し引くことにより、1990年4月1日以降に植栽された高木本数を把握（RVでは1990年1月1日以降の活動が対象となるが、1月1日から3月31日までの植栽本数が推計できないため、4月1日以降としている）。
- 「2」の本数に、500 m²以上の土地に植栽されている割合を乗じる。

¹³ 都市公園の単位面積当たりの高木本数は、全国の都市公園より、北海道176箇所、北海道以外321箇所をランダムに抽出し、樹木台帳や植栽平面図等から集計した。

4. 「3」の本数に、道路緑地の全体面積に対し1989年12月31日時点で森林であった土地の割合を乗じる。
5. 「4」の本数に、国土の土地転用割合において、土地の転用が無い開発地の割合を乗じる。

表 11-20 RVの報告対象とする道路緑地の面積

2018年度末時点

	高木1本当たりの道路緑地面積 [ha/本]	植栽高木本数 (本)			500m ² 以上の植栽区間である割合 [%]	1989年12月31日時点で森林であった土地の割合 [%]	RVの対象となる道路緑地面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
		1990年	2019年	1990年度～				
		3月31日	3月31日	2018年度				
a	b	c	c-b	d	e	$a*(c-b)*d/100*(100-e)/100$	$(c-b)*d/100*(100-e)/100$	
一般道路 (国土交通省、都道府県、市町村、公社管理道路)	0.006237	4,342,070	6,898,885	2,556,815	99.00%	5.49%	14,921	2,392,270
高速道路 (旧公団管理道路)	0.000830	1,096,380	8,896,993	7,800,613	100.00%	5.49%	6,119	7,372,575
合計	—	5,438,450	15,795,878	10,357,428	—	—	21,039	9,764,845

表 11-21 RV対象道路緑地における土地転用の有無別の活動面積と活動量 (高木本数)

2018年度末時点

	土地利用区分	国土における単年度の転用割合	活動量 (高木本数) [本]	活動面積 [ha]	
1990年以降告示かつ500m ² 以上のRV対象道路緑地	土地転用あり	0.37%	35,975	77.51	
	土地転用なし	99.63%	9,728,870	20,961.60	
	合計	100.00%	9,764,845	21,039.11	
	一般道路	土地転用あり	0.37%	8,813	54.97
		土地転用なし	99.63%	2,383,457	14,865.62
		合計	100.00%	2,392,270	14,920.59
	高速道路	土地転用あり	0.37%	27,161	22.54
		土地転用なし	99.63%	7,345,413	6,095.98
		合計	100.00%	7,372,575	6,118.52

(注)「土地転用あり」は、森林からの土地転用を除く。

○ 港湾緑地

港湾緑地における生体バイオマスの炭素ストック変化量の活動量については、全数調査で得られた供用面積に、都市公園の単位面積当たりの高木本数 (前述のような都市公園と港湾緑地との類似性から採用。北海道：329.5 本/ha、北海道以外：222.3 本/ha) を乗ずることで、港湾緑地に植栽された高木本数を算定した。なお、港湾緑地は、全て開発地に設置されており、1989年12月31日時点で森林であった施設は存在しないものと判断した。

表 11-22 土地転用の有無別の港湾緑地面積及び活動量

土地利用区分	国土における 単年度の転用割合	活動面積 [ha]	2018年度末時点
			活動量 (高木本数) [本]
土地転用あり	0.37%	6.88	1,562
土地転用なし	99.63%	1,859.72	422,445
合計	100.00%	1,866.60	424,007

○ 下水道処理施設における外構緑地

土地の転用を伴わない下水道処理施設における外構緑地の面積は、都市公園と同様の方法により算定した。下水道処理施設における外構緑地の生体バイオマスの炭素ストック変化量の活動量については、約束期間の当該年度に関する「下水処理場・ポンプ場における吸収源対策に関する実態調査」のデータを用い、緑化面積に単位緑化面積当たりの高木本数（北海道：129.8本/ha、北海道以外：429.2本/ha）を乗ずることで、下水道処理施設における外構緑地に植栽された高木本数を算定した¹⁴。

なお、下水道処理施設における外構緑地は、全て開発地に設置されている。

表 11-23 1989年12月31日時点で森林ではない下水道処理施設における外構緑地の面積

土地利用区分	国土における1990年度 から2018年度までの森 林から開発地に転用さ れた土地の割合	活動面積 (緑化面積) [ha]	2018年度末時点
			RVへの適合
森林	5.49%	38.67	対象外
森林以外	94.51%	666.04	対象
合計	100.00%	704.71	—

表 11-24 RV対象下水道処理施設における土地転用の有無別の活動面積と活動量（高木本数）

土地利用区分	国土における 単年度の転用割合	活動面積 (緑化面積) [ha]	2018年度末時点
			活動量 (高木本数) [本]
土地転用あり (森林からの土地転用 を除く)	0.37%	2.45	997
土地転用なし	99.63%	663.59	269,514
合計	100.00%	666.04	270,511

○ 緑化施設整備計画認定緑地

活動量（高木本数）は、全ての施設における個別の植栽本数が把握できることから、それらを積み上げた高木本数を用いた。

¹⁴ 下水道処理施設の外構緑地における単位面積当たりの高木本数は、データを得ることが出来た59施設の高木本数及び緑化面積から設定している。

表 11-25 緑化施設整備計画認定緑地の活動面積と活動量

認定年度	所在地	敷地面積 [m ²]	緑化施設面積内訳 [m ²]			活動面積 緑化施設面積－ 壁面緑化面積 [m ²]	活動量 高木本数 [本]
			地上	屋上	壁面		
2002	東京都港区	17,244	1,314	2,042	106	3,356	335
2002	東京都港区	19,708	3,285	736	0	4,021	147
2002	東京都港区	52,766	10,679	0	0	10,679	672
2002	東京都港区	84,780	8,846	9,386	0	18,232	813
2003	東京都港区	5,519	1,374	280	0	1,654	167
2003	大阪市	22,282	1,527	3,164	110	4,691	500
2005	川口市	1,995	586	164	18	750	153
2006	京都市	3,857	1,271	0	0	1,271	90
2006	広島市	4,453	130	783	0	913	1
2007	広島市	14,353	4,058	0	0	4,058	261
2007	福岡市	5,689	773	799	0	1,572	19
2008	石川県	7,281	682	1,411	0	2,093	19
2009	東京都世田谷区	5,526	1,116	0	0	1,116	51
2009	東京都世田谷区	6,459	1,370	0	0	1,370	15
	合計	251,912	37,011	18,765	234	55,776	3,243

(注) 2010~2018 年度に認定された土地は無い。

○ 河川・砂防緑地

土地の転用を伴わない河川・砂防緑地の面積は、活動面積に国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、活動面積に単位面積当たりの高木本数（北海道：1470.8 本/ha、北海道以外：339.0 本/ha）を乗ずることで算定した¹⁵。

なお、河川・砂防緑地は、調査実施時に地歴が森林であった土地を除外しているため、活動面積の計算過程では、森林からの土地転用は考慮に入れていない。

表 11-26 RV 対象河川・砂防緑地における土地転用の有無別の活動面積と活動量

	土地利用区分	国土における 単年度の転用割合	活動面積 [ha]	2018年度末時点 活動量 (高木本数) [本]
1990年以降竣工かつ 500 m ² 以上のRV対象 河川・砂防緑地	土地転用あり (森林からの土地転用を除く)	0.37%	6.44	3,556
	土地転用なし	99.63%	1,740.71	961,555
	合計	100.00%	1,747.15	965,111

○ 官庁施設外構緑地

土地の転用を伴わない官庁施設外構緑地の面積は、活動面積に国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、活動面積に単位面積当たりの高木本数（北海道、北海道以外共通：108.8 本/ha）を乗ずることで算定した¹⁶。

¹⁵ 河川・砂防緑地においては、対象施設の約95%で高木本数の実数を把握している。全施設の高木本数を簡便に算定するため、この95%の施設のデータから単位面積当たりの植栽本数を設定することとした。

¹⁶ 官庁施設外構緑地の単位面積当たりの高木本数は、植栽平面図を入手できた30施設を対象に、高木本数を「敷地面積－建築面積」で除して設定した。なお、北海道と北海道以外に分けてモデル値を設定するには、サンプル数が不十分と判断し、全国共通としている。

表 11-27 1989年12月31日時点で森林ではない官庁施設外構緑地の面積

2018年度末時点				
	土地利用区分	国土における1990年度から2018年度までの森林から開発地に転用された土地の割合	活動面積 [ha]	RVへの適合
1990年以降竣工かつ500 m ² 以上の官庁施設外構緑地	森林	5.49%	18.60	対象外
	森林以外	94.51%	320.29	対象
	合計	100.00%	338.89	—

表 11-28 RV対象官庁施設外構緑地における土地転用の有無別の活動面積と活動量

2018年度末時点				
	土地利用区分	国土における単年度の転用割合	活動面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
1990年以降竣工かつ500 m ² 以上のRV対象官庁施設外構緑地	土地転用あり (森林からの土地転用を除く)	0.37%	1.18	128
	土地転用なし	99.63%	319.11	34,720
	合計	100.00%	320.29	34,848

○ 公的賃貸住宅地内緑地

土地の転用を伴わない公的賃貸住宅地内緑地の面積は、活動面積に国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、活動面積に単位面積当たりの高木本数（北海道、北海道以外共通：219.9本/ha）を乗ずることで算定した¹⁷。

表 11-29 1989年12月31日時点で森林ではない公的賃貸住宅地内緑地の面積

2018年度末時点				
	土地利用区分	国土における1990年度から2018年度までの森林から開発地に転用された土地の割合	活動面積 [ha]	RVへの適合
1990年以降竣工かつ500 m ² 以上の公的賃貸住宅地内緑地	森林	5.49%	172.08	対象外
	森林以外	94.51%	2,963.88	対象
	合計	100.00%	3,135.96	—

表 11-30 RV対象公的賃貸住宅内緑地における土地転用の有無別の活動面積と活動量

2018年度末時点				
	土地利用区分	国土における単年度の転用割合	活動面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
1990年以降竣工かつ500 m ² 以上のRV対象公的賃貸住宅地内緑地	土地転用あり (森林からの土地転用を除く)	0.37%	10.92	2,401
	土地転用なし	99.63%	2,952.96	649,357
	合計	100.00%	2,963.88	651,758

b) 転用のない土地：枯死木

○ 都市公園

生体バイオマスの活動量データ算定に用いている単位面積当たりの高木本数は、公園開設

¹⁷ 公的賃貸住宅地内緑地の単位面積当たりの高木本数は、植栽平面図を入手できた33施設を対象に、高木本数を「敷地面積－建築面積」で除して設定した。なお、北海道と北海道以外に分けてモデル値を設定するには、サンプル数が不十分であると判断し、全国共通としている。

時のデータではなく、開設後の枯死及び補植の結果が含まれたある時点のデータを用いていることから、枯死木の炭素ストック変化量は生体バイオマスに含まれるものとして、「IE」として報告した。

○ 道路緑地

生体バイオマスの活動量データ算定に用いている高木本数は、5年に1回の調査（2007年度以降は毎年実施）時に現地の植栽本数をカウントしているものであり、植栽後の枯死及び補植の結果が含まれたデータを用いていることから、生体バイオマスに枯死の結果も含まれているとして、枯死木の炭素ストック変化量は「IE」として報告した。

○ 都市公園及び道路緑地以外の施設緑地

都市公園と同様の考え方にに基づき「IE」として報告した。

c) 転用のない土地：リター

リターについては、都市公園及び港湾緑地のみを対象に算定を行った。

転用のないRV地におけるリターの炭素ストック変化量は、「転用のない開発地（4.E.1.）」における算定式と同様の式により算定した。NIR6章6.9.1.b)2)節を参照のこと。

■ 各種パラメータ

施設緑地タイプごとの各種パラメータについては以下の通り。

○ 都市公園、港湾緑地

本報告におけるリターの対象は、高木からの自然落下による落葉・落枝のみを対象とした。都市公園における単位面積当たりリターの炭素ストック変化量は、都市公園における現地調査¹⁸の結果得られた高木1本当たりの年間リター発生量（北海道、北海道以外共通：0.0006 t-C/本/yr）と、単位面積当たりの高木本数、そして清掃等による敷地外への持ち出し率（54.4%）を用いて算定した。その結果、北海道0.0882 t-C/ha/yr、北海道以外0.0594 t-C/ha/yrとなった。なお、リターにおける炭素含有率は、2006年IPCCガイドライン（8.21頁）に示されるデフォルト値0.4 t-C/t-d.m.を用いた。

○ 都市公園、港湾緑地以外の施設緑地

各施設緑地における主なリターの構成要素は、自然落下により発生する落葉・落枝、及び枯死根である。供用後の落葉・落枝の一部は、清掃管理等により敷地外に持ち出されるが、清掃管理等による持ち出しの対象は、供用後に植栽された植生から発生した落葉・落枝等であり、その土地の従来のリター炭素ストック量を低減するものではない。逆に、持ち出されずに敷地内に残存した落葉・落枝により炭素ストックは増加する。また、枯死根についても同様であり、供用後、土壌を敷地外に持ち出すことは無いため、枯死根として炭素ストックは増加する。

上述したように各施設緑地への落葉・落枝、枯死根のインプットが炭素ストックを増加させていることから、リターが吸収源であることは明らかである。しかしながら、多岐にわたる管理についての詳細な情報（例えば清掃管理等）を得ることが困難であることから、これら施設緑地におけるリターの炭素ストック変化量を正確に算定することが困難である。その

¹⁸ 滝野すずらん丘陵公園（北海道）及び国営昭和記念公園（東京都）において、複数樹種にリタートラップを設置し、自然落下によるリターの発生量を測定した。なお、当該年に地表に落下したもののみをリターとして扱っている。なお、調査対象公園の選出においては、継続的なモニタリング調査が実施可能であり、かつ多様な樹種が植栽されているという条件を満たす公園として、規模が大きく管理水準が高い国営公園を対象とした。また、樹種構成比が北海道とそれ以外では異なることから、北海道で1箇所、北海道以外の日本の標準的な気候帯で1箇所という観点から上記2公園を選択した。

ため、安全側の対応として、排出源ではないため報告対象としないこととした。

■ 活動量データ

生体バイオマスと同様である。

d) 転用のない土地：土壌

単位面積当たりの土壌の炭素ストック変化量を設定した都市公園及び都市公園と整備方法が類似している港湾緑地を対象とした。植生回復地の土壌は、一般的に有機質土壌（泥炭土及び黒泥土）に該当しないため、有機質土壌は「NO」として報告し、鉱質土壌のみ算定した。

■ 算定方法

転用のないRV地における土壌の炭素ストック変化量は、「転用のない開発地（4.E.1.）」における算定式と同様の式により算定した。NIR6章6.9.1.b)3)節を参照のこと。

■ 各種パラメータ

施設緑地タイプごとの各種パラメータについては以下の通り。

○ 都市公園、港湾緑地

植生回復地における単位面積当たりの土壌の炭素ストック変化量は、整備後30年以内の都市公園における土壌調査結果¹⁹（整備後0～20年の統合年変化量1.28t-C/ha/yr、整備後21～30年の統合年変化量1.38t-C/ha/yr）から算定した（Tonosaki et al., 2013、国土交通省公園緑地・景観課、2015）²⁰。

なお、上記の単位面積当たりの土壌の炭素ストック変化量は、整備後30年以内の都市公園の調査結果を用いて設定していることから、造成後（整備後）30年以内の植生回復地に適用した。

○ 都市公園、港湾緑地以外の施設緑地

当該緑地については、植栽、造成、管理について、都市公園と類似しており、土壌における炭素ストックの変化量も同様の傾向を示すものと考えられる。また、植栽の方法が異なる高速道路ののり面についても、現地調査の結果、少なくとも整備後20年間以上は炭素ストックが増加し続けることが明らかになったため、「吸収源」として取り扱う。

ただし、当該緑地については、土壌の炭素ストック変化量を算定するための十分なデータが得られていないことから、これら施設緑地における土壌の炭素ストック変化量を正確に算定することが困難である。そのため、安全側の対応として、排出源ではないため報告対象としないこととした。これら都市公園、港湾緑地以外の施設緑地に係る算定については、今後、検討を進めていく予定である。

¹⁹ 整備後経過年の異なる東京都の都市公園について、土地被覆別（植栽地31地点、芝生地29地点、無植生地21地点）の炭素含有量（深さ30cmまで）を把握した。

²⁰ 都市公園は敷地全体を一体的に造成することが多く、敷地造成直後は、従前の土地被覆の形態に関係なく土壌炭素ストック量は敷地全体で同一と言える。ここで、植物からの炭素供給量が無い土地（無植生地）の土壌の炭素ストック率を造成当時の土壌の炭素ストック率とみなし、整備後経過年の異なる都市公園で土地被覆別（植栽地、芝生地、無植生地）の土壌炭素ストック量を用いて、「植栽地の炭素蓄積速度」及び「芝生地の炭素蓄積速度」を次の通り設定した。

・植栽地の炭素蓄積速度＝「植栽地と無植生地の土壌炭素ストック量の差／植栽地調査地点の平均整備後経過年」

・芝生地の炭素蓄積速度＝「芝生地と無植生地の土壌炭素ストック量の差／芝生地調査地点の平均整備後経過年」

さらに、都市公園の平均的な植栽地、芝生地、無植生地の面積割合を用いて加重平均を行い、単位面積当たりの土壌の炭素ストック変化量を設定した。なお、無植生地の土壌炭素ストック量は、サンプルデータから換算すると38 t-C/ha程度となっている。

■ 活動量データ

生体バイオマスの活動量の算定のために用いられた面積と同様である。

e) 転用のない土地：その他のガス

1) 施肥に伴う N₂O 排出

我が国では、都市公園における施肥の実態があるが、農業分野において算定されている窒素肥料の需要量に都市公園への施用量が含まれると想定し、「IE」とした。

2) 有機質土壌の排水に伴う N₂O、CH₄ 排出

植生回復地における有機質土壌の排水活動は我が国では実施しないため、当該排出量は、「NO」として報告した。

3) 土地利用変化・管理変化に伴う土壌無機化に伴う N₂O 排出

植生回復地では土壌炭素ストック変化量は増加、もしくは排出になっていないと報告しており、2006年 IPCC ガイドラインの Tier 2 以下の方法論では、当該区分の N₂O 固定量は算定対象とならない。従って、「NA」として報告した。

4) バイオマスの燃焼

RV 活動が実施されている開発地については、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」及び「消防法」により厳しく制限されているため、計画的な焼却活動は原則として実施されない。また、RV 活動が行われている土地は、全て管理地であり、基本的には自然火災が発生することはない。したがって、バイオマス燃焼により炭素を排出する活動は行われておらず、「NO」として報告した。

f) 他の土地利用から転用された土地：地上バイオマス、地下バイオマス

■ 算定方法

RV において、土地の転用とは「施設」が設置または建設されることにより生じるものであり、単年度で生体バイオマスが全て置き換わることが基本となる。そこで、土地転用を伴う RV の算定方法の基本方針として、報告年に新規開設された施設のうち、土地の転用を伴って開設された施設を「他の土地から転用された RV」と位置付ける。算定は他の活動同様、RV への転用に伴い失われるバイオマス蓄積量 ($\Delta C_{LB_conversion_to_RV}$) と転用後のバイオマス変化量 ($\Delta C_{RV_LB_SC}$) とを合算して求めた。ただし、11.3.4.節で示した通り、第3条4活動をまたぐ土地転用においては、転用に伴う炭素ストックの損失は元の活動下で報告する整理としたため、農地および草地からの転用分は CM 及び GM 下で算定され RV 下では算定されない。算定式は「他の土地利用から転用された開発地 (4.E.2.)」における算定式と同様の式により算定した。算定式は NIR6 章 6.9.2.b)1) 節を参照のこと。なお、RV 地から他の土地への転用は起こらない。

■ 各種パラメータ

○ 都市公園

土地転用直前の生体バイオマスの炭素ストック量の損失はそれぞれ元の土地における京都議定書活動で算定しており、京都議定書活動以外からの土地転用において、設定しているパラメータの関係上、炭素損失は算定されない。転用直後の炭素ストック量はゼロ (RV 該当施設開設時には、すでに植栽が成された状態であり、生体バイオマスもストックされているが、これらは圃場等の他所から移動されてきたものであり、RV 活動によって生じたストックでは

ないことからゼロとして取り扱う)とした。この際、対象施設開設に伴う土地の造成等により、転用前の生体バイオマスが全て消失することを前提としている。その他のパラメータは、転用を伴わない都市公園と同様とした。

○ 都市公園以外の施設緑地

土地転用直後及び直前の生体バイオマスの炭素ストック量 [t-C/ha] は、総て他の土地から転用された都市公園と同様である。その他のパラメータは、転用を伴わない道路緑地、港湾緑地、下水道処理施設における外構緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地と同様とした。

■ 活動量データ

○ 都市公園

土地の転用を伴う都市公園の活動面積は、都市公園の面積に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、土地の転用を伴わない都市公園と同様とした。

表 11-31 都市公園の土地転用別活動面積及び活動量

	転用前の土地利用区分	国土における 単年度の転用割合	活動面積 [ha]	2018年度末時点
				活動量 (高木本数) [本]
1990年以降告示かつ500m ² 以上のRV対象都市公園	土地の転用なし	99.63%	59,761.15	13,976,561
	農地	0.32%	190.94	44,655
	草地	0.05%	30.05	7,027
	湿地	IE	IE	IE
	その他の土地	IE	IE	IE
	合計	100.00%	59,982.14	14,028,243

○ 道路緑地

土地の転用を伴う道路緑地の面積は、道路緑地の面積に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、土地の転用を伴わない道路緑地と同様の方法とした。

表 11-32 道路緑地の土地転用別活動面積及び活動量

	転用前の土地利用区分	国土における 単年度の転用割合	活動面積 [ha]	2018年度末時点
				活動量 (高木本数) [本]
1990年以降告示かつ500 m ² 以上のRV対象道路緑地	土地の転用なし	99.63%	20,961.60	9,728,870
	農地	0.32%	66.97	31,084
	草地	0.05%	10.54	4,891
	湿地	IE	IE	IE
	その他の土地	IE	IE	IE
	合計	100.00%	21,039.11	9,764,845

○ 港湾緑地

土地の転用を伴う港湾緑地の面積は、港湾緑地の開設面積に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、土地の転用を伴わない港湾緑地と同様の方法である。

表 11-33 港湾緑地の土地転用別活動面積及び活動量

2018年度末時点

転用前の土地利用区分	国土における単年度の転用割合	活動面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
土地の転用なし	99.63%	1,859.72	422,445
農地	0.32%	5.94	1,350
草地	0.05%	0.93	212
湿地	IE	IE	IE
その他の土地	IE	IE	IE
合計	100.00%	1,866.60	424,007

○ 下水道処理施設における外構緑地

土地の転用を伴う下水道処理施設における外構緑地の面積は、下水道処理施設の緑化面積に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、土地の転用を伴わない下水道処理施設と同様の方法である。

表 11-34 下水道処理施設における外構緑地の土地転用別活動面積及び活動量

2018年度末時点

転用前の土地利用区分	国土における単年度の転用割合	活動面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
土地の転用なし	99.63%	663.59	269,514
農地	0.32%	2.12	861
草地	0.05%	0.33	136
湿地	IE	IE	IE
その他の土地	IE	IE	IE
合計	100.00%	666.04	270,511

○ 河川・砂防緑地

土地の転用を伴う河川・砂防緑地の活動面積は、河川・砂防緑地の植栽面積に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、土地の転用を伴わない河川・砂防緑地と同様の方法である。

表 11-35 河川・砂防緑地の土地転用別活動面積及び活動量

2018年度末時点

転用前の土地利用区分	国土における単年度の転用割合	活動面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
土地の転用なし	99.63%	1,740.71	961,555
農地	0.32%	5.56	3,072
草地	0.05%	0.88	483
湿地	IE	IE	IE
その他の土地	IE	IE	IE
合計	100.00%	1,747.15	965,110

○ 官庁施設外構緑地

土地の転用を伴う官庁施設外構緑地の活動面積は、敷地面積から建築面積を差し引いた面積に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、土地の転用を伴わない官庁施設外構緑地と同様の方法である。

表 11-36 官庁施設外構緑地の土地転用別活動面積及び活動量

転用前の土地利用区分	国土における 単年度の転用割合	2018年度末時点	
		活動面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
土地の転用なし	99.63%	319.11	34,720
農地	0.32%	1.02	111
草地	0.05%	0.16	17
湿地	IE	IE	IE
その他の土地	IE	IE	IE
合計	100.00%	320.29	34,848

○ 公的賃貸住宅地内緑地

土地の転用を伴う公的賃貸住宅地内緑地の活動面積は、敷地面積から建築面積を差し引いた面積に、国土の土地転用比率を乗じて算出した。生体バイオマスの活動量（高木本数）については、土地の転用を伴わない公的賃貸住宅地内緑地と同様の方法である。

表 11-37 公的賃貸住宅地内緑地の土地転用別活動面積及び活動量

転用前の土地利用区分	国土における 単年度の転用割合	2018年度末時点	
		活動面積 [ha]	活動量 (高木本数) [本]
土地の転用なし	99.63%	2,952.96	649,357
農地	0.32%	9.43	2,075
草地	0.05%	1.48	326
湿地	IE	IE	IE
その他の土地	IE	IE	IE
合計	100.00%	2,963.88	651,758

g) 他の土地利用から転用された土地：枯死木

土地の転用を伴うRV活動を実施する場合、転用前の土地（森林は対象外）はそのほとんどが「管理地」であり、樹木は「資産」であることから、枯死後、枯死木は敷地外へ運び出し、代わりに補植することが原則と考えられる。したがって、転用前の生体バイオマスのストック量に「枯死→補植」の結果が含まれ、見かけ上は枯死が発生していない。また、転用直後の植生回復地においては、生体バイオマスをゼロとしていることから、枯死もゼロとした。以上のことから、転用前及び転用直後の枯死木はゼロとした。

また、転用後1年間で発生する枯死量については、土地の転用を伴わない土地と同様に、「IE」として報告した。

h) 他の土地利用から転用された土地：リター

転用のない土地と同様に、都市公園及び港湾緑地のみを対象に算定を行い、その他の施設緑地（道路緑地、下水道処理施設における外構緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地）については、「排出源でないため報告の対象としない」とした。

■ 算定方法

○ 都市公園、港湾緑地

農地や草地、湿地などから転用して都市公園を設置する場合、現況地盤をそのまま活用するか、または現況地盤の上に客土を施すなど、基本的に転用前の土壌基盤を外部へ持ち出すことは無い。したがって、転用前の土地にストックされていた落葉、落枝、枯死根等は、土地の転用後も減少することはない。

また、土地転用直後の都市公園は、植栽が施された直後であり、リターに該当する炭素はほとんど存在しない。以上のことから、土地の転用に関わるリターの炭素ストック変化量はゼロとみなすこととした。

また、転用後1年間で発生するリターの量については、土地の転用を伴わない都市公園と同様の方法により算定を行った。算定方法については11.5.1.1.f.b)節を参照のこと。

○ 都市公園、港湾緑地以外の施設緑地

土地の転用に関わるリターの炭素ストック変化量は、都市公園と同様の理由により、ゼロとみなした。転用後については、上述した転用のない土地の道路緑地、下水道処理施設における外構緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地と同様に、各施設緑地への落葉・落枝、枯死根のインプットが炭素ストックを増加させていることから、リターが吸収源であることは明らかである。しかしながら、多岐にわたる管理についての詳細な情報（例えば清掃管理等）を得ることが困難であることから、これら施設緑地におけるリターの炭素ストック変化量を正確に算定することが困難である。そのため、安全側の対応として、排出源ではないため報告対象としないこととした。

■ 活動量データ

生体バイオマスと同様である。

i) 他の土地利用から転用された土地：土壌

転用のない土地と同様に、都市公園及び都市公園と整備方法が類似している港湾緑地を対象とした。

■ 算定方法

○ 都市公園、港湾緑地

リターの項に示したとおり、農地や草地、湿地などから転用して都市公園を設置する場合、現況地盤をそのまま活用するか、または現況地盤の上に客土を施すなど、基本的に転用前の土壌基盤を外部へ持ち出すことは極めてまれである（持ち出す場合も、焼却等、炭素を大気中に放出させるような処理は行わない）。

したがって、土地の転用に伴う土壌中の炭素ストック変化は生じない、または客土の分だけ増加することとなる。ただし、客土は、他所からの炭素の移動に過ぎず、大気中の炭素を固定する活動では無いため、土地の転用に伴う土壌炭素ストック変化は生じないものとして取り扱う。

転用後1年間の土壌炭素ストックの変化は、転用のない土地と同様の方法により算定を行った。算定方法については11.5.1.1.f.c)節を参照のこと。

○ 都市公園、港湾緑地以外の施設緑地

都市公園、港湾緑地以外の施設緑地においても、他の土地から転用された都市公園と同様の理由から排出源ではない。そのため、安全側の対応として、排出源ではないため報告対象としないこととした。

■ 活動量データ

生体バイオマスの算定に用いられた面積と同様である。

j) 他の土地利用から転用された土地：その他のガス

各GHGガスの算定報告は、転用のない植生回復地と同様である。

k) 算定結果

表 11-38 RV 活動による排出・吸収量

	1990	2013	2014	2015	2016	2017	2018
	[kt-CO ₂]	[kt-CO ₂]	[kt-CO ₂]	[kt-CO ₂]	[kt-CO ₂]	[kt-CO ₂]	[kt-CO ₂]
RV	-81.97	-1,227.59	-1,246.64	-1,267.46	-1,284.96	-1,307.71	-1,322.21
地上バイオマス	-49.64	-750.71	-760.21	-770.52	-779.41	-793.66	-800.34
地下バイオマス	-12.91	-195.19	-197.65	-200.33	-202.65	-206.35	-208.09
枯死木	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
リター	-0.92	-12.94	-13.22	-13.54	-13.77	-13.94	-14.17
土壌	-18.49	-268.75	-275.56	-283.07	-289.14	-293.76	-299.62
その他のガス	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO	IE,NA,NO

植生回復活動は、施設緑地タイプ（下位区分）や気候区分（北海道、北海道以外）の特性に応じた各種パラメータ（樹木の年間生体バイオマス成長量、単位面積当たりの高木本数等）を採用しており、それぞれの構成比は各年で異なるため、必ずしも各年の単位活動面積あたりの吸収量は一致しない。

11.5.1.2. 算定対象から除外した炭素プールについて

RVにおける道路緑地、下水道処理施設における外構緑地、緑化施設整備計画認定緑地、河川・砂防緑地、官庁施設外構緑地、公的賃貸住宅地内緑地のリター及び土壌を算定対象から除外している。これらの炭素プールについては国土交通省による調査により、炭素ストックが経年的に増加する傾向が観測されている（半田他、2008）。これらの炭素プールのストック変化量を算定するためには更なる情報の収集・整理等が必要な状態であるが、排出源ではなく吸収源であることは明らかであることから、吸収量の過大評価には繋がらない。

CM、GMにおける枯死木、リターを算定対象から除外している。該当節で説明の通りCM、GM対象地では枯死木、リターにおける炭素ストック変化量はゼロと算定されており、排出になっていないため、吸収量の過大評価に繋がらない。

11.5.1.3. 自然攪乱の排出除外ルールに関係する報告について

我が国では自然攪乱に由来する排出を除外するルールは適用しない。

11.5.1.4. 伐採木材製品に関係する報告について

■ 概要及び方法論

11.5.1.1.c) 節で説明したとおり、条約における我が国の伐採木材製品（HWP）報告と同様に、建築物に使用される製材、木質ボード、合板ごとの炭素ストック変化量は国独自の方法（Tier 3）を用いて算定し、その他木材利用（製材、木質ボード、合板）、紙製品（紙・板紙（古紙含む））については、2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスに提示されているTier 2方法を用いて算定した。算定式、利用した各種パラメータ及び活動量は、NIR第6章6.11節と同様である。

本議定書報告においては、この条約報告の数値を基に、2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスに従い、森林減少に由来するHWPを即時排出で除去した。

■ 過去のHWPの取り扱い

CRF表4（KP-I）B.1.1に示している通り、我が国の森林経営参照レベル（FMRL）は将来予測に基づいていない。このため、京都議定書第2約束期間前に生産されたHWPを算定に含めている。我が国はFM全体（HWPを含めない5炭素プール）の参照レベルはゼロと設定したが、HWPの参照レベル自体は将来予測に基づき設定されており、技術的調整として報告されている。詳細について11.7.5節を参照のこと。

■ 第1約束期間に既に計上されたHWPの取り扱い

我が国は第2約束期間の算定では第1約束期間に即時排出で計上されたHWPプールからの排出は特に除外等の処理は行っていない。ただし、上述の通り、HWPの参照レベルは将来予測に基づいて推計しており、参照レベルにおいても第1約束期間に即時排出で計上された分は除外されていない。従って、第1約束期間に即時排出で計上された分は相殺されてゼロになっている。

■ 森林減少由来HWPの取り扱い

森林減少に由来するHWPを即時排出で計上している(11.5.1.1.b節)。方法論の詳細について11.5.1.7節を参照のこと。

■ 固形廃棄物処分場(solid waste disposal site、SWDS)中の木材やエネルギー利用分の取り扱い

NIR第6章の6.11節においてHWP炭素ストック変化量の算定に用いた方法を説明しており、KP-LULUCF報告では同様の方法を適用している。SWDS中のHWPからの二酸化炭素排出は焼却処理と同様とみなし、HWPプールに含まれない。また、エネルギー利用のため伐採された木材は計上対象となるHWPプールに含まれないため、即時排出となっている。

■ 輸入材の取り扱い

HWPの計上は生産法を適用していることから輸入材の炭素ストック変化は含まれていない(NIR第6章6.11節を参照)。

11.5.1.5. 間接及び自然要因の分離(ファクタリングアウト)について

決定2/CMP.8の附属書IIのパラグラフ3の要件に関し、我が国では、第3条3及び4活動に伴う排出・吸収量の算定においてファクタリングアウトを実施していない。

11.5.1.6. QA/QCと検証

■ 一般的なQA/QC

京都議定書補足情報のQA/QCは2006年IPCCガイドラインに従った方法で、条約インベントリの作成と同様に一般的なインベントリQC手続きを実施している。一般的なインベントリQCには、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC活動については、1章に詳述している。

■ Tier.3の算定に関する検証

Tier.3を用いる算定について、CM/GM鈹質土壌の炭素ストック変化量の推計(RothCモデル)の適用に際して、下記の通り検証活動を行った。

○ 校正及び検証活動

RothCモデルでは特に校正は実施していないが、地目と土壌タイプの違いにより3つの改良バージョン(水田、黒ボク、非黒ボク)を使い分けることにより、実測データと精度よく一致することが確かめられている。

また、CM/GMの鈹質土壌炭素ストック変化の推計のためのRothCモデルの妥当性については、長期の圃場における実測データを用いたプロットスケールの検証及び改良を行っている。

○ 校正及び検証活動が全ての土壌種と活動を網羅しているという証拠

土壌の炭素動態の特徴から、まず湛水状態になるかどうかで水田と非水田に大きく分ける必要がある。さらに、非水田については、土壌の炭素動態の特徴から大きく黒ボク土と非黒ボク土に分けることが妥当である。結果として、すべての農地を大きくこれら3つに分けて扱うことは妥当であると考えられる。

○ より詳細な入力データに関する更なる情報

RothCモデルに関する校正、検証活動及び入力データの詳細は、論文（文献29、31～35、41）及び6章に説明されている。

11.5.1.7. 再計算と改善点

KP報告では、下記通り再計算を行った。再計算の影響の程度については10章参照。

■ AR面積及びD面積の見直し

AR率、D率の修正に伴い、AR面積及びD面積について再計算を行った。この修正に起因して2013年度～2017年度のAR、D及びFMにおける地上・地下バイオマス、枯死木、リター及び鉱質土壌の炭素ストック変化量を再計算した。さらに、当該修正に起因してCM、GM、RV面積も再計算された。その結果CM、GM及びRVにおける全ての炭素プールの炭素ストック変化量が再計算された。さらに、AR、FMにおけるバイオマスの燃焼に伴うCH₄及びN₂O排出量も、AR面積の修正により、再計算を行った。

■ 開発地へ転用時の有機質土壌からの排出量の新規算定に伴う再計算

有機質土壌が開発地に転用された場合、転用後の排出は生じないと報告してきたが、2018年インベントリ審査（ARR L.19）の指摘を踏まえて、調査を実施した結果、有機質土壌地などの軟弱地盤における道路造成では、沈み込みを前提とした工事が実施されており、そのような場合に有機質土壌の酸化が起こることが否めないため、今次提出より算定に含めることにした。これに伴い、転用元に応じて森林から転用した場合はD報告に、農地から転用した場合はCM、牧草地から転用した場合にはGMにそれぞれ含めることとした。これにより有機質土壌の排水に伴うCO₂及びCH₄排出量（on-site and off-site）及び有機質土壌の水溶性炭素によるoff-site CO₂排出量が計算され各活動下に追加された。

■ 単年生作物転用前後の生体バイオマス量の新規算定に伴う再計算

単年生作物栽培農地への転用に伴うバイオマスの増加及び、単年生作物栽培農地から他の土地利用への転用に伴うバイオマスの損失について、今次提出より算定に含めることとした。これに伴いAR、D及びCM下の水田・普通畑における生体バイオマスの炭素ストック変化量が再計算された。

■ 牧草地からの転用に伴う生体バイオマスの損失量の新規算定に伴う再計算

牧草地から他の土地への転用に伴う生体バイオマスの損失量を新規に算定に含むこととした。これに伴い、AR、D及びGMの生体バイオマスの炭素ストック変化量が再計算された。

■ 転用に伴う生体バイオマスの損失量の報告箇所の変更に伴う再計算

今までRV下で算定されていた転用に伴う生体バイオマスの損失量を転用前の土地利用下で算定することと整理した。これに伴い、RV、CM、GMの生体バイオマスの炭素ストック変化量が再計算された。

■ HWP算定に利用している活動量データ及びパラメータの更新

2017年度の木材需給統計の更新に伴い、2017年度値が再計算された。

解体国産材率と解体原単位についても計算式を修正したため、アウトフローが全年にわたり再計算された。また、解体材国産材率の変更に伴い、木質ボードのインフローも全年にわたり再計算された。この修正に伴い、HWPプールの炭素ストック変化量が再計算された。

■ HWPの参照レベルの修正

HWPの参照レベルについて2008～2012年のD面積平均からD由来のインフローを予測し控除している。そのため、D面積の修正及び上述のHWP算定の活動量及びパラメータの修正

に伴い、2013年度～2017年度のHWPの参照レベルの再計算を行った。

11.5.1.8. 不確実性評価

京都議定書第3条3及び4の活動に伴う2018年度の排出・吸収量の不確実性は-15%～+15%となった。

不確実性評価において用いたLULUCF関係の個別不確実性は、第6章及び第11章の関連箇所を参照のこと。特に、京都議定書第3条3及び4のそれぞれの活動におけるGHG排出・吸収量の算定に用いた排出係数及び活動量の細分化された不確実性の情報については、以下の表11-39から表11-43を参照のこと。

表 11-39 京都議定書第3条3及び4の活動に伴う不確実性評価結果

活動種類	GHGs	排出・吸収量 [kt CO ₂ eq.]	排出・吸収量の 不確実性 [%]		各区分の不確実性が純吸 収量に占める割合 [%]	
			(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]
3条3項の活動 新規植林および再植林	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	-1,442	-35%	35%	-1%	1%
3条3項の活動 森林減少	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	1,605	-23%	23%	-1%	1%
3条4項の活動 (人為的吸収源活動) 森林経営	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	-45,361	-14%	14%	-15%	15%
3条4項の活動 (人為的吸収源活動) 農地管理	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	3,721	-40%	40%	-3%	3%
3条4項の活動 (人為的吸収源活動) 牧草地管理	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	-209	-22%	22%	0%	0%
3条4項の活動 (人為的吸収源活動) 植生回復	CO ₂ , N ₂ O, CH ₄	-1,322	-33%	33%	-1%	1%
合計		-43,008	-15%	15%		

11.5.1.8.a. 新規植林・再植林活動に伴う排出・吸収量の不確実性

AR活動に起因する生体バイオマスの排出・吸収量に関する不確実性は、AR面積の判読精度(活動量)と森林における生体バイオマスの炭素ストック変化の計算の不確実性、及び土地転用前の炭素ストック量の不確実性を踏まえてTier 1の誤差伝播式を用いて推計した。リター、枯死木、土壌の排出・吸収量に関する不確実性は、CENTURY-jfosモデルにてモンテカルロ法を適用して推計した。その結果、AR活動に伴う2018年度の排出・吸収量の不確実性は-35%～+35%となった。

表 11-40 新規植林・再植林活動における不確実性評価結果

活動種類	GHGs	排出・吸収量 [kt CO ₂ eq.]	活動量 不確実性 [%]		排出・吸収係数 の不確実性 [%]		排出・吸収量 不確実性 [%]		各区分の不確実性が排出量/吸収 量に占める割合 [%]		
			(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	
3条3項の活動	各炭素プールにおける変化										
新規植林 および 再植林	地上バイオマス	CO ₂	-848.64	-12%	12%	-43%	43%	-45%	45%	-33%	33%
	地下バイオマス	CO ₂	-217.61	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
	リター	CO ₂	-274.62	-	-	-	-	-51%	51%	-10%	10%
	枯死木	CO ₂	-66.64	-	-	-	-	-22%	22%	-1%	1%
	土壌	CO ₂	-34.42	-	-	-	-	-20%	20%	0%	0%
	伐採木材製品	CO ₂	NO	-	-	-	-	-	-	-	-
	温室効果ガスの排出源										
	施肥	N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
	有機質土壌排水	N ₂ O	NO	-	-	-	-	-	-	-	-
	土壌有機質の無機化	N ₂ O	NA	-	-	-	-	-	-	-	-
バイオマス燃焼	CO ₂	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
	CH ₄	0.01	-	-	-	-	-51%	51%	0%	0%	
	N ₂ O	0.001	-	-	-	-	-53%	53%	0%	0%	
合計		-1,441.91					-35%	35%			

11.5.1.8.b. 森林減少活動に伴う排出・吸収量の不確実性

D活動に起因する生体バイオマスの排出・吸収量の不確実性もAR活動と同様に、D面積の判読精度、森林における生体バイオマスの炭素ストック変化量、転用後の土地におけるバイオマス成長量の不確実性を踏まえてTier 1の誤差伝播式を用いて推計した。リター、枯死木、土壌の排出・吸収量に関する不確実性は、CENTURY-jfosモデルにてモンテカルロ法を適用して推計した。その結果、D活動に伴う2018年度の排出・吸収量の不確実性は-23%～+23%となった。

表 11-41 森林減少活動における不確実性評価結果

活動種類	GHGs	排出・吸収量 [kt CO ₂ eq.]	活動量 不確実性 [%]		排出・吸収係数 の不確実性 [%]		排出・吸収量 不確実性 [%]		各区分の不確実性 が排出量/吸収 量に占める割合 [%]			
			(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]		
3条3項の活動	各炭素プールにおける変化											
森林減少	地上バイオマス	CO ₂	850.49	-12%	12%	-26%	26%	-28%	28%	-19%	19%	
	地下バイオマス	CO ₂	208.91	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
	リター	CO ₂	395.10	-	-	-	-	-51%	51%	-13%	13%	
	枯死木	CO ₂	161.98	-	-	-	-	-22%	22%	-2%	2%	
	鉱質土壌	CO ₂	-14.46	-	-	-	-	-20%	20%	0%	0%	
	有機質土壌	CO ₂	2.43	-1%	1%	-90%	90%	-90%	90%	0%	0%	
	伐採木材製品	CO ₂	IO	-	-	-	-	-	-	-	-	
	温室効果ガスの排出源											
		施肥	N ₂ O	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE
		森林管理による土壌排水	CH ₄	0.52	-	-	-	-	-71%	71%	0%	0%
	土壌有機質の無機化	N ₂ O	0.27	-	-	-	-	-75%	202%	0%	0%	
	間接排出(土壌無機化)	N ₂ O	0.06	-	-	-	-	-119%	288%	0%	0%	
	バイオマス燃焼	CO ₂	NO	-	-	-	-	-	-	-	-	
		CH ₄	NO	-	-	-	-	-	-	-	-	
		N ₂ O	NO	-	-	-	-	-	-	-	-	
	合計		1,605.29					-23%	23%			

11.5.1.8.c. 森林経営活動に伴う排出・吸収量の不確実性

FM活動に起因する生体バイオマスの排出・吸収量の不確実性は、森林面積データとFM率、及び森林における生体バイオマスの炭素ストック変化量の不確実性を踏まえてTier 1の誤差伝播式を用いて推計した。リター、枯死木、土壌の排出・吸収量に関する不確実性は、CENTURY-jfosモデルにてモンテカルロ法を適用して推計した。その結果、FM活動に伴う2018年度の排出・吸収量の不確実性は-14%～+14%となった。

表 11-42 森林経営活動における不確実性評価結果

活動種類	GHGs	排出・吸収量 [kt CO ₂ eq.]	活動量 不確実性 [%]		排出・吸収係数 の不確実性 [%]		排出・吸収量 不確実性 [%]		各区分の不確実性 が排出量/吸収 量に占める割合 [%]			
			(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]		
3条4項の活動	各炭素プールにおける変化											
森林経営	地上バイオマス	CO ₂	-35,184.14	-12%	12%	-8%	8%	-14%	14%	-14%	14%	
	地下バイオマス	CO ₂	-8,931.71	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
	リター	CO ₂	2,074.22	-	-	-	-	-51%	51%	-2%	2%	
	枯死木	CO ₂	-151.00	-	-	-	-	-22%	22%	0%	0%	
	土壌	CO ₂	-1,210.13	-	-	-	-	-20%	20%	-1%	1%	
	伐採木材製品	CO ₂	-2,062.00	-	-	-	-	-30%	30%	-1%	1%	
	温室効果ガスの排出源											
		施肥	N ₂ O	0.51	-	-	-	-	-31%	31%	0%	0%
		森林管理による土壌排水	N ₂ O	NO	-	-	-	-	-	-	-	-
		土壌有機質の無機化	N ₂ O	82.67	-	-	-	-	-75%	202%	0%	0%
	間接排出(施肥)	N ₂ O	0.27	-	-	-	-	-143%	493%	0%	0%	
	間接排出(土壌無機化)	N ₂ O	18.60	-	-	-	-	-119%	288%	0%	0%	
	バイオマス燃焼	CO ₂	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
		CH ₄	1.65	-	-	-	-	-29%	29%	0%	0%	
		N ₂ O	0.14	-	-	-	-	-32%	32%	0%	0%	
	合計		-45,360.92					-14%	14%			

11.5.1.8.d. 農地管理活動に伴う排出・吸収量の不確実性

樹園地の生体バイオマスに関する活動量及びパラメータの不確実性については、統計データの不確実性及び2006年IPCCガイドラインのデフォルト不確実性を利用する。鉍質土壌に関する不確実性は、モデルの構造に起因する不確実性については、入力値及び土壌炭素の実測値がそろっている圃場試験におけるモデルと実測の比較により、約10%程度の不確実性があることが明らかになっている。モデルの入力値に起因する不確実性については、まだ定量化されておらず、今後の課題である。有機質土壌に関する不確実性については、統計データの不確実性、及び湿地ガイドラインのデフォルト不確実性を利用する。その結果、農地管理活動に伴う排出・吸収量の不確実性は、-40%~+40%と評価された。

11.5.1.8.e. 牧草地管理活動に伴う排出・吸収量の不確実性

鉍質土壌に関する不確実性は、農地管理と同様であるため、記述を省略する。有機質土壌に関する活動量及びパラメータの不確実性は、統計データの不確実性、及び湿地ガイドラインのデフォルト不確実性を利用した。その結果、牧草地管理活動に伴う排出・吸収量の不確実性は-22%~+22%と評価された。

11.5.1.8.f. 植生回復活動に伴う排出・吸収量の不確実性

植生回復活動に起因する排出・吸収量の不確実性は、8つの下位区分の炭素ストック変化量算定のプロセスに従って推計した。最初に、炭素ストック変化量の算定に用いた各パラメータ、活動量（面積や高木本数）の不確実性を合成して、8つの下位区分の各炭素プール（生体バイオマス・リター・土壌）の不確実性を求めた。次に、下位区分毎の炭素ストック変化量を踏まえて誤差伝播式で合成をすることで、RV活動に起因する排出・吸収量の全体の不確実性を推計した。その結果、RV活動に伴う2018年度の排出・吸収量の不確実性は-33%~+33%となった。

表 11-43 植生回復活動における不確実性評価結果

活動種類	GHGs	排出・吸収量 [kt CO ₂ eq.]	活動量 不確実性 [%]		排出・吸収係数 の不確実性 [%]		排出・吸収量 不確実性 [%]		各区分の不確実性 が排出量/吸収 量に占める割合 [%]		
			(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	(-) [%]	(+) [%]	
			3条4項の活動	各炭素プールにおける変化							
植生回復	地上バイオマス	CO ₂	-800.34	-	-	-	-	-42%	42%	-32%	32%
	地下バイオマス	CO ₂	-208.09	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
	リター	CO ₂	-14.17	-	-	-	-	-61%	61%	-1%	1%
	枯死木	CO ₂	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	IE	
	土壌	CO ₂	-299.62	-	-	-	-	-38%	38%	-9%	9%
	合計		-1,322.21					-33%	33%		

11.5.1.9. その他の方法論（自然撓乱等²¹による影響に対する対処方法等）

11.5.1.9.a. 新規植林・再植林及び森林減少活動

自然撓乱等の影響は、計画区につき5年毎に行われる森林簿の更新時にまとめて資源状況に反映される。

11.5.1.9.b. 森林経営活動

自然撓乱等の影響は、計画区につき5年毎に行われる森林簿の更新時にまとめて資源状況

²¹ 火災、風害、虫害、干害、洪水、着氷害など。

に反映される。

11.5.1.9.c. 植生回復活動

RVにおいて変動の大きい自然攪乱としては、風水害、病虫害が考えられる。しかし、RVに該当する土地は全て、行政等による人為的な管理下にあり、また、主に開発地に立地する特性からも、高木の消失や土壌の流出等が生じた場合、安全性や景観上の観点から、事業予算の計上等により、早急な復旧措置が施されるケースが多い。

以上のことから、炭素ストックやその成長量は、見かけ上ほとんど変化しないものとし、算定方法に反映していない。なお、復旧措置は、災害の当該年内に実施されない場合もあるが、災害復旧による炭素ストック量の増加は、今回報告する炭素プールの炭素ストック変化量には含まれないことから、ダブルカウントになることは無い。

11.5.1.10. 活動の開始年

今回提出のインベントリでは、第3条3活動、第3条4活動及び選択された第3条4活動が2018年度までに開始された土地すべてが算定の対象となっている。なお、2018年度に活動が開始された土地の排出・吸収量は、2017年度の算定結果には含まれていない。各活動の該当面積は以下の通り。

表 11-44 新規植林・再植林活動、森林減少活動、森林経営活動の面積

活動面積	新規植林・再植林活動 [kha]	森林減少活動 [kha]	森林経営活動 [kha]		
			育成林	天然生林	計
1990～2018年度	105.8	323.0	8,898.8	7,047.6	15,946.4
(うち2018年度)	—	6.2	—	—	—

表 11-45 植生回復活動面積

区分	都市公園 [ha]	道路緑地 [ha]	港湾緑地 [ha]	下水道処理施設における外構緑地 [ha]	緑化施設整備計画認定緑地 [ha]
1990年度	3,743	1,623	198	44	0
1990～2018年度	59,982	21,039	1,867	666	6
(うち2018年度)	1,032	-269	17	12	0
区分	河川・砂防緑地 [ha]	官庁施設外構緑地 [ha]	公的賃貸住宅内緑地 [ha]	計 [ha]	
1990年度	58	13	248	5,926	
1990～2018年度	1,747	320	2,964	88,591	
(うち2018年度)	11	2	22	828	

11.6. 京都議定書第3条3の活動について

11.6.1. 1990年1月1日以降に人為的活動が実施されたことを示す情報

我が国では、1989年末の空中写真オルソ画像と直近の衛星画像を用いて1990年1月1日以降の森林被覆の変化を読み取ることで、AR及びD対象地を判断している。その際、人為性の有無を判読することにより、ARと自然遷移による森林回復とを区別している。ARの人

為性の有無は、画像判読の際に、同じ樹種・同じ樹高の植林が確認できるか、人工的な区画であるか、植林のための作業道が認められるか等により判断している。

11.6.2. 伐採及び攪乱に伴う一時的なストック減少と森林減少を区別する方法

我が国では、森林から他の土地利用への転用は、当該地が森林計画から除外されるかどうかによって決まる。したがって、たとえ森林が伐採を受けても、その土地が森林計画対象のままであれば、Dではなく一時的なバイオマスストックの減少となり、森林簿上、森林以外の土地利用に転用されるDとは区別される。

我が国では、Dについては空中写真・衛星画像の判読により把握しているが、その際、地形の改変や人工構造物の構築等が認められる場合や農地等の明らかに森林以外の土地利用に変化している場合をDと判断することにより、森林施業の一環としての皆伐のような一時的なバイオマスストックの減少とは区別している。

D対象地と判断されたプロットについては、毎年、いくつかの県で現地サンプル調査を行っている。平均的なD対象地の判読精度は約90%である。

伐採や攪乱により一時的に森林被覆がなくなっているが、Dには分類されず、森林簿上で伐採跡地として分類されている森林の全国合計面積（2018年）は、約9万5千haである。

なお、森林法に基づく制度により伐採後から植栽までの期間は、概ね2年以内とされており、また、天然更新の場合は、概ね5年以内とされている。

11.7. 京都議定書第3条4の活動について

11.7.1. 1990年1月1日以降に人為的活動が実施されたことを示す情報

11.7.1.1. 森林経営活動

2007年度以降、全国の育成林についてサンプリング調査を行い、現地調査、森林組合等への聴き取り、造林補助事業に関する行政文書等に基づき、1990年1月1日以降のFM活動の有無を調査している。調査結果はFM率の算出根拠として用いている。

天然生林については、11.4.2.4.a.b)節にて詳述した措置は1990年1月1日以降も継続的に適用されている。

11.7.1.2. 農地管理活動

農地については、全て、肥培管理など的人為的な管理活動が行われている土地であり、1990年1月1日以降に人為的活動が行われている土地である。

11.7.1.3. 牧草地管理活動

草地のうち、牧草地については、肥培管理等の人為的な管理活動が行われている土地であり、1990年1月1日以降に人為的活動が行われている土地である。

11.7.1.4. 植生回復活動

RV活動においては、以下の根拠に基づき1990年以降に人為的活動が実施されたことを証明する。

表 11-46 RV活動が1990年1月1日以降に行われた人為的活動であることを示す情報

施設緑地	1990年1月1日以降の活動の抽出と人為的活動であることを示す情報
都市公園	<p>【1990年1月1日以降の活動の抽出】 国土交通省が毎年実施している「都市公園等整備現況調査」において、都市公園の「告示年」を把握し、告示年が1990年1月1日以降のもののみを報告対象としている。なお、告示の前に施設が完成している場合があるが、あくまで、告示により都市公園法に基づく都市公園と位置付けられた年から、RV活動が開始されたこととしている。</p> <p>【人為的活動であることの証明】 都市公園の活動量（高木本数）の算定には、パラメータとして単位面積当たりの高木本数（本/ha）を用いている。当該パラメータは、現地における毎木調査または植栽平面図から人為的に植栽された高木のみを抽出して設定することで、人為的活動であることを担保している。</p>
道路緑地	<p>【1990年1月1日以降の活動の抽出】 国土交通省が5年に1回実施（2007年度以降は毎年実施）している「道路緑化樹木現況調査」において、植栽された高木本数のデータを用いて、内挿・外挿により1990年度以降の活動量を推定している。</p> <p>【人為的活動であることの証明】 活動量（高木本数）の算定において、「道路緑化樹木現況調査」では「人為的に植栽された高木」を対象に本数を計測しており、これにより人為的活動であることを担保している。</p>
港湾緑地	<p>【1990年1月1日以降の活動の抽出】 2006年度より国土交通省が毎年実施している全数調査において、1990年以降に供用された港湾緑地について、個別施設の供用年度、開設面積を把握している。</p> <p>【人為的活動であることの証明】 活動量（高木本数）の算定には、人為的活動のみを抽出して設定している都市公園のパラメータを用いて算定している。</p>
下水道処理施設における外構緑地	<p>【1990年1月1日以降の活動の抽出】 2006年度より国土交通省が毎年実施している「下水処理場・ポンプ場における吸収源対策に関する実態調査」において、1990年以降に供用された下水道処理施設における外構緑地について、個別施設の供用年度、緑化面積を把握している。</p> <p>【人為的活動であることの証明】 活動量（高木本数）の算定には、パラメータとして単位面積当たりの高木本数（本/ha）を用いている。当該パラメータは、人為的に植栽された高木のみを対象として設定することにより人為的活動であることを担保している。</p>
緑化施設整備計画認定緑地	<p>【1990年1月1日以降の活動の抽出】 認定制度の開始が平成13年度であることから、全ての施設が1990年1月1日以降に実施されている。一部、既存の緑化施設（高木等）が含まれる施設もあるが、これらはRV活動の対象外としている。</p> <p>【人為的活動であることの証明】 緑化施設整備計画認定緑地内の緑地は、全て人為的に整備されたものである。</p>
河川・砂防緑地	<p>【1990年1月1日以降の活動の抽出】 2007年度より国土交通省が実施している「河川における二酸化炭素吸収源調査」において、1990年以降に竣工した河川事業及び砂防事業を対象に、個別施設の名称、所在地、竣工年、植栽面積（投影面積）、高木植栽本数を把握している。</p> <p>【人為的活動であることの証明】 活動量（高木本数）の算定には、パラメータとして単位面積当たりの高木本数（本/ha）を用いている。当該パラメータは、人為的な植栽が行われている事業のみ対象として設定することにより、人為的活動であることを担保している。</p>
官庁施設外構緑地	<p>【1990年1月1日以降の活動の抽出】 2007年度より国土交通省が実施している全数調査において、1990年以降に竣工した官庁施設を対象に、個別施設の名称、所在地、竣工年、敷地面積、建築面積を把握している。</p>

施設緑地	1990年1月1日以降の活動の抽出と人為的活動であることを示す情報
官庁施設外構 緑地 (つづき)	【人為的活動であることの証明】 活動量(高木本数)の算定には、パラメータとして単位面積当たりの高木本数(本/ha)を用いている。当該パラメータは、植栽平面図から人為的に植栽された高木のみを抽出して設定することにより、人為的活動であることを担保している。
公的賃貸住宅 地内緑地	【1990年1月1日以降の活動の抽出】 2007年度より国土交通省が実施している「公的賃貸住宅緑地整備現況調査」において、1990年以降に竣工した公的賃貸住宅を対象に、個別施設の名称、所在地、竣工年、敷地面積、建築面積を把握している。 【人為的活動であることの証明】 活動量(高木本数)の算定には、パラメータとして単位面積当たりの高木本数(本/ha)を用いている。当該パラメータは、植栽平面図から人為的に植栽された高木のみを抽出して設定することにより、人為的活動であることを担保している。

11.7.2. 基準年及び約束期間の農地管理活動、牧草地管理活動、植生回復活動に関する情報

基準年のCM、GM、及びRV活動による排出・吸収量は、1990年内に行われた活動の結果として生ずる1990年排出・吸収量を抽出して報告する。1990年にCM、GM、及びRV活動が実施された土地は、直接的にデータを切り出して把握している。約束期間の各年のCM、GM、RV活動の排出・吸収量は、その年にCM、GM、RV対象地で生ずる排出・吸収量を計上している。データや方法論は11.4.2.5～11.4.2.7、11.5.1.1.d～11.5.1.1.f節の通り。これらの排出・吸収量は設定された地理的境界に応じて報告している。

11.7.3. 第3条4活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由

11.7.3.1. 森林経営活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由

11.4.2.2節で説明している通り、我が国ではまずAR、Dの排出・吸収量を算定し、その後管理森林の排出・吸収量よりAR及びDによる排出・吸収量を差し引いたデータを用いてFMの排出・吸収量を算定している(図11-1参照)。即ち、土地区分システムとしてAR、DがFMより上位にあり、FMによる排出・吸収量がAR、Dに計上されることはない。

11.7.3.2. 農地管理活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由

11.3.2.2節のCMの定義及び11.4.2.5節のCM面積の把握方法で記載している通り、ARには該当しない場所がCMの対象地である。また、農地のうちDに該当する土地はCM対象の土地から除外している。

11.7.3.3. 牧草地管理活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由

11.3.2.3節のGMの定義及び11.4.2.6節のGM面積の把握方法で記載している通り、ARには該当しない場所がGMの対象地である。また、牧草地のうちDに該当する土地はGM対象の土地から除外している。

11.7.3.4. 植生回復活動の排出・吸収量が第3条3活動で計上されていない理由

11.3.2.4節のRVの定義で記載している通り、我が国ではそもそもARに該当しない場所がRVの対象地である。従って、RVの排出・吸収量がARの下で計上されることは原理的に起こりえない。

D活動に該当しなければRVとなった土地は、CRF表4(KP-I)A.2.1でその面積を報告している。11.5.1.1.b節のDの算定方法、11.5.1.1.f節のRVの算定方法で説明を行っているように、このような場所は活動定義としてDに区分しておりRVの対象とはならないため、該当地の排出・吸収量は全てDの下で報告している。従って、RVとDの排出・吸収量の報告において重複計上は発生しておらず、RVの排出・吸収量がDの下で計上されることはない。

11.7.4. 天然林の人工林転換について

天然林の人工林転換は、そのような活動が生じた場合、FM対象の施業としてカウントされてFMの計上対象となることから、当該排出はFM算定に全て含まれている。

11.7.5. 森林経営参照レベル（一貫性）について

森林経営の計上において、我が国では森林経営参照レベル（FMRL）をゼロと設定したが、5つの炭素プール及びGHG排出の算定、及び自然攪乱の取り扱いにおいてFMRLと実際の算定との間で、方法論の一貫性は確保されている。HWPについて、下記の方法を用いて参照レベルが設定されており、技術的調整として報告されている。

■ HWPの参照レベルの設定

HWP参照レベルの設定については、サブカテゴリー別に2012年までの推移を基に将来予測した値を使用した。将来予測にあたっては、建築物の着工床面積、木質ボードの生産量については、1993年から2012年までの直近20年間、建築物の解体床面積、製材の生産量、紙製品の生産量については、2003年から2012年までの直近10年間の推移を平均または直線近似し、2013年から2020年の期間の予測値とした。また、国産材率については、2003年から2012年までの直近10年間の平均値を採用した。2013年から2020年までの森林減少に由来するHWPインフローは、2008年から2012年までの森林減少面積の平均を2013年から2020年までの森林減少面積として、参照レベルから除外している。

11.7.6. 森林経営参照レベル（技術的調整）について

森林経営におけるHWP計上において技術的調整分を提示した。

11.7.7. 等価森林ルールについて

森林経営における等価森林ルールは我が国では適用しない。

11.8. その他の情報

11.8.1. キーカテゴリー分析結果

2013年京都議定書補足的方法論ガイダンス2.3.6節、及び2006年IPCCガイドライン第1巻4.3.3節を踏まえ、以下の条件を満たす活動を京都議定書の下でのキーカテゴリーとする。

- ・ 条約の下でのキーカテゴリー（以下、条約キーカテゴリー）に対応する活動
- ・ Tier 1 レベルアセスメントにおける最も排出・吸収量が小さい条約キーカテゴリーよりも排出・吸収量が大きい活動。

■ 条約キーカテゴリーとの対応

2018年度の条約インベントリにおいてキーカテゴリーに該当するLULUCF分野の排出・吸収区分は以下の通りである。別添1を参照のこと。

- ・ 4.A.1. 転用のない森林（CO₂）
- ・ 4.A.2. 他の土地利用から転用された森林（CO₂）
- ・ 4.B.1. 転用のない農地（CO₂）
- ・ 4.E.2. 他の土地利用から転用された開発地（CO₂）
- ・ 4.G. 伐採木材製品の利用（CO₂）

2013年京都議定書補足的方法論ガイダンスによると、上記の排出・吸収区分がキーカテゴリーに該当する場合、我が国が報告を行う活動のうち、AR、D、FM、CM、RVが京都議定書の下でのキーカテゴリーに該当する可能性がある。

表 11-47 条約の下でのカテゴリーと議定書の下での活動の関係

条約の下での排出・吸収区分	議定書の下での活動
4.A.1. 転用のない森林	FM
4.A.2. 他の土地利用から転用された森林	AR
4.B.1. 転用のない農地	CM
4.B.2. 他の土地利用から転用された農地	D
4.C.1. 転用のない草地	GM
4.C.2. 他の土地利用から転用された草地	D
4.D.1. 転用のない湿地	—
4.D.2. 他の土地利用から転用された湿地	D
4.E.1. 転用のない開発地	RV
4.E.2. 他の土地利用から転用された開発地	D、RV
4.F.1. 転用のないその他の土地	—
4.F.2. 他の土地利用から転用されたその他の土地	D
4.G. 伐採木材製品の利用	FM

(注) 2013年京都議定書補足的方法論ガイダンス Table 2.1.1 及び我が国が報告する各活動の定義に基づいて作成。条約の下でのキーカテゴリーを網掛で表示。

■ 条約キーカテゴリーの排出・吸収量との比較

2018年度の Approach 1 レベルアセスメントによる条約キーカテゴリーのうち、最も排出・吸収量が少ない区分は「2. C. 1 鉄鋼製造：CO₂」であった。当該区分と各活動の排出・吸収量を比較した結果、FM活動のみが上回った。

以上の分析の結果、2018年度はAR、D、FM、CM、RV活動（何れもCO₂）がキーカテゴリーに該当することとなった。

11.8.2. 今後の検討課題

京都議定書第3条3及び4活動に関係する検討課題は、我が国で実施されている算定方法検討会において、網羅的に把握しており、毎年内容の検討や審査の結果を受け適宜更新を行っている。本報告書の第6章に記載している条約インベントリ LULUCF分野の検討課題については、京都議定書第3条3及び4活動に影響するものも多く、条約インベントリと議定書インベントリの両者について、一体的に検討を行っている。第3条3及び4活動に関する主な課題については以下の様な事項を把握しており、適宜改善を進める予定である。

- ・ 土地転用が起こった際の土壌炭素ストック変化の算定方法及びデータについて、土地転用に伴う管理行為の変化をより適切に反映できるように改善することを検討する。
- ・ RV活動の樹木個体当たりの年間生体バイオマス成長量について、今後も我が国独自の樹種別の年間生体バイオマス成長量に関する新しい知見が得られた際には精度向上を行っていく予定である。
- ・ 都市公園、港湾緑地以外のRV活動の土壌の炭素ストック変化量を「排出源ではないことから報告の対象としない」としているが、引き続き基礎知見の収集を行い、土壌の炭素動態を明らかにするとともに、排出・吸収量の算定方法の検討を行う。
- ・ KP-LULUCF活動に関する不確実性の値について、日本は現在、可能な限り細分化された不確実性値を第11章第11.5.1.8節で示し、かつ第6章の各カテゴリーの記述の個所でも補足的な情報を提供している。現在のNIRで示している不確実性よりさらに詳細な情報を体系的に提示する方法については、長期的課題として取り組んでいく予定である。

11.9. 京都議定書第6条に関する情報

我が国では、京都議定書第6条に基づくプロジェクトを実施していないため、当該プロジェクトを受けた土地を含む地理的境界の表示方法は設定していない。

11.10. 決定2/CMP.8 附属書IIの報告状況

決定2/CMP.8 附属書IIにおいて各国に要求されている京都議定書第3条3及び4活動の報告要素について、我が国は表11-48にて内容を報告している。

表 11-48 決定 2/CMP.8 附属書IIの報告要素の参照先

決定 2/CMP.8 による議定書補足情報の報告要件	パラグラフ	NIR 第 11 章中の主な情報提示先
2013 年京都議定書補足的方法論ガイダンスと決定 16/CMP.1 をどの様に考慮してインベントリの方法論を適用したかに関する情報	2 (a)	各節にて詳細を提示
地理的境界に関する情報	2 (b)	11.4.2、11.4.3
第 3 条 3 活動を受ける土地単位	2 (b) (i)	11.4.2、11.4.3
第 3 条 3 活動を受けなければ、第 3 条 4 活動に含まれた土地単位	2 (b) (ii)	11.4.2、11.4.3 及び CRF シート 4(KP-I)A.2.1
第 3 条 4 活動を受けた土地	2 (b) (iii)	11.4.2、11.4.3
ARD 活動を計上する面積を決定するための空間評価単位に関する情報	2 (c)	11.4.1
第 3 条 3、第 3 条 4 の LULUCF 活動の GHG 排出・吸収量		
排出源からの排出と吸収源からの吸収が明確に、附属書 A 排出源から区別されていることの情報	1	11.5.1 の方法論を参照のこと
現在及び以前の年において報告された全ての地理的位置における排出・吸収量を報告していることの情報	2 (d)	11.4.2.3、11.4.2.4、11.4.2.5、11.4.2.6、11.4.2.7
約束期間の開始、もしくは活動の開始のどちらか遅い方から、第 3 条 3 及び第 3 条 4 活動による排出・吸収量を報告していることの情報	2 (d)	11.5.1.10
計上から除外しているプールに関する情報	2 (e)	11.5.1.2
自然攪乱の排出除外ルールに関する情報	2 (f)	11.5.1.3
伐採木材製品に関する情報	2 (g)	11.5.1.4
HWP の推計に用いた、国産材由来生産、国内消費分、輸出分の活動量の情報	2(g)(i)	11.5.1.4
FOD 法を使った場合の半減期の情報	2(g)(ii)	11.5.1.4
FM 参照レベルが予測で作成された場合に、第 2 約束期間前に生産された HWP を算定に含めているかの情報	2(g)(iii)	11.5.1.4
第 2 約束期間の算定で、第 1 約束期間に即時排出で計上された HWP がどのように除外されているかの情報	2(g)(iv)	11.5.1.4
森林減少由来の HWP は即時排出で計上していることを示す情報	2(g)(v)	11.5.1.4
SWDS やエネルギー利用された HWP からの排出は即時排出扱いとするかの情報	2(g)(vi)	11.5.1.4
計上された HWP の変化による排出・吸収に、輸入材が含まれていない情報	2(g)(vii)	11.5.1.4
間接及び自然要因の分離（ファクタリングアウト）に関する情報	3	11.5.1.5
第 3 条 3 活動に特有な報告情報		
第 3 条 3 活動が 1990 年 1 月 1 日以降から約束期間最終年の 12 月 31 日までに開始されたことに関する情報	4 (a)	11.6.1
伐採及び攪乱に伴う一時的なストック減少と森林減少を区別する方法の情報	4 (b)	11.6.2
第 3 条 4 活動に特有な報告情報		
第 3 条 4 活動が 1990 年以降に開始され、それが人為的であることの情報	5 (a)	11.7.1
CM、GM、RV について、地理的境界にて報告される約束期間の各年及び基準年の排出・吸収量の情報	5 (b)	11.4.2.5、11.4.2.6、11.4.2.7、11.5.1.1.d、11.5.1.1.e、11.5.1.1.f、11.7.2
第 3 条 4 活動の排出・吸収量が第 3 条 3 活動で計上されていないことに関する情報	5 (c)	11.7.3
天然林の人工林転換に関する情報	5 (d)	11.7.4
森林経営参照レベル（一貫性）について	5 (e)	11.7.5
森林経営参照レベル（技術的調整）について	5 (f)	11.7.6
等価森林ルールについて	5 (g)	11.7.7

参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」(2006)
2. IPCC「2006年IPCCガイドラインに対する2013年追補：湿地」(2014)
3. IPCC「2013年京都議定書補足的方法論ガイダンス」(2014)
4. FAO「世界森林資源評価国別報告書2005」(2006)
5. UNFCCC, *Land use, land-use change and forestry*, (Decision 16/CMP.1), (FCCC/KP/CMP/2005/8/Add.3), (2006)
6. UNFCCC, “*Land use, Land-use changes and forestry*”, (Decision 2/CMP.7), (FCCC/KP/CMP/2011/10/Add.1), (2012)
7. UNFCCC, *Implications of the implementation of decisions 2/CMP.7 to 5/CMP.7 on the previous decisions on methodological issues related to the Kyoto Protocol, including those relating to Articles 5, 7 and 8 of the Kyoto Protocol (Decision 2/CMP.8)*, (FCCC/KP/CMP/2012/13/Add.1), (2013)
8. UNFCCC, *Guidance for reporting information on activities under Article 3, paragraphs 3 and 4, of the Kyoto Protocol (Decision 6/CMP.9)*, (FCCC/KP/CMP/2013/9/Add.1), (2014)
9. UNFCCC, *Implications of the implementation of decisions 2/CMP.7 to 4/CMP.7 and 1/CMP.8 on the previous decisions on methodological issues related to the Kyoto Protocol, including those relating to Articles 5, 7 and 8 of the Kyoto Protocol (Decision 3/CMP.11)*, (2015) (FCCC/KP/CMP/2015/8/Add.1)
10. 国土交通省「道路の植栽高木に関する基礎調査データ収集調査」
11. 国土交通省「道路緑化樹木現況調査」
12. 国土交通省「下水処理場・ポンプ場における吸収源対策に関する実態調査」
13. 国土交通省「河川における二酸化炭素吸収源調査」
14. 国土交通省「公的賃貸住宅緑地整備現況調査」
15. 国土交通省「都市公園等整備現況把握調査」
16. 国土交通省「都市緑化施策の実績調査」
17. 国土交通省公園緑地課「平成16年度地球温暖化防止に資する都市緑地効果把握技術に関する調査」(2005)
18. 国土交通省都市局公園緑地・景観課「都市緑化等による温室効果ガス吸収源対策等の次期枠組への対応方針等検討調査」(2014)
19. 国土交通省都市局公園緑地・景観課「平成26年度都市緑化等による温室効果ガス吸収源対策の推進等に関する調査」(2015)
20. 国土交通省国土技術政策総合研究所「国土技術政策総合研究所資料 No.506 わが国の街路樹VI」(2009)
21. 農林水産省「2000年世界農林業センサス」(2000)
22. 農林水産省「耕地及び作付面積統計」
23. 農林水産省「農地の移動と転用」
24. 林野庁「国家森林資源データベース」
25. 林野庁「森林・林業統計要覧」
26. 林野庁「平成29年度森林吸収源インベントリ情報整備事業(衛星画像等による土地利用変化状況調査)報告書」(2018)
27. 林野庁「平成30年度森林吸収源インベントリ情報整備事業(衛星画像等による土地利用変化状況調査)報告書」(2019)
28. Coleman, K. & Jenkinson D. S., “*Roth C-26.3 - A model for the turnover of carbon in soil. In Evaluation of Soil Organic Matter Models: Using Existing Long-Term Datasets*”, Ed. D. S. Powlson, P. Smith & J.

- U. Smith, p. 237-246, Springer, Berlin, (1996)
29. 白戸康人、「日本およびタイの農耕地における土壌有機物動態モデルの検証と改良」、農業環境技術研究所報告 24 号、p. 23-94、(2006)
 30. Sakai, H., Hashimoto, S., Ishizuka, S., Kaneko, S. & Takahashi, M., “*Estimation of the effect of forest management on the carbon stocks in Japanese planted forests using CENTURY-jfos: a modified CENTURY model.*”, The International Forestry Review,12(5):31-32(Forests for the Future: Sustaining Society and the Environment XXIII IUFRO World Congress, Republic of Korea Abstracts), (2010)
 31. Shirato, Y. & Taniyama, I., “*Testing the suitability of the Rothamsted Carbon model for long-term experiments on Japanese non-volcanic upland soils*”, Soil Science and Plant Nutrition, 49(6). 921-925, (2003)
 32. Shirato, Y., Hakamata, T. & Taniyama, I., “*Modified rothamsted carbon model for andosols and its validation: changing humus decomposition rate constant with pyrophosphate-extractable Al*”, Soil Science and Plant Nutrition, 50(1). 149-158, (2004)
 33. Shirato, Y. & Yokozawa, M., “*Applying the Rothamsted Carbon Model for Long-Term Experiments on Japanese Pddy Soils and Modifying It by Simple Tuning of the Decomposition Rate*”, Soil Science and Plant Nutrition, 51(3). 405-415, (2005)
 34. Shirato, Y., Yagasaki, Y. & Nishida, M., “*Using different versions of the Rothamsted Carbon Model to simulate soil carbon in long-term experimental plots subjected to paddy-upland rotation in Japan*”, Soil Science and Plant Nutrition, 57, 597-606, (2011)
 35. Takata, Y., Ito, T., Ohkura, T., Obara, H., Kohyama, K. & Shirato, Y., “*Phosphate adsorption coefficient can improve the validity of Roth C model for Andosols*”, Soil Science and Plant Nutrition, 57, 421-428, (2011)
 36. Tonosaki, K., Murayama, K., Imai, K. & Nagino, Y., “*Estimation of Soil Carbon Accumulation Rate in Urban Parks*”, Journal of the Japanese Society of Revegetation Technology, Vol. 38 (3), 373-380, (2013)
 37. 林真智、堀修二、栗屋善雄、松本光朗、家原敏郎、「京都議定書 3 条 3 項の下における ARD 把握手法の評価」写真測量とリモートセンシング 47 (3)、48-58 (2008)
 38. 半田真理子、外崎公知、今井一隆、後藤伸一「植生回復地における土壌及びリターに関する炭素固定量の把握に向けた研究について」都市緑化技術 69、18-22 (2008)
 39. 波多野隆介「草地飼料畑の管理実態調査事業」平成 28 年度日本中央競馬会畜産振興事業報告書 (2017)
 40. 松江正彦、長濱庸介、飯塚康雄、村田みゆき、藤原宣夫「日本における都市樹木の CO₂ 固定量算定式」、日本緑化工学会 35 (2)、318-324 (2009)
 41. Yagasaki, Y. & Shirato, Y., “*Assessment on the rates and potentials of soil organic carbon sequestration in agricultural lands in Japan using a process-based model and spatially explicit land-use change inventories –Part 1: Historical trend and validation based on nation-wide soil monitoring*”, Biogeosciences, 11, 4429-4442, doi:10.5194/bg-11-4429-2014, (2014)

第12章 京都ユニットの計上に関する情報

決定15/CMP.1の附属書パラグラフ10及び決定3/CMP.11のパラグラフ14の規定に基づき、我が国の京都ユニット（ERUs、CERs、ICERs、tCERs、AAUs、RMUs）1の保有及び移転の状況について報告する。なお、報告に際しては、決定15/CMP.1の附属書パラグラフ11の規定に基づき、決定14/CMP.1の附属書で定義された標準電子様式(Standard electronic format: SEF)を用いている。

SEFは本報告書とは別に、「RREG1_JP_2019_1_1.xlsx」というファイル名で条約事務局に提出されている。

12.1. SEFで報告されている情報のまとめ

我が国の国別登録簿に保有されている京都ユニットに関する情報については、決定14/CMP.1に基づき本報告書とともに提出されている「RREG1_JP_2019_1_1.xlsx」ファイルを参照のこと。

また、「RREG1_JP_2019_2_1.xlsx」ファイルの提出を行っている。

12.2. 不一致及び通知

我が国の国別登録簿について、決定15/CMP.1附属書パラグラフ12-17の規定において報告すべき不一致その他の事象は以下の通り。

表 12-1 不一致その他の事象

報告項目	変更点の記述
決定15/CMP.1、附属書I、パラ12 不一致	不一致トランザクションはなかった。
決定15/CMP.1、附属書I、パラ13 CDM理事会から受けた通知	結果的な排出によるICERの補填に関する国際取引ログ(International transaction log、ITL)通知はなかった。
決定15/CMP.1、附属書I、パラ14 Failure of certification	認証報告書未提出のためのICERの補填に関するITL通知はなかった。
決定15/CMP.1、附属書I、パラ15 List of non-replacements	移転記録に未実施と確認された補填の記録はなかった。
決定15/CMP.1、附属書I、パラ16 不当な京都ユニット	遵守に用いることができない不当なユニットはなかった。
決定15/CMP.1、附属書I、パラ17 是正策が必要と判断された不一致	是正策が必要と判断された不一致トランザクションはなかった。

12.3. 公開情報

「割当量に関する報告書」の第2部IVの通り、ユーザーが国別登録簿へアクセスすることにより入手できる公開情報のリストは以下の通りである。

- 決定13/CMP.1附属書パラグラフ45に規定されている口座情報

¹ 京都ユニットには、共同実施(JI)プロジェクトからのクレジット(emission reduction units、ERUs)、クリーン開発メカニズム(CDM)プロジェクトからのクレジット(certified emission reductions、CERs)、新規植林・再植林CDMプロジェクトからのクレジット(temporary certified emission reductions、tCERs、long-term certified emission reductions、ICERs)、割当量単位(assigned amount units、AAUs)、附属書I国内における吸収源活動からのクレジット(removal units、RMUs)がある。

- 決定 13/CMP.1 附属書パラグラフ 46 に規定されている 6 条プロジェクトインフォメーション
- 決定 13/CMP.1 附属書パラグラフ 47 に規定されている京都ユニットに関する情報
- 決定 13/CMP.1 附属書パラグラフ 48 に規定されている法人組織情報
- 決定 13/CMP.1 附属書パラグラフ 49(b)に規定されている追加期間終了時点の償却済みのクレジット情報
- 決定 13/CMP.1 附属書パラグラフ 49(c)に規定されている CP 2 クレジットへの付け替え（繰越し）申請をするクレジット情報

いずれの情報も、国別登録簿ホームページの「公開情報」ページにて提供されている

- 国別登録簿の URL : http://www.registry.go.jp/index_e.html
- 公開情報ページ : http://www.registry.go.jp/public_info_en.html

以下の情報については、機密保持の懸念があるため公開されていない。

- 個別の口座レベルにおけるユニット保有量
- 我が国の国別登録簿がユニットを移転した際の移転先口座、及び我が国の国別登録簿がユニットを取得した際の取得元口座

なお、可読性の向上のために、ユニットに関する情報はそれぞれのシリアル番号と関連付けられていない。

12.4. 約束期間リザーブの計算

日本は第 2 約束期間に参加していないため、約束期間リザーブはない。

第13章 国内制度の変更に関する情報

UNFCCC インベントリ報告ガイドラインパラグラフ 50 (J) 及び決定 15/CMP.1 の附属書パラグラフ 21 の規定に基づき、我が国の国内制度について、前回のインベントリ提出からの変更点を報告する。

- インベントリ作成責任機関の名称が「低炭素社会推進室」から「脱炭素社会移行推進室」に変更された。

第14章 国別登録簿の変更に関する情報

決定15/CMP.1の附属書パラグラフ22及び決定3/CMP.11のパラグラフ14の規定に基づき、我が国の国別登録簿について、前回のインベントリ提出からの変更点を報告する。

14.1. 2019年において我が国の国別登録簿でなされた変更点の概要

表 14-1 2019年において我が国の国別登録簿でなされた変更点

報告項目	変更点の記述
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(a) 登録簿管理者の名前又は連絡先の変更	変更なし
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(b) 協力構造の変更	変更なし
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(c) 国別登録簿のデータベース又はキャパシティの変更	変更なし
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(d) 技術的基準の確保に関する変更	変更なし
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(e) 不一致を最小化するための手続の変更	変更なし
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(f) 安全対策の変更	変更なし
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(g) 公開情報リストの変更	ユニット保有量及び取引の情報は、決定14/CMP.1で定義されているように、標準電子様式 (Standard Electronic Format: SEF) に基づいて公に入手できるようになっている。2019年4月に2018年分の情報を公開した。 以下の情報は機密保持の懸念があるため公開されていない。 - 個別の口座レベルにおけるユニット保有量 - 我が国の国別登録簿がユニットを移転した際の移転先口座、及び我が国の国別登録簿がユニットを取得した際の取得元口座 なお、可読性の向上のために、ユニットに関する情報はそれぞれのシリアル番号と関連付けられていない。
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(h) インターネットアドレスの変更	変更なし
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(i) データ保存の完全性を確保する手段の変更	変更なし
決定15/CMP.1、附属書II、パラ32.(j) テスト結果の変更	変更なし

14.2. 我が国の国別登録簿になされた変更に関する参考情報

以下の項目を実施した。国際取引ログ（the International Transaction Log: 以下、ITL）や他の登録簿の機能に影響は無かった。

- 2019年2月、ITLのデータセンター移行に伴い、ファイアウォールとネットワーク機器の設定変更を実施した。
- 2019年3月、Webサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年3月、DNSサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年3月、ネットワーク機器のセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年3月、ファイアウォールの更改を実施した。
- 2019年4月、メールサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年4月、DNSサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年4月、ファイアウォールのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年4月、京都ユニット保有量及び実施されたトランザクションについての公開情報を、2018年のSEFをもとに更新した。決定13/CMP.1附属書にて公に入手可能にするよう要請されている以下の情報については、主に機密保持の懸念上の理由から公開されていない。（下記の括弧内のパラグラフ番号は、決定13/CMP.1附属書のものである）
 - 口座の代表者氏名（パラグラフ45(e)）
 - 情報公開対象のERU、CER、AAU及びRMUのクレジット特定番号（パラグラフ47）
 - 年始時点における口座毎のERU、CER、AAU及びRMUの総保有量（口座種別毎の総保有量のみ公表）（パラグラフ47(a)）
 - 期間中に我が国の国別登録簿が取得したERU、CER、AAU及びRMUの移転元口座番号（移転元登録簿のみ公表）（パラグラフ47(d)）
 - 期間中に我が国の国別登録簿から移転されたERU、CER、AAU及びRMUの移転先口座番号（移転先登録簿のみ公表）（パラグラフ47(g)）
 - 口座毎のERU、CER、AAU及びRMUの現在の保有量（口座種別毎の現在の保有量のみ公表）（パラグラフ47(l)）
- 2019年6月、メールサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年6月、DNSサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年6月、Webサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年6月、パスワード要件の強化を実施した。
- 2019年9月、ログインパスワード再発行申請書の追加を実施した。
- 2019年10月、DNSサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年10月、Webサーバのセキュリティアップデートを実施した。
- 2019年10月、ネットワーク機器のセキュリティアップデートを実施した。

第15章 第3条14に則った悪影響の最小化

決定15/CMP.1の附属書パラグラフ23～25及び決定1/CMP.11の附属書IIIパラグラフ4の規定に基づき、第3条14に則った悪影響の最小化について報告する。なお、前回提出時からの変更点は下線で示すとおり。

15.1. 概要

我が国は、京都議定書第3条14に則った悪影響を最小化するための取組が重要である点を考慮し、行動を実施している。一方、気候変動問題を解決するための対応措置の実施により発生する具体的な悪影響を正確に評価することは難しいという点は留意すべきである。例えば、原油価格の変動は、原油需給バランスやその他の様々な要因（原油先物市場の動向、景気変動等）によって引き起こされるものであり、気候変動対策と具体的な悪影響との因果関係及びその程度は 依然として不明確である。

また、気候変動問題を真に解決するためには対応措置について発想の転換が必要不可欠と考えられるところ、この点において、持続可能な成長が重要な一つの鍵となり得る。例えば、再生可能エネルギーの導入は、温室効果ガスの排出削減に貢献するとともに、エネルギーアクセスの向上や防災対策、新しい産業の開発を通じた雇用対策に資する側面もある ことを強調したい。

既に2019年のG20大阪首脳会合では、「環境と成長の好循環」というコンセプトの下、気候変動・エネルギー及び海洋プラスチックごみ対策といった喫緊の地球環境問題への対処においてイノベーションの活用的重要性について合意した。こうした低炭素社会の構築に向けた取組は今後全世界において加速されるべきである。そのような観点から、2015年、我が国は、COP21における合意達成を後押しすべく、①2020年における1.3兆円の途上国支援実施及び②イノベーションからなる「美しい星への行動(エース2.0(ACE2.0: Actions for Cool Earth 2.0))」を発表した。我が国は、引き続き、これらの分野で国際社会に積極的に貢献していく。

このような国際的な取組と呼応し、2019年6月、我が国は、パリ協定に基づく成長戦略としての長期戦略を閣議決定し、国連気候変動枠組条約事務局に提出した。同戦略では、①最終到達点としての「脱炭素社会」を野心的に今世紀後半のできるだけ早期に実現することを目指し、2050年までに80%の温室効果ガスの削減に大胆に取り組むこと、②ビジネス主導の非連続なイノベーションを通じた「環境と成長の好循環」の実現を目指すこと等を特記している。

15.2. 京都議定書第3条14に則った悪影響の最小化に関する行動

京都議定書第3条1に基づく約束を達成する際の開発途上締約国、特に条約第4条8及び9で規定されている開発途上締約国に対する社会的、環境的及び経済的な悪影響を最小化することが重要である点を考慮し、我が国は以下の取組を優先的に行っている。

なお、上述した悪影響の最小化に関する取組の評価方法は国際的に確立されていないため、その評価を行うことは不可能であることに留意すべき ことも補足する。

■ エネルギー・環境分野における技術協力等

我が国は、エネルギー・環境分野における技術協力の世界各国での実施を通じて、開発途

上国のニーズを踏まえた、持続的な経済成長への貢献を継続している。例えば、中東諸国を含む開発途上国への受入研修・専門家派遣による省エネ・再エネ人材育成協力を実施し、同諸国における省エネ・再エネ関連制度等の制度構築・運用に関する支援を行っている。また、特に気候変動に対して脆弱な島嶼国における再生可能エネルギー普及の観点から、国際再生可能エネルギー機関 (IRENA) との共催により、アジア太平洋地域等の島嶼国を対象として、気候ファイナンスへのアクセス支援を目的とした国際ワークショップ (2019年1月：モルデイク、11月：東京、宮古島) を実施し、人材育成とプロジェクト形成支援を行っている。

■ 二酸化炭素回収・貯留 (CCS) 技術の開発等

我が国では温暖化対策上重要な技術である CCS について、「東京電力の火力電源入札に関する関係局長級会議取りまとめ」や「エネルギー基本計画」、「パリ協定に基づく成長戦略としての長期戦略」等を踏まえて取り組む。とりわけ、我が国では温暖化対策上重要な技術である CCS について、2020年頃の技術の実用化を目指し、国内において大規模実証事業を実施するとともに、コストの大幅低減や安全性向上のための研究開発、CO₂分離回収に伴う環境負荷の評価、国内での貯留可能地点を特定するための地質調査等を実施している。また、欧州や米国など各国関係者と積極的に CCS に関する技術情報の交換を実施した。

別添（Annex）1 キーカテゴリー分析の詳細

A1.1. キーカテゴリー分析の概要

インベントリ報告ガイドライン¹では、2006年 IPCC ガイドラインを適用することとされており、同ガイドラインに示されたキーカテゴリー（key category）分析を行う必要がある。

ここでは、直近年（2018年度）及び条約の基準年（1990年度）のキーカテゴリー分析の結果を報告する。

A1.2. キーカテゴリー分析結果

A1.2.1. キーカテゴリー

2006年 IPCC ガイドラインの評価方法（アプローチ1のレベルアセスメント及びトレンドアセスメント、アプローチ2のレベルアセスメント及びトレンドアセスメント）に従って「キーカテゴリー」の評価を行った。

土地利用、土地利用変化及び林業（LULUCF）分野は、排出源分野のみの分析にてキーカテゴリーを評価した後、LULUCF 分野も含めた全体の分析を行い「キーカテゴリー」の評価を行った。

その結果、2018年度は46の排出・吸収区分が、また1990年度は40の排出・吸収区分がそれぞれ我が国のキーカテゴリーと同定された（表 A1-1 及び表 A1-2）。

¹ Revision of the UNFCCC reporting guidelines on annual inventories for Parties included in Annex I to the Convention (Decision 24/CP.19)

表 A 1-1 日本のキーカテゴリー (2018 年度)

A コード	B 区分	C 温室効果 ガス	Ap1-L	Ap1-T	Ap2-L	Ap2-T
#1	1.A.1. エネルギー産業	固体燃料	CO2	#1	#1	#1
#2	1.A.3. 運輸	b. 自動車	CO2	#2	#18	#3
#3	1.A.2. 製造業及び建設業	固体燃料	CO2	#3	#7	#2
#4	1.A.1. エネルギー産業	気体燃料	CO2	#4	#4	#6
#5	1.A.4. その他部門	液体燃料	CO2	#5	#5	#5
#6	1.A.1. エネルギー産業	液体燃料	CO2	#6	#2	#9
#7	4.A 森林	1. 転用のない森林	CO2	#7	#10	#4
#8	1.A.2. 製造業及び建設業	液体燃料	CO2	#8	#3	#11
#9	1.A.4. その他部門	気体燃料	CO2	#9	#8	#24
#10	2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	#10	#6	#10
#11	1.A.2. 製造業及び建設業	気体燃料	CO2	#11	#9	#29
#12	2.A 鉱物製品	1. セメント製造	CO2	#12	#12	#23
#13	3.C 稲作		CH4	#13		#28
#14	1.A.3. 運輸	d. 船舶	CO2	#14		
#15	1.A.3. 運輸	a. 航空機	CO2	#15	#22	
#16	5.C 廃棄物の焼却と野焼き		CO2	#16		#14
#17	1.A.2. 製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	#17	#20	#13
#18	1.A.4. その他部門	その他の燃料	CO2	#18		#15
#19	3.A 消化管内発酵		CH4	#19		#12
#20	1.A.4. その他部門	固体燃料	CO2	#20	#15	#28
#21	2.C 金属の生産	1. 鉄鋼製造	CO2	#21		
#22	3.B 家畜排せつ物の管理		N2O			#8
#23	3.D 農用地の土壌	1. 直接排出	N2O			#27
#24	4.B 農地	1. 転用のない農地	CO2		#17	#18
#25	5.A 固形廃棄物の処分		CH4	#16		#13
#26	2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	2. 発泡	HFCs		#25	#19
#27	2.B 化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO2			#16
#28	2.D 燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO2			#20
#29	1.A.1. エネルギー産業		N2O			#29
#30	4.G 伐採木材製品の利用		CO2			#23
#31	5.D 排水の処理と放出		N2O			#31
#32	2.E 電子産業		PFCs			#17
#33	3.D 農用地の土壌	2. 間接排出	N2O			#7
#34	間接CO2	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2			#30
#35	2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	PFCs		#24	
#36	1.A.3. 運輸	b. 自動車	N2O			#26
#37	5.C 廃棄物の焼却と野焼き		N2O			#22
#38	4.E 開発地	2. 他の土地利用から転用された開発地	CO2		#26	#21
#39	2.G その他の製品製造及び使用		SF6	#13	#21	#2
#40	4.A 森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	#19		#19
#41	1.B 燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH4	#21		#6
#42	2.E 電子産業		SF6			#25
#43	2.B 化学産業	4. カプロラクタム等製造	N2O			#11
#44	2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	HFCs	#11		
#45	2.B 化学産業	3. アジピン酸	N2O	#14		#20
#46	2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	SF6		#23	

(注) Ap1-L: アプローチ1のレベルアセスメント、Ap1-T: アプローチ1のトレンドアセスメント、
Ap2-L: アプローチ2のレベルアセスメント、Ap2-T: アプローチ2のトレンドアセスメント。
各アセスメント中の数値は、それぞれのアセスメント中の順位を表す。

表 A 1-2 日本のキーカテゴリー (1990 年度)

A コード	B 区分	C 温室効果 ガス	Ap1-L	Ap2-L
#1	1.A.2. 製造業及び建設業	固体燃料	CO2	#1
#2	1.A.3. 運輸	b. 自動車	CO2	#2
#3	1.A.1. エネルギー産業	液体燃料	CO2	#3
#4	1.A.2. 製造業及び建設業	液体燃料	CO2	#4
#5	1.A.4. その他部門	液体燃料	CO2	#5
#6	1.A.1. エネルギー産業	固体燃料	CO2	#6
#7	1.A.1. エネルギー産業	気体燃料	CO2	#7
#8	4.A 森林	1. 転用のない森林	CO2	#8
#9	2.A 鉱物製品	1. セメント製造	CO2	#9
#10	1.A.4. その他部門	気体燃料	CO2	#10
#11	2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	HFCs	#11
#12	1.A.3. 運輸	d. 船舶	CO2	#12
#13	3.C 稲作		CH4	#13
#14	5.C 廃棄物の焼却と野焼き		CO2	#14
#15	1.A.2. 製造業及び建設業	気体燃料	CO2	#15
#16	4.B 農地	1. 転用のない農地	CO2	#16
#17	5.A 固形廃棄物の処分		CH4	#17
#18	3.A 消化管内発酵		CH4	#18
#19	2.G その他の製品製造及び使用		SF6	#19
#20	2.C 金属の生産	1. 鉄鋼製造	CO2	#20
#21	2.B 化学産業	3. アジピン酸	N2O	#21
#22	1.A.3. 運輸	a. 航空機	CO2	#22
#23	1.A.4. その他部門	その他の燃料	CO2	#23
#24	4.A 森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	#24
#25	2.A 鉱物製品	2. 生石灰製造	CO2	#25
#26	1.B 燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH4	#26
#27	3.D 農用地の土壌	1. 直接排出	N2O	#27
#28	間接CO2	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2	#16
#29	4.E 開発地	2. 他の土地利用から転用された開発地	CO2	#29
#30	3.B 家畜排せつ物の管理		N2O	#11
#31	1.A.2. 製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	#31
#32	2.B 化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO2	#18
#33	1.A.3. 運輸	b. 自動車	N2O	#13
#34	3.D 農用地の土壌	2. 間接排出	N2O	#10
#35	5.D 排水の処理と放出		N2O	#28
#36	2.D 燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO2	#27
#37	2.B 化学産業	4. カプロラクタム等製造	N2O	#20
#38	2.E 電子産業		PFCs	#25
#39	5.C 廃棄物の焼却と野焼き		N2O	#26
#40	2.E 電子産業		SF6	#23

(注) Ap1-L : アプローチ 1 のレベルアセスメント、Ap2-L : アプローチ 2 のレベルアセスメント。

各アセスメント中の数値は、それぞれのアセスメント中の順位を表す。

A1.2.2. レベルアセスメント

レベルアセスメントは、カテゴリー毎の排出・吸収量が全体の排出・吸収量に占める割合を計算し、割合の大きなカテゴリーからそれぞれの割合を足し上げて、アプローチ 1 は全体の 95%、アプローチ 2 は全体の 90% に達するまでのカテゴリーを「キーカテゴリー」とするものである。アプローチ 1 による分析では各カテゴリーの排出・吸収量を直接使い、アプローチ 2 による分析では各カテゴリーの排出・吸収量にカテゴリー毎の不確実性を乗じたものを分析対象とする。

分析は、初めに、排出源分野のみを対象にした評価を行い、一度キーカテゴリーを決定する (1)。次に、吸収源分野 (LULUCF) を含めた全分野を対象にした評価を行い、そこで新たにキーと判断された吸収源分野のカテゴリーを追加して、全分野のキーカテゴリーを決定する (2)。分析 (1) でキーカテゴリーと同定されたが (2) では同定されなかった排出源については、キーカテゴリーと見なした。一方、分析 (1) でキーカテゴリーと同定されなかつ

たが (2) でキーと同定された排出源については、キーカテゴリーとは見なしていない (表中のグレーの行)。

2018 年度の排出・吸収量に対するレベルアセスメントの結果、アプローチ 1 レベルアセスメントでは 21 の排出・吸収区分が、またアプローチ 2 レベルアセスメントでは 31 の排出・吸収区分がそれぞれキーカテゴリーと同定された (表 A1-3 及び表 A1-4)。

表 A1-3 アプローチ 1 レベルアセスメントの結果 (2018 年度)

A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	F 最新年度の 排出・吸収量 [千t-CO ₂ 換算]	H Ap1-L	I Ap1-L 寄与度 [%]	累積 寄与度 [%]	
#1	1.A.1. エネルギー産業	固体燃料	CO2	258,379.86	0.197	19.7%	19.7%
#2	1.A.3. 運輸	b. 自動車	CO2	181,333.18	0.139	13.9%	33.6%
#3	1.A.2. 製造業及び建設業	固体燃料	CO2	170,034.48	0.130	13.0%	46.6%
#4	1.A.1. エネルギー産業	気体燃料	CO2	154,614.23	0.118	11.8%	58.4%
#5	1.A.4. その他部門	液体燃料	CO2	79,417.13	0.061	6.1%	64.5%
#6	1.A.1. エネルギー産業	液体燃料	CO2	59,469.86	0.045	4.5%	69.0%
#7	4.A 森林	1. 転用のない森林	CO2	-58,092.54	0.044	4.4%	73.5%
#8	1.A.2. 製造業及び建設業	液体燃料	CO2	50,819.48	0.039	3.9%	77.3%
#9	1.A.4. その他部門	気体燃料	CO2	44,269.23	0.034	3.4%	80.7%
#10	2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	43,179.50	0.033	3.3%	84.0%
#11	1.A.2. 製造業及び建設業	気体燃料	CO2	32,191.67	0.025	2.5%	86.5%
#12	2.A 鉱物製品	1. セメント製造	CO2	26,182.94	0.020	2.0%	88.5%
#13	3.C 稲作		CH4	13,560.65	0.010	1.0%	89.5%
#14	1.A.3. 運輸	d. 船舶	CO2	10,546.38	0.008	0.8%	90.3%
#15	1.A.3. 運輸	a. 航空機	CO2	10,536.16	0.008	0.8%	91.1%
#16	5.C 廃棄物の焼却と野焼き		CO2	10,238.78	0.008	0.8%	91.9%
#17	1.A.2. 製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	9,791.65	0.007	0.7%	92.7%
#18	1.A.4. その他部門	その他の燃料	CO2	8,224.13	0.006	0.6%	93.3%
#19	3.A 消化管内発酵		CH4	7,465.58	0.006	0.6%	93.9%
#20	1.A.4. その他部門	固体燃料	CO2	7,336.57	0.006	0.6%	94.4%
#21	2.C 金属の生産	1. 鉄鋼製造	CO2	5,712.42	0.004	0.4%	94.9%
#22	2.A 鉱物製品	2. 生石灰製造	CO2	5,663.34	0.004	0.4%	95.3%

(注) #22 は分析 (1) でキーカテゴリーと同定されなかったが分析 (2) でキーと同定された排出源であり、キーカテゴリーとは見なしていない。

表 A 1-4 アプローチ 2 レベルアセスメントの結果 (2018 年度)

	A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	F 最新年度の 排出・吸収量 [千t-CO ₂ 換算]	L 排出・吸収 源の不確実 性 [%]	N Ap2-L 寄与度 [%]	累積 寄与度 [%]	
#1	1.A.1.	エネルギー産業	固体燃料	CO2	258,379.86	6%	15.1%	15.1%
#2	1.A.2.	製造業及び建設業	固体燃料	CO2	170,034.48	6%	9.9%	25.1%
#3	1.A.3.	運輸	b. 自動車	CO2	181,333.18	5%	8.8%	33.9%
#4	4.A	森林	1. 転用のない森林	CO2	-58,092.54	13%	7.5%	41.4%
#5	1.A.4.	その他部門	液体燃料	CO2	79,417.13	5%	3.9%	45.3%
#6	1.A.1.	エネルギー産業	気体燃料	CO2	154,614.23	2%	3.8%	49.1%
#7	3.D	農用地の土壌	2. 間接排出	N2O	1,854.45	164%	3.1%	52.3%
#8	3.B	家畜排せつ物の管理		N2O	3,921.66	76%	3.1%	55.3%
#9	1.A.1.	エネルギー産業	液体燃料	CO2	59,469.86	5%	2.9%	58.2%
#10	2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	43,179.50	6%	2.9%	61.1%
#11	1.A.2.	製造業及び建設業	液体燃料	CO2	50,819.48	5%	2.5%	63.6%
#12	3.A	消化管内発酵		CH4	7,465.58	26%	2.0%	65.6%
#13	1.A.2.	製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	9,791.65	19%	1.9%	67.5%
#14	5.C	廃棄物の焼却と野焼き		CO2	10,238.78	16%	1.7%	69.2%
#15	1.A.4.	その他部門	その他の燃料	CO2	8,224.13	19%	1.6%	70.9%
#16	2.B	化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO2	2,762.17	55%	1.6%	72.4%
#17	2.E	電子産業		PFCs	1,855.03	81%	1.6%	74.0%
#18	4.B	農地	1. 転用のない農地	CO2	3,506.81	42%	1.5%	75.5%
#19	2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	2. 発泡	HFCs	2,921.97	50%	1.5%	77.0%
#20	2.D	燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO2	2,643.96	55%	1.5%	78.5%
#21	2.G	その他の製品製造及び使用		SF6	1,374.70	83%	1.2%	79.7%
#22	5.C	廃棄物の焼却と野焼き		N2O	1,429.22	79%	1.2%	80.9%
#23	2.A	鉱物製品	1. セメント製造	CO2	26,182.94	4%	1.1%	82.0%
#24	1.A.4.	その他部門	気体燃料	CO2	44,269.23	2%	1.1%	83.1%
#25	2.E	電子産業		SF6	349.02	300%	1.1%	84.2%
#26	1.A.3.	運輸	b. 自動車	N2O	1,441.90	72%	1.1%	85.3%
#27	3.D	農用地の土壌	1. 直接排出	N2O	3,557.23	26%	0.9%	86.2%
#28	3.C	稲作		CH4	13,560.65	6%	0.9%	87.1%
#29	1.A.2.	製造業及び建設業	気体燃料	CO2	32,191.67	2%	0.8%	87.9%
#30		間接CO2	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2	1,606.10	48%	0.8%	88.7%
#31	5.D	排水の処理と放出		N2O	1,983.24	38%	0.8%	89.4%
#32	5.A	固形廃棄物の処分		CH4	2,930.29	22%	0.7%	90.1%

(注) #32 は分析 (1) でキーカテゴリーと同定されなかったが分析 (2) でキーと同定された排出源であり、キーカテゴリーとは見なしていない。

1990 年度の排出・吸収量に対するレベルアセスメントの結果、アプローチ 1 レベルアセスメントでは 27 の排出・吸収区分が、またアプローチ 2 レベルアセスメントでは 32 の排出・吸収区分がそれぞれキーカテゴリーと同定された (表 A 1-5 及び表 A 1-6)。

表 A-1-5 アプローチ 1 レベルアセスメントの結果 (1990 年度)

A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	D 1990年度の 排出・吸収量 [千t-CO ₂ 換算]	H Ap1-L	I Ap1-L 寄与度 [%]	累積 寄与度 [%]	
#1	1.A.2. 製造業及び建設業	固体燃料	CO ₂	199,587.36	0.145	14.5%	14.5%
#2	1.A.3. 運輸	b. 自動車	CO ₂	179,212.93	0.130	13.0%	27.6%
#3	1.A.1. エネルギー産業	液体燃料	CO ₂	178,959.74	0.130	13.0%	40.6%
#4	1.A.2. 製造業及び建設業	液体燃料	CO ₂	134,022.54	0.097	9.7%	50.3%
#5	1.A.4. その他部門	液体燃料	CO ₂	130,347.42	0.095	9.5%	59.8%
#6	1.A.1. エネルギー産業	固体燃料	CO ₂	109,537.93	0.080	8.0%	67.8%
#7	1.A.1. エネルギー産業	気体燃料	CO ₂	80,030.95	0.058	5.8%	73.6%
#8	4.A. 森林	1. 転用のない森林	CO ₂	-72,385.80	0.053	5.3%	78.8%
#9	2.A. 鉱物製品	1. セメント製造	CO ₂	38,701.10	0.028	2.8%	81.7%
#10	1.A.4. その他部門	気体燃料	CO ₂	22,241.56	0.016	1.6%	83.3%
#11	2.B. 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	HFCs	15,930.24	0.012	1.2%	84.4%
#12	1.A.3. 運輸	d. 船舶	CO ₂	13,674.88	0.010	1.0%	85.4%
#13	3.C. 稲作		CH ₄	12,770.99	0.009	0.9%	86.4%
#14	5.C. 廃棄物の焼却と野焼き		CO ₂	12,429.49	0.009	0.9%	87.3%
#15	1.A.2. 製造業及び建設業	気体燃料	CO ₂	11,894.05	0.009	0.9%	88.1%
#16	4.B. 農地	1. 転用のない農地	CO ₂	10,098.26	0.007	0.7%	88.9%
#17	5.A. 固形廃棄物の処分		CH ₄	9,570.42	0.007	0.7%	89.6%
#18	3.A. 消化管内発酵		CH ₄	9,422.90	0.007	0.7%	90.2%
#19	2.G. その他の製品製造及び使用		SF ₆	8,814.04	0.006	0.6%	90.9%
#20	2.C. 金属の生産	1. 鉄鋼製造	CO ₂	7,244.20	0.005	0.5%	91.4%
#21	2.B. 化学産業	3. アジピン酸	N ₂ O	7,210.88	0.005	0.5%	91.9%
#22	1.A.3. 運輸	a. 航空機	CO ₂	7,162.41	0.005	0.5%	92.5%
#23	1.A.4. その他部門	その他の燃料	CO ₂	6,678.58	0.005	0.5%	92.9%
#24	4.A. 森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO ₂	-6,675.49	0.005	0.5%	93.4%
#25	2.A. 鉱物製品	2. 生石灰製造	CO ₂	6,674.45	0.005	0.5%	93.9%
#26	1.B. 燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH ₄	4,760.38	0.003	0.3%	94.3%
#27	3.D. 農用地の土壌	1. 直接排出	N ₂ O	4,701.08	0.003	0.3%	94.6%
#28	2.F. オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	PFCs	4,549.94	0.003	0.3%	94.9%
#29	間接CO ₂	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO ₂	4,454.80	0.003	0.3%	95.3%

(注) #28 及び#29 は分析 (1) でキーカテゴリーと同等されなかったが分析 (2) でキーと同等された排出源であり、キーカテゴリーとは見なしていない。

表 A-1-6 アプローチ 2 レベルアセスメントの結果 (1990 年度)

A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	D 1990年度の 排出・吸収量 [千t-CO ₂ 換算]	L 排出・吸収 源の不確 実性 [%]	N Ap2-L 寄与度 [%]	累積 寄与度 [%]	
#1	1.A.2. 製造業及び建設業	固体燃料	CO ₂	199,587.36	6%	9.5%	9.5%
#2	4.A. 森林	1. 転用のない森林	CO ₂	-72,385.80	13%	7.6%	17.1%
#3	1.A.3. 運輸	b. 自動車	CO ₂	179,212.93	5%	7.1%	24.2%
#4	1.A.1. エネルギー産業	液体燃料	CO ₂	178,959.74	5%	7.1%	31.3%
#5	2.G. その他の製品製造及び使用		SF ₆	8,814.04	83%	6.2%	37.5%
#6	1.A.2. 製造業及び建設業	液体燃料	CO ₂	134,022.54	5%	5.3%	42.8%
#7	1.A.1. エネルギー産業	固体燃料	CO ₂	109,537.93	6%	5.2%	48.0%
#8	1.A.4. その他部門	液体燃料	CO ₂	130,347.42	5%	5.2%	53.1%
#9	4.B. 農地	1. 転用のない農地	CO ₂	10,098.26	42%	3.6%	56.8%
#10	3.D. 農用地の土壌	2. 間接排出	N ₂ O	2,414.03	164%	3.3%	60.1%
#11	3.B. 家畜排せつ物の管理		N ₂ O	4,207.98	76%	2.7%	62.8%
#12	1.B. 燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH ₄	4,760.38	65%	2.6%	65.4%
#13	1.A.3. 運輸	b. 自動車	N ₂ O	3,457.24	72%	2.1%	67.5%
#14	3.A. 消化管内発酵		CH ₄	9,422.90	26%	2.1%	69.5%
#15	5.A. 固形廃棄物の処分		CH ₄	9,570.42	22%	1.8%	71.3%
#16	間接CO ₂	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO ₂	4,454.80	48%	1.8%	73.1%
#17	5.C. 廃棄物の焼却と野焼き		CO ₂	12,429.49	16%	1.7%	74.8%
#18	2.B. 化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO ₂	3,623.06	55%	1.7%	76.5%
#19	1.A.1. エネルギー産業	気体燃料	CO ₂	80,030.95	2%	1.6%	78.1%
#20	2.B. 化学産業	4. カプロラクタム等製造	N ₂ O	1,672.86	99%	1.4%	79.5%
#21	2.A. 鉱物製品	1. セメント製造	CO ₂	38,701.10	4%	1.3%	80.9%
#22	1.A.4. その他部門	その他の燃料	CO ₂	6,678.58	19%	1.1%	81.9%
#23	2.E. 電子産業		SF ₆	418.70	300%	1.1%	83.0%
#24	3.D. 農用地の土壌	1. 直接排出	N ₂ O	4,701.08	26%	1.0%	84.0%
#25	2.E. 電子産業		PFCs	1,454.78	81%	1.0%	85.0%
#26	5.C. 廃棄物の焼却と野焼き		N ₂ O	1,438.04	79%	1.0%	85.9%
#27	2.D. 燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO ₂	2,039.82	55%	0.9%	86.9%
#28	5.D. 排水の処理と放出		N ₂ O	2,387.11	38%	0.8%	87.7%
#29	4.E. 開発地	2. 他の土地利用から転用された開発地	CO ₂	4,251.07	21%	0.8%	88.4%
#30	4.A. 森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO ₂	-6,675.49	13%	0.7%	89.1%
#31	1.A.2. 製造業及び建設業	その他の燃料	CO ₂	4,199.02	19%	0.7%	89.8%
#32	3.C. 稲作		CH ₄	12,770.99	6%	0.7%	90.4%

A1.2.3. トレンドアセスメント

カテゴリーの排出・吸収量の変化率と全体の排出・吸収量の変化率の差を計算し、それに当該カテゴリーの排出・吸収寄与割合を乗じてトレンドアセスメントを算出し、さらにその数値の合計値に占める当該カテゴリーの割合が大きいカテゴリーから足し上げる。アプローチ1では全体の95%、アプローチ2は全体の90%に達するまでのカテゴリーを「キーカテゴリー」とする。アプローチ1による分析では各カテゴリーの排出・吸収量を直接用い、アプローチ2による分析では各カテゴリーの排出・吸収量にカテゴリー毎の不確実性を乗じたものを分析対象とする。

分析は、初めに、排出源分野のみを対象にした評価を行い、一度キーカテゴリーを決定する(1)。次に、吸収源分野(LULUCF)を含めた全分野を対象にした評価を行い、そこで新たにキーと判断された吸収源分野のカテゴリーを追加して、全分野のキーカテゴリーを決定する(2)。分析(1)でキーカテゴリーと同定されたが(2)では同定されなかった排出源については、キーカテゴリーと見なした。一方、分析(1)でキーカテゴリーと同定されなかったが(2)でキーと同定された排出源については、キーカテゴリーとは見なしていない(表中のグレーの行)。

2018年度の排出・吸収量に対するトレンドアセスメントの結果、アプローチ1トレンドアセスメントでは26の排出・吸収区分が、またアプローチ2トレンドアセスメントでは31の排出・吸収区分がそれぞれキーカテゴリーと同定された(表A1-7及び表A1-8)。

表A1-7 アプローチ1トレンドアセスメントの結果(2018年度)

A コード	B 区分	C 温室効果ガス	D 1990年度の 排出・吸収量 [千t-CO ₂ 換算]	F 最新年度の 排出・吸収量 [千t-CO ₂ 換算]	J Ap1-T	K Ap1-T 寄与度 [%]	累積 寄与度 [%]	
#1	1.A.1. エネルギー産業	固体燃料	CO2	109,537.93	258,379.86	0.110	20.5%	20.5%
#2	1.A.1. エネルギー産業	液体燃料	CO2	178,959.74	59,469.86	0.084	15.7%	36.2%
#3	1.A.2. 製造業及び建設業	液体燃料	CO2	134,022.54	50,819.48	0.058	10.9%	47.1%
#4	1.A.1. エネルギー産業	気体燃料	CO2	80,030.95	154,614.23	0.056	10.4%	57.5%
#5	1.A.4. その他部門	液体燃料	CO2	130,347.42	79,417.13	0.035	6.5%	64.0%
#6	2.F. オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	0.00	43,179.50	0.031	5.9%	69.8%
#7	1.A.2. 製造業及び建設業	固体燃料	CO2	199,587.36	170,034.48	0.018	3.4%	73.2%
#8	1.A.4. その他部門	気体燃料	CO2	22,241.56	44,269.23	0.016	3.1%	76.3%
#9	1.A.2. 製造業及び建設業	気体燃料	CO2	11,894.05	32,191.67	0.015	2.8%	79.1%
#10	4.A. 森林	1. 転用のない森林	CO2	-72,385.80	-58,092.54	0.012	2.2%	81.2%
#11	2.B. 化学産業	9. フッ化物製造(製造時の漏出)	HFCs	15,930.24	100.30	0.011	2.1%	83.3%
#12	2.A. 鉱物製品	1. セメント製造	CO2	38,701.10	26,182.94	0.008	1.6%	84.9%
#13	2.G. その他の製品製造及び使用		SF6	8,814.04	1,374.70	0.005	1.0%	85.9%
#14	2.B. 化学産業	3. アジピン酸	N2O	7,210.88	58.69	0.005	0.9%	86.9%
#15	1.A.4. その他部門	固体燃料	CO2	353.86	7,336.57	0.005	0.9%	87.8%
#16	5.A. 固形廃棄物の処分		CH4	9,570.42	2,930.29	0.005	0.9%	88.7%
#17	4.B. 農地	1. 転用のない農地	CO2	10,098.26	3,506.81	0.005	0.9%	89.5%
#18	1.A.3. 運輸	b. 自動車	CO2	179,212.93	181,333.18	0.004	0.8%	90.4%
#19	4.A. 森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	-6,675.49	-934.38	0.004	0.8%	91.2%
#20	1.A.2. 製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	4,199.02	9,791.65	0.004	0.8%	91.9%
#21	1.B. 燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH4	4,760.38	478.77	0.003	0.6%	92.5%
#22	1.A.3. 運輸	a. 航空機	CO2	7,162.41	10,536.16	0.003	0.5%	93.0%
#23	2.B. 化学産業	9. フッ化物製造(製造時の漏出)	SF6	3,470.78	45.55	0.002	0.5%	93.4%
#24	2.F. オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	PFCs	4,549.94	1,505.11	0.002	0.4%	93.8%
#25	2.F. オゾン層破壊物質の代替物質の使用	2. 発泡	HFCs	1.34	2,921.97	0.002	0.4%	94.2%
#26	1.A.3. 運輸	d. 船舶	CO2	13,674.88	10,546.38	0.002	0.4%	94.6%
#27	4.E. 開発地	2. 他の土地利用から転用された開発地	CO2	4,251.07	1,396.93	0.002	0.4%	95.0%
#28	間接CO2	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2	4,454.80	1,606.10	0.002	0.4%	95.4%

(注) #26及び#28は分析(1)でキーカテゴリーと同定されなかったが分析(2)でキーと同定された排出源であり、キーカテゴリーとは見なしていない。

表 A 1-8 アプローチ 2 トレンドアセスメントの結果 (2018 年度)

A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	D 1990年度の 排出・吸収量 [千t-CO ₂ 換算]	F 最新年度の 排出・吸収量 [千t-CO ₂ 換算]	L 排出・吸収 源の不確実 性 [%]	O Ap2-T	P Ap2-T 寄与度 [%]	累積 寄与度 [%]		
#1	1.A.1. エネルギー産業	固体燃料	CO2	109,537.93	258,379.86	6%	6.20	14.0%	14.0%	
#2	2.G. その他の製品製造及び使用	SF6	8,814.04	1,374.70	83%	4.37	9.9%	23.8%		
#3	1.A.1. エネルギー産業	液体燃料	CO2	178,959.74	59,469.86	5%	3.95	8.9%	32.7%	
#4	1.A.2. 製造業及び建設業	液体燃料	CO2	134,022.54	50,819.48	5%	2.74	6.2%	38.9%	
#5	2.F. オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	0.00	43,179.50	6%	2.01	4.5%	43.4%	
#6	1.B. 燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH4	4,760.38	478.77	65%	1.98	4.5%	47.9%	
#7	4.B. 農地	1. 転用のない農地	CO2	10,098.26	3,506.81	42%	1.96	4.4%	52.3%	
#8	1.A.4. その他部門	液体燃料	CO2	130,347.42	79,417.13	5%	1.64	3.7%	56.0%	
#9	4.A. 森林	1. 転用のない森林	CO2	-72,385.80	-58,092.54	13%	1.45	3.3%	59.3%	
#10	1.A.1. エネルギー産業	気体燃料	CO2	80,030.95	154,614.23	2%	1.32	3.0%	62.3%	
#11	2.B. 化学産業	4. カプロラクタム等製造	N2O	1,672.86	128.58	99%	1.08	2.4%	64.7%	
#12	2.F. オゾン層破壊物質の代替物質の使用	2. 発泡	HFCs	1.34	2,921.97	50%	1.06	2.4%	67.1%	
#13	5.A. 固形廃棄物の処分	CH4	9,570.42	2,930.29	22%	1.04	2.3%	69.4%		
#14	1.A.2. 製造業及び建設業	固体燃料	CO2	199,587.36	170,034.48	6%	1.03	2.3%	71.8%	
#15	1.A.3. 運輸	b. 自動車	N2O	3,457.24	1,441.90	72%	1.01	2.3%	74.0%	
#16		間接CO2	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2	4,454.80	1,606.10	48%	0.95	2.1%	76.2%
#17	1.A.2. 製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	4,199.02	9,791.65	19%	0.78	1.8%	77.9%	
#18	3.D. 農用地の土壌	2. 間接排出	N2O	2,414.03	1,854.45	164%	0.60	1.4%	79.3%	
#19	4.A. 森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	-6,675.49	-934.38	13%	0.54	1.2%	80.5%	
#20	2.B. 化学産業	3. アジピン酸	N2O	7,210.88	58.69	9%	0.47	1.1%	81.6%	
#21	4.E. 開墾地	2. 他の土地利用から転用された開墾地	CO2	4,251.07	1,396.93	21%	0.43	1.0%	82.5%	
#22	1.A.4. その他部門	気体燃料	CO2	22,241.56	44,269.23	2%	0.39	0.9%	83.4%	
#23	4.G. 伐採木材製品の利用	CO2	-369.89	-2,046.01	30%	0.36	0.8%	84.2%		
#24	1.A.2. 製造業及び建設業	気体燃料	CO2	11,894.05	32,191.67	2%	0.36	0.8%	85.0%	
#25	2.A. 鉱物製品	1. セメント製造	CO2	38,701.10	26,182.94	4%	0.35	0.8%	85.8%	
#26	3.A. 消化管内発酵	CH4	9,422.90	7,465.58	26%	0.33	0.7%	86.6%		
#27	2.B. 化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO2	3,623.06	2,762.17	55%	0.31	0.7%	87.3%	
#28	1.A.4. その他部門	固体燃料	CO2	353.86	7,336.57	6%	0.29	0.6%	87.9%	
#29	1.A.1. エネルギー産業	N2O	889.46	2,166.21	30%	0.28	0.6%	88.6%		
#30	2.D. 燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用	CO2	2,039.82	2,643.96	55%	0.26	0.6%	89.1%		
#31	2.E. 電子産業	PFCs	1,454.78	1,855.03	81%	0.25	0.6%	89.7%		
#32	1.A.4. その他部門	その他の燃料	CO2	6,678.58	8,224.13	19%	0.23	0.5%	90.2%	

(注) #32 は分析 (1) でキーカテゴリーと同定されなかったが分析 (2) でキーと同定された排出源であり、キーカテゴリーとは見なしていない。

参考までに、2018 年度及び 1990 年度のキーカテゴリー分析に用いた基礎データを表 A 1-9 及び表 A 1-10 に示す。

表 A 1-9 キーカテゴリー分析に用いた基礎データ (2018 年度)

A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	E 1990年度排 出・吸収量 対値(千t-CO ₂ 換算)	G 最新年度の排 出・吸収量 対値(千t-CO ₂ 換算)	H Ap1-L	I Ap1-L 寄与度 [%]	J Ap1-T	K Ap1-T 寄与度 [%]	L 排出・吸 収量の不 確実性 [%]	M Ap2-L	N Ap2-L 寄与度 [%]	O Ap2-T	P Ap2-T 寄与度 [%]	
I.A.1.	エネルギー産業	液体燃料	CO2	178,959.74	59,469.86	0.045	4.5%	0.0840	15.7%	5%	0.029	2.9%	3.95	8.9%
I.A.1.	エネルギー産業	固体燃料	CO2	109,537.93	258,379.86	0.197	19.7%	0.1100	20.5%	6%	0.151	15.1%	6.20	14.0%
I.A.1.	エネルギー産業	気体燃料	CO2	80,030.95	154,614.23	0.118	11.8%	0.0555	10.4%	2%	0.038	3.8%	1.32	3.0%
I.A.1.	エネルギー産業	その他の燃料	CO2	0.00	24.22	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	19%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.A.1.	エネルギー産業		CH4	459.35	199.60	0.000	0.0%	0.0002	0.0%	49%	0.001	0.1%	0.09	0.2%
I.A.1.	エネルギー産業		N2O	889.46	2,166.21	0.002	0.2%	0.0009	0.2%	30%	0.007	0.7%	0.28	0.6%
I.A.2.	製造業及び建設業	液体燃料	CO2	134,022.54	50,819.48	0.039	3.9%	0.0584	10.9%	5%	0.025	2.5%	2.74	6.2%
I.A.2.	製造業及び建設業	固体燃料	CO2	199,587.36	170,034.48	0.130	13.0%	0.0183	3.4%	6%	0.099	9.9%	1.03	2.3%
I.A.2.	製造業及び建設業	気体燃料	CO2	11,894.05	52,191.67	0.025	2.5%	0.0150	2.8%	2%	0.008	0.8%	0.36	0.8%
I.A.2.	製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	4,199.02	9,791.65	0.007	0.7%	0.0041	0.8%	19%	0.019	1.9%	0.78	1.8%
I.A.2.	製造業及び建設業		CH4	359.71	491.85	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	49%	0.003	0.3%	0.05	0.1%
I.A.2.	製造業及び建設業		N2O	1,258.65	1,599.73	0.001	0.1%	0.0003	0.1%	30%	0.005	0.5%	0.08	0.2%
I.A.3.	運輸	a. 航空機	CO2	7,162.41	10,536.16	0.008	0.8%	0.0026	0.5%	5%	0.005	0.5%	0.12	0.3%
I.A.3.	運輸	a. 航空機	CH4	5.64	1.50	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	79%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.A.3.	運輸	a. 航空機	N2O	64.02	91.96	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	110%	0.001	0.1%	0.02	0.1%
I.A.3.	運輸	b. 自動車	CO2	179,212.93	181,333.18	0.139	13.9%	0.0044	0.8%	5%	0.088	8.8%	0.21	0.5%
I.A.3.	運輸	b. 自動車	CH4	252.59	98.87	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	70%	0.001	0.1%	0.08	0.2%
I.A.3.	運輸	b. 自動車	N2O	3,457.24	1,441.90	0.001	0.1%	0.0014	0.3%	72%	0.011	1.1%	1.01	2.3%
I.A.3.	運輸	c. 鉄道	CO2	935.40	498.78	0.000	0.0%	0.0003	0.1%	5%	0.000	0.0%	0.01	0.0%
I.A.3.	運輸	c. 鉄道	CH4	1.34	0.70	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	105%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.A.3.	運輸	c. 鉄道	N2O	109.95	57.60	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	125%	0.001	0.1%	0.05	0.1%
I.A.3.	運輸	d. 船舶	CO2	13,674.88	10,546.38	0.008	0.8%	0.0021	0.4%	5%	0.005	0.5%	0.10	0.2%
I.A.3.	運輸	d. 船舶	CH4	31.73	23.48	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	52%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.A.3.	運輸	d. 船舶	N2O	108.07	79.96	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	91%	0.001	0.1%	0.02	0.0%
I.A.4.	その他部門	液体燃料	CO2	130,347.42	79,417.13	0.061	6.1%	0.0350	6.5%	5%	0.039	3.9%	1.64	3.7%
I.A.4.	その他部門	固体燃料	CO2	353.86	7,336.57	0.006	0.6%	0.0051	0.9%	6%	0.004	0.4%	0.29	0.6%
I.A.4.	その他部門	気体燃料	CO2	22,241.56	44,269.23	0.034	3.4%	0.0164	3.1%	2%	0.011	1.1%	0.39	0.9%
I.A.4.	その他部門	その他の燃料	CO2	6,678.58	8,224.13	0.006	0.6%	0.0012	0.2%	19%	0.016	1.6%	0.23	0.5%
I.A.4.	その他部門		CH4	239.23	197.98	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	49%	0.001	0.1%	0.01	0.0%
I.A.4.	その他部門		N2O	709.45	625.37	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	30%	0.002	0.2%	0.01	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	1. 固体燃料	CO2	5.32	0.44	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	68%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH4	4,760.38	478.77	0.000	0.0%	0.0030	0.6%	65%	0.003	0.3%	1.98	4.5%
I.B.	燃料からの漏出	2.a. 石油	CO2	0.03	0.02	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	89%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	2.a. 石油	CH4	25.37	18.17	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	69%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	2.b. 天然ガス	CO2	0.63	0.83	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	80%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	2.b. 天然ガス	CH4	174.24	232.11	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	73%	0.002	0.2%	0.03	0.1%
I.B.	燃料からの漏出	2.c. 通気弁及びフレアリング	CO2	81.17	242.33	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	14%	0.000	0.0%	0.02	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	2.c. 通気弁及びフレアリング	CH4	7.96	3.76	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	49%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	2.c. 通気弁及びフレアリング	N2O	0.11	0.07	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	32%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	2.d. その他(地熱)	CO2	104.42	169.99	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	17%	0.000	0.0%	0.01	0.0%
I.B.	燃料からの漏出	2.d. その他(地熱)	CH4	5.21	8.35	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	17%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.A	鉱物製品	1. セメント製造	CO2	38,701.10	26,182.94	0.020	2.0%	0.0085	1.6%	4%	0.011	1.1%	0.35	0.8%
2.A	鉱物製品	2. 生石灰製造	CO2	6,674.45	5,663.34	0.004	0.4%	0.0006	0.1%	4%	0.002	0.2%	0.02	0.1%
2.A	鉱物製品	3. ガラス製造	CO2	312.88	201.51	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	6%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.A	鉱物製品	4. その他プロセスにおける炭酸塩の使用	CO2	3,542.02	1,639.29	0.001	0.1%	0.0013	0.2%	6%	0.001	0.1%	0.08	0.2%
2.B	化学産業	1. アンモニア製造	CO2	3,417.74	1,457.96	0.001	0.1%	0.0014	0.3%	1%	0.000	0.0%	0.02	0.0%
2.B	化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO2	3,623.06	2,762.17	0.002	0.2%	0.0006	0.1%	55%	0.016	1.6%	0.31	0.7%
2.B	化学産業	2. 硝酸	N2O	736.06	318.48	0.000	0.0%	0.0003	0.1%	73%	0.002	0.2%	0.21	0.5%
2.B	化学産業	3. アジピン酸	N2O	7,210.88	58.69	0.000	0.0%	0.0051	0.9%	9%	0.000	0.0%	0.47	1.1%
2.B	化学産業	4. カプロラクタム等製造	N2O	1,672.86	128.58	0.000	0.0%	0.0011	0.2%	99%	0.001	0.1%	1.08	2.4%
2.B	化学産業	9. フッ化物製造(製造時の漏出)	HFCs	15,930.24	100.30	0.000	0.0%	0.0113	2.1%	2%	0.000	0.0%	0.23	0.5%
2.B	化学産業	9. フッ化物製造(製造時の漏出)	PFCs	330.92	87.38	0.000	0.0%	0.0002	0.0%	2%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.B	化学産業	9. フッ化物製造(製造時の漏出)	SF6	3,470.78	45.55	0.000	0.0%	0.0024	0.5%	2%	0.000	0.0%	0.05	0.1%
2.B	化学産業	9. フッ化物製造(製造時の漏出)	NF3	2.79	57.96	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	2%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.B	化学産業	化学産業全体	CH4	37.49	22.71	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	55%	0.000	0.0%	0.01	0.0%
2.C	金属の生産	1. 鉄鋼製造	CO2	7,244.20	5,712.42	0.004	0.4%	0.0010	0.2%	4%	0.002	0.2%	0.04	0.1%
2.C	金属の生産	1. 鉄鋼製造	CH4	18.42	14.94	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	163%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.C	金属の生産	2. フェアラロイ	CH4	4.63	2.85	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	163%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.C	金属の生産	3. アルミニウムの製造	PFCs	203.66	0.00	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	44%	0.000	0.0%	0.06	0.1%
2.C	金属の生産	4. マグネシウム等の鍛造	HFCs	0.00	1.72	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	5%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.C	金属の生産	4. マグネシウム等の鍛造	SF6	146.54	273.60	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	5%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.D	燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO2	2,039.82	2,643.96	0.002	0.2%	0.0005	0.1%	55%	0.015	1.5%	0.26	0.6%
2.E	電子産業		HFCs	0.73	113.15	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	100%	0.001	0.1%	0.08	0.2%
2.E	電子産業		PFCs	1,454.78	1,855.03	0.001	0.1%	0.0003	0.1%	81%	0.016	1.6%	0.25	0.6%
2.E	電子産業		SF6	418.70	349.02	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	300%	0.011	1.1%	0.13	0.3%
2.E	電子産業		NF3	29.82	224.53	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	71%	0.002	0.2%	0.10	0.2%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	0.00	43,179.50	0.033	3.3%	0.0314	5.9%	6%	0.029	2.9%	2.01	4.5%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	2. 発泡	HFCs	1.34	2,921.97	0.002	0.2%	0.0021	0.4%	50%	0.015	1.5%	1.06	2.4%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	3. 消火剤	HFCs	0.00	9.84	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	16%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	4. エアゾール	HFCs	0.00	543.92	0.000	0.0%	0.0004	0.1%	10%	0.001	0.1%	0.04	0.1%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	HFCs	0.00	117.27	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	11%	0.000	0.0%	0.01	0.0%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	PFCs	4,549.94	1,505.11	0.001	0.1%	0.0021	0.4%	10%	0.002	0.2%	0.21	0.5%
2.G	その他の製品製造及び使用		N2O	290.86	370.01	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	4%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.G	その他の製品製造及び使用		PFCs	0.00	39.27	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	10%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
2.G	その他の製品製造及び使用		SF6	8,814.04	1,374.70	0.001	0.1%	0.0053	1.0%	83%	0.012	1.2%	4.37	9.9%
2.H	その他	ドライアイスの利用	CO2	64.61	105.33	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	4%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
3.A	消化管内発酵		CH4	9,422.90	7,465.58	0.006	0.6%	0.0013	0.2%	6%	0.020	2.0%	0.33	0.7%
3.B	家畜排せつ物の管理		CH4	3,120.55	2,323.55	0.002	0.2%	0.0005	0.1%	17%	0.004	0.4%	0.09	0.2%
3.B	家畜排せつ物の管理		N2O	4,207.98	3,921.66	0.003	0.3%	0.0001	0.0%	76%	0.031	3.1%	0.11	0.2%
3.C	稲作		CH4	12,770.99	13,560.65	0.010	1.0%	0.0008	0.1%	6%	0.009	0.9%	0.05	0.1%
3.D	農用地の土壌	1. 直接排出	N2O	4,701.08	3,557.23	0.003	0.3%	0.0008	0.1%	26%	0.009	0.9%	0.19	0.4%
3.D	農用地の土壌	2. 間接排出	N2O	2,414.03	1,854.45	0.001	0.1%	0.0004	0.1%	164%	0.031	3.1%	0.60	1.4%
3.F	野外で農作物の残留物を焼くこと		CH4	127.03	63.39	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	296%	0.002	0.2%	0.13	0.3%
3.F	野外で農作物の残留物を焼くこと		N2O	39.26	19.59	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	300%	0.001	0.1%	0.04	0.1%
3.G	石灰施用		CO2	550.24	293.54	0.000	0.0%	0.0002	0.0%	50%	0.002	0.2%	0.09	0.2%
3.H	尿素施肥		CO2	58.64	192.81	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	50%	0.001	0.1%	0.05	0.1%

表 A 1-9 キーカテゴリー分析に用いた基礎データ (2018 年度) (つづき)

A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	E 1990年度排 出・吸収量 対値[千t-CO ₂ 換算]	G 最新年度の 排出・吸収量 絶対値[千t- CO ₂ 換算]	H Ap1-L	I Ap1-L 寄与度 [%]	J Ap1-T	K Ap1-T 寄与度 [%]	L 排出・吸収 源の不確実 性 [%]	M Ap2-L	N Ap2-L 寄与度 [%]	O Ap2-T	P Ap2-T 寄与度 [%]	
4.A	森林	1. 転用のない森林	CO2	72,385.80	58,092.54	0.044	4.4%	0.0116	2.2%	13%	0.075	7.5%	1.45	3.3%
4.A	森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	6,675.49	934.38	0.001	0.1%	0.0043	0.8%	13%	0.001	0.1%	0.54	1.2%
4.B	農地	1. 転用のない農地	CO2	10,098.26	3,506.81	0.003	0.3%	0.0046	0.9%	42%	0.015	1.5%	1.96	4.4%
4.B	農地	2. 他の土地利用から転用された農地	CO2	1,598.43	23.44	0.000	0.0%	0.0011	0.2%	18%	0.000	0.0%	0.20	0.5%
4.C	草地	1. 転用のない草地	CO2	881.36	333.17	0.000	0.0%	0.0009	0.2%	9%	0.000	0.0%	0.08	0.2%
4.C	草地	2. 他の土地利用から転用された草地	CO2	180.80	66.96	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	20%	0.000	0.0%	0.02	0.0%
4.D	湿地	1.2 転用のない泥炭地	CO2	0.00	0.00	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	21%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4.D	湿地	1.2 転用のない浸水地	CO2	0.00	0.00	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	21%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4.D	湿地	1.3 転用のないその他の湿地	CO2	0.00	0.00	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	21%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4.D	湿地	2. 他の土地利用から転用された湿地	CO2	90.51	17.30	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	21%	0.000	0.0%	0.01	0.0%
4.E	開発地	1. 転用のない開発地	CO2	1,386.01	1,423.79	0.001	0.1%	0.0000	0.0%	33%	0.005	0.5%	0.00	0.0%
4.E	開発地	2. 他の土地利用から転用された開発地	CO2	4,251.07	1,396.93	0.001	0.1%	0.0020	0.4%	21%	0.003	0.3%	0.43	1.0%
4.F	その他の土地	1. 転用のないその他の土地	CO2	0.00	0.00	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	20%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4.F	その他の土地	2. 他の土地利用から転用されたその他の土地	CO2	1,180.13	163.84	0.000	0.0%	0.0007	0.1%	20%	0.000	0.0%	0.14	0.3%
4.G	伐採木材製品の利用		CO2	369.89	2,046.01	0.002	0.2%	0.0012	0.2%	30%	0.006	0.6%	0.36	0.8%
4.H	その他 (開発地への転用時の有機質土壌)		CH4	13.90	6.18	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	71%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4.H	その他 (開発地への転用時の有機質土壌)		N2O	0.84	0.38	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	138%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4(I)	施肥に伴う直接N2O排出		N2O	0.84	0.51	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	31%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4(II)	土壌排水に伴う排出		CO2	0.00	0.00	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	0%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4(II)	土壌排水に伴う排出		CH4	38.23	37.46	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	71%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4(II)	土壌排水に伴う排出		N2O	0.00	0.00	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	0%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4(III)	土壌の無機化に伴う直接N2O排出		N2O	153.67	137.41	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	138%	0.002	0.2%	0.01	0.0%
4(IV)	管理土壌からの間接N2O排出		N2O	41.19	33.03	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	318%	0.001	0.1%	0.02	0.0%
4(V)	バイオマスの燃焼		CO2	0.00	0.00	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	0%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4(V)	バイオマスの燃焼		CH4	47.20	30.78	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	28%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
4(V)	バイオマスの燃焼		N2O	22.15	18.80	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	31%	0.000	0.0%	0.00	0.0%
5.A	固形廃棄物の処分		CH4	9,570.42	2,930.29	0.002	0.2%	0.0047	0.9%	22%	0.007	0.7%	1.04	2.3%
5.B	固形廃棄物の生物処理		CH4	53.99	88.99	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	84%	0.001	0.1%	0.02	0.0%
5.B	固形廃棄物の生物処理		N2O	180.77	296.03	0.000	0.0%	0.0001	0.0%	170%	0.005	0.5%	0.15	0.3%
5.C	廃棄物の焼却と野焼き		CO2	12,429.49	10,238.78	0.008	0.8%	0.0014	0.3%	16%	0.017	1.7%	0.23	0.5%
5.C	廃棄物の焼却と野焼き		CH4	27.78	10.28	0.000	0.0%	0.0000	0.0%	170%	0.000	0.0%	0.02	0.0%
5.C	廃棄物の焼却と野焼き		N2O	1,438.04	1,429.22	0.001	0.1%	0.0000	0.0%	79%	0.012	1.2%	0.01	0.0%
5.D	排水の処理と放出		CH4	2,941.55	1,616.54	0.001	0.1%	0.0009	0.2%	21%	0.004	0.4%	0.20	0.4%
5.D	排水の処理と放出		N2O	2,387.11	1,983.24	0.002	0.2%	0.0003	0.0%	38%	0.008	0.8%	0.10	0.2%
5.E	その他		CO2	702.83	673.34	0.001	0.1%	0.0000	0.0%	10%	0.001	0.1%	0.00	0.0%
		エネルギー分野由来	Ind CO2	1,027.51	456.92	0.000	0.0%	0.0004	0.1%	32%	0.002	0.2%	0.13	0.3%
		工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2	4,454.80	1,606.10	0.001	0.1%	0.0020	0.4%	48%	0.008	0.8%	0.95	2.1%
		合計 (LULUCF含む)		1,374,938.04	1,308,675.43	1.00	100.0%	0.54	100%		1.00	100.0%	44.4	100.0%

表 A 1-10 キーカテゴリー分析に用いた基礎データ (1990 年度)

A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	E 1990年度排出・ 吸収量絶対値 [千t-CO ₂ 換算]	H Ap1-L	I Ap1-L 寄与度 [%]	L 排出・吸収 源の不確実 性 [%]	M Ap2-L	N Ap2-L 寄与度 [%]	
1.A.1.	エネルギー産業	液体燃料	CO2	178,959.74	0.130	13.0%	5%	0.071	7.1%
1.A.1.	エネルギー産業	固体燃料	CO2	109,537.93	0.080	8.0%	6%	0.052	5.2%
1.A.1.	エネルギー産業	気体燃料	CO2	80,030.95	0.058	5.8%	2%	0.016	1.6%
1.A.1.	エネルギー産業	その他の燃料	CO2	0.00	0.000	0.0%	19%	0.000	0.0%
1.A.1.	エネルギー産業		CH4	459.35	0.000	0.0%	49%	0.002	0.2%
1.A.1.	エネルギー産業		N2O	889.46	0.001	0.1%	30%	0.002	0.2%
1.A.2.	製造業及び建設業	液体燃料	CO2	134,022.54	0.097	9.7%	5%	0.053	5.3%
1.A.2.	製造業及び建設業	固体燃料	CO2	199,587.36	0.145	14.5%	6%	0.095	9.5%
1.A.2.	製造業及び建設業	気体燃料	CO2	11,894.05	0.009	0.9%	2%	0.002	0.2%
1.A.2.	製造業及び建設業	その他の燃料	CO2	4,199.02	0.003	0.3%	19%	0.007	0.7%
1.A.2.	製造業及び建設業		CH4	359.71	0.000	0.0%	49%	0.001	0.1%
1.A.2.	製造業及び建設業		N2O	1,258.65	0.001	0.1%	30%	0.003	0.3%
1.A.3.	運輸	a. 航空機	CO2	7,162.41	0.005	0.5%	5%	0.003	0.3%
1.A.3.	運輸	a. 航空機	CH4	5.64	0.000	0.0%	79%	0.000	0.0%
1.A.3.	運輸	a. 航空機	N2O	64.02	0.000	0.0%	110%	0.001	0.1%
1.A.3.	運輸	b. 自動車	CO2	179,212.93	0.130	13.0%	5%	0.071	7.1%
1.A.3.	運輸	b. 自動車	CH4	252.59	0.000	0.0%	70%	0.001	0.1%
1.A.3.	運輸	b. 自動車	N2O	3,457.24	0.003	0.3%	72%	0.021	2.1%
1.A.3.	運輸	c. 鉄道	CO2	935.40	0.001	0.1%	5%	0.000	0.0%
1.A.3.	運輸	c. 鉄道	CH4	1.34	0.000	0.0%	105%	0.000	0.0%
1.A.3.	運輸	c. 鉄道	N2O	109.95	0.000	0.0%	125%	0.001	0.1%
1.A.3.	運輸	d. 船舶	CO2	13,674.88	0.010	1.0%	5%	0.005	0.5%
1.A.3.	運輸	d. 船舶	CH4	31.73	0.000	0.0%	52%	0.000	0.0%
1.A.3.	運輸	d. 船舶	N2O	108.07	0.000	0.0%	91%	0.001	0.1%
1.A.4.	その他部門	液体燃料	CO2	130,347.42	0.095	9.5%	5%	0.052	5.2%
1.A.4.	その他部門	固体燃料	CO2	353.86	0.000	0.0%	6%	0.000	0.0%
1.A.4.	その他部門	気体燃料	CO2	22,241.56	0.016	1.6%	2%	0.004	0.4%
1.A.4.	その他部門	その他の燃料	CO2	6,678.58	0.005	0.5%	19%	0.011	1.1%
1.A.4.	その他部門		CH4	239.23	0.000	0.0%	49%	0.001	0.1%
1.A.4.	その他部門		N2O	709.45	0.001	0.1%	30%	0.002	0.2%
1.B	燃料からの漏出	1. 固体燃料	CO2	5.32	0.000	0.0%	68%	0.000	0.0%
1.B	燃料からの漏出	1. 固体燃料	CH4	4,760.38	0.003	0.3%	65%	0.026	2.6%
1.B	燃料からの漏出	2.a. 石油	CO2	0.03	0.000	0.0%	89%	0.000	0.0%
1.B	燃料からの漏出	2.a. 石油	CH4	25.37	0.000	0.0%	69%	0.000	0.0%
1.B	燃料からの漏出	2.b. 天然ガス	CO2	0.63	0.000	0.0%	80%	0.000	0.0%
1.B	燃料からの漏出	2.b. 天然ガス	CH4	174.24	0.000	0.0%	73%	0.001	0.1%
1.B	燃料からの漏出	2.c. 通気弁及びフレアリング	CO2	81.17	0.000	0.0%	14%	0.000	0.0%
1.B	燃料からの漏出	2.c. 通気弁及びフレアリング	CH4	7.96	0.000	0.0%	49%	0.000	0.0%
1.B	燃料からの漏出	2.c. 通気弁及びフレアリング	N2O	0.11	0.000	0.0%	32%	0.000	0.0%
1.B	燃料からの漏出	2.d. その他 (地熱)	CO2	104.42	0.000	0.0%	17%	0.000	0.0%
1.B	燃料からの漏出	2.d. その他 (地熱)	CH4	5.21	0.000	0.0%	17%	0.000	0.0%

表 A 1-10 キーカテゴリー分析に用いた基礎データ (1990 年度) (つづき)

A コード	B 区分	C 温室 効果 ガス	E 1990年度排出・ 吸収量絶対値 [千t-CO ₂ 換算]	H Ap1-L	I Ap1-L 寄与度 [%]	L 排出・吸収 源の不確 実性 [%]	M Ap2-L	N Ap2-L 寄与度 [%]	
2.A	鉱物製品	1. セメント製造	CO2	38,701.10	0.028	2.8%	4%	0.013	1.3%
2.A	鉱物製品	2. 生石灰製造	CO2	6,674.45	0.005	0.5%	4%	0.002	0.2%
2.A	鉱物製品	3. ガラス製造	CO2	312.88	0.000	0.0%	6%	0.000	0.0%
2.A	鉱物製品	4. その他プロセスにおける炭酸塩の使用	CO2	3,542.02	0.003	0.3%	6%	0.002	0.2%
2.B	化学産業	1. アンモニア製造	CO2	3,417.74	0.002	0.2%	1%	0.000	0.0%
2.B	化学産業	アンモニア以外の化学産業	CO2	3,623.06	0.003	0.3%	55%	0.017	1.7%
2.B	化学産業	2. 硝酸	N2O	736.06	0.001	0.1%	73%	0.005	0.5%
2.B	化学産業	3. アジピン酸	N2O	7,210.88	0.005	0.5%	9%	0.006	0.6%
2.B	化学産業	4. カプロラクタム等製造	N2O	1,672.86	0.001	0.1%	99%	0.014	1.4%
2.B	化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	HFCs	15,930.24	0.012	1.2%	2%	0.003	0.3%
2.B	化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	PFCs	330.92	0.000	0.0%	2%	0.000	0.0%
2.B	化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	SF6	3,470.78	0.003	0.3%	2%	0.001	0.1%
2.B	化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	NF3	2.79	0.000	0.0%	2%	0.000	0.0%
2.B	化学産業	化学産業全体	CH4	37.49	0.000	0.0%	55%	0.000	0.0%
2.C	金属の生産	1. 鉄鋼製造	CO2	7,244.20	0.005	0.5%	4%	0.002	0.2%
2.C	金属の生産	1. 鉄鋼製造	CH4	18.42	0.000	0.0%	163%	0.000	0.0%
2.C	金属の生産	2. フェロアロイ	CH4	4.63	0.000	0.0%	163%	0.000	0.0%
2.C	金属の生産	3. アルミニウムの製造	PFCs	203.66	0.000	0.0%	44%	0.001	0.1%
2.C	金属の生産	4. マグネシウム等の鍛造	HFCs	0.00	0.000	0.0%	5%	0.000	0.0%
2.C	金属の生産	4. マグネシウム等の鍛造	SF6	146.54	0.000	0.0%	5%	0.000	0.0%
2.D	燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO2	2,039.82	0.001	0.1%	55%	0.009	0.9%
2.E	電子産業		HFCs	0.73	0.000	0.0%	100%	0.000	0.0%
2.E	電子産業		PFCs	1,454.78	0.001	0.1%	81%	0.010	1.0%
2.E	電子産業		SF6	418.70	0.000	0.0%	300%	0.011	1.1%
2.E	電子産業		NF3	29.82	0.000	0.0%	71%	0.000	0.0%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	0.00	0.000	0.0%	6%	0.000	0.0%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	2. 発泡	HFCs	1.34	0.000	0.0%	50%	0.000	0.0%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	3. 消火剤	HFCs	0.00	0.000	0.0%	16%	0.000	0.0%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	4. エアロゾル	HFCs	0.00	0.000	0.0%	10%	0.000	0.0%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	HFCs	0.00	0.000	0.0%	11%	0.000	0.0%
2.F	オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	PFCs	4,549.94	0.003	0.3%	10%	0.004	0.4%
2.G	その他の製品製造及び使用		N2O	290.86	0.000	0.0%	4%	0.000	0.0%
2.G	その他の製品製造及び使用		PFCs	0.00	0.000	0.0%	10%	0.000	0.0%
2.G	その他の製品製造及び使用		SF6	8,814.04	0.006	0.6%	83%	0.062	6.2%
2.H	その他	ドライアイスの利用	CO2	64.61	0.000	0.0%	4%	0.000	0.0%
3.A	消化管内発酵		CH4	9,422.90	0.007	0.7%	26%	0.021	2.1%
3.B	家畜排せつ物の管理		CH4	3,120.55	0.002	0.2%	17%	0.005	0.5%
3.B	家畜排せつ物の管理		N2O	4,207.98	0.003	0.3%	76%	0.027	2.7%
3.C	稲作		CH4	12,770.99	0.009	0.9%	6%	0.007	0.7%
3.D	農用地の土壌	1. 直接排出	N2O	4,701.08	0.003	0.3%	26%	0.010	1.0%
3.D	農用地の土壌	2. 間接排出	N2O	2,414.03	0.002	0.2%	164%	0.033	3.3%
3.F	野外で農作物の残留物を焼くこと		CH4	127.03	0.000	0.0%	296%	0.003	0.3%
3.F	野外で農作物の残留物を焼くこと		N2O	39.26	0.000	0.0%	300%	0.001	0.1%
3.G	石灰施用		CO2	550.24	0.000	0.0%	50%	0.002	0.2%
3.H	尿素施肥		CO2	58.64	0.000	0.0%	50%	0.000	0.0%
4.A	森林	1. 転用のない森林	CO2	72,385.80	0.053	5.3%	13%	0.076	7.6%
4.A	森林	2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	6,675.49	0.005	0.5%	13%	0.007	0.7%
4.B	農地	1. 転用のない農地	CO2	10,098.26	0.007	0.7%	42%	0.036	3.6%
4.B	農地	2. 他の土地利用から転用された農地	CO2	1,598.43	0.001	0.1%	18%	0.002	0.2%
4.C	草地	1. 転用のない草地	CO2	881.36	0.001	0.1%	9%	0.001	0.1%
4.C	草地	2. 他の土地利用から転用された草地	CO2	180.80	0.000	0.0%	20%	0.000	0.0%
4.D	湿地	1.2 転用のない泥炭地	CO2	0.00	0.000	0.0%	21%	0.000	0.0%
4.D	湿地	1.2 転用のない湛水地	CO2	0.00	0.000	0.0%	21%	0.000	0.0%
4.D	湿地	1.3 転用のないその他の湿地	CO2	0.00	0.000	0.0%	21%	0.000	0.0%
4.D	湿地	2. 他の土地利用から転用された湿地	CO2	90.51	0.000	0.0%	21%	0.000	0.0%
4.E	開発地	1. 転用のない開発地	CO2	1,386.01	0.001	0.1%	33%	0.004	0.4%
4.E	開発地	2. 他の土地利用から転用された開発地	CO2	4,251.07	0.003	0.3%	21%	0.008	0.8%
4.F	その他の土地	1. 転用のないその他の土地	CO2	0.00	0.000	0.0%	20%	0.000	0.0%
4.F	その他の土地	2. 他の土地利用から転用されたその他の土地	CO2	1,180.13	0.001	0.1%	20%	0.002	0.2%
4.G	伐採木材製品の利用		CO2	369.89	0.000	0.0%	30%	0.001	0.1%
4.H	その他 (開発地への転用時の有機質土壌)		CH4	13.90	0.000	0.0%	71%	0.000	0.0%
4.H	その他 (開発地への転用時の有機質土壌)		N2O	0.84	0.000	0.0%	138%	0.000	0.0%
4(I)	施肥に伴う直接N2O排出		N2O	0.84	0.000	0.0%	31%	0.000	0.0%
4(II)	土壌排水に伴う排出		CO2	0.00	0.000	0.0%	0%	0.000	0.0%
4(II)	土壌排水に伴う排出		CH4	38.23	0.000	0.0%	71%	0.000	0.0%
4(II)	土壌排水に伴う排出		N2O	0.00	0.000	0.0%	0%	0.000	0.0%
4(III)	土壌の無機化に伴う直接N2O排出		N2O	153.67	0.000	0.0%	138%	0.002	0.2%
4(IV)	管理土壌からの間接N2O排出		N2O	41.19	0.000	0.0%	318%	0.001	0.1%
4(V)	バイオマスの燃焼		CO2	0.00	0.000	0.0%	0%	0.000	0.0%
4(V)	バイオマスの燃焼		CH4	47.20	0.000	0.0%	28%	0.000	0.0%
4(V)	バイオマスの燃焼		N2O	22.15	0.000	0.0%	31%	0.000	0.0%
5.A	固形廃棄物の処分		CH4	9,570.42	0.007	0.7%	22%	0.018	1.8%
5.B	固形廃棄物の生物処理		CH4	53.99	0.000	0.0%	84%	0.000	0.0%
5.B	固形廃棄物の生物処理		N2O	180.77	0.000	0.0%	170%	0.003	0.3%
5.C	廃棄物の焼却と野焼き		CO2	12,429.49	0.009	0.9%	16%	0.017	1.7%
5.C	廃棄物の焼却と野焼き		CH4	27.78	0.000	0.0%	170%	0.000	0.0%
5.C	廃棄物の焼却と野焼き		N2O	1,438.04	0.001	0.1%	79%	0.010	1.0%
5.D	排水の処理と放出		CH4	2,941.55	0.002	0.2%	21%	0.005	0.5%
5.D	排水の処理と放出		N2O	2,387.11	0.002	0.2%	38%	0.008	0.8%
5.E	その他		CO2	702.83	0.001	0.1%	10%	0.001	0.1%
	間接CO2	エネルギー分野由来	Ind CO2	1,027.51	0.001	0.1%	32%	0.003	0.3%
	間接CO2	工業プロセス及び製品の使用分野由来	Ind CO2	4,454.80	0.003	0.3%	48%	0.018	1.8%
合計 (LULUCF含む)				1,374,938.04	1.00	100.0%		1.00	100%

別添 (Annex) 2 不確実性評価

A2.1. 不確実性評価手法

「不確実性」とは、インベントリにおいて推計された排出・吸収量と潜在する真の値とのぶれを表す概念であり、推計に使用するデータの欠損や代表性の欠如、標本誤差、測定誤差等に起因するものである。「UNFCCC インベントリ報告ガイドライン」(決定 24/CP.19 附属書 I) のパラグラフ 15 及び 42 では、2006 年 IPCC ガイドラインに沿ってインベントリの不確実性を定量的に評価し、報告することとされている。不確実性評価の目的は、当該国インベントリの正確性の継続的改善に貢献すること及び方法論の選択を支援することであって、不確実性の高低によってインベントリの正当性の評価や正確性の各国間比較を行うものではない。

不確実性評価の基本的な方法論は IPCC ガイドラインにおいて提供されているものの、各排出・吸収源における具体的な不確実性の評価方法は各国の実情に応じた判断に委ねられている部分が多い。我が国では、平成 13 年度、平成 18 年度、平成 24 年度及び平成 26 年度温室効果ガス排出量算定方法検討会において、インベントリの不確実性に関する検討を行っており、今次提出インベントリでは、平成 25 年に改訂された我が国独自のガイドラインに基づいて不確実性評価を実施した。

A2.2. 不確実性評価の結果

A2.2.1. 日本の排出量の不確実性

日本の 2018 年度の純排出量は約 11 億 8,300 万トン（二酸化炭素換算）であり、アプローチ 1（誤差伝播方式）で実施した 2018 年度の純排出量の不確実性は-4%～+2%、純排出量のトレンドに伴う不確実性は-5%～+3%と評価された。不確実性が小さい要因としては、不確実性の小さい燃料の燃焼（1.A.）からの CO₂排出量が、純排出量の約 92%を占めることによるものである。

表 A 2-1 日本の純排出量の不確実性評価結果

A カテゴリー	B GHGs	C		D		G-1990		G-2018		I	J	
		1990年度 排出・吸収量	2018年度 排出・吸収量	1990年度 排出・吸収量 の不確実性	2018年度 排出・吸収量 の不確実性	2018年度排出・ 吸収量の1990 年度比増加率	総排出量のトレンド において考慮され た不確実性					
		kt-CO ₂ 換算	kt-CO ₂ 換算	(-) %	(+) %	(-) %	(+) %	%	(-) %	(+) %		
1A.燃料の燃焼 (CO ₂)	CO ₂	1,078,839	1,077,487	-5%	+2%	-4%	+2%	-0.1%	-4.9%	+2.6%		
1A.燃料の燃焼 (固定発生源: CH ₄ , N ₂ O)	CH ₄ , N ₂ O	3,916	5,281	-23%	+29%	-25%	+28%	34.9%	0.0%	+0.0%		
1A.燃料の燃焼 (運輸: CH ₄ , N ₂ O)	CH ₄ , N ₂ O	4,031	1,796	-32%	+92%	-30%	+87%	-55.4%	0.0%	+0.0%		
1B.燃料からの漏出	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	5,165	1,155	-40%	+80%	-23%	+39%	-77.6%	0.0%	+0.0%		
2.工業プロセス及び製品の使用 (CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O)	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	75,591	47,305	-4%	+4%	-5%	+5%	-37.4%	-0.1%	+0.1%		
2.工業プロセス及び製品の使用 (HFCs等4ガス)	HFCs, PFCs, SF ₆ , NF ₃	35,354	52,800	-7%	+36%	-7%	+8%	49.3%	-0.5%	+0.5%		
3.農業	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	37,413	33,252	-10%	+25%	-9%	+21%	-11.1%	0.0%	+0.0%		
4.土地利用、土地利用変化及び林業	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	-62,219	-57,390	-16%	+16%	-13%	+13%	-7.8%	-0.4%	+0.4%		
5.廃棄物	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O	29,732	19,267	-10%	+11%	-12%	+12%	-35.2%	-0.2%	+0.2%		
間接CO ₂	Ind CO ₂	5,482	2,063	-28%	+50%	-27%	+48%	-62.4%	0.0%	+0.0%		
純排出量		1,213,304	1,183,016	-4.5%	+2.3%	-3.7%	+2.1%	-2.5%	-4.9%	+2.6%		

各分野の算定に用いたデータは以下の通りである。

表 A-2-2 不確実性評価に用いたデータ (エネルギー)

カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	H-1990		H-2018		T	I	J	K	L	M		
								(-) (%)	(+) (%)	(-) (%)	(+) (%)								
			Input Data kt-CO ₂ 換算	Input Data kt-CO ₂ 換算	Input Data (-) (%)	Input Data (+) (%)	(E ² +F ²) ^{1/2} (-) (%)	(E ² +F ²) ^{1/2} (+) (%)	G ² C ² /ΣC ² (-) (%)	G ² D ² /ΣD ² (-) (%)	D/C	Note A	D/ΣC	F/F	J ² E ² /ΣE ² (-) (%)	(K ² +L ²) ^{1/2} (-) (%)			
合計			1,213,304	1,183,016					-4.5%	+2.3%	-3.7%	+2.1%						-4.9%	+2.6%
液体燃料			644.312	392.517	-8%	-2%	-8%	+2%	-4.1%	0.9%	-2.3%	0.6%	0.2%	32.4%	0.0%	-3.5%	-0.8%	3.5%	0.8%
I.A. 燃料の燃焼			309,482	435,755	-7%	+5%	-7%	+5%	-1.7%	1.2%	-2.4%	1.7%	0.1%	35.9%	0.0%	-3.3%	2.4%	3.3%	2.4%
I.A. 燃料の燃焼			114,167	231,175	-3%	+1%	-3%	+2%	-0.3%	0.2%	-0.6%	0.3%	0.1%	19.1%	0.0%	-0.8%	0.4%	0.8%	0.4%
I.A. 燃料の燃焼			10,878	18,040	-	-	-19%	+19%	-0.2%	0.2%	-0.3%	0.3%	0.0%	1.5%	NA	NA	NA	0.0%	0.0%
I.A. 固定発生源			1,058	889	-	-	-29%	+69%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.A. 固定発生源			2,858	4,391	-	-	-50%	+30%	-0.1%	0.1%	-0.1%	0.1%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.A.3. 運輸			6	2	-5%	+5%	-57%	+100%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
a. 航空機			64	92	-5%	+5%	-70%	+150%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.A.3. 運輸			253	99	-	-	-36%	+104%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
a. 自動車			3,457	1,442	-	-	-37%	+107%	-0.1%	0.3%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.A.3. 運輸			1	1	-5%	+5%	-60%	+151%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
c. 鉄道			110	58	-5%	+5%	-50%	+200%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.A.3. 運輸			32	23	-13%	+13%	-52%	+52%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.A.3. 運輸			108	80	-13%	+13%	-42%	+141%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.A.3. 運輸			5	0	-	-	-46%	+89%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.B. 燃料からの漏出			4,760	479	-	-	-43%	+87%	-0.2%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I. 固体燃料			0	0	-	-	-89%	+89%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I. 固体燃料			25	18	-	-	-69%	+69%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.a. 石油			1	1	-	-	-80%	+80%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.B. 燃料からの漏出			174	232	-	-	-70%	+76%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.b. 天然ガス			81	242	-	-	-14%	+14%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.B. 燃料からの漏出			8	0	-	-	-49%	+49%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.c. 通気弁及びフレアリング			0	0	-	-	-32%	+32%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.B. 燃料からの漏出			104	170	-7%	+7%	-17%	+17%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.d. その他 (地熱)			5	8	-7%	+7%	-17%	+17%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
I.B. 燃料からの漏出																			

表 A-2-3 不確実性評価に用いたデータ（工業プロセス及び製品の使用）

カテゴリー	A	B	C		D		E		F		G		H-1990		H-2018		T	I	J	K	L	M
			Input Data kt-CO ₂ 換算	1990年度 排出・ 吸収量	Input Data kt-CO ₂ 換算	2018年度 排出・ 吸収量	Input Data (+) % (-) %	活動量の 不確実性	Input Data (+) % (-) %	排出係数・ 算定パラメータの 不確実性	Input Data (+) % (-) %	排出・吸収量 の不確実性	G*P/D*ΣC (+) % (-) %	G*P/D*ΣD (+) % (-) %	D/C	Note A %						
2.A 鉱物製品		GHG	38,701	26,183																		
2.A 鉱物製品	1. セメント製造	CO2	6,674	5,663	+2%	+2%	+2%	+2%	+4%	+4%	+4%	+4%	+4%	+4%	+4%	+4%	-32.3%	0.0%	2.2%	0.0%	0.0%	0.1%
2.A 鉱物製品	2. 生石灰製造	CO2	313	202	+3%	-3%	+3%	-3%	-2%	-2%	-4%	-4%	-4%	-4%	-4%	-4%	-15.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
2.A 鉱物製品	3. ガラス製造	CO2	3,542	1,659	+3%	-3%	+3%	-3%	+5%	+5%	+6%	+6%	+6%	+6%	+6%	+6%	-35.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.A 鉱物製品	4. その他プロセスにおける炭酸塩の使用	CO2	3,418	1,458	+3%	-3%	+3%	-3%	+5%	+5%	+6%	+6%	+6%	+6%	+6%	+6%	-57.3%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	1. アンモニア製造	CO2	3,623	2,762	-	-	-	-	-2%	-2%	-2%	+1%	+1%	+1%	+1%	+1%	-57.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	2. アンモニア以外の化学産業	CO2	736	318	-	-	-	-	-73%	-73%	-73%	+55%	+55%	+55%	+55%	+55%	-23.8%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	2. 硝酸	N2O	7,211	59	+2%	-2%	+2%	-2%	+73%	+73%	+73%	+73%	+73%	+73%	+73%	+73%	-56.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	3. アジヒン酸	N2O	1,673	129	+2%	-2%	+2%	-2%	+9%	+9%	+9%	+9%	+9%	+9%	+9%	+9%	-99.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	4. カプロラクタム等製造	N2O	37	23	-	-	-	-	-99%	-99%	-99%	+99%	+99%	+99%	+99%	+99%	-92.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.C 金属の生産	1. 鉄鋼製造	CH4	7,244	18	-	-	-	-	-4%	-4%	-4%	+4%	+4%	+4%	+4%	+4%	-39.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.C 金属の生産	2. 鉄鋼製造	CH4	18	15	+5%	-5%	+5%	-5%	+163%	+163%	+163%	+163%	+163%	+163%	+163%	+163%	-18.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.C 金属の生産	2. フェアラロイ	CO2	2,040	2,644	-	-	-	-	-163%	-163%	-163%	+163%	+163%	+163%	+163%	+163%	-38.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.D 燃料の非エネルギー製品利用と溶剤利用		CO2	291	370	-	-	-	-	-4%	-4%	-4%	+4%	+4%	+4%	+4%	+4%	27.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.H その他	ドライアイスの利用	CO2	65	106	-	-	-	-	-4%	-4%	-4%	+4%	+4%	+4%	+4%	+4%	65.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (副生ガスの排出)	HFCs	15,929	12	-	-	-	-	-2%	-2%	-2%	+2%	+2%	+2%	+2%	+2%	-99.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	HFCs	2	88	-	-	-	-	-2%	-2%	-2%	+2%	+2%	+2%	+2%	+2%	5755.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	PFCs	331	87	-	-	-	-	-2%	-2%	-2%	+2%	+2%	+2%	+2%	+2%	-75.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	SF6	3,471	46	-	-	-	-	-2%	-2%	-2%	+2%	+2%	+2%	+2%	+2%	-98.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.B 化学産業	9. フッ化物製造 (製造時の漏出)	NF3	3	58	-	-	-	-	-2%	-2%	-2%	+2%	+2%	+2%	+2%	+2%	1978.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.C 金属の生産	3. アルミニウムの製造	PFCs	204	0	-	-	-	-	-44%	-44%	-44%	+44%	+44%	+44%	+44%	+44%	-100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.C 金属の生産	4. マグネシウム等の製造	HFCs	0	2	-	-	-	-	-5%	-5%	-5%	+5%	+5%	+5%	+5%	+5%	86.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.C 金属の生産	4. マグネシウム等の製造	SF6	147	274	-	-	-	-	-5%	-5%	-5%	+5%	+5%	+5%	+5%	+5%	15356%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.E 電子産業		HFCs	1	113	+10%	-10%	+10%	-10%	-100%	-100%	-100%	+100%	+100%	+100%	+100%	+100%	27.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.E 電子産業		PFCs	1,455	1,855	+10%	-10%	+10%	-10%	-80%	-80%	-81%	+81%	+81%	+81%	+81%	+81%	-16.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.E 電子産業		SF6	419	349	+10%	-10%	+10%	-10%	-300%	-300%	-300%	+300%	+300%	+300%	+300%	+300%	652.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.E 電子産業		NF3	30	225	+10%	-10%	+10%	-10%	-70%	-70%	-71%	+71%	+71%	+71%	+71%	+71%	NA	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.E 電子産業		HFCs	0	43,179	-	-	-	-	-6%	-6%	-6%	+6%	+6%	+6%	+6%	+6%	217643%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.5%
2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	1. 冷蔵庫及び空調機器	HFCs	1	2,922	-	-	-	-	-50%	-50%	-50%	+50%	+50%	+50%	+50%	+50%	NA	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%
2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	2. 発泡剤	HFCs	NO	10	-	-	-	-	-16%	-16%	-16%	+16%	+16%	+16%	+16%	+16%	NA	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	3. 消火剤	HFCs	0	544	-	-	-	-	-10%	-10%	-10%	+10%	+10%	+10%	+10%	+10%	NA	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	4. エアロゾル	HFCs	0	117	-	-	-	-	-11%	-11%	-11%	+11%	+11%	+11%	+11%	+11%	NA	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	HFCs	4,550	1,505	+10%	-10%	+10%	-10%	-10%	-10%	-10%	+10%	+10%	+10%	+10%	+10%	-66.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.F オゾン層破壊物質の代替物質の使用	5. 溶剤	PFCs	0	39	-	-	-	-	-10%	-10%	-10%	+10%	+10%	+10%	+10%	+10%	NA	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2.G その他の製品製造及び使用		SF6	8,814	1,375	-	-	-	-	-21%	-21%	-21%	+145%	+145%	+145%	+145%	+145%	-84.4%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%

表 A-2-5 不確実性評価に用いたデータ (LULUCF)

カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	H-1990		H-2018		T	I	J	K	L	M
								(-) (%)	(+) (%)	(-) (%)	(+) (%)						
		GHG	1990年度 排出・ 吸収量 kt-CO ₂ 換算	2018年度 排出・ 吸収量 kt-CO ₂ 換算	活動量の 不確実性 Input Data (-) (%)	排出係数・ 算定パラメータの 不確実性 Input Data (-) (%)	排出・吸収量 の不確実性 $(E^2 + F^2)^{1/2}$ (-) (%)	G*%C/ΣC (-) (%)	G*%D/ΣD (-) (%)	D/C	Note A	D/ΣC	PF (-) (%)	J*E ² /ΣE ² (-) (%)	活動量の 不確実性によ る 排出量のトレン ドにおける 不確実性 (-) (%)	活動量の 不確実性によ る 排出量のトレン ドにおける 不確実性 (-) (%)	総排出量の トレンドにおいて 考慮された 不確実性 (-) (%)
		CO2	-72,386	-58,093	-	-	-13%	-0.7%	-0.6%	-19.7%	0.0%	4.8%	0.0%	-0.4%	0.4%	0.4%	
	4.A 森林 1. 転用のない森林	CO2	-6,675	-934	-	-	-13%	-0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	-0.4%	0.0%	0.0%	
	4.A 森林 2. 他の土地利用から転用された森林	CO2	10,998	3,507	-	-	-42%	-0.4%	-0.1%	-65.3%	0.0%	0.3%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.B 農地 1. 転用のない農地	CO2	1,598	23	-	-	-18%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.B 農地 2. 他の土地利用から転用された農地	CO2	881	-333	-	-	+9%	0.0%	0.0%	-137.8%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.C 草地 1. 転用のない草地	CO2	181	67	-	-	-20%	0.0%	0.0%	-63.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.C 草地 2. 他の土地利用から転用された草地	CO2	NO,NA	NO,NA	-	-	-	NA	NA	NA	NA	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.D 湿地 1. 転用のない湿地	CO2	91	17	-	-	-21%	+21%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.D 湿地 2. 他の土地利用から転用された湿地	CO2	-1,386	-1,424	-	-	-33%	+33%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.E 開墾地 1. 転用のない開墾地	CO2	4,251	1,397	-	-	0%	0.0%	0.0%	-67.1%	0.0%	0.1%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.E 開墾地 2. 他の土地利用から転用された開墾地	CO2	0	0	-	-	-	NA	NA	NA	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.F その他の土地 1. 転用のないその他の土地	CO2	1,180	164	-	-	-20%	+20%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.F その他の土地 2. 他の土地利用から転用されたその他の土地	CO2	-370	-2,046	-	-	-30%	+30%	0.0%	0.1%	-0.1%	0.2%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.G 伐採木材製品の利用	CO2	14	6	-	-	-71%	+71%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.H その他の(開墾地への転用時の有機質土壌)	CH4	1	0	-	-	-75%	+200%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.H その他の(開墾地への転用時の有機質土壌)	N2O	1	1	-	-	-31%	+31%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.I 施肥に伴う直接N2O排出	N2O	38	37	-	-	-71%	+71%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.II 湿地・泥炭地からのCH4, N2O	CH4	NO,NA	NO,NA	-	-	-71%	+71%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.III 土壌有機物の無機化森林	N2O	IE	IE	-	-	-75%	+202%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.III 土壌有機物の無機化その他の土地	N2O	IE	IE	-	-	-75%	+202%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.III 土壌有機物の無機化農地	N2O	154	137	-	-	-31%	+31%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.III 土壌有機物の無機化草地	N2O	IE	IE	-	-	-31%	+31%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	NA	NA	NA	0.0%	
	4.IV) 間接N2O排出 森林施肥由来	N2O	41	33	-	-	-143%	+493%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.IV) 間接N2O排出 無機化由来	N2O	IE	IE	-	-	-119%	+288%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.V) バイオマスの燃焼 森林	CH4	10	2	-	-	-28%	+28%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.V) バイオマスの燃焼 農地(果樹剪定枝)	CH4	25	16	-	-	-29%	+29%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.V) バイオマスの燃焼 森林	N2O	1	0	-	-	-31%	+31%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.V) バイオマスの燃焼 農地(果樹剪定枝)	N2O	8	5	-	-	-300%	+300%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.V) バイオマスの燃焼 草地	CH4	13	13	-	-	-56%	+56%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	4.V) バイオマスの燃焼 草地	N2O	14	14	-	-	-63%	+63%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	

表 A 2-6 不確実性評価に用いたデータ (廃棄物、間接 CO₂)

カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	H-1990年		H-2018年		J	K	L	M		
								排出・吸収量	不確実性	排出・吸収量	不確実性						
	1990年度	2018年度	Input Data	Input Data	Input Data	Input Data	Input Data	(+) %	(-) %	(+) %	(-) %	Note A	D/ΔC	F/F	I*/E*/Δ2	(+) %	(-) %
	kr-CO ₂	kr-CO ₂	換算	換算	kr-CO ₂	kr-CO ₂	換算	(+) %	(-) %	(+) %	(-) %	%	%	(+) %	(-) %	(+) %	(-) %
5.A 固形廃棄物の処分	5.919	1,686	1,686	1,686	-	-	-	+32%	-0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.A 固形廃棄物の処分	3,643	1,206	1,206	1,206	-	-	-	+29%	-0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.A 固形廃棄物の処分	9	39	39	39	+60%	-	-	+29%	-0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.B 固形廃棄物の生物処理	54	89	89	89	-30%	-42%	-74%	+73%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.B 固形廃棄物の生物処理	181	296	296	296	+30%	-79%	+84%	+84%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	5,704	2,000	2,000	2,000	-30%	-167%	+170%	+170%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	3,670	3,466	3,466	3,466	+30%	-2%	+2%	+30%	-0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	2,134	3,771	3,771	3,771	-60%	-2%	+2%	+30%	-0.1%	-0.1%	-0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	916	1,001	1,001	1,001	+60%	-2%	+2%	+30%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	5	0	0	0	+30%	-2%	+2%	+30%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	12	1	1	1	-30%	+181%	+181%	+52%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	0	0	0	0	+30%	-104%	+184%	+184%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	2	0	0	0	-30%	+30%	+30%	+30%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	0	8	8	8	-30%	+203%	+203%	+203%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	2	1	1	1	+60%	-117%	+224%	+224%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	12	0	0	0	+30%	-104%	+104%	+104%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	306	83	83	83	-30%	-27%	+27%	+27%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	5	24	24	24	+30%	-76%	+76%	+76%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	1,656	1,275	1,275	1,275	-30%	-84%	+84%	+84%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	64	39	39	39	-60%	-44%	+44%	+44%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	6	8	8	8	+30%	-100%	+104%	+104%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.C 廃棄物の焼却と野焼き	216	301	301	301	-5%	-31%	+31%	+31%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	759	810	810	810	-	-	-	+31%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	131	8	8	8	-10%	-84%	+84%	+84%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	1,343	358	358	358	-10%	-58%	+58%	+58%	-0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	56	42	42	42	+30%	-60%	+67%	+67%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	206	93	93	93	-30%	-58%	+58%	+58%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	31	5	5	5	-100%	-39%	+39%	+39%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	416	431	431	431	+5%	-100%	+146%	+146%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	453	461	461	461	-	-	-	+42%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	67	4	4	4	-10%	-87%	+88%	+88%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	830	585	585	585	-10%	-58%	+59%	+59%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	298	336	336	336	+30%	-95%	+95%	+95%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	316	165	165	165	-30%	+30%	+66%	+66%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.D 排水の処理と放出	8	1	1	1	-100%	+100%	+107%	+107%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5.E その他	703	673	673	673	-10%	-1%	+1%	+10%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
間接CO ₂	1,028	457	457	457	-	-	-	+40%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
間接CO ₂	4,455	1,606	1,606	1,606	-	-	-	+61%	-0.1%	0.2%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

$$\text{Note A : タイプ A 感度} : \frac{0.01 \times D_x + \sum D_i - (0.01 \times C_x + \sum C_i)}{(0.01 \times C_x + \sum C_i)} \times 100 - \frac{\sum D_i - \sum C_i}{\sum C_i} \times 100$$

C_x, D_x : C 列、D 列の x 行目の値

$\sum C_i, \sum D_i$: C 列、D 列の合計値

参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリに関する 2006 年 IPCC ガイドライン」(2006)
2. UNFCCC「UNFCCC インベントリ報告ガイドライン」(決定 24/CP.19 附属書 I) (2013)
3. 環境省「わが国の温室効果ガスインベントリにおける不確実性評価ガイドライン」(2013)

別添（Annex）3 各排出・吸収区分における算定方法

A3.1. 前駆物質等に関する算定方法

我が国では、報告対象とされている温室効果ガス（CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃）の他に、前駆物質等（NO_x、CO、非メタン揮発性有機化合物 [NMVOC]、SO_x¹）の排出についても算定方法を設定し、報告を行う。以下では、算定方法を設定し、排出量を報告しているカテゴリーについて説明を行う。

A3.1.1. エネルギー分野

A3.1.1.1. 固定発生源（1.A.1.、1.A.2.、1.A.4.：NO_x、CO、NMVOC、SO_x）

A3.1.1.1.a. エネルギー産業（1.A.1）、製造業及び建設業（1.A.2）、業務（1.A.4.a）、農林水産業（1.A.4.c）

a) 排出源カテゴリーの説明

ここでは、エネルギー産業（1.A.1）、製造業及び建設業（1.A.2）、業務（1.A.4.a）、農林水産業（1.A.4.c）における燃料の燃焼に伴う前駆物質等（NO_x、CO、NMVOC、SO_x）の排出を扱う。

b) 方法論

1) NO_x、SO_x

■ 算定方法

○ ばい煙発生施設等

大気汚染防止法等に定めるばい煙発生施設等における燃料の燃焼に伴う NO_x と SO_x 排出量については、環境省「大気汚染物質排出量総合調査」のデータを用いた。ただし、共通報告様式（CRF）の部門分類との整合性を図るため、下記の操作に従って「大気汚染物質排出量総合調査」に記載された排出量からエネルギー分野における排出量を分離した。

1. 以下の施設種または業種からの排出量は、総てエネルギー分野において計上した。

【施設種】 [0101～0103：ボイラー]、[0601～0618：金属圧延加熱炉、金属熱処理炉、金属鍛造炉]、[1101～1106：乾燥炉]、[2901～3202：ガスタービン、ディーゼル機関、ガス機関、ガソリン機関]

【業種】 [A～D：旅館・飲食店、医療業・教育学術研究機関、浴場業、洗たく業]、[F～L：農業・漁業、鉱業、建設業、電気業、ガス業、熱供給業、ビル暖房・その他事業場]

2. 上記「1.」及び [1301～1304：廃棄物焼却炉] 以外の施設種または業種については、工業プロセス及び製品の使用（IPPU）分野における排出量を算定し、これを「大気汚染物質排出量総合調査」に記載された排出量から差し引くことによってエネルギー分野における排出量を算定した（IPPU 分野の詳細な算定方法に関しては、「A3.1.2.1. 鉱物産業、化学産業、金属製造、その他製品の製造（2.A.、2.B.、2.C.、2.D.：NO_x、SO_x）」参照）。

○ 群小施設

業務部門、製造業のうちばい煙発生施設等に該当しない施設（以下、群小施設という。）における燃料の燃焼に伴う NO_x、SO_x については、燃料種別のエネルギー消費量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。

¹ SO_x のほとんどは、SO₂ で構成される。主な排出源では、SO₂ 排出量を計上している。

■ 排出係数

○ ばい煙発生施設等

該当せず。

○ 群小施設

「大気汚染物質排出量総合調査」に示された業種 [L: ビル暖房・その他事業場] のうち施設種 [0102: 暖房用ボイラー] に該当する施設の燃料種別排出量を燃料種別エネルギー消費量で割ることによって、燃料種別に排出係数を設定した。

■ 活動量

○ ばい煙発生施設等

該当せず。

○ 群小施設

資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」の燃料種別エネルギー消費量から、環境省「大気汚染物質排出量総合調査」によって把握された燃料種別エネルギー消費量を差し引くことによって、群小施設の燃料種別エネルギー消費量を算定した。ただし、「大気汚染物質排出量総合調査」に示された活動量が「総合エネルギー統計」に示される活動量よりも大きい場合は、当該活動量をゼロとした。なお、対象とする燃料種は、都市ガス、LPG、灯油、A重油とした。

2) CO、NMVOC

■ 算定方法

当該排出源から排出される CO、NMVOC については、施設種別のエネルギー消費量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。

■ 排出係数

CO の排出係数は、大気環境学会（1996）の集計データに基づいて設定した。

NMVOC の排出係数は、CH₄排出係数に、CH₄排出係数に対する NMVOC 排出係数の比を乗じることによって施設種別燃料種別に設定した。CH₄排出係数は、第3章に詳述している。CH₄排出係数に対する NMVOC 排出係数の比は、日本環境衛生センター（1989）、計量計画研究所（1984）及び米国環境保護庁（1985）から設定した。

■ 活動量

活動量には、CH₄、N₂O の算定に用いた施設種別のエネルギー消費量を用いた。（第3章参照）

A3.1.1.1.b. 家庭（1.A.4.b）

a) 排出源カテゴリーの説明

ここでは、家庭部門における燃料の燃焼に伴う前駆物質等（NO_x、CO、NMVOC、SO_x）の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される NO_x、CO、NMVOC、SO_xについては、燃料種別のエネルギー消費量に、日本独自の排出係数または EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2016 に示されたデフォルト排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。

■ 排出係数

1) NO_x

固体燃料（一般炭、練豆炭）、バイオマス燃料については、EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2016 に示されたデフォルト値を高位発熱量換算した値を用いた。

液体燃料（灯油）及び気体燃料（LPG、都市ガス）については、環境庁大気保全局（1996）において算定された用途別燃料種別の排出係数を用いた。なお、報告書では、家庭用ガス機器メーカーへのアンケート調査及び業界ヒアリング等より得られた機器別のNO_x排出濃度を普及台数で加重平均することによって排出係数が算定されている。

2) CO

固体燃料（一般炭、練豆炭）、バイオマス燃料については、EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2016 に示されたデフォルト値を高位発熱量換算した値を用いた。

液体燃料（灯油）及び気体燃料（LPG、都市ガス）については、計量計画研究所（1997）に記載された用途別燃料種別の排出係数を用いた。なお、報告書では、東京都、横浜市、千葉県の実測値を用いて、排出係数を用途別燃料種別にまとめている。

3) NMVOC

固体燃料（一般炭、練豆炭）、液体燃料（灯油）、気体燃料（LPG、都市ガス）、バイオマス燃料については、EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2016 に示されたデフォルト値を高位発熱量換算した値を用いた。

4) SO_x

固体燃料（一般炭、練豆炭）、バイオマス燃料については、EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2016 に示されたデフォルト値を高位発熱量換算した値を用いた。

液体燃料（灯油）については、石油連盟資料に示された灯油の燃料性状に基づき、エネルギー消費量、比重、硫黄含有量より排出係数を算定した。

■ 活動量

活動量には、「総合エネルギー統計」の民生部門一家庭用の燃料種別消費量を用いた。対象とする燃料種は、一般炭、練豆炭、灯油、LPG、都市ガスとした。なお、家庭における用途別の燃料消費割合には、日本エネルギー経済研究所「エネルギー・経済統計要覧」の世帯あたり用途別エネルギー源別消費量の構成比を用いている。

A3.1.1.1.c. エネルギー利用、エネルギー回収を伴う廃棄物の燃焼

エネルギー利用、エネルギー回収を伴う廃棄物の燃焼に伴うNO_x、CO、NMVOC、SO_xの排出については、該当する1.A.1/2の細区分においてOther fossil fuelsの欄で報告を行っている。算定方法、排出係数、活動量についての説明は本章「A3.1.5. 廃棄物分野」にまとめて記載している。

A3.1.1.2. 移動発生源（1.A.3. : NO_x、CO、NMVOC、SO_x）

A3.1.1.2.a. 航空機（1.A.3.a. : NO_x、CO、NMVOC）

a) 排出源カテゴリーの説明

航空燃料の燃焼に伴う前駆物質（NO_x、CO、NMVOC）の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される NO_x、CO、NMVOC については、低位発熱量換算した燃料消費量に、2006 年 IPCC ガイドライン及び 1996 年改訂 IPCC ガイドラインに示された排出係数のデフォルト値を乗じることによって、排出量を算定した。

■ 排出係数

下表のデータを用いた。

表 A3-1 航空機の IPCC デフォルト排出係数

ガス	排出係数 [g/MJ(NCV)]
NO _x	0.25 ¹⁾
CO	0.12 ²⁾
NMVOC	0.018 ²⁾

(出典)

1) 2006 年 IPCC ガイドライン Vol. 2, Page 3.64, Table 3.6.5

2) 1996 年改訂 IPCC ガイドライン Vol. 3, Page 1.89, Table 1-47, Jet and Turboprop Aircraft

■ 活動量

活動量には、国土交通省「航空輸送統計年報」に示されたジェット燃料消費量（国内定期、その他 [コミューター航空、遊覧、貸切など]）を低位発熱量換算した値を用いた。

■ 完全性

航空ガソリンの消費に伴う NO_x、CO、NMVOC 排出については「NE」として報告する。

A3.1.1.2.b. 自動車 (1.A.3.b.) : 燃料の燃焼 (NO_x、CO、NMVOC、SO_x)

a) 排出源カテゴリーの説明

自動車の燃料の燃焼に伴う前駆物質等 (NO_x、CO、NMVOC、SO_x) の排出を扱う。

b) 方法論

1) NO_x、CO、NMVOC

■ 算定方法

当該排出源から排出される NO_x、CO、NMVOC については、車両区分別燃料種別の年間走行量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。

■ 排出係数

排出係数については、環境省「自動車排出ガス原単位及び総量に関する調査 (2002 年度)」、及び環境省「自動車排出ガス原単位及び総量算定検討調査 (2004、2007、2008、及び 2011 以降の毎年度)」に基づき車両区分別燃料種別に設定した。ただし、NMVOC の排出係数については、同調査の THC (全炭化水素) の排出係数に、THC 排出量に対する NMVOC 排出量の割合 (ガソリン車と LPG 車は 60%、軽油車は 99%。環境省調べ) を乗じることによって算定した。なお、排出係数の年次変化には、最新排出ガス規制適合車への代替の影響に加え調査年度間の排出係数の算定方法変更の影響も含まれる。

参考までに、新車に対する排出ガス規制値の概略を表 A3-5 に示す。

■ 活動量

活動量には、CH₄および N₂O の排出量算定で算出した車両区分別燃料種別の年間走行量を用いた。(第 3 章参照)

表 A 3-2 自動車のNO_x排出係数

燃料種	車両種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
ガソリン	軽乗用車	g-NOx/km	0.23	0.16	0.16	0.08	0.04	0.15	0.12	0.12	0.10	0.08	0.06	0.09	0.07	0.07	
	乗用車(LPG含む)	g-NOx/km	0.24	0.20	0.20	0.08	0.04	0.14	0.12	0.09	0.07	0.06	0.05	0.09	0.08	0.06	
	軽貨物車	g-NOx/km	0.87	0.66	0.38	0.20	0.13	0.27	0.23	0.27	0.23	0.19	0.18	0.32	0.32	0.25	
	小型貨物車	g-NOx/km	1.12	0.90	0.48	0.09	0.04	0.15	0.11	0.09	0.08	0.07	0.06	0.14	0.10	0.07	
	普通貨物車	g-NOx/km	1.83	1.09	0.56	0.16	0.05	0.33	0.26	0.25	0.23	0.23	0.20	0.24	0.20	0.16	
	バス	g-NOx/km	4.45	3.65	2.44	0.09	0.06	0.15	0.09	0.07	0.06	0.06	0.06	0.05	0.08	0.08	0.10
	特種用途車	g-NOx/km	1.47	0.87	0.43	0.12	0.04	0.32	0.26	0.19	0.17	0.15	0.12	0.31	0.22	0.17	
軽油	乗用車	g-NOx/km	0.64	0.53	0.44	0.45	0.37	0.47	0.46	0.44	0.38	0.34	0.26	0.40	0.39	0.35	
	小型貨物車	g-NOx/km	1.33	1.10	1.01	1.00	0.81	1.06	1.00	0.93	0.89	0.79	0.73	1.87	1.02	0.96	
	普通貨物車	g-NOx/km	5.35	4.59	4.33	4.50	4.06	3.26	3.09	2.86	2.73	2.64	2.40	3.05	2.50	2.28	
	バス	g-NOx/km	4.23	3.83	3.60	4.07	3.52	3.38	3.48	3.39	3.23	3.13	2.96	3.74	3.46	3.25	
	特種用途車	g-NOx/km	3.38	2.76	2.15	3.63	2.99	2.97	2.75	2.50	2.41	2.24	2.05	3.21	2.97	2.75	

表 A 3-3 自動車のCO排出係数

燃料種	車両種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
ガソリン	軽乗用車	g-CO/km	1.75	1.55	1.54	0.97	0.72	1.51	1.33	1.47	1.22	1.08	0.94	1.39	1.32	1.29
	乗用車(LPG含む)	g-CO/km	2.32	2.06	2.03	0.94	0.58	1.37	1.19	1.07	0.92	0.81	0.75	1.33	1.27	1.16
	軽貨物車	g-CO/km	10.42	8.54	5.51	2.77	2.10	2.87	2.41	3.17	2.76	2.38	2.27	2.46	2.48	2.06
	小型貨物車	g-CO/km	9.66	10.08	8.31	2.05	1.08	2.73	2.13	1.85	1.61	1.40	1.25	1.67	1.19	1.05
	普通貨物車	g-CO/km	12.62	10.60	8.95	3.62	1.67	7.53	5.73	5.67	5.04	4.77	4.36	4.18	3.06	2.89
	バス	g-CO/km	26.21	25.08	21.94	2.07	1.45	2.62	1.88	1.77	1.78	1.65	1.57	1.79	1.72	1.60
	特種用途車	g-CO/km	12.47	10.67	8.92	2.30	1.19	5.34	4.24	3.69	3.44	3.09	2.76	3.51	2.23	1.79
軽油	乗用車	g-CO/km	0.48	0.43	0.43	0.37	0.30	0.39	0.37	0.36	0.29	0.22	0.17	0.24	0.23	0.20
	小型貨物車	g-CO/km	0.98	0.90	0.81	0.59	0.37	0.45	0.42	0.36	0.34	0.30	0.25	0.54	0.34	0.28
	普通貨物車	g-CO/km	3.22	2.99	2.44	2.04	1.47	1.10	0.97	0.80	0.72	0.65	0.55	0.50	0.36	0.31
	バス	g-CO/km	2.58	2.53	2.20	2.03	1.44	1.24	1.18	1.14	1.05	0.98	0.89	0.86	0.76	0.66
特種用途車	g-CO/km	2.11	1.89	1.30	1.60	1.00	0.93	0.79	0.63	0.58	0.50	0.43	0.53	0.48	0.41	

表 A 3-4 自動車のNMVOC排出係数

燃料種	車両種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
ガソリン	軽乗用車	g-NMVOC/km	0.08	0.03	0.03	0.03	0.02	0.08	0.07	0.06	0.05	0.04	0.04	0.05	0.05	0.04
	乗用車(LPG含む)	g-NMVOC/km	0.11	0.07	0.06	0.02	0.01	0.06	0.05	0.04	0.04	0.03	0.03	0.06	0.06	0.06
	軽貨物車	g-NMVOC/km	0.64	0.37	0.16	0.09	0.06	0.14	0.13	0.13	0.12	0.10	0.10	0.12	0.11	0.08
	小型貨物車	g-NMVOC/km	0.71	0.53	0.21	0.04	0.02	0.07	0.06	0.05	0.04	0.04	0.03	0.10	0.05	0.04
	普通貨物車	g-NMVOC/km	0.99	0.58	0.28	0.06	0.02	0.17	0.14	0.14	0.13	0.14	0.11	0.14	0.07	0.06
	バス	g-NMVOC/km	2.16	1.90	1.32	0.04	0.02	0.07	0.05	0.04	0.04	0.03	0.03	0.06	0.05	0.06
	特種用途車	g-NMVOC/km	0.97	0.47	0.19	0.05	0.02	0.16	0.13	0.10	0.10	0.09	0.08	0.24	0.09	0.08
軽油	乗用車	g-NMVOC/km	0.11	0.10	0.10	0.09	0.08	0.10	0.10	0.10	0.08	0.07	0.05	0.06	0.05	0.04
	小型貨物車	g-NMVOC/km	0.39	0.34	0.26	0.20	0.10	0.14	0.13	0.10	0.09	0.08	0.07	0.14	0.09	0.07
	普通貨物車	g-NMVOC/km	1.62	1.47	1.03	0.75	0.50	0.35	0.30	0.23	0.21	0.19	0.15	0.14	0.08	0.06
	バス	g-NMVOC/km	1.26	1.24	0.98	0.80	0.53	0.43	0.39	0.38	0.34	0.32	0.28	0.32	0.26	0.21
特種用途車	g-NMVOC/km	1.09	0.96	0.52	0.57	0.32	0.27	0.23	0.17	0.16	0.13	0.12	0.14	0.11	0.08	

表 A 3-5 新車の排出ガス規制値の概要（参考）

		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2007	2008	2009	2010	2011	2016	2018	2019		
ガソリン・LPG	軽乗用車・乗用車	CO	2.1	2.1							0.67					1.15		1.15			1.15		1.15			
		HC	0.25	0.25								0.08					0.05		0.05			0.05		0.1		
	NOx	0.25	0.25								0.08					0.05		0.05			0.05		0.05			
	単位	g/km	g/km								g/km					g/km		g/km			g/km		g/km			
	モード	10	10-15								10-15					10-15+11		10-15+JC08C			JC08H+JC08C		WLTC			
	CO	60									19															
	HC	7									2.2															
	NOx	4.4									1.4															
	単位	g/test									<<															
	モード	11									<<															
トラック・バス	軽貨物車	CO	13	13					6.5				3.3				4.02	4.02			4.02			4.02		
		HC	2.1	2.1					0.25				0.13					0.05	0.05			0.05			0.1	
	NOx	0.5	0.5					0.25				0.13						0.05	0.05			0.05			0.05	
	単位	g/km	g/km					g/km				g/km						g/km	g/km			g/km			g/km	
	モード	10	10-15					10-15				10-15						10-15+11			JC08H+JC08C		WLTC			
	CO	100						76				38														
	HC	13						7				3.5														
	NOx	5.5						4.4				2.2														
	単位	g/test						g/test				g/test														
	モード	11						11				11														
ディーゼル	軽量車	CO	2.1	2.1							0.67					1.15		1.15			1.15		1.15		7)	
		HC	0.25	0.25								0.08					0.05		0.05			0.05		0.1		
	NOx	0.25	0.25								0.08					0.05		0.05			0.05		0.05			
	単位	g/km	g/km								g/km					g/km		g/km			g/km		g/km			
	モード	10	10-15								10-15					10-15+11		10-15+JC08C			JC08H+JC08C		WLTC			
	CO	60									19															
	HC	7									2.2															
	NOx	4.4									1.4															
	単位	g/test									g/test															
	モード	11									11															
ディーゼル	中量車	CO	13	13				13			6.5		2.1			2.55		2.55			2.55			2.55		
		HC	2.1	2.1			0.4		0.4			0.25		0.08			0.05		0.05			0.05		0.15		
	NOx	0.7	0.7			0.4		0.4			0.4		0.13			0.07		0.07			0.07		0.07			
	単位	g/km	g/km			g/km		g/km			g/km		g/km			g/km		g/km			g/km		g/km			
	モード	10	10-15			10-15		10-15			10-15		10-15			10-15+11		10-15+JC08C			JC08H+JC08C		WLTC			
	CO	100						100			76		24													
	HC	13						13			7		2.2													
	NOx	6.5						5			5		1.6													
	単位	g/test						g/test			g/test		g/test													
	モード	11						11			11		11													
ディーゼル	重量車	CO	1.2		102			102			51		16			16									7)	
		HC	410		6.2			6.2			1.8		0.58			0.23										
	NOx	650		5.5			4.5			4.5		1.4			0.7											
	単位	ppm		g/kWh			g/kWh			g/kWh		g/kWh			g/kWh											
	モード	6		G13			G13			G13		G13			JE05										8)	
	通称		短期規制					長期規制					新短期規制					新長期規制								
	ディーゼル	乗用車	CO	2.1	2.1	2.1				2.1	2.1				0.63			0.63		0.63	0.63				0.63	
			HC	0.4	0.4	0.4				0.4	0.4				0.12			0.024		0.024	0.024				0.024	
		NOx	0.5/0.9	0.5/0.9	0.5/0.6				0.4/0.6	0.4				0.28/0.3			0.14/0.15		0.14/0.1	0.08				0.15		
		単位	g/km	g/km	g/km				g/km	g/km				g/km			g/km		g/km	g/km				g/km		
モード		10	10-15	10-15				10-15	10-15				10-15			10-15+11		10-15+JC08C			JC08H+JC08C		WLTC			
CO		2.1	2.1		2.1			2.1					0.63			0.63		0.63	0.63				0.63			
HC		0.4	0.4		0.4			0.4					0.12			0.024		0.024	0.024				0.024			
NOx		0.9	0.9		0.6			0.4					0.28			0.14		0.14	0.08				0.15			
単位		g/km	g/km		g/km			g/km					g/km			g/km		g/km	g/km				g/km			
モード		10	10-15		10-15			10-15					10-15			10-15+11		10-15+JC08C			JC08H+JC08C		WLTC			
ディーゼル	中量車	CO	790					2.1							0.63		0.63	0.63						0.63		
		HC	510					0.4							0.12		0.024	0.024	0.024					0.024		
	NOx	380/260					1.3							0.49		0.25	0.25	0.15					0.24			
	単位	ppm					g/km							g/km		g/km	g/km	g/km					g/km			
	モード	6					10-15							10-15		10-15+11		10-15+JC08C				JC08H+JC08C		WLTC		
	CO	790					7.4			7.4	7.4			2.22	2.22	2.22			2.22	2.22			2.22	2.22		
	HC	510					2.9			2.9	2.9			0.87	0.87	0.17			0.17	0.17			0.17	0.17		
	NOx	400/260					6/5			4.5	4.5	4.5			3.38	3.38	2			0.7	0.7		0.4	0.4		
	単位	ppm					g/kWh			(2.5-3.5)	(3.5-12)	(>12)			(2.5-12)	(>12)	g/kWh			(>7.5)	(3.5-12)		(>7.5)	(trac-tor)		
	モード	6					D13			3.5)	12)					JE05			JE05	12)		WHDC		(3.5-7.5)		
通称		短期規制					長期規制					新短期規制					新長期規制									

注 1) 環境省及び国土交通省の資料を元に作成。
 2) 上記車種に対する粒子状物質 (PM)、燃料蒸発ガスの規制や、二輪車、特殊自動車に対する排出ガス規制は、本表では省略。
 3) 表中の規制値は新型車の型式あたり平均値を示す。
 4) 1990の列は1990年時点での規制値を、以降は規制開始年 (新型車) を示す。
 5) 網掛けの文字は過去の規制からの変更箇所を示している。
 6) 2005年規制以降HCにメタンは含まれない。
 7) ガソリン・LPGの軽量車は車両総重量1.7t以下。2000年まで、中量車は1.7-2.5t、重量車は2.5t超。2001年以降、中量車は1.7-3.5t、重量車は3.5t超。
 8) 1997年までLPG重量車には異なる規制値が設定されていた。(本表では省略)
 9) ディーゼル乗用車の0.5/0.9という表記は「小型車(車両重量1,265kg以下)が0.5、中型車(1,265kg超)が0.9」を示す。
 10) ディーゼルの軽量車は車両総重量1.7t以下。2004年まで、中量車は1.7-2.5t、重量車は2.5t超。2005年以降、中量車は1.7-3.5t、重量車は3.5t超。
 11) ディーゼルトラック・バスにおける1990年代の380/260という表記は「直噴式が380、副室式が260」を示す。

2) SO_x

■ 算定方法

当該排出源から排出される SO_xについては、燃料種別の燃料消費量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。

■ 排出係数

排出係数には、燃料種別の硫黄含有率（重量比）を用いた。

表 A 3-6 燃料種別の硫黄含有率（重量比）

燃料種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
ガソリン	0.008%	0.008%	0.008%	0.005%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%
軽油	0.350%	0.136%	0.050%	0.005%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%	0.001%
LPG	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%	0.002%

（出典） ガソリン： 計量計画研究所調べ（2004年度まで）、規制値の上限（2005年度以降）

軽油： 石油連盟調べ（1997年度まで）、規制値の上限（1998年度以降）

LPG： 計量計画研究所調べ

■ 活動量

活動量には、資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」に示された燃料種別の燃料消費量に、燃料種別の比重を乗じて、重量単位に換算した値を用いた。

■ 完全性

天然ガス自動車、二輪車からの NO_x、CO、NMVOC、SO_x排出については「NE」として報告する。

A3.1.1.2.c. 自動車（1.A.3.b.）：燃料の揮発（二輪車を除く、NMVOC）

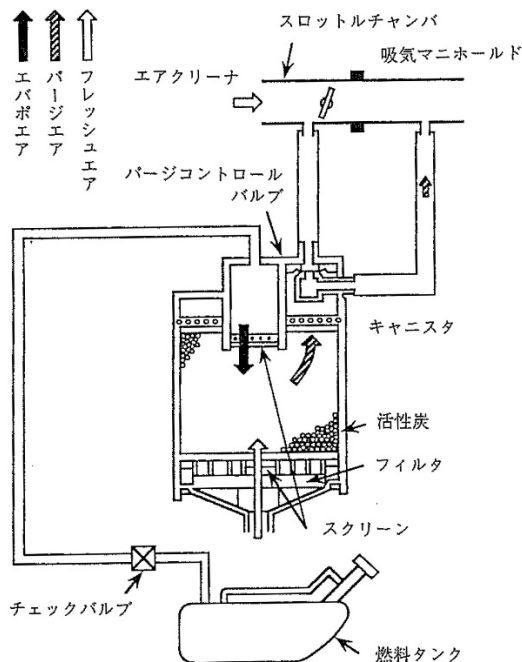
a) 排出源カテゴリーの説明

自動車の燃料の揮発に伴う NMVOC の排出を扱う。ガソリンを燃料とする自動車について、タンク内のガソリン成分が揮発することにより NMVOC が排出される。燃料蒸発ガスは、以下の3通りに区分される。なお、給油時の蒸発ガスについては燃料からの漏出分野の給油所における漏出（1.B.2.a.v）における算定対象である。

表 A 3-7 自動車燃料蒸発ガスの区分

種類	概要
ダイアーナルブリージングロス Diurnal Breathing Loss (DBL)	駐車中に気温の変化等によりガソリンタンクで発生したガソリン蒸気が破過した ¹⁾ キャニスタ ²⁾ から大気に放出されることにより発生する蒸発ガス
ホットソークロス Hot Soak Loss (HSL)	エンジン停止後1時間以内に吸気管に付着したガソリンから発生する蒸発ガス
ランニングロス Running Loss (RL)	燃料タンクのガソリンが走行に従って高温になり、キャニスタのパージ ³⁾ 能力を超えて発生する蒸発ガス

- 1)「破過」とは、吸着容量を超過したため、吸着されずに被吸着体が通過すること。
 - 2)キャニスタとはガソリン自動車の燃料系統に蒸発ガスの発生を防止するために装着されている活性炭等が封入された吸着装置を指す。駐車中に蒸発したガスはキャニスタに吸着され、走行中は吸気マニフォールド（多気筒エンジンに空気を供給するための枝別れになっている配管）が負圧となって吸着された蒸発ガスを空気とともに吸気マニフォールドに送り、キャニスタの吸着能を回復する。
 - 3)パージとは吸着された蒸発ガスを空気とともに吸気マニフォールドに送られることを示す。
- （出典）経済産業省、環境省「PRTR 届出外排出量の推計方法（平成24年）」



(出典) 自動車技術会 (2008)

図 A 3-1 燃料タンクとキャニスタの構造

b) 方法論

自動車の燃料蒸発ガスは、経済産業省・環境省「PRTR 届出外排出量の推計方法」(以下、PRTR)の算定と同様、環境省環境管理技術室「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査(特殊自動車)(平成15年度)」による2002年のDBL、HSL、RL別のTHC排出量を、保有台数あるいは走行量で年次補正することにより算定した。

RLについては、PRTR排出量が存在する2003年以降はPRTR排出量を直接引用した。

なお、燃料蒸発ガスにはメタンが含まれない²ため、THC排出量=NMVOC排出量とした。各排出源別の算定方法概要と使用データは表 A 3-8の通りである。

² 燃料蒸発ガスの具体的な成分組成については、例えば横田他(2011)を参照。

表 A3-8 自動車燃料蒸発ガスに係る排出量算定方法の概要

区分	算定式	使用データ
DBL	$E_n = \sum_p \sum_q \sum_r \left(E_{2002} \times \frac{N_{n,p,q,r}}{N_{2002,p,q,r}} \right)$ <p>E_n : n 年度の DBL 排出量 [t-NMVOC] $N_{n,p,q,r}$: n 年度における都道府県 p、車種 q、規制/未規制別 r のガソリン車保有台数 [台]</p>	<p>E_{2002} : 環境省環境管理技術室「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査（特殊自動車）（平成 15 年度）」による 2002 年の THC 排出量</p> <p>N : 日本自動車工業会「自動車統計月報」、自動車検査登録情報協会「自動車保有車両数（自検協統計）」（各年）を基に設定。</p>
HSL	$E_n = \sum_p \sum_q \left(E_{2002} \times \frac{N_{n,p,q}}{N_{2002,p,q}} \right)$ <p>E_n : n 年度の HSL 排出量 [t-NMVOC] $N_{n,p,q}$: n 年度における車種 p、業態 q のガソリン車保有台数 [台]</p>	<p>E_{2002} : 「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査（特殊自動車）（平成 15 年度）」による 2002 年の THC 排出量</p> <p>N : 「自動車統計月報」、「自動車保有車両数（自検協統計）」を基に設定。</p>
RL	<p>【1990～2002 年】</p> $E_n = \sum_p \sum_q \left(E_{2002} \times \frac{N_{n,p,q}}{N_{2002,p,q}} \times \frac{M_{n,p}}{M_{2002,p}} \right)$ <p>E_n : n 年度の RL 排出量 [t-NMVOC] $N_{n,p,q}$: n 年度における地域 p、規制/未規制別 q のガソリン車保有台数 [台] $M_{n,p}$: n 年度における地域 p のガソリン車走行量 [km]</p> <p>【2003 年～】 PRTR の排出量を引用。</p>	<p>E_{2002} : 「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査（特殊自動車）（平成 15 年度）」による 2002 年の THC 排出量</p> <p>N : 「自動車統計月報」、「自動車保有車両数（自検協統計）」を基に設定。</p> <p>M : 国土交通省「自動車輸送統計調査 月報」（各月）の車種別走行量と、「自動車統計月報」の都道府県・車種別保有台数を基に推計。</p>

A3.1.1.2.d. 自動車（1.A.3.b.）：燃料の揮発（二輪車、NMVOC）

a) 排出源カテゴリーの説明

二輪車の燃料の揮発に伴う NMVOC の排出を扱う。ガソリンを燃料とする二輪車においては、ガソリン自動車同様、気温の変動によってタンク内のガソリン成分が揮発する。ここでは、PRTR 同様、DBL 及び HSL に係る NMVOC 排出を扱う。

b) 方法論

二輪車の燃料蒸発ガスは、PRTR の算定と同様、環境省環境管理技術室「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査（二輪車）（平成 14 年度）」（以下、「H14 環境省環境管理技術室調べ」）による 2001 年の THC 排出量を、保有台数・走行量という活動量で年次補正することにより算定した。

表 A3-9 二輪車燃料蒸発ガスに係る排出量算定方法の概要

区分	算定式	使用データ
DBL	$E_n = \sum_p \sum_q \left(E_{2001} \times \frac{M_{n,p,q}}{M_{2001,p,q}} \right)$ <p>E_n : n 年度の DBL 排出量 [t-NMVOG] $M_{n,p,q}$: n 年度における都道府県 p、車種別 q の二輪車走行量 [km]</p>	<p>E_{2001} : 環境省環境管理技術室「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査(二輪車)(平成 14 年度)」による 2001 年の THC 排出量</p> <p>M : 日本自動車工業会「自動車統計月報」、日本自動車工業会「二輪車市場動向調査」を基に設定。</p>
HSL	$E_n = \sum_p \sum_q \left(E_{2001} \times \frac{M_{n,p}}{M_{2001,p}} \times R_{n,p} \right)$ <p>E_n : n 年度の HSL 排出量 [t-NMVOG] $M_{n,p}$: n 年度における車種 p の二輪車走行量 [km] $R_{n,p}$: n 年度における車種 p の使用係数補正比率</p>	<p>E_{2001} : 「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査(二輪車)(平成 14 年度)」による 2001 年の THC 排出量</p> <p>M : 「自動車統計月報」、「二輪車市場動向調査」を基に設定。</p> <p>R : 車種別の国内向け販売台数(日本自動車工業会ホームページ)と、経過年数別残存率(環境省環境管理技術室調べ)を乗じて算出した年別の保有台数構成比に、経過年数別使用係数(PRTR 届出外排出量の推計方法)を乗じ、合計して算出。</p>

A3.1.1.2.e. 鉄道 (1.A.3.c. : NO_x、CO、NMVOC)

a) 排出源カテゴリーの説明

ディーゼル鉄道車両の燃料の燃焼に伴う前駆物質 (NO_x、CO、NMVOC) の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される NO_x、CO、NMVOC については、低位発熱量換算した燃料消費量に、1996 年改訂 IPCC ガイドラインに示された排出係数のデフォルト値を乗じることによって、排出量を算定した。

■ 排出係数

1996 年改訂 IPCC ガイドラインに示された「Locomotives」のデフォルト値を用いた。

表 A3-10 鉄道の IPCC デフォルト排出係数

ガス	排出係数 [g/MJ(NCV)]
NO _x	1.8
CO	0.61
NMVOC	0.13

(出典) 1996 年改訂 IPCC ガイドライン Volume 3、Page 1.89、Table 1-47

■ 活動量

活動量には、資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」に示された鉄道の軽油消費量を用いた。

A3.1.1.2.f. 船舶 (1.A.3.d. : NO_x、CO、NMVOC、SO_x)

a) 排出源カテゴリーの説明

船舶の燃料の燃焼に伴う前駆物質等 (NO_x、CO、NMVOC、SO_x) の排出を扱う。

b) 方法論

1) NO_x、CO、NMVOC

■ 算定方法

当該排出源から排出される NO_x、CO、NMVOC については、低位発熱量換算した燃料消費量に、1996 年改訂 IPCC ガイドラインに示された排出係数のデフォルト値を乗じることによって、排出量を算定した。

■ 排出係数

1996 年改訂 IPCC ガイドラインに示された「Ocean-Going Ships」のデフォルト値を用いた。

表 A 3-11 船舶の IPCC デフォルト排出係数

ガス	排出係数 [g/MJ(NCV)]
NO _x	1.8
CO	0.18
NMVOC	0.052

(出典) 1996 年改訂 IPCC ガイドライン Volume 3、Page 1.90、Table 1-48

■ 活動量

活動量には、資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」に示された船舶の燃料種別燃料消費量（軽油、A 重油、B 重油、C 重油）を低位発熱量換算した値を用いた。

2) SO_x

■ 算定方法

当該排出源から排出される SO_x については、燃料消費量に排出係数を乗じて、排出量を算定した。

■ 排出係数

船舶の燃料の比重、燃料中の S 分（硫黄分）、及び SO₂ と S の分子量比の積を排出係数とした³。燃料中の硫黄分は法律及び日本産業規格で規制されており、規制値を硫黄分として引用した。

表 A 3-12 船舶の燃料の比重と硫黄分

燃料	比重 [kg/L]	硫黄分 [質量%]
軽油	0.83	0.5 (1990-1991)
		0.2 (1992-1997)
		0.05 (1998-2004)
		0.005 (2005-2006)
		0.001 (2007 以降)
A 重油	0.84	2.0
B 重油	0.91	3.0
C 重油	0.93	3.5

(出典) 軽油の硫黄分：石油連盟（2015）

各重油の硫黄分：日本産業規格 JIS K2205

比重：公害研究対策センター（2000）

■ 活動量

活動量には、資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」に示された船舶の燃料種別燃料消費量（軽油、A 重油、B 重油、C 重油）を用いた。

³ SO_x のほとんどは、SO₂ で構成される。主な排出源では、SO₂ 排出量を計上している。

A3.1.1.3. 燃料（石油及び天然ガス）からの漏出（1.B.2. : NMVOC）

A3.1.1.3.a. 石油の生産（1.B.2.a.ii）

a) 排出源カテゴリーの説明

ここでは油田において原油の生産時に漏出する NMVOC の排出について扱う。なお、稼働中の油田の点検時の NMVOC の漏出については「天然ガス生産時の点検時の漏出（1.B.2.b.ii）」で扱う。

b) 方法論

本排出源については、CH₄、CO₂排出量の算定方法に整合するよう、海上油田・陸上油田別に排出量を算定する。

■ 算定方法

下式の通り、海上・陸上油田別の原油生産量に 2006 年 IPCC ガイドラインにおける NMVOC のデフォルト排出係数を乗じて排出量を算定する。

$$E = \sum_i (AD_i \times EF_i)$$

E : 石油の生産時の漏出に伴う NMVOC 排出量 [kt-NMVOC]

AD_i : 海上・陸上油田別の原油生産量（コンデンセートを含まない）[千 kL]

EF_i : 海上・陸上油田別の原油生産量当たりの排出係数 [kt-NMVOC/千 kL]

■ 排出係数

排出係数には、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている一般原油の陸上油田および海上油田からの漏出の排出係数デフォルト値（陸上油田： 2.25×10^{-3} 、海上油田： 7.4×10^{-7} kt-NMVOC/千 kL）を用いる。なお、陸上油田の排出係数はデフォルト値（ $1.80 \times 10^{-6} \sim 4.50 \times 10^{-3}$ ）の中間値とする。

■ 活動量

活動量には、海上・陸上油田別の原油生産量（コンデンセートを含まない）を用いる。このうち海上油田における原油生産量（コンデンセートを含まない）については、コンデンセート生産量に国内における天然ガス総生産量中の海上油田分の割合を乗じて海上油田におけるコンデンセート生産量を推計し、海上油田における原油生産量からこの推計値を減じて求める。また、陸上油田における原油生産量（コンデンセートを含まない）については、国内における原油総生産量（コンデンセートを含まない）から上記の海上油田における原油生産量（コンデンセートを含まない）を減じて求める。天然ガス、原油、コンデンセートの国内における総生産量は、経済産業省「エネルギー生産・需給統計年報」（1990～2000 年度）、「資源・エネルギー統計年報」（2001～2010 年度）及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」（2011 年度以降）を用いて把握、また海上油田からの天然ガス、原油生産量は、天然ガス鉱業会「天然ガス資料年報」を用いて把握する。

A3.1.1.3.b. 石油の輸送（1.B.2.a.iii）：原油の流通

a) 排出源カテゴリーの説明

国産の原油が流通する際に、貯蔵タンクにおける呼吸ロス・受け入れロス、ローリー車等への積出し作業時に蒸発ガスとして NMVOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

国内の原油生産量に生産量当たりの NMVOC 排出係数を乗じ、石油の輸送に係る NMVOC 排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

E : 石油の輸送に係る NMVOC 排出量 [t-NMVOC]

AD : 国内原油生産量 [千 kL]

EF : 原油生産量当たりの排出係数 [t-NMVOC/千 kL]

■ 排出係数

環境省「揮発性有機化合物 (VOC) 排出インベントリ作成等に関する調査」(以後、「VOC 排出インベントリ調査」)において算定された「原油(蒸発ガス)」に係る排出量と、活動量(原油生産量)を用いて排出係数を設定する。VOC 排出インベントリ調査に示されている排出量は 2000 年度と 2005 年度以降に限られるため、2004 年度以前の排出係数については、天然ガス鉱業会提供の排出量算定結果を基に⁴、表 A 3-13 に示す通りに設定する。

表 A 3-13 石油の輸送に係る排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～2004 年度	天然ガス鉱業会提供の 1990～2004 年度における排出量データを活動量(原油生産量)で割り戻して設定。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査における 2005 年度以降各年度の排出量を活動量(原油生産量)で割り戻して設定。

■ 活動量

「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」における原油生産量(コンデンセートを含む)を活動量とする。

A3.1.1.3.c. 石油の輸送 (1.B.2.a.iii) : 船舶

a) 排出源カテゴリーの説明

ガソリン等の液体貨物を海上輸送するプロセスにおいて、またタンクのガスフリー作業及び船舶への積荷時において NMVOC が発生する。原油タンカー、ガソリンや化学薬品を輸送するプロダクトタンカーの 2 種における船舶のカーゴオペレーションから発生する NMVOC を扱う。

なお、船舶のその他の積荷として、ナフサも揮発性が高く NMVOC が排出される可能性があるが、自己着火性が高いため、静電気発生が完全に抑えられていないプロダクトタンカーでの運搬は安全上禁止されており、気密性が高く耐圧タンク構造になっているケミカルタンカーによって輸送することとなっている。したがってナフサの輸送・積荷時において NMVOC が大気中に排出されることはないと考えられるため、算定対象としていない(化学薬品も基本的にはケミカルタンカーで輸送されるが、一部がプロダクトタンカーで輸送されることもあるため、過少推計とならないように全量を算定対象としている)。

また、本排出量のうち、「原油」、「石油製品(ガソリン)」起源の VOC 排出については、「1.B.2.a.iv. 石油の精製及び貯蔵」の排出にも含まれるため、当該排出量を「1.B.2.a.iv. 石油の精製及び貯蔵」における排出量から差し引いたうえで本カテゴリーにおいて計上する。

⁴ 天然ガス鉱業会提供値における 5 種類の排出源別(「呼吸作用・受入れ作業」、「積出作業(ローリー)」、「リボイラーベント(GDH)」、「放散ガス」、「脱 CO₂ 装置」)の排出量のうち、VOC 排出インベントリ調査に倣い、初めの 2 種類の排出源を本サブカテゴリーの排出量とし、残りの排出源を「天然ガスの処理(1.B.2.b.iii)」の排出量とする。

さらに、「化学薬品」起源の VOC 排出についても「2.工業プロセスと製品の使用」分野にて算定する化学品の製造からの排出にも含まれるため、本排出量を「2.工業プロセスと製品の使用」分野から差し引いたうえで、本カテゴリーに計上する。

b) 方法論

■ 算定方法

国土交通省「港湾統計年報」の「輸出貨物品種別仕向国別表」及び「移出貨物品種別仕向港別表」に示された、「原油」、「石油製品（ガソリン）」及び「化学薬品」の、各港湾の輸出及び移出量（国内の別の地域に輸送された量）に排出係数を乗じて NMVOC 排出量を算定する。

排出量算定式は下式の通り。

$$E = \sum_i (AD_i \times EF_i)$$

- E : 船舶からの蒸発起源 NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
- AD_i : 貨物 i の輸送量（輸出量+移出量）[t]
- EF_i : 貨物 i の荷役起源排出係数 [kg-NMVOC/t]
- i : 貨物種（原油・ガソリン・化学薬品）

■ 排出係数

排出係数は表 A 3-14 の通り設定する。

表 A 3-14 船舶からの蒸発起源 NMVOC 排出係数

活動量		排出係数 [kg-NMVOC/t]
原油	Vapor recovery あり (2007 年以降の喜入港のみ)	0.03
	Vapor recovery なし	0.14
ガソリン	荷役時	0.12
	ガスフリー時	0.14
化学薬品	ベンゼン	0.011
	メタノール	0.006
	トルエン	0.004
	ジクロロエタン	0.016
	アセトン	0.023

(出典) 海洋政策研究財団 (2006)

■ 活動量

活動量は、「港湾統計年報」の「輸出貨物品種別仕向国別表」及び「移出貨物品種別仕向港別表」における原油、石油製品及び化学薬品の移出・輸入量を基に表 A 3-15 の通り設定する。

表 A 3-15 船舶からの蒸発起源 NMVOC に係る活動量の設定方法

活動量	活動量設定方法
原油	原油の移出量・輸出量
ガソリン	石油製品の移出量・輸出量に、「資源・エネルギー統計年報」における石油製品の国内向販売量・輸出量に占めるガソリンの割合を乗じて算定。
化学薬品	化学薬品の移出量・輸出量に、化学薬品中の NMVOC が占める割合を乗じて算定。 化学薬品中の NMVOC が占める割合については、「港湾統計年報」における化学薬品の移出量に対する、NMVOC の発生が見込まれる化学薬品 5 品目（ベンゼン、メタノール、トルエン、ジクロロエタン、アセトン）輸送量実績の割合（海洋政策研究財団、2012）を使用（2003 年実績）。

(注) 各活動量は暦年データのため、当該年次データの 75%と次年次データの 25%の合計により年度値に換算を行う。

A3.1.1.3.d. 石油の精製及び貯蔵（1.B.2.a.iv）：製油所における漏出

a) 排出源カテゴリーの説明

原油を精製して石油製品等を製造する際に、原油成分の漏洩により NMVOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

製油所設備能力（BPSD (Barrel per Stream Day)：常圧蒸留装置における 1 稼働日あたりの石油製品生産量）に年間稼働日数を乗じて製油所の年間生産量を算定し、それに排出係数を乗じることによって排出量を算定する。年間稼働日数は、年間日数（365 日、うるう年は 366 日）に年間稼働率を乗じて算出する。

$$E = AD \times D \times R \times EF$$

E ：製油所における漏出に伴う NMVOC 排出量 [g-NMVOC/年]
 AD ：製油所設備能力 [BPSD]
 D ：年間日数（365 日※うるう年は 366 日）
 R ：年間稼働率 [%]
 EF ：排出係数 [g-NMVOC/BPSD]

■ 排出係数

排出係数は、VOC 排出インベントリ調査に従い、計量計画研究所（2000）に記載の 5.675 [kg/日/10⁵ BPSD] を排出係数として設定する。

■ 活動量

活動量は、VOC 排出インベントリ調査に従い、石油通信社「石油資料」における「常圧蒸留装置における 1 稼働日あたりの石油製品生産量（BPSD）」を用いる。また、常圧蒸留装置の年間稼働日数は、365 日（1991, 1995, 1999, 2003, 2007, 2011, 2015 年度はうるう年のため 366 日）に、「石油資料」による常圧蒸留装置の年間稼働率（= 年間処理量 [bbl/年] ÷ 年間処理能力 [bbl/年]）を乗じて算出する。

A3.1.1.3.e. 石油の精製及び貯蔵（1.B.2.a.iv）：潤滑油の製造

a) 排出源カテゴリーの説明

潤滑油を製造する際の、脱ろう、脱れき工程で NMVOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される NMVOC については、潤滑油の国内向販売量に、トルエン及びメチルエチルケトンの日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定する。

■ 排出係数

国内の実測例に基づき、トルエンとメチルエチルケトンのそれぞれについて排出係数を設定する。

表 A3-16 潤滑油製造におけるトルエンとメチルエチルケトンの排出係数

ガス	排出係数 [g/kL]
トルエン	333.2
メチルエチルケトン	415.5

（出典）計量計画研究所（1987）

■ 活動量

活動量には、「エネルギー生産・需給統計年報」及び「資源・エネルギー統計年報」に示された潤滑油の国内向販売量を用いる。

A3.1.1.3.f. 石油の精製及び貯蔵（1.B.2.a.iv）：貯蔵・出荷施設における漏出

a) 排出源カテゴリーの説明

原油基地、製油所、油槽所における燃料（ガソリン、原油、ナフサ等）の貯蔵・出荷の際に、燃料蒸発ガスの漏出に伴う NMVOC の排出が起こる。

貯蔵施設からの排出としては、固定屋根式タンクの呼吸ロス及び受入ロス、浮屋根式タンクの払出ロスが存在する。また、出荷施設からの排出としては、タンカー、タンク貨車、タンクローリー等に原油または石油製品を積み込む際の出荷ロスがある。

b) 方法論

■ 算定方法

「原油、ガソリン、ナフサの受入量」を活動量とし、受入量当たりの排出係数を乗じることによって、原油基地・製油所・油槽所における燃料の貯蔵・出荷に係る NMVOC 排出量を算定する。

$$E = (AD_1 + AD_2 + AD_3) \times EF$$

E : 燃料の貯蔵・出荷施設における漏出に伴う NMVOC 排出量 [kg-NMVOC]

AD_1 : 原油の受入量 [kL]

AD_2 : ガソリンの受入量 [kL]

AD_3 : ナフサの受入量 [kL]

EF : 石油製品の受入量当たりの排出係数 [kg-NMVOC/kL]

なお、上記排出量算定結果には、「石油の輸送（1.B.2.a.iii.）」において計上する船舶による「原油」、「石油製品（ガソリン）」荷役時の排出量が含まれるため、本カテゴリーでは当該排出量を差し引いて計上する。

■ 排出係数

VOC 排出インベントリ調査において算定された原油基地・製油所・油槽所における燃料の貯蔵・出荷に係る排出量と、後述の活動量（原油、ガソリン、ナフサの受入量）を用いて設定する。VOC 排出インベントリ調査に示されている排出量は 2000 年度と 2005 年度以降に限られるため、1990 年度以降の各年度における設定方法は表 A 3-17 に示す通りとする。

1990～1999 年度については、自主行動計画による取り組みの開始前であり、対策の普及状況等に関する情報がないため、2000 年度の排出係数を一律で適用する。

また、2001～2003 年度については、石油連盟加盟企業において継続的に自主的対策が実施されてきたことから、内挿補間により、排出係数が直線的に低下していると想定する。

表 A3-17 原油基地・製油所・油槽所における燃料の貯蔵・出荷に係る排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査における排出量を活動量（原油処理量、ガソリン・ナフサ受入量の合計値）で割り戻して設定。
2001～2003 年度	2000 年度と 2004 年度の値から内挿補間により算出。
2004 年度	石油連盟の自主行動計画で報告されている排出量を活動量（原油処理量、ガソリン・ナフサ受入量の合計値）で割り戻して設定。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査における排出量を活動量（原油処理量、ガソリン・ナフサ受入量の合計値）で割り戻して設定。

■ 活動量

「エネルギー生産・需給統計年報」及び「資源・エネルギー統計年報」における原油処理量、及びガソリン・ナフサの受入量を活動量とする。なお、原油については、受入量が未確認のため、処理量を使用する。

A3.1.1.3.g. 石油製品の供給（1.B.2.a.v）：給油所における漏出

a) 排出源カテゴリーの説明

給油所において、地下タンクにガソリンを受け入れる際（受入ロス）や自動車へガソリンを給油する際（給油ロス）にガソリン蒸発ガス起源の NMVOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

都道府県別・月別ガソリン販売量に、都道府県別・月別ガソリン販売量当たり排出係数（受入ロス・給油ロス）を乗じて都道府県別・月別に排出量を算定する。都道府県別・月別に排出量を算定することで、月別の気温や夏用ガソリンの蒸気圧低下が排出量に与える影響等を考慮する。

$$E = \sum_{i,j} (AD_{i,j} \times EF_{i,j})$$

E : 給油所からの NMVOC 排出量 [kg-NMVOC]

$AD_{i,j}$: 都道府県 i の j 月におけるガソリン販売量 [kL]

$EF_{i,j}$: 都道府県 i の j 月におけるガソリン販売量当たりの排出係数（受入ロス・給油ロス）
[kg-NMVOC/kL]

■ 排出係数

1) 受入ロス

VOC 排出インベントリ調査に示された、資源エネルギー庁（1975）を基にした以下の排出係数算定式に従い、都道府県別・月別の気温を考慮した受入ロスに係る排出係数を設定する。各都道府県における月別平均気温については、気象庁「気象統計情報」における各都道府県の県庁所在地における月別平均気温を使用する。

$$EF_{i,j} = (0.46 \times T_{i,j} + 13.92) / 21$$

$EF_{i,j}$: 都道府県 i の j 月における受入ロス排出係数 [kg-NMVOC/kL]

$T_{i,j}$: 都道府県 i の j 月における平均気温 [°C]

また、受入時の蒸気回収装置の設置が条例により定められている 7 都府県（埼玉県、東京

都、神奈川県、福井県、愛知県、京都府、大阪府)については、VOC 排出インベントリ調査に従い、85%が回収されると仮定し、各条例適用年度以降について0.15 を乗じた値を最終的な受入ロスによる排出係数とする。

さらに、夏季においては、ガソリンの蒸気圧を抑制する取組が実施されていることから、VOC 排出インベントリ調査に従い、ガソリン蒸気圧の低減効果として、夏季(6~9月)の排出係数には一律0.9 を乗じる。

2) 給油ロス

給油ロスのNMVOC 排出係数については、国内の試験結果に基づき、VOC 排出インベントリ調査において構築された下記算定式を使用して設定することとする。パラメータの設定に使用する都道府県別・月別平均気温については、受入ロスの排出係数と同様の値を使用する。

$$EF_{i,j} = 0.0359 \times A_{i,j} - 0.0486 \times B_{i,j} - 0.0092 \times C + 0.0149 \times D - 0.1804$$

- $EF_{i,j}$: 都道府県 i の j 月における給油ロス排出係数 [kg-NMVOC/kL]
- $A_{i,j}$: 都道府県 i の j 月における車両タンク内燃料温度 [°C]
- $B_{i,j}$: 都道府県 i の j 月における車両タンク内燃料温度と給油燃料温度の差 [°C]
- C : 給油速度 [L/min]
- D : リード蒸気圧 [kPa]

表 A3-18 給油ロス排出係数算定式の各パラメータの設定方法

パラメータ	設定方法
$A_{i,j}$: 都道府県 i の j 月における車両タンク内燃料温度 [°C]	都道府県 i の j 月における平均気温 $T_{i,j}$ [°C] +5°C
$B_{i,j}$: 都道府県 i の j 月における車両タンク内燃料温度と給油燃料温度の差 [°C]	都道府県 i の j 月における平均気温 $T_{i,j}$ [°C] に対し、以下の通り設定する。 $T_{i,j} < 15$: $T_{i,j} + 5$ $15 \leq T_{i,j} < 20$: $T_{i,j} + 2.5$ $20 \leq T_{i,j} < 25$: $T_{i,j}$ $25 \leq T_{i,j} < 30$: $T_{i,j} - 2.5$ $30 \leq T_{i,j}$: $T_{i,j} - 5$
C : 給油速度 [L/min]	35 [L/min]
D : リード蒸気圧 [kPa]	6~9月 : 63.2 [kPa]、10~5月 : 86.0 [kPa]

(出典) 環境省「VOC 排出インベントリ調査」

■ 活動量

「エネルギー生産・需給統計年報」及び「資源・エネルギー統計年報」における国内向月別ガソリン販売量を、石油連盟「都道府県別石油製品販売総括」における都道府県別年間ガソリン販売量により按分して得られる都道府県別・月別の国内向ガソリン販売量を活動量に使用する。

A3.1.1.3.h. 天然ガスの生産 (1.B.2.b.ii)

a) 排出源カテゴリーの説明

ここではガス田において天然ガスの生産時に漏出するNMVOC について扱う。なお、生産井点検時のNMVOC の漏出については「天然ガス生産井の点検時の漏出 (1.B.2.b.ii.)」で扱う。

b) 方法論

本排出源については、CH₄、CO₂排出量の算定方法に整合するよう、海上ガス田・陸上ガス田別に排出量を算定する。

■ 算定方法

海上・陸上ガス田別の天然ガス生産量に2006年IPCCガイドラインにおけるNMVOCのデフォルト排出係数を乗じて排出量を算定する。

$$E = \sum_i (AD_i \times EF_i)$$

E : 天然ガス生産時の漏出に伴うNMVOC排出量 [kt-NMVOC]

AD_i : 海上・陸上ガス田別の天然ガス生産量 [百万 m³]

EF_i : 海上・陸上ガス田別の天然ガス生産量当たりの排出係数 [kt-NMVOC/百万 m³]

■ 排出係数

排出係数については、2006年IPCCガイドラインに示されているガス生産の陸上ガス田及び海上ガス田からの漏出の排出係数デフォルト値（陸上ガス田：5.5×10⁻⁴、海上ガス田：9.1×10⁻⁵ kt-NMVOC/百万 m³）を用いる。

■ 活動量

海上ガス田からの天然ガス生産量は、「天然ガス資料年報」の海域からの天然ガス生産量を用いる。また、陸上ガス田からの天然ガス生産量は、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された天然ガス総生産量から、上記海上ガス田における天然ガス生産量を減じて算出する。

A3.1.1.3.i. 天然ガス生産井の点検時の漏出 (1.B.2.b.ii)

a) 排出源カテゴリーの説明

石油・天然ガスの生産井の点検時に測定器を井中に降ろす際に漏出するNMVOCの排出を扱う。

b) 方法論

点検時の油田・ガス田に伴う排出量については、2006年IPCCガイドラインでは活動量としては原油生産量を用いることとされているが、天然ガス井の点検に伴う排出量と原油生産量との相関関係が不明であることから、CO₂、CH₄、N₂O排出量の算定においては、IPCC「グッドプラクティスガイダンス及び不確実性管理報告書」(2000) (以後、GPG 2000) に従い原油及び天然ガスの生産井数を活動量として用いている。しかし、NMVOCについては、GPG 2000に生産井数に基づく排出係数が示されていないことから、2006年IPCCガイドラインに基づく原油生産量を用いた算定方法を採用することとする。

■ 算定方法

原油生産量にNMVOCのデフォルト排出係数を乗じて排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

E : 油田・ガス田の点検時のNMVOC排出量 [kt-NMVOC]

AD : 原油生産量 [千 kL]

EF : 原油生産量当たりの排出係数 [kt-NMVOC/千 kL]

■ 排出係数

排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示されている点検時の油田・ガス田のフレアリング及び通気弁における原油生産量当たりの排出係数デフォルト値（ 1.7×10^{-5} kt-NMVOC/千 kL）を用いる。なお、CO₂、CH₄、N₂O 排出量の算定としては、点検時の排出としてフレアリング及び通気弁以外のプロセスによる排出も計上されているが、点検時の NMVOC 排出量算定に使用可能な排出係数は 2006年 IPCC ガイドラインに示された点検時のフレアリング及び通気弁の排出係数デフォルト値のみのため、当該排出係数を用いることとする。

■ 活動量

「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における原油生産量を活動量とする。

A3.1.1.3.j. 天然ガスの処理（1.B.2.b.iii）

a) 排出源カテゴリーの説明

採掘された天然ガスが販売先に至るまでの流通過程において、天然ガスに含まれる水分や不純物（炭酸ガス等）を除去する装置からのベーパー・水蒸気等により、あるいは輸送パイプラインの移設工事等の際に大気放散されることにより天然ガス由来の NMVOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

国内の天然ガス生産量に生産量当たりの NMVOC 排出係数を乗じ、天然ガスの処理に係る NMVOC 排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

E : 天然ガスの処理に係る NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
 AD : 天然ガス生産量 [百万 m³]
 EF : 天然ガス生産量当たりの排出係数 [t-NMVOC/百万 m³]

■ 排出係数

VOC 排出インベントリ調査において算定された「天然ガス」に係る排出量（天然ガス鉱業会の自主行動計画報告値から算定）と、後述する活動量（国内天然ガス生産量）を用いて排出係数を設定した。VOC 排出インベントリ調査に示されている排出量は 2000 年度と 2005 年度以降に限られるため、2004 年度以前の排出係数については、「石油の輸送（1.B.2.a.iii）」同様に、天然ガス鉱業会提供の排出量算定結果を使用し、表 A 3-19 に示す通りに設定する。

表 A 3-19 天然ガスの処理に係る排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～2004 年度	天然ガス鉱業会提供の 1990～2004 年度における排出量データを活動量（天然ガス生産量）で割り戻して設定。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査における 2005 年度以降各年度の排出量を活動量（天然ガス生産量）で割り戻して設定。

■ 活動量

「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年

報 資源・窯業・建材統計編」における国内の天然ガス生産量を活動量とする。

■ 完全性

当該排出源からの排出量は「天然ガスの輸送及び貯蔵（1.B.2.b.iv）」及び「通気弁（天然ガス産業）（1.B.2.c.Venting.ii）」の排出量を包含する。

A3.1.1.3.k. 天然ガスの供給（1.B.2.b.v）：都市ガス製造

a) 排出源カテゴリの説明

都市ガス製造におけるナフサタンクからの漏洩により、NMVOC が排出される。我が国の都市ガス産業界では、2005 年度にナフサを原料とする低カロリーガスから LNG 等を原料とする高カロリーガスへの全面転換が完了したことにより、ナフサの使用は取りやめられており、2006 年度以降、排出活動は存在していない。

b) 方法論

■ 算定方法

都市ガス製造における原料としての揮発油消費量に消費量当たりの NMVOC 排出係数を乗じ、都市ガス製造所におけるナフサタンクからの NMVOC 排出量を算定する。なお、2006 年度以降については、排出活動が存在しないため、「NO」と報告する。

$$E = AD \times EF$$

E : 都市ガス製造における NMVOC 排出量 [t-NMVOC]

AD : 都市ガス製造における原料揮発油消費量 [kL]

EF : 原料揮発油消費量当たりの排出係数 [t-NMVOC/kL]

■ 排出係数

VOC 排出インベントリ調査において算定された「ガス製造所」に係る排出量（日本ガス協会の自主行動計画報告値から算定）と、都市ガス製造における揮発油の原料消費量を基に排出係数を設定する。VOC 排出インベントリ調査に示されている排出量は 2000 年度と 2005 年度以降に限られるため、各年度の排出係数については、表 A 3-20 に示す通りに設定する。

表 A 3-20 都市ガス製造に係る排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査における 2000 年度の排出量を活動量（揮発油原料消費量）で割り戻して設定。
2001～2003 年度	2000 年度と 2004 年度の排出係数より、内挿補間により算出。
2004 年度	自主行動計画において報告されている 2004 年度の排出量を活動量（揮発油原料消費量）で割り戻して設定。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査における 2005 年度以降の排出量を活動量（揮発油原料消費量）で割り戻して設定。

■ 活動量

資源エネルギー庁「ガス事業生産動態統計」における揮発油の原料消費量を活動量とする。

A3.1.1.3.l. 通気弁（石油産業）（1.B.2.c.Venting.i）

a) 排出源カテゴリの説明

石油産業における通気弁からの NMVOC の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

原油生産量に 2006 年 IPCC ガイドラインにおける NMVOC のデフォルト排出係数を乗じて排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

E : 油田の通気弁における NMVOC 排出量 [kt-NMVOC]

AD : 原油生産量 [千 kL]

EF : 原油生産量当たりの排出係数 [kt-NMVOC/千 kL]

■ 排出係数

排出係数については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている油田の通気弁における排出係数デフォルト値 (4.3×10^{-4} kt-NMVOC/千 kL) を用いる。

■ 活動量

活動量には、「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における原油生産量を使用する。

A3.1.1.3.m. フレアリング（石油産業）（1.B.2.c.Flaring.i）

a) 排出源カテゴリーの説明

石油産業におけるフレアリングからの NMVOC の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

原油生産量に 2006 年 IPCC ガイドラインにおける NMVOC のデフォルト排出係数を乗じて排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

E : 油田のフレアリングにおける NMVOC 排出量 [kt-NMVOC]

AD : 原油生産量 [千 kL]

EF : 原料生産量当たりの排出係数 [kt-NMVOC/千 kL]

■ 排出係数

排出係数については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている油田のフレアリングにおける排出係数デフォルト値 (2.1×10^{-5} kt-NMVOC/千 kL) を用いる。

■ 活動量

「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における原油生産量を活動量とする。

A3.1.1.3.n. フレアリング（天然ガス産業）（1.B.2.c.Flaring.ii）

a) 排出源カテゴリーの説明

天然ガス産業におけるフレアリングからの NMVOC の排出を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

天然ガス生産量に 2006 年 IPCC ガイドラインにおける NMVOC のデフォルト排出係数を乗じて排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

E : ガス田のフレアリングにおける NMVOC 排出量 [kt-NMVOC]

AD : 天然ガス生産量 [千 m³]

EF : 天然ガス生産量当たりの排出係数 [kt-NMVOC/千 m³]

■ 排出係数

排出係数に、2006 年 IPCC ガイドラインに示されているガス田のフレアリングにおける排出係数デフォルト値 (6.2×10^{-7} kt-NMVOC/千 kL) を用いる。

■ 活動量

「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における天然ガス生産量を活動量とする。

A3.1.1.3.o. フレアリング（コンバインド）（1.B.2.c.Flaring.iii）

a) 排出源カテゴリーの説明

我が国では統計上、石油と天然ガスの 2 区分で整理を行っており、石油産業・天然ガス産業におけるフレアリングからの漏出のうち、どちらの産業におけるフレアリングであるか区別できる漏出については、「フレアリング（石油産業）（1.B.2.c.Flaring.i）」または「フレアリング（天然ガス産業）（1.B.2.c.Flaring.ii）」にて報告し、当該分野では石油産業と天然ガス産業の区別ができない、石油及び天然ガスの試掘及び生産テストに伴う漏出による NMVOC の排出を扱う。

b) 方法論

試掘・生産テスト時の油田・ガス田のフレアリングに伴う排出量については、2006 年 IPCC ガイドラインでは活動量としては原油生産量を用いることとされているが、CO₂、CH₄、N₂O 排出量の算定においては、天然ガスの試掘やテストに伴う排出量と原油生産量との相関関係や、試掘・生産テスト時の排出と商業プラントからの生産量との相関関係が不明であることから、点検時の排出と同様、GPG2000 に従い試掘井・テスト井数を活動量として用いている。特に試掘時の排出については、我が国の場合、既存の生産井数と比較して井数が極めて少なく、原油生産量を活動量とすると過大推計となる懸念がある。しかし、GPG2000 には試掘井・テスト井数を活動量とする NMVOC の排出係数デフォルト値は示されていないことから、NMVOC については、2006 年 IPCC ガイドラインに従い、原油生産量を活動量とする算定方法を採用する。また、試掘時と生産テスト時のフレアリングに伴う NMVOC 排出については石油・天然ガス産業別の排出係数デフォルト値が示されていないが、両者を統合した排出係数デフォルト値は 2006 年 IPCC ガイドラインに示されているため、本カテゴリーにおいて、まとめて算定・計上する。

■ 算定方法

原油生産量に 2006 年 IPCC ガイドラインにおける NMVOC のデフォルト排出係数を乗じて排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

- E : 油田・ガス田の試掘・生産テスト時のフレアリングにおける NMVOC 排出量 [kt-NMVOC]
 AD : 原油生産量 [千 kL]
 EF : 原油生産量当たりの排出係数 [kt-NMVOC/千 kL]

■ 排出係数

排出係数については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている試掘・生産テスト時のフレアリング及び通気弁における原油生産量当たりの排出係数デフォルト値の和（試掘： 8.7×10^{-7} kt-NMVOC/千 kL、生産テスト： 1.2×10^{-5} kt-NMVOC/千 kL）を用いる。

■ 活動量

経済産業省「エネルギー生産・需給統計年報」、「資源・エネルギー統計年報」及び「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」に示された我が国における原油生産量を活動量とする。

A3.1.2. 工業プロセス及び製品の使用分野

A3.1.2.1. 鉱物産業、化学産業、金属製造、その他製品の製造（2.A.、2.B.、2.C.、2.D. : NO_x、SO_x）

a) 排出源カテゴリーの説明

鉱物製品、化学産業、金属の生産、その他製品の製造段階において、NO_x、SO_xが排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される NO_x と SO_x については、環境省「大気汚染物質排出量総合調査」のデータを用い、以下に示す施設種または業種に該当しないものを対象に、工業プロセス及び製品の使用（IPPU）分野における排出量を分離することによって算定した。

【施設種】 [0101～0103 : ボイラー]、[0601～0618 : 金属圧延加熱炉、金属熱処理炉、金属鍛造炉]、[1101～1106 : 乾燥炉]、[1301～1304 : 廃棄物焼却炉]、[2901～3202 : ガスタービン、ディーゼル機関、ガス機関、ガソリン機関]

【業種】 [A～D : 旅館・飲食店、医療業・教育学研究機関、浴場業、洗たく業]、[F～L : 農業・漁業、鉱業、建設業、電気業、ガス業、熱供給業、ビル暖房・その他事業場]

○ NO_x

原料が [44 : 原料炭] または [45 : 原料コークス] に該当する場合は次式を用いた。

$$E = \sum \{EF_{NO_x} \times A \times (1-R)\}$$

E : 原料炭または原料コークスからの NO_x 排出量 [t-NO_x]

EF_{NO_x} : 各原料の NO_x 排出係数 [t-NO_x/kcal]

A : 各原料のエネルギー消費量 [kcal]

R : 脱硝率 [%]

原料が [41 : 鉄・鉄鉱石] または [46 : その他原料] に該当する場合は次式を用いた。

$$E = \sum \{N \times (1-R)\}$$

E : 鉄・鉄鉱石またはその他原料からの NO_x 排出量 [t-NO_x]

N : 各原料の窒素含有量 [t-NO_x]

R : 脱硝率 [%]

ただし、上式より算定された IPPU 分野の排出量が「大気汚染物質排出量総合調査」に記載される排出量より大きくなる場合は、記載された排出量を IPPU 分野の排出量とした。また、原料のうち [42：硫化鉱] と [43：非鉄金属鉱石] については、データがほとんど得られないため、算定対象から除外した。

○ SO_x

原料 ([41：鉄・鉄鉱石] ～ [46：その他原料]) の消費量及び硫黄含有量から IPPU 分野における排出量を算定した。また、これを「大気汚染物質排出量総合調査」に記載された排出量から差し引くことによってエネルギー分野における排出量を算定した。

$$E = \Sigma \{S \times (1 - R)\}$$

<i>E</i>	: SO _x 排出量 [t-SO _x]
<i>S</i>	: 各原料の硫黄含有量 [t-SO _x]
<i>R</i>	: 脱硝率 [%]

■ 排出係数

○ 原料炭または原料コークスの NO_x 排出係数

原料炭または原料コークスからの NO_x 排出量の算定に用いられる各原料の NO_x 排出係数は、環境省「大気汚染物質排出量総合調査」に基づいて施設種別原料種別に設定した。

○ 脱硝率

脱硝率は、以下の式に従って算定した。

$$R = RE \times (O_{removal} / O_{furnace}) \times (P / E)$$

<i>R</i>	: 脱硝率 [%]
<i>RE</i>	: 脱硝効率
<i>O_{removal}</i>	: 脱硝装置稼働時間 [h/yr]
<i>O_{furnace}</i>	: 操炉時間 [h/yr]
<i>P</i>	: 脱硝装置処理能力 [m ³ /yr]
<i>E</i>	: 最大排ガス量 [m ³ /yr]

$$RE = (V_{before} - V_{after}) / V_{SS}$$

<i>RE</i>	: 脱硝効率
<i>V_{before}</i>	: 処理前の NO _x 量
<i>V_{after}</i>	: 処理後の NO _x 量
<i>V_{SS}</i>	: ばい煙量

いずれの項目とも、環境省「大気汚染物質排出量総合調査」のデータを使用。

○ 脱硫率

脱硫率は、以下の式に従って算定した。

$$R = DE \times (O_{removal} / O_{furnace}) \times (P / E)$$

<i>R</i>	: 脱硫率 [%]
<i>DE</i>	: 脱硫効率
<i>O_{removal}</i>	: 脱硫装置稼働時間 [h/yr]
<i>O_{furnace}</i>	: 操炉時間 [h/yr]
<i>P</i>	: 脱硫装置処理能力 [m ³ /yr]
<i>E</i>	: 最大排ガス量 [m ³ /yr]

$$DE = (V_{before} - V_{after}) / V_{SS}$$

<i>DE</i>	: 脱硫効率
<i>V_{before}</i>	: 処理前の SO _x 量
<i>V_{after}</i>	: 処理後の SO _x 量
<i>V_{SS}</i>	: ばい煙量

いずれの項目とも、環境省「大気汚染物質排出量総合調査」のデータを使用。

■ 活動量

○ 原料炭または原料コークスのエネルギー消費量

環境省「大気汚染物質排出量総合調査」に示された原料消費量（[44：原料炭]、[45：原料コークス]）に、高位発熱量を乗じることによって算定した。

○ 鉄・鉄鉱石またはその他原料の原料分窒素含有量

環境省「大気汚染物質排出量総合調査」に示された原料（[41：鉄・鉄鉱石]、[46：その他原料]）の窒素含有率及び消費量に基づいて算出された窒素含有率の加重平均値に、原料消費量を乗じることによって算定した。

○ 各種原料の原料分硫黄含有量

環境省「大気汚染物質排出量総合調査」に示された原料（[41：鉄・鉄鉱石]～[46：その他原料]）の硫黄含有率及び消費量に基づいて算出された硫黄含有率の加重平均値に、原料消費量を乗じることによって算定した。

A3.1.2.2. 溶剤及び燃料の非エネルギー用途の使用 - 溶剤の使用（2.D.3.）（NMVOC）

A3.1.2.2.a. 塗料の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

工業製品や建築物等の塗装等、塗料の使用段階⁵において、塗料中含有溶剤及び希釈用溶剤由来の NMVOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

塗料販売量に塗料販売量当たりの NMVOC 排出係数を乗じること、塗料の使用に係る NMVOC 排出量を算定した。

$$E = AD \times EF$$

<i>E</i>	: 塗料の使用に伴う NMVOC 排出量 [千 t-NMVOC]
<i>AD</i>	: 塗料販売量 [千 t]
<i>EF</i>	: 塗料販売量当たりの排出係数 [t-NMVOC/t]

■ 排出係数

（社）日本塗料工業会において、塗料の使用に係る VOC 排出量の調査が 2000 年度以降毎年行われているため（2002 年度を除く）、この排出量を塗料販売量で割り戻した塗料販売量当たりの NMVOC 排出量を塗料の使用に係る排出係数とした。

1999 年度以前の排出係数については、一部では水性塗料への移行や、VOC 処理装置の導入が始まっていた可能性があり、2000 年度以降、明確な減少トレンドとなっているが、排出係数を推定するための定量的な情報が確認できないため、2000 年度から大気汚染防止法に基づく自主的取組の目標年度である 2010 年度までの傾向を基に、外挿補間により設定することとし

⁵ 塗料の製造段階での NMVOC 排出は「A3.1.2.2.n 化学品の製造」において計上する。

た（表 A 3-21 参照）。

表 A 3-21 塗料の使用に係る NMVOC 排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000～2010 年度までのトレンドから外挿推計。
2000～2001 年度	塗料の使用に係る VOC 排出量（（社）日本塗料工業会調べ）における各年度の排出量を、各年度の塗料販売量で割り戻して設定。
2002 年度	2001 年度と 2003 年度の排出量を活動量で割り戻して算出した排出係数より、内挿補間により算出。
2003 年度～	塗料の使用に係る VOC 排出量（（社）日本塗料工業会調べ）における 2003 年度以降各年度の排出量を、各年度の塗料販売量で割り戻して設定。

■ 活動量

経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」（以下、化学工業統計年報）における塗料販売量を活動量とする。

A3.1.2.2.b. ドライクリーニング

a) 排出源カテゴリーの説明

衣服のドライクリーニングを行う際、ドライクリーニング洗濯設備から、洗濯に使用するドライクリーニング溶剤由来の NMVOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

「ドライクリーニング溶剤の使用量」から「廃棄物として移動する量」（カートリッジ付着分、蒸留スラッジ含有分）を差し引いて算出した。

$$E = AD - A - B$$

- E : ドライクリーニング溶剤の使用に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
- AD : ドライクリーニング溶剤の使用量（テトラクロロエチレン、工業ガソリン 5 号）[t]
- A : 廃棄物として処理されるカートリッジ付着分（カートリッジフィルター交換時における吸着溶剤の移動量）[t]
- B : 廃棄物として処理される蒸留スラッジ含有分（蒸留スラッジ中の残留溶剤の移動量）[t]

■ 排出係数

ドライクリーニングに用いられる溶剤は、その全量が大気中に放出されると仮定したため、排出係数は設定していない。

■ 活動量

1) ドライクリーニング溶剤の使用量

ドライクリーニング溶剤の使用量（テトラクロロエチレン、工業ガソリン 5 号）については、「VOC 排出インベントリ調査」で採用されているデータに倣い、表 A 3-22、表 A 3-23 の通りに設定した。

表 A3-22 活動量設定方法（テトラクロロエチレン）

年度	活動量の設定方法
1990、1991年度	1990、1991年度の用途別消費量が存在しないため、1992年度の総消費量に占めるドライクリーニング用途の割合（クロロカーボン衛生協会「用途別需要」より算出）を各年度の総消費量に乗じて算出。
1992年度	クロロカーボン衛生協会の「用途別需要」におけるクリーニング溶剤のテトラクロロエチレン使用量。
1993、1994年度	クロロカーボン衛生協会の「用途別需要」には当該年度のデータの記載がないため、1992年度と1995年度の値から内挿補間。
1995年度～	クロロカーボン衛生協会の「用途別需要」におけるクリーニング溶剤のテトラクロロエチレン使用量。

表 A3-23 活動量設定方法（工業ガソリン5号）

年度	活動量の設定方法
1990、1991年度	厚生労働省「ドライクリーニングにおける溶剤の使用管理状況に関する調査」における石油系溶剤洗濯機の設置台数の1992年度比を1992年度の工業ガソリン5号使用量に乗じて推計。
1992～1999年度	日本クリーニング用洗剤同業会の「洗剤出荷実績」における石油系ドライクリーニング用洗剤出荷実績の2000年度比を2000年度の工業ガソリン5号使用量に乗じて推計。
2000年度	VOC排出インベントリ調査に記載の石油系溶剤メーカーからのドライクリーニング溶剤出荷量調査結果。
2001～2004年度	2000年度と2005年度の値から内挿補間。
2005年度～	VOC排出インベントリ調査に記載の石油系溶剤メーカーからのドライクリーニング溶剤出荷量調査結果。

2) 廃棄物としての移動量

廃棄物として移動する量（廃棄物として処理されるカートリッジ付着分、蒸留スラッジ含有分）については、VOC排出インベントリ調査の手法に従い、表A3-24の算定式により推計し、ドライクリーニング溶剤の使用量から差し引く。「廃棄物としての移動量」を推計するための各種パラメータ（洗濯機の設置台数以外の値）については、日本クリーニング環境保全センター等へのヒアリング等に基づくVOC排出インベントリ調査に使用されている値（全年度固定）を使用した。

洗濯機の設置台数については、1990年以降の各年度の値が把握可能な厚生労働省「ドライクリーニングにおける溶剤の使用管理状況に関する調査」における値を用いた。ただし、2001年度以降調査は隔年で実施されているため、調査が実施されていない年度はVOC排出インベントリ調査に従い、前年度値を据え置きとした。

表 A3-24 ドライクリーニング溶剤の廃棄物としての移動量の計算方法

廃棄物種類	ドライクリーニング溶剤の廃棄物として移動する量の計算式
カートリッジフィルター交換時における吸着溶剤の移動量	<p>通常、カートリッジ交換1回につき、「洗濯1回あたりの平均洗濯物乾燥重量」（ワッシャーの標準負荷量）1kg に対して2L が吸着されるため以下の式に従って計算を行う。</p> $A = A_{unit} \times L \times D \times W_{ave.} / T \times N$ <p> <i>A</i> : カートリッジ付着分 [kg/年] <i>A_{unit}</i> : カートリッジ交換1回、ワッシャー負荷量1kg あたりのVOC吸着量 [L/回/kg] <i>L</i> : 洗濯1回当たりのワッシャーの標準負荷量 [kg] <i>D</i> : 比重 [kg/L] <i>W_{ave.}</i> : 年間平均ワッシャー回数 [回/年] <i>T</i> : カートリッジ交換1回あたりの平均ワッシャー回数 [回/回] <i>N</i> : 洗濯機の設置台数 [台] </p>
蒸留スラッジ中の残留溶剤の移動量	<p>蒸留スラッジ中の残留溶剤の移動量は以下の式に従って計算を行う。</p> $R = L \times T \times F \times N \times I$ <p> <i>R</i> : 蒸留スラッジ含有分 [kg/年] <i>L</i> : ワッシャーの標準負荷量 [kg/台] <i>T</i> : 年間平均ワッシャー回数 [回/年] <i>F</i> : フィルター種別の係数 [kg/kg] <i>N</i> : 洗濯機の設置台数 [台] <i>I</i> : 蒸留器設置率 [%] </p>

(出典) 環境省「VOC排出インベントリ調査」

A3.1.2.2.c. 金属洗浄

a) 排出源カテゴリーの説明

電気・電子製品や金属加工部品等の製造プロセスにおいて、工業用洗浄剤による金属部品の洗浄に伴いNMVOCが排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

1) 塩素系洗浄剤

塩素系洗浄剤の使用に伴う排出については、塩素系洗浄剤の使用量に大気排出率を乗じて算定した。なお、一部が外部の業者によりリサイクルされていることから、リサイクル分の補正を行った。

$$E = AD \times R \times EF$$

E : 塩素系洗浄剤の使用に伴うNMVOC排出量 [千t-NMVOC]

AD : 塩素系洗浄剤の販売量 [千t]

R : リサイクルによる補正率 (1.1倍)⁶

EF : 塩素系洗浄剤の使用時の大気排出率 [%]

2) 塩素系以外の洗浄剤

塩素系以外の洗浄剤（準水系、炭化水素系、アルコール系、フッ素系、その他の洗浄剤）に

⁶ 環境省「平成23年度揮発性有機化合物（VOC）排出インベントリ作成等に関する調査業務報告書」によれば、日本産業洗浄協議会が日本溶剤リサイクル工業会に調査した結果では、塩素系洗浄剤については、販売量の1割程度が外部業者により再生されて再供給されているとのことである。

については、洗浄剤の使用量に大気排出率を乗じて排出量を算定した。

$$E=AD \times EF$$

- E : 塩素系以外の各洗浄剤の使用に伴う NMVOC 排出量 [千 t-NMVOC]
- AD : 塩素系以外の各洗浄剤の使用量 [千 t]
- EF : 塩素系以外の各洗浄剤の使用時の大気排出率 [%]

■ 排出係数

1) 塩素系洗浄剤、2) 塩素系以外の洗浄剤の双方ともに、表 A 3-25 に示す VOC 排出インベントリ調査に記載の排出係数を使用した。

表 A 3-25 各洗浄剤の使用に係る NMVOC 排出係数

洗浄剤	大気排出率	出典
塩素系洗浄剤	75%	日本産業洗浄協議会「平成 17 年度 揮発性有機化合物(VOC) 排出抑制に係る自主的取組推進マニュアル原案作成(洗浄関係)委員会報告」より
準水系洗浄剤	0.4%	日本産業洗浄協議会調査結果
炭化水素系洗浄剤	31.3%	
アルコール系洗浄剤	60% (2010 年度以降は 45% を使用)	
フッ素系洗浄剤	84%	
その他洗浄剤	75%	

■ 活動量

1) 塩素系洗浄剤

塩素系洗浄剤の活動量については、VOC 排出インベントリ調査及び、クロロカーボン衛生協会提供データを基に表 A 3-26、表 A 3-27 の通りに設定した。VOC 排出インベントリ調査によると、塩素系洗浄剤については、販売量の 1 割程度が外部業者により再生されて再供給されているとのことであり、推計した使用量の数値を 1.1 倍してリサイクル分補正後の活動量とした。

表 A 3-26 塩素系洗浄剤の使用に係る活動量設定方法
(ジクロロメタン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン)

年度	活動量の設定方法
1990～1994 年度	1990～1994 年度の用途別消費量が存在しないため、1995 年度の総消費量に占める金属洗浄用途の割合(クロロカーボン衛生協会「用途別需要」より算出)を各年度の総消費量に乗じて算出。
1995 年度～	クロロカーボン衛生協会「用途別需要」における金属洗浄用のジクロロメタン・トリクロロエチレン・テトラクロロエチレン販売量。

表 A 3-27 塩素系洗浄剤の使用に係る活動量設定方法(その他の塩素系洗浄剤)

年度	活動量の設定方法
1990～1999 年度	1990～1999 年度の塩素系主要 3 溶剤の国内総消費量合計値(クロロカーボン衛生協会「用途別需要」)の 2000 年度比を 2000 年度の活動量に乗じることで推計。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査に記載の販売量実績を使用(日本産業洗浄協議会の調査結果)。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の活動量から内挿補間。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査に記載の販売量実績を使用(日本産業洗浄協議会の調査結果)。

2) 塩素系以外の洗浄剤

塩素系以外の洗浄剤については、VOC 排出インベントリ調査において示されている情報を基に表 A 3-28 の通り設定した。

表 A 3-28 塩素系洗浄剤以外の洗浄剤の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1999 年度	VOC 排出インベントリ調査に示されている洗浄剤別の業種配分比率（表 A 3-29）を対応する各業種の原材料使用額に乘じ、洗浄剤別に合計することで、各洗浄剤別の原材料使用額合計を算出。算出された原材料使用額合計の 2000 年度比を各洗浄剤使用量実績の 2000 年度値に乘じて各年度の使用量を推計。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査における各洗浄剤の使用量実績を活動量として設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の活動量から内挿補間。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査における各洗浄剤の使用量実績を活動量として設定。なお、VOC 排出インベントリ調査では、アンケート調査（サンプル調査）で得られた値を補正して使用実績としている。またアンケート調査は毎年行われていないため、適宜据え置き、内挿等によりデータの補完がされている。

表 A 3-29 塩素系洗浄剤以外の洗浄剤の VOC 排出量の業種配分比率

業種	ンメ （NMP） 混合 剤	グリ ル系 混合 剤	ン パ ラ フ イ ン 系 洗 浄 剤	イ ソ パ ラ フ イ ン 系 洗 浄 剤	ナ フ テ ン 系 洗 浄 剤	そ の 他 の 炭 化 水 素 系 洗 浄 剤	イ ソ プ ロ ピ ル ア ル コ ール 系 洗 浄 剤	そ の 他 の ア ル コ ール 系 洗 浄 剤	H F C 系 洗 浄 剤	そ の 他 の フ ッ 素 系 洗 浄 剤	臭 素 系 洗 浄 剤	そ の 他 の 洗 浄 剤
19 プラスチック製品製造業			3%	6%	4%			12%				
23 鉄鋼業			3%	0.1%	5%				1%	2%		
24 非鉄金属製造業			16%	0.05%	7%				1%	2%		
25 金属製品製造業		2%	17%	30%	26%	8%					4%	
26 一般機械器具製造業			11%	8%	15%	11%			1%	2%		
28 情報通信機械器具製造業		19%					1%					
29 電子部品・デバイス製造業	70%	49%	17%	15%	7%	13%	25%	28%	28%	38%	30%	100%
30 輸送用機械器具製造業		2%	16%	26%	36%	10%		12%	7%	19%	18%	
31 精密機械器具製造業	30%	18%	17%	15%		18%	74%	46%	61%	37%	48%	
32 その他の製造業		10%	0.1%		1%	41%		3%				
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

（出典）環境省「VOC 排出インベントリ調査」

A3.1.2.2.d. 製造機器類洗浄用シンナーの使用

a) 排出源カテゴリーの説明

製造機器類洗浄用シンナーの使用に伴い NMVOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

塗料用を除いたシンナー販売量に販売量当たりの NMVOC 排出係数を乘じ、洗浄用シンナー使用時の NMVOC 排出量を算定した。

$$E=AD \times EF$$

- E** : 洗浄用シンナーの使用に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
AD : 塗料用を除いたシンナー販売量 [kl]
EF : 洗浄用シンナー販売量当たりの排出係数 [t-NMVOC/kl]

■ 排出係数

VOC 排出インベントリ調査において算定された「製造機器類洗浄用シンナー」に係る排出量（東京都条例に基づく報告データを基に推計）と、後述した活動量（塗料用以外のシンナー販売量）を用いて排出係数を設定した。

なお、1999 年度以前の排出係数については、2000 年度以降、やや減少トレンドとなっているが、排出係数を推定するための定量的な情報については業界団体でも確認できないこと、シンナー洗浄については技術的な対策の導入が困難であることから、2000 年度の排出係数を一律で適用することとした（表 A3-30 参照）。

表 A3-30 製造機器類洗浄用シンナー使用に係る排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査における 2000 年度の排出量を活動量（塗料用以外のシンナー販売量）で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の排出係数から内挿補間により算出。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査における 2005 年度以降の排出量を活動量（塗料用以外のシンナー販売量）で割り戻して設定。

■ 活動量

1990 年度以降の経年に渡るデータが把握可能な「化学工業統計年報」におけるシンナー販売量から、日本塗料工業会「塗料からの VOC 排出実態推計のまとめ」における塗料希釈用シンナー消費量を差し引いた塗料用以外のシンナー販売量を活動量として設定した。

なお、2004 年度以前の塗料希釈用シンナー消費量については、データが未確認であるため、2005 年度のシンナー販売量に占める塗料希釈用シンナー消費量の割合を、2004 年度以前のシンナー販売量に乗じて塗料希釈用シンナー消費量を推計し、同様に設定を行った（表 A3-31）。

表 A3-31 製造機器類洗浄用シンナー使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～2004 年度	2005 年度のシンナー販売量に占める塗料希釈用シンナー消費量の割合を、各年度のシンナー販売量に乗じて 2004 年度以前の塗料希釈用シンナー消費量を算出し、シンナー販売量から差し引いて設定。
2005 年度～	「化学工業統計年報」におけるシンナー販売量から、日本塗料工業会「塗料からの VOC 排出実態推計のまとめ」における塗料希釈用シンナー消費量を差し引いて設定。

A3.1.2.2.e. 印刷用溶剤の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

印刷工程において、印刷インキやその希釈溶剤の使用時に VOC が排出される。なお、文房具等に含まれるインキ、印刷機器の洗浄用の溶剤の使用（「A3.1.2.2.d 製造機器類洗浄用シンナー」で計上）、印刷インキの製造段階における排出（「A3.1.2.2.n 化学品の製造」で計上）については本排出源では対象外である。

b) 方法論

■ 算定方法

VOC 排出インベントリ調査に記載の印刷工程における VOC 使用量に大気排出率を乗じて VOC 排出量を推計する。

$$E=AD \times EF$$

E : 印刷用溶剤使用に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]

AD : 印刷工程における VOC 使用量 [t]

EF : VOC 使用量当たりの大気排出率 [%]

■ 排出係数

VOC 排出インベントリ調査に記載の種類別大気排出率を使用する。平板インキ・グラビアインキ以外の印刷インキについては、2000 年度以降、一律に同じ大気排出率が適用されており、1999 年度以前についても同様に 2000 年度の大気排出率を適用するものとした。

平板インキ・グラビアインキについては、2000 年度以降、やや減少トレンドとなっており、対策が継続されていた可能性が高いため、2000 年度から自主的取組の目標年度である 2010 年度までの傾向から、1990 年度まで遡及して外挿して大気排出率を設定する（表 A3-32 参照）。ただし、グラビアインキについては、単純に外挿推計を行うと 1990 年度の大気排出率が 100% を超えるため、計量計画研究所「炭化水素類排出量概要推計方法確立調査（1984 年）」における 1983 年度の調査結果値と 2000 年度値より内挿補間を行い設定した。

表 A3-32 印刷用溶剤使用に係る排出係数設定方法（平板インキ、グラビアインキ）

年度	排出係数の設定方法	
	平板インキ	グラビアインキ
1990～1999 年度	2000～2010 年度のトレンドから外挿推計。	計量計画研究所「炭化水素類排出量概要推計方法確立調査（1984 年）」における 1983 年度の調査結果値と 2000 年度値より内挿補間を行う。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査における 2000 年度の排出係数を設定。	
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の値から内挿補間により算出。	
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査における 2005 年度以降の排出係数を設定。	

（注）樹脂凸版インキ、金属印刷インキ、その他のインキ、新聞インキについては、VOC 排出インベントリ調査に従い、全年度共通の排出係数を適用する。

■ 活動量

VOC 排出インベントリ調査に記載の印刷工程における VOC 使用量（印刷インキ工業連合会の調査結果、日本印刷産業連合会の自主行動計画を基に VOC 排出インベントリ調査にて推計）を使用し、表 A3-33 の通りに設定した。

表 A3-33 印刷用溶剤の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1999 年度	「化学工業統計年報」における種類別の印刷インキ販売数量の 2000 年度比を 2000 年度の VOC 使用量に乗じて推計。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査の印刷工程における VOC 使用量を使用（VOC 排出インベントリ検討会による推計値）。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の活動量から内挿補間。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査の印刷工程における VOC 使用量を使用（VOC 排出インベントリ検討会による推計値）。

A3.1.2.2.f. ラミネート接着剤の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

ラミネート加工において、基材とラミネートを貼り合わせる接着剤に含まれる溶剤起源の VOC が排出される。なお、ラミネート用接着剤の製造段階における排出は、「A3.1.2.2.n 化学品の製造」で計上する。

b) 方法論

■ 算定方法

ラミネート用フィルム販売数量を活動量として販売数量当たりの NMVOC 排出係数を乗じることによって、ポリエチレンラミネート加工に係る NMVOC 排出量を算定した。

$$E=AD \times EF$$

<i>E</i>	: ラミネート加工に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
<i>AD</i>	: ラミネート用フィルム販売数量 [t]
<i>EF</i>	: ラミネート用フィルム販売量当たりの排出係数 [t-NMVOC/t]

■ 排出係数

VOC 排出インベントリ調査において自主行動計画の報告値を基に推計されている VOC 排出量を、ラミネート用フィルム販売数量で割戻したラミネート用フィルム販売数量当たりの VOC 排出量をポリエチレンラミネート加工に係る排出係数とした。VOC 排出インベントリ調査の対象期間外（自主行動計画の対象期間外）の各年度の排出係数の設定方法は表 A 3-34 の通り。

表 A 3-34 ラミネート加工に係る NMVOC 排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	ラミネート用接着剤の使用に係る VOC 排出量（日本ポリエチレンラミネート工業会の自主行動計画に基づく推計値）をラミネートフィルム販売量で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の排出係数から内挿補間により算出。
2005 年度～	ラミネート用接着剤の使用に係る VOC 排出量（日本ポリエチレンラミネート工業会の自主行動計画に基づく推計値）をラミネートフィルム販売量で割り戻して設定。

■ 活動量

経済産業省「経済産業省生産動態統計年報 紙・印刷・プラスチック製品・ゴム製品統計編」（以下、紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計年報）におけるラミネート用フィルム販売数量を活動量とした。

A3.1.2.2.g. 溶剤系接着剤の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

溶剤系接着剤の使用に伴い、VOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

接着剤の使用に係る VOC 使用量を大気排出率 100% とみなし、全量を排出量として計上する。

$$E=AD$$

E : 接着剤の使用に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
 AD : 接着剤の使用に係る VOC 使用量 [t]

■ 排出係数

接着剤に用いられる溶剤は、その全量が大気中に放出されると仮定したため、排出係数は設定していない。

■ 活動量

VOC 排出インベントリ調査の推計対象外である 2001～2004 年度については内挿補間により算出し、2000 年度以前については、日本接着剤工業会「接着剤実態調査報告書」に示された各年における溶剤系接着剤の種類別出荷量（暦年値）の 2000 年比を 2000 年度の VOC 使用量に乗じて算定した（表 A 3-35 参照）。

表 A 3-35 接着剤の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1999 年度	日本接着剤工業会「接着剤実態調査報告書」に示された溶剤系接着剤の種類別出荷量（暦年値）合計の 2000 年比を 2000 年度の VOC 使用量に乗じて推計。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査に記載の接着剤の使用に係る VOC 使用量を使用（VOC 排出インベントリ検討会にて推計）。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の活動量から内挿補間。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査に記載の接着剤の使用に係る VOC 使用量を使用（VOC 排出インベントリ検討会にて推計）。

A3.1.2.2.h. ゴム用溶剤の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

ゴム製品の製造の際に、ゴム溶剤起源の VOC が排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

ゴム製造時における溶剤用揮発油使用量に、VOC 排出インベントリ調査に基づく溶剤用揮発油使用量当たりの NMVOC 排出係数を乗じることで、ゴム製造におけるゴム用溶剤からの NMVOC 排出量を算定した。

$$E=AD \times EF$$

E : ゴム製造に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
 AD : ゴム製造に係る溶剤用揮発油使用量 [t]
 EF : 揮発油使用量当たりの排出係数 [t-NMVOC/t]

■ 排出係数

VOC 排出インベントリ調査における日本ゴム工業会の自主行動計画報告値を基にした排出量を、溶剤用揮発油使用量で割戻した溶剤用揮発油使用量当たりの VOC 排出量をゴム製造に係る排出係数とした。

表 A3-36 ゴム製造に係る NMVOC 排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	溶剤用揮発油からの VOC 排出量（日本ゴム工業会の自主行動計画に基づく推計値）を溶剤用揮発油使用量で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の中央値を適用。
2005 年度～	溶剤用揮発油からの VOC 排出量（日本ゴム工業会の自主行動計画に基づく推計値）を溶剤用揮発油使用量で割り戻して設定。

■ 活動量

活動量については、経済産業省「ゴム製品統計年報」及び日本ゴム工業会調査結果より得られた溶剤用揮発油使用量とした。溶剤比重を乗じて、体積ベースから重量ベースに換算したうえでの活動量とした。なお、2006～2010 年については、調査対象となる事業者数が前後の期間と異なっていた可能性があるため、内挿補間により補正をした値を設定した。

A3.1.2.2.i. 粘着剤・剥離剤の塗布

a) 排出源カテゴリーの説明

粘着テープ・粘着ラベル等の製造時における粘着剤・剥離剤の塗布に伴い、粘着剤・剥離剤中に含まれる溶剤が NMVOC として排出される。なお、粘着剤・剥離剤そのものの製造段階における排出については「A3.1.2.2.n 化学品の製造」に含まれるため、本カテゴリーでは粘着テープ・粘着ラベル等の製造における粘着剤・剥離剤の塗布に伴う排出のみを扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

粘着テープ出荷量を活動量として出荷量当たりの NMVOC 排出係数を乗じることで、粘着剤・剥離剤の塗布に係る NMVOC 排出量を算定した。

$$E=AD \times EF$$

E : 粘着剤・剥離剤の塗布に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]

AD : 粘着テープ出荷量 [百万 m²]

EF : 粘着テープ出荷量当たりの排出係数 [t-NMVOC/百万 m²]

■ 排出係数

VOC 排出インベントリ調査における日本製紙連合会、印刷用粘着紙メーカー会、日本粘着テープ工業会、日本ポリエチレンラミネート製品工業会 4 団体の自主行動計画報告値を基にした排出量を、粘着テープ出荷量で割り戻した粘着テープ出荷量当たりの VOC 排出量を粘着テープ製造時の粘着剤・剥離剤の塗布に伴う排出係数として設定した。

表 A3-37 粘着剤・剥離剤の塗布に係る NMVOC 排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	粘着剤・剥離剤の塗布に係る VOC 排出量（日本製紙連合会、印刷用粘着紙メーカー会、日本粘着テープ工業会、日本ポリエチレンラミネート製品工業会の 4 団体の自主行動計画報告値に基づく推計値）を粘着テープ出荷量で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の排出係数の内挿補間により設定。
2005 年度～	粘着剤・剥離剤の塗布に係る VOC 排出量（日本製紙連合会、印刷用粘着紙メーカー会、日本粘着テープ工業会、日本ポリエチレンラミネート製品工業会の 4 団体の自主行動計画報告値に基づく推計値）を粘着テープ出荷量で割り戻して設定。

■ 活動量

日本粘着テープ工業会提供の粘着テープ出荷量を活動量とした。

A3.1.2.2.j. 防虫剤・消臭剤の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

家庭などで、衣類の害虫を殺傷する目的とした防虫剤や室内の消臭を目的とした消臭剤の使用に伴い、主に薬剤の昇華により NMVOC が排出される。主に排出される物質は、p-ジクロロベンゼンである。

b) 方法論

■ 算定方法

防虫剤・消臭剤は主に一般家庭用として用いられており、使用場所で全量が環境中に排出されると考えられる。したがって、大気排出率を 100% とみなし、防虫剤・消臭剤に含まれるジクロロベンゼンの量を VOC 排出量とした。

■ 排出係数

防虫剤・消臭剤に含まれるジクロロベンゼンはすべて NMVOC として大気放出されるとみなし、排出係数は設定しない。

■ 活動量

経済産業省・環境省「PRTR 届出外排出量の推計方法」に記載の日本繊維製品防虫剤工業会調査による、「ジクロロベンゼンの防虫剤・消臭剤としての全国出荷量」を活動量とした。日本繊維製品防虫剤工業会の調査結果は 2001 年度以降のみであるため、1990～2000 年度における全国出荷量は、同じく日本繊維製品防虫剤工業会を通じて得られたジクロロベンゼン防虫剤の市場規模調査結果の 2001 年度からの伸び率を、2001 年度の出荷量に乗じて推計した。ただし、市場規模も 1992 年度以降に限られるため、1990,1991 年度については外挿により推計した。

表 A3-38 防虫剤・消臭剤の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1991 年度	1992～2010 年度の出荷量から外挿により推計。
1992～2000 年度	ジクロロベンゼン防虫剤の市場規模の 2001 年度からの伸び率を、2001 年度の出荷量に乗じて推計。
2001 年度～	経済産業省・環境省「PRTR 届出外排出量の推計方法」に記載の日本繊維製品防虫剤工業会調査による、ジクロロベンゼンの防虫剤・消臭剤としての全国出荷量を使用。

A3.1.2.2.k. エアゾール噴射剤の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

殺虫剤、ラッカー、ヘアスプレー等、エアゾール製品の使用に伴い、噴射剤由来の NMVOC が排出される。塗料中の溶剤等、内溶液由来の NMVOC については、塗料の使用、化粧品の使用等、他のカテゴリーにて別途計上されることから、二重計上を避けるため、ここでは噴射剤として使用される液化ガス由来の NMVOC のみを扱う。エアゾール製品の噴射剤としては、主にプロパン (LPG) とジメチルエーテル (DME) が使用される。

b) 方法論

■ 算定方法

財団法人 計量計画研究所「東京都環境局委託 民生部門からの VOC 排出量調査報告書 (平成 22 年 3 月)、(以下、東京都調査)」における算定方法に倣い、下式の通り、エアゾール製品種類別の生産容量に LPG・DME 排出係数を乗じて排出量を算定した。

$$E = \sum (AD_i \times EF_{LPG, DME})$$

E : エアゾール製品の使用に伴う NMVOC 排出量 [g]
 AD_i : エアゾール製品 i の生産容量 [cc]
 $EF_{LPG, DME}$: LPG・DME 排出係数 [g/cc]

■ 排出係数

東京都調査で使用されている各パラメータを基に、下式により、エアゾール製品生産容量当たりの LPG・DME 排出量を排出係数として設定する。

$$EF_{LPG, DME} = R_{LPG, DME} \times R_p \times C_{LPG, DME} \times d_{LPG, DME}$$

$EF_{LPG, DME}$: エアゾール生産容量当たりの LPG・DME 排出係数 [g/cc]
 $R_{LPG, DME}$: LPG・DME を噴射剤とするエアゾール製品の割合 [%]
 R_p : エアゾール缶中の噴射剤割合 [%]
 C_{LPG} 、 C_{DME} : 噴射剤中の LPG・DME 割合 [%]
 d_{LPG} 、 d_{DME} : LPG・DME の比重 [g/cc]

表 A 3-39 に製品種類別のエアゾール製品の使用に伴う LPG・DME の排出係数を示す。

表 A 3-39 エアゾール製品の排出係数 (g/cc)

製品種類		LPG	DME
殺虫剤	ハエ・カ用	0.223	0.0296
	その他 殺虫剤	0.223	0.0296
塗料	塗料	0.227	0.0151
家庭用品	室内消臭剤	0.236	-
	クリーナー	0.236	-
	ワックス・ポリッシュ	0.236	-
	洗濯用品	0.236	-
	その他 家庭用品	0.236	-
人体用品	ヘアスプレー	0.202	0.0269
	その他 頭髮用品	-	0.269
	シェービングクリーム	0.202	0.0269
	オーデコロン&香水	0.112	0.134
	医薬品	0.176	0.0905
	人体消臭制汗剤	0.225	-
	その他 人体用品	0.112	0.134
自動車用品	くもり止め	0.213	-
	その他 自動車用品	0.213	-
その他	簡易消火具	-	-
	その他	0.221	-

(注)「東京都調査」を基に設定。

1) LPG・DME を噴射剤とするエアゾール製品の割合

LPG・DME を噴射剤とするエアゾール製品の割合については、表 A 3-40（東京都調査により設定）を 100%から減じた割合を対応する用途に適用した。塗料と医薬品についてはデータの記載がないため 100%とした（表 A 3-41）。

表 A 3-40 圧縮ガスを噴射剤とするエアゾール製品の割合

製品	割合
殺虫剤	1.8%
家庭用品	6.2%
化粧品	10.8%
工業用品	2.3%
自動車用品	15.3%
その他	12.5%

(出典)「東京都調査」

表 A 3-41 LPG・DME を噴射剤とするエアゾール製品の割合

製品種類		割合
殺虫剤	ハエ・カ用	98.2%
	その他 殺虫剤	98.2%
塗料	塗料 ¹⁾	100.0%
家庭用品	室内消臭剤	93.8%
	クリーナー	93.8%
	ワックス・ポリッシュ	93.8%
	洗濯用品	93.8%
	その他 家庭用品	93.8%
人体用品	ヘアスプレー	89.2%
	その他 頭髮用品	89.2%
	シェービングクリーム	89.2%
	オーデコロン&香水	89.2%
	医薬品 ¹⁾	100.0%
	人体消臭制汗剤	89.2%
	その他 人体用品	89.2%
自動車用品	くもり止め	84.7%
	その他 自動車用品	84.7%
その他	簡易消火具	87.5%
	その他	87.5%

(注)「東京都調査」を基に設定。

1) 塗料と医薬品についてはデータの記載がないため 100%と仮定。

2) エアゾール缶中の噴射剤割合

東京都調査における設定に基づき、「エアゾール缶中の噴射剤割合」(液体としての噴射剤が容器に占める割合)については 45%と設定した。

3) 噴射剤中の LPG・DME 割合

東京都調査における設定に基づき、噴射剤中の LPG・DME の割合は表 A 3-42 の通りに設定した。

表 A 3-42 製品別噴射剤中の LPG と DME の割合

製品種類		LPG	DME
殺虫剤	ハエ・カ用	90%	10%
	その他 殺虫剤	90%	10%
塗料	塗料	90%	5%
家庭用品	室内消臭剤	100%	0%
	クリーナー	100%	0%
	ワックス・ポリッシュ	100%	0%
	洗濯用品	100%	0%
	その他 家庭用品	100%	0%
人体用品	ヘアスプレー	90%	10%
	その他 頭髮用品	0%	100%
	シェービングクリーム	90%	10%
	オーデコロン&香水	50%	50%
	医薬品	70%	30%
	人体消臭制汗剤	100%	0%
	その他 人体用品	50%	50%
自動車用品	くもり止め	100%	0%
	その他 自動車用品	100%	0%
その他	簡易消火具	0%	0%
	その他	100%	0%

(注)「東京都調査」を基に設定。

4) LPG、DME の比重

東京都調査における設定に基づき、LPG、DME の比重は各々0.56、0.67 と設定した。

■ 活動量

東京都調査に従い、エアゾール製品の容器容量別生産数量に、容器容量別の1缶当たり平均容量を乗じて、容量ベースに換算したエアゾール製品の生産量を活動量とした。

$$AD_i = \sum(N_{i,k} \times P_{ave,k})$$

AD_i : エアゾール製品 i の生産容量 [cc]
 $N_{i,k}$: エアゾール製品 i 、容器容量 k の生産数量 [缶]
 $P_{ave,k}$: 容器容量 k のエアゾール缶平均容量 [cc/缶]

「容器容量別生産数量」については、日本エアゾール協会が毎年実施している「エアゾール製品生産数量調査」における調査結果を使用する。「平均容量」については、東京都調査において実施された、日本エアゾール協会へのヒアリングに基づく、容器階級別の設定値（表 A 3-43、表 A 3-44、表 A 3-45）を使用した。

表 A 3-43 容器階級毎の平均容量（ブリキ容器）

容器容量 [cc]	100～	150～	180～	220～	280～	420～
平均容量 [cc]	125	165	200	250	350	420

表 A 3-44 容器階級毎の平均容量（アルミ容器）

容器容量 [cc]	～49	50～	100～	150～	200～	300～
平均容量 [cc]	25	75	125	175	250	300

表 A 3-45 容器階級毎の平均容量（合成樹脂容器）

容器容量 [cc]	※
平均容量 [cc]	210

（注）※全容量共通

（出典）「東京都調査」（表 A 3-43～表 A 3-45）

A3.1.2.2.1. 化粧品の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

化粧品の使用に伴い、各種化粧品中に含まれる VOC 成分が大気中に放出される。

b) 方法論

■ 算定方法

東京都調査における算定方法に倣い、種類別の化粧品販売数量に対し、化粧品種類別の VOC 含有率、化粧品種類別の大気放出率を乗じることで VOC 排出量を算定した。

$$E = \sum_i (AD_i \times C_i \times EF_i)$$

E : 化粧品の使用に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
 AD_i : 化粧品 i の販売数量 [t]
 C_i : 化粧品 i の VOC 含有率 [%]
 EF_i : 化粧品 i の大気放出率 [%]

■ 排出係数

各化粧品種類の VOC 含有率については、各種文献に基づき東京都調査において設定されている VOC 含有率を基に、化学工業統計年報の分類に再編した VOC 含有率を新たに設定した（表 A3-46）。

また、東京都調査に示されている VOC 含有率のうち、化学工業統計年報よりも部門が細分化されているものについては、富士経済研究所「化粧品マーケティング要覧」調査結果に基づく配分比率により細分化された販売数量で加重平均し、化学工業統計年報における部門分類に対応するよう部門統合を行った。

表 A3-46 化学工業統計年報における部門分類に基づく VOC 含有率および大気排出率

	化粧品種類	VOC 含有率	大気排出率
基礎化粧品	マッサージ・コールドクリーム	7.5%	100%
	モイスチャークリーム	7.5%	100%
	洗顔クリーム・フォーム	10.0%	0%
	クレンジングクリーム	10.0%	0%
	化粧水	10.0%	100%
	乳液	6.0%	100%
	美容液	8.5%	100%
	パック ¹⁾	4.4%	100%
	その他の皮膚用化粧品	7.5%	100%
メイクアップ	ファンデーション ¹⁾	2.6%	100%
	おしろい	0.0%	100%
	アイメイクアップ	4.0%	100%
	まゆ墨・まつ毛化粧料	0.0%	100%
	ほほ紅	0.0%	100%
	口紅	0.0%	100%
	つめ化粧料(除光液含む) ¹⁾	76.8%	100%
ボディケア	リップクリーム	7.5%	100%
	日焼け止め及び日焼け用化粧品	10.0%	100%
フレグランス	香水・オーデコロン	83.5%	100%
インバスヘアケア	シャンプー	1.5%	0%
	ヘアリンス	1.5%	0%
	ヘアトリートメント	1.5%	0%
ヘアメイク	ポマード・チック・ヘアクリーム・香油 ¹⁾	10.6%	100%
	液状・泡状整髪料 ¹⁾		
	セットローション ¹⁾		
	ヘアスプレー	27.5%	100%
	その他の頭髪用(パーマネントウェーブ液を含む)	1.5%	100%
ヘアカラー	染毛料(ヘアブリーチ含む) ¹⁾	22.1%	100%
男性用化粧品	ひげ剃り用・浴用化粧品	25.0%	100%
	男性皮膚用化粧品	7.5%	100%
	ヘアトニック(育毛料含む)	42.5%	100%

(注) 1) 加重平均により統合した部門。

(出典) 「東京都調査」を基に設定。

大気排出率についても、VOC 含有率同様に、化学工業統計年報における部門分類に対応する大気排出率として再設定を行った。各化粧品の一般的な使用方法に基づき、各製品の排出率を 0%あるいは 100%に設定しており（表 A3-47、表 A3-48）、部門を統合する際には、対象部門中、最も販売数量の多い製品に表 A3-47 の考え方を適用し、再設定を行った。

表 A3-47 東京都調査における大気排出率の設定方針

商品の形態	使用方法・処理方法	大気排出率
固体	水中で使用するか、流し落とす	0%
	放置して成分を揮発させる	100%
液体	水中で使用するか、短時間のうちに洗い流す	0%
	長時間放置して、乾燥させる	100%
	成分を揮発させる	100%
	スプレーとして噴霧する（噴射剤は別途推計・原液のみ）	100%

(出典)「東京都調査」

表 A3-48 東京都調査における各商品の一般的な使用方法に基づく大気排出率

化粧品種類		大気排出率	
基礎化粧品	マッサージ・コールドクリーム※1	100%	
	メイク落とし	0%	
	洗顔料	洗顔料 クレンジング	0%
	化粧水	化粧水	100%
	乳液	乳液	100%
	美容液	美容液	100%
	パック	ウォッシュオフパック	0%
		ピールオフパック	100%
		シートパック	100%
フェイスクリーム	(※1の細分類に含む)	-	
その他	スポットケア	100%	
メイクアップ	化粧下地	メイクアップベース	100%
	ファンデーション・コンシーラ	ファンデーション等	100%
	フェイスパウダー	フェイスパウダー	100%
	アイカラー	アイシャドウ	100%
	アイライナー	アイライナー	100%
	マスカラ	マスカラ	100%
	アイブロウ	アイブロウ	100%
	チークカラー	チークカラー	100%
	リップカラー	リップカラー	100%
	ネイルカラー	ネイルエナメル	100%
ネイルケア(リムーバー他)		100%	
ボディケア	ボディローション・クリーム	ボディクリーム・ローション等	100%
	リップクリーム	リップクリーム	100%
	ハンドクリーム	ハンドクリーム	100%
	UVケア	サンタン・サンスクリーン	100%
	むだ毛処理剤	除毛・脱毛料	100%
	制汗防臭剤 ※2	制汗剤(足用+服用)	100%
フレグランス	香水 ※3		0%
	トワレ ※3	パルファン・オードパルファン	100%
	コロン ※3		0%
インバスヘアケア	シャンプー	シャンプー	0%
	ヘアリンス・コンディショナー	リンス・コンディショナー	0%
	ヘアトリートメント・パック	ヘアトリートメント	0%
ヘアメイク	ブロースタイリング剤ヘアスプレー・ヘアグロス	ヘアスタイリング剤	100%
	女性用ヘアトニック	(※6の細分類に含む)	-
	女性用育毛・養毛剤	(※7の細分類に含む)	-
	パーマ剤	コールドウェーブ液	100%
ヘアカラー	黒髪用カラーリング剤 白髪用カラーリング剤※4	白髪用ヘアカラー	100%
		黒髪用ヘアカラー	100%
		白髪用ヘアマニキュア	100%
		黒髪用ヘアマニキュア	100%
		その他のヘアカラー(スプレー等)	100%
		ブリーチ(脱色)	100%
男性用化粧品	プレシェーブ・シェービング剤	シェービング料	100%
	男性用洗顔料・パック		0%
	男性用スキンローション	男性用皮膚用化粧品	100%
	男性用スキニングクリーム・ミルク		0%
	男性用メイクアップ		0%
	男性用ヘアトニック ※6	ヘアトニック	100%
	男性用育毛・養毛剤 ※7	育毛剤・育毛トニック	100%
	男性用ブロー・スタイリング剤	(※4の細分類に含む)	-
	男性用ヘアスプレー・ヘアグロス		0%
	男性黒髪用カラーリング剤	(※5の細分類に含む)	-
	男性白髪用カラーリング剤	(※5の細分類に含む)	-
	男性用制汗防臭剤	(※2の細分類に含む)	-
	男性用フレグランス	(※3の細分類に含む)	-

(出典) 財団法人 計量計画研究所「東京都環境局委託 民生部門からの VOC 排出量調査報告書」(平成 22 年 3 月)

■ 活動量

「化学工業統計年報」における化粧品種類別販売数量を活動量とした。なお、「化学工業統計年報」には、輸入品等が含まれていないため、実際の消費量との乖離が大きいとみられる。そこで、「化学工業統計年報」の販売金額に対する輸入超過額（輸入額－輸出額）の割合が特に大きい「香水・オーデコロン」については、輸出入分を考慮した補正処理を行った。

表 A3-49 化学工業統計年報における化粧品項目

基礎化粧品	マッサージ・コールドクリーム
	モイスタークリーム
	洗顔クリーム・フォーム
	クレンジングクリーム
	化粧水
	乳液
	美容液
	パック
	その他の皮膚用化粧品
	メイクアップ
	おしろい
	アイメイクアップ
	まゆ墨・まつ毛化粧品
	ほほ紅
	口紅
	つめ化粧品(除光液含む)
フレグランス	香水・オーデコロン
ボディケア	リップクリーム
	日焼け止め及び日焼け用化粧品
インバスヘアケア	シャンプー
	ヘアリンス
	ヘアトリートメント
ヘアメイク	ポマード・チック・ヘアクリーム・香油
	液状・泡状整髪料
	セットローション
	ヘアスプレー
	その他の頭髪用（パーマメントウェーブ液を含む）
ヘアカラー	染毛料（ヘアブリーチ含む）
男性用化粧品	ひげ剃り用・浴用化粧品
	男性皮膚用化粧品
	ヘアトニック（育毛料含む）

A3.1.2.2.m. 洗車・補修用品の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

ワックス・クリーナー等、各種自動車用洗車・補修用品中に含まれる VOC 成分が、製品の使用に伴い大気中に放出される。

b) 方法論

■ 算定方法

東京都調査における算定方法に倣い、種類別の自動車用洗車・補修用品生産量に対し、自動車用洗車・補修用品種類別の VOC 含有率を乗じて自動車用洗車・補修用品中の VOC 使用量を算定、使用時に商品中の VOC 全量が大気中に放出されるとみなし、VOC 使用量を VOC 排出量とした。

$$E = \sum_i (AD_i \times C_i)$$

E : 自動車用洗車・補修用品の使用に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]

AD_i : 自動車用洗車・補修用品 i の生産量 [t]

C_i : 自動車用洗車・補修用品 i の VOC 含有率 [%]

■ 排出係数

VOC 含有率については、各種文献に基づき東京都調査において設定されている VOC 含有率を基に、最小値と最大値が示されているものについては中央値を算出して新たに設定した（表 A 3-50）。

表 A 3-50 洗車・補修用品の VOC 含有率

製品		VOC	VOC 含有率
車用ワックス、コート剤		灯油を中心とした石油系炭化水素の化合物	50.0%
ウインド関連	ウインドウォッシュ液	メタノール	25.0%
	撥水剤	エタノール	49.0%
		イソプロピルアルコール	42.0%
	油膜取り	エタノール	6.5%
		イソプロピルアルコール	12.5%
		ジエタノールアミン	5.0%
		石油系溶剤	30.0%
	霜取り剤	エチレングリコール	25.0%
イソプロピレンアルコール		25.0%	
車用クリーナー		エチレングリコール	10.0%
車用ペイント、補修剤	塗料		-
	接着剤		-
車用芳香、消臭、脱臭剤	芳香剤	香料(液体)	1.5%
		エタノール	2.3%
		メタノール	3.5%
		香料(ゲル状)	3.5%
	消臭剤	エタノール	50.0%

(注)「東京都調査」を基に設定。

■ 活動量

「オートケミカル製造業実態調査報告書」に記載のオートケミカル製品種類別生産量を活動量とした。2006 年度以降の活動量については、自動車 1 台あたりの洗車・補修用品消費量に自動車登録台数（国土交通省「自動車輸送統計年報」）を乗じて推計した。自動車 1 台あたりの洗車・補修用品消費量は、2003 年度から 2005 年度のオートケミカル製品種類別生産量を各年度の自動車登録台数で除して算出し、その 3 カ年平均値⁷に、各年度の自動車 1 台当たり走行量における 2005 年度からの伸び率を乗じて推計する。平均値を用いたのは、車用ワックス・コート剤については 1990 年度以降減少傾向にあり、「自動車用品小売業協会」によると、自動車 1 台当たり消費量は、自動車利用率の低下、自動車の小型化、自動洗車装置の普及等により、近年減少傾向であるとのことから、自動車 1 台当たり走行量のトレンドを考慮したためである。また、車用ワックス・コート剤以外の製品についても同様に自動車 1 台当たり走行距離の伸び率を基に推定することとした。

⁷ 2005 年度は前年度に比べ特異的に増加しているため、3 カ年平均値を基準とした。

表 A3-51 洗車・補修用品の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990 年度	1991 年度値を使用。
1991～1996 年度	日本オートケミカル工業会「オートケミカル製造業実態調査報告書」に記載のオートケミカル製品種類別生産量を使用。
1997、1998 年度	1996 年度と 1999 年度の活動量から内挿補間。
1999～2005 年度	「オートケミカル製造業実態調査報告書」に記載の車両用品種類別生産量を使用。
2006 年度～	自動車 1 台あたりの洗車・補修用品消費量に自動車登録台数（自動車輸送統計年報）を乗じて推計する。 自動車 1 台あたりの洗車・補修用品消費量は、2003 年度から 2005 年度の車両用品種類別生産量を各年度の自動車登録台数（自動車輸送統計年報（国土交通省））で除して算出し、その 3 年平均值に、各年度の自動車 1 台当たり走行量における 2005 年度からの伸び率を乗じて推計した。

A3.1.2.2.n. 化学品の製造

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、化学品の重合や合成の製造施設からの揮発性の高い物質の漏洩、化学品の貯蔵・出荷の際の漏洩、ポリマーの重合等の化学反応を起こさせる場合や特定の成分を抽出する場合等に使用される溶剤からの排出、および原料等の使用からの NMVOC 排出量の算定方法を扱う。

b) 方法論

■ 算定方法

排出活動別の活動量（塗料生産量、印刷インキ生産量、溶剤系接着剤出荷量、表面処理機材製造における VOC 使用量、化学工業関連業出荷額、およびフィルム-軟質製品-包装用生産量）に、VOC 排出インベントリ調査における排出活動別の排出量を各活動量で割り戻して設定した NMVOC 排出係数を乗じることで化学品の製造からの NMVOC 排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

E : 化学品の製造に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]

AD : 排出活動別に設定した活動量 [-]

EF : 活動量当たりの排出係数 [t-NMVOC/t]

さらに、上記排出量算定結果には、「1.B.2.a.iii. 石油の輸送」において計上したタンカー等による化学品荷役時の排出量が含まれるため、本カテゴリーでは当該排出量を差し引くこととする。

■ 排出係数

環境省 VOC 排出インベントリ調査の「化学品」において対象となっている各排出活動における排出量に対し、表 A3-58 に示した各活動量で割り戻した値を排出係数とした。VOC 排出インベントリ調査の対象期間外（自主行動計画・PRTR 届出データの対象期間外）を含む各年度の排出係数の設定方法は表 A3-52～表 A3-57 の通り。

表 A 3-52 化学品の製造に係る NMVOC 排出係数設定方法（塗料製造）

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	塗料製造に係る VOC 排出量（日本塗料工業会の自主行動計画に基づく推計値）を塗料生産量で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の平均値を適用。
2005 年度～	塗料製造に係る VOC 排出量（日本塗料工業会の自主行動計画に基づく推計値）を塗料生産量で割り戻して設定。

表 A 3-53 化学品の製造に係る NMVOC 排出係数設定方法（印刷インキ製造）

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	印刷インキ製造に係る VOC 排出量（印刷インキ工業連合会の自主行動計画に基づく推計値）を印刷インキ生産量で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の平均値を適用。
2005 年度～	印刷インキ製造に係る VOC 排出量（印刷インキ工業連合会の自主行動計画に基づく推計値）を印刷インキ生産量で割り戻して設定。

表 A 3-54 化学品の製造に係る NMVOC 排出係数設定方法（溶剤系接着剤製造）

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	溶剤系接着剤製造に係る VOC 排出量（日本接着剤工業会の自主行動計画に基づく推計値）を溶剤系接着剤出荷量で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の平均値を適用。
2005 年度～	溶剤系接着剤製造に係る VOC 排出量（日本接着剤工業会の自主行動計画に基づく推計値）を溶剤系接着剤出荷量で割り戻して設定。

表 A 3-55 化学品の製造に係る NMVOC 排出係数設定方法（表面処理機材製造）

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	表面処理機材製造に係る VOC 排出量（日本表面処理機材工業会の自主行動計画に基づく推計値）を表面処理機材製造における VOC 使用量で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の平均値を適用。
2005 年度～	表面処理機材製造に係る VOC 排出量（日本表面処理機材工業会の自主行動計画に基づく推計値）を表面処理機材製造における VOC 使用量で割り戻して設定。

表 A 3-56 化学品の製造に係る NMVOC 排出係数設定方法（化学製品製造）

年度	排出係数の設定方法
1990～1994 年度	積極的な削減活動は行われていなかったため、1995 年度の排出係数を全年度に適用。
1995～1999 年度	1995 年度から PRTR のパイロット事業として自主的取り組みが始まったことから、1995 年度以降排出係数は減少傾向であったと考えられる。以上より、2000～2010 年度までのトレンドから外挿推計とする。
2000 年度	化学工業に係る VOC 排出量（日本化学工業協会の自主行動計画に基づく推計値）を化学工業関連業出荷額で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の排出係数より、内挿補間により算出。
2005 年度～	化学工業に係る VOC 排出量（日本化学工業協会の自主行動計画に基づく推計値）を化学工業関連業出荷額で割り戻して設定。

- 1) 1990～1999 年度の排出係数を外挿により設定する場合には、2000 年度から VOC 排出抑制に係る自主行動計画の目標年度である 2010 年度までのトレンドを基に設定する。

表 A 3-57 化学品の製造に係る NMVOC 排出係数設定方法（セロハン製造）

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を全年度に適用。
2000 年度	セロハン製造に係る VOC 排出量（PRTR 届出排出量）をフィルム-軟質製品-包装用生産量で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の平均値を適用。
2005 年度～	セロハン製造に係る VOC 排出量（PRTR 届出排出量）をフィルム-軟質製品-包装用生産量で割り戻して設定。

■ 活動量

VOC 排出インベントリ調査の「化学品」において対象となっている各排出活動に相関のある指標として、表 A 3-58 に示す活動量を設定した。「各種化学製品製造」については、(社)日本化学工業協会の自主行動計画で捕捉されている範囲が広範囲にわたり、特定の製品の生産量等を活動量として設定することが困難であったことから、業界全体の出荷金額を活動量として設定した。なお、自主行動計画の報告値は年度値であるが、出荷金額は暦年値のみしか得られないため、次式により、簡易的に年度値に換算した。

$$S_{FYi} = S_{CYi} \times 0.75 + S_{CY(i+1)} \times 0.25$$

S : 出荷金額
 FY_i : i 年度
 CY_i : i 暦年

表 A 3-58 化学品の製造における活動量

排出源	活動量	出典
塗料製造	塗料生産量	経済産業省「化学工業統計年報」
印刷インキ製造	印刷インキ生産量	経済産業省「化学工業統計年報」
溶剤系接着剤製造	溶剤系接着剤出荷量	日本接着剤工業会「接着剤実態調査報告書」
表面処理機材製造	表面処理機材製造に伴う VOC 使用量 (注)ただし、1990～1999 年度は 2000 年度値を適用、2001～2004 年度は 2000・2005 年度平均値とする。	経済産業省「VOC 自主行動計画及び実績報告」
各種化学製品製造	自主行動計画で報告されている PRTR 届出排出量の対象業種における出荷額合計（「化学工業」及び「プラスチック製品製造業（別掲を除く）」）	経済産業省「工業統計」
セロハン製造	フィルム-軟質製品-包装用生産量	経済産業省「紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計年報」

A3.1.2.2.o. 塗膜剥離剤（リムーバー）の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

塗装を塗り替える際、塗膜を剥離するためにジクロロメタンが使用されており、その使用過程で排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

塗膜剥離剤（リムーバー）の使用時は局所排気等の排出抑制対策を実施しにくいいため、リムーバーに係るジクロロメタンの使用量全量を排出量として計上する。

■ 排出係数

活動量をそのまま排出量とするため、排出係数は設定しない。

■ 活動量

リムーバーに係るジクロロメタンの使用量については、クロロカーボン衛生協会提供データを基に以下の通り設定した。

表 A3-59 リムーバーの使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1994 年度	1990～1994 年度の用途別消費量が存在しないため、1995 年度の総消費量に占めるリムーバー用途の割合を各年度の総消費量に乗じて算出。
1995 年度～	クロロカーボン衛生協会「用途別需要」におけるリムーバー用のジクロロメタン使用量。

A3.1.2.2.p. 試薬

a) 排出源カテゴリーの説明

化学実験や成分分析等において、化学反応を起こさせる目的で使用される試薬に NMVOC が含まれ、使用時に排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

VOC 排出インベントリの算定方法に従い、物質別の試薬使用量に試薬使用時の物質別大気排出率を乗じて推計する。

$$E = AD \times EF$$

E : 試薬の使用に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]

AD : 試薬の使用量 [t]

EF : 試薬使用時の大気排出率 [t-NMVOC/t]

■ 排出係数

VOC 排出インベントリに従い、「化学物質安全対策推進等（すそ切り以下事業者排出量推計手法、オゾン層破壊物質及び低含有率物質の排出量推計手法に関する調査）報告書」に記載の試薬の使用に係る排出係数を使用する。1999 年度以前及び 2001～2004 年度の排出係数については、以下の表の通りに設定する。

表 A3-60 試薬の使用に係る排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度値と同値とする。
2000 年度	VOC 排出インベントリ調査に記載の「化学物質安全対策推進等（すそ切り以下事業者排出量推計手法、オゾン層破壊物質及び低含有率物質の排出量推計手法に関する調査）報告書」における値。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の排出係数の内挿補間により算出。
2005 年度～	VOC 排出インベントリ調査に記載の「化学物質安全対策推進等（すそ切り以下事業者排出量推計手法、オゾン層破壊物質及び低含有率物質の排出量推計手法に関する調査）報告書」における値。

■ 活動量

試薬の使用に係るジクロロメタン、トリクロロエチレンの使用量については、環境省 VOC 排出インベントリ調査及び、クロロカーボン衛生協会提供データを基に以下の表の通りに設定する。

表 A3-61 試薬の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1994 年度	1990～1994 年度の用途別消費量が存在しないため、1995 年度の総消費量に占める試薬用途の割合（クロロカーボン衛生協会「用途別需要」より算出）を各年度の総消費量に乗じて算出。
1995 年度～	クロロカーボン衛生協会「用途別需要」における試薬用のジクロロメタン・トリクロロエチレン使用量。

その他の試薬については、VOC 排出インベントリ調査に記載の、環境確保条例（東京都）の報告データのうち、使用目的が「試薬」である物質の取扱量の同ジクロロメタン取扱量に対する比率を、クロロカーボン衛生協会の「用途別需要」におけるジクロロメタンの使用量に乗じて推計する。

A3.1.2.2.q. プラスチック発泡剤の使用

a) 排出源カテゴリーの説明

軟質ウレタンフォームの補助発泡剤としてジクロロメタンが使用されており、使用過程で排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

プラスチック発泡剤用のジクロロメタン使用量を排出量として計上する。

■ 排出係数

活動量をそのまま排出量とするため、排出係数は設定しない。

■ 活動量

プラスチック発泡の製造に係るジクロロメタンの使用量については、クロロカーボン衛生協会提供データを基に以下の通り設定した。

表 A3-62 プラスチック発泡剤の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1994 年度	1990～1994 年度の用途別消費量が存在しないため、1995 年度の総消費量に占める発泡用途の割合を各年度の総消費量に乗じて算出。
1995 年度～	クロロカーボン衛生協会「用途別需要」における発泡用のジクロロメタン使用量。

A3.1.2.2.r. 漁網防汚剤の使用

a) カテゴリーの説明

養殖場で用いられる網や定置網に塗布されている漁網防汚剤を希釈するために溶剤が使用されている。網を薬品に漬けた後、溶剤を蒸発させてから網を使用するが、その際に溶剤が大気中に排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

PRTR 届出外排出量の「漁網防汚剤に係る排出量」における「海面養殖等に係る漁網防汚剤の全国使用量」（水産庁調べ）のうち、キシレンの全国使用量（海面養殖・定置網）を排出量として計上する。

■ 排出係数

活動量をそのまま排出量とするため、排出係数は設定していない。

■ 活動量

PRTR 届出外排出量及び、水産庁提供データを基に以下の通り設定した。

表 A 3-63 漁網防汚剤の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1997 年度	漁網防汚剤に係るキシレン使用量が存在しないため、1998 年度の海面養殖及び定置網における漁網防汚剤に係るキシレン使用量を使用する。
1998～2001 年度	水産庁提供データを使用。
2002 年度～	PRTR 届出外排出量の「漁網防汚剤に係る排出量」における水産庁調べによる「海面養殖等に係る漁網防汚剤の全国使用量」のうち、キシレンの全国使用量（海面養殖・定置網）を使用。

A3.1.2.2.s. コンバーティング溶剤の使用

a) カテゴリーの説明

染色整理業のコンバーティング加工施設の乾燥工程、仕上加工の乾燥・ベーキング（形態安定加工）工程、捺染（プリント）の乾燥工程において使用される溶剤が大気中に排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

染色整理業における製品加工高に、加工高当たりの NMVOC 排出係数を乗じることで、排出量を算定する。

■ 排出係数

VOC 排出インベントリにおける、日本染色協会の自主行動計画報告値を基にした排出量を染色整理加工高合計（毛織物を除く）で割り戻して、排出係数として設定する。

表 A 3-64 コンバーティング溶剤の使用に係る排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度値と同値とする。
2000 年度	コンバーティング溶剤の使用に係る VOC 排出量（日本染色協会の自主行動計画報告値に基づく推計値）を染色整理業における製品加工高（毛織物を除く）で割り戻して設定。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度の排出係数の内挿補間により設定。
2005 年度～	コンバーティング溶剤の使用に係る VOC 排出量（日本染色協会の自主行動計画報告値に基づく推計値）を染色整理業における製品加工高（毛織物を除く）で割り戻して設定。

■ 活動量

経済産業省「生産動態統計年報 繊維・生活用品統計編」における染色整理加工高合計（毛織物を除く）を使用する。毛織物については、生産過程でコンバーティング溶剤が使用されていないことから、活動量から控除する。

A3.1.2.2.t. コーティング溶剤の使用

a) カテゴリーの説明

プラスチックフィルム上に特殊機能（帯電防止剤、耐磨耗・傷剤、防曇剤、電磁遮断剤、導電性付与剤、紫外線吸収剤等）を付加するコーティングを行う際に使用する溶剤から排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

フィルム販売数量に、販売数量当たりの排出係数を乗じることで、排出量を算定する。

■ 排出係数

VOC 排出インベントリにおける、ポリエチレンラミネート製品工業会の自主行動計画報告値を基にした排出量をフィルム販売数量で割り戻した値を排出係数として設定する。

表 A 3-65 コーティング溶剤の使用に係る排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～2004 年度	2005 年度の排出係数を適用。
2005 年度～	コーティング溶剤の使用に係る VOC 排出量（ポリエチレンラミネート製品工業会の自主行動計画報告値に基づく推計値）をフィルム販売数量で割り戻して設定。

■ 活動量

「紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計年報」におけるフィルムの販売数量を使用する。

A3.1.2.2.u. 合成皮革溶剤の使用

a) カテゴリーの説明

合成皮革を製造する際、ポリウレタンの溶解に N,N-ジメチルホルムアミドが使用されており、その使用過程で排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

PRTR 届出排出量におけるプラスチック製品製造業における N,N-ジメチルホルムアミドの大気排出量と PRTR 届出外排出量推計結果におけるすそ切り以下事業者からの同様の排出量の合計を計上する。

■ 排出係数

活動量をそのまま排出量とするため、排出係数は設定しない。

■ 活動量

PRTR 届出排出量におけるプラスチック製品製造業における N,N-ジメチルホルムアミドの大気排出量と PRTR 届出外排出量推計結果におけるすそ切り以下事業者からの同様の排出量の合計を使用する。

表 A3-66 合成皮革溶剤の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法	
	PRTR 届出排出量	PRTR 届出外排出量
1990～2000 年度	「紙・印刷・プラスチック・ゴム製品統計年報」における「合成皮革向けのその他の樹脂消費量」の 2001 年度との比率を、2001 年度の大気排出量に乗じて推計。	
2001 年度～ 2012 年度	PRTR 届出排出量におけるプラスチック製品製造業における N,N-ジメチルホルムアミドの大気排出量を使用。	2017 年度 ⁸ の届出排出量に対する届出外排出量の割合を 2001～2012 年度の届出排出量に乗じて算定。
2013 年度～		PRTR 届出外推計結果におけるすそ切り以下事業者からのプラスチック製品製造業における N,N-ジメチルホルムアミド大気排出量を使用。

A3.1.2.2.v. くん蒸剤の使用

a) カテゴリーの説明

農地や倉庫等でのくん蒸剤の使用により臭化メチルが排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

くん蒸剤用途の臭化メチル使用量に使用量当たりの排出係数を乗じて排出量を算定する。

■ 排出係数

VOC 排出インベントリに従い、国立環境研究所「臭化メチルの使用実態調査」（平成 10 年度）に基づく排出係数（64%）を全年度に適用する。

■ 活動量

メチルブロマイド工業会「用途別国内出荷量」におけるくん蒸剤用途の臭化メチル使用量を基に以下の通り設定した。なお、「土壌用」と「検疫用」については、全量をくん蒸剤用途とみなし、「その他用」については、工業原料用が含まれるが、内訳詳細が不明なため 50%をくん蒸剤用途とみなしている。

表 A3-67 くん蒸剤の使用に係る活動量設定方法

年度	活動量の設定方法
1990～1999 年度	臭化メチルの用途別国内向け出荷数量（農林水産省消費・安全局農産安全管理課調べ）。但し「その他用」は当該データを用いて推計。
2000 年度	メチルブロマイド工業会「用途別国内出荷量」におけるくん蒸剤用途の臭化メチル使用量。
2001～2004 年度	臭化メチルの用途別国内向け出荷数量（農林水産省消費・安全局農産安全管理課調べ）。但し「その他用」は当該データを用いて推計。
2005 年度～	メチルブロマイド工業会「用途別国内出荷量」におけるくん蒸剤用途の臭化メチル使用量。

A3.1.2.2.w. 湿し水溶剤の使用

a) カテゴリーの説明

オフセット印刷に使用される湿し水に添加されるエッチ液中のイソプロピルアルコールが

⁸ 過小推計を回避するため、最も割合の大きい年度の値を採用した。

VOCとして大気中に排出される。

b) 方法論

■ 算定方法

平板印刷インキ販売数量に、平板印刷インキ販売数量当たりの VOC 排出量を乗じて排出量を算定する。

$$E = AD \times EF$$

E : 湿し水の使用に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]

AD : 平板印刷インキ販売数量 [t]

EF : 平板印刷インキ販売数量当たり NMVOC 排出量 [t-NMVOC / t]

■ 排出係数

日本印刷産業連合会の自主行動計画報告値を基に以下の通り設定した。

表 A3-68 湿し水の使用に係る NMVOC 排出係数設定方法

年度	排出係数の設定方法
1990～1999 年度	2000 年度の排出係数を適用。
2000 年度	湿し水の使用に係る VOC 排出量（日本印刷産業連合会の自主行動計画報告値に基づく推計値）を平板印刷インキ販売数量で割り戻して設定。
2001～2003 年度	2000 年度と 2004 年度より内挿補間により設定。
2004 年度～	湿し水の使用に係る VOC 排出量（日本印刷産業連合会の自主行動計画報告値に基づく推計値）を、平板印刷インキ販売数量で割り戻して設定。

■ 活動量

「化学工業統計年報（経済産業省）」における平板印刷インキ販売数量を使用する。

A3.1.2.3. その他 - 食料・飲料産業（2.H.2.）（NMVOC）

A3.1.2.3.a. 食料品等（発酵）

a) 排出源カテゴリーの説明

食料品や飲料の製造段階で生成するアルコール等が漏洩することにより、NMVOC として排出される。パンの製造時に生成するアルコール、および酒類の製造時に生成するアルコールが算定対象となるが、これらの排出量はバイオマス起源であると考えられる。

b) 方法論

■ 算定方法

パン及び各種酒類の生産量に、生産量当たりの NMVOC 排出係数を乗じることで、食品製造に係る NMVOC 排出量を算定した。

【パンの生産に係る NMVOC 排出量算定式】

$$E = AD \times EF$$

E : パンの生産に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
 AD : パン生産量 [千 t]
 EF : パン生産量当たりの排出係数 [kg-NMVOC/t]

【酒類の生産に係る NMVOC 排出量算定式】

$$E = AD \times ABV \times EF$$

E : 酒類の生産に伴う NMVOC 排出量 [t-NMVOC]
 AD : 酒類生産量 [千 kl]
 ABV : エチルアルコール含有率 [%]
 (焼酎、ウイスキー類、スピリッツ類、リキュール類にのみ設定)
 EF : 酒類生産量当たりの排出係数 [kg-NMVOC/kl]

■ 排出係数

パンの生産の排出係数は、European Environment Agency 「EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2009」に記載のパンの製造に係る排出係数 (4.5kg / t) を使用した。

酒類の生産の排出係数も、「EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2009」に記載の酒類の製造に係る排出係数 (表 A3-69、A3-70) を使用した。各酒類のエチルアルコール含有率は焼酎、ウイスキー類、スピリッツ類、リキュール類にのみ設定し、このうち焼酎、ウイスキー類については「EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2009」を元に設定した (表 A3-70)。スピリッツ類、リキュール類については、VOC 排出インベントリにおけるエチルアルコール含有率を使用し設定した (表 A3-71、表 A3-72)。

表 A3-69 酒類の製造に係る排出係数

酒類	排出係数	単位
清酒	0.08	kg/100L-酒類製成数量
合成清酒	0.08	kg/100L-酒類製成数量
焼酎	0.4	kg/100L-エチルアルコール製成数量
ビール	0.035	kg/100L-酒類製成数量
果実酒類	0.08	kg/100L-酒類製成数量
ウイスキー類	15	kg/100L-エチルアルコール製成数量
スピリッツ類	0.4	kg/100L-エチルアルコール製成数量
リキュール類	0.4	kg/100L-エチルアルコール製成数量
雑酒 (発泡酒等)	0.035	kg/100L-酒類製成数量

(注) 「EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2009」を基に「VOC 排出インベントリ調査」で設定。

表 A3-70 酒類 (焼酎、ウイスキー類) のエチルアルコール含有率

酒類	エチルアルコール含有率
焼酎	25%
ウイスキー類	40%

(注) 「EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook 2009」を基に設定。

表 A 3-71 スピリッツ類、リキュール類のエチルアルコール含有率設定方法

年度	設定方法
1990～1999 年度	VOC 排出インベントリにおける 2000 年度のエチルアルコール含有率を使用。
2000 年度	VOC 排出インベントリにおけるエチルアルコール含有率を使用。
2001～2004 年度	2000 年度と 2005 年度より内挿補間により設定。
2005 年度～	VOC 排出インベントリにおけるエチルアルコール含有率を使用。

表 A 3-72 酒類（スピリッツ類、リキュール類）のエチルアルコール含有率

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
スピリッツ類	25.9%	25.9%	25.9%	12.7%	10.6%	10.3%	10.1%	10.1%	10.0%	9.8%	9.7%	9.7%	9.8%	9.8%
リキュール類	11.7%	11.7%	11.7%	8.5%	7.2%	7.0%	6.9%	6.8%	6.7%	6.8%	6.7%	6.5%	6.4%	6.4%

■ 活動量

パンについては、農林水産省「米麦加工食品生産動態統計調査年報」における各種パンの生産量を活動量とした。

酒類については国税庁「酒類製成及び手持高表」における各種酒類の製成数量（生産量）を活動量とした。

A3.1.3. 農業分野

A3.1.3.1. 野外で農作物の残留物を焼くこと（3.F: CO、NO_x）

a) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される CO、NO_x については、CH₄、N₂O の算定と同様に 2006 年 IPCC ガイドラインに示された方法を用いて算定した。

$$E = A \times M_B \times C_f \times G_{ef} \times 10^{-3}$$

E : 農作物残渣の野焼きによる CO、NO_x 排出量 [t-CO または t-NO_x]

A : 野焼き対象の面積 [ha]

M_B : 単位面積当たり燃焼重量 [t/ha]

C_f : 燃焼係数

G_{ef} : 排出係数 [g-CO/kg または g-NO_x/kg]

■ 排出係数

CO: 92 g-CO/kg（乾物）（2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値）

NO_x: 2.5 g-NO_x/kg（乾物）（2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値）

■ 活動量

活動量は CH₄、N₂O の算定で用いたものと同じであるため、「5.7. 野外で農作物の残留物を焼くこと（3.F）」を参照されたい。

A3.1.4. 土地利用、土地利用変化及び林業分野

A3.1.4.1. バイオマスの燃焼 (4(V))

a) 方法論

1) 森林火災に伴う非 CO₂ 排出 (CO、NO_x)

■ 算定方法

バイオマスの燃焼による CO 及び NO_x の排出量については、Tier 1 の算定方法を用いた。

○ CO

$$bbGHG_f = L_{forest\ fires} \times ER$$

○ NO_x

$$bbGHG_f = L_{forest\ fires} \times ER \times NC_{ratio}$$

- bbGHG_f* : 森林によるバイオマス燃焼に伴う CO、NO_x 排出量
L_{forest fires} : 森林の火災に伴う炭素ストック損失量 [tC/yr]
ER : 排出比 (CO : 0.06、NO_x : 0.121)
NC_{ratio} : NC 比

■ 排出係数

○ 排出比

バイオマスの燃焼に伴う CO 及び NO_x の排出比には以下のパラメータを用いた。

CO : 0.06、NO_x : 0.121

(出典 : GPG-LULUCF デフォルト値 Table3A.1.15)

○ NC 比

バイオマスの燃焼に伴う NO_x の NC 比には、以下のパラメータを用いた。

NC 比 : 0.01

(出典 : GPG-LULUCF p.3.50 デフォルト値)

■ 活動量

森林における活動に関しては、森林火災による炭素排出量を適用した。詳細に関しては、第 6 章の 6.16 節の活動量の項目を参照のこと。

2) 果樹剪定枝の焼却に伴う非 CO₂ 排出 (CO、NO_x)

■ 算定方法

果樹剪定枝の焼却による CO、NO_x 排出については、2006 年 IPCC ガイドラインに提示されている方法 (Equation 2.27, p.2.42, Vol.4) を適用して計算を行った。算定式は以下のとおりである。

$$L_{fire} = M_B \times C_f \times G_{ef} \times 10^{-6}$$

- L_{fire}* : 焼却に伴う CO、NO_x 排出量 [kt]
M_B : 焼却量 [t-d.m]
C_f : 燃焼率
G_{ef} : 排出係数 [t/kt-d.m.]

■ 各種パラメータ

燃焼率についてはわが国の農業分野の農作物残渣の野焼きで一般的に利用されている値 (0.90) を利用することとする。排出係数は 2006 年 IPCC ガイドラインに記載されたデフォ

ルト排出係数のうち「Agricultural residue」の値を適用することとする。

表 A 3-73 焼却に伴うデフォルト排出係数 [t/kt-d.m.]

区分	CO	NOx
Agricultural residue	92	2.5

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン, Vol.4, chp.2, Table 2.5

■ 活動量（焼却量）

果樹剪定枝（残さ）の活動量に関しては、第 6 章の 6.16 節の活動量の項目を参照のこと。

3) 草地の燃焼に伴う非 CO₂ 排出（CO、NOx）

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの Tier.1、Tier.2 に適用されるバイオマス燃焼の算定式 (Equation 2.27, p2.42, Vol.4) に従い、草地の燃焼に伴う CO、NOx 排出量の算出を行った。算定式は以下のとおりである。

$$L_{fire} = A \times M_B \times C_f \times G_{ef} \times 10^{-6}$$

L_{fire} : 焼却に伴う CO、NOx 排出量 [kt]

A : 燃焼面積 [ha]

M_B : 単位面積あたり焼却量 [t-d.m./ha]

C_f : 燃焼率

G_{ef} : 排出係数 [t/kt-d.m.]

■ 各種パラメータ

燃焼率については我が国における調査データも鑑み、専門家判断により 90%を利用した。排出係数は 2006年 IPCC ガイドラインに記載されたデフォルト排出係数のうち「Savanna and grassland」のデフォルト値を適用した。

表 A 3-74 焼却に伴うデフォルト排出係数 [t/kt-d.m.]

区分	CO	NOx
Savanna and grassland	65	3.9

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン, Vol.4, chp.2, Table 2.5

■ 活動量（焼却量）

草地燃焼の活動量（焼却量）に関しては、第 6 章 6.16 節の活動量の項目を参照のこと。

A3.1.5. 廃棄物分野

A3.1.5.1. 廃棄物の焼却と野焼き (5.C.)

A3.1.5.1.a. 一般廃棄物の焼却 (5.C.1.-)

a) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される NO_x、CO、NMVOC、SO_xについては、一般廃棄物の焼却施設区分別（全連続式焼却炉、准連続式焼却炉、バッチ燃焼式焼却炉、ガス化溶融炉）の焼却量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。当該排出量は、NIR 第 7 章に記載している方法を用いて、エネルギー回収を伴わない単純焼却と、エネルギー回収を伴う焼却に分離し、単純焼却分を廃棄物分野で、エネルギー回収を伴う分をエネルギー分野に分けて報告している。

■ 排出係数

○ NO_x、SO_x

焼却炉については、環境省「大気汚染物質排出量総合調査」によって把握された排出量及び廃棄物処理量を用いて、焼却施設区分別の排出係数を設定した（対象施設は [1301：廃棄物焼却炉（一般都市廃棄物用、連続）] と [1302：廃棄物焼却炉（一般都市廃棄物用、バッチ）]、対象燃原料は [53：一般廃棄物]）。なお、「大気汚染物質排出量総合調査」では焼却施設区分が「連続」と「バッチ」の2区分とされているが、「連続」のうち操炉時間 3000 時間以下のものを「准連続」とした上で、「全連続燃焼式」、「准連続燃焼式」、「バッチ燃焼式」の3区分で排出係数を設定した。

ガス化溶融炉については、燃焼方式が類似の全連続燃焼式焼却炉の値を代用した。

表 A 3-75 一般廃棄物の焼却施設区分別の NO_x、SO_x 排出係数

炉種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
NO_x															
全連続燃焼式焼却炉	kg-NO _x /t	1.238	1.213	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127
准連続燃焼式焼却炉	kg-NO _x /t	1.055	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226	1.226
バッチ燃焼式焼却炉	kg-NO _x /t	1.137	1.918	1.850	1.850	1.850	1.850	1.850	1.850	1.850	1.850	1.850	1.850	1.850	1.850
ガス化溶融炉	kg-NO _x /t	1.238	1.213	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127	1.127
SO_x															
全連続燃焼式焼却炉	kg-SO _x /t	0.555	0.539	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361
准連続燃焼式焼却炉	kg-SO _x /t	0.627	1.141	0.712	0.712	0.712	0.712	0.712	0.712	0.712	0.712	0.712	0.712	0.712	0.712
バッチ燃焼式焼却炉	kg-SO _x /t	1.073	1.625	1.714	1.714	1.714	1.714	1.714	1.714	1.714	1.714	1.714	1.714	1.714	1.714
ガス化溶融炉	kg-SO _x /t	0.555	0.539	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361	0.361

（注）2001 年以降のデータは 2000 年データで代替している。

（出典）環境省「大気汚染物質排出量総合調査」

○ CO

焼却炉については、大気環境学会「温室効果ガス排出量推計手法調査報告書」（1996 年）等において集計された個々の施設の排出係数データに基づいて、焼却施設区分別の排出係数を設定した。なお、「温室効果ガス排出量推計手法調査報告書」では焼却施設区分が炉種（ストーカ炉、流動床炉等）によって細区分されているが、炉種別焼却量を用いて加重平均した上で、「全連続燃焼式」、「准連続燃焼式」、「バッチ燃焼式」の3区分で排出係数を設定した。

ガス化溶融炉については、燃焼方式が類似の焼却炉である全連続燃焼式ストーカ炉の値を代用した。

表 A 3-76 一般廃棄物の焼却施設区分別の CO 排出係数

炉種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
全連続燃焼式焼却炉	g-CO/t	557	557	555	554	554	554	553	553	553	553	553	553	554	554
准連続燃焼式焼却炉	g-CO/t	548	548	567	591	605	611	609	613	609	614	607	600	603	603
バッチ燃焼式焼却炉	g-CO/t	8,237	8,237	8,298	8,341	8,351	8,270	8,272	8,270	8,274	8,274	8,279	8,281	8,239	8,239
ガス化溶融炉	g-CO/t	567	567	567	567	567	567	567	567	567	567	567	567	567	567

（出典）大気環境学会「温室効果ガス排出量推計手法調査報告書」（1996 年）等

○ NMVOC

焼却炉及びガス化溶融炉ともに、CH₄及び NMVOC の発熱量当り排出量を推計した資料（日本環境衛生センター「地球温暖化問題への対策に関するスクリーニング調査結果報告書（大気管理）」（1989）、計量計画研究所「炭化水素類排出量概要推計方法確立調査」（1984））を用いて設定した燃料種別の排出量比「NMVOC/CH₄」を、炉種別燃料種別の CH₄ 排出係数に乗じることによって、NMVOC 排出係数を設定した。

表 A3-77 一般廃棄物の焼却施設区分別の NMVOC 排出係数

炉種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
全連続燃焼式焼却炉	g-NMVOC/t	0.9	0.9	0.9	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3
准連続燃焼式焼却炉	g-NMVOC/t	7.8	7.8	8.5	2.2	2.3	2.4	2.3	2.4	2.3	2.4	2.3	2.3	2.3	2.3
バッチ燃焼式焼却炉	g-NMVOC/t	9.1	9.1	9.5	1.5	1.5	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3	1.2	1.2
ガス化溶融炉	g-NMVOC/t	-	-	0.6	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8

(出典) 日本環境衛生センター「地球温暖化問題への対策に関するスクリーニング調査結果報告書(大気管理)」(1989)、計量計画研究所「炭化水素類排出量概要推計方法確立調査」(1984)

■ 活動量

焼却炉の活動量には、環境省「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用量実態調査報告書(廃棄物等循環利用量実態調査編)」に示された一般廃棄物焼却量に、環境省「日本の廃棄物処理」より算出される焼却施設区分別の焼却割合を乗じることによって算定した焼却施設区分別焼却量を用いた。

ガス化溶融炉の活動量には、環境省「日本の廃棄物処理」より算出されるガス化溶融炉の焼却量を用いた。

A3.1.5.1.b. 産業廃棄物の焼却 (5.C.1.-)

a) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される NO_x、CO、NMVOC、SO_xについては、産業廃棄物の種類別(燃原料別)焼却量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。当該排出量は、NIR 第7章に記載している方法を用いて、エネルギー回収を伴わない単純焼却と、エネルギー回収を伴う焼却に分離し、単純焼却分を廃棄物分野で、エネルギー回収を伴う分をエネルギー分野に分けて報告している。

■ 排出係数

○ NO_x、SO_x

環境省「大気汚染物質排出量総合調査」によって把握された排出量及び廃棄物処理量を用いて、産業廃棄物の種類別の排出係数を設定した(対象施設は[1303: 廃棄物焼却炉(産業廃棄物用、連続)]と[1304: 廃棄物焼却炉(産業廃棄物用、バッチ)]、対象燃原料は[23: 木材]と[54: 産業廃棄物])。廃棄物の種類は「紙くずまたは木くず」、「汚泥」、「廃油」、「廃プラスチック」、「繊維くず」、「動植物性残渣、家畜の死体」の6区分とし、「紙くずまたは木くず」、「繊維くず」、「動植物性残渣、家畜の死体」には[23: 木材]を、「汚泥」と「廃油」と「廃プラスチック」には[54: 産業廃棄物]を適用した。ただし、複数の廃棄物の混焼は、排出係数の設定対象から除外した。

表 A3-78 産業廃棄物の焼却施設区分別の NO_x、SO_x 排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
NO _x															
「木材23」	kg-NO _x /t	1.545	1.312	5.828	5.828	5.828	5.828	5.828	5.828	5.828	5.828	5.828	5.828	5.828	5.828
「産業廃棄物54」	kg-NO _x /t	0.999	1.158	1.415	1.415	1.415	1.415	1.415	1.415	1.415	1.415	1.415	1.415	1.415	1.415
SO _x															
「木材23」	kg-SO _x /t	1.528	1.274	2.118	2.118	2.118	2.118	2.118	2.118	2.118	2.118	2.118	2.118	2.118	2.118
「産業廃棄物54」	kg-SO _x /t	1.179	1.882	1.352	1.352	1.352	1.352	1.352	1.352	1.352	1.352	1.352	1.352	1.352	1.352

(注) 2001年以降のデータは2000年データで代替している。

(出典) 環境省「大気汚染物質排出量総合調査」

○ CO

大気環境学会「温室効果ガス排出量推計手法調査報告書」(1996年)等において集計された個々の施設の排出係数データに基づいて、産業廃棄物の種類別の排出係数を設定した。廃棄

物の種類は「紙くずまたは木くず」、「汚泥」、「廃油」、「廃プラスチック」、「繊維くず」、「動植物性残渣、家畜の死体」の6区分とし、実測例のない「繊維くず」、「動植物性残渣、家畜の死体」には「木くず」の排出係数を適用した。また、複数の廃棄物の混焼は、排出係数の設定対象から除外した。

表 A3-79 産業廃棄物焼却施設の操業形態別のCO排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
紙くず又は木くず	g-CO/t	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334
廃油	g-CO/t	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127
廃プラスチック類	g-CO/t	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790	1,790
汚泥	g-CO/t	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285	2,285
繊維くず	g-CO/t	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334
動植物性残渣・動物の死体	g-CO/t	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334	1,334

(出典) 大気環境学会「温室効果ガス排出量推計手法調査報告書」(1996年)等

○ NMVOC

CH₄及びNMVOCの発熱量当り排出量を推計した資料(日本環境衛生センター「地球温暖化問題への対策に関するスクリーニング調査結果報告書(大気管理)」(1989)、計量計画研究所「炭化水素類排出量概要推計方法確立調査」(1984))を用いて設定した燃料種別の排出量比「NMVOC/CH₄」を、炉種別燃料種別のCH₄排出係数に乗じることによって、NMVOC排出係数を設定した。

表 A3-80 産業廃棄物の焼却施設区分別のNMVOC排出係数

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
紙くず又は木くず	g-NMVOC/t	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48
廃油	g-NMVOC/t	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54	0.54
廃プラスチック類	g-NMVOC/t	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40	3.40
汚泥	g-NMVOC/t	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61
繊維くず	g-NMVOC/t	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48
動植物性残渣・動物の死体	g-NMVOC/t	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48	2.48

(出典) 日本環境衛生センター「地球温暖化問題への対策に関するスクリーニング調査結果報告書(大気管理)」(1989)、計量計画研究所「炭化水素類排出量概要推計方法確立調査」(1984)

■ 活動量

活動量には、環境省「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用量実態調査報告書(廃棄物等循環利用量実態調査編)」に示された廃棄物の種類別の焼却量を用いた。

A3.1.5.1.c. 産業廃棄物の野焼き(5.C.2.-)

a) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出されるNO_x、CO、NMVOC、SO_xについては、産業廃棄物の野外焼却量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。

■ 排出係数

国内での野焼きの排出係数に関する知見が無いことから、産業廃棄物の焼却のための排出係数を代替とし、「廃プラスチック類」の野焼きについては廃プラスチック類の焼却に用いたNO_x、CO、NMVOC、SO_xの排出係数を、それ以外の廃棄物については木くずの焼却に用いた同様の排出係数を適用した。詳細は「A3.1.5.1.b 産業廃棄物の焼却(5.C.1.-)」を参照のこと。

■ 活動量

活動量には、「産業廃棄物行政組織等調査報告書、環境省」に記載される、野外焼却される産業廃棄物の量を用いた。1995年度以前の産業廃棄物の野外焼却量は同報告書から把握できないが、適切な推計方法を想定することが困難なため、1996年度データを1990~1995年度にも代用した。

A3.1.5.1.d. 廃棄物の原燃料利用に伴う焼却 (1.A.-)

a) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される CO、NMVOC については、廃棄物の種類別原燃料利用焼却量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。当該排出量は NIR 第7章に記載した区分に応じて、エネルギー分野 (1.A) で報告している。

■ 排出係数

○ CO

1A 固定発生源からの排出量算定に用いている各種炉における CO 排出係数 (熱量単位ベース) に、総合エネルギー統計における発熱量を乗じて重量ベースに換算し、これを CO 排出係数とした。

表 A 3-81 廃棄物の原燃料利用に伴う焼却の CO 排出係数

用途	単位	廃油	RDF	RPF	廃タイヤ (2004年 度以前)	廃タイヤ (2005年 度以降)	廃プラ	廃プラ (油化)	木くず
単純焼却	kg-CO/t	0.13	1.79	1.79	1.79	1.79	-	-	-
ボイラー	kg-CO/t	0.052	0.24	0.39	0.28	0.44	0.39	0.034	3.64
セメント焼成	kg-CO/t	-	19.8	32.2	23.0	36.5	32.2	-	-
その他の炉	kg-CO/t	0.052	0.24	0.39	0.28	0.44	-	-	-
乾留炉	kg-CO/t	-	-	-	0.021	0.033	-	-	-
ガス化	kg-CO/t	-	-	-	0.015	0.024	-	-	-

○ NMVOC

一般廃棄物、産業廃棄物の焼却時と同様に、CH₄及び NMVOC の発熱量当り排出量を推計した資料から排出係数を求めた。

表 A 3-82 廃棄物の原燃料利用に伴う焼却の NMVOC 排出係数

用途	単位	廃油	RDF	RPF	廃タイヤ (2004年 度以前)	廃タイヤ (2005年 度以降)	廃プラ	廃プラ (油化)	木くず
ボイラー	kg-NMVOC/t	0.015	0.00027	0.00043	0.00031	0.00049	0.00043	0.010	0.12
セメント焼成	kg-NMVOC/t	-	-	0.043	0.031	0.049	0.043	-	-
乾留炉	kg-NMVOC/t	-	-	-	0.0051	0.0080	-	-	-
ガス化	kg-NMVOC/t	-	-	-	0.0187	0.0297	-	-	-

■ 活動量

廃棄物の原燃料利用に伴う CH₄排出量の推計に用いた活動量をそのまま用いた。

A3.1.6. その他分野

A3.1.6.1. 喫煙（6.- : CO）

a) 方法論

■ 算定方法

当該排出源から排出される CO については、煙草の販売数量に、日本独自の排出係数を乗じることによって、排出量を算定した。

$$E_{CO} = S \times EF$$

E_{CO} : 喫煙からの CO 排出量

S : 煙草の販売数量

EF : 排出係数 [g-CO/本]

■ 排出係数

日本たばこ産業株式会社から提供された排出係数（0.055 [g-CO/本]）を用いた。

■ 活動量

活動量には、社団法人 日本たばこ協会の HP（<http://www.tioj.or.jp>）において公表されている紙巻たばこの販売数量を用いた。

参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための1996年改訂IPCCガイドライン」(1997)
2. IPCC「グッドプラクティスガイダンス及び不確実性管理報告書」(2000)
3. IPCC「グッドプラクティスガイダンス 土地利用、土地利用変化及び林業分野」(2003)
4. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」(2006)
5. European Environment Agency「EMEP/EEA Air Pollutant Emission Inventory Guidebook」
6. 資源エネルギー庁「石油産業における炭化水素ベーパー防止トータルシステム研究調査報告書」(1975)
7. 資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」
8. 資源エネルギー庁「ガス事業生産動態統計」
9. 経済産業省・環境省「PRTR届出外排出量の推計方法」
10. 経済産業省「ゴム製品統計年報」
11. 経済産業省「生産動態統計年報 化学工業統計編」
12. 経済産業省「エネルギー生産・需給統計年報」
13. 経済産業省「資源・エネルギー統計年報」
14. 経済産業省「生産動態統計年報 資源・窯業・建材統計編」
15. 経済産業省「生産動態統計年報 紙・印刷・プラスチック製品・ゴム製品統計編」
16. 経済産業省「生産動態統計年報 繊維・生活用品統計編」
17. 経済産業省「VOC自主行動計画及び実績報告」
18. 経済産業省「工業統計」
19. 経済産業省・環境省「PRTR届出排出量・移動量の対象化学物質別集計結果」
20. 国土交通省「航空輸送統計年報」
21. 国土交通省「自動車輸送統計年報」
22. 国土交通省「港湾統計年報」
23. 農林水産省「米麦加工食品生産動態統計調査年報」
24. 国税庁「酒類製成及び手持高表」
25. 環境省「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査(二輪車)(平成14年度)」
26. 環境省「新たな自動車排出ガス試験法の開発調査(特殊自動車)(平成15年度)」
27. 環境省「平成23年度揮発性有機化合物(VOC)排出インベントリ作成等に関する調査業務報告書」(2012)
28. 環境省「揮発性有機化合物(VOC)排出インベントリ」
29. 環境省「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用量実態調査報告書(廃棄物等循環利用量実態調査編)」
30. 環境省「産業廃棄物行政組織等調査報告書」
31. 環境省「大気汚染物質排出量総合調査」
32. 環境省「自動車排出ガス原単位及び総量算定検討調査」
33. 環境省「日本の廃棄物処理」
34. 環境庁大気保全局「群小発生源対策検討会報告書」(1996)
35. 気象庁「気象統計情報」
36. 厚生労働省「ドライクリーニングにおける溶剤の使用管理状況に関する調査」
37. 国立環境研究所「臭化メチルの使用実態調査」(平成10年度)
38. 日本エネルギー経済研究所「エネルギー・経済統計要覧」
39. 計量計画研究所「炭化水素類排出量概要推計方法確立調査」(1984)
40. 計量計画研究所「炭化水素類発生源基礎解析調査報告書」(1987)

41. 計量計画研究所「平成8年度前駆物質排出目録検討調査報告書」(1997)
42. 計量計画研究所「大気汚染物質排出量グリッドデータ整備業務報告書」(2000)
43. 計量計画研究所「東京都環境局委託 民生部門からの VOC 排出量調査報告書(平成22年3月)」(2010)
44. 日本接着剤工業会「接着剤実態調査報告書」
45. 日本環境衛生センター「地球温暖化問題への対策に関するスクリーニング調査結果報告書(大気管理)」(1989)
46. 大気環境学会「温室効果ガス排出量推計手法調査報告書」(1996)
47. 日本たばこ協会 HP (<http://www.tioj.or.jp/index.html>)
48. 公害研究対策センター「窒素酸化物総量規制マニュアル〔新版〕」(2000)
49. 自動車検査登録情報協会「自動車保有車両数(自検協統計)」
50. 海洋政策研究財団「平成17年度 船舶からの揮発性有機化合物(VOC)の排出影響に関する調査報告書(平成18年3月)」(2006)
51. 海洋政策研究財団「平成23年度 排出規制海域設定による大気環境改善効果の算定事業報告書(平成24年3月)」(2012)
52. 石油通信社「石油資料」
53. 日本産業洗浄協議会「平成17年度 揮発性有機化合物(VOC)排出抑制に係る自主的取組推進マニュアル原案作成(洗浄関係)委員会報告」
54. 天然ガス鉱業会「天然ガス資料年報」
55. 日本塗料工業会「塗料からの VOC 排出実態推計のまとめ」
56. 富士経済研究所「化粧品マーケティング要覧」
57. 日本オートケミカル工業会「オートケミカル製造業実態調査報告書」
58. 横田久司、上野広行、石井康一郎、内田悠太、秋山薫「ガソリン給油ロスによる VOC の排出について」大気環境学会誌、第47巻、第5号(2012)
59. 横田久司、上野広行、石井康一郎、内田悠太、秋山薫「給油時のガソリン蒸発ガス成分及びガソリン乗用車からの VOC 排出量推定について」東京都環境科学研究所年報(2011)
60. 石油連盟「今日の石油産業2015」(2015)
61. 石油連盟「都道府県別石油製品販売総括」
62. 日本クリーニング用洗剤同業会「洗剤出荷実績」
63. 日本エアゾール協会「エアゾール製品生産数量調査」
64. 経済産業省委託「化学物質安全対策(すそ切り以下事業者排出量推計手法、オゾン層破壊物質及び低含有率物質の排出量推計手法に関する調査)報告書」
65. 自動車検査登録情報協会「自動車保有車両数(自検協統計)」
66. 日本自動車工業会「自動車統計月報」
67. 日本自動車工業会「二輪車市場動向調査」
68. 米国環境保護庁「Compilation of Air Pollutant Emission Factors (AP-42)」Volume 1, 4th Edition (1985)
69. 自動車技術会「自動車原動機の環境対応技術」(2008)

別添（Annex）4 直近報告年のエネルギー収支

A4.1. CRF 報告値と IEA 報告値の相違点

2007年1月から2月に行われた対日審査の報告書（FCCC/ARR/2006/JPN）において専門家審査チーム（ERT）からCRFに報告された数字とIEA統計に報告された数字にいくつか相違があるので次回NIR提出時に相違点について明確な説明をすべきであるとの勧告を受けた。この勧告を受けてCRFとIEA統計で報告されている2005年の値の違いに関する詳細な情報をNIRの別添で提供してきたが、2010年提出インベントリの対日審査報告書（FCCC/ARR/2010/JPN）において、これを直近のインベントリ年で更新することがERTより勧告された。この勧告を受けて、CRFとIEA統計で報告されている値の違いに関する詳細な情報を2016年度実績で更新する。説明中のIEA統計の数値は、OECD/IEA, *World Energy Statistics, 2019 Edition* の電子版から引用した。

概略を説明すると、燃料の輸出入量の相違は、(a) CRFとIEA統計の間で国際航空や外航船舶における燃料消費（ボンド輸出）の取り扱いが異なること、(b) A重油の分類が異なること、に起因する。CRFに報告している燃料の輸出入量はボンド輸出を含むが、IEA統計の燃料の輸出入量はボンド輸出を含まない。また、A重油については、日本のエネルギーバランス表では重油（heavy fuel oil）に分類されるが、IEAへの報告では欧米での分類に従い、軽油（gas/diesel oil）として報告している。

なお、日本における定義では、A重油とは重油のうち、引火点60℃以上、動粘度20 mm²/s以下、残留炭素分4%以下、硫黄分2.0%以下の性状を有するものとされている。また、B重油とは、重油のうち、引火点60℃以上、動粘度50 mm²/s以下、残留炭素分8%以下、硫黄分3.0%以下の性状を有するものである。B重油は現在ほとんど使われなくなっているため、日本の統計ではC重油と併せ「B・C重油」として扱われている。なお、C重油とは、重油のうち、引火点70℃以上、動粘度1,000 mm²/s以下、硫黄分3.5%以下の性状を有するものである。

ほかに、IEAへの報告時期は、報告する年度（y）が終了した年（y+1）の秋であるため、総合エネルギー統計の速報値を報告している。対して、CRFの報告時期は翌年（y+2）の春であるため、総合エネルギー統計の確報値を報告している。このため、国連が審査する翌年（y+2）の夏の時点では速報値（IEA統計）と確報値（CRF）の相違が生じている。IEAに報告した速報値は翌年（y+2）秋の確報値報告で更新され、更新された数値は翌々年（y+3）夏に出版されるので、この時点で日本からの報告値は一致することとなる（ただし、後述する定義や計算方法の相違等に起因する数値の不一致を除く）。

以下に、指摘のあった相違点について個別に説明する。

a) ジェット燃料油と residual fuel oil の輸出量の相違

<ERT 指摘事項 FCCC/ARR/2006/JPN>

Exports of liquid fuels are between 40 and 70 per cent lower in the IEA data; the differences are due in particular to differences in the figures for jet kerosene and residual fuel oil, with the largest errors occurring in recent years.

<説明1：ジェット燃料油の輸出量>

ジェット燃料油の輸出量がCRFとIEA統計とで異なるのは、CRFに報告しているジェット燃料油はボンド輸出を含む輸出量であるが、IEA統計のジェット燃料油の輸出量はボンド輸出を含まないためである。IEA統計ではジェット燃料油のボンド輸出分はボンド輸入分と

合算して国際航空バンカー（international aviation bunkers）に計上する。（ボンド輸出入については第3章を参照）

表 A 4-1 ジェット燃料油の2017年度の輸出量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
輸出：9,878.62×10 ³ kL <内訳> ボンド輸出を除く輸出：2,643.66×10 ³ kL ボンド輸出：7,234.96×10 ³ kL	輸出：2,071×10 ³ t [2,643.66×10 ³ kL（ボンド輸出を除く輸出量） × 0.7834 t/kL（密度） = 2,071×10 ³ t] <備考1> 国際航空：6,652×10 ³ t [7,234.96×10 ³ kL（ボンド輸出分） + 1,256.10×10 ³ kL（ボンド輸入分） = 8,491.06×10 ³ kL 8,491.06×10 ³ kL × 0.7834 t/kL（密度） = 6,652×10 ³ t]

<説明2：residual fuel oilの輸出量>

residual fuel oilの輸出量がCRFとIEA統計とで異なるのは、CRFに報告するresidual fuel oilはボンド輸出を含む輸出量であるが、IEA統計のfuel oilの輸出量はボンド輸出を含まないためである。IEA統計ではfuel oilのボンド輸出分はボンド輸入分と合算して外航海運バンカー（international marine bunkers）に計上する。（ボンド輸出入については第3章を参照）

また、CRFのresidual fuel oilの輸出量はA重油を含むが、IEA統計のfuel oilはA重油を含まない量である。IEA統計ではA重油は軽油と共にgas/diesel oilに計上する。日本ではA重油は軽油と区別され重油として扱うが、欧米では軽油と一緒に扱うためIEAへは従来から軽油に含めて報告している。

表 A 4-2 Residual fuel oilの2017年度の輸出量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
輸出：8,338.08×10 ³ kL [1,243.78×10 ³ kL（A重油） + 7,094.30×10 ³ kL（B・C重油） = 8,338.08×10 ³ kL] <内訳> A重油の輸出：1,243.78×10 ³ kL ボンド輸出を除く輸出：1,075.53×10 ³ kL ボンド輸出：168.25×10 ³ kL B・C重油の輸出：7,094.30×10 ³ kL ボンド輸出を除く輸出：2678.80×10 ³ kL ボンド輸出：4,415.51×10 ³ kL	輸出：2,411×10 ³ t [2,679×10 ³ kL（ボンド輸出を除くB・C重油の輸出量） × 0.9 t/kL（密度） = 2,411×10 ³ t] <備考> 外航海運：3,983×10 ³ t [4,415.51×10 ³ kL（B・C重油のボンド輸出分） + 10.06×10 ³ kL（B・C重油のボンド輸入分） = 4,425.57×10 ³ kL 4,425.57×10 ³ kL × 0.9 t/kL（密度） = 3,983×10 ³ t]

b) ジェット燃料油とgas/diesel oilの輸入量の相違

<ERT 指摘事項 FCCC/ARR/2006/JPN>

Imports of jet kerosene have been reported to the IEA, but are shown as zero in the CRFs for the years 1990-1997, while imports of gas/diesel oil are systematically about 80 per cent lower in the CRF tables than in the IEA figures.

<説明1：ジェット燃料油の輸入量>

ジェット燃料油の輸入量が CRF と IEA 統計とで異なるのは、CRF に報告しているジェット燃料油はボンド輸入を含む輸入量とボンド輸出量の合計量であるが、IEA 統計のジェット燃料油の輸入量はボンド輸入を含む輸入量であることによる（ボンド輸出入については第3章を参照）。

表 A 4-3 ジェット燃料油の 2017 年度の輸入量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
輸入：8,846.11×10 ³ kL <内訳> ボンド輸入を除く輸入：355.05×10 ³ kL ボンド輸入：1,256.10×10 ³ kL ボンド輸出：7,234.96×10 ³ kL	輸入：1,262×10 ³ t [355.05×10 ³ kL（ボンドを除く輸入分） + 1,256.10×10 ³ kL（ボンド輸入分） = 1,611.14×10 ³ kL. 1,611.14×10 ³ kL（ボンド輸入を含む輸入量） × 0.7834 t/kL（密度） = 1,262×10 ³ t]

<説明2：gas/diesel oil の輸入量>

gas/diesel oil の輸入量が CRF と IEA 統計とで異なるのは、CRF に報告している gas/diesel oil は A 重油を含まない軽油のみの輸入量（ボンド輸入分を含む）とボンド輸出量の合計量であるが、IEA 統計の gas/diesel oil の輸入量はボンド輸入分を含む軽油の輸入量とボンド輸入分を含む A 重油の輸入量の合計であるためである。

表 A 4-4 Gas / diesel oil の 2017 年度の輸入量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
輸入：542.74×10 ³ kL <内訳> ボンド輸入を除く輸入：510.96×10 ³ kL ボンド輸入：18.42×10 ³ kL ボンド輸出：13.36×10 ³ kL	輸入：516×10 ³ t [510.96×10 ³ kL（ボンド輸入を除く軽油輸入量） + 18.42×10 ³ kL（軽油ボンド輸入量） + 83.06×10 ³ kL（ボンド輸入を除く A 重油輸入量） + 0 kL（A 重油ボンド輸入量） = 612.44×10 ³ kL 612.44×10 ³ kL × 0.843 t/kL（密度） = 516×10 ³ t]

c) 原料炭の輸入量の相違

<ERT 指摘事項 FCCC/ARR/2006/JPN>

Furthermore, the figures for imports of coking coal are systematically lower in the CRF tables than those in the IEA statistics, with the largest discrepancy occurring in 1999.

<説明：原料炭の輸入量>

原料炭輸入量の物理量は、CRF と IEA 統計とで基本的には同じである。

表 A 4-5 原料炭の 2017 年度の輸入量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
輸入：47,347.40×10 ³ t <備考> CRF はコークス用原料炭と吹込用原料炭の単純合計を報告している。 コークス用原料炭：47,347.40×10 ³ t 吹込用原料炭：0×10 ³ t	輸入：47,347.40×10 ³ t

d) 液体及びガス体燃料の在庫変動の相違

<ERT 指摘事項 FCCC/ARR/2006/JPN>

In addition, the data on stock changes are not consistent for liquid and gaseous fuels.

在庫変動量の符号が CRF と IEA とで異なることに注意が必要である。CRF の変動量は正値が在庫積増、負値が取崩と定義されている。一方、IEA の変動量は、負値が在庫積増、正値が取崩と定義されている。

<説明 1 : 原油の在庫変動量>

原油の在庫変動量が CRF と IEA 統計とで異なるのは、CRF に報告している原油の在庫変動量は通関後（正確には税関員による立ち会い検尺後）の原油の在庫量から在庫変動量を計算するが、IEA 統計に報告している在庫変動量は通関前であっても日本の領海内洋上のタンカーに搭載されている原油や国家備蓄分も含めて在庫量として計算しているためである。これは、UNFCCC の目的と IEA の目的が異なることによる。

表 A 4-6 原油の 2017 年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：-327.54×10 ³ kL	在庫変動：896×10 ³ t

<説明 2 : NGL の在庫変動量>

2017 年度は、CRF も IEA 統計も 0 である。IEA 統計では NGL の在庫変動量が 0 となっているのは、IEA 統計の値は IEA の Monthly Oil Statistics (MOS) の値と整合していなければならないと IEA から指導されており、MOS における NGL の在庫量は 0 となっているためである。MOS における NGL の在庫量を 0 計上しているのは NGL の在庫量に関する統計値がないためである。更に詳細を説明すると CRF では「在庫変動」となっているが、MOS には「在庫変動」を報告する項目はない。MOS では「opening の在庫量」と「closing の在庫量」を報告することになっているが、我が国では NGL の「opening の在庫量」と「closing の在庫量」に関する統計がない。そのため IEA の MOS への報告では「opening の在庫量」と「closing の在庫量」はそれぞれ 0 としている。一方 CRF では、NGL の在庫量に関する統計値がないため、供給量と消費量の差を在庫変動量とする推計値を報告しており、2017 年度は 0 であった。

<説明 3 : ガソリンの在庫変動量>

CRF に報告しているのはガソリンの在庫変動のみであるが、IEA 統計のガソリンの在庫変動に関する数値は、ガソリンの在庫変動量と国家備蓄変動量の合計からその他ガソリンの在庫変動量を引いて報告する。その他ガソリンは、IEA 統計では White spirit の在庫変動量として報告する。

表 A 4-7 ガソリンの 2017 年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：-104.78×10 ³ kL	motor gasoline の在庫変動：77×10 ³ t <備考> IEA に報告している Motor gasoline の在庫変動量は CRF で報告しているガソリンの在庫変動量にガソリンの国家備蓄分の変動を加え、その他ガソリンの在庫変動量を控除している。

<説明4：ジェット燃料油の在庫変動量>

ジェット燃料油の在庫変動量は、CRFとIEA統計とで基本的に同じである。

表 A 4-8 ジェット燃料油の2017年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：79×10 ³ kL（確報値）	在庫変動：-61×10 ³ t（速報値） [-79×10 ³ kL × 0.7834 t/kL（密度） = -61×10 ³ t] <備考> IEA 統計は、年度末在庫量に密度を乗じて小数点以下を四捨五入した量の差分を計算するので、変動量全体に密度を乗じて計算した場合と若干異なる場合がある。

<説明5：灯油の在庫変動量>

CRFに報告しているのは灯油の在庫変動量のみであるが、IEA統計の灯油の在庫変動量は、灯油の在庫変動量と灯油の国家備蓄変動量の合計である。

表 A 4-9 灯油の2017年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：474.88×10 ³ kL	在庫変動：-386×10 ³ t <備考> IEA 統計は、年度末在庫量に密度を乗じて小数点以下を四捨五入した量の差分を計算するので、変動量全体に密度を乗じて計算した場合と若干異なる場合がある。

<説明6：gas / diesel oil の在庫変動量>

CRFに報告している gas / diesel oil は A 重油を含まない軽油のみの在庫変動量であるが、IEA統計の gas / diesel oil の在庫変動量は A 重油の在庫変動量、軽油及び A 重油の国家備蓄の変動量も含む。

表 A 4-10 Gas / diesel oil の2017年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：-98.66×10 ³ kL	在庫変動：-136×10 ³ t <備考1> IEA 統計の軽油の在庫変動は、当該年度初めの在庫量と次年度初めの在庫量との差を報告しているが、CRFでは、前年度末の在庫量と当該年度末の在庫量との差を報告しているので軽油のみの在庫変動量を見た場合でも若干異なる場合がある。 <備考2> IEA 統計は、在庫量に密度を乗じて小数点以下を四捨五入した量の差分を計算するので、変動量全体に密度を乗じて計算した場合と若干異なる場合がある。

＜説明7：residual fuel oilの在庫変動量＞

residual fuel oilの在庫量がCRFとIEA統計とで異なるのは、CRFに報告しているresidual fuel oilはA重油を含む重油の在庫変動量であるが、IEA統計のfuel oilはA重油を含まない在庫変動量であるためである。（上記「gas/diesel oil」を参照。）

表 A 4-11 Residual fuel oil の 2017 年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：-163.07×10 ³ kL	在庫変動：90×10 ³ t
＜内訳＞ A 重油の在庫変動量：-63.17×10 ³ kL C 重油の在庫変動量：-99.9×10 ³ kL	＜備考＞ IEA 統計には、IEA の MOQ に報告した Residual fuel oil の在庫変動量を報告している。MOQ への報告値は以下のとおり。 C 重油の 2017 年 3 月末の在庫： $1,308.76 \times 10^3 \text{ kL} \times 0.90 \text{ t/kL (密度)} = 1,178 \times 10^3 \text{ t}$ C 重油の 2018 年 3 月末の在庫： $1,208.86 \times 10^3 \text{ kL} \times 0.90 \text{ t/kL (密度)} = 1,088 \times 10^3 \text{ t}$ 在庫変動量： $1,178 \times 10^3 \text{ t} - 1,088 \times 10^3 \text{ t} = 90 \times 10^3 \text{ t}$ なお、C 重油の体積での在庫変動量は、 $1,308.76 - 1,208.86 = 99.9 \times 10^3 \text{ kL}$ である。IEA では符号は逆転する。

＜説明8：LPGの在庫変動量＞

LPGの在庫変動量がCRFとIEA統計とで異なるのは、IEA統計のLPGは国家備蓄量を含むためである。

表 A 4-12 LPG の 2017 年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：-77.9×10 ³ t	在庫変動：29×10 ³ t

＜説明9：ナフサの在庫変動量＞

ナフサの在庫変動量は、CRFとIEA統計とで同じである。

表 A 4-13 ナフサの 2017 年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：264.78×10 ³ kL（確報値）	在庫変動：-195×10 ³ t（速報値） [-264.78×10 ³ kL × 0.737 t/kL（密度） = -195×10 ³ t]

＜説明10：bitumenの在庫変動量＞

「bitumen」の在庫変動量がCRFとIEA統計とで若干異なるのは、CRFの「bitumen」には「アスファルト」と「他重質油・パラフィン等製品」を報告するが、IEA統計の「bitumen」は「アスファルト」のみであるためである。IEA統計では、「他重質油・パラフィン等製品」は「paraffin waxes」に計上する。

表 A 4-14 Bitumen の 2017 年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：30.95×10 ³ t	bitumen の在庫変動：-30×10 ³ t
<内訳> アスファルト：30.19×10 ³ t 2017年3月末在庫：193.11×10 ³ t 2018年3月末在庫：223.29×10 ³ t グリース：1.40×10 ³ t パラフィン：-0.63×10 ³ t	<内訳> アスファルト：-30×10 ³ t 2017年3月末在庫：193.11×10 ³ t 2018年3月末在庫：223.29×10 ³ t <備考> CRF で bitumen に計上しているグリースおよびパラフィンは IEA 統計では Paraffin waxes に計上している。

<説明 1 1：潤滑油の在庫変動量>

潤滑油の在庫変動量は、CRF と IEA 統計とで同じである。

表 A 4-15 潤滑油の 2017 年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：3.01×10 ³ kL（確報値）	在庫変動：-3×10 ³ t（速報値） [3.01×10 ³ kL × 0.891 t/kL（密度） = -3×10 ³ t]
	<備考> IEA では符号は逆転する。

<説明 1 2：オイルコークスの在庫変動量>

オイルコークスの在庫変動量は、CRF と IEA 統計とで同じである。

表 A 4-16 オイルコークスの 2017 年度の在庫変動量（参考）

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：-0.64×10 ³ t	在庫変動：1×10 ³ t

<説明 1 3：refinery feedstock の在庫変動量>

refinery feedstock の在庫変動量が CRF と IEA 統計とで異なるのは、IEA 統計では CRF で報告する精製半製品のほかに粗蠟及び粗コークスの在庫変動量を計上するためである。

CRF で粗蠟及び粗コークスを在庫変動として計上しない理由は、粗蠟及び粗コークスはいずれも固体であってパラフィン、オイルコークスの原料であるため石油精製工程に再度投入されて利用されることはあり得ないこと、粗蠟及び粗コークスから生産されたパラフィン、オイルコークスの出荷量は別途把握されていることによる。

表 A 4-17 Refinery feedstock の 2017 年度の在庫変動量 (参考)

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
在庫変動：-591.97×10 ³ kL <内訳> 揮発油留分：-89.92×10 ³ kL 灯油留分：-68.67×10 ³ kL 軽油留分：-45.81×10 ³ kL 重油留分：-338.32×10 ³ kL 潤滑油留分：-49.25×10 ³ kL	在庫変動：506×10 ³ t <内訳> 揮発油留分：90×10 ³ kL 灯油留分：69×10 ³ kL 軽油留分：46×10 ³ kL 重油留分：338×10 ³ kL 潤滑油留分：49×10 ³ kL 粗蠟：-4×10 ³ kL 粗コークス：0×10 ³ kL 上記のそれぞれに密度をかけて質量に換算し報告している。

<説明 1 4：天然ガスの在庫変動量>

天然ガス（輸入液化天然ガス（LNG）と国産天然ガス）の在庫変動量が CRF と IEA 統計とで異なるのは、輸入 LNG の在庫変動量の推計方法の相違、都市ガスの在庫変動量の計上の有無による。国産天然ガスの在庫に関しては統計で把握されているため CRF、IEA 共に同じ統計値を使っているが、輸入 LNG に関しては両方で推計方法が異なる。CRF で報告している LNG の在庫変動量の推計方法は統計上の LNG の前年度末在庫量と今年度末在庫量の差を在庫変動量としているが、IEA に報告している LNG の在庫変動量の推計方法は前年度 3 月の LNG 輸入量の半分を前年度末在庫量とし、当該年度 3 月の LNG 輸入量の半分を当該年度末在庫量としてその差を在庫変動量としている。これは LNG の在庫量に関する統計がなかった時代から IEA 報告にはこのような推計値を報告してきたという経緯があるためである。また、CRF では都市ガスの在庫変動量を含むが、IEA では含まない。

表 A 4-18 天然ガスの 2017 年度の在庫変動量 (参考)

CRF Table1.A(b)	IEA 統計
天然ガスの在庫変動：-8,114 TJ (GCV) <内訳> LNG の在庫変動量：-5,693 TJ 国産天然ガスの在庫変動量：107 TJ 都市ガスの在庫変動量：-2,529 TJ	天然ガスの在庫変動：5,576 TJ (GCV) <内訳> LNG の在庫変動量：5,683 TJ 国産天然ガスの在庫変動量：-107 TJ

A4.2. 総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）について

A4.2.1. 総合エネルギー統計の概要

エネルギー分野の燃料の燃焼の活動量については、総合エネルギー統計（資源エネルギー庁）に示されたエネルギー消費量を用いている。

総合エネルギー統計は、日本国内に供給された石炭・石油・天然ガスなどのエネルギー源が、どのような形態に転換され、日本国内においてどの部門によりどのような形で消費されたのかを捉え、国内のエネルギー需給の状況を表した統計である。総合エネルギー統計は、供給・転換、消費の各部分を、公的統計を基礎として必要最小限の推計・調整により構築されている。（戒能、2012）

総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）は、各種エネルギー源を「列」、エネルギー供給・転換・消費部門を「行」として、国内のエネルギー需給を行列形式で表現している。

具体的には、各種エネルギー源「列」においては、13の大項目区分（石炭 [0100]¹、石炭製品 [0200]、原油 [0300]、石油製品 [0400]、天然ガス [0500]、都市ガス [0600]、再生可能エネルギー（水力を除く） [0700]、水力発電（揚水除く） [0800]、揚水発電 [0900]、未活用エネルギー [1000]、原子力発電 [1100]、電力 [1200]、熱 [1300]）と必要な中項目以下の区分で構成されている。そして、需給部門「行」の構成については、一次エネルギー供給 [#01]、エネルギー転換 [#08]、最終エネルギー消費 [#19] の3つの大部門と必要な中部門以下の部門で構成されている。

総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）は下記の資源エネルギー庁のウェブサイト
で1990年度から入手できる。

http://www.enecho.meti.go.jp/statistics/total_energy/results.html#headline2

総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）の簡易表を次に示す（表 A4-19～表 A4-22）。

¹ 総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）のコード番号

表 A4-19 総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）の簡易表（1990、1995年度）

1990FY	Row \$	\$0100	\$0200	\$0300	\$0400	\$0500	\$0600	\$0700	\$0800	\$0900	\$1000	\$1100	\$1200	\$1300	\$1400	\$1401	\$1402
<< 総合エネルギー統計 >> エネルギー単位表(本表) 簡易表 高位発熱量基準 表示単位: TJ		石炭	石炭製品	原油	石油製品	天然ガス	都市ガス	再生可能 エネルギー (水力を 除く)	水力発電 (揚水除 く)	揚水発電	未活用エ ネルギー	原子力発 電	電力	熱	合計	エネル ギー利用	非エネル ギー利用
Line #																	
#01	一次エネルギー供給	3,357,112	-39,341	8,981,710	2,026,426	2,056,326	0	265,253	818,519	0	317,978	1,883,500	0	0	19,667,485	18,065,096	1,602,388
#02	国内産出	193,762	0	24,484	0	89,203	0	264,134	818,519	0	317,978	1,883,500	0	0	3,591,581	0	0
#03	輸入	3,161,715	15,352	9,139,187	2,341,168	1,967,475	0	1,119	0	0	0	0	0	16,626,016	0	0	0
#04	総供給	3,355,476	15,352	9,163,671	2,341,168	2,056,678	0	265,254	818,519	0	317,978	1,883,500	0	0	20,217,596	18,615,208	1,602,388
#05	輸出	-53	-56,644	0	-292,955	0	0	-1	0	0	0	0	0	-349,653	0	0	0
#06	供給在庫変動 (+取崩/積増)	1,689	1,951	-181,961	-21,786	-352	0	0	0	0	0	0	0	-200,458	0	0	0
#07	国内供給 供給側 消費側	3,357,112	-39,341	8,981,710	2,026,426	2,056,326	0	265,253	818,519	0	317,978	1,883,500	0	0	19,667,485	18,065,096	1,602,388
#08	エネルギー転換	-3,151,561	1,278,447	-8,961,984	5,499,143	-1,980,245	510,901	-210,804	-818,519	0	-317,978	-1,883,500	2,785,371	1,017,851	-6,232,880	-6,170,658	-62,222
#09	石炭製品製造 (+発生回収/投入)	-2,142,047	1,934,969	0	-27,085	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-234,162	-234,162	0
#10	石油製品製造 (+発生回収/投入)	0	0	-8,073,053	8,125,199	5,121	0	0	0	0	0	0	0	-94,149	-36,882	0	-36,882
#11	ガス製造 (+発生回収/投入)	0	-19,178	0	-161,220	-503,899	683,704	-101	0	0	-445	0	0	0	-1,139	-1,139	0
#12	事業用発電	-673,045	-209,619	-874,209	-1,052,475	-1,529,799	-65	-13,827	-752,524	0	-1,882,503	2,679,366	0	-4,308,700	-4,308,700	0	0
#13	自家用発電	-162,252	-132,541	0	-432,338	-4,367	-27,139	-87,643	-65,995	0	-170,247	-997	407,088	0	-676,431	-676,431	0
#14	自家用蒸気発生	-147,046	-135,509	0	-640,435	-4,241	-61,907	-109,183	0	0	-145,775	0	0	1,106,351	-137,745	-137,745	0
#15	地域熱供給	-824	0	0	-2,592	0	-6,169	-37	0	-1,511	0	-1,229	8,445	-3,916	-3,916	0	0
#16	自家消費・送配損失	-3,015	-161,697	-1,017	-319,060	-238	-20,889	0	0	0	0	-299,854	-2,796	-808,566	-808,566	0	0
#17	転換・消費在庫変動 (+取崩/積増)	-20,454	-858	-13,705	1,607	542	0	-13	0	0	0	0	0	-32,881	0	0	-32,881
#18	統計誤差 (+取崩/不足)	-195,600	12,361	19,725	610,760	18,443	967	7,398	0	0	0	0	32,051	-3,906	502,201	428,368	73,832
#19	最終エネルギー消費	401,151	1,226,745	0	7,525,569	57,638	510,901	54,449	0	0	0	0	2,753,319	1,021,756	13,551,529	12,011,363	1,540,166
#20	企業・事業所他	401,119	1,223,865	0	3,918,348	57,638	167,823	7,398	0	0	0	0	2,036,799	1,020,472	8,833,463	7,334,048	1,499,414
#21	農林水産畜産建設業	133	5,090	0	676,135	1,753	2,182	0	0	0	0	0	82,174	2,276	769,744	538,526	231,218
#22	製造業	400,852	1,218,775	0	2,186,936	55,885	100,469	0	0	0	0	0	1,453,695	935,052	6,351,664	5,157,299	1,194,364
#23	食品飲料	48	0	0	52,839	0	8,102	0	0	0	0	0	55,667	49,454	166,110	166,110	0
#24	繊維	544	0	0	50,419	0	4,699	0	0	0	0	0	70,615	92,180	218,458	218,458	0
#25	パルプ・紙・紙加工品	126	0	0	31,978	2	4,731	0	0	0	0	0	130,637	274,119	441,594	441,594	0
#26	化学工業(含石油石炭製品)	6,633	46,779	0	1,458,711	25,021	9,582	0	0	0	0	0	209,979	234,151	1,990,856	809,905	1,180,951
#27	薬業・土石製品	236,521	37,016	0	202,373	854	13,546	0	0	0	0	0	110,399	42,437	643,147	630,418	12,728
#28	鉄鋼	140,959	1,109,711	0	126,609	24,987	11,084	0	0	0	0	0	271,771	110,581	1,795,703	1,795,017	685
#29	非鉄金属	15,811	11,378	0	56,323	322	9,162	0	0	0	0	0	61,575	17,411	171,982	171,982	0
#30	機械	15	13,891	0	170,765	4,698	33,072	0	0	0	0	0	395,851	76,719	695,011	695,011	0
#31	他製造業	194	0	0	36,918	0	6,489	0	0	0	0	0	147,202	38,000	228,803	228,803	0
#32	業務他(第三次産業)	133	0	0	1,055,278	0	65,172	7,398	0	0	0	0	500,931	83,144	1,712,055	1,638,223	73,832
#33	家庭	0	2,880	0	606,330	0	343,074	47,051	0	0	0	0	656,006	1,284	1,656,625	1,656,625	0
#34	運輸	33	0	0	3,000,891	0	3	0	0	0	0	0	60,514	0	3,061,441	3,020,689	40,752
#35	旅客	33	0	0	1,513,029	0	1	0	0	0	0	0	56,610	0	1,569,672	1,537,748	31,923
#36	貨物	0	0	0	1,487,862	0	3	0	0	0	0	0	3,905	0	1,491,770	1,482,941	8,829
#37	非エネルギー利用(最終消費内数)	6,063	26,437	0	1,493,632	13,997	38	0	0	0	0	0	0	0	1,540,166	0	1,540,166

1995FY	Row \$	\$0100	\$0200	\$0300	\$0400	\$0500	\$0600	\$0700	\$0800	\$0900	\$1000	\$1100	\$1200	\$1300	\$1400	\$1401	\$1402
<< 総合エネルギー統計 >> エネルギー単位表(本表) 簡易表 高位発熱量基準 表示単位: TJ		石炭	石炭製品	原油	石油製品	天然ガス	都市ガス	再生可能 エネルギー (水力を 除く)	水力発電 (揚水除 く)	揚水発電	未活用エ ネルギー	原子力発 電	電力	熱	合計	エネル ギー利用	非エネル ギー利用
Line #																	
#01	一次エネルギー供給	3,725,382	-91,908	10,166,812	1,642,489	2,477,257	0	270,876	728,509	0	380,411	2,693,458	0	0	21,993,285	20,191,531	1,801,754
#02	国内産出	153,374	0	32,455	0	95,250	0	268,391	728,509	0	380,411	2,693,458	0	0	4,351,848	0	0
#03	輸入	3,575,648	18,016	10,171,504	2,226,378	2,382,172	0	2,491	0	0	0	0	0	18,376,210	0	0	0
#04	総供給	3,729,022	18,016	10,203,959	2,226,378	2,477,422	0	270,882	728,509	0	380,411	2,693,458	0	0	22,728,057	20,926,303	1,801,754
#05	輸出	-75	-103,811	0	-717,045	0	0	-6	0	0	0	0	0	-820,938	0	0	0
#06	供給在庫変動 (+取崩/積増)	-3,565	-6,113	-37,147	133,156	-165	0	0	0	0	0	0	0	86,166	0	0	0
#07	国内供給 供給側 消費側	3,725,382	-91,908	10,166,812	1,642,489	2,477,257	0	270,876	728,509	0	380,411	2,693,458	0	0	21,993,285	20,191,531	1,801,754
#08	エネルギー転換	-3,316,691	1,148,397	-10,063,320	6,946,884	-2,418,050	685,997	-224,089	-728,509	0	-380,411	-2,693,458	3,146,437	1,055,422	-6,841,391	-6,776,339	-65,052
#09	石炭製品製造 (+発生回収/投入)	-1,899,695	1,792,057	0	-24,231	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-131,869	-131,869	0
#10	石油製品製造 (+発生回収/投入)	0	0	-9,375,750	9,417,456	5,773	0	0	0	0	0	0	0	-103,260	-55,781	0	-55,781
#11	ガス製造 (+発生回収/投入)	0	-12,205	0	-180,538	-723,679	915,060	-37	0	0	0	0	0	0	-1,400	-1,400	0
#12	事業用発電	-1,072,304	-219,914	-669,401	-835,632	-1,750,119	-663	-27,002	-667,399	0	-2,691,935	3,054,038	0	-4,880,332	-4,880,332	0	0
#13	自家用発電	-182,384	-138,015	-539	-439,103	-5,482	-45,424	-97,713	-61,110	0	-202,462	-1,523	440,632	0	-733,124	-733,124	0
#14	自家用蒸気発生	-160,158	-127,828	-669	-672,325	-4,887	-98,261	-99,257	0	-174,443	0	0	1,145,849	-191,980	-191,980	0	0
#15	地域熱供給	-638	0	0	-1,601	0	-11,101	-99	0	0	-3,505	0	-2,548	15,985	-3,507	-3,507	0
#16	自家消費・送配損失	-2,978	-139,799	-1,058	-322,242	-86	-19,128	0	0	0	0	0	-345,686	-3,152	-834,129	-834,129	0
#17	転換・消費在庫変動 (+取崩/積増)	3,103	-7,537	-15,903	-3,893	5,944	0	20	0	0	0	0	0	-18,265	0	0	-18,265
#18	統計誤差 (+取崩/不足)	-45,916	425	103,492	597,548	991	1,724	6,146	0	0	0	0	8,298	-32,390	640,318	561,034	79,283
#19	最終エネルギー消費	454,606	1,056,064	0	8,589,373	58,216	685,997	46,786	0	0	0	0	3,138,139	1,087,812	15,116,994	13,380,291	1,736,703
#20	企業・事業所他	454,575	1,054,427	0	4,287,233	58,216	286,618	6,182	0	0	0	0	2,252,156	1,086,444	9,485,851	7,781,649	1,704,203
#21	農林水産畜産建設業	82	1,590	0	632,231	1,571	2,963	0	0	0	0	0	80,014	1,944	720,394	511,426	208,969
#22	製造業	454,325	1,052,837	0	2,523,6												

表 A4-20 総合エネルギー統計(エネルギーバランス表)の簡易表(2000、2005年度)

2000FY	Row \$	\$0100	\$0200	\$0300	\$0400	\$0500	\$0600	\$0700	\$0800	\$0900	\$1000	\$1100	\$1200	\$1300	\$1400	\$1401	\$1402
<< 総合エネルギー統計 >> エネルギー単位表(本表)簡易表 高位発熱量基準 表示単位: TJ		石炭	石炭製品	原油	石油製品	天然ガス	都市ガス	再生可能 エネルギー (水力 を除く)	水力発電 (揚水除 く)	揚水発電	未活用エ ネルギー	原子力発 電	電力	熱	合計	エネル ギー-利用	非エネル ギー-利用
Line #																	
#01	一次エネルギー供給	4,202,973	-3,821	9,634,832	1,528,928	3,058,878	0	273,741	745,903	0	409,621	2,858,092	0	0	22,709,148	20,834,599	1,874,549
#02	国内産出	66,683	0	28,034	0	106,340	0	269,008	745,903	0	409,621	2,858,092	0	0	4,483,681	0	0
#03	輸入	4,139,375	76,219	9,733,303	2,252,207	2,952,403	0	4,746	0	0	0	0	0	19,158,252	0	0	0
#04	総供給	4,206,057	76,219	9,761,337	2,252,207	3,058,742	0	273,754	745,903	0	409,621	2,858,092	0	0	23,641,932	21,767,383	1,874,549
#05	輸出	-112	-78,077	0	-617,396	0	0	-13	0	0	0	0	0	-695,597	0	0	0
#06	供給在庫変動 (+取崩-積埋)	-2,972	-1,963	-126,505	-105,883	136	0	0	0	0	0	0	0	-237,187	0	0	0
#07	国内供給 供給側 消費側	4,202,973	-3,821	9,634,832	1,528,928	3,058,878	0	273,741	745,903	0	409,621	2,858,092	0	0	22,709,148	20,834,599	1,874,549
#08	エネルギー転換	-3,705,208	1,114,629	-9,622,842	7,212,868	-3,022,830	806,834	-223,793	-745,903	0	-403,364	-2,858,092	3,414,136	1,158,623	-6,874,942	-6,769,391	-105,551
#09	石炭製品製造 (+発生回収-投入)	-1,738,478	1,664,686	0	-33,697	0	0	0	0	0	0	0	0	-107,489	-107,489	0	0
#10	石油製品製造 (+発生回収-投入)	0	0	-9,331,059	9,412,940	6,972	0	0	0	0	0	0	0	-137,327	-48,474	0	-48,474
#11	ガス製造 (+発生回収-投入)	0	-9,573	0	-150,046	-925,341	1,084,614	-31	0	0	0	0	0	0	-377	0	-377
#12	事業用発電	-1,513,154	-219,155	-301,245	-544,697	-2,130,517	-1,632	-27,668	-679,439	0	-2,851,772	3,320,803	0	-4,948,477	-4,948,477	0	0
#13	自家用発電	-222,305	-114,011	-83	-431,572	-9,034	-71,592	-99,374	-66,464	0	-178,038	-6,320	0	-741,126	-741,126	0	0
#14	自家用蒸気発生	-198,902	-69,828	-135	-673,602	-7,845	-128,034	-96,581	0	-220,572	0	0	1,276,604	-118,895	-118,895	0	0
#15	地域熱供給	-708	0	0	-1,692	0	-14,515	-116	0	-4,755	0	0	-3,940	-22,910	-2,817	-2,817	0
#16	自家消費・送配損失	-4,240	-132,502	-518	-335,337	-519	-13,139	0	0	0	0	0	-360,392	-3,564	-850,210	-850,210	0
#17	転換・消費在庫変動 (+取崩-積埋)	-27,422	-4,989	10,199	3,549	-5,414	0	-22	0	0	1	0	0	-24,098	0	0	-24,098
#18	統計誤差 (+取崩-不足)	75,778	60,164	11,990	579,916	-14,343	1,900	4,904	0	0	0	0	-87,507	-65,597	567,206	492,144	75,062
#19	最終エネルギー消費	421,987	1,050,644	0	8,741,796	50,391	806,834	49,948	0	0	6,256	0	3,501,643	1,224,220	15,853,720	14,084,722	1,768,998
#20	企業・事業所他	421,941	1,050,644	0	4,217,503	50,391	386,796	17,046	0	0	6,256	0	2,534,187	1,222,914	9,907,679	8,172,843	1,734,835
#21	農林水産鉱建設業	47	1,744	0	553,302	1,930	2,959	0	0	0	0	0	75,110	1,530	636,622	470,277	166,345
#22	製造業	421,754	1,048,900	0	2,490,337	48,461	178,337	12,142	0	0	6,256	0	1,442,530	1,076,657	6,725,374	5,231,946	1,493,428
#23	食品飲料	34	0	0	66,924	0	21,171	0	0	0	0	0	76,030	79,504	243,663	243,663	0
#24	繊維	257	0	0	34,638	1	5,858	0	0	0	0	0	56,856	79,810	177,420	177,420	0
#25	パルプ・紙・紙加工品	0	0	0	26,149	71	8,250	12,142	0	0	0	0	140,751	287,154	474,517	474,517	0
#26	化学工業(含石油石炭製品)	556	36,239	0	1,872,199	23,397	22,408	0	0	0	0	0	212,850	352,672	2,520,320	1,028,207	1,492,113
#27	窯業・土石製品	185,818	24,256	0	171,471	1,681	19,036	0	0	0	6,235	0	96,439	33,996	538,932	537,768	1,164
#28	鉄鋼	230,744	973,938	0	109,345	22,154	36,208	0	0	0	0	0	261,843	109,404	1,743,636	1,743,484	152
#29	非鉄金属	4,209	10,185	0	49,559	238	14,836	0	0	19	0	0	57,029	23,072	159,147	159,147	0
#30	機械	0	4,282	0	123,449	919	37,437	0	0	2	0	0	389,555	65,343	620,985	620,985	0
#31	他製造業	137	0	0	36,602	0	13,133	0	0	0	0	0	151,177	45,703	246,753	246,753	0
#32	業務他(第三次産業)	140	0	0	1,173,863	0	205,500	4,904	0	0	0	0	1,016,548	144,727	2,545,682	2,470,621	75,062
#33	家庭	0	0	0	768,778	0	418,897	32,902	0	0	0	0	900,592	1,306	2,122,475	2,122,475	0
#34	運輸	46	0	0	3,755,515	0	1,141	0	0	0	0	0	66,864	0	3,823,565	3,789,403	34,162
#35	旅客	46	0	0	2,188,610	0	172	0	0	0	0	0	63,385	0	2,252,212	2,226,404	25,808
#36	貨物	0	0	0	1,566,905	0	969	0	0	0	0	0	3,479	0	1,571,353	1,562,999	8,354
#37	非エネルギー利用(最終消費内数)	19	19,641	0	1,740,814	8,523	0	0	0	0	0	0	0	0	1,768,998	0	1,768,998

2005FY	Row \$	\$0100	\$0200	\$0300	\$0400	\$0500	\$0600	\$0700	\$0800	\$0900	\$1000	\$1100	\$1200	\$1300	\$1400	\$1401	\$1402
<< 総合エネルギー統計 >> エネルギー単位表(本表)簡易表 高位発熱量基準 表示単位: TJ		石炭	石炭製品	原油	石油製品	天然ガス	都市ガス	再生可能 エネルギー (水力 を除く)	水力発電 (揚水除 く)	揚水発電	未活用エ ネルギー	原子力発 電	電力	熱	合計	エネル ギー-利用	非エネル ギー-利用
Line #																	
#01	一次エネルギー供給	4,765,771	15,795	9,517,554	1,173,834	3,291,376	0	381,401	671,487	0	428,091	2,660,242	0	0	22,905,552	20,957,622	1,947,930
#02	国内産出	28,110	0	33,051	0	134,612	0	375,991	671,487	0	428,091	2,660,242	0	0	4,331,584	0	0
#03	輸入	4,737,747	81,303	9,473,040	1,127,563	3,156,903	0	5,461	0	0	0	0	0	19,582,017	0	0	0
#04	総供給	4,765,856	81,303	9,506,092	1,127,563	3,291,515	0	381,452	671,487	0	428,091	2,660,242	0	0	23,913,601	21,965,671	1,947,930
#05	輸出	-85	-49,279	-4	-880,259	0	0	-51	0	0	0	0	0	-929,678	0	0	0
#06	供給在庫変動 (+取崩-積埋)	0	-16,228	11,466	-73,470	-138	0	0	0	0	0	0	0	-78,371	0	0	0
#07	国内供給 供給側 消費側	4,765,771	15,795	9,517,554	1,173,834	3,291,376	0	381,401	671,487	0	428,091	2,660,242	0	0	22,905,552	20,957,622	1,947,930
#08	エネルギー転換	-4,310,565	1,121,057	-9,510,672	7,253,280	-3,227,280	966,321	-354,038	-671,487	0	-421,786	-2,660,242	3,561,818	1,200,062	-7,053,534	-6,930,734	-122,800
#09	石炭製品製造 (+発生回収-投入)	-1,730,636	1,633,464	0	-18,801	0	0	0	0	0	0	0	0	-115,974	-115,974	0	0
#10	石油製品製造 (+発生回収-投入)	0	0	-9,209,723	9,278,313	8,203	0	0	0	0	0	0	0	-139,784	-62,992	0	-62,992
#11	ガス製造 (+発生回収-投入)	0	-1,994	0	-99,300	-1,315,246	1,414,464	-46	0	0	0	0	0	0	-2,121	-2,121	0
#12	事業用発電	-2,146,038	-189,378	-301,537	-546,895	-1,910,075	-58,869	-52,804	-614,127	0	-2,660,242	3,440,790	0	-5,039,177	-5,039,177	0	0
#13	自家用発電	-250,929	-106,559	-20	-400,673	-16,206	-115,803	-132,042	-57,360	0	-178,129	0	502,571	0	-755,149	-755,149	0
#14	自家用蒸気発生	-215,125	-66,543	-37	-573,353	-12,856	-183,042	-168,956	0	0	-238,466	0	0	1,317,977	-140,401	-140,401	0
#15	地域熱供給	-633	0	0	-1,023	0	-18,102	-146	0	0	-5,124	0	-4,129	25,433	-3,724	-3,724	0
#16	自家消費・送配損失	-6,994	-129,554	-91	-331,117	-16,279	-9,176	0	0	0	0	0	-377,413	-3,563	-874,188	-874,188	0
#17	転換・消費在庫変動 (+取崩-積埋)	39,791	-18,378	736	86	-27,972	0	-44	0	0	-68	0	0	-5,850	0	0	-5,850
#18	統計誤差 (+取崩-不足)	33,648	93,718	6,882	689,356	-566	2,003	4,315	0	0	0	0	-127,635	-55,234	646,487	579,348	67,138
#19	最終エネルギー消費	421,558	1,043,135	0	8,427,113	64,662	966,321	27,363	0	0	6,305	0	3,689,453	1,255,296	15,901,205	14,076,076	1,825,130
#20	企業・事業所他	421,521	1,043,135	0	4,159,284	64,662	526,270	4,340	0	0	6,305	0	2,624,656	1,253,971	10,104,143	8,314,686	1,789,456
#21	農林水産鉱建設業	34	524	0	478,484	2,758	3,115	0	0	0	0	0	61,043	1,350	547,307	430,354	116,954
#22	製造業	421,249	1,042,61														

表 A4-21 総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）の簡易表（2010、2015年度）

2010FY	Row \$	\$0100	\$0200	\$0300	\$0400	\$0500	\$0600	\$0700	\$0800	\$0900	\$1000	\$1100	\$1200	\$1300	\$1400	\$1401	\$1402	
<< 総合エネルギー統計 >> エネルギー単位表(本表) 簡易表 高位発熱量基準 表示単位: TJ																		
Line #		石炭	石炭製品	原油	石油製品	天然ガス	都市ガス	再生可能エネルギー(水力を除く)	水力発電(揚水除く)	揚水発電	未活用エネルギー	原子力発電	電力	熱	合計	エネルギー利用	非エネルギー利用	
#01	一次エネルギー供給	4,983,144	14,115	8,127,286	730,774	3,994,127	1,105	436,721	715,871	0	529,798	2,462,243	0	0	21,995,185	20,126,923	1,868,262	
#02	国内産出	25,764	0	30,637	0	149,324	0	421,916	715,871	0	529,798	2,462,243	0	0	4,335,554	0	0	
#03	輸入	4,957,466	29,909	8,140,499	1,946,768	3,844,997	0	14,857	0	0	0	0	0	0	18,934,496	0	0	
#04	総供給	4,983,230	29,909	8,171,136	1,946,768	3,994,321	0	436,773	715,871	0	529,798	2,462,243	0	0	23,270,050	21,401,788	1,868,262	
#05	輸出	-87	-19,695	0	-1,187,778	0	0	-51	0	0	0	0	0	0	-1,207,611	0	0	
#06	供給在庫変動 (+取崩/積増)	0	3,901	-43,851	-28,216	-194	1,105	0	0	0	0	0	0	0	-67,255	0	0	
#07	国内供給 (供給側消費側)	4,983,144	14,115	8,127,286	730,774	3,994,127	1,105	436,721	715,871	0	529,798	2,462,243	0	0	21,995,185	20,126,923	1,868,262	
#08	エネルギー転換	-4,523,260	1,090,966	-8,133,969	6,531,651	-3,960,650	1,087,983	-415,373	-715,871	0	-522,602	-2,462,243	3,799,612	1,004,032	-7,219,724	-7,082,491	-137,233	
#09	石炭製品製造 (+発生回収/投入)	-1,704,578	1,611,327	0	-20,407	0	0	0	0	0	-87	0	0	0	-113,745	-113,745	0	
#10	石油製品製造 (+発生回収/投入)	0	0	-7,949,128	8,038,382	5,579	0	-8,588	0	0	0	0	0	0	-146,978	-60,732	-60,732	
#11	ガス製造 (+発生回収/投入)	0	0	0	-73,311	-1,646,183	1,719,690	0	0	0	0	0	0	0	196	196	0	
#12	事業用発電	-2,087,400	-207,076	-189,297	-374,290	-2,342,899	-59,859	-49,589	-574,862	0	-5,678	-2,462,243	3,474,987	0	-4,878,205	-4,878,205	0	
#13	自家用発電	-440,814	-104,816	-46	-309,431	-149,028	-133,885	-172,142	-141,010	0	-282,311	0	704,858	0	-1,028,624	-1,028,624	0	
#14	自家用蒸気発生	-240,628	-76,411	-90	-379,511	-27,268	-168,223	-184,754	0	0	-229,472	0	0	1,131,316	-175,042	-175,042	0	
#15	地域熱供給	0	0	0	-822	0	-17,003	-331	0	0	-4,068	0	0	-4,126	24,925	-1,425	-1,425	
#16	自家消費・送配損失	-20,471	-134,613	-62	-293,998	-4,773	-50,390	0	0	0	0	0	0	-376,108	-5,231	-885,645	-885,645	
#17	転換・消費在庫変動 (+取崩/積増)	-29,368	2,555	4,654	-9,526	1,573	0	278	0	0	-987	0	0	0	-30,821	0	-30,821	
#18	統計誤差 (+取崩/不足)	68,210	49,980	-6,683	305,495	-34,148	108,373	4,483	0	0	0	0	0	72,105	-85,415	482,400	424,308	58,092
#19	最終エネルギー消費	391,674	1,055,101	0	7,262,538	67,624	1,089,087	21,349	0	0	7,196	0	3,727,507	1,089,447	14,711,544	12,980,516	1,731,028	
#20	企業・事業所他	391,630	1,055,101	0	3,299,700	67,624	657,370	4,832	0	0	7,196	0	2,584,207	1,088,165	9,155,827	7,460,274	1,695,552	
#21	農林水産畜産建設業	87	140	0	395,747	5,064	2,672	0	0	0	0	0	45,685	1,392	450,789	371,050	79,738	
#22	製造業	391,306	1,052,992	0	2,193,545	62,560	281,280	350	0	0	7,196	0	1,328,271	976,583	6,294,085	4,736,363	1,557,722	
#23	食品飲料	28	91	0	50,351	0	39,753	0	0	0	0	0	91,017	99,108	280,349	280,349	0	
#24	繊維	153	0	0	13,555	0	7,678	0	0	0	0	0	35,646	49,765	106,797	106,797	0	
#25	パルプ・紙・紙加工品	322	0	0	20,024	333	5,171	344	0	0	89	0	123,781	228,675	378,740	378,740	0	
#26	化学工業(含石油石炭製品)	1,051	49,884	0	1,838,713	34,826	27,260	0	0	0	0	0	204,731	365,869	2,522,335	964,981	1,557,354	
#27	薬業・土石製品	128,254	17,780	0	97,328	4,255	28,179	6	0	0	6,582	0	72,081	19,889	374,355	374,174	181	
#28	鉄鋼	258,193	972,911	0	77,484	20,273	76,514	0	0	0	387	0	258,467	118,085	1,782,315	1,782,128	186	
#29	非鉄金属	2,314	8,661	0	24,276	1,024	16,292	0	0	0	137	0	52,474	10,665	115,843	115,843	0	
#30	機械	76	3,587	0	52,817	1,849	65,643	0	0	0	0	0	372,900	58,690	555,562	555,562	0	
#31	他製造業	915	78	0	18,996	0	14,790	0	0	0	0	0	117,174	25,837	177,789	177,789	0	
#32	業務他(第三次産業)	237	1,970	0	710,408	0	373,417	4,483	0	0	0	0	1,210,250	110,189	2,410,953	2,352,861	58,092	
#33	家庭	0	0	0	646,431	0	427,050	16,516	0	0	0	0	1,077,621	1,282	2,168,901	2,168,901	0	
#34	運輸	43	0	0	3,316,427	0	4,667	0	0	0	0	0	65,679	0	3,386,816	3,351,340	35,476	
#35	旅客	43	0	0	1,962,870	0	640	0	0	0	0	0	62,568	0	2,026,122	1,999,526	26,596	
#36	貨物	0	0	0	1,353,557	0	4,027	0	0	0	0	0	3,111	0	1,360,695	1,351,815	8,880	
#37	非エネルギー利用(最終消費内数)	16	17,902	0	1,696,536	16,575	0	0	0	0	0	0	0	0	1,731,028	0	1,731,028	
2015FY	Row \$	\$0100	\$0200	\$0300	\$0400	\$0500	\$0600	\$0700	\$0800	\$0900	\$1000	\$1100	\$1200	\$1300	\$1400	\$1401	\$1402	
<< 総合エネルギー統計 >> エネルギー単位表(本表) 簡易表 高位発熱量基準 表示単位: TJ																		
Line #		石炭	石炭製品	原油	石油製品	天然ガス	都市ガス	再生可能エネルギー(水力を除く)	水力発電(揚水除く)	揚水発電	未活用エネルギー	原子力発電	電力	熱	合計	エネルギー利用	非エネルギー利用	
#01	一次エネルギー供給	5,096,871	57,471	7,406,284	731,279	4,658,056	-833	728,470	725,930	0	537,296	78,638	0	0	20,019,460	18,221,383	1,798,078	
#02	国内産出	31,982	0	20,896	0	110,598	0	696,397	725,930	0	537,296	78,638	0	0	2,201,738	0	0	
#03	輸入	5,064,950	80,375	7,414,496	1,952,126	4,551,428	0	32,118	0	0	0	0	0	0	19,095,492	0	0	
#04	総供給	5,096,932	80,375	7,435,391	1,952,126	4,662,026	0	728,515	725,930	0	537,296	78,638	0	0	21,297,230	19,499,152	1,798,078	
#05	輸出	-62	-22,999	0	-1,265,963	0	0	-45	0	0	0	0	0	0	-1,289,068	0	0	
#06	供給在庫変動 (+取崩/積増)	0	95	-29,108	45,115	-3,970	-833	0	0	0	0	0	0	0	11,299	0	0	
#07	国内供給 (供給側消費側)	5,096,871	57,471	7,406,284	731,279	4,658,056	-833	728,470	725,930	0	537,296	78,638	0	0	20,019,460	18,221,383	1,798,078	
#08	エネルギー転換	-4,717,988	946,659	-7,406,973	5,867,082	-4,603,419	1,072,604	-712,916	-725,930	0	-512,036	-78,638	3,464,532	887,051	-6,519,974	-6,404,115	-115,859	
#09	石炭製品製造 (+発生回収/投入)	-1,523,216	1,436,363	0	-19,673	0	0	0	0	0	-4,893	0	0	0	-111,419	-111,419	0	
#10	石油製品製造 (+発生回収/投入)	0	0	-7,191,157	7,208,200	4,204	0	-14,525	0	0	0	0	0	0	-119,254	-112,532	-112,532	
#11	ガス製造 (+発生回収/投入)	0	0	0	-68,503	-1,669,358	1,738,071	-116	0	0	0	0	0	0	95	95	0	
#12	事業用発電	-2,375,953	-201,063	-226,562	-382,134	-2,924,727	-121,063	-53,914	-588,695	0	-5,484	-78,638	2,945,950	0	-4,012,282	-4,012,282	0	
#13	自家用発電	-502,927	-101,086	-39	-262,498	-159,588	-136,847	-472,131	-137,236	0	-297,981	0	843,863	0	-1,226,471	-1,226,471	0	
#14	自家用蒸気発生	-243,912	-70,119	-74	-320,294	-24,529	-181,391	-171,077	0	0	-200,796	0	0	989,727	-222,464	-222,464	0	
#15	地域熱供給	0	0	0	-225	0	-14,096	-578	0	0	-2,631	0	-3,609	21,309	169	169	0	
#16	自家消費・送配損失	-20,270	-120,506	-83	-304,499	-13,393	-46,590	0	0	0	0	0	-321,672	-4,730	-831,743	-831,743	0	
#17	転換・消費在庫変動 (+取崩/積増)	-51,710	3,069	10,941	11,383	18,491	0	-128	0	0	-250	0	0	0	-8,204	0	-8,204	
#18	統計誤差 (+取崩/不足)	-52,944	48,080	-690	195,986	-7,176	75,252	4,842	0	0	0	0	0	46,363	-57,246	252,467	208,930	43,537
#19	最終エネルギー消費	431,827	956,049	0	6,598,801	61,813	1,071,770	15,553	0	0	25,260	0	3,418,170	944,297	13,523,540	11,841,222	1,682,219	
#20	企業・事業所他	431,788	956,049	0	2,985,844	61,813	668,128	5,233	0	0	25,260	0	2,391,174	943,195	8,468,483	6,822,698	1,645,786	
#21	農林水産畜産建設業	28	291	0	361,272	4,695	3,082	0	0	0	0	0	37,635	1,095	408,098	348,088	60,010	
#22	製造業	431,413	952,800	0	2,055,828	57,118	248,435	390	0	0	25,260	0	1,215,152	878,520	5,864,916	4,322,677	1,542,239	
#23	食品飲料	245																

表 A4-22 総合エネルギー統計(エネルギーバランス表)の簡易表(2017、2018年度)

2017FY	Row \$	\$0100	\$0200	\$0300	\$0400	\$0500	\$0600	\$0700	\$0800	\$0900	\$1000	\$1100	\$1200	\$1300	\$1400	\$1401	\$1402	
<< 総合エネルギー統計 >> エネルギー単位表(本表) 簡易表 高位発熱量基準 表示単位: TJ																		
		石炭	石炭製品	原油	石油製品	天然ガス	都市ガス	再生可能エネルギー(水力を除く)	水力発電(揚水除く)	揚水発電	未活用エネルギー	原子力発電	電力	熱	合計	エネルギー利用	非エネルギー利用	
Line #																		
#01	一次エネルギー供給	5,038,858	3,936	7,113,232	728,704	4,693,643	2,529	939,424	714,466	0	583,800	280,761	0	0	20,099,351	18,229,155	1,870,197	
#02	国内産出	33,574	0	19,645	0	119,167	0	886,197	714,466	0	583,800	280,761	0	0	2,637,699	0	0	
#03	輸入	5,005,364	37,635	7,093,587	1,940,898	4,568,890	0	53,259	0	0	0	0	0	0	18,681,958	0	0	
#04	総供給	5,038,938	37,635	7,093,587	1,940,898	4,688,057	0	939,456	714,466	0	583,800	280,761	0	0	21,319,567	19,449,370	1,870,197	
#05	輸出	-80	-36,027	0	-1,228,902	0	0	-32	0	0	0	0	0	0	-1,265,041	0	0	
#06	供給在庫変動 (+取崩-積増)	0	2,328	17,674	16,708	5,586	2,529	0	0	0	0	0	0	0	44,825	0	0	
#07	国内供給 供給側消費側	5,038,858	3,936	7,113,232	728,704	4,693,643	2,529	939,424	714,466	0	583,800	280,761	0	0	20,099,351	18,229,155	1,870,197	
#08	エネルギー転換	-4,641,267	987,825	-7,089,045	5,766,154	-4,638,400	1,099,219	-925,731	-714,466	0	-555,628	-280,761	3,482,970	895,342	-6,613,789	-6,435,266	-178,523	
#09	石炭製品製造 (+発生回収-投入)	-1,535,648	1,446,972	0	-18,762	0	0	0	0	0	0	0	-4,869	0	-112,306	-112,306	0	
#10	石油製品製造 (+発生回収-投入)	0	0	-7,024,862	6,982,103	2,496	0	-19,101	0	0	0	0	0	-122,642	-182,006	0	-182,006	
#11	ガス製造 (+発生回収-投入)	0	0	0	-76,876	-1,761,650	1,838,541	-143	0	0	0	0	0	0	-128	-128	0	
#12	事業用発電	-2,706,684	-205,468	-79,828	-371,040	-2,981,791	-157,692	-229,749	-691,397	0	-134,714	-280,761	3,309,933	22,405	-4,529,191	-4,529,191	0	
#13	自家発電	-166,109	-65,007	-46	-191,876	-40,950	-107,159	-492,908	-23,069	0	-216,354	0	543,987	0	-759,490	-759,490	0	
#14	自家用蒸気発生	-242,389	-72,162	-85	-311,090	-23,579	-192,494	-178,437	0	0	-196,065	0	0	1,001,433	-214,867	-214,867	0	
#15	地域熱供給	0	0	0	-208	0	-15,058	-530	0	0	-2,545	0	-3,598	22,405	466	466	0	
#16	自家消費・送配損失	-11,456	-121,048	-3,094	-248,917	-16,326	-42,208	-3,491	0	0	-4	0	-367,353	-5,854	-819,750	-819,750	0	
#17	転換・消費在庫変動 (+取崩-積増)	21,018	4,537	18,780	1,025	-41,312	0	-1,019	0	0	-1,076	0	0	0	2,044	0	2,044	
#18	統計誤差 (+取崩-不足)	-31,724	55,553	24,186	213,268	-7,195	75,245	4,567	0	0	0	0	9,934	-56,018	287,817	245,449	42,367	
#19	最終エネルギー消費	429,315	936,207	0	6,495,312	62,438	1,101,748	13,693	0	0	28,172	0	3,473,036	951,360	13,491,280	11,799,607	1,691,673	
#20	企業・事業所他	429,274	936,207	0	2,892,157	62,438	670,980	4,839	0	0	28,172	0	2,426,063	950,221	8,400,351	6,746,585	1,653,766	
#21	農林水産鉱建設業	0	3	0	332,581	5,135	2,745	0	0	0	0	0	38,194	1,023	379,682	346,295	33,387	
#22	製造業	428,601	931,881	0	2,032,574	57,303	254,889	272	0	0	28,172	0	1,221,130	884,409	5,839,231	4,261,220	1,578,012	
#23	食品飲料	16	42	0	24,528	0	29,618	0	0	0	0	0	89,406	82,000	225,410	225,410	0	
#24	繊維	0	0	0	5,126	57	5,603	0	0	0	0	0	30,850	45,107	86,743	86,743	0	
#25	パルプ・紙・紙加工品	986	0	0	14,969	505	4,477	227	0	0	624	0	110,115	203,310	335,213	335,213	0	
#26	化学工業(含石油石炭製品)	1,909	50,888	0	1,785,043	27,450	23,395	0	0	0	1,977	0	186,841	330,893	2,408,395	830,840	1,577,554	
#27	薬業・土石製品	134,258	11,677	0	83,627	5,220	24,288	45	0	0	22,722	0	63,950	25,691	371,478	371,135	344	
#28	鉄鋼	289,365	860,396	0	54,189	20,870	81,477	0	0	0	1,481	0	255,023	99,913	1,662,713	1,662,599	114	
#29	非鉄金属	1,876	6,420	0	15,695	1,449	15,325	0	0	0	1,368	0	46,666	9,328	98,127	98,127	0	
#30	機械	191	2,456	0	36,839	1,752	59,308	0	0	0	0	0	328,315	43,892	472,754	472,754	0	
#31	他製造業	0	1	0	12,759	0	11,400	0	0	0	0	0	109,964	44,275	178,399	178,399	0	
#32	業務他(第三次産業)	672	4,323	0	527,002	0	413,346	4,567	0	0	0	0	1,166,738	64,789	2,181,437	2,139,070	42,367	
#33	家庭	0	0	0	566,849	0	428,376	8,854	0	0	0	0	983,819	1,138	1,989,036	1,989,036	0	
#34	運輸	41	0	0	3,036,306	0	2,392	0	0	0	0	0	63,154	0	3,101,893	3,063,986	37,907	
#35	旅客	41	0	0	1,780,110	0	171	0	0	0	0	0	60,364	0	1,840,686	1,811,667	29,019	
#36	貨物	0	0	0	1,256,196	0	2,221	0	0	0	0	0	2,790	0	1,261,206	1,252,319	8,888	
#37	非エネルギー利用(最終消費内数)	13	19,271	0	1,661,975	10,415	0	0	0	0	0	0	0	0	1,691,673	0	1,691,673	
2018FY	Row \$	\$0100	\$0200	\$0300	\$0400	\$0500	\$0600	\$0700	\$0800	\$0900	\$1000	\$1100	\$1200	\$1300	\$1400	\$1401	\$1402	
<< 総合エネルギー統計 >> エネルギー単位表(本表) 簡易表 高位発熱量基準 表示単位: TJ																		
		石炭	石炭製品	原油	石油製品	天然ガス	都市ガス	再生可能エネルギー(水力を除く)	水力発電(揚水除く)	揚水発電	未活用エネルギー	原子力発電	電力	熱	合計	エネルギー利用	非エネルギー利用	
Line #																		
#01	一次エネルギー供給	4,944,024	3,398	6,762,810	651,820	4,509,574	51	1,033,125	689,820	0	580,100	553,171	0	0	19,727,893	17,900,439	1,827,455	
#02	国内産出	23,366	0	17,833	0	104,813	0	971,210	689,820	0	580,100	553,171	0	0	2,940,313	0	0	
#03	輸入	4,921,481	46,929	6,765,782	1,901,650	4,406,588	0	61,941	0	0	0	0	0	0	18,104,370	0	0	
#04	総供給	4,944,847	46,929	6,783,614	1,901,650	4,511,401	0	1,033,150	689,820	0	580,100	553,171	0	0	21,044,683	19,217,229	1,827,455	
#05	輸出	-823	-41,727	0	-1,252,139	0	0	-26	0	0	0	0	0	0	-1,294,715	0	0	
#06	供給在庫変動 (+取崩-積増)	0	-1,804	-20,804	2,309	-1,827	51	0	0	0	0	0	0	0	-2,075	0	0	
#07	国内供給 供給側消費側	4,944,024	3,398	6,762,810	651,820	4,509,574	51	1,033,125	689,820	0	580,100	553,171	0	0	19,727,893	17,900,439	1,827,455	
#08	エネルギー転換	-4,537,250	983,878	-6,780,653	5,580,157	-4,411,579	1,065,004	-1,018,699	-689,820	0	-550,152	-553,171	3,430,832	881,861	-6,599,592	-6,385,591	-214,001	
#09	石炭製品製造 (+発生回収-投入)	-1,528,522	1,437,066	0	-18,779	0	0	0	0	0	0	0	-4,627	0	-114,862	-114,862	0	
#10	石油製品製造 (+発生回収-投入)	0	0	-6,740,876	6,704,469	2,081	0	-19,366	0	0	0	0	0	-125,124	-178,817	0	-178,817	
#11	ガス製造 (+発生回収-投入)	0	0	0	-77,073	-1,720,302	1,796,888	-118	0	0	0	0	0	0	-604	-604	0	
#12	事業用発電	-2,576,505	-147,129	-41,672	-272,213	-2,809,032	-158,175	-259,744	-661,791	0	-155,589	-553,171	3,225,499	0	-4,409,520	-4,409,520	0	
#13	自家発電	-175,754	-113,235	-41	-179,350	-41,805	-117,976	-551,054	-28,029	0	-204,158	0	582,672	0	-828,730	-828,730	0	
#14	自家用蒸気発生	-236,261	-69,255	-77	-303,150	-23,880	-198,541	-178,858	0	0	-184,661	0	0	990,028	-205,326	-205,326	0	
#15	地域熱供給	0	0	0	-133	0	-14,512	-450	0	0	-2,334	0	-3,687	22,767	1,651	1,651	0	
#16	自家消費・送配損失	-14,173	-119,558	-1,902	-254,891	-15,555	-35,748	-6,912	0	0	0	0	-373,652	-5,809	-828,200	-828,200	0	
#17	転換・消費在庫変動 (+取崩-積増)	-6,034	-3,341	3,916	-681	-10,019	0	-1,855	0	0	1,218	0	0	0	-16,797	0	-16,797	
#18	統計誤差 (+取崩-不足)	-7,332	61,610	-17,843	209,918	36,065	38,521	4,628	0	0	0	0	26,289	-94,135	257,722	207,662	50,060	
#19	最終エネルギー消費	414,106	925,667	0	6,232,237	61,929	1,065,055	14,426	0	0	29,948	0	3,404,544	975,996	13,123,907	11,510,453	1,613,454	
#20	企業・事業所他	414,064	925,667	0	2,748,813	61,929	662,332	4,886	0	0	29,948	0	2,402,778	974,891	8,225,308	6,650,375	1,574,933	
#21	農林水産鉱建設業	0	63	0	319,730	4,888	2,773	0	0	0	0	0	35,173	972	363,598	336,105	27,494	

A4.2.2. 総合エネルギー統計とインベントリのCRF

インベントリのCRFにおける排出量の報告においては、総合エネルギー統計（エネルギーバランス表）の各部門における排出量をCRFにおける各部門に計上している。総合エネルギー統計の各部門とCRF table 1.A(a)「部門別アプローチ」との対応関係は表 A4-23を参照のこと。

総合エネルギー統計に示された、エネルギー転換部門（#200000）、企業・事業所他部門（#600000）、家庭部門（#700000）、運輸部門（#800000）のエネルギー消費量から、非エネルギー利用（#950000）に計上されているエネルギー消費量を除いた分を用いている。非エネルギー利用に計上されているエネルギー消費量は、燃料以外の用途に用いられておりエネルギー分野ではCO₂を排出していないものと考えられるためこの分を控除している（ただし、原料用及び非エネルギー用として控除された分のうち、廃棄物として焼却される際にエネルギーとして利用もしくはエネルギー回収されている分は、別途排出量を算定して計上している）。

2006年IPCCガイドラインでは、発電等のために消費したエネルギーから排出されるCO₂は、その発電等を行った部門に計上することを原則としている。総合エネルギー統計では、自家用発電及び自家用蒸気の製造のために投入された燃料消費量を、エネルギー転換部門の自家用発電（#250000）及び自家用蒸気発生（#260000）部門に計上しているが、実際に自家発電及び蒸気発生を行っているのは企業・事業所他部門である。従って、エネルギー転換部門の自家用発電及び自家用蒸気起源のCO₂排出量については、最終エネルギー消費部門における各産業からのCO₂排出量と合計し、「1.A.2.製造業及び建設業」及び「1.A.4.その他部門」に計上している。

エネルギー転換部門については、石炭製品製造（#210000）、石油製品製造（#220000）、ガス製造（#230000）、事業用発電（#240000）、自家用発電（#250000）、自家用蒸気発生（#260000）、地域熱供給（#270000）、自家消費・送配損失（#300000）の各部門を算定対象とし、その他の部門（他転換・品種振替、転換・消費在庫変動）に示されたエネルギー消費量は算定対象外とする。

石炭製品製造（#210000）には、コークス製造工程における原料の投入量と石炭製品の産出量の収支が示されている。投入された炭素量と産出された炭素量の差分は、赤熱コークスがコークス炉から押し出されてからコークス乾式消火施設（CDQ）に移行する間に、大気に酸化される（燃焼）分等に相当すると考えられることから、CO₂排出として計上することが妥当であると判断し、当該部門からの炭素排出量として算定を行った。（環境省、2006）

石油製品製造（#220000）には、石油精製工程における原料の投入量と石油製品の産出量の収支が示されている。投入された炭素量と産出された炭素量の差分は、流動接触分解装置において、重油留分の分解反応に伴って低下した触媒活性を取り戻すため、触媒表面に蓄積した炭素を除去するために燃焼した分や、その燃焼時に発生するCO等を含む燃焼ガスがボイラーで熱回収される分、水素製造装置から副生するCO₂等に相当すると考えられることから、大気に排出されるものとして計上することが妥当であると判断し、当該部門からの炭素排出量として算定を行った。（環境省、2015）

表 A 4-23 総合エネルギー統計（細目部門）と CRF table 1.A(a)の部門対応

CRF	総合エネルギー統計	
1A1 Energy industries		
1A1a Public electricity and heat production	事業用発電	#240000
	自家消費 事業用電力	#301400
	地域熱供給	#270000
	自家消費 地域熱供給	#301500
	自家用発電 電気業(2015まで)	#255330
1A1b Petroleum refining	石油製品製造	#220000
	自家消費 石油製品製造	#301200
	自家用発電 石油製品	#253171
	自家用蒸気発生 石油製品	#263171
	最終エネルギー消費 石油製品製造業(除 石油製品)	#626510
	▲非エネルギー利用(石油製品)	#951540
1A1c Manufacture of solid fuels and other energy industries	石炭製品製造	#210000
	自家消費 石炭製品製造	#301100
	自家用発電 石炭製品他	#253175
	自家用蒸気発生 石炭製品他	#263175
	最終エネルギー消費 石炭製品製造業他(除 石炭製品)	#626550
	ガス製造	#230000
	自家消費 ガス製造	#301300
1A2 Manufacturing industries and construction		
1A2a Iron and steel	自家用発電 鉄鋼業	#253250
	自家用蒸気発生 鉄鋼業	#263220
	最終エネルギー消費 鉄鋼業	#629100
	▲非エネルギー利用 鉄鋼	#951560
1A2b Non-ferrous metals	自家用発電 非鉄金属製造業	#253230
	自家用蒸気発生 非鉄金属製造業	#263260
	最終エネルギー消費 非鉄金属製造業	#629300
	▲非エネルギー利用 非鉄金属地金	#951570
1A2c Chemicals	自家用発電 化学工業	#253160
	自家用蒸気発生 化学工業	#263160
	最終エネルギー消費 化学工業	#626100
	▲非エネルギー利用 化学	#951530
1A2d Pulp, paper and print	自家用発電 パルプ・紙・紙加工品製造業	#253140
	自家用発電 印刷・同関連業	#253150
	自家用蒸気発生 パルプ・紙・紙加工品製造業	#263140
	自家用蒸気発生 印刷・同関連業	#263150
	最終エネルギー消費 パルプ・紙・紙加工品製造業	#624000
	最終エネルギー消費 印刷・同関連業	#625000
	▲非エネルギー利用 パルプ紙板紙	#951520
1A2e Food processing, beverages and tobacco	自家用発電 食料品製造業	#253090
	自家用発電 飲料たばこ飼料製造業	#253100
	自家用蒸気発生 食料品製造業	#263090
	自家用蒸気発生 飲料たばこ飼料製造業	#263100
	最終エネルギー消費 食品飲料製造業	#621000
1A2f Non-metallic minerals	自家用発電 窯業・土石製品製造業	#253210
	自家用蒸気発生 窯業・土石製品製造業	#263210
	最終エネルギー消費 窯業・土石製品製造業	#628100
	▲非エネルギー利用 窯業・土石製品製造業	#951550
1A2g Other	自家用発電 農林水産鉱建設 (農林水産業[#251010-#251040]を除く。)	#251000
	自家用発電 製造業 (1A1b, 1A1c, 1A2aから1A2fに掲げられている業種を除く。)	#252000
	自家用蒸気発生 農林水産鉱建設 (農林水産業[#261010-#261040]を除く。)	#261000
	自家用蒸気発生 製造業 (1A1b, 1A1c, 1A2aから1A2fに掲げられている業種を除く。)	#262000
	最終エネルギー消費 農林水産鉱建設 (農林水産業[#611000]を除く。)	#610000
	最終エネルギー消費 製造業 (1A1b, 1A1c, 1A2aから1A2fに掲げられている業種を除く。)	#620000
	▲非エネルギー利用 農林水産鉱建設 (農林水産業を除く。)	#951100
	▲非エネルギー利用 製造業(大規模・指定業種) (1A1b, 1A1c, 1A2aから1A2fに掲げられている業種を除く。)	#951500
	▲非エネルギー利用 製造業(中小規模他)	#951700

表 A 4-23 総合エネルギー統計（細目部門）と CRF table 1.A(a)の部門対応（つづき）

CRF		総合エネルギー統計	
1A3	Transport		
1A3a	Domestic aviation	最終エネルギー消費 旅客 航空	#815000
		最終エネルギー消費 貨物 航空 ▲非エネルギー利用 運輸(航空)	#854000 #953000
1A3b	Road transportation		
i	Cars	最終エネルギー消費 旅客 乗用車	#811000
		▲非エネルギー利用 運輸(乗用車)	#953000
ii	Light duty trucks	IE (1A3biii)	-
iii	Heavy duty trucks and buses	最終エネルギー消費 旅客 バス	#811500
		最終エネルギー消費 貨物 貨物自動車/トラック ▲非エネルギー利用 運輸(バス、貨物自動車/トラック)	#851000 #953000
iv	Motorcycles	最終エネルギー消費 旅客 二輪車 ▲非エネルギー利用 運輸(二輪車)	#812000 #953000
v	Other	IE (1A3biii)	-
1A3c	Railways	最終エネルギー消費 旅客 鉄道	#813000
		最終エネルギー消費 貨物 鉄道 ▲非エネルギー利用 運輸(鉄道)	#852000 #953000
1A3d	Domestic navigation	最終エネルギー消費 旅客 船舶	#814000
		最終エネルギー消費 貨物 船舶 ▲非エネルギー利用 運輸(船舶)	#853000 #953000
1A3e	Other transportation	NO	-
1A4	Other sectors		
1A4a	Commercial/institutional	自家発電 (電気業[#255330] (2015まで)、農林水産建設[#251000]、製造業[#252000]を除く。)	#250000
		自家発電蒸気発生 (農林水産建設[#261000]、製造業[#262000]を除く。) 最終エネルギー消費 業務他 ▲非エネルギー利用 業務他	#260000 #650000 #951800
1A4b	Residential	最終エネルギー消費 家庭 ▲非エネルギー利用 家庭	#700000 #952000
1A4c	Agriculture/forestry/fishing		
i	Stationary	自家発電 農林水産建設(農林水産業)	#251000
		自家発電蒸気発生 農林水産建設(農林水産業) 最終エネルギー消費 農林水産業(#611000)のうち固定発生源(推計値) ▲非エネルギー利用 農林水産建設業(農林水産業)	#261000 #951100
ii	Off-road vehicles and other machinery	最終エネルギー消費 農業(#611100)のうち移動発生源(推計値) 最終エネルギー消費 林業(#611200)のうち移動発生源(推計値)	
iii	Fishing	最終エネルギー消費 漁業(#611300)のうち移動発生源(推計値) 最終エネルギー消費 水産養殖業(#611400)のうち移動発生源(推計値)	
1A5	Other	NO	-

▲非エネルギー利用：原料用として用いられた分を控除している。

2014年度の対日審査の報告書（FCCC/ARR/2014/JPN）において、CRF table 1.A(d)中の燃料とエネルギーバランス表に報告された各種燃料との対応関係を整理した表を NIR に載せることを勧告された。総合エネルギー統計、CRF table 1.A(b)「レファレンスアプローチ」及び CRF table 1.A(d)「燃料の非エネルギー利用」における燃料種の対応関係は表 A 4-24 を参照のこと。

表 A 4-24 総合エネルギー統計と CRF table 1.A(b), (d)との燃料種対応

CRF table 1.A(b),(d)における燃料種名		総合エネルギー統計における燃料種名	コード	
Liquid fossil	Primary fuels	Crude oil	精製用原油	\$0310
			発電用原油	\$0320
		Orimulsion	瀝青質混合物	\$0321
		Natural gas liquids	NGL・コンデンセート	\$0330
	Secondary fuels	Gasoline	ガソリン	\$0431
		Jet kerosene	ジェット燃料油	\$0432
		Other kerosene	灯油	\$0433
		Gas/diesel oil	軽油	\$0434
		Residual fuel oil	A重油	\$0436
			B重油	\$0438
			一般用C重油	\$0439
			発電用C重油	\$0440
		Liquefied petroleum gas	液化石油ガス (LPG)	\$0458
		Naphtha	純ナフサ	\$0420
			改質生成油	\$0421
		Bitumen	他重質石油製品	\$0452
		Lubricants	潤滑油	\$0451
		Petroleum coke	オイルコークス	\$0455
	Refinery feedstocks	揮発油留分	\$0412	
		灯油留分	\$0413	
		軽油留分	\$0414	
		常圧残油留分	\$0415	
分解揮発油留分		\$0416		
分解軽油留分		\$0417		
	精製混合原料油	\$0418		
Other oil	製油所ガス	\$0457		
Solid fossil	Primary fuels	Anthracite	無煙炭	\$0130
		Coking coal	原料炭	\$0110
		Other bituminous coal	輸入一般炭	\$0121
			発電用輸入一般炭	\$0123
		Sub-bituminous coal	国産一般炭	\$0124
	Secondary fuels	BKB and patent fuel	練豆炭	\$0213
		Coke oven/gas coke	コークス	\$0211
			コークス炉ガス	\$0221
			高炉ガス	\$0222
			転炉ガス	\$0225
Coal tar	コールタール	\$0212		
Gaseous fossil	Natural gas	輸入天然ガス (LNG)	\$0510	
		ガス田・随伴ガス	\$0521	
		炭鉱ガス	\$0522	
		原油溶解ガス	\$0523	
		一般ガス	\$0610	
		簡易ガス	\$0620	
Biomass	Solid biomass	木材利用	SN131	
		廃材利用	SN132	
		黒液直接利用	SN136	
	Liquid biomass	バイオエタノール	SN134	
		バイオディーゼル	SN135	
	Gas biomass	バイオガス	SN137	

A4.3. 軽油の品質規格について

1.A.3.b (Road transportation) における液体燃料（軽油）の炭素排出係数は、附属書 I 国中で最も低い値であるが、これは自動車排出ガス規制の関係上、我が国では道路輸送用のガソイルとして硫黄分の多い中東産原油を一度分解し超深度脱硫した低硫黄軽油 (<10ppm) が義務づけられており、軽油の品質規格が他国と異なること、道路輸送用以外のガソイルは「A 重油」として厳格に区別して扱われていることに起因するものである。我が国では当該軽油や A 重油分を含めた石油精製の炭素収支がほぼ成立していることが統計上確認されており、これらの炭素排出係数は異常値ではない。

2012 年 9 月に行われた対日審査において、専門家審査チーム (ERT) から我が国の軽油の水準に関する参考データを将来の NIR に記述する可能性について質問を受けた。この質問を受けて、主に自動車のエンジンに使用する我が国の軽油の要求品質について下の表 A 4-25 に示す。この規格において軽油は流動点の違いにより特 1 号、1 号、2 号、3 号及び特 3 号の 5 種類に分類されている。またこの規格は当然ながら「揮発油等の品質の確保等に関する法律」にも適合している。

表 A 4-25 日本の軽油の要求品質

試験項目	単位	種 類				
		特 1 号	1 号	2 号	3 号	特 3 号
引火点	℃	50 以上			45 以上	
蒸留性状 90% 留出温度	℃	360 以下		350 以下	330 以下 ¹⁾	330 以下
流動点	℃	+5 以下	-2.5 以下	-7.5 以下	-20 以下	-30 以下
目詰まり点	℃	-	-1 以下	-5 以下	-12 以下	-19 以下
10% 残油の残留炭素分	質量%	0.1 以下				
セタン指数 ²⁾	-	50 以上		45 以上		
動粘度 (30℃)	mm ² /s	2.7 以上		2.5 以上	2.0 以上	1.7 以上
硫黄分	質量%	0.0010 以下				
密度 (15℃)	g/cm ³	0.86 以下				

1) 動粘度 (30℃) が 4.7 mm²/s 以下の場合には、350℃以下とする。

2) セタン指数は、セタン価を用いることもできる。

(出典) 日本産業規格 軽油 (JIS K 2204:2007)

A4.4. 発熱量の換算係数について

2014 年度の対日審査の報告書 (FCCC/ARR/2014/JPN) において、高位発熱量 (GCV) と低位発熱量 (NCV) の換算係数を NIR に提供することを勧告された。2018 年度の標準発熱量の設定により GCV と NCV が得られたため、参考までに両者の比率を次の表に示す。

表 A 4-26 主な燃料の高位発熱量と低位発熱量の比（参考）

燃料種	NCV/GCV	燃料種	NCV/GCV
石炭		石油製品	
輸入原料炭	0.92	LPG	0.93
コークス用原料炭	0.92	ナフサ	0.94
吹込用原料炭	0.92	ガソリン	0.94
輸入一般炭	0.95	ジェット燃料油	0.94
輸入無煙炭	0.97	灯油	0.94
石炭製品		軽油	0.94
コークス	0.98	A重油	0.94
コークス炉ガス	0.79	C重油	0.95
高炉ガス	0.98	潤滑油	0.94
転炉ガス	1.00	その他重質石油製品	0.95
原油		オイルコークス	0.98
原油	0.94	製油所ガス	0.92
NGL・コンデンセート	0.94	可燃性天然ガス	
		輸入天然ガス(LNG)	0.91
		国産天然ガス	0.91
		都市ガス	0.91

（出典）資源エネルギー庁（2020）から算出

参考文献

1. UNFCCC「日本国年次提出の個別審査報告書(2007年11月)」FCCC/ARR/2006/JPN(2007)
2. UNFCCC「日本国年次提出の個別審査報告書(2011年3月)」FCCC/ARR/2010/JPN(2011)
3. UNFCCC「日本国年次提出の個別審査報告書(2013年7月)」FCCC/ARR/2012/JPN(2013)
4. UNFCCC「日本国年次提出の個別審査報告書(2015年6月)」FCCC/ARR/2014/JPN(2015)
5. OECD/IEA, *World Energy Statistics*
6. 資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」
7. 資源エネルギー庁「エネルギー源別標準発熱量・炭素排出係数(2018年度改訂)の解説」(2020)
8. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果(平成18年8月)」(2006)
9. 環境省「平成26年度温室効果ガス排出量算定に関する検討結果」(2015)
10. 日本産業規格 軽油(JIS K 2204:2007)
11. 戒能一成「総合エネルギー統計の解説 / 2010年度改訂版」(2012年4月)

別添（Annex）5 完全性、注釈記号の定義及び「NE」を用いた排出吸収源

A5.1. 完全性に関する検討

現在のインベントリでは、共通報告様式（CRF）に基づきデータの提出を行っており、全ての区分について、排出・吸収量データまたは「NO」、「NE」、「NA」等の注釈記号（Notation Key）の記入が求められている。本章では、インベントリ報告ガイドライン（Decision 24/CP.19）、2002年度、2012年度及び2014年度温室効果ガス排出量算定方法検討会の検討結果に基づいて策定した注釈記号の定義と注釈記号決定のためのデシジョンツリー（「重要でない」という意味での「NE」の適用基準を含む）について紹介する。

また、「重要でない」という意味で「NE」を用いた排出源およびそれ以外で「NE」（Not Estimated）として報告した区分を示す。

A5.2. 注釈記号の定義

我が国ではインベントリ報告ガイドライン（Decision 24/CP.19）に従い注釈記号を用いている。下記の表 A 5-1 はインベントリ報告ガイドラインに示された注釈記号を示している。

表 A 5-1 インベントリ報告ガイドラインに示された注釈記号の定義

記号	説明
NO (Not Occurring)	ある附属書 I 国の特定の排出・吸収源において、カテゴリーやプロセス（回収を含む）が存在しない場合に用いる。
NE (Not Estimated)	排出・吸収源からの温室効果ガスの排出・吸収量または活動量が算定されていないが、発生している可能性がある場合に用いる。CO ₂ 、N ₂ O、CH ₄ 、HFCs、PFCs、SF ₆ 及び NF ₃ の排出・吸収量のインベントリでの報告に「NE」を用いた場合には、その算定されなかった理由を NIR と CRF の完全性の表（completeness table）の両方に記載せねばならない。また、あるガスのデータを得るのに過剰な労力を必要とし、当該カテゴリーの排出量が国全体から見て量的にもトレンドの点でも重要でない（insignificant）とみなされる場合、「NE」を用いることができる。その場合、取りうる排出量レベルの観点から除外した正当性について NIR に記述すべきである。重要でないとみなすことができる排出量は国内総排出量（LULUCF を除く）の 0.05%未満で、500ktCO ₂ 換算を超えないレベルに限定すべきである。重要でないとみなした排出量の総量は国内総排出量の 0.1%未満でなければならない。附属書 I 国は活動量（AD）の近似値と IPCC の排出係数デフォルト値を用いて、カテゴリー毎の想定される排出レベルを導くべきである。なお、特定カテゴリーからの排出量が過去の提出で報告されている場合、それ以降の温室効果ガスインベントリ提出においても、当該特定カテゴリーからの排出量は報告すべきである。
NA (Not Applicable)	ある排出・吸収源カテゴリーにおいて、活動自体は存在するが、特定のガスの排出または吸収が起こらない場合に用いる。CRF において「NA」が適用可能な排出・吸収源カテゴリーのセルに網掛けがされている場合には、記入しなくて良い。
IE (Included Elsewhere)	排出・吸収源からの温室効果ガスの排出・吸収量が算定されているが、記入することが求められている箇所に報告する代わりに、インベントリの他の箇所に含める場合に用いる。インベントリで「IE」を用いた場合、締約国は CRF の完全性の表に、インベントリの他のどの箇所に排出・吸収量を含めたかを示し、本来記入を求められていたカテゴリーからの変更について、特にそれが秘匿による場合は、説明すべきである。
C (Confidential)	パラ 36 の規定に従うと秘匿情報の開示につながる場合に用いる。（パラ 36：業務及び軍事に関する秘匿情報を保護するための合算は最低限度とすることを考慮し、排出と吸収は最も細分化されたレベルで報告されるべきである。）

（出典）インベントリ報告ガイドライン（Decision 24/CP.19）

なお、重要でない (considered insignificant) という意味での「NE」の我が国における適用基準は 2012 年度及び 2014 年度温室効果ガス排出量算定方法検討会で定めており、そのデシジョンツリーは下記の図 A 5-2 に示している。

また、インベントリ報告ガイドラインが改訂された場合には、再度、記号の定義及び記入方法について見直すこととする。

A5.3. 注釈記号選択のためのデシジョンツリー

インベントリ報告ガイドライン (Decision 24/CP.19)、2002 年度、2012 年度及び 2014 年度温室効果ガス排出量算定方法検討会の検討結果に基づいて独自に作成した注釈記号決定のためのデシジョンツリーは以下の通りである。

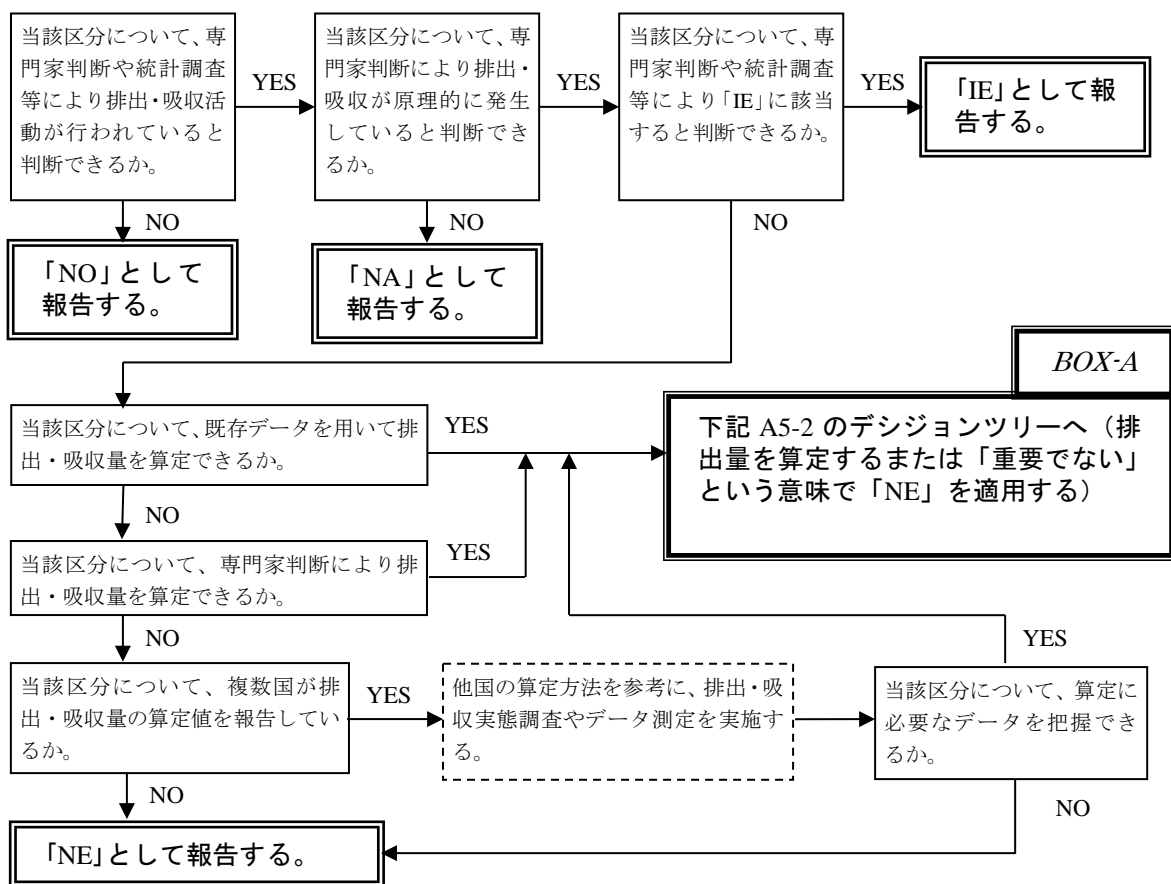


図 A 5-1 注釈記号選択のためのデシジョンツリー

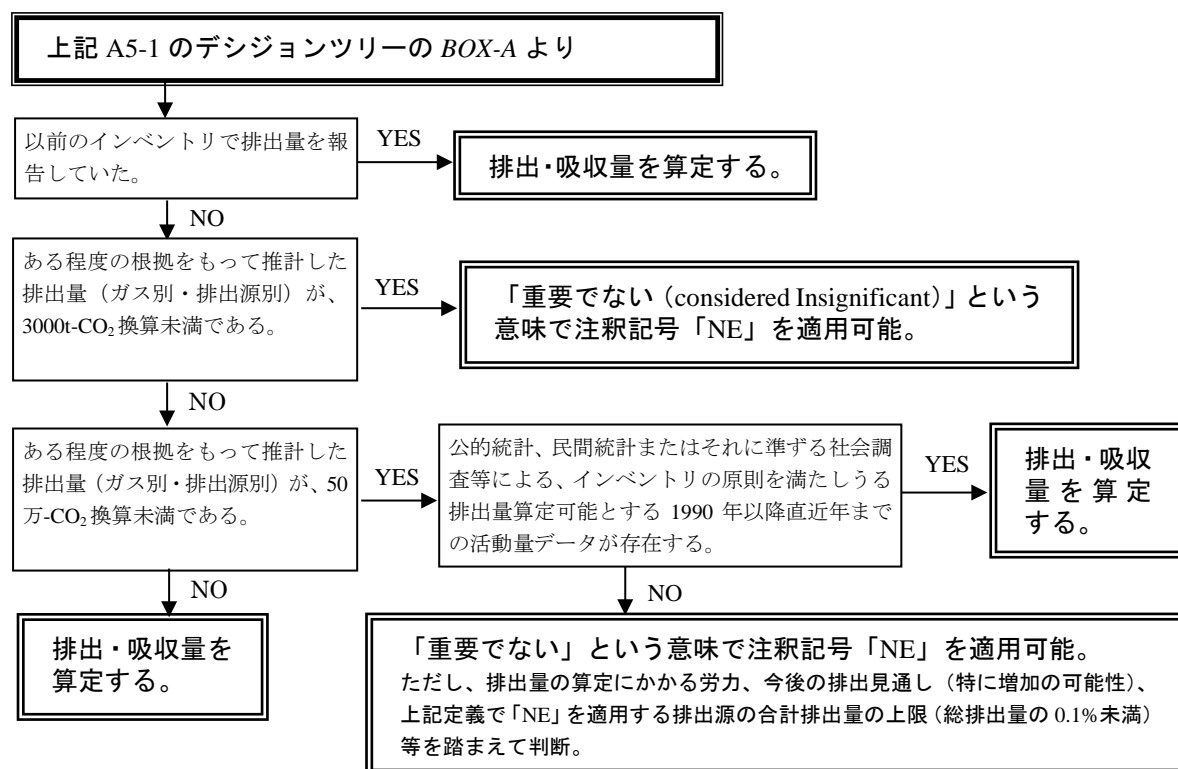


図 A5-2 「重要でない」という意味での「NE」の適用基準を定めたデシジョンツリー
なお、算定する排出・吸収源の排出・吸収量が機密情報である場合は「C」として報告する。

A5.4. 我が国における「重要でない」という意味で「NE」を用いた排出吸収源

排出源は存在するが排出量が小さく、「重要でない」という意味で「NE」を用いた排出吸収源は以下の通りである。これらの排出源からの合計排出量（吸収源を除く）の概算値は最大でも 122kt-CO₂換算程度であるため、インベントリ報告ガイドライン（Decision 24/CP.19）の paragraph 37(b)に記述されている、「重要でない」という意味で「NE」を用いる際の上限である総排出量の 0.1%（我が国では約 1.24Mt-CO₂換算）を超えることはない。

表 A5-2 「重要でない」という意味で「NE」を用いた排出源

コード	カテゴリー No.	分野・カテゴリー		対象ガス	排出量概算値 [kt-CO ₂ eq]	
1	1.C.	エネルギー	CO ₂ の輸送と貯留	CO ₂	<0.007	
2	2.D.3.	IPPU	NMVOCの焼却	CH ₄	<0.2	
3	2.D.3.	IPPU	NMVOCの焼却	N ₂ O	<1.0	
4	2.F.1.	IPPU	冷蔵庫及び冷凍空調機器	冷媒コンテナからの漏洩	HFCs	<63
5	2.F.4.	IPPU	オゾン層破壊物質の代替としての製品の使用	エアゾール	HFCs	<1.8
6	2.G.2.	IPPU	その他製品の使用からのSF ₆ 、PFCs	防音窓	SF ₆	<0.3
7	3.A.4.-	農業	消化管内発酵	鹿	CH ₄	<2.3
8	3.A.4.-	農業	消化管内発酵	アルパカ	CH ₄	<0.07
9	3.B.4.-	農業	家畜排せつ物の管理	鹿	CH ₄	<0.03
10	3.B.4.-	農業	家畜排せつ物の管理	トナカイ	CH ₄	<0.01
11	3.B.4.-	農業	家畜排せつ物の管理	銀ぎつね	CH ₄	<0.04
12	3.B.4.-	農業	家畜排せつ物の管理	その他の家禽類（あひる・あいがも、七面鳥、うずら、がちょう、ホロホロ鳥、きじ）	CH ₄	<0.8
13	3.B.4.-	農業	家畜排せつ物の管理	鹿	N ₂ O	<0.6
14	3.B.4.-	農業	家畜排せつ物の管理	トナカイ	N ₂ O	<0.02
15	3.B.4.-	農業	家畜排せつ物の管理	銀ぎつね	N ₂ O	<0.01
16	3.B.4.-	農業	家畜排せつ物の管理	その他の家禽類（あひる・あいがも、七面鳥、うずら、がちょう、ホロホロ鳥、きじ）	N ₂ O	<0.3
17	4.D.	LULUCF	湿地	泥炭採掘	CO ₂	<50
18	4.D.	LULUCF	湿地	バイオマスの燃焼	CH ₄	<0.14
19	4.D.	LULUCF	湿地	バイオマスの燃焼	N ₂ O	<0.16
20	5.B.2	廃棄物	バイオガス施設における嫌気性消化		CH ₄	<1.4
合計						<122

注) 一定の想定の下、Tier1等の簡易的な算定方法により1990年度から直近年度までの排出量を概算した場合の最大の排出量

A5.5. 我が国における未推計排出吸収源

上記に示した「重要でない」という意味での「NE」を除く未推計排出吸収源を以下に示す。

表 A5-3 わが国の未推計排出吸収源

Code	分野	排出吸収区分			対象ガス	
1	エネルギー	燃料の燃焼、運輸	液体燃料	航空	巡航時	CH ₄
2	エネルギー	燃料の燃焼、運輸	液体燃料	潤滑油		CH ₄
3	エネルギー	燃料の燃焼、運輸	液体燃料	潤滑油		N ₂ O
4	エネルギー	燃料からの漏出	固体燃料	石炭採掘	回収とフレア	CH ₄
5	エネルギー	燃料からの漏出	固体燃料	その他（制御不能な燃焼）		CO ₂
6	エネルギー	燃料からの漏出	石油及び天然ガス	石油	精製及び貯蔵	CO ₂
7	エネルギー	燃料からの漏出	石油及び天然ガス	石油	供給	CO ₂
8	エネルギー	燃料からの漏出	石油及び天然ガス	石油	供給	CH ₄
9	IPPU	化学産業	アンモニア製造			CH ₄
10	LULUCF	湿地	転用のない湿地	転用のない湛水地	生体バイオマス	Carbon Stock Change
11	LULUCF	湿地	転用のない湿地	転用のない湛水地	枯死有機物	Carbon Stock Change
12	LULUCF	湿地	転用のない湿地	転用のない湛水地	土壌	Carbon Stock Change
13	LULUCF	湿地	他の土地利用から転用された湿地	農地から転用された湿地	土壌	Carbon Stock Change
14	LULUCF	湿地	他の土地利用から転用された湿地	草地から転用された湿地	土壌	Carbon Stock Change
15	LULUCF	湿地	他の土地利用から転用された湿地	開発地から転用された湿地	土壌	Carbon Stock Change
16	LULUCF	湿地	他の土地利用から転用された湿地	その他の土地から転用された湿地	土壌	Carbon Stock Change
17	LULUCF	開発地	転用のない開発地	都市緑地以外	生体バイオマス	Carbon Stock Change
18	LULUCF	開発地	転用のない開発地	都市緑地以外	枯死有機物	Carbon Stock Change
19	LULUCF	開発地	転用のない開発地	都市緑地以外	土壌	Carbon Stock Change
20	LULUCF	開発地	転用のない開発地	RV対象でない都市緑地	枯死有機物	Carbon Stock Change
21	LULUCF	開発地	転用のない開発地	RV対象でない都市緑地	土壌	Carbon Stock Change

別添 (Annex) 6 日本のインベントリのファイル構造

わが国では、インベントリの作成に際して、複数の Excel ファイルから構成されるファイルシステムを用いている。以下に、わが国のインベントリファイルの内容及びファイルシステムの構造を示す。

表 A 6-1 ファイルの内容

カテゴリー	Excelファイル名	内容
	JPN_20xx_1990～JPN_20xx_20yy	CRFレポーターで作成された共通報告様式 (CRF)
1. エネルギー分野	1A-L3-CO2-1990-20xx～1A-L3-CO2-20yy-20xx	燃料の燃焼起源のCO ₂ 排出量
	1A-L3-CRF-20xx	燃料の燃焼からのGHG排出量に関するCRF形式データ (廃棄物のエネルギー利用による排出量を含む)
	1A-L3-timeseries-20xx	燃料の燃焼からのGHG排出量に関する時系列データ
	1A-L2-MAP_EB-1990-20xx～1A-L2-MAP_EB-20yy-20xx	炉種別活動量
	1A-L3-Biomass-20xx	バイオマスの燃焼からのGHG排出
	1A-L3-CO-20xx	各種炉・特殊自動車からのCO ₂ 排出量
	1A-L3-HC-20xx	各種炉・特殊自動車からのCH ₄ 、NMVOC排出量
	1A-L3-N2O-20xx	各種炉・特殊自動車からのN ₂ O排出量
	1A-L3-NOxSO2-20xx	燃料の燃焼 (運輸部門除く) からのNO _x 、SO ₂ 排出量
	1A-L2-nonCO2-ADEF-20xx	燃料の燃焼 (運輸部門除く) からの非CO ₂ に関する活動量と排出係数
	1A-L2-NOxSO2-ADEF-20xx	燃料の燃焼 (運輸部門除く) からのNO _x 、SO ₂ に関する活動量と排出係数
	1A-L3-Lub-20xx	潤滑油からのCO ₂ 排出量
	1A-L2-EBEF-20xx	燃料の燃焼からのCO ₂ に関する排出係数
	1A-L1-EB-20xx	固定発生源以外のカテゴリーで利用する総合エネルギー統計の値
	1A3-L3-CH4N2O-20xx	移動発生源 (運輸部門) からの温室効果ガス排出量 (CO ₂ を除く)
	1A3-L2-ADEF-20xx	移動発生源 (運輸部門) の活動量および排出係数
	1A3-L2-2wADEF-20xx	二輪車の活動量および排出係数
	1B-L3-20xx	燃料からの漏出に伴うGHG排出
	1B-L2-ADEF-20xx	燃料からの漏出の活動量および排出係数
	2. 工業プロセスと製品の使用 (IPPU) 分野	2-L2-ADEF-20xx
2-L3-20xx		Sector 2 (IPPU) からのGHG排出
2-L3-Fgas-20xx		Fガス類 (HFCs, PFCs, SF ₆ , NF ₃) の排出量
2-L3-NMVOC-20xx		IPPU分野のNMVOC排出量
2-L2-NMVOC-20xx		IPPU分野のNMVOC排出量算定に関する活動量及び排出係数
3. 農業分野	3A-L3-CH4-20xx	消化管内発酵に伴うCH ₄ 排出
	3B-L3-CH4N2O-20xx	家畜ふん尿管理に伴うGHG排出
	3C-L3-CH4-20xx	稲作に伴うCH ₄ 排出
	3D-L3-N2O-20xx	農用地の土壌からのN ₂ O排出
	3F-L3-CH4N2OCO-20xx	野外で農作物の残留物を焼くことに伴うGHG排出
	3GH-L3-CO2-20xx	石灰施用、尿素施肥からのCO ₂ 排出
	3-L2-ADEF-20xx	Sector 3 (農業) の活動量および排出係数
	3AB-L2-EF-20xx	家畜に係る排出係数
	4-L3-nonCSC-20xx	炭素ストック変化以外のGHG排出
	4-L3-4A-CO2-20xx	森林からのCO ₂ 排出・吸収
4-L3-4B-CO2-20xx	農地からのCO ₂ 排出・吸収	
4-L3-4C-CO2-20xx	草地からのCO ₂ 排出・吸収	
4-L3-4D-CO2-20xx	湿地からのCO ₂ 排出・吸収	
4-L3-4E-CO2-20xx	開発地からのCO ₂ 排出・吸収	
4-L3-4F-CO2-20xx	その他の土地からのCO ₂ 排出・吸収	
4-L3-4G-CO2-20xx	伐採木材製品からの排出・吸収	
4-L2-Area(Pref.)-20xx	鉱質・有機質土壌面積	
4-L2-LandArea-20xx	各土地利用カテゴリーの土地面積	
4-L2-LandArea-Matrix-20xx	土地転用マトリクス	
4-L2-Orchard-20xx	果樹の炭素ストック変化量	
4-L2-Parameter-20xx	各土地利用カテゴリーのパラメータ	
4-L2-Soil-20xx	農地及び草地の面積および土壌炭素ストック変化量	
4-L2-Biochar-20xx	バイオ炭の農地炭素貯留量	
5. 廃棄物分野	5A3-L2-AD-20xx	固形廃棄物の処分 (その他) の活動量
	5A-L3-20xx	固形廃棄物の処分からのGHG排出
	5A-L2-AD-20xx	固形廃棄物の処分 (管理処分場) の活動量
	5B-L3-20xx	固形廃棄物の生物処理からのGHG排出
	5B-L2-AD-20xx	固形廃棄物の生物処理の活動量
	5C-L2-AD-20xx	廃棄物の焼却と野焼きの活動量
	5C-L3-20xx	廃棄物の焼却と野焼きからのGHG排出
	5C-L3-Energy-20xx	廃棄物の焼却等 (エネルギー分野での報告) からのGHG排出
	5D-L3-20xx	排水の処理と放出からのGHG排出
	5D-L2-AD-20xx	排水の処理と放出の活動量
	5E-L3-20xx	その他のGHG排出
	5E-L2-AD-20xx	その他の活動量
	5-L2-EF-20xx	廃棄物分野の排出係数
	6-L3-20xx	喫煙に伴うCO ₂ 排出
	7. 間接排出	7-L3-Indirect CO2-20xx
メモアイテム	1D-L3-bunker-20xx	国際バンカー油起源の温室効果ガス排出
KP-LULUCF	4KP-3-Summary-20xx	KP3.3及び3.4活動からのGHG排出・吸収
	4KP-2-AR-20xx	新規植林・再植林からのGHG排出・吸収
	4KP-2-CM-20xx	農地管理からのGHG排出・吸収
	4KP-2-D-20xx	森林減少からのGHG排出・吸収
	4KP-2-FM-20xx	森林経営からのGHG排出・吸収
	4KP-2-HW P-20xx	森林経営のうち伐採木材製品からの排出・吸収
	4KP-2-GM-20xx	牧草地管理からのGHG排出・吸収
4KP-2-RV-20xx	植生回復からのGHG排出・吸収	

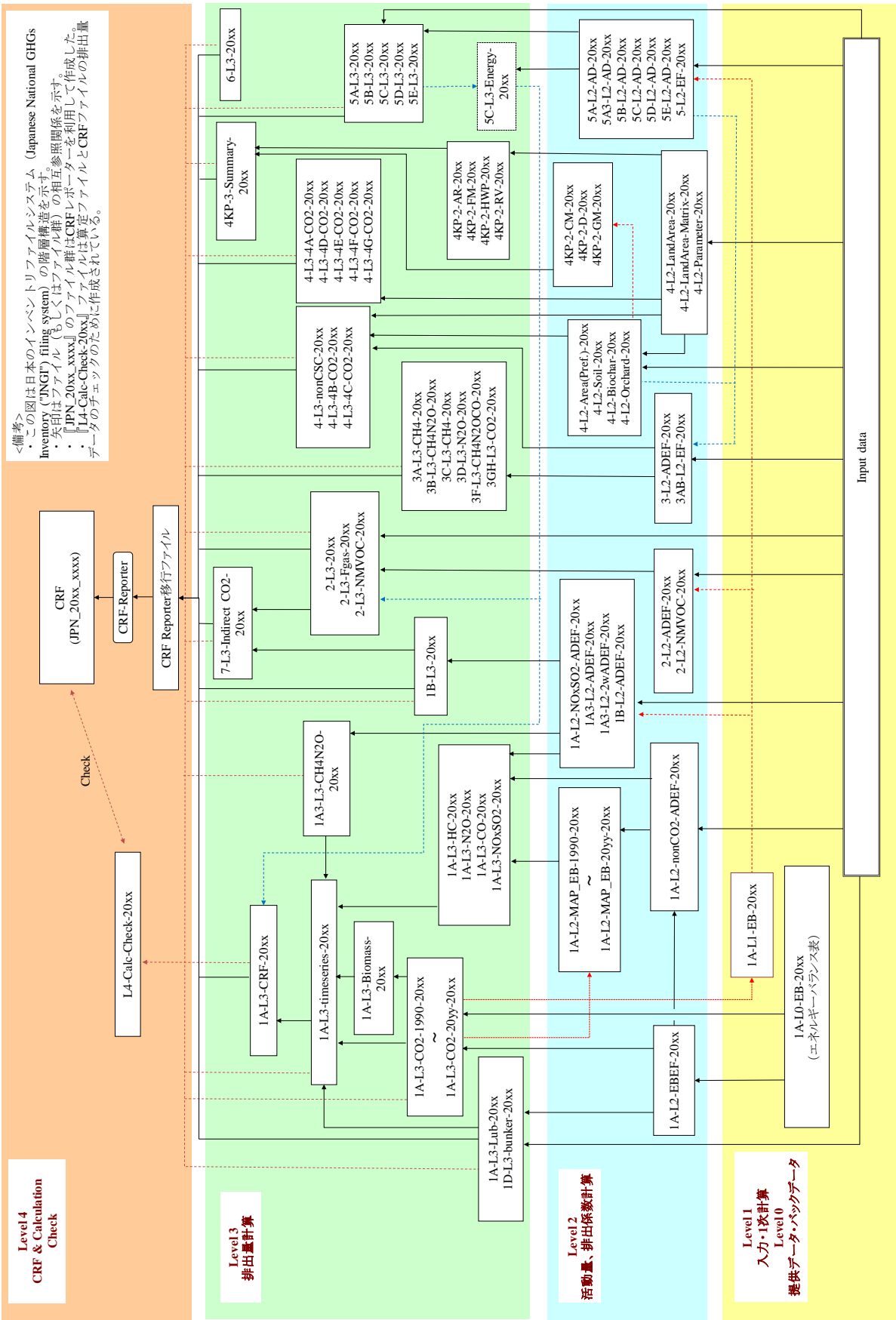


図 A 6-1 日本のインベントリのファイル構造

略語集

1. 温室効果ガス

表 AB-1 温室効果ガス

化学式	物質名
CO ₂	二酸化炭素
CH ₄	メタン
N ₂ O	一酸化二窒素
HFCs	ハイドロフルオロカーボン
PFCs	パーフルオロカーボン
SF ₆	六ふっ化硫黄
NF ₃	三ふっ化窒素

表 AB-2 前駆物質及びSO_x

化学式及び略号	物質名
NO _x	窒素酸化物
CO	一酸化炭素
NMVOC	非メタン揮発性有機化合物
SO _x	硫黄酸化物

2. 接辞語及び単位

表 AB-3 接辞語

記号	読み	定義
P	ペタ	10 ¹⁵
T	テラ	10 ¹²
G	ギガ	10 ⁹
M	メガ	10 ⁶
k	キロ	10 ³
h	ヘクト	10 ²
da	デカ	10 ¹
d	デシ	10 ⁻¹
c	センチ	10 ⁻²
m	ミリ	10 ⁻³
μ	マイクロ	10 ⁻⁶

表 AB-4 単位

単位	定義
m ³	立方メートル
L	リットル
a	アール
ha	ヘクタール
g	グラム
t	トン
J	ジュール
°C	度 (摂氏)
yr	年
cap	人
d.m.	乾物

3. 注釈記号

表 AB-5 注釈記号 (詳細は別添 5 参照)

注釈記号	定義	邦訳
NO	Not Occurring	発生しない
NE	Not Estimated	未推計
NA	Not Applicable	該当しない
IE	Included Elsewhere	他に含む
C	Confidential	秘匿

4. その他略号

表 AB-6 その他略号

	英略語	定義	邦訳
A	AAU	Assigned Amount Units	初期割当量
	AD	Activity Data	活動量
	ARD	Afforestation, Reforestation and Deforestation	新規植林、再植林、森林減少
B	BFG	Blast Furnace Gas	高炉ガス
	BOD	Biochemical Oxygen Demand	生物化学的酸素要求量
C	CFG	Converter Furnace Gas	転炉ガス
	CGER	Center for Global Environmental Research	地球環境研究センター
	CM	Cropland Management	農地管理
	CO ₂ eq.	Gas Emission in CO ₂ equivalent	二酸化炭素換算値
	COD	Chemical Oxygen Demand	化学的酸素要求量
	COG	Coke Oven Gas	コークス炉ガス
	CRF	Common Reporting Format	共通報告様式
	CS-EF	Country-Specific Emission Factor	国独自の排出係数
E	EEA	European Environment Agency	欧州環境庁
	EF	Emission Factor	排出係数
	EMEP	European Monitoring and Evaluation Programme	欧州モニタリング・評価プログラム
F	FM	Forest Management	森林経営
G	GCV	Gross Calorific Value	総発熱量（高位発熱量）
	GHG	Greenhouse Gas	温室効果ガス
	GIO	Greenhouse Gas Inventory Office	温室効果ガスインベントリオフィス
	GM	Grazing Land Management	牧草地管理
	GPG	Good Practice Guidance	グッドプラクティスガイダンス
	GPG (2000)	Good Practice Guidance and Uncertainty Management in National Greenhouse Gas Inventories (2000)	温室効果ガスインベントリにおけるグッドプラクティスガイダンス及び不確実性管理報告書
	GPG-LULUCF	Good Practice Guidance for Land Use, Land-Use Change and Forestry	土地利用、土地利用変化及び林業に関するグッドプラクティスガイダンス
	GWP	Global Warming Potential	地球温暖化係数
I	IEA	International Energy Agency	国際エネルギー機関
	IEF	Implied Emission Factor	見かけの排出係数
	IPCC	Intergovernmental Panel on Climate Change	気候変動に関する政府間パネル
J	JNGI	Japanese National GHG Inventory	日本国温室効果ガスインベントリ
K	KP	Kyoto Protocol	京都議定書
L	LNG	Liquefied Natural Gas	液化天然ガス
	LPG	Liquefied Petroleum Gas	液化石油ガス
	LTO	Landing and Take-off	離着陸
	LULUCF	Land-Use, Land-Use Change and Forestry	土地利用、土地利用変化及び林業
M	MDI	Metered Dose Inhalers	定量噴射剤
N	NCV	Net Calorific Value	真発熱量（低位発熱量）
	NGL	Natural Gas Liquids	天然ガス液
	NIES	National Institute for Environmental Studies	国立環境研究所
	NIR	National Inventory Report	国家インベントリ報告書（日本国温室効果ガスインベントリ報告書）
Q	QA/QC	Quality Assurance / Quality Control	品質保証/品質管理
	QAWG	Quality Assurance Working Group	インベントリ品質保証ワーキンググループ

表 AB-6 その他略号 (つづき)

	英略語	定義	邦訳
R	RDF	Refuse Derived Fuel	廃棄物固形燃料
	RPF	Refuse Paper and Plastic Fuel	古紙・廃プラ固形燃料
	RV	Revegetation	植生回復
S	SEF	Standard Electronic Format	標準電子様式
T	THC	Total Hydrocarbon	全炭化水素
	TOE	Tonnes of Oil Equivalent	石油換算トン
U	UNFCCC	United Nations Framework Convention on Climate Change	国連気候変動枠組条約

編著担当者： 地球環境研究センター（CGER）温室効果ガスインベントリオフィス（GIO）
連携研究グループ長

野尻幸宏

GHG インベントリエキスパート

畠中エルザ、尾田武文、伊藤洋、小坂尚史、楊川翠、林敦子、吉永博巳、
平田絵里子、大佐古晃

編著協力者： 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社

阿部達生、五十嵐慶一、川西理史、川島一真、森本高司、中村仁明、小川結、
佐藤淳、寺川卓志、植田洋行

株式会社数理計画

藤嶋康夫、新田竜太、岡田正和、佐藤厚

日本国温室効果ガスインベントリ報告書 2020 年

国立環境研究所地球環境研究センター 温室効果ガスインベントリオフィス（GIO）編
環境省地球環境局総務課脱炭素社会移行推進室 監修

2020 年 4 月発行

発行元

国立研究開発法人 国立環境研究所

〒305-8506 茨城県つくば市小野川 16-2

電話：029-850-2777

FAX：029-850-2219

E-mail：www-cger@nies.go.jp

http://www.nies.go.jp/

本レポートは、ホームページ <http://www.cger.nies.go.jp/ja/activities/supporting/publications/report/index.html> から pdf 形式で閲覧できます。

本書を国立環境研究所に無断で転載・複製することを禁じます。

本書を引用する場合には、下記のとおり記載をお願いします。

温室効果ガスインベントリオフィス（編）、環境省地球環境局総務課脱炭素社会移行推進室（監修）「日本国温室効果ガスインベントリ報告書 2020 年」、国立環境研究所地球環境研究センター（2020 年）

リサイクル適性の表示：紙へリサイクル可

本冊子は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料 [A ランク] のみを用いて作製しています。

